

秘する恋 秘するが花 短編集



breve

A-side

01 Angel's Grief

君はオレの天使だよ、アンジェ。

シャルルはそう言ったのに、一度あたしから視線をそらすと、彼の視線の先は、いつも、違う人を見ている。

マリナという冴えない、まるっきりいけてない日本人だ。
彼女は非常に小柄で、凄く幼く見える。若く見えるんじゃない。
東洋人は、みんなそんな感じなのかというと、そうでもないと思う。

よく言えばスポーティーな格好。悪く言えばずさんな、おしゃれとはほど遠い格好をしている。
コンタクトをはずして、眼鏡をかけて、ぼさぼさの頭でアルディの庭を歩いている様をみると、それはそれはびっくりしてしまう。

たまに遊びに来てくれる和矢は、フランス人と日本人のハーフだけど、凄く優しいし、かっこいい。あたしを丁寧に扱ってくれる。
でも、彼もマリナにだけ、この上なく優しい笑顔で微笑むんだ。

もっと気に入らないのは、シャルルの態度だ。
いつも怜悯で、冷徹で、「フランスの華」と呼ばれるくらいの人なのに。
彼に出来ないことはない。
だけど、マリナの扱いは未だに手を焼いているようだよ。
確かに、そういう意味で言えば「世界で唯一、シャルルを困らせることの出来る人間」ではあるわね。

ダイに、「シャルルは、あたしだけのモノになってくれないの。こんなに愛しているのに」とぼやいたことがあった。彼は笑って、
「そりゃあ シャルルはマリナに首ったけだからね。あきらめな。彼のファム・ファタルは一人だけだ」

あたしのことはアンジェ（天使）と呼ぶのに。
どうして、あたしはシャルルの天使になれても、唯一人の女性になれないのかしら。

02 Angel's Gealousy

わかっているわ。

シャルルがあたしだけでなく、すべての世の中の女性よりも、マリナが大切だっていうことも。
この気持ちが、シャルルに届くコトなんて、ないってことも。ちゃんとわかっているんだから。

あたしはマリナが羨ましい。ちゃんと、それは把握してる。

彼の愛をいっぱい受け止めている彼女が、羨ましい。

彼女のために創られた薔薇園で、俵せそうに歩いている二人を見ると、
どういわけか心臓が、痛くなる。

そもそも、世界最高の男を、こういう近くで見えてしまうことが間違いなんだ。他の男が凡庸に見えたって、しょうがないじゃない。

でも、シャルルはわかってないんだ。優しくされればされるほど、あたしの中の醜いゴブリンがどんどん増殖する。いっそのこと、突き放してくれれば良いのに。

その愛を、ただひとりじゃなくって、あたしにも少し分けて欲しいだけなんだ。もちろん、独り占めできるのであれば、全部が欲しいけれど。それがムリであるのなら。

「手に入らないモノを願う気持ち」がこんなに苦しいなんて、思わなかった。こんな気持ち、いらない。欲しくなかった。

03 Angel's Vociferation

物思いにふけることが多くなって、必要がなければ、部屋から出ることがほとんどなくなってしまった。そんなあたしを心配して、いろいろな人たちが尋ねて来てくれた。特に、シャルルは毎日、朝と晩にやってくる。

マリナはもっと頻繁にやってくる。それが気に入らない。

ああ
あたしは、何をしたいんだろう。

そんなある休日のこと。
シャルルが、めずらしく朝早くからあたしの部屋を尋ねて来た。

「今日は何か特別な日だったかしら」

そんなわけない。
シャルルに関する特別な日は、全部暗記している。
彼は小さく笑って、ほら、と小さな薔薇の花束を差し出した。

「アンジェのために、品種改良していた薔薇が、今朝咲いたんだ。一番を君に、ね。」

ああ、シャルル。
あたしは、ネグリジェのまま飛び起きた。
レディにふさわしくない動作ということはわかっていたけど。

嬉しい表情を隠すのが精一杯だった。

シャルルは忙しいはずなのに、こうしてあたしを尋ねて来てくれて、しかも、あたしのために薔薇を作ってくれた。

何年も前にマリナのためだけに創った薔薇を見せられて、あたしも欲しい！とだだをこねたことがあった。
彼は、それを覚えていてくれたんだ。

素直に、嬉しかった。

こういう風に優しくされた時だけは、もうこれ以上はいらなんて思っただけ。
少し立てば、もっともっと、と思う。

難しいわ。

04 Angel's Wish

あたしのためだけに、創られた品種改良された薔薇。
グリーンの花びら。かぐわしい香り。柔らかいトゲ。

葉のグリーンとの濃淡が美しい薔薇だった。

「さあ 名前をつける権利を、君に進呈しよう」
「Evergreen」

すかさず、答えた。
この広いアルディの屋敷で、年中咲き誇るたくさんの薔薇や花たち。
あたしは、シャルルのEvergreenになりたい。

そう言うと、「それは却下」
と言われてしまった。

「どうして」

あたしの膨れた頬をつついて、シャルルは目を細めた。

白金の髪。見上げるくらいの長身。
いつもスマートで、近づくの良い匂いがする。
それに、彼の瞳が好きだった。
青灰色の瞳。吸い込まれそう。

「君のEvergreenは、もっと別の場所で、咲かせて欲しい。いつか、この家を出るときに、この薔薇をもって、そこでたくさん増やしてくれないかな」

「この家を出るコトなんてしないわよ。あたしは一生ここで、シャルルと暮らすの。」

シャルルは両手を腰にあてて、困ったように身をかがめた。

「我が娘ながら、強情なマドモアゼルだね。」
「あら」

つんと、あたしは横を向いた。
こんなことで、あたしの機嫌は直らないわよ。

でも。シャルルが、こうしてあたしのために休日を早起きしてきてくれることは、ちょっとだけ嬉しかった。ううん、かなり、嬉しかった。

「そういうところ、マリナに・・ママンにそっくりだよ」
「違うわよ！全然似てないわ！」
あたしは赤くなって、地団駄を踏んだ。

シャルルが、吹き出した。
「そら。やっぱり君は、間違いようもなくオレの、オレ達の天使だ」

(FIN)

■01

「・・・やっと着いた！」
アンジェは声を上げて、その島に降り立った。
「気を付けて・・・足場が悪い」
彼はそう言って、アンジェに声をかけたが、彼女はひとり、ボートから飛び降りた。
揺れない陸地に降り立ったものだから、三半規管に影響されて、少しだけ躰をふらつかせた。
「大丈夫か？」
彼は続いて降り立った。
そして、これくらい平気よ、と言ってつんとすまし顔をして横を向くアンジェを見て、苦笑する。
アルディ家の令嬢となれば、ボートから真っ先に自ら足を降ろすことは決してするなと教育されただろうに。
彼女の自由奔放さは、彼女の母譲りだ。

突然「ちょっと出かけよう」と彼女が言い出したのは今朝のことだった。
彼はいつもの気紛れだろうと思っていた。
昼を過ぎれば、もっと違うところに買い物に行こう、とか、やっぱり出かけるのをやめた、と言い出すに違いないと思っていた。
だが今回は違っていた。
出かけるわよ、と言われて、彼は驚いて立ち上がった。
薔薇園で、少し元気のない薔薇の鉢替えを行っていた最中だった。
泥まみれの手であったのに、アンジェは、早くしなさいよ、と言って彼の手を掴んだ。

アンジェは財閥の姫らしからぬ行動を取る。

汚れた彼の手を握ることも躊躇わない。
そして時々こっそりお忍びで館を抜け出しては、父に叱られる。
それでも繰り返す。
自分の身の程を知れ、と怒られても、けろっとしている。
「自分の見たことや感じたことでない信じないことにしているの」
彼女はいつもそれを口癖にしていた。
それが免罪符になるわけではないだろう、と彼が言うと、すぐに怒るのに。

そして誰にでも高飛車ではあるけれど、自分の考えを実行に移せると確信するまでは、絶対に何があっても話をしない。
・・・今回はそのケースに該当するのだ、と彼が理解したとき。
彼らはすでに準備も慌ただしく、アルディ家を出立していた。

彼女はどこにそんな行動力があつたのか、いつの間にか手配していた車に乗り込み、戸惑う彼を供にして、ヘリポートに向かった。

長い移動時間であった。

いつもなら、退屈だから話をしようと言い出すのに、アンジェは外を見つめたまま、じっと、考え事をしていた。
その様は、やはり、あの「フランスの華」の血族であると認めざるを得ないほど気品に溢れ、話しかけることの出来ない空気を放っている。

こうも心を引き寄せられる人物は居るだろうか。

確かに、アンジェは欠点も多い。
我が儘で、父親を敬愛するあまり男性蔑視の傾向にある。
けれども、それ以上に、情に深く、頭の回転がよく、そして何度傷ついても屈することを受け入れない誇り高さがある。
彼はそんなアンジェの傍に居られるという喜びを、彼女はわかっているのだろうか、時々思った。

同じ空を見つめて、同じ花を愛で、同じ時をともに成長する。
鮮やかな暁に、彼はいつも吸い込まれて行く。
目が離せないのだ。
どうにも心が引き寄せられる。
この想いを、一体、いつまで秘めていることが出来るだろうかと思う。

アンジェの、腰まで伸びた髪が海風に吹き上げられて、大きく広がった。
天使の羽に見える。
あの素晴らしい完璧な男性が唯一、彼女を「オレの天使」と呼ぶ。

彼はそこでその様を見て・・・小さく呟いた。

オレだけの天使になってくれないか

■02

彼らが到着した先は、1周5キロ程度の小さな島だった。
無人島で、電灯すらない。
そして昔は小型ヘリで乗り付けることができたそうだが、今では浸食が激しくて、こうして少し離れた場所からボートでしか接岸することが出来ない。
・・・ここはひょっとすると、海に沈む運命の島なのかもしれない。

ごつごつした岩場をのぼり切ると、そこは見晴らしが良い、水平線が目の前に広がる大変に見晴らしの良い場所だった。

古い手すりや、気休め程度に設置された足場などを見ると、ここはほとんど手を入れず、そのままにしてあった小島なのだとわかる。

「アンジェ、いい加減、ここはどこで、何をしに来たのか、教えてくれても良いと思うよ」
彼はそう言って、海風に吹かれる彼女に声をかけた。

海鳥の鳴き声や、島に叩きつけられる波音で声はかき消されたのだろうか。

アンジェは、彼に背中を向けたまま、何も言わなかった。

・・・聞こえなかったのだろうか。

彼はもう一度彼女の背中に向かって名前を呼び、そして同じ事をくり返し言った。

うるさいわね、と言って、彼女は彼を振り返った。
長い移動時間のために、もう、すでに日は暮れそうになっていた。
淡く染まっていく茜色に、綺麗だわ、とアンジェは感嘆した。
そしてその夕陽の暁が、彼女の全身を明るく照らしていた。

・・・逆光で、眩しい。

でも、その暁より、もっとアンジェは煌めいている。
「ここは贖罪の島。アルディ家の所有する無人島よ。正確に言えば、所有権はマリナにあるけれど」
アンジェは薄く微笑んだ。
よく通る声で答えた。
「知らなかったよ、こんなところにもアルディ家の所有島があるなんて」
「私も、つい最近まで知らなかったのよね」
アンジェはそう言って、彼にこっちに来るようにと言って、白い腕を向けて、手招きした。
「あまりそちらに行くと危ない」
彼が慌てて注意すると、平気だよ、とアンジェは笑った。
「あなたが居るから。・・・護ってくれるんでしょう？」
彼女はそう言ってまたくすくす笑い出した。
「危険に飛び込むアンジェは護りきれない」
彼はそう反論した。
「それは避けられない。私はそういう生き方しかできない。・・・それはわかっているでしょう」
その言葉には、返事をする事ができなかった。
彼は、彼女が長く憂慮した末に、その結論を出したことを知っていたから。
だからアルディ家の異端児とも言える、彼女の行動は、しばしば一族を悩ませていたが、彼女は一向に改めないの、遂には彼に「お目付役」という素晴らしい役割分担に割り当てられたのだ。

■03

日没が近かった。
今日はよく晴れていて、そして空気が澄んでいないから、余計に空の朱さが鮮烈に彼の目に飛び込んでくる。
「綺麗な夕焼けだね」
「そうね・・・」
アンジェは小さく言った。
こうして並ぶのは随分久しぶりだった。
彼女の背をとうの昔に越してしまった彼は、アンジェをそと横目で見た。

凜とした佇まいが美しい。
彼女は憂いも哀しみも知っているはずなのに、いつも闊達で陽気だった。
しかし一度こうして黙ると、非常に寡黙であり、父譲りの気品が溢れていることがわかる。
どちらが本当の彼女なのだろう。
そう思ったこともあった。
でも、それは正解ではない。
どちらも、アンジェなのだ。

「ね、これから・・・あの日没をよく見ている」
アンジェは彼にそう囁いた。
「何かあるの？」
「良いから！黙って言うとおりにして！一瞬だから」
そして彼女は並んだ彼の大きな手のひらを握った。
彼の爪の中には、先ほどの作業で泥が入っていたから、彼はアンジェの冷たくて細い指の感触にどきりとして、手をふりほどこうとした。
「汚れるよ」
「うるさい人ね・・・少し黙って前を向いて居てよ」
アンジェが気を悪くした風に言ったので、彼はそのまま、それ以上言葉を発することを諦めて、アンジェの手に繋がれて、正面に視線を向けた。

この景色だけは抜群に良い島に、彼女は考えがあって来たようだ、ということはわかった。
そして、これから彼に何かを見せたいのだと言うことも。

時々。
彼女の傍らに居ることが苦しくなる。
良いよ、とアンジェは言うけれど、それでもやはり苦しい。
彼がこれほど彼女に焦がれていることを、彼女は知っているはずなのに、それでも平然としている。そして自分を護れと言う。

・・・それでも抗えなかった。

彼は、どうしようもないくらい、彼女に心を奪われていると認めざるを得ない。

「・・・見て！」
アンジェが叫んだので、彼ははっと我に返った。
そして・・・驚きの声を漏らす。

水平線に太陽が沈む一瞬のことだった。
太陽光が明るく赤く耀いていたのに。
その球体が、水平線に沈んでいき、そして消える、その刹那のことだった。
沈み墮ちる寸前・・・

「碧色だ・・・！」
彼は声をあげた。

鮮やかな、赤ではない碧色が、彼の瞳に飛び込んできた。
ちかり、と光って・・・
次に、大きく暁が水辺線と空の境界の上で横に広がり、拡散する。

「アンジェ・・・！」
声にならない声で、アンジェの名前を呼んだ。
繋がれた手は冷たかったはずなのに、その温もりを今感じる。
彼女は、掌を少し持ち上げて、彼の手に、自分の指を絡めた。

「アンジェ、今のは・・・」
「グリーンフラッシュ（緑閃光）よ」
アンジェは満足げに言った。
グリーンフラッシュ・・・彼はくり返し呟いた。
そう、とアンジェは小さな顎を引いて、頷いた。
「今日なら必ず見られると思ったの。・・・条件が整うと、見られる現象よ」
「知らなかった」
「でしょうね」
知っていたら、連れてこないわよ、と言ってアンジェは笑った。

落日後の空は、あっという間に闇夜に包まれていく。
水平線のほんの限られた部分だけが太陽の暁の名残を受けて明るかったが、反対側の空の向こう側は、もう星が輝き始めていた。

「戻りましょう」
「・・・アンジェ、どうしてオレを連れてきたの？」
彼は彼女に質問した。
先ほどの、今日連れてきたかった理由はわかった。
気象条件が整っていることを朝知って、彼女は頃合いだと見計らったのだ。
でも、次の疑問があった。
どうして、彼を連れてきたかったのだろうか。
見たかったら、誰か他の供を連れてきてても良かったはずだ。
彼女のお気に入りには、彼だけではない。
特に、彼女をこよなく愛する、彼女の父にせがむのが彼女の常套手段だったから、なぜ彼なのかがわからなかった。
■04

「贖罪の島って言ったけれど、ここには別名がある。いえ、贖罪の島と言ったのは、ひとりしか居ないから、こちらの名前が本当の名前ね。・・・ここは『奇跡の島』とか『愛の島』と呼ばれている」
「愛の島・・・」
繰り返してはばかりね、あなたは。
アンジェはそう言った。
「あの緑閃光は、ごくまれにしか見ることが出来ない。奇跡の暁だと言われている。・・・だから、それを見ると・・・」
そこまで言うと、彼女は言葉を句切った。
何か歯切れの悪いその様子に、彼が首を傾げた。

「・・・あれを見ると？」
言いかけてやめるのはアンジェらしくないだろ、と彼が言うと、アンジェは少しむっとしたように、横を向いた。
目の端が赤くなっているような気がした。
アンジェは、少しだけ肩を上げて、大きく息を吸う。

「あれを見ると・・・真実の愛に目覚めるのですって」
「・・・」
今度は反対に、彼の方が黙ってしまった。
一瞬、アンジェが言った事がわからない、と言ったように、目を見開いた。
手は繋がれたままだった。
一瞬、そのことを忘れて、力を入れてしまい、彼女が小さく悲鳴を漏らしたので、慌てて力を緩める。でも、とうてい、手を離すことは出来そうになかった。

「もう一度言ってくれないか」
「私は二度は言わないわよ」
アンジェはきつと彼を睨んだ。

「・・・オレが真実の愛に目覚めていないとでも？」
彼がそう言うと、アンジェは小首を傾げて、さあね、と言った。
彼は極力声を抑えて、彼女に向かってひとつひとつの言葉に心を込めて、アンジェに言った。
どう伝えたら、これは伝わるのだろうか。

「アンジェ。オレもだよ。何度も言わない。言うことが出来ないんだ。オレは君を護ると誓った。オレの名前にかけて。君はオレのファム・ファタルで・・・それ以外のなにものでもないよ」
アンジェはその言葉を聞くと、頬を緩めて、淡く微笑んだ。
美しい微笑みだった。

あなたはわかってない、と言った。

「私があなたを何とも思っていないと思っている人には、何を言っても無駄だわ」
だから、見せることにした。
彼女はそう言った。

言葉で伝わらないなら、伝わるためのあらゆる手段を講じる。それがアルディ家の家訓なのよ。

知らないわけではないでしょう？と、おかしように、アンジェが言う。
そしてちょっと言葉を切って、彼女は彼の顔をのぞき込んだ。
もう、あたりは暗くなり、小高いこの場所から見下ろせる場所に停泊しているクルーズの前面灯が点いた。
戻ってこいという合図だった。

アンジェが彼の名前を呼んだ。

「・・・私はこの生き方しかできない。
こういう愛し方しか知らない。・・・それでも、良いわね？」
「選択肢はない・・・そうだろう？」
「ええ、そうよ」
「だったら聞くな」
彼は彼女の手を力強く握った。
今度は彼女は悲鳴をあげなかった。
うん、と言って、下唇を少し噛んで、はにかんだ。

ああ、アンジェ。

彼は呟いた。
そして、そと・・・非常に躊躇いながらも、彼女の頬に手を触れた。
目を細めて、アンジェの頬が紅潮しているのは、黄昏時の光線が照射されているだけではないことを知る。もう日は暮れているから。
・・・頬が熱かった。

オレはね、初めて君に逢った時から・・・
もう、わかっていたんだよ。
君が、オレの運命の人だと。
ファミ・ファタルを定める瞬間は躊躇いも途惑いも感じなかった。

ただ「ああ そうか」と思った。

彼だけの天使は微笑んだ。

オレ達を引き寄せた同じ哀しみを越えて、君はオレに向かって降り立った。

今日、君がここに連れてきたことの意味。
考えようと思う。
そしてどんなに計算されていても、気象条件はその瞬間になるまでわからない。
特にこんな海に面した気象は予測絶対だと言い切ることが出来ない。
それなのに、彼女は彼を連れてきた。

今日、見ることが出来なかったかもしれないグリーンフラッシュを二人で見ることが出来なかった。

偶然の奇跡だろうか。
いや、これは必然だ。

彼女は計算してきたのだ。
今日の気象条件を計算してきた。
そして絶対発現すると確信していなかったから、彼に道中明かさなかった。
確実でないことを予測して動くような行動は、彼女は決して実行しないのに。

気持ちを寄せるために、彼女は彼と一緒に「真実の愛の暁」を見にやって来た。
彼は、彼女を十分に理解していたはずなのに。
・・・彼女を不安にさせてしまった。

■05

帰りのクルーズに乗り込むとき。
彼は、今度は自ら手を差し出して、アンジェを搭乗を介助した。
軽やかに飛び上がり、岸から足を浮かせた天使は、彼の胸の中に舞い降りた。
「ああ、すっかり磯の香りが髪に・・・」
アンジェが顔を曇らせたが、彼はそのまま、胸の中の天使の髪に精悍な頬を埋めた。
「・・・ごめんよ」
彼はそう囁いた。
彼女の愛はちゃんとあった。
そして彼の内なる激しい想いも、彼女は気がついていて。
その上で、良いよ、と彼女は言ったのに、彼はそれを信じて良いかどうか躊躇っていた。

こうして触れることも、彼だけに許された行為なのに。

潮の香りを感じながら、すっかり暗くなってしまった空に輝く星を見上げた。
ゆっくりと離岸するクルーズに乗り込んだふたりは、しばらくの間無言だった。
「また、来よう」
彼はぼつりと言った。
何度でも来よう。
アンジェ、君が見たいと言うのであれば、いつでも来よう。

でも、約束して欲しい。
あの暁と一緒に見るのは、オレとだけ、と。

彼がそう言うと、アンジェは横を向いた。
照れくさそうに、わからないわよ、と否定した。
「私は変わらずにシャルルが好きだし。・・・いつかシャルルと一緒にあそこに行くの」
「彼がウィと言うかなあ」
「言うわよ。・・・言わせてみせるわ。私はシャルルの天使なのよ」
たった今、彼だけの天使だと思い定めた相手は、シャルルのことになるとムキになって声を荒げて抗議する。

彼は声を上げて笑った。
シャルル・ドウ・アルディがライバル、ね・・・手強いけれど面白いね。
アンジェのチェスの相手をするより難しいことかもしれない。

彼女の携帯電話が鳴った。
圏内まで入ってきたらしい。
間もなく、ヘリポート近くの碇泊所に到着するようだ。
アンジェは通話を始める。
「・・・シャルル！」
電話の向こう側の相手は、彼女の焦がれた相手だったようだ。
ぱっと花が咲くように、彼女の顔が満面の笑顔になった。
優しく柔らかな睨が瞳に宿る。
先ほどの彼に見せた顔とはまるで違っていた。

彼はくすりと微笑んだ。

アンジェ。
シャルル・ドゥ・アルディは教えなかったのか？

売られた喧嘩は買う。そして・・・倍返しだ。

帰りが遅いと心配してコールしてきた回線の主に窘められているはずなのに、嬉々として話をするアンジェに向かって近づいた。
エンジン音が大きくて、彼女は彼の近寄る気配に気がつかなかったらしい。
片耳を押さえて、懸命に電話口で何かを言っている。

「・・・あ！」
アンジェは声を上げた。
背後から、彼が携帯電話を取りあげて、回線を切り、放り投げてしまったからだ。
「ちょっと、何をやるのよ！」
しばし携帯電話の落下場所を見つめていたアンジェが、目をつり上げて彼に抗議した。
波の揺れで、携帯電話が更に床の向こう側に転がり、やがて壁に叩きつけられたのを見て、アンジェは我慢出来ないと言って地団駄を踏んだ。
長い髪を揺らして、振り返る。
アンジェは彼の名前をフルネームで呼んだ。
憤りが絶頂の時の彼女の特徴だった。

・・・その時。
彼が、動いた。
「アンジェ」
「・・・！」

彼は彼女の腰を抱き、彼に向かって引き寄せた。
これまで、彼に何もかも勝っていた彼女は、抗えない力に囲まれて、言葉を失う。
彼はこれほどまでに、力強かったのだろうか。
「・・・強くないと護れないからね」
密着した彼の躰は、よく鍛えられて均整が取れていた。
彼女の敬愛する最愛のシャルル・ドゥ・アルディのように。
シャルルも、護りたい人を護るために、強くなったのだろうか。
それとも、元々完璧であったけれど、傍らに居る人のために、更に強くなったのだろうか。

・・・自分はどこまで強くなれるだろうか。この人と一緒に。

彼が頬を寄せて、彼女に接吻した。
許可は求めてこなかった。
一度だけ、いい？と尋ねるかのように、視線を絡めただけだった。
いつものアンジェなら怒り出して、頬を叩くところだったが、今回はそうしなかった。
アンジェは目を閉じた。

言葉にしなくても。
伝わることがある。
言葉にしないと伝わらないものもある。
選別は難しい。

けれども、彼女の愛する薔薇を、同じように愛でて、やるべき立場でもないのに一生懸命世話をして、常に泥だらけになっている彼を、心から愛おしいと思う。
心が引き寄せられる。

同じ閃光を見て。
これで何かが伝わっただろうか。
伝えられただろうか。

・・・自分の真実の愛について、自分は何かを確認できたのだろうか。

わからなかった。
答えはまだ出ていない。

それでも。
この胸に居るのも悪くはないな、と思う。

あの睨を教えてくれたのは、マリナだ。
躊躇うアンジェに行ってこいと言った。
彼と一緒に見ておいで、と彼女は上陸許可を出した。

普段は、アンジェには何も口出ししないのに。
今度ばかりは行ってこいと言った。
その睨を見た上で、アンジェの考えていることを実行しろと言った。
シャルル・ドゥ・アルディがこよなく愛する・・・彼の運命の人。
なぜ、あれほどまでに完璧な人物が小さな東洋人である彼女をあれほどまでに愛するのか・・・

わかりたくなかったけれど、少しだけ、理解した。

彼女は彼のぎこちない愛の烙印にそっと、目を瞑った。
目の裏には、あの碧色の暁がまたたき・・・そして、消えた。
それでも彼女の心の中には、あの緑閃光がいつまでも輝いていた。

この暁が消えることはない、少なくとも今は思う。
だからそれを信じてみようと思う。
根拠の無いことは信じないのに、アンジェはそう思った。

接岸したと連絡が入っているのに。

若いふたりは、しばし、言葉によらない伝達方法で、彼らの真実の愛への目覚めについて伝えあった。

(FIN)

B-side

01 一乃至二

時間が逆転していきます。

最初は、彼との抱擁から。

「これで最後だ」

シャルル・ドゥ・アルディは耳元でそう囁いて、そうして彼は私を抱きしめた。
この上なく、力一杯。
雷に打たれたように、電流を流されたように。
私の全身に私自身が抗うことはとうていできない何かが走った。

私は目を瞑った。

もう、これで思い残すことはない。

・・・本当に？
・・・本当に？
・・・本当に思い残すことはないの？

ここが薄暗い画廊の渡り廊下であり、私とシャルル以外に誰もいないことを彼は良く確認してから、私を抱きしめた。

そうして、小さく囁いた。よく通る声で。低く短く小さく。

「これが、最後だよ」

そう言うと、私の腰と背中に手を回し、髪の毛に顔を埋めた。
廊下の壁に私を押しつけ、そして強く息も出来ないくらい激しく抱きしめた。

シャルル。

私はこのままこの壁に吸い込まれてしまいたい。あなたと一緒に。
そのまま、彫像になってしまえばあなたが私から体を離すことなく、ずっと一緒に居られるのに。

私がそう思っていることを十分に感じているはずなのに、彼は答えなかった。

―――狡い人。酷い人。

そう言うと、シャルルは薄く笑った。私の顔のすぐ近くで。
彼が微笑む過程がよくわかるほど近くで。

泣きたくなるほど息苦しい想いが、私の声を失わせていた。
ただただ、抱擁に酔いしれているだけで、立っているだけで精一杯だった。

その時のことだった。

廊下の向こうから、がたん、と音がした。
扉が開く音がした。
シャルルに抱き留められている私には、誰かがやって来たという
人の気配はわかったけれど、彼の体に覆われていてそこに誰が立っているのかわからなかった。

けれども。

次の瞬間、私とシャルルは引きはがされてしまった。
力強い風によって。
その人は、シャルルの肩を掴み、絞り出すような声で言った。明らかにシャルルと知り合いで、そして、怒っていた。
「・・・何してるんだ・・・!!!」
彼は言った。
そして、シャルルの胸をつかみ上げた。

私とシャルルは思いもかけず引き離されて、長身の男性に横から力を加えられた格好になったシャルルの横力がかかり、私はよろけて転びそうになった。

あっ 転ぶ。
目を瞑って、地面に転がる自分を想像した。この廊下で転ぶと相当痛いだろう。
そんな悠長なことが一瞬間いた。

けれども。

「大丈夫か」
シャルルが、私の二の腕を掴んで、地面に向かった私を引っ張り上げた。
勢いで、私はシャルルの胸の中に転がり込む。

状況はなんとなく理解できた。

シャルルの知り合いに、見られたのだ。そして、その男性はシャルルに怒っている。
そして・・・そして薄暗がりによく見えなかったけれど、廊下のあちら側で立ちすくんでいる茶色の髪の毛の女性も、シャルルの知り合いのようだった。

こんな時でさえ冷静に状況を判断している自分がいやだった。

こんな時でさえ、シャルルの腕の中に収まる自分に酔いしれた。

02 二乃至参

私には二人の私がいる。

人格が多数いるのとは違う。

お互いがお互いを見つめ合っているかのような、そんなかんじと言えれば的確だろうか。

ひとは冷静で常に回りの状況を判断する自分。
この自分が一番強く出ている時間が最近長い。
もうひとは、焦がれるあまり、愚かな願いをシャルル・ドウ・アルディに聞き入れてもらうにはどうしたらよいか、とそればかり考える自分。

携帯電話が鳴った。
待ち焦がれた電話番号からの着信は、その他と違う設定をしてある。
すぐにわかるように。

シャルルは、「手短かに言え」と少し苛立たしげに言った。
私これから何を言うのか、すでに予測していたようだった。

「——今すぐに、来て」
私はそう言った。

ひとつ、冷たいため息が向こう側から聞こえた。

「これから行ったら夜中になる。明日にしろ」

彼はどうやら外からかけてきているらしかった。
外の雑音が混じる。
彼の声だけ聞いていたいの。

私は少し笑った。
「駄目。今すぐ来て。何時でも待つわ」
すると、彼は「わかった。切る」とだけ言って、回線を切断した。

つれない人。

そう思ったけれど、一度だけ口頭で伝えただけの電話番号を彼が覚えていたこと、メールなどでなく、私に直接電話をかけてきたことを素直に喜ぶことにした。

彼は「わかった」と言った。彼は嘘をつかない。
だから、私に会いに来るはずだ。
本当は、私に会いに来るのではなくて用事を済ませるだけなのだけれど。

そして彼は不機嫌そうに現れた。
予想到着時刻より15分も早かった。読み違えた。
「随分早かったのね」「時間が無駄になる。早く済ませよう」
彼はスーツの上着も脱がずにそう言った。
まあ、立ってないで、腰かけたらどうなの？と私はくすくす笑って言った。
夜は長いわけだし。
彼は無言だった。
そして彼は不機嫌なはずだ。
その無表情からは見て取れなかったが、私にはわかった。

———気配が、とげとげしいから、すぐ解る。

「それで何がのぞみだ」
「シャルル・ドゥ・アルディともあろう人が、…人に何が望みだ、と尋ねるのね。」
私はまたおかしくなって笑った。
「わかっていることを尋ねるのも、儀礼のうちかと思ってね」
「素晴らしいわ」
シャルルはむすっとして言った。
「用事をさっさと済ませたい。でなければ帰る。私は君に割く時間はそれほど多くしないと決めているので。」
冷たい言い方をする人だ。でも、彼の物言いは、いつものことだった。
でも、彼は私の言うことに従わざるを得ないのだ。

「それならこちらも単刀直入に。私はシャルル・ドゥ・アルディが欲しい。時間限定で良いので。」
「いつまでだ」
「たった今から、明日の昼過ぎまで。・・・そうしたら、あなたの言うとおりにします。」
「わかった。成立だ」
彼はそこで初めて、室内のソファに腰を下ろした。
冷たい目線でこちらを眺める彼は、やはり同じように絶対零度の微笑みを浮かべていた。

「で？私は何を君に提供するのかな？体？だったら早く始めよう。」
「私の言っている意味をよく理解して。そういう下世話な話し方は、私の欲しいあなたでない」

——やれやれ。

彼が少しため息をついた。

「私を買うのであれば、高くつくよ」
「十分おつりが来るわよ。どちらにおつりが来るかはあなた次第だけれどもね」
彼が冷笑した。
「シャルル・ドゥ・アルディを一晩手に入れて、おつりが出る買い物なんてないな」
「あるわ……。少なくとも、シャルルには、欲しいと思うものが手に入る。」
「なるほどね。」
シャルルは私の答えに満足そうに頷いた。
「三度は聞かないよ。・・・君の望みはそれで良いのだね？」
ええ、と私は頷いた。

「これを限りに、一夜の夢で良いわ。
いつものように、私の相手をして。もう、何度も一緒に過ごしたでしょ」

そうして、その夜から、私と彼は朝まで一緒だった。
言葉通り、片時も離れずに。
彼は一晩中寝ずに、私と向き合ったままだった。
寄り添うのではない。
私に対峙したままの、挑戦的なシャルルに心躍り、心臓が早鐘を打ち、
このまま打ち壊れてしまうかと思った。

そしてほんの少しの休息しか取らず。

彼が息を詰めて私に挑む攻撃に歓喜した。
あのシャルル・ドゥ・アルディを少しの間でも無言にさせ、熱中させたことに踊り狂いたくなるくらいの喜びを感じた。興奮した
私はこの貴重な時間を使い果たすことに専念し、彼に注文をつけた。
彼はそれに無言で従った。夜が明けたことにまったく気がつかなかった。

でも、そんなことを求めたかったのではない。言うとおりになるシャルルなんて、彼ではなかった。

・・・時間だ、とシャルルは言って体を起こした。

私はまだまだよ、まだ時間はあるわ、と言ったけれど、シャルルは聞き入れなかった。

「私の予定は変えられないし、君のために変えようと思わない」

そう言うと、私に身支度をするほんの時間を与えただけで、待機していた車に乗せられた。

都内の約束した場所に向かう。
駐車場を降りて。
薄暗い廊下を抜ければ、すぐそこが最後のゴールだった。
そこに行き着けば、終わってしまう。

「・・・いや」
私はそう言って立ち止まった。
シャルルは私の二の腕を掴んだ。

「行くぞ」

いや、と私はまた言った。脚が鉛のように重かった。
いえ、重くなればいいのにと強く願ったから、脚を動かしたくなかった。

「・・・いや。まだ、まだ時間がある。私の言うとおりにして。・・・私を抱きしめて。強く。
恋人にするように。手を抜かないで。」

引っ張られた腕が痛かった。
このまま腕が抜けてしまえば、彼は申し訳なく思うだろうか。

思わないわね、きっと。
もう一人の私が囁いた。

彼は、そこで初めて困ったように、吐息をついた。
「君は恋人じゃないから抱けない。」
「それはあなたの勝手でしょ。」
私はまた言い返した。
「私は手を抜かないで、と言ったのよ。これが私の希望なの。手を抜いたら、承知しない。
この場で帰る。ひとりで歩いてでも帰るから」

その瞬間だった。

シャルルが、私を抱いた。その胸に抱いた。
お芝居だとわかっている。私でない誰かを想像しながらの抱擁だったとしても。
・・・十分だと思った。もう、これで思い切れると思った。
そんなにまでして、自分自身を身売りして、あの絵が欲しいのだろうか。

だったら、あれはあなたにあげるわ。シャルル・ドウ・アルディ。

私の望みを受け入れてくれるのであれば。

誠次・マクドゥガルの「自画像」が。そんなにまでして欲しいのだろうか。

私にはわからない。

私にわかっている価値と言えば、シャルルを引き替えにできるほど、その絵には価値がある。その程度だった。

03 参乃至四

シャルル・ドゥ・アルディに日本で会うとは思ってもみなかった。特に、こんな場所で。

ここは都内の雑居ビル近いにある画廊で、私はこのオーナーに呼び出されていた。入り口にはつんと済ました女の子がいて、奥に通されると、先般から話があった絵画の売買の話になった。

私はあまり乗り気でなかった。

なぜなら、祖父から譲り受けた絵画で、これを決して手放してはいけないと言われていたから。絵画の価値が私にはわからなかった。残念ながらその方面の能力は皆無だった。

最初は両親を通して話をして欲しいと言ったのだが、正当な所有者が私であり成人している以上、本人にきちんと話を通すのが筋だと彼は言い張った。

正直言って、どちらでも良かった。

その誠実なコンタクトの仕方が気に入ったので気紛れが働いただけだった。だがこれに加えて、彼の父親がこのあたり一体を所有する不動産王であることが、気乗りしない私の外出を両親が強く勧める理由だった。

・ ・ あの人達は悪い人ではないのだけれども。どうも権力に弱い。

強い日差しの中を歩いてきたので、しばらくして目が慣れてから、ようやく薄暗い室内に壁に飾られた例の画家の絵に気がついた。3点飾ってある。

そして、私の所有する「自画像」が並ぶと、この絵は4点になる。10点とも100点とも1000点とも言われるその作品の、この国内にあるすべての作品がここに集うことになるのだ。

売買は気乗りしません。

そう言ったけれど、私はなんとなくその絵画が気になった。美術品の価値はわからなかったが、この3点に4点目を加えることは面白そうと思った。

その考えを述べると、彼はそれでも良いから、考えてくれないかと言った。本来なら、自分から出向いて話をしないとイケないのだけれど、是非この絵を見て欲しかったと言っていた。

なるほど。

この絵は並ぶとそれ相応の迫力というか・・・作者の想いが伝わってくるようなそんな気がする。ここに自画像が並ぶと。やはり面白いのかも知れない。

そう思うと、少し考えさせて欲しいと言った。

売買契約で提示された金額は、高くもなく安くもなく相場のようなようだった。それでも、売ってはいけないと言われていたので、なぜそれほど祖父が繰り返し私に言い聞かせてその絵を託したのか、少し考えてみようと思った。

それ以来、私は気が向いたときに車を差し向かわせて、その画廊に足を運んだ。まだ自画像を譲る気になれなかったけれど、この絵を見ていると、どういうわけか、彼を思い出す。そしてここに自画像が並ぶと、ますます彼を思い出すのであろう。

…彼。シャルル。シャルル・ドウ・アルディ。

今、フランスを出国して、渦中の人になっているフランスの華。
彼が結婚するという噂を聞いた。
そのニュースを思い出して、きりりと、胸が、少し痛んだ。

私に話しかける彼は、いつも淡々としていて、そしていつまでもとりとめなく私につきあってくれるかと思えば、突然連絡を絶つたりする。

そんな彼を憎らしいと思う一方で、限りなく魅了されていくのが、わかった。

これを恋というのであれば、きっと間違いなかった。

だから。

その画廊で、ばったり彼に出くわしたときには、心臓が止まるかと思った。
彼は入り口の受付嬢に、マリナ・イケダという人物に会いたいと言って押し問答をしていた。
やがて彼に負けてしまった受付嬢が、情報を漏らすのを聞いて、彼は満足そうに頷いて、
すぐに入り口に背を向けた。

——シャルル？

私はそこに、声をかけた。おそるおそる。
シャルルはそこで、足を止めた。
間違いなかった。そこには、シャルル・ドウ・アルディが居たのだ。

私は驚いて近寄った。
彼も少し驚いていたようだった。
ここにいる用件は？と彼が尋ねた。
再会の言葉もなにもなくするりと彼がそう言ったので、私は彼に「普通の再会」を求めていたことに気がついて苦笑した。

どうしたの？どうしてあなたがここにいるの？と尋ねると、彼は時間がないと答えた。
だから私も要件のみ伝えた。
画廊に追加したい絵画があって、このオーナーに売買契約を持ちかけられた、と言った。
彼はそこで初めて私に向き直った。「それは誠次・マクドゥガルの【自画像】か」と尋ねたので、そうだと答えた。

シャルルはそのまま少し首を傾けて、やがて、素っ気なく無表情に「あとで連絡する」と言った。
その素っ気ない答え方に私は少し不満を持った。けれどもすぐに気を取り直して
それなら電話して、と言って携帯電話の番号を言った。
彼はじっとその番号を聞いていたけれど、やがて「連絡する」ともう一度短く言った。

彼が来日する日程は、もっと遅かったはずだ。それなのに、日程を繰り上げて来日している。
一体、どういう事なのだろう。
私と会うはずの約束の日を、私がどんなに心待ちにしているのか、彼は全く気にかけていないかのようにだった。
きっと、その当日になれば平然としてまた、素っ気ない顔つきで現れるのだろう。

今日の偶然の再会は、運命の再会だと思う私に反して、彼は、とても無感動だった。
それでも良い。彼は、必ず、私に会いに来てくれるのだから。

そして帰宅すると、シャルルからメッセージが入っていた。
【自画像】の鑑定人になりたいというのだ。
そして、その絵画は元々アルディ家の所有物であり、今は巡り巡ってあの画廊に渡ったが、
その自画像だけは、アルディ家の鑑定書がついていないという。
もし売買契約を進めるのであれば、そこに鑑定書を付けたいという彼からの申し出に、私は少し首をひねった。だって彼には何もメリットがないから。

あれこれ考えて、彼にはどうしてもこの絵が必要であること、売買契約に応じて欲しいと思っていること、そして来日の予定を繰り上げたのには彼の結婚問題がからんでいるらしいこと。
そして、私との約束はいつでも良いことなのだという結論に達した。

シャルル。私に攻撃している訳ね。その、護りたい誰かのために。

彼が利益を明らかにしないでこのようなメールを送りつけてくること自体、本来ありえないのだ。
私は、彼に、約束の日時を繰り上げてくれるのであれば、応じようと話を持ちかけた。

自画像の売買は、もうどうでも良くなった。
これが彼と引き替えに出来る有益な札だということに、気がついた私はひとり笑みを漏らした。

私はこれを使うことにした。

メールの返信をする。時間をかけて、ゆっくりと。

まずは売買契約に応じようと思うこと。
鑑定をシャルルにお願いしたいこと。
そして電話連絡が欲しいと言うことのみ。
ごく簡潔に書いて送った。

待つことも最大の攻撃よ、シャルル。

その一方で、あの絵について考えてみることにした。

祖父は、この絵は、この家から米国の大富豪マクドゥガル家へ嫁いで縁続きになった娘のために描かれた画だと言っていた。
祖父もあまりよく知らないらしい。ただ、これをいつか手に入れたいと言ってくる者がいるので、
見極めて、その時が来たら手放しても良い、というようなことを言っていたと記憶している。
その祖父もそのあとすぐに逝去したので、今となっては話を聞くことが出来ない。

おじいさま。

今が「そのとき」のようよ。

私は笑った。

まったく惜しいと思わない。
これが彼と私を繋ぐツールであるならば喜んで使用しよう。ただそれだけだった。
それに、この望みがなければ、あれら3点に自画像を加えることは良いことのように思えた。
まっすぐにこちらを見据えるような、そんな視線の強い人物が描かれている。
自画像と言うからには、誠次本人なのだろう。

・・・そしてこれを縁続きになって米国へ行ったという女性に贈ったのであれば、彼と彼女は深い仲だと予想した。
でもそれ以上考えることをやめた。
思考能力は全部、「シャルルをいかにして呼び出すか」ということに注ぐことにした。

・・・常々、家族からは情が薄いと言われる。
ほとんど外にも出ず、夜中に起き出しては明け方眠る生活も久しい。
そんな生活になるまでは、私も普通に暮らしていたのだけれども。
もう、呆れて、誰も私に忠告しなくなってしまった。

だがしかし、彼だけは。シャルルだけは、私に常に忠告をした。
そして、自分は医者でもあるから、そんな生活を改められるようにするよう医師として助言ができると言った。彼は私が病気なの
だと思っているらしかった。

病気。確かに病気だ。恋の病という病気にかかっているではないか。

そう、思った。

電気も付けない部屋の中で、じっと、携帯電話を握りしめて、彼からの連絡を待つことにした。
電話がかかってきたら。すぐにここに来て欲しいというつもりだ。
そして一晩中彼を離さないつもりだ。

夜遅い訪問であっても、家族は誰も心配しないし、詮索もしない。
屋敷の人間にはあらかじめ来客の旨を伝えてある。両親は今海外に旅行中だ。
ある意味、良いタイミングだった。
たとえ帰国した両親に咎められても、あのフランスの華であるアルディ氏が、私のために来日予定を繰り上げてわざわざ尋ねて来
てくれたと言えは、感激こそすれども、叱りつけることはしないだろう。

私はその時が来るのをじっと、待った。

シャルル。早く、早く来て。

そう願いながら。

04 四乃至五

私はシャルルという人間について情報を収集してみることにした。

シャルル・ドゥ・アルディという人間は、とてつもなく人嫌いで、とても気むずかしいという話は誰もが証言する一致した見解であるようだ。

確かに。

彼の返事はいつも素っ気なく、要件しか言わない。
そしてメールを送っても返事さえない。

でも、私と話をするときの彼は、あまりそういったことが気にならない。
いつだったか彼は私に向かって「君は悪くないね」と言ったことがあった。
それが彼独特の賛辞だということに気がついて、とても嬉しくなった。

そうして、彼をもっと知りたいと思った。

元々、彼と知り合ったのは、WEB上でのことだった。

夜に起きて朝に眠る生活になってから、暇に任せて、ネット上でチェス対戦をするのが私の日課だった。
小さい画面を眺めるのは辛いので、大画面モニターを使い、ソファに寝転びながら、一晩中音声変換キーソフトを使用して、ぶらぶら部屋の中で雑事をしながら、チェックメイトが何手で可能か想像する毎日だった。

チェスは好きだ。

頭脳を使えばそれでいろいろなことができる。

先の手を読み、想像し、相手の攻撃方法や防御方法をあれこれ考えながら次の攻撃方法を変更させていく。そのスリルと、充実感と、達成感が何とも言えず好きだった。

たまに気が向けば、ネット対戦を楽しむ。

いつだったか、無敵のユーザーがいると聞いて、アクセスしたのがシャルルだったというわけだ。

でも、彼は私の正体に気がついていたようだった。

何度挑戦しても、まったく勝てなかった。でも、普通のユーザーなら彼はまったく相手にしないし、

それなりのチャンピオンや各国のキングが挑戦しても手が進まないのに、私は食い下がって、

彼を一晩相手に戦うことができた。

最後は負けたけれど。

その時に彼が「君は悪くないね」と言ったのだ。私は一瞬で彼に夢中になった。

何度かそういった時間を持つうちに、彼に自分がほとんど外に出ないで過ごしていることや、そして、彼に一度、ネット診断をしてもらった患者であることを漏らしてしまった。

その時、彼が初めて、あれこれ私に質問をし出した。

チェスの相手では不足で、患者なら詮索してくれるのね。

そんなことを思っ少し笑った。

そしてしばらく彼と連絡を取らずにいたら。

どこで調べたのか、手紙が来た。

彼には私の正体なんてお見通しだったわけだ。

近いうちに来日するから、是非診察させて欲しいと言ってきた。

そんなに興味があることなのかしら。別に命に別状ないし、日々の生活にはほとんど困らない。

私は首を傾げた。

でも、彼がこうして私に特別な手段でアクセスしてくれることが嬉しかった。

そして、もう一度、彼に連絡を取ってみようと思った。

―――いた。

彼は、ネット上にまだいた。
やあ、待っていたよ、とメッセージが入る。本当に待っていたかのような、素早いメッセージだった。

来日の件は了解しました。今度は実践で勝負しましょう。
でも、ここのところ少し外出をしているので連絡が取れないかも。

つれない返事をしてみたつもりだったけれど、彼にはまったく通用しなかった。
彼はわかった、と言って日にちを指定し、回線を切断した。
何がわかったのだろうか。私のことはまったくわかってないくせに。

もう一通、私宛にメッセージが来ていた。伝言を受けると、それはある都内の画廊からだった。
我が家の所有する絵画を買いたいので是非来てくれないかという招待状だった。
売買に応じて欲しかったら、通常はそちらから来るのが礼儀でしょう。そう返事をしたら、
実は事情があって、是非、見せたい絵画がある、という。

私は先ほどのシャルルに言った「留守がちなのでない」というでまかせを、ここで使ってみることにした。
シャルルの来日までには少し時間があり、それまでには昼夜逆転した生活を改めねばならない。
そのためには、この外出来訪も無駄でないかも知れないと思い直すことにした。
どうせ家にいても退屈だった。だれも私に話しかけもしない。

そんなことを思ったほんの気紛れだったのに、来日はまだ先だというシャルルに、会ってしまったのだ。

これを運命と言わないで、何と言えれば良いのだろう。

・・・シャルル。私には、すぐわかったよ。シャルルの声。シャルルの話し方。言葉の使い方。
それだけで、すぐにわかった。

こんな偶然で、聞き間違いかと思ったけれど、でも違った。

これをどうして、喜んでいけないの？

これを秘めたる恋にすることなんて、とうてい出来なかった。
秘めたら、私という人間も消えてしまう気がした。

シャルル。

私を見て。

シャルル。

私に微笑んで。

普通の恋人と同じは求めない。

だが、一緒にチェスをして、私に「悪くないね」という手を打たせて欲しい。
一晩中。あなたを少しの時間でも、考えさせることができたかしら。

ネットの向こうがわの、気むずかしい、私の対戦相手。

そして、私に何か、用事があるのよね？

この、私に。

私の病気のことなのだろうか。
それがかのフランスの華の目にとまるような難病だったのか。

確かに日本の医師はさじを投げたけれど、私はそんなに困っていない。
だってこうしてあなたと話をするにはちっとも困らない。

普通に、暁は感じるし、日中の外出は目が疲れるけれど、完全に闇に吞まれるのは、まだ先の話だ。
こうして夜に活動し昼に眠っていれば、目立って疲れることはない。

大画面で音声変換ソフトを使わないと小さな文字はもう見るできないけれど。
誰かに付き添ってもらわないと、薄暗い廊下は歩けないけれど。
でも、あなたと勝負する脳神経は薄れていない。

シャルルは、他の人と同じように、私の色素の薄くなった瞳が、そんなに奇特に思うのだろうか。
彼の写真を見た。青灰色の瞳だった。あなたも色素の薄い静かな色の瞳をしているじゃない。
私の何があなたの気になるのか、わからないけれど。

私の何をあなたは欲しいと思っているのか、私の何を利用したいと思っているのか、何となく想像つくけれど。

この奇病は遺伝だという。

眼病で有名な医師の大半に診てもらったが、まったくわからなかった。
徐々に視力が失われていき、そして目の色素が薄くなる病。
以前、シャルルにネット診断してもらった際には、軽度だけれど同じ病気の人がいるので、
研究対象にしたいという話をされたことがあった。
でも、両親は、治る見込みがないのに、研究の対象になるくらいなら、このまま暁が失われた方が良くと言った。

私の慟哭なんてお構いなしに。
だから、私は部屋に閉じこもった。
人と話をしなくなった。
昼間が眩しくて眩しくて、外で遊んだ子供の日々を夢見て何度も泣いた。ひとりで泣いた。
そうして、夜の空だけを眺め、私の目を笑わないネットの世界に逃げ込んだ。

彼が来日して、私に会いたいというのはこの目の診察をしたいからだ。

わかっていた。

私に会いたいのではない。
私という人間に巣くう奇病に会いたいのだ。

あなたは残酷だ。
そして狡い。

単に私の診察をしたいだけならば、こんなにも心を奪うまで時間をかけることはなかったではないか。

久方ぶりに、少し、泣いた。

でも、それでも良いと思った。

彼に会えるのであれば、この病はそれさえも彼に会うためのツールだ。
それで良いじゃない。
自分に言い聞かせた。

この目の暁が完全に闇に落ちる前に。

彼の姿を目に焼き付ける、最初で最後のチャンスなのだと思うことにした。

そんな、拙い決心の、数日後に。

思いもかけない場所で彼に遭遇してしまうことになるなんて、このときまったく予想していなかった。

シャルル、思わない手を使ってきたのね。

そう、思った。

そしてあなたは、私に微笑むのかしら。冷たく横目で見るとのかしら。私のすっかり薄くなってしまった茶色の瞳をみて、気味が悪いと思うのかしら。

でも、いつも通りに話しかけて欲しいな。

「待っていたよ、――ノリ。」

そう言ってくれるだろうか。

05 四乃至五の続き

異変が起こったのは、とてもゆるやかすぎて、最初は気がつかなかった。陽の光が眩しく感じ、そこから薄暗い場所に入ると、とたんに夜目が利かない状態というのか、いわゆる「夜盲症」の状態から始まった。

次に、盤上のポーン（歩兵）とビショップ（僧正）を間違えた。そこで初めて、おかしいと気がついた。

それまで、私はこの毎日が永遠に続くと思っていたし、永遠に続くかどうかということを考えてこともなかった。最年少でジュニアクイーンに輝いた後は順風満帆という言葉は私のためにある、と何度も違う人から言われた。時には賞賛の言葉であったし、あるときには揶揄の言葉でもあったそれを、私は平服のように常に身に纏っていた。

私の名前は乃理という。おじいさまが名付け親だ。そして、おじいさまは、一枚の絵画を私に託した。その画を譲った人物が、これを譲渡するかわりに、一族に生まれる女の子のひとりに「のり」という名前をつけるようにという交換条件を出したと知った。

その昔、アメリカの大富豪に嫁した女性も同じ名前だったとか。若くして亡くなったそうだ。彼女の栄光と功績をたたえて。我が家は私に同じ音の「乃理」と名前を付けた。

名前は好きでも嫌いでもない。名前には意味がない。私にとって意味があるのは、ただ、毎回の勝負にどれだけ少ない手数で勝てるのかということ。どれだけ短い時間で答えを見つけ出すことが出来るのかということだけだった。「男に生まれれば良かったのに」そう何度も言われて、自分もそう思ったこともあった。クイーンの称号は私にとっては不足だった。物足りなかった。

男に生まれれば、家督を継いだ後も、この自分の生活の一部を捨てることなく、ずっと続けていくことができたのだろうと思う。

おじいさまが私に託した一枚の絵。

若き画家が描いた「自画像」だった。昔は、その視線がどこを見てもこちらを見ているような落ち着かないその絵が怖かった。でも長じるにつれて、その絵を見ても何とも思わなくなった。どちらかということ落ち着く感じがした。だからといって、とても気に入って四六時中眺めているほど私はチェス対戦に飽きているわけではなかった。

毎日が楽しくて眩しくて、そして、取り戻せないことに気がついた時には、もう遅かった。夏の強い日差しの中で、眩暈を起こして倒れた。それが発覚するきっかけだった。
・・瞳の色素が薄くなっている。
そして、視力が落ち始めて、睨が眩しすぎる。太陽の光が差すように感じ目を開けていることが出来ない時がある。そういう時間が、だんだん長くなっていった。

両親は慌ててあらゆる眼病治療に有名な医師に診察を依頼した。けれども原因はわからなかった。シャルル・ドゥ・アルディというフランスの医師にネット診断を受けたりもした。世の中は、人に直接会わなくてもその人を診断することが出来るのだ、とその時初めて知った。そして、この病が、かの有名なフランス人医師でさえ、すぐさま診断を下すことが出来ず、ただただ「研究対象」でしか取り扱うことができないと知り、両親は私を諦めることにした。

チェスの白さを見ているだけでも眩暈がする毎日を思い返すだけで、今も頭痛に悩まされる。

「乃理は女の子なんだから。良いじゃないか」
彼らはそう言った。
私にはありえない言葉で、とうてい受け入れられなかった。
何か良いのか。
もう、盤を何時間も見つめることが出来ないことがそんなに良いことなのか。
さっさと決められた結婚をして、子供を産んで、一家安泰になるような権力者の妻になれば、私のこれからのことはどうでも良いことなのか。

私は、何度も自問した。人にも聞いた。
でも、自分自身も出すことの出来ない答えは、他人が見つめることができるわけがないのだと思い知らされただけだった。

私は遮光カーテンで締め切った薄暗い部屋に閉じこもるようになった。
誰とも口をききたくなかった。
そして、私の瞳を見て、色素の薄い瞳を見て、周囲の人間が哀しそうに目を伏せることが怖くなった。
ただ、私の瞳をまっすぐ見つめ返してくれるのは、そう、おじいさまからいただいた一枚の画だけだった。「彼」だけが、私を見つめてくれた。いつもと変わらずに。

そういう意味で言えば、この自画像はなくてはならない私の友達になったのかもしれない。

本当の友達はいらなかった。

そして、夜に活動し、日が高くなると眠り、そういう昼夜逆転の生活が始まった。
体調が良くて気が向けば、大画面スクリーンに常時移されるネット対戦を見て、自分の対戦相手に相応しいユーザーを物色したり、気が向けば、自分が参戦して、相手を一瞬で負かして愉しんだ。
回線の向こう側にいる、情報の海のかなたにいる人達は、私を賞賛こそすれども、決して馬鹿にしたり、その瞳はどうしたのと聞いたりしなかった。だから楽だった。
もっと視力が弱る原因になったとしても、私はこの繋がりだけは絶つことができなかった。

そんな日々をもう、どれくらい過ごしたのだろうか。

無敵のユーザーがいると聞いて、私は興味を持った。
是非、対戦したくなった。
そのユーザーがログインする時間がわからなかったので、始終彼を捜して情報の海を彷徨った。
男でも女でも構わない。この対戦には男女の性別も年齢も関係ない。

そしてそれが、シャルル・ドゥ・アルディだと知ったのは、程なくしてからだった。

それは僥倖とでもいうかのような偶然で、彼がログインしている最中に、私もその場所にいた。
すぐに対戦して欲しいとエントリーした。
彼と挑戦したいという強者は世界中にたくさんいたけれど、彼は相手にしなかった。
だけれども。

エントリーから少しして、私に入室の暗号キーが送られてきた。
私は小躍りした。

そして、最初の対面を迎え。時間の流れを忘れるほど、のめり込んだ。
最後は負けてしまったけれど、私は十分満足していた。
久しぶりの高揚感。久しぶりの充実感。

こんな気持ちはいったいどれくらい長らく味わっていなかっただろうか。

彼の「悪くないね」という賛辞のメッセージが読み上げられたとき。

私は、その顔も見えないし声も聞いたことのない、その人に。

恋をしてしまったのだ。

やがて彼からのメッセージが、情報収集をして手に入れた彼の数少ない音声にかぶり、ソフトの読み上げでなく、シャルル・ドゥ・アルディ本人が語りかけているような、そんな気になった。

実際、この大胆であり独創的でもあり、そしてこれまでに誰も考えつかないような組み合わせで攻めてくる攻撃型の戦略は、私が今まで見たことも聞いたことも戦ったことのない相手のタイプだった。

これはAIや他の人物が代わりに行っている攻撃ではない。
私は彼と対戦する度にそう確信した。

そしてかの麗人の気に入った手で攻め入ると、「悪くないね」というメッセージが時たま入ってきた。
それが楽しみでそれが嬉しくて、私はまた、彼にのめり込んだ。

だから彼が来日することを知って、心躍る喜びを感じた。
彼に再会するための場所や洋服、長らく放置していた癖のある髪の毛を整えることに夢中になった。

再会。

本当なら初めて会うはずでも、私にはそれは「再会」なのだ。

シャルル・ドゥ・アルディ。

彼の名前を呼んでみる。
それだけで胸があたたかくなり、微笑みがこぼれ、そして彼のその明晰で伶俐な頭脳が何を考えているのか知りたくなる。

フランスの華と言われた人はどんな人なのだろう。

もっと知りたい。
もっと話しかけて欲しい。

その画廊で再会したときには、だから、これは運命だと思った。
秘めたる恋にしてその恋の息の根を止めなくて良かったと心の底から思った。

私は唯ひたすら想見した。
シャルルが、私を見定めて、運命の人として、フランスのパリへ。
彼の住む国へ攫っていつてくれることを。
そして、彼に永遠に愛される、倅せな自分を夢想した。

その一方で、「もう一人の冷静な私」が「そんなことあるわけないでしょう。現実を見て、ちゃんと見て。」と叫んでいた。でもその声には耳を塞いだ。
とにかく、彼に会わなければ、何も始まらないし……何も終わることがない果てのない夢見の生活を続けることになるであろうことが十分にわかっていた。

だから、長らく陽の光にあたっていなかった生活を改めようとした。

彼との再会はきっと、都内の豪華なホテルや空港のVIPルームなのかもしれない。
だとしたら、そんな光溢れる場所で、体勢を崩したり、まっすぐ彼に向かって歩けない醜態はさらしたくなかった。

これが恋に堕ちたということであるのだとしたら、私は間違いなく、恋に酔いしれていた。

少なくとも、かのフランスの華が、私に会いたいと言うのだから、それはまさしく彼にとって私は「特別」なのだ。…理由はどうであれ。

だから、画廊でシャルルに再会した時には本当に驚いた。
シャルルも驚いたと思う。

彼の白金の髪が眩しかった。
今の私には、間接照明でさえ堪える。でも一生懸命彼を見た。
彼は輝いていた。

よく似た面立ちの女性を携え、華のような微笑みをしていたのを感じた。
もう、私は「見える」ではなく「感じる」のだ。
その空気、音、その人の息づかい、体の動く空流、それらすべてでその状況を「感じて判断」する。

窓口の女性が一瞬でその態度を崩し、彼に見惚れてため息をつくのがわかった。

彼の声は、思ったより低かった。でも予想通りだった。想定範囲だった。

涼やかなよく響く声。そしてその完璧な日本語。歩く歩調も、予想通り。
彼は完璧な人だった。

だから。

その完璧な人が、「マリナ・イケダ」の名前を聞いた時に、少しだけ、吐息をついたのを聞き逃さなかった。切なく甘く、そして、待ち望んだその言葉を、彼は小さく復唱した。
復唱。彼は、同じ事は二度は繰り返さないのに。

シャルル。

あなたの護りたい人はその人なのだろうか。

画廊で彼は私が嫌だと駄々をこねると、冷たく言い放った。
「先に行こう…時間だ」
でも私は「いや」と言った。
彼は首を振って否定し、そして私の腕を掴んで、帰れと言った。

「帰ろう」ではなく「帰れ」だった。
私は遣る瀬無くなって、ただただ「いや」と叫ぶ子供になった。

彼が「やあ マリナちゃん」という言葉がとても切なかった。
「マリナ」と呼ばれたのは、廊下の先にいた人物に違いなかった。
そして、彼女が、彼の「愛おしい恋人」なのだと悟った。
彼は決して名前に「ちゃん」付けしない。
私の薄い瞳で見ても、どうみても私より年上の彼女を、彼は慕わしげに呼ぶ。

どう見ても。彼女は特別なのだ。彼女だけは特別なのだ。

私は動揺を隠すことが出来なかった。
焦点の合わなくなった瞳は、ずっと遠くを見つめた。
もう、何も見えなくなればいいのに。そう思った。

「10分で戻る。先に行ってくれ」
彼はそう言って、私の腕を掴み、引きずり出すように彼らが来た道を戻っていった。

そして待機していた我が家のベンツに私を投げ入れた。

「乃理。こんなに具合が悪くなるほど悪化したのは、いつからなんだ」

彼は少し怒っていた。

それは私が目の症状以外はすこぶる健康だと言ったことに対する憤りではなかった。

彼女と約束した「10分以内に用件を済ませる」という、そのことだけに気を取られていたことに、私はとても憤った。

私は眩暈がした。あまりにも期待しすぎていたことに対して、失望した自分に立ってられないほどがっかりした。

シャルルに夢想していた自分が、いかに甘い妄想を抱いていたのかを感じ、がくんと昔乗ったジェットコースターの下降曲線のように落下するのを感じた。

「…乃理！」

私はそこで失神した。

正直に言えば、まだ意識はあったけれど、もう、私が私でいたくないと自分で拒否した。

私の膝は崩れ、そして目は焦点が合わなくなり…そして自分が脳貧血を起こしてその姿勢を保つことが出来なくなったのだと、気づくのは、自宅に運び込まれて、ビタミン注射と点滴をされて随分経過してからだった。

私は自分のベッドに寝かされていた。
その枕の肌触りやスプリングの感じ、部屋の匂いですぐにわかった。

目の前が暗い。
どうやら、目を痛めないように包帯か固定バンドで目を覆われているらしい。
起き上がろうとすると、左腕がちくりと痛んで、自分の腕に針が入っているのを感じた。
「点滴してる。動くな。」
シャルルの声が脇から聞こえた。
「真っ暗で何も見えない」
「さっき点眼した。瞳孔が開いているから、眩しく感じないように包帯を巻いている。急ごしらえだから、眩しかったら言ってくれ。」

今、何時なの？と聞く。
シャルルの答えた時間は、画廊を訪れた時間よりもかなり時間が経過していた。
「…契約はどうなったの？」
「終わった。さっき、弁護士が書類を持ってきた。内容を確認し受けとった。書類はそこに置いてあるから、後できちんと誰かに保管してもらうように。」
「あなたが保管してよ、シャルル。」
私がそう言うと、シャルルは駄目だと言った。
「意味がないことはない」
少しでも繋がりを持とうと思った私の思惑はかわされてしまった。

耳を澄ますと、彼はパソコンで誰かにメールを打っているようだった。
そして何本かフランス語と英語で電話を済ませた。
次に、私に話しかけた。非難の言葉だった。
…私に話しかけるのは、最後ののね。あなたの優先順位からすると、私の容態を気遣うことは電話よりもずっと低いということなのだろう。
「乃理。君の血管はこんなに脆くなっていることを主治医は忠告したと思うが？」
「主治医はシャルルよ。…私に主治医はいらない」
「乃理。」
もっと。もっと、私の名前を言ってもらえないだろうか。
名前には意味がないと思っていたけれど、シャルルその人の口から発せられる私の名前は私の名前であってそうでないようにも感じる。なんて甘美で…残酷なのだろう。
私への呼びかけは、先ほどの「マリナ」のように穏やかで優しいものではない。

「画廊に戻ると約束したのに、戻らなかったのね。…約束は守る人かと思ってた。」
「契約が完了してないからだ」
手厳しく、シャルルはびしりと言った。
…ああ、彼はお見通しなのだ。
私はとぼけてみた。こういう時に、目が覆われているというのは好都合だった。
彼の青灰色の瞳や完璧な美貌を見ないで、平気で嘘をつける。
「なんのことかしら」
「二度も言わせるな。…契約は完了していない。」
「契約？あなたとの契約は今日の昼までよ。あなたの時間を占有して、私はあの絵を売却した。契約書も戻ってきているのだったら、もう完了でしょう。…それとも、私ともっと一緒に過ごしたくなったの？シャルル・ドウ・アルディ」
「乃理。」
ため息をついて、シャルルは言った。抑揚のない声だった。
近くのソファに腰掛けていたらしく、彼が立ち上がって私の横たわるベッドの近くまで来る。一定距離で立ち止まる。きっと冷たい眼差しで私を見下ろしているのだろう。

「オレが鑑定をしたのに、気がつかないでやり過ごすと思ったのか？」
「…」
「契約に立ち会いたいという話を承諾したのは、君が【自画像】にかかるすべてを売却すると言ったからだ。でも、まだ足りない。…さあ、出せよ。」
「どうしてわかったの？あの【自画像】に、付属品があること」
「見くびるな」
自尊心を傷つけられたシャルルは少し苛立たしげに言った。
「乃理。この話を長く続けるつもりはない。どこにあるんだ。」
「私の枕の下。取れるものなら取ってご覧なさい」

私は少し微笑んだ。
シャルルが大きくため息をついた。
「君はもう少し賢いと思っていたよ。」
「あら、十分だと思うわよ。シャルル・ドウ・アルディを困らせるぐらいには知恵は働いたと思う。」
「それは蠢愚というんだよ、乃理」

彼は私を愚かな女だと言った。
今度は私がひとつため息をついた。

何を言っても賞賛してくれない。
何を言ってもこちらを向いてくれない。

どこまでも残酷でどこまでも美しい人は、私に「悪くないね」と声をかけてくれたのに。
その言葉さえも否定しそうな物言い、彼は私に蔑視を送った。

「君がそのつもりなら、こちらにも考えがある」
シャルル・ドゥ・アルディがそう言った。
彼の考えを聞くのが怖かった。
その手順を踏むときは、私と金輪際縁が切れるときなのだ。
「わかったわ」
私は大げさにため息をひとつついて、咄嗟に枕の下に隠しておいた封筒を出した。
シャルルが来訪する前に慌てて隠したものだ。
「教えて欲しいことがあるの」
彼がそれを受けとる前に、私は質問をしてみることにした。
これを受けとってしまったら、彼はその場で立ち去り、二度と会えない気がした。
「なんだ」
彼はつまらなさそうに言った。これが普通の彼なのだ。
彼女を慕わしく呼ぶ時の彼とはまるで違っていた。
「…あの人、あのマリナとかいう女性は、シャルルの何？」
「君に応える義理はないよ、乃理」
少し怒った風にシャルルが言った。
ここで彼女の名前を持ち出されるとは思っていなかったようだった。
「これほどまでにシャルル・ドゥ・アルディとも在ろう人が、走り回って。私が見えないとも思っているの？あの人にこの【自画像】を引き渡したいがために、あなたがこうやって嫌々私のところに通うのはお見通しなのよ」
嫌々、と言ったところを否定してくれるほど、シャルル・ドゥ・アルディは優しくなかった。
「それほどまでにあなたが情熱を傾ける価値が、あの人にあるの？」
「価値はある。」
「あの方は、あなたの何？」
もう一度尋ねた。
聞かなくても良いことを尋ねた。
聞いたらもっと傷つくことをわかっているながら、尋ねた。
彼は少し吐息をついて言った。
「オレのすべてだ」
質問はこれで終わりか、とシャルルは言った。
「もうひとつ。あとひとつだけ。」
「早く言え。時間がない。」
何の時間がないのだろう。彼は大分、時間を気にしているようだった。
「…この結果をあの人にもたすために、私の目を犠牲にしたの？」
その言葉に、シャルルが少し沈黙した。凶星だったわけだ。
今頃になって、彼女の目の診察をしろと言ったシャルル。
今頃になって、絵の鑑定をしろと言いだしたシャルル。
私のとんでもない申し出を、引き受ける代わりに、売買契約を速やかに行おうとしたシャルル。
そのすべてが、彼女と、あの絵に繋がるのであることはもうとっくにわかっていた。

調べればすぐにわかることだ。
シャルルが訪問する前に、彼が来日の日程を繰り上げたことの本当の理由について推測した。
憶測でも推測でもなく、それは事実だったようだ。
私の目が見えなくなりそうだと確認して、両親がいない頃を見計らった。
そして、売買契約に必ず応じるように段取りを整えた。
面商には、顧問弁護士と、買主しか現れないはずなのに、先方の弁護士らしい男性と一緒に彼女は現れた。そして慕わしげに「マリナちゃん」と呼んだ。

…それで気がついた。彼女が、イケダ・レポートを書いた人物だと思った。
売り主の画廊のオーナーから、これが5点ある連作で、そのうち彼女がレポートを書いてそれにシャルル・ドゥ・アルディ氏がそのレポートに評点SSを付けている、と聞いた。
彼女その人だと思った。
仕事もプライベートも彼を満足させる、そんな奇跡のような人
彼女は狡いと思った。

「君の目は、治らない」
静かにシャルルが言った。
私はぎゅっと唇を噛んだ。
彼に言われると死ねと言われているように聞こえた。
「でもその進行を遅らせることはできる。それを研究するために、サンプル取得に来た。
君と同じ病の者がいる。だから、決して原因のない病ではないはずなんだ。」
それはなんだか私というよりはむしろ、シャルル自身自身に言い聞かせているようだった。
「それでいいわよ、酷い人ね。私の進行をもっと早く止められたはずなのに、時期を見て、進行具合を見ていたわけね。…その程度の人間であったということがよくわかったわ」
「乃理」
「気休めはいらない」
私は強く言った。
「気休めじゃない。この時期にしか日本に来られなかった。そして君の病気の進行を早ませたのは、他でもない、君自身の責任なんだ」
シャルルにそう言われて私は言葉に詰まった。
シャルルに責任をなすりつけても仕方がないのに、そうすることで、これっきり会うこともできないという縁を、つなぎ止めていたかった。

「それでは、行くよ。」彼はそれを受けとると、部屋を出て行こうとした。
「シャルル。」
最後に、私は彼にもうひとつお願いを言った。

「明日でいい。それまでにゆっくり休んでおくから…また、来てくれる？そして、私をあの子のところに連れて行って欲しい」

その申し出を、シャルルは「考えておく」と言った。深い哀しみと静けさを帯びた声で。
彼は断らなかった。
あの、付属品の状態と中身次第で次の手を考えるのだろう。

どこまでも酷い人ね…

私はそこで濁った笑いを漏らした。
今は、涙なんて出なかった。その代わりに、何か、自分の手のひらからこぼれ落ちてしまったと思った。
彼と唯一対戦できた自分が特別だと思っていたけれど、そうじゃなかった。
もっと特別な人が、居た。
そしてその人のために彼は滅私の状態で休むことなくその頭脳を働かせている。
時にはその自らの美貌さえ、利用して。

本当に、酷い人。

それでも良かった。利用されても良かったのに。

あの手紙を読んで、シャルルがここに来てくれることを祈ったけれど、
あの手紙を読んで、シャルルがここに来ると言うことは、私の願った結果にならないことを意味していた。
来て欲しいけれど、来て欲しくない。

そんな、答えのない問答に、今夜も眠れなさそうだった。

シャルル・ドウ・アルディが私を迎えに来た。
半分予想していて、半分予想していなかった。
「行くぞ」
私の点滴の針を引き抜いて、軽く止血するなり、開口一番、彼がそう言った。
「支度をしろ」
「連れて行ってくれるの？」

支度をしろと言うことは回答にならないのかい？

詰まらなさそうに彼は言った。
細くて長い彼の指が私の腕に触れたとき、私はまた甘い刺激に酔いそうになった。
シャルルはまるっきり無視をしたけれど。
身支度を終えた私と彼は屋敷を出た。
彼の車が後ろからついてきた。
行きは同乗しよう、医師として。
彼はそう言って、私と同じ車に乗った。
後ろから彼の車がついて来ているということは、帰りは私と別の場所に行くのだろうと思った。
そして、画廊に直接車を待たせていないところを見ると、あまりそこには長居をしないつもりの方だ。

「あの手紙は昨夜のうちに先方に渡してきた」
彼は結果報告をした。
私は背もたれによりかかり、厚い膝掛けをかけなおしながら、そう、とだけ言った。
「…あの手紙。読んだの？」
「読んだよ」
シャルルは言った。私は感想を尋ねたかったのに、彼は結果しか言わない。
「君に宛てた手紙だけれど、手放しても後悔しないね？」
「シャルル・ドウ・アルディらしくないわね」
私は苦笑した。
「何度も尋ねるなんて、あなたは本当は偽物？」

でも、あの手紙はもう、二度と忘れないくらい印象的で・・・覚えてしまったわ。忘れられないのは、シャルル、あなたと同じ特質なのかもしれない。

「文字には効力はなく、記録だから。それを覚えて記憶するのであれば良いだろう」
彼らしい答えが返ってきた。
彼は普段手紙を書かない。書く必要がないから。
だから彼に関して残っている文字は、たくさんの書類の末尾に記された、彼の署名だけだった。

シャルルの中では、文字とは、それだけの価値に過ぎない。
だから手紙というものもあまり、価値がないのかもしれない。
知識を埋めるためのものであり、それに感動したり…想いを秘めたりすることはないのかもしれない。
私は彼を知らなさすぎだ。

「ありがとう…来てくれて」
彼は夜になるのを待って来てくれた。
その心遣いが嬉しかった。
確かに、あの陽の光の下ではもう、どうしようもなく目が痛むから外出なんて無理だった。
外出するときには目の包帯も取ってくれた。
そして眼球の検査をして、脈を測り、水分くらいは摂れ、と忠告した。
それでも声をかけてくれることが嬉しかった。

「…帰るのね、フランスに」
「ああ、今夜発つことになるだろう」
シャルルは長い脚を組み直した。
乃理には説明がいらぬから楽だよ。
彼はそう言った。お世辞でも嬉しかった。

後部に付いてくる車は、どうも荷物を乗せているような重量を感じさせるタイヤの摩擦音だった。
そして私の処方箋だろう、屋敷の者に何かを渡して説明しているのを聞いた。
何件か電話をしていたのも…きっと私の入院先でも指定していたのだと思う。
そして彼はラフな格好ではなく、スーツを着ていた。上等上質の。
これはフランスや日本の空港で、誰に見られても良いように、身なりを整えているのだろう。

「あの人は連れて行かないのね」
「…連れて行くよ」
その時だけ、シャルルの声小さくなったような気がした。
「何か、賭をしているの？」
「どうしてそう思う？」
私は微笑んだ。彼との問答はやはり楽しい。
「…一緒に便だと言わないし。後ろの車に誰も乗っていないし。時間をあまり気にしていないから、待ちあわせでもなさそう。
だから、何か条件が整ったら連れて行くつもりで、そうでない可能性が高いから、そんな言い方をするのかしらと思って」

賢すぎるのとおしゃべりなのとは違うよ、とシャルルは言った。
あなたに言われたくないわ、と私が応えた。

決しておしゃべりではない、私の賢者。

「乃理。」「はい。」
「…君の病は治らないけれど、治療方法は見つける。だからそれで我慢して欲しい。」
「良いわ。しょうがない。」
私は微笑んだ。
彼のすべてが欲しかったけれど、仕方がない。
この失われていく視を戻せないのであれば、それを嘆いても仕方がない。
元々、私は彼の姿をこの目に焼き付けて起きたい、と最初にそれだけを望んでいたはずだった。
人間って、欲深よね、と言うと、シャルルはそうだね、と同意した。
シャルルのような人でも、貪婪の罪に悩むことがあるのだろうか。
聞きたかったけれど、聞かないことにした。

…画廊に着いてしまった。

停車した車の中で、シャルルが言った。
「乃理。…入院しろ。しばらく体力をつけて、治療はそれからだ」
主治医として命じる、と言ったものだから、私は吹き出した。
「シャルル。前半と後半が一致してない。あなたはフランスに帰って主治医じゃないし、医師は患者に命じない」
「それは普通の医者の話だ。」
シャルルが笑った。きっと、あの青灰色の瞳で、可笑しそうに皮肉気な笑いだろう。
薄暗くてよく見えなかった。点眼液のせいで瞳孔が定まらないせいもあった。
「オレを誰だと思ってる？オレは世界中のどこにいても、乃理の主治医だ。」

…それがシャルルの答えなんだ、と思った。
私はきちんと微笑みを返せただろうか。

この孤独で優しい人は、冷たく人を拒絶する人でなかった。
私との関わり合いはとうに終わったはずなのに。
いえ、それ以上のことを彼は私にしてくれたのに。
…今、これがさよならじゃない、と彼は言ったのだ。

「チェスの相手が居ないと、寂しいわ」
また、相手をしてくれる？
私がそう言うと、シャルル・ドウ・アルディはくすくす笑った。
「考えておこう」

…考えておこう。
彼の肯定の言葉は独特だった。
確約は出来ないけれど、彼のその頭脳の片隅では、忘れていないよ、という約束。

その言葉だけで、十分だった。

「もう良いわ。私の用事は、あの手紙がきちんと【自画像】の裏面に収納されて、できれば公開されないことをお願いというか確かめるだけだったの。」

だから、シャルルが行ってきて、その目で確かめてきて。
…そして結果は知らせなくてもいいわ。なんだかわかる気がするから・・・」
乃理がそう言うと、ではそうしよう、とシャルルからの答えが聞こえた。

「さようなら、私のライバルさん。」
「いつかまた対戦しよう。その時には最高のチェス盤を贈ろう」

くしゃっと、大きな手のひらが私の頭をなでた。
こども扱いするなんて、酷いわ。レディに向かって。
私は軽口を叩いた。

すると、彼は私の両の頬を包み…額にキスをした。
軽く、風のように。
冷たく薄い唇が私の額に押し当てられた。

…車の扉が閉まる音がした。
そしてシャルルが立ち去る足音が遠のく。

シャルル・ドウ・アルディ。
あなたって本当に酷い人ね。

私の秘めたる恋は秘めるままにしておくことができなかった。
秘めていれば、彼との関係は相変わらず、良好だったと思う。
でも、そのままにしておけなかった。
私は彼の姿を焼き付ける方を選んだ。

そして彼は私の最後の残像として残るばかりか、記憶にも…切ないけれど大切な思い出を刻み込んでいった。

私はまた、彼と対戦するときの新しい手を考えなければいけないな、と思った。

体は疲れていたのに、どういうわけか軽かった。

シャルル・ドウ・アルディ。
さよなら。
私の対戦相手。

———あの人をしっかりと捕まえて、チェックメイトと言いなさい。

(FIN)

01 Satan's grief

君はオレの *luminosité du diable* だよ。

あたしの大好きなシャルル・ドゥ・アルディと同じ顔で、彼がそう言う度に、あたしはとても落ち着かない気分させられる。

シャルルと同じ青灰色の瞳に白金の髪に、ため息が出るほど美しい造作を持ち合わせる、もう一人の奇跡のような人。シャルルの片割れ。そういう言い方をすると少しだけ目を細める。これは彼が怒っている印だ。

ミシェル・ドゥ・アルディは初めて会ったときにそう、あたしに言った。あろうことか「悪魔の輝き」ですって！

あたしはシャルルのアンジェ（天使）なのに。

見た目はまるっきり彼と同じなのに、その底意地の悪さと、良く響く声だけがシャルルと違う。でもそれはその酷薄な唇を開いて、発せられる言葉を聞かないとわからない。残酷な言葉なのかこの世の楽園に誘う言葉が出るかによって、シャルルなのかミシェルなのかようやく区別が付くくらいだ。だから、あたしはできるだけ彼に話しかけないようにしている。

そもそも、ミシェルと初めて会った時が最悪の出会いだった。

それは、あたしのお誕生会の日。

忙しい中、シャルルが都合をつけて時間を作ってくれた、大切な大切な短い時間。忙しいシャルルが、あたしだけを見てくれる時間を作る。それはどんなプレゼントにも勝る、最高の贈り物だった。・・・マリナはいつも暇そうだけれど。

出先から戻るよ、というシャルルのコールを受けて、その会の始まりを本当に楽しみにしていた。

その集いは毎年催されているけれど、マリナが、今年はとびきりの来賓を招いているの、と嬉しそうに言った。とびきりの来賓？主賓はあたしでしょ。主賓が知らない来賓なんて、聞いたことがないわ。

つんと横を向いてマリナにそう言うと、彼女はちょっと笑って、まあ会ってみればわかるから。とそう言った。

それが、ミシェルだった。

あたしは、あろうことか、シャルルとミシェルを間違えた。マリナやダイとは家族の抱擁ではなく、再会の握手を交えていたし、朝出て行った服装とも違う。あたしは、コールよりも早く帰還したシャルルが、あたしに会いたくて急いで帰ってきてくれたと思い込んで。

そうして、レディにあるまじき事に。ミシェルに抱きついてしまったのだ。しかもこの上ない極上の笑みで。ああ、本当に口惜しい。その行為に、最初彼は戸惑ったように、体当たりをしてきたあたしを受け止めた。

「これがシャルルの遺伝子か。まるっきり半分だな。」シャルルよりもずっと低いバリトンがあたしの頭の上から降ってきて、そうして、何かが違うようだとうやく気がついた。

良く良く見れば。髪の毛の長さが少しだけ違う。そして、あたしを見る視線が柔らかくない。いつもなら、真っ先に抱き上げてくれるのに。「オレのアンジェ」そう言って、優しくキスをしてくれるのに。その他のパーツは全部同じであるのに、どういうわけか、声を聞くと、シャルルではないということがわかってくる。

戸惑った顔をしていたのだろう。あたしにマリナが説明した。「初めてではないけれど。ミシェルよ。シャルルの双子。何度か写真を見せたわよね。それからグリーティングカードも毎年もらっているでしょう」すっとあたしは表情をなくして、ミシェルから離れた。

「この無表情加減、シャルルそっくりだよな」
「いえミシェルでしょう」
周囲のやかましい客人達が、そんなあたしの反応を観察し始めるころ、シャルルが戻ってきた。

玄関先の広間でのやり取りに、この館の主であるシャルルは、ちょっと驚いたように目を見開いたけれど、すぐに面白そうに皮肉たっぷりに笑った。
「アンジェ。君はミシェルとオレを間違えるくらい、ノンアルコールのカクテルを飲み過ぎたのか？」

ああ、シャルル。どうしてそうになってしまうの。
それもこれも、マリナがきちんと来賓について情報を流さなかったからだ。

そう軽く睨むと、今度はシャルルは自分と同じ顔の、ミシェルに向き直った。
「久しぶり」
「今日はお招きありがとう」
こういう素直な会話は、本当に何年ぶりなのだろうとマリナが少し嬉しそうに、呟いた。
この二人は一緒に写真を撮ることがない。
だから、あたしはシャルルとミシェルが並んでいるところを見ていないので、比較できないままでいた。
双子だから、似ているのは当たり前なのだろうけれど。
彼らはよく似ていて、そしてまったく違っていた。会話しているとわかる。

出会いは最悪だったけれど、その後のあたしへの言動は、本当に腹が立つとしか言いようがない。

luminosité du diable = 悪魔の輝き

02 Satan's jealousy

シャルルとミシェルは何もかもが違う。外見は例え同じであっても。

たとえば。
あたしが何か、失敗してしまって、どうにもならないことに対して、涙を流していたとする。
すると
シャルルは
「涙を拭いて。オレのアンジェ。ひとりで泣くな」という。
ジルは
「涙を拭いて。まずはそこからですよ。そして一緒に何が一番良いことなのか考えましょう」という。
セイジは
「泣いても解決にならないだろ」と冷たく言う。そして、乱暴にあたしの涙を拭う。
アルディ家やここを訪れる人達の発言は千差万別だ。

・・・でも。
ミシェルは。

無視するのだ。このあたしを。

そうして辛辣に言う。
「涙を流す行為には意味がない。単に異物を流し出すだけの行動だ。それに理由を求めてどうする。
君の名前どおり、慈悲の心がそうさせるのかい。だとしたらとても無駄な機能だね。是非、削除するべきだ。」
そう言うのだ。
あたしは悔しいけれど、これで一番涙が止まる。そうして涙していても口を開く。
「解決しないことを嘆いても結論は出ないでしょ。あたしは今、一生懸命考えているの。体の老廃物を押し流しながら。考えながら、涙で瞳を洗っているの。同時にできるのだから、機能的だと言って欲しいところだわ」
この言い返しのどこがミシェルは気に入ったのかわからない。
彼は薄く笑うと、悪くない答えだ、と言う。
けれど、すべてにおいて、あたしとミシエルのやり取りはこんな感じなのだ。

「そっくりよねえ 二人とも」
「似てる・・・さすがアルディ家。遺伝は恐ろしいまでに確実だ。」
マリナとダイがそう感心して言う。あたしはまた、ぷいっと横を向いた。
「けれども、ミシェルがまたこうしてアルディを尋ねて来てくれることが嬉しい」
ジルがそう言って微笑むものだから。
あたしはミシェルが嫌いで、ここにはそれほど頻繁に来て欲しくないのだと言い出せないでいた。

でも、シャルルと一緒にいる時のミシェルは、何となくだけれど、穏やかな気がする。これまで離ればなれで暮らしていたから、きっと何か感じ入るところがあるのだろうか。あの二人にはそんな感慨はあてはまらないと思うけれど。

そもそも部屋が余っているのだから、一緒に暮らせばいいのだ。どうして、ふいっと現れて、そしてふいっと帰っていくのだろうか。ここはミシェルの生家でもあるはずなのに。これを漏らすと、周囲の誰もが少し哀しそうに微笑む。まだ、アンジェには早い話よと言われると、あたしは腹が立って仕方がない。

あたしはシャルルのアンジェなのよ。どうして彼を知りたいと思う気持ちをとめるの。これは誰にも出来ない事じゃないの。そうはいっても、シャルルがこの件に関して口を開くとはとうてい思えなかった。

だから、気が進まなかったけれど、シャルルではないもう一人のシャルルに、思い切って聞くことにした。

03 Satan's vociferation

あたしがミシェルの来訪を待つ、というのは人生初めてのことだった。ミシェルはいつも思いもかけない時にやって来る。そして思いついたように帰っていく。泊まったことはないし、シャルルやマリナがいない時にやって来て、邸内をぐるっと散歩して帰るだけのこともある。ミシェルは、誰かに会いにここに来ているのではないのだと思う。この館と、この館に住まった人を偲んでいるのだ。でもそれはそれほど待たなくてもすぐにやって来た。いつものように、思いもかけない時間に、彼はやって来た。

庭園の中央。そよぐ風に髪をなびかせて、ミシェルは座っていた。噴水の脇で、ベンチに腰掛け、長い脚を組んで、煙草を燻らせながら一人考え事をしているかのように微動だにしないミシエルの前を、あたしはわざとらしく、偶然を装って横切った。「あら、ミシェル・ドウ・アルディ。ごきげんよう」相変わらずあたしを無視した。目に入っていないわけではない。その青灰色の瞳がちょっとだけ動いたから。

「そんなにこの庭園が好きなら、ここに住めば良いのに。ここはあなたの生家でもあるのだから。・・あたしはあなたが嫌いだけれどね、ミシェル・ドウ・アルディ。」

「君の話は矛盾している」

おもむろにそう言うと、ミシェルはお話にならないね、と肩をすくめた。「オレのことが嫌いなら、どうして一緒に住めば良いのにと尋ねるんだ？」
「そういうミシェルこそ矛盾している」
あたしは言い返した。脳内のありとあらゆる部分を刺激しながら、彼にどう切り込んだらいいのか、瞬時に思いつく限りの手を考える。チェスをしているような感覚だ。「あなたを嫌いというあたし個人の感情と、一緒に住みたいのに住めない事情を持つ人に提案をするのは、因果関係がなく、まるっきり関連性がない。そこを矛盾ということ自体が矛盾している。」
びっくり、とミシェルが眉を動かした。挑戦的な青灰色の眸が徐々に強くなってくる。少し嬉しそうに、薄い唇の橋を持ち上げて、そこでようやくあたしを視界に入れた。「さすがはシャルルの半分だ。」
意地悪くミシェル・ドウ・アルディは言った。「もっと言葉少なに言葉。アルディの人間なら。必要以上の言葉は浪費でしかない。」
「・・必要なときに言葉を発しないのも、時間の浪費だと思うけど」
「今の言葉は説明に不十分だ」
ああ、要は、どうしてこういう話をするのか、説明しろと言う訳なのよね。わざとらしく、あたしは肩をすくめた。ミシェルがやったように。「お話にならないわね」
「アンジェ」
名前を呼ばれてぎくり、とした。ぎらり、とあたしを睨み付ける男の人がいた。一瞬息をのむ。有無を言わさない強い言い方。そして人を傅かせるほどの威圧感を持つこの雰囲気。煙草の灰が、落ちそうになっていた。彼はそんなことは気にしないで、こちらを睨み付けている。たとえ、あたしでも容赦しないのだ。これがアルディの男なのだ。そう思うと、体中の血が打ち震えて、頭の中がすっきりしてくる。目が見開いてミシェルを睨み付けている格好になる。きっと今、あたしも、ミシェルと同じ微笑みをしているのかもしれない。不謹慎だとマリナが困ったように言うかもしれないけれど、どういいうわけかわくわくする。

シャルルがいつか言っていたことを思いだした。「あいつの狂気はまだ鎮まってない」
確かにそうだと確認した。たった、今。そして彼の触れてはいけない話題の一つがここ、アルディ家を不定期に訪れる理由にあるのだということも確信した。

天使のようなカーブに、物憂げな微笑み。気品あるけれど静かな青灰色の瞳。それはまさしく、シャルルと同じだったけれど、ミシェルにはどこか・・・そう、暗くて拭いきれない悲しみがあつた。はつきりと強い艶めくバリトンが響いた。「シャルルはどうやら教育という大事な調教を忘れてしまっているようだね。売られた喧嘩は買わねばならぬし、やられたら倍に返せという家訓を君は知らないらしい。」

アルディの家訓を忘れた訳じゃないだろうな。ミシェルがそう言った。とても、挑戦的に。だからあたしも挑戦的に言った。「あなたのIQの足元にも及ばないけれど、ミシェル。でも、あたしも一応アルディ家の人間ですしね。その言葉は撤回するか、でなければ、変更して頂戴。投げたパイは引っ込める事なんてできやしない。『やられたら倍に返せ』？ミシェル。あなたはあたしにやられたと思っているのかしら」そうせせら笑うと、ますますあたしの頭が冴えてくる。挑発しているのは十分理解した上でのことだ。ミシェルはくっと笑うと、悪くない、と言いながら煙草の火を消した。そして組んでいた長い脚を解いて、立ち上がった。

「それではアルディー族で最も傲慢で最も愚かなMademoiselleに耳を傾けてみることにしよう。途中、オレが優位に立ったり、最後の切り札を君が出しそびれたら・・・切り札なんてものがあるならね。」

「わかっているわ。売られた喧嘩は買わなければならない。負けたら、ミシェル。あたしは永遠に『ドウ』を名乗らないことにする」

「良かろう。あまりにも少ない見返りだが、それで我慢してやる。暇つぶしとして。」

――何から何まで腹の立つ人だ。

「それで？君の考察を聞こうじゃないか」

「その前に、行くところがある」

シャルルが憂えたまなざしで、吐息をつくことがある。それは決まって必ず、ミシェルがシャルルに連絡もなく黙ってこの館を訪れて、そしてメッセージも残さずに帰って行ったと報告を受けたときだ。決して、シャルルとミシェルが断絶されているわけではなかったけれど、シャルルのため息は実に切なくて、マリナでさえ、ジルでさえも癒すことが出来ない。それなら。やっぱり、シャルルのため息の源から、その理由を引き出して聞かないといけないのだ。あたしはくるりと背を向けると、シャルルに着いて来て、と行った。

シャルル、ごめんなさい。あたしはこれから、シャルルの言いつけを破ります。

着いたところはアルディ家の庭園を抜け、薔薇園を抜けたその奥。そこは小高い丘になっていた。脇には小さな泉があり、一面には寒さに強く、できるだけ長く咲くことが出来るようにシャルルが品種改良した薔薇が植わっていた。音はすべて薔薇の蔓に吸収されて、あたし達の足音しか聞こえない。静かな、静寂だけが続く場所だ。小高い丘だから、庭園より風が少しだけ強かった。アルディ家にはあまり相応しくない、素朴で自然に任せたままの場所。そこには地下に下がる階段と手すりがないければ、自然に出来た丘と間違えるほど、ごくさりげなく造られた場所だった。「・・・本当は、もっと花が咲いて、蔓を延ばしてから、ミシェルを呼ぼうとシャルルが言った。」

「・・・それで？」

「それでじゃないでしょう。ミシェル・ドウ・アルディ。ここはあなたとシャルルのママンのお墓なのよ！」

「いつの間に移したんだ。断りもなく」

そのときだけ、ミシェルが感情を露わにした。不快感。そう、その言葉がぴたりだった。「もう、ずっと前からよ。そしてミシェルがこの館に現れるようになってから、急ピッチで進められた。・・・ミシェル・ドウ・アルディが厭がるかも知れないけれど、ここは、自分とミシェルがかつて住んだところで、やはりママンはここに居て、一緒にいる姿を見守りたいのだと思うって・・・」

「くだらない感傷だな」

ぴしゃりとミシェルが言った。あたしは憤りに任せて、言葉を選ぶことを忘れた。「くだらない？くだらないと言うあなたのほうが、くだらないわ。」

風がまたひとつ、吹いた。「死者に意志はない。死んでしまえばただの肉片になり薔薇に還る。ただ、それだけだ」

「いいえ、違う。」

あたしは言った。あまりに強く言ったので、ミシェルがちょっとせせら笑った。「君は発言が感情に左右されがちだ。そして、論理的であることを時々失念する。」

「いいえ、先ほどの続きは終わってない。」

そう続けた。「これがあたしの答えよ、ミシェル。シャルルはずっとあなたを待ってる。かつてひとつであったものが、欲しているのよ。ミシェルがここにほんの短い時間しか滞在しないのは、あなたが言うところの説明の付かないもの、つまり矛盾があなたの中にあるからなのよ」

「オレは矛盾もしないし、間違えもしない」

笑った。冷たく笑った。「根拠のない結論はやめろ」

「いいえ。あなたはこの館に特別の思い入れがあるのがわかる。事情を知らないあたしでもわかる。そして、シャルルとミシエルのママンが過ごした館で、あなたたちが生まれた場所だもの。この館を散策しているのは、何かを捜していたんでしょ。」

その時初めて、彼がぎくりとした表情をした。「それがこのお墓じゃないの？シャルルがお墓を移したのは知っていて、でもこの館の中のどこかだろうと検討をつけていたのよね。でも彼に聞くことができずに、こうして短い時間を探索してたんでしょ。随分増改築したしね、ここも。ミシェル・ドウ・アルディが捜してもわからないなんて。」

「小さな探偵が付きまわっていたからね。時間もあまりないし。」
ミシェル・ドゥ・アルディがそう言った。ため息を一つついて。
そうして少し下を向いて、じっと、地下に続く階段を見つめていた。
この先に、シャルルとミシエルのママンの棺がある。
アルディ家の人間は土に還らない。薔薇に還ると言われている。
だから、シャルルはここ一面を薔薇で埋め尽くしたんだ。いつか、自分たちもここに入ることを夢見て。
扉には、これも新しいことを思わせないように配慮された大理石の扉がついていた。
薔薇の花を摘んで戯れる天使が模されている。そしてそこには二人の天使がいた。よく似ているけれど、お互いがお互いを見て、向き合っている構図だ。
あたしはこれをデザインしたマリナが、シャルルとミシエルを模したものにしたということを知って、
ミシエルではなくあたしの顔にして欲しいと何度もねだったことを思いだした。
このときだけは、マリナはあたしに「駄目だ」と言った。

ミシエル。あたしはだから、ミシエルが嫌いなんだ。
シャルルやその他の人の気持ちを知っていながら、それを感謝する表現の術を知らないミシエルが思い出そうとしないただ一つの感情。それは『家族の愛』だ。ママンが死んでしまって、その後、随分と、この言葉を忘れていたのだ。
「言葉が足りない時も、時間を浪費する。これが原因で取り戻せない状態に陥ったとき、それを取り戻そうとするまでに時間を浪費する。以上、あたしの考察よ」
そこまで言うと、ミシエルはおかしそうに笑った。
「・・・反撃のチャンスがないね」
「反撃？この理論にあなたはまだ反証できない。証明できないことを証明していないから。」
「君は、証明できるというのかな？」
「できるわ。」
あたしは笑った。あのミシエルを閉口させたのだ。愉しくて仕方がない。

05 Le sourire du diable

あたしは小さな鍵をポケットから取り出した。
薔薇の形をした小さな鍵だ。
「これはこの扉の鍵よ。ひとつしかないマスターキー。」
あたしはこれをミシエルに渡した。
「これがあたしの最後の切り札よ。これは誰にも見せてはいけなと言われていたから、誰かにこの鍵のことを言うのは初めてよ。だから誰もコピーを持っていない」
そうして、最後の切り札を使うことにした。
「ミシエルがもし、必要以上は無駄であり浪費であると言うのであれば。これは感傷からできている至極無駄なものよね。なら、捨てて。今、あたしの目の前で。あなたは捨てられない。これがあたしの証明。」
全部、出し切った。ミシエルはじっと、青灰色の瞳であたしを見ていた。
何かを試すように、何かを計るように、何かを・・・探るように。あたしの思惑を探っていたのだろう。
その視線は、今のシャルルには持ち得ないものだった。
「面白いね」
今度は悪くないね、とは言わずに、面白いね、と言った。
そうして。

「—————あ。」
ぼいっと、投げ捨てたのだ。泉に向かって。鍵を。
ぼちゃん、と音がして、泉に鍵が沈んでいく。
「・・・！！！！ミシエル！ミシエル・ドゥ・アルディ！」
「くだらないね」
ミシエル・ドゥ・アルディがそう言った。そして、風で乱れた髪を掻き上げた。
その仕草はあたしのシャルルとまったく同じだった。
「君の話の聞いている時間ロスしてしまった。帰る。」
「ちょっと待ちなさいよ！」
あたしは激昂して言った。極力レディらしく振る舞ったつもりだが、限界だった。
「何してるのよ！あのキーひとつしかないって言ってるでしょ！ミシエル・ドゥ・アルディ！あたしのよ！返してよ！」
あたしは地団駄を踏んだ。ああ、もう我慢できない。
「地団駄を踏むアルディー族か。最悪最低だな。」
ちらりと横目で流し見て、ミシエル・ドゥ・アルディはふんと鼻を鳴らした。

でも、そんな冷笑に腹を立てていられなかった。

拾わなくっちゃ！

あたしは泉に飛び込んだ。泉は結構深くで、あたしの肩くらいまでの深さがある。
柵も電灯もない場所なので、あたし一人では絶対に、ここに来てはいけないと釘を刺されていた。
夢中で飛び込んだので、服が水に濡れると重みを増して身動きが取れなくなることに注意を払う余裕がなかった。
沈んだ鍵の場所の見当をつけようとしたけれど、泳げないあたしの体が沈んでいく方が先だった。
・・・これ、溺れているっていう現象？
苦しいとか思う暇はなかった。次の瞬間、大きな力で引っ張り上げられたからだ。
「君は本当にluminosité du diableだ」
耳元で、低いバリトンの声が響く。髪の毛がずぶ濡れで、頬に水滴が張り付いている。
天使の水浴びだ！そう思った。ミシエルがあたしを抱き上げる。自分も濡れているのに。
「まったく目が離せないね、だから、悪魔の輝きなんだよ。・・・目が離せない」

ミシェルは泉から引き上げると、アルディ邸にそのまま歩き出す。あたしは軽々抱き留められていた。

「さっき捨てたのは、違うキーだ」ほら、とミシェルがあたしの鍵を渡した。
「注意力散漫だ。及第点はやれない。でも、その闘志は買ってやろう」
それから、あたしの頭を撫でた。そして、頬を撫でた。水に濡れて体温が奪われているせいか、冷たい指だった。
「この考察に対する議論は後日。もっとマシな反証を持ってきてくれ」
そう言うと、小さく笑った。綺麗な笑顔だった。

ああ、もう、勝ち負けはこの笑顔の前ではどうでも良いことになってしまう。
それは、シャルルがマリナ以外のどんな人にも絶対に向けてくれない笑顔だった。
ミシェル・ドゥ・アルディはやっぱり、腹黒い。

その後、シャルル・ドゥ・アルディに随分とこっぴどく怒られた。
約束を反故にしたこと、泉に落ちたこと。そして風邪を引いて高熱を出す結果になったこと。
そのほか諸々。
ただ、ミシェル・ドゥ・アルディの服を台無しにして、一晩アルディ邸に宿泊させることになったことだけ、褒められた。そこは一番、叱られるところだと思っただけ。

帰り際、ミシェル・ドゥ・アルディはまた来るよ、と言って帰っただけ。
あたしは高熱を出してしまい、見送ることが出来なかった。
また今度、来るんでしょ？そう思っていた。これはずいぶんな収穫だ。
帰ったよ、という報告とあたしの様子を見に、シャルルが部屋を尋ねて来てくれた。
これからまた仕事で出かけるという。
風邪がうつるよと言うと、オレは医者で、オレのアンジェを置いていくお詫びをしなけりゃいけない、と言った。
シャルルは、やっぱり優しい。
あたしはシャルルのアンジェで居続けたい。
すると、シャルルはミシェル・ドゥ・アルディからあたしへの預かりものがあるという。

何かしら

あたしは熱に浮かされながらも、それを受けとる。小さな箱に入ったそれを見る。
熱でも好奇心が勝るのは、誰譲りかね、とシャルルは苦笑した。
そして珍しくそのシャルルの言葉を聞き流しながら。あたしはあっと声を上げた。

・・・キーだ。形状が同じだ。
シャルルのデザインしたキーじゃない。つまり、あたしの持っているマスターキーじゃない。

.....

ミシェルは、あの場所を知ってたんだ！
彼がここを訪れていたのは、お墓参りであって、お墓そのものの探索じゃなかったんだ。
そしていつの間にか、鍵もちゃんと複製してた。
なのに、あたしの戯言を聞くためにあたかも初めて来たところのように、一芝居打ったのだ。
ミシェル・ドゥ・アルディが「暇つぶし」と言っていたことをようやく思い出す。
「アンジェに会いに来てるんだと言えば良いのに。我が弟は素直じゃないらしい。」

シャルルは笑って、あたしの頭を撫でた。ミシェル・ドゥ・アルディのように。
「じゃ、オレのアンジェ、ゆっくりお休み。良い夢を」と言って、扉を閉めた。
あたしは、何これ！と言って、枕を投げつけた。

(FIN)

C-side 佳辰

★秘する恋 秘するが花D-side → キリ番リクエスト 想起 をご覧になってからお進みください。

佳辰 めでたい日のこと

「誕生日はどのようにか」
マリナ・イケダにそう言われて、シャルル・ドウ・アルディは読んでいた厚い学術書から目をあげた。
「誕生日・・・」
「シャルルの誕生日のことについて私は10分ほど前から喋っていました。」
マリナはそう言って、唇を尖らせた。
シャルルはあまり興味がないことだったので、彼女の絶え間なく流れてくる構想を聞き流していた。彼女の様子から、自分の誕生日について話をされているのだとわかった。
「シャルル、私の話は聞いていたの？」
「聞いてはいたよ」
ソファに長い脚を投げ出しながら、彼はそう言った。
「ひとつ年を重ねるのだから、何かお祝いしたいという気持ちを無視するなんて酷い」
彼女はそう抗議すると、シャルルは薄い唇を歪めて、マリナに反論した。
「正確に言うと、日本の戸籍法では満年齢は生年月日の前日とされる。
・・・だから、ひとつ満年齢があがる行為を祝うのであれば、バースデーその日ではなく、前日に行くべきだとオレは思うね」
「ひねくれた言い方はよして」

「シャルルについて何かを祝いたいという気持ちを無視しないでくれる？」
「黙殺しているつもりはないけれど」
シャルルは身を起こした。
「一般の質問ならよしてくれ。オレは何もいらぬし、何も祝ってもらおうと思わないし。・・・第一、その日は仕事だ。」
正面に座ってチャイを飲みながら抗議するマリナから、カップを取り上げ、そうして彼は彼女を抱き寄せようとした。シナモンの香りが部屋一杯に充満する。

毎年、彼のバースデーにはたくさんのカードと贈り物が届けられる。
それこそ世界各国から。
しかし彼はそれらを一度も開封したこともなかったし、心待ちにしたものもなかった。
送り主の一覧を作成し、後日お礼のメッセージカードを送るのは彼の統括する仕事ではなかった。
彼女を抱き寄せようとしたシャルルに、マリナは身を引いたので、彼は強引に彼女の腰を掴み、自分の胸に引き寄せてソファに座り直した。
彼女は小さく悲鳴をあげる。

「マリナ。前半と後半の文章の整合性がまるでない。まあ、君が何かをしたいというのであれば反対はしないけれど」
ディナーまでの僅かな時間のことだった。
外は薄暗くなり、薄紫色に変化していた。
彼がこの時間に私邸に居ること自体がとても珍しい。
マリナは相変わらず日本とパリを往復し、近いうちにまた日本に戻ると言っていた。
だから二人がこうして早い時間から一緒に時間を過ごすのも・・・とても貴重なことだった。
シャルルとはあまり話ができないことをマリナは常々悲しんでいた。
彼は仕事をセーブしなかった。マリナをこの館に住ませようになっても。
「シャルルの欲しいものは何か・・・ないの？」
「ものはいらないよ」
彼はそう言って微笑む。青灰色の瞳で彼女の顔をのぞき込んだ。
そして、ゆっくりと唇を寄せて、彼女にキスをした。
マリナは静かに瞳を閉じて、その啄むような口吻に酔いしれた。
やがて、ゆっくりと唇を離すと、シャルルは彼女に微笑んだ。綺麗な微笑みだった。
「強いて言えば・・・時間が欲しい・・・そう、君との時間が」
「それはシャルル次第だわ。私はいつでもシャルルのために時間を空けたいと思っているのに」
「もうすぐ日本に行くと言っている人が言ってくれるね」
彼はそう言って彼女を絡め取っていた腕の力を緩めた。

「それなら、具体的に要望を言っておこうかな」
シャルルは切れ長の瞳を輝かせると、挑戦的に彼女に言った。
「・・・当日は日本で過ごそう。オレもオフを取る。・・・君のアパートで一日中、一緒に居る。
たまには天井の低い日本家屋にカンヅメになって、どこにも出ないで君を一日抱き続ける日があっても面白いな」
そうして妖しく笑った。
彼は、少しだけ、意地悪な気持ちになっていた。

彼女が日本のアパートに彼を入れたがらない理由は、知っていた。
けれども、知らないふりをしていた。

彼が欲しかったのは、ふたつ。

ひとつはマリナとのこれからの時間すべて。
そうしてもう一つは…マリナと過ごさなかった彼女の過去の時間。
今は、後者が最も彼の欲しいものだった。

マリナの困った顔が目の前にあった。

明らかに狼狽していた。

「…君のアパートで過ごせない理由でもあるの？」

「シャルル。」

困った顔をして、マリナが眉根を寄せた。そんな顔をするマリナの頬にシャルルはそっと手を触れた。大きいけれども冷たい手のひらが、彼女の頬を包んだ。

「オレは知りたい…オレの知らない8年以上もの間、君が何をどう感じてあの部屋で過ごしたのか。この欲求は押さえられそうもない。」

「あなたの誕生日にわざわざ過ごす場所でもないでしょう。日本に来るのであれば、なおさら。」

「そうかな？…『その日』だからこそ意味があると思うけれど」

彼はまた意味深げに言った。マリナが少しだけ吐息をついた。

彼の言葉ひとつひとつが…彼女に何かを訴えかけようとしていた。

「冷えるよ」

外は冷たい風が吹いて、だいぶ冷え込んできた。

彼は彼女にショールをかけてやり、そして頭を撫でた。

「考えておいてくれ。そしてわかってくれ。…オレが欲しいのは、君に関することだけだということ。」

彼はマリナの頬を寄せて、彼女の小さな額に彼の秀でた額を合わせた。

茶色の髪と白金の髪が混ざり合い、そして少ししてから離された。

「そもそも、その日は一緒に過ごせるかどうかかわからない。」

これは本当だった。

オフを取るとなると、どんなに繰り上げてその日には予定が詰まることになる。

日本に滞在したとしても、一日ホテルに籠もりきりになって、仕事をしなければ到底時間を作ることは実現できそうもなかった。

「そうだ、それなら、シャルルの誕生日には、私、一日中、シャルルのためにシャボン玉を吹くわ」

彼女が思いついたように言った。そして両手を鳴らす。

どこからその思いつきが湧いて出たのか理解できないというように、しばらくシャルルは彼女を見つめていた。

「…この寒空でそれは愚行だと思うけれど。特に日本は湿度が多いから…」

「ねえ、シャルル」

マリナは少し哀しそうに言った。

「誕生日は特別な日よ。あなたが生まれてきた日でもあり、お母様があなたをこの世に送り出すために、一生懸命になった日でもあるのよ」

彼はその言葉を聞いて薄く笑った。

彼の母に対する記憶と感想はあまり良いものではなく、ただ哀しいだけだったから。

母が自分を産むために苦しんだ日に、シャボン玉を飛ばしたいというマリナの心が少しだけ…嬉しくもあり哀しくもあった。

一説によれば、シャボン玉は魂と言われている。

次々生まれては天井高く上り、そして消えていくその様が、輪廻転生を表しているという説があったことを、シャルルは思い返していた。

彼が生まれ落ちたその日から始まったアルディ家の悲劇と、まっ先に彼の誕生日を祝うべきであろう、儚くなってしまった彼の父母への追悼を込めて、マリナがそう言いだしたことに気がついた。

泡沫の創作に心を込めようとするマリナの気持ちが、微笑ましかった。

「ものはிரない」

そう言いきった彼に捧げられる最大のマリナの誠意だった。

けれども…彼は彼女の時間が欲しかった。

彼の誕生日前後には日本では雪が降る。

その時期にマリナは日本に帰ることを躊躇った。

特にシャルルと一緒に訪日したいといつも言うのに、今度ばかりは言い出さなかった。

オフの頃合いも、マリナの帰国に遅れて出発することに、彼女が少しばかり安堵の色を見せたことに、シャルルは納得しなかった。

。

今回は画廊のオーナーに乞われてどうしても帰国しなければならない理由ができてしまったから、やむを得ない帰国であるということらしかかったが…。

「何か、その日はオレを部屋に入れたくない理由でもあるの？」

シャルルが尋ねた。

「そうじゃない。」

マリナが言い切ったので、ますますシャルルは追求を止めることが出来なくなった。

「マリナ、オレに隠し事をして無駄だよ」

そう言うと、今度はマリナが訝しげに彼に尋ねた。

「シャルル。あなたは…何か私に言いたいことがあるの？」

ああ、あるとも

彼は心の中で呟いた。

オレの誕生日を祝いたいという君の唇が…違う男に覆われて、そして「その日」が君にとって特別な日になったという記憶と事実が欲しいと言っているだけだよ。

彼は声に出さずに、内心でそう叫んだ。

戻せない事実は存在する。

もちろん、マリナにとってもそういった過去はあるだろう。

あの陽だまりのような男と一緒に居た彼女を想像するだけで、強烈な衝動を抑えることができなくなり、そしてほんの少し眩暈さえ感じる。

――憤りで。

それが彼自身に感じる憤りなのか、彼女に感じているのか、それとも…あの男に感じているのか、それさえもよくわからなくなってしまうほどに、彼の狂気が激しく刺激されるのだった。

眼をそらしたのは彼の方が先だった。

「シャルル！」

マリナが彼の名前を呼ぶ。

彼女は、話の途中で切り上げられることが好きではなかった。

それを良く承知しながら、シャルルはマリナに宣言した。

「マリナ。オフは取る。だから、久々にゆっくり一緒に過ごそう。

…でもその日はどうしても一緒に居られない。」

シャルルの「どうしても」という言葉は絶対だ。

彼には予定の変更はありえない。

シャルル・ドゥ・アルディだからこそその言葉だった。

マリナはその言葉を聞くと、みるみる萎れていく花のようになり、そう、とだけ言って項垂れた。

「残念だわ。せっかく、お祝いしたいと思っていたのに。」

「マリナ。特別はいらない。」

シャルルは青灰色の瞳を少しだけ細めて、目の前の彼女を見た。

自分は、少しばかり食欲になったと思う。

少し…いや、「かなり」と表現した方がより適切だ。

彼女と一緒に居る倅せ以上のものはありえない、と考えていたのに、今では、もっと彼女が自分に心を傾けてくれないかと願っている。

一滴水を飲めば、もっと水を欲しがらる海難者のように。

彼は速度を上げて加速する渴望を堪えてみせなければならなかった。

彼は…そうして穏やかな日々の中で、身の内の狂気と闘わなければならなかった。

彼女を運命の人と定めたときには、マリナの無邪気さや闊達さに惹かれたと思って居た。

でもこうして大人になったマリナは、無邪気さも闊達さもすべて損なわれていなかったがやはり、憂いを学んだように思う。

たくさんの人と出会い、別れ、そしてまた再会するというくり返しの中で、彼女は、転化した（他の物質に変わる）のではなく変通した（状況や経年に応じて適応すること）のだと感じる。

それでもなお、この愛おしさや狂おしいほど恋しい気持ちがシャルルから消えることもなく、ますます、彼女だけが唯一の女性であると確信せざるをえないという気持ちになる。

どんなマリナ・イケダになっても、彼の愛は揺らがなかった。

それなのに。

彼は、時々彼の中の狂気を抑えることができなくなる。

過去を変更することはできない。

それなのに…彼は彼女に訴えかけてしまう。

「わかった。それなら、シャルルの仕事が一段落したら、落ち合おう。

でも、忘れないで。私は、シャルルがこの世に生まれてきてくれたことを祝いたいし、シャルルがなんと言おうとも、その日はやっぱり特別な日なのよ。シャルルだけでなく、私にとっても。」

最期の言葉は、随分と含みがあるね。彼は声に出さずに、また言った。

マリナはシャルルの様子を敏感に感じ取り、困ってしまった。

「シャルル…私の言葉、届いてる？」

「ああ、もちろんだよ」

彼女の自分への気持ちを疑っているわけではなかった。

マリナの申し出は大変に嬉しいものだったし、彼女の、自分に向けられた仕草のひとつひとつに、彼が充足感を感じているのは間違いなかった。

それでも、この満たされない気持ちを、彼女に伝えても傷つけるだけだとわかっていた。

だから、マリナに伝えるつもりはなかった。

彼女にはどうすることもできないことはシャルルが一番良く承知していた。

長らく待ち望んだ人が傍らに居るのに。

彼は、それでも満足できない自分に苛立っていた。

「今年は、日本は珍しく雪が多いようだ。」

彼は遠くを見ながらそう言った。

「雪…珍しいわね…昔は雪合戦や雪だるまを楽しみにしていたわ。」

「今はそこまで積もらないよ。温暖化現象もあることだし。…だが、日本に居る間に、雪見ができるかもしれないね」

「ええ、そうね…」

彼女が語尾弱くそう答えたので、彼はこの話を完全に切り上げることにした。

「そろそろ食事の時間だ。…行こう」

これがパリで交わす彼女と彼の最後のひとときの会話だった。

喧嘩にならない喧嘩をした、と言ってマリナが相談に来た。

ジルが様子を見計らってシャルルにそう告げたのは翌日のことだった。

明日にはマリナが出発すると言う。

彼はそう、とだけ言った。

彼と良く似た面立ちの女性は、少しだけため息をついた。

顔を横に向けて、とても憂いを帯びたため息だった。

「シャルル。どんなに彼女がそうしたいと願っても、彼女があなたに与えられないものは存在するのです。」

そう言って、ジルは続けた。

「聞けば、あなたのパースデーのことで彼女はシャルルの機嫌を損ねてしまったとか。」
「そういうことではない。」
「彼女は…きっと、あなたのために、一日、あなたのことだけを考えて過ごすのでしょうか。その日を。」
「時差の関係もあるから、日本で過ごすパースデーというものには意味がないと思うがね」
「そういうものではありませんよーシャルル。」
今度はジルがシャルルを窘めた。
普段あまりこういったことに口を出さないジルが、言葉を差し挟むということは、マリナは相当意気消沈しているのかもしれない。彼は推測した。
何がどうとはっきりわかっているわけではないが、シャルルが酷く不機嫌になってしまったことを察したマリナが、困りに困ってジルに相談した内容に、ジルは心当たりがあったようだった。取りなしを頼まれたわけではないが…とジルは前置きした。
「時間ではないと常日頃口にする彼女が、これまでの時間と空白を埋めようと努力しているのです。本来なら、その日は確か…日本で仕事のはずだったのに、彼女は無理を言ってキャンセルしています。シャルルも同じ事をしろとは言いませんが…もっと彼女を…」
「ジル」
彼が短く低く彼女の名前を呼んだ。ジルは口をつぐんだ。
「仕事中に私事は口にしないな」と言った。
ジルがもっと何か言いかけようとしたが、シャルルはそれを遮断した。

「――今日は戻れるかどうかわからない。マリナにそう伝えてくれ」
彼はそれだけ言うと、それっきりその話題には触れるな、とジルに念を押した。

彼が屋敷に戻ったのは、日付も越えて夜も更けてからである。
この時間帯の帰宅は今まではほぼ日常であったのに、今ではひっそり静まり返った帳がシャルル・ドウ・アルディさえも包み込んでしまおうとしていた。
こんなに人気のない、寂しい館だったのだろうか…
彼は思った。
以前と変わらない様子であるのに、シャルルがそのように感じるのには、やはり、彼の帰りを待つ者がいると思いながら帰宅するかどうかの違いであるということがよくわかる。
以前は…ここは就寝するだけの場所だった。
でも、今は違う。待つ人がいて、その人がこの館に住まうことをもう随分と長い間待ち焦がれていた。
願いが果たされたのに、どうしてこんなにも…こんなにも苦しいのだろうか。

彼は自室へと向かう足を少しだけ止めた。
少しだけ立ち止まり、薄い唇からため息をもらす。
…そして向きを変えた。
マリナの私室へと向かう。
ノックをすると、意外にもマリナは起きていた。
「シャルル」
「少しだけ驚いたようだ。ジルの伝言を聞いていたようだった。」
「良かった！もう会えないかと思ってた。」
「遅い訪問ですまない…明日、早いんだろう？」
「うん…でも荷物もあまりないし。」
マリナが少しだけ照れくさそうに笑う。
昔から荷造りは苦手だった。
彼女は、いつも必要最小限だけ持って出発する。
シャルルはその様子が相変わらずなので、少しだけ微笑んだ。
「忘れ物は突如として現れるものだ。…準備は万端と思っても実際は8割から9割しか整っていないと思った方がいい。」
「忘れ物なら、あるわよ」
彼女がちょっと首を傾げていった。
「シャルルへのプレゼント。…何が欲しいのか、もう一度確認するのを忘れていた。」
「ものはいらない」
彼はもう一度だけ言った。
「マリナ、オレの言ったことを忘れたの？」
「そうじゃないけど」
マリナが彼の顔を眺めながら言った。
「私ができることってとっても限られているのよ。だから、できることをやってみたいと思うけれど、それがシャルルの気に入った結果になるかどうか、わからなじゃない？」
彼は黙っていた。
「シャルルが何か…自分の誕生日にあまり関心が持てないことも、何となくだけどわかっているつもり。でも…私はこれから、ずっと、ずっと、あなたにおめでとと言い続けたいと思うから…」
「その気持ちだけで充分だよ」
シャルルは努めて優しく言った。
綺麗な微笑みだった。
そして、彼女に屈んで、額にキスをした。
「もう遅い。明日は早いのだろう？休め。オレは…君の出発までにここを出てしまうから」
「起きられるのかしら」
シャルルは朝が弱いことをマリナはよく知っていたから、軽口を叩いたが、シャルルは少し笑っただけだった。
寝られないから、眠らないんだよ、と言おうとして、言わずにおいた。
「お休み、マリナ。良い夢を」
彼はそう言って、扉を閉めた。
彼女が日本に行くときと何ら変わらない挨拶だった。
またすぐに会えるという気持ちがあったから、彼らはごく自然にこういう挨拶で済ませることができるようになった。
「明日の朝、いつも通り薔薇を届けるよ。」
彼は扉を閉める直前にそう言った。
彼は毎朝、温室で咲く最高の状態の薔薇を彼女のために届けさせていた。
明日の朝の薔薇は、決まっていた。

白い薔薇にするように、指示を入れることにする。
朝咲きの薔薇と、ドライフラワーにした白薔薇を混ぜて活けるように言った。

薔薇の花言葉は…「恋の吐息」
そして枯れた白い薔薇は…「生涯を誓う」
彼女はこの矛盾したシャルルからのメッセージを受け止めてくれるだろうか。
正面から言えば、二人の関係は壊れてしまう。
彼は彼女を失いたくなかった。もう二度と、その手を離さないと誓った。
壊してしまうつもりはなく、ただこの苦しみを…どこかにはき出したかった。
マリナ、君も同じように、苦しんでいるのだろうか。
オレと居るときには、思い出さないのだろうか、あの男のことを。

月は太陽には勝てない。
そう思った。

彼はしんと静まり返った長い廊下を、マリナの部屋を背にして、ひとり、静かに歩いた。

マリナ・イケダと連絡が取れない。

ジルがシャルルに報告をしてきた。
他にもない彼の誕生日のことだった。
彼は彼女との約束を守るために、オフの時間を作るべく、かなり繁忙な日々を送っていた。
マリナが居ないときにはいつもこうだった。
彼は、彼女の不在の時に訪れる寂寥感を埋めるかのように作業に没頭する。
まるで、思い出すことが怖いとも言えるかのように。
かつての荒んだ生活を思い出し、ジルは彼の体調管理にそれとなく気を遣っているようだったが、シャルルは無用で無意味だ、
と言って薄く笑うだけだった。

彼はすでに日本に向かっているところだった。
急な予定が入り、出発の日にちが変更された。
彼は通常の間人ならオフを返上しなくては到底消化できないその困難な案件もわずかな時間で解決したが、それでも彼の予定は変更せざるを得なくなった。

けれども、シャルルはマリナにはまだ到着日時が変更されたことも、いつ到着するのかも知らせていなかった。
きっとジルからは連絡が入っていることだろう、と思った。
…自分のバースデーに意味があるとは思えなかったが、彼を祝福したいというマリナの気持ちには値打ちのつけ様がなかった。

そんな折の連絡に、彼はジルに経緯説明と現状報告を求めた。
「彼女にシャルルの到着を知らせました。いつもなら開封メッセージが届くはずなのですが、今回はメールも見えていないようです。国際電話をかけてみたのですが、留守が続き、連絡が取れません。…外出するような時間でもないですし、彼女の安否の確認を急ぎます」

「1時間以内に次の報告を」

彼はそう言ってジルとの回線を切断した。
そして、じっと青灰色の瞳で視線を遠くにやり…少しだけ考えを巡らせる。
彼女の行動範囲から予測できるすべてを、彼の中で計算する。
そして、一本、メールを打つことにした。遮断していた回線を接続する。
…あまり送信したくない相手だったが、今は彼の機嫌を優先するべきではなかった。

しばらくして、返信があった。
彼はそのメールを開封すると、ざっと目を通して内容を把握する。
——イケダさんはここ数日こちらに仕事の打合せで来ていましたが、本日は予定があるということで来訪していません。
こちらは降雪があり、交通機能も大分麻痺しています。
…昨日帰りに、壊れにくいシャボン玉の作り方について教えて欲しい、という質問をされました。また、ペンタブレットの使い方を教えて欲しいと言われましたのでこの2点について回答したのを記憶しています。…W

彼はそのメールを閉じると、今度は彼女とのホットラインである回線を繋いだ。
…しばらくこちらのメッセージを見ていなかったが、何通か、マリナからメッセージが届いていた。
彼女は携帯電話やモバイルを持ち歩かない。
連絡手段はこのメールと、固定電話のみだった。
シャルルは今更になって、彼女の危機管理能力のなさに苦言を呈していなかったことを少しだけ悔やんだ。

メールを時系列に開いていく。
一通ずつ開封していく。
もどかしそうにディスプレイに映るメッセージをスクロールした。
到着の知らせ、外出の知らせ…そして、最後は…

彼はそのメッセージを開いた。

To:Charles

From:Marina IKEDA

Title:誕生日おめでとう

内容：誕生日おめでとう。今日は一緒に祝えなくて残念だけど、こちらの画像を送ります。使い方を習ったばかりなので、あまり上手ではないけれど…私の気持ちです。
それから約束通り、今日はシャボン玉でお祝いしようと思います。
日本の空の下だけれども、シャルルに届きますように。 マリナ

彼はその添付ファイルを開いた。通常はウイルスチェックをしないと決して開かない用心深い彼であったけれど、その時ばかりはそれを気にする余裕がなかった。

…そして、彼は、その細く長い指を少しだけ震わせた。
同じように、薄い唇も細かく震え…彼は目を瞑った。
マリナ、と小さく呟いた。

彼女が送って寄越したものは、薔薇の絵だった。
たどたどしい線で描かれた、着色もあまり上手とは言えないその彼女のイラストを、彼はじっと見つめた。

…青い薔薇の蕾が、画面一杯に溢れていた。

青い薔薇。
…近年改良に成功した薔薇は、すでにずっと以前からアルディ家の薔薇園に存在した。
以前、彼女は薔薇を、シャルルの瞳の様だと言った。
薄い花卉の薔薇は、確かに彼の青灰色の瞳に似ていた。

シャルルは息を呑み、その薔薇を食い入るように見つめた。

青い薔薇の花言葉は「奇跡」「神の祝福」

——そして薔薇の蕾は「愛の告白」。

彼女は、彼の無言の言葉に、やはり同じように無音で答えた。
言葉に出すと壊れてしまうから。

シャルルは、ぎゅっと、手のひらを握った。
マリナ。
もう一度、彼の運命の人の名前を呼んだ。

日本はあいにくの大雪だった。
何年かぶりの降雪だという。
あまりの降雪に、彼を乗せた機体は本来着陸する場所から大分離れた空港に臨時で着陸する始末だった。
日本を縦断したこの雪雲は、あちこちで影響を与えていた。
ようやく着陸はできたものの、その後の交通手段がまったく確保できなかった。
シャルルはこの天候を恨んだ。
しかも、交通機関が完全に麻痺してしまい、除雪にはあと数日ほど要するという。
彼がどう主張しても、外国人でかつ要人である彼に無理な移動は許可されなかった。
同じ国内にいるのに、彼は彼女の傍に行くことができない。

マリナと連絡が取れない以上は、彼はメールを送り、彼女の固定電話にコールするしか手段がなかった。ジルには別の手段で確認するように伝えてある。
なぜ、連絡を寄越さないのか。
彼は思案した。
シャルル・ドゥ・アルディの誕生日以降、ぷつぷつと連絡を途絶えてしまった彼女が、何か事故に巻き込まれていなければ良いのだが…
この焦燥感に、彼は酷く狼狽した。

寂寥感とは違う。
突然のこの出来事は…彼を驚惶させた。

待つことに慣れていたはずなのに、なんとか彼女の安否を確認できないかどうか、その手段に考えを巡らす。

そして、薄い携帯電話を取りだして、彼は、覚えていた番号を押した。
何コールかあって、…相手は出た。

「お待ちしておりましたよ」
彼はそう言った。
手短にこちらの状況を説明すると、彼はそうですか、と静かに言った。
そして、こちらはまだ雪が降り続けていて、当分止みそうもない、と説明する。
「こんなに積もるとは誰も想像していませんでしたでしょう」
彼はそう言って笑った。
「彼女は、当然あれから来ていませんよ…それなのにここに電話をかけてくるということは、連絡が取れないのでしょうか」
シャルルはその問いには黙っていた。
「…あなたのサイトはいつも拝見しています」
「ログを残していただいております。…あなたがこう足繁く通ってくださると思っております」
シャルルの言葉に、彼は少し笑い声を漏らした。
この画廊の電話番号を知るために、シャルルは彼のサイトに飛び…そして、「Marina」が更新されていることを知った。

彼女が来日するたびに、その作品は増えていく。

その都度、見たくないと思う気持ちの一方で、シャルルでない男の視線を確かめるかのように、その新作を眺める。

来日する度に、彼に会っているのかという強烈な嫉妬が彼を、矛盾した感覚の世界に誘った。

今回更新されていた「シャルルの目線でないマリナ」には、珍しくタイトルがつけられていた。

日本語で「憂い」と冠されていた。

グラフィックアートですでに名を轟かせている彼は、彼女をモデルにいくつか自分のサイトに作品を公開していた。それだけでも我慢出来ないのに、彼は、シャルルの皮肉にさらりと応えたのだ。

故意にログを残したのに、彼はそれを受け流した…

彼は、シャルルとマリナの関係を知っていながらも作品を描き続ける…

シャルルが遠回しに、自分の恋人のマリナをああい目線で描き続けることを非難しているのに、彼はそれを隠そうともせず、シャルルの言葉をかわした。

彼は、この点だけは、シャルルより優勢だった。
愛を得ていないのに、優勢だった。

「…あのタイトルのテーマで作品を作るのはこれで最後にしたいものです」
彼はそう言って電話を切った。

シャルルは回線が切れた音だけが鳴り続ける携帯電話を持ったまま…少しだけ無言であったが、やがて、乱暴にその携帯電話を強く投げつけた。
かしゃん、と音がして、床に本体とバッテリーがばらばらになって飛び散った。

マリナ…

君は、一体、何処にいるんだ。
どこで…何をしているんだ。
この雪の中、ひとりで泣いているのではないのか。

ひとりで泣くな

そう言ったのは、シャルルだったのに。

彼女が泣いている気がした。

この雪空のように、音もなく声もなく泣いている気がした。

彼女を…悲しませてしまった。
彼女を傷つけてしまった。

それでも…それでも、この声にならない慟哭を、彼はまだ持て余していた。

マリナはどうやら体調を崩して、床に伏せっいたらしい。

その情報が入ってきたのは、彼がようやく彼女の自宅に向かって移動を始めた時のことだった。
ジルに報告が遅すぎると冷たく言い放ったが、シャルルは少しだけ間をおいて、情報は有効に使うことにしよう、と言った。
彼の賛辞だった。
ジルは電話口の向こうで少しだけ微笑んだようだった。
マリナと直接話をする事ができて、彼女は快癒に向かっているということだった、と付け加えた。
彼女は自宅にいて、今は静養中だと彼女は言って報告を終えた。

フランスと日本を往復する生活が、彼女の疲労感を増長させたのだろうか。
…それなら、いっそのこと、フランスに永住すればいいのに。
彼は何度かその話をマリナに持ちかけたが、彼女はウィと言わなかった。

生活のためとか目先のことでなく…
彼女は彼女の作品を創り続ける限り、日本を訪れるだろう。
それで良いと承諾したのも誰もいないシャルル・ドウ・アルディだった。

体調が悪かったのに、あの絵を描いて寄越したのだろうか。
それとも、最初に彼が忠告したように、寒空の下、彼女はシャボン玉を創ることに熱中して、失調したのだろうか。

どちらにしても…ジルの予告どおり「その日はシャルルのためだけに、シャルルのことを考えて過ごす一日」として彼女は独りで過ごしたのだろうと思った。

彼にとって、誕生日はどうでも良かった。

しかし、それを特別だと言ってくれる、彼にとっての「特別な」彼女がそう言うのであれば、その日はやはり特別なのだと思う。

その一方で、彼女がその日を迎える度に、自分でない誰かを思い出したり、憂いのある表情を自分以外の誰かに見せるのは、到底我慢出来なかった。

いっそのこと彼女を幽閉しようかという思いに駆られたこともあった。

それでは、彼女は生きていけなかった。

彼女は温室に咲く薔薇ではなかった。

雪の下でも、風の中でも、一度は萎れてもまた咲くような、そんな人だった。

命はそんなに弱くない、と遠い昔に叫んだ若い人の言葉を思い返していた。

彼女はそんなに弱くない。

昔の郷愁に囚われて、シャルルに何かを重ねることは決してしないと思う。

だから、これは自分の問題なのだ。

それはわかっていた。

彼女を・離したくない。

彼女を・壊したくない。

やがて彼女の住む地区に入っていった。

このあたりは一方通行が多いから、これ以上はこの車幅では入れない、と運転手が困ったように言うので、彼はそれなら一人で歩いて行くからここで待て、と指示を出した。

長い脚を地面に落とし、彼は細い路地を歩き始めた。

以前と変わらない景色に、少しだけ安堵する。

彼女のようにだった。

彼女はいつまでも変わらない。

変化してもいつまでも彼女の根幹は変化していない。

だから…だから、彼女ともう一度話をしようと思った。

路地を曲がると、ますます細い一方通行の路になり、ところどころ除雪されていない部分があった。

ますますあたりは静かになっていく。

…人の話し声がした。

曲がり角にさしかかり、彼は速度を緩めた。

完全に曲がりきったところに、マリナの住むアパートがある。

その前で、子供の嬌声と…聞き間違えようのないマリナの声が、した。

シャルルは息を呑んだ。

マリナの声が聞こえる。

幻聴ではなかった。

彼は随分、その声を聞いていなかった。

パリで最後に話をしてから、それほど日数は経過していなかったけれど、彼女のあの明るい声は、…久しぶりに聞いた。

そこでシャルルは青灰色の瞳を切なく瞬かせた。

マリナ…君に憂いを与えていたのは、オレだったんだね。

君は変わらず、オレでない誰かには、子供のようにはしゃぐこともできる人だったのに。

シャルルは足を止めて…白いため息をついた

シャルル・ドウ・アルディが曲がり角を曲がりきると、楽しそうな話し声が止んだ。

少し離れた路地の向こうには…マリナが居た。

彼は彼女を見定めた。

少し、瘦せた。

具合が悪かったと聞かすが、確かに風邪をこじらせたようだった。

まだ、顔色が優れていない。でも、最悪の状態は抜けて、快調に向かっているようだった。

彼の青灰色の瞳は、彼女の姿だけを捉えていた。

マリナは少しだけ息をのみ、茶色の瞳を見開いた。

唇を開き、驚いたように「シャルル」と彼の名前を呼ぶ。

…彼女が生きていてくれれば良い

そう思って過ごした時代を、思い返していた。

彼は…彼は愛に貪欲になっていたことを再認識する。

元気にしているだろうか
困っていないだろうか
そして…あいつを愛し、あいつに愛されているだろうか
倅せだろうか

そんなことを考えていた長い時間を思い出した。

彼女はその時間を埋めようと、彼女なりに愛の証しを示したのに。
彼は、貪欲になりすぎて…少しだけ見失ってしまっていた。

自分の愛を。

シャルル・ドウ・アルディの愛がマリナを惑わせて、シャルル自身も惑わせた。

マリナ。

彼はもう一度、熱く彼女を見つめた。
無言で、マリナは彼の顔を眺めていた。

彼はやはり同じように黙ったまま、彼女に近づいて、そしてマリナを抱き上げた。

——軽く感じたので、彼は狼狽する。

悪戯で彼女を抱き上げることはあったけれど、それでもこんなに軽かっただろうか。

こんなに小さかっただろうか。

彼女はいつも太陽のようで眩しくて、そして彼の中ではいつでも微笑んでいた。

「何するんだよ！」
子供の甲高い声が響いて、彼はその時に我に返った。
彼女と話をしていた男児だった。
その時になって、ようやく彼はその子供に目を遣る。

典型的な日本人の男子だ。
小学校高学年から中学生くらいだろうか。
黒い理知的な瞳の知性のある顔立ちだった。
だが、まだこどもだった。
頬を紅潮させて、こちらを睨んでいる。

「ずいぶん、小さいナイトだな」
「なんだと！」
こどもが怒って、手に持っていた箒を握りしめた。
その年齢と、様子から、マリナの住むアパートの管理人の息子だと推測した。
昔、もっと小さい頃にマリナと写っている写真を見たことがあった。
確か…ダイ。そんな名前だった。

「おい、マリナ、何とか言えよ！…言ってやれよ！」
ダイが悲鳴に近い声でそう言った。
彼は憤慨していた。
…マリナが失調していたときに傍に居たのは、こいつか。

シャルルが苦笑する。
この小さなナイト気取りのこどもにまで、自分は嫉視の瞳で睨み付けそうになる。

「オマエがシャルルだろ。」
「だからなんだ。」
シャルルは冷たく言い放った。流暢な日本語に、子供は少し驚いた様子だった。
彼は怯まずに、それでも叫んだ。よほど憤慨しているのか…度胸があると言うのか。
この状況でこの行動を取る彼を、ほんの少しだけは褒めてやるに値する行動だった。
「マリナはずっと、オマエのこと待ってたんだぞ！
雪の中、誕生日を祝えなかったって言って、熱を出して寝込むまで、シャボン玉飛ばし続けたりする阿呆なオンナだけど。
でも、そういう扱い、することないじゃないか。」
ダイはシャルルを睨んだが、睨みになっていなかった。

シャルルはその言葉に、少しだけ間を置いた。

…やはり、彼女は約束を違えなかった。

一日中…誰が見ているわけでもないのに。シャルルが傍で見ているわけでもないのに。
彼女は当初の予定通り…彼の魂と命を祝って、奇跡の花を描き、そして祝いの珠を創り続けていたのだと知る。

シャルルが口を開きかけたそのときだった。
マリナが、ふわり、と軽くシャルルに腕を回した。
彼は視線をダイからはずし、そしてマリナに移す。

「・・・来てくれて、ありがとう」
その言葉に、シャルルは微笑んだ。

「・・・迎えに来たよ」
「・・・うん」
会話は、それだけだった。
でもそれで充分だった。

シャルルは、ぽんぽんと、マリナの頭を軽く撫でた。
それ以上の行動は・・・できなかった。
彼女の触れることそのものが、どうにもならないくらい苦しかった。

シャルルは、上着を脱いで、そっと上着を彼女の肩にかける。
彼女はありがとう、と小さく言った。
いつもの、微笑みだった。
彼女が寒そうにしていたからという理由もあったが、何より直接彼女に触れることが・・・どうにも遣る瀬無かったので、彼は上着を彼女にかけてくるむことにした。

行こう、と言って、彼はマリナの歩幅に合わせて歩き始めた。
彼女はゆっくり彼に添って歩いた。

彼女は彼の無言のメッセージに、同じように答えた。

だからこの無言の会話も、どういうわけか、心地好かった。

彼の言葉にならない狂気を彼女は正面から受け止めて、そして彼をそれでも愛していると言葉に出さずに告げたから、彼はその愛を少しだけ信じてみることにした。

目に見えない、その非科学的な何かを――
彼は、根拠もないものは信じないはずだったのに、信じることにした。

彼女の彼への愛を、ではなく。彼の彼女への愛、でもなく。
彼と彼女の間に流れる愛を信じることにした。

「マリナを泣かすな！マリナをいじめるな！マリナを・・・マリナを、笑わせてやってくれ！」
シャルルとマリナが背中を向けた側で、ダイがおもむろに叫んだ。
ああ、小さなナイトでさえ、彼女の憂いを感じ、そして訴えている。

自分はこの生涯付きまとう狂気と闘わねばならない。
シャルルはそう思った。

彼の秘する想いは、決して、もう表に出ることはない。
この狂気は彼の中で、これから一生、隠されていくことになる。
嫉妬と言う言葉で表すには、激しすぎて触れる者すべてを傷つけてしまう諸刃の剣を、彼は自分の胸の内に納めた。
血を流すのは、自分だけで良い、と思った。

シャルル・ドウ・アルディはダイに振り返り、ふうっと笑った。

綺麗な微笑みで。

あの、青い薔薇のような奇跡のような微笑みだった。

「オレはシャルル・ドウ・アルディだ。」
彼はそう言ってまた微笑んだ。
「どーでもいいよ！そんなこと！オマエで十分だ！！！！！」

その声に、マリナがくすくす笑った。
まだ少し鼻声だった。

遠くなる怒声に、少しだけ目を潤ませた。

「彼は、私のともだちなのだ。…彼が、生まれたときから一緒なのよ。」

「そうか」

シャルルが静かに言った。

彼も彼女も、そして当人も、これから思わぬところで再会し、再び巡り会い、一生を親しく過ごす間柄になるとは、このとき予想もしていなかった。

「マリナ。今夜は、ディナーだ。少しだけ、長く時間をかけて…温かくして…ゆっくり時間を過ごそう。…それから…オレのバースデーを祝ってくれるかな…」

マリナは茶色の瞳を大きく開いて、素晴らしいわ、と言った。

彼はその様子に微笑みながら、意地悪くちらりと視線を流して言った。

「それにしても…あのイラストはお粗末だから、描き直してくれ。」

シャルルがそう言うのと、彼女はいつものとおり、頬を膨らませて抗議した。

「もうひとつ。危機管理ができてない。——この国も、君も。せめて携帯電話くらいは持ってくれ」

先にその端末を自らたたき壊したシャルルがマリナにそう忠告した。

そう言って、彼はそっと、彼女の小さな肩を抱いた。

伝えなくても伝わらなくても…もう良かった。

それでもこの愛は確かにここに在る。

それが彼への最大の贈り物だった。

毎年、毎日、生涯彼女から贈り続けられる「奇跡」そして「神の祝福」それから「愛の告白」を彼は手に入れた。

——周囲の雪はまだ白く、そして今夜も雪になりそうだった。

(FIN)

D-side

■Dのつぶやき

ボクの家が経営するアパートには、もう12年も住んでいる古参の主がいる。

そして、そいつはボクの知っている大人のうち、一番けったいなオンナだった。

そいつの名前はイケダ・マリナと言って、売れない漫画家だ。

あんまりにも長年売れないので、部屋の更新手数料をもらい損ねて以来、ずっと住み着いているとか一ちゃんが嘆いていた。

12年というと、ボクが生まれた年から住み続けていることになる。

ちょうど、ボクの部屋の窓からマリナの部屋の扉が見えるので、時々、見かけるけど。

一言で言って、神出鬼没だ。

何日も部屋から出てこない（と、思われる）日があるかと思うと、何日も帰ってこない時もある。いったい、どうやって生活してるんだと、子どもながらも思ってしまう。ああいう大人になりたくないなあ　と思う一方で、あいつの自由気ままさが、何となく好きだった。

12年も住んでいれば、ボクとも当然に顔見知りになるわけで。

「ダイ、おおきくなったわねえ　つい最近までおむつしてたと思ったのに」
時たまばったり行き会うこともあると、このセリフを繰り返す。
「マリナ、ボクは『ダイ』じゃなくて『ヒロ』という名前なんだから、いい加減、ちゃんと呼んでよ」というと、マリナは茶色い目をくりくりさせて、くすくす笑う。

「あら、『大』と書くんだからダイで十分よ」
ぼんぼん、と頭をたたく。

マリナは大人のわりに小さい。

ボクもそれほど大きいわけではないけれど、マリナはボクより少し、大きいくらいだ。最近、ぐんと背が伸びてきたので、マリナを追い越す日も近いと思う。

■Dのぼやき

マリナが12年もここに住み続けているせいなのか、あいつが友達が多いせいなのか。どっちも理由であるように思うけれど。

マリナには来客が多い。

しょっちゅう、人が出入りしている気がする。

「イケダさんちには、いつもモデルさんだか、芸能人のような人が出入りしている」と噂されたもんだ。
マンガのモデルでもやってもらっているのだろうか。

実際、2つ年上のねーちゃんと、ミーハーなかーちゃんの目撃証言によると、背の高いハーフっぽい男だったり、ヴァイオリンケースを片手に、どこか歩く男か女かわからない奴だったり、時には、目が覚めるような美形の外人を招き入れているそうだ。

そこまでしっかり目撃されているのに、
「フトクテイタスウ」の男と遊んで暮らしてると思われないうところが、マリナのすごいところだ。

だけど、ねーちゃんやかーちゃんや他の人は知らないと思う。

マリナが、時々、ものすごくあいつらしからぬことをしているのを。

雪の日だった。

都内にしては珍しくドカ雪で、朝から降り続けた時だったから、良く覚えている。
学校から帰って鞆を置いて、普段にはない雪のつもり具合に、どこで雪合戦をしようかと
友達との待ち合わせに備えるべく、外出の支度をしていたとき。
ふと、目をやると、マリナが玄関先で、なにやらたたずんでいた。

手に何かを持って、一生懸命口にあてている。

「あ？あいつ、この雪の中で薄着だなあ」
まだ明るいうちから、酔っ払ってるのか？

目をこらしてみると。

マリナは、一生懸命シャボン玉を飛ばしていた。

雪の日にシャボン玉。

奇妙な組み合わせに、ボクはしばらくあんぐりと口を開いていた。
この寒い中、マリナは玄関先にたたずんで、シャボン玉を飛ばしているんだ。

その姿、いつか通報されると思うよ・・・

シャボン玉は、寒い空気にさらされて、大きな球状にはならないだろうし、
この雪にぶつかって、飛ばしてもすぐに割れてしまうだけだった。

でも。
いくつかは、空に向かって飛ばされていく。
弱風が、シャボン玉を飛ばしていった。

その、奇妙で摩訶不思議な光景は、ずいぶん忘れることができなかった。

マリナは遠目に見ても、小柄で髪の毛が茶色いのですぐわかる。
ハタチをとうに越えたおとなが
何やってるんだよ。

玄関先で、手袋もせず、立ち尽くしているから、さぞかし寒いだろう、とか
シャボン玉をこの真冬の真雪の中にふかしていることに対する疑問、とか。
そういうことをすべて超越したマリナがいた。

やっぱり、ヘンなオンナ。

そのときは、ただそう思っただけだった。

■Dのなげき

イケダさん、すっごい風邪を引いたらしいよ
もう何日も寝込んでるんだって

たまった郵便物が階下のポストに溢れていたの、かーちゃんが見かねて届けたらしい。そのときに、マリナがあの日以来、風邪を引いて寝込んでいることを知った。

ダイちゃん、悪いけどこれをイケダさんちに届けてくれる？

ねーちゃんもかーちゃんもボクの名前をそう呼ぶから、マリナもいい気になって、ボクをダイと呼び続けるんだよ。心の中で文句は言ったものの、書留郵便を受け取れないくらい具合が悪いマリナがちょっと気になった。

やだなあ

ボクんちのアパートで、物騒な事件が起きなきゃいいけど。でも、あいつは来客が多いからな。きっと、誰かが看病してるに違いないよ。

そう思う一方で、玄関先にも出られないマリナが、友人が尋ねてきたとしても、応対できないんじゃないかと思った。

表面はしぶしぶ、という顔をしながら、ボクはマリナの部屋に行ってみることにした。

「ダイ？」
ものすごい鼻声で、マリナが出た。
出た
というよりは、布団から顔を上げた、という程度だ。

鍵だって開いたまんまだ。
さっきかーちゃんが郵便物を届けに来て、そのままにして寝てしまったらしい。

ボクは、部屋に上がり込んで、そうぶつぶつ言いながら、タオルを水で冷やして、マリナの額にあてがった。
そのとき、ものすごい熱があって、顔も赤くて、目がどんよりしていて、とにかく、弱った動物みたいなぐったりした姿のマリナに、ボクはびっくりした。

部屋は、雑然としていて、まさに「足の踏み場がない状態」だった。
オンナの部屋か、これ。
久しぶりにマリナの部屋にあがる。
昔は、よく、マリナの部屋に上がり込んで、マンガを読んだり、画材道具でいたずら書きをして時間を過ごしたものだ。

ボクが大家の息子かどうか、ではなく、マリナは本当にボクのことをともだちだと思ってたようだ。
そこが、マリナの才能だと思う。
老若男女関係なんだよね、きっと。

小学校の高学年になるにつれて、だんだんクラスの友達と遊ぶことの方が楽しくなっていったけど。
マリナと遊んだことは忘れていないんだ。

・・・かーちゃんも薄情だよな
こんな状態のマリナを放っておくなんて。

「あたしが大丈夫だって言ったんだよ」
咳き込みながら、マリナがそう言い返した。

「マリナ、病院に行こう」
「う～ん 今、動くのもしんどいんだけど」
「だいたい、なんでそんなに具合が悪くなるまでの風邪を引くんだよ。
ボク、この間目撃したんだぞ！雪の中で、シャボン玉ふかしてただろうがっ」
「あはは。見られちゃってた？」

ボクはあまりの間抜けな答えに、あんぐりと口をあいた。
呆れてものが言えない、とよくかーちゃんがボクが口答えすると、そう言うけれど、
マリナのこの反応には「ダツボウ」だよ・・・

「一体ぜんたい、なんでそんなことになっちゃったんだよ」
呆れついでに聞いてみることにした。

「えとね。」
熱に浮かされて、聞かれるがままに答えてしまったんだろう。

「ともだちの、誕生日」
「え？」
「ともだちの誕生日に、たくさんのシャボン玉でお祝いしてあげようと思ったんだけど。
そのともだちと、けんか、しちゃって。
一緒にお祝いしようねって言ってたんだけど、その人は来てくれなかったんだ。
でも、お祝いしたい気持ちには変わりがないから。
その日は大雪で、たくさん、たくさん飛ばしてあげられなくて・・・」

「おまえは阿呆だ。」
ボクは言った。
なんだか知らないけど、無性に腹が立った。

「オマエ、一体いくつになったと思ってるんだよ。
あんな薄着で、雪の中、しゃぼん玉ふかしてたら、年寄りだったら死ぬぞ。」
しゅん、としたマリナが布団にもぐった。

ボクはまだ怒ってた。
「オマエのそういう夢見るオトメみたいなぼやんとしたところが良いて言う奴もいるんだろうけど。
いい年して、何やってるんだよ。自覚持てよ。」

つもりに積もった言いたいことをはき出した。
そのあと、言い過ぎたかなと思い直して「ごめん」と言うとマリナは一言だけ、言い返した。

「・・・オマエ言うな」
「オマエで十分だ」

マリナは笑った。
「その言い方、すごく、わたしの知っている人に似てる」

汗で額に髪の毛が張り付いていた。

「食べ物少し口に入れられたみたいだね。とにかく寝ろ。」
「言われなくてもそうする」

マリナはそう言って、それから、しげしげとボクを眺めた。
大きい茶色い目玉が、こっちを見てる。
ボクは、ちょっとどきりとした。
「なんだよ？寝ろよ」

「大きくなったね、ダイ」
「そりゃ、もうすぐ小学校卒業だしね」

「つい最近まで、おむつしてたのにねえ。いつの間にか、口答えするようになっちゃって。
ほんと、私の周りには怒りっぽい人がたくさんで、困るわ」
すぐにうつらうつらし出したようだ。

ボクは、簡単に部屋を片付けて、湯を沸かし、台所を洗って、一応、人が棲息できる状態を作った。
12歳でここまでできる奴がいたら、是非勝負したい。

「じゃ ボクは一度帰るから。後でかーちゃんかねーちゃんを寄越すよ」

そう言って、振り返ったときには、マリナはもう寝付いていた。

そっと部屋を出ようと、玄関先で靴を履いたとき。
「ごめんね、シャルル」

という声が聞こえた。

寝ぼけていたらしい。マリナは寝言を言ったようだ。
「しゃるる。」

ボクは、その名前らしき単語を復唱した。

そいつとけんかして、でも、謝れなくて、それでも誕生日を祝いたくて、あの雪の中を馬鹿みたいに一人でシャボン玉飛ばしていたわけ？

一体、何日寝込んでるんだよ。

壁に掛けてあったカレンダーをみた。

1月25日に、マルがしてあった。

■Dのためいき

人間という生き物の体は、頑丈に出来ているんだ

マリナの回復ぶりをみると、ボクは自然にそう思ってしまう。

あれだけ弱っていたのに、見かねたかーちゃんが差し入れた食べ物と、惰眠をむさぼるだけ食ったら、あつという間に回復しやがった。

寝言でみーみー泣いていたマリナより、ふらっとどこかに出かけて、「スケッチしてきたの！」と、ボクよりずっと年下のこどものようにはしゃぎ回っている方が、マリナらしい。

まあ、たまにはあいつだって、弱気になることくらいあるよな。

ボクは、いろいろなことをそうやって納得させることにした。肯定はしてないけど。理解はしているつもりだ。

おとなにだって、いろいろ事情がある。マリナがおとなかどうかはわからないけど。（現に体だって小さいし、何より精神年齢が、生活年齢より下回っている）

ボクから切りださなければ、マリナはあの日のぼやきなんて、きっと、けろっとして忘れてしまっているに違いない。いや、そんなことさえ呟いたことも、覚えていないと思う。

北風が、また一層寒くなって、空がどんよりと墨色になってきた。雪の気配がしてきた。

「今年は、雪が多いねえ」

マリナが話しかけてきた。

ボクは、アパートの入り口周辺に散った枯葉を掃除していた。「もう、具合は良いの？」
「すっかり。」

「それにしても偉いわね、お手伝い？」
「あるばいと。」
ボクは胸を張って言った。
「もう 学校は短縮授業だから、暇なんだよ。もらったお小遣いで、買いたいものあるしね」

「へえ」
マリナがいたずらっぽく笑った。

「計画的なのねえ」
「オマエが無計画なんだよ」

買い物の帰りだといっていた割には、手に荷物を持たずに帰ってきたマリナは、何か、アタリをきよろきよろして、落ち着かない様子であることに、やがて気がついた。

■Dのささやき

「誰かと待ち合わせ？」

ボクが尋ねると、マリナはううん、と首を振った。

こういう仕草が、とても、子どもっぽい。
茶色い髪の毛が、ふるふると揺れた。

「そうじゃない、けど」
じゃあ、誰かを待っているんだね。あの『しゃるる』って人のことかい？
ボクはそう尋ねようと思ったけれど、言わないことにした。

聞いてもどうにもならないことは聞かない。
よく、ねーちゃんが「良いこと教えてあげようか。あのね・・・ああ、やっぱり言えないわ」
と言うことがあるけれど、ボクは決まって「じゃあ聞かない」と言うことにしている。

そういう話は聞いても面白くないし、ボクに関係のない話であることが確実だからだ。

轟しいねーちゃんとかーちゃんという自分と違う性別の生物から得た、経験からくる知恵というやつだ。

マリナは、茶色の瞳をくるくるさせて、せわしなくアタリを見回している。

明らかに、誰かを、もしくは何かを、待っている様子だった。

「病み上がりなんだから、早く部屋に入れよ」
「はいはい」
「『はい』は一度で良いの」
「は～～い」
これじゃ、どっちが大人だかわかりゃしない。
そんなことを思いながら。
何かと、部屋に入りたがらないマリナは、まわりつく子犬みたいだった。
掃除に邪魔だ邪魔だと追いやろうとしたときに。

アパート入り口の細い路地から、誰かが角を曲がってやってきた。

ん？

ボクは目をこらした。
マリナは目を見開いた。

■Dのおどろき

ずいぶんと後になって。
こういうシチュエーションは、女子がこの上なく喜ぶものだということを知ったけれど。
12歳のボクは、そのときは、ただただ、啞然とするだけだった。

アパートの前は、細い路地で一方通行だ。
だから、ボクみたいな子どもが遊んでいたり、今みたいに枯葉を掃除しても安全な場所だった。

その路地を、「場違いな」そう、本当に場違いな、ガイジンが歩いてきた。

ガイジンだ！
姿を見定めた時は、そう、思った。

長い、長い脚。
冬なのに、厚着なのに。
遠目からも体を鍛えていることがわかる、調整された体。
寒風に揺れる、色素の薄い髪。
金髪よりももっと白い。こういうのを「銀髪」と言うのだろうか。
彫刻のように整った顔立ち。
寒さなのか緊張なんか、つまらないからなのか。
無表情だった。
印象的な、青灰色の目が、マリナだけを、見据えて捕らえていた。

ボクのコトなんて、二人は眼中にない。
そんなかんじだった。

何だよ・・・???

そのとき。

その人と、マリナの視線の先が同じだということに気がついたときに。

寒そうに、フード付きの丈が短いダッフルコートを羽織ったその人を、
マリナが待っていたことを。
知ったんだ。

「しゃるる」

彼女はそう、呟いた。

ああ、こいつを、マリナは待ってたんだな。

雪が、ちらついてきた。

ゆっくり、音もなく、マリナと、そいつと、ボクに降りかかってきた。

「あっ」

先に静寂を破ったのは、ボクの声だった。

ひょい。

まるで、花束を担ぐかのように。

シャルルという奴は、マリナをか肩に担ぎ上げた。
本当に、簡単にいともなげに。

マリナは小柄だから、その動作は何となく、小動物を抱えて愛でるみたいに見えた。

「何するんだよ！」

思わず、ボクが声を荒げて近寄った。
シャルルは、ボクを、横目を見た。
うう、ガイジンのにらみつけがこんなに怖いとは、思ってもいなかった。

「ずいぶん、小さいナイトだな」
「なんだと！」
ボクは、持っていた箒を握りしめた。

何もかもが、こいつに勝ってない。
唯一、年が若い ことくらいか。自慢にならない。

■Dのためいき

「おい、マリナ、何とか言えよ！・・・言ってやれよ！」
ボクは叫んだ。

シャルルと呼ばれたそいつは、ため息をひとつ、つくつと、マリナを肩から降ろした。
まるで荷物を降ろすように、ぞんざいに。

マリナはモノじゃない。

ぎゅっと、両手に握りしめていた箒の柄を、もう一度持ち直して。
ボクは、ゆっくり、一句一句を確認しながら、言った。

「オマエがシャルルだろ。」

「だからなんだ。」

ヤツは言った。

ボクはココで負けてはいけないと決心して、渾身の力で叫んだ。

「マリナはずっと、オマエのこと待ってたんだぞ！」

雪の中、誕生日を祝えなかったって言って、熱を出して寝込むまで、シャボン玉飛ばし続けたりする阿呆なオンナだけど、でも、そういう扱い、することないじゃないか。」

シャルルとかいうヤツは、ぎろりとこっちをにらんだ。

ボクは、また、箒の柄を握り直した。

やるっていうのなら、望むところだ。

この間、合気道教室で習った払い脚を披露してやる。

脚が長いから、さぞかし有効だろう。

そのときだった。

マリナが、抱きついたのだ。

ふわっと、軽く。

そう、ボクではなくシャルルにだ。

ヤツは、視線をボクからマリナに移した。

もう、この段階で、僕の気配というか存在感は消されてしまった。

「・・・来てくれて、ありがとう」

「迎えに来たよ」

「・・・うん」

会話は、それだけだった。

シャルルは、ぽんぽんと、あやすかのようにマリナの頭を軽く撫でた。

その仕草は、マリナが、ボクの頭を撫でる時に良く似ていた。

ボクはまったくのピエロだったんだ。

そう、気がついたときには、ヤツが暖かそうなダッフルコートを脱ぎ、優雅なしぐさでもってマリナにそれをかけて、肩を抱いて歩き始めたときだった。

ボクは、かぁっと頬が赤くなった。

マリナ。

マリナ。

小さいときから。

違う。

ボクが、生まれたときから一緒のマリナ。

彼女が行ってしまう。

彼女が、去ってしまう。

「おい！オマエ！」

ボクは、二人の背中に叫んだ。

「マリナを泣かすな！マリナをいじめるな！マリナを・・・」

最後は、声がかすれていた。

目の前が、なんだか滲んでくる。

「マリナを、笑わせてやってくれ！」

そこまで言うと、シャルルはふいっと、ボクを見たんだ。

そして、笑った。

綺麗な、綺麗な笑顔だった。

「オマエ、言うな。オレはシャルル・ドウ・アルディだ。」

「どーでもいいよ！そんなこと！オマエで十分だ！！！！」

ボクは、そう叫んだ。

空から、雪が、ひとひら、落ちてきた。

今夜は雪になりそうだ。

(FIN)

■そしてDは

国立病理研究所で、快挙を成し遂げた日本人研究者がいた。

彼はその若さで、辛抱強く研究を重ね、かつ、時には大胆に仮説を打ち立て、水の清浄化を急速に促すバクテリアを発見し、濾過システムを確立した。

また、これを偶然の産物でないことを証明した。
モザンビークをはじめ、衛生状態の良くない場所で役に立つことだろう。

彼は、若き研究者であると同時に、病理研究所所長の信任厚い片腕でもあり、家族共々親しくつきあう間柄だった。

そして。

フランスの華と呼ばれた所長にいつも寄り添う彼の生涯の伴侶とは、文字通り、彼が生まれたときから一緒だったという。

彼らは、その研究者のことを本名ではなく「ダイ」と慕わしげに呼んでいた。

(本当の F i n)

■嫩葉01

・・・進学先が決まったとき。

真っ先に音楽活動をいつになったら再開するのか、と聞かれたので、僕は「趣味だから」と言って微笑むことに決めていた。

つまり、もう、公には姿を出すことはない、と言って、引退宣言をした。

人より少し早い進路の決定だった。

これまでの音楽活動が功を奏したのかもしれない。

一般入試とは違う特別枠で入ったものの、僕はその道を邁進するという選択をしなかった。

音楽活動が加点されたことは認めるが、それで入学したのではなく、僕はやりたい路に進みたいと言った。

もちろん、試験も受けたし、これまでの学生生活の評点が及第だったからこそその結果であったけれども。

・・・つまり、理系のある特別な分野に進むことに決めていて、音楽の路には進まないことにした。

これまでの、一日のうちのほとんどを練習時間に費やすという生活からきっぱりと決別した。

短い活動だったけれども、周囲の理解と協力があったからこそ続けられたのだと思う。

親はアパートの空き部屋を防音室に改築してくれたし、大変に高名な音楽家に師事してくれるように取りはからってくれた人も居た。

とても今の生活では持つことの出来ない楽器を貸与してくれた人物もいた。

友人は僕をインターネット投票で1位に押し上げてくれる運動をしてくれたし、長らくのパートナーであった音楽仲間と一緒に留学しないかと声をかけてくれたこともあった。

・・・僕は、大変に恵まれていると思う。

しかし、たくさんのコンクールに出て、部屋には数え切れないほどの賞状やトロフィーが並んでいたが、それもすべて片付けてしまった。

過去の栄光を飾っていても何にも満たされないから。

だから、これまでの生活を一変させて、普通の・・・まったく考えて居なかった普通の生活をするようになった時。

誰もが驚き、そしてもったいないと言った。

何がもったいないのかわからない。

だって、僕の一日は決まった時間しかなくて、僕は自分の進みたい路をすでに決めていたから。

音楽は好きであったけれども、僕はこのまま進んだら・・・戻れなくなると思った。

好きと仕事は一緒にできない人間なのだと思っている。

まだ、好きで居られたから。

好きなままに一生を共にしたいと思ったから。

だから、留別を選んだのに。

それが間違っているとと言われて、僕は大変に困惑した。

でも、彼女はそれで良い、と言ってくれた。

彼女は・・・僕に偉大な師を紹介し、そして希なる名器を貸与するように、彼女の恋人に取りはからってくれた人は僕の家を経営するアパートの住人だった。

そして僕が生まれた時から一緒に居る。

本当の名前は「大」と書いて「ヒロ」と読むのに、彼女はいつも僕を大きな声で「ダイ」と呼んだ。

そして、彼女は笑って、彼女よりずっと大きくなった僕の背中をとんとん、と軽く叩いた。

「決まった路ではなく決めた路に行くのが一番よ」

・・・重みのある言葉だった。

その言葉に押されて、僕は今に至る。

だから後悔していない。

僕が恵まれていたのは機会であって、すべてがダイの実力なのだ、とあの人は言ってくれたから、ここまで続けることが出来た。

高名な師が慰留してくれたけれども、それは丁寧に断った。

僕から始めたいと言ったことなのに。それでも皆はダイが選んだのだからと言って許してくれた。

僕の夢はいつの間にか、あのフランスの華の元で研究開発をすることに変わっていた。

いつか・・・彼が今でも研究を続けている、彼が救いたいと思っているあの国の土壌開発について、研究チームに加わりたいと思っていた。

どんなに彼が万能でも、彼はあらゆる方面から必要とされている逸材であり、着手した研究について、最後まで研究を進めることは難しかった。

彼の身体もひとつしかない。そして彼の時間も僕と同じだけの時間しかなかった。
そして、フランスの華は、自分の実験については大変に厳しく、信用できないデータはすべて元から廃棄してしまうという潔癖さを持っている。
そんな彼の元で一緒に研究をしていけたら。どれほど素晴らしいだろう。
そう考えていたものの、僕にはもう一つ・・・野卑な願いがあった。
もし、願いが叶えば、彼女と一緒に居られると思ったからだ。

彼女を泣かさないうで欲しい。
彼女を笑顔にさせて欲しい。
彼女を大事にして欲しい。
そう訴えて大声を張り上げたのは、つい最近のここのように思える。

確かに、彼はマリナを大事にしている。
どんなときも。どんなときでも。

しかし僕の胸の中の秘めたる疼きは・・・彼女の幸せそうな笑顔を見る度に、渴きとうねりをもたらし、僕を悩ます。

マリナ、わかっているだろうか。

貴女は僕のすべてを知り、僕の生き方に深く影響しているのに。

・・・彼女は僕を見ない。

少し年の近い親子ほど年齢が離れているのに、彼女は年若く見えるので、少し年の離れた姉弟のように僕らは会話を交わす。

そして、フランスの華と言われている、彼女の永遠の恋人は・・・やがて彼女と永遠を誓い合う人となった。

それはとても嬉しいことのはずなのに。
僕はどういう訳か僅かに哀しかった。

だからだろうか。
音楽の路から決別するとき、あれほどあっさりとしていられたのは。
深みに入れば入るほど、彼と彼女の絆について考えが及び、それが音色に出る。

いつだったか・・・師であるカオル・ヒビキヤに叱咤されたことがあった。

「悲恋ばかりを表現したいのなら、よそへ行け」
僕がどういう感情の波に溺れているのか、彼女は見抜いていた。
だからこそ・・・僕にそんな言葉をかけたのだと思う。
そして彼女はふと、非常に中性的な横顔を見せて呟いた。
彼女は大変に端正な顔立ちをしているが、時々・・・男女の性差を超えた表情をすることがあった。
そんなときは、誰かの遠くにいる人の事を考えて居るのだな、と思った。
彼女はいつも、そういう表情をしたときには「別れのワルツ」を弾いた。

■嫩葉02

普通は違う楽器の奏者は弟子にしない。
せいぜい、音楽理論を教えるくらいだ。
それなのに、カオル・ヒビキヤは僕を受け入れた。
かの師は、決して弟子を取らないことで有名だった。
それなのに、たったひとりの人の言葉で、彼女は僕を受け入れた。

茶色の髪の色、茶色の瞳の色、僕の家に住居人に連れられて、僕はカオル・ヒビキヤに会いに行った日の事を決して忘れない。

彼女は大変な美形で・・・そして性別を超えるほど、年齢を押し量れないほどに綺麗な人だった。

そこは、天使の庭かと思った。

・・・最初。

レッスンの先生を紹介したいと言われたので、ちょっとそこまで、といった気分で僕は彼女と一緒にアパートの前で待ち合わせをして、そのまま大通りに出て・・・面喰らった。
細い路地が続く一方通行のアパートの前ではとても止められないくらいの、大変に立派な迎いの大きな車に乗せられて、僕は都内を走り抜けて、豪華なマンションの一室に連れて行かれた。
次からはひとりで来られるか、と聞かれて、僕は無言で頷いた。
マリナの車の乗り方が洗練されているとは思えなかったが、とても慣れていたので・・・僕は言葉を発することが出来ず、ただ首を縦に振るだけだった。
彼女が知らない人のように思えた。
だから・・・隣に座って、僕の相づちの有無も関係なく喋り続けるマリナ・イケダの声の高低だけを感じながら、車の震動に身を任せているばかりだった。
決して踏み入れてはいけない領域に入っていくような感覚があった。

・・・そこは交通の便が良く、陸路も空路もすべてにおいてアクセスが良い場所にそこはそび

え立っていた。

いくつものセキュリティゲートを越えて、僕はそこに辿り着いた。

今度からひとりで来られる場所にその場所は在ったけれど、これではひとりで入れないじゃないか。

心の中でそう思った。

ペントハウスのそこは、大変に日当たりの良い場所で、エレベーターは、特殊キーを持ってIDセンサーに特定のカードを入れて暗証番号を入れないと停止しない階だった。

生体認証とIDカードと暗証番号が正しい順序で合致していないと入れない場所にあり、表示されている最上階の数字を表したパネルの数字のさらにその上の階層に位置していた。

大きな重たい扉を開いて、中に入ると、そこには……僕がテレビや雑誌でしか知ることのない世界が広がっていた。

靴を脱がない居住空間。

何人か点在する使用人。

アパートの路地より広そうな長い廊下。

中二階になっている螺旋階段の先はプライベートルームなのだろう。

……そして次に大きな居間を通り、ソファの上に大きなスーツケースが途中まで開いてあって、その中から散らばった楽譜が床に散乱しているのを見て、マリナは顔をしかめた。

「カオルはいつになったら、掃除ができるようになるのか」

その言葉を、マリナ・イケダという人物にそっくり返してやりたかった。

そこで僕はようやく苦笑いであつたけれど、笑い声を漏らすことが出来た。

車内で説明された。

カオル・ヒビキヤという音楽家と知り合いだと言う。

だから僕を引き合わせたいのだ、と彼女は言った。

どういう理由でそういう経緯になったのかと言うと、これはまた長い話になる。

けれども、僕の中に何か……音楽的センスがあつて、それが本物かどうか、カオルに見て欲しいと思う、とマリナが橋渡しをしてくれた。

それが彼女のとの出会いだった。

……部屋の構造について、詳細を言えば言うほど、現実離れしてくるような気がした。

そしてその雑然としているけれども、途方もなく生活の匂いのなく、かつ広すぎる空間を、彼女が慣れた足取りで自由に泳ぎ渡っているように歩いて、目的の部屋に僕を誘う後ろ姿を見ながら……僕は覚束無い足取りでその後を夢中で追いかけた。

やがて、分厚い扉が威圧的な雰囲気構えていて、僕とマリナは両開きのその扉を片方ずつ担当して、取っ手を横に引いた。

その時に、大変に珍しい横開きの防音扉だということに気がついたが、部屋の中はとても静かだったので、拍子抜けしたことを覚えていた。

・・・2室の壁を抜いたのだろう。それくらい広かった。

中央には漆塗りのグランドピアノが設置されており、温度も湿度も完璧に調整されていた。

シャルル・ドウ・アルディと、カオル・ヒビキヤがそこに居た。

すぐにわかった。彼らはそれくらい特徴がありすぎる。

マリナが「扉が重い」と言っただけで文句を言いながら、その部屋に入っていく。

僕は入り口でしばし立ったまま、その姿を眺めていた。

おいで、と彼女に言われて、僕はそっと足を踏み入れた。

防音室なのに、立派な天窓や出窓があって、彼らの居る場所には、燦々と陽光が射し込んでいた。

特に、シャルル・ドウ・アルディの白金の髪が、とても強く煌めいていて、僕は一瞬目を細めたのを覚えている。

美術室の壁に取り付けられている絵画のような荘厳さがそこにあった。

・・・ヴァイオリンの弦を爪弾きながら、片膝を立てて椅子に座る男装の麗人と、白金の髪に青灰色の瞳の・・・整った顔立ちと表現するにはとても足りない顔立ちをした男性がそこに立っていた。

マリナの恋人が、大変な人物であることを知ったのはその少し前のことだった。

けれども、それよりなお・・・音楽雑誌でその名前を見かけない時はないくらいの有名人がそこに居て、写真やジャケットや動画を見る以上の存在感を持ってそこにいたので、僕はその場所に立ち尽くしてしまっていた。

マリナに背中を押されるまで、その場をしばらく動くことができなかった。

それからフランスの華は、これから大事な話があるからシャルルは出て行け、と言ったマリナに苦笑しながら、部屋を出て行った。

大変に小柄な彼女に近づくと、ちょっと屈んで、彼女の髪にキスをした。

その仕種が映画のワンシーンのようにあまりにも綺麗で流れるようで、僕はちょっと瞬きを繰り返してしまった。

あまりにも眩しかったから。

そして、もっと眩しかったのは・・・その祝福の口吻を・・・マリナが嬉しそうに瞳を細めて

軽く顎を上げて、シャルルのキスを受け止めている姿だった。

僕は・・・また目を反らした。

そこはカオル・ヒビキヤのレッスン室で、防音設備が完璧にされている上に、大変に高価なスピーカーが部屋の四隅に設置されていて、今は入手するのも難しいLPレコードを再生するためのレーザー読み取り装置が完備されていた。

僕の知っているマリナはいつも漫然としていて、遠くを見つめていて・・・雑然としたアパートの一室で、整頓できないことさえ、平気で生きている人だったのに。

胸が苦しくなったことだけ覚えていて、その時の彼女の様子についてあまり細かく覚えていない。もちろん、僕と彼女が車内でどんな会話をしたのかさえ、うろ覚えだった。

僕の脇を通り過ぎていった。

何も声をかけられなかったし、触れることもなかったけれど、すれ違う時に僕はびりっと電流が腕に走るような気がした。

彼の長身が、マリナを軽々と担ぎ上げた時のことを思い出したからだ。

・・・その時の僕にはまだそれほどの腕力も身長もなかったから。

だから僕は彼の気配と温度と空気を感じて・・・ひどく緊張した。

僕とすれ違った時に、とても良い香りがした。

・・・出で立ちが外国人であるのに、シャルル・ドウ・アルディは完璧な日本語を操る。

隣の部屋で寛いでいるがあまり時間はない、と短いけれども要点を押さえた言葉だけを残して、シャルルは部屋を出て行った。

・・・シャルルは僕の顔をちらりと一瞥した。

僕の顔を覚えているようだった。

でも僕は、母さんから言われているように、大人にきちんとした挨拶をしなさいという教えを守ることが出来なかった。

ちょっと首を曲げて、ぺこりとお辞儀をただけだった。

彼はそんな僕の様子を見て、「なるほどね」と言ったが、その意味がどういう意味なのか、その時にはわからなかった。

彼と会うのは、これが初回ではない。

2回目だ。

だからなのだろうか。

いや、そういった意味ではない、もっと違った意味での肯定の言葉を彼は残して部屋を出て行った。

しかし、カオル・ヒビキヤはシャルルのたったそれだけの言葉でシャルルが何を言いたかったのか、何を指摘したのか、わかったらしい。

端正な口元をほころばせながら、不敵に笑った。

「・・・昔の誰かを思い出すな」

彼女は僕を見て、それで決めてしまった。

最初で最後の弟子を取ろう、と言った。

僕の何を見て、彼女は微笑んだのだろうか。

僕の何が、シャルルを肯定させたのだろうか。

それ以来、僕は音の路を駆けるように抜けていった。

あつという間の日々であったが、一日たりとも無駄に過ごしたとは思わなかったし、そう思う必要もないくらいに満たされていた。

レッスンは厳しかったけれど、マリナに途中で弱音を吐いたこともあったけれども、それでも僕は続けて良かったと思う。

続けていればシャルル・ドウ・アルディの言った言葉の意味と、カオル・ヒビキヤが呟いた言葉の意味と、なぜ師がいつも別れのワルツを奏でるのかという理由と・・・もっといろいろなことを知ることが出来るのだろうと思ったから。

■嫩葉03

僕の音楽生活の中には、いつもシャルル・ドウ・アルディの影がちらついていた。

彼と僕との間には奇妙な利害関係が成立していた。

マリナ・イケダが日本のアパートを不在にしているときに、僕の実家が管理を任されていることもあって、僕にいろいろと連絡を取ってきていた。

最初は国際電話からの一方的な指示だった。

しかも、意地の悪いことに、僕以外の人間が電話に出ると、フランス語やイタリア語やドイツ語やラテン語で話し出して、会話しようとしなない。

もしくは、秘書らしきとても落ち着いた若い女性の声で呼びだして、僕が受話器に出ると交替し

てシャルルがいきなり話し出す。

彼の奇妙な行動には理由があった。

彼が、非常に知能指数が高く、数奇な運命と経験をたどり、生来の人間嫌いに起因するという
ことを後になって知ったけれども、それでも彼の行為は奇妙を通り越して奇怪としか言いようが
なかった。

マリナがどうしてあんな外国人と一緒に居たがるのか・・・最初はよくわからなかった。

次に、僕が彼の存在を認識するようになると、今度はマリナから聞いたのか、どこかで調べた
のか、FAXや文書送付での連絡と続き、程なくしてそれは僕の個人メールアドレスに到着するよう
になった。

・・・彼ができないことはない人物だということは知っていた。

その頃になると、マリナの恋人が、シャルル・ドウ・アルディという人物であることも知った。
そして彼が大変な有名人であることも。

だから、僕に関する情報をどうして知ったのだ、とか、個人情報漏洩だとか、そう言って騒ぐ
つもりはなかったけれども、それでも外国籍でありながら、それほど強大な権力や権利をこの国
で行使することができるのであれば、僕やこのアパートに拘る事なんて、ないじゃないかと思っ
ていたのは確かだった。

正規の手続きを経ないで、未成年にあれこれ業務を委託するなんて、おかしいじゃないか、と最
初のころ抗議したことがあった。

ところが、今度は、僕が遠方に住む友人との連絡にWEBチャットを使用しており、そのソフトがあ
まり品質の良いものではないことを知ったらしく、シャルルが開発したWEB会議システムのソフト
とOSを僕に無償提供すると言って来た。

僕がそういったことに、普通の男子よりも興味を持っていることと、現状に窮していることを知
ったシャルルの策略に不承不承乗ったことが、彼とのやり取りの始まりだった。

確かに、彼が開発したシステムは素晴らしかった。

画期的で斬新なOSであったにも関わらず、彼はそれを市場販売にまで踏み切るまでに、だいぶ足
踏みしていた。

・・・それがマリナとシャルルと、僕と・・・ごく限られた人間だけしか使えないということに
意味があるのだ、と彼は言っていた。

マリナが日本に居る間も、そのシステムを使用して連絡を取っているようだった。

それなのに、シャルルは、僕と彼との連絡とマリナと彼との連絡に利用しているシステムを、決

して・・・三者間通話で使用したり、マリナと僕との間の回線を開こうとしなかった。これにもきっと理由があり、あの時・・・カオル・ヒビキヤが言っていた言葉のこたえによって、シャルルはこのような行動を取っているのだろうと思った。

・・・彼ほどの人物であれば、代理人を立てるとか、別の者を管理に遣らせるとか。
・・・アパートそのものを引き払ってしまって、もっと様々なサービスの行き届いた場所にマリナの居を移すことも想定していたはずなのに。

それなのに、どういうわけか、シャルルは僕に連絡を寄越す。
然るべき立場の大人ではなくて、大人になる前の僕に。
結局事務手続きなことは僕では荷が重すぎるので、親に委託することもあったけれど、それでもシャルルはそのシステム経由でいつも僕に連絡を寄越した。
それはマリナが日本に居る時にも続いた。

時差があるはずなのに。僕の行動時間に連絡を寄越す。
メールだったら受信時間の差はあるが、要件は済まされるはずなのに、メールの送信でさえ、彼は僕のログイン時間を見はからって送って寄越していた。

マリナ・イケダという人物が、密に連絡を取り合うことに労苦を感じない人間であれば、きっとそういったこともなかったのだろうと思う。
連絡も寄越さず、連絡もせず、マリナは突然ふらりと居なくなったり、アルディ家から出てしまったりするらしい。

大変な過保護ぶりだ。
マリナは大人でこどもじゃない。
そして、シャルルのように拘束してばかりだったら、マリナはさぞかし苦しいのだろうと思った。
けれどもそれは二人の問題であり、僕が口を差し挟めるものではなかった。
でも。

シャルルにとって、マリナが、唯一絶対なのだと思った。

・・・家族に恵まれなかった人だと聞いた。

肉親はいるけれども一緒に暮らすことが出来ないのだとマリナが少し寂しそうに、でもたくさんは語ることなくそう言ったときに、眉をひそめて、顔を曇らせたから。

僕はそれ以上聞くのをやめた。

・・・僕は両親が健在で、けんかばかりしているけれども姉が居る。
季節の行事に電話をする程度であったけれど、祖父母も仲良く元気に暮らしていた。
それがどれほど大事なことで・・・どんなに手を伸ばしてもぎ取りたくてもそうできない人が居るのだと思った。
それがシャルル・ドゥ・アルディという人物の青灰色の瞳がいつも静かで哀しそうな色をたたえている理由なのかと思うと・・・無視することができなかった。
憐れみは彼は欲していない。
同情や憐憫といった感情は彼の誇りを傷つけることは理解していた。

誇り高い、フランスの華と呼ばれる希なる傑人が、僕に一体どうしてそこまで関わるのだろうか。
僕は普通の・・・本当に普通の学生で、そして・・・たまたま、彼の恋人の住居を管理している家の息子であるだけであった。

時差があるのに、彼の活動時間外であろう時間帯に僕に連絡を寄越す。
忙しい時はメールや短いチャットだった。
そして彼はいつも決まった時間に、決まった長さしかやり取りしない。
まるで一日のうちの会話の回数や時間や文字数を決めてしまっているようだった。

「ダイに」
彼は僕のことをダイ、と言った。
流暢な日本語だった。
マリナから聞いているのだろう。
もしかしたら、カオル・ヒビキヤからも聞いているのかも知れない。
出来の悪い弟子だから。
きっと呆れているのだろうな。
ネットなどではその音源を求めて彷徨っているファンがいるという幻の演奏会では、シャルル・ドゥ・アルディとカオル・ヒビキヤが共演している演目があるらしい。

パソコンのスピーカーから流れてくる声は、うっとりするくらい綺麗な声だった。

「ダイには小さい時に逢ったことがある。
・・・まだ、あの建物が古いときに。
居室の扉にはちゃちな鍵しかなくて、それでも彼女の家に入って彼女を待つ必要があったときに。
・・・君はまだ小さくて・・・そう、とても小さくて、大きな声で泣いていた。

建物の前の細い路地を行ったり来たりしてあやす大人の声と一緒に、君は生命に輝いていた。その声があまりにも大きくて、でも、その声を聞きながらマリナは君と一緒に時間を過ごしていたのだろうと思って・・・ただひとり、君が母の胸に抱かれて、泣き止んでは眠り、そしてまた泣き出す声を聞いていた」

そして次に、その様を見て、自分も誰かを・・・幼子を抱いたらどう対応すれば良いのか知った、と言っていた。

・・・誰のことを言っているのかは、わからなかったけれども。

彼は僕を通して、彼の経験とし、そして彼が経験するときに僕を思い出したのだと言った。

■嫩葉04

いつしか、シャルル・ドウ・アルディとの奇妙なやり取りが僕の日常になっていった。

人が聞けば、大変に珍しい体験であると言うだろう。

でも僕にとってはそれが「普通」だった。

生まれてからいつも一緒に居たマリナ・イケダには来訪者が多く彼女は・・・常にひとつところにじっとしてられない人物だったので、僕は小さい時から彼女の家の管理を任されていた。

シャルルが会話の出来る程度に成長した僕と初めて会った時。

それは、雪が降りそうなどんよりした日のことだったけれども。

「小さいナイト」と僕のことを揶揄した。

でも、僕は確かに、小さい時からマリナが戻ってくる場所を守ってやらなければならないのだ、という意識が強かったように思う。

それをシャルルが見越して僕のことをナイトと言った。

それは「騎士」という意味であったけれども、決して背中を向けて駒を置くことをしないルールのチェスの「ナイト」の意味もあつたように思う。

彼はチェスの達人だった。

・・・だから。

彼女が僕の知らない面をたくさん持っていて・・・雪の日にマリナがシャボン玉を空に飛ばしている理由を知った時や、初めて彼女の口から聞く「シャルル」という名前に酷くびっくりしたものだ。

彼女は自分の知人のことをあまり口にしない。

来訪者が多いが、彼らの氏素性についてはほとんど語らなかつた。

誰かが来るのを待っているかのように決して転居を考えようとしなくせに、彼女は・・・いつも誰かを待っているように思った。

それは、シャルルが僕の目の前に現れるより前に、よく彼女の部屋に訪れていた癖の強い黒髪の

あの人のことを思い出しているからなのだろうか、と思ったが、結局随分と長い間、その人のことについては聞くことはしないままになってしまっていた。

その時の僕は余りにも幼くて、記憶が断片的でしかなかった。

・・・どこまで僕のことをシャルルが知っているのか不明であったけれども、僕を無視していれば良いのに、彼はいつも僕にちょっかいを出す。

そんな余裕も時間もないはずなのに。

あるとき、彼がカオル・ヒビキヤに預けものをした。

それを受け取った時。

僕は唸った。

赤茶色の、上等な革のケースに入った中身について・・・推測できたから。

僕に・・・彼は大変に高価な楽器を貸与してくれたのだ。

まだ、音楽活動を初めてそれほど年数が経っていない僕に。

僕は受け取れないと言った。

その価値を知っていたから。

どんなに高名な奏者であっても、それを目にするにはほとんどないと言われているくらいの名器だった。

それなのに。

カオル・ヒビキヤは僕に微笑んで、受け取れないと首を振るばかりの僕に、そのケースを押し戻した。

「あたしはメッセンジャーじゃないからね。あんたとシャルルのやり取りに付き合うつもりはない」

そうして彼女は笑った。

とても美しい微笑みで、彼女は時々・・・そうして少し寂しそうに笑う。

なぜ僕を見て、そういう微笑みをするのかわからないが、シャルルもカオルもマリナも、僕に対して懐かしそうな・・・それでいて切なさそうな瞳をすることがあった。

「楽器は使われてこそ息を吹き返す生き物だ。

だからアルディ家の陳列ケースに並んでいるより良いと思って、判断したことなのだから有り難く受け取れ」

僕は、それは無理だと言った。受け取れないと繰り返し言った。

人には分相応というものがあると思う。

僕には・・・梅華のように、大変貴重な楽器を受け入れてさらに努力しようという精神力は持ち合わせていない。

しかしカオル・ヒビキヤは首を振った。

「ダイ。

こう考えろ。

・・・おまえにくれてやるのではない。

貸与されたと思え。

だから、受け取れ。

・・・おまえが使うのならそれで良いと、本当の持ち主が願ったのだから。

・・・でも、受け取ったのなら。

おまえはその楽器に相応しい演奏と技術と功績を背負わなければならない」

そこで僕はカオル・ヒビキヤに尋ねてみることにした。

なぜ、彼が僕にそこまで関わろうとするのか。

すると。

彼女は、とても綺麗な瞳をちょっとだけ細めて僕を見た。

眩しいものを見るかのように。それでいて・・・とても嬉しそうであり、そして少し哀しそうだった。

「それを見つけて、ダイから彼に直接回答してやるのが、シャルルへの最高の報酬だと思うがね」

彼女はそれっきり・・・その話を一方的に打ち切った。

僕がその楽器を手にしなれば、マリナに怒られる、とカオルが肩を竦めるので、ようやくそれを「ほんのちょっと預かる」つもりで受け取ったのが、最初だった。

しかし、一度手にしたそれは僕のために創られたと言われたら信用してしまうくらい、大変に僕の手の中に馴染んで・・・そして僕はそこから一段も二段も飛び越して、駆け足で音楽の階段を上っていくことになった。

けれども、シャルルへの礼に毎年バースデーにカードやメールを送ったが、彼はそれには一度も返信することはなかった。

そして、カオルは・・・僕の質問にはいつも唇の端を曲げて、面白そうに微笑むだけで決して堪えてくれはしなかった。

だから、僕は・・・この楽器を手放す時が。

この音の路からはずれて、もっと違う人生を歩むときが来た時に。

シャルル・ドウ・アルディに何かしらのこたえを述べる準備が整うのだと確信した。

だから、カオル・ヒビキヤは少し哀しそうな顔をしたのだと……

その路と決別するしかない、と思った時に。
理解した。

いつか、僕が……この路を進むことはなく、もっと別の人生を進んでいくのだろう、と彼女は予感していたのだ。
あっさりとした慰留であったことも領けた。

考えてみれば、年齢的にはこれからというジュニア世代であったのに、僕はその先には進まないと宣言した。
ほぼ無償で僕にすべてを教えてくれたカオルの顔に泥を塗ることになりはしないかと思った。
でも。

……それなのに。
カオルは、僕の願いに耳を傾けてくれた。

勝手なことを言って弟子入りした。
文字通り、カオル・ヒビキヤにとっては……僕は最初で最後の弟子になった。

僕は矮小で狡賢いこどもだった。
彼女のコネクションを使って無理も言った。
それなのに、勝手に離別しようとした僕に、彼女は良いよ、と言った。
シャルルに……報告しなさいと言っただけだった。

「他人のために路を決めてはいけない」

この言葉を、カオルもマリナも僕に繰り返し言った。
だから僕はごめんなさいと謝罪しなかった。
そのかわりに、ありがとう、と言った。

人に謝るときには、その言葉が……「ありがとう」と言い換えることはできないかと考えると、マリナはいつも言っていた。
だから、僕は、心を込めて、言った。

そして、シャルルに礼を言うために……僕は丁寧に楽器を調整し、磨き、そしてすっかり変色

してしまった革のケースに専用の保護クリームを塗った。

僕の音色はリードの加工からくるところによるものが大きいと言われている。

確かに独特の製法で僕にぴったり合うように調整されたものだった。

しかし材料を用意してくれたのは、いるもシャルル・ドウ・アルディだった。

そして、溜息が出るくらい高価な楽器を貸与してくれたのも、彼だった。

WEBメッセージで僕の様子をいつも観察していた。

そして、マリナの雑事を処理している駄賃だ、と言ってこの楽器を貸与した。

まったく釣り合わない値段だよ、と言おうと思ったが、そういうときには彼はいつも青灰色の瞳を曇らせた。

「オレに値段の話をするなよ。

・・・価値と値段が違うという論争から始めたいのであれば、もっと根源的なところから議論を始めよう」

高い知能指数を誇り、フランスの華と呼ばれている彼と僕が議論という盤上で互角に渡り合える状況ではなかった。

僕が唇を噛むと、彼はいつも薄い唇を持ち上げて微笑んだ。

・・・遠回しに、遠慮はするな、と言われていると思った。

だから僕はそういう時にはきまって、ありがとう、と言った。

■嫩葉05

確かに。

僕は、普通に暮らしていたのであれば。

生涯、関わり合いになることは決してないような人物たちと知り合うことが出来た。

それを声高に自慢するつもりもないし、これが僕の人生の付加価値なのだと思うこともなかった。

けれども。

彼らは・・・僕の「これまで」に加えて「それから」に大きく影響していったことは否めない事実だった。

カオルやマリナはどこまでも限りがないと思っていた路に分岐点を設けてくれた。

シャルルは僕の路に広がりとお行きを持たせてくれた。

それは、僕の選んだ路が「たった一つ」しかないと思わせるものではなく、もちろん、彼らが用

意した路でもなかった。

そして・・・彼らは、幾通りもの違う路が存在すると教えてくれた。

乗った一直線の路の上を、出口の見えそうで見えない薄い暁に向かって走るのではなく・・・何種類もある出口と終着駅と通過駅があるのだと教えてくれた。

僕の心は軽くなり、そして「それから」を決めた。

理路整然とした音の譜の謎や解釈を考えるように・・・僕は、多くの人に共感してもらえる理論という名前の音楽を奏でたいと思った。

理系クラスに進学したことも影響していた。

音楽関係者は、解釈の豊かな感性を求められることから文系出身者が多いように思われているが、実は理系出身者が多い。

それは演奏会場の解釈の問題が幾何学の分析であることや、音符や音差や・・・客観的な「差」というものを求められる業界だからなのだと思う。

・・・その年がやって来る前のことだった。

年末にはすでに僕の進路の結論と結果が出ていて、我が家には穏やかな冬が訪れていた。

すでに学校は休みに入り、僕は毎日、学校の音楽室に入り浸った。

防音の個室があり、僕の原点に戻っていた。

小学校の音楽室で、たくさんの音楽家達の肖像を印刷したポスター達が整然と並んでいる壁を眺めていたことを思い出す。

僕は音楽教師が好んで聞くと言うカオル・ヒビキヤのCDを授業中に流してもらったことから始まったことを思い出していた。

僕が音楽を始めようと思ったのはその時だった。

友人がその筋の話に詳しくあった。

少しでも彼の知っている世界を理解したくて・・・随分とCDもDVDも彼から借りて聞き込んだ。

そのうち、家でも大音量で聞くようになり、それを聞きつけたマリナ・イケダが、カオル・ヒビキヤは彼女の学生時代の同級生で、紹介してやることができると言った。

普段、彼女は友人の職業には口出ししない。

シャルル・ドゥ・アルディのことにしてもそうだった。彼女からは、彼とのいきさつや顛末や、どうして一緒に居るようになったのかと

自分が口出しされるのがいやだから、と彼女は言っていたけれども、もっと違う理由があったように思う。

だから僕は彼女の友人を紹介されるのは滅多にないことで・・・とても驚いた。

彼女曰く「カオルにはダイが必要だから」と言った。

どうして僕なのだろうか。

世の中には、ヴァイオリンの才能を持った人物が溢れており、僕がやりたいのはヴァイオリンではなく、オーボエが良いなと思っていた矢先だったから。

後で聞いたところによると、カオルは誰か人を教える立場に一度就いた方が良く、とシャルルに進められていたそう。

彼は医師でもあり、いろいろとカオルに助言をしているらしかったが、それらはすべてマリナを経由してのことで、彼らは、それまではほとんど滅多に逢うことはなかったのだと言う。

マリナはそれを僕に伝える時に、少し声を漏らして笑った。

「必要なのはシャルルの方なのかも知れないね」

そう言って微笑んだ。

そんなことを思い出しながら・・・僕はこれまでの6年間を思い出していた。

辛かったこともあったけれど、それは、今は良い経験だったと思えるようになった。

僕は、彼にこたえを出すときがやって来たのだと思った。

マリナは今は、ほとんどこちらには戻って来ない。

だから、マリナの部屋は僕のレッスン室に改築されていて、実際は僕の部屋になっているも同然だった。

時々戻って来ることがある。その時には僕はその部屋を明け渡す。

そして夜通し、彼女はその部屋の隅で、ひっそりと絵を描いたり・・・窓辺に座って、ぼんやりと外を眺めていたりする。

その時には、彼女はマリナ・イケダに戻るのだ。

僕はその時に本来の部屋に戻る。

そして、自分の部屋から見えるマリナの部屋の明かりを見て、どういうわけかほっとする。

彼女は、ここに戻ってくる度に、雑然とした自分の部屋と見違えるくらい綺麗になっている、と目を丸くして笑う。それでも懐かしいと言う。

僕は僕で、彼女が冬の雪空の下で、一生懸命シャボン玉を吹いていた姿を懐かしく思っていた。まだ厚底の眼鏡をかけていた時代も知っている。

家賃や光熱費を滞納して、居留守を使っていたことも。

交通費を浮かせようとして、徒歩で都内に行って、帰って来られなかった時のことも。

スケッチに行くのと言って、近所の散歩に行く後ろ姿も。

今は懐かしい思い出だ。

その部屋は、シャルル・ドウ・アルディが支払いを済ませて防音室に改装したこともあったが、

誰にも貸し出しはしなかった。

「ここはいつ、誰が訪ねてきても良いように」ということから、今でも、マリナ・イケダの名前で表札がかかっている。

音楽の路には進まないと決めた時に、その部屋はこれほど狭かったのだろうか、とふと気がついたことがあった。

それまで毎日そこで過ごしていたのに。

空気の入れ換えのために、窓を開けて、雪の降りそうな空を見上げたとき。

・・・僕は、自分自身が成長して目線が変わったのだということを実感した。

そして、あの狭い部屋の中で、マリナが何を思っていたのかをよく考えた。

マリナにとっては、この空間はお城のような場所だったに違いない。

若くして自活を始めて、彼女はいろいろなことを経験して大人になった。

今の僕の年齢の時には・・・彼女は長らく留守にしていたときがあった。

そして、ある冬の日、ひょっこり戻って来た。

「帰る場所があるって良いね」

彼女はそう言って、空を眺めることが、それ以来多くなったように思う。

まだ僕はその時に小さくて、彼女の言っている意味もわかっていなかったし、記憶もおぼろげである部分が多かったが。

その時に、帰りたくても帰れない人のことを思って、空を見上げていたのかもしれないと、今になって想像がついた。

マリナ。

僕はマリナとずっと一緒に育ってきたようなものだけれど。

僕はマリナのことをほとんど何も知らないよ。

でも、貴女は僕のことをよく知っているから。

だから、この部屋を僕に託してくれたのかな、と思うことにする。

■嫩葉06

．．．．．好意だけでは済まされない様々な厚遇について。
僕はいつかきちんとシャルルに礼を言わなければならないと思っていた。

彼は大変に多忙を極める人物で、アポイントを取っても、三ヶ月後、半年後、といった風になんまり待たされることで有名だった。

その彼が、時間に余裕がないのに、些事で来日する。
僕の演奏会であったり、夏の甲府での休暇だったり．．．
この時間を捻出するのに、一体どれだけの労力をかけているのだろうかと思う。

だから。
僕はある計画を実行することにした。

年が明けて、本格的に一日中自習時間になる期間にさしかかってきたとき。

僕は、これまで家の手伝いをするによって得た小遣いと、春の新しい備えのための祝いの総額に少しばかり親に借金をして足してもらった旅費で、フランスのパリに行くことにした。
卒業旅行にしては豪奢だった。

そしてこの先．．．僕はきっと「普通の」人生は歩まないのだろうと確信していた。
そのことについては、大変に申し訳ないと思った。
僕の家族は、自分の身内で僕のような変わり者が．．．そういう者が出ることに慣れていない、善良な人達だった。
若いうちは良いだろう。
でも、年齢を重ねるにつれて、彼らは戸惑うと思った。
大学を出て大学院に行き、そして就職して、配偶者と一緒になって孫の顔を見せに週末の時間をやりくりする。
そういう一生を贈ることが出来ないのではないのかなと思っていた。

だから、誰もが浮かれがちな状況ではあったけれども。
僕はただひたすら、一足先に訪れた春に浮かれていることに没頭することができなかった。

．．その点で言えば、僕はシャルルやカオルやマリナととても近い人間なのだと思う。

それが少し誇らしかったけれども、その一方で、家族には・・・大変に申し訳ないと思っていた。

息子が・・・弟が、世間一般の人生と違う路を進んだと思い知るときが、いつか来るだろう。たぶん、将来は・・・この国で暮らすこともないのかもしれない。

その時に。

これは僕の選択であり、誰かに・・・特に僕の家族には、僕がそう決めたことに対して理解して欲しいと勝手なことを思う一方で、彼らに、僕がそういう価値観を持つのはマリナに感化されたからだ、と欲しくなかった。

彼女が居たから。

そしてシャルル・ドウ・アルディが居たから。

僕は僕の路を決められたのだから。

そして、僕は、あの日の近くにパリを訪れることにした。

計算と綿密な調査の上のことだった。

未成年のひとり旅を心配する親には、カオル・ヒビキヤとパリで合流することになっていると言った。

これは本当のことだった。

彼女は心臓に持病があり、シャルルに定期的に診察してもらっている。

僕が合格の報告とともに、パリに行ってシャルルに会ってきたいと相談すると、彼女は少し考えてから・・・小さく笑って、不敵な微笑みをうかべた。

僕の偉大なる師は、大変に悪戯好きな人だった。

僕たちは、まるでこどもが親の目をくぐり抜けて廃墟を探検する算段を整えるかのように、夢中になって計画を練った。

ひとつ、彼女が僕の保護者に演奏旅行に連れて行くと言えば済むだけの話なのだけれども、それではダイのためにならない、と彼女は言って、僕が渡仏するための準備については何も口出しをしなかった。

僕も、彼女の財力に縋ってパリに渡ることも考えて居なかったし、治安の面も考えて、ツアーに申し込むことにした。

自由行動の時間が多く、それでいて手続きなどはしっかりしているところを選んだ。

その時期にパリのアルディ邸には、シャルルとマリナが滞在していることもきちんと確認していた。

僕は、彼の所有物の楽器を持っていたので、シャルルに関する情報を取得するにはなんら支障の

ない立場に居たことをその時に実感する。

僕が貸与されていた楽器は特殊な金属や樹脂を使っている部分があり、これは日本では代替品は手に入れることが難しかった。

けれども、定期的に・・・僕の様子を見はからっているかのように、いつもそれらは僕宛に送られてきていた。

シャルルが凄いと思うところは、そういうところだった。

一回限りの幸運や奇蹟を起こすことができる人はたくさん居る。

でも、それを継続させることができる人は大変に少ない。

つまり、僕に楽器を貸し与えてやろうと思いつき実行するのは簡単なことだけれど、その先にあるメンテナンスの問題について考えが及ぶのは、僕の知る大人の範囲では、シャルルぐらいしか思いつかなかった。

日本を発つ前に・・・最後の調整をする時に。

僕宛に、移動中の震動を防ぐ特殊ケースが送られて来た。

・・・カオルが手配してくれたのだろうか。いや、違っていた。

シャルルからだった。

そして、それには連絡先と、アルディ邸の受付時間と・・・何もかもを見透かしたようなシャルルの手配準備に僕は悔しくなってしまった。驚かそうと思ったのに。

それなのに、彼はいつも僕の先に行く。

それは知能指数が高いからだけではなく、シャルルが僕よりずっと・・・ずっと大人だからなのだと思った。

僕はパリに行った。

まだ卒業もしていないうちから旅行に行くというのは大変に贅沢なことだった。

姉も同行したいと言ったけれど、学校の試験があり、彼女は大変に不満を漏らしていた。

僕は苦笑して、家族にお土産を買ってくることを約束した。

あれこれ忘れ物はないのか、と僕のあまりの軽装に家族が世話を焼くので、とうとう、僕は防音室に籠もって支度を済ませてしまうことにした。

空港までの手続きも見送りも必要ないと断った。

ひとりで行かなければ、きっと泣きそうになるから。

道中は終始快適だった。

ツアーと言っても航空券を確保するための募集であるので、搭乗と降機で名前をチェックされる以外には、何も煩わしいことはなかった。

機内では退屈しのぎに音楽を聞こうとして、クラシックチャンネルを自然に選んでいた僕は指先を伸ばすのをやめて、そしてくすりと声を漏らして笑った。

身につけてしまっていた習慣というものは恐ろしいなと思った。

軽く目を瞑って・・・貸し出された毛布にくるまっていると、まるで、マリナの部屋で薄い毛布に身を包んで彼女のスケッチブックをこっそり眺めたことを思い出す。

彼女はまだ・・・日本のあの部屋ではシャルルの絵を描いていないのだろうか。

パリでは描けているのだろうか。

そして、僕は、彼女と一緒に過ごしてきた久しいのに、マリナのパリでの生活をまったく知らないことにも少しばかり臆していた。

だから日本の土産をマリナに持っていこうと思ったけれども、その予定は不採用にした。

不便があれば彼女は何か言ってくるだろう。

それに・・・僕とマリナは家族のような付き合いをしているが、彼女には家族がちゃんと居る。

シャルルは、今回のことを予測しているようだった。

僕は日本を発つ際に、メールを入れておいたのを彼が読んでくれたのだろうと思った。

ケースの礼を述べてあるだけだったけれど、必要ないものだとか、どうやって使うのかといったような内容は記載していなかった。

彼女にも渡仏を伝えていないし、シャルルはおそらく・・・マリナに何も言っていないのだろうと予測していた。

彼女はパリでの生活について、日本ではまったく話をしなかった。

逆に、日本で何をしているのか、パリではまったく話をしないのだろうか、と予想している。

そして僕はこの旅から帰ってきたら・・・肌身離さず持ち歩いていた、長年一緒に過ごしてきた楽器ケースが傍にない生活に入る。

パリについて、ホテルでチェックインを済ませる。

交通の便が良い場所に位置している、単身旅行者でも安心して泊まれるホテルだった。

でも荷物を置いて一息つくこともなく、僕はすぐに出発した。

大変に冷え込む冬で、もっと着込んで来れば良かったかな、と思ったくらい寒かった。

雪になるらしい、と誰かが言っていた。

僕は外に出ると、異国の街並みに歓声を上げるより前に・・・空を見上げた。

空気が乾燥しており、日本で感じる降雪の前の湿り気を帯びた冷たい風ではなかった。

どこをどう感じて雪になるのだろうか。でも、確かに、いつ雪が降ってもおかしくないくらいの空模様で、そして大変に寒かった。

シャルルが特殊ケースを寄越してくれなかったら、寒暖の差で、足部管がいたんでしまったかもしれない。

マリナは、この空を見て生活しているのだろうか。

そして僕は、アルディ邸に初めて足を踏み入れることになった。

彼が大変な資産家であり、由緒正しい家柄の人物でありながら、親日家としても有名で、日本とフランスを結ぶ重要な人物であるということは、認識していたけれども。

・・・いつも運転手付きの車で来ていたし、彼が日本で宿泊しているホテルに遊びに行ったこともある。

夏には甲府のダンジョウ家で幾日かを一緒に過ごす。

着ているものだって僕の知らないブランドの高そうなものばかりを身につけていた。

でも、それがシャルル・ドウ・アルディであると思っていたし、生活環境が違うからと言って彼と僕との間や、僕の家族の日々の生活が変化するわけでもなかった。彼は僕にとっては「ちょっと風変わりなガイジン」であった。

それなのに。

僕は啞然としてその建物を見つめていた。

パリの16区はそれほど広い区画ではないと聞いていた。

この広い土地は一体どういうことなのだろうか。

最新の設備に、制服を着た警備の人達。

・・・まるでお城だな、と思った。

シャルルのためだけに存在するような、場所であったけれども、とても寒かった。

内邸は居住空間であるとのことなので、これほど寒々と感じることはないのだろうけれども。

今は客棟は縮小されていて、人の出入りは多くないとカオルから聞いていた。

シャルルは仕事とプライベートを完全に切り分けているようだった。

それでも寒い冬の日だというのに、これほどの人達がフロアで手続きを済ませている。

・・・こんな場所に長い間ひとりで・・・シャルルは寂しくなかったのだろうか。

僕の年の頃では、すでに現在の総合研究所の前身である国立病理研究所の所長に就任していたという。そして彼の数奇な人生は、めまぐるしい流転と激流を終結させることもなく、シャルルをアルディ家の当主に今一度据え置いた。

・・・彼がシャルル・ドウ・アルディというフランスの要人であるということをあまり僕が考えないのは、彼がこれまでに起こった彼の経験を、あまり多くは話さないからなのだろうと思った。

僕は溜息をついた。

僕は彼のプライベートしか知らない。

仕事でよく日本に来ているようだったけれど、何のために何をしているのか知らなかった。

マリナもシャルルの事を多く話さない。

それなのに、僕は、彼と一緒に仕事をしたいという大それた夢を持ってしまった。

こんなに凄い人の周囲にいる人達は、僕の知らない世界の人達だった。

彼が効率よく仕事ができるように、各国から優秀な人材を集めていることだろう。

シャルル・ドウ・アルディは一人しか居ない。

それなのに、彼は様々な面で常人では達成できないことを次々に開発している。

彼は・・・一体どこに行き着きたいのだろうか。

■嫩葉07

・・・その特殊保護のケースの底には、アルディ家が独自に採番したと思われるシリアルナンバーが打刻されており、この番号と僕の氏名をアルディ家の入り口で伝えたと、その他大勢の者が面会やアポイントの申し込みを求めて列を成している外客棟で順番を待つことなく、アルディ邸の本邸に入れる仕組みになっていた。

まるで僕が来訪することを待っていたかのような、そんなごく自然の手配だったので、大変に目を丸くした。

別世界の出来事のようにであった。

十数時間前までは、僕はフランス語が話せないのに会話が通じるかどうか、どの交通手段を使ったらアルディ家まで迷わずたどり着くことが出来るだろうかなど・・・つまらないことで頭を悩ませていたというのに。

唾然として大きな建物を見上げて、高い天井を見回して首を捻りそうになって・・・それでも僕は彼が大変に・・・大変に住まう世界が違う人間なのだということを知った。

これだけの人がいるのに。そして、空調は完備されているというのに。

・・・僕は身体が冷えているのを感じた。

そうだ。彼はこれだけの人たちに頼られている。けれども。彼でなくてはならないことなのだろうか。

彼が処理するのが一番早くて的確だから。

彼なら何とかしてくれるから。

神様への願い事めいたことを面謁申請書に記入している人がほとんどなのではなかろうか。

・・・何となく、彼が孤独であることを感じていたけれども。

アルディ家の当主、とか。フランスの華、とか。

そう呼ばれているシャルル自身を、本当に必要としている人はいったいどれだけいるのだろうかと思った。

だからちょっと哀しくなった。

彼が・・・日本で見せる姿というのは、ここでは見る事が出来ないのだろうと思った。

そんな場所に足を踏み入れてしまって・・・僕は、本当は何をしたかったのだろうかと考え始めていた。

マリナがどうして・・・パリに遊びに行こうと誘うことはあっても、アルディ邸において、と言わないのか理由が少しだけわかったような気がした。

カオルがどうして・・・僕と往路から随行しないのかがわかった。彼女たちは知っているからだ。アルディ家の当主の仕事をしているときのシャルルというのは、日本で僕と会話をしている彼とは違う面を持っているのだということに。

僕は日本語と僅かな英語しか使えなかったけれど、応対してくれた係の人は、とても丁寧に僕を扱ってくれた。そして僕は外客棟を通り越して、本邸に入っていく時には、幾人もの係の人が交替して僕を先導した。彼らが入ることの出来る場所というのは、厳格に管理されているらしい。

そんな中を、マリナはいつもひとりでふらりと出て行くのか。

僕は呆れてしまっていた。

・・・彼女の豪胆さにはいつも頭が痛いものだと思っていたけれども、これほど嚴重な保守警備の中で暮らしているのだとは知らなかった。

おそらく、シャルルの取り計らいがなければ、僕は何時間も・・・いや、ひよっとすると何日も待たされてしまったのだろうと思った。

僕はとても幸運で、今日は当主が在邸している、と聞いた。

日中にはほとんど姿を見せないアルディ家の当主は、今日は昼過ぎから戻っている、と言っていた。

朝が苦手なシャルルが、昼までに用事を済ませて戻ってくるということではできないと思って、僕は苦笑いをした。

僕にもシャルルにも等しい時間しか配分されていない、と良く思うけれども。

シャルルは、時間がないときには何をするのかということ、最初に睡眠を削る。

彼は脳を酷使するので、睡眠時間を多く取らなければ負荷が大きくなってしまう。

しかし休めることを放棄する。

そして、食事時間などの生活時間を極限まで削る。

マリナと違ってきれい好きだから、シャワーぐらいは入るだろうが。

彼が来日するときはずっと決まって不機嫌そうだった。

時間を捻出するために、寝不足と過労が続くからだ。

それほど忙しいのなら来なければ良いのに、と僕が口を尖らせて不満を言った時にだけ、マリナに窘められた。

今になって、大きくなってから理解した。

彼がどれほど・・・日本で過ごす時間を大事にしているのか、必要としているのかということ。

かなり歩いたような気もしていたし、それほど遠い道のりではなかったのかもしれない。

初めて訪れる屋敷の荘厳さにただただ驚いていたが、いきなり視界が開けて・・・僕は応接室に通されたのだと知った。

そこから先は、自由に過ごすようにと言われて僕は面食らった。日本語が通じるからだ。

驚いた僕に、係の人は当然ですと言って微笑んだ。シャルルがある時期から日本語でしか話をしなくなってしまったので、日本語を話せる者を採用するか、語学を習得してもなお雇用を継続したい者だけが残った結果が現在だ、と言った。呆れてしまった。シャルルの一言で、この邸はすべての者が動くのだ。

おそらく・・・彼が今でもそれを徹底しているのであれば、それは、マリナがここに滞在しているからという理由なのだろう。

彼女はフランス語が得意ではない。いや、まったくわからないに近い。

彼女のためにすべてを変えたのだ。

でも彼は自分がアルディ家を捨てられないから。

シャルルに不可能はない。

やろうと思ってできないことはほとんどないだろう。

だから日本に居る時とあまり大差ないように、彼は言語を整備した。

もっと目に見えない様々なことも整えてあるのだろうと思った。

彼ならやるだろう。先まで見える人だから。

僕に貸与した楽器の消耗や摩耗を計算してメンテナンスの予定を立てることができるくらいなのだから。

それなのに。

・・・彼はとても不器用な人だから

マリナが僕を窘めたときに、そう言った言葉を思い出した。
シャルルが不器用なんてことはあり得ないだろ、と僕は笑ったけれど。
マリナはそれを聞いて、そうなのだけれどもね、と哀しそうに微笑んだ。

ごめんよ、マリナ。

僕は心の中でそう呟いた。
彼女がシャルルと一緒に居るのに。
それでもシャルルはいつも何かに憂えている。
手放しの幸せというものを信頼していないようだった。

■嫩葉08

どこまでが本邸と呼ばれているところなのかは定かではなかった。
とにかく何もかも規模が違い、僕の住んでいるアパートや地区ではどうてい考えられない空間だった。
応接間に通されて、僕はそこに座ることすら出来なかった。
しばらく待つように言われているが、邸内は自由にして良いと言われて、庭を少し散歩してくると言った。
散歩どころではない。隅々まで歩いたら、大変な距離になるだろうと思われた。
そして、どこからどこまでが彼の発言が影響する範囲・・・つまり、アルディ邸の占有地なのだろうかと考えるだけで、背筋が寒くなる。
ここに住まうということがどれほどのことなのか、マリナだってわからないわけではない。

それなのに。
それなのに・・・

僕は暖房でぼんやりした頭を切り換えようと思った。
硝子扉を開けて内庭を通り、白い小石を敷き詰めた小道を歩いて行くと、やがて大きな庭に出た。
寒い季節だというのに、立派な彫像を備えた噴水が勢いよく水を放出していた。
手入れの行き届いた庭からは、冬だというのに、薔薇の香りがした。

僕は荷物は持ったままで・・・そして空を見上げる。
僕の知らないフランスの空だ。
雪が降りそうで降らない。
そんな天気であつたけれども。

・・・なんだか視界がぼやけてきそうだった。
姉を連れて来なくて良かったと思った。きっと卒倒するだろう。
いや、それよりも。
もし姉と一緒にいたら。
・・・僕のこの表情を見られるのが辛かった。

僕の声は掠れていた。
深い溜息を漏らす。
頬に冷たい空気があたった。
寒いと言うより痛みを感じるような冷たさだった。空気が冷え切っているからだ。
風寒を浴びて、僕は肩を竦めた。

僕は誰に祈りを捧げるでもないのに、ぼつりと声を漏らして言った。
この家で彼が安らげるのであればそれで良い。でも。
マリナやカオルの知らない・・・一日のうちの大半以上の時間の「職務従事中のシャルル・ドウ・アルディ」である時間でさえも、彼が穏やかに居られるように。

「・・・シャルルを笑わせてやってくれ」
僕は薔薇の香りのする冷たい風に声を乗せて祈った。

すると。
その声に呼応するかのように、空で何かがきらりと光ったことに気がついた。
雪が降りそうな空で陽光は遮られているというのに。
僕は目を細めた。
今、僕が立っている場所から遠く離れた・・・噴水も丘も越えた本邸のひとときわ大きなバルコニーから・・・寒空に乗って、きらきらと輝く球体が見えて僕は声を漏らした。

「・・・シャボン玉だ！」

そこにはマリナが居るのだろうと確信した。
重厚な手摺りが邪魔をして、ここからでは、階上のバルコニーの人物の姿は見えなかった。

彼女は、ここでも鎮魂を願っているのだろうか。
シャルルの誕生日に彼女が寒い冬の空の下で何をしていたのか、僕は知っている。
家族に恵まれないシャルルのために。シャルルの両親やすでに居ない人達のために。
彼女なりの方法で、祈祷している様を見て・・・
まだ、続けていたのか。

開扉の音がして、近くの庭の硝子扉が開き、邸内に外気を取り込む。
僕はそちらの方を向いて、顔を持ち上げた。

彼は周囲の者に、ひとことふたこと何かを指示し、そのうちのひとつの言葉によって人払いをした上で・・・ゆっくりとこちらに歩いてきた。

彼に追従していた者達が彼の指示によって離れていくが、遠くからでもその人物が誰であるか、すぐにわかった。

白金の髪は、陽光の射さないこんな曇天でもなお、輝いて眩しい。

整った顔に、鍛えられた鋼のような体躯、高い腰位置から伸ばされる長い脚に、広い肩幅。

手には何も持っていなかった。

歩き方も揺るぎなく、慣れた道のりを歩いて来る彼は、この家の主だった。

両手をあけたままでごく自然に歩ける人物というのは、シャルルのような環境で生きている人達だけだろう。

僕は持っていたケースを軽く持ち直した。僕のすべてが詰まったそれは、マリナの持ち歩いている鞆よりずっと小さかったけれども、それでも僕のこれまでがぎっしりと詰まっている。

人が背負い込んだものの重さをふと感じるときには・・・きっと、自分の詰め込んだものについて、再認識するときなのだろうと思った。

彼は両手に何も持っていないのに。それでも、彼が背負っているものはなんて大きいのだろうと思った。

彼はああして・・・確か、ああして、彼女を迎えに来た日の事を思い出していた。

着ているものも違うし、その頃と少し髪型も違っているし、何より年月が経過しているのに。

シャルルは、あの頃のままでの若々しい足取りで僕に近寄った。

「・・・ダイ」

「やあ、シャルル」

良く来てくれたね、とか。ひとりで来たのか、とか。

彼はそういったことを一切尋ねなかった。僕も同じようにした。

シャルルにとっては想定済みのことであり、そこに至る過程は彼には興味の無いことであつたようだ。

「・・・借りていたものを返しに来た」

僕がそう言うと、彼は青灰色の瞳をちらりと、僕の提げて居たケースに遣って、次にふわりと端

正な顔を綻ばせて、綺麗な笑顔を作った。

どうして、彼が人払いをしたのかわかっていた。

ここでのシャルル・ドウ・アルディを知って僕が驚くといけないと判断したからだ。

だから僕の知らない人を傍に寄せるのを避けて、彼はひとりでこちらに歩いてきたのだと知る。

「そうか」

シャルルは短くそう答えただけだった。

「それから、これまで過分な好意を当然のように享受していたけれども、いつも有り難いと思っていたよ。シャルルは・・・僕がシャルルに対して何か負い目を感じるのだと思って、わざと距離を置いていたことも知ってた。でもちゃんと言うことは出来なかった」

僕はそこで言葉を切った。

ごめんなさい、と謝罪するより、もっと違う言葉があるでしょう？

マリナにいつもそう言われていたことを思いだした。

シャボン玉の舞うアルディ邸の庭先で・・・僕は、シャルルにそつと言った。

下を向いてはいけないと思った。

顔を上げて・・・成長して、シャルルとあまり身長差がなくなった僕はシャルルの青灰色の綺麗な瞳をじっと見つめてから、やがてひとつひとつの音に心を込めて言った。

「シャルル・・・ありがとう」

■嫩葉09

彼は薄い唇の端を持ち上げて、流暢な日本語で言った。

「我が家の保管品のうち、使用しないと価値が低減するものについて、効率よく保守しただけだ」

楽器は使っても劣化するが、使わないとさらに劣化する。

手入れをし、本来の目的である音を出すということを怠らさずに行ってこそ、最高の状態に保つことが出来る。

毎日、一日のうちの大半をこの楽器に触れている僕であれば、きっと、ここで眠らせておくよりはましな状態になるだろう、と彼が遠回しに言ったのだ。

だから、礼を言うには及ばない、と。

シャルル・ドウ・アルディは本当に不器用な人だ。
マリナの言うとおりであった。

聞いているとは思っていたけれど、僕は自分の口から彼に今後のことを報告した。

「・・・春から、僕は日本ではまだ数少ない分野の学部に進むことにした。
大学院にも行くことになると思う。
だから、まだ、ずっと先のことであるけれども・・・」

僕の長い前置きにシャルルは冷笑した。
彼はいつも結論がすぐにわかってしまうので、長い話をするのを好まない。

「就職の相談は受けかねるな。縁故採用はしていないのでね。
・・・フランス語で日常会話以上の専門用語まで話せるようになっていることと、論文をいくつか提出して学会発表をしていることが最低条件だ。
・・・研究所に欠員があれば募集がかかるだろう。
いくら所長でも・・・独断と偏見で入所させることはできないからな」

「日本の制度では、いろんなことを飛び越えてシャルルに追いつくことができない。
でも、僕はきっと追いつくから」
シャルルの持っているいくつもの称号と並ぶことは出来ないかもしれない。
でも、彼の傍で・・・

楽器と同じように。
一日のうちの大半を彼と過ごし、彼の仕事の面もそうでない部分もすべて・・・すべて知る人物になりたかった。
マリナは彼の就業中の顔を知らない。僕は彼が日本に居る時しか知らなかった。
でも。
彼の孤独を引き受ける人がマリナだとしたら。
彼の全部を見て、彼の業務を引き受ける人のひとりに僕はなりたいたと思った。
僕はシャルルよりずっと年下で、マリナとシャルルの関係を知っている。
そういう立場の人間が、仕事の面でパートナーになれるかということ、それは難しかった。シャルルの従妹が秘書をしているそうだけれども、彼女は僕とシャルルとの関係に立ち入らなかった。
彼女のことについては、必要最小限の情報しか知らない。

でも。

僕の叫びにシャルルは耳を傾けた。

あの雪の日に。

彼はマリナを泣かせるなど言った僕の言葉を無視すれば良いのに、振り返って微笑んだ。

そしてマリナは彼の誕生日にはああしてシャボン玉を浮かせる。

彼を想って。

彼だけを想って。

それなら。

僕は、一体どうすれば良いのだろう。

カオルが言っていた、僕のこたえとは・・・どうすれば良いのだろう。

ダイはシャルルの希望がいっぱい詰まっている

マリナがそう言った。

カオルもそう言っていた。

意味がわからなかった。

彼に叶えられない希望があるのだろうか。

彼は何でもできるのに。

何でも持っているのに。

僕の一番欲しいものを持っているのに。

僕が出来ないことをすることができるのに。

・・・マリナを笑わせることが出来るのに。

目の前に、寒空の下なのに、僕の言葉を待っているシャルル・ドウ・アルディに向かって、一番適切な言葉が思い浮かばなかった。

彼が僕を見守ってくれたから、今の僕がある。

今度は、シャルルを見守る役割を僕にもちよっとだけわけてもらえないかと申し出たら、彼は否定しなかった。

だから、僕はシャルルに対して回答するこたえを発する準備が整っているのだと思った。解が出

ているのに。

僕は、シャルルに回答することができていない。

どうして、彼が僕に対してそれほどまでに・・・哀しそうな顔をしたり、関わろうとしたりするのか。

どうして、日本に居る時のマリナのことを託そうとするのか。

それなのに、どうして・・・僕の目の前で彼女にキスをするのか。

シャルルは、こたえを待っている。

僕の中に詰まっているものを解放するために。

彼が僕の中に詰め込んでしまったと思っている何かについて、彼が憂えている。

僕は・・・さっきよりもっと小さな声で言った。

でもはっきりと言った。

僕に遺された音は、もう、これしか残っていなかった。

黙ったままの彼の顔を見つめながら、言った。

間違っているでもいい。

この言葉を彼が嘲笑しても良い。

でも。

今、輪郭を淡くして消え入りそうなほど、美しい男性を目の前にして・・・

僕は僕とシャルルのこれまでをこの一言に託すことにした。

「シャルル・・・大丈夫？」

その時。

シャルルが綺麗な唇を僅かに開いて・・・そして青灰色の瞳を大きく見開いた。

息を呑む彼の呼気が、次にゆっくりと吐き出されて・・・白い衣を纏って空に浮かぶ。

まるで、マリナの浮かべている球体のように、それはすぐに淡くなり、大気に溶けていった。

これほど寒いことに加えて、風が少し出ているので、シャボン玉は長くその姿を留めておくことが出来ない。

それでも彼女は無数の魂を空に流す。

シャルルは僕の来邸を予定して、朝から僕を待っていた。

昼からではない。朝から。正確には前日の晩から。

・・・彼は寝ないで僕を待っていたのだ。

「ダイは・・・ダイは彼に良く似ているよ」

シャルルが僕の顔をじっと見つめながら、ようやく、それだけ言った。

目が潤んでいて・・・彼は今にも泣き出しそうな顔をしていた。

■嫩葉10

そこで僕はようやくわかったのだ。

カオルやマリナやシャルルが・・・僕を通して誰を見ていたのか。何を見ていたのか。

あの癖の強い黒髪の人への想いを、彼らは秘めたるものにして、それを僕に詰めて託した。

僕の年齢は、彼とシャルルとマリナとカオルが過ごしたあの時代に到達していた。

決して彼らが僕に詳しく話をしないあの時代。

カオル・ヒビキヤが病氣療養として一時期再開していた音楽活動を途中で中断してしまっていた時代。

彼は僕を見ると思い出すのだろうか。

僕に願いを込めているのだろうか。

あの時代を後悔していないと思うけれど・・・もっと違った路もあったのかもしれないと僕を見て思うのだろうか。

シャルルが、どうして僕に関わろうとしているのか少しだけ理解した。

・・・僕からマリナを取り上げたとシャルルが思っているから。

あの人から、マリナを取り上げたとシャルルが思っているから。

だから、僕に少し哀しそうな瞳を向けていたのだと、気がついた。

それまでは幼すぎて気がつかなかった。

みんなが・・・各々にどうしても諦めきれない、秘めたる想いを持っていて、大人になっても、それを諦めきれないのだということに。

でも僕は同じくらいの年齢になったから。

でも僕は同じ気持ちを持つようになったから。

そして僕が言った言葉はシャルルを激しく動揺させた。

彼が僕に込めた願いがとても勝手なものなのだとシャルルは思っているように感じた。

憧憬とか遠い日の記憶とか。

回顧という表現では足りない様々な思いを・・・

「ダイは・・・彼に良く似ている。顔容ではなく、自分の気持ちより相手を優先させて尋ねるところが、特に」

彼は長い話を好まないのに、そっと吐き出すように一気に語った。
白い頬を紅潮させていた。

「君はオレにないものを持っている。そしてとても健全だ。
・・・オレが君の年齢の時には決してそうではなかった。ダイになりたいとは思わない。
けれども、ダイと一緒に居ると・・・ほんの少しだけ、オレは赦されたのかな、と思う」
彼は、最後の言葉は、全部補足しなかった。
シャルルが僕とマリナと一緒に過ごすことで・・・どんなときも彼を理解し信頼していた人を思い出しているのだとわかった。

あの人が居て。
マリナが居て。
シャルルが居て・・・カオルが居た時代なのだろうと思った。

僕があの人への代わりじゃないことはわかっている。
マリナの恋の相手でもあったあの人への代わりはできない。
マリナはそういう視線で僕を見ない。

・・・代わりでも良かったのに。

マリナとカオルから奪ってしまったあの人との時間を、再現しているのだと思った。
僕は代わりじゃない。あの人への代わりには、誰もなれない。
でも、穏やかで、平凡で、ささやかで・・・それでも相手の健康と幸せを願い、何かしてやりたいと強く思う・・・そんな気持ちをもう一度持ちたかったのだと思った。

「ダイはオレ達の・・・オレの若葉なんだよ」
彼がぼつりとそう言った。
視線をはずして、彼は宙に遠く舞うシャボン玉を見つめて、それから、マリナは飽きないと言って笑った。
でも、少し嬉しそうだった。

こんな寒い日の空の下なのに。
シャルルは若芽の話をした。

僕が若葉だという。

何もかもが凍て付くような寒い空気の中で、彼の唇だけが赤くて・・・生命の息吹を連想させた。

少し肩を竦めて空を見上げる白金の髪の方は、いつもの・・・僕の知るシャルル・ドウ・アルディだった。

広大な敷地と立派な屋敷の持ち主は、自分の睡眠時間を削ってまで日本にやって来る。

いつもの・・・不機嫌そうなシャルルの顔を見て、どうして彼はそんなに不機嫌なのだろうと思っていたことを思い出した。

そして、彼は滅多なことがない限り、彼女の部屋に入らなかった。

どうしてなのか。

あの人と過ごしたマリナがその部屋に拘り続けるからだと思っていた。

でもそれは少し違うのだと知る。

僕が居るから。

僕が小さい時にはマリナの部屋に入り浸っていたことを彼は知っていたから。

自分が尋ねていくことで、僕が遠慮するからと思ったのだ。

マリナがシャルル以外の人と過ごした時間を、奪ってはいけないと思っていたから。

・・・彼はあの部屋に出資をして、防音装置を備えた僕の空間を作りつつ、マリナがいつ訪れても良いようにしたのだとわかった。

大人なのか子どもなのか、わからないよ・・・

かつて、マリナに感じた言葉を反芻させた。

シャルルは不器用だ。どうして、こんなに不器用なんだ。

何でもできるのに。何でも持っているのに。

マリナも居るのに。

僕は唇をぎゅっと強く噛んだ。寒さで、唇の感覚がよくわからない。

けれども、唇を噛みしめて頬を持ち上げて、眉をしかめなければ・・・泣いてしまいそうだった。姉も家族も連れてきていないのに。泣いてしまいそうになった。

良く通る魅惑的な声で、彼は歌うように囁くように言った。

「芽吹くのを楽しみにしている。成長するのを待ち遠しいと思う。

・・・家族でもないのに。

肉親でもないのに。

君が息災で居ることが何より嬉しい。

マリナと誰よりも長い時間を過ごした君の泣き顔がちらつくと・・・彼女を幸せにしてやりたい

と強く思う」

■嫩葉11

「シャルルが気兼ねしている限りは・・・まだまだ彼女はああやってシャルルの誕生日にシャボン玉をこっそり吹かすのをやめはしないよ」

僕は静かにそう言った。

顎を僅かに上げてアルディ邸から舞い上がる稚拙な虹色の球体を眺める。

休むことなくそれはアルディ邸のバルコニーから空に高く・・・昇って消えて行った。

僕とあの人はあまり似ていない。

けれどもシャルルが似ていると言うのは・・・もっと違うところなのだろうと思った。

誰かを想って自分のことより他者を優先させる人なのだろうな、と想像する。

そして、誰よりも・・・シャルルのことを理解していたのだろう。

もうすぐ・・・間もなく彼はひとつ年齢を重ねる。

その都度、彼は様々なことを想うのだろう。

「本当に、本当の意味で、マリナを幸せにしてやってくれよ。

・・・あいつは笑っている顔が一番だ」

僕がそう言うと、彼は微笑んだ。うっとりするくらい綺麗な微笑みだった。

「そうだな」

けれども、彼はきっと・・・ずっとそのことを考え続けるのだと思った。

もう、大人なのだから。

自分の幸せのことだけを考えるわけにはいかないのかも知れない。

でも、もう大人なのだから。

自分とマリナの幸せのことだけを、そろそろ考えても良いのではないだろうか。

「随分と素直だね、シャルル」

彼はちょっと瞳を見開いた。

そして白金の前髪の下から、青灰色の物憂げな瞳で僕を軽く睨んだ。

「睡眠不足と疲労が影響しているのかな」

曖昧な表現は避ける傾向にあるシャルル・ドウ・アルディが、そう言ったので、僕は苦笑いをした。

僕はケースを差し出した。

「これは返却する。でも、手入れする人が必要だから、時々・・・誰かの手入れが必要だ」

「それならダイが持っている。これまでと同じように」

僕は首を横に振った。

「いつか、パリで暮らすようになったらそうする。それまでは・・・シャルルが管理して」

それを聞くと、彼は不敵に笑った。

彼は僕に、随分と壮大な夢物語だね、と言った。

僕は笑った。

「マリナにフランス語を教える人が必要だ。・・・シャルル、いつまで彼女を甘やかすんだよ」

「甘やかしているつもりはない」

シャルルが否定したが僕は言って遣った。彼に意見できる人なんて、そう多くはない。

特に、この邸内では。

「それに、睡眠不足だとか疲労しているとか言って・・・どうせ、ひとりで何でも解決しようとしているからだろ。

息抜きに日本に来るのは構わないが。

仏頂面のシャルルばかり見ている僕としては、ここで口うるさく言って、シャルルを少しは休息させろと言ってそれが通るくらいの権限を持って、シャルルに小言を言う役割を引き受けた方が精神衛生上良いというものだよ」

「煩い小姑だな」

「そうだよ」

僕はあっさりと認めた。

そしてたっぴりの皮肉を込めて言ってやる。

僕がどれだけ、マリナに口うるさくあれこれ言ってきたのか、シャルルは知らないんだ。

そんな言葉を言われても、まったく動じなかった。讃辞にさえ聞こえる。

「楽器の礼にしては、高くついたよ。

・・・なにせ、生涯、シャルルの友達でいてやるのだから。

僕はこれからずっと・・・シャルルに『大丈夫か』と尋ねて過ごすのだから」

僕はマリナをかけがえのない存在だと思っているけれど。

それと同じくらい。

シャルルのことも大事なんだ。

でも、そう言ったら彼は僕を遠ざけるから。
だから敢えて言わなかった。

先ほど彼が言った言葉は・・・マリナには聞かせることはないだろう。
男同士の秘密だ。

これは秘めたる想いとして、誰に告げることもない。
シャルルのあの想いは、僕だけが知っていれば良い。
マリナはとっくに気がついているかも知れないけれど。

「だから僕を不採用にしたら、とても後悔することになるよ」
僕はそう言って笑った。もちろん、これから先、余程努力しないと、彼には近付けないだろう。
「・・・でも、やりがいのある仕事だと思うよ。僕は、シャルルと一緒にあの国についているんなことを考えていきたいと思うから」
今年か来年の夏休みには、あの国に行ってみようと思った。
まだまだパリの街中や日本と同じ平穏を求めることは出来ないけれど。
シャルルが今でも気にかけている懸案事項を解決できたのなら。それは僕の夢でもある。

シャルルは僕を若葉だと言った。嫩葉という言葉があって・・・それは若葉を意味する。
シャルルにとって、僕は嫩葉であるのなら。
僕の夢は僕の嫩葉だった。
たくさんの夢を持っている。

いつか彼の片腕となって・・・彼の素晴らしい功績を一番近いところで見たかった。
そして・・・マリナとシャルルが過ごすこの邸で静かに・・・カオルやシャルルの家族を交えてオーボエを演奏する。指が鈍らないようにするのは大変だ、と少しばかり文句を言いながら。

マリナが僕のことを希望の塊だと言ったけれど。
僕は、マリナやシャルルこそが夢の塊なのだと思う。

「あ」
僕は声を漏らした。
雪が・・・白い雪がひとひら、目の前に落ちてきたからだ。
そこで身体が冷え切っていることに気がついて、僕は身震いをした。
シャルルは黙ったまま・・・雪の中で舞うシャボン玉を見上げていた。

彼の憂いも、あの珠に混じって、空に還れば良いのに。
そう思った。

彼には、傍に居る人が必要だった。

だから僕はあの人と同じように彼の親友になれるとは限らないけれど。

せめて・・・彼の傍に居て彼の見つめるものを一緒に見たいと思う気持ちを、シャルルでさえ変更させることはできない。

「シャルル。楽器が冷える。中に入ろう」

僕がそう言って、彼の肩に手をあてた。

アルディ家の当主が失調でもしたら・・・僕はここに来た意味がなかった。

その時。シャルルが向き直って、僕の肩を抱いた。

ふわり、と薔薇の香りがした。

僕は面食らってしまって、しばし呆然としていたが、シャルルは一度だけ強く、僕を抱き締めた。

「・・・・・・・・ありがとう」

その言葉は、僕に言ったものなのか、あの人に言ったものなのか、わからなかったけれど。

彼の声は少し震えていた。

ごめんよ、と謝らずに。

彼はありがとう、と言った。

だからこれで良かったのだと思った。

・・・僕は楽器ケースを持っていない方の手の平で、彼の背中を撫でた。

「素直なシャルルも悪くないね」

すると彼は少し声を漏らして笑った。

「なるほど。ダイの前ではどうも・・・オレは自分を律することができないらしい」

「いつも不機嫌そうな顔しているだろ。あれのどこが自己を抑制しているのかわからないよ」

彼はちょっと嗤った。

「ダイはまだこどもだな」

おとなかこどもかわからない。

その言葉は、僕にも当てはまるようだ。

でも。

僕は知っている。

僕に微笑むマリナの顔を見て、シャルルはいつもちょっとイヤそうな顔をしていることも。僕だけが彼女の部屋に立ち入ることが、彼は相当気に入らないけれども、他の男が立ち入るのはもっと気に入らないと思っていることも。

だから表札はマリナの名前のままにしてあるのに、管理を僕に任せて、僕を常駐させるように仕向けるために、あの部屋を防音室にしてしまったことも。

「・・・ヒビキヤも来るのであれば、グランドピアノを調律しておこう」

彼はそう言った。

カオルと僕がここで合流することを知っていたらしい。

誕生日のサプライズにするつもりであったのに、少しぐらい驚いてくれても良いのではないのかなど、彼の頭脳と抜かりのなさについて恨めしく思う。

でも。

カオルがヴァイオリンを弾いて僕がオーボエを吹き・・・ピアノは誰が演奏するのだろうか。

ふと・・・カオルとシャルルが昔、共演したことがあったということに思い出した。

彼はピアノも奏するのだということを思い出して、それから僕は唸った。

リサイタルを開くほどの腕前の持ち主達と共演は・・・とても緊張する。

寒いと感じていたのに、身体が緊張して熱くなり、背中に汗が流れ落ちるのを感じた。

「どうやら、オレは静かに自分の誕生日を過ごすことができないようだ」

彼が澄ましてそう言ったので、僕は吹き出してしまった。

その時。静かなアルディ邸で、マリナの声が響き渡った。

僕が来邸していることを聞いたのだろう。

バルコニーから身を乗り出して・・・雪の交じる空から聞こえて来た。

アルディ邸から、手摺りを乗り越えそうな勢いで、茶色の髪の人が手を大きく振っているのが見えた。

・・・パリの16区で、大声を出して僕の名前を呼ぶのはマリナくらいだ。

僕はくすりと笑った。

パリでも相変わらずマリナは変わらなかった。

・・・それが、どういうわけかとても嬉しかった。

なんだ、もっと早く来れば良かった。

僕はそう思った。

行こう、と僕の方から促したのに。

僕は寒空の下で手を振るマリナの姿を目に焼き付けとしてそのまま立ち止まってしまった。

「楽器が冷えるのだろうか？」

シャルルが可笑しそうに言うので、それでやっと邸内に入ることにした。

彼の誕生日には、彼はいつもひとりではない。それが嬉しい。

僕とシャルルは肩を並べて歩き出した。

硝子扉の向こう側で待機している人達が居た。誰が・・・また来客があるらしい。

僕がそうされたように、先導する人が居て、その係員の人材がまた、別の人に取り次ぐという手の込んだ手順を無視して、誰かが入ってきたようだった。

その人物に心当たりがあった。ありすぎた。

彼が大きな溜息を漏らした。

でも、少し嬉しそうだった。

僕もその横顔を見て、嬉しくなった。

雪がちらついているのに。

彼が腕を回して僕に触れた部分からじんわりと温かさが浸透していく。

「宿泊先のホテルには連絡しておいてやる。今日はこちらに泊まれ」

僕はウイ、と言った。

それから少し考えて・・・まだ明日の話であったけれども、一足早く、用意してきた言葉を言うことにした。

「シャルル・・・誕生日おめでとう」

彼はそれを聞くと・・・綺麗な微笑みをして、瞳に強い暁を宿らせて言った。

「なるほど。・・・東の果ての国の者に相応しい。

・・・それで？一日早いオレへのバースデープレゼントは？」

「シャルルに『親友』をあげるよ」

僕は笑った。

贈るとか受け取るとかいう問題ではないことは、お互いにわかっているのだが。

シャルルは黙って僕の持っていたケースを受け取った。

それまで持っていた、慣れた重さが急に軽くなって・・・そして、僕はまた泣きそうになった。

各々が持つ荷物の重さについて僕は憂えたけれど・・・こうして、渡したり託したりすることもできるのだと言うことに気がついた。

だから、僕は・・・誰かに何かを託されて託して生きていくことが大人になることなのだと知った。

シャルルが背負っているものは大きくて重いけれども。

彼のその重さを僕は引き受けることが出来るのだとわかった。

カオルが僕に託したもの。

マリナが僕に託したもの。

シャルルが僕に託したもの。

それはあの人の代わりという役割ではなくて・・・彼が言った嫩葉という言葉の意味、そのものなのだと思います。

春が来て芽吹いて成長し枝を伸ばして花を咲かせ、実を結ぶ。

僕は僕の決まった路ではなく、自分の決めた路を進むことで・・・彼らから託されたものを別のものに形を変えて、やがて別の誰かに還すことが出来るのだろう。

僕はそれまで歩いてきたひとつの路と決別した。

でも、その路と違う路に進んでも、きっとまたひとつに重なる時がくると思った。

「『親友』なら。まずは、マリナにあの奇行をやめさせろ」

彼はマリナと揃いの指輪を薬指に光らせながら、髪をかき上げてそう言った。

「アルディ夫人が日本にお忍びでやって来ることも十分奇行だと思うけれども」

「彼女の奇妙な行動については分析が必要だな。・・・ダイ、レポートしておけ。

・・・それが入所試験だ」

「難しいな」

「困難だからこそ為し遂げる必要があるのだろうか？」

シャルルが意味深い言葉を言ったので、僕はくすりと笑って頷いた。

「それは大変に難しい試験というか・・・魂の試練だね、シャルル」

彼はその言葉が気に入ったようだった。

「昔、愛とは魂の試練だ、と言った男が居たな」

彼は顔を綻ばせて、そう言った。

行こう、と彼は言った。

行け、ではなかった。

一緒に、行こうと言った。
それが彼の回答だと思った。

僕とシャルルはほぼ同じ歩幅で歩き出した。
白金の髪の麗人は、僕を隣に並ばせて歩くことを許可した。

僕の出したこたえに、シャルルが及第点をつけてくれたのかどうか。
それはもっと・・・ずっと後になってわかることになる。

雪が、また降ってきた。
マリナの慌ただしい足音が、アルディ家の長い廊下の億から聞こえて来る。
そして反対側からは、僕の師匠が奏でるけたたましい足音が邸内に響いていた。

ひっそりと静かな卒業旅行になるはずであったのに。
決して忘れられない旅になりそうだった。
そして、この国を訪れるのはこれが最初で・・・やがてこの国に行くという表現ではなく、この国に帰るという表現を使うようになるのだろうなという予感がした。

それは予感ではなく、予想でもなく・・・シャルル・ドウ・アルディ曰く「予定」だった。

今年のシャルルの誕生日は・・・一体何人分の賑やかさになるのだろう。

(FIN)

■01

眩しい光に目を細めながら、ダイは軽く腰を浮かせて、ベンチに座り直した。浅く腰掛けるのは、彼が演奏者である故に自然に身についた姿勢の良さであった。

それより前から武術を習っていたこともあり、それで背筋が発達していたこともあった。

彼の背筋の潔いと言って良いほどの美しさは、背面に座る者たちを陶然とさせた。

その彼は、急な身長伸び具合から伴う成長痛に悩まされていたがそれもなくなり、体格が安定してきたこともあって、音に艶と丸みが出てきたと評判になっていた。自分ではそんな風に意識したことはなかったが、やはり声帯や呼吸を支える筋肉や骨格が安定しているということによるものであるのだろうと思うし、彼の師による厳しいレッスンの継続が、最近になってようやく果実となってきたのだろうと思われた。幼い頃から教育を受けている者とは、明らかに遅れている開始であったが、ダイはそれを努力で補った。そして、驕ったり飾ったりすることをせず、彼の師に言われたとおり、長い時間基礎練習に費やした。その成果が・・・今、実ろうとしている。

「ダイ」

彼の名前はダイという名前では無い。けれども、周囲の者は皆、彼のことをダイ、と呼ぶ。取り決めはないけれども、いつの間にかそうなってしまう。環境が変わっても、こんな風に・・・全国から集まった選抜メンバーだけの合宿で初めて顔を合わせる者が居たとしても、いつの間にか彼はダイ、と呼ばれるようになる。

最初はかなり訂正を求めていたが、それでも彼をダイと呼ぶ者たちは彼を慕わしいと思うからこそそう呼ぶのであるのだと・・・諦めることにし、それ以来何も言わないことにした。敢えて訂正させることもない。ダイであろうと本名のヒロであろうと、彼は彼であることには変わらないからだ。

一番最初に、彼をダイ、と呼んだ人物は彼のそんな変遷を眺め続けて久しかった。茶色の髪、茶色の瞳のあの人は、ダイの人生に深く関わっている。離れて過ごしたこともあるし、彼女と一緒に過ごした時間は家族よりもずっと短い。けれども、彼には誰よりも大事な人のひとりであることには変わらない。

時間の長さではないのだ。誰かが、誰かを大事にする時には、時間の長さが非礼するのではないのだ。

彼は振り返らずに、ただ、膝の上に立てた楽器を陽の光に当てて丁寧にキーを磨いていた。

そんな彼の傍に、誰かが寄ってくる。

ここは、合宿所だ。

ダイは今夏に予定されている全国ジュニア音楽祭の選抜メンバーに選ばれていた。

ある日突然舞い込んだ招待ではなかった。

彼は個人でも受賞しているし、何より彼の師の影響が大きかった。音楽科に進学しているわけでもないし、彼の家族環境は普通の家族だ。

しかし。彼の師は、誰も弟子にしないと有名な人であった。気難しく、そして、師だけしか持ち得ない技術を保持し続けて世界を魅了し続ける。

・・・不幸な事件があったとしてもそれを乗り越えるだけの生命力と精神力を兼ね備えた人であった。

だからこそ、あの人はダイを託そうと思ったのだと思うと・・・彼はいつも自分の何が、彼らを安らがせるのだろうかと思う。

もう、何度か経験している、合宿所での集中レッスンであった。彼は定期的にここに招聘されることになり、幾度めかの季節を迎える。この招待を誰も断ることができない程に、充実した環境だ。

・・・ここは楽器のコンディションを保つには素晴らしい環境である。外気でさえ素晴らしいが、施設はさらに完璧であった。

完全に調整された空調、演奏棟にほど近い場所にある宿舎は湿度の管理が自分で行える。・・・奏者の持つ楽器によってそれらは微妙に違っているからだ。完全なる防音の部屋が配置されて自室でも練習できるし、もちろん、調律の完璧なピアノが設置されている個室で調整することもできる。恵まれた環境であるということは十分に理解していた。そして・・・こんな風に、尽くされた状態でなくても自分は活動することができるのだと思うのだ。雑然とした音楽室で、初心者である者たちに運指を教えつつ、自分の技術を磨く。朝夕の練習しか時間が取れないけれども、昼休みであったり自分の時間が捻出できる範囲で皆が練習する。場所がないから・・・音楽室の廊下やベランダで練習する。

しかし、ダイは、そんな時間が嫌いではなかった。

完璧な場所でないからこそ故の方法もたくさんあるのだから。

「もうすぐ、時間よ」

彼女の声はとても綺麗だった。すでに何度か組んだ相手であった。彼の息継ぎのタイミングやページの捲り方すら、承知している相手であった。彼のコンディションに合わせることができ、かつ自分の主張は崩さない。音程を保つことが難しい楽器を扱いながらも彼以上に精通している知識と経験と努力から生まれる彼女の音色があるからこそ、ダイはこんな風にして選ばれた奏者達と一緒に演奏できるのだ。

ダイは、視線を向けずに微笑む。

そして、空を見上げた。

伸びた枝葉の間から、木漏れ日が柔らかく変換されてダイに降り注ぐ。

・・・この暁を有害な紫外線だとは思わない。

彼は支えていた楽器を持ち直した。リードが乾く頃であった。

オーボエ奏者の彼の音色の秘密は、そのリードにある。フランスのパリに住む人物が調達してくる最高級の素材を、更にこの国の湿度に合わせて調整できる技術が彼に備わっているからだ。

「・・・それほどの名器を日光にあてる人は、後にも先にもダイだけだと思う」
梅華はそう言って、笑いながらダイの隣に座った。それが当然であるかのように。彼女のために空けておいた場所ではなかったが、彼はいつもひとり分を確保して座る。・・・小柄なあの人が座ることができる空間分だけ。

しかし、華奢な彼女には十分な幅であった。

今は自由時間であり、各々が好きな場所で好きなように時間を過ごして良いと許可された時間である。情操教育も音楽性の伸張を促す。だから・・・皆と集う時間にせず、彼はこうして外に出ることにしたのだから。

トッパ奏者は孤独だ。特に管楽器奏者は。

厳しい競争の中で、自分の存在を主張しつつ、それを継続することは許されない。個性を煌かせてはいけないのに、個性が求められる。

・・・なぜなら。

その呼吸ひとつで・・・曲が変わるからだ。息継ぎのひとつふたつで、流れが変化する。失敗も成功もその吐息ひとつなのだ。

■02

他の奏者は管楽器でも弦楽器でもやって来ることのなかった場所であった。

考えられるのは、打楽器奏者のみ。練習中のスティック音が他の者の妨げにならないように離れた場所で練習するからだ。それに、彼らは定音であることを求められるので、無音の状態の中で訓練されることを必要とされるものの、時折こんな緑空の下に出たがる。これはなぜなのか、理由はわからない。

・・・そして、ダイはここに居る。

梅華は微笑む。彼が・・・何もかも他の者と違っているからだ。

梅華は彼の側にあった自分の長い黒い髪の毛を耳にかけながら、座った。

彼女の髪が、ダイの楽器に触れてはいけないと思ったからだ。彼の楽器は、人が羨むほどの名器であった。しかもコンディションは最高の状態で、定期的に国内の最高の調整師によって整えられている。

この国では存在しない材を使い、経年と丁寧な手入れによって甘い色が出ている。多くの楽器は漆黒色であったのだが、彼の持っている管は、内面はもちろんのこと、接着剤の色に至るまですべてが完全に他と違っていた。オーボエはパーツが多く、複雑に関係する精密機械と同じ物体で

ある。

そして、些細な違いが音色に影響する。この楽器には、キーが少ない他の楽器の繊細さと違う精密さが必要とされていた。それは、管楽器のうち、フルート、オーボエ、ファゴット及びクラリネットなどキーを多く保有する楽器の持つ問題であった。

だから、ダイと梅華が各々大事にしている半身のような存在を伴って、ここに座って居るとわかるとは誰も思い至らない。紫外線や外気に晒すという行為には危険が伴うのだから、彼らがそんなことをするはずはないと誰もが思っている。

「ウメ。・・・戻れよ」

ダイはそう言う。

梅華のことを、彼はウメ、と言う。

昔から知っているからだ。そして、彼女のことを大事なパートナーと思っているから。

そして彼女も彼のことをダイ、と呼ぶ。

他の誰にもそんな風に呼ばせはしない。梅華は顔を上げて、夏に入る前の、僅かな・・・梅雨の気配の混じった暁を浴びながら、言った。緑の匂いが風に乗ってやって来る。

彼女の左手には、愛器が乗っていた。彼の学校の部活動では決して見ることの出来ない程の品であった。値段の問題ではない。世界で数台しかない品であったが、それに加えて梅華の求める仕様にカスタマイズされているから、これは世界で一台しかない楽器なのだ。

燻し銀のような光沢であったが、それはもっと重量のあるプラチナ・フルートであった。キーのひとつひとつは、梅華の指圧に合わせて作られている。管中はノンコーティング。これは音程に影響するからだ。取り扱いが簡易であることを捨てて、梅華は彼女にとって最高の状態を求める。・・・それほど年齢が変わらないのに、彼女の求めるものは常に最上でしかない。その隣に座るダイは、同じであることは必要とされなかったが、同じだけの技量は必要とされた。

彼女の高雅な音色に合わせることでできる者は少ない。

この国のジュニアと呼ばれる年齢の奏者の中で彼女はトップクラスどころか、常にトップなのだ。

それを考えると、ダイの環境は恵まれているとしか言いようがない。

しかし。

そんな品を手をしている者は、梅華だけではない。他にも大勢、居る。

そして他の者から見れば、ダイも同じ部類であった。・・・この楽器は、アルディ家が保有する古器であるのだという説明を受けたが、どんな手段を講じてどんな過程で作られたのかわからないほどに・・・この器は素晴らしかった。梅華でさえ感嘆する。他の楽器の講師でさえ、ダイの楽器を見せて欲しいとわざわざ別の棟からやって来るのだ。彼は、それに見合った技量をつけていると感じられないうちは、それが恥ずかしかった。しかし、代用器を持っているほど彼は潤沢に音楽へ費やす資財を持っていない。皆のように、たくさんの楽器を体格や年齢に合わせて買い

換えるということはない。だから、これが彼の唯一で最後の楽器になるのだろうと考えていた

。ダイが他の皆が味わったような苦渋の日々を経験していないかという、そうではなかった

。誰かに追い抜かれるおそれや屈辱、悔悟などについて無縁であったかというところではない。常にこの選抜メンバーに選ばれている梅華と違い、ダイは浮沈を繰り返して、そして選ばれなかった時もある。それがここ数回は毎回招聘されるようになったというだけだ。

ダイはそこで初めて梅華を見た。彼女は、ダイでないパートナーも知っている。だから、ダイがこれから先、梅華と一緒にどれだけの回数を演奏できるかどうかという技量について、彼女は承知しているような気がしてならない。

それでも・・・今回の合宿の終盤に行われる、成果発表を兼ねたミニコンサートにはどうしても主席奏者で出たかった。

あの人があるからだ。甲府の友人を訪問するついでに立ち寄るといふ連絡が入っていた。

正確には、その人本人からではなくて、その人を渋々甲府に遣らせる、この楽器の本当の持ち主からであったが。

●03

「・・・そんなに楽器を甘やかしても、良い音色が出るとは限らないでしょう」

梅華の言葉に、彼はおや、と顔を上げる。

時折、自分が本当にここに居て良いのだろうかと思うことがあり、そういう時には、ダイはこうして外に出ることにしていた。何時間も楽器を持ったままで練習をするのも苦にならないが、ふと降りてくる疑念をそのまま合同練習に持ち込めば、たちまち梅華に知られて、叱責されるから。彼女は普段大人しくてあまり口数が多い方ではないが、彼の様子を誰よりも客観的に観察している相手である。相手の少しでも音が良くないと、席を立つこともしばしばあった。その彼女が、ダイの隣に座り、気持ちよさそうに風に眼を細めていた。

だから。

彼女と会話したければ、練習をするに限る。男女問わず、誰もが梅華に憧れていた。

あまり自分のことを多く語らない。でも、彼女の実力が全てを物語っていた。

圧倒的に、ダイと練習量が違っているのだ。それなのに彼女は自分の基礎練習に加えて、皆と同じだけの練習量をこなして、疲れた顔は見せずに淡々とメニューをこなしていく。いったい、いつ、身体を休めているのかと思うくらいの時間を彼女は音楽に費やしているのだ。好きだからとか興味があるからというレベルではなかった。

そんな彼女が、外の空気を吸いにやって来たダイの行為を咎めないどころか、肯定したのでダイは彼女の横顔を見た。

いつもと眺めている横顔と違って見える。それは、太陽光の下だからなのかと思ったが、それだけではなかった。いつも座って居る場所と逆であったのだ。

彼女は笑う。同年代の女の子達の顔を見ても、同じにしか見えないダイであったが、彼女の顔は綺麗だな、と思う。

顔容が整っているというだけではなく、彼女には隙がない。姿勢も崩したことはないし、髪の毛もいつも綺麗に梳ってある。服装もかなり高価なものを着ているなどという印象があったが、それが彼女の自信なのではないのだ。高価な品を自慢することで、自分の価値が高まるとは決して思っていない。彼女は他者にも厳しかったが、自分自身には更に厳しかった。

やはり、この選抜メンバーの定連であることが、彼女の誇りなのだろう。そして幾度もここを訪れているために施設の場所を熟知している梅華には、ダイの行き着く場所などというものはお見通しなのだ。

「何だかさ、時折・・・こうして風に触れた方が良いような気がしているんだ。根拠がないけれども」

ダイは正直に、梅華に告白した。室内の、完璧な状態での合奏は彼を昂揚させる。楽しいし、新しい技術やそれまでできなかったことができるようになった時の喜びは大きいし、何より誰かと一緒に言葉を越えてひとつのことを為し遂げる充実というものは代えがたいもので、誰にも与えられるものではなかった。コンクールに出て賞を取ることも実力を測るためのものであり、賞を取ることもそのものが目標というわけではない。

彼の欲のなさは有名であった。

パートをグループ内で割り振りして良いという自由を認められた小規模のグループ練習では、彼はいつもソロを扱わない。誰かに譲ってしまうのだ。私の強さも必要とされるポジションであるのに、彼には誰かの諦めの上に立つつもりはないという気持ちの方が優先しているようだ。

先ほども、管楽器の四重奏のグループ決めの時にも、彼は一步引いて、梅華や他のトップ奏者が全員揃っているグループではないところに入った。

それを梅華が責めに來たのではなかろうか、と思っていた。

一度だけ、彼女はダイに言ったことがあった。

「手を伸ばさないのは、いつでもそこに手が伸びるからだと思っているからなの？」

彼女が言いたいことは良くわかっていた。そうしたいと思ってもできない者がいる。ここに集うまでに、多くの選抜がされており、合宿の場所にやってくることもできない者も居るのだ。

そして、ここにやってくるからと言って、ソロを任せられる実力を兼ね備えた者が大勢いるとは限らない。

梅華だって最初から完璧ではなかったはずだ。今も、努力し続けている。それがわかるからこそ、その言葉の重みと痛みを、ダイは受け止めるだけで言い返すことはしなかった。

そんなこともあったので。

ダイは身構えていた。

彼女が怒っているのか、何を考えているのかわからない。

けれども、険しい顔つきではなかったのだから、本当に休憩に来たのかもしれないとさえ思う。

彼女の真意がわからなくて、ダイは座ったままで、大きく息を吸った。

澄んだ空気が入り込み、彼の中を廻っていく感覚が好きだった。

煮詰まった時にはこうするに限る。

ダイ自身がそうであるのなら、彼の楽器も同じ様に呼吸したいのかもしれないと思ったし、手近なところに置いておくほど気軽な品ではなかった。

「ひとつ、聞いてもいい？」

梅華が、そう話を切り出した。休憩時間はそれほど長くない。けれども、彼女とこんな風に話をするのは・・・滅多にないことであった。しかも、梅華から話しかけてきた。ダイも御喋りな方であるとは思わなかったが、梅華は輪をかけて人見知りを乗り越えて会話が少なかった。

時々・・・梅華は、自分は交流するためにここに来たのではないという悲壮なまでに思い決めた覚悟のようなものを感じる時があった。馴れ合いを禁じているような、そんな気がしてならなかった。

その梅華が、彼に問いかけをした。そして、上を向く。

楽器をぎゅっと握りしめる梅華の爪は綺麗に丸く整えられている。楽器を傷つけないためだ。そして深爪すると音程が狂うので、指先にも気を付けていなければならない生活を、彼女は何年過ごしているのだろうか、と思った。

彼も、上を見上げる。彼女が何を言いたいのか、何となくわかったから。

緑が濃く、爽やかな風が吹き抜ける。

空の色はダイの居住地から見える空よりずっと鮮やかだった。

「ダイは、なぜ、音楽を続けるの？」

「え？」

なぜ、音楽を始めたのか、そのきっかけは、と聞かれることも多くなってきた。それほど初めて出逢う人々との会話のきっかけに必要なことだろうかと思うこともあるが、彼が「ダイ」と呼ばれることと同じくらいに、彼の中では普通の質問になってしまっていた。

●04

ダイが珍しく動揺していたので、梅華は隣でくすり、と声を漏らして笑った。

「ダイは、誰かに奨められて始めたわけではなさそうだったから」

「確かに・・・時間を決めているかもしれないね」

「それは刻限ということ？」

「そう」

彼女が他人のこれからについて興味を持つとは珍しいこともあるものだ、と彼はどこか他人事のようにそう思っていた。梅華は決して弱音を言ったりしない。彼女が相当な年月を音楽のために費やしていることもわかる。

しかし、彼女が一度も疑問に思ったことがなかったのかというと、そうではないだろうと思っていた。

誰もが考えることだ。

自分の将来と音楽はどんな風にして結びつくのだろうか。ある日突然、指が動かなくなったり、聴力が落ちていることに自分が気がつかなくなってしまった時には、どうしたら良いのだろうか、と。

「そうだな・・・」

彼は少し考えた。

軽率な答えは梅華に失礼だと思ったから。

確かに、自分は少し、この世界の暗黙知のようなものを知らなさすぎると思っていた。でもそれは恥じるべきことではない。しかし、知らないからと言って免責されることも望んでいない。知らないから、何をしても良いのだと思わなかった。

その一方で、咎められることは承知の上で、彼は楽器ごと外に出る。彼の師が、ヴァイオリンケースひとつで世界を廻り歩く気持ちが、少しだけわかるような気がした。

やがて、彼は言った。

「生涯つきあっていきたいとは思いうけれども、片時も離さないという距離でなくてもいいのかな、と思ったりする」

彼女は黙っていた。自分の楽器に陽光が注ぎ、反射している様を見つめている。ダイの方を見ることはなかった。いつもと同じだ。・・・彼らはいつも隣合って、正面を向いている。互いを身体の僅かな動きや合図で何もかもがわかる。けれども、今、こうして座って居る彼女の質問に、ダイは狼狽していた。けれども、正直に言うことにする。誰にも言ったことがなかった。誰からも、問われなかったから。

ここに居る誰もが、永遠に音楽の世界に身を浸すのだろうと思う。どんな職業に就いたとしても、決して全部を捨てることができないことはわかっていた。

「・・・それほどの技量なら、どこに留学しても通用する」

「ああ、それでは駄目なんだ、ウメ」

ダイは笑う。

「僕の家は音楽にとっても理解があるという家族ではないけれども、あの家で僕の演奏を楽しみにしてくれている人が居て、時々、聴いてもらうことが、僕の目的だから」

それから、肩を竦めてダイは唇を持ち上げた。彼女の大きな眼が開き、そしてダイに何かを言いそうになって、綺麗な唇を嚙ませる。わかっている。

ここに居る誰にも理解できないことだろう。賞を取るより、留学するよりも大事なものがある。

彼には、彼の理由があつてここに居る。それが理解できない梅華ではないから、言う気になつたのだ。

「その人のため？・・・あの人のためなの？」

梅華の言葉に、ダイは言葉に詰まつた。

誰のことを言っているのか、彼女は知っているのだ。

彼がこんな風に思っていることを知らないあの人のことを。

小さい時から一緒だつた。

だから、彼は彼女と少しでも繋がりを持っていたかつた。

ダイは自分を狡いと思う。彼が音楽を本格的に始めたきっかけとなつた人であつた。彼に現在の師を紹介し、彼女が勧めた事である。

だから、ダイが音楽を続けている限り、彼女は日本に戻ってくるのだ。様子を見に来る。彼女しか観客がいない舞台上・・・ダイは、彼女のためだけに演奏する。賞を取つて楯や賞状が増えると、彼女は目を輝かせて喜ぶ。彼女は学生時代、転校が多かつた。そのために、何か作品を出品してもその結果を見ることのないまま、去って行くことが多かつたのだと言つていた。だから。彼はどこにも行かない。・・・その時だけは、彼女は、彼を見つめるからだ。彼を決して見ない人が、彼を見るのだ。

梅華の瞳が左右に動いていた。彼女も、返答に詰まつている。

「誰かのためだけであるのなら、こういう生活を過ごしたりはしないよ。もちろん、僕が楽しくて、そうしたいと思つているから、そうしているだけだよ」

彼は付け足した。自分の言葉に過不足があるとは思わない。けれども、他者への取り繕いではなく、今自分が発した言葉は、自分自身への説明であつた。

それでも、梅華は黙つていた。想定外の返答であつたようである。そして、彼女は何かをじつと考へているようであつた。

・・・風が大気を揺らし、木々が動き、雲を動かしていく。

彼女の横顔は綺麗だつた。ちらりとするだけでそう思うのだから、皆が騒がしくするのも無理はない。

けれども、彼女はそういったことすらまったく無関係であると言つたように、禁欲的なレッスンを続ける。飽きもせず、基礎練習を繰り返す、見せ場や早いテンポの曲は最後に回す。地味な練習が、彼女の響きのある低音や繊細でありながら音程の保たれた確実な音を作り出して行くのだ。

「ダイ。誰かのため、というのは十分、理由になるものよ」

やがて、彼女がそう言つたので、ダイは自分の楽器を持ち直した。手の平に汗が滲んできたからだ。

しまった、という気持ちはなかつた。けれども、どうして彼女にはそんな風に素直に話してしまうのだろうかという自分への困惑があつた。

うん、とダイが頷く。彼女が、隠そうとするなど彼の後押しをする。だからかもしれない。だから、彼はあの人のことをもう少し語ることにした。彼女になら、良いのだと思った。それほど長い時間を一緒に過ごしているわけではない。住んでいるところも違う。環境も将来の展望も違う。何もかも違うけれども、あの人を知っているようで知らない梅華にだから、言える。

そこには、彼の秘めたる思いがあった。

「その人が演奏を聴き終わった時に、幸せだね、って言う。・・・幸せだな、じゃないんだよ、ウメ。幸せを共有しているねという意味で、幸せだよ、と僕に言うから。・・・僕は、そうだねって言うことにしている。彼女の幸せな顔が見られるだけではなくて、僕に・・・僕も幸せだよ、同じ気持ちだよって聞くからだよ」

■05

「・・・ダイは、本当にそれで良いの？」

「それが良いんだよ」

梅華の質問はそれだけで終わってしまった。疑問ではなく、念押しだったのかもしれない。ダイは、誰にも言うなど口止めしなかった。彼女はそんなことはしないだろうと思っていたから。

「この話はこれで終わり」

「私が、あの人に言うかもしれないって思わないの？」

怪訝な顔つきで、梅華が最後にそう言った。ダイはくすり、と小さく笑う。

「今日のウメは質問してばかりだね」

そう言うと、梅華は息を吸い込んで黙り込んだ。彼女がそんな風にして誰かに問いかけることは、あまり見かけない。音楽の解釈であったり、ブレスの位置合わせをしたりするときでさえ、彼女はいつも誰にどうしたいのかは尋ねない。皆の言葉を最後まで聞き、そして誰も意見が出なくなった時まで待つから、最適の方策を披露する。見物をしているようで高慢だと言う者もいたが、ダイはそうは思わなかった。

彼女は、皆の意見を全部聞き取り、それで最も良い選択をしているように思う。単にソリストとしてだけではなく、彼女は皆を統べるための知恵も経験も持っていた。彼女がそう言えば従わざるを得ないけれども、決まらない事に責任を持って決断する勇気と潔さを持っている人だと思う。まるで、あの人のように。

ダイは、微笑んだ。質問してばかりのあの人の声や姿が、梅華に重なる。

似ても似つかないのに。ダイに会えば元気であったのか、何をして過ごしているのか、最近は何処に行っているのかなどと矢継ぎ早に尋ねるが、その内容はいつも同じだった。

辟易したダイが、「繰り返すなよ」と窘めると、彼女はいつも「彼のようだ」と言って笑う。彼女が言う「あの人」は誰のことなのか、わかっている。白金の髪の毛、青灰色の瞳を持っている、相当に性格の捻れている美形だ。だから、ますます意地悪な言い方をしてしまう。

・・・ダイが今回の合宿にいつもより更に精を出して練習に励むのは、あの人がやって来るからだけではない。・・・最後に別れた時に、ダイは繰り返し彼の様子を尋ねる彼女に向かって冷たく言い放ってしまったのだ。

「僕に干渉するなよ。・・・親でも姉でもなくせに」

そう言ってしまった。

ダイは、いつも彼女に向かって、誰にもしないような態度を取ってしまう。

それが甘えと嫉心が混じったものが、彼をそうさせているのだとわかっていたけれども。それでも、彼女がどんなときでも必ず、別れる時には「またね」と言い、次に会った時には「元気だった？」と屈託無く笑うから。だから、ダイはそれに安心しきってしまっていたのだ。そして、そのまま合宿のために出発してしまった。

後から追いかけるからね、と言われたがそれも漫ろな気持ちで聞いているばかりであった。

彼女を泣かせるな、とあの男に叫んだのに。彼女を傷つける自分が嫌だった。でも、仲直りすることも謝ることもしないで、出てきてしまった。

だから。

気まずい雰囲気のまま居たので、彼は梅華から思いもかけない質問で彼女の話を語り、自分がずっと口にしていなかったことを口にしたのである。

だから、梅華の質問に、ただ、言葉少なく装飾をつけることもなく、ダイは答える。

「言っても構わないと思ったけれども、ウメはきっと、言わないんだろうな、と思ったし、もし・・・ウメが言ったのなら、それでも良いと思ったんだ」

彼の言葉に、梅華が持っていた楽器をぎゅっと握り直した。

・・・管楽器奏者の癖で、狭い場所で座っているときには、楽器本体を立てて持つってしまう。互いの楽器がぶつかり合って傷つくのを防ぐためだ。だから、彼女が自分の楽器にしがみつこうように・・・額を寄せて、大きく溜息をついたので、ダイは慌てて彼女に声をかけた。

「具合でも悪いのか？暗い室内から急に外に出たから・・・」

「ううん、違うの・・・違うのよ」

梅華の声は絞り出すような掠れた声で、小さかった。さらり、と耳にかけていた彼女の髪が頬にかかったので、彼女の表情が見えない。ダイは腰を浮かせたが、それを梅華が押しとどめた。

彼女は普段、あまり表情豊かではない。その反面、音色は豊かで幅があり、喜怒哀楽を音で表現できる数少ない奏者でもある。技術も、解釈の深さも彼が知っているジュニアの中では抜群であった。その梅華が、大きく肩で息をして、何より大事にしているフルートにしがみつこうような状

態で身体を傾けたので、ダイは酷く狼狽した。立てたフルートの足部管が彼女の柔らかな素材のスカートに深く埋もれていた。

「本当に大丈夫か？医務室に行くか？」

ダイの言葉に、彼女は首を振った。

「必要ない。・・・それより、ダイ。その人に、ちゃんと、伝えた方がよいよ」

「何を？」

「ダイが、思っていること」

そう言って、梅華はダイの顔を見た。

どきり、とする。

彼女は全部を言わなかった。

何を思っているのか、ダイがどんな風に思っているのか、知っているのだ。

誰かのために、これほど厳しいレッスンを繰り返す粹狂な者はここには居ない。

皆が、自分の限界に挑戦し、それを越えて行こうとしている。その中で、ダイだけが、飄々としている様が、梅華には気に入らないのかもしれない。

そう思った。傷つけた、と思った。

なぜなら。

彼女の瞳が、濡れたように潤んでいたからだ。

泣きそうな顔をしていた。

彼女の声も、震えていた。

しかし、梅華はそういう詰りの言葉を言わなかった。

その代わりに、また、切れ切れに言う。

空気を求めるように、喘ぐように・・・言った。

「私はそんなに良い人じゃない。ダイがそんな風に思い悩んでいることを言えないでいるのなら、それを聞いた私は、ダイの代わりに言うかもしれない。演奏に支障が出るくらいなら、その人に私が代わりに言うわよ」

「ウメ、君がそんなに怒らなくても・・・」

ダイが狼狽して言うと、今度は梅華の瞼はきゅっと持ち上がった。

「私がダイと、あと何回、隣に座ることができると思っているの。限られた回数しかない。限られた時間しかない。それなのに、これまでもこれからも一緒に居られる人のことだけを考えているダイが、黙っていることで情けない演奏しかなかったら、許さないから」

彼女は早口でそれだけを言うと、大きく深呼吸をした。

「・・・こんな短いフレーズの息継ぎさえ苦しい」

彼女は恨めしそうにそう言った。いつもなら、もっと長く呼吸を止めることもできるのに。

それから、そつと言う。俯いていた。しかし、彼女の背筋は伸びたままであった。

「・・・ダイ、私はいつもダイの隣に座っているけれども、ダイの演奏を独り占めできたことはない。いつも一緒に吹くけれども、ダイが私のために演奏することは・・・ない」

彼女はそれだけ言うと、眼を瞑り、日焼けを知らない白い顔を上げて、木漏れ日を受け止めた。

■06

ダイは梅華の様子に、ただ狼狽えるばかりであった。具合が悪いのかと尋ねると、そうではないと言う。それなのに、いつもの彼女の状態とはとても言えないほど・・・彼女は激しく葛藤している様が見て取れる。ダイの前でも決してそんな顔は見せないというのに。

けれども、彼女は片方の手で楽器を支え、もう片方の手で自分の頬を押さえた。

彼女の僅かな変化を、彼は黙って見守っていた。彼女に何かが起こっていることは知っている。

けれども、それは黙っていることにしていた。ダイしか気がついていないことで、ダイはそれを梅華に告げていなかった。

彼女は時々・・・誰も見ないところでそうして顎を押さえていることがあった。痛むのだろうと思ったが、ダイは大丈夫かと声をかけることはしない。体調管理も奏者の義務のひとつであるが、誇り高い彼女の失調が誰かの耳に入れば、梅華が追いつめられることになるのだ。

「・・・ウメ、頑張りすぎるな」

「人の心配をするより、自分の心配をしたらどうなの？」

間髪入れずに彼女がそう言うので、ダイは笑い出した。

けれども、梅華と一緒に笑うことはせずに・・・じっと、ダイの顔を見て、そして少しも表情を崩さずにいた。もう、いつもの彼女であった。

「・・・その言葉はまだ、必要ない」

ああ、彼女の言い方はあの気に食わない白金の髪の人によく似ているんだな、と思った。それに、甲府に住む口数の少ないあの人にも。ダイはそう思うと、そこでなぜ、梅華のことが気になるのか・・・少しだけわかったような気がした。

彼女は、似ている。

茶色の髪の色茶色の瞳の・・・あの人を連れて行ってしまおう白金の髪の方は、こんな風にして誰かに心配されることに慣れていないのかもしれないな、と思った。そして、ダイ自身も。

僅かなきっかけであったが、一度そう思うと、どんどん、自分の中で未消化であったものが咀嚼されて、すとん、と内に入ってくる。

ダイは自分自身のことを・・・あの人への心配ばかりをしていると思っていたが、その実、ダイは多くの者に気に懸けてもらっている事実を彼は当然のように受け止めていた部分があったことに気がついた。

だから、ダイのことを必要以上に構うのかもしれない。

だから、梅華も見かねて声をかけるのかもしれない。

梅華への気遣いの言葉は必要ない、と言う。自分の心配をしろ、と言う。

どうしてそう言うのか、ようやく、わかった。

彼がこれから進むべき路を、あやふやにしたままで梅華に余計な心配事を増やさせるわけにはいかなかった。彼女とは、年に数回しか音を重ねることができない。

そうして去って行った者たちを知っているから、梅華はダイに腹を立てているのだろうと思った。だから、音楽を続ける理由を尋ねたのだ。

そこまで考えると、彼は、空を見上げた。眩しい陽光が少し動いて、今度は彼の楽器のキーを輝かせる。・・・外気に触れるのは良くないと思うが、それでも、こんな葉の音や、陽の光や、優しい風が・・・ダイにも、この楽器にも必要なのだと思う。

あの白金の髪の人が、ダイに無言で託してくれたものだから。

「ウメ。結葉って言葉があるんだ」

彼は、梅華にそう言った。彼女は黙ってそれを聞いている。だから、ダイは続けた。

「・・・葉が茂るころ、葉が重なって交わりあうように陽の光を受けることなのだけれども。

・・・葉が結び合っているように見えることからそういう風に言うらしい」

「結葉・・・」

そう、とダイは頷く。

「音楽も同じ。僕にとっては、重なり合う葉だ。でも、それらがなければ、僕は、自分の道を決めることはなかつただろうし、音楽を続けようとは思わなかつた。片手間に思えないくらい、好きだから」

その言葉に、梅華は僅かに身体の向きを変えた。彼が何を言い出そうとしているのか、察したからだ。少し、険しい顔をしていた。けれども、彼女は青白い顔をきゅっと引き締めて、真剣な顔をしてダイを見つめる。だから、彼は自分の中だけの考えのひとつである、それを言った。彼女になら、言っても良いと思ったからだ。

ダイは、初めて声に出して言った。

「僕は、高校までで音楽活動をやめる」

「・・・知ってる」

彼女がそう言ったので、今度はダイの方が唇をぎゅっと引き結んで緊張した顔になった。知っている、とはどういうことなのだろうか。それに梅華は回答する。質問もまだしていないのに。本当に、何もかも見透かしているかのようだ。

「どうして？」

それを聞くのは自分の方なのに、と言わんばかりの顔つきで、梅華が苦笑いしたので、ダイは途方に暮れてしまう。彼女は、いつから・・・わかっていたのだろうか。

「ダイが、自分のためではなくて、誰かのために音楽を続けて居るって言ったから」

「それが、僕の活動をやめることと関係があるの？」

「十分に」

彼女はそれだけ言うと、ほっと吐息をついた。彼女の溜息は彼女の楽器の音色のひとつのように聞こえる。ひっそりとして、それでいてとても哀しそうであった。

■07

彼女は軽く溜息をつく、肩を竦めた。それを横目で見て、ダイは困ったように、しかし自分の言葉を繰り返す。

彼女を失望させてしまった。そう思ったが、それで彼の意志が翻ったり揺るいだりするような脆さしかもっていないければ、彼女はもっと失望するのだろうと思い直す。

「僕はこの道を選んで、良かったと思う。だから、次に進む道は、この道の続きなんだ」

「それで、ダイはあの人の傍に居続けることができる？」

梅華の質問は、意外なものであった。でも、彼女には隠し事はできないな、と思う。彼の心の動きを他の誰よりも知っている梅華だから。長い付き合いであった。時間は短いものであるかもしれないが、彼女の音色が・・・一番好きであった。

孤独で端雅で、それでいて透明な彼女の優しさと厳しさを併せ持つ音が、彼の成長を促したのだから。

もっと、彼女に近付きたい、彼女の音色に重なりたいと思って練習を重ねてきたのだから。彼に詮索するようなことはせず、ただ、静かに・・・彼と音を合わせる梅華を誰よりも崇敬していた。彼女のように、全てを投げ打って、ただそれだけにひたすら打ち込むことが出来たのなら。

・・・梅華の期待に添うように、梅華を残念がらせることはしないと決めて邁進することであっただろうか。

でも、ダイが望んでいるのはその道ではないのだ。皆がどれほどそうして欲しいと願っても、それはダイの願いではない。

だから、自分の考えをきちんと告げることが・・・残された時間を大事に使うことが、彼のできることなのだろうと思うし、怠惰に過ごして後悔したくなかった。失敗しても構わないが、やり直したいと思いたくなかった。

いつも、その時の選択が・・・今に繋がるのだから。だから、一度決めたら迷わなかった。振り返ってはいけないと思った。そうしなければ進めないから。

だから、彼は・・・青葉の匂いの風に目を細めながら、誰にも言った事がなかった言葉を、梅華に零す。

「・・・そうでありたいと思う」

「ダイがそう決めたのなら、決して振り返ってはいけない」

梅華は言う。何となく、覚悟があったのだろう。だから、彼女はここに来たのだ。

皆が彼の将来に期待しているところで、彼はこれからも成長をし続ける、最も期待される若手演奏家のひとりなのだ。

それをあっさり投げ打つというのは欲がないというより、他に目標が出来たからだと考えるのは当然であった。だから、彼女はそれを聞きに・・・ここにやって来た。

「ダイの路と・・・私の路は違うけれども、振り返ることはしないところは・・・同じね」

「そうだな。ウメのことを、尊敬しているし・・・挫けそうになった時には、きっとウメのことを思い出すだろうね」

「それなら、思い出さない方が良いのかしら。・・・思い出して欲しいと言うべきかしら」

その言葉に、ダイは言葉に詰まった。彼女の泣きそうな笑顔が、緑の陽光の下で・・・白く輝いていた。彼はいつも・・・あの人も、こんな風な表情をさせる自分のことが厭わしかった。けれども、それを懼れて誰かと関わることを躊躇っていたら、自分はきっとここまでやって来られなかったと思う。

邪な気持ちで始めた路であった。でも、今度は・・・自分の意志で、この路の方角を変える。

いつも、思っていた。

いつも、考えていた。

あの人に、必要とされたい。

あの人に、気にかけてもらいたい。

・・・あの人に笑って居て欲しい。

彼のことを決して見なかったあの雪空の日から・・・ずっと考えていたことであった。

自分で幸せにしたいと思うより、幸せな彼女の顔を見ていたかった。だから、彼女を笑顔にするために遠い国から乗り込んでくるあの男に取って代わろうとは思わない。でも、その代わりに、ダイにしかできないことをしたかったのだ。

「結葉って良い言葉よね」

梅華がそう言ったので、ダイは頷く。

「僕には目標があって・・・緑のない場所に、緑を増やしたいと思う。水を必要としている人だけでなく、草木が・・・葉が生い茂って、こんな風に木漏れ日の中を皆が歩ける場所を作りたい」

「それはどこなの？」

「ここではない遠い場所。あの人も、それを望んでいるからだけではなくて、僕もそうしたいと思っているから」

白金の髪の毛、あの子の恋人が今でも技術や器材や人材提供をしている国では、まだまだ何もかもが足りなかった。そのうちのひとつが・・・水の濾過システムである。装置というより、あの国

の環境構造を人為的に変更させることもなく、どうすれば改善されるのかダイは挑戦したいと思っているのだ。・・・根本的な問題を解決しなければ、あの国は未来へ続いていかない。特定の国だけではなく、すべてのものに適用できるシステムが必要であった。それには、長い年月と国際協力が必要になる。結局は、あの男のことを支える結果になるのだろうけれども。それであの人が笑顔になるのであれば、それで良かった。

「それに、僕は彼が嫌いじゃない。悔しいけれど」

「え？」

ぼつりと言ったダイの言葉に、梅華が首を傾げたがダイは何でも無い、と言ってまた微笑む。

「結葉の夢、ということなのかな。途方もなく、大きな夢だよ。

・・・でも、実現できると思うから、強く気持ちを持って、努力するよ。

どれほど、長い時間がかかっても。・・・だって、今日、ウメに宣言してしまったからね」

ダイはそこでようやく自分の楽器を持ち直し、立ち上がった。彼の影が伸びて、梅華の身体に影を作る。

ふたりは、話をしている間、決して足元を見なかった。下を見るような梅華ではない。後ろを振り返らない、と言い切るに相応しい姿勢であったから、ダイはいう気になったのだ。自分の、秘めたる思いを。

「おかしいだろ？・・・僕の生まれた時からを知っている人を・・・」

「いいえ、少しも」

彼女の答えは簡潔だった。

「追い掛けるのよ、ダイ。どこまでも。・・・どこまでも」

「・・・うん」

梅華の言葉に、彼は頷く。どこまでも・・・どこまでも続く結葉を、彼は創ろうと思う。痴がましいかもしれないけれど、それが彼の夢であった。

それから。梅華も静かに立ち上がって、間もなく終わる休憩の刻限のために、移動しようとする。ふたりの空気は流れていく。立ち上がったので日も葉も彼らに近付く。彼らが近付くのではなく、降り注ぐ陽光や枝葉が・・・彼らに近付くのだ。まだ若いのに、滅多に並ぶことのない名器を持ち合わせるふたりは、それだけの才覚と努力を持って、ここに居る。

ほんの一瞬しか交わらない時間かもしれないけれども、それでも、確かに・・・ここにダイは居る。

彼は梅華に振り返ると、ウメ、と呼んだ。いつもの口調で、あっさりと。

「・・・トップ（首席奏者）は、必ず取るよ」

彼はそう言った。あまりそういうことを宣言しない彼が、初めてそう言ったので、梅華はそれを聞くと少し驚いた顔をした。

しかし、すぐに嬉しそうな顔をして、私もよ、と言った。

行こうか、という声も必要ではなかった。彼の動きや僅かな音が、彼女を促すから。
そして、彼女の音を隣で聞くことができる回数は、もう、限られている。
だから。
持っているものを惜しむことなく、彼はこの日々を大事に生きようと思う。
それが、あの人が彼を見続ける唯一の方法なのだから。

■08

合宿の終盤には、ミニコンサートが終わった。

一般に公開されているコンサートで、スポンサーがついているので主催者、共催団体、後援の名義がずらりと並ぶスクリーンの中での演奏が終わると、普通はその場で奏者達は退場していくものなのだが、今回は趣が違っていた。

交流会を兼ねて、彼らは楽器を持ったまま、観客席から出口へと向かい、観客達の近くを歩いて、観客達が退場するのを出口で見送るのだ。

会場の防音扉を抜けた先の出口付近では既にたくさんの花が届いていて、噓せ返るような匂いであった。

また、関係者はそこで自分のこれぞと思う奏者に名刺を渡すために、すでにそこで待機していた。演奏が終わる瞬間には静寂が訪れるが、それが過ぎ去ると騒然が続く。

プレスリリースもあったし、撮影も入っている。けれども、それが問題ではなかった。皆、そういうことには慣れているので気にならない。彼が気にしているのは、ただひとつだ。演奏は完璧に近かったけれども、それでも章の合間などには気になった。

しかし、ダイは、演奏が終わって大きな歓声とスタンディング・オベーションの嵐の渦の中、観客席のうちのある一点を軽く睨んだ。

宿舎から少し離れた場所にあるコンサート・ホールでは、彼の師も演奏したことがあるという有名なホールがある。そこをジュニアでありながら使えるというのも、何とも贅沢な話であった。しかし、その中央に座ることができる首席奏者は限られている。特に、今季は様々な多くの曲ではなく、じっくりと聴かせる交響曲を題材にしているので小曲などは数が少ない。

決して短くはない時間を、ここにやって来ようと思う者達は、関係者ばかりではない。

無料開放であるから、面白くなければすぐに席を立ってしまうような、僅かな雑音でも集中が途切れる奏者の困点となる一般の聴者も混じっている。その中でも、今日の演奏会は成功であると言えた。

ダイも充実感が大きかった。今回は、自分からトップ奏者を希望したからだ。皆が驚いたが、それでも誰も文句を言わなかった。それだけの実力を、ダイが持っているからだ。今回、演目と彼の持つ音色の特色が合致していたこともあった。加えて、木管の首席奏者のメンバーが、皆、ダイと相性の良い楽器や音色の持ち主ばかりであったこともある。

だから、これは自分ひとりの力ではなく、いろんな作用が働いたものなのだと思っていた。

梅華はいつも通りであった。

でも、メンバーが発表された時。僅かに、微笑んでいた。それは、彼女の名前のところではなくダイの名前が読み上げられた時のことであった。ぴんと張った姿勢を保ちながら、それでも嬉しそうであった。彼女は目立った言動はないのだが、どうにも視線がそこに行くのはダイだけではなかった。多くの者が、彼女を目標にしている。彼女は長い間・・・首席奏者のリストから名前を消したことはない。才能だけではここまで維持することはできない。彼女の見えない努力がどれほどのものなのか、ダイは知っている。

そんな、いつもと変わらない梅華がいるから、ダイは何も配慮することなくいられる。梅華だけではない。他の者たちだって、同じであった。こんな優しい空間を、自分から捨ててしまうというのは、相当におかしな話だと思うけれども。

でも、彼にはやりたいことがある。そして、ずっと、傍に居たいと思う人がいて、その人の傍にいる人のことも・・・嫌いではない。

これから先。自分ひとりだと思い、孤独に苛まれることもあるだろう。音楽の路も同じであった。

でも、こんな風にして・・・結葉のように、皆の路が重なりあって、こんな風に出会いと別れを繰り返して・・・そして、少しずつだけれども、行き着きたい場所に近付くのだろうと思った。

葉が結ぶ夢というのは、どんなものなのだろう。

自分の夢だけではなく、皆の夢が重なり合っただけの夢。それが、彼の望みであった。

・・・その人はとても小柄であったので、観客席に座る者たちの頭半分程度、顔の位置が低い。それに茶色の髪の方は落ち着きがないので、演奏中でも頭がふらふらしているのがよく見えた。だから、指定席でなかったにも関わらず、すぐに彼女の姿を見つけることができた。

ダイは、その人の傍に居たいがために、音楽と違う路に行く。

捨てるのではないが、諦めなければならないものも、それまで日常であったのにそうでなくなるものも・・・多くあるだろう。

愚かだな、と思うし、他の路もあるのではないのかと思うこともある。でも、そうしない。結局、自分のしたいことというものはいつも、考え及ぶ限り考え尽くしても・・・最後に行き着く考えはいつも同じであるから。

それほど大きなコンサートではないのに、盛況であった。人の入りというものは、どれだけ宣伝したかにもよるが、どれほど興味を持たれているかということも大きかった。こういう活動は、花を咲かせるのと同じだ。地道に地を均し、水や肥料をやり、種を撒き・・・そして花が咲くまで長い時間をかける。一度限りの催事にしてしまわないように、どれほどの人々の努力があったのだろうかと思うと、単に遊びに来て演奏しているという気持ちには決してなれなかったし、メンバーも皆、同じ気持ちであったはずだった。

ダイは、少し明るくなった会場の観客席の階段をゆっくりと上る。その間、観客はみな立ち上がって拍手し続けたので、折々で、ペこりペこりと不器用に頭を下げた。新調したばかりの服に、タイがきつかった。

・・・こういうことは、いつになっても慣れない。

早く楽屋に戻って、タイを緩めて一息つきたいというのが正直な感想であった。この時ばかりは、彼の師のことを少しばかり偉大だと思う。

人々の賞賛が彼の糧ではない。でも、誰かに聞いて欲しいという面もあるから音楽とは音を出しているのだろうと思う。

しかし、一番見て欲しい相手が、彼の演奏をろくに聴いていないというのは、なかなか不機嫌になっても仕方の無いことであるように思えた。しかし、それを顔に出すことはしない。

皆が、笑顔でこの会場を後にして欲しいから。

もちろん、あの人にも同じであって欲しいと思う。

道すがらと言っても、ここに来るまでにはバスを乗り継ぎ、本数の少ない電車を乗り継いで来なければならない。

・・・そんな遠い場所に足を運んで来るのだから、彼女にも、同じ気持ちで会場を後にして欲しかった。

■09

演奏会終了後の会場というものは、如実に結果が出る。

演奏の出来が悪ければ、会場から出て行き誰も居なくなるまでの時間は、閉場時間よりもずっと前になる。

奏者の知り合い達はここで待ち合わせをすることはせず、直接楽屋に向かったり、裏口で待ち伏せしているから、一般の聴者だけの動きが続く。・・・だから、この空間は演奏の出来そのものを表す。

ダイは舞台から降りた後は、こっそり、こうして会場の風景を除くことがあった。

手応えがこうだとはっきりわからないときには、よくそうしたものだっただ。

でも、今日は少し違っている。今日は・・・皆と整然と並び、皆が見送るのだ。変わった趣向に、来場者達がわっと歓声を上げた。このところ、若手の演奏家に対する理解が深まった。ダイの師の時代には、もっと閉鎖的であったが、今は聴かせてやるという高慢さはなく、もっと観客と奏者が近い場所にあることを求められる空気になりつつある。

・・・コンサート・ミストレスは今季参加したばかりのまだ若い顔立ちの少女であったけれども

、どこかカオル・ヒビキヤを思わせる演奏をすることで注目を浴びていたし、ヴィオラの少年はこれでジュニアの世代から抜けてしまい来月からは留学の準備に入ると聞いた。だから、こうして・・・このメンバーでもう一度同じ曲を奏すことはもう、二度とないのだろうと彼は思った。

幾度演奏しても、この音を同じ様に再現することはもうできない。

人々のざわめきの中、彼らは決められた位置に立ち並び始める。会場の高い天井の下で、ダイの楽器は光を受けて淡く甘い色に輝いていた。演奏もアンコールも終わり、その後のこういった計らいについて、普通ならばすぐにでも楽器をケースにしまい込み、今日自分に課せられた練習の続きを行うために会場を後にしたいと言い出す者がいてもおかしくないのだが、今回は誰もそんな希望は言わなかった。皆が集い、人が轟めく空間を見て、ダイは、梅華と見上げた結葉の空を思い返していた。

ここは室内であるが、どこか空を思わせる。ああ、そうか、と思った。壁紙が、深い空天色だったからだ。

近寄ると表面は平らではなく、その中で、無数の影が重なり合っている。

彼は、そこで胸が詰まった。これで最後ではない。幾度か、こういう風景を目にすることになるだろう。でも、それはあと何回もあることではない。梅華が歎いても、誰かに引き止められても・・・彼は、これらが永遠に続かないとわかっているから、投げ出さずにひとつひとつを大事にしていく。それを教えてくれたのは、茶色の髪の毛、あの人だから。

全員で見送り、と言っても帰りを急ぐ退場者も少なくはない。まだ整列しきれない、彼らの慌ただしい見送りに微笑みながら、退場していく人々が幾人か見えた。また次回も来ますという声が聞こえてきたり、目礼だけしていく者も居る。そんな各々の反応の違う背中を見送りながら、ダイはあの子の姿を捜している自分の視線に気がつく。

彼女は非常に小柄なので、皆が静止している会場で姿を追う時と同じ様にして捜し出すことはとても難しい。先ほど、会場の中を通った時には、あの子の座っている側と逆の通路を上ったのですれっきり姿を見失ってしまい、外で待っていて欲しいと声をかけることもできずにいた。

彼女は、ひとりでふりとやって来る時にはいつもこうしてダイに声をかけないで帰ってしまう。楽屋に立ち寄ることができるように、関係者パスの登録もしてあるというのに、彼女は必要ない、と言うのだ。

「だって、ダイの演奏を聴きたいだけだから」

彼女はいつも、そう言って笑う。特別扱いして欲しいから、ダイの演奏会に行くのではないと言いたいのだろうな、とダイは考えていた。けれども、単に、純粹に、彼女はダイの演奏風景を見て、それで満足してしまっているらしい。

「ダイ」

その時、後ろから彼の名前を呼ぶ声がして振り返ると、梅華がそこに立っていた。

「あちらに居る。・・・ここは良いから、はやく行って」

梅華は場慣れしていることもあり、落ち着いた表情で静かにダイを促す。ちらりと梅華が視線を別の方向に流すと、そこに・・・見覚えのある人の後ろ姿が見えた。

オーケストラは構成人数が多いので、会場扉からホールの出口まで、両側にずらりと人が並ぶ。そして年齢も様々だが、彼らは無言でいられるほど、老成していない。演奏会が終わった後の昂揚感で落ち着かない空気が渦巻いている。

ようやく整列が終わり、会場内で準備が整った旨を知らせるアナウンスが流れ始めていた。

「今のタイミングしか、ない」

梅華は彼の隣で囁くように言った。ダイにしか聞こえないような、小さな声だった。そして彼女は軽く彼の肘をとん、と押し出す。

その間に、あの人の姿はどんどん、小さくなっていく。それほど長い距離があるわけではない。ホールそのものを出てしまえばもう、声をかけることもできない。それに人の声が段々大きくなり、高い天井であるのにそれらが響き渡って本来の騒がしさよりもっと大きな音がする。だから。・・・今、行かなければ、すぐに、また見失ってしまう。

「ウメ。ここを・・・少し抜ける」

返事を待つより先に、身体が動く。

同じパートの者に少し抜けると声をかけると、そのままダイは歩き始めた。

彼はいつも優等生で、これほど大人数の中で短い期間であるけれども生活するに必要な規定されたものを破ることはしない。

でも、今度ばかりは・・・ダイは、彼女に後を託すと、大股でその茶色の髪の人に近付いて行った。

何人かがダイに気がついて声をかけるが、まったく無視して、観客の通り道を歩く。

彼は音楽家の多くのように耳が良く、自分の靴がホールの床に響く音さえ聞こえる。

それなのに、彼女の気配を感じるために集中しても拾うことが出来ないなんて、と少し苛立った。

パンフレットを片手に、大きな鞆を肩に提げてどこか楽しそうに歩く彼女の後ろ姿に向かって、歩く。

彼女に、伝えたい事がある。そして、それは今でなければ、これから先には言おうと思っても、また、躊躇ってしまうだろうから。

彼がどうしたいのか、どうしていきたいのか・・・悩んでいることを、彼女は知っているから。

■10

ダイが声をかけても、しばらくその人は気がつかなかったので、幾度か彼女の名前を呼んだ。通り過ぎる時、両脇に居た仲間達がダイの姿を見て、彼の決められた立ち位置と違うところを歩いているので、皆がおや、という顔をしたけれども、会場の騒ぎに紛れて彼はそれらをすべて無視して遣り過ぎた。

彼は、もう、彼女を見送るだけではなくなった。

あの雪空の日。ただ、見送るだけしかできなかつた。ついて行ってはいけないのだと、わかっていたから。・・・彼女は迎えに来たあの男と一緒に行ってしまった。でも、今は違う。・・・違うのだ。

片手に楽器を持ち、慣れない服装であつたので、彼はいつものように走って彼女に向かうことが出来なかつたが十分だつた。

茶色の髪の方は、空を仰ぎながら歩くことさえ楽しんでいる。

そうだ。

この人は、そうなのだ。

たとえ、どんな時であつたとしても、空を見ることを忘れはしない。空の向こうの・・・白金の髪のある人に、報告するために。彼女は自分のみた風景をうまく彼に伝えることができないで悩んでいるから。だから、ダイを連れて散歩に出ても、どんなに寒い雪の日でも、彼女は空を見ることを忘れてたりしない。

彼女を振り向かせるために発した彼の声から漏れる彼女の名前が・・・それが幾度目なのか、数えるのはやめた。

彼女の名前を呼ぶ度に、周囲が振り返る。でも、それでも良かった。違う意味で注目されても、まったく気にならなかつた。目の前の人を振り向かせるために呼ぶ声というのは、音に似ている。でも、一連の長いフレーズではないから、人は振り返る。

そうではない。

合図や気を引くための音楽ではない。彼は、彼女の名前を呼び続けていたい。

それが世間一般的な絆でなかったとしても、それでも良い。

ただ、・・・彼は、彼女の心を揺さぶりたいのだ。

それが、音楽を続けている理由だ。

「やっと追いついた」

ダイがそう言うと、振り向きながら驚いた顔をして、目を瞞る茶色の髪の方は、どうしてダイがそこに居るのかわからない、と言った。

彼女は間もなくやって来る周回バスに乗り込んで、次の移動先に向かうところであった。でも、まだ、大丈夫だ。ダイは少し離れたバス停に入庫の気配がないことを確認すると、ほっと大きく深呼吸する。

そんな彼を見上げながら、彼女は嗤った。

「ダイ・・・まだ、会場に居るはずだと思ったけれど」

「抜けてきた。少しの時間なら、大丈夫だから」

それだけ言うと、彼はそれほど長い距離を走ったり歩き続けたりしているわけでもないのに、自分の声が震えて途切れがちになっていることに気がついた。

彼女もそれに気がついたらしく、立ち止まって自分の肩に提げている鞆の取っ手に手を掛けていた手を、ダイの腕に置いた。

「そんなに、急がなくても良いのに。この後、甲府に立ち寄るのでしょうか？そこで会えるのに」

「そこじゃ、駄目だから」

彼の言い方が切羽詰まった感じがして、彼女はふと、微笑みを閉じる。

改まって、彼はぺこりと頭を下げた。

「今日は、ありがとうございました」

その様子に、彼女が慌てる。

「何？畏まって言うことではないでしょう・・・」

「いや、こういうのは、畏まって言わなければならないから」

彼はあらかじめ、言おうと思っていたことの順番をきちんと決めていたはずなのに、彼女の前ではそうならないことにひとり、苦笑する。

ありがとう、と最後に言おうと思ったのに。これでは、ずっと考えていたことの通りにならないではないか。

・・・彼女はいつも、誰かの予定の通りにはならない。

・・・そして、彼女自身の予定のとおりにもならない。

だから、彼女だ・・・

だからこそ、彼女だけなのだ・・・

白金の髪の方は、彼女のことをそんな風に言ったことがあった。

確かにそうだ。その通りだ。

「花束を持って来る余裕もなくて。ごめんね」

「謝るなよ。花が欲しいだけなら、誘わない。来てくれただけで・・・嬉しいよ」

彼の背後が騒がしくなった。会場の退場時間になり、皆が一斉に会場から出てくる頃合いになったのだ。それまで、直接花束を渡したいと思っている者たちが、各々の目当ての者たちに渡したあと、会場から出口までのエントランスホールにまで続く人の路を通して出てくるのも間もなくのことであった。

ダイはそこで、彼女に言った。順序が乱れていると思ったし、唐突に何を言うのかと怒られるのも承知の上だった。でも、言いたいことから言った。

「僕、大学に進んだら、この楽器をあの人に返しに行こうと思う」

それだけで、何を言わんとしているのか、彼女は悟ったらしい。

はっと顔を上げる。

そして、ダイの顔をしげしげと見つめた。食い入るように、じっと。周囲の喧騒などまったく耳に入っていないようであった。

彼女の瞬きはとてもゆっくりだ。だから、時間の経過が自分のそれと違うのだろうと思わせる。でも、今、ここでこうして対面している彼女の中で、ダイの言葉が呑み込まれて・・・そして彼女に、言いたいことが・・・伝わると良いのにというダイの願いを含めてそれらを受け止めて欲しいとダイは強く、思った。

「それで、いつか・・・別のことで、僕だけしかできないことをしてみたいと思う」「捨てる必要はないと思うけれども」

「音楽を捨てるとは思わない。・・・ただ、音楽をしていたからわかったことも、あるんだ」

ダイの言葉に、彼女はじっと耳を傾けていた。彼は昂揚して大きな声を上げるということはしない。だから、自分でかなり動揺して支離滅裂だと思っている今のこの状態であっても、彼女にはきちんと伝わった。

「そう」

彼女は言った。彼が決めたことだから関与しないということではなく、彼の決断に彼女の言葉が大きく影響していることを承知しているから、何も言わなかったのだろうと思う。

思いつくままに喋っていたあの頃と、明らかに違う彼女の反応であった。変化することは簡単だが、元も戻せない変化もある。それを知っているものの、助言を求められていないのに自分の考えを押し付けるようなことはしない、と彼女は考えているらしい。それほど、ダイを信頼しているのだと思うことにしている。冷たいとは思わない。それなら、彼女はこうしてここにやっ

て来ない。

言葉だけを受け止めると、彼女の返事はとても素っ気なかった。

でも、ダイは知っている。

梅華も同じ様に返答をした。

彼女達はいつも、肯定も否定もしない返事で、ダイの決めたことについて反対はしない。

もっと驚かれるかと思ったのに、詰られるかと思ったのに。だからダイは思わず、尋ねた。

「どうして、何も言わないの？」

「どうして？何か言って欲しい？」

彼女が微笑む。

若いというより幼い笑いだ。

でもそれがいつも通りであったので安堵する。

彼女はとても小柄であったが、彼にとってはとても大きな存在である。

だから、今、言おうと思ったのだ。

彼は震える声で言った。自分が、緊張しているのがわかる。先ほどの舞台の上ではまったくそんなことはなかったのに。手先が震えて、うまく声にならなかった。

「ついでの立ち寄りでも良いんだ。できるだけ、多く・・・来て欲しい。無理は言わない。でも、あと少しだから、僕が皆の前で見せる姿を、見守って欲しい」

自分の望みだけを押し付けるような言い方しかできなかった。もっと練習していたのに。何を言うべきなのか、きちんと整理して言うことにしようと決めていたのに。

・・・そうできなかった。

すると、彼女はくすりと声を漏らして笑う。そして、彼の方に一步近づき、踵を上げて彼の貌を覗き込んだ。

そして、腕を伸ばすと、彼の顎を指で突いた。

「いつの間にか・・・見上げないと顔が見えないね」

目の前に、茶色の瞳があって、彼は言葉を失う。こんな風に覗き込まれたことがなかったから。彼女の身長を追い抜いたのはもう、ずっと前のことであった。だから、今になって気がついたことではないはずなのに、彼女は笑って言った。

「もう、私だけのための演奏は、必要ないよ」

「うん」

彼は頷いた。

本当は・・・彼女のためだけに演奏したかった。まだ、これからも。

でも、彼女は彼のこれからを見ていてくれるだろう。どんなに、遠くに居ても、彼女はいつもダイのことを忘れないでいてくれるだろう。

それだけは確信できる。

きょうだいで親でもないけれども、彼女は彼のことを、自分の心に入れてくれたのだから。

「ダイが、お願いするなんて珍しいね」

彼女がそう言ったので、彼は淡く微笑む。

「たまには・・・ね」

ダイの返事に、彼女は笑う。そして、そろそろ行くね、と付け加えた。

「またね」

彼女はいつもの通りに、そう言い残す。誰かを見送るのは苦手だ、と彼女はよく言った。それは、彼女がそれまでの日々の中で哀しい思いを幾度かしたからだ。これからも、決して経験しないとは言い切れない。でも、そうやって、彼女も大人になった。そして、ダイも・・・彼女を見送った時に、少しだけ、大人になったことを自覚している。無邪気に見送ることができなかった、あの日のことがなければこんな風に彼女との繋がりである音楽を断つ、と彼女に言い出すことはできなかつたらう。

この絆だけしか、彼と彼女の間に存在しないというわけではないから。だから、もう、不安に思ったり心配したりすることはしなくて良いのだ。

「まだ、もうひとつお願い事がある」

ちょっとそこまで、というような気軽さで背中を向けた彼女に、ダイは声をかけた。

彼女が立ち止まって、振り返る。茶色の髪が翻って、茶色の瞳がダイを見た。

彼は、楽器をぎゅっと握った。これだけはちゃんと言わなければならない、と心に決めたことの殆どをきちんと言う事が出来なかったけれども。でも、これだけは言って彼女を見送りたいと強く想っていたから。

「なに？」

彼女が笑う。ダイのお願い事なら、仕方が無いわね、と言った。

肩にかけていた鞆を持ち直す。踵を浮かせて勢いをつけなければそれは持ち上がらないほどたくさんのもが入っている。彼女のすべてだ。夢も希望も未来も過去も、その鞆の中にすべてを詰め込んで、彼女は今でも様々な場所に軽やかに出歩く。そして行く先々で、その鞆に何かを詰めて帰ってくる。

そういう、人なのだ。

彼女が本当に帰る所は・・・ダイもいるあのアパートではないのだ。

彼女だけが叶えられる願い事であるとわかっているのに、ダイの目の前で屈託無く笑う彼女の輪郭に暁があたって、彼女の輪郭が淡く発光しているような錯覚を覚える。

そんな彼女を眩しそうに見つめながら、ダイは少し大きな声で言った。

もう、叫ぶことはしない。

彼は大きな声で周囲を憚らず叫ぶことのない少年になった。

こどもから、少しだけ・・・大人になった。

彼は大きく息を吸い込んで、言った。

「・・・あの人に、泣かされたら、いつでも戻って来るんだぞ。だから、それまでは笑

って・・・あの人を、笑わせてやってくれ」

彼はそれだけ言うと、彼女の驚いたような顔を見ながら、笑った。

彼女にとって、ダイは結葉のひとつでしかないかもしれない。多く出会ってきた人々のうちの、ひとりなのかもしれない。でも、その多くの出会いと別れの中で・・・彼女はたった一枚の葉を見つけた。

そして、ダイという葉が・・・結葉の中できらきらと日を受けて輝いていても、雨に濡れたり枯れたりしそうになっただとしても、彼女はダイのことを忘れてたりその他大勢という括りにしない。どんなに他の葉に埋もれたり隠れていたとしても、彼女はダイのことを忘れてたりしない。だから・・・もう、ふたりだけの時間を彼が持たなくても、もっと違う夢を抱いても、彼女はそれで良いと言うのだ。

しばらく、彼女は無言でいた。

呆然としているようにも思えるし、どこか嬉しそうな顔にも見えた。でも、それはすぐに見えなくなってしまう。

会場は散り散りになった来場者達が、主催者の粋な計らいに驚き喜んで良い演奏会だったね、と言い交わしながら出入口から出てき始めていたからだ。

人の波が溢れ寄せてきた。

すると、あっという間に・・・彼女は非常に小柄であるので、姿が見えなくなってしまう。

周囲はすぐに、騒がしくなる。

もう、ダイも戻らなければならない。それほど長い時間を空けられない。

彼女のために演奏をしていた彼ではなくなった。

務めとは思わないが、演奏会は楽屋口を出るまで演奏会なのだ。途中で放棄することはできないし、したくなかった。たとえ、彼女のためでなくても。

・・・そういう風に自分を戒めることが嫌ではなかった。

一応、挨拶は済ませていたし、そのまま彼女が出立しても構わないと思った。

この人の流れに逆らって戻ってくることはしないだろう。

すると。

「ダイ」

強く叫ぶ声が聞こえた。会場に戻ろうとした彼を呼ぶ彼女の声が聞こえる。

でも、姿は見えなかった。

はっとして足を止める。そして、彼は思い切り踵を上げて背伸びをした。

明らかに観客ではない彼の格好と楽器を交互の眺めながら、周囲の人々がちらちらと彼の様子を窺い見たが、彼はまったく気にしなかった。

そして、彼が顎を上げて彼女の姿を探そうとした時。

声が、聞こえた。

「ダイ！・・・私・・・あんたのことが、大好きなのよ！」

彼女の声が、涙声だった。

張り裂けんばかりの声で、ホールの出入口に居た人達は、驚いて彼女を見たが、彼女は全く気にしていなかった。

人の波が・・・僅かに開いて、彼女の顔がちらりと見えた。ダイと目が合う。

ダイは、彼女の名前を呟いた。

年の離れた、彼の大好きな人は、ダイに向かって満面の笑顔を浮かべる。

彼は無言で、頷いた。

それから、彼女はにっこりと今一度微笑むと、勢いよく向きを変えて、ダイに背中を向けて走って行った。

人にぶつかりながら、先を急いで走って行く。

彼女は彼の結葉だ。彼女の結葉にダイが混じっているのと同じ様に。葉が重なり合い、木漏れ日を感じ、多くの葉が茂って重なる。

あっという間に、また、彼女の姿が見えなくなってしまったが、ダイはすぐに自分も人混みに背を向けて歩き出した。

少し先には、梅華が居て、こちらに視線を向けていた。

彼はその場所に急ぐ。

もう、彼女の姿は探さなかった。

また、すぐに会えるから。

・・・彼の結葉に。

だから、それ以上見送らなかった。

彼女もわかっていた。

彼は、彼女に近付くために努力しなければならない。これからも。これまで以上に。彼女がダイに叫んだ言葉を胸にしまい込んで、ダイはこれからも、彼女の結葉になりたいと思う。

自分は声を上げることができなくなってしまったのに、彼女は叫んで彼に伝えてくれた。

彼女の声を、忘れない。

決して、忘れない。

大好きなあの人が、大好きな人の傍で笑っていられるように、彼は彼女の背中を押し出し、見送る。

それがダイの夢だ。

結葉の夢なのだ。

小さくても葉が重なれば・・・大きな、憩いの葉陰を創り出すことができる。

「まったく、どっちが大人かこどもか、わからないじゃないか」

ダイはそれだけ言うと・・・会場のエントランスをくぐり抜けて、元来た道を今度は小走りで戻った。

(FIN)

●Note 01

その日は、ダイは自分の星回りは悪い日なのだ、と思った。

彼も人間であるから、調子の良くない日がある。

通年を高気圧の中で過ごすことはできない。

集中出来ない時期もあれば、憤りで不本意な結果を出してしまうこともある。

しかし。

それを言い訳にするつもりはなかったのに、彼の師であるカオルに叱責されても・・・ただ、黙ってそれを受け止めるだけであった。

彼の師であるカオル・ヒビキヤは世界を巡る音楽を奏でる者である。

それが、旧友に頼まれたからという理由で、ダイというまったくの初心者を弟子に迎えた。

誰も弟子にしない彼女が、ダイを引き受けたのだ。

遅い開始であった。

だから、この世界では大成しないともわかっていた。

この世界しか知らないというわけではない年齢から開始してしまった。

それ故に、目移りするのだ。他の世界がどれほど素晴らしいか、ダイは知っている。

視野が狭いということではない。でも、ダイは、音楽だけしかできない人間になりたくなかった。それでいて、片手間にするものでもないと思っていた。

ある意味、決心が必要だった。

高校を卒業する時期になるまで、進路を決める頃になるまでに・・・音楽を続けることについて決断をすることになるのだろうと予感していた。

音楽を専門とする学校に進学するつもりはなかった。

だから。

ダイは、本当に、マリナという人物はカオルにとって大事な存在なのだと思った。

断れない相手であったのだろう。

付き合いというものは筈になることがある。

マリナがカオルに、ダイのことを何と言って紹介したのか、詳細は知らない。けれども、彼が与えられた彼女からの恵みを自分から手放すようなことはしたくなかった。

カオルは厳しかった。

少しでも練習を怠るとたちどころに「今日は帰れ」と言って無表情になってしまう。

姿勢が悪いと叩かれた。挨拶などの礼節を欠けばレッスンもしないで追い出された。

そして、彼女の聡い耳では、ダイの練習成果の過不足を察知するまでの時間を多く必要としなかった。

日々の練習のうち、基礎練習がどれほど退屈であったとしても、それを怠るのであれば上達はしないと、常々言っていた。

それは、彼女が、幾度か・・・楽器を手にして華やかな舞台に立ち続けることはできないと思うような状況を経験してきたからなのだろうと思う。

この世界は、派手やかな曲を奏することができるようになるのが良いこととされているわけではない。

その曲の構成、歴史、作曲者や多くの奏者の解釈など、ひとつの曲を完成させるときには自分のすべてを捧げるような覚悟でのめり込むことを求められる。

片手間にはできないものだ。

だから、ダイは独奏者ではなくてオーケストラ奏者であり続けた。

ひとつのことに、のめり込むのが、怖かったのかもしれない。

ダイは、マリナにすまないな、と思った。

彼女が良かれと思い用意してくれた舞台の上で、ダイはその役割を十分に発揮することができないのだと思うと。ただ、申し訳ないな、と思った。

両親も姉も、自分のことを応援してくれている。

演奏会があると、チラシを経営しているアパートの隅に貼り付け、本当は有償のチケットも、必ず来てくれることを念押ししながら、無償で近所に配る。

ダイの演奏会の時には、様々な名前で花束が贈られるが、それらは皆、家族からであったり・友人が名前を分割して、花束を数多く用意してくれたりしているからなのだ。

今日は、朝からあまり気分の良い状態ではなかった。

姉と些細なことで諍いになった。

ダイは特別だから、と言われてかっとなった。

彼の努力や忍耐を否定されたと思った。

もし、彼が特別であるなら、特別になりたい相手を選ぶことが出来ない今の状態にはならないはずである。

彼が今の状態を続けるには、理由がある。

しかし、それは姉には言えなかった。

怒鳴ることはしなかったが、自分の家族でありながら無神経だと憤った。

血族であるから、一緒に暮らしているから何でもわかり合えるというのは違うとわかった。

・・・でも、そんなときも、取っ組みあいの争になることはない。
彼はどこか・・・自分の家族の間にでも一線を引いているように感じる。
自分のことなのに、どこか冷静になっている自分がある。
それは寂しい。彼は、いつの間にか・・・大人になってしまっていたのだ。親友と別れた時から。
それより前に・・・マリナをあの雪の日に見送ってしまったから。

●Note 02

占い事を信奉しているような、クラスの女子とは違うけれども。
自分の努力の至らなさを何かのせいにはしているわけではないけれども。

なぜ、彼は星回りが悪い・・・つまり、タイミングが悪かったと思うのか。
その理由が、目の前に座っていた。

今日は、ダイのレッスンを早々に終了してしまった。
集中力散漫であるのなら、次は来なくて良い、と言われた。
他人から、これほど強く叱責されたことのないダイは、ただ、俯くばかりだった。
泣き出してしまったり、不平不満を感じたりすることはない。
カオルだって、自分の貴重な時間をダイのために費やしているのだ。
こんなに立派な設備の中で、違う世界で活躍する有名人が自分のことを見てくれる。それだけで
大変名な僥倖とも奇蹟とも言えるような状況に満足できないと思うわけはなかった。

だから、カオルの叱責に臆し、次から足が遠のくことはなかったけれども。
でも、レッスン室を出たところで、彼は足を止めてしまった。
防音室の中に居たから、人の気配に気がつかなかったけれども。

オーボエの運指は法則を覚えてしまえばそれほど難しくはない。
けれども、今ひとつ自分の望んだ音として出し切れていない。
もっと自在に、自由に吹くことが出来たのならどれほど楽しいだろうと思うが、それより前にカ
オルに指定されている基礎練習や集中力が欠けてしまいそうなロングブレス練習ばかりで、少々
辟易していたこともあった。ビブラートは禁止されていた。
そしてカオルが練習曲以外を指定することもなかった。

他の皆が他の教室で復習しているような曲の譜面をダイは手にすることは出来なかった。唯一、
部活動での練習が息抜きの場所になってしまっているような状態だ。
それでも、彼の日々の努力は成果を上げているようで、その上達の速度が他の者と違うので、ど

の先生にレッスンについているのかという質問を、顧問の先生にされたばかりであった。彼は言葉を濁して知り合いの音楽家です、とだけ言った。

カオルのことを自慢できるようになるまで、彼には足りないものが多すぎると、自分では思っていたからだ。

カオルやマリナに恥ずかしい思いをさせたくない。

ただ、それだけであったが、自分の態度に自分自身が酷く落胆した。

そんな時に、カオルに叱責され、姉と口論し、あげくの果てには目の前に居る、最悪のダイの困惑の源がダイに渾身の一撃を加えたのだ。

一番、見られたくない人物に、彼が肩を落としてレッスン室から出てくるところを見られてしまったのだ。

ダイの唇の両端が、意図していないのにきゅっと下がった。

頬骨のあたりが細かく痙攣する。自分が緊張しているのだとわかった。

レッスン室の防音扉を開けると、そこにはダイには到底その価値がわかりそうもないほどに高価な音響設備を取りそろえた部屋がある。膨大な数の楽譜があったが、カオルの昔の写真などは飾っていなかった。

殺風景であったが、膨大な量のそれらは作り付けの背の高い棚にきちんと分類されて時折カオルがそこに手を伸ばしていることはわかっていた。

過去に使った楽譜やスコアを眺め、希少価値の高いレコードやCDなどを揃えている場所で、カオルがどれほど昔から音楽に携わっていたのかがよくわかった。

だからこそ、ダイは、この世界に魂を捧げるほど自分は傾倒できないのだと思い知る。

楽器は、その小広間で準備をしてからレッスン室に入る。だから、楽器ケースも自分の荷物もそこに置いたままであった。

彼のためだけに用意された、飾り気のない水色の革張りのソファが彼の定位置であった。他に弟子がいないので、ダイが通うようになってから、彼が座り楽器を調整するための小さな椅子が、この場所に増えた。

濃い色合いではなく、薄い灰色の混じった蒼色で・・・座り心地は抜群であると思ったが、その色があまり好きではなかった。

・・・あの人の眸を思い出すからだ。

その色と同じ、青灰色の瞳の持ち主が、その椅子の肘当てに腰を下ろしていたのである。

ダイは声に詰まった。

陽気に挨拶するような関係でもない。気まずいな、と思った。

彼は顎を上げて、膨大な量の譜面の背表紙を眺めていた。瞬きを忘れたかのように、長い睫の下の眸は動かない。その色と、彼が体重を預けている椅子の色はとてもよく似ていた。白金の髪がとにかく人目を引く。東洋人が脱色をしたような、くすんだ薄さを持つ色ではなくて、本当に艶のある白金髪なのだ。神経質そうな鼻梁も頬もどこか作り物めいている美しさであったが、それは配分と配置が完璧な配合であったからだ。酷薄そうな薄い唇が、誰の名前を呼ぶときに綻ぶのか、ダイは知っている。

・・・とても、よく知っている。

●Note 03

そこは自分の場所だ、と主張することができなかった。

あまりにも現実離れした人がそこに居る。

鍛えた鋼のような、筋肉質であるけれども決して度を超えることは無い身体の曲線は少し離れたダイの立っている場所からもよくわかった。

それに、運動神経も悪くはないらしい。

ダイに気がついて、僅かに腰を浮かせた時の間合いがそう思わせた。

どこか、劣っているところがあれば、ダイはそこから彼を越えることが出来る野かも知れないと思っただろう。

けれども。

彼には一分の隙も無かった。

人間だから、何かしら欠点が見え隠れするのだろうと思うが、彼は不完全ささえ完全にさせてしまっているように思えた。

薄い色素の持ち主だった。

しかし、彼には極めて濃い色が見え隠れしている。

シャルル・ドゥ・アルディの背中には、拒絶と孤独と傲慢さと気高さが同居していた。

僅かに背を屈めて、考えに耽っている物憂げな様は、大人の憂悶を知らないダイでさえ胸に押し当てられたように疼痛を感じる。

しかし、ダイはそのまま立ち尽くしている状況から次の行動に移る。防音室は完全防音とはいつでも高温などは振動として響いてくる。・・・カオルのレッスンが始まったからだ。出て行け、と言われていたような気がした。しかし、戻るわけにもいかないし、今日のレッスンを最初からやり直して欲しいという贅沢はダイには言う事が出来なかった。

どちらにしても、この状態ではカオルに嘲ら笑われるだけであろう。

だから。

彼は、唇を引き締めた。楽器をぎゅっと握りしめ、楽器が皮脂で傷むことがないように、超微繊維のベルベットクロスでそれを軽く握るだけにする。

「・・・そこの荷物を取りたいのだけれど」

ぶっきらぼうな言い方だ、と自分でも思った。

挨拶もなく話を始めるには相手はダイに無関心そうであった。

ここで何をしているのか聞きたくなかったけれども、言わないことにする。

大体の察しはついていてた。

世界を巡るカオルの心臓はとても脆い。何時間も立ったままで神経を集中させて演奏する独奏家たちは、運動選手と同じほどの体力を消耗する。

日本人にしてはかなり大柄であるカオル・ヒビキヤであったが、それでも彼女の具合があまり良くない時にはすぐにわかった。

唇の色が紫に近い赤であったり、肌の色が以上に白かったりするからだ。

まだ、レッスンを受け始めたばかりであり、彼女の全てを知っているわけではない。でもこうして定期的に時間を持って貰っているので、何となく、体調が不良の 때가ダイにもわかるようになった。

彼女が弟子を取らないのも、こういった健康問題に影響しているのだろうと思った。

かなり管理された生活を送っているというのはわかったけれども、彼女はやはり、音楽を取り上げられたら、生きていけないのだろうと思うほどに・・・音を愛し楽器を愛しているのだ。

シャルルはそこで顔をこちらにちらりと向けた。

白金の髪の下にあった青灰色の双眸がダイを捕らえるがすぐに視線を元に戻してしまった。

「・・・聞こえないの？楽器ケースを、取らせてください」

そこは自分の専用スペースだという主張はしなかった。ここは彼の家ではないからだ。椅子の足元に立てかけてある楽器ケースをシャルルがうっかり踏みつぶすのでは無いのかと内心焦る。

彼は、まだ、自分の楽器のレベルを決めることのできない程度だ。かなり上達して、もっと上のランクのものを持ったらどうか、と言われるが。彼は今のままの貸与で構わないとだけ言っていた。オーボエはかなり高価だ。最初からそんな高価なものを持つのは自分の音を見つけることを阻むと思うし、家族にそんな負担をかけることはできない。もちろん、現状で満足しているということではなかったが、それでも次を望めばきりが無かった。

それに、次のジュニアコンクールで入賞すれば、彼の住んでいる区の教育委員会が推奨する、若手音楽家の集いというものの更に下ではあるが、それらに参加し研鑽を重ねるための候補準備生として登録することができる。

そうなれば、スポンサーとして楽器店から、中古ではあるが良い楽器を貸与してもらえる制度を利用する申請をすることができるのだ。

ダイは自分の声が上擦っているのを感じる。逆毛が立つような、肌がぴりぴりとした痛みを伝えてくる。

ああ、厄介な相手に会ってしまった。

そう思った。

彼は褐色の細い線で描かれた格子柄のシャツを着ていた。衿がかためのもので、彼の髪に良く似合っていた。二番目までの釦を無造作に開けているようであったが、それは彼がオフであることを示しているという合図のようでもあった。

マリナ・イケダであるのなら、彼がどうして無表情なのか、何を考えこんでいるのかわかるのかもしれない。しかし、マリナの口からあれこれ・・・この人物の話を書くことはしたくなかった。今は、まだ。

だから、今、目の前にいる人のことを気難しい外国人とだけしかはっきり言う事が出来なかった。それから、日本語が流暢で・・・マリナ・イケダをこよなく愛しているのだということもわかっていたが、それを認めたくなかった。

●Note 04

目の前の人物に対して気を遣うというアピールを本人に送る方が好ましくないと思っていた。だから、できるだけ遣り過ぎせるものを多くすることに専念する。でも、強ばった顔になって、自分が身構えているのがよくわかった。カオルのレッスンの時と異なる緊張が走る。

ダイの声が聞こえていないはずはないのに、彼はダイの存在を無視する。

彼は、人が嫌いなのだろうな、と思った。

これほどの大人になれば、愛想というか人への敬意を持つものだが、彼にはそれを感じる事ができない。

・・・なんで、こんなヤツがマリナ知り合いなのか、わからない

そう思っはみたものの、マリナやカオルが彼と懇意にしている事実は変わらない。

実際、来客を接遇するためにある部屋を使わないで、彼はこうして自由に出入りできる権限を与えられている。

理解できないという言葉で解決するのは簡単だ。

しかし、目の前の事態を解決する言葉にはならない。

ダイは、溜め息をついた。相手を消沈させるには溜め息が有効だと聞いたことがあったが、それをシャルルの前で披露するわけにはいかなかった。

自分がこどもであると主張しているようなものだからだ。

シャルルの足元にある楽器ケースが、ダイが先ほど置いた時より少し移動しているような気がした。そこに座りたいのだろうか。

革張りのよく手入れされた椅子は、ダイの家では持つこともないような、とても品の良い椅子であった。足の部分の焦げ茶色と相まって、涼しげでありながら決して寒々しくない色を帯びて

いる。

柔らかな革の感触というものを初めて知ったダイは、彼の友人の家にあった椅子と似ているな、と思った。

今は、離れているけれど、ダイにとっては大事な友であった。

シャルルにダイはぼそりと言った。

「カオルならレッスン室だよ」

「あの苛つく大音量が聞こえないのなら、君の聴覚には問題があるな」

驚くほど、流暢な日本語が飛び出して来た。しかも、彼の傲慢な態度も一緒に表すことが出来るほど堪能であるらしい。

しかし、ダイは、おかしいな、と思った。

カオルと待ち合わせをしているようであれば、今は通常のレッスン時間であるので、もっと遅く来るはずである。

カオルはここに人が大勢押し寄せることを好まない。

彼女の人柄からは想像できないが、ここは、誰かと一緒にいる時間を持つための空間ではないのだと感じる。

カオル・ヒビキヤに纏わる様々な出来事は、ネットを検索すればすぐにわかることで、音楽業界の中でも、普通に知れ渡っていることであった。

それでも。

彼女は挫けなかった。

彼女は負けないで続けた。

それが自分の命をすり減らしているのかもしれない、と思わない。

それでも良いのだ、と思っているのだろう。

だから、こうしてダイと誰かの顔を合わせることをしなかった。

最初にマリナがダイを連れて来た時が、ダイがここで見た最大人数である。

それ以来、マリナは同行するとは言わなかった。

そして、ダイも付き添いを頼むことはなかった。

彼女が、自分以外の人と自分の知らないところで約束をしていることが、気に入らなかった。

でも、ダイの所有物ではないのだ。マリナは、ダイをよく知っているが、マリナの知らないダイが存在するように、ダイの知らないマリナが存在する。

シャルル・ドウ・アルディがカオル・ヒビキヤやマリナ・イケダと知り合いであることについて、ダイは踏み込む必要もないし、それを主張することもできない。

するつもりもない。

でも、はじき出された気がして、少し寂しいのだ。

「・・・苛立つ音？」

ダイは、シャルルの言葉を拾った。ダイには、いつもと同じにしか聞こえない。

そもそも、楽器が異なるので、彼女がとてつもなく凄い人なのだということしかわからない。

まだ、それしかわからないのだ。

しかし、今は・・・カオルは、ダイに課したように禁欲的な基礎練習をしているところであった。

ダイナミックな彼女の持ち曲（奏者が得意とする曲。急な演奏を必要とするときに選択する曲で、周知度が高い曲が多い）をいきなり練習することはない。

指や楽器や弦をあたためて慣らす作業に余念が無い。

曲なのか音の延長なのかわからないようなアップダウンを繰り返しているだけの、基礎練習。それを、彼は苛立つ音、と表現した。ダイは、持っていた楽器を再び握りしめる。

●Note 05

指や肘などの関節がゆっくりと慣れていくために必要な緩急の音が流れてくるが、ダイにはそれがシャルル・ドゥ・アルディの指摘するような「とても苛立つ音」には聞こえなかった。

ダイがカオルを失望させるほどの存在ですらないのだと思い知る瞬間であった。

いつもと同じ。いつもと同じ様に自分の調子を崩さない。

だから。苛立つ音、と聞いて顔をシャルルに向ける。

「いつも通りだよ、カオルは」

彼の師匠であるので、先生、と呼んだら、カオルと呼べと言われた。それ以来、彼女のことはカオルと呼び、カオルは彼のことを「ダイ」と呼ぶ。名字も下の名前の呼び方も、彼女は気にしない様子だった。

マリナの連れてきたダイという人物であるというだけで充分であるようだ。

金品も受け取らない。

でも、ひとつだけ、彼女はダイに要求した。

・・・レッスンのある日には、その後の予定を入れないように、ということだけだった。

時間を気にして受ける指導では集中できないから、とダイは理解していたが、それだけではないと気がついた。

・・・カオルは・・・気まぐれに見えるが、レッスンが終わると、ダイに自分の練習風景を見せたり、こうしてダイを自分の空間に招いたりする。

しかし、最初の日以来、誰かと顔を合わせることは殆どなかった。

カオルとダイだけの賑わしいけれども、穏やかで優しくて静かな時間が流れて行く・・・そう思

っていたのに。

白金髪の男が、それを台無しにした。

いや、台無しにしたのはダイの方であったのは、承知している。

今日は、ダイが何もかもに責任を取る日であった。

そう思わなければ、目の前の人物に寛容になれなかった。

ダイの言葉に、シャルルはふっと嗤った。ダイは、かっとなりを染める。誰かにこんな風にあからさまに見下されるのは・・・あの雪の日以来のことであった。

彼はまわりとはそれほど波風を立てることのない人物として皆に認識されていた。自分でもそうなのかな、と思う。誰かを特に嫌いだと思ったりすることも、否定することもない。唯一、家族とマリナと・・・本当に限られた人にしか意見することがなかった。

今回の姉との諍いの原因も、弟であるダイが、手の届かない場所に行ってしまうのかもしれないと思った姉の杞憂から来るものであった。

その予感は正しいと思う。

姉は、ダイの中にある変わりゆくものを感知しているのだと思った。

音楽で身を立てることは・・・ないと思う。しかし、自分が何かにむかって、この国を飛び出していくのかもしれないという予感めいたものがあつた。

この国が窮屈であるとは思わない。でも、カオルやマリナを傍で見ていて、自分はそうなれないと思いながらも、きっと・・・いつか、自分は外の世界を見たいと思う気持ちに勝てないのかもしれないと思った。

順調に進学し、この国で就職し、時折取れる休暇に満足しながら、毎日与えられたものをこなしていく日々を過ごしていく路が自分に適しているのか、疑問に思うのだ。

マリナやカオルのようになりたいとは思っていない。不安定な日々を送りたいとは思わない。ダイはまだこどもであったけれども、大人ではないからこそ感じるものがあつた。将来の確約などは・・・誰も約束できない。

けれども、どこかこう、鬱屈したものが自分の中にあつて、それを姉が見抜き、ダイは怠惰だと言って口論に至ったことを考えると・・・今日のレッスンは、途中で強制終了されてしかるべき結果であつたのだろうと思った。

「それを聞いたら、彼女は失望するだろうな」

「なぜ？」

「オレに、『なぜ』と聞くから」

禅問答に答えるつもりはなかった。

ダイは唇を横に強く引いて、彼の足元にある楽器ケースと荷物を引き寄せるために体を屈める。彼が言う彼女、というのは誰のことを指し示しているのだろうか。カオルだろうか。それとも、マリナだろうか。どちらにしても、ダイに「お前はお呼びじゃない」と言っているような口調のシャルルに、親しく会話しながらこの場を遣り過ごす義理も感じなかった。胡散臭いな、と思うが、彼は確かに正真正銘の・・・フランスの要人なのだ。

目の前に、滅多に逢うことが出来ないような有名人がいたとしても、ダイはまったく気にしなかった。マリナの影響なのかもしれない。人の肩書きに興味はなかった。ただ、シャルルがカオルとマリナの旧くからの知り合いであり、そのうちのひとりと・・・悔しいが恋人関係にあることだけで、ダイには十分すぎる情報であった。

「誰もがっかりしない。ボクが一番、わかっているよ・・・そんなこと」ダイはそれだけ言うと、楽器を持っていた反対側の手でケースを引き寄せた。中身は今、ダイが身体に添えて持っているからそれほど思いものではない。床の上を滑ってダイのところに到着したそれらを自分の足元に引き寄せた。一度には持ちきれないし、そんなことで抱えている楽器に思わぬ衝撃を与えてしまい、破損させてしまう方が怖かった。

●Note 06

彼は、そっと天上に顔を向けた。物憂げで、何もかもに気懈いのだと言わんばかりの憂鬱そうな顔。

マリナとは正反対であった。

彼女はいつも澆漑としていて、消沈した時でさえ躍動している。彼のまわりだけ、時間が止まっているような・・・そんな空気だった。

しかし、ダイはそれに見惚れるほど、彼に心酔していない。

ただ、見目が良くて日本語に堪能な奇妙な外国人にしか見えなかった。

そして彼は、シャルルが場所を譲らないので、諦めて彼の脚元に屈み込んだ。

恐ろしく長い脚と小さな腰が見える。

けれども決して人形のようにではなく、着ているものに隠れて見えていないだけだが、筋肉質で均整の取れた、計算された鍛え方をしているのだとわかる。

ダイにも少しばかり武道の心得がある。だから、わかるのだ。

彼にそれを教えてくれた人も同じ様な体格であった。

人に言われて場所をあけるということを知らない人種も居るのだと思った。

彼の友人の不磨などは、眼を瞠るくらいの裕福な生活を送っているが、いつも謙虚で、皆と違うと言われることを恥じていた。

今は別の場所で暮らしているが、今でも彼とは離れていても友達であった。マリナが、よく言っていた。

どんなに離れていても、また逢いたいと思うことが大事なのだ、と。

またね、と声を交わしたのなら。

それは必ず再会できるまじないになるのだ、と。

傲慢で不遜な態度の人物を目の当たりにして、彼は無関心を装った。

マリナを軽々と抱き上げる人物。

そして、彼女が失調するまで祝いを送りたいと想われている人物。

ダイはまだ少年であるけれども、マリナとシャルルが友達以上の関係であることくらい、察することができる。

わけもなく惹かれて・・・遠く離れていてもきっと迎えがあるのだ、とマリナは信じていたのだろうと考えると、胸が痛む。

この痛みは・・・きっと、これからも繰り返すのだろう。

そして小さな棘ほどなかなか抜けないのだ。

でも、ダイのいつもの日常で足りないものがあるから、カオルに拒否されたのだ。シャルルが居ても居なくても・・・関係ない。

こんな状態のまま、マリナに会いたくなかった。

今、目の前に居る白金髪の男性が日本に居るということは、マリナも近くに居るのだろう。

ダイは、マリナの居ない四季を・・・連続しない季節を過ごすことに対して、シャルルに憤懣を訴えても、それは不当ではないと思えた。

春が一緒でも、夏には居ない。

秋と一緒に迎えたいと準備しても冬には居ない。

しかし、それは言わなかった。

マリナが・・・あの黒髪の人と一緒に居ない理由を、ダイはまだ聞いていない。そして、違った想いで、目の前のこの人と一緒に居ることも、ダイは詳しく経緯を聞いていなかった。

それを、彼が幼いからだと思っているのか・・・それとも、誰にも言えないのだと思っているのかは・・・ダイには、わからなかった。

●Note 07

ダイが、楽器をケースに収納しようとして腕をいま一度伸ばした時に。

シャルルはそれを待っていたように言った。

・・・ダイがここで挫けてしまうようであれば、シャルルはダイを見限るつもりだったのだ。

彼に纏っている冷然について、少しばかり理解できた気がする。

ダイの持っている楽器は、シャルル・ドウ・アルディから見たら目に入れるまでもない品であるかもしれない。

けれども、今、身の傍に置いているオーボエは、彼の全てであった。

それに溺れることはない。それ以上を求めはしないが、ダイは自分の分にあわないものを手にする愚かしさは持ち得なかった。

己の持つものだけがすべてで絶対だとは思わなかった。

カオルに教わっているから、自分が最高の弟子であるということにはならない。

楽器の値段というのは可能性でしかない。

彼が今、持ち歩いているものは、彼にとっては分が過ぎるものである。

・・・この年齢になって音楽を始めることの辛さを教える象徴そのものであった。

性質や、業界の独特の色や温度や気配を、ダイは知ることが出来ない。

今、どんな音色が求められて、どんな奏法が求められているのか、ダイにはわからない。

音楽という世界に、生まれた時からどっぷりと浸かりきっている者と、ダイは明らかに違っていた。

・・・それなのに、カオルは彼を教えようと言ったのだ。

古典を聴けとは言われていたが、自分がどれだけ異質であるのかということについてはまったく聞かされていなかった。

他に弟子がないから、比べようがなかった。

同じ環境に居る、他の師に教えてもらっている者のことは、ダイは積極的に聞くことはしない。彼が、皆と同じではないことを理解していたからだ。比べても・・・比べられないのだとわかっていたし、そのことについて他の誰かと違う自分を歎くのは、彼にはとうていできないことだとわかっていたから。

幼の時から日々当然のように浴びた特別な雨のような来音を聞くことがなかったのは、ダイの責任ではない。けれども、そういう環境に居なかったことによって、自分だけ感じるものもあるのかもしれないなと思ったのだ。

幼い時から英才教育を与えられた者は、同じ様な生活環境を過ごしている。

突き指を懸念して体育に出席しなかったり。

失調を気にしてコンクール前は学校を休ませたり。

そういう特別な配慮が、ダイには存在していなかった。

だから、カオルも・・・特に、マリナもダイに対して何も壁を作らないのかもしれない。

カオルは多くを語らないが、マリナは自分の都合ではない事情で様々な場所を転々と住み歩いた経験を持っている。

思うとおりに習い事ができなかった時もあったのだろう。

趣味や習い事という範囲で片付けることの出来ない、諦めなければいけなかったものもあったように聞いている。

・・・人が何かを諦める時というのは、誰かに託すことができるとわかっているときにのみ、受け入れることができるのだと聞いたことがあった。

カオルは。

マリナは。

そしてシャルル・ドゥ・アルディは・・・

何を諦め、何を誰に託したのだろう。

それを考えると、彼は哀しくなってしまう。

人は、生きていく年数を加えるたびに、何かを失っていくばかりなのだろうか。

そうではないと思う。

そうでないのだと思いたい。

だから、ダイは言った。

それが自分を不機嫌にさせるとわかっているのに、聞いてしまう。

言っただけいけない場所だと聞くと、そこに向かってしまうこどものように。

彼は、こどもだからそうするのだろうか。こどもでなくなったからそうするのだろうか。

それを確かめるかのように、硬い声でダイは言った。言わなくても良いことを言った。

「マリナを待つのであれば、だいぶ遅れてくる。カオルはボクがここから居なくなったら、出てくると思う」

哀しいけれども、それは真実なのだ。ダイが今この瞬間に、断言できることはそれだけであった。

。

ダイが傍に寄ると、シャルル・ドウ・アルディは僅かに頬を引き締めた。
彼は誰かが傍に寄ることに対して警戒しているようだ。
ひどく神経質な人だな、と改めて感じる。
細く長い指先も潔癖そうだったし、乱れた感じを与えることのない服の着方をする人だと思った。

彼の家では、人と賃貸借関係を結ぶ時に、相手と必ず一度は話をする。
一度でその人すべてがわかるわけではないが、大体のことが推測できるのだと、彼の母は言う。
その時には、指先と服装と・・・相手の目を見るかどうかで決めると教えられた。

彼は、あの雪の日にまっすぐダイを見つめた。
青灰色の瞳と白金の髪が印象に残っていたが、それよりも、マリナを見つめる視線があまりにも優しくダイはそこに割り込むことすらできなかった。
今でも鮮明に思い出すことができるが、思い出すと胸が痛くなる。
その疼痛に慣れることはなかった。

うまくいかないことばかりであった。
この人は、そんなことはないのだろうか、と思う。
ダイは彼のことを知らないわけではない。
少なくとも、彼がダイのことについて知っている以上のことは、ダイはシャルルのことを知っている。
彼はダイのことなどは気に懸けることもないだろうが。
調べようと思えば、大抵のことはわかった。
彼の経歴も、フランスでは大変な有名人であることも。
そんな人物が、マリナを迎えに来る。
マリナのために、自分の予定を変更する。
「彼女は君に翻弄されはしない」
「そう。だからだよ」
ダイはシャルルの言葉に項垂れた。自分は、彼に慰めて欲しかったわけではない。それなのに、事実を突きつけられてダイはひどく傷ついた。
彼は、カオルのレッスン中にここに入ることを許されている。

カオルは大らかで細かいところに拘る様子は余り見せないが、音楽に関することだけはかなり自分自身に厳しかった。
彼女の肉体は強靱とは言えない。
体格に恵まれているが、その恩恵を十二分に受けているとは言えない。

時折、長時間の立位に耐えられなくて座ってダイを指導することがある。
まだ数えるほどしかレッスンを受けていないけれども、彼女は体調に左右される時があるのだ、
と思った。
長距離を移動して演奏に赴く彼女の疲労が蓄積すると身体の方がついていかなくなるのだろう。
彼女ほどの演奏家になれば、ダイの基礎練習ほどの時間以上に自分の一日のほとんどを彼女の情
熱のために費やしているのだろうと思われた。

「誰にも影響されない」
ダイは自分で自分を抉っていると思った。
彼にとっては・・・自分のやっていることはままごと以下だろう。
玩具のような楽器に四苦八苦しているダイは滑稽に映っていると思った。
無関心であるようにも見えるが。
マリナの小さなナイトだと揶揄した白金の髪外国人はダイを無表情に見た。
自分では無情な言葉を使うのに、ダイがそう言うと思外だと思ふのだろうか。
それはそれで苛つく。

人は消沈した次には憤りがやってくるのだと知る。
誰にも吐き出すことのできない感情が、種類を変えてダイに何かを訴えているのだが、彼はまだ
それがどうしてなのか理由がわかるほど経験を積んだ生を送っていなかった。
マリナに聞けば、彼女はダイの欲しい答えをくれるのだろうか。
でも、そんな質問はしたくなかった。

「・・・君が不調なのは、オレのせいじゃない」
「そうだよ」
ダイは声を押し殺して言った。
楽器ケースを自分に引き寄せて、片付けを始める。
「だから、カオルの音が苛立つ音だと感じるのなら、それはボクのせいじゃない」
ダイはカオルに影響しない。
それから。
次に言いそうになった台詞を、ダイは慌てて呑み込んだ。
それを言ったら、もうここには来られない。

カオルはマリナのともだちで・・・この人はマリナとカオルと関係が深い。
ダイは、そこには入り込めない。
カオルは、ダイの練習不足くらいでは、感情を動かすことはない。
・・・マリナも同じだ。

それを思うと、ダイは、何も出来ないただのこどもに戻ってしまう。

●Note 09

早くここから出て行こう。

そう思った。

シャルル・ドゥ・アルディはダイの荷物の近くから離れる様子はない。

自分で誰かのために場所を引き渡すということはしない人で、それが当然である環境に居る人なのだ。

自分の方が、異邦人なのだ。

特に、ここでは。

大人になってまだ続く交友関係については、ダイにはまだわからない。

小学校卒業と同時に別れてしまった友人と将来にわたって友人で居続けることができるかどうかについても、絶対に永遠であると言い切ることができなかった。

マリナがダイを認知しているのは、彼が大家の息子だからという理由がなければ、マリナはダイに対してこれほどまでに良くしてくれることはないと思った。

それから、そんなマリナの依頼だから断れなかったカオルに対しても、気の毒であるなという申し訳ない気持ちでいっぱいになってしまう。

こういう時には、誰にも会いたくなかった。

気晴らしをするのが必要なのかもしれないが、とてもそんな気分になれない。

自分の部屋に戻って、そうそうにベッドに潜り込み、課題曲を連続再生にして眠りにつくまで音量を大きめにしたまま横たわっていたいと思った。

それとも、少し身体を動かしてこの鬱屈とした気持ちを吹き飛ばしてしまうほどに疲労すれば良いのだろうか。

「・・・彼女が苛立っているのは、明らかに君のせいだろう」

シャルルがそう言ったので、ダイは眉を動かした。

「さっき言ったことと矛盾する」

「矛盾はしない」

彼は唇の端を曲げた。その姿さえどこか、この世のものとは思えないほどに端正であった。

ダイは「過ぎるのは良くない」といつも聞かされていたが、シャルル・ドゥ・アルディは何に対しても過ぎるという言葉を超えた存在のように思えてくる。

シャルルは面白くなさそうに、つまらなさそうに言った。

ダイは説明を求めてはいないのに、何を言い出すのかと思ったが、彼はダイに許可を求める前に話し始めてしまう。

・・・防音室の向こう側では、カオルの音が漏れ聞こえていた。単調な指の練習のための音階の昇降を繰り返している。

シャルル・ドゥ・アルディが静かに説明した。彼はとても気怠げな表情を崩さなかった。

「翻弄されはしないが、君が思ったより気がついていないことに苛立っているし、もっと欲があれば良いのと思っている。加えて、自分の中の音楽家としての誇りにかけて負けられないと思っているから、ああして君を追い出した後に慌てて練習するのさ。・・・自分の身体の融通がきかなくなるほどに没頭するのは悪い癖だ」

それをダイは黙って聞いていたが、やがて、自分の持っていた楽器を分解し始めた。

本当は安定した平らな場所で行うべき作業であったが、彼は自分の元に片手で荷物全てを引き寄せると、シャルルから離れた場所で床に片膝をつき、それらの作業を始める。

はやく、ここから出て行こう。

改めてそう思う。

恐ろしく日本語が流暢な外国人が、ダイに何か、理解できないようなことを言っている。

彼にとっては、その言葉は聞き慣れない外国語のように聞こえた。

覚えきれないほどの話を聞いたわけではないが、にわかには信じろと言われてもできない内容であった。

しかし、これだけはわかるのだ。

・・・彼は嘘や虚飾は用いていない

深い付き合いをしていなくても、わかる。

潔癖そうだとすることはうすうすわかるものだ。

彼は人が嫌いなのだと思う。

人を寄せ付けない態度に、名乗ったり挨拶を交わしたりすることのない不遜な態度。ダイがいくらこどもであったとしても、先客であるわけだから、何かしら反応を示しても良いはずなのに、彼はまったく無関心であった。

・・・誰かにすり寄る必要もないと思っているくらい、人が嫌いそうだなというのも、ダイだからこそわかるのかもしれない。こどもは特に、そういうことには敏感だ。

誰が自分と距離を置きたがっているのか、誰が自分のことに興味を持っているのかという区別くらいは、瞬時にできる。

それほど、すべてのことに疎くて鈍いわけではない。

「なんで、そんなことがわかるんだよ」

ダイがぼつりとそう言った。楽器は冷やすといけない。だから、レッスンを終わればすぐに湿気

を抜いてやらなければ急速に劣化する。それがわかっているのに手が止まった。ようやく手に馴染んできたそれをぎゅっと握りしめて、ダイは床にむかって呟くように呻くように言った。

●Note 10

それはダイの頭上から降って来た。

良く通る声で、静かに響き渡る硬質の声であった。

でも決して突き放すような冷たさではなかった。

シャルル・ドゥ・アルディの答は簡潔であった。

「聞いたから」

「誰からだよ」

愚問だとわかっているけど、ダイはそれでもその言葉を否定する。

視線を逸らして、ダイはぶっきらぼうにその言葉を吐き出した。

「わかったような口をきくな」

「わかっていないような口をきくな」

瞬時に彼が遣り込めたので、ダイは口を嚙む。頬が熱くなり、彼は自分が昂奮しているのだとわかった。あまりそういう感情の起伏は好まない。

姉と口論した時にも、これほど憤らなかつた。直情的で順序立ててダイに文句を言う事の出来ない姉の言葉のひとつひとつに耳を傾けているより聞き流してしまうことが気に入らないのだ、と言われたばかりであった。

あんたは、家族より他人との関係の方が大事な、冷たい子なのよ。

そう言われてもなお、何も言い返すことはなかった。

しばらく時間が経過すれば、謝ってくるのは姉の方なのだ。

嵐が来たと思って遣り過ごすことにしていた。

が、その漣が鎮まる前に、このような言葉を投げかけられてしまったものだから、彼は自分の感情を静かにしておくことができなくなってしまった。

シャルル・ドゥ・アルディの言っていることは正しい。でも、ダイにはそれが受け入れられない。

わかっていないようなふりはできなかった。わかっているのだ。

自分が誰かのために音楽を始めたことをカオルは哀しんでいる。

自分のためにではなく誰かのために・・・自分の夢や希望というものを捨ててしまったと思っている。

マリナもそうだ。

何度も、確認された。

それで良いのか、今からやめることもできるのだ、と。

しかしダイはその言葉に・・・ただ笑って・・・考えすぎだよ、と言うだけであった。

マリナは感じていたのかもしれない。ダイが、自分のことを優先させない少年になってしまい
そうで怖いと彼女に言われているような気がした。

カオルのレッスンに通うようになって感じるがあった。

マリナも含めて・・・ダイを通して誰かを見ているのではないのだろうか、という疑問が常に湧
き上がるのだ。

そして、マリナからもそれを感じるのだ。

自分は・・・意図せずしてマリナやカオルの求めるものになろうとしているのではないのだろ
うか、と。

だから、姉の声を聞き流すことができなかったのだ。

聞き捨てることができなかった。

自分の心の声を無視して、他人ばかり気にしている。

そう言われたことが、ダイを言い当てたものであると認めざるを得なかったのだ。

●Note 11

「ヒビキヤは融通の利かないところがあるが、自分の経験していないことは教えてやれないとい
うのは、彼女に限ったことではない」

「・・・何を言っているのか、わからない」

また『知らないふりをするのか』と言われることを予想していたが、シャルル・ドウ・アルディ
は何も言わなかった。

カオルの事を、カオルのいないところで定義づけすることは避けたかった。

だから、ダイはそれを軽く聞き流そうとするが、彼はそれを許さなかった。

彼は不機嫌そうにまたダイを見下ろす。

蔑視ではなかったが、こうもあからさまに好意的ではない視線を向けられると、爽快さはさすが
に感じない。

ダイは黙って片付けを始める。

その様子をシャルルが眺めていることもわかったが、彼は無視してその場を立ち去るための時間

を短縮することに専念した。

大人の方が、状況を読めていないってどういうことだよ
ダイは心の中で困惑の言葉を漏らした。

こんな風に、自分には愉快ではない日もある。

誰かと関わるということはそういうことなのだ。

そう自分に言い聞かせるが、想定外の相手に不機嫌そうに話しかけられて、ダイは困惑するばかりであった。彼が何を言いたいのか、本当にわからないのだ。

ダイの困惑を越えてまで会話の往来を成立させたいとは思わない。

片付けもそこそこに立ち上がったダイは、一応の儀礼としてシャルルに僅かに頭を下げる。

自分のそういうところが嫌であった。

誰かと波風を立てたくないからということが先に身体を動かしてしまう。

ここで不作法を披露すれば、マリナの耳に入ると思ったからだ。

それから、扉の向こうにいるカオルにも。

マリナとはしばらく顔を合わせていなかった。

彼女に会った時にはレッスンは順調で、日々つつがなく暮らしているとだけ報告している。詳細をあれこれ語るより、マリナの詳細を聞いたかった。

でも、聞けずにいる。

聞けば、目の前の男性との話題に触れることになるからだ。

ダイが知りたいのはシャルルのことではなくマリナのことであったが、マリナひとりのことを知るためにはシャルルのことも聞かなければならないという事が何とも堪え難かった。

シャルルは溜め息を漏らした。それが余りにも綺麗であったがどこか物憂げであった。

マリナは、こういう奴が良いのか。

ダイは電流のような痛みか痺れかわからない感覚が胸から込み上げてくるのを感じる。

見れば見るほど、彼は平凡という言葉と無縁である人物であると思われた。

自分とは違う世界の住人である。

ダイが感じているように、彼にとってもダイは彼とは違う世界の住人なのだから、理解できなくても当然だろうと思う事にする。

お互い様だ。

そう思って、この場を立ち去ろうとした時。

シャルルが、言葉をかけてきた。

「ここしばらくで、体格が変わったのが原因だ」

「え？」

ダイが振り返った。シャルルの言葉が自分に向けられたものだとわかったから。彼は無表情に言った。

「不調だと思うのは、身長が伸びて立位の時のポジションが変わるから。・・・次からは時間の半分くらいは座って慣らせ。気管支も骨格が変わるから注意しなければならない。いつまでも同じスタイルに拘ると、悪影響だ」

ダイは驚いてシャルルに向き直った。

「なんでそんなことがわかるんだよ・・・」

彼の声は掠れていた。驚きだけのためではない。彼の声は低くなり始めていた。

それを、風邪かもしれないとカオルに言ったところ、彼女は健康管理もレッスンのうちだとダイに注意したのだ。

「前回会った時より声質も違っているし、身長も成長期特有の伸び方だ」

彼は素っ気なく言った。それほど親しく近付いたこともないのに、彼はそこまで目視で判断できるのか。ダイは驚愕した。

「成長痛が気になるのなら、休むか時間を半分にしろ。いずれおさまる」

そして、もうひとつ彼はダイに言う。

「楽器が馴染まないのならば、リードを削れ。自分に合ったものを作るのもオーボエ奏者には必要だ。・・・習わなかったのか」

ダイはそこでもぐっと言葉に詰まる。確かに、微調整をするためにリードを自分で削り、湿り気を与えてストックを何本か作っておくことについては聞いているし、自分でもやっていることであった。けれども、それも納得できるものに出逢えるのは本当に僅かな確率で、その上消耗品であるから永遠に使い続けることはできない。

「それくらい、知ってる」

ダイはぶっきらぼうに返事をした。

そこでふと思った。

彼は一体、いつからここにいるのだろう。

●Note 12

自分には最高の環境と最高の師がついているのに、それに対応できるほどの才能がないのだと宣告されたような気がした。

いや、才能がないのは最初からわかっている。

だから、才能という名前のついた、最初から持っているものではなく、彼が努力し続けなければ決して手に入れないもののことを指し示されているのだと思った。

ダイはわかっている。

彼は、世界を駆ける立場にはならないだろう。

なぜなら、音楽だけに没頭することができないからだ。

そのことだけに自分の頭の中の全部を使い、体力の全てを注ぎ込み、情熱を燃やし尽くして満足することができないから。

まだ何もかも始まったばかりであるのに。

彼は、終わりの予感を肌に受けていた。

永遠ではないからこそ、夢中になれるのだ。

自分の一部ではあるが全部ではないことを承知しているから・・・だから、マリナは彼をここに寄越すのだらうと思った。

カオルとダイは何もかも対照的だった。どこか醒めた感じのダイに、いつもカオルは皮肉っぽく言う。

「世界を知ったような口を利くなよ」

それでも彼女はこどものくせに、とは言わなかった。

シャルル・ドゥ・アルディは軽く溜息をつく、と、噛んで含ませるような言い方で、かつゆっくりとした速度で説明した。

それがダイを苛立たせると承知の上でのことであった。

「骨格に変化があるときに、癖をつけると矯正に時間がかかる。

だから、ヒビキヤは帰れと言った。

が、自分の時はどうであったかという経験を語って聞かせてやることができないから、ああやって苛立つ」

オマエにわかるわけではないだろう、と言いつつになって口を嚙む。

けれども、ダイには心当たりがあるのだ。

確かに指の動きも肘の位置も違和感を感じていた。

加えて、リードを口に含んだ時の感触がしっくりと馴染むことがない。

これまでは懸命に基礎練習をこなしていくことだけに懸命であったが、こうして日々の生活に慣れて・・・それで注意力が散漫になり余計なことに気を遣ってしまうのだとダイは考えていた。

●Note 13

「・・・楽器はもっと合ったものを使え。こればかりは相性だから、たくさん楽器を持ち自分にはどんなタイプのものが必要で、何が欠けていて、何を削ぎ落とすべきなのか考えろ。

ヒビキヤが帰れと言ったのは、考える時間も必要だと言いたかったのだから」

いつものダイであったのなら、この忠告を真摯に受け止めるよう努力したであろう。

けれどもこの時ばかりは、彼は素直に受け止めることができなかった。

ダイはいつもよりずっと短い時間で片付けをして雑になってしまった鞆の中身に気を遣うこともせず、シャルル・ドウ・アルディに向き直った。

「それなら、あなたは・・・古くなったり自分に合わなかったりしたら、簡単に取り替えるのですか。ボクにはこれしかないし、これで十分だと思っています。ボクが合わせれば良いだけだ。でも・・・あなたは・・・気軽に取り替えるのですか。それしかないとわかっているのに。たとえば・・・マリナも飽きたら捨てますか。捨てられますか」

ダイが彼のことをオマエと言わずに「あなた」と呼んだのは最後の理性であった。

弱さを見せたくなかったなので、強がってみせた。

彼のこれまでの人生の中で、誰かに抗議するなどとは家族以外では二回目であった。しかも、二回とも同じ人物に対して彼は憤然とした言い方をしている。

自分が正しいと思っていないからこそ人は声を荒げるのだと思う。

だから、何かを伝えたいのであれば、ゆっくりと静かに要点だけを伝えるようにしなさいと言われていたし、実際、そうすることによってうまくいくことの方が多かった。

「・・・ファム・ファタル、という言葉を知っているか」

彼は静かに、ダイの言葉に返答した。

「・・・宿命の人、という意味だと記憶している」

ダイはぼつりとこたえた。

シャルル・ドウ・アルディがこれまでの表情を一切消して、まったく無になってしまったから。どことなく生気のない顔に見えて、本当に生きている人なのだろうかと思うほどに呼吸が浅くなる。

ダイは彼の貌を見つめた。

その整った横顔が、余りにも儂くて遠くを見つめていたからだ。

見つめていないと、次に視線を移した時にはもうそこにはいなくなってしまうても不思議はなさそうな程であった。

「・・・運命の人、と言うべきか。

宿命とは前世で決まっていることだが、運命は違う。

宿命は現在を定めるが、運命は未来を定める。

・・・彼女はオレのファム・ファタルだ。

もし、彼女がオレから離れて行ったとしてもそれは変わらない。決して変わらない」

ダイは頬に血が上るのを感じた。

この人は・・・マリナのことを心底欲しているのだ。

それなのに、同じだけ愛して欲しいとは思っていない。

何故なのだろう。

どうして、この人はこんな風に身を切るようにして、魂を削るようにして彼女に心を傾けるのだろう。

目の前の外国人が、彼のよく知るマリナ・イケダについての激しい恋情を囁いている。そんな言葉は現代の日本にあっては笑われるだけだと言いたかったが、彼から発せられる言葉には、冷やかすほどの軽さは少しも存在していなかった。

彼がそれを静かに言う事ができるのは、様々な葛藤があったからだろうと思わざるを得ない。あのマリナを運命の人と言い切ったのだから。

彼が望めば手に入らないものはない存在なのだということは痛いほど感じていることである。それなのに、マリナを完全に彼で覆い尽くすことはできないのだろうとわかっているようでもあった。

・・・切なくなった。

マリナは、彼のことを大事に思っている。でも、距離を置いている。それは、彼女の前の恋人が影響しているのだろうと思われた。

・・・遣りきれなかった。

シャルルは・・・いつかマリナがシャルルとの関係に飽きて離れて行くのかもしれないと思っている。でも、それでも離せないと思っている。

そうでなければ、ダイにまで彼女のことについて語ったりしない。これほどの事をさらりと言っただけるのであれば、それなりの覚悟はできているはずだ。もし、彼女が生涯をともにすることがない相手であったとしても、彼は『今』一緒に居ることを一番大切にしているのだ。

もう、それだけしか残されていないのだ。選択する余地などはないのだ。唯一であり絶対であるから、他に候補があったとしても、それは唯一でも絶対でもないのだから。

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

●Note 14

「・・・楽器のように挿げ替えることができるものではない」

シャルル・ドゥ・アルディという人物は随分と気難しい学者気質の人だな、と思った。友人の不磨も時折、そんな口調になることがあった。

話ながら考えを纏めているから感情を込めることを省略してしまうのだ。

だが、シャルルは先ほどから一貫してずっと冷淡に話をしている。

彼は、話ながら考えているのではない。話す時には、もう、考え終わっている。

そんな気がした。

「どうしてボクにそんなことを言うんだよ」

溜息混じりにダイは聞いてしまった言葉をそのまま丸めて小さくして彼に返してやりたい気持ちでいっぱいになりながら、言った。

「質問されたから」

素っ気なくシャルルの返事がまたひとつ返ってきた。

立っている場所が違っている者との会話は、意思疎通しようと思わない限り相当な労苦を伴う。

・・・ダイはこれだけの短い会話なのに、酷く摩耗している自分に気がついた。

彼は、ダイの質問にはぐらかさず、淡々と事実を述べる。それがダイを苛立たせる。

この人が、マリナ・イケダの特別な人なのだと思うだけで落ち着かなくなった。

彼女を抱き上げ、連れて行ってしまふことのできる大人の男性が、今、ダイに向いていると思うとそれだけで・・・平然としていられなかった。

それならもう何も言うまいと思い、ダイは口を噤む。

今日は本当に風向きの悪い日なのだ、と思った。自分に都合の良いことばかりが起こるとは思わないが、ダイにとっては、都合などという言葉では片付けられない事実を突きつけられてばかりで・・・困憊し憔悴していた。

「・・・過干渉はやめておけ、とマリナにもヒビキヤにも忠告した」

すると、シャルルはダイのことを横目で見ながら、抑揚なく言う。

「どういうこと？」

しまった、と思った。また質問してしまった。

「学童の余興程度でしか接触のなかった音楽を本格的に始める年齢には遅すぎるから、やめておけ、と言ったんだ」

ダイは頬を紅くした。自分のことを言われているのだ。

・・・そして、彼はダイのことをダイが思っている以上に知っているとなり、また緊張が体を走り抜ける。

オーボエを本格的に始めたのは中学に入ってからだが、小学校の授業で触ったことがあり、決断はあっさりしたものであったからそのことを指摘しているのもであろう。

確かに、オーケストラの中で、管楽器の中ではひときわ目立つが、扱いやすそうだと軽率に思ったことも理由の一つであるのだと否めなかった。

簡単に音が出ると思った。実際、最初は簡単だった。音を出すのは簡単だが音楽を作るのが難しかった。

でも、彼は愚痴も文句も後悔も何も言わなかった。自分で決めたことだからだ。

そして、マリナは彼の為に師を紹介してくれた。

思ったものと違うから、やめたいと言いつことはできなかつたし、そうしてしまえば楽にはなれたが、マリナはとても残念がるだろうと思ったのだ。

だから、自分を見つめて、自分で結論を出した。

本当にやりたいことが見つかるまでは、これが「今、やりたいこと」なのだと。

目先にぶら下がっている「逃げたい」という気持ちは、決して本心からではなく、それを乗り越えなければ先に進まないダイは思っていた。

そんなダイの心の動きを・・・シャルルは、見抜いているのだ。

ダイには迷いが無いけれども、誰のために・・・誰を思って努力しているのか、彼は知っているのだ。

ダイの思い描く人と同じ人が、彼の中に住まっているから。

「ヒビキヤが憤っているのは、おまえが自分のことより他人のことを優先させてばかりいるから・・・誰かを思いだして苛つくのさ」

そう言って、シャルルは肩を竦めた。

ダイは自分の足元を見つめた。

このところ急に身長が伸びたので、着ている服の寸法が合わなくなってきた。

あまりも見苦しいものにならないようにしてはいたが、またすぐ身長が伸びてしまうと感じているところであった。

手も長くなってきたし、これまでの姿勢では肩の幅も違うので違和感を感じる。

それでも練習を休まないのは・・・自分の中で、マリナの知っているダイでなくなっていく自分が怖かったからだ。

マリナは彼に会うたびに「見るたびに顔つきが違ってくるね」と嬉しそうに眩しそうに、そして少し哀しそうに、言う。

たまに会うからそう感じるだけだ、と言うと彼女は首を横に振るのだ。

「毎日会っていても・・・変化はわかるものよ。特に、ダイの年齢の頃は」

彼女はそう言って自分の身長を追い越してしまったダイを見上げるのだ。

・・・一度追い抜いてしまえば、永遠に・・・彼女はダイを見上げ続けるのだ。

「もう少し貪欲にならなければ、オーボエなどという楽器は個性が生まれない。個性が強すぎるのも奏者として向かないが、あるものを消すのは簡単だが、ないものをあるように見せるのはより手間がかかることだからな」

彼は辛辣にダイに言い放った。

●Note 15

「やめるのを決めるのは、ボクだ」

彼はそれだけと言うのがやっとであった。マリナの想い人であるのなら、なおさらのこと彼のことを嫌いになりたくなかったが、どうにも居心地の悪さを感じる。

人の一面だけでその人物を好ましくないと判断してはいけないのだと頭でわかっているのに、感情がついていかなかった。

「そうだな。始めたのがおまえであるのなら」

ダイは唇を強く噛んだ。

「奏者ならそうやってこどもじみた態度で主張する方法は逆効果だぞ」

唇の微妙なコンディションが音色に左右する。

それをシャルルは指摘しているのだ。

・・・彼の言っていることは音楽理論にもならないほどの初歩の話であった。しかし、ダイはそれにすら言い返すことも傲然と忌避することもできなかった。

「あの人の責任にするな。決めたのは、おまえだ」

そこで、彼はシャルルが「あの人」と言い、彼女のことを少し距離を置いて表現したことに、頭の芯にいきなり鉛を打ち込まれたかのような衝撃を受けた。

「何だよ、大人のくせに、こどもみたいなことを言うのはやめろ」

ダイはそれから続けて言った。

「ボクにマリナのせいにするなど言っているくせに、最後までやれと言う。

どっちなんだよ。関わって欲しくなさそうにボクをけん制するのに、悔しかったらやってみろと煽る。

・・・ボクはオマエのおもちゃじゃない」

彼の最後の声は、絞るような低い声であった。このところ、発声に苦勞する。

体格が変わってきたからだ。腹式呼吸を自然に行うことができなくなった。

意識しないで行えたことが難しい。どうやって手と足を出していたのだろうと思うことさえあった。手順を思い返そうとするとうまくいかない体に染み付いた基本的なことができなくなっていく。

それは、マリナに対する態度も同じであった。平然とできたことが気恥ずかしくなった。挨拶をしたり一緒に散歩したり、彼女の髪に勝手に触れたりすることが、気恥ずかしくなった。してはいけないことなのかもしれないとさえ思う。

・・・それを、この男は見透かしているような目付きで彼を見るから、彼は困惑し、憤り、そして最後には再び途方に暮れる。

「玩具なら、これほど退屈はしない」

彼は無表情にそう言ったので、とうとう、ダイは彼とのこれ以上の会話は無理だと限界を受け入れることにした。どれほどマリナが彼のことを好きでも、どれほど彼がマリナを大事にしていたとしても、ダイは彼らにとっては部外者なのだ。

●Note 16

ダイとの話が退屈だと言われて、ダイはそれでも平気で居られるほどに達観した態度を続けることはできなかった。

「だったら、退屈しない人と話せばいいだろ。さっきから、何だよ」

いつもの彼らしくないとわかっていても、こういう物言いをされることに慣れていなかった。確かに、カオルも口が悪いし、マリナも遠回しにものを言うことはできなかったが、ダイはそれで憤ることはなかった。

彼女達との間には、信頼関係があったからだ。

家族に対する甘えのようなものがあったのかもしれないが。

姉との口げんかにしても、またすぐに何事もなかったかのような状態に戻ると確信していたからだ。

「何でも持っているくせに、退屈だと言うな。傲慢だよ」

ダイの言葉に、シャルルが反応した。彼は綺麗な眉を僅かに動かして、切れ長の、青灰色の瞳を少し大きくした。

白い頬に僅かに血紅色を含み始めた。彼の何かを傷つけたのは明白であった。

しかし、彼は止められない勢いのままに言ってしまった。

冷淡でどこか人を見下したような彼の態度に傷つけられたダイは、マリナの想い人である彼のことを妬ましく感じていた。

彼は、何でも持っている。

彼は、何でもできる。

彼は・・・マリナに愛されている。

「敵の数を増やすことに夢中になって、味方の数を減らすタイプだよな」

ダイの言葉が言い終わらないうちに、彼とシャルルのいる場所から少し離れた出入り口付近から、何かを落とす大きな音がして、ダイは我に返った。
足元に落下の時の振動が伝わる。

しまった、と思った。

ダイは人を傷つけることを好まない。

けれども・・・今、関係を修復できるかどうかということすらわからない相手に対して、不適切な発言をしてしまった。

「ごめん・・・」

謝ろうとした時に。

音のした方から、何か茶色のかたまりが突進してきたと思った。

軽やかに走ることにに対して気を遣うこともなく、ただ、反射的にという言葉のままに勢いよく近付いて来たそれは、シャルルとダイに向かっている。

そのかたまりが目に入った時に、ダイは思った。

茶色の髪に、茶色の瞳。

日焼けしない職業であるから、色が白くきめ細かい肌をしているけれども日焼けを気にしない気質の持ち主。

大変に小柄で・・・ダイは彼女の背を追い越してしまった。

それが寂しかったが、もうその時代には戻れないので寂しいと思う一方で、彼女を軽々と抱き上げて去っていったシャルルが羨ましいとさえ思ったあの雪の日が重なる。

ああ、マリナだ。

マリナ・イケダが、彼らに向かって小走りで寄って来たのだ。

次に、ダイは覚悟を決めた。

マリナに平手打ちをされると思った。彼女の顔が、いつになく怒気を含んでいたから。

マリナは感情表現が豊かで、しばしばダイに「もう少し大人の対応を」と窘められるほどであった。

長い付き合いのダイには、彼女の喜怒哀楽がかなりの確率で理解できている。

他の者にはわからないかもしれない襲もダイには感じ取ることができる。

だから、瞬時に彼女の顔に浮かぶ感情を汲み取ることができた。

ああ、怒っているな、と思った。

しかも、相当に。

シャルルはマリナの恋人だ。もう、ダイも認めざるを得ない。

しかも、彼に釘を刺されることになった。彼の運命の人で、宿命と呼ぶ以上の存在であるということも聞かされたばかりであった。彼がそうして口にするということは、彼がそう思っていることを、マリナは知っているということだろう。

シャルル・ドウ・アルディという人物は、片想いでありながらマリナを好きだと人を選ばずに四散させたり吹聴したりするような軽い誇りしか持っていない人物には見えなかった。

●Note 17

聞かれたのだ、と思った。

マリナはいつから、彼らの話を聞いていたのだろう。

気配を消して立ち聞きするほどの能力は彼女には備わっていない。

武道の心得のあるダイは踵を鳴らさずに歩くこともできるし、シャルルもそういうことができる人物だと思われたが、マリナは違っている。

・・・それなのに、いつからマリナがそこに居たのか、気がつかないほどダイは気が散っていたということらしい。シャルルの来訪にすら、気がつかなかったのだから。

彼女が床に落としたのは、いつも持ち歩く画材道具の詰まった鞆であった。

彼女はそれを持っているのであれば、どこにでも行く。どこにでも行ってしまおう。

それさえあれば、何もいらないと言うかのように。

その鞆を取り落とすということは、彼女は相当・・・動揺しているということだ。

だから。

ダイは覚悟を決めた。

マリナに叩かれると思った。

自分も、同じ立場であったのならそうするかもしれないと思ったからだ。

自分の大事な人が誹られている場面に立ち会ったのなら。

相手は、シャルル・ドウ・アルディだ。・・・彼女の、運命の人なのだ。

誰かや何かに決められた人なのではなくて、彼女がそうだと定めた人。シャルルも同じなのだろう。

だからこそ、彼らは何もかもが違う環境であるのにも関わらず、惹かれあってしまうのだ。どうしようもなく。

ダイが見ていても、わかる。

彼女は、今は・・・あの黒髪の人と過ごした日々と違う日々を生きている。どちらが良いか、ではない。彼女にとってはどちらも必要なことで、それは過去形にできないほどに彼女の中では生きている想いなのだ。

哀しみと切なさが彼の中に湧いた。

でも、それでも自分を憐れんだりすることはしない。彼が漏らした失言をマリナは咎める権利がある。

・・・ダイは奥歯を噛みしめた。

殴られることは覚悟していたが、唇や口内を切るのは避けたかった。次の練習に差し障りがあるからだ。

・・・そこで、彼はある事実気がついた。

自分の中で、音楽は自分の一部になっていたことを。

喧嘩をすれば集中力に影響すると憂えて、怪我をすれば演奏不能になるかもしれないと身構えてしまう。

自分が・・・どれほど、投げ出したいと思ったとしてもこの瞬間には彼はまだ、手放すことができないのだと・・・思うのだ。いつか、この世界から離れる時が来るのかもしれない。でも、その時までは諦めずにできることを全部注いでみようと思う気になれるほどには、彼は今の状態が好きだった。

カオルに怒られながらも目標を定めて練習する。何時間練習したか数分の演奏でわかる世界。カオルは努力した時間の長さは褒めないが、練習の成果が如実に表れるレッスンが充実しているとても機嫌が良かった。

まだ拙い演奏であるのに、一緒にヴァイオリンで音色を重ねてくれる。

跳ねるバッハであったり、困ったショパンであったりするが。

そして、それを彼は・・・一番聴かせたいと思っている人を哀しませてしまった。だから、これは罰だ。

当分、口も利いてもらえないだろうなと思った。

ダイは息を止める。

殴られるのなら、楽器ケースを床に置いた方が良いだろうかという的外れなことを考えていた時のことであった。

「・・・ちょっと！」

彼女は叫んだ。

ダイは軽く目を瞑る。

彼女は憤っている。

けれども。

目を瞑り、歯を食いしばったが、彼に打撃は伝わらなかった。

その代わりに、ひゅっと音がして、シャルル・ドゥ・アルディの前でマリナが彼の腕に自分の小さな手の平で作った拳を埋めようとし、それをあっさりとしてシャルルの手首で受けられた音がした。

肌が触れて、ぱちんと何かが弾けたような音がする。

「シャルル・ドゥ・アルディ！ダイに何するのよ」

彼女は怒気を含んだ顔で、彼女の恋人を睨み上げていた。

シャルルは涼しい声で、応える。

「退屈しのぎ」

マリナは紅潮して足元をどンドン、と踏みならした。相当、怒っている。

●Note 18

シャルル・ドゥ・アルディは不機嫌極まりない声と顔で彼女に向かって言った。

「マリナ、状況から何をどう判断したら、そういう結論なのか説明しろよ」

マリナとシャルルは身長差があるので、腰掛けていたとしてもシャルルの頬には跳び上がらなければ手が届かない。

それでも彼女は振り上げた手を下ろすことはなく、彼の腕に拳を向けたのである。

それをあっさりとして躲すシャルルの動きは、やはり並大抵の訓練と運動神経ではないのだと思わせてしまう。

優雅な仕草で気懶い雰囲気を持つシャルルであるが、青灰色の瞳が呆々としている。

彼は酷く好戦的であるらしい。

「喧嘩を売るならいつでも買うぞ。・・・家訓だからな」

彼はそう言うのと薄く嗤う。

マリナは彼に手首を捻り上げられて、悲鳴を上げた。

しかしそれは彼女の腕を痛める仕草ではなく、なかなか自分から寄ってこない恋人を優しく窘めるような・・・それでいて彼女が自分の方に向かってくることを計算していたかのような様子であった。

「こども相手に配慮が欠けている」

「こども？こいつが？」

シャルルはマリナに向かって冷笑した。品の良い顎を上げて、唇を歪める。

「マリナのことになると顔色を変えて、配慮のたっぷり入った忠告も助言も受け入れないほどに激昂する彼のどこか『こども』？」

「シャルルの理屈と定義に付き合うつもりはない」

マリナは怒気を満面に表した。

「ダイはね、シャルルと違うのよ」

「同じだったらおかしいだろう」

シャルルの言い方に、マリナはますます早口になって声を大きくした。

「ああ、もう！ どうして心配だと言えないの。心配で心配で、彼の様子を見に行きたいって言ったのは、シャルルの方なのよ」

「オレは言っていない」

シャルルは横を向いた。

「成長期によく見られる情緒不安定からくるストレスがヒビキヤのストレスを誘因し彼女の体調に影響・・・」

「御託は結構です」

マリナは彼の言葉を遮った。

彼女はシャルルの腕を振り払うと、息も荒くシャルルに向かって目を吊り上げた。

それから、今度は片脚を上げて、膝を彼の脛に思い切り強く蹴り上げる。

これにはシャルルも驚いたようであった。

「マリナ！」

彼もむっとしたように立ち上がるが、マリナは視線が今よりさらに上になっても臆することもなく彼を睨み付けている。

ダイはその様子を口を半開きにして眺めていた。

シャルルがダイのことを心配？

いや、そもそも、マリナ・イケダがここにやって来ていることにも驚きであったが、彼女がシャルルをこんな風に叱責するとは、彼は想像すらしていなかった。

恋人同士というものはもっと甘く抱擁を交わし、ダイが赤面するほどの見つめ合いを繰り広げるのかと思ったら・・・どうやら、彼と彼女はそうではないらしい。

そこで我に返る。

彼女が怒っている。

彼女の言うところによれば、シャルルがダイを心配しているのに気遣う言葉に足りていないことがいけないのだということが原因らしい。

「君の方こそ、あいつの話しかしない」

シャルルは白金の髪を揺らしながら、傲然として言った。

「彼にヒビキヤを紹介したが、彼女はダイに不適切な教育しかしないのではないのかと気を揉むから・・・」

「シャルルよりはずっと適切だと思われます。私はそう思います」

マリナは切り捨てるように言った。

彼女の物言いは前から知っていたが、恋人に対しての照れを通りこしている。

ダイは思わず、横から口を挟んでしまった。

「あの・・・ボクは平気だから・・・」

「ダイはちょっと静かにしていて」

きっとマリナに睨まれて、ダイは口を嚙む。

彼女は喜怒哀楽を豊かな表情で表現するが、怒った時の彼女は手がつけられない程に激しいのだと知る。

彼にはそんな風にして怒ったことはなかった。

いつも、怒ったり叱ったりする後にはすぐに笑顔になる。

気まづくなまま別れることはしない。

すぐに、仲直りしましょうね、と言う。

「でも、ボクはこういうの、好きじゃない」

マリナは頬を紅くしながらダイに向き直る。

「ダイもダイよ。」

シャルルの言うとおりに早く戻って体を休めないよ。

私はね、ダイの演奏会に行く日を楽しみにしているの。

ダイの演奏会のチラシやパンフレットのデザインをいつか私が手がけて、ダイの初演パンフレットでいつか高額取引する日を夢見ているの。いいえ・・・夢じゃないわ。予定なのよ」

「君の予定の方が夢のようだよ、マリナ」

シャルルがそう呟いたので、マリナは、今度はシャルルに怒りの矛先を戻した。

「シャルル。ダイは私の大事なともだちなのよ。私の、大事な、ともだちなの」

「繰り返さなくても知っているよ」

シャルルは嫌そうな顔をした。

案外、マリナの方が怒り方が執拗らしい。

しかし、マリナは収まらなかった。

「カオルの様子はしばらく大丈夫そうだからと言っておきながら、定期より予定を繰り上げて来日するくらいなら・・・最初から、ダイに会いたって言えば良いでしょう。理由が必要なの？

」

ダイは目を丸くした。

彼は偶然、ここにやって来たのではないのか。

あの人を黙らせるには、彼女くらい遠慮なくもの言う人でなければならないのだろう。

シャルルは不貞腐れたような顔をしたが、そのまま引き下がらなかった。

「ヒビキヤにも、同じことを言ってやれよ。自分の教え子の調子が悪そうだけれども、医師としての所見はどうなのか聞かせてくれと言ってきたのは、彼女の方だ」

「誰が最初かという順番も、必要ではないでしょう」

マリナに苦笑いする。あくまでも、彼女の言うことを認めようとはしない彼の態度が気に入らないマリナ・イケダは、ダイに向かって言った。

「こどもみたいな人ばかりで苦労するわよね」

「マリナに言われたくないよ」

肩を竦めて言うマリナに、ダイはぼそりと言い返す。

・・・呆気にとられて、憤りを忘れてしまう。

自分のことをカオルがそれほど気にしてくれていたことにも驚きであったが、最悪の出逢いであったあの雪の日から、それほど親しくしていたというわけでもなかったシャルルが自分のことを気にしていたというのも、何とも不思議な話である。

「君がオレより大事だと平然と言う作業鞆を放り出して怒る原因の人間を、気持ち良くもてなせというのは、何とも貴女は残酷な人だ」

シャルルに向かってマリナは、あら、と言って唇を突き出した。

「今回ばかりは加勢はしないわよ。ダイにちゃんと説明してあげられなかったのだから」

「説明はした」

「あれは説明ではないでしょう。何よ、カオルも居たのにふたりとも何も言わなかったの？」

マリナは呆れた声を出した。これが本来の彼女であった。

たとえ恋人の前であっても、彼女は変わらない。自分がそうしなければならないと思った時には言葉も体も動いてしまう。そういう人なのだ。それが自分のためでなかった時でも、彼女は・・・ダイをその他大勢のひとりとして扱うことはしなかった。

周囲を眺め回して言った。

「カオルはどこ」

その言葉から、彼女が途中から入ってきたのだとわかる。

「ここに入ってきて、行き会わないのであれば、ひとつしかないだろ。この奥の防音室で集音マイクの電源を入れて、今の会話をにやにやしながら聞いているところだよ」

ダイは、えっと驚いて言った。

確かに、防音室は緊急の時のために呼び出し用のスピーカーとマイクがあった。事故があって閉

じ込められてしまった時や、カオルがレッスン中に具合が悪くなった時のためだと説明されていた。

それは防音室と管理室との間の会話が可能であるという認識で居たが、部屋の外の集音機能まで備わっているというのは、初めて知った。

ダイの顔つきから、彼が不知であったことを察したシャルルは皮肉っぽく嗤った。

「いくら耳が悪くても、音が聞こえなくなったのだから、彼女は中で何をしているのか、わかるだろう。いくら『こども』でも」

「カオル」

彼は呟いた。そして荷物を床に置いて、防音室の前に走り寄った。

扉を軽く叩く。

「カオル。具合が悪いの？大丈夫？」

ダイは慌てて言った。彼女はレッスンを途中で止めることはしない。決してそれはしない。切り上げてしまったのなら、自分に課したものを放棄すると思っているように感じる。彼女には音楽しかないのだという切実な想いがあるように感じていた。

だからなのかもしれない。

ダイは、懸命になって・・・マリナとの繋がりが断截されないように躍起になっていたように思う。しがみついているわけではなかったが、彼女と彼のあの姿を見たときに。

ダイは、自分とマリナを繋いでいるものがとても脆くて弱くて・・・彼女の中にある多くの繋がりと枝のひとつでしかないのだと思い知ったから。

でも、本当はそうではないのかもしれない。

彼自身が選択して、ダイはここに居るのは間違いのないことだから。

それをか細い枝にしてしまうのか、もっと違うものになるのか、それはダイの選択によるものだと思う。

彼女が選んだ路ではなくて、ダイが・・・この状況を選んだのだ。

「カオル？」

ダイは慌てて、開けるよ、と声をかけてから、言い終わるより前に扉を開ける。

彼の背中から声が聞こえてきた。

シャルル・ドウ・アルディが飛び込んで行かないし、マリナが今でもシャルルと会話をしているのであれば、大したことはないのだろう。

それでも、ダイは彼女をひとりにできなかった。

「何をやっているんだよ、マリナ。カオルに何かあったら・・・」

「困るのはおまえだろう」

「おまえと言うな！」

ダイは叫びながら、室内に入り込む。

先ほど、彼が追い出された場所にまた入った。

気まずさも何もない。

ただ、彼女の音が消えた段階で彼は気がつくべきであったのに、自分のことに夢中になっていて

、異変がないかどうか確認することを怠ってしまった。それが腹立たしいのだ。

●Note 20

部屋の中で、カオルが壁に凭れて楽器を腿の上に置き、面白そうに聞き耳を立てている姿を見つけてダイはほっと安堵の溜息を漏らした。

相変わらず顔色は血色が良いということではないが、これは心臓に負担がかかっているからだ。血流が悪いので、自然とそのような肌色になってしまう。

完全なる健康体ということではないということを表しているが、彼女はそれでもとても楽しそうであった。

口元に微笑みを浮かべながら、カオルはダイの気配に唇を歪ませる。

「おや。何だ、もう終わり？つまらないな」

「カオル」

彼は肩を大きく上下させる。それほど激しい運動をしたわけではなかったが、汗が額に浮かぶ。

「無理しないでくれよ」

ダイは困った顔をして言った。

「カオル以外の人に師事するつもりはない。だから、もっと一生懸命練習してくるから。だから、こういうのは・・・やめて」

ダイは言葉を詰まらせて言った。

「ボクの知らないところで、ボクの心配をしないで。もう、そういうのは嫌なんだ。離れるのは仕方がない。でもさ、ボクも一緒に考えたいんだよ。だから、置いて行くな」

「置いて行かれると思ううちは・・・まだだよ」

カオルはそう言って染み入るような笑顔をダイに向けた。

ああ、彼女は・・・誰かに置いて行かれそうになったのだ、と思った。

そして自分が同じ・・・誰かを教える立場になって、その人の気持ちを少し理解したのかな、と思った。想像でしかないけれども。

・・・そういえば、彼女の兄も・・・音楽を教える立場の人であったと聞いたことがあった。

「・・・自分の身体のコトは、自分でわかるから。ダイの心配は不要だ」

「ボクだってそうだよ」

彼はむっとしながら言った。

「確かに、練習不足はボクの責任だ。もうしない。でも、カオルに心配かけるようなほどのことでもない。あのガイジンを連れて来るほど重篤ではないよ」

ダイの言葉にカオルは嘲ら笑った。

「それだけなら、呼ばない。アタシもアイツが好かんからな」

「じゃ、意見の一致があるのに、どうして？」

「・・・マリナが居るから。マリナにはダイが必要だけれども、シャルルにもダイが必要だから」

カオルの言葉に、ダイは目を見開いた。

彼女は弦をぽんぽんと爪弾きながら俯いて言う。

戯れの短音であるのに、その音色すら美しかった。

いつもの皮肉ばかり彼女特有の言い方ではなかった。

「あいつらは・・・あいつは、ダイに、いろんなものを重ねているんだよ。

ダイの年齢の時には、もうシャルルは大人の中にいた。

自分の自由と責任で何かを言ったりやったりできるけれども、我慢しなけりゃいけないこともあった。

ダイにはさ、そういう風になって欲しくないと言うか・・・あんたには、自分の選択を後悔して欲しくないんだと思う」

「シャルルは後悔したの？」

「後悔はしていないだろうが、違った選択もあったのかもしれないと思うことあったらう」

まだ何か話し込んでいるシャルルとマリナに声が漏れないように、ダイはさり気なく防音扉を閉めた。

静音設計でそれほど力を入れることなく開閉される扉は、最新の技術によるもので最初にダイを酷く驚かせたものであった。

「マリナも同じだ。あいつも、好きなことばかりしているように見えるが、あれでなかなか苦労人でな。

他人の人生や生死について、あんまりにもたくさん、かつ深く関わりすぎてしまった。自分が望んだことだと言うが。

だからかなあ。生まれた時から知っているダイのことが気になって仕方が無いのだろう」

「どうして？」

彼は不思議そうに言った。

「ボクは単に、大家の息子ってだけだ。マリナとの付き合いは長いけれども、マリナの特別じゃない」

「特別だよ。ダイ。あんたは、特別なんだ」

カオルはそっと微笑んだ。

「それに、ダイにはマリナは特別じゃないのか？」

「それは・・・」

ダイは言い淀んだ。カオルはマリナの友人だ。その人に自分の心の内を見せることに躊躇いを感じた。いつか、マリナに知れることになるだろう。そうなったら、こんな風にしてここに来ることはできなくなってしまう。それは避けたかった。

「そんな顔をするな。アタシがダイを虐めているとマリナに膝蹴りされる」
カオルはくすくすと笑った。

●Note 21

「ま、ダイのために、なかなか普段は積極的に調整もしない三人が予定を合わせたんだ。少し、大目に見てやってくれ」

「何を大目に見るんだよ」

ダイはむっつりとそう言う。カオルはますます可笑しそうに言った。

「シャルルのあの言い方はいつものことだ。ダイにだけ、ということではない。

ああ、でも、マリナを独占できないから、あんたには更に加えて冷淡かもな」

「カオル」

「最初はさ。断ろうと思った」

彼女はぽつりと言った。ダイの方を見ていなかった。

「本格的な奏者になるためには、もっと早いうちから取り組まなければ難しい。

音楽科があるところか、それなりに音楽教育の熱心な環境の学校に通わなければ必要最低限の練習時間を確保できない。

同じ楽器ではないから、遊びで来るのであれば、お断りだと言ったら。

一度で良いから、彼に会ってくれないかとマリナが食い下がるので仕方が無く・・・一度だけだと決めてダイに会った。

アタシは弟子は取らないことにしていたし、誰かアタシの後を継いで欲しいとも思っていないから」

その口調が・・・何度も反芻された彼女の決心なのだと思うと、ダイは何も言えなくなってしまった。

ダイが活着ているよりずっと長い時間、カオルは生きてきて・・・そして、何かを思い定めてしまっている。自分の後継は作らないと決めているし、彼女は自分自身を滅ぼしてしまいそうな程の大きな秘密を抱えているのかもしれないな、と思った。

それを口に出して言うほど、ダイはカオルの中に踏み込めていない。まだ。

「その子が自分でアタシを探し出して、頼みにやって来るのと状況が違う。いくら友人でも、その子のことが大事でも、やり過ぎじゃないか、と忠告したら。マリナは、会ってみればわかると自信たっぷりに言うからさ」

そして、ダイをそこで初めて見たカオルは、眩しそうに彼を見た。

「アンタは凄く、似ている。あの人に、似ている。

そして、アタシ達が失ったものをまだ持っている。

・・・自分の希望を述べることもなくて、何がしたいのかこっちはわからない。

誰にも優しいけれども、自分に厳しすぎて、本当に遣りたいことがあったとしても、呑み込んで

しまっているように見えた。

でも、マリナに連れられて、どうしてこんな場所に居るのだろうというような顔をして、緊張しているダイを見て、もう一度だけ会おうと思うようになった」

カオルはそう言って天井を見上げた。

「毎回、これっきりだと思っていた。次は、ない。

アタシが日本にずっといるということもないし、そのうちに・・・飽きてダイの方から来なくなるだろうと思っていた。それで友人への義理は果たせるし、マリナに責任が生じることもない。だから、どんなに次々に出すたくさんのメニューをダイがこなして来たとしても、アタシは絶対に・・・次の次は約束しないことにしていた」

カオルは笑う。そして、参ったな、お喋りが過ぎると言った。

「だからさ。シャルルが同じ様に、あんたのことを心配するのは、ダイが・・・マリナの中で大きな位置を占めていて、シャルルはそれを無視できないからだ」

「どうしてわかるの？」

「シャルルは、昔、マリナの友人を救うために・・・決してしてはいけないことをしたことがあったから」

カオルの顔は苦渋に満ちていた。ダイの質問に答えたくはなかったのに、という顔をしていたがダイが引き出してしまったのだと思うと、慌てて彼は彼女の言葉を遮った。

きっと・・・友人、と言ったがそれはカオルのことなのだろうと確信していた。

「言いたくないことは言わないで良い。ボクは・・・カオルが怒っていないということと、マリナとシャルルが今日ここにいる理由がわかったから、もうそれで・・・それだけ良いよ」

カオルは溜息を漏らした。

「ほら、そういうところがさ。・・・嫌になるほど、似ているんだ」

それから、困ったように首を振った。

「でも、ダイはダイであって、アイツじゃない。それは皆わかっていることだから。それだけは心に留めてくれ」

「ボクは・・・このままだよ。ボクは誰かにならないし、誰かのためにここに居るわけではないから」

「そう。それで、良い」

彼女はそう言うと、嬉しそうに微笑んだ。少し眩しそうに。少し哀しそうに。でも、満足そうでもあった。

「なんてことはない。ダイにかこつけて、シャルルはマリナについて来たかっただけだし、何よりダイに興味があるのは本当のことだろう。

あの人間嫌いのシャルル・ドウ・アルディがアンタには随分とご執心だな」

「マリナを独占したいというのは無理な話だよ」

ダイは肩を竦めた。カオルも同意する。

「あちこちふらつく性格は、昔から変わらない。シャルルも随分と厄介な相手を選んだな。気の毒に、としか言いようがない」

カオルはそう言ったが、どこことなく誇らしそうだった。マリナのことは彼女にとっても特別であり、彼女の最大の理解者のひとりなのだろうと思う。

●Note 22

「マリナは、ダイにシャルルとともにだちになって欲しいと思っている」

「ともだち？・・・それは頼まれて作るものではないだろ」

「ダイならそう言うと思った」

カオルがくすりとまた声を漏らして笑った。

「きっと、お互いに良い影響を与えると思うんだ。

マリナがいつだったかな・・・ぽつりと言ったことがあってさ。『シャルルには彼を理解して、一緒に居てあげられる人が必要なのだ』というようなことを言っていた。

彼には理解者は居るが、傍に居る者がとても少ない。

傍に居るものは多いが、彼を理解できている者は殆ど居ない。

家族も離ればなれだし、親族とも不和のままだ。

家族がすべてではないけれども、だからこそ、彼にはダイのような健やかな人が必要なのかな、と思う」

「ボクはそんなに大層な人間じゃないよ、カオル」

「逆に、ダイにもシャルルが必要じゃないのかな」

ぎくり、と彼が驚いた顔をしたので、カオルは顎を引いて彼を斜めに見下ろした。

「ボクに？」

「そう。シャルルがマリナの恋人だって、知っているよな？」

ダイは黙っていた。

それは彼女からそのように言われていないからだった。だから、認めるわけにはいかなかった。

彼女はシャルルのことは、まだダイには「ともだちだ」としか言っていない。

彼女のことを尊重するのであれば、ここで頷くわけにはいかなかった。

面白そうにダイの無言を観察しながら、カオルが続ける。

「・・・マリナは自分の恋愛相談は殆どしないからな。

自己完結させてしまうところがある。

そうになると、どこにも逃げ場がなくなる時がある。

あのフランスの華と付き合うというのは、軽い恋愛を愉しむということではないことは、わかるよな？」

それにはダイは頷いた。

気難しく人間嫌いで、ああやって人への対応が一般的とはいいがたい人のことをマリナが気に懸ける理由がわからなかった。

「マリナは行き詰まると日本に戻ってくる。

逃げているというより・・・彼との関係を継続させたいから、自分自身を見つめ直し少し離れた場所から自分と彼の関係を見直すために、日本に戻る。

きっと当分・・・こたえが出るまではそんな生活を繰り返すと思う。

その時に、ダイはマリナの拠り所になるだろう。

ダイを見るたびに、思い出すことがあって・・・そしてダイを見るたびに彼女は救われるものがあるはずだ。

ダイは、シャルルと情報共有することで、彼女を支えてやれる。

そして、シャルルはマリナにとって・・・どういう人なのだろう、とダイは自分で考えることができる」

そこまで聞いてから、ダイは面白くなさそうに顔を曇らせた。

「何だか、カオルに言いくるめられているような気がする」

カオルはふふんと鼻を鳴らして笑った。

「アタシはそんなに人に説教するほど話術が巧みじゃないぞ。

言葉が足りないといつもマリナに言われている。

・・・言葉は難しい。

そして疲れる。

だから音楽をやっているくらいだからな」

そこまで言うと、カオルは凭れていた体を正し、楽器を丁寧に拭いて手早くケースの中に納めた。

甘いニスの光沢がケースの中に消えて、彼女は伸びをした。

「今日の練習は終わりだ。・・・さて、飯でも食いに行くか」

彼女はそれ以上何も語るつもりはないらしい。

振り返ると、もう、いつものカオル・ヒビキヤであった。

「おい、今日はアタシのレッスンを台無しにしてくれた礼をしてもらおうぜ。

あの煩いふたりと一緒に、アタシが黙って食事をするために、ダイに担当を任せる」

えっとダイが声を上げると、カオルは当然だという顔をした。

「アタシの溟沫の時間を奪った罰だよ。師匠の言う事は、絶対だぜ」

「メイモク？」

彼が首を傾げると、カオルは、ああ、と言って説明してくれた。

「『溟』は海原のこと。『沐』は洗うということ。

つまり、海で浄めを行うように深く瞑想しながらも濯ぐように自分の中のものを削ぎ落としていくことだ」

ダイは意外そうな顔をしてカオルを見た。

日々の練習とは、何もないものに添加していくことなのだと思っていたからだ。

カオルはダイの疑問に答えた。

「どんなことも、蓄積を続けていくと、ある一定の時期になると飽和状態になる。そこから・・・何を落とし、何を捨て、何を残すのかを決めるのは自分自身だ。だから、演奏家の練習時間を溟沐の時間と言うことがある」

それでふと、思った。

マリナも溟沐するのだろうか。

何か・・・物思いに沈んで、選ばなければならないものについて悩むのだろうか。

そして、シャルルも。

同じ様に、ダイも・・・ダイも、これから溟沐する時間を迎えるのだろうか。

「まあ、ダイにはまだ早いかな。でも、いつか訪れる。その時に、一緒に居る人がダイを支える。・・・その時に、シャルル・ドゥ・アルディが居れば随分と勝手が良いと思わないか」

「・・・カオルが言うと、別の悪いことを唆しているように聞こえるよ」

ダイはふいと、横を向いた。

「唆しているのさ。・・・あのシャルルが気に入る相手がアタシの弟子なのだから、好き放題できるだろ」

冗談なのか本気なのか、まったくわからなかった。

いつもの、とらえ所のない飄々とした雰囲気のカオルは言った。

●Note 23

「ダイ。

体調には気を付けろ。

アタシじゃ、どうにもしてやれない。

でも、幾人もそれが原因で音楽をやめてしまった者を知っている。

成長前から音楽を続けていると、成長期に対応できないんだ。

余りにも長くその体で演奏することに慣れてしまっているから。

だから、ダイは一番良い時期に音楽を始めたと思って欲しい。

シャルルの言う事には腹立つかもしれないが、今は堪えて言う事を聞け。

・・・基礎練習は辛いけど、そのうちに自分の思いの通りに吹ける」

「・・・ボクは、また、ここに来てもいいの？」

「無理をしないでほどよく練習するのであれば」

カオルが傍に立つと、彼女の顔がまた少し近くなった気がした。

ダイの身長が伸びたからだ。

そして、彼女の顔が更によく見えるような気がした。

「次の次も。ボクはここに来て、カオルから教えて欲しい」

「ダイがそう望むのであれば。アタシはいつも・・・いつでも迎えるよ」

それだけ言うと、彼女は彼の背中をぽんと軽く押した。

「さ、行くぞ」

カオルはそう言って、扉を開けると、防音扉で消音されていたマリナとシャルルの声が飛び込んで来た。

彼女にも、マリナにも・・・そして、シャルルにも涙の時間があるのだろう。

まだ、ダイはそれを知らないけれども。

自分で自分の選んだことをもう少しで恨みそうになってしまうところであった。

それを・・・彼らは遠くから見守って、そして自分達にできることをしようと躍起になって・・・

ああ・・・

ダイは思わず呟いた。

「どちらが、こどもでおとなか、わからないよ」

カオルはその声を聞いて言った。

「おとなでもありこどもでもあるって凄いことだよな」

ああ、そうか。

ダイはそこで悟った。

この人達は。

おとなで、こどもなんだ。

「涙を懼れるな。いつか、ダイにもやって来る。その時には・・・ダイの傍には、アタシ達がいると良いなという勝手な願いがあるだけさ」

カオルはそれだけ言うと、ダイを先に外に出した。

ありがとう、という時間的余裕もなかった。

そこには、マリナとシャルルがまだ話をしていた。

「だいたい、シャルルはダイに対して敬意がなさ過ぎる」

「君に言われたくない」

「ダイはね、大家さんの息子なのよ。生まれた時から一緒なの」

「それが彼の負担になると思わないのか」

「うるさいわね、シャルルのその束縛癖、何とかならないの」

「君の放浪癖よりマシだ」

何とも実のない会話を繰り返している彼らであったが、ダイの姿を見つけると、互いに無言になった。

彼はマリナの手首をそのまま掴み、まだ離していなかった。

・・・マリナはそれを一度は振り払ったはずなのに。

そして彼女は先ほどよりもシャルルに一步近い場所に居た。

「・・・そこ、ボクの使っている椅子なのだけれども」

ダイはそこでむっつりとして言う。

すぐに部屋から続いて出てきたカオルが、状況を見てにやりと笑った。

「痴話喧嘩か。楽しそうだな。アタシの家で痴話喧嘩なんて度胸があるな。

・・・飽きるまでしばらく見物しているから、続けろよ。

食事の時間までまだ少しある。

おい、片手間にやるなよ。

手を抜くな。

マリナはよく言うだろ？

何事も、『一生懸命』だけ」

●Note 24

それでマリナは肩を竦めて降参の合図をした。

食事と聞いて我に返ったようだ。

慌ててシャルルから離れ、彼の手を今一度振り払った。

「失礼しました」

それから、ダイに向かって言う。

「そのソファ、気に入ったの？」

シャルルの瞳の色のように思ったが、マリナに尋ねられてダイはまあね、と言った。

「良かった。シャルル。シャルルの選んだ品、ダイは気に入ってくれたみたい」

マリナが手を叩いて喜色満面になったので、ダイとシャルルは同時に面白くなさそうな顔をした

。

シャルルは黙って居ろと言ったのだろう。

そして、ダイは知らずに自分の場所だと主張したので気まずくなってしまったのだ。

彼は無表情に言った。

「この部屋に合うものを、カオルに礼として贈りたいと言ったのは君だ、マリナ」

「ダイに思い出して欲しくて自分を連想させる色にするなんて、どれほどダイのことが好きなのかしら。本当に回りくどいわね」

今度ばかりはマリナも負けていなかった。

彼を言い負かすことが出来るのはマリナ・イケダくらいだろう。

改めてそう思った。

ダイはやれやれ、と溜息を漏らす。

今日は本当に星巡りが悪いらしい。

いろんなことが、ありすぎた。

「そうか。もう終わりか。つまらないな。じゃ、ダイ、食事でも行こうか」

「どこに？」

「シャルル・ドウ・アルディの宿泊先近くのレストラン。最上階で、景色も良い。成長期には肉を食え。最高の焼き加減で出してくれる。

・・・ああ、もちろんそこはシャルル・ドウ・アルディの驕りだ」

「じゃ、一番良い物ください、と言わないとね」

マリナがわくわくすると言いながら、自分の転がした荷物を取りにシャルルから離れる。

「三人分しか予約していない」

「あんたなら、もうひとり分くらい、なんとかなるだろ。

それに・・・ダイも誘っていくつもりだったのでは？」

あのレストランで最高の席をチャージする時には偶数人数しか受けないって話だ」

シャルルは軽く溜息をついて電話をかけてくると言い、胸ポケットから携帯端末を取り出した。

隣のフロアで話をするようで、出て行く際に鞆の中身を床に落とした時と同じ場所で確認を始めてしまったマリナの茶色の髪をこつん、と拳で軽く叩きながら出て行った。

その自然な仕草が・・・もう、見ているだけでダイは苦しくなる。

お互いだけがわかる小さな合図が、シャルルとマリナの間にはあるのだ。

「席次が問題だな。食事の時には喧嘩するなよ。マリナを取り合ってダイとシャルルの言い合いは楽しそうだが、食事の時くらいは静かにやってくれ」

にやにやと笑って忠告するカオルに、ダイは嫌そうな顔をした。

「ボク、今日は家に遅くなると家に言っていない」

「それを言い、マリナは行って戻って来たところだよ」

カオルに苦笑いにダイはまたやられた、と思った。

マリナが遅れて来たのは、そういう理由か。

彼女は携帯電話を持ち歩かない。電話で簡単に済ませられるとも思っていないのだろう。

しかもダイの家はそういう不意の予定には厳しかった。

だからそれを知っているマリナは、わざわざ、家に行ってダイの寄り道の許可を得てきたのだ。

「大人の事情に付き合わせたからな。ダイの親御さんに叱られても、それはマリナの役目だ」

「ボクはおもちゃじゃないよ」

ダイはシャルルに言ったことを繰り返した。

「・・・ともだち、だろう？マリナも言ったぞ」

「・・・うん」

遠くで、シャルルのよく通る声が聞こえてきた。

「友人をひとり追加で招くから席を用意してくれ」

たったそれだけの素っ気ない言葉であった。

すまない、とか。申し訳ないけれども宜しく頼む、とか。

そういう言葉は彼からは発せられない。

まったく高慢な人だ、とダイは思った。

でも、彼はダイのことを友人、と言った。

それを聞いて・・・ダイは何となく、彼のことを最初の印象と違った風に見えていることに気がついた。

最初の時ほど、嫌悪感を感じない。彼は口は悪いしマリナ以外の人間には興味がなさそうに見えるが、その実・・・本当は人に関わりたいと思っているのかもしれないとさえ思えた。ひょっとすると、そういう職業も兼務しているのかもしれない。他人を分析するのは得意でも、自分のことになると・・・そうでもないのかな、と思った。

●Note 25

「ダイ。許可は貰ってきたから」

マリナの声にダイはわかっているよ、と言った。

「久々にダイの話聞かせて」

「マリナの話も聞きたい」

すると、マリナは顔を上げてダイの方を見た。

カオルがダイに見せたように・・・眩しそうに目を細めた。

「シャルルの話も聞いてくれる？」

「仕方が無いな」

ダイはそう言って彼女に譲歩した。

マリナは嬉しそうに・・・本当に、心から嬉しそうに笑った。

彼女には笑顔が似合う。

そして、彼女を泣かせることはせず、笑わせてやって欲しいとシャルルに懇願したのは、他ならないダイであったことを忘れていた。

「しょうがないな」

ダイは頭を軽く掻いた。

「ともだちは、作るものじゃない」

彼の呟きにマリナは不思議そうに言った。

なぜ、ダイがそのようなことを言っているのか、わからないという顔をしていた。

「違うわ。作るものよ。・・・自然にできるものではない。やってくるものではない。自分でともだちになりたいと願い、少しでも理解しようと近づき、そして努力するから、ともだちになれるのよ」

ダイは大きく息を吸った。

彼女はやはり、ダイの大事な存在なのだ。

「なるほどね。シャルルがマリナに拘るわけだ」

「何？」

「何でもない」

ダイにはわかっていた。シャルルにマリナが拘る理由も。何となく、わかった。

「車の準備ができた。行くぞ」

シャルルが不機嫌そうな顔をして、言った。

マリナはカオルの腕に自分の腕を絡めて、もう片方の腕には自分の鞆を提げた。

「カオル。今日は落ちたモノを食べるんじゃないわよ」

「マリナもな」

ふたりはそれを言うと、顔を見合わせて笑い出した。

何のことを思い出しているのか見当もつかなかったが、遠い日の・・・マリナとカオルが共有する思い出について、微笑んでいるのだ。

その様子を見て、彼はますますむっとした顔をしていた。

彼は相当な独占欲の持ち主のようである。他人には冷淡であるのに。マリナ・イケダには違うらしい。

マリナの笑顔が、皆を朗らかにする。

たとえどんなに、湊沐の時間が彼に選択を迫ったとしても。

ダイは決して捨てることのないものがあるのだと知った。

それはともだちであり・・・ダイを囲む人々との繋がりであった。

それは、彼の環境が変わっても変化しない。

シャルルの前を通り過ぎようとした時。

彼は、ダイに向かって低く言った。

「楽器を変えろ。君には可能性が・・・ある」

「残念ながら、今のボクにはこれしかないから。他を選ぶこと以前の問題だよ」

ダイがそう言って、自分の楽器ケースを撫でた。

彼から見たら安物かもしれないが、ダイにはこれが唯一であった。

・・・マリナのことを唯一だと言ったシャルルとは少し違うかもしれない。

ダイの言葉を聞いて、彼が少し何かを考えている顔つきになったのが気になったが、マリナに急かされてダイはそのまま慌ただしく外に出ることになった。

その後、大変な借り物を受けることになり、彼との関わりがもっと深くなっていくとは、この時にはまだ予想もしていないことであった。

けれども、ひとつ、わかっていることがあった。

ダイは、マリナやカオルに言われたからではなく・・・自分から、シャルルとともにだちになってみたいな、と思い始めていた。

そして、ダイはシャルルに振り返って言った。

「シャルル、ボクを『おまえ』というのはやめろ。ともだちにそれでは敬意がなさすぎる」

シャルルがそれに何か反論しようとしたが、ダイはま前を向くとそのまま足速に、マリナとカオルに向かって行く。

「焼き加減は？」

「そもそも何料理なの？」

「デザートは？」

三人の姦しい相談に、シャルルはまた無表情になったままで軽く溜息をついた。

だがしかし、その顔はどこか穏やかであった。

ダイが叫ぶ。

「シャルル。行くぞ」

シャルルはそこでようやくダイに向かって言葉をかける。

「オレに命令するな」

彼は白金の髪を揺らしながら、彼を待っている者たちのところへ歩み始めた。

誰にも歩み寄らないとしていたシャルルは、彼を待つ者たちのところへ・・・彼はゆっくりと進んで行った。

それからずっと彼のことを見守って行くことになり、やがてダイが・・・シャルルのよき理解者

となることを、予感するかのよう。

(FIN)

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

●Congratulations on the arrival of your son. 01

裾上げを頼まれて、正直に戸惑った。

確かに、成長に伴って衣類の裾を変更することも多かった日々であったけれども。

制服の裾上げをするとき。

やはり、格別の思いがあった。

生まれたばかりの瞬間や、この子を妊娠した時のことを思い返す。

同じ様に、彼の前に娘を産んでいた。

けれども、少し違う感想を持っている自分に戸惑う。

これは、夫にも言えない感想であった。

彼女は男兄弟の中で育った。母親と仲睦まじいという関係かということそうでもなかった。

・・・自営業の夫の元に嫁ぐときにはだいぶ反対された。会社員である父と専業主婦であった母の中では、自営業という存在そのものを認めていたとしても、自分達の生活や人生の中に組み入れることは考えていなかったのだろうと思われた。

確かに、彼女もそうであった。自分がまさか・・・都内のアパートを経営する家に嫁ぎ、夫は会社員であるから自分ですべてを取り仕切らなければならないのだと知ったのは、結婚してから後のことであった。

結婚してすぐに、娘を授かったのでそんなことを考えることはなかった。彼の両親と同居もしくは同業になることを厭って、彼は会社員になった。それで知り合ったのだけれども・・・その先も、自分のこれまでの人生と同じであると根拠もないのにそう思っていた。

彼の両親は彼が結婚するとなると同居を申し出ることもなく、彼らの出身地である田舎に引いてしまった。そこに、家屋も彼らの先祖の墓もあり・・・ここには仮住まいであったのだと言わんばかりに、あっという間に引き払ってしまった。

これまでの縁故も、近所づきあいも、彼と彼女に引き継いで、そして重荷を下ろしたと言っ
て・・・残していったものがどれほど大きかったのか、重かったのか振り返ることもなく去っ
てしまった。

娘の成長は、想像も想定もできた。自分と同じなのだろうと思うと、ただ、愛おしかった。けれども、息子の大については少しばかり事情が違っていた。

●Congratulations on the arrival of your son. 02

何も心配のないこどもであった。

姉にあたる娘を甘やかしすぎたと思った時には、遅かった。

少し浮ついたところもあるけれど、気立ての良い子に育てくれたと思う。

けれども、大にはそういうことを殆ど感じないままに過ごしてきた。

顔色を覗ってばかりいるような子ではなく、気立ての良い、穏やかな性格であった。

彼が生まれた時に、年若い入居者を迎え入れることになって、彼女は母親としての自覚よりも、アパートの管理人としての仕事を遂行することに明け暮れた。

ひとりめの時には、その子だけにかかり切りになれば良かった。

でも、第2子となるとそうはいかない。上の子は赤ん坊に返ってしまい、夜泣きに悩まされた。

自分ひとりだけに浴びていた愛が、違う対象に移っていきそうだと何となく感じているのだろうなと思うと、ますます不憫に思えた。

けれども、ひとりきりの寂しさを味わわせるより、ふたりで・・大きくなっても、きょうだいで喧嘩をしながらも、仲良く生きていって欲しいと思う。

正直に言って、慣れない生活は疲れたという以外に何も言えなくなってしまうほどであった。

毎日毎日、同じ事を繰り返す。そして、休みもないし、少しでも怠ると自分に返ってくる。

労いの言葉をかけてもらえるわけでもなかったし、何もなくて当たり前であった。

何もないことを維持することにも、大きな労力が必要とされると言うのに。

綺麗なことばかりでもなかったし、苦情も受けることもあった。温和に楽しく過ごす仕事ではない、と思った途端に、嫌気がさした。

そんな時に・・・それまで大人しくて手がかからなかった大の夜泣きが始まり、呼応するように上の子の甘えが始まった。

わかっていたことであつたし、周囲からの話も聞いていた。でも、実際に自分が遭遇すると、とてつもない苦行のように思えて仕方がなかった。

アパートの管理というのは、そのまま、人の管理でもある。

彼女の苦悩の種は、最近受け入れたばかりの若いまんが家であった。中学を卒業したばかりで、まんが家として生計を立てると聞いて、最初は不安定な職業の者を受け入れることはできないと思った。

親になってみて、わかることもある。

彼女の親は、どれほど心配していることだろうと思った。

時々、電気や電話が止められていることもあつたし、どうやって生活しているのかわからなかった。

家賃も滞納することが多く、定日に入金されることは殆どなかった。

細々と、その日を凌いでいるような印象を受けた。

だからこそ、ここを追い出すことはできなくなってしまう。

もう、彼女には行くところがないからだ。

憂慮することが多く、彼女も眠れない夜を過ごすようになった。

けれども、誰も助けてはくれない。夫は毎朝仕事に行ってしまう。日中はひとりきりで、泣き叫ぶ子ども達の面倒と際限なく繰り返すのだ。

そうして一息ついた頃には、すでに陽は高くなっていて、もう一度、朝の繰り返しが始まる。その合間に、アパートの運営管理に関する仕事を片付けて、自分の食事は台所で立って食べる始末だった。

惨めだな、と思い始めると全てが悲惨に思えてくる。

けれども、誰にも、言い訳できない。子を生んで育てるということを選んだのは、自分なのだから。

親になるということは喜びだけではなく、自分も一緒に子どもと育っていかなければならないのだと思うと・・・これまでの自分は一体何だったのだろうと思ってしまう。

そんなときのことであった。

夜泣きが酷い大に、姉が手を上げるようになったのだ。

それを目撃した時、彼女は衝撃を受けた。

幼い子が、苛ついた顔をしながら、嬰兒を叩くのだ。

その顔つきが、自分に似ていたから。朝の鏡に映る、自分の顔によく似ていたから。

彼女は眠っている夫を揺り起こし、熟睡を妨げられて不機嫌そうな顔をしている夫に娘を頼むと言って、大を抱え上げ・・・夜の道路に飛び出した。

どうしよう、と思った。

自分は、親として失格だ、と思った。

情けなくて・・・何もかもに中途半端な自分が、ただ、情けなくて涙がにじむ。

それなのに、乳飲み子は・・・彼女の腕の中で、小さくしゃくり声を上げているばかりであった。

●Congratulations on the arrival of your son. 03

自分ひとりで何もかもを背負うのは、無理だと思う。

でも、自分ひとりで背負わなければいけないこともあると思う。

そういう生真面目さが、息苦しいと言われたことがあって、彼女はそれを思い出した。

泣き疲れたために擦れ声で声にならない叫びを上げている乳飲み子を抱えて途方に暮れてしまう

。乳を含ませれば良いのだろうが、彼女は連日の睡眠不足で、乳の出が悪かった。愛しているのに、愛している存在が困っているのに、対処できない。

溜息を漏らす。

アパートの前は一方通行であったので、しばらくそこを往復することにした。

街灯も明るかったし、大通りに出るよりここで歩き回った方が安全であったからだ。何も持たずに出てきてしまったことに気付いたこともあった。

自分はどうして、こうしているのだろうと思った。

子を授かった時のあの時の喜びや、陣痛の苦しみと痛みを耐えて聞いた産声に涙した時のことを忘れたわけではない。

でも・・・大の声が大きくなると、身体が震えるのだ。同じように娘が憤るのも、自分が苛ついているからなのだと思うと、ただ、哀しくなる。無性に。

「あの・・・」

自分の回想に夢中になっていて、声をかけられていることに気がつかなかった。

それにこんな夜更けに、人が通るとは考えていなかったのだ。

歩いていれば、大は静かであった。だから、歩いている。でも他の人に遭遇するとは思っていなかった。

彼女は貌を上げて・・・少しして、目線を落とした。

街灯の下にある人影はとても小さかったからだ。

随分、小柄な人だと思った。

身長は140cmぐらいであろうか。こどもと言ってもおかしくない。けれども、その人物はじつと自分の方を見ている。

「大家さんですよ」

彼女がそう言ったので、ああ、と声を漏らした。

思い出した。

彼女は、アパートの最年少の住人で・・・池田麻里奈であった。

大きな鞆を肩から提げて、彼女はじつとこちらを見つめていた。

●Congratulations on the arrival of your son. 04

「ええと」

少女特有の少し高めの声で、彼女はぺこりと会釈をした。

こんなに遅い時間に出歩くのは危険だ。親から、そう教えて貰わなかったのだろうか。彼女は、

驚きの次に、呆れてその少女を見つめる。

まだ未成年であったが他に住む場所が見つからないということで困っているという話を聞き、入居を引き受けた。

しかし、ただそれだけで引き受けたわけではない。ボランティアではないと割り切って済ませることもできたし、何よりそんな不安定な職業を持つ少女をアパートに住ませるのは、どうかと思った。

古いアパートで、一部屋の大きさは本当に狭い。もう少しすれば、立て替えを考えなければならないと計画しているが、今はそんなことも考える余裕がなく先延ばしにしている懸念事項であった。

その少女は茶色の髪の前髪を結び、眼鏡をかけおり、それが街灯にあたって光って眼の奥が見えないが、とても幼い顔をしていた。

入居の時に挨拶に来たが、ちょうど授乳の時間であったので、挨拶もしたのかしていないのかわからないような会話であった。

忘れていたわけではないが、今、正直に言って他者のことについて詮索したり想像することのできる余裕はなかった。日中ならば、管理人なのだという責任感が彼女を覆い、仕事を優先しなければならないのだという気概が訪れるが、それは夜が更けていくと、呼応するかのように消え去っていく。

自分の時間はまったくない。自分のことを考える時間もない。そしてようやく眠れると思って横になり、瞬きをしたと思うと既に夜明けになっていて、また子供が泣き出す声で目が覚める。夫は育児に協力的であったが、積極的ではなかった。確かに、夜泣きを煩いと言われたりすることはなかったが、具体的にこうして欲しいという提示をしなければ彼は何をすれば良いのか思いつかないらしい。

そんな中で、記憶に薄かったのは確かであるが、こんな時間に外をふらついていることを当然とするような価値観の娘であるのならば、次の更新は考えなくてはいけない、と思った。

やはり、自分は親になったのだと思う。娘や息子が、目の前にいる彼女と同じ様にまだ十代で夜暗の路を歩く姿を想像するだけで、肩がどっと重くなってしまう。

「こんばんは」

池田麻里奈は、そんな彼女の考え事を上書きするかのようになり、何とも珍妙な挨拶をした。

「遅い時間のお帰りだけど・・・いつもこんな風に遅いの？」

彼女の声は、少し尖っていた。責めるつもりはないが、それでも・・・どこか軽蔑した目付きになってしまっていたと思う。心配するのはもっと先の話だろうが、自分の子らに良くない影響を与えるような住人が近くに居ることは良くないと思えてくる。

どうして、彼女を入居させてしまったのだろうという疑問が、ふつふつと湧いて来た。

●Congratulations on the arrival of your son. 05

「打ち合わせが長引いて・・・電車賃を浮かせるために、歩いていたら遅くなってしまって・・・」

憂慮の種であったのに、すっかり忘れてしまっていたことが少し後ろめたくなった。

確かに、彼女は見る限り、同じ年頃の少女達とは違っていた。

他の者たちは学生服に身を包み、恋や学校や親のことで悩み、些細なことで笑い転げる。

友達という名前の群を作り、そして電車賃を支払うのが惜しくて歩いて帰ってくるようなことは決してしない。

彼女は、肩に提げていた鞆を持ち直した。

池田麻里奈は非常に小柄であるので、鞆が彼女を背負っているような感じにさえ見える。

「そう」

自分の言葉が大人として不適切であったと思うが、謝るきっかけを失ってしまった。それほど、相手は気にしていなさそうであったが、彼女の胸に抱いた赤子に興味を示しているようであった。

「お子さんですか」

そうでなかったら何に見えるのだ、と言いそうになったが、彼女は堪えて言葉を呑み込んだ。

「そうなの。・・・ちょっと機嫌が悪いみたい」

彼女はそう言った。大抵の者は、それで通り過ぎて行く。はやく去って欲しいと思った。

息子が誇らしいと見せるような時間ではなかった。

そういう空気を発しているのに、池田麻里奈はその場を去ろうとしない。

洋服もたくさんは持っていないようであった。清潔であればそれで良いと思っているらしい。

自分の若い時はどうであったかということを出していた。こどもができる前は、好きな服を好きな時に買い、そしていつでも自分は何でも手に入ると思っていたし、その通りになることが多かった。自分のペースで生活ができた。

後悔しているわけではないが、もう、二度とああいう日々には戻らないのだろうなと思うと、手の中にあった、「在って当然であったもの」が急になくなってしまっていることに気がついた時の驚愕と焦燥と不安が一度に押し寄せてくる。

近くに彼女は寄って来て、彼女の胸で小さく嘸り泣く乳飲み子を覗き込んだ。

彼女は反射的に腕を持ち上げて、池田麻里奈の頭上に彼を避難させた。

そういう自分の行動に、少し驚く。まだ少女というよりあどけない幼女の顔つきの彼女が、大きな瞳を見開いて、赤子に感嘆した。

「名前は何と言うのですか」

「大。漢字の大と書くの」

彼女は答える。名前をどのように書くのかと聞かれることが多かったし、漢字を見せると何と読むのかと聞かれるので、読み方と漢字の説明はいつも揃いの説明になっていた。

少女は、嬉しそうに声を上げた。

「私の名前にも、『大』が入っています。マリナの『奈』に入っています」

赤子との共通点に喜ぶ池田麻里奈の顔を、彼女はじっと見つめた。

●Congratulations on the arrival of your son. 06

近くで見ると、本当にまだこどもの顔をしていた彼女は、その一方でどこか大人びていた。

なぜ、そう見えるのだろうか。ふと、気になって彼女は池田麻里奈を見つめる。

こんな遅い時間に夜道を闊歩しているからそう思うのか。

いいや、違うと思った。彼女の瞬きはとてもゆっくりで・・眼鏡をかけていても、とても視力が弱いことがわかった。

だから、彼女は尋ねたのだろうか。

胸の中の息子の鳴き声はか細くて、暗闇の中で聞けば子猫が啼くくらいにしか聞こえない。

もっと泣きわめく、火の付いたような激しい夜泣きではなく、今夜はたださめざめと泣く息子に、ほとほと疲れていた。

眠っている顔や、大人しくにこにこ笑顔を浮かべている時には、天使がやって来たのだと思い幸せと喜びで溢れるのに。

それでも、激しく泣くことに疲れて弱々しく愚図り続ける彼のことを、他人に遠慮して外では気を遣って泣くこどもなのだと思ってしまう。

良い風にも悪い風にも受け止められない、救いようのない事態に陥っていることも自覚していた。

彼女は・・・息子の顔を覗き込むようにして、踵を上げた。

小柄な彼女が、赤子の顔を見る為にはあとほんの少し浮き上がらなければならなかったが、今の状態が池田麻里奈の精一杯なのだと知ると、彼女は腕の力を弱めて・・・ゆっくりと自分の腕を麻里奈の方に傾ける。

大人げないことをしているとわかる。

幼い少女の前で、自分は酷く意固地になり、意地悪になっていた。

恥ずかしいと思うよりも前に、自分が惨めに思えてくる。

なぜ、こんな風にしてまで自分は夜の街を彷徨っているのだろうか。皆が家の中で鎮まり身体を休め、団欒で笑い疲れてさて眠ろうかと思っているに違いない時間に・・・こどもの鳴き声が響き渡るかもしれないのに、家に籠もることもできずに外に飛び出してしまった。

麻里奈は正直な娘であるらしい。夜目に見る、御包みの中の赤子のことを、可愛らしいとか男の子らしく元気だとか・・・ありきたりな言葉は使わなかった。ただ、見つめている。

ゆっくりとした瞬きで。眼鏡の奥で、瞳が柔らかく上下する。

「・・・こんなに遅い時間に一人歩きは、危険よ」

「今はひとりではないですよ」

この子は頭の回転は良いらしい。彼女の注意に、ちょっとはにかんだように笑いながら、大人の心配は不要だと言うかのように、今は大丈夫なのだから問題ないのだという意味を込めて彼女を遣り込めた。

●Congratulations on the arrival of your son. 07

「元気そう」

麻里奈がそう言うと、彼女は苦笑いを浮かべた。

大を出産してから気がついたことがあった。

最初の子の時には、はっきりと自覚していなかった霧の正体を知った。

皆、自分のことを見なくなるのだ。

赤子のことばかり聞かれる。

何ヶ月なの？

性別は？

名前は？

そう、良い名前ね。

・・・彼女を詮索するための言葉の組み合わせは無数にあるが、そのひとつひとつは知ったからといって利益になるものでもないし、意味のないものでしかなかった。

質問される側の彼女にとっても、それは同じだった。

その質問には、彼女のことは含まれない。皆は、こどもに眼が行くが決して自分のことは見ない。

この子も同じだ。

そう思うと、池田麻里奈に対して、自分のことをどうせわからない子供なのにと思い始めてしまう。誰も悪くないのに。

何かのせいに見てみたくなる。

誰か野せいにしてみたくなる。

苛立ちの理由や、空しさの矛先を・・・自分のこどもに負わせてしまいそうになる。

自分は、いつから・・・心が沈むようなことばかりしか思いつかなくなってしまったのだろうかと思う。

「元気すぎるの」

自嘲気味に笑い、そして次に彼女は自分が管理人で、大人で・・・人の子の親であるということが麻里奈よりも優れていることだと勘違いしそうになる。

「それより、帰りがこう遅いのは、良くないわ。もっと、自分のことを考えて大事にしないと」大人とは若い者に対して、教え諭す義務がある。

そして、彼女は池田麻里奈の保護者から彼女を預かっている身でもあった。

そこには契約関係しかないことは承知していた。でも。

自分は、誰かより優位であるのだと確かめたかった。

彼女は、胸の中でぐずる息子を抱いたまま、麻里奈の茶色の髪を見つめながら言った。

「仕送りが来ているのに、送り返すくらいなら、独り暮らしは諦めて実家に戻った方が良いのではないの？」

彼女は踏み込んではいけないところに踏み込んだと思ったが、止められなかった。

生意気なこどもを言い負かしてやろうという気持ちがまったくなかったと言えば嘘になる。

麻里奈はそれを聞くと、ぐっと唇を噛んで、眉をぴくりと動かした。それまで和やかだった麻里奈の空気が、とたんにぴんと張り詰める。

随分とわかりやすい人がだと思った。

まだこどもだと心の中で失笑する。

池田麻里奈が親から送られてくる配送物を、受け取り拒否していることを彼女は知っていた。

親元から離れてみて、親のありがたさがわかるものであるが。

彼女はそうではなかったらしい。

親を蔑ろにしているわけではないのだろうが、彼女が若くして家を出てしまったことや、電車賃を惜しんでいるほど生活に困窮していることを考えると、池田麻里奈の毎日が満ち足りているとはほど遠いと思えた。

●Congratulations on the arrival of your son. 08

明らかに謗言だと思った。

しかも、本人の目の前であからさまな意図の透けて見える物言いが自分の口から出てきたことに、少し驚く。

こどもには。

大きな志を持って欲しいと願ったり、誰からも愛されるような子になって欲しいと思ったり・・・

・ひとつの文字で全部の祝福を表すことができる文字があったのであれば迷わずそれを選ぶと思った日は、遠い昔のことではない。

自分の子を泣かせる者は許さないと思ったのに。

自分の子を、自分の子が泣かせている。

そして、そのことから逃げるようにして彼らを引き離して外に出てきてしまった。

・・・そして、自分は今・・・他の親の子供である池田麻里奈を傷つけている。

これは業なのだろうか。

それとも・・・自分は親として欠格しているのだろうか。

こども達を産み落とす時に。

人として大切だと思いこども達に受け継いでいって欲しいと思ったものを吐き出してしまったのだろうか。

そう思うと・・・自分自身に嫌悪する。

これから未来のある者に対して、それを否定するような呪禁を浴びせるというのは、彼女の良心に反することであり、それを敢えて越えてしまっていることについて、無関心かつ無感情でいる自分に脅えていた。

こうして自分は大人になったという言い訳と免罪符を使って、人を・・・少女を傷つけることを正当化しようとしている。

けれども。

彼女はそれに対して返事をするのではなかった。

彼女の顔を見上げた。

目が弱いはずであるのに。麻里奈の視線はこちらを見据えており、どこか人を落ち着かなくさせる。

けれどもそれは、麻里奈の影響ではなく・・・自分が後ろめたいからそう思うのだと我に返る。謝る機会を失ってしまった。

自分は、最低だ。

そう思った。

その時。

彼女の胸の中で、息子が身動いだ。

まるで、彼女の声にならない慟哭に呼応したかのように。

そして。

目の前の・・・池田麻里奈は、彼女の冷たい言葉を躲して茶色の瞳を瞬かせながら、言った。
赤子ではなく。

彼女の顔を見ながら、麻里奈は言った。

「元気ですか」

皆が、彼女の分身しか気にしない。

彼女はどうかのかと聞かない。

自分は子を持って誇らしいと思うのに、その子に注目が行くことに戸惑っている。手放して喜べない。

それが・・・どうしてなのか・・・池田麻里奈は見透かしているようであった。

そうして欲しいと言わないのに。

どうして・・・こんなに幼い少女が自分に聞くのだろう。

元気なのか、と。

何も言わないでいると、麻里奈は静かに微笑む。

彼女には豪胆な笑顔や豁達な物言いが似合っていると思ったし、いつもきっとそうするのだろうと思われたけれども。

こんな夜には。こんな夜だからこそ。

若く幼く、何もかもがまだ始まったばかりの池田麻里奈から言われる言葉が、塩水のように全身の肌に染み入る。

●Congratulations on the arrival of your son. 09

「ああ、だからね。さっき言った通りよ。・・・元気が良すぎるくらい」

彼女はそう言って、虚ろな笑いを浮かべる。

万華鏡のように話題が変わるのは、少女特有の現象なのかもしれない。けれども、池田麻里奈は話題を変えるのではなく繰り返した。

これで会話は終わるだろうと思ったし、終わらなければ終わらせるつもりであった。今は、誰とも・・・話をしたくない。

誰かに話を聞いて欲しいけれども、最初から事細かに事情を話すことはしたくないと思っていた。面倒だとか億劫だとか思う気持ちが先行する。

結局、当人ではないのだから、どれほど熱心に語ったとしても、理解してくれないという失望しか残らないことはわかっていた。

もし、自分が耳を傾ける立場だとしたら、きっと・・・同じ様に、当たり障りのないことしか言えないだろう。

声をかけてやりたいけれども、それは海辺の熱砂と同じで・・・ほんの数滴の海水を垂らしたところで満たされることはないのだから。

けれども、池田麻里奈は彼女の顔を見て、不思議そうな顔をした。

茶色の瞳が印象的で、近くで見るととても気になる目線を持っている少女であった。目が弱いからだろうか。少し潤んだ、それでいてどこかとらえ所のない不思議な視線を彼女に向ける。

「違う」

麻里奈は短くそう言った。

そして、彼女が首を傾げていると、続けて麻里奈は言った。彼女が胸に抱いた、乳飲み子にちらりと視線を向けたが、彼女はすぐにこちらに眼を向けた。

「・・・あなたは元気ですか」

喉が干上がるのを感じた。

このまま、ここに根が生えて、立ち尽くしてしまいそうになる。

皆が、赤子のことばかりを尋ねる。それなのに、この少女は・・・子を守る為にはどんな危険も冒すほどに強いとされる、この世で最も強靱な役割を背負わされた者に向かって、尋ねるのだ。

どうして、と言いきうようになってしまった。

喉元が干上がり、そして声にならない声が、掠れた摩擦音になって器官を通っていく。

何なのよ、と言いきりになった。自分がまったく考えていなかった事態に陥っていると……はつきりと自覚したからだ。

何なのよ、ともう一度言いきりになった。

けれども、彼女の唇は震えて……肘から先の腕の感覚を失っていく。

それでも、息子を取り落とさないように注意を払うのは、自分の理性ではなく本能からくるものであった。

楽しくて、明るくて、毎日が素晴らしいとしか思えない日々がやって来ると思っていた。長女の時には、手こずったものの、そう思えた時が幾度かあった。

一対一で向き合うことも怖くなかった。

けれども、息子が何を訴えているのか、理解できなかった。彼の心の声が、聞こえてこないのだ。

性別が違うからという理由で片付けられなかった。

……様々なことが彼女を躊躇させた。

ひとりめよりも、ふたりめの方が育児は苦勞が伴うと聞いていたけれども。

それでも、芽生えた命がこの世に出るまで……彼女は毎日、語り続けたのに。

暮れてゆく空を見て、激しい雨音を聞いて、外気と室内の温度差に驚き、時には長女や夫を交えて……腹の中の海で泳ぐ子供にどんな名前をつけようかと真剣に悩んだ。

そこで彼女は気がついたのだ。

自分は、誰かに……気付いて欲しかったのだということに。

夫でも娘でもない、外の世界の空気を吸っている人から、自分という人物は透明な人間ではないのだと認めて欲しかった。

●Congratulations on the arrival of your son. 10

「どうして？元氣よ」

彼女は作り笑いを浮かべる。目の前の少女が、まったく信用していないこともわかっていた。それほど、惨めな顔をしていたのかと思うと苛立ちが募ってくる。行き場のない感情は、いつも……自分を虚しくさせるだけだとわかっているのに、どうにもできなかった。

誰か、自分に気がついて。

そんな風に、この少女にさえ聞こえるような内なる声が、響き渡っていたのだろうかと思うと・・・ただ、情けなくなってくる。

終わりが見えていることであれば、我慢できた。少しずつでも足を動かしていればいつかは終着点に辿り着くと信じてきた。でも、こればかりは先が見えず、これで終わりなのだと思うこともできず、ただ・・・日々を何も考えずに繰り返しを繰り返すだけに、彼女は恐怖していたのだ。繰り返しているつもりでも、自分は確実に衰えている。最初の子の時より、二番目の子である息子の時の方が、何をするにも時間を要し、疲労の程度も酷かった。疲労を回復するためには、ただ、眠るだけで良いのに眠れない。

こども達が流感にかかると、彼女も間違いなく感染した。

・・・これは何の拷問なのかとさえ思う時があった。

もっと驚くべきことに、こども達に愛情を注ぐことを、生活の次にしてしまっていることであつた。

腹の中にいた時にかけていた、毎日の自分の感動を話すことも無くなってしまっていたし、誰も聞いていないことを確認してこども達に愛しているのだと囁くこともなくなってしまっていた。身が二つになったから、もう違う人格なのだと自分の中で考えてしまっていることに驚愕した。所有物だとは思わない。彼らも、ひとりの人間である。

でも、感情を整理することができないほど、肉体が疲弊していた。

業務が忙しくて、他の者のように同じくらいのこどもを持つ親たちとの交流はほとんどなかった。日中出歩くことができるのは、育児休暇を取得することができる者ばかりだ。彼女にはそれはない。いつまでも、休日も祝日も・・・カレンダーに記載されている休日という意識を促すための曜日にも彼女にはまったく意味のないものであつた。

池田麻里奈は茶色の瞳を向けて、彼女を心配そうに覗き込んだ。

そして、そっと手を上げると、彼女が抱きかかえていた息子の腰元をぽんぽんと軽く叩いた。御包みの中で、息子がもぞもぞと動いた。

「ああ、やっぱり」

彼女は明るい顔になって、頷いた。

●Congratulations on the arrival of your son. 11

彼女の手の手は小さかった。

そして、指先は・・・打ち合わせの時にでも付いたのだろうか。少し、鉛筆の芯の色で汚れていた。

これほど若い顔立ちの人物が、生業として大人と話をする時に、屈辱や挫折を感じないかという、それはないのだろうか、と思った。

外気からの雑菌に息子が触れてしまうという懸念と、自分の求めていたものに気がつき声をかけてくる彼女への驚愕が天秤の両端に乗り、拮抗していた。

人の心が読めるのだろうかと思ひさえ、持つ。

今になって思えば・・・自分はそれほど虚ろな顔つきをしていたのだろうか、と思えた。

他の者が居る前では気丈に振る舞っていたのだけれども、夜になり、こどもと二人きりで歩いた路の上では、心と、誰にも見せまいと懸命になっていた必死さが出てしまったのだろうかと思う。

引き締めすぎた神経と、弛緩した肉体と・・・抱えた息子を落とさなかったのは、やはり母としての本能なのだろうか。どれほど疲れていても、その選択だけは考えつかなかった。

その時に、池田麻里奈が、そっと彼に触れたのだ。

麻里奈は言った。

「この子は、夜は紙おむつは嫌みたい」

「え？」

彼女は我に返った。言っている意味が、うまく飲み込めなかった。池田麻里奈は少し唇を突き出して、言った。

「妹が、そうだった。夜になると急に敏感になってしまって、紙の僅かな音とか、肌に触れる感じとかが気になる神経質な子もいるのですって」

確かにそうであった。赤子には布のおむつが良いのだと言われていたし、娘にもそうしてきたが、彼には紙製品を使っていた。自分の時と違い、今ではとても肌触りが良いものが出ている。

「上の子はあまりそういうこだわりがなかったから」

彼女が驚きながらそう言うと、麻里奈は微笑んだ。

彼女が彼に触れた時の反応を見てそのように言ったのだとしたら。池田麻里奈という少女は当てずっぽうで言ったわけではないのだと思うと、根拠のないことは言うなと言諭することはできなかった。

「きょうだいでも、みんな、違う。うちは三人姉妹だけれども、みんなそれぞれで、もう本当に大変だったって、今でも言われるし。・・・きっとずっと言われるのだろうかと思うと少し憂鬱」

「そんな理由だけで夜泣きが治るのであれば・・・こんなに苦労しないわ」

彼女は苦悶に満ちた声で言った。言い負かしたいわけではないし、不思議なことに、誰かに言われるとそうなのかもしれないとさえ思えてくる。特に、この少女にはそんな言い表しがたい不思議な説得力があった。

けれども、それを素直に受け入れるほどに、彼女の心は澄んでいなかった。自分のやり方を否定されたようで、むきになってしまっていた。一目見てわかるほどの原因があるのだとしたら、自分が最初にわかるはずだ。そう思った。

すると、麻里奈は彼女の反論に、うん、と小さく頷いたのだ。

「だから、これはほんのひとつのきっかけかもしれないけれども・・・そうやって、少しずつみ

んなで挑戦するうちに解決するかもしれない」

「みんなで？」

彼女は首を傾げる。そう、と麻里奈は言った。

「赤ちゃんとママだけの話ではなくて、家族で解決することで、みんなで見つけるものが『育てる』ってことでしょ？」

それから、彼女は話を始めた。

「父の転勤が多くて・・・その度に、転居ばかりしていて、いろんな子と友達になったけれども、こうして赤ちゃんがいるおうちに行くと、哀しそうな顔をするお母さんに会うことがあった。そういうおうちの友達は、同じ様に時々哀しそうな顔をするの。

どうして、と聞くと・・・お母さんが哀しそうにしているのは、自分のせいだからって言う。お父さんも溜息ばかりつくのは、自分が生まれてきたからだって。・・・赤ちゃんではなくて、自分がいない子なんだって言うの」

「そんなこと、あるわけないでしょう」

彼女は驚いて、麻里奈の顔を見つめる。

「そう。家のことは、わからないからって大人は言うけれども。こどもは、わかっている。だから、気付いて欲しくて、本当はそうしたくないのに、そうしてしまう。・・・泣き愚図ってみたり、妹や弟に当たり散らしてみたり。

望んでいないよ、誰も、そんなこと。

・・・でもそれって本当は、大人の感情に呼応しているのだと思う時が、ある」

●Congratulations on the arrival of your son. 12

だからね、ちょっと深呼吸してみませんか

麻里奈はそう言って、彼女に屈託のない笑顔を浮かべた。

「赤ちゃんは、泣くのが仕事。小さい子は、愚図るのが仕事。よく、そう言われた。でも、本当に仕事を持ったときに、それがどれほど深い意味があるのか・・・知りました」

彼女は押し黙った。

日々の業務と子育てという終わらない仕事について、これは自分に課せられた労役なのだからと思ったことを、見透かされているような気分になった。

「仕事と割り切れることも割り切れないこともあると知って、それでも・・・親というものは自分のことを育てる時に、仕事だとか役割だとかと思わないわけではないのだと思います。

そうしなければ、やりきれない思いだって、あると思う。だって親は神様じゃない。神様だって時々、不思議なことをする。

・・・親だって万能ではない。だから、良いんです。最初から何でも悟っている親より・・・一緒

に考えていくから、子は育つのかな、と思うんです。いつか、一緒に居られなくなってしまうから、それがわかっているから。だから、泣くのではないのかな」

そこまで言ってから、彼女は少し照れくさそうに笑った。

「押しつけがましい説教してしまった。親でもないのに」

「親ではないから親子を語ってはいけないとは思わないわ。

皆が親になれるとは限らないけれど、皆は誰かの子なのだから」

彼女がそう言うと、池田麻里奈は弾かれたように顔を上げて・・・そして、それからとても嬉しそうに笑った。

ああ、そうですね、と言った。

「おむつのことは、何となく、そうなのかな、と思っただけです」

そして彼女は笑った。

「日中は、家にいることが多いので。・・・いつでも、預かりますよ。何もできないけれども、一緒にいることはできるから。だから、深呼吸したくなったら、いつでも、来てください」

そこで彼女は・・・何も解決していないのに、どこか心が軽くなったことに気がついた。

池田麻里奈という少女は、実に不思議な雰囲気を持っている。なぜなのだろう。ほとんど話をしたことがないのに、彼女は自分のことをとてもよく観察していると思った。

不思議そうな顔をしていたのだろう。やがて、池田麻里奈は彼女に向かって気恥ずかしそうに笑った。茶色の髪に手をやり、僅かに顔を俯かせるが、大きな瞳は眼鏡の奥からこちらを覗き込んだままであった。

「・・・いつも、アパートの前を歩いているでしょう。上のお子さんを背負って、下のお子さんを抱いて」

「こどもの泣き声が煩かった？」

彼女はそう言ったが、麻里奈はいえ、と言って顔を横に振った。

「少しも。だって、泣かないこどもはいないから。みんな、そうして育ってきたのだから」

麻里奈の言葉に呼応するかのよう、胸の中の赤子が身動きをした。

涙を一杯にして、顔をくしゃくしゃにして、それでも声のする方に・・・麻里奈に向かって澄んだ瞳を向けていたので、彼女は小さく笑う。

「あら。不思議。知らない人には警戒することが多いのに」

「こどもが人見知りしたり警戒したりするのは、親子関係がうまくいっている証拠なのですよって」

池田麻里奈が澄ましてそう言ったので、彼女はそれがあまりにも面白くて、つい、声を出して笑ってしまう。

「ああ、笑うって、偉大ですよ。みんなを幸せにするし、自分も幸せであるから笑う。

いつもアパートの窓から、見えますよ。

誰もいないのに、小さなお子さんに笑いかけているあなたの笑顔は、いつも・・・見えています」

池田麻里奈はそう言って、また一呼吸した。

「親と離れてみて、わかることがあります。親のありがたみって言ってしまえば簡単だけれども。でも。・・・私は、私の居場所を見つけたから。離れないと、わからないこともある。

もう、どこにも行かなくても良いと思うと、苦しくても、とても毎日が楽しい」

彼女は先ほど、転居が多かったと言っていた。

自分の居場所というものについて固執しない気質かと思ったが、そうではなかったのだ。ずっと、憧れていたに違いない。自分だけの、誰にも左右されない自分が決めた場所に住むということに。

もう、どこにも行かなくても良い・・・どんなに遅くなっても、帰る場所があるから。

「母が送ってきてくれるのは、いろんなものです。でも、受け取ったら、自分で出てきてしまったことに説明がつかなくなる。・・・でも、ひとつだけ、受け取ったものがありました」

「それはなに？」

彼女は思わず口にしてしまった。

「母が若いときに着ていた洋服を、裾上げしてくれていました。それだけは、受け取りました」
彼女は声が詰まってしまった。池田麻里奈が来ている洋服は、確かにサイズを探すのが難しい。なぜなら、彼女は非常に小柄であったからだ。幼い、こどものような格好に近かったが、それでも仕事で出掛けるには耐えられる格好であった。それを作ったのは・・・彼女の母親だったのだ。彼女は中学校を卒業し、高校に行かずに大人の世界に入っていった。だから、私服も多くはないのだろう。

今時の洋服を身につけていないことを軽蔑した自分が恥ずかしくなった。

池田麻里奈がどんな思いで日々を過ごしているのか・・・想像できなかった自分の余裕のなさを恥じた。

だから、大事に、ひとつひとつに思いを込めて彼女は少女に言う。

黙っていれば、涙が出そうになるから。

「帰りなさい。あなたの家に。気を付けて帰るのよ。独り暮らしは、親はたいそう気になるものだと思うから。・・・そうね。私があなたの親であれば、仕送りを受け取らないことだけでも立派になったと思うかもしれないけれども・・・夜遅くに、あかりのついていない部屋に娘が戻ることにについては、立派になったと喜ぶべきことではないのだと思うわよ」

池田麻里奈は、はい、と言って彼女に礼を取ると、そのまま脇をすり抜けて・・・アパートに向かって行った。

しかし、これほど不規則な生活をしていけば、他の賃貸物件では受け入れてもらえないだろう、と思う。厄介な住人を住まわせてしまったと思うが、それでも・・・どこか、胸の奥で彼女が何かをしでかすのではないのだろうかという期待のようなものが芽生えていることを自覚していた。

一方通行であったので、彼女は池田麻里奈の背中を見送りながら・・・ふと、気がついた。

抱いた息子は、目を見開いており、先ほどの涙顔ではなく・・・じっと、母を見上げてそして微笑んでいた。

しかし、彼女にはわかっていた。彼が何を欲しているのかを。

「ああ、ミルクの時間ね。それから・・・おむつを取り替えようか。夜だけは、布おむつに変更してみようか。一緒に、試してみましょう」

その声を聞いて、腕の中の息子は笑った。まるで、話がわかっているようであった。

「あなたも、わくわくするの？あの子はいつか・・・名探偵になるのかしらね」

帰ろう、と思った。

夫と娘が待っているだろう。それとも、夫は困った顔をしながらも娘を寝かしつけているのだろうか。今度は・・・娘と出かけてみようと思った。

都内の夜空は、星をたくさん見ることは出来ない。けれども、ここが、彼女の夜空であった。いや、違うな、と思い直す。

ここが・・・自分達家族の生きている場所なのだ。

深呼吸してみませんか

池田麻里奈の声を思い出して、彼女は胸に抱いた大人しい息子を強く抱きしめ直した。そして、空を見上げる。

こども達の、帰る場所に・・・自分はなれるのだろうか、と思った。

けれども次には、そうなりたいと思った。

強くそう思う。

池田麻里奈の声だけが、彼女の胸の中に残っていた。

いつか、こども達も自分の元を離れていくだろう。

けれども、麻里奈のように・・・思い出してくれる時もあるかもしれない。

どれほど疎遠になっても、彼らに憎まれることになったとしても・・・人生は、この夜空のように・・・広がっていて、空は繋がっているのだから。

「さあ、帰ろうか。・・・うちに、帰ろう」

腕の中の息子は、声を漏らして彼女に賛成するかのようには笑った。

これほどよく笑う子であったのだろうか、と彼女が驚くほどに、彼は笑っていた。

徐々に、息子の裾上げをすることになった。
近い場所に眼をやると、焦点が合うまでに少し時間がかかる。
自分は、若かったあの時とは変化したのだと、こんなところで実感する。

今では、新型の高機能のミシンも安価で出回っているし、店に頼めばそれほど金額や時間をかけることもなくサイズや丈を直してくれる。

それでも、不思議と・・・娘も息子も、裾上げは母に頼んでいた。それほど裁縫が長けているとは思わない。逆に、自営業であるから時間がなくて雑に仕上げてしまったことも多かった。けれども、彼らはいつも、母に依頼するのだ。

紀律に違反するような短さで、娘を叱ったこともある。
息子はそういったことに疎くて逆にもっと気を付けろと窘めたこともあった。
特に、息子は。演奏会の度に・・・その裾の位置が変化していった。

池田麻里奈は、自分の言ったとおり・・・息子を預かってくれた。
娘と一緒に過ごす時間が必要だからと言って、上の子の寂しさを理解していた。
日中在宅している職業であったから、彼女はあまり気にしていなかったようだが、それが母としての深呼吸になったのだと、今でも思う。
その代わりに、家賃を少し待ってくれませんか、と言われて。
彼女は苦笑したことは数知れなかった。
心優しいだけではなく、強かさも持っていた池田麻里奈のことを、どこか嫌いになれなかった。

その後・・・池田麻里奈が息子と深く結びつき、彼の人生に大きく影響する人物となった時に、仕方が無いな、と思った。反対する気持ちもあったが、どこか納得してしまっていた。

彼は麻里奈とずっと一緒だったのだから。
友達で、家族で・・・そして、その相手に、彼は恋をした。
母親だから、何となく察することができた。
しかし、彼女は素知らぬ顔をしていた。それが、息子への愛であったから。
彼が音楽を始めた時も。音楽をやめた時も。

ただ、気持ちを乱すだけであったが、息子はそれを承知していて、ごめん、と言った。
息子に謝罪されるようになったら、いけないのだ、と思っていたけれども。
彼は、母のことをちゃんと見ていた。

娘は・・・彼女に向かって「あなたの息子なのだからもっと信用してみたらどうなの」と言った。
。いつの間にか、彼らは彼女を悩ませる存在ではなく、彼女の憂いを身に受けて癒す存在になって

いた。

夫のことを優柔不断だと物足りなさを感じていたのも遠い昔のことで・・・今ではただ静かに、彼女を支えていてくれる。こうして、年齢を重ねて行くことも悪くないと思えるようになった。

ただ、慌ただしく駆け抜けていく日々であったけれども、振り返ってみればなんと長い道程だったのだろうか、と驚く。

池田麻里奈には、随分と・・・手を焼いたと思った。

管理人である以上の気持ちを持っていたが、すでに麻里奈は家族になってしまっていた。

冷房のない部屋に愚図る息子を抱きながら、彼女は描画に専念して・・・迎えに行くと一緒に寝て睡っていた。

小学校に上がる頃になると、疎遠になったのかなと思ったのに高学年になって彼女のことを気にしだした彼を不安に思ったことがあった。年齢が離れていても男女なのだから自重しろと言うと、息子は初めて親に向かって声を荒げた。

中学・高校と順調に進んだが、その間に彼は驚く程、奏者としての才能を発揮したのは池田麻里奈が紹介した高名な音楽家の指導によるものだと思う。どれほど努力しても掴み取ることのできない一握りの栄光を、息子が手にしたのは・・・やはり本人の努力だけではないところも作用している。そして大学に入る前に、フランスに行きたいと言って彼はパリに少しだけ滞在し・・・その後、大学と大学院に在籍している間は、頻繁にパリに行っていた。卒業すると、フランスの研究所の受け入れ試験に合格したと言って、いつの間にか自分の路を決めてしまっていた。

その間、相変わらず、彼女はここにいる。

飯田橋に居を構え、建て直したとは言えども、できるだけ安価な賃料を維持しているので、若く希望に溢れて暮らしを始める者たちがの入居希望が多かった。

問題は今でも解決することはない。何も問題のない仕事は、存在しない。

だから。

彼女は、何かに行き詰まると、いつも麻里奈の言葉を思い出す。

深呼吸してみませんか。

あなたは・・・元気ですか。

そして、あの夜のことを思い出す。

あれから、どれほどの年月が経過したのか、数えるのも愚かなことだと思える。

そんな中、息子の大が、何か大きな賞を取ったのだと聞いたのは娘の知らせからであった。

彼なら真っ先に母に知らせると思っていたので少しばかりがっかりする。

けれども、娘の言葉に思い直した。

「時差があって、夜中の知らせになるから・・・代わりに伝えて欲しいと言われただけよ」
軽率だと思っていた娘が、母である彼女にそう言って弟の知らせを厳粛に受け止めるように伝えてくる。

彼が何を研究しているのか、まったく知らされていなかった。聞いてもわからなかった。

けれども、水源について深刻な問題を抱えている国を助ける研究をしているのだと聞いて、誇らしく思っていた。

彼が部屋に籠もって学術書や学会論文や・・・様々なことについて人並み以上の努力をしていたことを、彼女は知っていたからだ。

あの時が、もっとも・・・苦労したけれども、いろんな景色があった日々なのだろうと思う。

池田麻里奈がしばしば留守にするので、息子が立腹しながらも郵便物などを纏めて届けていた時や・・・彼女が発熱した時に、慌てて出掛けていった息子の背中を見守った時や・・・フランスに留学したいのと言った彼の顔つきも、音楽を極めないのはもったいないことで、日本の損失だと訴えに来たフルート奏者の美少女の涙顔や・・・いろんな情景が、彼女の中で浮かんでは消える。でも、最後まで消えないのは、息子の・・・あの時の笑顔であった。

夜泣きが酷くて、もう、一緒に居られないと決めて・・・最後の夜歩きかもしれないと思った。しかし、池田麻里奈との出会いによって、今に繋がる未来への路を敷くことができた。

●Congratulations on the arrival of your son. 14

epilogue 02

裾上げ、というのは実に久しぶりだ。

裾を短く上げることである。昔は、裾上げは一度だけで・・・それ以降は、裾を長くすることはばかりであったが、作業自体はそれほど変わりはない。

けれども。

この年齢になって・・・息子の裾上げをすることは思わなかった。

彼は、自分の体型に合った衣類を整えることができるような年齢であった。

昔と違う。

彼の成長に合わせて、身に纏うものを心配するという親の役割はとうに終わっていると思って

いた。

けれども。

この家を出て久しい息子が、突然に・・・裾上げをして欲しいと言ってきたのだ。

専門職に任せてはどうかのと言っても、彼は電話口で笑うだけであった。

「母さんにやって欲しい」

それで決まってしまった。

事前に送られて来た衣類は、彼女が見たことのないほどに上等なものであった。どこをどう直せば良いのか、わからない。だから、息子の到着を待った。

大学院を出て、海外に住むと言われて、彼女は自分が生きてきた世界と違うところで彼が生きようとしていることを理解できなかった。だから、息子からのメッセージより、より近い場所で生活する娘との連絡の方が密であった。

まるで、あの時の罪滅ぼしのように。息子に注力して、娘に対して蔑ろであったことを今頃になって、埋めているのだと・・・自分で自分を嗤う。

夜の散歩で空を見上げるたびに、あの時の幼子であったこどもの姿を思い出した。

永遠に続くかもしれない作業に近い日々の動作に・・・溜息をついていたのに。

それが、突然に終わってしまったことに嘆くために、空を見上げる。

どうにも、矛盾する気持ちを味わうたびに、彼女は思い出すのだ。

池田麻里奈の言葉を、思い出す。

深呼吸、してみませんか。

今になって思うことがある。

池田麻里奈は、彼女に深呼吸して一息つけ、と言っているだけではなくて・・・

麻里奈と一緒に、深呼吸しろと言っていたのかもしれないのかなと思うのだ。

彼女には、そう言ってくれる者はいたのだろうか。

大人になって・・・麻里奈は日本に居る時間が少なくなり、やがて、フランスに移住すると聞いたがそれでも彼女の部屋は永久的に賃料が振り込まれ続けて居る。

それを管理する息子も、ここには常駐していない。

結局、夜泣きの原因はわからなかった。

けれども、池田麻里奈との会話の後、何かが・・・彼女の中にある何かが変わったことは確かであった。

夫に苦しいと訴えることができた。いなかで退いた義父母や自分の親に助けを求めることができ

たし、地域のサークルに足を運ぶこともできた。自分に足りなかったのは、きっかけだったのだろうと思う。そして、自分はこうして機会や環境に恵まれていたけれども・・・そうではない人々がいることを痛感する。

だからこそ、彼女は・・・そういう人々の差しのばした手を掴み取る場所が必要だと思うのだ。具体的に、何をどうできるのかと考えると、とても限られたことしかできないのだと痛感する。しかしながら、彼女ができることは・・・アパートの住人を、母子家庭であるとか未成年であるとか・・・そういったことで断らないことにしようと決めたことであった。

家賃を払わなければ、もちろん、通常の交渉に出て行く。けれども、受け入れる最初について、条件を見て断ることはしなくなった。

そのせいで・・・不思議な住人を受け入れることも多かったし、池田麻里奈のようにいつまでも居座る人間を受け入れることになったけれども。

●Congratulations on the arrival of your son. 15

epilogue 03

「・・・こんな上等なスーツなら、仕立てた場所に変更してくれたでしょう？」

息子は、母の言葉に唸った。

「海外の裾直しというのは、どうしても微妙なものが伝わらないことが多くて」

それは理由なのだと思う。

息子が他のどんな高級店よりも実家を選んでくれたことを嬉しいと言うことができずにいることを、彼女の息子は承知しているのだ。

慌ただしく、彼は帰国した。

間もなく、彼はこうして実家に滞在することすら難しくなる。

日本は平和で・・・些細な突出にさえ敏感だ。だから、息子が世界に名だたる研究所で素晴らしい開発に成功したことすら・・・大きな出来事なのだ。

それは、彼のことを昔から応援していた音楽仲間や、小学校の頃に親友であった少年が後に、通信業界にも顔の利く実業家として成功したことにもよるけれども。

大きな志と心を持って育てて欲しいと願い、彼に名前をつけた。

そして、彼はその通りになった。

それが、今は少しだけ・・・寂しい。

家族で過ごす時間は少なかった。

慌ただしく昼食を摂り、姉に会い、彼はまた戻ると言ってスーツケースを広げることもなく出発しようとしている。

だからこそ不思議であった。

なぜ、スーツの裾を直すだけで・・・日本に戻ってくるのか。ここは彼の現実ではない。記憶を蓄積した懐かしい場所であったけれども、息子は今は、違う場所で生活している。

部屋も、彼が出て行った時のままであったし、戻る都度、それで良いのだと聞かされるとますます変化することは受け入れない場所になっていった。

息子の足元に跪き、彼の体軀を見上げる。・・・自分の時代には考えられない程に、彼の身体は成長していた。食生活の変化もあったのだろうが、とても離れた場所で生きる・・・まるで違う人種に感じることもある。

それは、あれほど小柄で幼いと思った池田麻里奈にも感じたことであった。

ここに留まることのない者たちは、いつか・・・どこかに行ってしまうという香辛料を備えて常に弾けるような花火のような存在になっている。

長い足を伸ばし、彼女はそこに跪く。

それほど大きな修正はないのに。

なぜ、息子はここに訪れるのか・・・わかっていないようでわかっている。そんな気配が、彼女を切なくさせた。

受賞式の直前に、戻って来た息子は、彼女に裾上げを頼んだ。

「・・・なんだか、久しぶりね。あなたをこうして見上げるのは」

彼女はそう言った。久しぶりに戻った息子を歓待したいという企画は数知れない。けれども、それらのすべてを断って・・・彼女の息子は、彼女に記念すべき日の衣裳のしつらえを頼んだ。

「母さん」

彼女の息子は・・・彼女を呼んだ。

あの時、泣いて掠れた声を出した赤子は今・・・こうして、彼女と遠い場所に生きている。

「ここまで来られたのは、母さんが理解してくれて、ここに・・・帰る場所があると思ったからだよ」

息子は、彼女にそう言う。そして、すべてを理解する。

彼は彼女に丈直しを依頼したかったのではない。ただ、これを言いたかったのだ、と。

彼女に理解できないような、難しい理論で世界を驚かせた彼は・・・確かに、あの夜に池田麻里奈に触れられて涙を落とした赤子なのだ。その彼が・・・彼女の伴侶を助けるような位置に立ち、そして今は・・・彼女の腕からすり抜けてその先に行こうとしている。

「母さんだけだよ。裾上げができるのは」

彼女は声を詰まらせる。自分と違う人生を選んだ。彼は、結婚することもなく、ただ、先を見つめながら・・・自分の祈りを命に変えて、多くの生命を維持するための研究を重ねている。

恥ずかしそうに言う息子が、成人してとうに久しい年齢であるということを忘れてしまう。

裾上げをするとき。いつも、思うことがある。

成長を気にして、先走って・・・長く逃えたからこそその行う作業であった。

それを、あと幾度できるのかと思った日々を思い返す。

今になって・・・裾上げをするとは思わなかった。

一流の仕立てであった。彼女にもそれはわかっていた。けれども、最後の裾直しは母にしてもらうからと言って、そのまま持ち込んだらしい。

息子の考えそうなことであった。手間になるのに、それを惜しまないのだから。

もう二度と・・・裾を上げることはないと思っていた。けれども、今一度そうして欲しいと息子に言われて。

彼女は、裾を上げる。

あと数時間で、彼は日本を発つ。その先は・・・どうなるのかわからない。

速報で聞いた限りでは、当分こちらに戻ってくることはできなさそうであった。

池田麻里奈の親も、こんな風に思ったのだろうか。いつでも会えるのに、もう、しばらくは会えない。・・・仕送りをして彼女も母親の裾上げした洋服だけを身につけた。

この意味と伝言を、親である者や家族が知るときには、池田麻里奈はどんな風に変化しているのだろうかと思う。

「・・・こんな上等なスーツなら、仕立てた場所に変更してくれたでしょう？」

息子は、母の言葉に唸った。

「海外の裾直しというのは、どうしても微妙なものが伝わらないことが多くて」

それは理由なのだと思った。

息子が他のどんな高級店よりも実家を選んでくれたことを嬉しいと言うことができずにいることを、彼女の息子は承知しているのだ。

慌ただしく、彼は帰国した。

間もなく、彼はこうして実家に滞在することすら難しくなる。

日本は平和で・・・些細な突出にさえ敏感だ。だから、息子が世界に名だたる研究所で素晴らしい開発に成功したことすら・・・大きな出来事なのだ。

それは、彼のことを昔から応援していた音楽仲間や、小学校の頃に親友であった少年が後に、通信業界にも顔の利く実業家として成功したことにもよるけれども。

大きな志と心を持って育てて欲しいと願い、彼に名前をつけた。

そして、彼はその通りになった。

それが、今は少しだけ・・・寂しい。

家族で過ごす時間は少なかった。

慌ただしく昼食を摂り、姉に会い、彼はまた戻ると言ってスーツケースを広げることもなく出発しようとしている。

だからこそ不思議であった。

なぜ、スーツの裾を直すだけで・・・日本に戻ってくるのか。ここは彼の現実ではない。

記憶を蓄積した懐かしい場所であったけれども、息子は今は、違う場所で生活している。

部屋も、彼が出て行った時のままであったし、戻る都度、それで良いのだと聞かされるとますます変化することは受け入れない場所になっていった。

息子の足元に跪き、彼の体軀を見上げる。・・・自分の時代には考えられない程に、彼の身体は成長していた。食生活の変化もあったのだろうが、とても離れた場所で生きる・・・まるで違う人種に感じることもある。

それは、あれほど小柄で幼いと思った池田麻里奈にも感じたことであった。

ここに留まることのない者たちは、いつか・・・どこかに行ってしまうという香辛料を備えて常に弾けるような花火のような存在になっている。

長い足を伸ばし、彼女はそこに跪く。

それほど大きな修正はないのに。

なぜ、息子はここに訪れるのか・・・わかっていないようでわかっている。そんな気配が、彼女を切なくさせた。

受賞式の直前に、戻って来た息子は、彼女に裾上げを頼んだ。

「・・・なんだか、久しぶりね。あなたをこうして見上げるのは」

彼女はそう言った。久しぶりに戻った息子を歓待したいという企画は数知れない。けれども、それらのすべてを断って・・・彼女の息子は、彼女に記念すべき日の衣裳のしつらえを頼んだ。

「母さん」

彼女の息子は・・・彼女を呼んだ。

あの時、泣いて掠れた声を出した赤子は今・・・こうして、彼女と遠い場所に生きている。

「ここまで来られたのは、母さんが理解してくれて、ここに・・・帰る場所があると思ったからだよ」

息子は、彼女にそう言う。そして、すべてを理解する。

彼は彼女に丈直しを依頼したかったのではない。ただ、これを言いたかったのだ、と。

彼女に理解できないような、難しい理論で世界を驚かせた彼は・・・確かに、あの夜に池田麻里奈に触れられて涙を落とした赤子なのだ。その彼が・・・彼女の伴侶を助けるような位置に立ち、そして今は・・・彼女の腕からすり抜けてその先に行こうとしている。

「母さんだけだよ。裾上げができるのは」

彼女は声を詰まらせる。自分と違う人生を選んだ。彼は、結婚することもなく、ただ、先を見つめながら・・・自分の祈りを命に変えて、多くの生命を維持するための研究を重ねている。

恥ずかしそうに言う息子が、成人してとうに久しい年齢であるということを忘れてしまう。

裾上げをするとき。いつも、思うことがある。

成長を気にして、先走って・・・長く逃えたからこそその行う作業であった。

それを、あと幾度できるのかと思った日々を思い返す。

今になって・・・裾上げをするとは思わなかった。

一流の仕立てであった。彼女にもそれはわかっていた。けれども、最後の裾直しは母にしてもらうからと言って、そのまま持ち込んだらしい。

息子の考えそうなことであった。手間になるのに、それを惜しまないのだから。

もう二度と・・・裾を上げることはないと思っていた。けれども、今一度そうして欲しいと息子に言われて。

彼女は、裾を上げる。

あと数時間で、彼は日本を発つ。その先は・・・どうなるのかわからない。

速報で聞いた限りでは、当分こちらに戻ってくることはできなさそうであった。

池田麻里奈の親も、こんな風に思ったのだろうか。いつでも会えるのに、もう、しばらくは会えない。・・・仕送りをして彼女も母親の裾上げした洋服だけを身につけた。

この意味と伝言を、親である者や家族が知るときには、池田麻里奈はどんな風に変化しているのだろうかと思う。

彼は、自分が携わっていることには何も触れなかった。ただ、ごめんと言った。

それは彼がそれまで疎遠にしていた者たちからの祝福の連絡先がここに設定されていたことを指すのだろうし・・・自分ひとりではどうにもできない処理を親に託すことになってしまうということに対する謝罪であった。

でも、彼女は嗤う。

「深呼吸したら、それらは全部、どうでもいいことになってしまうから」

それを聞くと、息子は淡く微笑む。

「そうだね・・・そうだったね」

そう言って笑うのだ。

そして息子は前を向いた。

彼の部屋でのことであった。昔からそのままに残してあったけれども。彼が見る・・・窓から見える景色を、母は知っている。

彼の部屋からは、池田麻里奈の部屋がよく見えた。

そして、あの・・・ねむれない夜を過ごした通りからも、彼女の部屋はとてもよく見えた。

彼女が、自分のことをよく見えたと言ったのと同じ程度に・・・池田麻里奈のことはよく見えた。けれども、彼女はその他大勢とひとくくりにしてしまっていた。

彼は、自分が携わっていることには何も触れなかった。ただ、ごめんと言った。

それは彼がそれまで疎遠にしていた者たちからの祝福の連絡先がここに設定されていたことを指すのだろうし・・・自分ひとりではどうにもできない処理を親に託すことになってしまうということに対する謝罪であった。

でも、彼女は啜う。

「深呼吸したら、それらは全部、どうでもいいことになってしまうから」

それを聞くと、息子は淡く微笑む。

「そうだね・・・そうだったね」

そう言って笑うのだ。

そして息子は前を向いた。

彼の部屋でのことであった。昔からそのままに残してあったけれども。彼が見る・・・窓から見える景色を、母は知っている。

彼の部屋からは、池田麻里奈の部屋がよく見えた。

そして、あの・・・ねむれない夜を過ごした通りからも、彼女の部屋はとてもよく見えた。

彼女が、自分のことをよく見えたと言ったのと同じ程度に・・・池田麻里奈のことはよく見えた。けれども、彼女はその他大勢とひとくくりにしてしまっていた。

epilogue 04

「これからもっと大変かもしれないわよ」

彼女は、母としてそう言った。

けれども、息子は、軽く笑う。

「そうだね。そして毎日と違うことに謝罪しなければ」

そう言うと、彼女は言う。どうして、彼女の息子はこれほどまでに生真面目なのだろうか。

わかっている。彼女の息子だからだ。彼女はそういう風に育てたからだ。

自分の境遇は決して・・・まぐれではないのだと教えた。必然と偶然と・・・努力と才能と、きっかけの有無について教えた。

それらが相まって、人生は色取りを得るのだと・・・言ったから。

「謝罪は必要ではない。感謝は必要ね」

そういった母の言葉に、息子は微笑んだ。

「ああ、そうだね。ひとりではできなかつたから。いつもそう思うよ」

息子の謙虚な言葉に、彼女は静かに応じるだけだった。

ダイと呼んだ者たちの助力があつたから・・・彼は今があるのだと承知している。

でも、彼女は自分の息子について、もっと讃えたかった。

こうして控えめな性格になってしまったのは・・・彼女の責任によるところが大きいのだと思うと、尚更、彼のことが心配になってしまう。

なぜなのだろう。

彼に関わってはいけないと思う瞬間を経験したのに。彼に関わってはいけないと思いながらも・・・息子に近付いてしまう。

これは、親子だからそう思うのか。いいや、そうではないと思う。

自分の中にある、区切りがとても優しすぎるからなのだ。

謙虚な姿勢でのぞむ息子を誇らしいと思う。

「これからもっと大変かもしれないわよ」

彼女は、母としてそう言った。

けれども、息子は、軽く笑う。

「そうだね。そして毎日と違うことに謝罪しなければ」

そう言うと、彼女は言う。どうして、彼女の息子はこれほどまでに生真面目なのだろうか。

わかっている。彼女の息子だからだ。彼女はそういう風に育てたからだ。

自分の境遇は決して・・・まぐれではないのだと教えた。必然と偶然と・・・努力と才能と、きっかけの有無について教えた。

それらが相まって、人の生は色取りを得るのだと・・・言ったから。

「謝罪は必要ではない。感謝は必要ね」

そういった母の言葉に、息子は微笑んだ。

「ああ、そうだね。ひとりではできなかったから。いつもそう思うよ」

息子の謙虚な言葉に、彼女は静かに応じるだけだった。

ダイと呼んだ者たちの助力があったから・・・彼は今があるのだと承知している。

でも、彼女は自分の息子について、もっと讃えたかった。

こうして控えめな性格になってしまったのは・・・彼女の責任によるところが大きいのだと思うと、尚更、彼のことが心配になってしまう。

なぜなのだろう。

彼に関わってはいけないと思う瞬間を経験したのに。彼に関わってはいけないと思いながらも・・・息子に近付いてしまう。

これは、親子だからそう思うのか。いや、そうではないと思う。

自分の中にある、区切りがとても優しすぎるからなのだ。

謙虚な姿勢でのぞむ息子を誇らしいと思う。

けれども。

息子が立派に成長したのは、彼に対して様々な大人が関与したからだ。そう思う。

なぜなら、自分の娘はとても平凡であったから。

噂に敏感で、周りに聡いのにそれでいて自分の感情に鈍感であった。

でも、今は人並みに幸せを味わっている。

どちらが、良かったのだろうか。

優劣を決めることはできない。

姉にあたる娘と、息子とでは・・・どちらも、己が選択した道であるのだから、彼女はどちらも肯定した。

「裾上げをお願いできるのは・・・ここだけだ」

息子の言葉に、彼女は言葉に詰まった。

これまで幾度、彼の裾を気にしたことだろう。

遠い場所に行くのだと聞かされても・・・彼には季節毎に、しばらくの間は食べ物の他に衣類を送り続けた。彼の身長は、もう、伸びないとわかっていたけれども。裾上げが必要な時には声を

かけて欲しいとメッセージを綴った。

息子を独り占めする池田麻里奈を恨めしいと思ったこともある。

彼女は、息子の感情を、沸き立てさせる人物であった。

親子では決してそんな感情を見つめることはできない。だからこそ、池田麻里奈は彼女の息子にとって必要な存在なのだろうと思ったが、それは理性の範疇での許諾でしかなかった。

れども。

息子が立派に成長したのは、彼に対して様々な大人が関与したからだ。そう思う。

なぜなら、自分の娘はとても平凡であったから。

噂に敏感で、周りに聡いのにそれでいて自分の感情に鈍感であった。

でも、今は人並みに幸せを味わっている。

どちらが、良かったのだろうか。

優劣を決めることはできない。

姉にあたる娘と、息子とでは・・・どちらも、己が選択した道であるのだから、彼女はどちらも肯定した。

「裾上げをお願いできるのは・・・ここだけだ」

息子の言葉に、彼女は言葉に詰まった。

これまで幾度、彼の裾を気にしたことだろう。

遠い場所に行くのだと聞かされても・・・彼には季節毎に、しばらくの間は食べ物の他に衣類を送り続けた。彼の身長は、もう、伸びないとわかっていたけれども。裾上げが必要な時には声をかけて欲しいとメッセージを綴った。

息子を独り占めする池田麻里奈を恨めしいと思ったこともある。

彼女は、息子の感情を、沸き立てさせる人物であった。

親子では決してそんな感情を見つめることはできない。だからこそ、池田麻里奈は彼女の息子にとって必要な存在なのだろうと思ったが、それは理性の範疇での許諾でしかなかった。

●Congratulations on the arrival of your son. 17

epilogue 05

「できた」

幼い少女のような言い方をしてしまったと思った。

「・・・池田さんによろしくね。ああ、もう、池田さんではなかった」

彼女はそう言ってひとり微笑む。

池田麻里奈はとうとう、この場所を離れて行ってしまったけれども・・・それでも、まだ、繋がりがあって、それはずっと続くのだろうと思われた。

親戚のような付き合いではない。

けれども、息子から聞かされる彼女の元気そうな様子を聞くと、あの時の少女がいつの間にか大人の女性になってたいことに喜びと切なさと少しだけ苦しさを感じる。赤い髪飾りをつけた、小さな女の子であった。

裾上げしてもらった服を大事に着ているような、そんな度しやかさを持っていた。

本人がそれを聞いたのならそんなことはないと酷く驚くのかもしれないけれども。

将来、有名なまんが家になるのだから、と言っていた彼女は、今でも・・・スケッチブックを片手に漫ろ歩いているのだろうか。

畳の上で膝をつき、屈んで息子の裾を直すのも・・・あと幾回できることであろうか。

靴の踵や膨れを計算して、彼の立ち姿が最も美しくなるような位置を知っている。

年齢とともにその場所はいつも変更されていったけれども。

それでも、いつも彼の成長を見守っているからこそ、そして、今はまだ彼女だけの秘密なのだ。

次は、彼の伴侶をさっさと見つけて、その人に裾上げしてもらいなさい、と言いたかったけれども。

その言葉を呑み込む。

まだ、彼女だけの特権でありたいという気持ちが残っていた。

自分にできなかったことをこどもに託すつもりはない。彼らは、彼女から生まれたけれども、彼女そのものではない。

でも。

彼女は・・・ずっと、言っていなかったことをとうとう、口にした。

「本当はね、あの時・・・あなたが泣き止んだのは、おむつのせいではなかったの。街灯を反射して光っている彼女の赤い髪飾りと眼鏡が気になって、それで泣き止んだだけだったのよ。その後も、ずっと泣き止まなかつたので、大変だったのだから」

彼女がそう言うと、息子は振り返って母を見下ろした。

彼女よりずっと背が高くなった。

腕に抱えるほど小さかったのに。こんなに、大きくなった。

言っている意味がわからずに、不思議そうな顔をする彼に、母は微笑む。

幼いこどもは獣と同じで、光っているものに敏感に反応する。

怖いと泣き出すこともあれば、声を潜めて自分の気配を消そうとすることもある。

あの時は・・・夢のような瞬間であった。

不思議な・・・夜の出逢いが、彼らのその後を左右した。

年の離れた、しょうがないと苦笑いしてしまいたくなるほど、困った住人だった。
でもどういうわけか・・・彼女が煮詰まると、いつの間にか家の扉の前に立ち、「家賃の支払いを少し延ばしてもらえませんか。その代わりに・・・この子を預かれます」と言った。
交換条件などは、本当は必要なかったのに。
しかし、池田麻里奈はそう言って彼女の負担を軽くしようとした。

いつの間にか・・・彼はダイと呼ばれて、自分もそう呼ぶようになっていた。
泣いて笑って、そして怒ったり嘆いたり・・・つかず離れずの距離であったのに、どういうわけかいつも決まって別れる時には池田麻里奈は「またね！」と言う。
いつの間にか、彼女にもその口癖はうつってしまった。

「彼女からの、伝言」
息子は、母の独り言に対して、そのように言い返した。
彼は上を向いており・・・こちらを向こうとしない。
声が、少し震えているように思えたが、それはこちらも同じであった。

「自分には、『大』という文字が含まれていると言ったけれども、本当は・・・『人』という文字も含まれているのだと言いそびれていた、と。
自分はひとりではないと思って・・・そして人と人が交わると、それはとても大きな実りある生になるのだ、と・・・母さんから教わったと彼女は言っていたよ」
それから、彼は照れくさそうに笑ったが、決して振り向かなかった。
「この名前をつけてくれて・・・ありがとう。母さんの息子で良かった」
そして、彼は一呼吸置いて、背中を向けたままで言った。
「あなたの息子であることを誇りに思う。ありがとう。僕は、あなたの息子で良かった」
彼女は、聳える大樹のように立つ彼を見上げながら、しばし呆然としていた。
けれども、彼女は・・・込み上げてくる熱いものを慌てて飲下すように、詰まりながら言った。
「何を言っているの。・・・これからでしょう。裾上げを親に頼むくらいなのだから・・・まだまだ・・・先を見ていなさい」
「うん」
息子の返事は拙かった。けれども、それがすべてであった。

「実家って良いものだな」
彼はぽつりと言った。誰を思っているのかは、わかっていた。
赤い髪飾りをして現れた少女は転居が多くて、自分の場所がないと言っていた。どこでも生きていけるが、どこにも自分の場所がないと感じていた。
自分もそうだ。彼女はそう思った。
透明で、何もかもが役割の名前で呼ばれる。自分の名前では呼ばれない。

ダイくんママと呼ばれて、彼の名前は違う呼び方なのです、と言い直すこともできず・・・
ただ、笑うだけしかできなかった自分の空しさを思い返す。

彼女は自分の膝上に乗った糸くずを丁寧につまみ上げると、片手に包んだ。

己の太腿に手をかけて、体重を乗せると膝が軋む。最近では、かけ声が漏れることが多くなった。

老いていくことが怖いとは思わなくなった。楽しみになった。

それは、池田麻里奈のことを思い出すからだ。彼女のようにになりたいと思うのではなくて、彼女のように生を謳歌することを認めることができるようになったのだ。

こども達の理解できない行動に困惑した時も、諍いで心がささくれだった時も。

あの少女がああ晩・・・彼女に大丈夫ですか、と声をかけてきてくれたから。

自分はひとりではないのだと気がつくことができたから。

彼女は、顔を上げて身体を起こした。

「あなたの実家はここだけでも・・・ダイ、自分の戻りたい場所を見つけなさい。ここには思い出がたくさんあるけれども、あなただけの思い出を誰かに残す場所を・・・作るのよ」

彼はその時によく母に向かって顔を向けた。

振り返る時の姿は、夫にも自分にも似ている。どうしてなのだろう。こういう僅かな仕草が・・・とても愛おしい。

「ダイって呼ぶからみんなが真似するだろう？名前表記でいつも問い合わせが来るから困るよ」
彼女は笑った。

「あら、名前がふたつあるのはとても贅沢なことじゃないの。いいじゃない」

「脳天気だなあ」

息子の呆れた顔に、鼻声になってしまった声音を誤魔化すように、高らかに彼女は笑い声を上げた。

「今日は好物ばかり用意したわよ。お姉ちゃんも帰ってくる。みんなで・・・昔のように、一家団欒にしましょう。写真を見ながら。ああ、あなたの裾上げがいつも大変で、そのことについては少しばかり文句があるのよ」

どういふわけか、池田麻里奈の笑顔が浮かんだ。

裾上げも、もう、これで最後だろうと思うと・・・少し寂しかった。

・・・彼女が立ち上がる時に手を差しのばす息子の大きな手の平に手を重ねながら。
池田麻里奈の小さな手の平が、息子に触れた時のことを思い出していた。

昔のことを思い出してばかりいるのは、自分が・・・親になったからなのだろうか。

彼女は節くれ立った自分の手の平を恥じることもなく、息子の手に重ねた。

(FIN)

◆01

まったく、マリナはどうしてあれほど迂闊なのかな。

彼はそう口の中でももぞもぞと呟いた。

誰に聞かせるわけでもないが、自然と、言葉になってしまう。

彼の年齢の近い姉に知れてしまえば、老化現象だと揶揄われることは明白であった。

ダイは、手に持っていた大きな旅行用の鞆を持ち直した。

今夏、これまでずっと使っていた鞆の隅が摩耗して革の縁取りが薄くなってしまっていた。

合宿の時にしか使わない鞆だ。

何日か天気が続く乾燥した日ざしの日を狙って使う前に陰干しをしてあったところ、それを取り込む時に、母が提案してくれた。

キャリーケースを買おうかと言ってくれた。

けれども、ダイは、有り難く感じながらも、もういらぬから、と言った。

便利ではあるが、彼には必要のないものであった。

荷物は最小限で良い。それに、自分の身の回りの品よりも、楽譜や譜面台や調整道具が大半を占めているのだから。

ダイは、反対側の手で提げている楽器ケースには振動を加えないように配慮する。

傍に寄せて、誰かにぶつかって落とすなどの事故がないように無意識に身体が動く。

これも長い間の習慣になっていることであった。

彼は、じわりと染み込むような日ざしに一瞬目を細めた。

建物の影から出てきたばかりなので、視界は煌びやかすぎる色しか残らない。

しかし、その暑さや照射がどこか、懐かしかった。昨夏と変わらないからだ。

彼は、それでも・・・自分の中に留めて置くべき記憶として肌にそれを刻み込むようにした。

・・・これで、最後の夏になるのかもしれない。

毎夏、この時期になると彼は甲府に行く。

別の目的があって、甲府に行く前から近い場所に滞在しているのだが、その用事が終わると皆と合流するのだ。

皆、と言っても家族ではない。

血縁関係があるということではないが、彼には大事な存在ばかりであった。

皆、年上で、彼らのこどものような年齢のダイだけが、異質であった。
だから、こうして頻繁にここを訪れることになろうとは思っていなかった。気後れすることもなかったのは、マリナが居るからだ。

毎年、どういうわけか、この事だけは忘れずにダイに念押しする。
どこに居ても、必ず確認してくる。
もう、日本に滞在していることも少ないのに。

そして甲府の館を提供する当主は、この時期に彼らを出迎える。
どこかに旅行するわけでもなく、家族を作るわけでもなく、ただ、淡々と過ごしている人がいた。
友人が居ないわけではなさそうだが、彼は、夏に訪れる旧い友人達以外の友を呼んだことはなかった。仕事の話もしない。それはその屋敷に集う皆が同じであったが。

だから。
ダイがマリナに招かれて弾上藤一郎宗景静香の家を訪れた時に、あまりの荘厳さに唖然としてしまった。
けれども。
出迎えた人は一人きりだった。
弾上藤一郎宗景静香という人物だけである。
他にはそこに住んでいる人はいないようで、誰も家族だと紹介されなかった。
それ以来、顔ぶれが変わることはない。
静かな、静かな家。
大変に古くて大きな家なのに。
ダイの家の囂しさが信じられなかった。
そんな広い家に、たったひとりで居るという風変わりな人は、マリナの長い付き合いの友人だ。
そして、その第一印象の理由を知ったのは、後のことであった。
昔、不幸な事故があって、彼は一度に家族を失ってしまったのだという。
その時のことは、皆、多くを語らない。
一番何も言わないのは、当主その人であった。
いやな思い出だからなのか。
そうではないと思った。ただ、彼は哀しいのだと思った。
その出来事が起こったその場所に今でも住み続けるのは、彼の誇りであるのかもしれないがそれだけではない思いがあって・・・

「誰が、迂闊なの？」
ダイはそこで思考を停止した。

自分がひとり、考え事に耽っていたことに気がつく。

甲府に近付くにつれて、浮かれている自分をそこに見つけて苦笑いした。

額に汗が浮かぶが、流汗の淋漓（汗が滴り落ちること）はなかった。

◆02

日暮れになるとかなり冷涼な空気が風になって流れてくるが、日中はかなり暑い。

「ここまでで良いの？」

彼女は頷いた。

「迎えが来ますから」

その涼やかな声の持ち主は、非常に小柄な少女であった。

それが、ダイの大事な存在のひとりを思い出させる。

彼と永らく隣同士で演奏をしたパートナーとでも言うべき梅華とは違うタイプの少女であった。

彼より年下で、まだ小学生と言っても通用しそうなほどに幼い顔立ちをしていた。

でも、とても落ち着きのある少女で、ジュニアメンバーの中では地味であるけれども毎年顔を出している実力の持ち主だ。

梅華はどちらかと言うとその勝ち気そうな外見で損をしているようなところもあるが実はかなり禁欲的で努力家でもある。

彼女は合宿が終わると、慌ただしく去って行った。

また別の日に機会を設けて逢おう、と言ったがそれは叶わないのかもしれないな、とダイは考える。

彼女との関係をいつも仲間達に囁かれるが、ダイは苦笑いして何も答えないことにしていた。

彼女は大事な仲間である。

恋愛をすることによって音楽の幅が広がるということは幾度も聞いたが、彼は溺れる程の恋を音楽の世界で広げるつもりはなかった。

ただひとりだけに、届けばそれで良いと思っている。それは今でも変わらない。

それに、仲間と一緒に居ると楽しかった。

毎日顔を合わせているわけではなかったが、こうして定期的に演奏するたびに上達している仲間達に負けては居られないと思ったし、彼らに自分が認めて貰う喜びも知った。

衝突することもあったし、突出した才能を持つものへの嫉妬から来る摩擦も見かけたことがある。

けれども、彼がその渦を作ることはなかった。

自分は・・・彼らと少し距離を置いた場所にダイは自分が存在するのだろうなと思っていた。

音楽しかないわけではないのだという余裕めいた蔑視が、ダイの無意識のさらに底にあるのではないのか、と梅華に注意されたことを思い出していた。

「ケース、重いのなら持つよ」

「大丈夫です」

彼女は華奢な肩に提げたハードケースを持ち直した。

熱気と湿気を避けるために、移動の時にはソフトケースではなくハードケースに収納するのは彼女に限ったことではない。

そう言うダイも、彼の身に余る高価な楽器を持ち歩いているので移動の時には細心の注意を払っている。

彼女と並んで歩くときも、互いにケースがぶつからないように持ち手を変えて歩くのは、暗黙の了解のようなものであった。

愚かな声掛けだとわかっていたが、この小さな人を見ていると、どうにも放っておけなくなる。

彼のよく知る・・・茶色の髪、茶色の瞳の人を思い出させるからだ。

しかし、彼女の柔らかい髪や俯き加減の少しそばかすの浮いた頬は、あの人とは似ていなかった。

彼女は体が小さくて、何かひとつでも自信を持てるものを身につけさせたいという親心で音楽を勧められたのだと言う。

楽器はフルート。これも梅華と同じであった。

そんな彼女はダイが参加する合宿では、一度もソロを吹いたことがない。

梅華という古株が居るからというわけではなさそうだった。

彼女には備わっていないものがある。

確かに、首席奏者としての実力はあるものの、梅華のような「華」がなかった。

きっちり練習をこなしていると思われる彼女は、毎年上達しているとダイでさえはっきり感じるほどに才能がある。

音大附属の学校に入学したと聞いているから、毎日練習三昧なのだろう。

寮に入り毎日やることが限られているから、と彼女は謙遜して言ったが、生半可な気持ちで入学することはできないレベルの学校であった。

もちろん、維持継続するだけというのも許されない、向上し続けなければならないという意味では最も厳しい場所のひとつである。

そこで、彼女は進路を決めたようであった。

彼女はソリストとしてではなく、カルテットやトリオなど複数人と組んで演奏活動をすることにしたらしい。

やがてどこかの楽団員となり、研究生を続けながら、息の長いメンバーとして彼女はどこでも遣っていきそうであった。

だからであろうか。

トップ奏者になることに固執せず、いつも難しいけれども目立たないパートを担当することが多かった。

彼女は小柄でありながら循環呼吸が少しできるようで、長く音程を保つことができる。

その彼女の実家が甲府にあるのだということで、ダイは彼女と合宿が終わった後に一緒に電車でやって来たのだ。

お互いに、高価な楽器を持ち歩いている。

席をはずす時などには単身で移動するより安全であると判断したダイは、彼女の誘いに応じたという経緯であった。

合宿の終わりの懇親会の時に、彼がこのまま甲府に立ち寄るのだという話を聞いていたらしい。

そこで、彼女の実家が同じ駅を使った場所にあるのだということを初めて知った。

それくらい、何も知らなかった。

何か会話した記憶さえなかった。

挨拶程度はしていたので顔と名前は勿論知っている。

管楽器奏者だけのグループで一緒に来たこともあったが、そうであったかもしれない、という程度の会話しか記憶になかった。

だから、彼女から話しかけて来た時には、ダイは相当驚いた。

「甲府まで、ご一緒しませんか」

丁寧な、育ちの良さを感じさせる物言いであった。

皆の居ないところで、そっと、静かに言った。

最初、ダイは自分に向かって言われている言葉だとわからなかった程であった。

どう答えたものか考えていたダイに、俯きながら彼女はぽつりと言った。

「梅華さんの許可が必要でしょうか」

ダイは目を丸くして言った。

「なぜ、彼女の許可が必要なの？」

「だって・・・」

ダイは首を捻る。

梅華は大事な仲間であるが、それ以上の関係ではない。

そういう風に考えたこともなかった。

姦しい女子の方が詮索に躍起になっているようで、梅華はいろいろと質問されることが多いようだ。しかし一貫して彼女は否定し続けた。

ダイは無視することにしていた。ひとつひとつ答えていたらきりが無い。
だから、聞かなかったことにすると言うだけで、コメントは一切しなかった。

「僕は彼女の所有物ではないし、ウメだって同じように言うと思う」
それから、彼女の名前を呼んだ。

「同行する」
小さな人は、足元に目を落としていたがダイを驚いたように見上げる。
そういう答を期待していなかったかのようだ。ダイが断ると思っていたらしい。
「甲府までの間、ひとりで移動は心許無いから、是非、同行させてもらえるかな」

◆03

彼の申し出に、彼女は最初は驚いたような顔をしていた。
しかし、行き先が同じであるのだから、同行というよりも便乗と言った方が正しかった。
何か特になるようなことはないが、それほど長くないけれども、毎年見慣れた風景も少し違って見えるのかもしれないと思った。
異性に興味がないという意味ではない。
けれども、夢中になるほどの相手が現れないし、彼も見つけようと思わないというだけのことであった。
自分の姉よりも心配になってはらはらしてしまうほど危なっかしい相手は、今、ここにはいない。
彼が生まれた時から一緒に居る、茶色の髪、茶色の瞳のその人は・・・彼に対して、彼と同じ気持ちにはならないだろう。

話してみると、彼女は実に普通であった。
どちらかと言えば、学友を思い出す。
会話も弾むことはないが、決して気まずくならない。
持ち物の中にウェットティッシュが入っていたり、何度も読んだと思われる総譜が丁寧にカバーをかけられていたり、使い込んだと思われるチューナーが持ち運び用の鞆に入っていたりするとところに好感が持てた。
ダイのまわりには、会話好きの者が多かったのも、これはとても新鮮であった。

梅華とは音楽解釈で話をしたが、個人的な情報交換は殆どしない。
けれども、彼女の場合はまったく逆で・・・音楽の話はほとんどせず、今日は暑いですねと天気の話で始まり、甲府で行われる催しものについての情報をダイに教えたりするといった、世間話に終始していた。
男女問わず誰とも穏やかにつきあえるダイであったが、こういう気質の人も居るのだな、と改め

て自分の経験の浅さを実感した。

それほど長い旅ではなかった。

昼食を摂ってから解散であったので、空腹も感じていない。

ただひたすら話をしているということでもなかった。

時折黙ったままで、窓の外の景色を見入る彼女の横顔を見て、ダイは、またあの人のことを思い出す。

こういう無言が気にならなかった。それまでお喋りをしていたと思うと、何かを考えるように無言になり、また、脈絡のない話を始める。

彼の姉もそうであった。

ダイの思考と、彼女達のそれは違うのだろうと思ったし、それがいけないとも思わなかった。

万華鏡のように、ころころと変わる感情や、些細なことに心を動かされる感性は、音楽の中では必要不可欠であった。

それをどう制御するかという課題もあったけれども。

ダイの申し出を承引した彼女であったけれども。

彼からそう言われることは考えていなかったようであった。

しかし、行き先が同じであったのなら別々の車両に乗り込む必要はないだろうと思った。

幾日も寝食を共にした仲間である。

ダイにとっては、皆が大切な家族のような存在だった。毎年顔ぶれは変わるけれど。

この時間が彼を成長させるから。

考え方や価値観や環境の違う同年代の者が全国から・・・果ては、この合宿に参加するためだけに帰国する者との交流はダイにとってはとても得難い経験となっていた。

甲府に到着してからの彼女はますます無口になった。

地元であれば、帰ってきたと安堵し、異邦人のダイに知識を披露するのだろうと思っていたが、彼女はそうしなかった。

駅前には整備されて清潔で区画のはっきりした場所という印象を強く残す街並みに変わっていた。

昔が良かったとは思わないけれども。

変わってしまったことを良かったと思うには・・・もう少し時間が必要だな。

いつ見てもきっちりと短髪でいる、目尻が少しつり上がった人は、ダイにそう呟く。

不思議なことに、ダイは彼の親族でもないし、彼の弟子でもないのに、何か大事なことを伝え渡したいと思っているようだと感じていた。

甲府の名士として永らく名前を轟かせている人は、まだそれほど年老いてはいない。

マリナのクラスメイトであったのだと聞くと、マリナや彼は過ぎ行く年月の速度が他の者たちよりずっと遅いのだろうと驚歎する。

年月は彼らの輝きを増すだけで、決して色褪せないのだと思う。

年若いダイがそう感じるのだから。

きっと・・・あの、白金の髪の青灰色の瞳の人もそう思うのだろう。

甲府に住まう、あの人とマリナの間には、シャルルとあの人やあの人とマリナや、ダイとマリナの間とは違う空気が流れているのだ。そしてそれは誰にも奪うことはできないし、誰も摸倣することはできない。

だから。

今、目の前にいる彼女に対してどう行動すれば良いのか、ダイは正直に言って戸惑っていた。迷うのではなく、わからないのだ。

◆04

彼女の演奏は実に堅実であった。

そして、決して自分を主張しすぎるということはない。

だから皆から出遅れてしまうことも多いようであるが、演奏会では失敗した様を見たことがない。

ハプニングや失敗をどう取り繕うかが奏者の技量であったが、彼女にはそういう想定外のことすら存在しない。そういう印象を持っていた。

彼女は自分に与えられたパートや課題が他の者の好まない避けがちな内容であったとしても、それを彼らと同じ様に嫌だと言って押し戻すことはなかった。

そういうところは、梅華と似ていると思う。彼女も、どれほど難易な曲であっても決して受けないという返事をしない。

誰かと誰かを似ていると言って一括りにしてしまうことは良くないと思ったけれど。

それでも、彼女のことを思い出してしまう。

目の前の人に、失礼であると思ったけれども。

それでも、思い出してしまう。

もう、彼女と演奏することも数えられるだけの回数になったのだな、と思うと尚更であった。

音楽業界の常識を知らないダイに様々なことを細かく教えたのは、梅華であった。

序列の厳しさ、首席奏者が最初にしなければならないこと、演奏会では楽器以外は照明に反射するものは身につけてはいけないこと・・・

同じとは言い難かったが、気安さを感じる。これまでどうしてあまり話をしなかったのだろうと思うくらいであった。

彼女は熱心にダイの拙い話に耳を傾け、決して自分の経歴を誇示することはなかった。確か、彼女は日本でも指折りのプロ奏者に師事しており、時々外国留学も経験しているようだと言った。

それなのに、一切そういったことには話に触れない。

・・・誰に師事しているのかは、自分の能力に関係がないと思っているダイと共感する部分であったのだろう。

ダイは、彼女の言葉がごく普通であることに心地よさを感じ始めていた。

だから、道中は決して退屈しなかったし、気詰まりであると感じることもなかった。

甲府に到着した時には、すっかり打ち解けて、様々に話が進んだものであった。

彼女の和やかな雰囲気は、どこか旧友の不磨を思い出させる。

聞き上手で、それでいて自分が話をするのができないという鬱憤を持たない人物。

それが、彼女であった。

彼女は甲府の出身で、かなり古い家柄であること。

音楽は道楽だと思われがちであったが、彼女の家では古くから楽奏者が家を守るという不思議な風習があって、そのためにだいぶ理解された環境であるけれども、将来が堅実であるように教職に就くことを望まれていること。

しかし、彼女は梅華に触発されて、様々な土地を歩き渡って古来の音楽の共通する者が何であるのか研究したいと思っていること・・・

何もかもが違っていたのに、あの茶色の瞳と茶色の髪の人を思い出させるのは、彼女が小柄であるからなのだろう。

身体的特徴だけで誰かと類似しているのだと決めつけてしまうのは良くないことだとわかっていたけれども。

やはり、彼女のことを思い出してしまう。

年の離れた彼の良き理解者。

けれども、彼にはたったひとりの人であったけれども、彼女にとってはそうではなかった。わかっているよ、と幾度も呟いた事を思い出す。

自分がどうかしているのだ、と幾度も思った。

あれほど年の離れた人のことを案じるなんて・・・どうかしている。もう、それ以外に言いようがなかった。

あの人に聴いて欲しくてこの世界に足を踏み入れた。

あの人以案じている人はダイ以外にもたくさん存在する。

悔しいとは思わない。それが、彼女だから。でも、時々寂しくなる。

こんな時・・・彼女によく似た人を目の前にしてしまった時に、彼女であったのならどんな風に対峙するのかなと考えてしまう。

甲府の駅まで、という約束であった。

それ以外は関与しないという決め事があったわけではなかったけれども。

途中まで一緒のようだから、という申し出の他については聞いていなかった。

皆無と言って良い程、合宿の時のことの話や、音楽の話はなかった。

敢えて、そういう風に話を運んでいるように見えたが、ダイはそれについて何も言わなかった。

彼も学校に戻れば、同じ状況であるからだ。

聞かれれば答えるが、それ以上のことは自分から発しない。

梅華ほどのストイックさはなかった。彼女は、一切話をしない。自分のことも話さない。どれほど苦労しているのか、何に悩んでいるのか・・・逆に、彼女が話すことと言えばいつも音楽のことばかりであった。心から音を愛しているのだと思うが、時にダイはその姿を見て・・・自分はそれほど没頭しきれないということを思い知ることになった。

だから、今、目の前にいる彼女の話でどことなく心が安らいたというのは、決してごまかしではないのだろうと思う。

◆05

その彼女が、慣れているはずの甲府の駅前で足を止めたまま、日差しの中に身を晒しているのので、ダイも足を止めて、彼女の顔を見ようとした。

具合が悪くなってしまったのだろうか。

確かに、合宿というものはかなりハードで、就寝時間も話し込んでしまう棟があると聞く。幸いなことに、木管楽器の男子棟にはそういう騒がしい輩はほとんど居ない。

寝不足になれば体調に響くし、鈍った指先で誤魔化すことができるほど生易しいカリキュラムではないからだ。

皆、睡眠時間の確保に集中し、少しでも体を休めることに専念する。

アスリートとまったく同じであった。神経がいかに興奮していようとも、体力を温存する方が優先された。

ダイが懸念したように、彼女の体調が優れないのであるならば。

すぐさま、然るべき場所に連絡を取り、彼女を送り届けなければならない。

大変に小柄な人で・・・ダイのよく知る人物を彷彿とさせるほどの小柄さに加えて、華奢な感じも見受けられた。

疲弊が彼女の足を止めてしまっていたのなら、それに気がつかなかったダイの責任でもある。

ダイは、彼女に近付いて、顔を覗き込もうとした。

一瞬、彼女は、体を引いて、彼から離れようとした。ダイはそれでも、この暑さの中で、彼女が失調したのではないのかと案じた。

・・・手元にある楽器ケースが温んでしまうことも気になったが、何より、同行している仲間が

倒れた時に、しなくてはならないことはひとつだけだ。

・・・本人が倒れても、楽器だけは倒すな。

そう言われて皆、成長する。

自分の命よりも大事な楽器と書き込みの入った楽譜を、どれだけ大事に扱うことができるのかということで音楽家の道への配点が決まってしまうかのように。

誰も、そんなことは言わないのに。誰も、そんなことは強制しないのに。

自分の体が自然に相手の持つ楽器ケースを気にしていることに気がついた。

ダイが音楽に携わることを見直そうと思ったのは、自分のそういう動作からであった。

人より楽器に眼が行ってしまう。

その人物の才能や努力や功績より、どれほど素晴らしい名器を持ち得ているのかということに気が向く。

それではいけないのだ、と思ったからだ。

確かに、この世には傑出した器がある。その楽器の特徴を最大限に反映できる奏者の存在も少ないのだ、とダイは知っていた。

なぜなら、自分の楽器は不相応だと感じているからだ。

つてがあって、借り受けることができた。そして、彼の音楽に対する姿勢も、周囲の扱いも激変してしまった。楽器というものはそういうものだ。

最高の切札を持っている、万年適応の名刺のようなものだ。

ダイ本人よりも、楽器に皆が興味を注ぐ。それが面白くないのではなく、ただ、彼の能力はどこに影響しているのかとってしまう瞬間があった。

大人を交えた世界ではそういうことを感じない。なぜなら、奏者があってこそその楽器なのだと言が知っているからだ。

しかし、ジュニアの世界ではそうはいかない。

どれほど賞を受けているか、どれほど留学経験があるか、どれほどの楽器があるか・・・すべては外側の器から入る。

絶対的な違いというものを感じて、ダイはそこで挫折という名前と少し違う疎外感を味わった。

彼が、この楽器を得ていなかったら。

もっと違う評価だったのかもしれない。

それを素直に受け入れる根拠も環境も整っていなかった。

歪んだ精神で成長することはなかったが、自由気ままに自分が一番だと思う程自惚れる材料は調っていなかった。

中途半端にしていたつもりはない。

けれども・・・今、目の前にいる彼女を見て、自分はこれ以上続けられないのだろうなという思いが湧いてくる。

彼女は、ダイを見上げていた。小柄な少女であったので、彼は視線を落とした。彼の親の経営するアパートに住むあの人も、こういう風に小柄であった。

けれども、彼は彼女が小さいと思ったことはなかった。年齢が上であったということもあったけれども、いつも・・・彼は同じ視線であるように感じていた。

今、目の前に居る彼女のあの人の違いは何なのだろうか。ほとんどすべてが違っていて、身長だけしか類似は見当たらない。それなのに、あの人を思い出す。これはなぜなのか・・・ダイには、わかっていることであったのに、それを口に出すことはなかった。

これからもないだろう。これから先・・・秘めたる想いとして抱えていくことになったとしても、それでも良いのだと・・・今はそう思っているから。

目の前の彼女は何かを言いたそうで、それを言えずに口籠もっている。内気な性格だとは承知していたが、本当に言いたいことを言うのは苦手な気質らしい。

奏者は、その音や演奏方法とまったく逆の性格をしているか、聞いた音のとおりの性格か・・・その二極に分かれると思われる。

折衷の者というものは大成しないことが多く、その例外的演奏家というのは、ダイは、カオルと梅華のふたりしか知らなかった。

時に大胆で、時に繊細で、それでいて音楽に関しては禁欲的でありながら解釈は奔放で大胆な面も見せるという奏者は・・・ふたりしか知らない。

彼女の音は堅実であったし、これまでの道中から、その人柄もわかった。

年相応の少女であることに変わりはないが、彼女はいつか・・・音楽家としての歩みを止めてしまう時が訪れるかもしれない、と自分でわかっているようであった。

だから、ダイに同行したいと言ったのだろう。

生涯の道にするつもりはない。

道楽でやっているわけではなかったが、良くある留学や音楽大学附属高校への編入への誘いなどは、すべて断っている以上、その理由について明かさなければならない時もあった。

どこからか、その話を聞いたのだろうと思われた。

だから・・・ダイに意見を求めたいのか、話を聞いて欲しいのか・・・それとももっと別の目的があって、彼と個人的に会話したいと思ったのか、ダイにはわからないままであった。

けれども、彼女の配慮に満ちた時間の中で、ダイが不愉快に思うような箇所は少しもなかった。

ただ普通に話をして、時間の経過を忘れてしまうような時の流れを共有した。

心が浮き立つような出来事には遭遇しなかったが、それだからこそ、ダイは安心して彼女と甲府まで遣って来ることが出来たのだろうと思う。

「具合が悪いのなら・・・」

ダイはタクシーを呼ぼうとした。彼女が行き先を述べることができるうちに、彼女を正しい方法で送り届けなければいけない。そう思った。

ダイの持っている楽器も高価であったが、彼女の持つ楽器も高価であったし、合宿の帰り道ということもあって、荷物は大きかったので、ひとりで帰らせるには心配が払拭できなかった。

ダイはこのあたりは詳しいというわけではない。いつも訪れる場所であったが、ここは下車駅でしかなかったし、それ以上の用事をこの場所で済ませることはなかった。

自分で同行させてくれ、と言った以上は、彼女を送り届ける必要があった。

こどものような小柄な彼女の持つ楽器は、見る者が見れば相当な額の品だということがわかってしまう。

梅華のように割り切って持ち運ぶケースではなく、彼女の持っているものはメーカーとモデルロゴが入ったものであった。それが、学生の身分で購入できるものでないことは、わかる者にはわかってしまう。

ダイが彼女に対して横を向いた時。ふと、体が引かれたので彼は視線を戻した。

体が強ばる。

彼女が、彼に腕を伸ばして服の裾を引いたのだ。

それほどまでに近い距離に、誰かが居ることはほとんどないことであった。

彼女の顔は見えなかった。ただ、俯いて・・・彼の持っている楽器ケースの端を持っていた。

引き寄せるといふには消極的すぎた。

お互いに、片手しか空いていない。

各々、決して手放すことの出来ないものを持っていた。

それは、とても象徴的であった。どれほどのことがあっても、自分の体が傷ついても、手に持っているものは離さない。

そういう習慣が染み付いている。

けれども。

ダイは、知っている。

自分がそうできない瞬間があることを。持っているものをすべて落とさなければ、あの人を救えないという選択が訪れた時。彼は、迷いもなく手放すだろう。この国の誰もが持っていない歴史ある高価な宝飾のような音器を落としても。それでも、あの人のためなら、そうしようと考えなくてもそうしてしまう。そういう自分が内包されたままであることを、ダイは知っていたから。だから、この事態に狼狽えた。

確かに、ダイは常日頃、自覚がなさ過ぎると注意されることがあった。

ダイの家は姉と母が強毅であったこともあり、加えて彼の昔なじみであるあの人も同じくらいに私の強い人であったので、こういう・・・吹けば倒れ萎びてしまいそうな人への対応方法の経験が乏しい。

梅華のように打てば響くような者の方が、こたえがはっきりしているので気が楽だということもあった。

しかし、それでは自分に対する驕慢だけではなく、相手に対しても無礼だと思った。

人の気質について、彼が優劣をつけることはできない。その逆を彼が相容れないのと同じ様に、彼も、相容れないと否定しては、自分を拒絶することになるのだと思っているから。

そういう考えの人と、共有する時間を多く持ってきたから。

自分の周囲の者たちのように、恋愛に興じることはできないな、と思っていた。

日々を過ごすだけで精一杯であったということもあったが。

何より、家族が心配するほど、自分が何かに現を抜かすというような状況を見せたことがなかったからだ。

ダイの同級生達は異性のどの相手を自分に向かせようかと夢中になっている。そして、ダイもそういったことにまったく興味がないというわけではなかったが・・・何か、違うような気がしていた。

何がどう違うのか、うまく説明できなかった。自分の身体が成長するにつれて、あの人との視線の差が開いていくことに嬉しさは感じなかった。成長が楽しみねと言われると胸が痛んだ。

はやく大人になりたいと誰もが思うわけではないし、そう思わない瞬間だって誰にでもあるのだと知った。

ダイは、もう、あの人が見ている風景と同じ位置に居る事が出来なくなった。自分で望んでそうしたのではなく、ダイは彼女の視線を追い越してしまっていた。

・・・友人の不磨にでさえ打ち明けられないことであった。

彼は承知していたかもしれないが。

だから、総合するに、自分は同世代の者と上手に会話できない方なのだと思う。当たり障りなく接することができても、深く立ち入ることの出来るような友人関係を築くことができないのは、ダイの方に原因がある。

だからかもしれない。音楽に固執することができないのは、それが原因なのかもしれない。

「そうじゃない」

彼女の口調は幼かった。軽く俯いた時、額に汗が僅かに浮かんでいるのがわかった。

目眩のするような日射が、彼女から言葉を奪っているのだろうか。

それとも・・・彼女に対して自分が何も話させないような態度を見せているから、彼女はこうして言いたいけれども言えないということももどかしさを感じながらも、それをダイに訴えているのだろうか。

しかし、すぐに彼女は俯いたままでぼそぼそと物思いを吐き出した。

「勿体無いです。ダイさんは、これからの人です。

どんなに小さい時から教育を受けていても持って生まれたものに敵わない時があります。

だから、みんな、それを知っているから努力するんです。

そういう・・・うまく言えませんが『持っている人』が努力した時どれほど素晴らしい結果が待っているか知っているから、持っていない人は、それ以上に頑張れるんです。努力するんです。

ダイさんは、両方持っている人です。両方持っているんです。

だから、みんなの憧れと尊敬の人です」

彼のことをダイさん、と言った彼女は、それでも最大限の敬意を払っている。

拙い口調で少し早口で吐露する彼女の心情を思うと、ダイは何か声をかけてやるべきなのだと思った。

しかし、ダイはただ、彼女の小さな声を聞き漏らさないように黙っているだけで精一杯であった。

この暑さが、彼にも彼女にも注ぎ込む。直射日光は楽器にも良くない。どれほど完璧な設計をされたケースであっても大概是日本の気候にそぐわないものばかりであった。特に、木管楽器は気温だけではなく湿度や空気の成分すら影響してしまうことが多いから。

先般、音楽雑誌にジュニア世代の特集記事が掲載され、小さくであったがダイの名前も挙がっていた。

音楽業界は他の世界と大差ない。

芽吹く前の音楽家の卵を発掘することに熱心な者も居るのだ。

それ以降、彼には師事するには同じ楽器の師が必要だと売り込む者も居たし、様々なコンクールへの参加応募への案内などが届くようになっていた。

ダイは恵まれた環境にあるが、音楽しかないとは思わない。中途半端に適当にしていれば良いという選択でこの世界に飛び込んだわけではない。やるなら、自分の限界まで極めたかった。それに結果がついてきた。それはようやくここ最近になって実感するようになった。そのことについて、彼女はここで切り上げるのではなくもう少し未来まで伸ばしてみないのかと説得しているのだ。

彼女がなぜ、ダイと同行したいと言い出したのか、少し、理由がわかったような気がした。

失っても構わないというような態度が皆を惑わせていたのだろうと思うと、ただ、やるせなさが募るだけだ。そういう気持ちで音楽を続けている者がいれば確かに、周囲は惑うだろう。

梅華にも確認されたことがあった。けれども、彼女はそれっきり何も言わなかった。ダイの周囲の者たちは、皆、優しかった。彼を責めることはしない。これまでやってきたのに、何故なのだと説得することもない。親しくなればなるほど、そういう傾向が強かった。

友人の不磨とも、このことについては話をしたばかりであった。

近いうちに、今度はきちんと顔を合わせて報告する必要があるのかなと考えている。

ディスプレイ越しの彼の声や表情だけでは、自分に都合良く解釈してしまいそうになるからだ。

彼もずいぶんとダイを応援してくれている。

ダイが知らない部分でも心を砕いてくれている。

「なぜ、見返りを求めないといけないんだ？」

不磨ならそう言って笑い飛ばすだろう。

自分が好きでやっていることなのだから、と言われた。

それはダイにも言えることなのだろう？と言われているような気がした。

しかし、そうは思わない、彼のことを惜しんでくれる人が居ることに対して、彼は浅慮であったのだと思った。

目の前の少女には、きちんと話しておくべきだろうか。

かなり、迷った。自分の心の内を曝け出すことが理解されることに繋がるとは限らない。何を考えているのか、さっぱりわからないと言われてしまうのが怖いわけではなかったが、それでも、一緒に築き上げてきた信頼を自分から壊してしまうことに躊躇いを感じる。

「ありがとう」

素直に言った。

こうして、仲間と個別に話をするのも、もう、回数が限られている。

永遠の別れではないけれども、彼らにとっては永遠の別れに等しいのだろうと思った。

ダイが、あの人に「またね」と言われる度にそう思うから。

もう会えなくなってしまうのではないのか、次に会った時に自分は変わらずに彼女の「大きくなったね、ダイ」という言葉に不満を漏らす小さなダイを演じられるかどうか、不安だったから。

「少し言い過ぎました」

彼女はそう言って、眉を寄せた。非常に大人しい存在であるという認識はあったが、これは彼女の勇気なのだろうと思われた。

頬が紅くなっている。暑さのためではない。

彼女は指を引いた。楽器ケースではなく、彼の服を引いた彼女は、やはり音楽人なのだと思う。楽器を人に触れられることを好ましいと思わないという意識が、彼女の身に染み付いている。

「私が何かを言う立場ではないのは、わかっています」

彼女は恐縮しながら言った。こういう奥ゆかしさを持った音楽家はとても少ない。その一方で、とても大胆な演奏をするのに普段はとても大人しい演奏をする者も、その逆の場合もあった。音楽を奏でるものは、音そのもののような性格であるとは限らないのだ。人と交流できないから、音で交流する。そういう者も居る。彼女は

だから、彼女は彼女のこれからの人生に、ずっと音楽を連れて行くのだろうと思った。

「そうじゃないよ」

ダイは努めて穏やかにそう言った。

それでも、彼女はただ申し訳なさそうに言った。

「部外者なのに、踏み込んでしまいました」

「そうは思わないよ」

今度は彼が声を出す。

・・・少し自分の口調が乱れていることに気がついた。

普段、こんな風に自分を律することができないなと思うのは、あの人と話をしている時だけであると思っていたけれども。

思わぬことを言われると、このように慌てるのだな、と思った。

その理屈が正しいのであれば、あの人の前でだけは自分は自分を律することができないということになるけれども。

今はそれを深く追求することはせず、彼女に向かってただ、正直に思うところを言うことにした。

こういう風に、行動を決めてから発言するのは彼が計算しているからなのだ、と思う。まったく、あのフランスの華の影響を大きく受けすぎているとカオルに言われたことも思い返していた。

「僕には決めたことがあって、それは音楽を続けながらできる事ではないから。だから、どちらも中途半端にすることはできないから」

「決めてしまったのですね」

少し寂しそうに彼女が言った。上から見る彼女の瞳は長くて、幾度も瞬いていた。ぱちぱちと音がするほどに長くて、綺麗だった。でも、その仕草すら、あの人のことを思い出すきっかけになってしまう。

「部外者は存在しない」

ダイは強くそう言った。誰かと何かと関わっているのであれば、まったくの部外者であるとは言いきれない。人は、常に何かと繋がっている。

あの人がそう言う限りダイはそうなのだろうと思うし、あの人がそうだとしなくてもそう思うのだ。

人は、何かで繋がっている。何かの瞬間に触れあう時があれば、それは必要があってそうなるのだ。偶然に見えるかもしれないが、それは必然だ。

彼女は自分に考え直すように言いたかったから、こうして予定を合わせて同行したのだと思うと、ただ申し訳ないと思う。

しかしそれを口に出してはいけないのだと思っていた。

誰かに詫びながら何かを決めたのなら、いつか自分は必ず後悔すると思ったからだ。

選んだ路に迷うときもあるだろう。特に・・・あの人の距離が開いてしまった時には、誰の責任でもなく自分が決めたことなのに、きっと、逃げ道がないかどうか探してしまうことになるだろうと思っていた。

自分はそれほど強くは内。だからこそ、逃げ場を持っていたくなかった。

「同じ演奏仲間なのだから」

ダイはそう言った。

彼女の眉頭が神経質そうにぴくりと動く。

非常に真面目な彼女は、まったく手を抜くことを知らない梅華ととてもよく似ていると思ったし、梅華も彼女のことをかなり気に懸けているようだということは何となく察せられたことであった。

梅華の壮麗な音色は誰にでも合わせられるものではない。特に、第一奏者と言われる者は、目立ちすぎてもいけないが、没個性であってもいけないという実に矛盾した要素の均衡を保ち続けることに長けているかどうかということも重要であるとダイは考えていた。

梅華も自分の音色や技術の特徴をよく熟知しているようであったが、高音だけは個性というものが出してしまうので、だからこそ、彼女は基礎練習を絶やさず、個を消すレッスンも欠かさないで繰り返している。

目の前の彼女は、そんな梅華と相性が良かった。

低音が揺らぐ常と同じ呼吸で続けることができるのは横隔膜と腹筋が発達しているだけでなく、常日頃全身を鍛えているからだ。彼女は非常に小柄で持久力も肺活量も平均値を大幅に上回ることはあまりないと思われたが、それでも彼女が人一倍努力しているからこそ、この選抜メンバーの会合に参加する資格を得ているのは間違いようのない事実であった。

道中、気になっていたことがあった。

彼女は背筋の良さが際だっていたが、足も腕もびっちり隙が無く張って閉じており、ダイはそれを見て年齢相応の者の姿勢ではないなと思っていたところであった。

あまり長く見つめると失礼に当たると思っていたが、音楽に携わる者として同じ管楽器奏者としてその秘密が気になる場所であるのは否めない事実であり疑問でもある。

直列に並ぶことはあっても、こうして対峙することのない楽器が管楽器奏者であった。特に、木管楽器は、場所が近いのに互いの顔を見ることがない。

呼吸音だけで意思疎通を図る。

指揮者の気配に注意深くなければいけないのに、楽器のコンディションにも気を配る必要がある。

舞台の上では、何もかに完璧ではならなければいけないが、その分、背後や隣の者達がどんな表情をしているのかということについて考えるのはいつも演奏が終わってからのことであった。

彼女はダイの目の前で、何度も何か言おうとして口を開き、小さな唇を閉ざしてしまう。

けれども、ダイはその先を督促することはしなかった。

こういう時には、迷っている時だからだ。

何を言ったら良いのかわからない、ということではなさそうだった。

自分にも経験あることだ。

ダイも、あの人の前では、本当に言いたいことが言えなかった時もある。

でも今は・・・こうして、自分の人生に関わるあの人に関わっていたいと思うから。

夏の暑い日差しの下で、彼女はそれほど長い時間を過ごしたことがない。

白い額は日焼けを知らなかった。意識して日焼けを避けているのではない。楽器を持ち運ぶ者は必然的にそうなるのだ。

直射日光や湿気を避けるようになる。ごく普通に暮らすダイとは違う生活の規定であった。そんなダイでも、皆から肌が白すぎると揶揄されることがある。同じ生活を送っていながらも、自分もいつの間にか・・・この世界に生きるようになったのだと思うと、それが嫌いではなかった。合宿の間中、何か運動をやっているのか、指は気にしなくて大丈夫なのかと聞かれる度に、彼は自分が異質なのだと思うのだけれども。

結局、どちらの世界に居ても中途半端なのだと思っていたが、そうやって卑下する時間があれば少しでも練習をし、解釈に頭を悩ませる時間に変換したかった。

「あの・・・」

彼女は勢いをつけるためにそう言ったかのようであった。何を言うのか考えながら喋るような気質の人ではない。ダイはうん、と頷いた。それで決心がついたようだ。

「私は、ダイさんに辞めて欲しくないのです。来年も合宿で会いたいです。合宿だけではなくて、その・・・いろんな演奏会で・・・見ていたい」

最後の方は声が小さくてよく聴き取れなかったが、もう一度、と催促することはなかった。

「これで気持ちを変えてくれるとは思っていません。でも、周囲の惜しむ声があまにも大きいので・・・」

彼女はそう言って、顔を上げた。内気な彼女がこれほど強く言うのであれば、相当な勇気を振り絞ったことだろうと思われた。

自分がそれほど他人に影響しているとは思っていなかったのも、ダイは少なからず驚いていた。この世界では、ライバルがひとりでも減ればそれだけ自分にチャンスが巡ってくると信じている者がほとんどだ。

ダイがそういう話を好まないのも、誰も彼の前では言わないだけで、誰もがそのように思っていることを知りながら、主席奏者達は走り続けるし、そうでない者たちはその背中を追い越すために走り続けるのだ。

「いえ、そうではないです。私が、悔しいと思っています」

彼女は正直にそう言った。

小さな肩が震えていた。

「でも、まだ迷っているのですしたら考え直して欲しい。少しの間のお休みということにして欲しい」

「迷ってはいないよ」

ダイは彼女に率直な気持ちを伝える。

誰が言っても、これは変えることはない。たとえ、あの人がそうしろと言ったとしても。

自分にとっては、音楽が一番ではなかったのだ。順位を決めることさえ難しいと思われる自分の中の大事なものであることには変わらないが、それよりももっと大事にしたい生涯の思いと言えるようなものを知ってしまったから。

「僕はそれほど器用じゃなくて、いろいろなものを適当にすると、すぐに満足できなくなってしまふ。でも、これからは余所見をしてはいけないようなものに取り組もうと思っているから」
そう言うと、ダイは困ったな、と言って頭に手を遣った。

「僕は音楽への取り組みがとても遅くて、他の人のような経験がとても少ない。この差は大きい。でも、一生懸命やり遂げたことに結果がついてきてくれたこともあった。そうじゃなかった時もあった。それに、僕にはたくさんの人と知り合いになれたことの方が実りがあって・・・負け惜しみみたいに聞こえるかもしれないけれども、これが僕の選んだ路なんだ」

これまでの経緯や葛藤は語らなかった。ただ、決めてしまったからという結論だけしか言わなかった。それでも、それでわかってくれたと思うし、それ以上言うつもりもなかった。

「梅華さんが惜しんでいたと言っても、駄目ですか」

彼女が意を決したようにそう言ったので、ダイは目を丸くする。

「ウメにそう思われているとは光栄だけれども、ウメがどうして今の話に関係するのかな」
まったくわからなかった。

彼の姉も母も時々、前後の関係が全くないものを話題にすることがあったが、彼女も同じなのだろうか。あの人と話をするときには「それは脈絡がない」と平気で言えるが、目の前の小柄な同輩にはそのような指摘をするとは思っていなかった。

もっと配慮した言葉にすれば良かったのかもしれないが、先ほども梅華のことを口にしていたので、何か梅華との間にあったのだろうかと思ってしまう。

しかし、それはダイが口出しをすることではない。梅華は容姿が艶やかではあるが内面は非常に生真面目で細やかであり、それでいながら対人関係に関しては非常にドライと言うか、どこかさばけているところがあった。

多くの人間と上手くやっていくには、一定の距離を保っていなければいけないので、特定の者との付き合いを避けているような節があった。去っていく者は追わないし、来る者に忠告することもない。

彼女は顔を上げて、驚いた表情のままのダイと目が合うと、見る間に目元を朱に染めて泣き出しそうになった。

「ダイさんは、梅華さんをそれほど信頼しているんですね」

「ウメのことは信頼しているよ。そして君のことも。大事な仲間であることには変わりがない」

「私、梅華さんのことを尊敬しています。本当に、彼女は凄いと思います」

ダイの心配そうな顔で察したのだろうか。彼が懸念しているようなことはないのだと言うかのようになり、彼女は慌ててまくし立てた。

「ふたりは・・・その・・・お似合いだと思います」

彼女はそう言うと真っ赤になってまた俯いたが、かなり緊張しているようであった。

「私は、ふたりの音が好きです。今年も近くで聴けて、とても幸せでした。優しいってこういうことを言うのかなって思いました」

「ありがとう。梅華は僕の友人だよ。これからもそれは変わらない。彼女を見習おうと思うし、尊敬すべき人のひとりだ」

ダイと梅華の間柄が噂されるのは、今に始まったことではない。ダイは彼女の重篤な秘密を知っているし、梅華はダイがなぜ音楽を中断して別の世界に行こうとしているのか理由を知っている。

そういう意味で言えば、他の仲間達よりも近しい存在かもしれないが、恋愛の対象と見ることはなかった。

他の皆が期待した答えを返せなくて、苦笑いで話を終了することにしてばかりいたダイであった。

こういう時は、何を言っても無駄であったし、何かを言えば意図したものと違った解釈で伝わってしまう。だからそういう時には何も情報を発信しない。

◆11

照りつける日差しを避けるために、ダイは、彼女に言った。

お互いに、耐熱性に優れている楽器であるということではない。

どれほど気を付けていても、楽器は消耗品であるが、こういうことで消耗させるには惜しいと思った。

こういうこと。

ダイはそこでふと、思った。

彼女は、ダイに音楽の世界に残るように懸命に説得しようとしている。

太陽光の熱射が楽器に良くないことも知っている。

けれども、彼女はそれでもダイに再考して欲しいと懇願している。

しかし、ダイは言った。

「考えてみるよ、と言う事は簡単だけれども。僕は、決めてしまったから」

先送りすることは簡単だ。その場凌ぎであったとしても、有効な時も知っている。

少し距離と時間を必要とするのかもしれない。

けれども、彼女に次に会うときには、全ての決着がついてしまっている時なのだと思ったから。

もう、次の夏には会うこともないかもしれない、と思い、誠意を込めて彼女に告げる。

「僕は諦めてしまうわけではなくて・・・音楽を生涯好きでいたいと思うんだ。でも、僕は別の路を選んだ。それで、叱られてしまっても、申し訳ないと思っても、それでも・・・僕はこの気持ちのままで続けていたら、きっと後悔すると思うんだ」

後悔はしては駄目よ。反省なら良いけれど。

大きな眼をした非常に小柄なあの人の顔と声が思い浮かぶ。

彼女は俯いた。

「そうですか」

「演奏会は、きっと行くよ。これでさよならにしたら、叱られてしまう」

誰に叱られてしまうのか、とダイは言わなかった。

そして、彼女も尋ねなかった。

ひょっとしたら梅華のことと思っているかもしれない。

しかし、彼の中で、常に微笑み励まし続ける相手はひとりしかいなかった。

そういうのは、面倒くさいって言うんだぞ

カオルの声が聞こえてくる。確かに、彼の心中は「厄介な」という形容詞以外に接続させることは難しそうだった。

そうだ。厄介だ。面倒くさい。けれども、それでも、捨てることができないものがあるって、彼女はそれを「夢」なのだとした。

だから、それはダイの夢なのだ。永遠に、追いかける続ける夢。手が届かないことも、承知している。それでも良いから、今はやってみようと思うのだ。

あの人だけではなく、あの人を取り巻く皆が好きだ。

まだまだ、自分は足りていないと思う。いろんなことが。

教養も経験も忍耐も、努力もすべてが不足している。

彼女の足元に、ぽつり、と雫が落ちた。

熱さのために、汗が滴り落ちているかと思ったら、それは涙であった。

ぎょっとして、ダイは狼狽えた。

今の会話の中で、彼女が涙を零す箇所があったのか、と反芻するが思い当たらない。

けれども、彼は驚いていた。動揺する。

女の子を泣かせてしまうようなことを、自分が一体、いつ、してしまったのだろうか。

「あ、あの・・・」

彼女は俯いたまま、頬を流れ落ちる雫を手の平で拭いていた。

そのうちに、啜り泣き出してしまった。

「ダイさんは、国内だけではなくて、世界にも行ける。

たったひとりだけ、認められたカオル・ヒビキヤを師とする人なのだから」

切れ切れの哀切な声が、ダイを困惑させる。

音楽を愛する者は、奏者を愛でる。

どの者がこれから才能を開花させ、どの者が天才と囁かれていても世界から消えていくのか、肌で実感している者ほど・・・つまり、同じ奏者はその感情が強く出てしまう。

才ある者と早期に近しくなりたいという願望からなのか、それとも・・・強烈な引力によって惹き寄せられるのか。

だからこそ、ジュニアメンバーの中では暗黙の了解なのだ。

恋愛が禁じられているのは、恋愛と尊敬を誤認混同して、彼らは見失ってしまうことが多いから。

「いいじゃないか、恋愛を経験しないで偉大な音楽を作った作曲家はいないぞ？」

カオルなら、そんな風に軽く言っただけかもしれない。

けれども、彼女がどの楽団と協奏しても決して浮いた噂がないのは、彼女がそういう感情は持たないのだと強く心に念じているからなのだ、とダイは知っている。

彼女は、たったひとりを想っているから。昔から。そして、今でも。

泣かないで、と言えなかった。

どうやって涙を止めて良いのか、わからない。

ダイには、目の前の彼女が、自分に重なって見えた。

あの時。

寒い冬のあの日。

彼女を見送った日のことを思い出す。

どうしようもなく泣きたかった。視界が滲んだ。

消えてしまいたいと思ったけれども、彼はその後もこうして生きている。

あの時に、音楽を得ていなかったら。

彼女のように涙を零していただろう。

◆12

「その未来ではない未来に、行ってみたいと思ったんだ」

彼は正直に言った。

確かに、このまま極めたらどこに行き着くのだろうと考えたことはあった。

専門の路に進み、このまま走り続けたのなら、カオルと別れることもないし、あの人はダイが舞台に上り続ける限りダイに会いに来てくれる。そして彼が今持っている楽器を貸与してくれた人との繋がりが消えることもない。

夏の合宿が終わると、必ず甲府を訪れ、夏の騒がしくも泣きたくなるほど美しい祭りを眺め、童心を思い返して心を洗淨する。

いつも、そこにはあの人がいた。そして、あの人の好きな人達に囲まれ、あの人が愛している人とあの人がどれほど幸せな時間を過ごしているのかを、この目で確かめる。

それが永遠に続けば良いのにと考えたことは一度や二度ではない。

ダイは、流れる汗を感じながらも、彼女に辛抱強く言った。

すべての人が理解して欲しいと願ってはいけないのだと思った。

けれども、その場しのぎの適当なことは言えない。なぜなら、彼女とは次の夏には会うこともないからだ。

この夏を経験して、確信になった。最初は「そうなるのかもしれない」と思ったのに。しかし、彼は淡々と過ごした。

いつもの通り、何事もなく過ごすことを目標にした。

彼だけが特別なのではない。翌年には顔を見せない者は大勢存在する。

だから。

皆にとってのいつもの夏を過ごすことが重要なのだ。

彼女が言いたくても言えないことが何なのか、そういったことに疎いダイでも何となく肌で感じていた。

彼も年若い男子である。

まったく興味がないわけではない。

けれども、それでは相手に失礼だと思った。そして、自分自身の心にも。

彼の心の中には、あの人が大きな場所を占領している。

そして彼はあの人のために、これからの人生をあの人達に関わったものにしようと決めていた。

誰の為でもない。自分がそうしたいからだ。

不器用だなあ

カオルがそう言って嗤うような気がした。

しかし、カオル自身も、ダイと同じ類の人間である。

不器用な人生だからこそ、カオル・ヒビキヤは音の路を進んでいるのだ。

今年の日射は厳しいと言われていたが、本当に、その通りであった。

照り返しも強く、このままでは彼女は具合が悪くなってしまうかもしれない。

ダイは腹筋や背筋、持久力を高めるために、ある程度躰を鍛えているが、皆がそうであるとは限らない。

特に、彼女のように常に基礎練習を最優先させるような者は、暑さに弱い。

そして木管楽器は湿度にも温度にも気を配る必要があった。

だから、本当は彼女はこんな日差しの下には長居したくないと思っているはずだ。

それを越えて、こうしてダイと話をしているのは、彼女が本当にダイのことを惜しい人材だと思ってくれているからなのだ、と彼は思った。

人にそこまで思われることを幸せだと思う。

そして、そういう心根を育ててくれたのは、家族であり、家族と同じだけの年月を過ごしてきたあの人や、あの人に深く関わる人々が教えてくれたものである。

それから、ダイがこれまで出会った多くの友達からいろんな事を教わった。

彼女はまたひとつ、大きな涙を落としたが、俯いているので、どんな表情をしているのかわからない。

互いに楽器を持っているので、どうして良いのかわからなかった。

陽の光でさえ、音が出ているような気がする。

じりじりと焦げ付くような強い日差しは、音を発している。

すべてに、音がある。

彼は、音楽という路以外で、彼の音を奏でようと思ったのだ。

それを賛成してくれる人はまだごく僅かであった。

でも。

誰に理解されない孤独な路であったとしても、彼はそれでも進むつもりであった。

彼しかできないことがある。

それは、あの人が・・・あの人が一緒にいようと決めた人の影と光を同時に担うことを決めたということを忘れないで憶えていることである。

それはとても難しいことなのに。

ダイには、とうていできそうもないことなのに。

あの人は・・・笑ってそれを為し遂げてしまうのだろう。

たとえ、どんなに苦しくても。

理由はごく単純だ。

ダイは他の者に、ダイの場所を譲りたくなかった。

だから、音楽を捨てることになったとしても、彼は後悔しない。

誰にわかってもらえなくても。

涙を手の甲で拭う彼女の前で、彼はただ無言で立ち尽くしていた。もし、あの人があったのなら、どのような言葉をかけたのだろうか。

◆13

ダイは強い日差しの中で今一度、肩に提げた荷物の重さを確認するかのよう腕を僅かに動かした。

長居をさせてしまっは、目の前の彼女に負担がかかる。

そういう風に、周囲のことを考えてしまうダイは自分自身に苦笑した。

あの人と一緒に居るときには、そんなことは考えない。動き回る落ち着きのない人を追いかけるだけで周囲を見る余裕はない。

けれども、彼はいつも文句を言いながらもそれを楽しんでいる。

「ああ、もう行こう」

ダイが優しく言うと、彼女は雨粒をまたひとつ、落とした。

上を見て、ダイの表情を確認することもなかった。

目を合わせてしまえば、それが確定になってしまうと思っっているかのように、頑なに下を向いている。

・・・彼女はややあって、頷いた。

ここで立ち往生していても、何も始まらないし何も変わらないのだと知っているからだ。

そして、彼女もダイと同じように、常に持ち運ぶ自分の分身とでも言うべき楽器を気にしている。音楽を続けていくとは、そういうことなのだ。

ダイはどんなことがあったとしても・・・借り受けた楽器を放り出すことはしないだろう。理性が吹き飛ぶことが素晴らしいことでもないし、情熱の証でもないことをダイはよく知っている。

彼は彼の秘めたる想いを抱えて、そして今とは違う路に行くという決断をする勇気を持って・・・今訪れているひとつひとつの季節をそれで最後にしようと思っている。

「・・・梅華さんは、哀しむと思います」

彼女は、切れ切れにそう言った。

ダイは苦笑いして彼女に答えた。

「ウメはきっと・・・『成果を見せてみる』って言うと思う」

梅華は厳しい。他人にではなく、自分に厳しい。だから張り詰めた空気が人を畏縮させることもあるけれども。彼女は何より音楽が好きで、毎日毎日努力し続けている。

それでも、叶わないことを知っているし・・・ダイにはいつも彼がその先で立ち止まった時に考えさせられる言葉を予言のように告げる。

それは、彼女が通ってきた道なのかもしれない。

「彼女を・・・失望させないように、頑張らないといけない、と思っているよ。何より自分自身が失望しないように」

ダイの言葉に、彼女は顔を上げた。

涙で目が赤くなっている。でも、彼女はいつも穏やかで、そういう顔を見せたことがなかった。

「・・・ダイさんに失望されるのだけは、嫌だなあ」

彼女は最後は幼い口調で言い切った。ダイは唇を引き締める。

惜しんでくれる仲間のことを思うと、彼には後悔している余裕などを得ようと思っただけではないのだと思った。ただ、走り続けるしかないけれども、それは遠回りであるかもしれないけれども

。

でも、振り返るような時が訪れるとしたら。

やはり、この時期を一緒に過ごした仲間達のことを思い返したい。

「じゃ、お互いに頑張ろう」

彼女は何か言いたそうな顔をした。でも、それ以上は何も言わなかった。

どうして彼女が梅華の話を持ち出すのか。なぜ、音楽を捨てないで欲しいと言いつつ募ったのか、本当のところはダイにはわからない。でも、肌で感じるものがあった。

彼女は、溢れそうになったところで自分を押しとどめたのだ。

それを言う事によって心が晴れやかになるのは、その一瞬だけのことだ。

きっと・・・きっとその次はないと思っているから。

それはダイも同じであった。

あの人には何も言わない。思っているだけなら自由だとは思わない。だから、ダイには自分ができることをし続ける。自己満足であるかもしれないけれども、あのだけではなく、あの人のまわりにいる人々も好きで・・・離れたくないから。

やらない後悔よりやってしまった後悔を選ぶことが多いけれども。

これだけは・・・言わないことで良かったのだ、と思いたい。

いつか、言う日が来るかもしれない。

けれども、それは「今」ではないのだから。

彼女はすぐに笑顔になった。

まだ、目尻に濡れるものがあったけれども、彼女はそれを太陽光に預けることにしたらしい。

拭き取ることもせず、自分の荷物を持ち直した。

ダイと同じ仕草だった。

何もかもが違うとは思わない。

彼女は、彼に似ている。

お互いに、お互いが大事にするべきものを抱えている。

それは同じだった。

彼らは、似た者であるな、と感じた。

「私はここで車を待たせているので」

「長く引き留めてしまった」

「いいえ、こちらが引き留めたのです」

そして彼女は明るく言った。

「みんなの憧れのダイさんを、これほど長く独り占めしたのは、この夏では、私が最後ですね」

ダイは頷いた。憧れ、と聞いても他人のことを言われているような感じがする。

けれども、そうしてはいけない人を独り占めすることへの後ろめたさと僅かな喜びを、彼も知っていた。

◆14

彼女が満足そうに、深呼吸をした。

きっと、これからまた泣くのだろうなと思ったけれども、そこで声をかけてしまったら自分の決心がとても脆弱なものになってしまうと思った。

でも、どうして良いのかわからない、というのは正直なところであった。こういう時に、うまい言葉が見つからない。どういう風に振る舞えば良いのか、わからない。

「暑いですね」

彼女は、最後に言った。額には汗が浮かんでいた。

普段外に出ない生活をしているのであれば、この日射はかなりきついだろう。

ダイは周囲を見回して、どこかで休ませるよりもそのまま帰した方が良さそうだと判断する。

急激な寒暖の差は、楽器には良くない。今、かなりぬるまった楽器を急冷させてしまうような場所に駆け込むのは得策ではなかった。

「送って行くけれども」

「いいえ、お気遣いありがとうございます。でも、車を待たせているので」

彼女は丁寧にダイの申し出を断った。

しかし、すぐに自分の言葉が足りていないことに気がつき、顔を上げた。

「乗っていきますか？」

「いいや」

彼は首を横に振った。

「ひとつだけ、お尋ねします」

聞いてよいか、と彼女は許可を求めなかった。

僕は彼女を見つめる。

きちんとした印象の人だった。それでいて、柔らかい空気を持っている。こういう人が、あの集団には必要だった。

決して自分を誇示することはないけれど、個性が強すぎて和が成立しない仲間達の中で、彼女を通して皆が一枚、薄皮を張って相手とぶつからないようにする。

トップ奏者は、独奏できるから素晴らしいのではない。

低音があり中音があり、他者の音に合わせることができるから素晴らしいのだ。

そして、そんな個性豊かなソリストに合わせることでできる者も同じくらい素晴らしいとダイは考えている。

決して自分が目立つことはないけれども・・・それでも、その人がいなければ良音が出ないと言い切る梅華には必要な人であった。

ダイと重なる和音については完璧だった。

いつも音程が崩れず、それでいて涼しげで時にはあたたかい。こういう気温の変化でさえ、彼女は自分の音楽に取り入れてしまう。それはもう、技術というより気質によるところが大きかったが、彼女はそういう風に音を出せるように重点的に練習をしているのだろうと思われた。

「・・・その人、なのですか」

言わないだろうと思ったことを、彼女が言ったのでダイは息を呑んだ。

しかし、それは極限まで抑えた質問であった。

誰がどうであるということは、何も言っていない。

今までの会話の中で、梅華ではないことは察したのだろう。

けれども、具体的に聞くことはしなかった。どこの誰、とは聞かない。

それでも、それで・・・ダイが誰かを決めてしまっていることも、誰にも言うつもりがないことも、察知していたのだろうと思う。

彼女はそういうところが聡い人だと思った。

全部を言わないのに、言葉や態度で相手の心の動きを読むことが出来る。素晴らしいと思うが、ダイはそれが自分に向けられるとは思わずに少しばかり困惑した顔を見せてしまう。

しかし、それが最後の質問になると思った。

彼女はあまり質問をしない人であった。木管ミーティングの時にも、あまり質問や発言をしない。けれども、彼女はいつもの確であった。疑問に思わないということではなく、きちんと理解しているのだと思っていたし、梅華もだからこそ安心して彼女に任せていたのだろうと思われた。

かなりの間を置いてしまう。

ダイは、言うべきかどうかかなり悩んだ。

しかし、決める時は一瞬だった。

この人は、誰にも言わない。そう思ったからだ。

熱い風が、彼らを撫でるように流れて行く。

夏の風であった。しかし、湿り気は少なく、目を閉じればそれほど不快な温風ではなかった。

彼女のはじめての・・・そして最後の質問であった。

それをダイは、逸らかしたり拒否したりすることはしてはいけないと思った。

誰にでも、「その時」というものを決める瞬間がある。

だから、このことに関してだけは「その時」なのだと思った。

「うん」

ダイは、頷いた。

「私の・・・私だけの秘密にして良いですか」

「ありがとう」

彼女の申し出に、ダイは感謝を捧げた。

彼女は慌ててダイの目の前で手の平を振った。

「私の我が侘です。私の・・・」

そこまで言う前から、彼女も厳かに姿勢を正して、綺麗に頭をさげて、礼を述べた。

「ありがとうございます」

その時を待っていたかのように、突然、熱風が逆巻いたように感じた。
自分に向かって大きな風が近寄ってきた、と思った。

確かに、それは間違いではなかった。

大股で近寄ってくる人の気配を背後に感じた、と思った時にはもう遅かった。

振り向くほどの余裕はなかった。

けれども、殺気にも似た、抗えない気配が近付いて来る。

あっと彼女が顔を上げて声を出した時にはもうそれは止めることができなかった。

がつん、と頭の上に何かが降って来て、彼の後頭部が震動する。

半歩前にのめり、彼女の小さな悲鳴と、そしてそれでも自分が体に近接させている楽器を庇って体を丸めたのは、同時であった。

あっ、と思った時には、彼は肩を掴まれていた。

背中に、自分よりずっと背の高い人の影を感じる。

足元にはダイでも彼女でもないひとつの翳が黒々と映し出されていた。

少し近付いた彼女からは、困惑と驚愕の声が漏れていた。

でも、大きな悲鳴にならないのは彼女がそれを抑制しているからだ。

殴られた、と思ったけれど。

それは、彼に対する悪意があるものではなかった。

誰が近付いて来たのか、ダイにはわかっていたから。

だから・・・彼はわざと、ゆっくりとその人を見上げる。

「・・・何だよ」

不機嫌そうな顔をしたその人を見上げた。彼との目線の差は年々縮まってきている。でも、大きな、という印象は今でも残っていた。

短く整えられた髪に、張りのある肌。全身が引き締まっていて隙がないと感じるのは、彼が武道の鍛練を今でも怠っていないからだ。

鋭い目付きであるが、決して冷淡であるということではない。

若くして、この地域では旧家として知られる家の当主になった。

家族はいない。彼がどんな悲劇に遭ったのか、聞くだけしかできないけれど。はっきりと本人の

口から聞いた内容は、それほど多くはなかった。

あの人を介して知ったダイのことを、とても可愛がってくれているし、体力がなければ何事も成
就できないという考えである彼の元で、幾度か武道の指導を受けた。

今でもそれは実践している。音楽というものも持久力が影響することを知って、ますます彼の教
えてくれた内容を重んじるようになった。

・・・こうして毎夏訪れる短い夏の滞在を、ダイは心待ちにしている。

なぜなら、その時だけは、ダイは大人になることを強制されないからだ。

あの人と一緒に童心に戻り、そして花火を見て、夏の祭りを楽しみ、広大な私有地で遊びに興
じる。

それが永遠だとは思っていないけれど。

でも、もう少しだけ・・・そんな空間を用意してくれている、甲府の若い当主様に甘えていたい
とっていた。

今夏も同じだ。

今後の予定を思い返す。

確かに、合宿が終了した後、この駅前で合流することになっていた。

そして・・・ダイが到着時刻を知らせており、迎えを待つことになっていたことを思い出す。

弾上藤一郎宗景静香という長い名前を持つ彼は、酷く不機嫌だった。

怒りを含み、ダイを見下ろしている。間もなく彼はダイを見上げることになるかもしれないけれ
ども。

それでも、その人の存在は、どれほど経過しても、ダイがどれだけ成長しても、大きいままであ
った。

彼は簡単な外出着であって、雑踏の中に紛れていたのなら、それほど風変わりな格好ではなか
った。

けれども、その風格があまりにも周囲と違っていて、目立つのだ。

ダイと彼女の出で立ちも、目立つと思う。

必要以上に大きな荷物を肩から提げて、それでも手慣れた様子で決して床に落とすこともない
様は、異質に映るらしい。

けれども。

静香の様子は、まったくそれとは違っていた。

たまに見かける不思議な光景、というものではないのだ。

彼はそれでよく当主の仕事を進められるな、と思うくらいに。

大変に、目立つ存在だった。

実際、彼がダイの傍に立っているだけで、周囲の者はちらちらとこちらを見始めている。

「泣かせるな」

それで、彼がどうして憤慨しているのかわかった。

◆16

ダイはしばらくの間、驚きで声を失っていたが、やがてその場の状況を把握した。ここで彼と待ち合わせをしようと約束したのは、他ならないダイであったからだ。用事があり近くまで行くことがあるので、そのついでにダイを同乗させて行くという予定を組んで貰った。

愁いを含んで少しつり上がり気味の涼しげな瞳に、上品な額がよく見える短髪に、意志の強そうな眉、清潔感のある口元。

・・・昔から変わらない。

この土地の事情に詳しい者がいたら、すぐにわかるだろう。

彼が、誰なのか。

彼は憤慨を隠そうともしないで、ダイを見ていた。

ダイは首を竦める。

この人物を怒らせると相当に宥めるのが大変だということは承知している。最も、白金の髪の毛の「ガイジン」よりかはずっと意思疎通ができるけれども。

しかし、ダイは彼を怒らせたことがなかった。

専ら宥める側であったので、今回ばかりは身を竦ませる。

何しろ、彼はかなり腕が立つのだ。

彼が本気になったらダイなどはひとたまりもないだろう。

何しろ、筋肉の付き方からして違うのだから。

ダイも背筋や腹筋を鍛えてはいるが、武術を体得するためのものではないから、毎夏、この人物に呆れられるのであった。

「もっと食え」と言われて苦笑いするばかりであった。

彼は時々、彼の年齢よりずっと年嵩の者のようなことを言ったりする。

ダイの事を、彼らはいつもこども扱いする。

それは、彼らがダイを通して、昔の彼らの時代のことを見ているからなのだろうな、ということはわかっていた。

重ねて託していることもあるのかもしれない。

でも、それは決して重苦しいものではなくて、ダイはそれらの思いを息苦しく迷惑であると受け止めることはなかった。

「あ・・・」

ダイが狼狽していると、静香は険を含んだ顔をダイに向ける。

「人目のあるところで、何をやっている」

それで、ダイは気がついた。

ああ、そうか、と思った。

彼は若い時に、妹を亡くしていた。

目の前の彼女よりも少し幼い頃だろう。でも、静香には重なって見えるのだ。

母を亡くし、父が行方不明で心細い気持ちになった妹を支えるために、彼は気丈に振る舞っていたという。

そして、彼の目の前から突然なくなってしまった妹のことを・・・思い出しているのだろう、と思った。

だから彼はいつになく激昂しているのだと思った。

しかし、それでも怒鳴り散らしたりすることなく、憤怒を抑えている様は、あの人に言わせれば「おとなになった」というところなのだろうか。

ダイを張り倒すのではなく軽く小突く程度で制御するとは、確かに彼はかなり自制している。

目の前の彼女はしばし呆然として、その光景を見ていた。

涙はとっくに止まっており、そして静香とダイの顔を交互に見遣っていた。

「謝れよ」

「ごめんなさい」

ダイは勢いに急かされて反射的に言葉を出したが、彼は嫌そうな顔をした。

「オレじゃない。彼女に、だ」

そして顎を軽く上げる。

腕を組んで仁王立ちになっている彼が見下ろすと、相当に迫力があつた。

まだ若いのが、すでに長い期間、弾上家の当主を務めている彼からは風格という名前の気が立ちこめている。

「あの、私は大丈夫ですから」

「そういう問題ではないだろう」

名乗っていないのに、静香は彼女に横柄に言った。いつもの彼の対応であるが、彼女は畏縮しているのは明らかであった。

ダイは状況を把握しようとして、周囲を見回す。

遠くで、黒塗りの車が陽光を受けて眩しく反射していた。

彼も知っている弾上家の車だった。

長い時間止めておける場所ではなかったから、先ほどやって来たのだと推測する。

しかし、静香が炎天の中、ダイを呼びにやって来るというのも疑問であった。

車の運転手を呼びに寄越すのではないのだろうか。

彼はそれだけの使用人を多く抱える屋敷の主人なのだから。

よく見れば、涼しい顔をしているが静香はつい先ほどここにやって来た、というわけではなさそうであった。

彼が険しい顔をして「泣かせるな」と言っているのは、その様子を見ていたことになる。

ダイは頬が熱くなるのを感じた。

・・・見られていた、と知ったからだ。

◆17

静香の顔を見て、彼女は顔を赤くしていた。確かに、涼やかな面立ちの年上の青年が突然現れたのだから、驚き対応に困ってしまうのは仕方の無いことだと思われた。

けれども、静香はダイを軽く睨む。

「・・・このお嬢さんの実家にはいろいろと世話になっているからな。礼を欠くことはするな」

「どうして・・・」

どうして、彼女のことを知っているのだ、と言おうと思ったが言葉にならなかった。

ダイは慌てて振り返る。

長く止められないと思った場所に、弾上家の車が停車しているが、どうして自分がそう思ったのかということを思い出したのだ。

その後ろに、同じ様に、誰かと待ち合わせているような車を見かけたからだ。

後方の車が出るためには道幅が少し足りないように思ったから。

だから、自分を待っているのであればはやく出なくてならないな、とダイは無意識のうちに思ったのだ。

確かに、彼女は言っていた。車を待たせている、と。

そうか、と思った。

静香が用事があると言ったのは、このことであったのか。

確かに、夏の時期、彼は何かと忙しい。加えて、ダイ達が複数人で屋敷を訪れるものだから、彼は相当に準備に配慮しているのだろうと思われた。

「用事って・・・」

狼狽えたような声で言うので、静香は鼻を鳴らして言い放った。

「いろいろだ。ひとつひとつ説明する必要はない」

いつもながらの大雑把な説明であった。

ダイはそれでも更に尋ねる。

「彼女の家は、弾上家と知り合いだったのか」

「だから、それはもう言った」

「そうだけれども」

静香の前ではあっという間に少年に戻ってしまう。

なぜなのだろう。取り繕っても仕方が無いと思える何かが、彼にはあるのだろう。

すると、静香は彼女に向かって軽く目礼した。

「迎えが待っている」

「はい・・・」

彼女は大人しく、頷いた。ダイは、呆気にとられてその様子を見ていた。

彼女が弾上家と知り合いだというのは、今はじめて知った。

それは偶然なのだろうか。

「偶然ではないですよ」

彼女はダイに向かって、言った。

彼が不思議そうな顔をしていたからだろう。

もう、感情を揺らせて声を詰まらせる彼女ではなかった。

いつもの・・・彼の知っている彼女だった。

「甲府の弾上家というのは有名ですから。毎年、見かけていました。合宿の帰りにここに立ち寄っているのも、知っていました。だから、ダイさんが縁者の方なのだと知っていました」

「どうして言ってくれなかったの」

ダイは驚いて言った。確かに、彼女の実家はここである。知らないはずはないだろうし、このような日中に「迎えが来る」と言っているくらいであれば、彼女はかなり・・・ダイの生活とは違うような日々を送っているのだろうと予想することもできたはずなのに、まったく思いつかなかった。

「そういう特別が欲しかったわけではないから」

彼女の言葉にダイは何も言えなくなってしまう。確かに、彼はそれを聞いて彼女への対応が変わるとは思わなかったし、彼女もそれを期待していたわけではないだろう。

だから。

静香と彼女が名乗らなかったのは、ダイの失態を咎めることを優先とさせたわけではなく、互いに名前くらいは見知っている間柄だったからだ。

すると、彼女はそこで笑った。

「ダイさんのそういう顔が見たかったのかもしれない」

彼女はそれだけを言うと、今度は静香に向かって頭を下げた。

「お引き留めしてしまいました。お時間をいただきありがとうございました」

「よくできた子を持って、会長も幸せだろうな」

「ダイビングクラブの後援の件では御礼申し上げますように、と父が・・・」

「新堂の墓参りでは気遣いに感謝する、と伝えてくれ」

そこまで言うと彼女は啞然としているダイに気がついて、話を切り上げた。

そして肩を竦める。

「いところが会長をしていた、愛好者で作っていたダイビングクラブの存続に尽力してくれたのが、彼女の父君だ」

ああ、そうか、と思った。

彼のいところは市内に住んでいて、妹の逝去と同じ事件に巻き込まれたということを聞いていた。

「新堂は・・・いところは、まだ若い会長だったから、設立当時から尽力してくれた」

それだけ言うと、静香は遠い眼をした。故人を偲んでいるのだろう。

ダイビングか。なるほど。彼女がどうしてあれほど低音を出せるのか、理由がわかったような気がする。これほど小柄でありながら肺活量が平均以上であるのは、彼女もダイビングなどで鍛えているからだ。だから安定した音を出せる。

梅華が言っていた「彼女の音はいつも一定しているから合わせやすい」というのは、こういう理由からだったのか、と唸った。

◆18

彼女は、ダイに向き直ると、改めて礼を言った。

「ありがとうございます。楽しい時間でした。それから・・・お元気で。また、来年もここに来てください」

そして静香にも簡単な挨拶を済ませる。

彼女は何かを思いきったような顔をしていた。

それじゃ、と彼女が言った。

ダイは、ああ、と頷くと、静香とダイをすり抜けて行ってしまいう小柄な彼女の背中を見送った。

「何だか、似ているな」

ぽつり、と静香が腕を組みながらそう言ったので、ダイはそうだね、と曖昧な返事をした。

誰に似ているのかは、もう聞かなくてもわかっている。

誰を思い浮かべているのかも、わかっている。

「全然、違うよ」

ダイは言った。誰かと比べることなんてできない。

あの人のことは、誰かに似ているという表現では表すことが出来ないのだと思う。

そして、彼女も同じだ。あの人に比べたとしても、彼女は彼女であることに変わりがない。

「そうか」

静香は低い声で頷いた。彼も、ダイと同じことを考えていたように思う。

けれども。

あの日々を懐かしいと思っていることは間違いなかった。

戻りたいと思っているのかどうかは・・・わからない。でも、彼は決して自分の過去を正当化したり神聖化したりすることはないのだろうと思われた。

それから、ダイは決まり悪そうに、彼を見上げた。

「最初から、知っていたの？」

「何を、どう、知っているのかな」

静香の逸らかし方から、ダイにそれ以上は回答しないのだという意志を感じた。彼はいつも真っ直ぐで、駆け引きは行わない。けれども、この時だけはダイと彼の間にはやんわりとした境を引いた。

「ただ、オレはダイを迎えに来ただけなのに、何をむくれている？」

「だって」

彼は幼い口調で言った。先ほどの、彼女に教え諭していた彼とは違った表情を見せる。どちらもダイであった。人によって態度を変えるのではなく、彼の前に居ると、隠し事は出来なくなってしまうからダイは困惑してしまうのだ。

「・・・頼まれてくれ、と言われたわけではないぞ。たまたま、打ち合わせをしていた時に、互いの話をしてみたところ、同じ場所の同じ時間に待ち人がある、ということがわかった。それだけだよ」

果たして、そうだろうか、と思った。

いつもの彼なら、どこに居ても、誰と話をしていても時間が来れば姿を現す。けれども、今回は割って入るようなことはしなかった。

・・・それは、ダイが区切りをつけるために、ここでしばし足を止めることを・・・何かしら話を持ち込まれることを見透かしていたのではないのだろうか、と思えるのだ。

しかし、それを口にすることはないのだろう。

「何だか、いつになく説明が多いな」

ダイが言うと、静香は笑った。

「お前も、いつになく生意気だぞ」

「だって」

ダイはそこまで言ってから、彼の視線の向こう側に停車していた車が出て行く様子に気がついて、それを見送るまで黙ってそこに立ち尽くしていた。

彼女が車に乗り込むまでの間を見送ろうと思ったのに。

静香との話に気を取られていて、彼女の姿を見失ったままになってしまった。

でも、それで良いのだ、と彼女は言うだろう。

大事な、仲間だ。

またいつか、どこかで再会することもあるだろう。

そして、その時には笑顔で再会を喜ぶことができるように。胸を張ってそれまでの自分を語れるように。ダイは、これから今まで以上に努力しなければならないという気構えを湧き起こらせた。

どちらも選ぶという器用さは、ダイにはなかった。

けれども。

選ばなかったことを後悔しない、と決めた。選んだことを後悔しないのと同じように。

それでも、きっと、懐かしく思う時があるのだろう。

毎日が走って行くだけで精一杯だった。だから、まわりが見えなかった時もある。

梅華や彼女の情熱と、ダイのそれは違う方向に向かっている。

でも、それは悪いことではない。決して、哀しいことではない。

誰かを満足させるために生きているのではない。でも、ダイだけが満たされていればそれで良いとも思えなかった。

「泣かせてしまったことに対して、ダイは、いつかきちんと返せよ」

借りとか貸しとかいうことでもなく、静香は、まだ、彼女に涙を浮かばせたことに対してダイへの感情を波立たせているのだと思ったので、ダイはうん、と大きく頷いた。

「謝るのは簡単だけれども、彼女が泣いたことを後悔させるなよ」

「わかった」

ダイはもう一度、強く頷く。

◆19

静香はそれを横目で見、そして断言した。

「女を泣かせる男は最低だ」

「男女は関係ないよ・・・誰かを傷つけることに平気になってはいけないんだ」

ダイの反論に、静香は涼しげな目元をさらに細めた。

眩しそうであった。

しかし、ふたりに同時に浮かんだのは、あの人を傷つけないという気持ちで、それは共通していることなのだとダイは思った。

先ほどの彼女と同じような背格好の、とても小柄な人物。

幼い顔立ちの、あの人はいつも誰かのことを心配する割には、いつも彼女のことを心配する人物が後を絶たない。

嬉しいけれども、それは少し哀しい。独り占めできないほどに彼女が誰もから愛される人物で、そんな人物を心に秘めていることが誇らしいのに。

「荷物はどうする」

体力をつけるために、荷物を持ってやることはしない、と前に宣言されて以来、その言葉を実行し続けている静香に向かって、ダイは首を横に振った。

「珍しい」

本当に珍しいことだ。

「炎天下の下の長話は疲れただろう」

「どうして長話ってわかるんだよ」

ダイの言葉に、静香は肩を竦める。

彼はこれほどの熱射の中に居たとしても、少しも乱れた風はなかった。

そんな彼に「炎天下」と言われて、ようやく自分の身体がだいぶ暑さで疲弊していることに気がつく。

「オレも遠慮できるくらいに年を取ったということだよ」

まだ若いくせに、とダイは呟いたが静香はそれを無視した。

「大丈夫。まだ、持てる」

ダイは彼に礼を述べる代わりにそう言った。

これは大事な預かり物だ。重く感じるけれども、ぎりぎりまで自分の傍に置いておきたい。誰かに肩代わりしてもらおうわけにはいかない重さを感じながら、ダイは静香の背中を見た。

彼の短く切り揃えられた首筋には、うっすらと汗が浮いていた。誰にも気がつかないくらいであった。

でも。視線が近くなったダイには、それがわかった。去年のダイであつたら、わからなかっただろう。先ほど静香が彼のことを眩しそうに目を細めて見たのは、ダイが前回に会った時よりも背が伸びていたからだ。成長期という時期ではなかったが、確実にダイの体は変わっていつている。

それでわかった。

最初から、居たんだな、と思った。

到着時刻は知らせてあつた。朗らかで何事にも拘らない人物に見えるけれども、人との約束事にはとても厳しい人である。

時間通りに来ていれば、一部始終を見ていたのだろうと思われた。

「・・・彼女はそんなんじゃないよ」

ダイは静香の背中に声をかける。茶化したり囁いたりすることはないだろうが・・・ダイが、説明しておきたかつたのだ。

「なにが？」

振り返りながら、静香は生真面目な顔をして言った。

この土地で育っていない時間があつたのに、彼はすでにこの土地の人になっていた。

溶けてしまいそうなほどに熱い空気を纏いながら、それでも涼しそうに泳ぐように歩くその人の足捌きは軽やかだった。武道の達人だからこその足の運びは流れるような美しさを持っている。

陳腐なことを言ってしまったと思ったけれど。

それでも、皆に報告するような内容ではなかった。特に、あの人には聞かせたくない。

「僕には、やりたいことがあるんだ」

それ以外に、言い募る言葉を知らなかった。

ダイの年代の者がよく使うような、恋愛に関する言葉をダイは使うことが出来ない。

軽く言っただけのけることができるのであれば、最初からそうしている。

あの雪の日に叫んだ言葉以外の思いは、すべて呑み込んで彼の血肉になっている。

「そうか。今のお前は、やりたいことをやっていないわけじゃないだろう？」

「うん」

ダイはまた頷く。今までの自分が後悔すべきものだから、軌道修正するというわけではない。きっと、この期間を経ていなければ自分の路はわからなかつただろう。

だから、これで良い。そう思ったから、口に出すことができる。

「これから大騒ぎだな。・・・皆を説得させるのは、たったひとつの方法しかない。お前が、結局のところはそれで良かったのだという結果を出すことだけだ」

「わかった」

わかっているよ、とは言わない。どれほどまわりの皆が彼のことを案じ、忠告し、そしてこれからだという未来を捨てるのかと疑問を投げる。でも、ダイはそれらについて耳を傾けて、そして誠実に対応していくことが、自分のできることだと思っていた。

これほどの人間から声をかけられるとは、彼は恵まれている。そう感じることはできるのは、あの人がいるからで・・・ダイが人を大事にすることをあの人が教わったからだ。

いつか、泣かせてしまった大事な仲間にも、ダイが元気でやっていることを教えたいと思った。静香を通じて、話を聞くこともあるだろう。

彼が配慮するほどに縁のある人物であるのだとしたら。尚更であった。

ここは、ダイにとってはもうひとつのふるさとのようなものだ。

毎夏、ここで過ごした日々のことを忘れない。

辛くて厳しい合宿の後に訪れる静かな時間。

次からは、少し違う。これが最後の夏になるだろうと思った。

次の夏には、立ち寄った先がこの場所、という順路ではなくなる。

◆20

彼は、青く染み渡るような夏の空を見上げて、顎を上げた。

強くて眩しい日差しが少しだけ柔らかくなったような気がする。

届かない想いを空に還しているかのように。静香は、切ないほどに涼やかであった。

ずっと昔から知っているのに。

彼のそんな背中を見て、ダイは切なくなった。息苦しい。そして・・・思いはずっと届かないままであるのに、それでも後悔しないで生きている彼のことを、ダイはずっと見つめ続けていた。だから、ダイのことも理解していない静香ではないと思う。

・・・思えば、こうして彼のことを見つめながら自分のことを考える時間はなかつたのだな、と

ダイは思う。

大人なのに。

ダイより、ずっと年上なのに。彼らは、まだ模索している。

きっと、ダイも彼らの年齢に達しても迷ったり悩んだりするのだろう。

でも。

共通していることがある。

あの頃に戻れたら良いのに、と思うことはないのだということだ。

過去があるから現在がある。

過去に戻ってやり直しても、きっとここに行き着く。

そう思っているから・・・彼らは、いろんな愁いを乗り越えて生きているのだと思った。

すべてが自分の思い通りに運ぶとは限らない。思わぬ出来事に惑い、余裕なく対処し、そしてそのことを悔やむ時が来るだろう。でも、今は変えられない。

変えられないから、今が未来に続いている。

そういうことを教えてくれたのは、夏になると静香の家に集う人々からであった。

彼の背中を見ながら、ゆっくりと従って歩く。

肩の荷物の重さは痺れに変わっており、どこか心地好かった。

誰かに頼らずとも、自分で持ち運ぶことが出来るようになって、ダイは嬉しかった。

託された重みが苦痛に感じることはなかった。痺れはいつも甘い疼痛でしかなかった。

それだけが・・・彼だけが持っている重さだと知っているから。

だから、そう感じる。

同じ様に、目の前を歩く短髪のこの人にも、彼だけしか持っていない重さがあるのだと思う。それから、目の前に突然飛び込んで来た、彼女にも。そして、話に出てきた梅華にも。・・・勿論、茶色の髪のある人にも。

ダイは、彼と歩調を合わせるために大股で歩いた。

彼の妹と同じくらいの年齢の彼女を見て、静香が何を思ったのか、想像できた。

でも、互いにそれを言う事は無い。永遠に少女のままの面影しか残さなくなってしまった妹のことを、彼がいつまでも記憶に留めておこうとしていることを知っていた。

あの人を見ると・・・昔と殆ど変わらない容姿のあの人を見ると、静香は時々目を細める。

さっきの仕草と同じであった。

それは懐かしいからではない。

・・・「そうしない」と決めたことをやってしまいそうになるからだ。

昔に戻れたのなら、彼女を守ることができたのなら・・・そういう思いを繰り返し思い返すからだ。

けれども。

ダイは、足を止めた。

彼とダイを待っている車に向かって、静香が迷いもなく足を進めている時。

ダイは気がついた。

彼が、どこにも立ち寄ろうとしないで、車に向かっていることを。

目を見開き、彼は静香を待つ車に目を懲らした。

特別な者を迎えるための車両というものは、ひとめでわかる。

・・・カオルが普段使っている車も、同じ様な様相であったからだ。

乗っている人物が見えないように細工されて、それを誰も咎めない。

乗っている人物は、不用意に外を見ることもないし、唇の動きを読まれるようなこともない。

景色を眺めることもない。そういったことを目的としているわけではないからだ。

ダイが立ち止まって啞然としている気配を、背中で感じ取った彼は、同じ様に静かに動作を止めて、そしてダイを振り返った。

短く揃えた髪、厳しそうな、つり上がった冷涼な瞳や・・・引き締まった頬から背中までの線はすべてに無駄な曲線は存在しない。

「・・・来ているの？」

ダイは、驚きながらそう言った。それだけで、すべてが足りた。

背筋に、汗が走る。

すると、目の前の大人の男の人は、ダイに向かって無情な事実を告げた。

「車で待っている」

あっ、と声を出しそうになった。

静香が迎えに来るというのは、余程のことだ。

ダイにはいつも厳しかった。

だが今夏は少し違っている。

自分で辿り着けと言っていたのに、今夏に限っては迎えを寄越すと言った。

それは、ダイにだけに向けられたものではなくて・・・あの人の迎えも兼ねていたからなのではないのだろうか。

夏の催事で忙しいはずなのに。

ダイに同伴した彼女のこと、彼は夏の予定に組み込んでしまった。

◆21

「・・・来ているの？」

「自分で確認しろ」

静香の声はいつもと変わらない。

でも、ダイにはわかる。

その声が、少し優しい。

待っていた人を迎え入れた時の声は、誰よりも優しい。

そして、それが始まってしまったと思うことに軫憂を抱えている。

夏が、やって来てしまったと静香は思っている。

でも、一年のうちのどの季節よりも、この時期を待っている。

ダイにはそれを感じることができる。

説明されたこともないし、彼が説明したこともなかったけれども。

彼がこうしてダイを待つこと以上に大切にしているものがある。

それは、あの人の到着を待つことだ。

知らせる時もあるし、そうでない時もあるという。

でも。

ダイよりも、ずっとはやく最初に弾上家に到着するようにやって来る彼女がここにはいないのだという理由は、ダイには思いつかない。

しまった、と思った。

ダイに同行していた彼女よりも前の位置に停車していた車が、なぜ、「前」に停車しているのかまったく考えていなかった。立場の違いなどではない。

先に、迎えたい人物がやって来ていることが前提であったからだ。

ダイよりも前に、ここに降りたって・・・そして、ダイの到来を待つことが出来る人物はたったひとりしか存在しない。

フランスの華であるのなら、列車ではなく自分で交通手段を用意するだろう。

人と交わることが何より嫌いな人なのだから。

待つことも嫌いなのに。

フランスの華は、彼のファミ・ファタルのことだけは、呆れるくらい気の遠くなるような長い年月を待っている。

そして、静香も。

彼は毎夏、この時期が訪れることを予定に入れている。

最も囂（かしがま）しい時期を、彼は心待ちにしている。

目を懲らせば、後部座席に人の気配を感じるが、それは・・・

ダイはぐっと声を呑み込んだ。それから、静香に向かって声をかける。

嫌な予感がする。とても、嫌な予感がする。

「いつもは、そんなことしないのに」

思わず、口に出してしまう。

静香もそうであったが、あの人も静香を迎えに来させることもなかったし、ダイを迎えに来ることもなかった。

なぜ、来ているのだろうか。

「ついでだ」

素っ気なく静香が言ったがダイは更に踏み込んで尋ねた。

「『ついで』？」

「そう」

彼は少し怒っているようにも見える。

いつも無愛想で、あの人とは大人同士なのに、本気で喧嘩している。

ダイは慌てて彼の隣に並んだ。汗が一気に噴き出してくる。

体が暑さを忘れていたようだ。でも、違う意味の汗も混じっているような気がする。

「今回だけは、迎えに来いと言い張るから。理由を聞けば『ダイを迎えるため』と言うだけで、何も言わない。あいつが体の良い理由で自分の交通手段を確保するのかと思ったが、毎年勝手にふらりとやって来るのに今回だけは違う」

ダイはそれを聞いてまた目を見開く。

そんな様子を見て、静香はダイのことをこどもだな、と言いたそうな顔をした。

「『最後の夏だから、迎えに行く』と言うから。・・・おい、変な顔をするな」
言葉とは反対に、彼の声音はどこまでも優しかった。

彼が違う路に行くことはすでに伝えてあったけれども。これが最後になるとは言っていなかった。合宿所までやって来たこともあったのに、彼女はここでダイを迎えるために、一足先にやって来て、彼を待ち受けることにしたのだとしたら。

・・・少し考えればわかることであったかもしれない。

でも、そこまでダイのことを考えているとは、ダイ自身が思っていないことであった。

そして、彼がどれほどこの夏のひとときを大事にしているのか、彼女はわかってくれたのだ。

静香は顎を上げて車の方を指し示した。

「あれこれ聞きたいのなら、車の中にいるあいつに聞け。オレは『仕事の話のついで』にここに立ち寄って『ついでに』あいつを拾って、そしてその次におまえを迎えに行くという予定を実行しただけだよ」

自分の意図はまったく関係しないという言い方は、フランスの華によく似ていたが、それを指摘すれば彼は面白くなさそうな顔をすることはわかっていたので、ダイは素直に頷いて感謝の言葉を述べる。

「ありがとう」

「そう言われているのは、今のうちだけだ」
歩きながら、静香が言ったのでダイは訝しげな表情になった。

◆22

背筋に、ぞわりと這い上がるものを感じる。
嫌な予感について、すっかりと忘れていた。

「ひょっとして・・・」

「ああ、ひょっとするとも」

彼は愁いを含んだ眼をダイに向けてにやりと笑った。

「今頃、冷房の効いた車の中で狂喜乱舞してスケッチブックを広げているだろうな。・・・少年少女の恋愛場面を描けないけれどもモデルがいないと歎いていたから」

あの人の名前を口の中で呟く。

嫌な予感は、これだったのか。

見られているという感覚は、気のせいではなかったのだ。それは、静香に見られているのではなく、もうひとつの視線があったのだと知った。

「眼が弱いくせに、こういうことだけはしっかり観察できるんだよな。

・・・さっきまで、暑い中で隠れておまえたちの一部始終を見ていた不審者が居たのだが。

・・・ダイはそれどころではなかったようなので、オレが迎えに来てやった」

「なんで・・・」

ダイが絶句していると、静香は整った顔を傾げて、ダイを見下ろした。

「なぜ、声をかけなかったか？・・・それは、これが畢竟だからだよ」

畢竟、という言葉の成り立ちを頭の中で思い浮かべる。

「『とどのつまり』？」

「いいや、これは・・・様々な経過を経ても、最終的にはそこに行き着く、という意味だ」

そして彼よりずっと大人の弾上藤一郎宗景静香は、大きく溜息を漏らす。

「ダイが、何をどう選ぼうとも、ダイが決めた場所に行き着く、という意味だ」

ダイは、ああ、と声を出した。

彼がどんな選択をしても、そこは畢竟なのだ。

「おまえが選んだことだから、それはどんな結論になっても、どんな場面でもそれは『畢竟』だということだ。・・・それを見届けようとした、と思ってやってくれ」

いつも喧嘩ばかりしているのに。

目の前の、短髪の涼しい目元の人、今日は・・・あの人の弁護をする。

最後の夏になるだろうから。でも、それを特別にしていまいたくはなくて、あの人は遠くで見守

ろうとしたから。前もってやって来て、ダイを迎えに来たのに・・・でも、声がかけれなかった。そういう切なさを感じ取ってやってくれ、と言われたような気がした。

畢竟か。

ダイは心の中で呟く。

結局は、とか。要するに、という意味であるけれども。どちらも「終わり」を表す言葉であった。そして区切りを表す言葉でもある。

・・・そうか。区切りなのか。

ダイは改めて、そう思った。この夏は、確かに彼の区切りであった。

惜しまれるのに、それを振り切って違う路に行くことを宣言した。彼はそれを後悔しないようにこれから生きていくことになる。

あの人になぜ、声をかけなかったのか理解しようとした。

だれかによって終わらせることではない。

・・・でも。

先ほどは、彼女によって会話が終わり、静香によって場面が終わった。

ダイは、まだこどもなのだと思います。

自分で打ち切ることのできない部分がまだあるから、あの方は声をかけなかったのだろう。

ダイはそこで呟れた声で、言った。夏の熱気が彼の喉を灼いているようであった。

「今年で・・・夕涼みのコンサートは終わりになるかもしれない」

「どうかな」

静香は微笑んだ。

「毎年でなくても良いさ」

ダイは顔を上げる。いつも、ここを訪れるのはダイが夏の合宿で近くまで来ているからだ。それがなくなってしまったのなら、ここを訪れる理由も口実もなくなってしまう。けれども、静香は来年を予想させる言葉をダイに告げる。

「それは・・・」

「オレは最後まで言わないぞ」

静香は威厳を保つように言った。けれども、それはどこかからかいを含んでいた。

「・・・また来ても良いということ？」

「さて、どうしようか」

彼は云った。

「毎年のことなのに、終わりにする必要はあるのか？少なくとも、あいつはそうは思っていないようだけれど」

ダイは言葉に詰まる。今年が最後になると思っていた。だから、ひとりで来るのが少しだけ怖かった。だから・・・だから、彼女が同行したいと言った時に、気が紛れると思って同意した。断

る理由もなかったということもあったけれども、何より、ダイがひとりで考える時間が長ければ、余計なことを考えて明るく過ごすことができないだろうと思っていたから。

◆23

そういう狭い考えを持つようになった自分が嫌だった。でも、ダイ以外の者は彼を受け入れてくれた。毎夏を一緒に過ごした仲間である彼女も。そして泣きながら声を出さずに涙を流した梅華も。それから・・・ダイの知っている、様々な人達も。

「狭いよ。・・・後で落ち合おうと言っておきながら」
フランスの華も、茶色の髪のある人も。
合流するはずであったのに、なぜ、ここで待ち伏せするのだろうか。
ダイの意志が働くことをどうして待ってられるのだろうか。

梅華のことを頼んだのは、ダイであった。

そしてその後・・・一緒に行動するかと思ったのに「後から来い」と言った。
カオルも、白金の髪のある人も。・・・そして、茶色の瞳のある人も。
ここにダイが降り立つことが重要だと言わんばかりであった。
どうしてなのか、ようやく、意味がわかった。
いつも通りという言葉は、通用しない。永遠は存在しない。けれども、それを終わらせるのはダイであり、それを続けるのもダイなのだと言ったのだ。

何だよ・・・なんだよ

ダイは何度も呟く。

そういう扱いがむず痒い。そして哀しい。でも、嬉しかった。

彼の夏について、理解している者がこれほど多いということを知って・・・泣き出したくなる。
ここは、彼の青春時代を過ごした場所だった。フランスの華が、青春の輝きの時代を懐かしく思うように。彼も・・・ダイも、この場所で過ごす時間が彼の中に決して消えない灯火となって輝き続ける。

どこで過ごしても。どれほど年月が経過しても。これまで過ごしたダイの日々は、決して消えない。

「・・・格好良く描いて貰わないと」

ダイは呟く。

車の中で彼がやって来るのを待っている人が、何を描いているのかは想像できた。

彼女の最愛の人のことは、うまく描けなくせに。

ダイのことを描こうなどは、100万年早い。そう言おうとしたけれども、喉に何かがつかえて

いて、今は上手く言葉にできなかった。

「売れないまんが家だからな」

静香がそう言ったので、ダイは笑いながら、そうだよな、と言った。

車の中で待っている人は、ダイと静香の憎まれ口はどう対抗するのだろうか。

それまで一緒にいた同年齢の仲間との間にあった出来事を彼女はどう解釈するのだろうか。・

・いや、そのことは聞かないのだろうと思われた。

人通りの多い空間であるのに、蝉の鳴き声が大きく聞こえて来る。

夏は、まだ終わっていない。

そう思えた。

これから先、何十年と変わらない日々を送るかもしれない。いや、きっとそうなのだろう。

でも、この夏のことを忘れない。

なぜなら、彼の「畢竟」の夏であったから。

終わりではない。終わりの先にある始まりを見つけた夏だから。

静香の背中を見つめながら、ダイはそう思った。

少し先の、車の中でダイの到着を待つあの人の影を見つめながら。

そして・・・彼の大事な仲間である、涙を零した彼女に礼を述べながら。

ダイは歩いた。

暑い日差しの中で。

溶けてしまいそうなほどに熱い空気の中を泳ぎながら、今宵は、どれほど疲れていても、もうそれで良いと言われるまで演奏してみせようと思った。

畢竟という夏がやって来た。

そうだ。

過ぎ行くのではない。

終わりではなくて、終わってはじまるのだ。

これからやって来るのだ。

少し歩くと、覚えのある車のウィンドウが開き、小さな手の平が覗いた。

ダイと静香に向かっている。

「ああ、面倒くさい女が引き連れてくる輩の相手をするのが・・・オレの役割なのかな」

弾上藤一郎宗景静香がそう言ったので、ダイは大きく笑って、肩の荷物を持ち上げながら答えた

。

声は弾んでいた。

青い空と、強い日差しと、何もかもがとけてしまいそうな風を感じながら。

「そうだよ。・・・畢竟するに、これは僕達の選んだことなのだから」

(FIN)

■01

ここ最近の世の中は、近隣住人との関係が希薄になっている、と言われてはいるけれども。ボクの住んでいる場所は、そういった「一般的なこと」があまり通用しない場所なのかもしれないと思っている。

確かに、昔よりこどもの数が減ったし、日中はとても静かだなと思うこともある。

公園もあるのに、そこで人を見かけることがないのは、ボクが日中学校に行っているからなのかもしれないけれども。

母さんが昔と比べて、という話をするのはわかる。

でも、あまり年齢の離れていない姉ちゃんが、まるで大人みたいな口調で「最近は・・・」とか「昔は良かった」とぼやくので、その時はボクは笑い出しそうになるのをぐっと堪えるので精一杯だった。

いつだったか、まったく備えをしないままに姉ちゃんが「最近の若い子は制服の着方がおかしい」などと言っていたので、自分だってそうじゃないか、と大笑いしてしまい、こっぴどく叱られてしまったことが今でも身に染みた教訓となっている。

「あんたも、もうすぐ制服着るようになるのよ。すぐに背が伸びて、気持ち悪いくらいひよろひよろするようになってしまうのだから」

姉ちゃんはそう言って、ボクを見下ろす。まだ姉ちゃんの方がボクより背が高い。でも、足のサイズが父親と同じなので、きっとずっと背が高くなるからね、と言って母さんは笑う。

そんな未来のことはいつになるのかわからないし、明日になってもやって来ないことはわかっているのに、ボクは曖昧に聞き流すことにしていた。

「いつか」って、いつのことを指しているのかまったくわからない。いつ、やって来るのかまったくわからないことを、ボクは心待ちにするよりも、毎日があっという間に過ぎてしまうことに夢中になってしまっていた。

そんなに慌てて大人にならなくても良い、と言われるけれども。でも、ボクは別に慌てていない。

慌てているのは周りだ。ボクが去年来ていた洋服が着られなくなってしまったことや、ボクの背中のランドセルが小さくて、電柱に蝉が止まっているみたいになってしまっていることや、その他もろもろ、なんでそんなことに注意して観察しているのかなあ、と思ってしまうくらいの出来事に大袈裟に感激している様子を見て、ボクはいつか自分もそう感じるようになるのかな、と思って見るけれども。

でも、その「いつか」もいつのことなのかわからない「いつか」なのだ。

日にちが決まっていれば、その日に向かっていろいろと準備できることも我慢できることもあるというのに。

それでも、ボクはここで生まれ育っているのに、他を知らないから比較することはできないものの、やはり、この近辺は何となく「昔ながら」の部分が割と多く残っているような気がする。

なぜかと言うと、ボクの家はアパートを経営していて、その家族構成とか状況に割と気を配っているからだ。これは大家であるボクの家の方針にも繋がっている。

困った時にしか手助けしないけれども、無関心でいるわけではない。

最近ではプライバシーとか個人情報の保護とか言っているけれども、ここのアパートは単身者が多いので、何か困ったことがあれば大家が面倒を見ることになる。

不動産屋や仲介業者に任せてしまえば良いのに、ウチは割と古風というか、新しいことを望まないでいつまでもやり方を変えない。

そういうところが良かったり悪かったりするのだけれども、経営が傾くほどではなかったし、この土地は田舎に引っ込んでしまったじいちゃんが代々受け継いできた土地だったりするので、遣り繰りが難しい時があったとしても、みんな鷹揚に構えて居て、そしてそれが通用してしまっているという摩訶不思議な場所なのだ。

そんなのんびりした家族の中で育ったものだから、ボクには焦りを感じないのだと言われる。

そして、家の手伝いをする代わりに小遣いを貰っている身なので、アパートの住人については結構顔を知っている方だった。

最近の住居事情ではそれは珍しいと言われている。

しかも、ボクはこどもだから、取り返しのつかない事件に巻き込まれたらどうするのだと忠告してくる大人が居る事もいるには、いる。

確かに、ここのアパートの人達にはちょっと生意気なこどもだと思われているのだろうと思うし、実際にボクもそう思う。

単身者が多いというのは、ここがあまり広くないスペースでありながらも都内にあって、ちょっと歩けば交通の便が良い大通りや駅に向かうことができるからだ。

ボクはここはとても便利な場所だと思う。

公園もあるし、学校も近い。

図書館も充実しているし、買い物をするにも困らない。

でもそれは、この辺の地域を知っているからこそなのだ。

実に便利な場所であったけれども、知らない人に見ればちょっと困った立地である。

アパートそのものは家族で住むには狭い場所だし、部屋数はそれほど多くない。

全室の駐車場を完備しているわけでもないし、細い路が続くのでタクシーなどで乗り入れることもできない。

引っ越しの時には最悪で、少し先に止めて配送業者さんはこのアパートの前まで荷物を運ばなければならないから、大荷物を持って引っ越して来ようという人は少なく、身軽な単身者が多くなってしまった、というわけだ。

そして、自分のプライバシーだとかいうものを大事にしている人にとっては、ここは住みにくい場所なのだろうと思う。

監視されているような気になってしまうのも仕方が無いことだ。

全ての人に好まれる空間を提供することはできないのだから、と母さんは言う。でも、姉ちゃんはこのアパートをもっと高層の洒落たものにしてしまえば良いのと言って母さんに窘められて

いた。父さんはまったく放置を決め込んでいる。困った時だけ相談に乗る。でもそれは相談ではなくて単に頷いたり相槌を打ったりするための時間の時間しかない。アパートの経営方針そのもののような人だ、と母さんがよく歎いているが、少しも根に持つことはない。いや、本当は思うところがあるのかもしれないけれども、きっと何も言わないことにしているのだろうか、と思った。

そういう時。

将来、ボクにここの経営を任せて、母さんはさっさと引退したいのだろうか、と思う。

将来を親が決めることはないのだから、と口では言っているけれども、遠くに行つて欲しくないのかなということは何となく肌で感じる。

でもボクは何となく思っている。

ここを引き継ぐのは姉ちゃん、ボクはここではないどこかに行ってしまうような気がするのだ。逃げ出したいということではなく、自分が何ができて何ができないのかを確かめるためには、ここは幸せすぎてあたたかすぎるのだと思ったのだ。

姉ちゃんは、何となくボクよりもずっとここが好きなのだと思う。退屈で、都内に住んでいるのにまったく煌びやかなところがない住宅の中で、周囲に挨拶をすることにだけは厳しい親のところ鬱屈しているのだ、と言う。でも、姉ちゃんは決して親が心配するようなことはしないし、大それた野望を持っているわけではない。どちらかと言うと、ボクより生真面目で、ここの暮らしがとても合っているようにも思う。

気性が激しくて、弟のボクと本気で喧嘩をすることもあつたけれども、最近では喧嘩にならなくなつてきてしまった。

人との諍いは見ることすら好きではないボクは、姉ちゃんとの喧嘩のあとは本当に自己嫌悪で沈んでしまう。でも、姉ちゃんに冷たくされたり無視されたりするともっと落ち着かなくなつてしまう。

何でだろう。

人は、敵意が剥き出しになるよりも、諦められて無関心に扱われる方がとても哀しいことなのだと考えた。

それでボクは、ボク自身も、同じ様に他の人に対して諦めたりしていないのかな、と振り返つてしまうのだ。

まだこどもなのに、そんなことを考えるのはおかしいことなのかな、と思うけれども。ボクは、こどもみたいな大人を知っているし、ボクはまだまだ大人になりきれていなかった。

将来のこともわからないし、明日の自分が何をどう予定するのかさえきちんと決めることができない。もやもやした気持ちがあるのは、ボク自身がぼんやりしているからなのかなと思つてみるけれども、そのことについて解決策が見つかるわけでもないことはちゃんと把握している。

だから、ボクはたぶん、今回が最後になるかもしれない行事に参加することにした。

親と決めていたことがある。周囲の行事に参加することを免除される年齢が迫っていた。これで夏の朝の体操も、冬の餅つき大会も秋の落ち葉拾いのボランティアにも参加しなくて良いのかと思うと少しどころではないほつとした気持ちがあつた。

待ち遠しかったのかな、と思っではみたけれども、待っていたわけでもない。ようやくやって来たのかなという感じだ。

そしてそれは、ボクが時々不思議に思う、大人がよく口にする「いつか」という日なのかと思っった。

そういう行事に参加することが嫌なわけではなかった。

どちらかという、楽しみだ。

学年を越えた催しものに参加することはとても面白い結果に終わる。

でも、最初はその日が到来するのがとても億劫に思える。いざ、当日になってしまえばそんなことはまったく思わないのに。

準備の期間が長すぎると、それはもっと強い気持ちになる。当日、何かの理由で中止にならないかなと思うことさえあった。

予防接種があると知らされて、当日は発熱して接種を見送ることにならないかと願う時の気持ちにも似ている。

ボクのことを「ダイ」と呼ぶ人ではない人達と会うからなのかな、と自分で分析しているつもりであった。でも、それを認めて口に出すつもりはない。

ボクの名前は「大」というけれども、家族も含めてボクのことを「ヒロ」とは呼ばずに「ダイ」と呼ぶ人が殆どだ。それは、アパートに住む住人がボクのことをそう呼び続けるから・・・自然に、そんな風に呼ばれるようになってしまった。

でも、そんな事情を知らない、行事の時にしか会わない人達は、ボクのことを「大」と呼ぶ。それが正常で、当たり前なことなのにボクはそれがとても奇妙なことに感じてしまい、ボク自身に戸惑うから。だから、億劫だと感じるのだろうと思った。

それに、ボクのことを「ダイ」と呼ばない人達がボクのことを「ダイ」と呼ぶ人達の会話に困惑しているのを見て、ボクがいちいち説明をするのも、そろそろ面倒になってきてしまった。

人に対して面倒だと思っではいけないのだと思うし、極力そうしないように気を付けていようと心に誓うけれども。

やっぱり、思わないでいることと、顔や態度に出さないでいることは違うのだと思っってしまう。そういう自分が嫌で、時々、わっと叫びたくなってしまうこともあった。

まだ、ボクはそれほど長く生きているわけではなかったけれども、これから先、こんな風に喚きたくなることを何度も繰り返さなければいけないのか、と思うと「いつか」が怖くなってしまうこともあった。

そんな時に、思うのだ。

あの人はどう思うのだろう。

こどもみたいなおとなの人。

ボクよりずっと、こどもみたいなのに、おとなの人。

最近、話をしていなかったな、と思った。

茶色の髪で、茶色の瞳で、とても小柄で、ボクのことをダイと気軽に大きな声で呼びつける、迷惑なアパートの住人。

最近、滅多に会わない。ボクは学校だし、あの人はいるのかいないのかよくわからない生活をずっと続けている。

でも、どんなに家賃を滞納してしまうほどに不在にしているとしても、どういうわけかボクの母さんは彼女を追い出すことはしなかった。

手放しでいつまでもいてください、とは思っていない様子だけれども。

でも、彼女にも子育てを手伝ってもらったから、という気持ちが大きいようだ。

ボクはまったく覚えていないし、それほど家事育児に積極的な人とも思えないので、母さんがひとりで恐縮しているだけなのかもしれないと思う。

それでも、一応、大人なのだし、ボクは最大限の尊重をしているつもりなのに、相手は違う。

彼女にとってのボクと、ボクにとっての彼女の比重はまったく違う。

各々違う人間なのだし、そういうものだと言っめることは簡単だったけれども。

でも、もう、無邪気に彼女の家を仕事もないのに訪ねていくという頃合いを過ぎてしまっていた。

●02

もっと残っていても良いのに、と言われたけれども。

ボクは、早々に会場を辞することにした。

家族が煩いからという理由を述べたけれども、本当はもっと別の理由だった。

嘘をつくことはいけないことなのだと教えられた。

それは、嘘を言われた相手を傷つけるからだけではなく、嘘を言った方も傷つくことだからだ、ということらしい。

でも、大人はいつも誤魔化したり嘘をついたりする。

それなのに、こどもには反対のことを教える。

どうしてなのか、ボクは知ってしまったらおとなの狡さだけを押し付けられる気がして聞きたいとか知りたいとかいう気持ちになれることはなかった。

今日はとても良い会合になったと思う。

10月の終わりの日。世の中はハロウィンで染まっている。

ボクの家ではそれほど浸透している行事ではなかった。ただ、かぼちゃのお菓子だけが出ているような、そんな一日になるはずであった。

でも、こうして近所のこども達の集う場所では、ハロウィンは特別だった。

何しろ、夜まで出歩けるからだ。

日が暮れるのは夏の頃に比べればとてもはやくなっていた。

夜になれば、少し肌寒い。

でも、昨日から季節が戻って来てしまったかのような日中の陽気が夜まで影響していて、それほど厚着しなくてもまったく気にならない程度だ。

・・・夜遅いといっても、それほど遅い時間ではない。

世の中の大人達が、どこにも立ち寄りなければ丁度帰宅する時間か、それより少し遅い時間である。

近くの図書館が併設している貸し出し会議室で、ささやかな菓子を持ち寄った後は、ハロウィンの由来、それから今日は割り当ての場所に「トリック・オア・トリート」と言いながら菓子をねだって回る特別な日なのだということを言い聞かせる。

ボクよりもずっと小さいこども達は、仮装してお菓子をもらい、そして少し遅い活動時間を許可されてかなり興奮していた。

でも、この時代で他所の家に上がり込んで菓子をねだり、それを目的として突然訪問するのは流石に困り事も多い、ということであった。

だからこうして疑似体験だけを味わう。

夜を待って、日が暮れた瞬間にこの場にいるこども達はこどもから仮装した人ではないものになる。

年に一度のことなのに、親たちはこの日だけしか着用できない衣装に工夫を凝らし、その時だけしかおさめることのできない画像をより多く取得することに懸命になる。

ボクも何人かと一緒に撮って貰ったけれども、ボクの家族はここにはいないボクが必要ないと言ったからだ。最後になるかもしれないことはわかっていたけれども、どうにも気恥ずかしかった。

ボクと同学年の子は誰も出てきていなかったし、ボクはもう、衣装に着替えてはしゃぎまわるほど小さなこどもでなかった。

こういうところが、姉ちゃんがいうところの「可愛げのない」部分なのかもしれない。

母さんはこのところ、雑事に拘っている。本当はそれがなければ今日は同席するはずだった。

最初は無理して出席するのだと言っていたけれども。ボクは、必要ないよ、と言って遣った。

今夜は家でもいつもより少しばかり豪勢な食事が待っているだろうと思ったし、日暮れからそれほど長い時間もかからずここは閉会になってしまう。

大家の仕事というのは、ただ月例で家賃を取り立てるだけではない。子育てと同じなのだ、と母さんは言う。

休みの日はないし、何か突発的なことがあったら、それが最優先になる。自分の思惑通りに物事は運ばないし、定期的に手入れも新調することも必要だ。

だから、今日が、その「突発的なこと」があった日なのだった。あまり愉快でないことはボク達には聞かせないようにしているのかな、と思う。

それでも。ボクの最後のハロウィンの催しに出られないという状況になった時に、母さんはとても困った顔をしていた。

ボクは誰かがボクのために困った顔をするのを見ているのが一番苦しい。

今年は両親と決めた「行事に参加する年齢」の上限であったけれども、ここの参加者は年々、減っていくように感じる。こういう有志の集いにこどもを参加させる親が少なくなっているということらしい。でも、それだからこそ、ボクの両親は期限を決めて参加させることを強制した

のかな、と思っている。

来年からは、ボクの自由意志での参加になる。きっと、やっぱり、優先させなければならないことができてしまったのならここには来ないという選択をするのだろうかという予感があった。

それほど熱心でなかったということもあったけれども、ボクは「大」と「ダイ」と「ヒロ」の混在するこの会合で、一生懸命説明をすることはないと諦めてしまっているのだろうかと思った。

そんなことを聞いたのなら、あの小さいおとなの人は「そんなことはない」と自分のことのように怒り出すのだろうか、と想像する。

だから早々に引き揚げることにした。

たくさんのお菓子を土産に持たされた。ボクは、それほど大袈裟な衣装を纏っているわけではなく、ジャック・オ・ランタンのプリントの入ったオレンジ色のシャツを着て、頬にペイントをしているだけだ。ついでに、大きめの、フェルトでできた黒い帽子を被っている。

他のこども達はそれぞれに工夫を凝らした衣装だったけれども、ボクは会場の手伝いなどに目が行ってしまうし、元々は母さんがこの会場設営の割り当てだったからつき合ったような始まりであった。

ボクは、ここで学んだことがある。

自分が注目を浴びることよりも、注目を浴びている人を見ていることのほうが自分が生かせるのかな、と思い始めていた。

ダイはそんなことはないのだ、と学校の同級生は笑うかもしれないけれども。

でも、何となく。

ボクは、こうして催しものを開催するまでにどれだけの労力がかかっているのだろうかと思ってしまったり、後片付けが楽になるように菓子を散らかしたりするようなことはできなかった。

確かに、姉ちゃんのいうとおり、ボクはどこか歪んでいてちっともこどもらしくない部分があるのだろうかと思う。

だから、ボクは、いつまでもこどもみたいなあの人が気になるのかな、と思った。

難しいことを考え過ぎているのだと思う。

いろんな人のいろんな考え方に触れてしまったから。

アパートの住人はいろんな人がいる。そして、必ずしも、良いことばかりではない。それもわかっている。

それでも。

母さんが楽しみにしていた行事に参加できなくなったり、ボクがこどもであることだけに集中することができないのも、誰かの何かが作用している。

けれども、それは誰の責任でもない。

だから。

その日の帰り道で。

いつもは禁じられていて、今日は許されていることをやってみようと思った。

ひとりで帰る路は短かった。途中まで一緒に連れ添ってくれた親子がいて、ボクは微笑んだ。

すっかり燥いで、睡そうな顔をしたこどもはボクよりずっと年下で、まだ小学校にも行ってい

ない。でも、今年のハロウィンは最初で最後で・・・来年のこの時期にはまた違った衣装に身を包んで、前の年のことはすっかり忘れてしまっているのだろう。でも、それで良いのだ。なぜか、そうしたくなった。それしか理由はない。彷徨う魂達が、ボクに乗り移ってそういう気持ちにさせたのであるならば、それを実行するボクが決断して決めたことだから、彷徨う靈魂の責任ではない。

どういうわけか、あの人に会いたかった。いや、会いたいというよりも前の気持ちだ。気になった、と言った方が正しいのかな、と思う。

ふと、思いついた。

それが理由でそれが動機だ。

あの人を思いつくときも、きつこうなのだろうな、と思った。

それがきっかけとなって、いろんなことを思い出す。

ここ最近顔を見ていないけれども、どうしたのだろう。

どうして、会わないでいられたのだろう。

生まれた時からアパートに住まう人で、母さんと時々困らせる張本人だ。

もうずっと売れないまんが家を自称している。

姉ちゃんがふたりいると思うほど、年齢の差を感じさせない人だった。

ボクをどこにでも連れ出すし、全くボクをこども扱いしない。

お腹がすいたと隠さずに言い、睡くなったと言って眠り、絵を描きたいから絵を描く。

月を見上げれば誰かを思いだしたように黙り込み、熱い夏にも冷房を入れることなしに窓を開け放って風を入れるような、そんな無防備で無邪気で危なっかしい人は、今、どうしているのだろうか。

そんなことを思いついてしまったものだから、ボクは帰り道、家の前の一方通行の路から先はひとりで帰れると言い張った。

家の前まで送り届けるのが大人の役割なのだと思っている付添人に、ボクは丁寧に断りを入れた。

あんまりにもできすぎた用意された言葉に、最初は戸惑ってびっくりしていたけれども、すぐに、帰り着くまで見通しが良い場所なのだからということに納得してボクを解放してくれた。

どうしてなのかな。

ボクはまだ誰かに送り届けられる側なのだと思うと、ちょっとしんどかった。

足踏みして、それだけで疲れてしまったような感じがする。

ほんのちょっとの距離なのに、それがとても長く感じる。いつも通る道程なのに、なぜか今日に限っては、迷ってしまった杜のように見えた。

それはすっかり日が暮れて、周囲に灯りが点る時間だから、そう思うのだろうか。

確かに、ボク達は靈魂を呼び寄せる魂そのものの姿をしている。

忘れていたわけじゃない。

あの方は、いつもボクがいるときにはいない。どこに行っているのか、何をしているのか、まったくわからない。いつしか、聞くこともなくなってしまっていた。なぜなら、ボクは傍観者だから。

らだ。

決して、なりたい場面の主役にはなれないし、なりたいと強く願わないから舞台に上がることができないのだと承知している。

■03

ボクはボクを送り届けてくれた近所の人に大きく会釈をした。

もう、家まではすぐそこであった。これ以上の見送りは必要ないという意味で、ボクは元気よく手を上げた。

こういう小さなことで相手が安心することがわかり、それなら姉ちゃんか母さんに迎えに来て貰った方が良かったのだろうかと思える。

・・・誰かに見送られることばかりだ、と思った。

ボクが安全で、目的の場所に行き着くまでボクは誰かに見守られる。

ボクも、いつか・・・誰かをそうやって見送る日が来るのだろうか。

もう、家はすぐ近くというより目の前だ。

それでも、そこに行き着く前に、ボクが今思い出していた人のアパートの入り口があった。いつもの、見慣れた風景。ボクはこの出入口を掃除したり、たまった郵便物を依頼があって取り纏めたりする。ここは単身者が多く、毎日几帳面にポストを覗く者が全員ではない。小さな郵便受けはすぐに一杯になってしまうから、そういうところは気を配らないといけないと母さんに教わった。

ポストの並んだ場所を見て、ボクは自分の格好を見て、そして少し首を傾げた。

あ、また、いない。

まるで下宿のようで気が抜けないと言って去って行く人もいるけれども。

でもボクはこの家にずっと住み続けている、奇妙な職業の、風変わりな人のことを忘れて、思い出したりしている。

どういうわけか、ボクは今日は彼女のことを思い出していた。

時々、ふらりと消えてしまう。母さんが家賃滞納でだいぶ扱いに困っているようだけれども、もうそれ以上は待てないというぎりぎりになるといつも入金してくるので、とうとう追い出せないままに今に至る。

困った人ではあるが、どうしても拒絶することができない人は今でも、ボクの近くに住んでいる。

見かけることはほとんどない。ボクと生活時間帯が違うのだとわかっていることだけれども、それを合わせることはできないし・・・でも顔を合わせればいつも彼女は少し驚いた顔をして、そして「大きくなったね、ダイ」と言うのだ。

いつも変わらずそう言う。

それが時々ボクが大きくなって成長してはいけないのだと言われているような気がして、だん

だん、それを聞くのが苦痛になっていった。

でも、苦痛になったけれども、うんざりするほど頻繁にそれを聞いていたわけではない。

ボクはすっかり薄くなってしまったポストの表札の名前を読み取った。

日当たりの良い場所ではないが、外気に触れていたせいで薄くなっている。背の低い彼女はこのポストを開けるのも四苦八苦している。

それが、今はボクはあまり苦にならない位置にあった。昔は、ここにたくさんの郵便物やチラシが詰まっていて、それでも手が届かなくて母さんに知らせに行くのがボクの分担のようなものだった。そこに何かがいっぱいで溢れていることを、彼女は取って替えているような気さえしてくる。

彼女が夢とか希望とか可能性というものを、そこに詰め込んで、いっぱいになっているのを確認しているのではないのかなと思えてくる。

昔と違って、今は、勝手に郵便物を取り纏めるのは禁止されている。今日の会合でも、ここ最近では決まり事が多くなって、人はなんだか殺伐としていると誰かが言っていた。

枷というものがなくなることがすべて良いことだとは思わないけれども、何となく・・・年齢を重ねた人がなぜ、昔は良かったと言うのか少しだけわかったような気がする。それはあまり根拠がないことであつたものの、その「何となく」というのは、これからボクの中で、どんどん多くなっていくのだろうという予感があつた。

「・・・また溜めている」

思わず口に出してしまった。

そして、彼女の部屋を見上げた。ここは玄関口に面しているので、在室の有無はわからない。

今日はハロウィンでこども会のこども達が訪問するかもしれないという予告があつた。この近隣の家々には前からの行事でもあるので、かなり浸透している習慣だった。

出も、このアパートは例外だ。こういう集合住宅が増えて行くと、好まない人もいる。尊重する相手を誰にするのかというのはその時によって違うものだとわかっているけれども、寂しくなるねという声が少なからずあるのは否めない。

賑やかではないことが寂しいということではないと思う。でも、なぜ、人は寂寥感というものがあるのかな、と不思議に思った。

この間、覚えたばかりの言葉についてどれほどの深い意味が混じっているのだろうかと思う。

寂しいと思うのは、何かが欠けているからだと言ったことがあつた。

欠損しているのではなく、以前にはそれがあつて当然だと思つていたのに、ある日突然、自分の中にあつたものがなくなっていることに気がついたのでしたら。それはとても驚き慌てるものだと思う。

それまで当然にあつて、まったく存在に気がつかなかつたものが。あつて当然だと思つていたものが。ふと、目を向けてみれば忽然と姿を消してしまつたのだとしたら。

それはとても哀しいことなのかもしれない。

ボクは、それが嫌で目を逸らしてしまつている部分があるのかもしれないと思った。

一度くらいは、チャイムを鳴らし、在室確認をした方が良いのかもしれないと思った。とても過

干渉な大家の方針であることは、承知している。

・・・着替えてから出直そうかなと思ったけれど。

いないかもしれないし、ボクの部屋から確認できる部屋の灯りを見てからでは、ボクは家から出ることはできない。

一度帰宅すれば、外出するというのは相当な理由がなければ出ることはできない。

それがボクの家を決まり事のようなものだ。

日が暮れてからの外出であるのならば、必要があつてのことなのだという、よくわからない理論が家の中には存在する。

それはボクだけがわからないのか、父さんや母さんがよくわからないままに絶対だと思っているのかはわからない。

でもそれに逆い反論するだけの理由が存在しない。

姉ちゃんは、それに反抗しているけれども、きっとどこかでわかっているから反抗しているのだなと思われた。

いかにもハロウィンの企画に参加してきました、という状況だった。

あの人に遭遇したのだとしたら、ボクは気恥ずかしくてきっと上手に会話できないことはわかっていて。

最初は軽口で揶揄いを交えてボクを赤面させるのだろうけれども、結局は受け入れてくれるのかもしれないという気安さと期待があつた。

他の人に、過度な期待はしてはいけないよ。

そう言われてきた。だから、ボクを含めてボクの家の人アパートの住人には必要以上の干渉はしない。それでも過干渉だと思うけれど、これは近隣の住人の不安を取り除くための「業務」の一部を越えるものは存在しない。

ボクがそんなことを考えるのは、きっと、こどもとおとなの狭間にいるからなのと思う。時々「難しいことを考えすぎる」と言われる。もっばら、それは姉ちゃんに指摘される。

でも、ボクはそれを誰かに言ったりすることもないし、誰かもボクと同じであって欲しいと思わない。だから、ずっと黙っている。それがボクの今回の催しもので浮き立つ存在にしてしまっているのかもしれないけれども。

・・・ボクは周囲を見回して、そしてボクを見送った大人の姿もなくなってしまったことを確認すると、そっと足音を立てずに階段を上った。

後ろめたい気持ちを持った方が良いのか、それとも捨て去ってしまっただけの方が良いのか、それすらわからなかった。

■04

ボクは迷ったものの、結局、階段を上る選択をした。

いるかないかだけを確認すれば良いのだ。

もし、居たとしても。郵便受けがいっぱいになっているので忠告しに来たのだ、と言えれば良い。

それに。彼女のことは昔から知っているし、部屋に上がり込んでそのまま眠ってしまい親に迎えに来て貰ったことも幾度かあった。

家族ぐるみの付き合い、ということではなかったけれども。どことなく憎めない人の姿を最近見ていないのだと改めて感じる。

・・・季節はもうすぐ冬を迎えようとしている。

でも、今年の秋はとても短くて、秋を無視して冬が先に陣取っているような空が続いていた。そうかと思えば、夏のような強烈な紫外線が出てきて姉ちゃんは嫌な顔をする。姉ちゃんはここ不機嫌の連続ばかりで、ボクとはあまり話をしなくなってしまった。

ハロウィンの企画なども、家族の中ではボクが最後の出席者になってしまった。

昔は、もっと様々なことを家族で執り行っていたように思う。年始の餅つきもあったし、年末にはお飾りを各戸に配り歩いた。今はほとんど、そういうことはない。

だからボクがこうして大家の息子の立場で漫ろ歩くような場所ではないと思っている。

相反する気持ちと理由を混ぜながら、結局は彼女の家の前にやって来てしまう。

ボクは肩に提げた袋を持ち直した。大きな袋は口を紐で綴じるタイプのもので、この中に今日使用した道具や残りのお菓子、それから終了報告を兼ねた保護者への御礼の手紙が入っていた。

それが乾燥した風を受けて、かさかさとした音をたてている。

ここまで来てしまって、引き返すかどうか悩む。

でも、彼女のことがきつと気になってしまって、どうにもならなくなって、落ち着かない気持ちになるより、確認することによって解決するという道を選んだ。

少し前に、全体のドアを交換したのでそれほど古めかしい感じはしない。集合住宅は時々こうして鍵を変更したりドアを交換しなければ防犯上好ましくないということで、母さんが頭を痛めていた件であった。

だから、ボクはこの合鍵を持っていない。管理するのは母さんであったし、管理してある場所は知っていたけれども、使ってみようという気にはならなかった。

唯一、今、ボクが立っている部屋に住んでいる人のことは除外される。

ボクは姉ちゃんの反抗期を目の当たりにしてきた。

親に反抗しても結局自分が惨めに思ったり後悔するだけなのだと思うこともあるし、あまり敵愾心というものを持っていないよだと気がついた。

けれども、それは元々持ち合わせていないのではなくて、矛先が別に向かったというだけなのだ。

だから、ボクはあの人に向かっては、結構、意地悪いことを言うてしまうことがあった。

ボクよりずっと大人なのに、まるでこどものように夢を追いかけている人だ。

夢に生きているようなところがあるけれども、現実もちゃんと見ていて、時々アルバイトをして生計を立てているようだ。でも、それは一生続くと思わないのが普通の人なのだけれども。

彼女は、それが生涯続くと思っているところが、奇妙な思考の持ち主だと思わざるを得ないところだ。

ボクが呆れて彼女を眺めると、彼女はいつも屈託無く笑う。豁達という言葉はあの人のためにあ

るようなものだ。そして、あの人は大人の殆どが諦めてしまったものを諦めずに今でも追いかけている。

・・・ボクは深呼吸して、扉を叩いた。傍らにある呼び出しボタンを押しても、まったく返事がない。わかっていることであつたけれども、ボクはもう一度ゆっくりと全体を見回して、もう一度だけ呼び出しボタンを思い切り押した。

彼女には来訪者が多いことは知っていた。

来訪者達は押し並べてかなり荒っぽいというか気短な人が多い。

一度の呼び音だけでは諦めきれずに何度も打鍵するように押すものだから、この部屋のベルが最初に壊れる。

今では予め来訪を告げるためのツールなどはたくさんあると言うのに。

いや、彼女がそういうものを多く持ち合わせていないということから、必然的に直接約束もなしに来訪せざるを得ないというところなのかもしれない。

やはり、居ないのかな。

少しほっとしたような、それでいてがっかりした気持ちがボクの中を巡っている。

小さな悪戯好きの妖精達がボクを翻弄している。

訪ねてみたら、留守だった。

それだけのことなのに、ボクはどうしてこんなにがっかりしたりほっとしたりを繰り返しているのだろう。

ボクは袋の中から菓子の包みを取り出した。焼き菓子で、日持ちがするものだ。

市販のもので、個別包装になっているから、不審なものではないことはわかるだろう。

それに、あの人はそんなこと、まったく考えないだろうなという確信めいたものがあつた。

この扉には、のぞき窓の他に、新聞受けがある。彼女は新聞を継続購読していないので、それを利用することはほとんどないけれども、一応、彼女の部屋にもついている機能だ。

ボクの役割というのはごく簡単で、階下に溢れている郵便物を小分けにまとめてそこに放り込むのだ。そこに、何日までの分、とメモを入れて軽く括っておく。そうすると、いつ到着したもので優先的に目を通さなければならないものはひとめでわかる。

歩合制ということでもないし、本当にこの住人が快適に過ごせるような些細なサービスだけでも。

単身者が多いと帰省時などは便利なのだという。

もちろん、個人情報漏洩するとかいう問題もあるから、予め頼まれたところしか行わない。

でも、あの人だけは何も言わずにふらりと出かけてしまうので、この場所だけはそういった配慮とサービスと規制というものをまったく無視して、ボクの家は管理監督している。

困った住人ではあるが、小さい時にはボクを預かってくれたりしたものだから、母さんは黙認しているようだった。その代わりに、家賃はきっちり精算することにはしているようだけれども。

ボクは、それを取り出すと、手の平に乗せた。夜、少し冷え込んで来た風の中で、包装紙の縁が揺れていた。ボクの手の平の中にすっぽりと入る程度の量だから、それほど重くはなかった。

ボクはそれを持ったままでしばし考えこんでしまっていた。

でも、ボクはそれを握りしめると、勢いよく受け口の中に突っ込んだ。

からから、と音がしてそれらが吸い込まれていく。

その瞬間に、待っていたかのように天井の照明がぱちんと不思議な音を立てて一斉に点灯した。朝夕の補助灯だけでは暗すぎるので通常灯に切り替わったのだろう。ボクは少し眩しくなって、目を細める。

あいつ、悪戯だと思うかな。

そう呟く。悪戯だと思われても仕方が無いけれど、それが誰なのか思いつかないのかもしれない、と思う。

彼女がそれを見て首を傾げる姿を想像する。

ボクのことを忘れてしまっているのかな、と考えると少し哀しかった。

■05

そして、ボクは小さく呟く。

「Trick or ……」

上手に発音はできないけれども、意味はわかっている。

何かくれないと悪戯するぞ、という意味だ。

本当は、ボクの方が相手から何かを貰う側なのだけれども。

あいつがくれるのは、散歩の途中で積んできた草花であったり、本当にそんなことがあったのかと疑わしくなってしまうほど奇想天外な話であったりするのだ。

彼女はいつも、形のないものばかりをボクに寄越す。

やはり、家に戻って、郵便受けがいっぱいになっているので取り纏めておくように母さんに言うておこう。

そう思った。

ボクは金輪際、彼女の面倒を見るのは避けた方が良くと思った。

なぜなら、ボクはいつも文句を言ってしまうから。苦笑いするあの人の顔を見たくて言っているわけではないけれども、いつもそんな顔をさせてしまうから。

本当は、わかっているんだ。

彼女がボクのためにさっき散歩から戻って来たばかりなのに、また散歩に行こうと言うことも。

小さなことに気がつく心を失わないように、季節の草花を選んで持って来ることも。

ボクが見せろと言った彼女のスケッチブックのうちの一冊は絶対に見せてもらえないのは、そこに大事な思い出を思い出にできないままにしまっているからなのだ、ということも。

そして彼女が最近、よく留守にするのは、どこか別のところで生活をしているようだということも。

全部、わかっているけれどもボクはこどもだからわからないというフリをしているだけだった。

そんな風に、気付いてしまうのは毎日毎日、飽きもせず観察しているからだ。

時々忘れてしまうこともあるけれども、思い出すと気になってしまう。

・・・親戚でもないから、いつかは別れてしまうこともわかっている。

でも、ボクが生まれた時から一緒にいるから。

時々しか会えなかったとしても、何となくどこかで繋がっているような気がしていた。彼女が、ボクと会う度に「大きくなったね、ダイ」と言うのは、前回のボクを覚えているからだ。忘れられて、誰であったのかわからないという程の繋がりではないことをそこで確認して安心していたのはボクのほうだった。

今夜は、精霊達が自分の存在を主張しながら遡り歩く夜なのだと聞いた。

ボクはここにいるけれども、あの人はここには居ない。

いつもはアイツ、と言うけれども、あの人はまったく動じない。年上の者に対する尊敬はないのかと言うけれども、まったく怒らない。

時々、ボクが言い切れない憤りを扱い兼ねて彼女に当たり散らすのに、まったくと言って良いほど動じず、受け流してしまう。親には言えないことを独り言のように呟く時には、必ず黙って傍らに居てくれる。

どうして、そういう人をどうでも良いと思うことができるのだろうか。

軽い溜息を吐き出した。

あの人は、溜息を覚えると、こどもではなくなるのだと言っていた。

だったら、しょうがないほど夢を諦めないあの人の目の前で幾度も溜息をついて見せたボクは、とっくに・・・大人になってしまっているのではないのか、と言おうと思ったけれど、言わずにそのままになっている。

おとなだとかこどもだとか区別することそのものがおとなではない証拠なのだから。

少し考えて、ボクは持っていた袋の中の菓子を全部取り出し、そして先ほどの受け口に押し込んだ。

ばらばらと今度は乱雑な音がした。

これはボクが貰ったボクの菓子だったけれども、家族の分が残っているから、それで充分だと思ったからだ。

さあ、そろそろ帰ろう。

そう思って、その場を離れようとしたその時のことだった。

がちゃん、と音がして。

新聞受けをあける音がした。

ボクは誰も居ないと思っていたので、酷く驚いた。

息が止まるかと思った。

他の人が戻ってこないうちに確認を済ませてしまおうと思っていたから、かなり気を張っていたようだった。誰にも見つからないで何かをすることは難しいとわかっているし、後ろめたいことで彼女を訪ねているわけでもなかったから、もっと堂々としていれば良いのに。

ボクは密やかに計画を実行する、とても臆病なハロウィンの霊魂と同じ様に、人の気配を求めながらも人の気配に怯えていた。

ボクは慌てた。

居留守を使うのも日常茶飯事のことであったけれども。

でも、こんな風に慌ただしく人の気配を確認しないで自分の在室を主張するような人ではなかったと思ったからだ。

何か、出るに出不れぬ事情でもあるのだろうか。

ボクは心配になった。単身者の心配なところはこういうところが。

事情を知らなければ、どこでどうなっているのかまったくわからない。

このアパートではそういう「不知のための事故」は避けたいと言っていた。この辺りの近隣住人にも心配をかけたくないというのが主旨であったけれども、それより何より希薄になってしまった人間関係とか住居事情とかを理由にして自分は悪くないと言うことはおとなじゃない、と母さんは言っていた。

ボクは扉を手の平で叩く。

「おい、マリナ。居るのか？」

ごそごと人の気配がするので、ボクはぞっとした。マリナでないのなら、他には誰も暮らしていないわけだから、考えられることはそれほど多くはない。

ここで引き返して大人を呼んできた方が良いのだとボクは判断する。

鍵はかかっているし、相手はボクの声聞いてこどもだとわかっているからそれほど大層なことはしないだろうけれども。

せっかく家まで送ってくれた近所の人に申し訳ないなと思った。ボクがまっすぐ家に帰るのだと信じ込んで、ボクを信頼してあの場所までの見送りで済ませてくれていたのだから。

でも、この時のボクは何かが痲痺してしまっていた。

何でもできると思っていたわけではない。その逆だ。ボクは非力で何にもできない。でも、この扉の向こう側で、もし、マリナが助けを求めていたのならボクはこの場を立ち去ったことをずっとずっと後悔するのだろう。それだけは確実にわかっていた。

だから、ボクは声を少し大きくして言った。

苦肉の策であった。

もし侵入者であったのなら、これを聞いても何も行動しないだろう。

「トリック・オア・トリート！トリック・オア・トリート！」

今日は各戸に訪問すると周知されていたから。

これで何かがあっても大丈夫だ。周囲にも聞こえる声で、何度も繰り返す。

「マリナ、トリック・オア・トリートだ！」

夜がボクを追いかけて来た。逢魔が時を越えて、ボクは照明の下で叫んだ。

ボクは力一杯扉を叩いた。

これでは、乱暴な来訪者と同じではないかと思う余裕すらなかった。

手の平で叩きつけたので、熱くなってきたけれどもまったく気にならなかった。

何度かそうやって扉を叩いた時。

いきなり扉が開いた。

ボクは手の平を扉に付き、あやうくそのまま扉後となぎ払われてしまうのかもしれないという勢いに面食らって一歩後ろに下がった。

「壊れる！」

彼女の声の先にボクに飛び込んで来た。

それから、マリナ・イケダが顔を出したので、ボクはあっと息を呑んだ。

マリナが出てきた。

マリナ・イケダという、売れないまんが家はボクを睨んだ。

けれども、扉の向こう側で暴れていたのがボクだと認識すると、表情を少し和らげる。

そして、目を瞑った。

茶色の眼がボクの目の前で何度かしばしばと瞬きをする。

ボクを通り越して、ボクの頭上に見える空気の色を読み取った彼女は呟いた。

「ああ、もう夜なのね・・・」

彼女はそう言ったので、ボクは啞然としていた。

この人は、時計を見ないのだろうか。

そして、まじまじと顔を見つめる。

ぼさぼさの髪に、寝起きなのか睡眠不足なのかわからない少し浮腫で疲れた顔。コンタクトは外して分厚い眼鏡をかけているけれども、慌てて身につけたようでその位置は少し曲がっている。

服装は上下の揃っていない部屋着だった。ところどころ染みついているのは、彩色の際のもので、それは彼女が色を扱う仕事をしているから故のものであった。勲章のように誇らしげに見せる彼女に、いつだったかボクは「上手な人や達人は、汚さないでできるはずだ」と辛辣な言い方をしてしまったことを思い出した。

ボクは、彼女を笑わせることはできないのかなと思うと悔しくて、余計にボクは彼女に突っかってしまう。

どこまで行っても、すれ違ってしまう。

「・・・居留守は最後まで出てこないから居留守って言う」

つつい、苛立った声で言ってしまった。

すると、彼女はボクを認識する。ぼんやりとした顔つきであったのに、ボクの顔を見ると彼女は笑った。

彼女は狡い。いつも、その笑顔ですべてを誤魔化してしまう。

哀しいことも苦しいことも、辛いと思うことも。ボクの前では曝け出したりすることはなかった。

それがとても哀しくて時々、残酷な気持ちになってしまう。

彼女が、ここではないどこかに向かって気持ちを飛ばしているのだとわかるから。

時々・・・彼女が、空の更なる先を見ているのが、わかっていたから。

ここではないどこかを定めて、そしてそこに思いを馳せていることがわかったから。

彼女が散歩に行こうと言うのは、かつてそうして青空の下を歩いた人とのことを思い出すから。彼女がボクに草花を持って来るのは、かつてそうして彼女が草花に目を向けるような長い旅を経験したから。

ボクを通して、誰かを見ているのかな、と思う。

過去の思い出に引きずられているのではなく、ただ、彼女の中にある景色や音や匂いや・・・そういうものを思い返しているのだと思った。

戻りたいと思っているわけではなく、ただ、思い返して、そしてその時に煌めいていたものを今でも同じ様に感じたいと思っているのかな、と想像する。

彼女はとても自由で、そして同時に孤独だった。

彼女は、彼女と誰かが共有できない部分を持っている。

それが彼女を自由にさせているし、彼女が人に対して絶望しきれない願いのようなものになっている。

ボクはそれが嫌いではなかった。

彼女の部屋はいつも絵の具の匂いがして、デッサンのために紙と筆記具が擦れる音が絶えることはなかった。

話の流れを考える時には彼女は独り言が多かったし、うまくいかないときにはとても不機嫌になっている様も知っている。

でも、ボクはそんな彼女を見つめ続けて・・・そして今に至る。

すると、マリナはボクの格好を見て、目を細めてから笑った。

「なに、その格好」

「うるさいな。人のこと、言えるのか？」

ボクは唇を尖らせて言った。ボクの格好を笑うほど、彼女の出で立ちは洗練されているのかと言えば決してそうではなかった。

「居るなら出る」

「居留守は・・・出たら居留守にならないと言ったのは、ダイよ」

マリナの返事に、ボクはむっとした。揚げ足を取るような言い方をされて、少し気分を害した。

彼女はいつもと変わらず、部屋に居るときには無防備だった。

睡そうな顔をしているのは、どこかに出掛けていたからなのだろうか。

「また放浪していたのか」

「違うわよ。・・・ちょっと、眠れなかつただけ」

「マリナが眠れない？」

ボクは笑ってしまった。神経が太い女だと思っていたけれども、眠れないことなんてあるのか。

しかし彼女の申告を聞き入れるのだとしたら、何か不安事があったのか・・・

すると、彼女は首を軽く振って、利き腕の側の肩を回しながら、言った。

「時差があってね・・・」

それを聞いてボクはまた驚いた。時差がある場所に彼女は居たのか。

この国で「時差」は存在しないに等しい。国内ではなく、国外に彼女が居たのだと知って、ボクは何だか知らない人を見るような目付きで彼女を見てしまう。

確かに、彼女は「ちょっとそこまで」という気軽さで、どこにでも行ってしまう。でも、それが国外にまで行動範囲を広げたものだとは少しも考えていなかった。

・・・確かに、何週間かまったく連絡が取れずに行方不明になり、明日には然るべきところに届けようという時になって彼女がひょっこり戻って来たという話は、母さんから幾度となく繰り返し聞かされたことであった。

ボクがあんまりにも驚いた顔をしていたのだろう。マリナは気恥ずかしそうな顔を浮かべた。

「とにかく寝たいのと、絵を描きたいのと・・・それを繰り返していたら、食べ物がなくなってしまっていて・・・」

それである程度の事情を察した。

食を絶てばすべてが絶たれると思っているマリナが、食を忘れていたということに衝撃を受けた。そして、彼女が戻ってきてからずっとそんな風にして何かに没頭して描き続けるものは何なのだろうかと思ったけれども。きっと、彼女は自分の満足を確かめるまで何も見せてくれないのだろうし、何も話してくれないのだろうと思った。

「ボクは、金輪際、呼び鈴は使わないからな」

ボクは不貞腐れてそう言った。マリナが覚えているとは限らないけれど。ボクは、彼女がまったく違う理由で扉を開けてやってきたのだと知ると、またひとつ、大きな溜息を呼吸の代わりに吐き出した。

なんだよ、と言いたくなかった。

何をそんなに夢中になるほど、何を見てきたのか、ボクには理解できなかつたし、ボクがまったく知らないところで彼女が見聞きしてきたことが彼女を奪っていくような気がして、ボクは胸がどきどきして・・・そしてどうしようもなく焦ってしまっていた。

だから、ボクは極力素っ気なく言って遣った。

「それでどうして出てくる気になったの？」

理由は明白だった。マリナの口の端には、菓子くずが付いていたからだ。

■07

「それで、その寝たいと描きたいを繰り返している人間が、何だって起きて来のさ」

ボクは意地悪いと思いつつも尋ねてみた。

彼女はうっと声を詰まらせたが、すぐに横を向いて空々しいことを言い始める。

「ダイがあまりにも大きな音で騒ぐからでしょう」

「嘘をつけ」

ボクは冷たく言った。

誰かを思い出したように渋い顔をしたマリナに言ってやる。

「おまえ、お菓子に釣られて出てきたな」

「そんなことは・・・」

まったく。言っていることとやっていることがまったく合致していない。

マリナ・イケダという人物がこういう生き物なのか、それとも女という生き物がそうなのか。そこまで考えて、心と疑問に思った。

確かに、姉ちゃんも同じ傾向にあるし、母さんも今日は絶対参加すると言っておきながら欠席した。

こういうものなのだろうか。ひとつひとつが道理にかなっていないことを、自覚しているようには見えないから、余計に訝しんでしまう。

性別で思考が違うということを考えたくなかった。それだから違うのだとか、それだからわかり合えなくて当然なのだ、ということは言いたくなかったし、ボクのことをそんな風にして線引きされることはとても哀しいことだと思ったから。

「だって」

彼女は少し唇を尖らせた。

マリナが「ダイが来てくれないかな、と思っていたのよ」と言ったので、ボクは鼻で笑った。彼女がボクを待っていたわけではない。ボクのことをすっかり忘れて、いろんなところに行ってしまう人の言うことを全部信じていては、ボクの気持ちはいつも失望し続けていることになってしまう。

期待しすぎれば、失望も大きいと言うけれども。

でも、ボクもマリナのことを忘れていた時間があったことは否めない事実であった。なぜなら、ボクはボクの日々で一杯であったからだ。

マリナも大人ではあるけれども、同じ様にマリナの日々に懸命になっているのだとしたら、それはボクが非難することではないように思えた。

でも・・・

マリナが、ボクの声に反応して出てきてくれたと喜ぶところなのか、それとも、ボクの呼び掛けに最初は無反応であったことを歎くべきなのかと考えるよりも前に、マリナはボクに言った。

「食べ物を持って来てくれないかな、というのが正しいだろ」

そう言うと、マリナは少し上を向いて考えていたが、すぐにうん、と頷いた。

「ダイなら、きっとそうしてくれると思ったから」

聞こえの良い言葉を選んでいるみたいに聞こえたけれども。それがマリナの本心だと思った。確かに彼女は着の身着のままの部屋着としか言いようのない格好をしていたし、玄関先で座り込んだまま立ち上がろうとしなかったのは、きっとあまりにも空腹でその姿勢で座っている以外の行動はできないのだろうと思われた。

彼女は、いつも変わらない。

飾ったり驕ったりすることもないし、いつもボクの前ではこどものような朗らかな、愁いをまったく感じさせない笑顔と声でボクの呆れたと言いたい態度にに応じているだけだ。

マリナはボクを特別に思っていない。

だから、ボクは期待してはいけない。

その他大勢のうちのひとりなのだから。

自分に常日頃言い聞かせていたけれども、ボクは彼女にそう言われてしまうと、体の内側を擦られているように落ち着かなくなる。

期待というものが満たされなくて失望してしまうのは、相手の問題ではなく自分の問題なのだと思う。

でも、何も期待されないより期待される人間でありたい、と思うのはボクだけではないとわかっている。

難しいなと感じるところだけれども。

でも、それだからこそ人との交流が面白いのだとマリナは言う。

マリナのペースにすっかり巻き込まれていると承知しながらも。

ボクは、ボクの声が何だか知らない人の声のようだと思いながらも言わずにはいられなかった。

その声でしか、ボクの声が伝えられないのであれば、それでもマリナはボクの声だとわかってくれるように思えた。

これは、余計な、大きすぎる期待なのだろうか。

叫びすぎて少し喉が痛かった。でも後悔していない。

「ボクが菓子を取り込んだから、ボクを呼ぶの？・・・気付いていないかもしれないけれども、今日はハロウィンだよ」

ボクは、遠回しに言って遣った。

本来なら、マリナは来訪者に菓子を振る舞う側なのに。

来訪者のボクが菓子を振る舞ったら、マリナの方が精霊になってしまうではないか。

外からやって来る魂は菓子で遣り過ごすことができるけれども。内にいる魂は、どうやって送り出すと言うんだよ。

ボクはそう言いたかった。

でも、うまく言えなかった。

■08

「ダイなら、きっと、困っているところにやって来ると思ったの」

マリナは言い直した。

そこで取り繕うつもりであるなら、何も言わなければ良いのに。

そんなに都合良く、ボクがやって来るなんて、少しも思っていないのに、時々彼女はとても不思議なことを言う。だから、思っていることをそのまま言っただけだ。

こういうところが、マリナらしい特徴であり、損をしているなと思うところであった。

でも、彼女は人間関係に関しては損得を先に考えることはしない。

その後はわからないけれども。

最初は、そのことで動かされるということとはしないようだった。

というより、どこか途中で考えが変わったような気がする。ボクの気のせいかもしれないけれども、あるとき、考えが変わったという瞬間があったのかな、と思った。

人の考えが変わることは良いことなのだから、受け入れるようにと言われて育ってきた。

ボクは、あちこちに見せる顔を変えることはあまり良くないことだと思っている。

けれども、周囲の意見や状況から自分の持っている考えを覆すという勇気は持っていたいと思っているし、そうできる人は凄いと思う。

大人になると、なかなか、変化というものを受け入れたり自分で創り出したりすることは難しい。

ボクは幾度かそんな場面を目にしてそう思ったものだった。

心を落ち着けるために、深呼吸する。

ボクは姉ちゃんの時には思わない憤りを、マリナに感じている。

それはボクがマリナに期待しているからだ。

ボクが特別な存在であるに決まっていると、まったくそんなことはないのに、そんな風に穿った見方をして、それを改めることがないから、ボクはこれほど落ち着かない気分になってしまう。

ボクが生まれた時からここに住み続けているマリナという人物は、ボクがいてもいなくてもここにいたのだという事実がボクを失望させる。

ボクは・・・マリナの心の片隅にでも置くことのできる人物とは言えないのだと思い知るから。だから、苛つくのだ。

ボクは、どこまでいっても「ボク」のことしか想像できないからだ。

マリナの心の内のことはなにひとつ、わからない。

ボクは呆れながらも、袋の中から包みを取り出した。

選んで渡すことはなくて、手に取ったものをそのままマリナに差し出す。

手渡すために、マリナの開けた扉の中に入り込むけれども、中には入らない。

母さんと約束していることがある。

決して、住居している人と仲良くなりすぎないように、ということだ。

具体的には。その人の家に上がり込んではいけない、という項目が入っている。

マリナには尽く適用されないことであつたけれども。

・・・うちの匂いと少し違うマリナの家の匂いが漂ってきた。

「ほら。やるよ」

玄関先でボクは立ったままで、座り込んでいるマリナの顔の前に菓子を差し出した。

この時期特有の菓子ということではないが、パッケージはハロウィン仕様になっていたので、マリナは最初、中に何が入っているのかわからなかったらしい。でも、それでも口に入れてしまうなんて、まるでこどもだ。

警戒心がまるでない彼女は、一体、どうやって生きているのだろうかと思った。

何に対しても好奇心旺盛で、それでいてかなり遅しいと思う。そうでなければ、都内で、たったひとりで暮らしていくことなんてできないだろう。

マリナは嬉しそうな顔をした。

「ありがとう」

ボクは呆れて言った。そうしなければ気が済まないというわけではないけれども、彼女の前ではいつも余計な言葉が出てしまう。

些細なことで喜び、嬉しそうなマリナの前で、どんな風に振る舞って良いのかわからないからだ。

「もう少し自重しろよ」

「なにを？」

「不規則な生活態度を改めるとか」

「ダイ、大人ねえ」

「おまえがこども過ぎるんだよ」

ボクはますます頬を膨らまして口調を速めてしまう。

マリナは、ボクが大人だとは思っていない。それなら、こんな格好をしていることにも何か言うだろうし、ボクが差し出す菓子についてももう少し何か付言するだろうと思われた。

ボクはどこか哀しくなってしまった。

マリナにはボクはどう映っているのかなんて、まったく関係ないのだ。それに、自分のことも飾らないのは、ボクに無関心だから。だから、余程のことが無い限りは家から出ないと決めた時にもボクは「余程のこと」にはならない。

「・・・大声で呼び出して、悪かったよ」

ボクは横を向きながら、言った。

マリナは意識がはっきりしてきたのか、そんなボクを遣り込めた。

「今日はハロウィンなのでしょう？・・・謝る日だったかな？」

彼女はそう言って、自分の両手に乗った受け渡された菓子を膝に置いた。

「そんなに空腹なら、何か食べよ」

「だから、何もなかったの」

この人は餓死することはないかもしれないけれども。

食べ物に執着する割には、家の中に備蓄しておくことを知らない人なのだ、と思った。

それとも。

先ほど遠くに行っていたことが明らかになったから。家の中に何も残さないで出掛けていたということか。ボクはそこでちょっと不安な気持ちになってしまった。戻らないことがあるかもしれないと思って、彼女が何も残していないのかもしれないと考えてしまったからだ。

どうしてそんな風に思ってしまったのだろう。

以前にも、かなり頻繁に長期不在にすることがあったと母さんから聞いていたからなのか。

「何もなくて・・・」

ボクの目の前で、彼女は小袋をあけて、口の中に放り込んだ。あっという間に次の袋にも開けてしまう。食べ終わるよりも前に。

体が欲しているのだろうと思った。何やっているのだ、という気持ちにもなった。

けれども、彼女が少し上を向いて「おいしいね」と言って嬉しそうな顔をするので、ボクはただ黙って彼女を見下ろしていた。

ボクは、これからずっと彼女の顔を見上げていくことになる。背が伸びて、マリナが抱き上げることもなくなったボクは、もう、彼女には用事が無いのかもしれない。

他の人のように、彼女を助けることはできないし、何かを与えてあげることもできない。できるとしたら、今日みたいに菓子袋をマリナの家に投げ込むくらいだ。

前みたいに、気軽にマリナの家を訪れることができない。なぜなら、いつも不在だからだ。それでも昔は良かった。また居ない、と言うだけで良かった。けれども。

いつの頃からなのだろうか。それが失望に変わって、ボクは諦めるようになってしまった。

行っても居ない。居るかどうかを毎日確認することも疲れて、ボクはマリナがこういう生活をしていることなどは知らなかった。

ふらりと出かけてしまうことはあっても、まさか、そんな遠くに行っていて、しかも帰ってくることを繰り返しているような様子のマリナは、どうしてこの場所に戻ってくるのだろうか。

■09

ボクは、思わず、マリナの前でしゃがみ込んだ。

彼女はまったく、ボクと違う人なのだと思い知らされたような気がして、とても重苦しい気持ちになった。

こういう時に何か言えば、きっとマリナを困らせてしまう。それはわかっていることだったので、本当は早々にここを立ち去る方が良い選択なのだとわかっていたけれども・・・どうしても、どうしてもこのこどもみたいな人を放っておけなかった。

肩に掛けていた袋が地面に擦れて、音を立てる。

マリナの乱れた茶色の髪が近くなって、間から茶色の眼が見える。

年齢よりもずっと幼く見える。けれども、自分は少しもそんなことを意識していない。彼女の心がとても幼いのだと思う。幼稚という意味ではなくて、いつまでも失っていないものがあるというよりはむしろ・・・失ってはいけないのだと自分に言い聞かせているような部分を持ち続けているから、そんな風に見えるのかな、と思った。

少女の心を失わない人、というのではなくて。失ったことを承知していながらも、その時に感じていたことそのものよりも「その時には現在の自分と違う景色が見えていたことを理解している」とでも言うのだろうか。

まだ、ボクにはそれを言い当てるような上手な言葉は探すことはできなかった。

「マリナ」

ボクは彼女の目線に自分を合わせた。

もう、お互いが何も工夫しないで同じ目線になることはなかった。それが寂しかった。

はやく大人になりたいと思ったけれど。

こうして、ひとつずつ手放していくことの重さを知らないままに大人になりたいとは思わなかった。

・・・でも、こういう気持ちも、いつかは忘れてしまうのかな。それだったら、大人は寂しいな、と思った。

マリナは口元が汚れていることなどは気にしないのだろうか。そう思いながら彼女の指先を見ると、確かに彼女の言った通りのことが現れていた。

手の平全体が汚れていた。

それでも、その汚れた手で素描をし続けていたのだろう。爪の中まで色が残っていた。

ボクは、マリナの小さな手を見る。

大変に小柄な人なので、手も小さい。でも、昔はボクよりずっと大きかった。

爪は綺麗に整えられていて、手入れが行き届いた滑らかな手の甲だった。

少しも荒れていない。締切前のマリナの指先は、いつも、もっと違っていた。

だから、仕事のためにどこかに行っていたのではないのだと気がついた。

仕事の帰りであったのなら、こんな風に夢中になって絵を描くこともないのだろう。

いや、マリナならどんな時でも思いついたのなら絵を描く場所を選ばない。

自分でもわかっているから、スケッチブックや画材道具を持ち歩いているのだから。でも。

ボクは、気がついていていた。

彼女が外で描くものは、人間以外だ。時々、人を描くこともあるけれど、それは風景と一体となったもので、マリナがボクの前で人物画を描いているところを見たことがない。

マリナはそういう人だ。

自分のことはあまり言わない。お喋りで、どこに行ったとか、どんな友達がいて、どんな人物と知り合ったのかという話はするけれども、彼女は自分の過去のことはあまり言わない。

だから、ボクは敢えて言うことにした。

少なくとも、マリナは自分を大事にしていると言うけれども。

人も、その通りだと言うけれども。

でも、ボクから見ると、彼女はちっとも自分を大事にしていなかったように見えたから。

「マリナ。食べ物ないことに気がつかないくらい、何を描きたかったの？」

すると、マリナは顔を上げた。酷い顔だ。絶対、他の人が直視することなんてできないぞ、と思った。

ボク以外の人に、そんな顔を見せることはしないでくれよ、と心の中で祈っていた。

そこで思う。どうしてボクは、そんなことを思ったのだろうか、と。

自分の生活を整えることができないほど貧窮していたわけではない。

ただ、彼女はそういうことを考える余裕すら全部注ぎ込みたいと思うほど、彼女は夢中になっていたのだ。

ボクには、何となくわかる。一緒に居るときも、心と、遠くを見て、何かを感じ取るように目を細めて空を見るマリナを幾度か見たことがあったから。

でも、そんな顔を知っているのは、ボクだけだと思っていた。

・・・ボクだけではなかったのだね、と確認することが何だか怖かった。

このまま、笑い飛ばして、マリナはやっぱりいろんなところが散漫だと言うだけで良かったのかもしれないけれども。

・・・それを言ったら終わりかもしれないと思っているのに、言ってしまうというのは、ボクがこのままでいられないとわかっているからなのだろうか。

マリナはボクの質問に、一瞬、はっとしたような顔をした。

ボクは、それだけで全部がわかった。本当は、全部ではないのだろうけれども。

少なくとも、ボクの知りたいことはわかってしまった。

ずっと遠くにいる人を想っている。

そして、その人のことを、ようやく、描く気になったのだろうと思った。

でも、上手く描けなくて。

それでも、溢れる欲求を抑えきれなくて。

ただ、夢中で描いているのに満足できない。

だから、もやもやしながらかいては消して、手が汚れるまで描いて、また少し眠って次に描く。

それが、家族とか彼女のよく話すともだちという立場の人ではないことは、わかっている。

彼女が決して明かそうとしない部分に住んでいる人のことを、ボクはとうとう聞く事が出来なかった。

それはボクが聞きたいことではなかった。

これを聞いたら、本当にマリナがどこかに行ったままになってしまおうと思っていたから。

・・・それでも言ってしまったのは、きっと、マリナにはそれが必要だからだ。

ボクが必要だから言わないのではなくて、マリナには必要だと思ったから。だから、ボクのこととはどうでも良いのだと思った。どういうわけか、この日のこの瞬間だけは、そう思った。

彼女の遠い眼が、ボクに向けられて、あまりにも近くて、ボクは少しどきどきした。

マリナは女の人で、ボクはそれをずっと意識したことはなかったけれども。

彼女は、おとなの視線でボクを見た。

・・・どうして、母さんが、居住者の人と必要以上に親しくなってはいけないよ、と忠告するのかこの時になってわかった。

いつもは、観察して少しでも心配な点が出てきたら、確認するようになっていた母さんが、矛盾するようなことを言っているのか理解できなかった。でも、ボクは、マリナは特別で、まったくその約束事に当てはまらないと思っていた。でも、今ならわかる。わかるのだ。わかってしまったのだ。

■10

マリナが本当は絵を描きたくて仕方が無いのに、どうにもうまく書けないで悩んでいるということもわかっていて。

上手く描けないという表現はちょっと違うかもしれない。

なぜなら、マリナは上手に描くことよりも自分が描きたいものが描けているかどうかに重きを置いているような部分があるからだ。

それが多くの人を求めるものと違う時があるから、マリナの絵はあまり大衆受けしない。

絵が、というより話の筋かもしれないけれども。彼女の描く物語は、こどもや少年少女という世代には受けないのかな、と思ったことがある。でも、こどものうちに読んで、大人になって思い返す作品になるのかもしれないと思うこともあった。

ボクにはそれが正しいことなのかどうかはわからないけれども。まだ、ボクはその時を迎えていないから。

悔しいけれども、それは事実だから認めることにする。

「何かに夢中になるということを持ち続けるって、結構、大変なことなのね」

おもむろにマリナは言ったものだから、ボクはびっくりして彼女を見た。

彼女がそんな風に言うなんて、考えたこともなかったからだ。

「どうして？」

思わずボクは聞いてしまった。大変かどうかということなんて、マリナは考えたことはないのだろうと思っていたからだ。

ボクはマリナの部屋着なのか寝間着なのかわからない様子の彼女を改めて見つめた。

彼女が寝食を忘れるなんて、相当のことだと思うけれども、あの格好を見たのならそれも頷けるのだろう。まったく他者の目を気にしない様子であったし、ボクはそれを見慣れていたので少しばかり驚いてしまったわけだから、彼女は相当・・・部屋に閉じこもりきりだったのだろうと推測される。

きっと、昼夜なく彼女はひとつのことを考えていたのかな、と思われた。

見れば、それほど広くない部屋の中はスケッチブックが開きっぱなしになっていたし、その他に描けるもの全てに彼女は自分の指を走らせていた痕跡があった。

絵具の匂いや、鉛筆の匂い、マリナの家の中では独特の匂いが混じって、ボクの家のもとはまるで違っていた。

でも、不愉快な匂いではない。ボクがよく知っている懐かしい匂いだ。

「大変だから、やり遂げるのだろうか？」

ボクは言った。大変なことだから、人は時に諦めてしまうし、またある時にはそこに向かって脇目もふらずに突き進んでしまうこともある。でも、どちらも理由は同じだ。

為し遂げることが簡単であるのなら、諦めたり追いかけてたりしないのだから。

ボクは極力、宥めるように言った。責めるような口調で言ったら逆効果だ。

姉ちゃんが相手だと面倒くさいな、とってしまうようなこともマリナの前ではあまり気にならなかった。

これくらい年齢が離れていると、わからないことが苦痛でなくなる。

だから、ボクはマリナが真っ暗で電気もつけない部屋の中で、何を悶々としていたのか、聞く事は無くそのまま袋の中のありったけの菓子を出した。

「やるよ」

彼女の視線は自分の糧になりそうな物体たちにくぎづけだった。まったくわかりやすい人だ。

内心、ボクは笑ってしまう。これが苦笑というものなのか、と思った。

「いいの？」

良いのかどうかなんて、関係なくなってしまうんじゃないか。ボクはそう言いそうになった。マリナの手はもう次の菓子袋に伸びているからだ。でも、そこは大人の意地なのだろうか。とにかくよくわからなかったけれども、ボクの目の前で、ボクをじっと見つめるマリナの瞬きはとてもゆっくりで、時間の流れがこの人は違っているのではないのだろうか、とさえ思ってしまう。

ボクは彼女に気の利いた言葉をかけてやることはできない。マリナもそれは期待していないのだろう。

けれども、ボクが、マリナの窮地に居合わせることで、ボクは少なからず浮かれていた。ああ、どうしてなのだろう。ボクは、困っている人を見て喜んでることになる。それは後ろめたいことで、素晴らしい心持ちなどではないことも、ボクにはわかっていたことであつたのに。・・・マリナが困っていて、ボクがそれを少しかもしれないけれども助けたのだ、役に立ったのだ、と思ったら心がふわりと何かに撫でられるような気がした。

「だいたい、灯りも点けないで居留守を使って何やっているんだよ」

ボクは話を変える。

彼女が語った、夢を追いかけることに関しては、きっとそれ以上は言わないのだろうな、と思ったからだ。マリナはそういうところはとても頑固で、決して覆すことはない。少なくとも、その瞬間は。しかも、空腹というマリナの最大の窮地の時においても口を割らないわけだから、それ以上何かを話すということは考えられなかった。

ボクだけではなく、皆にそうであるのなら、それでも良いのだ、と思う。

でも、彼女の交友関係を全部知らないボクは、彼女は別の人にならその先を・・・続きを話すの

かもしれないという不安に襲われた。どうして、なぜ、不安に思うのだろう。なぜ、安心できないのだろう。それまで浮かれていた心というのを維持させておくことが出来ないのは、ボクがマリナに対して、もっと何かを追加で要求しているからなのだろうか。

「だから、寝たり起きたりしていたから」

とても具合が悪そうとは思えない。ボクが部屋に入ってきた時に、灯りをつけたものだから、マリナは目を眩しそうに瞬かせてばかりいた。でも、手はしっかり菓子を握っている。昔と違って、少くくは手持ちの金品もあるだろうに、彼女はまったく無頓着な人で、こういうことは慣れているのだろうと思われた。

本当に困ったのなら、昼夜問わず、ボクの家飛び込んで来るのだろうから。

「違うだろう？誰が来ても出るものかっていう意気込みを感じたぞ」

ボクの言い方がマリナには面白かったらしい。

ううん、と少し唸って、マリナは唇を尖らせた。

「まあ・・・今日は誰が来ても出ないつもりでいたけれども」

「ハロウィンが怖いのか？」

ボクは呆れて言ってしまう。この人の前では、思ったことがそのまま口に出てしまう。遠慮のいらぬ仲と言えればそれまでだったけれども、マリナにはそういうことを言わせやすいという雰囲気があるのだと思う。

ボクが目線や年代に調子を合わせているわけではないのだろうけれども。

■11

「それだけ食べられれば大丈夫だな」

ボクは呆れた気持ちよりも、はやくこの場を立ち去らなければ、マリナの何かを邪魔してしまいそうな気がしていた。そこは、ボクが立ち入ってはいけない場所なのだと思う。

ボクの出で立ちに妙な顔をしていたマリナは、ボクがそろそろ退散するのだという気配を見せたのでちょっと残念そうな顔をした。

「ダイには珍しい格好ね」

「だから、ハロウィンの催しのためだって言ってる」

ボクは立ち上がり、膝を軽く曲げ伸ばしした。

「普通はボクみたいなこどもにマリナみたいな大人がお菓子を配ってくれる日だぞ」

「あら、そうなの？」

マリナはある程度空腹が満たされたようで、玄関先に座り込み、所在無く目を走らせた。

「そうだよ」

「でも、こどももおとなも関係ないと思わない？」

「え？」

ボクが聞き返すと、マリナはにこりと屈託無く笑った。こういうところが、マリナの気安いとこ

ろなのだろうと思う。

きっと、ボクだけではなく他の人にもこういう態度で接するのだろう。だから、どこに行っても苦労しない。

いや、いろんなことを苦労しているのに、笑顔でいられるのかと思うと、マリナがなぜそこまでして強くあれるのかという抛り所があるのだろうと思った。

人が笑顔なのは、余裕があるからではない。余裕を生み出す努力をしているからだ。

大人になると、笑顔を忘れて行く。こどもも、生まれたばかりのときには笑顔を知らない。

もともとあるものではなくて、維持しようと思って、常にそのことを忘れないでいるからなのだから、母さんは言っていた。

それだけ、笑顔は偉大なんだ。

だから、こんな恐ろしい日も皆が笑顔になれるような夜になるための工夫なのだろうと思っている。

一度は持っていないもので、喪失することがあるけれども、皆が持っているもの。

マリナはそのことをよく知っている。

「でも」

ボクは何かひとこと言い返してやろうという気持ちになった。腹が立ったというわけではないけれども。マリナがこんな風に笑っているのは、なぜなのか、ボクには絶対に話してくれないと思ったからだ。

哀しいけれども、それはきっとあたっている。

ボクとマリナだけの世界で、マリナは成立しているわけではない。よくわかっていることであつた。でも、ボクはそれを自分自身で確認することはできなかつた。不能ということではなく、そうしなかつたのだ。

マリナの世界は、ボクがひとりだけしか関わっていない世界ではない。そんなことはわかっている。

「マリナはボクに何もくれない」

それは、言っではいけないことなのだと思った。ずっと、そう思っていた。ボクとマリナの関係は、捧げて捧げられるような関係ではない。

友達よりももっと親しいけれども、ボクはマリナの殆どを知らない。

ボクはひとにねだるといことが苦手だ。

だから、母さんはハロウィンの企画はそんなボクにぴったりの行事だと言って送り出すことにしている。それも、間もなく終わってしまうけれども。

行事の一環で、元気にかけ声として発声できるのなら、それはボクにとって少しは何かを変える力になるのかもしれないという親ならではの期待が少し嬉しかった。嫌になる時もあるけれども、親がどうしてそう考えるのかというと、ボクのことを思ってからこそなのだと思うから。完璧な親はいないけれども、同じ様に完璧なこどももいないから。だから、一緒に親子になっていくのって素敵だよ、と母さんに言われた時に。それはマリナから受け取った言葉なのだろうと思った。

母さんはマリナのことを、時々放浪してしまう困った賃借人と考えているけれども、どこか別のところでそれだけではない何かを考えているようだった。

ボクが小さい頃に世話になったから頭が上がらないのだろうか。

そうではなくて、何か、マリナには困った時にほっとするような一言であったり、背中を押してもらったりしたことがあったようなのだが、ボクには詳細はわからなかった。

何かを期待して、自分は何ができるのだろうかと考えることなしに相手に縫ったりねだったりすることが、どうにもボクにはやってはいけないことに思えたのだ。

だからボクはマリナと一緒に歩いていても、何かを欲しがらなようなこどもではなかったようだ。元々そう考えていたのではなく、性分だから仕方がない。水さえ欲しがらなかつたので、あやうく脱水症状になりかけたこともあったのだと聞く。親やきょうだいには言えることも、この人には言えなかつた。

強烈に何か欲しいということではないからなのだ、と姉ちゃんは言うけれども。

確かに、思い当たることが幾つもある。

姉ちゃんが我慢していたことを、ボクは我慢しなくて良いことが多かった。

欲がないというわけではなくて、奪い取ってまでして、その人の手の中にあるものを取り上げてまで欲しいものがなかつた、というだけだ。というより、それを探さなかつたからなのだろう。

欲しいものは時間や希望や奇蹟と同じで、やって来るものではない。

それもわかっているところであつたけれども。

でも、ボクはマリナに貰うとかあげるとかいう関係になりたくなかつた。

ボクはとうとう言ってしまった。

「今日はハロウィンだよ」

そう言った後に、言うのでは無かつたなと思ってしまう。

ボクは家に帰ると決めた。そう決めなければ、マリナと話し込んでしまいそうになつたから。なぜなのかわからないけれども、この人は人を引き留めておく力がある。

「ひとつの家に滞在するのではなくて、いろんなところに行くんだ」

ボクは言い訳がましくそう言った。

マリナがそれを聞いて、眉を少し動かした。

マリナはボクくらいのときには、転居が多かつたのだと聞いたことがある。だから、こういう言葉に敏感に反応してしまうのだろう。

ますます、しまった、と思った。

ボクには、マリナのように気の利いた言葉は出すことはできない。

ただ、ボクはマリナの傍観者でしかない。

それを思い知らされたような気がして、胸の奥が少しどきどきしてきた。

期待で胸が高鳴るということではない。その反対だ。

失望を確認してしまつたから、胸がどきどきするのだ。

■12

「今日はハロウィンで、来訪者を無視できない日だよ」

僕はそう言って溜息をつき、立ち上がった。

マリナが世の中の行事や常識から逸脱していることはわかっていることだった。

ボクがそう思っている位なのだから、その無関心ぶりは本人も自覚していることだろう。知らないのではなくて、きっと関心を寄せることとか優先順位が上位であるということではないのかな、と思った。

他の人・・・特に大人達は彼女のことを永遠のこどもなのだと思っているのだろう。でも現実に生きられない人ではなくて、現実の中で夢を失わない人なのかな、とってしまう。鼻屑目なのはわかっている。

確かに、苦労人であることには間違いない。

赤貧の生活を知っているし、それでも夢を諦めていない。

ある意味、尊敬に値する人物だ。

「そう・・・」

彼女はしばらくの間、考えていたけれども。

斜め上を見ている瞳が茶色だな、と思った。彼女の色素はとても薄くて、こうしてある一定の角度から見ると茶色の瞳がとても印象的だった。

すると、マリナは突然顔を上に勢いよく向けて、ボクに与えられた菓子の包み紙をかき集め始めた。そして急に立ち上がると、それらを抱えて部屋の奥に行ってしまう。奥に、といっても、それほど広くはない空間であるから、彼女がボクに背中を向けてなにやら作業机の上で描き込みを始めているらしいということはすぐにわかった。

でも、薄暗がりの中で、目の弱い彼女が・・・カーテンも敷かず外のおぼろな灯りを頼りに、顔を近づけて背を丸くして何かを描いている様を見て。

ボクは、思った。

彼女は夢に生きている人ではなくて、夢を追いかけている人であり、夢と一緒に生きている人なのだ、と。

何かの天啓のように。

彼女は、その行動のひとつひとつに意味があると言うけれども、ボクから見ればとても唐突なことに没頭していた。

でも、それは彼女の「次」なのだと思う。

「次」というのは、彼女の次の行動で、その瞬間にはボクは置き去りにされてしまったような、泣きたい気持ちになる。でも、仕方の無い人だと思うことで踏みとどまる。

彼女は彼女の順序で物事を組み立てている。

それでも、ボクが困っていれば自分の着手していることを放りだしてでもボクの方に意識を向

ける。

今時の人にしてみれば、とても珍しいと思う。

諍いや面倒を嫌って、誰かに意見する人もいないし、そもそも、そこまで深く誰かと関わろうとしている人はとても少ないのだ、と親から聞いたことがあった。

彼女は一切、そんなことはなかった。

彼女からしてみればずっとこどもであるボクに真剣かつ対等につき合うというのはボクに敬意を払っていてくれるからなのだ、と改めて思った。

いつでも、こんな風に自分の思い描いた世界を描くために夢中になってしまう。

ボクがこどもの時からそうだった。小さい時はそれでよかったけれども、彼女はボクの方をちっとも見ていないと気がついた時からボクは彼女と距離を取るようになってしまった。

それすら、彼女は受け入れているように思えた。やって来るものと、去って行くもの。それらが交互に訪れる彼女の生活に、ボクはほんの一瞬しか関われないのだと、彼女から知らされたわけだ。

母さんが「深入りするな」と忠告した理由がここにあると思った。

そしてすぐに「生まれたときから一緒だからね・・・」と諦めた口調でボクに囁く意味も、何となくわかるような気がする。

マリナ・イケダほど、強烈な存在はこの住人では存在しないかな、とってしまう。

一度触れてしまえば、決して忘れることはできないし、会わずにいられることを強いられることがとにかく苦しいと思う。自分の望みのおりに振る舞うとは限らないのに、彼女はいつも・・・当人の核心を突くことを語るものだから、皆が彼女が目の前から消えてしまったり連絡が取れなくなってしまうと、途端に慌てるのだ。

いつも、会えると思うから。

いつでも、会えると思うから。

彼女は転居することもしないで、ここで生きている。家賃が据え置きだからというだけではなくて、ここに居ることに拘っている。

なぜなら、遠く離れた人達と連絡を取る手段がここに居続けることだと固く信じているからだ。相変わらず、という状況を意固地なくらいに貫いている。

ボクが必要なわけではなくて、この場所が必要だから。ここに居る。それを思い知らされて、いつも寂しくなってしまう。

そんなことを繰り返したボクは、マリナの生活にあまり深入りしないようになった。

だから、ボクとそんなマリナの間にはこういう空疎な風が時折感じられていて、ボクよりもマリナの方がそれを気にしている。

彼女はあちこちにいろいろな人との関わりを持っていたけれど、長く、これほど長く関わりを持つというのは家族以外にはなかったことなのかもしれない。

だから、時折とても戸惑っているのかなと思われる瞬間に遭遇する。

そして、家族の前ではマリナはいつも感じている人物像とは違う面を見せているのかなとってしまう。

ボクの知らないマリナ。

それを、マリナは見せてくれることは決してないのだ、と思うとどうにも鳩尾あたりの何かがかぐうっと音をたてて振れるような感覚が生まれてしまう。

■13

「できた」

ぼんやり立ったままのボクに、マリナは満足そうな声を出してボクを現実に戻した。

辺りはもうとても暗くなってきていて、それでも電気を灯すことのないマリナに対して、呆れるというより、何か事情があるのではないのだろうかと思え思うけれど。

マリナは自分の目線よりも高くそれらをつまみ上げて、ひらひらと空気の中を泳がせた。乾燥させているつもりらしい。

それを幾度か繰り返すと、よし、と声を洩らす。ひとりで居ると独り言が増えるというけれども、マリナはひとりではなくても独り言が増えたような気がする。たまに部屋の外の廊下を掃除していると話し声が聞こえることがあった。

誰を部屋に招いているのか気になったけれども、マリナに来訪者はここ最近殆どなかったように思う。

部屋の外はいつも暗くて、留守にすると言われていたからだ。

確かに少し前まで留守にしてではいたのは本当だけれども。

詮索はよくないと思ったけれども、いつ帰ってきたのか、誰かと話をしていたのかと聞くと、彼女は笑って「私、誰と話をしていたのかな」と曖昧かつ不思議な返事をした。

マリナは立ち上がるとボクに向き直った。彼女はとても小柄であったものの、それほど歩数を伸ばして歩かなければボクに到着しないというわけではない。小さな、小さな、彼女だけの城。それをとても大事にしているとわかっている。でも、時々、ボクは泣き出しそうな気持ちになってしまう。

マリナが何を護っているのかわからないことに対して、ボクはボクの持っているアンテナがとても幅の狭いものだと思うから。

彼女の考えていることをとらえることができないことに苛立つ。

この世の中には、絵描きという仕事でなくてもたくさんの仕事がある。けれども、マリナはそれらのどれも選ぶことはなかった。

どうしてそういう決意があるのか、ボクにはまだ聞く事が出来ないと思った。

「Trick OR・・・」

彼女はボクに言った。

そして、ボクの手の中にそれを押し込める。

それからボクの顔を見て、にっこりと笑った。

ボクはどうしていいのかわからなくなって、俯いた。手の平に握らされた紙が、ボクの体温を吸って甘い匂いをボクに届けている。

「これがダイを笑顔にさせる」

御守りだ、と言って彼女は肩を竦めた。

トリック・オア・トリート、ともう一度彼女は口の中で呪文のように唱えた。

「どうして絵を描くのかな。描き続けるのかな、ということのこたえは、描くことをやめるときまでの宿題なの」

彼女はそう言った。ボクの疑問に答えた。

そして、首を傾げて、ゆっくりと瞬きをした。

「ダイにはいつか、話をするね」

できたら良いね、という曖昧な言い方はしなかった。

何をどう話をするのか、それ以上ボクは聞くこともなかった。

それから、彼女は言った。

「ダイにはいろいろ・・・隠せないなあ」

「何か隠してるのか？」

「そういうことを言ううちは、まだまだね」

彼女はそこで大人ぶってみせたが、すぐにボクの腕を軽く叩いて帰宅を促した。

「おうちの人心配するよ」

彼女はそう言って、ボクを送り出した。

「それ、似合っている。よく、似合ってるよ」

彼女はボクの服装をみて、最後にそう言った。

彼女が包み紙に何を描いたのか、確かめるボクの様子を確かめることもなく。

彼女は扉を閉めてしまった。ボクは彼女の心の中にちょっとだけ入り込んでしまった。迷い込んでしまったような気がするけれども。

「ボクの名前は、ダイじゃないよ」

ボクは呟いた。でも、みんなボクのことをダイと呼ぶ。マリナがそう言うからだ。それでも、嫌いな呼び方であったのなら反論するだろう。ボクはそこまでして否定する気になれなかった。

誰もがボクの名前をそのように呼ぶものだから、この近所でボクのことを知らない人だけがボクの名前を聞く。そうして周囲にボクのことを知っている人が増える度に、ボクはマリナのことを思い出すのだ。狡いよなあ、と思った。マリナは知らずにボクのことを護っているではないか。

それから、誰かに何かを要求することが下手なボクが唯一、マリナに何かくれ、と言ったら。彼女は真剣になって自分の持っているもので勝負した。勝負というのは少しおかしい表現かもしれないけれども。

ボクの目の前であっという間に絵を描き上げた。そういえば、マリナは自分の苦しかったことや哀しかったことをあまり多く話さないな、と思った。人によっては言ってしまうと楽になる人もいるけれども、マリナは誰かにそれを告げることで余計に苦しくなると思っているのではないのかとさえ思ってしまう。

ボクは冷えてきた廊下を歩いて、家に戻る。それほど離れた場所にあるわけではないが、勝手口の場所は路地の角を回らないと入れない場所にある。

母さんが用意してくれた、ハロウィンの衣装は、来年にはもう着られないだろう。そして、ボクはもう、催しものに行くこともないと思う。母さんの狙いというか願いは達成されたわけで、ボクは大きな声でマリナに叫んだことによって、少しだけ何かが軽くなったような気がした。ねだる行為を覚えたというより、我慢する限界をちょっとだけ知ったということなのだろうか。相手に嫌われることを怖れて何も言わないでいるより、実行することによって気まずくなくても修復できる関係を築いておけ、ということなのかもしれない。こどもは遠慮するなと言うけれども。遠慮の意味がわかっていなかったのは、ボクだったのだと思う。

■14

こどものままでいたくない、はやく大人になりたいと思っていた。マリナとの年齢差が縮まるわけではないのに、マリナと同じ土俵に立ちたかった。

でも、ボクはまだ何になりたいのかははっきりしていなかった。

小さなところで、じたばたしているしかない。

でも、マリナはボクの年齢のころにははっきりと将来の夢を持っていたと思う。ボクは慌てた。でも。

急いで大人になっても、マリナのようにまだ夢と現実を考え続ける者も居て、だから、ボクにゆっくり確実に歩けとマリナは言っているような気がした。

・・・何だか、マリナの様子を見に行っただのに、マリナにボクの様子を確認されてしまっただけだった。

結局、何がどう変化したわけではない。

明日になってしまえば、また何もかも変わらない日常が始まり、それは続いていくのだと思う。ボクは夜空を見上げた。もう、冬が溶け込んでいるような夜空だ。

都内の空は明るくて、あまり多くの星を見ることはできない。

でも。

なんだか、それでも、いつも見る空とちょっと違っているような気がした。

空には、はちみつ色の月がきらきらしていて、金平糖のような星の光がまばらに見える。夜雲は僅かに残っていて、それが綿菓子に見えた。

なんだ、お菓子はこんなところにもあったじゃないか。

ボクはそう思いながら笑った。

そして、家に急いで戻った。

家に帰ると、珍しく母さんが台所から出てきて玄関でボクを迎えた。

夕飯ができているけれども、もう少し待つようにと言われて、それならお風呂に入ろうかなと言った。

それから、ボクは母さんにありがとう、と言った。

すると、母さんはびっくりしたようにボクを見て、それから笑った。

珍しいこともあるものだ、これこそハロウィンね、と言ったのでボクは笑いながら家に上がった。

・・・あれだけ大きな声を出していたのだから、母さんは、ボクがマリナのところに立ち寄ったことを知らないわけがなかった。

アパートの住人に大家の息子が個人的に親しくなることについては親はあまり良い気持ちを持っていないことも知っている。でも、マリナだけは特別だった。多少のことには目を瞑っている節があった。

ボクは、用意してくれた服がもう来年は着られそうもないのだと言わなかった。

その代わりに、着たものは洗濯に出しておくと言うと、色が落ちやすいので区別しておくようにと言われる。うん、と返事をしてボクはふと、台所に向かう母さんの背中に言った。

「今日、貰ってきたお菓子は全部あげてきてしまった」

そう、と母さんは言った。誰にあげたのか、それすら聞かなかった。

何でもお見通しなのか、と思うとボクは母さんが振り返らずに、いつもの口調で応対してくれたことにほっとした。

今夜はお姉ちゃんがたくさんお菓子を買ってきたから、と母さんは言った。

ボクは荷物を置くためにそれを聞きながら、部屋に入った。

そして、まだカーテンが閉められていないボクの部屋の窓から見えるマリナの家の灯りを探す。

・・・彼女はまた眠りについたのだろうか。部屋の灯りはなかった。

軽い溜息をつく。失望ではない。でも、少し疲れていた。

慣れない人達と、慣れない催事にやはり緊張していたのかもしれない。ボクにとっては馴染んだ地域の定例的行事であったけれども、こうして親にお膳立てされて申し込みをすることは、ないだろう。それに、ほどなく対象年齢を越えてしまうわけだから。

そう考えると少し寂しかった。これから燥ぐということがないのかもしれないと思うと、ボクの中からずっと何かが消えてしまったのかなと思って、また慌ててしまう。

気がつかないうちに、気がつかなかったものが消えてしまう。それがどれほど大きなことなのか、消えてしまって驚くのだ。きっと、こういう気持ちを重ねて言って、ボクは何か違うことを考えるようになるのかもしれないな、と思った。

まだ他人事のように考えるうちはこどもだよ、とマリナは笑うかもしれないな。

マリナのことを考えていたら、彼女が寄越した包み紙のことを思い出したので、ボクはしまい込んだポケットからそれらを出した。

ポケットの中で少しだけ皺になってしまったそれらを机の上に取り出して、軽く広げた。

ボクは部屋の灯りを点けて、荷物を部屋の隅に置き、そしてそっと両手でそれらをのばした。

・・・やっぱり、マリナは絵を描く人なのだ、と思った。

そこにはかぼちゃの絵があった。ボクのシャツに描かれているものだった。かなりデフォルメされているけれども、かぼちゃのお化けの絵が描いてあった。

そういうものはマリナは苦手だと思っていたのに、こういう風に自分の中で変換して描くのなら大丈夫なのか、とちょっと驚いた。包み紙の裏に描かれたそれは、マリナがボクだけのために描いたものだった。

何だよ、と少し呟いた。マリナは目が弱いから、暗い中で描くのは難儀しただろうに。ボクの為だけに、ボクの「何かくれよ」という我が侏につき合ってくれたのか。

■15 Trick OR...

御守り、か。

ボクは呟く。

これから、今日のように悩んだ時には、この絵を見て思い出すことになるのだろう。

これは、ボクとマリナしか知らない秘密の絵であった。彼女はボクと共有するものをあえて作ってくれたのかな、と思った。あんまりにも、ボクは不満そうな顔を見ていたのかもしれない。

・・・気恥ずかしくなってしまった。

でも、マリナにはきっと、ボクが困っているのだと思ったのかもしれない。

どうしたの？と聞くことは簡単だけれども、彼女はボクに小さな御守りを授けた。

何から護るのかと言えば、きっと、ボクのこういう悩みからボクが笑顔を忘れてしまうということのを忘れないようにすること、なのかなと勝手に想像する。

笑顔になれない時には、これを見て笑え、ということなのかな。

ボクは薄く微笑んだ。

姉ちゃんが見たら、ひとりで何を笑っているのよ、と手厳しく言うだろう。

でも、ボクはひっそりと微笑んだ。

でも。それでこの話は終わりにならなかった。

もう一枚を見た時に。

ボクはぎょっとした。

そこには「あと少し待ってください！」とメッセージが書かれていたからだ。

それを見て、何を意味しているのだろうか、何を待つのかとボクは難しい顔をして首を捻ってしまう。

そして、はた、と思いついてしまった。

急にふわりと持ち上げられて急降下するような感覚があった。

あっと声を上げてしまう。

そうか、と瞬時にわかることを悟るというのであれば、確かにこの時、ボクは悟ったのだ。

壁にかけてあったカレンダーを見る。そして、マリナの部屋の方角をもう一度見た。

そして、手元の四角い包み紙を見る。甘い菓子の香りが残るそれに書き込まれた内容を見て、ボクは・・・ボクは思わず笑ってしまった。最初はぼかんと口を開けたままにしてしまったのだけれども。次には、思わず、笑ってしまった。

なんだ、マリナの御守りって、こっちのことなのか。

ボクは思わず声に出してしまっていた。

「マリナ！」

ああ、もう、本当に……！

ボクは心の中で言うだけでは済まされず、声に出してしまう。

マリナがひとりで呟く時というのは、こういう時なのか。心に留めておくだけでできず、溢れてしまったものが口に出してしまう。

今日はハロウィンだ。

そして、月の最終日。

……今日は家賃の支払い期限日だ。

昔から、マリナは滞納するとわかっているときには留守にしてしまうか居留守を決め込んでしまう。

今回は、どこからか戻って来て、用立てることも考えずに眠ったり描いたりする時間に没頭してしまっていたのだろう。

今日、ボクが来訪しなければ日にちの感覚はまったくなかったのだと思う。

それで、彼女が時差のあるところでしばらく生活していたのだと確信できた。

今日がハロウィンで、月末であることに気がつき、しまったと思ったのだろう。

ボクが呼び鈴を押しても出てこないわけだ。

電気も付けずに、息を潜めるようにして、ひっそりと遣り過ごそうと思っていたに違いない。

そして、母さんが今日は忙しいので同伴できないと言っていた理由もわかった。

未納者への督促があったからだ。それから、住人達の安否確認も月末にまとめて行っている。だから、忙しいと言ったのだと理解した。

それなのに。

母さんは、マリナのところが未納しているとは、ボクには少しも言わなかった。住人達と親しくなってしまうと督促できなくなるから、ボクや姉ちゃんにはあまり近付くなと言う。でも、母さんは何も言わなかった。お帰り、と言っただけだった。

ボクに、マリナは在宅しているのかとは聞かなかった。

ボクは笑ってしまう。

本当に、困った大人達だ、と思った。厄介で、どうにもならなくて、それでも……ボクはその人達に囲まれて、大きくなった。

大人はいろいろ大変だな、と思った。

そして、階下からはやくお風呂に入りなさいという母さんの声が聞こえる。

いつもなら、それはとても煩わしい命令にしか聞こえなかった。

でも、今日は。

わかっているよ、とボクは大きな声で言い返した。

それから、姉ちゃんに見られたらきっと揶揄われると思って隠すように着た上着を脱いだ。来年は、確かにもう着られないと思う。ボクはもっと背が伸びそうだから。

でも、捨てたり忘れたりすることはなく……ハロウィンのたびに、思い出すと思った。

与えられたマリナの描いたハロウィンの絵とともに。

それはどんな菓子よりもボクにとっては大事な贈り物になった。

思い出という名前の、ボクの宝物に変わった。

ボクは窓の外に見える彼女の部屋に目をやる。

夜遅くになったら、マリナはこっそり電気をつけて、また絵を描くことに没頭するのかな。

マリナでは止めることのできないものがマリナの中にある。

ボクはこどもだけれども。マリナのように、自分にとって大事なものを迎え入れる準備をしているところなのだ。

参ったな

そう思った。

それから、今度会った時には、居留守を使うのであれば前もって支払っておけと忠告することを忘れないようにしようと決めた。もうひとつ、言うことがあった。誰かに向かって何かを話している声は、結構響くものだから。

独り言になってしまうくらい、黙って居られないで言いたいことがあるのであれば、直接本人に言えよ、と言うつもりだった。

ずっと後になって、それがWEB会議システムという録画システムで、それに向かってマリナが録画をしているのだと知ったけれども。

それでも、マリナ・イケダという人は変わっていると思った。

また、母さんに呼ばれたのでボクは部屋を後にした。

今夜はきっと、お菓子が降ってくる夢を見るのだろう。

もしくは、マリナの描いたかぼちゃのお化けに追われる夢を見るのかもしれない。

それも良いな、受けて立つよ。

ボクは笑った。

ああ、本当だ。

マリナの御守りは、ボクを笑わせる。

マリナには、彼女を笑わせる御守りがあるのだろうか。

その疑問に対するこたえは、今は見つからなさそうだった。

でも、ボクは心に刻んだ。

ハロウィンの思い出と一緒に。

今夜はハロウィンだけれども。

後で、料理が残ったらマリナのところにこっそり差し入れしてやろうと思った。

母さんは黙認するのだろうけれども、またアパートの手伝いをさせられるのだろうか、と思った。

・・・今夜、ボクが手にしたのは、何だったのだろう。

そう思ったけれども、それは少しも不満にならなかった。

ボクは、着ていたシャツに手をかけながら、慌てて風呂場に駆け込んだ。

お腹が鳴った。

でも、なぜかボクは笑っていた。

ダイ、効果抜群でしょう？というマリナの声が聞こえてくるようだった。

(FIN)

E-side

本当は…。

その人は好きになってはいけない人だった。

彼のことは入学当初から知っていた。

やがて同じクラスになったときには、まずいな、と思った。

ストレートの黒い髪、透明感があって鋭い目元、低く響きの良い声。彼は最初から私の中で特別だった。

大人びていつも、少しだけみんなと距離を置いている風に見える彼を、私は同級生であったのに、「さん」付けして呼んだ。あの頃は、男子も女子も名字を呼び捨てが普通だった。

彼は少し…寂しい人だね、とそう言うと、みんなが目を丸くした。どこがそう見えるの、と言われたから、私は答えに詰まった。どうして、そう見えないのかわからなかったから。

私はいつしか彼の事を女子の話題に聞くことはあっても、自分から口に出すことはしなかった。

私は自分でもそう思うけれど…地味だ。ひっそりと生きる方が好きだ。目立つことは好きではない。

どこのクラスにも「華」になる人が居る。大抵は成績が良く、スポーツも良くできて、はきはきしている。そしてクラス委員などはいつも同じ顔ぶれだった。

勉強は嫌いではない。むしろコツコツやって成果が出るものは好きだった。本を読むのも好きだ。何時間でも読んでいたいと思う。

図書館の静けさが好きだった。いつかは図書館の司書になりたいと思っていた。本に囲まれて本に埋もれて暮らせば、大学の研究職でも良いなと思った。

この頃の私も含めた私たちは…願えば何にでもなれると思っていた。

彼はパイロットになりたいと言っていた。同じように夢があるんだな、と思って、その他大勢とひとりとして、その話を聞いた。

彼は…いつも輪の中心だった。

私は彼の事を「寂しい人」と思うか「やりづらい人」と思うだけだった。たまたに、話をする事があっても、私は会話が続かない。「元気ないなあ」と彼は笑うけれど、私は目を反らさずに彼の目を見る事なんてできやしなかった。

そんなとき。

転校生がやってきた。

小さい女の子だった。茶色の髪に、茶色の瞳の、とても小さいけれど元気な子だった。

イケダさんはすぐに私のところに話しかけてきた。他に女子のグループはたくさんあるし、私はどこにも所属していない空気みたいな存在だったから、どうして私に声をかけるの？と聞いたら、「ふたつ理由があって」

と言いだした。そして何が可笑しいのかくすくす微笑んで言った。
いたずらっ子のようにだった。

彼女は、少し笑いをやめて、
「あなたは、一番よく人を見ているから」
と言った。

「私の妹の名前と同じだし！漢字は違うけれどね！ね、瑛梨奈と呼んでもいいかしら」

彼女はそう言って、お願い！私心細いの！と言って手を合わせた。

ちっとも心細い感じはなかったけれど…

私たちはそれから…一緒にお昼を食べる仲になった

マリナは、私とは正反対の子だった。

彼女は転校が多いという。

だから短い期間であっても、友達をたくさん作ろうと思う、と言った。
私なら、そんな短い期間なら友達を作っても、すぐに疎遠になるわ、と思うのに。
彼女は違った。

闊達な子だった。

だからすぐに彼と彼女は打ち解けてしまった。

彼は突けばすぐに反応を示す、喜怒哀楽の激しい彼女が気に入ったらしい。

昼にも自習時間にも…彼はあからさまに、教室の隅から隅の席なのに、彼女の席に立ち寄っていった。

私は極力その場に居ないようにした。

「瑛梨奈も一緒におしゃべりしようよ」と言われてもその気はまるっきりになかった。

だからマリナが「瑛梨奈は…火狩のことが嫌いなの？」と聞くので、私はそうじゃないけれど、と口ごもるだけだった。

彼を見ていると落ち着かなくなる。

ただそれだけが理由だった。

私は静かな方が良い。
ああいう人の視線が集まるような人と一緒に居ると、私の静寂は破られてしまう。

ただ、それだけを心配していた。

やがて。

——マリナが彼とつきあい始めた。

当然の成り行きだった。

彼は恋に堕ちたのだ。
見た目にも解る。

サッカー部の彼の部活動が終わる時間を待って、マリナは下校していく。

そして、校門で落ち合って、学区内の短い距離を一緒に歩いて行く。

私はそれを図書館の窓から何度か見かけて…

そしてため息をついた。

ああいう人達は呼び寄せ合うものなのだ。
だから、彼女が転校して間もないとか、これまで誰にも興味を示さなかった彼が、
彼女を選んだのは、不思議なことではないのだと思った。

…夕暮れが来て、下校のチャイムが鳴った。

私は、図書室の窓ガラスをそっと閉めた。

「火狩ってね。本当はいっこ年上なんだよ」
マリナはそう言った。

これは内緒だよ。マリナはそう言った。
…他の誰に言うって思うの？

私は笑った。

彼はご両親の都合で長らく海外で過ごしていたらしい。
国内と国外を行ったり来たりしているうちに、1年進学が遅れてしまったという。

…だから彼は寂しい人ではなくて、大人なだけなんだよ。
私たちより、少しだけいろんなことを知っているから。

マリナがそう言ったので、私はようやく、彼の秘密を私だけに打ち明けた彼女の意図を理解した。

私が「寂しい人だね」と思わず、彼女に言ってしまったことをマリナは覚えていたのだ。

だって同じクラスなんだから！彼女は笑った。

ね？

と彼女が首を傾げるので、私は少しだけ笑った。

そうだね…よく知らないのに、火狩さんのことを決めるつけるようなことは言わないことにするわ。

私はそう言った。

だからと言って、私と彼との間に何かがあるわけでもなく。

でも。

彼はマリナと相変わらず仲良く登下校しているし、女子の嫉妬の視線は陰しくなるし、
私は周囲から「あの二人の情報を教えて！」と、知らない他学年からも話しかけられるようになり、
少々辟易していた。

そんなある日のことだった。

いつものとおり、図書室の戸締まりをしていた。
私が最初に来て最後に帰るので、いつのまにかこれが日課になっていた。

図書委員はカウンターに座り、貸し出し・返却の管理をする。
細かい作業はいらないけれど毎日同じように返却漏れや貸し出し簿にチェックする雑務は、
私たちの世代では「退屈」そのものであった。
でも、私はその作業が好きだった。

締切に追われると焦ってしまうし、初めて扱う事柄については戸惑ってしまう。
いわゆる機転が利かないタイプだ。

そんな私だったから、もちろん、その時にも気の利いた動作も言葉も紡ぎ出す事なんてできやしなかった。

「…イケダ来てる？」

下校の時間も近くなったころ火狩遼が、図書室にひょい、と顔を出したのだ。
そして私がどう声をかけているのか解らずに黙っていると、こちらを向いて、綺麗な日に焼けた笑顔で言った。

「…瑛梨奈、君に話しかけているのだけれど」

彼は私の名を呼んだ。

家族以外の異性に名前を呼ばれて…私はその場から動き出すことができなくなってしまった。

「あの。…居ませんけど」
私はうつむきながら言った。それだけ言うのがやっとだった。
「そうかあ。どこにも居ないから、イケダの一番来そうもないところを狙ってきたんだけど。」
彼のわからないところにマリナが居るとしたら、どうして私がわかるのかしら。
「彼女が来そうもないところ」とそれくらい彼女のことをわかっているのだったら、どうしてここを尋ねてくるのかしら。

私はそう言いたかったけれど、やっぱり気の利いた受け答えなんてできるわけもなく、また下を向いた。
「私、これから戸締まりをしなくてはいけないので…」
遠回しに、ここにはマリナが居ないから、はやく出て行って欲しいと言ったつもりだった。
彼は私の静寂を壊す。
だから、私は彼が苦手…そう、苦手だった。
「それなら、今日は瑛梨奈と帰るか」
彼はそう言った。すでに制服に着替えて、荷物も手に提げていた。
私は慌てた。
「あの…！これから、戸締まりがあるの。…本当に、本当に戸締まりするの。時間がかかるのよ、これ。だから…」
そう言うと、彼はおかしそうに笑った。
会話にならない私の会話がおかしかったのかもしれない。
自分で聞いていてもおかしいのだから、彼はもっと可笑しかったのだろう。
…ああ、ついてない。
その時はそう思った。
思いもかけず、予習してきていない部分を教師にあてられてしまった時に似ていた。

「戸締まりするんだろ？だったら手伝うよ」
彼は手に提げた鞆を置いて、てきぱきと戸締まりし始めた。いくつもある窓ガラスに、資料室や準備室の小部屋の鍵閉めも、あっという間に終わってしまった。
「さて、これでよし。じゃ、帰ろう。」
彼はそう言って、私を出口で待った。

夕日に照らされて、火狩遼は私を待った。
髪と横顔が、オレンジ色になり、私は彼がこの世の人ではないような、そしてやっぱり「寂しい人」だと思った。
そのじつと佇む風情が…何かを決めてしまった人のような気がした。
その時の私はあまりにもこども過ぎて、彼が何を考えているのか、何をそんなに人と距離を置こうとしているのかがわからなかった。
どんなにみんなと親しげにしているも。
彼はやっぱり、マリナのように、考えることなく自然にずっと人の輪に入っていけない。

…ある意味、火狩遼とマリナはよく似ていた。
誰とでもそつなく付き合うことができるけれど、誰にもその心を見せない。

でも、彼が彼女を好きなことは確かな事実だった。

最終下校を知らせるチャイムが鳴り響いたので、火狩遼に急かされるまま、私は慌てて荷物を持って図書室を後にした。

「瑛梨奈は図書室の鍵を常備してるの？随分と信用されているんだなあ」
私は苦笑いとも作り笑いとも言えるような引きつった微笑みをした。
愛想笑いには慣れていないし、彼に向かって極上の微笑みを返すという上級テクニックは持ち合わせていない。

他の生徒達にはじろじろ見られる、この道のりが早く終わってくれば良いのに、と思った。
私は人に見られて心地好いと感じるタイプではない。むしろ落ち着かなくなり、普段できることも集中できなくなってしまう。

本番に弱いタイプだと思う。

だからこそ、私は常日頃こつこつと地道に積み重ねていかなければ、何かをやり遂げることができなかった。

「…ください」

私はそう言った。

「え？」

彼は何かを考えていたらしく、私の声を聞き逃したようだった。

「ごめん。聞き逃した。…どうしたの？」

彼は「何？」と聞かずに「どうしたの？」と尋ねる人だった。

だからこそクラスの誰からも好かれる人なのだと思う。

もし、「何か用？」と彼のような人に聞かれれば、例え何か用事があっても私はすぐさま「何もないです」と言ってくるりと向きを変えてその場を立ち去ってしまいたくなるだろう。

ほらね、私と一緒に歩くと、彼は考え事を始めるくらい退屈なのだ。

少しだけ胸が痛んだ。

もう一度同じ台詞を言う気が無くなってしまった。

「いえ…なんでもない…です」

語尾が消え入りそうになった。

「名前を呼ばないでください、ってどうしてそんなことを言うの？」

彼は私が言った言葉を繰り返したので、少し驚いて足を止めてしまった。

考え事をしていて、聞こえていなかったのではないの？

「だからこうして質問してみた。なぜ、名前で呼んではいけないの？」

それは聞こえなかったから聞き返したのではなく、私の言葉の意味を私に尋ねたのだと、ややあってようやく理解した。

「…マリナは『イケダ』なのに私は名前で呼ばれると…ちょっと、驚きますから」

クラスメイトなのに、敬語はやめようよ。

彼は笑った。

透明感のある鋭い視線をこちらに向けたので、私はまた眼を反らした。

「だって、同じ名字の人が3人もクラスに居て、呼び分けられないしね。瑛梨奈って綺麗な良い名前じゃないか。」

私はそんなことを言われたことがなかったので、どうやって言葉を繋いだらいいのかわからずに、途方に暮れてしまった。

素直に賛辞に対しては、お礼を述べれば良かったのだけれど、そうしてしまうと名前を呼ばれても良いと許可をしてしまうことになりそうだったので、私はどうしたものかと、困ってしまった。

「あいつの…イケダの妹も同じ名前だから、凄く親近感が沸くんだってさ」

彼がマリナの話をし始めた。

私たちには共通の話題がなかったから、この最大の話題を続けることにした。

「そうみたい」

「いつも、イケダは瑛梨奈の話しかしないよ。おとなしくて、でも凄く勉強が出来るって。でもそれを自慢したり、転校ばかりで勉強が遅れがちなあいつを決して馬鹿にしたりしないで勉強を教えてくれるって。」

彼がそう微笑みながら言う様は本当に愉しそうだったので、つい私もつられて笑ってしまった。

マリナは屈託なく、なんでもあけすけに話をしてしまうのだろう。

彼女から見た私は、他の人達が見ている私とあまり大差がないように思えた。

いつも同じ評価。

もうちょっと積極的に。もうちょっと社交的に。もうちょっと…話題に入って。

でも、人の話を聴くのが喋るより好きな人が居ても良いのではないか。

ボタンとボタンホールのように、喋る人が居て、聴く人が居るから、会話は成り立つのではないのだろうか。

彼女の私に対する印象とは、他のクラスメートよりもやや長く一緒に居ても…。

同じだったということが哀しくなった。

でも彼は続けて言った。とても、優しく。

「よく似ているって言ってたよ。オレと…瑛梨奈が。」

「…どうして？」

「いつも遠くを見ているって言われた。そんなことないって言ったけどね。サッカーのことでも考えていたかなあ。…そうしたら、イケダは、『瑛梨奈に似てる』って言ったんだ。」

イケダが瑛梨奈、瑛梨奈というので、うつたみだ。

彼は少し照れくさそうに笑った。でも本当に良い名前だと思うよ、と付け足した。

「…良く人を見てるって。イケダが言うから。オレは人を見て態度を変えないよってちょっと怒ったんだ。そうすると、あいつはそうじゃないって言って。」

そこでひとつ、言葉を句切って火狩遼は私を見た。

少しだけ目を細めたその仕草が、とても大人びていて、私はまた落ち着かない気持ちになった。

「人の内面を見て…ただ、見るだけなんだって。」

どういう意味なのか、その時の私にはよくわかっていなかった。

随分後になって、その意味がようやくわかる頃には、マリナはまた転校が決まり、慌ただしくクラスみんなに「またね！」と元気よく言って、登校最終日を迎えることになった。

転校することが決まったの。

マリナが突然にそう言ったものだから、私はあやうくりボンの端を引っ張りすぎてしまうところだった。

…家庭科の実習で、ケーキを作ることになった。
できあがったケーキは日持ちのするパウンドケーキであったので、みんなが思い思いにラッピングして持ち帰ることが出来る。
意中の子がいる女子は、その子にケーキを渡すのが、我が校のささやかな伝統になっていた。

マリナがすでに等分されたケーキに四苦八苦しなながらラッピングをしているので、私は手伝おうか？と言った。
彼女は助かる！と明るく笑った。
人には向き不向きがある。
彼女は絵を描かせたらとても上手だったが、こういう細かい作業はあまり得意ではないようだった。
逆に私は想像力を求められる事は苦手だったけれど、こういった細かくて注意を払う作業は好きだった。

…ほんとうに、私たちは正反対だね

私が苦笑しながら、最後のリボンをきつめに結った。
こうすれば多少揺らしてもほどけることはない。

その時だった。彼女が、ふと、思いついたようにそう言えば、と言った。

私は声を上げずに、ただぼかんとしていた。
同じグループの女子はさっさと片付けを始めているので、作業台で話をしているのは、私とマリナの二人だけだった。

「いつ？」
「今月末」
今週末はもう月末近くだ。来週には月が変わる。
私は呆気にとられた。
確かに転校が多いとは聞いていたけれど、こんなにも短い期間しか在籍しないことがありえるのだろうかと思った。
「仕方がないよね…親の都合だもん。でもいいの！そのおかげで、たくさん友達と知り合うことができるし。新しい土地も楽しみだし」
彼女はそう言って笑った。

だって…
だって、火狩さんはどうするの？
私がそう尋ねると、別れることになるのかな、と彼女は言った。
私は息を呑んだ。

…後で話をしよう。ゆっくり。

ここでは人目があって話ができない。

私は、彼女に、放課後になったら図書室に来るように言った。
彼女はきつめに巻かれたリボンを見ながら、ケーキを持ち上げた。

そして、マリナはわかったと言った。

そして次には、その間の話はまったくなかったかのよう、「ね、瑛梨奈のケーキは誰にあげるのかしら」と言った。

私はどうして良いのかわからずに、ただ、淡々と調理実習室の片付けを始めた。
そうでもしなければ心を落ち着かせることが出来なかった。

私はマリナを…放課後の図書室に呼び出した。
今は定期テスト前で、部活動も活動を制限されているので、ここに残る生徒はいない。
もちろん…窓硝子の向こうから聞こえる運動部の声も今日ばかりは聞こえなかった。

マリナが、「どうしたの」と言って、図書室に顔を出した。
その言葉のかけ方は…火狩遼と一緒にいた。
私は理由がわからなかったけれど、少しだけ切なくなった。
切ない。
これまで味わったどんな気持ちより、それは的確だった。
でも「これまで」の経験が乏しい私には、それがどれだけ…どれだけ遣る瀬無くて、取り返しのつかない、失われつつある暁の時代であるのか、その瞬間にはまったくわからなかった。

私はいつも通り、いつものカウンターに座って…そして今日はやるべき作業が少ないけれど心を落ち着ける単純作業に没頭していたときだった。

マリナが、現れた。
夕暮れも近い、ぎりぎりの時刻だった。
そして…
程なくして、火狩さんが現れた。彼は、ジャージを着ていて。サッカークラブのロゴが入ったものだった。彼はサッカーの力量は、学生レベルを超えていた。
だから、別のサッカークラブに所属していることはすぐにはわかった。でも、彼は回りの輪を重んじるばかりに、そんなシャツを着ることもなかった。
…私は彼と彼女に何かが起こると確信した。

――でも。

私はその場に立ち入る勇気はなかった。

マリナと火狩さんは…今日、決着をつけるつもりで、私を立会人に仕立てたのだとわかっていた。

呼び出したのは私なのに。

結局は、マリナと火狩さんとの話になってしまう。

私は、マリナが羨ましかった。
彼女の、…その火狩さんを捉えてやまないその魅力が羨ましかった。
…きっと、彼だけではないだろう。老若男女問わず…彼女に魅せられて、そして地獄の沼に沈んでいく人はいないとは限らない。
でも、彼女は基本的に陽の人だった。すべての陰気を明るいものに変化してしまう、そういう陽気な人だった。

マリナと火狩さんは、図書準備室に入っていった。
彼と彼女の話し声らしき物音が聞こえるだけだったけれど、それはとても静かでごく短い時間だった。

…最初に出てきたのは、意外にも火狩さんだった。

彼は透明感がある鋭い瞳を、あたしにちらりと向けて…無言で出て行ってしまった。
その遣る瀬無い表情にあたしは胸が痛んだ。どういう訳か。

彼のその表情から、マリナと別れの話をしたのだと思った。

ややあって、マリナが出てきた。

「ごめん…火狩と先に話をする約束をしてしまって…」
彼女は頭を掻いた。
私はちょっと曖昧に微笑んだ。
今の会話を聞くべきでないと思ったから、どうやってその次の話をすれば良いのかわからなかった。

私は手元にあった、すでに整頓された書籍をまた、整え直すフリをした。
「…瑛梨奈」
「はい」
「黙っていてごめん。転校のこと。…急に決まったの。いつもそうなの。」
「怒ってないよ。」
でもその顔は怒っているよ、とマリナが少し哀しそうな顔をした。
「怒ってないよ。…ただ、火狩さんに一番に話しをしなかった理由が知りたい」

彼は明らかに私より後にその事実を知ったはずだった。

放課後のHR直前までは、彼は普通に彼女に笑いかけていた。
それが、図書室に入ってきた彼は、取るものもとりあえずと言った感じで、部活の最中に抜け出してきて、と言った感じだった。
今は部活動の活動時間も厳しく短縮制限されているから、それを抜け出してこまでやって来るのは、相当の理由があつてのことに違いなかった。

「瑛梨奈は本当に人をよく見ているね」
マリナがそう言って苦笑した。ちょっと困ったような笑いだった。
かなわないなあ と彼女は小さな体で、カウンターにもたれかかった。
その仕草が、妙に大人びていて、私は少しだけどきりとした。
カウンターの向こう側に座っている私と、同じくらいの目の高さにマリナの茶色の瞳があった。

「…火狩も、転校するんだよ、もうすぐ」
マリナがまた内緒の話だよ、と言った。
「え？」
私はそこで初めて顔を上げた。
瑛梨奈は綺麗なんだから、もっと顔を上げた方がずっと良いよ、とマリナが笑った。

「転校？誰が？」
「だから、火狩が。…いえ、違うね。火狩とあたしと。ほとんどタイミングは一緒だと思うよ。」

…知らなかった。マリナの転校のことさえ知らなかったのだから…火狩遼の転校の話なんてもっとわからなかったはずだ。

マリナはちょっと首を傾げて、茶色の髪の毛を揺らした。

彼のご両親の元に行くことになったらいい。すでに手続きも済んでいるという。
外国と日本を行ったり来たりして、その間の進学年がその国ごとに異なるのであれば、彼の本来の学年に就学させるか…もしくはスキップで学校を早々に卒業させて、彼がもっと自由に学べるようにさせてやりたい、というご両親の教育方針だということだった。

「だから、あたしと火狩はそういうことになったの」

そういうことの意味がわからないのだけれど……
私は唇を噛んだ。

「だから、別れるってこと。いえ、もう別れてきた。」

ね？とマリナが肩をすくめたものだから、私は声を抑えて言った。

「それで良いの……？」

マリナが困ったように言う。

「良いも何も、これ以上一緒にいられない。ただ、それだけだよ。」

普通なら。友として、私は何か声を荒げて反論した方が、「普通の友」らしかったに違いない。
でも、私は黙ったままだった。

……マリナの転校のことより、火狩遼の転校が、これほど堪えていたことに、今更になって気がついてしまったから。

私はそんな自分がいやだった。
だから、マリナと過ごした時間より、彼を見続けた時間の方が長いから、きっとそう思うのだと思うことにした。

マリナと過ごす時間も……彼と一緒に共有する時間も残りが僅かだということは事実で、これは変更することが出来ないのだとしたら。
私には一体、何ができるのだろう。

行動を起こす、というのは、私がひどく苦手なことだった。
今までと同じであることができない、ということは、とてもしんどかった。

風のようにやって来て、そして去っていくマリナは私と正反対だった。
私は彼女を自分と違うと思ったけれど、そんなマリナのようにには到底なれないと思った。

でも、このとき初めて、彼女を羨ましい、と思った。

こんな風にあっさり何にも執着しないで脱ぎ捨てて行くことの出来るマリナが羨ましかった。

私のことも……そして火狩さんのことも、きっと次の土地に行ってしまったら忘れてしまうのだろう。
彼女は太陽のような気質の人だったから、その太陽の暁は、みんなにまんべんなく照らすことはあっても……特定の誰かに注ぐことがないのかもしれない。
そんなときが来ることはあっても、その注がれる対象は、少なくとも私ではないことは明白だった。
そして火狩遼も、その対象でないことに……私は、どういう訳か……安堵した。

その瞬間、私はかっとなりを赤くした。

——私は、マリナと火狩さんが別れたと聞いて喜んでいる……???

自分の気持ちがわからなかった。

なぜ喜ばなければならないのだろう。
友人と、クラスの星のような人が、やむを得ず別離の路をたどらねばならないことを、どうして喜ばなければならないのだろう。
マリナが、それじゃ、帰るね、と行って図書室を出て行った。
私は待って、と言おうとして、慌てて立ち上がり、そして積んであった本の山を倒してしまった。

ああ……大変

私は屈んで、床に散らばった本を拾い上げた。

——動揺していた。

そして、下を向いて作業をしていた私は、不意に、拾い上げようとした本の上に滴を落としたことに気がついた。

私は泣いていた。涙をこぼしていた。
図書館には誰もいないことが幸이었다。
なぜ、涙が出るのかわらなかった。感情の高ぶりは感じていなかったから。

ぐいっと手で涙を拭いたけれど、後から後から流れてくる。

その時になって初めて、わかった。

自分が恋をしていることに。

マリナと彼が別れたことを喜んでる自分に失望して流した涙をみて、ようやくわかったのだ。

クラスの女子と同じように、彼の一挙手一投足に歓声を上げるような恋ではなかった。
私は、マリナと一緒に居て、一緒に微笑む彼が好きだということに気がついた。

私の友達と…私の好きな人が一緒に笑って並んでいる姿が好きだった。
だから、彼らが別れるとなったときに、安堵した自分が許せなかった。

火狩遼は、寂しい人だと思った。
彼とも仲良くなるけれど、何かをじっと考えている様子を時折見かける度に、彼が学生らしからぬ考えを巡らせていることを知った。
それを誰かに告げるのでできない厳しさと高潔な感じが、私の目を惹いたのだ。

だから…同じようなマリナが現れて、彼はほっとしたのかも知れない。
彼女も火狩さんによく似ていた。
こちら側には簡単に滑り込んでくるけれど、決して自分の領域には踏み込ませない。
転校を繰り返しているから、人との距離を取るのが上手なのかもしれないと最初は思ったけれど…どうも違うようだった。
何も聞かない私と居るとほっとすると言ったマリナが本当のマリナだと思った。
本当は、あの太陽の様な人は、誰もが見ることの出来ない内なる何かを秘めた人なのではないかと思った。口には出さなかったけれども。

マリナには、悩みや真意を打ち明けることができるのかな、そうしたら、彼は少しだけ…寂しくなくなるのかな、と思った。
二人がつきあい始めたとき聞いた時に、それは良かったと喜べた。
でも、今、私は別れたと聞いて再び喜んでる。

…この恋は秘めたる恋にしよう。
そう、思った。
誰にも言うてはいけない。
誰にも告げてはならない。
誰にも…知られてはいけない。

私の初めての恋は、秘めた恋として、封印しなければならない。

そう、決心した。

マリナがこの学校を去る日が来た。
マリナと火狩遼は、普通に過ごしていた。
一緒に話をするし、一緒に帰ったりもする。
でも、彼と彼女の間には、もう、何かが変わっていた。

みんなで色紙を書き、連絡先を教え合った。
このうちに、何人が彼女に連絡を取るのだろうと思った。
私は、彼女に約束をしなかった。
彼女に手紙を書くね、と約束したところで、彼女は自分の生活で慌ただしい日々を過ごすことになるだろうと想像していたし、短い私との時間を永遠に継続して欲しいとは図々しくて言えなかった。

私にとってマリナが特別であるように…マリナにとって私が特別であるとは限らなかった。

彼女はひとりひとりに、またね！と大きな声で挨拶した。
そして、火狩遼のところまでやって来ると…またね、と穏やかに笑った。
火狩さんは、そうだね、と言って、彼と彼女は握手をした。
少し、寂しげなその顔が切なかった。

マリナは一番最後に、私のところに来て、言った。
またね！と一番大きな声で言った。
私はうん、と小さく頷いた。
連絡先のカードを交換したけれど、彼女は転校が多いから、やがて連絡を取らなくなってしまうたら、私は彼女の居所がわからなくなってしまうだろうと思った。
彼女から連絡を取らない限り、私とマリナはこれが最後の顔合わせになると感じた。

これが最後なのかも知れない。

そう思うと、私は彼女の居た時間が夢でないかと疑うくらい…あっという間に私の前から消えてしまった。

そうして…風のような、太陽のようなマリナはこの学校を慌ただしく去った。

マリナは、私に、大きな宿題を残していった。
「瑛梨奈。最後まで、火狩を見てね。…見ているだけで良いと思うから。」

マリナ・イケダは別れ際にそう言って、そして居なくなってしまった。

マリナの転出よりも、火狩遼の転校の話が判明したときに、クラスはおろか、学校全体がどよめきを起こした。

彼は、もうすぐ日本を発つ、と言ってちょっとだけ笑った。
サッカーをもうちょっと続けたかったな、とそれだけを残念がっていたけれど、彼はマリナと同じくらい、あっけらかんとしていた。

もう誰もマリナと火狩さんがどうなったのか、尋ねなかった。
ただ、彼がここを去ることだけを残念がった。

私はマリナのことを火狩さんが忘れていないことを、知っていた。
注意深く、見ていたから。
時々、空いた席を眺めているその眼差しがとても、遣る瀬無かった。
そんな顔は決して誰にも見せないと心に決めていたのだろうけれど、それでも、垣間見えるその様子は、やっぱり…どこか寂しげだった。

彼女が私に課した宿題だった。

彼を見ていなければならない。
最後まで。

こっそり見ていたつもりだった。
また元の生活に戻った。
変わったのは、私が意識して、静かに彼を見つめるようになったことだけだった。

けれど。

彼は私に声をかけきた。
定期テストも今日で終了して、また放課後に図書室を開けることになったので、私は図書室に向かう廊下を歩いていた時だった。

「瑛梨奈」
彼は制服だった。
偶然を装っていたけれど、HRが終わった後、ずっと待っていたらしかった。
最初、誰が私に声をかけてきたのか、わからなかった。
もう私を「瑛梨奈」と下の名前で呼ぶ人はこの学校に居ないと思っていたから。

ぎくりとして足を止めた。

彼の顔をまともに見られなかった。
見れば…きっと、私は今の私でなくなる。

それが怖かった。

私は静寂の中で過ごしたかった。
だから、彼を好きだという気持ちが私を乱すことが怖かった。
恋とは穏やかでいられないものだと、何となくだけれど感じていた。

彼とは…これが最後の話になるだろう。

そう思った。

「どうしたの。部活は行かなくても良いの？」
と尋ねた。彼は良いんだ、と言って少し笑った。

本をね、返しに来たんだ。
彼は持っていた本を持ち上げた。

私は少しだけ待ってね、と言って、図書室の扉を開けた。
締め切っていたから、少しだけ空気が澱んでいた。

…静かな図書室の静寂と同じものが、私の中にあっただけなのに。
私は、こうして彼の視界に自分が入ることさえ…どきどきした。

彼の視界に入らないように見つめるだけで良かったのに。

そうして、中に入ると、私は窓を開け始めた。
あまり全開にすると湿気が入るので、ほどよく適度に空気が対流するよう、細く開けた。
手伝うよ、と火狩さんが言ったけれど、私はすぐ済むから大丈夫よ、と答えた。

彼が渡してくれた本は、まだ返却期間までに相当日数ある本だった。
でもその期限の日が到来する頃には、彼はもういない。

「…片付けは済んだ？ロッカーとか。荷物とか…」

「ああ、元々、あまりなかったしね」

私の答えに、彼は笑った。

彼は持ち物が少なかった。

荷物もあまりなかった。

こんなに長く居るのに、彼はいつでも出立できるかのように、最初から準備していたかのようだった。

「いよいよ、明日だね」

私はそう言った。彼の最後の日だった。

「あれから…イケダさんとは話げできたの？」

「別れたから」

彼は短くそう言った。少しだけ、眉根を寄せて言った。

私はその言葉に声をかけることができずに、やっぱり黙ったままだった。

火狩さんは、少しだけ開けた窓のひとつに立ち寄り、窓を全開にした。

風が入り込んできて、彼の黒髪をなびかせた。

その様子があんまりにも綺麗だったので、私は息を止めてその姿に見入っていた。

「オレももうすぐ…日本を離れてしまうしね、次にどこかで逢うこともあるだろう。」

「…それで良いの？」

「どうということ？」

彼は私に振り返った。ややつり上がり気味の切れ長の瞳が私に向けられた。

「別れたら、それでお終い？そしたら、火狩さんの、気持ちはどうなってしまうの？やっとな、やっとな、見つけたんじゃないの？」

「瑛梨奈」

彼が短く私の名前を呼んだ。

私は思わず、口に手を当てた。

言ってはならないことを言ってしまったと思った。

「ごめんなさい。言い過ぎた」

見れば…

ちょっと哀れそうな、困った顔をした火狩さんが佇んでいた。

「謝ることないよ。瑛梨奈には隠し事はできないね」

「イケダ、元気でやってると思うよ。だって、あいつはそう、元気の固まりのような人だから。」

そうして火狩さんはまた風を受けながら言った。

「イケダの言うとおりでだよ。確かに君はよく人を見ているね…オレの考えていることを見透かされて居るみたいだ」

そんなことないよ、と言ったけれどその声は小さくなる一方だった。

「だから、わかってるんだろう？…本当の、オレのこと」

彼はそう言うのと、勢いよく窓を閉じた。

その音の大きさに驚いて、私は目を瞑った。

…そして目を開けると。

私の知っている火狩遼ではなかった。

みんなの知っている火狩遼ではなかった。

老成した、静かな男の人がそこに居た。

唇を結び、その視線は厳しかった。

眉を少しだけ寄せて、私を見つめるその視線は深くて…そして哀しみに満ちていた。

何かを決心した人の顔だった。

同じ顔同じ体なのに、どういうわけか、まるっきり別人のようだった。

その時、わかった。

彼が日本を出るのは…進学だけが目的ではないのだということに。

だから、マリナとは連絡を取らないことにしたのだ。

だからこそ、いつかどこかで会える、と彼は言ったのだと思う。

マリナに本当のことを言ったのかどうかは、わからなかった。

彼女は本当の彼を知っていたのだろうか。

だから「最後まで見て」と言ったのだろうか。

その時。

風が強く吹いて、別の窓硝子から吹き込んだ強風に煽られて、図書室のカウンターに積んであった貸出票の紙が大量に舞った。

私と火狩遼の前に、紙のカーテンがかかった。

ああ、大丈夫か…

彼の穏やかな声が出て…そのカーテンがすっかり床に落ちる頃には、彼はもういつもの彼だった。

私は幻を見ていたのかと思い、目を擦った。

床に飛び散った大量の紙を私は拾い上げた。
ついこの間、本を拾い上げた感覚を思い出した。
その時には…マリナが去ろうとしていて、火狩さんが居た。
この紙を拾い上げたときには…私しか残らなくなってしまう。

彼は手伝うよ、と言って一緒に拾い上げてくれた。
もうすっかり、いつもの火狩さんだった。

けれど…けれど、彼はぼつりと言った。
「見てるって…辛いな」
その言葉の意味がいくつもあるような気がして、私は声を詰まらせた。

彼は人の領域には踏み込まない。決して。
踏み込みたくても踏み込めない、そんな感じだった。
この場がかりそめの場所であることを、彼はよく知っていたから、だから彼は自分の中にも誰も入れないし、決して特定の誰かに踏み込もうとしなかった。

そうだね、と私が言うと、彼は最後の一枚を私に手渡して…行くよ、と言った。
そして立ち上がった。

「瑛梨奈と話ができて良かった」
彼は私の頭の上に手を置いて、ぼんぼんと頭を叩いた。
「元気で…いつか、また会おう」

私と彼には握手はなかった。
ただ、最後の会話だけが。
私の思い出になった。

そしてそれは、何年も経過しても忘れることが出来なかった。

そして、火狩遼は私たちの前から居なくなった。

本当の彼を見たのは、私とマリナだけだったのだろうか。
本当の彼を受け入れてくれる人が他に居るのだろうか。

——寂しい人。

私の最初の印象は、間違っていなかった。

そして彼を見ていたいと…ずっと見ていたいと思ったけれど、彼はそれに気がついていた。
最後に、自分の姿を見せて。

マリナの言ったように、私と火狩遼の方が似ていたのかもしれない。

私は好きになってはいけない人を好きになってしまった。
彼の事は忘れない。

——何年後かに再会することになったのだけれど。

その時まで。
学校の校門を通りすぎるたびに。
図書室の窓をうっかり開けすぎて、風が強く入りこんでしまった時に。
私は彼と…彼を見てあげてと言った太陽のような人を思い出した。

(FIN)

F-side 不磨 前編

***千載不磨01

不磨（ふま）という名前が嫌いだった。
最近の若い教師は、この名前の意味がわからないらしい。
わかっている。
僕の名前を最初に呼ぶときには、職員室で最初にふりがなを鉛筆で薄く出席簿の名前の上を書くのだ。

そして、そういう作業をしてなお・・・僕の名前を呼ぶときには、誰しもが少なからず、眉をしかめる。
おいおい、わかっているからそういう表情をするのか？
わからなかったら・・・調べてみるとかできないのかな。

僕はそうやって、初対面で僕の名前についてあれこれ思う輩をふるいにかけていた。
賢いとか、知識があるとかそうじゃない。
「なんて意味で、どういう由来なのか」と聞いてくることさえ出来ない者は、僕には必要でなかったから。
わからなかったから、聞けよ。
僕はそう思いたかった。
僕から情報発信をしなければ、決して理解しようとしないうちは、老若男女問わず・・・皆、表面だけのつきあいしかしようとしなかった。

・・・僕の両親は、いつも不在がちで、放任主義の家庭のこどもだからああいう偏屈なこどもになるから、感化されてはいけな
いから一緒に遊んではいけない、と。
どの同級生の親も口を揃えて言った。
ウチの事情を知っているくせに、自分たちと同じではないから、仲間はずれにしろと囁くのは、いつだって・・・こどもではなく
て大人の方なのだ。
こどもは残酷で、すぐに異質者を村八分にすると大人は言う。
違うと思う。
こどもは・・・そんなことには頓着しないんだ。
誰が親で、自分とどう違っていて・・・でも関係しない。
だから、こどもなんだということに大人が気がつかないだけなのだ。
大人とこどもの境界線を引いているようで、区別がつかないのは僕よりずっと年齢を重ねている大人の方なのに。

僕は毎年あるクラス編成に辟易していた。
マンモス校ではないが、都内の公立小学校は出入りが多い。
特に、この地区近辺は、最近、学区の半分に当たる地域で、再開発が行われており、駅前に大きな商業施設の開店や、住居住宅の
変化がともなって、慌ただしく変化を始めている最中のことだった。
住宅街の中にある僕たちの生活範囲では、昔ながらの居住者達が、いつも新参者に対してぴりぴりしていた。
大人の精神の影響を受けて、そのこども達だって同じように神経を尖らせる。
親に失望されないように、友を選ぶようになるのだ。

・・・馬鹿馬鹿しい。

僕は呆気にとられて傍観することにしていた。
いや、諦観かもしれない。

確かに、僕の親は不在がちで、家に戻れば、周囲の家より大きな邸宅に住んでいて、お手伝いや、代々我が家に使える使用
人や・・・ばあやと言われる存在が闊歩している。
でも、それが僕の価値を証明することにはならない。

あの家のこどもは・・・とても偏屈だ。
僕はつくづく、私立校に通わせてくれなかった両親を恨んだ。
同じ環境で育った者同士が居れば、自分を含めて、周囲はもっと空気を読めたらさう。
そして、それが普通だと思っているから決して、そんなつまらないことで僕について価値評価することはない。

・・・なんてことはない。
単に、妬みや嫉みから来ている感情と・・・異質な者だから排除しようという気持ちが相まっているのだと・・・気付くには、
あまり時間がかからなかった。

ねえ・・・
どれだけの人が、僕の名前に込められた願いについて、気がついてくれているのだろうか。

僕の生江は・・・千載不磨ということから来ているのだということに。
決して「磨かれない存在」なのではなく・・・
摩滅しないで千年の後までも消えないこと示し、転じて「永遠」を意味するの。

そのことに気がついたのは、たったひとりだった。
彼は自分の本当の名前を「ヒロ」と呼ぶのに・・・彼はいつも「ダイ」と呼ばれていた。
大、という字を使うからだ。
僕と違っていた。
僕の名前を慎重に呼ぶ人々は、誤っているのに、大の名前を・・・
ダイ、と呼んだ。
そして彼はそれでも良いと言って笑った。

・・・本当の名前を呼んでもらえない。
それは、本当の名前を呼ぶのに最新の注意を払ってなお、本来の意味を知ろうとしてもらえない者と、どういう違いがあるのだろ

うか。

僕は困惑した。

そして・・・

ダイという人物と初めて一緒にクラスになった時に初めて交わした言葉が・・・彼からの言葉であったことを、今でも忘れない。

「千載不磨って凄い名前だよな・・・よほど、よほど・・・おまえが生まれて来てくれて嬉しかったんだな」

・・・僕とダイは同級生で、まだ小学生だ。
それなのに・・・そんな言葉を漏らす小学生なんて、僕は知らなかった。

・・・彼が元々知っていたのではなく、僕と話をするために、僕の名前の由来を図書館で調べたと知ったとき。

僕は、この人物は生涯の友になると思った。

友になる、というのはおこがましい。
けれども・・・けれども。

僕に近づいて来た、家族ではない第三者は、ダイが初めてだった。

彼は理知的な瞳で、笑った。

「図書館って面白いな・・・なんでも知りたいことがわかる。しかも今はインターネットでも検索できるけど・・・文字や自分で調べるこつて大事なんだなと思った。
不磨、おまえは凄い。いつも図書館に居て、あんなに膨大な文字を見ているなんてどんなに凄いかと思ったけど、やっぱり凄い」

・・・ダイは知っていたのだ。

僕が誰とも話をするのができないから、図書館で時間をつぶしていることを。
でも、図書館の書物に埋もれている時間は決して嫌いではないことを。

そして・・・彼は僕に近づいて来た。

世の中には、誰とでも仲良くできる人物がいるそう。
でも、ダイも僕も・・・そうではなかった。
躊躇いと驚きをもって、相手に近づく。それが普通なのだけれども。

・・・そして、彼は僕に語りかけた。

僕は微笑んだ。

「僕の名前のこと・・・よく知っているね」

言葉が少ない、といつも言われる。
いつも窘められる。
でも、この短い言葉で通じる相手が居るのだと、初めて知った。
短い身近いに通じる。
身に近しい相手だから・・・少ない言葉で通用する。

僕の何がダイの興味を引いたのだろうか。
まずは、そこから始めようと思った。

どうして、彼のような存在が居るのだろうか。

周囲の噂は聞いていただろう。
この学年で初めて一緒にになった相手だったけれども、いろいろと話は吹き込まれていたはずだ。
・・・彼にはいつも人が集う。
そして彼はそれを苦としていない。
それなのに。
それなのに・・・僕にも等しく語りかける。
どんな気まぐれがそうさせるのだろうか、と身構えていると。

ダイは、ちょっと笑った。

「オレの知っている人に・・・不磨は良く似ている」
と言った。
僕は鼻白んだ。
「僕は僕であつて・・・誰の模倣でもないよ」
「ほら そういう所がそっくりなんだよ」
ダイはまた、少し可笑しそうに笑った。

・・・もし。
僕が女子だったのなら。
彼に間違いなく恋していただろう。
同性かどうかも問題にならないくらい・・・それを凌駕する微笑みだった。
彼はとても綺麗に笑った。

「オレ達、気が合うと思わないか」
それが彼との長い付き合いの始まりだった。

それが・・・最初の千古不磨の始まりだった。
***千載不磨02

人と人が知り合うのに、始まりはない。
だから、終わりもない。

始めると意識しないから。
・・・終わりと意識して誰かとの繋がりを断ち切ることはしないし、できない。

長い時間を経て久方ぶりに逢う者も彼の友なのだ。
・・・そして彼には時間の隔たりや、径庭（=ふたつのものが隔たって距離があること）は彼には影響されない。

ダイはそういう考えの持ち主だった。
それが誰かの影響であることは、すぐにわかった。

「いつも一緒に居ることが親密さであるとは限らない」

僕とダイを含めた学年の卒業が近くなったとき。
彼が、そのように漏らすことが多くなった。

年が明けた頃からだろうか。
この頃になると、国内の私立中学校の入試情報が頻繁に飛び交い、欠席する者が出れば「アイツは私立を受験するのだ」と静かに、本人に聞こえないさざめきとして囁かれていた。
表面的には・・・皆が同じ学区に進学することが当然のように、穏やかに日々が流れていく。
でも、その中で、幾人かが、その静寂から離脱することを、他でもない、僕たちはわかっていた。
少なくとも、僕とダイはわかっていた。
・・・ダイはそのまま地元の学校に進学することが決まっていたし。
僕はようやく・・・家族と一緒に、様々に彼らと一緒に諸国を渡り歩くことを赦される年齢になったことを喜ぶことで頭がいっぱいだった。
まだ、誰にも話していない事実なのに。
それでも、ダイはわかっていたようだった。
僕たちが。
僕とダイが。
間もなく離れてしまうことを、彼は知っていた。
ダイは、僕と友達だと思ってくれているのだろうか。
僕は・・・ダイを友だと思っていると同じように、彼は僕のことを永遠の友と思い定めてくれるだろうか。
この頃になると、仲間内に秘密が発生する。
他校への受験を意識している者は、試験結果が漏れて自分のプレッシャーになることを懼れている。
そしてそのまま定められた学区への進学を決めた者は、学区によって・・・ここに居る誰が離れて誰が同じ空気を吸うようになるのかという打算を始める。

これまでは最上級生だったのに、今度は下級生になる。
大人とこどもくらい体格に差が出てくる者たちが集う場所を憂えて・・・僕たちはそこに行き着かなければ先に進めないことも、十分よく承知していた。
憂えるのは、僕たちがいちど「おとな」になったのに、また「こども」に戻るからだ。
それを制度という強制力でもって「当然のこと」と言われるからだ。
・・・それまでは上級生で、何でも「お兄さんだから、お姉さんだから」と言われてきた。
それなのに、今後はその立場を捨てると言われる。
理不尽なことを損理だと受け止めるほど、僕たちはおとなじゃない。

「・・・雪合戦、最後になるな」
ダイがぼつんと寂しそうに言った。
彼は地元の学校に進学することが決まっていた。
ダイは、クラスのリーダー的存在だ。
それなのに、ちっとも・・・そういう立場をひけらかさない。
自分では意識していないのかもしれないが、彼には不思議な憩いの空気が纏わり付いている。
家では、父は会社員であるものの昔ながらの地元民であることを利用して、持っている土地をアパートにして経営しているという。
他の誰よりもたくさんのいろんな人と交わると、彼のような人間になるのだろうか。
人見知りやが激しく、誰にも自分のことをわかってもらえないと信じ込んでいる僕には、彼はある意味興味の対象であり、驚異的であることは確かだった。

「今年は雪が多いみたいだね。・・・珍しい」
僕はダイの言葉に呼応した。
いつも闊達なダイは、僕の前ではどういいうわけか寡黙で静かだった。
少ない言葉を交わして、どれだけ会話が続くか愉しんでいるようにも思えた。
僕がそういう気配を好んでいたから、彼は合わせていたようだったけれども、最近では彼の好みは、実はこういった静かな空間な

のではないのかと僕は思うようになった。

僕の通っていた学校では、クラス対抗の競い、というものは、滅多に行われなかった。保護者の誰かが、競争させるのは良くない、と声高に言い始めた時代だった。・・・けれども、実際の・・・当事者である僕たちはそれを「競争」だなんて決して思っていなかった。コミュニケーションの一環であり・・・それは普通の遊びだった。その遊びをひとつずつ奪われていき、そして自分たちは・・・大人になるのだと、何となくわかっていた・・・そんな時期でもあった。

寒さと湿度で、教室の窓硝子が白く曇っていた。ここ数日、雪が降ったり止んだり、夜間には冷え込んだりして・・・この国には珍しい厳冬の季節を迎えていた。特に、数日前に降った大雪は、このあたりの交通機関をすべて麻痺させて、そしてまだこの国の上空に居座っていた。徒歩圏内で通学できる今のうちはまだ雪に喜んで通うことが出来るが、進学したら、電車の交通状況を調べなければならぬわね、と家人に言われて僕は憂鬱さが増していくばかりだった。

ダイは僕に横顔を見せながら、曇った窓の向こう側に広がる灰色のどんよりした空を眺めていた。この時期は、僕たちのように進学先が決まっている者は、割と時間にゆとりがあって、ダイは最近合気道を習い始めたようだった。

少し引き締まって、細長くなった顎が印象的だった。ダイは普通の子だと思うけれど、あまりいろんなことには執着しない。しかし、どういう気まぐれなのか・・・聞いてみたけれど「友達の友達が進めてくれたから」と言っていた。僕の知らない友達のことを、ダイが語ったのは、その時だけだった。彼は学校外の交友関係については、ほとんど喋らない。最も、この狭いコミュニティの中で・・・誰か余所者と親しいと自慢する愚か者は居ない。自分の知らない者のことを話されても、それは理解したり共有することはできない情報なのだから。

「ダイ・・・何か、心配事？」僕はそう言って彼の思考を中断させてしまったことを少し悔いながら、話しかけた。ダイはたぶん、ちょっと変わった思考回路を持っているのだろう。クラスの誰もが考えつかないようなことを提案するが、決して強要しない。そういう風に見えるのは自分だけなのだ、いつから気がついていたのだろう。誰かと少し距離を置くときには彼がおとなの顔をするのを誰が気がついているのだろう。・・・僕しか知らない秘密であれば、それはとても・・・とても苦しくて切なくて・・・そして僕にしてみれば僅かに嬉しい事実であった。彼はひとりじめできない。これは他のクラスの女子が喚き散らす「恋する」気持ちとは違っていた。男女問わず・・・教師でさえ、ダイをひとりじめしようとする。彼は誰のものにもならないのに。

わからないのだろうか。みんな、わかってないのだろうか。

彼が僕の傍で静かに本を読んでいるときに、僅かに微笑んでいることを。彼が僕の傍ではほとんど何も話さずに、深く何かを考えていることを。

傍目から見れば、僕とダイは一緒に過ごしている時間がとても長いように映るだろう。でも実際には、ダイは僕の傍に居ながら、いつも違うことを考えている。それを尋ねたり咎めたりしないから、彼は居心地が良いから・・・僕が傍に居ても良いと許可してだけなのだということに・・・僕以外の誰が気がついているのだろうか。

でも。ダイの知性に溢れた・・・静かな瞳が、空を見て、そして誰かを思い浮かべているとき。その瞬間に、傍に居ることを赦されたのは、他の誰でもない僕だけなのだということの希有なる資格を僕は噛みしめている。

わかっている。

・・・これは・・・刻限があるからこそ、そんな気持ちになるのだ。

間もなく、僕とダイは離ればなれになる。だからこそ、僕は、僕の名前のような、不磨の関係を誰かと結んでおきたいと切に願っているだけなのだ。ダイでなくてはいけないというわけではなかった。でも、ダイで良かったと思った。

・・・彼は、僕の領域に入ってきた。僕がそれを許可したから。

でも。彼の心に入り込んでいる人がいる。彼が僕の領域に入り込んだように。

「ボクのウチのアパートに住んでいる奴で・・・ひどい風邪を引いているのが居てさ」「そう」

僕はその時に、ダイの横顔が・・・とても穏やかでありながらとても躍動している気持ちを抑えていることに気がついた。

彼は自分でわかっているのだろうか。

・・・その人のことについて、初めて話を聞くのに。

彼はずっと・・・その人の事について心の中で繰り返し語っていたのだということがわかるくらいに、ごく、自然に話をしたものだから。

僕はしばらく驚いたと伝えることが出来ずに、ただ、黙ってダイの話を聞くばかりだった。
***千載不磨03

そういえば、ダイが誰かの話をするのはほとんどないことに気がついた。
家族の話をしたり、友達の話をしたり。興味があることも熱心に語ることもなかった。
随分と、「薄い」人なのだなあと思っていた。

たまに居る。
そういう人物が。

話に知識はあったり、興味をそそられることもあったりするのだけれども、どこか、こう・・・執着しないというのか・・・
僕の当時の語彙力では上手な表現は見当たらなかったけれど。

自分は他のみんなと違う、と思っているのではなくて・・・
もう、ダイはものの見方が僕たちの年代の大部分とは違っているのだけれど、それに自分自身が、気がついていないらしかった。

彼のことを表すびつりの言葉はなかった。
今も思い浮かばない。
彼を何かに当て嵌めること自体が、烏滸がましいと思う。
・・・強いて言えば、雲煙過眼とか行雲流水とかいう言葉がびつりだった。

だから、彼が異質だという扱いを受けたり拒絶されたりすることはない。
けれども、誰かを心に深く留めておくことはしないようにしているような・・・そんな気がした。

僕たちには未来があって、この先何でもできるのに、ダイはそこに高慢になったりすることがなかった。

ちょっとだけ大人なのかもしれない。

なぜ、大人なのかは、彼にもうまく説明できないだろう。
僕にもそれを事細かに事実として説明することはできなかった。

この時期特有の・・・「何となく」という言葉を当て嵌めるしかなかった。

彼は、何となく大人だった。
そして何となくこどもだった。

間もなく皆が別れ別れになるという時になって、そこで初めて気がつく雰囲気であったりクラスの仲間関係の変化であったり・・・
僕たちはそういったことに対して鋭敏に変化を感じ取り始めていた。
早熟な女子は、永遠の別れでもないのに、「最初の恋」を「最後」の恋にしたがった。
未熟な男子は、永遠の別れでもないのに、しきりに、これまでの遊び仲間と、これからずっと先の遊びの約束を取り付けることに熱心だった。

ダイは女子に結構人気がある。男子にも人気がある。

最近背が伸び始めたからだろうか。
女子も男子もみんな彼を「ダイ」と呼ぶ。
本当は「ヒロ」と呼ぶのに。
担任の教師も彼をダイと呼んだ。
彼の家族も、彼を「ダイちゃん」と呼ぶので、彼がその時にはかなり嫌そうな顔をしていたことを思い出した。

それがどういういきさつでそうなったのか明白な理由があるようなのだが・・・彼は理由を教えてくれない。

その時だけ、彼は小さな微笑みを創って、秘密を持っていることを明白にした。

彼が大人びている瞬間があるのは・・・
何か秘めたる想いを持っているからなのだろうか。
恋愛に限らず・・・誰にも言わない秘密が出てきたときに、人は「こども」から「おとな」になるのだと思う。

僕はその点で言えば、かなり昔から大人だったけれど、それとダイの「おとな」は違うような気がした。
それでも良いと思うが。
だって、僕とダイは同一人ではないから、同じ「おとな」という境界をわざわざこしらえて、自分たちを区別することはないと思っていたから。
そんな僕の気質が、彼のどこかのなにかに気に入ったらしい。

誰かに気に入ってもらおうとか、気に入るとか。
そういうことは関係がないのだ。

ただ、互いに楽だった。

干渉しないし、長い時間を共有することが親しい間柄であるという定義を持っていなかったから。
僕は元々が・・・そういう環境にあったので、特段に気にすることもなかったのだが、ダイは普通の家のこどもだ。
きょうだいだっている。
それなのに、彼はどうしてああして人と距離を取ることが得意なのだろうか。
誰かと暮らすとそうなるのか。
いや、違う。

だって僕はそうではない良い証拠であり見本だったから。

・・・その彼が、自分の身の回りの人物で、僕の知らない人のことを話し出した。ダイは、知らない人のことを話すことは滅多にない。ましてや、彼の家の住人たちについて述べることは家で禁止されているようだ。しかしそれ以前に、彼はそういったことにあまり興味が沸かないようだった。「知らない人の話をして、つまらないだろう」と言う。同じクラスの者たちは、自分の交友関係や見聞録を披露したいがために、そういった話を多くしたがるものだったのに。彼は違った。

「へえ」
僕はその話を聞き流すべきかどうか躊躇した。
「この間の・・・雪遊びをしようって言った大雪の日に・・・シャボン玉を一生懸命吹かして、風邪を引いた」
だから看病をしたいので、当面の間は早く家に帰ると言った。
残された僕たちの共有時間は少なかった。

皆で授業を受けるでもない、一日の大半が自習時間になるという奇妙な日々が・・・何よりも優先されるべき時間であるとの教室にいる誰もがそう思っていた。
ちらほらと欠席する者たちは、私学を目指す受験組だった。
それを知っていても、口に出さないルールを僕たちは知っている。
やがて訪れる別れの予感を察知していたから。
だから、あえて口の端に昇らせることはしなかった。
・・・こどもだと大人はいうけれど、僕たちはこどもであるけれども、ちょっとだけ大人だった。

彼らがよく使う「暗黙のルール」とやらを知っていた。

そんな雰囲気の中で、彼は時間の長さではない、ということ僕に伝えたかったのだと思う。
何がどうウマがあったのかわからないけれど、何となく一緒に居る時間が他の人より多かったような気がする。
だから、彼は自分のことを少しだけ話すことで、僕に許可を求めたのだ。

「シャボン玉・・・」
僕は頭の中で、その構図を想像したけれど、その人がどんな人物なのか、彼の描写が少なすぎて、あまり具体的な想像にならなかった。
「この大雪と寒空の下で・・・正気の沙汰じゃないよ」
ダイは少し怒った風にそう言ったので、僕は苦笑した。
日頃、温厚な彼が怒るなんて。
いや、本当は温厚だと思っているのは周囲だけで、本人はちっともそうだとは思っていないのかもしれない。

「だいたい、なぜ、シャボン玉なんだよ。・・・小さなこどもみたいに、身体が冷えることも時間も忘れて・・・」
なるほど。その人物は、おとななのだ。
彼の家の賃借人であるなら、きっと相当な大人のはずだった。
ここは都内だから、地方の同じ間取りの住まいと比べて、決して家賃が安いとは言えない。

彼は僕が黙っていることに安堵したのか・・・そのまま、勢いがついたかのように、いくらかをぼつぼつと話し出した。
彼が生まれた時から一緒にいる女性であること。
最近、彼女が家を不在にすることが多く、会話は無いけれども、留守を頼まれていること。
・・・そして彼を「ダイ」と呼び習わし始めたのは、その人なのだという事。
短い言葉で、彼は僕に話をした。

だから僕は笑った。
「ダイ、それなら優先すべきことはわかっているだろう」
「うん」
「・・・それに、その人は、気まぐれにシャボン玉を創っていたわけではないと思うよ」
そこで、ダイが顔を上げた。
彼の知的な瞳が、僕を見つめる。
きゅっと唇を結んでいたが・・・ダイは、その理由を、予測していたようだった。

誰かのために、祈りを捧げて天に魂を還す儀式なのだということを・・・
僕は静かに教えてやった。

「そう」
ダイは小さい声でそう言った。
ぼつり、とそう言って、彼は下を向いた。
知らなかったようだったが、合点がいったといったような顔つきをしていた。

彼は、背が伸びて、尖った顎が際立って見えた。
この頃になると、僕たちはランドセルを卒業していた。
担当教師の意向で、ランドセルは卒業まで大事に使いなさいと言われていたけれど、身長や体格が追いつかなくなって背負うことが出来ない生徒が教室の三分の一を占めた時、担任教師は任意使用を認めた。
でも僕たちは、最上級生の特権を手に入れて、勝利をもぎ取った気分になっていた。

大人になると、背負うものが大きくなる。
それなのに、こどもに背負うことを強要する大人達に少しばかり反抗してみたかったのだ。

彼は肩から提げたナイロンの鞆を重そうにかけ直した。
勢いをつけて、ちょっと踵を上げて、彼は荷物を持ち上げた。

・・・そう。

僕たちは知っていた。
背負ったって肩にかけたって、重さは少しも変わらないってことを知っていた。

「その人・・・きっと、とっても哀しいことを経験したんだよ。
泡を空に還すことが、この気候ではとても無理だと・・・さすがにわかっているはずだと思うよ。
・・・どこかで聞いたことがある。魂を空に飛ばすんだって。魂を空に還すんだって。遠くに居る、届けたい人に届くように風に乗っていくんだって」
「・・・」
ダイは無言だった。

僕は夢中だった。
いつもみたいに「不磨、物知りだな」と言ってもらえるとあって得意になっていた。
だから、気がつかなかったのだ。
ダイが・・・とても・・・とても何とも言えない表情を浮かべていたことに気がつくのが遅くなってしまっていた。

僕は続けて言った。
少し早口だったように思う。

「大事な人なのかな・・・家族とか。恋人とか。
だったら哀しいよな。たまにしか帰って来ないアパートで物思いに耽ってシャボン玉を飛ばす人が・・・それは気になるよね」

その時の表情を・・・僕は見なければ良かった、と思った。

・・・ダイは顔を真っ赤にして・・・今にも泣きそうな顔をしていた。

***千載不磨04

そこで初めて僕はしまったと思ったのだ。
でも、しまったと思っただけで、僕の言葉の何が、彼をそんな表情にさせたのかがわからなかった。

ただ、これだけはわかった。
ダイを酷く傷つけてしまったのだ。

彼はぐっと唇を噛んだ。
僕は息を吞んで彼の顔をただただ凝視するばかりだった。
何が悪かったのか、わからなかったけれどもひとまず謝ることにした。

「ダイ、すまない」
「いいんだ」
ダイはそう言って・・・僕の顔を見つめた。
その肯定の言葉を聞いて、僕はますます息を潜める。
胸がぎゅっと締め付けられるように痛み、喉元に何か・・・言葉にならない言葉が出し切ることが出来ずに滞留しているような感触を味わった。
でも、それは僅かな時間の出来事だった。

顔を上げた彼は、もう、いつもの彼だった。
目尻が少し朱に染まっていたけれど、ダイは大きく息を吸ってひとつ、深呼吸をした。
そして彼の中にそれを沈めていく。何かを呑み込んでいく。

僕の状態について彼は察したように笑った。
「不磨、わからないのに、謝るなよ」
「わからないから、謝るんだよ」
僕は少しむっとして言った。
自分が理解していなくても相手を傷つけた時には、相手には傷つく理由があるはずだ。
特に、ダイは理不尽な怒りや悲しみを持つことはないだろうし、彼にそんな思いを呑み込ませてしまった僕には、まったく非がないかと言ったらそうではないと思っていたからだ。

難しい理屈を並べ立てていても、結局のところ、僕はダイを好きなのだ。
友人として、なくしたくないと強烈に思っていたのだ。
間もなく別れがやって来るから。
だから、余計に・・・拗れてしまった糸は解しておきたかった。
そういう危うい氷上を渡り歩くような張り詰めた空気を、彼との間に持ちたくなかった。

ダイは少し笑った。
「不磨のそういう返事が良いと思う」
「そう・・・はぐらかすなよ」
僕はそう言った。
彼が決して、今の一連の行動に説明をしないと知っていたから。

僕はもう一度、言った。
胸が苦しかった。息が詰まる、という感覚を、この時初めて味わった。
気まずいのではない。
ダイはそれほど狭量な人間ではない。
でも、彼の内に秘めたる想いを・・・僕が強制的に暴き晒してしまったかのような罪悪感があった。
ダイはそんなことは望んでいなかった。
それなのに・・・僕は引っ張り出してしまったのだ。
彼を強引におとなにしてしまった、とえば正しいのだろうか。

僕はたまらなくなつて、言った。
これ以上、この場に居たら、僕はまた彼を傷つけてしまう。

「ダイ、行けよ。・・・不作為の後悔ほど不毛なものはないって、議論しただろ。・・・やらない後悔はしてはいけない。だから、行け」
僕はそう言って、手を伸ばし、ダイの肩をぼんと押した。

冬の冷気を纏った彼の上着は、冷たかった。
まだ空気は湿っていたから、それも加わったのかもしれない。
彼の肩はそれほど広くて逞しいわけでもないのに・・・なぜか重かった。

「その人のところに、行け。
あと5分しても、ダイがここに立っていたら、僕はダイの友達をやめる」
「ともだち」
ダイは眉を潜めた。
・・・声が掠れていた。

僕は、ここで少し・・・躊躇いを持たなければ良かったのかもしれない。
でも、ここで言わなければきっと後悔すると思った。
僅かな時間しか残されていないと思ったからなのだろうか。
焦燥感が僕の背中から首筋にかけて這い上がり、そして僕の脊髄を浸食して僕の考えも着かなかつたような言葉を言わせているようだった。

たとえ、僕の投げつけた言葉がダイとの関係を崩したとしても。
それでも、彼には必要だと思ったから。
適当に愉しくて、適当に気楽な関係は欲しくないと思ったから。

だから、僕は彼の肩をとん、と押して、彼に加力した。

ずっと・・・ずっと大事にしていたものがそこにはあつたから。

「ダイがどう思っているか、だよ。・・・早く逃げ。少しでも長くその人の傍に居るのが良いよ。きっと、心細いよ。その人・・・体調を崩しているんだろ？」
「不磨、すまない」
ダイはもう一度そう言ったので僕は笑つた。
「ここで繰り返すつもりはないよ。・・・僕は、ダイともだちだと思っているし、また明日も会える。それなのに、どうして謝るの？」

わかつていた。
わかつているよ。

この瞬間、僕という媒体を通り過ぎて、ダイは大人になってしまったのだ。
それを、自覚したのだ。

彼の中に、誰にも言えない想いがあることを、彼が自覚したのだ。

「ともだち・・・良い言葉だけれど、今は辛いな」
彼はそう言って、空を見た。
また冷えて、雪が降りそうだ、と呟いた。

僕とダイの関係を言っているのではないと思った。

その人を深く案じているダイを見て。
クラスでダイを慕っている女子がこの場に居たら、ダイの表情について理解できる者は居ないだろう。
彼は・・・空を見て、ごめんよ、と呟いていた。

おそらく、彼の案じている人物が浮かべた空泡を最初に見たときに。
彼はまったくその行動の意味がわからなかつたから。
軽んじて見つめていたことに対して・・・空に還った魂に詫びているのだと思った。

「不磨はやっぱり、物知りだ。・・・話を聞かなければ、わからなかつた」
ダイは曇天の空を見上げながら、そう言った。
ここ数日は夜になると雪が降って、周囲の交通機関もだいぶ影響を与えている。
おまけに、朝は冷え込むから・・・ここは都内であるのに、陸の孤島になってしまつていた。
空港は欠航が続いてたし交通機関は制限が加えられていた。

食料の供給値が高くなっていると、僕たちには直接憂えるような知識にならないようなことを、朝のホームルームで担当教師が言つていたことを思い出した。
だから、毎日配膳される給食を粗末にするな、と言いたかつたのだろうけれど。
僕たちにはまったく影響しない。
この狭い空間から出ることを許されていないのに。
それでも・・・大人は僕たちより、広い境域を過ごしていることを誇示したがる。

ダイにそんな大人になつて欲しくなかつた。
彼には・・・いつまでも少年であり青年であり壮年であつて欲しかつた。
おとなとこどもが共存しているような・・・

そんな人になって欲しかった。

僕が勝手に願っているだけだけれど。

僕が自分自身の環境を歎くことが無駄なのだと思った時に、僕は大人になってしまった。

不満や不平を述べることは簡単だった。

でも、それを言っても解決しないだろうと思うようなことには、言葉を呑み込むことを覚えた。

誰もが・・・それを抱えて生きているのだと思ったし、僕は「聞き分けのよい子」という自分の立場を利用していただけだった。

こどもは、大人が思っているより、ずっと狡いのだと・・・自分でそう思っていた。

僕はこどもの仮面を被っているだけだ。

ダイのように魂が清廉ではない。

僕は・・・ダイのようにになりたい。

でもダイにはなれないと知っているから。

時の流れについて知っている。

孤独について知っている。

僕が広い屋敷に住んでいても、それは僕に付随する事柄ではない。

僕の親がどれほど高名であっても、それは僕のことではない。

どうして、僕は僕で在ることを、周囲に否定されなければならないのだろう。

僕は不磨と名付けられたのに。

不朽不滅を意味する言葉で名付けられたのに、どうして、僕は、誰かであったり・・・周囲やその他のものに合わせて、自身の価値を決められてしまうのだろう。

「不磨、行くよ」

彼は言った。

ダイは・・・きっと僕のようににはならない。

彼は秘めたる想いを持ってなお、変質しなかった。

だから、僕はそれに感動して、苦しくなった。

僕より、僕の知らない誰かをダイが優先させることが苦しかったのではない。

彼の知らない誰かを僕は知っているし。

僕の知らない誰かを彼が知っているし。

でもそれは問題にならない。

・・・ダイの後ろ姿を見て、思った。

僕は・・・ダイが誰かを定めてしまった瞬間に立ち会ってしまったことに、とても・・・衝撃を受けていただけだった。

彼の家の住人であって、彼の述べる描写の人であれば、親子ほどに年齢の離れている人なのだろう。

それなのに・・・ダイは・・・その人に思いを残すことを決めてしまった。

それからしばらくして。

ほんの数日後のことだったように記憶している。

「容態は良くなったから」

とダイが言った時。

何かの話のついでだったように思う。

でも、彼はそれを狙って言ったのだと思った。

何気ない会話に織り込んで・・・

彼は、彼の中の思いを淡く薄く儂いものにしようとしていた。

でも、僕にはわかっていた。

僕だけにしか、彼は言わなかったから。

僕だけにしか、彼は言えなかったから。

・・・

彼はそれを呑み込んで、千載不磨とすることにしたのだと。

***千載不磨05

それから更に数日が経過した。

すでに一日の授業のうちの大半は、自習時間だった。

僕はこの時期に最上級生に与えられた最後の自由を満喫することにした。

図書室にあるたくさんの本を借りてはその日のうちに読破して、返却するという自己最高記録を更新し続けていた。

自分の好きなことをして良い、と言われると何をしても良いのかわからなくなる。

そろそろ、僕たちは・・・室内での個人活動に飽きてきたところだった。

ここのところの大雪で、校庭のコンディションは最悪だったし、体育館では校庭へ出て授業を行うことが出来ないクラスの生徒

達が、所狭しという具合にひしめき合っ「体育の時間」をようやくの思いで開催しているといった状態だった。

寒い日が続くので、教室内のストーブの周りは休み時間の度に盛況だった。

僕の進学はこの学区外であることはもう決まっていた。

それは周知の事実だった。

だから、僕に集団行動を強制する者はもう居なかった。

進学してからも仲良くしてね、と言って、教室内ではメッセージカードがたくさん出回った。

加除式のルーズリーフのような綴じ穴のついた少し厚手の紙が、幾枚も机の上に乗っており、どの者のものであるのかがわかるように、名前がそれぞれに記入してあった。

つまり、そのカードを寄越した人物に対してメッセージを書け、ということらしい。

僕は苦笑する。それほど親しくない相手に、どうやって何を告げれば良いと言うのだろうか。

しかしダイは律儀にそれを一枚一枚丁寧に書いて返却していた。

だから彼の自習時間の一時間分くらいはこの「執筆」にあてられたが、彼は「いい暇つぶしだ」と言って笑っていた。僕と考えていることが同じだったらいい。

知らない者に何かを伝えることは僕たちにはまだ難しかった。

ダイはフリーメッセージ欄にはいつも短く「またな！」と書くだけにしてあった。

特にダイの机には、他のクラスや学年の者からの依頼もあり、いつも山盛りでカードが置かれていた。

まったく彼の人柄というものは彼の大変に貴重な財産になるのだろう。

短いようで、そして僕はまったく普通に過ごしているダイを見る度に、なんだか、この間のことは本当は僕の夢なのではないのかと思っただけだった。

けれども、ダイは終業後はそそくさと足早に帰ってしまう。

短縮授業になっていたのだから、それほど慌てて帰らなくても良いのだろうけれど。

それでも、ダイは・・・やはりあの人のところに通っているのだと思った。

一日のうちの大半を同じ空間で過ごしていたのに。

僕はダイの事をあまり多くは知らないことに気がついた。

少し寂しかったが、彼のあんな表情を見てしまったことに比べればそれは大きな事ではなかった。

今日も雪が降りそうだと、帰り際にダイは呟いて、そしてさっさと下校してしまった。

その後。

掃除当番だった僕は少し居残りをして、職員室に呼ばれた。

・・・進学するときに必要な書類だという。内申書ってやつだろうか。

封緘されているので、中身はわからなかったが、その封筒は校紋が入っており、小学校の名前と担任教師の名前が正式名称で入っていた。

寂しいな、と言われたけれど、それがいわゆる社交辞令であることはわかっていた。

僕たちはそういった言葉は知らないが、知らないからそれがどういう時に使われるのかも知らない、というわけではなかった。

僕はそれを受け取ると、そこでようやく全部の用事を済ませて、下校することができると思った。

帰り際に図書室に立ち寄って、朝に借りた本を幾冊か返却する。

シリーズ物というのは一気に読んだ方が面白いので、僕はこのところ、連作ものを読みあさっていた。

図書室は職員室を出て廊下を挟んだ対角線上の場所にあり、そこには放課後には図書委員が輪番で本の貸し出しを行っているが、それ以外の時間は無人だった。

たまたま、非常勤の司書の人に来て本を揃えたりしているようだった。

これじゃ、持ち去られても仕方がないよな。

僕はそう思いながらも、返却カウンターに本を置いた。

図書室は、単独で出入りできるのは最上級生だけだった。

今はそれほど、ここを利用する者も居ない。

どちらかというとコンピュータールームに入り浸りになっている者が多い。

紙をめくって文字を追いかけるより情報をスクロールさせる方が楽しいという時代だった。

だからこそ、誰も邪魔をしない静かなこの空間が好きだったのだけれど。

僕は、明日貸し出してもらうための本をどれにするか物色しようとして、本棚に向かおうとしたとき。

・・・その時に。

「あ」

僕は声を漏らした。

返却カウンターに幾冊か本が無造作に置いてあった。

昼休みにでも返却されたのだろう。

ダイが読みたがっていた本だった。

僕が面白いよと薦めたもののうちのひとつだった。

人の出入りがあまりない図書室ではあったが、このシリーズだけはなかなか人気で、いつも貸し出し中であることが多かった。

僕も気をつけて返却状況を見ていたのだが、予約制度のない図書室では、手に取った者から先に借りることが出来た。

・・・ダイ、喜ぶかな。

僕は誰も居ないことと、僕がいつもここで所定の手続きをしないで本を借りることを黙認してもらっていることを良いことに、その本を手にとった。

・・・返却カウンターは貸し出しカウンターも兼ねている。

カウンターの上には、貸し出しカードというものが置いてあり、その本も貸し出し中の扱いになっていた。

僕はルールは守るためにあるものだと思っている。けれども、その時ばかりは・・・ごめんなさい、と呟いて、カウンターの脇にあった、不要紙を使ったメモ帳に走り書きをした。

どうしても借りたいので、貸し出し手続きを経ないで借りていきます、と書いた。

・・・約束を破ることや、紀律を護らないことは僕の主義に反した。

決まり事というのは守ってこそ決まりなのだから。

これは大変に胸が苦しくなるような出来事で、僕は本当に小心者なのだといいことをよく理解した出来事だった。

その時に・・・後ろめたいという気持ちを知ったわけだけれども。

でも、ダイにあんな表情をさせてしまったことが僕の中でいつまでも燻ったままだった。

これで相殺できるとは思わなかった。ダイにはそんな取組みたいな事は必要じゃなかった。

僕は誰もいないのに、カウンターにペコリとお辞儀をして、その本を胸に抱えた。
今になって思えば、それほど目くじらを立てられることではなかったのかもしれない。
けれども僕にとっては重大だった。
誰が許しても自分が許せなかった。
そうまでしてダイと関わり合いを持ちたいと思っている自分が嫌だった。
彼は僕のことを忘れてしまうだろうと思っていた。忘れないだろうけれど・・・
一緒に過ごした何をするでもない時間のことや、何かを言わなくても伝わった感覚や、クラスみんなより少しばかり・・・秘密を胸に持つという大人の作法みたいなものを経験した者同士の共有感があった。
ダイにその本を届けるのは、次の日でも良かった。
外は雪が降りそうだったし、鞆の中には、徐々に持ち帰るようにしている文具などが詰まっていたから、何かの拍子に本を傷めてしまう可能性もあった。
そして、先ほど受け取ったばかりの僕に関する書類もあった。
けれども・・・けれども、そんなものよりもっと大事なものに思えた。
僕がダイにそうしたかったんだ。
それが理由ではいけないのだろうか。

***千載不磨06

その頃の僕は何も感じないように努力していたように思う。
努力とは自分で意識しているかどうかは関係ないのだと思った。

本当は自分で閉じ込めてしまっているものがあることに自分で気がつかない場合。
その時は、ため込まれた「いろんなこと」をどうやって見つけるのだろう。
たとえ見つけ出せても。
それは・・・行き場なんてないのに。

気がつかないうちに自分の中に潜めていた鬱屈とした気持ちに気がついた時。
僕はうまく外に表現できずにいた。

僕だって本当は、何も感じないわけではない。
親と離れて暮らすことはとても寂しいと思う。
家族とか家庭とかいうものは、遺伝子の似通った個々人の集合体でしかないと感じ切れていない・・・

いつか大人になった時。
僕は誰かを好きになれるかどうか、とても疑問だった。
恋愛という意味ではなく。
それまでよりもっと短い期間しか共有していない相手と、自分の人生の残りを共にするという行為のために、相手を求めて彷徨い歩くことが最上至上のことであると声高に言う者がほとんどなのだ。

そういうものだと言いついて聞かせてきたけれども、他のみんなの家はそうではない環境がほとんどなのだと言うことも。

もっと低学年の頃には、僕は頻りに友達の家を歩き来していた。
あまり人付き合いが上手とは言えない僕でさえ、記憶に残っているくらいだから。

その家に招かれて、一足踏み込むとすぐに判るその家独特の匂いに僕はいつも頬を緩ませる。
僕の家に招いたら、誰かが同じように同じ事を感じてくれるかな、と想像するからだ。
でも僕は結局、誰も招かなかつたし、誰も招いてくれよ、とは言わなかった。
不磨の家は自分の家と違う香りがする、と誰かに言って欲しかった。
けれども、そういった記憶は僕の中に残っていない。

僕が思っているよりも、ダイはあっさり新しい環境に馴染むと思う。
僕とダイは・・・春が来たら別々の制服に腕を通すことになる。そうなったら、それは魔法の衣のように、それまでの記憶をすべて消し去ってしまうのだろうと思った。
時折懐かしいと思うことがあるかも知れないけれど、それはずっと先の、大人になってからのことなのだろうと予想していた。

僕は、ダイの家の近くの路地まで来て、角まで来ると、そこで立ち止まった。
・・・彼の家までの道のりを知らないわけでもないし、迷ったわけでもなかった。
けれども、大通りから小道に入り、彼の見てきた風景を僕は再現しながら歩いていると思うと、ゆっくり歩かなくてはいけないような、そんな気持ちになったからだ。
僕はダイではないし、ダイに僕になってほしいとは思わない。

でも、彼が見てきた景色を覚えていたかった。

いつか・・・
この道のりをこの目線で歩き、この空気を吸った記憶を共有できると良いのに、という願いが僕の中に湧き起こっていた。
感傷的になっているのかもしれない。

けれども。
けれども・・・

もうすぐ、僕とダイは離れる。

僕は空を見上げた。どんよりとした空だった。
・・・僕の心を表しているような、そんな灰色の空を見て、僕は溜息をついた。
また少し歩いて・・・そしてまた空を見上げる。

数歩歩いただけで、空は晴れるわけではないのに。

ダイに渡したい本があると行って急な訪問をするのは、彼は迷惑だろうか。
あの・・・シャボン玉を飛ばす彼のアパートの住人がまだ快癒していないことはわかっていた。
彼が毎日、下校の準備が整うとそそくさと帰宅してしまう日々に変化がないからだ。

あの時のダイの顔を見てから、何となく聞くことが出来なくなってしまっていた。
その人は、ダイとどのくらい親密なのか、と聞くことは、誰かとダイとの関係と、僕とダイとの関係を比較することになるから。
ひいては、それは僕とダイの間に流れるものを否定することになるのではないのかなと思っていたから。
・・・口実を作らなくては訪問することが出来ないなんて。
僕はちょっと苦笑いをした。
ただ単に・・・寂しいと言えばそれで済んだかもしれない。
でも僕は、見てはいけないダイの秘めたる想いを見てしまったから。
だから、とても後ろめたかった。

溜息を漏らすと、白い息が宙に舞って・・・そして消えて行く。
大人になったら、背も伸びて、この嘆息はもっと空に近い場所から発することになるのだろう。
大人になっても・・・こんな気持ちを持つのだろうか。
胸がぎゅっと締め付けられて、それでいてじわじわと締め上げられるような感じだ。
それでいてちくちくと痛み、どこか疼きさえ感じる。

・・・痛みの種類を全部一度に味わっているような感覚だった。

ダイの声が聞きたかった。
「そんなことないよ。不磨とはいつまでもともだちだ」
彼はそう言ってくれば良いのにと自分に都合の良い言葉を夢想する。

・・・その時。

ダイの声が聞こえた。

「・・・・・・・・を笑わせてやってくれ！」

そこで一度声が途切れた。
僕は曲がり角の傍で、角を曲がりきるところだった。
驚いた僕は・・・そのまま足を止めて、電柱の影に隠れた。
このところ電柱は地中に埋められる工事が至るところで進んでいたが、この地区ではそれは未完の手配だったようだ。
これを幸いだと思う余裕なんて、なかった。
ダイの声が涙声だったからだ。

僕は・・・今度は聞いてはならない声を聞いてしまった、と思った。

いつも闊達で、朗らかで、それでいて感情を露わにしないダイの悲壮な声が聞こえてきた。
まだ声変わりする前の、少し掠れた少年の声が灰空に響く。

僕は息を吞んで・・・息を潜めて、その言葉を耳にした。

彼の、見てはならない表情を見た。
今度は。
彼の、聞いてはならない声を聞いてしまったと思った。

F-side 不磨 後編

***千載不磨07

僕は小走りになった。
聞いてはならない声を聞いたから、本当はそこで踵を返してなかったことにした方が大人の対応なのだとわかってはいたけれども。
でも、足が、ダイの方に向いていた。
彼の声がとても・・・とても胸を裂くような声音だったから。
だから僕は、路の先を急いだ。

これが彼の誇りを傷つけて、彼が僕と距離を持ったとしてもそれでも良かった。
今は・・・ダイの傍に行かなければいけないのだと思ったから。
ああ、僕はまだ・・・本当にこどもだ。
その先に何があるのか知っているのに、それでも・・・行き着こうとする。

角を曲がると、ダイがこちらに背中を向けて・・・そこにいた。
何かを呟きながら、肩を上げていた。
そして、ダイが見つめていた先は・・・僕と反対側の曲がり角で、僕が見たものは一瞬しかわからなかった。
白金の髪をした長身の外人が、もうひとり、誰かを抱えながら・・・角を曲がっていくところだった。
それは本当に一瞬のことで、冷たい風に靡いた白金の色しかわからなかった。
顔もはっきりとはよくわからない。
ちらりと見えたただけだったが、恐ろしく整った横顔だなあという印象だけが残った。
人の記憶や残像というのは、まず、印象というカイメージが先行するのだな、と妙な納得をしていたことだけ記憶に残っていた。

消えていく一端を眺めた僕は、あっという間に角の向こうに消えてしまった彼らに、ダイが何かを叫んだのだということだけが判断できた。

彼は大きく息を吸って吐いていた。
冷たい大気に、彼の呼気がいくつもいくつも浮かんでは宙に消えて行く。
普通の深呼吸とは違っていた。
次々と生まれては消えて・・・まるでシャボン玉のような彼の溜め息には、嗚咽が混じっていた。

僕は一瞬足を止めて、その様子を黙って見ていた。
声をかけられなかった。
およそダイらしからぬ彼の挙動が僕の足を止めた。

ダイを越えて過ぎた人影が消えると、ダイは更に大きく息をして、しゃくり上げて泣き始めたからだ。
それで、その人影を彼が見送ったのだと確信した。

「・・・ナを泣かすなよ。絶対だ。あいつは笑った顔が一番なんだ。絶対だ」
彼は涙声に『絶対』を交えて、繰り返し呟いていた。
彼はいつも絶対ということはこの世ではあり得ないと言っており、僕はそれにいつも同感だよと言っていた。
この世には絶対はない。
それなのに、絶対という言葉を使い繰り返すダイの心情を推し量ると、僕は心臓がぎゅっと締め付けられるような苦しさを味わった。
後ろから眺めると、ダイの頬からいくつもいくつも大きな波が零れていた。
頬を伝うほどに静かな落涙ではなかった。
激しく・・・彼は泣いていた。
睫からそのまま重力に負けた涙は落ちて、地面に落ちていった。
彼の耳も首筋も、昂奮のために赤くなっていた。

「・・・ダイ」
僕はそっと声をかけた。
そこでようやく声をかける気になったのは、空から・・・ちらり、と雪の種が落ちてきたからだ。
雪の種というのは僕が作った言葉で、それをダイが気に入ってくれたのでそれ以来使うことにしている。
雪が絶え間なく降る前の、まばらな降雪をそう呼んだ。
僕とダイは今年多く見られる雪の種を見つけて、雪が降ってきたことをどちらがはやく察知できるか競争していたものだった。
この冬は、そんな冬だった。
しかしそんな他愛のない言葉を交わしていたダイと、今、ここでこどものように泣きじゃくるダイは別人のようだった。
いつも物静かで、でも朗らかで・・・誰にも気を遣う優しいダイが、これほど昂奮している。僕は、一体、どうすれば良いのだろう。

ダイは僕のか細い声に、びくりと肩を大きく上げた。
こんなに近くにいるのに、気がつかなかったようだった。
目の前の・・・彼が見送った人達への集中で、彼の背後に居た僕の気配に少しも気がつかなかったらしい。
・・・ダイは大きく息を吸って、それから空を見上げてから・・・ゆっくりとゆっくりと、僕の方に振り返った。

***千載不磨08

彼は服の袖で涙を拭った。服の裾はあっという間に水分を吸って、色濃くなっていった。それすらよく判るくらい彼はとても・・・とても大粒の涙を流していたが、僕は普通に話すことにした。

「読みたいと言っていた本が借りられたから。持ってきてやったんだ」
僕は下を向いてそう言った。

彼の顔を直視できそうにもなかった。
目は腫れているし、顔は真っ赤だし、何より、彼の知的な瞳からは大きな涙がまだ浮かんでいた。

でも、僕はどうしたのか、と尋ねなかった。

ごく普通に、話をした。

その涙も、いつも僕のよく知っているダイと違う表情を浮かべているダイの顔もまるっきり無視した。

しばらく僕たちは無言だった。

僕はずっと下を向いて、やや内向きになってしまっている僕の脊先を見詰め続けていた。

その爪先の上に・・・雪の種が、ちらりちらりと落ちて、それが水滴になって、重なって、水の華を作っていた。

自然は素晴らしい。こんな時にでも・・・平等に僕の上にも雪の種を注いでくれる。

本当は、ダイの上にかくさん降らせて、彼の涙を隠してやって欲しいと願っていた。

彼が僕の方に向き直ったために、背中を向けた、あの人影の方角から、また誰か来やしないか、と彼が気を払っていることに気がついた。

だから、僕は黙っていた。

脊の上にくっつき水花が咲いては、滴となって僕の足から地面に流れていく。

ダイの涙のように。いやもっと静かであってほしいけど、これはダイの涙なのだと思う。

やがて涙をすすり上げるダイが、自分の服の袖で、涙を拭き始めたので、僕は自分の上着のポケットからハンカチを出して彼に差し出した。

彼の袖の面積は、涙をすべて拭き取るだけの余裕はないはずだった。

それでも僕はまだ下を向いたままだった。

下を向いていたので彼の顔に突き出すようにやや上向きに差し出したハンカチを・・・彼は黙ってつまみ上げた。

読みたい本があると、彼はいつも下校時に図書室に立ち寄っていた。

もっと読みたい本があると、一日に何度も図書室に足を運んだ。

そんな彼が・・・図書室に立ち寄らずにまっすぐに帰宅していた理由になった人を見送ったのだろう、と思った。

彼の熱くなった顔から漏れる吐息は先ほどより更に白く発光して、空に吸い込まれて行く。

雪が降り始めた。

ちらつく程度だけれど、今夜はまた、雪になるだろう。

僕らは雪が積もると雪合戦をして遊んでいた。

でも、今のダイは、遊戯に興じるこどもの表情ではなかった。

こどもか大人かわからない。

それなのに、彼はこどものように泣きじゃくっていた。

でも、僕に気がつくとその涙を鎮めてしまった。

・・・ああ、彼は、大人になったのだな、と思った。

誰にも見せられない秘めたる想いを彼は知ったのだと思った。

僕たちはまた、黙り込んでしまった。

言はずいという言葉では表現できなかった。

なぜなら・・・僕は・・・ダイが誰も傍に寄って欲しくないと思っただろう瞬間に吹き込んでしまったから。

それは一度ではなく、今度は二度目だったから。

だから、彼がこれで僕と距離を置いて新しい環境に行き着くための最初の階段を昇ったのだとしたら、それは僕が招いたことなので、止めることは出来ないと思った。

ともだちだけれど。ともだちだから、見てはいけないことがある。

それを知った僕も・・・少し大人になれたのだろうか。

失敗をして、ダイに去られて、大人になることは、そんなに素敵なことなのだろうか。

だったら、大人になりたくない。

そう思った時のことだった。

ダイがぼつりと言ったのだ。

「ありがとう」

僕は顔を上げた。顔を上げると、すぐ傍にダイの顔があった。

まだ鼻先は赤かったし、頬も腫も赤いままだったけれど、もう、いつものダイの顔だった。

「これ、借りることにする」

「気にするな」

僕は湿ったハンカチを好まないの、いつも2枚持ち歩いてきた。だから、1枚くらい貸しても何かに影響することはない。

それに後は家に帰るだけだったから、気にすることでもない小さな事だった。

それなのに、ダイは、大事そうに四折になったハンカチを整えながら、目と鼻を強く押さえて涙を拭き取った。

***千載不磨09

「あいつ、行っちゃった」

ダイが言った。彼の言う『あいつ』が誰だか察しがついた。

その人物のために、彼は好きな時間を削って、毎日早めに下校していたのだと判っていた。

「うん」

僕は頷いた。彼の視線は僕を通り越して遠くを見ていた。

僕の背中の方こう側にある、彼の親の経営するアパートの一室を眺めていたようだった。

「銀髪のガイジンにひょいって抱え上げられて・・・」

「ダイ、彼はプラチナ・ブロンドって言って、銀髪じゃないと思うよ」

僕がちょっと口出しをしてしまった。銀の髪はもっと違う色だ。

「どっちでも良いよ。・・・そんなこと」

些細なことに拘る僕の癖を良く知っていたダイは、ぶっきらぼうにそう言った。

でも怒っているわけではなかった。

どうやら、その白金髪のガイジンに『あいつ』がついて行ってしまったようだ。

そして、それを・・・ダイが見送った。

ただそれだけのことなのに。

どうして、彼はそこまで号泣するのだろうか、と尋ねることはできなかった。

彼の心の内が少しだけわかったから。

・・・ダイはゆっくりと、地面に落ちた箒を拾い上げた。その時になって、僕はようやく、彼が家の手伝いで、アパートの前の通りを掃除していた途中だということに気がついた。
足元には、雪でほんのり白くなった落ち葉の山が積まれてあった。
「・・・湿った落ち葉は燃えないんだよな」
彼はそう言って呟いた。この地区はたき火は禁止されているのに、彼はそんなことを呟いたので、不思議そうな顔をしている僕に、ちょっと片眼を瞑った。
「あいつとよくたき火をして焼き芋してたんだ。・・・内緒だよ」
彼の声はくぐもっていたが、それでも・・・いつもの静かなダイの口調だった。

優等生のダイが、禁止されていることを率先してやっていたとは驚きだった。
今日この短い時間だけで、僕の知らないダイをどれだけ見たことだろう。
3ヶ月分の驚きが一気に押し寄せてきた感じだった。

彼は箒を握り直して、今日の掃除はお終いだ、と言った。
そして大きな溜め息をついた。
「・・・戸締まりしないといけない部屋があって、これからそれをやる」
「邪魔はしないよ。本を届けに来ただけだ」
僕はそう言って、靴から彼の待ち望んだ本を取り出した。学校の図書室の本は、汚損防止のためにビニールコーティングが施されている。その表紙の上に、また、雪の種が落ちて水になった。
ダイは空を見上げた。
「・・・今夜は雪になる」
「もう雪だよ、ダイ」
そう言って僕はダイと同じように空を見上げたけれど、徐々に降ってきた雪のつぶてが顔に当たって、その冷たさに目を細めた。
彼はそれすら気にしないようで、空を眺めて・・・やがて静かに言った。
雪はとても静かだ。
音を掠って行く。
同じように、ダイの嘆きも吸い込んでしまったかのようにだった。
彼は、もう、いつものダイだった。

「今夜のフライトは難しいだろうね。路面も凍結しているだろうし」
ここ最近の降雪によって、路面凍結が深刻な話題になっていたもので、僕はああ、と頷いた。
首都圏でさえ、交通が麻痺した程の大雪に遭遇したのはつい最近のことだった。
この近辺でしか活動しない僕たちには、格好の遊び場を提供しただけの雪も、大人から見れば大変な憂慮すべき事態なのだと思うと・・・僕はその時には大人は大変だなあと思ったものだった。
・・・フライトという、彼らはそのままその足で出国すると言うのだろうか。
「パスポートも持っているのかどうか分からないのに・・・」
ダイはそう言って、小さな声で文句を言っていた。
それほど小言を言うダイも初めてだった。
彼は誰か特定の人の事を肯定しないかわりに否定もしない人物だった。
だから、彼の文句を言っている『あいつ』はかなり・・・彼の中で特別なのだろうと思った。
またそこで僕は胸が疼いた。込み上げるものを感じる。
慌てて、下唇を突き出して、ぎゅっとその気持ちを一気に呑み込んだ。
「忘れ物したら、取りに来るよ」
雪がちらついてきて、ますます冷え込んで来たので、僕は身震いをした。
そしてつまらないありきたりの言葉を彼にかけてしまったので、しまった、と思った。
「・・・あいつの忘れ物が、あいつを取り返しに来たからそれはないな」
彼は不思議な言葉を呟いた。
でも何となく意味がわかった。
それからダイは、僕の顔をしげしげと見つめた。
何か顔についているのかと思うくらい、じっと見つめるので、僕は口ごもってしまった。
気の利いた冗談でも言おうかと思ったが、うまく言葉にならなかった。
・・・この寒さのせいだろうか。違う。そうではなかった。
ダイが・・・ダイが、おもむるに、また、大粒の涙を流していたからだ。
今度は、静かに・・・。先ほどの涕涙と違っていた涙だった。

・・・大人の泣き方だった。
***千載不磨10

彼が急速に、音を立てて変化していくのを目の当たりにして、僕はただ戸惑うばかりだった。
僕のクラスの誰よりも大人だと思っていたダイが、本当は・・・もっと違った面を持っていたことに対して驚いていた。
自分と違うことを思い知らされる。
彼が登り始めた階段の下から、追いつくことが出来ずに、徐々に確実に上昇するダイの後ろ姿を見上げる自分を想像した。
落ちた雪の種が、魔法のように僕の足先から葉や根を伸ばし、冷たさという名前の果実を実らせるために、それらが速度を増して僕の体温を糧として奪っていくように思えた。

僕はダイの泣き顔を見ていた。
彼は静かに涙を流していた。

それほど時間は経過しなかったと思う。
今度も、ダイがぼつりと言った。
眼も鼻も頬も赤かったけれども、彼は平静の中で、何かに区切りをつけたようだった。
「これで、良かったんだ」
まるで自分に言い聞かせるようだった。
僕はうん、と頷いた。
「そうだね」
何が良かったのか悪かったのか判らなかつたけれど、ダイがそれで良いと言うのであれば、それで良いのだと思った。

「だって」
ダイは自分の中でめまぐるしいスピードで、何かを問答していたようだ。
彼の言葉と言葉の間には、きっと、もっといろんな言葉が飛び交っているのだろう。
僕はそれを黙って聞いてやることしかできない。

「・・・あいつ。・・・とても・・・とっても・・・嬉しそうな顔をした」

彼がその人物を止めずに見送ったことを言っているのだと気がついた時には、大きなつぶてとなった雪の華が、僕たちの上に降りかかってくるころだった。
まだまばらであったけれど、今夜は相当雪が積もりそうな、そんな前兆の雪に、僕とダイは立ったままだった。
冷えるよ、とか。寒いよ、とか。
そんな言葉で彼を動かすことはできないと思った。

でも、やっぱり、この静寂を破ったのはダイからだった。
・・・雪がすべての音を吸い込んでいくようだった。まだ積もっていない雪に音が吸い込まれるとは、視認できるとしたら、一体どんな風なのだろうか。
音が空に還って行くのだろうか。
空にシャボン玉が浮かんで消えて行くのと同じように、音も消えていくのだと思った。

僕とダイの間には、静けさしかなかったから。

僕が差し出したハンカチを握りしめて、彼は目頭をぎゅっと押さえる。
そして、少し首を振って、それから一度だけゆっくりと大きく息を吸ったダイは、ほっと小さな溜め息をもらした。

「不磨。・・・ごめんな」
「謝る理由がないよ」
僕は笑った。
ダイは首を振った。
そして、受け取った本の表紙を眺めると、言った。
「これ、手に入れるのは大変だっただろう？ 人気があって順番待ちだって聞いていたから」
「ちょっとした魔法だよ」
僕はおどけて言った。
いつもの会話だった。それが始まったので、僕は正直言ってほっとした。
好きな女の子に泣かれる時より、ずっと困った。
この時には、まだ、そんな恋愛感情なんて知らなかったけれど。

本当に、もっと後になってから。
この時に感じた・・・ぎゅっと掴み上げられるような、締め上げられるような痛みと疼きを伴う息苦しい感覚は、「せつない」というのだと、知った。

僕は肩を竦めた。
これ以上ダイをこのままここで立ち尽くすままだにさせておくわけにはいかなかった。
何しろ、彼の両袖は涙を吸って湿っており、号泣したことによって体温が上昇しているのだから、寒空の下で長時間過ごしていれば、彼が看病した「あいつ」と同じように寝込む結果になることは眼に見えて明らかだったからだ。

「ダイ。・・・戸締まりの用事があるなら、行けよ。僕は帰るから」
僕はそう言った。
このまま遊びに行こうよ、と誘える状況ではなかった。
明日からは、彼は、下校時刻よりずっと過ぎてから、僕と一緒に帰ることになるだろうと思ったけれど、それでも、今日だけは・・・彼だけの余暇というものを味わって欲しいと言う、願いと祈りとかに似た気持ちを持ったからだ。
***千載不磨11

うん、と頷いてから、ダイは少し気恥ずかしそうに僕を見た。
「格好悪いな」
自分の事をそう言って卑下する必要はないと思った。
だから僕は首を振った。
「何かどう格好悪いのか、わからないよ」
するとダイは、ちょっとだけ、涙で濡れた唇の端を歪めた。
「泣いたり怒ったりするって、格好悪いだろ」
僕は首を横に振った。
それは違うと思ったからだ。強く首を振った。
「そんなことない」
気休めにしかならない言葉のひとつがこの言葉だと習った。
適当に適切に生きることを教わっていたから、誰かが自分自身を否定したときにはこうやって相手を肯定してやれば良いのだ、と僕は記憶していた。
・・・でも、本当にこの言葉しか出てこなかった。
ちょっと息を吸って・・・言葉を探す。
僕の語彙力では、首を振ってただ否定する仕草によってダイを肯定することしかできなかった。

彼は自嘲気味に嗤った。
「・・・あいつを軽々抱え上げるガイジンに叶わない。
ボクはあいつをそんな風に抱き上げたり・・・嬉しそうに笑わせたりすることができない」
だから、ただ単に、地団駄踏んでいる小さなことと同じなんだ、とダイは言った。
どう言っても良いのやら判らなかつた。
でも、何かを伝えたかった。
後になって考えればこの時にダイを慰める行為はいくつでも考えついた。
でも、この時には、たったひとつの事だけを伝えたかったという気持ちしかなかった。
「格好いいよ」
僕は怒ったような口調でそう言った。

「・・・ダイ。誰かのために、怒ったり泣いたりすることは格好いいと思うよ」

断片的な映像と、ダイの言葉の端々からしか想像できないけれど。

きっと白金の髪のカイジンは、「あいつ」を、白馬の王子様のような登場方法で、誰もが羨むような洗練された動作で、彼女を連れ去り方をしたのだろう。

ああ、そうだ。

僕はとっくに気がついてた。

「あいつ」は、ダイの一番大事な人なのだというのを。

滅多なことでは怒りや悲しみを表さない彼が、こうしてくるくと激しく表情を変える相手というのは・・・彼の秘めたる想いの源になっている人なのだろうと思った。

最初から、わかっていたのに。

彼が、僕より・・・彼の心を占めている人が居て、僕は哀しかったのだ。

そのまま、どんどんダイの心の中からじりじりと端まで追いやられて、いつかは、ダイの心や記憶から、弾き出されるのは僕なのだ、と感づいていた。

そんな矮小で狭隘な考え方しか思いつかない自分自身が嫌だった。

ダイは人に順番をつけたりしない。

でも、たったひとりだけ、彼の中で特別な人が居て、それは、誰も触れることない彼だけの領域なのだと知っただけだった。

その事実は最初からあったのだ。

それを僕が今知ったからと言って、彼が裏切ったとか、変わってしまったとかいうことではなく・・・

ダイは、僕より、一足先に大人になったのだ、ということだけだった。

「ダイは格好いいよ」

僕は繰り返したので、ダイはくすりと声を漏らして笑った。まだ鼻声だったけれど。

「不磨は優しいね」

その言葉に、今度は僕の方が泣きそうになった。

違うよ、ダイ。

君に見捨てられたら哀しいのは僕の方だから。

ダイの特別な友達でいたかったから。

だから、僕は、ダイの欲しい言葉を言っただけだ。

本当は、「あいつ」のことなんて忘れて、さっさと遊びに行こうよ、と言いたいところだった。

僕にとって、ダイは憧れであり、心穏やかになれる唯一の友達だったから。

とおりいっぺんの付き合いしかなく、卒業後は連絡が途絶えるだろうな、とわかりながら付き合っている他の者と違っていただけだから・・・だから僕はダイの弱っているところに、つけ込もうとしたのだ。

彼のために本を無断で持ち出したり、彼の流涕の場面から去ろうとしなかったり・・・僕は自分がとても卑怯な奴なのだと思うた。

彼の秘めたる想いを知っているのが僕だけで良かった、と内心思ってしまった、そして少しほっとしたのだ。

それを見透かされたかのような、透き通った視線で見つめられて、そして優しいね、と声をかけられた。

僕は一体、どうしたいのだろう。

僕は一体、彼に何をしてやりたかったのだけ。

・・・そうだ。彼に笑って欲しかったんだ。

***千載不磨12

「それなら、不磨の方が断然、格好いいな」

彼がそう言って、僕を見た。

「どうして？」

今、僕が考えていたことと全く逆のことをダイが言ったので、僕は苦笑した。

行き違っているとは思わなかったけれど、ダイは僕のことを知らなさすぎた。

これほど一緒に居るのに。

距離は時間ではない。

そう痛感する瞬間だった。

どんなに離れていても。

ダイとあの人との距離は、とても近いところにあった。

人と友好関係を築くためのマニュアルなんて彼らには必要なかった。

彼はちょっと笑った。僕がいつも眼にしている彼の微笑みだった。

でも少し大人びていた。

「一番欲しい言葉を一番欲しい時に言ってくれるから」

「・・・施しをしてあげているわけではないよ」

「ああ、そうだけれども・・・誰かのために、何かをするって、素晴らし事だと思うよ」

互いを褒め合っても仕方がないので、僕はそれ以上何も言うことはなかった。

ダイもそうだった。

「ダイ。・・・帰るよ。今日はすごく冷えるようだから、はやく中に入れ」

僕がそう言うと、彼はそこで寒さを強烈に感じたのか、肩を上げて、自分の服の裾の中に腕を引いたが、袖口は濡れて冷たくなっていたので、彼は顔を顰めて、また腕を少し伸ばした。

「わかった。戻る。・・・不磨、本を届けてくれてありがとう」

ダイはそう言って僕に片手をあげた。その手の中には、僕が運んできた本があった。

けれども・・・彼は、もう、昨日までのダイと違って、嬉々としてすぐに表紙を開き、没頭して読まないのだろうな、と思った。

彼はこの灰色の空の下で、大人になってしまったから。

絶対はない。

それはダイの口癖だった。

いつかきっと別れが来る。同じ状態で永遠は続かない。

自分の中で変わらないと思っていた何かが変化してしまっていたことに気がついたりして、僕たちはひとつずつ大人になっていくのだらうと思っていた。

でも違った。

大人になる瞬間というのは突然に訪れるもので、緩やかに、徐々に切り替わるものではないのだと知った。

そこから先は、きっと穏やかに徐々に変化していくものであるのかもしれないけれども。

少なくとも・・・ダイに関して言えば、そうだった。

「不磨」

ダイが僕の名前を呼んだので、僕は顔を上げた。

そろそろ、本当にこの場所に長居しようものなら失調しそうなほど冷え込んできた。

元々不足していた日差しが更に、薄くなって僕たちの体温さえ奪っていくようだった。

陽光は温度を与えるだけではなく、温度を奪うときもあるのだと思った。

「なに？」

僕は返事をした。

彼は上げた手を下ろして、ゆっくりと視線を建物の方へ遣った。

これから彼は、僕が持ち込んだ本を読むのではなく『あいつ』の後始末に行くのだらうな、と予想していた。きっとそうなのだらう。

でも、僕の名前をダイは呼んでから、僕に微笑んだ。

同級生の僕が言うのもどうかと思うが・・・その時のダイの笑顔は、とても綺麗だった。

生涯忘れることはないだらう、と思うくらいに。

絶対や永遠はない、とダイは言うけれど、この思い出は絶対・・・僕の中で消えはしないと思った。

それとも、大人になったら忘れてしまうのだらうか。

忘れるのが、大人になることなのだらうか。

それならそれでも良いと思った。

今日感じているもどかしさや苦しさを、ダイが大人になったことによって、そういった感情を忘れたり、痛みが和らいだりするのであれば、大人になることはがっかりすることでもないのだらう、と思えた。

「不磨の名前は千載不磨からきているのだらう？」

「そうだよ」

僕は自分の名前について、ダイが何か聞いてきたことはなかったので、ちょっと驚いて、帰路に向かって顔を戻し始めた動作を止めた。

僕たちの別れの挨拶はいつもと同じだ。

今日が終われば明日が来る。

だから、また明日、と言って別れる。週末であればまた週明けに、と言う。

次を約束する言葉が僕たちにはいつもの別れなのだ。

それなのに、不磨という僕の名前について、ダイが珍しく何かを言おうとしていたので、怪訝な顔をしていたのだらう。

変な顔している、とダイが苦笑した。

「凄いな。長い刻を変わらないっていう意味だろ？」

「そうだよ」

僕は頷いた。

「終わらない時という意味ではなく、長い時間、という意味か・・・」

彼が言いたいことはわかっていた。

永遠はない。絶対はない。

これがダイの持論だった。それは生涯変わらないだらう。

人は変化する。そして万物も。だからこそ、僕たちは生きているのだから。

まだこどもの僕が、生きるということばを口にするには烏澁がましいかもしれないけれど、それでも、僕は、ダイという人は生命に溢れていてそしてとても眩しい存在なのだということに改めて気がついた。

彼は言う。

永遠はない。絶対はない。

けれども、彼は永遠も絶対も目の当たりにしたのだ。おそらく。

『あいつ』とダイの関係。

そして『あいつ』と白金髪の人との関係。

消えゆくシャボン玉の話。

彼が何を秘めたままにしてこどもから大人に変化したこと。

それらを経験したから。

だから・・・僕の名前の意味を今一度尋ねたのだらう。

僕は言った。

「永遠はないからね。・・・僕の名前の意味は、『不磨』だから。・・・後世まで残ること、という意味だよ」

偉人になれ、という意味ではなかった。

後世まで何かを誰かに残すことを為し遂げよ、という意味の名前を良い名前だね、と言ったのは、家族以外ではダイだけだった。

彼は知っているから。

いつかは終わりが来るけれど、それは始まりがあるからで、そして変化していくことによって、終わったかのように見えたものが

また始まることもあることを、知っているから。

僕はそこで、彼が何を言いたいのか悟った。

・・・僕とダイはもうすぐ離ればなれになる。これでお別れ、という意味の会話もしたことがなかった。でも、確実に、その日は近付きつつあった。この雪が溶けて、桜の並木で蒼が膨らみ始めるよりを確認するより前に、僕はここを去ることになる。

それは決まっていることだった。

でもダイはその日を探ねることはしなかった。

別れというか、逢えなくなる事への恐怖も不安も感じていないかのようだった。

僕は幾度もそういった別れに出会っていたので、慣れていたけれど、ダイは根本的に違う考えを持っているようだった。

「あいつとは長い付き合いだけれど、逢えなくなっても、突然現れて再会しても、いつも『またね』と言っていた。それだけで十分だったから」

「そう」
彼の口から、その人の話を聞くと、こちらの方が胸が苦しくなった。
ダイがその人のことを思う度に、何を思うのだろうかと考えるからだ。

でもダイはちょっと笑って首を傾げた。
本を持ち替えて、脇の下に挟んだ彼は、僕から眼を反らさずに、ゆっくりと言った。

「・・・だから、不磨ともそうでありたいと思うだけだよ」

・・・しまった、と思った。

何か失敗したわけではないけれど、僕は動揺してしまった。
取り返しのつかないことをしてしまったときに使う言葉だけれど、僕にはその言葉だけしか浮かばなかったのだ。
ダイは・・・永遠と刹那と、両方を手に入れたのだ。
大人になって苦しみを学んだけれど、彼は、何一つ変わっていない。
現状に更に加えて、彼は何かを得たのだ。何かを失ったのではなかった。
だから、永遠はないと言い切るのに。
長い時間は肯定する。僕の名前を肯定する。
これまで、僕の名前をあり得ないと否定することもなかったけれど、肯定もしなかった。良い名前だね、と言ったことはあったけれど、そうでありたいと言わなかった。

それなのに。
僕はダイが可哀想だと憐れんだ。
それは違っていた。
彼は少しも可哀想なんかじゃなかった。
誰かを見送っても、その人が戻ってくると信じて、戸締まりをすと言っていたのに、僕はそれを勘違いして、彼を哀れんで胸を痛めた。
そんな必要もなかったのに。

ダイはいつも自分と誰かを比べたりしない。
それなのに・・・僕は、いつの間にか、ダイと僕を比べて、ダイの方が僕より可哀想だと蔑んでいたのだ。
彼はそれを知っていたのに、知っていたはずなのに、こうして僕と普通に接した。
僕なら、一瞬で、激昂するだろう。
憐れみは最大の屈辱だ、とは思わないけれども。
でも、理由なく、誰かにそういう感情を持たれることには愉快で居られなかった。

それなのに。
憐れんだ僕を憐れむことなく、ダイは・・・僕に生涯の宝となるような言葉を言った。
彼の心に秘められた想いと同じくらい、僕との関係を大事にしているよ、と言われたような気がした。

「なんだよ・・・なんだよ」
僕は呆気にとられて、そのまま思ったことを口に出した。
少し前を歩いていたダイが、困ったように唇を少し突き出していた。
僕の表情は・・・あの時のダイと同じ貌をしているに違いない、と思った。

シャボン玉の話をしたとき、ダイが浮かべたあの表情に。

***千載不磨13

しかし、考えてみると、僕がダイと同じ過程を経ているのであれば、僕も間もなくダイのように何かを憂え誰かのために祈りを捧げ、誰かの笑顔を思い浮かべて幸せになってくれと思えるときが来るのだろうか、と思った。

・・・ダイは僕の後ろ暗い気持ちを知っていたように思う。

僕が居ても居なくても同じだと思って欲しくなかった。

僕は、僕と離れたダイが、誰ともうまくやっていけないと良いのに、とちらりと思ったことを恥じた。
もしくは、そつなく何事も処理できる彼のことだから、人当たりは良くても真実の友人ができることのないように、と願っていたことを、ダイは知っていたように思う。
だから、僕の前では、中学生になったらどうしようとか、部活に入ろうかな、とか、具体的な将来像を語ることはしなかったのだと思った。

彼に憂いを与えていたのは、僕だったのだ。

うまく言えなかった。

僕はこれ以上何かを言えば、大声でわめいて・・・ダイに理不尽な言葉を言ってしまうようになっていた。
彼は自分のせいだと思っていたのだろう。
だから、さっきからしきりに『ありがとう』と彼は言っていたのだ。
泣き顔を見られたら誰だって気まずく思う。それなのに、彼は僕の目の前で涙を見せた。
大事な人が行ってしまうと泣いた。
それに同調することもできなかったし、励ましてやることもできなかった。
ただ、彼を、哀れんだ。
それは最も必要のない行為であったのに。

けれども、ダイはそれらをすべて彼の涙で流し、僕に『またね』という。

彼は、最初から。僕の物思いに、気がついてた。僕の小さな悲鳴を聞いて、僕に近寄った。僕の作った高い心の檻を越えて・・・
ダイは僕にすべてを見せてくれたというのに。

それなのに、僕のことを蔑んだり哀れんだり低く見たりすることもなく、彼は、僕に・・・いつもと同じように会話をしていつもと同じように接した。

もうすぐ逢えなくなるのに。
それなのに、彼の中では、僕とダイの関係は、いつまでも千載不磨なのだ、と言ってくれた。

・・・狡いよ、ダイ。

僕は泣きそうになった。込み上げてくる熱い滾りを制御することができない。
ぎゅっと奥歯を噛みしめて、眼を見開いて、そして僕は鼻を大きく息を吸った。

僕の呟きを聞かなかったことにして、ダイは言った。
「不磨。・・・またな。また、明日。本、嬉しいよ。待っていたものだということあるけれども、ダイがそれを覚えていてくれたことの方が嬉しい」
「そういうのはもっと大人になって、社会人になって、誰かをおだてる時に使った方が良いよ」
「そうだね、そういうことには向いていないからな・・・」
将来か、と彼はぼやいていた。
「明日の天気より将来を気にする小学生というものを、少し体験しても良いのかな」
そんな軽口を叩いて、彼は大きく伸びをした。脇に挟んだままの本はまた大事そうに、手の平で掴みなおしていた。

「届けてくれたお礼をしないといけないな」
僕が絶句しているのを、今度はダイが話題を切り替えた。
僕は首を振った。
「いらない」
「それじゃ、出世払いにしてくれ」
「そうする」
「不磨が覚えていてくれよ。きっとだ」

それからそこで、本当に行くよ、とダイは言った。
僕ももう帰る時間だった。

「礼には及ばない。でも・・・僕と別れるときにはダイは『またね』と言ってくれることだけ、希望しておく」
「・・・出世払いじゃないの？」
「出世するかどうかわからないから」
僕とダイはそう言って笑った。
おだてるのが苦手なダイと、出世が見込めないと僕が言った僕の将来は、どうなるのだろう。
でも僕たちにはまだまだ可能性がたくさんあるからこそ、そんな会話ができてお互いがわかってた。
そしてそんな話をする時期は限られた僅かな瞬間しかないのだということも、わかっていた。
「じゃ、帰るよ」
僕はそう言った。
別れの時には笑顔で別れよう。
それはいつも思っていることだった。次を約束しているときには、特に。
「またね」という言葉には笑顔を添えなければ、効果が半減する。
次も逢いたいと思うから。
また、笑ったダイの顔が見たいから。

・・・でも、僕がそう思っているだけではなかったのだとダイが教えてくれたから。
僕も、笑顔で別れることにした。
涙がたまっている瞳だったと思う。
でもダイはそのことについては、何も言わなかった。

ごめんよ、ダイ。
僕は僕の不安を、ダイを蔑むことで紛らわそうとしていたんだ。

彼が望んだことを叶えてやろうとして、神様気取りで約束事を破って本を持って行ってやることも。
手の届かない人に手を伸ばそうとして傷ついていることを、自分の特権みたいに思って、訳知り顔で、立ち会ったことも。
すべて彼のためではなく自分のためだったんだ。

でもそれは違っていた。

ダイは最初から傷ついていなかった。
ダイはルールを破ってまで何かを望んだりしない。

誰かを傷つけても自分は傷つきたくなかったから。

「・・・誰かのために、何かをできるって、素晴らしいよね、不磨」
彼は別れ際にそう言った。
そして、次には勢いをつけて「また明日！」と叫んで、小走りに建物の中に入って行ってしまった。
もし、彼が僕を見送ると言ったのなら、僕はいつまでも動かないでいるだろうと思ったのだろう。
実際、そうなってしまいそうだったから。
そして・・・僕の困惑したような何とも言えない表情をダイは見て、そして、だから、行け、と言ったのだ。
そうやって誰かの背中を見送ることも、誰かの背中を押してやることもできるダイは、これから一体、どんな大人になるのだろうかと思った。
僕たちは同級生なのに。

僕はずっと年を経てしまった年上の大人のように、彼を見つめていた。
これから輝かしい将来という名前の光が、小走りて去っていくダイの背中で輝いているように見えた。
薄灰色の空の下で、彼だけが明るく燦然と光を放っているようだった。
こんな薄暗い空なのに。

・・・僕は眩しくて眼を細めた。

この時初めて、僕は自分の名前のように・・・ダイが千載不磨に名を残す何かを為し遂げることが出来ますように、と祈った。

あの人とダイは長い時間を一緒に過ごしたのだと聞いた。
だから、あの人の光が、ダイに入り込んで、そして光の種となって、ダイに息づいているのだと思った。
雪の種は形を変えて、彼の中に入り、芽吹き、そして光になった。
いつか、僕も・・・彼のようにになれるだろうか。

誰かのために、泣いたり怒ったりして、誰かのために、何かをしようと自然と体が動くような、そんな大人になれるだろうか。

僕がダイと過ごした最後の冬がそれで終わった。

そして、もう、ダイと冬を過ごすことはなかった。

それから、案の定、ダイは高熱で失調してしまい、2週間も学校を休んでしまったのだ。

授業がほとんどないと言っても、2週間も寝込んでいて、それでも本調子に戻れずにいたので、結局3週間ほどダイの姿を見ることが出来なかった。

加えて、ダイと入れ替わりに今度は僕が流感にかかってしまい、登校禁止になってしまったのだ。これも10日ほどかかった。
互いに、互いの休んで居た時のノートや連絡物を届けに毎日相手の家に行ったけれど、うつるかもしれないと言われていたので、僕たちは結局・・・3月に入るまで顔を合わせることはなかった。

電話などでは話をしたけれど、僕は喉もやられてしまっていたので、最後はほとんど話をすることができなかった。
でも、それでも不満に思うことはなかった。

だって、僕たちは「またね」と挨拶したから。約束したから。
今でも、思い出すと胸が苦しくなる。
大人になったら、こういう記憶は懐かしいという想いだけ残ると思っていた。
今でも、時折苦しくなる。

ダイ、君の言ったことは本当だった。
永遠に同じものはない。
絶対に変わらないものはない。
あの時に感じた痛みも疼きも、和らぐどころか、ますます僕を切なくさせる。
切ないという気持ちを知ったから、僕は大人になったのだろうか。

この苦しい泣き出しそうに成るほど熱い物思いは、僕の中で、薄れるどころか、もっと違う強烈な痛みとなって僕の中に残った。

・・・結局、僕は卒業式にも出席できずに、ダイと別れなければならなくなってしまった。
そのことを詫びようと思ったけれど、保護者同士の挨拶で終わってしまった。
僕の住んでいる場所は引き続き我が家の所有であったから、いつかまた戻ってくるという気安さがあったのかもしれないけれども。
それでも。
僕はちゃんとお別れを言いたかった。

いや、違った。
またね、と言いたかった。
さようなら、ではなく。
また今度、と言って別れたかった。
その時にはもうメールもモバイルもだいぶ発達していたから、すぐに連絡が取れるという気安さもあった。

でも、冬休みや夏休みの別れとは違う。
本当に、逢えなくなってしまうことすら可能性としてあり得るのだ。
それなのに、ダイは毎日いつもと同じように連絡事項とプリントと課題と、それから、お大事にと書かれたメモだけを遺して行った。
卒業式間近の最上級生なんて、やることはほとんどない。荷物も僕は、年明け早々にすべて持ち帰ってしまっていたから教室には僕の痕跡は出席簿に残る、ふりがなのついた名前だけであったはずなのに。
ダイは、いつも同じように僕の家にやって来て、決して逢うことが出来ない僕のために荷物を運び続けていた。

それがどれだけ嬉しかったのか、僕は伝える余裕がなかった。

***千載不磨14

僕とダイの別れはとても呆気ないものだった。
別れとは、それほどの素っ気ないものだと思う。

もともと、卒業式の日には僕はそこに居られないことはわかっていた。
だから、担当教師は僕を呼び出して、様々な書類を渡したのだから。

僕がようやく起き上がれるようになった時には、あいにくと週末のことで、そして僕はここを離れなければならなかった。少し延期しようか、と言われたけれども、僕はそのまま予定通りに出発しようと言った。どういふわけか、また、すぐに逢えるような気がしたから。その代わりに、ダイに手紙を書いた。

今時手紙を残すなんて、時代錯誤もいいところだ。何でもメールや電話で話が通じてしまう。でも、僕は、僕だけしか紡ぐことができない紋様としてそれを残したかった。読んですぐに捨てられても構わない。でもダイならそれをしばらくの間は残してくれていると思っていた。思い上がりかもしれないけれども、ダイはそういう人なのだと思っていた僕の認識は、間違っていないということを証明したかったのかもしれない。

とうとう、僕が登校することなしに卒業しそうだということを担任は公表したらしい。僕の家には・・・カードが届けられていた。僕は連絡先を書かずに、そのまま一言だけ「またな」と書いて皆に返却するように手配してもらった。それがダイが預かってきたカード達だと知って、僕は苦笑した。僕は誰の記憶にも残らないのだろうと思っていたし、そういう風に振る舞ってきたので、きっと、ダイが皆に声をかけたのだろうと思った。そういう時には妙に気を遣うダイは、将来、人の事ばかり気にして損な役回りばかりを受けるようになるのだろうな、と思ったが、素直にそれを受け止めることにした。ダイの好意を過ぎた真似だと思ふほど、僕はこどもになりきれなかった。

出発は、朝早くだった。僕は長い間ここで働いてくれていた使用人の人たちに軽く挨拶をした。彼らは少し涙ぐんでいたけれども、引き続きここで定期的に働くことは約束されていたので、僕がまた戻ってくるのだ、と思っているらしかった。ここには、僕はもう戻らないだろうと思っていた僕の予想に相反した考えでもって、彼らは僕とまた逢えるから、いってらっしゃい、と言った。僕はうん、とだけ言った。

今になって考えれば、とても素っ気ない僕の卒業だった。成績表や配られなければならない連絡事項はすでに保護者の元に郵送されていたし、卒業証書も、後日送られてくることになっていた。そういう紙面は単に事実を証するだけで、もう一度見てみようという気持ちになれないだろうから、僕は、それらに固執することはなかった。これはいつの時代の卒業でも同じなのだろうと思った。実際そうだった。感慨に耽ることはない。それが僕なのだ。不磨という名前の通り、淡々と長い時間を過ごして生きるだろう。でも、僕はその中でも、ダイと過ごした時間を忘れないと思った。ダイだけではない。彼が居た教室の雰囲気や、放課後の遊び、そして図書館の本の匂い、音楽室に並んだ音楽家達の肖像画のプリント・・・・・・ひとつひとつがきつと、いつか、宝物のように大事な思い出になれば良いのに、と思った。今はまだ記憶でしかないけれど、それはいつか、思い出になるのだろうか。それが大人になるといふことなのだろうか。

そんなことを考えていた。

あれほど親しいと思っていたダイとの別れがこれほど淡彩であるとは思っていなかったけれど、別れを惜しんだあの雪の日のやり取りがあったので、もう、それで良いのだと思っていた。僕は、誰にも会わない朝を選択した。もう、季節は春になっていた。朝の空気は澄んでちょっと寒かったけれど、僕の病み上がりの躰に障る程ではなかった。すでに長くなった日が顔を出して、僕の家玄関前を明るく照らしていた。この太陽のように、永年を輝かしく生きろ、という意味を持つ僕の名前が嫌いだった。でも、今度は、誰かに自分の名前を問われたら、胸を張って自分に込められた願いを言うことができるだろうと思った。

それはダイが教えてくれたからだ。誰かのために、怒ったり泣いたり、幸せを願うことが、どれほど素晴らしいことなのかを。

きつと、「あのひと」が教えてくれたのだろう、と思った。彼にそんな素敵なことを教える人は、いったい、どんな人なのだろうか。僕はいつか、きつと、その人にも逢えるのだろうと、何となくだけれども予感していた。

ダイ、またね。また・・・逢おう。僕は家の玄関を出るときに、そう思った。名残惜しい気持ちはあった。でも、必要な荷物はすべて運び出してあったし、今日の僕は身体一つで出発するだけだった。旅行に行くときより簡単な出発だった。

外には車を待たせておくから、という手筈になっていたけれど、予定されていた僕の出発時間より少し遅れると連絡があった。だから僕は玄関先で、のんびりと・・・朝の陽光を眺めながら、物思いに耽っていた。

ダイには、昨日のうちに、手紙を添えて投函していた。それから、卒業の時には、大きな花束を彼の家に届けてもらうように頼んでおいた。きつと、驚くだろう。これまでのお礼のつもりだったけれども、もので表現することのできない僕の気持ちは、手紙にしたためた。言葉を選んで、幾度か書き直したけれど、全部を伝えることは難しいと気がついて、ただただ、ありがとう、と伝え、連絡先と、僕のメールアドレスを書いた。

そして、入学まで少し時間があるので、ゆっくり養生するから、またいつか一緒に遊ぼうと書いて、最後に、「またな」と書いた。

僕は空をまた、見上げた。
あの時のような、雪の種の落下を予想させるような空でも雲でもなかった。
もう、季節は春だった。
まだ柔らかいけれども、季節は確実に巡っているのだと思った。
この瞬間のこの僕の気持ちは、次に同じように春の朝の空の下ではもう、同じではないだろう。
だからこそ。
忘れてしまうことを畏れずに、ずっと記憶していいたいと思うことが大事なのだった。

ダイが僕を忘れたって良い。
僕がダイを好きで、僕が忘れたくないと思っている事の方が大事なのだから。

僕が玄関先の花々と別れを告げて、少し遅れているという車
その時だった。
「不磨！」
ダイが居た。
僕は驚いて、目の前のダイをしばらく凝視していた。
こんな朝早くに、ダイは、僕の家に来た。
すぐに僕は笑顔になった。
彼が見送りに来てくれたのだとわかったから。

別れの時には笑顔で。これは大事な決まり事だ。
「やあ、ダイ。おはよう。はやいね」
僕がそう言うと、ダイは少し怒ったように言った。そして僕を責めた。
「今日の出発だって、どうして知らせてくれないんだ」
「知らないのにここに居る理由がわからないな」
僕がそう切り返すと、彼は眉を顰めて僕を見た。
見れば、彼の愛用している自転車が、僕の家壁にもたれ掛かっていた。
僕が出てくるのを待っていたらしい。季節は春でも、まだ朝は冷えるというのに。
「風邪がぶり返すよ」
「不磨こそ、こんな朝早くに出発だなんて。まだ本調子ではないのだろう？」
気管支が弱くて僕がいつも咳き込んでいることをダイは知っていたらしかった。
「今日は大丈夫。ダイがいるからかな」
僕はそう言って微笑んだ。
ダイに出発の日を教えたのは、この家の使用人の誰かだろう。
なぜなら、僕とダイの会話を尊重して、見送りに玄関先に出ていた人々や、車の扉を開けて僕が乗車するのを補助しようとしていた運転手さんまでもが、姿を消していたからだだった。
それを裏付けるような言葉がダイの口から出てきた。
「日参して、不磨の家の人に、ようやく聞き出せたよ。なんで、口止めするんだよ」
「こうやってダイが来るだろうと思ったから」
僕は笑った。よくあるワンシーンを演じるつもりはなかった。
このまま見送られたら、彼は、二度も誰かの背を見送ることになる。
「まったく、口の軽いおとなは困るな」
僕は肩を竦めた。
「そう言うな。こちらがしつこく聞いたからだだよ」
ダイが苦笑してそう言った。
そして、僕の方に近寄ると・・・ぼんぼんと僕の肩を叩いた。

「もう時間だろう？」
「うん。でも車の到着が遅れていて、搭乗時間に間に合わなくなりそうなので、あまり話ができない」
「それなら、これを持っていってくれ」
ダイは、肩にかけていた鞆から、一冊の本を取り出した。
・・・それは僕がダイのためにこっそり借りていた本だった。しかしそれは新品だった。

彼は読んだ本を、もう一度買い直したのだろうか。
「家の手伝いをして、小遣いをためて、買った。・・・卒業まで借りられないと思ったから、自分で買おうと思って」
「でも読んだらどう？」
「不磨は読んでないだろう？僕と同じくらい楽しみにしていたこと、知ってるよ」
ダイがそう言ったので、僕はちょっと笑った。泣きそうになった。
彼は何もかも、お見通しだったのだ。
僕はその本を受け取った。
ありがとう、と言った。
ダイはやっぱり凄い人だ。
僕はそんな人の友達だと思いがっていた自分が恥ずかしかった。
そして、彼と知り合えて良かったと思った。

「道中長いだろう？だから退屈しのぎに」
彼は笑ってそう言った。僕はそうするよ、と言った。
僕たちの会話はとても短いけれど、それだけで十分だった。
「そろそろ行くよ」
そう言うと、ダイはちょっと肩を持ち上げた。
「車がこんなに遅れるとは思わなかったから。不磨を急がせてしまった。ごめんよ」
・・・彼が不思議なことを言うので、僕は吹き出した。
日差しが移動してきて、玄関先の日だまりは、僕とダイの上に降りかかってきた。
暖かい日差しだった。
もう、季節は春だった。
あの雪空の冬は過ぎ去ってしまっていた。

「なんだよ、それってダイが僕の家をわざと遅らせたみたいじゃないか」

そう言った僕の言葉を肯定も否定もせず、ただ笑っているダイの顔を見て、彼が僕と話をするために、この本を渡すために、何か細工をしたのだと気がついた。

「・・・ダイ、何をやったの？」

「何も」

「ウソつけ」

僕が軽く睨むと、ダイはくすりと声を漏らして笑った。

「僕は本当に何もしてないよ。・・・ただ、この通りを、フランスの要人が通るっていうんで、通行止め箇所がたくさんできてしまったことを、ちょっとだけはやくみんなより先に知っていただけ」

「・・・それって、ダイがそう仕向けたの？」

「人間性が悪いな。ただ、時差で眠れないと言っているある人物に、朝早く来るなら、あいつの部屋の合い鍵を渡してやっても良いよ、と取引しただけ。

・・・加えて、その時間しかこちらに来てはいけないよ、と念押ししただけだ」

呆気にとられていた僕に、ダイは片眼を瞑って、悪戯っ子のように無邪気な笑顔を浮かべた。

「内緒だよ」

僕がかつて言ったように、彼はそう言って笑ったので、僕もつられて笑ってしまった。

ダイにはやっぱり、叶わない。

彼なら本当に実現しそうだった。そして本当に実行したのだろう。

彼の人脈についてほとんど知らないことに気がついた。

狭い校舎を出た、広い世界を知っているダイの背中を見送ってやりたかった。

「・・・ほら、行けよ」

彼が僕の肩をまた軽く叩いた。

「うん」

そしてダイと僕は、自然と、握手を交わした。

おとなの挨拶だと思っていたけれども、僕とダイは、どちらがどうということでもなく、自然と・・・握手を交わしていた。ダイの手は少し冷たかった。

ずっと、待っていたのだろうと思った。

玄関を鳴らせばよいのに、朝早いから、と遠慮した彼の心を考えただけで頭が下がる。

「ダイ。・・・また逢おう」

僕は彼と手を離すと、そう言った。小さい声で。

彼もまたな、と言った。

言いたいことは手紙にしたためたつもりだった。

しかし、その言葉すら、今の握手ほどにはすべてを伝えきれなかった。

どうしても、どうしても。

彼の友達でいたかったから、僕は彼と最後まで会わないことを決めたのに。

それなのに、ダイはこうして会いに来てくれた。

それだけで、満ち足りた。

いつか、彼が、困った事態に遭遇したら。何かに悩んだら。

今度は、僕が彼の背中を見送ってやろうと思った。

誰かのために何ができるだろう。

僕はこのこたえを胸に秘めて、これから大人になっていくのだろうと思った。

本当に時間が迫ってきたらしく、運転手が乗車を促すために、扉を今一度開けてエンジンをかけた。僕はダイに背中を向けて、ゆっくりと車に乗った。

「ダイ。この本の感想文を書くよ」

「そうしてくれ」

分厚くて、読み込むまでには大変に時間がかかりそうだけれども、それでもダイが僕にくれた贈り物は、本の文字だけではない何かを乗せて、真新しい表紙の光沢を放っていた。

膝の上に大事に置いた。

そして、車の後部座席から、僕はダイの姿を見た。

彼はいつまでも僕を見送っていた。

運転手さんが気を利かせて、ゆっくり走ってくれたけれど、間もなく曲がり角にさしかかって、すぐにダイの姿は見えなくなった。

彼は手を振らず、ただ、僕を見ていたようだった。

僕もダイを見ていた。手は振らなかった。

だって、また逢えるのだから。

僕はダイの姿が見えなくなると、急に暖かい車内に入ったせいで、少し咳き込んだ。

けれども、膝の本は、決して手放さなかった。

・・・ダイの言うとおりで、朝早い時間であるのに、大通りは騒がしかった。

彼の言ったとおり、大使館送迎で、この辺りでも滅多に見ることのできない大きな車両がゆっくりと凱旋するかのようになり、走っていくところに出くわした。

一車線通行しかできなくなっているんで、運転手が時間に間に合うかどうかぎりぎりだと言ったので、僕は笑った。

ダイの魔法だ。

僕はそう思った。

だから、遅れてもいいよ、と少しばかり鷹揚な気持ちになっていた。

僕には時間がある。

けれども、今日のこの時間は二度と繰り返さない。

だから、すこしばかり・・・それを噛みしめて味わってみようと思った。

道路は込んでいて、運転手さんは少し苛立たしげにハンドルを小刻みに動かしていた。

僕は、膝上の、ダイの温もりが残っている本をゆっくりと開いた。

この感想文を書いて、ダイに届けるのと、ダイが大きな花束と手紙を受け取って困惑気味な顔をするのと、どちらが先なのだろう

うか、と思いながら。

(FIN)

F-side GRAFFITIと落とし文 前編

あの冬の時間から1年が経過したとはとても思えなかった。

僕は日々の暮らしで精一杯で、四季の移ろいなどにはまったく気を留めていなかった、というのが正直なところだった。ダイを忘れたわけではない。

僕たちの時代には、メールやWEBカメラによるチャットなど「遠くにいる感覚を払拭するためのツール」がなんでもあった。毎日の生活に追われて、それまでの友人とは疎遠になった、という話はよく聞いたが。

僕とダイの間は違っていた。でも、それは他の人との親密さと少し違っていたのかもしれない。

WEBカメラなどによる会議システムについて提案してきたのはダイの方だった。「この方面に詳しい人がいるので、セキュリティや安全性に優れていると思うこのソフトを使って欲しい」とダイから提案されたときには、正直言って驚いた。

・・・彼はそういう方面に明るいと言うことを知らなかったからだ。

でも、ダイは世間で言う「理系文系」に分類されない人物なのだろうな、と思った。時たまいる。そういう人が。

僕の両親が僕に引き合わせる人々も皆、そういう傾向が強かった。けれどもそのような優れた才能を発揮する人々は、みな一様に何かに欠けていた。思いやりであったり、人の話を聞く能力であったり、人材育成能力であったり・・・自分の中での成長と完成に手一杯で、他者とのネットワークについてはまったく考えていないようだった。それはとても残念なことで、両親が僕にそうあって欲しいと願っているのであれば、僕はそうできないことをいつの段階で告げなければならぬのだろうということが目下の悩みになっていた。

環境が変わることはあまり気にしていない。それまではそういうことが多々あったから。それはいつものこと、ということで処理できた。

けれども。
けれども。

ダイの環境の変化の激しさには、ただただ驚くばかりだった。

離れてみてわかった。
彼は大変に几帳面でまめな性格だった。

とても忙しくて、それだったら気にかけてくれなくても良いのに、とさえ思うのに、彼は短いメッセージを決まった日にちに送って寄越す。少し余裕があれば、自分が今何をしているのか、何を考えているのか、箇条書きで送って寄越す。決して、不磨はどうだろうか、と僕の返事を促すことをしない。自分一人の独白のような報告であるのに、彼はそれを見ている人のことを想像して何か行動しているような気がした。

・・・そして同時にWEB会議システムについて随分と手慣れているな、と思った。彼の視線は常にカメラだった。しかし自分の報告とか録画に関してそうやって・・・視線を、その後に観るであろう人物に合わせて少し上向きにする、といったようなことは、慣れている者にしか思いつかないことだった。

そこで僕はダイの事を本当によく知らなかったんだなあと思える。それなのに、律儀に連絡を寄越す彼が・・・とても希有な存在だと思った。僕はダイの他にもこうして連絡を取りつつも、その後、連絡が取れなかった人が少なくない。けれどもダイはこうして僕にアクセスする。

話の内容などではない。
彼が僕を気にしているということが、どんなにか僕が嬉しいと思うのか、彼は知っているから。

だから、長期休暇を利用して、彼と過ごした地域に戻ることにしようということがわかったとき。真っ先に彼に連絡した。すると彼はすぐに連絡を寄越した。日本時間では相当な夜間であったにも関わらず。

いつ、いつまで滞在し、自由な時間はあるのか、と言っていた。僕は苦笑した。僕の変った姿を見て、彼は辟易しないだろうか。背も伸びて、声も低くなった。今も身長が伸び続けているので、手足の関節が痛む夜を過ごしている。顔も長くなり、彼の知っている不磨でなくなったことを認識する。だから僕は・・・逢うのはやめよう、思っていた。

こうして連絡を取り合って、解析度の低い画像を眺めている程度なら、まだ良いのだ。・・・夢を持てるから。

僕も、彼も、変わってしまったから。録画送信で送られた彼の顔を見ると、とても切なくなる。

ダイが大人になったら、こうなるだろうな、という面立ちだった。
けれども、それが僕にはどうにも切なかった。
予想通りに、彼は健やかな大人への入り口に到達したことを知ったから。

寂しい、と言った方が良かったのかもしれない。
僕のことは棚に上げて随分と勝手な感想を述べているが。
彼は僕の中では・・・永遠に、懐れのかたまりのような人物なのだ。
期待の宝玉と言った方が良いのかもしれない。

・・・ダイは中等部に進んで、それまでのダイとは考えられなかったオーケストラ部に入部したと聞いて大変に驚愕した。
彼がオーボエ奏者としての頭角を現し始めたのはこの頃からだ。

インターネットで彼の名前がヒットするようになった。
まだ始めて一年だというのに。
彼は、カオル・ヒビキヤという世界的に有名なヴァイオリン奏者に師事して・・・始めてから一年という短い期間で、中等部オーケストラでは大変に有名な彼の学校の中で、一番難しい楽器の一つを克服してしまった。
彼が、世界的に有名な奏者の師を持っているということが理由のひとつだが。
彼の楽器はどこから譲られたのかわからないが、世界で数台しかない名器であることと、彼のまじめな性格が相まって・・・彼をそこまで押し上げたのだと思う。

僕も少なからず応援した。
遠く離れたこの土地で、彼の活躍を聞くのが楽しみになり、彼がジュニア・ソリスト連名に登録できる資格を保持するまでに数年前であることを知りつつ、ネット署名を集めて、彼の登録を可能にした。

・・・普通は、彼のように部活動で始めた学生が大成することはありえない。
けれども、彼がそれを現実にしたのであれば。
彼を・・・彼の進む道をどこまで明るく照らし出すことが出来るのだろうか、という僕なりの挑戦だったのかもしれない。

だから。
そんな活動のことは・・・彼はほとんど僕に知らせずに黙ったままでいたのに。
ダイから、招待状が来たときには、心臓が止まる勢いだった。
メールの添付ファイルにつけられた、そのチケットの番号が、最優先席を示す一桁の番号だったからだ。

中学校の演奏会のチケットだった。
どこにでもある年度末の集大成の・・・イベントのひとつにしか過ぎない。
けれども、彼の学校は違った。
特別な担当教官を選任し、音楽教育に熱心で、かつ毎年のようにコンクールに入賞している強豪校だった。彼はそれを知っていてそこに進んだのだろうかと思うくらいに、それまでの常式を覆すような破竹の勢いでもって様々な手順や経路や順番を無視して、あっという間にトップ奏者に上り詰めてしまったらしい。

・・・ダイの人柄に寄るところも大きかったと思う。

彼は決して驕らないし、努力を自慢しない。そして優れている人物には素直に「凄いね」と褒め称える潔さも持っている。
合気道を習っていたので、その影響もあるのかもしれない。
甲府の有名な武道家のダンジョウ家の手ほどきを受けたのだという。

礼を尽くして礼を驕らず。

そういう精神が彼の中で息づいているのかもしれない。
あの業界には大変に珍しい、異色の存在だったことだろう。

■GRAFFITIと落とし文 002

彼が様々なコンクールに顔を出し始めたと聞くと、僕は他人事とは思えずただただ嬉しくなった。

この世の中にはたくさんの方がいて、それぞれに価値観が違う。
中には、自分ではない人物の自慢をして嬉しくなっている人がいて、「自分の友達はこれだけ凄いんだ」「自分の親はこれだけ凄いんだ」と言う人に対して、僕は好感を持つことが出来なかった。
凄いのは自分ではなく他人だと吹聴する行為がどうしても同調することができなかった。

けれども、今ならわかる。
彼らは単に嬉しいだけなのだ。
自分の事のように嬉しがっているだけなのだ。
そう思うと、稚拙な自慢話は退屈な話と思わず、ほほえましく聞くことが出来るようになった。

そして少し苦しくなった。
カンがよいのだと思うが、彼がどれだけ黙々と練習を積み重ねていったのかが目に浮かぶようだったから。
幼い時から教育を施されてきた者たちと決定的に出遅れている彼がそこまで上り詰めるためには、唯単に、練習量が人より多いということだけでは不十分だったはずだ。

・・・そしてすぐにわかった。
彼の独特の音色であったり、奏法というものは、ヴァイオリン奏者であるあの高名な人物からの影響が大きく、それが功を奏したこと知った。
弦楽器のなかでも、人の声に近いと言われているそれを自在に操ることが出来る彼女から、彼は技術だけではないいろいろなものを教わったに違いない。
彼の音色は人の歌声に近い。まろやかで艶があり、何より耳に入れば離れない音色でありながら、オーケストラという集団の中で実に巧妙に溶け込んでいる。

それが計算されたものであり、彼に音色の秘密が自ら調整しているリードであることも何となくわかった。

彼がチャットに参加しなくなったからだ。

リードは消耗品だから、いくつかストックをしなければならない。

しかしあれは生き物と同じなので、大量に生産してストックしておいても、時間が経過すればコンディションが悪くなる。彼はそれを防ぐために、途中までリードを調整するために鑢や小刀で削りを調整し、演奏会の前にはそれらを直前で調整する。だからしょっちゅう指先を傷つけるものの、演奏に支障を来すから、キーボードなどを激しく叩いて指先を接触する遊びはだんだんと控えなければならないということなのだろうと思った。僕はそのことについては何も言わなかった。

彼の素晴らしい才能が開花しようとしている瞬間に立ち会えないことが口惜しかった。

一緒に学校に進学していれば、もっと違った方法で彼を支えてあげられたのに。

いや、違う。

僕がそうしたかったのだ。

僕が彼にそうしてやりたかったのだ。

彼は凄い、と手放しで断言できる。

・・・並大抵の集中力では成し得ないことだった。

それを中学生のダイがやり遂げてしまうのだから、彼は大層な精神力の持ち主で、何をしても大成する器なのだろうと思った。

努力を惜しまない者が最後に行き着きたい場所に行き着けるのだ。

彼はそれを実践している。

僕はふと、思った。

あのシャボン玉の人に、聴かせてやるために彼が音楽を始めたのだろうか、と。

空を見上げて魂の鎮魂を祈る彼女のために、彼ができることはたくさんあるのに。

・・・それなのに、彼は、なぜ、音に魂を乗せて運ぶ方法を選んだのだろうか。

僕はそれを、ダイに逢った時に聞いてみようと思った。

送られて来たチケットは無駄にするつもりはなかった。

都内でも有名なホールだった。

パイプオルガンがあり、オーケストラピットがほとんど無音で稼働することで有名な、最新の音響設備が整っている舞台に乗りたいたいと思う者はダイだけではないはずだった。

チケットの礼のメールを送ったときに、よくそんな場所が抑えられたね、と言うと、「とあるコネ」を使った、と彼が返信のメールの中で種明かしをしてくれた。

午前中にカオル・ヒビキヤのモーニングコンサートがあり、その後の余興として彼女が場所を提供可能にしてくれたということだった。

「本当はそういうたぐいのマジックは使いたくないと思うのだけれど」

と彼が言ったが、今年で退職が決まっている副顧問の先生に土産を持たせてやりたい、という部員からの感謝を形にしたかった、

と言っていた。

そういう気遣いが彼らしいと思いつつも、彼はそういう気遣いなしにいられる人物と多く巡り会うことが出来ると良いのに、と祈らざるを得なかった。

彼はきっと・・・「ちょうど都合良くホールに空きがあるらしい」という程度にしか周囲に話していないのだろう。

彼らしかった。そして誰にも労ってもらえなくても彼はそれでも平気なのだ。

でも僕はそこで少し心配になった。

他人を大事にするあまり、自分を粗末にすることはないだろうが。

自分を優先しないで、誰かを優先するようなことがあったとき。

後悔するのはダイではなく相手なのだとすることをダイは知っているのだろうか。

だから・・・演奏会には、彼だけを称えようと思った。

お小遣いをためて、彼に両手一杯の花束を用意し、よそ行きの服を着て、新品の革靴を履いた。

これは僕のジグスだ。大事なときには、新しい靴を履くときっと良いことが起こる。

根拠はないけれど、それは僕にとって大事な「まじない」であった。

そして、それは自分のことではなく、誰かがそうであるようにという祈りを込めた場合にとっても効果的だったので、久方ぶりに・・・僕は誰かのために祈りながら、僕だけの秘めたる想いを胸に込めて、颯爽と会場に向かった。

両手一杯の花束を抱えて、まだ年端もいかないこどもがホールを訪れたものだから、周囲の者はぎょっとして僕を凝視した。

でも僕はまったく気にしなかった。

なぜなら、この華を受け取るダイの顔を想像するだけで・・・久しぶりに逢う僕の友人の晴れ舞台に、相応しい贈り物を届けることが出来るのだと思って、自然と微笑みが漏れるから。

まだ人が少ないと思っていたのに、結構な人数がそこに集って居て僕は面食らった。しかし、午前中に高名な奏者の演奏会が終わった後だし、彼女はまだ裏口から出てきていないのだろう。

待ちを決め込んでいる彼女のファンがうろうろしているための人混みのようだった。

演奏会が終わったあとの火照った顔で歩き回る人と、僕のようにこれからその場所に行くために気もそぞろになっている人とが微妙に均等に入り交じた空間は、本当に奇妙極まりなかった。

カオル・ヒビキヤは、その後のことも考えていたらしい。

演奏会の終了後に、入場チケットがその場でも購入できるという触書を直筆で書き、チケットを購入した客は、彼女のサイン入りCDかDVDを購入できるという特典をつけた、と立て看板に書いてあった。

・・・商業的才能を生かされていると褒めた方が良いのか、彼女の生来の悪戯好きが高じたと苦笑すれば良いのか、よくわからなかった。

でも、とにかく、そんなことをしなくても、この演奏会はあっという間に満席になってしまった、と受付で聞いて、僕は頷いた。

この地域でも有名なジュニア・オーケストラの選抜メンバーになっているダイが所属する、毎年入選している経験と実績があるその集団はジュニアと言っても、唸るほど上手な連中が多かった。

・・・彼らは中等部から音楽コースに進まず、高校進学時に留学するか、高等部に推薦試験で試験科目が免除される、公立校からの受験を狙っている。
もう僕はこの学区を離れてしまっているのだから、教育システムがどのようになっているのか知ることには意味はないと思って知ろうとはしなかったけれど、それでもダイは大変に恵まれた環境で健やかに過ごしていると知って、ますます・・・嬉しくなった。

本当はゲネプロの時から舞台裏に忍び込みたい気分がずっとあった。
こういうホールは、大抵が同じ作りなので、関係者を装って入り込むことは簡単だったし、セキュリティが厳しい場所であってもうまく入り込める手段を知っていた僕は、その花束を直接手渡ししたいと考えて、受付に寄託することを躊躇った。
そしてその花束の大きさに面食らっている受付の子に向かって、僕はにっこりと微笑んだ。こういうときには余裕を見せた方が便利だった。

■GRAFFITIと落とし文 003

僕は受付に配置されている、僕と同じくらいの年齢の人達を見て微笑んだ。
同じ学校の同級生で、手伝いに来ているのだとすぐに知ったからだ。
いかにも慣れていない風情だった。
慣れていないくらいに大きなホールで、かつてない経験をしているのだから仕方がないことだと思えるくらいに、皆一様に緊張している。彼らや彼女たちが預かっている品と言えば、ピアノの発表会などや誕生日によくある記念品などの小さな小物や、手に持てるブーケ程度の花束ばかりだったからだ。

これはこれで良い選択だと思う。

花束を持ち帰る奏者の最も大事にするものは、両手一杯のブーケなどではなく、彼らが毎日の生活で睡眠時間より長い時間触れているであろう、彼らの分身なのだから。
しかし讃辞の証であるそれらは、どれだけ多く持ち帰ることが出来るのか、ということが奏者の力量や人気を表すものだから、ジュニアの世界でも競争することに脚を踏み入れた者たちは・・・数と量のどちらも根拠として競い合う。

やがて・・・彼らが世界を飛び回る奏者になるのは、今日のメンバーのうち、一体何割なのだろうか。
割合すら換算できないくらいごく少数であることの厳しさを、僕は傍観者として良く知っていた。

ダイならば。

それこそ、根拠のない自信に繋がるつまらない要素だと笑っただろう。
しかしそういう方法でないと讃辞を表することの出来ない者たちへの慈愛を忘れていない彼は、満面の笑みでそれらを受け取るに違いない。
自分の思い入れ、という大きくて重くて澱んだ願望を摘んだ箱船のような花々を受け取ってなお、ダイはそれらを軽々と持ち上げる。

・・・それは、あのシャボン玉を見上げた時と同じだと思っているからだ。

どんなに重たい気持ちでも、空気や風に乗ってどこまでも行きたい場所に行き着くことができると知ってしまったから。

・・・言い換えれば、大人になってしまったから。

彼は、だからこそ・・・個々人の妄念のような意識を受け流す術を知っている。

それは・・・
あのカオル・ヒビキヤから学んだのだろうか。
それとも・・・あのシャボン玉の人から学んだのだろうか。

僕の両手一杯の花束に面食らった受付の人達は、自分たちの職務を忘れて、楽屋への近道を丁寧に教えてくれた。僕は内心苦笑していた。
セキュリティの厳しいこのホールでは考えられない状況だったから。

しかし一般の中等部学校の演奏会程度ではこれくらいできているのは大変に行き届いていると言った方が良いのかもしれない。

・・・ダイの価値について、彼らは過大評価しているつもりでも、本当は過小評価していると思った。

彼がこのままこの道を進むことを選んだのだとしたら、十年後はとうてい僕たちと親しく言葉を交わすことさえ無理なくらいまで高みに行ってしまうだろうと知っていたから。

理由はそこかしこに落ちていた。
彼あての花束は、テーブルひとつの上に乗るに足りないほどにたくさんあり、量も数も質も・・・すべてにおいて勝っているからだった。
ダイは誰かと競うことはしないと思うが。
それでも・・・彼の人徳や能力やその他すべてについて、僕だけが感じる主観的な価値観によるダイという人物が、決して誇大妄想による偉大な人物ではない、という証明が成されたようで、僕はとても嬉しくなってしまった。

嬉しいという感情は実に摩訶不思議だ。
他者をもその感情に引き込む。
喜怒哀楽というものは伝染性があるということは知っていたが、即効性があるのはその感情が最たるものであるということを確認した僕は、つつい微笑んでしまう。これは・・・大変に興味深い事象であると思っていたし、自分以外の誰かがこれをいつか証明してくれないかどうか、と心許ない希望を持ったことを僕は否めることはできないと思っていた。

希望は失うと失望と言う名前に変わる。
でも、僕は・・・希み、望み、そして次を願う気持ちというものを否定することは出来なかった。

僕はダイと過ごしたあの時期を再現したいと思っているのではない。
けれども、あの時代がかけがえのない、希有なる時代であることを知っている。

・・・いつか。

僕が大人になったときだったり、考えたことはないけれども、いつか死の間際にあったりするときに。
ダイと過ごしたあの時期が、一番好きだった場面のひとつであれば良いのに、と思う。
ダイがそう思ってくれれば、更に加えて嬉しいと思うだろう。
でも、それは付属でしかない。

様子に。

僕がどう思っているか、なのだ。

僕はこうしてちょっとした気遣いと気配りと手順を済ませて、受付を通り過ぎた。慣れからくる余裕を持った方が優位なのだ。

あまりにも規模の違う花束を持っている人は、それが無条件で通行証になってしまう。

・・・ダイに対してこれほど肩入れしている人物はおそらく僕一人ではないだろう。

こういった演奏会のノウハウを知っていたとダイが知ったら驚くだろう。
でも僕は小さい時からこうして行ってきた。
美術や音楽や絵画や・・・そのほかすべての自分では創り出すことの出来ない何かについて教えられた。
それは僕が両親に与えることの出来ない、この世に生み出すことの出来ないものだったから。

だから彼らは僕に顕したのだ。

■GRAFFITIと落とし文 004

両手一杯の花束を抱えながら、僕は楽屋口へ向かって、裏を慣れた足取りで歩いた。
・・・実際、このホールの楽屋口には何度か来たことがある。
そんな経験をしている僕ぐらいの年齢の者は余りいないだろう。
この時ばかりはそういう経験を有り難く思った。
ゲネプロはとうに終わったようで、めいめいが最後の練習に励んでいる。
各部屋を割り当てられた者たちは、防音効果が施されている楽屋からさえ音が漏れるほどに練習に勤しんでいた。

演奏会直前のこの雰囲気は独特だ。
僕はステージから脇階段を上って、舞台の上に入った。
両手一杯の花束を抱えている僕は、幾つもの扉を開くことができなかったから。
それに、ステージから昇って、そしてそのまま楽屋に行く方が、この時間帯には都合良かった。
照明は全照になっていて、かなり舞台の上は暑かった。
・・・演奏会前のステージには譜面台や難壇が並んでいる。
随分な大所帯であるな、と思った。同時に、ダイがアマチュアの学生オーケストラの一演奏者として終わるはずがないのだろうな、と思った。

ダイが座る場所はすぐに分かった。
指揮者の正面・・・このオーケストラという音の波の中心に座る。
コンサートミストレスかコンサートマスターかはわからなかったけれど、その音合わせに最も重要な基音を出す。
そして全員がそれに合わせる。だから最初の音を出すダイのプレッシャーは相当なはずだった。でも彼なら淡々とそれをこなすの
だろうなと思う。

学芸会のような演奏会ではなかった。
演奏会の看板も、豪華な譜面台も、揃いの譜面隠しも、何もかもが専用のもものばかりだ。
ダイの通う学校はそれなりに全国大会で名前を見かけるところだった。
公立では大変に珍しかった。この学区は音楽教育の特区であることは知っていたけれど、大変に恵まれた環境に居ることに甘んじ
ないで居るダイはやっぱり凄い人なのだなと思った。

そして上下関係より実力が左右される厳しい場所なのだなと思った。
ダイの学年で、首席奏者になるというのは、余程・・・彼に喰うほどの実力が備わっているのだろう。しかもこれだけ大所帯である
のであれば、人格高潔でなければつとまらない。・・・この世界はそういうところだった。
ダイの師であるカオル・ヒビキヤも、ソリストとして活躍しているが、一時期、活動拠点を持たずに転々としていたことがあった。
その時の話も、彼は聞いているのだろうか。

僕はそんなことを考えながら、階段を上りきって、ステージをちょっと見回すと・・・大きく息をついた。
花束が重かったこともあったけれど・・・舞台から客席を見て、自分の事でもないのに緊張が伝播して来るのがわかったからだ。
大変な人数がここに訪れることになるだろう。
ステージが暑いと言うことも出来ないほどの熱気がやがて訪れる。
客席は案外ははっきり見えるものだ。
ダイも・・・このステージから僕を見つけることが出来るだろうか。
久しく逢ってなかった。
演奏会の終わりに、会ってこうと思っていたけれどそれはやめにした。
・・・こんな両手一杯の花束を抱えて彼は帰ることになるから。
そして僕だけではないだろうたくさんの花束を抱えて、彼はちょっと困ったな、と言いながら照れくさそうにして、それを全部自
分で持ち帰るのだろうと思った。

ステージの裏を通り抜けると楽屋への通路に出る。
そこは頻繁にステージマネージャーが出入りして最後のチェックをしているので、開け放たれたままになっていた。

随分と物々しいな、と思ったが僕の容姿はずいぶんと役に立った。
この開場前の僅かな時間、逢魔が時に似た一瞬の空白ができる。誰もステージを見ていない僅かな時間ができる。
この瞬間に不審人物が入り込んだり、気圧の差によって演奏家が舞台を降りてしまうような空調や調音の異常が生じたりする。

そんな一瞬の静寂を・・・僕は好んでいるように思った。
他人事みたいな言い方だけれども実際にそう思ったのだから仕方がない。
張り詰めた空気も好きだったが、この寸刻の空気はなかなか味わえるものではない。
人の気配はするのに、人が居ない。
そんな場所で、たったひとり・・・ダイはライトを浴びて座る。他に同じパートの奏者も居るが、首席奏者はひとりだけだ。その孤独と重圧に彼はいつも挑んでいるのだと思うと、ダイがなぜこの路を選んだのか、少し分かったような気がした。

■GRAFFITIと落とし文 005

舞台は整えられていた。
僕はしばらくの間・・・そこで立ち尽くして、舞台から見える、仄暗い客席を眺めていた。
両手に抱えた花束の重さを感じながらも、開場前のこの雰囲気は何とも言えないと思う。
しばらく味わったことがない緊迫感と少しばかりの緩衝だった。

・・・こうして立ち止まって、少し先の廊下を行った奥部屋で待機しているであろう、ダイになかなか会いに行こうとしないのは・・・僕がダイに再会することが怖かったのかもしれない。

大人の一年と、こどもの一年は違う。

環境が変わるだけではない変化を伴って、僕とダイとの間に発生した距離というものは、僕らが一緒に居た時間をもっと別の場所に格納してしまいそうになるのだ。要するに、どれだけ親密であっても、時間が僕らを違う関係にってしまったのではないのか、と怯えているだけなのだけれども。

しかしこの両手一杯の花をそのままにして、持ち帰ることは出来ないし、何より彼の演奏を楽しみにしてきたのだから。
・・・それほど話ができないかもしれないが、楽屋に置いてくるだけでも良いではないか。

そして僕はそう思いながら、開場の壁に埋め込まれた時計を見た。
開場や開幕までの時間を正確に知らせるために、このホールはデジタル表示を採用していた。観客席から見やすいように傾斜した時計は、舞台側からは見えにくい設計になっている。
舞台の上に乗る者たちが集中できるようにという配慮だった。

ダイ、こんなに凄い場所で舞台に立つなんて、やっぱり凄いや。

僕はそう思いながら、舞台の端に立って、バランスを崩さないように注意しながら、時計を覗き込んだ。もうすぐ開場だ。だから、もう移動しなければならない。

照明や音響の最終調整をしているのか、ライトが淡くなり、減光した。
それまでが強烈な眩だったので、僕は目を細めた。
視界に慣れるまでは目がちかちかする。
暗いところから、いきなり明るいところに出たときと同じ現象だった。

その時。
それを待っていたかのように、こつん、と沓音がして、何かが舞台袖から出てきた。
舞壇の脇をすり抜けて・・・僕がその物体の輪郭を見定めるより前に、舞台の中央に躍り出たのだ。

茶色の物体・・・いや、茶色の髪の人だった。
とても小柄だ。
僕は両腕でしっかりと抱えていた花かごに包まれて視界が悪くなっていたけれど、首を伸ばして状況を確認しようとした。

・・・それがとても小柄な女の人だと気がついたのは、飛び出して来たと思った瞬間に、譜面台につまずいて彼女がきゃっと声を出して、その場にしゃがみ込んだからだ。

茶色の髪の女の人だった。
ここからでは座り込んでいるので、それだけしかわからない。
彼女はしゃがんだ脇でぐらぐらと大きく左右して揺れる譜面台の脚を持って、傾倒を防ぐと、こちらに聞こえるほど大きな安堵の溜息をついた。

「大丈夫ですか」
僕はここの関係者ではないから、こういう風に誰かと言葉を交わすことは避けた方が良かったのだけれど、声をかけずには居られなかった。
彼女はこういう舞台になれていないのかな、と思ったからだ。
ライトからの照り返しが強いので、舞台の上での暗転はかなり目に負担がかかる。
だからそんなときに小走りで舞台上に躍り出るなんて・・・幾度か舞台経験がある者は決してやらないことだから。
・・・そのために、オペラやオペレッタやバレエなどでは、床に小さな目印が置いてある。
これは、立ち位置や椅子の位置を調節するからで、照明がくるくと変わる舞台では、周囲の物体との距離から推し量ることが出来ないからだ。

最初は、演奏前の学生が忘れ物を取りに来たのかと思った。
しかし彼女は学生服も演奏会用の衣装も身につけていなかった。
・・・演奏会だというのに、ごく軽装で・・・そして肩には大きな鞆を提げていた。
目が慣れてくるにつれて僕はその人に向かって、歩いて行く。
彼女が立ち上がった時、僕はすぐ近くに寄って、開場前で誰も座っていない舞台の上に幾つも並ぶ奏者用の椅子の上に、花籠を置

いた。
花を包んでいる籠の中の柔らかいフィルムが、かさり、と音を立てた。

「・・・素敵な花ね」
彼女のその声から、僕よりずっと年上の人なのだとことがわかった。
しかし、彼女はとても若く見えた。
近くで見ると、若いな、という印象より幼いなという雰囲気だと言った方が正しいのだとわかる。僕が言うのもどうかと思うが、彼女はとても童顔だった。
大きな瞳に髪も茶色だった。とても色素が薄い。とても色が白くて、日に当たらない職業の人なのかな、と思った。
それなのに、不釣り合いな鞆を持っており、それが引っかかって転倒したというのに、彼女は鞆の中身を最初に気にしていた。
・・・不思議な人だ。
明らかにここの関係者ではないから、保護者か父兄だろうか。
それにしても、彼女の年齢は若かったし、演奏する学生の姉というかんじでもない。

「ありがとう。今日、友人に贈るためのものです。・・・それより、怪我は？大丈夫？」
僕はずっと年上の人だとわかっていたのに、つい同級生と同じような口調で喋ってしまった。彼女の気易さが全身からにじみ出ていた。
「大丈夫。ね、そんなに大きな花籠だったら、持ってくるのが大変だったでしょう」
「苦にならない大変さというものがあると思いますよ」
僕がそう答えると、彼女はくすりと笑った。
「誰かを思い出すわ、その受け答え」

■GRAFFITIと落とし文 006

僕とその人は、ゆっくりとそこで会話を交わしている余裕などなかった。まったくの部外者が舞台の中央で世間話しているとなったら、すべてに迷惑と支障を与えてしまう。ダイの晴れの舞台にそんな汚辱を僕と与えることはとうてい我慢できなかった。早く移動しなくてはならない。だから、今一度、僕は椅子の上に仮置きした花籠を抱えようとした。

「オーボエという楽器を持つ人は、どこに座るか知っている？」

その言葉から、やはり、彼女は音楽に疎い人なのだとわかった。楽団の中核にあって、その音を振り所にする鳴り物について知識を持ち合わせていない。だから、彼女は何処に何があるのかわからず、様々な場所に目移りしてしまっていたので、足元への注意が散漫になり転倒したのだとわかった。

茶色の瞳のその人は、周囲をせわしなく見つめていた。きっと目が弱い人なのだった。僕は既に目が慣れて、あたりをずっと見渡すことが出来たけれど、彼女はそうできないのだと思った。細められた瞳がくると・・・焦点を定めているいると彷徨う様を見て、彼女は一体どういう目的で、どうしてここにやって来たのかなという疑問が湧いた。

「同じ楽器にも、座り位置があって・・・誰を捜しているのですか？」
これではどちらが大人か子どもかわからなかった。しかしその会話すら自然に感じてしまう。彼女は本当に知らないのだ。そして知らないことを素直に尋ねるといふ素樸な質を持っている。だから決して彼女の言葉に何か遠回しな意図を感じることはなかった。

この短い時間で僕にこれほどの情報を与える人も珍しいと思った。普通なら、自分自身について、わからないように話をしたり近づいたりするというのに。まったく変わった人だった。

そこでようやく僕はその人の特徴について観察することにした。茶色の瞳に茶色の髪、白い肌ということは、一目見てわかっていただけたけれども。この人は一体、誰を目当てにやって来たのだろうか。「・・・その人の座席を探しているのですか？」
「そう」
そこでますます彼女は音楽業界に疎いのだと思った。奏者・・・特に管楽器などの人数が少ないパートでこのような学生オーケストラでは、人材育成を目的として、年功序列を重んじて、奏番（トップ、ファースト、セカンド、サード、アシスタント=アシ）などのこと。ファースト奏者がトップ=ソロ奏者であることがほとんど）を変更するからだ。あのダイでさえ、第三部の交響曲はトップ奏者だが、第一部と第二部の小品集では、先輩奏者を優先してセカンド奏者としてパンフレットには紹介されていた。

僕はその人に声をかけた。「今はプログラムパンフレットを持ち合わせていませんが、誰だか名前と年齢を仰っていただければ、だいたい推測がつきます」僕がそう言うと、彼女は、余程慌てていたのか、自分の名前と年齢を言った。「マリナ・イケダです」僕は吹き出しそうになったが、彼女のまじめな顔を見て、それをようやく抑えた。

それほど要領を得ていないこたえをまじめな顔で返答するのに。彼女は何も知らない。けれども・・・知らない者がこういった大きな会場の舞台に忍び込むことはできない。

余程要領が良いか、予め楽屋入場の登録を行っている者かのどちらかだ。最近では、不審者の無断入場を防ぐために、父兄や保護者を名乗る者は、事前に登録をしておき、楽屋入り口でチェックを受けてからでなければ入れない。
・・・よくよく観察してみれば、彼女の上着の裾には、「Visitor」と書かれた小さなバッジが光っていた。

それなら、先ほどの、保護者が父兄であるという予想は当たっていたことになる。しかし、彼女は自分の身内が座る場所さえわからないと言って困惑し、そして決して立ち入ってもわからないであろう場所に入り込んで、何かを探している。

「ここの奏者の学生の名前ですよ」
そうはっきりと言うと、彼女は、ああ、と言って頬を赤らめた。まったくこの人の年齢や精神の構造について、よくよく観察したくなるくらいだった。これほどまでに幼さと大人の精神を混ぜた状態を保っている大人も珍しかった。僕の両親も僕の同級生の中ではかなり若い方であったが、それでも、彼女の幼さというか、瑞々しさには及ばない。どちらが大人で、どちらが子どもなのかわからない。それでも、彼女を放置しておけないという気持ちにさせられるのは、なぜなのだろうか。頼りなさそうな、ということではない。しかし人はひとりでは生きていけないから助力については肯定的であるという主義の持ち主であるように思えた。だから、僕に気安く質問をするのだと思う。

マリナ・イケダと名乗った人物は額に汗を浮かべながら、そっと言った。
僕にそうやって尋ねられたことが嬉しかったと言った。
「困っていたの」
そう最初に言うてから・・・彼女は、僕がよく知る人物の名前を言った。

「私はダイ、と呼んでいるのだけれど。彼の音を聞きに来た。それから・・・少しばかりのおつかいも果たしに」
事情をよく知らない彼女が、何の使いにやって来たのだろうか。
ここで、ことり、と僕の好奇心が蠢くのを感じた。
それがこの人の天賦の才であるのなら・・・この人物は大変な魁傑なのだろうと思った。
自分自身が優れた絶対的な才能を持っている者ではないが、逸足の士が彼女に寄り、彼女に助言や福音や援助を惜しみなく注ぐの
だろうと思った。
そういう人間はいる。

この、運命的とも言えるような出会いに・・・僕は何を言えばよいのだろうか。
彼女の言葉にただ、従うだけしかなかった。

ダイの知り合いで。彼が申請しなければ得られない来場IDを持っている人。
彼の家族構成は知っていた。年齢がさほど離れていない姉と両親の4人家族だ。そして名前も違うから・・・彼女は親類か、知人
という程度の関係であるはずなのに。
僕が持てなかった、来訪者IDを彼女は持っている。それほど、ダイと親密な関係にあるという人物を僕は知らなかった。

嫉妬するということはなかった。この人なら、ダイの知り合いでも仕方がないとなぜか領けたからだ。
年齢のせいだろうか。性別のせいだろうか。
それとも・・・彼女の溢れる魅力のせいだろうか。
これほど短い会話しかやり取りしていないのに、マリナ・イケダが大変に風変わりな人であるということはすぐにわかった。
そして、ダイはこういう人物に・・・心を寄せるのだろうか、ということも。

■GRAFFITIと落とし文 007

僕はダイが一番最初に座る場所を指し示した。
彼の演目では、第三部の交響曲まではずっとセカンド、サードと座り直し、時にはイングリッシュホルンを吹く。
常々、彼は器用だと思っていたがそれは顕著になったらしい。
彼の経験年数で、すべての演目で舞台に乗る、というのは大変なことだ。

普通、トップ奏者はそうやってパートを別にして吹くことを嫌う。
ソロを吹くときは特に神経質になる。
楽器の持ち替えなどは極力避ける。
持っている楽器を手放せば温度が変化して、音程を再度調節するのに、一苦労するからだ。

「彼はそこに最初に座りますよ」
僕は中央の椅子を指し示した。
さっきまで彼が座って最終的な調整を行っていたと思われる場所だった。
・・・そこに座ればまだかれの温もりが伝わってくるような、そんな気がした。
「次に、そこ、そしてその次にはその椅子に」
僕は曲順に指で示しながら教えてやった。
「最後の・・・その、一番長い曲を吹くところはあの中央の場所？」
「そう」

彼女が、ひょっとしたら目が弱い人なのかも知れないと思ったからだ。
たぶん、コンタクトレンズを装着しているのだと思う。
舞台の照明が眩しすぎて、彼女はしょっちゅう瞬きを激しく繰り返していたから。
そのうち慣れればどうってことないのだけれども、それより前に僕たちはここから退場しなければならない。
少し目を細めながら、彼女はうんうん、と頷きながら僕の話聞いていた。
そして一番最後の席だ、と僕が教えた場所に行くと、マリナ・イケダはその椅子に勢いよく座った。

彼女は大変に小柄だったので、背もたれにぴったりと背中をつけてしまえば、少し脚が浮いてしまう。
その動作がとてもこどもっぽくて、僕は驚いて目を見開いた。

・・・大人のやることではないと思って僕は啞然とした。

何をしたいのだろうか。
ダイの熱烈なファンということではなさそうなのに。
それなら、彼の楽屋まであと少しの距離であるにも関わらず、誰に見つかるかわからない場所でうろろしたりしない。
熱狂的なファンは、奏者の楽譜や使用したリードを手に入れたがったりするものだが、彼はそこまで有名ではなかったし、一度こ
ういったところで出入り禁止になってしまうような行為が発覚すれば、近寄ることさえ難しくなるからそういったことは少し知恵
を働かせれば、決してしてはいけないことなのだとわかる。

ますます、彼女とダイの関係が気になった。

マリナ・イケダと名乗ったその女性は、その席にしばし座って居ると、高い天井を見上げて、照明の眩しさに目を瞑った。次に周
囲を見回して、そして舞台を見つめ、もう一度舞台上の誰も座っていない空間に茶色の瞳を向ける。

大変に恵まれた機会だと思う。
ダイのコネクションがなければ、到底使用できないものばかりだった。
設備や音響効果のすべてが計算され尽くした見事な舞台に、豪華な演奏椅子に、譜面台だって特注品だ。
普通の学生オーケストラが使用できるものなどではなかった。

しかし、その譜面台の上に乗っている、予め用意された楽譜達は、それらとは正反対だった。何度も読み込まれて書き込まれて、そして製本した上から更に補修テープが貼られているほどに繰り返し使用された名残がそこかしこに残っている。繰り返し奏法が変化するので、鉛筆書きで書かれており、楽譜の端はめくり跡が残っていた。どの楽譜も同じだった。彼女はそれらを愛おしそうに見つめると、やがて言った。

「・・・こんな場所で演奏するなんて、ダイは凄いねえ」
独り言なのか、僕に共感を求める言葉なのかわからない口調で、彼女は言った。そして、僕が見ていたのと同じように、彼らがこの日のためにどれだけ時間を費やしたのかが明らかにわかる譜面をぐるりと眺めた。彼女は眼が弱いという想像は当たっているらしく、詳細な様子までは見ることが出来なかったようであった。目を細めて、ダイの楽譜を眺めていたが、よくわからないわ、と言って首を振った。けれども、それでも無言で、彼らの持ち主達の成果が披露されることを待っている数々の備品を眺めながら、彼女は溜息を漏らした。

「・・・でもここはとても寂しい場所ね。みんなの中心にいるのに」

彼女がぼつりとそう言ったので、僕はマリナ・イケダの感性に感嘆した。彼女が普通の人と少し違うのだなということを知る。

華やかで良いわね、とか。
ダイは素晴らしいでしょう、とか。
そういう讃辞が述べられるのかと思っていたのに。
彼女はそこに座り、周囲を眺めて、そして音楽にそれほど詳しいとは思えないのに、奏者が誰もが一度は感じる言いようのない不安感について、彼女は経験しても居ないのに、言い当てた。

そして「一番長い曲だから、一番分厚い楽譜よね、きっと」と言うと、演奏の順番に降順に並んでいた楽譜の中から、最も厚い冊子と言っても良いほどのそれを取り出すと、じっと食い入るように見つめていた。

「ね・・・これがダイの使うもので良いのかしら」
彼女は曲名すら知らないで、この演奏会にやって来たのだろうか。
僕はマリナ・イケダが持ち上げた製本された楽譜を見て、頷いた。
きっちりと裁断されて製本テープが綺麗に貼ってあった。ダイらしい。
遠目で見てもわかった。たくさんの書き込みがしてあった。
おそらく、自分への注記だけではなく、彼の気になるすべてのものが書き込まれているのだろうと思った。
きっと、総譜も持ち歩いているに違いない。
席移動をすることが多い管楽器は、楽譜を持ち歩いて入場したりしない。
だから、本当は彼はぎりぎりまでこの楽譜を眺めていたいと思っているだろうと想像した。

すると、彼女は僕の肯定の言葉を聞くと、大きな鞆の中から・・・サインペンを何本も取り出したので、僕はまた声を失った。想像を絶する時というのは、無声になるのだと知る。
「やめた方がよい」
僕がそう言わないうちに、彼女は譜面になにやら書き込みを始めたのだ。
鉛筆で、真っ黒になった譜面に、あっという間に花が咲いた。
下書きもしないで、いきなり書き始める。
速乾性の水性サインペンは、滲みがなく鮮やかな色味で有名なメーカーのもので、ボディにはフランス語が書かれていた。
僕も知っている有名なものであったが、日本で販売されるときには日本語にリプリントされるから、これはフランスで購入したものなのだとということがわかった。
僅かな時間なのに、あっという間にその譜面は花壇になった。
しかし微妙に、書き込みを避けて彩色されている。
僕はその色合いに妙に感心してしまっていた。
こんな時なのに。
彼女のグラフィティを一度は窺めたけれど、静止しなくて良かったとさえ思った。

ああ、そうか。
僕は思った。
この人は、絵を描く人なのだ。
大きな鞆の中身は画材道具なのだとわかった。
スケッチブックの端が覗いていたから。
そしてそれを何より大事にしていたのは、それらが彼女にとってとても大事なものだから。
・・・でも僕はその鞆から、今日のパンフレットが入っているのを発見した。
セキュリティバッジと一緒に渡されたものなのだろう。
僕は先ほどもらったばかりのそれと少しデザインが違っていたから、初稿の段階のゲラを持っていたようだった。

僕は息が詰まった。

そのパンフレットには、たくさんの書き込みがしてあったから。
そして、そのパンフレットは、ここにあるどの楽譜よりも更に使い込まれていた。
パンフレットは情報を取得し、演奏会は記録となるだけであるから「使い込む」という表現は不適切であったけれど。
何度も何度も読み返したあとがあった。それだけ読み込んだのであれば、曲目くらい勉強してきても良さそうなのに。
そして、そこには乱れた走り書きで赤く大きな文字が走っていた。
「ダイの演奏会。時差注意」

そこで推測がついた。
彼女はフランスから、ダイの演奏会を聞くために来日したのだ。
時間がないから、花束を手配しておくことすら省略してやってきた。
目を瞬かせているのは、目が弱いせいもあるだろうけれども、時差が影響しているからだろう。
そして、こっそり・・・彼女は彼のために彼女ができることをした。

彼女は、彼のために用意される数多の大きな花束よりも、もっと素晴らしい讃辞の花束を用意した。
楽譜に咲き乱れる花束をダイに渡すことができるのは・・・マリナ・イケダという人物だけしかないのだろう、と。

■GRAFFITIと落とし文 008

「これでよし」
きゅっとキャップを閉める音がして、僕は我に返った。
「・・・驚くよ、ダイは」
「後で怒られるのは確実ね」
彼女はそう言うのにこりと微笑んだ。とても幼い表情だった。
僕は好奇心の方が勝って、マリナ・イケダが鞆にペンをしまい込むために身を屈めた時に、ダイの譜面を覗き込んだ。

彼女は新進気鋭の画家なのだろうか。それにしても名前を知らない。
けれども・・・どこか懐かしいと思わせる色だった。これほど短い時間で描き上げるのは、相当慣れているからだ。
「あんまり見ないで。・・・急いで描いたから、今、もうすでに描き直したい気持ちでいっぱいなの」
「いや、素晴らしいと思うよ」
僕がそう言うと、マリナ・イケダが少し困ったような顔をした。

「私が良いと思う時は駄作と呼ばれて、落書き程度にしかならないものや、駄目だと思う時には褒められる。これってどういうことなのかしら？」
「傑作と思う作品は作らないことにしたほうが良いってことだよ」
僕の返答が彼女の何を刺激したのかわからなかったけれども、マリナ・イケダは首を傾げて、おかしいわね、としきりに唸っていた。

・・・楽譜の隅には、あの走り書きと同じ筆跡で、小さく、マリナ・イケダのサインがしてあった。
その脇には、紛失防止のために、ダイのサインがあった。・・・この曲のこのパートを吹く人物はひとりしか居ないから、そんなサインは必要なのに。これは彼の几帳面な性格を表していた。
そして、正確に言うと、ダイのそのサインの脇に、マリナ・イケダが名を寄せたのだ。

励ましの言葉を書くでもなく・・・彼女は花を置いて名前を書いて、それだけで終わらせた。
まったく変わった人だったが・・・
「そろそろ行かないと、最終チェックでステージマネージャーが来てしまう」僕は彼女にそう言うと、マリナ・イケダは立ち上がった。
「わかった。・・・なんだか隠れん坊で遊んでいるみたいね」
呑気な言葉を呟きながら、マリナ・イケダの背中を急かして、僕は花束を持ち直して、そして舞台の袖に下がる。
今度は薄暗い舞台裏に入ったので、僕とマリナ・イケダは同時に目を瞑って闇目に慣れようと努力した。

「・・・何度か演奏会前の舞台裏に来たことがあるけれど、今日のような体験は初めてだよ」
知らず知らずのうちに、僕も彼女の独り言の癖が伝播していたようだった。
彼女を責めているわけではないが、自分のこの行動にびっくりしていた、というのが本音だった。
「見つかったら、ダイの演奏どころではないよ」
「あら、見つかったら、その時はその時よ」
彼女は屈託のない微笑みを浮かべて、服の裾のピンバッジを見せた。
確かに正規の手続きを経て得られたものであるけれども、それを正規の手続きを経て抹消されたら意味がないだろうに。

「ついでに、もうひとつ、付き合ってくれる？」
彼女はそう言って、僕の目の前で片眼を瞑った。
断ることの出来ない口調に、僕は苦笑した。

これでは、どちらが大人で、どちらがこどもなのかわからない。

・・・そこまで思ってから、僕はこの言葉をダイも使っていたことを思い出した。

彼の両親の経営するアパートの住人で、確か、そういう幼い言動の人が居る・・・と聞いたような記憶があった。
彼女にダイとの関係を尋ねるタイミングは今ではないと思った。

僕は・・・両手一杯の花束が、彼女の創り出した彼を激励する花よりももっと味気ないものであると感じ始めていたから。
大ぶりの花を持ち歩いていても。それをダイが受け取ったとしても。
彼女が関係者に見つかるかもしれないという危険があるのに、この場所にやってきた行為が、僕がそうできなかったことを彼女は為し遂げているのだと感じたから。

彼女はフランスに居ても、こうしてひょっこり彼のために戻って来て、そして会わない年月と気まずさを考えることなく、ただダイに手放しの気持ちを伝えるために行動する。
僕が・・・これまで彼と離れていた間に溝ができてしまったのではないのだろうかと思えて居るというのに。
彼女はそういった距離は関係ないと考えて居るようだった。
そしてそんな彼女を、ダイがとても信頼しているのだということも知っていた。
他者のことについて滅多に話をしない彼が、彼女のことは話をしたことがあった。

決して崩れることのない関係というのはあり得ないと僕の心の中の囁きに、僕は疑問を持つこともなくそういうものなのだと受け入れてしまったことを恥じた。
楽屋にまっすぐに行って、久しぶりだね、楽しみにしているよと伝えればそれで良かったのに。
僕は路の途中で足踏みしている最中に、決して躊躇ったり臆したりしないマリナ・イケダという人物に行き会ったのだ。

■GRAFFITIと落とし文 009

僕とマリナ・イケダは、舞台裏の壁の前までやって来ると・・・彼女は小さく歓声を上げた。
「すごい！」
僕は目を細めた。

ああ、また増えているな、と思った。
そしには、びっしりと無数の者たちの署名があった。
様々な言語で書かれているがそのどれもが名前を記してあり、ここに来た証拠のようなものになっている。
一面の・・・この舞台に乗った者たちのサインがあった。
いわゆる「落書き」というやつだ。

もう一度ここに乗ることを祈って。
この舞台に乗れたことを感謝して。
そして、もうひとつ・・・この舞台裏の落書きには意味があった。

「舞台裏の壁がこんな風になっているなんて、知らなかった」
彼女が感嘆の言葉を漏らすので、僕は質問した。
「知っていてここに来たのではないの？」
彼女がもうひとつ、やっておきたいことがあると言ったのは、この落書きを見たいということではなかったのだろうか。
舞台裏に行きたいと指定したのはマリナ・イケダの方からであったのに。

違う、と彼女は首を振った。
「ちょっとした頼まれ事。舞台裏に行って名前を探してこいと言われたの」
しかし彼女は非常に小柄で、上部のサインまでは見上げて読み取ることが出来ないようだった。だから僕に協力して欲しいと言うのだ。
断ることもできたが、彼女にも時間がなかった。
そしてダイの知人であるこの女性を放置しておくことは出来ないと思った。
「良いよ。でもあまり時間が無いから、そのつもりで」
「ありがとう」
マリナ・イケダはとても嬉しそうに微笑んだ。
茶色の大きな瞳がくるくると良く動く。すでに、目的のものを探し始めているようだった。

「・・・ところで、誰の落書きを探しているの？」
僕が尋ねると、彼女は視線を壁に向けたまま、呟いた。
「カオル・ヒビキヤ」
えっと声を上げた。
ダイの師であり、世界的に有名な演奏家だった。
一体、誰に探してこいと言われたのだろうか。彼女は音楽に疎いようだけれども、カオル・ヒビキヤの熱烈なファンなのだろうか。
その割には、誰かに頼まれた、と言っていたが・・・
「・・・カオル・ヒビキヤのものなら、いくつもあろうと思うよ。彼女はここで幾度か演奏しているから」
「いえ・・・彼女はひとつの場所に幾度もサインをしない。『面倒だ』と言うから。その割には、一度サインをしたものはちゃんと覚えているのだから、不思議よね」
マリナ・イケダは鷹揚にそう言った。
ますます、この人物についてわからなくなってきた。

ダイの師であるカオル・ヒビキヤのことを良く知っている口ぶりだ。
アパートの住人でしかない彼女が、どうして・・・どういう繋がりか、あの演奏家を知っているのだろうか。

「・・・それならもっと上の場所にあると思うよ。普通、人は自分の目線にサインをするから」

カオル・ヒビキヤは大変に体格の良い演奏家だ。
大病を患ったとか、現在も治療中だとか言われているが、まったくそれを感じさせない演奏で、聴く者を魅了する。
長い指に、長い手足に高身長というのは、ソリストにとっては手に入れたくても手に入れることの出来ない恵みであった。
高い位置から音を落とすことが出来るし、繊細な指先を持つカオル・ヒビキヤの独特の音色というのは、ダイの奏法と共通している。
いや、彼が影響を受けたのだろう。

そして・・・僕はすぐにそれを見つけることが出来た。
「あったよ」
彼女は目線を上にして、僕の指さした方向を見た。
「ああ、そこに居たのね」
彼女はカオル・ヒビキヤのサインに対して、まるで人に話しかけるように言った。
確かに彼女のサインだった。幾度か見たことがあった。
そして、マリナ・イケダの言うとおりに、彼女はサインの下にここで演奏した日にちを書き込んでいた。いくつも時系列に並んでいる。
・・・この素晴らしい舞台上、幾度も演奏できる者はそうたくさんは居ない。

そして、彼女のサインを中心に、まるで星々が集うように、いくつもいくつも他者のサインが並んでいた。少しでも近くにサインしたいという願いのようなものが込められていた。
上に下に脇に・・・書ききれないほどのたくさんの他者のサインがあった。
どれも有名な演奏家や、各国の楽団の奏者たちのものばかりだった。
皆が彼女と共演したがつている。まじないが実現するとは限らないのに。
それでも一縷の望みにかけて、彼らはカオル・ヒビキヤを追いかける。
演奏家として長い時間を活躍しながら、今も第一線を走り続ける高名な人物に対する表敬がそこにはあって・・・一瞬、厳肅な何かを感じ取り、気が引き締まった。

僕はその数が多いにも多いので、絶句してただ見上げるばかりだった。
・・・これほどまでに有名な人物に師事しているダイの将来は、きっと・・・こんなふうに、彼のサインの脇に皆が名前を連ねることを願うほどの演奏家になるのだと確信できた。

「・・・ここにはもうひとつ、話があって。
・・・舞台に乗った演奏家が・・・共演したいという演奏家の名前を書くと、実現すると言われている」
僕はそういつて説明したけれど、彼女はそのことを知っていたのだと思った。

マリナ・イケダのもうひとつの目的。
それは何だろう。

■GRAFFITIと落とし文 010

「私の手は届かないから、書いてもらえる？」
彼女はそう言ってから、一緒に来てもらって良かったと言った。
僕は両手に持っていた花を床に置いた。
この人の頼み事には逆らえないし、そのつもりもなかった。
まったく不思議な人だった。

そして彼女は鞆の中から、サインペンを取り出した。
普通はチョークなどの消えるもので書くのだが、彼女はあえて油性のマジックを取り出した。
「ルール違反だとわかっているけれども・・・消えて欲しくない人の名前を書いて欲しいの」
「良いけど・・・」
僕は困惑した。

カオル・ヒビキヤのサインを探していたということは、彼女と演奏したい誰かに依頼された、ということになる。
しかし、マリナ・イケダはどうもカオル・ヒビキヤを知っているような口ぶりだった。
どういうことなのだろうか。
そして、その人物はこの舞台裏のジックスを知っているであろうし、ここで演奏した者であるはずだから、自分で書き込めば良かったのに。
僕のそんな疑問を解決するかのように、マリナ・イケダは説明した。

「その人は・・・ここに来られないの。まだ」
「良いよ・・・ペンを貸して」
僕はそう言って、彼女からペンを受け取った。
そして踵をあげて、少し背伸びをする。
腕を伸ばして背伸びをしても、彼女の目線にはまだ届かなかった。
「どこでも良いの。カオルの名前の近くなら」
「わかった。それで、その人の名前は？」

彼女はその人の名前を言う直前に、唇を嚙んだ。
次に、それまでの悪戯っ子のような口調ではなく・・・大人の人の声で、静かに言った。
その名前は大変厳格に扱わなければならないと言うかのように。

「・・・タツミ・ヒビキヤ」

僕は持ち上げていた踵を下ろした。
腕は伸ばしたままだったけれども、マリナ・イケダの顔を見た。
彼女は眉を顰めて少し・・・微笑んでいた。
茶色の前髪の下で、泣きそうな顔をしていたので、僕は驚いて言葉をかけることができなかった。
表情の変化が激しい大人は幾人も知っている。
けれども、彼女ほど・・・目の離せない人は余りいなかった。

僕はしばらくの間、彼女を見つめていた。
ダイが師事するということを知って、カオル・ヒビキヤの経歴をネットで検索したことがあった。
そこには出ていなかったけれども、彼女には音楽活動に空白の期間がある。
それが病気療養のためにより、とされていたけれども。
彼女の両親も音楽家で有名な家柄である。
そして、彼らの一族から、大変な事件をしでかしたということで一時話題になった人物のことについても僕は知っていたから。
・・・その人物は自分の命でもって購った罪があると聞いたのに。

「内緒よ」
彼女は唇の前で右手の人差し指を立てた。

なぜ、彼女は擦れ具合から経年を推測できる筆記具ではなく、いつ書かれたのかわからないように油性ペンで名前を書け、と言ったのか理解した。
「今」書き込んだと知られなくなかったからだ。
油性は劣化もするけれども、鉛筆やチョークなどの筆記具とは比べものにならないくらいに鮮やかに色が残る。先ほどの水性ペンでは駄目なのだ。
それを見た者が、昔に書いたのだと誤認混同する程度に耐えうるものでなくてはいけない。

僕は黙って・・・また踵をあげて、腕を伸ばした。
今度は、もっと手を伸ばして、震えながらも言われた通りの名前を書いた。
カオル・ヒビキヤの名前に最も近い場所に添えた。
・・・彼女の名前に、彼の名前を重ねたのだ。
ありがとう、と彼女は言った。
僕は見上げていたので、小柄な彼女の顔は見られなかったけれど、涙ぐんだ声だった。

「本人に文句を言われても、僕は責任取らないよ」
書き終わった後で、僕はそう言いながらペンを戻した。
しかし彼女はそれを受け取らなかった。
「あとふたり、書いて欲しい人がいるのだけれど」
「代筆だとわかってしまうから、離れた場所にしか書き込めないよ」
僕がそう言うと、マリナ・イケダはそれでも良いと言った。
ここまで来たら、もう、最後まで付き合うつもりだった。
キャップを外し僕はカオル・ヒビキヤのサインから、樹形図のように複雑に伸びる様々な者たちの起請の刻印を昇って末端の空いたスペースを確保した。
そこはもう僕の目線のところまで降りてきていた。

「ひとりはいちぢだらう？」
「わかるの？」
「顔に書いてある」
彼女が頬を擦ったので、僕は笑った。
マリナ・イケダもそれにつられて笑う。
彼女は笑顔が良く似合った。
「いちぢが書いた方が良く思ふけれど・・・彼はそんなことは決してしたくないってぼやくから」
「そうだらうね」
僕も同意した。
けれども、彼とカオル・ヒビキヤが。
こうして時間差で舞台に昇るのではなく、一緒に演奏する日があれば良いのにと僕も思ふから。
僕は僕の目線に届くところに、彼の名前を書いた。
脇に、小さく、いちぢがカオル・ヒビキヤとの共演する日を楽しみに待っています、と書いた。
これは僕の願いなのかも知れない。

「・・・それからあと、ひとは？」
書き終わると僕は次を促した。
刻限は迫っていた。
舞台の照明が明るくなり始めたからだ。

「・・・シャルル・ドウ・アルディ」
・・・もう当分驚くことはないだらうと思っていたのに。
僕はまた驚いて、ペンを取り落としそうになった。
■GRAFFITIと落とし文 011

一度だけ、彼らは共演したことがあった。
しかしそれ以来、再共演はなかった。
シャルル・ドウ・アルディと言えば、フランスの華として絶大な人気を持っている国民の華とでも言うべきフランスの要人の名前だった。
彼は大変に多才で、ピアニストとしても十分にやっていけるほどの腕前だと言う。大変な親日家でもあるが、だからと言って久しく実現されていない共演についてここに書き込みをする人物が出るとは思えなかった。
それが、マリナ・イケダであるならなおさらだった。
カオル・ヒビキヤを知っているのであれば、それはあり得ないのだと思わないのだらうか。
ネットでも、その時の音源を求めて探している人がどれだけたくさん居るのか・・・カオル・ヒビキヤについて検索する度に、必ずその名前がヒットした。

「それは実現が難しいなあ」
僕が呟くと、彼女は笑った。
「あり得ないことも含めて書くのが願ひ文でしょう？」
「ここは絵馬を書く場所ではないよ」
苦笑して僕が言うと、彼女は同じよ、と言ってまた笑った。
「願ひを込めて書くのだから」
確かにそうだ。
僕は妙に納得してしまった。彼女の考え方にいつの間にか影響してしまっているらしかった。それがわかっているのに、とても・・・霧が晴れていくような感覚を味わう。
うまく言葉が見つからないけれども、彼女と一緒に居ると、自分の中で出せなかったこたえが見えてくるような・・・だが、彼女は助言するわけでもない。
だから不思議な人なのだ、と改めて思った。

たとえば・・・誰も入ってくることのできない場所に、彼女は軽やかに脚を踏み入れて、そして同じ軽さでもって去っていく。
そんな感じだ。
彼女は別離の時には、僕のように感傷的になったり、再会を臆したりすることはないのだらうと思った。
僕自身が、そうなれば素敵だな、と思ったからだ。
彼女に言われて書いたのではない。
彼女に賛同したから書いた。

僕はこれまた小さくシャルル・ドウ・アルディの名前を書いた。
彼が知ったら激怒するだらうな、と思いながら。
「他者が署名を偽造したと言って怒りそうだ」
彼は大変に気難しく人間嫌いで有名だった。
「どうかな・・・明らかに違ふとわかっているものについては意味を考えると思ふわよ」
マリナがそう言ったので、僕はまた、おや、と思った。
彼女はシャルル・ドウ・アルディを知っているらしい、と思った。
カオル・ヒビキヤやいちぢを語る時と同じ口調だったから。
そして、加えて、彼女の表情は柔らかくそしてどこか幸せそうな微笑みを浮かべていたからだ。

その時、舞台袖の階段から、誰かが上がってくる音がした。
関係者ではない。
仕立ての良いスーツを着て、彼は・・・顔が見えないくらいの両手一杯の花束を抱えていたからだ。
ぱっと顔をあげたマリナ・イケダが、鞆を持ち直した。

「じゃ、またね！本当に助かったわ！」
彼女はそう言って・・・僕の手持っていたペンを引き取ることも忘れて、その人物のところまで走っていった。僕が声をかける余裕さえなかった。

・・・彼女の小走りする沓音が舞台裏に響き渡り、やがて男性の前で止まった。彼は不機嫌そうな声であったが良く通るとも美しい声だった。
・・・そしてマリナ・イケダとの会話が響いた。

「・・・オレを使いにするなんて、マリナくらいしか居ない」
「時間がなかったのよ。ありがとう。ダイが喜ぶ。・・・カオルは？」
「間もなく来るだろう」

相手の男性の姿は見えなかった。
僕はその大きな花籠を見て、床に置いた自分の花束を思い出し、慌てて抱え上げた。
僕の用意した花籠もそれなりに大きなものであったけれど、彼の持っているものは入り口から入ることができたのかどうか疑わしいと思うくらいに特大だった。
そして最後までその会話を聞くこともなく、僕は楽屋へと足を運ぶことにした。

彼女のあっさりとした「またね」という言葉の後には、マリナ・イケダはもう、こちらを見ていなかったから。
待ち合わせをしていたわけでもないだろう。
関係者でもないのであれば、彼は僕と同じ過程を経てここにやって来たに違いない。
それなのに、彼女が居ることをわかっていたような口ぶりだった。
そして彼女はもう僕の方を見ることもなく、まっすぐに彼に向かって行った。

・・・マリナ・イケダと彼とは恋人同士なのだろうか。
かなり親密な会話のやり取りだった。
短い会話でありながら、すべての内容が通じ合っていた。

彼女には・・・また、逢えるような気がした。
だから僕は声をかけることをしないで、預かったペンもそのまま持ち、楽屋に急ぐことにした。
花籠を抱えて、ペンをポケットに入れて歩く。

・・・それまでの憂いは一体何だったんだろうと思うほどの経験をした。

本当に短い時間であったのに。

彼女は落書きを残して去った。
それは、Graffitiと落とし文の両方だった。
前者はこどもの落書きを意味していて、後者は大人のそれを意味する。

彼女は。

こどものような落書きを残して、無秩序に行動するのに。
大人の意味深い・・・舞台裏の署名を書きにやって来た。

ダイを案じてこっそり絵を描くのに。
メッセージを残さないで去っていく。

真っ先に彼に逢いに行かないで、花束を持ち運ぶ彼女の連れを待つ。

まったく、不思議な人だった。

僕は長い廊下を歩きながら、学生達が気忙しげに出入りする大部屋をいくつか横切った。
パートごとに設定された楽屋らしく、管楽器が一番大きな部屋に一緒に纏められているらしい。
楽屋番号の下に、パートの割り振りを書いた紙がぶら下がっていたのでそれで何となく類推できた。

磨滅しないで長く残ることを不磨という。僕の名前だ。
それが不滅であるかどうかは、僕の努力次第であるのに。
僕はそれを怠って、ダイが変わってしまったのではないのかと思い悩んでいた。
でもそうじゃなかった。
僕が・・・変わらずに彼をいつまでも大事な友達だと思っていることの方が大事なのだと、あの人に教えられたような気がした。

あの楽譜を見て。
ダイはきっと・・・少し顔を赤くして、あまり驚かない冷静沈着である彼らしくもなく、動揺するのかもしれない。
けれども落ち着いて演奏することを期待されていることを知って、その通りに彼女の願いを叶えるのだろうと思った。

ダイとマリナ・イケダの間にも、言葉や時間や年齢差は影響しないのだと思った。ただ、彼女は彼を労い、彼は彼女のために心を込めて演奏するのだろう。

やがて・・・目的の場所に辿り着くと、僕は入り口で佇んでいる女の子に声をかけた。
ダイを探している、と言うと、彼女はこちらを向いて、花籠で隠れてしまっていた僕の顔を覗き込んだ。

・・・近くにびっくりするほど綺麗な顔があって、僕は息を呑んだ。
気の強そうな眉に、大きな瞳がこちらを覗き込んでいる。
唇が少し厚めなのは彼女が管楽器奏者だからだ。
真っ黒な直毛をきっちり三つ編みにして、彼女は立っていた。
・・・肩には革張りの楽器ケースを提げて居た。
特注品だ。

そこには品の良い書体で「UMEKA」と型押しがしてあった。
まだ新しいものらしく、肩紐のストラップの革色は変色していない、真新しいことを示す薄いページジュだった。
僕はおっと声を漏らした。
そのキャリングケースには銀のプレートが埋め込まれており、製品名と品番が刻まれていた。
そのモデルは最近出たばかりの・・・完全受注のフルートだったからだ。

「ダイを探しているの？私もなの。・・・今日は新しい楽器を見せに来ただけで、私はここの生徒ではないから」
彼女はそう言うにはにかんだ。
僕も他校生なんだ、と正直に話をした。
ひょい、と部屋を覗くと、演奏会本番直前の慌ただしさがそこで繰り広げられていた。
あれほど静かだった舞台裏がすぐそこだとは信じられないくらいだった。
廊下で騒ぐな、とじつくり言い聞かせられていたらしく、皆、廊下で騒ぐことはしなかったが、防音対策の万全な楽屋では大変な嵐の最中であった。

しかし彼女は僕をじっと見つめると、おもむろに話しかけてきた。

「・・・あなた、不磨でしょ」

いきなり呼び捨てにされて、普通なら不機嫌になるところであったが、彼女はダイと僕の友達を呼ぶのと同じくらいの気安さで僕に話しかけた。
僕の名前はとても珍しいので聞き間違えることはない。
怪訝な顔をしていると、彼女はちらちらと部屋の中に視線を走らせながら、言った。
少し陰のある顔立ちであったが、大変に綺麗な子なのだと思う。

「ダイが言った。
自分の一番の友達が、今日必ず来てくれるはずだって。
・・・私は絶対はあり得ないし、演奏に支障が出るから、そういう風に待つのはやめた方が良いのって言ったのに。
でも、絶対来るからって・・・」
そこまで言うと、彼女はふと微笑んだ。
同年代のはずなのに、彼女の微笑みはとても・・・綺麗だなと思った。

「演奏者にとって、花束というのは嬉しいものだけれど・・・何より来てくれることが一番嬉しいのよ」
「そうだね」
僕はその言葉に頷いた。

彼女はそこまで言うと、終わった後に来ることにする、と言って部屋の入り口から去った。大変に姿勢の良い女の子で・・・長い演奏歴があると思った。
ソリストは普通立って演奏したり練習するが、椅子に座るときには背もたれに深く座らない。だから背筋と腹式呼吸によって腹筋が発達する。
そして彼女は・・・反対側の舞台袖の入り口に消えて行った。
おそらく、彼女は受付に花束を預けてあるのだろうと思った。
演奏会前の慌ただしさを知っている人物だろうと思う。
僕の知らないダイの人間関係を見て・・・悔しいと思うどころか、嬉しくなった。
「UMEKA」と書かれた楽器ケースを持っている彼女との関係を聞き出してみようと思ったくらいに。

僕は今日、来て良かったと思った。
時間がないから、ということで早々に退散しようと考えて居た自分が可笑しかった。
それほど長い時間を必要としない。
ただ・・・
元気だった？とか。
演奏良かったよ、とか。
それだけで良いのに。
何を臆していたのだろう。

その言葉に被るようにして、部屋の奥から声が聞こえてきた。
僕は腕の中の花籠を差し出すべき相手が来たと思った。
誰かから、彼女の来訪を知らされたのだろう。
行き違いに退出してしまったことを知らない彼が、慌てて声を出しながらやって来る音がした。

「ウメ！悪い、時間がないから、終わった後で見せて」
隣の楽屋と続き部屋になっていたので、来訪者に気がつかなかったらしい。
小さな出入り口が開いて、僕の記憶している声より少し低くなった声が響いた。

そして、それは同時に起こった。
今、来た廊下の方から、わっと歓声があがったので、僕は反射的に振り返った。
・・・そこには、茶色の髪と茶色の瞳をした女性と、顔が見えなくらい大きな花束を抱えた長身の男性と一緒に連れ立って、こちらに向かって来る場所だった。
前方が不注意になるといけないと思ったのか、彼女の腕は・・・軽く彼の腕に添えられていた。ごく自然に。

開場のベルが鳴り響いた。

僕は花籠を彼に渡したら早々に会場に移動しなければならない。
だから目の前から近づいて来る・・・成長したダイの姿をゆっくり見るのは後からの楽しみにする。

そして、あのGraffitiと落とし文のことについても、少し考えてみようと思った。
マリナ・イケダとの秘密は、僕の胸の中で秘めたるものになり、誰かに詳細を語ることはないと思う。

でも。

ダイと、カオル・ヒビキヤが共演すれば良いのにな、と思ったことや・・・これまで連絡を取ることを遠慮していた詫びをどう切

りだすか思案したことや・・・その他いろんなことを伝えるには、この時間ではさすがに短すぎると思った。

僕の筆跡によるGraffitiとも落とし文とも言えないような、願い事をこめたサインは、消えることはない。それだけは間違いのない事実だった。

「不磨」
近くで、声がした。

演奏者は直前には楽器を抱えて持ち歩く。温度変化を避けるためだ。
それなのに・・・彼は、リードも楽器も別の場所に置いて・・・
花籠を抱えていた僕の両手の上から彼の手を重ねた。
そっと。
その暖かさは・・・最後の日に交わした握手の感触となんら変わっていなかった。

僕は花束の中から、顔を覗かせて・・・まだ、手の平の温度だけしか確認していない古い友人に向かって彼の名前を呼んだ。

彼が変わったように。僕も変わったのだろう。
でも、彼は僕の顔が見えないのに。僕の名前を呼んだ。

「やあ、待っていたよ・・・」

背後で、ダイの名前を呼ぶ声が聞こえた。

それは僕とほんの少しだけ秘密を共有した人の声だった。
そしてダイの大事な人達のひとりの声だった。

・・・彼女に返しそびれてしまったペンは、どちら側のポケットにいれたっけ、と記憶を呼び起こしながら、僕は微笑んだ。

(FIN)

H-side

■Interview 1日目

・・・ええ！覚えておりますよ。

その日はフランスからシャルル・ドゥ・アルディ氏が宿泊されるとのことで、ホテル内では緊張体制が敷かれていました。

でも他のお客様もいらっしゃいますからね。
そういう厳戒態勢をお客様に悟られることなくお過ごしいただくのが、私どものつとめかだと思います。

・・・私ですか？ええ、フランス語を少々。
今回、アルディ氏の担当といいますが、氏の滞在中のシフト勤務を命ぜられました。
もちろん、シフト制ですから、私以外にも何人かフランス語を解する者が待機しておりますが、
多忙なアルディ氏のために、身の回りのものから、ルームサービスまでを担当させていただきました。

当ホテルには、光栄なことに何人ものVIPに滞在していただきましたが、アルディ氏ほどの方にご宿泊いただけるとは想定しておりませんでした。

ああ、過ぎたる主観的発言は、どうか削除してくださいね。

とにかく、アルディ氏の要求はすべてが超一流でホテル泣かせではありましたが、氏の洗練されたセンスというものは卓越していて、ただただ感服するばかりでした。

■Interview 2日目

学会の発表ということで、当ホテルをご出発されるという朝でした。
アルディ様が、私のところにお立ち寄りになり、「これを」と言って、一冊の小冊子をお渡しになりました。

その動作が、ふと、気がついたとかのようになりさき気なくて、
思わずうっとりしてしまい、工作中だということを忘れて立ち尽くしてしまいました。

「もし、自分が戻る前に『マリナ・イケダ』という日本人女性が尋ねて来たら、渡して欲しい」
それだけ言うと、彼はそのまま迎えのベンツに乗ってしまわれました。

見ると、それは学会資料でした。やや分厚く、表紙に書かれた開催年月日から、この学会のためにシャルル・ドゥ・アルディ氏が来日したということがわかりました。

表紙には流麗な文字で、『マリナ・イケダ』様にあてたメモが挟まっていました。アルディ氏は、日本語も書けるんですね。
素晴らしい語学力に感服しました。

そして、そのメモには。
「マリナへ この論文集を持って入場するように シャルル」
ああ、誤解しないでくださいね。盗み見したわけではありません。
見えてしまったのです。

そではさておき。

誰が見たって、わかります。

アルディ氏は、この女性のことを待っていらっしゃるのだ、と。

昨日のご到着から、それはもう分刻みという言葉は実際にあるものだと実感してしまうほどの多忙なスケジュールでいらっしゃいました。アルディ氏は来客、伝言メモ、FAXなどにひとつひとつ目を通していらっしゃいます。
それは、きっと、この女性からの連絡を待っているからなのではないのでしょうか。

それを確信したのは、アルディ氏がホテルにお戻りになられたときです。
「ご来訪の方も、伝言メッセージもございませんでした」
それを聞いた時の氏の表情は、冷たく口をきゅっと結んで、「そう」とだけ、氏は呟きました。

その後「予定をキャンセルして部屋で休む」と仰ったときには、具合が悪くなるほどショックだったのかと、私の申し上げ方に配慮がなかったのではなかろうか、と気をもんでしまったくらいです。

■Interview 2日目の続き

ええ、最初はびっくりしましたよ

フランスの華と謳われる有名人のシャルル・ドゥ・アルディ氏が、女性を部屋に喚ぶなんて。

でも、その方はシャルル・ドゥ・アルディ氏にお似合いの方でした。

茶色いストレートの髪が、漆器のようにきらめいていて、知性が溢れた素晴らしい容姿の女性でした。
会話をしなくても彼女が知性溢れた方であることはわかりました。

その物腰は洗練されていたし、アルディ氏の部屋までに行き着く過程はとてもスマートなものでした。

ああ、こういう方がアルディ氏の回りには衛星のように取り囲んでいるのだと、今更ながら思いました。

でも、その女性は「マリナ・イケダ」様ではなかったのです。
彼が、配慮に重ねた伝達方法をもってしても連絡を取ることの敵わない女性。

どんな人なのだろうと思いました。

それはさておき、アルディ氏を訪ねた女性は、部屋の扉の向こうに消えると、暫くの間彼の部屋から出てきませんでした。

数時間後に、「部屋のベッドメイキングを頼む」というアルディ氏からの内線電話がなければ、
彼女はビジネスの相手だったのかも知れないと錯覚するくらい、淡々とアルディ氏は出迎えていました。

■Interview 2日目の続きの続き

シャルル・ドゥ・アルディ様からの内線があって、すぐのことでした。

マリナ・イケダと名乗る方がフロントにお越しになったのです。

私どもは、普段業務中は喜怒哀楽を出さないよう、訓練されています。
どんなことがあっても、あくまで、にこやかに。あくまで、丁寧に。

ですが、さすがにこのときばかりは驚きました。

この方が、あの「フランスの華」であるアルディ氏の待つ女性なのかと、思いました。

大変に、小柄な女性でした。

茶色い髪と茶色の瞳で、色素の薄い女性でした。
色も白く、長らく日差しにあっっていないような感じでしたので、もしお仕事をしているのであれば、
室内でお仕事をする内勤の職業なのだと思います。
あ、失礼しました。どうも、人間観察と言いますが、たくさんのお客様と接するうちに、その方の様子からいろいろなことを想像

するのが癖になっておりまして・・・。

彼女は周囲をきょろきょろと伺いながら、フロントまでやって来ました。
物慣れない様子で、少し、ためらったように、アルディ氏が宿泊していないか、とお尋ねになりました。

「今日、ここに宿泊されているシャルル・ドゥ・アルディ氏に伝言を御願いたいののですが。それから、差し支えなかったらこれをメッセージと一緒に。」

そう仰って、小さな包みとメッセージカードを出されました。

正直、困ったなと思いましたね。
最初に対応したフロントマンが、近くに居た私に視線を流したので、私は対応を交代することにしました。

アルディ氏付きのスタッフですから、氏の来客の方に対応するのも、私の役目です。

「お客様の宿泊情報はお伝えできませんので・・・お約束はされているのでしょうか」

本人であることを確認しなければいけない規則ですから、マニュアル通りに、そうお尋ねしました。

すると、しばらく考え込んでいらしたものの、身分証明書と、在る方のお名前を仰いました。

やはり、イケダ様だ。

それで確信しました。

この方のお名前を出すことは差し控えていただきますが。
アルディ氏の側近の方で、この方のお名前を出せる方は、本当にごく限られているはずなのです。
いわば、この方のお名前を知っているお客様は、みな様、アルディ氏に招かれたお客様なのです。

伝言をお預かりしておりましたので、そのままイケダ様にお渡ししました。

肩にかけた重そうな荷物も置くことなく、イケダ様はじっとカードをご覧になっていました。

それとは引き替えに、イケダ様から小さな包みとカードをお預かりして、アルディ氏にあてて内線を入れました。

お待ちの方が、お見えですよ。

あやうく、そう言ってしまうところでした。

でも、アルディ氏は先ほどの内線の後、お部屋を出られたようです。

何度かコールを鳴らしたのですが、応答はありませんでした。

行き違い、とはまさにこのことです。

■Interview 2日目の続きの続きのそのまた続き

内線を何度か鳴らしたのですが、結局アルディ様は外出されてしまったようでした。

その旨を伝えると、イケダ様は特段問題ない、と仰いました。
それから、上階にあるバーで少し過ごされたと思います。場所をお尋ねになりましたので。

後になってわかったことですが、アルディ様もそのバーにいらっしゃったようです。
チェックの時間がだいたい同じくらいでした。

それでも、その日はたいそう混み合っていたので、お会いにならずに、お帰りになられることにしたようです。

程なくして、今度はロビーにアルディ様がいらっしゃいました。
かなり慌てている様子でした。

「ここに、マリナ・イケダという人物が訪ねてきたと思うが」
そうお尋ねになりました。
そしてどこに行かれたのか、どのくらい前のことだったのかを聞くと、
また、来た道を大股で戻って行かれました。
イケダ様をそのまま帰さずに待たせるように、と仰って。

白金の髪を乱暴にかき上げて、最後まで話を聞か聞かないかの時点で、今きた道を戻っていく様は本当に、美神が動いているかのようで、ため息が出ます。工作中であるということを何度も忘れそうになってしまうほどのお客様は、今のところ、アルディ様だけです。

しばらくしてイケダ様がロビーに到着しました。
その時間は、アルディ様が姿を消してから、わずかな時間だったように思います。

「ホンの数分前に、アルディ様がフロントにいらっしゃいまして。イケダ様がまだ館内にいるようであれば、自分も戻ってきているので、そのまま待っていて欲しいという旨の伝言を受けました。」

そうお伝えしますと、イケダ様は少し驚いたようにして、腕時計をご覧になりました。
その様子から、イケダ様がアルディ様が外出中を狙ってお尋ねになられたことがわかります。

「館内にいらっしゃることは間違いありませんから。
そちらのロビーホールのソファでおかけになっていただけませんか。」

私はアルディ様から承っていた伝言をそのままお伝えしました。
あのアルディ様の慌てた様子を見てしまえば、イケダ様をこのままお返しすることはできませんでした。

「いえ、あの。今日は会うことが目的ではないんです。」
今日は、その、伝言を伝えられるだけで良くて・・・。
あの。私、もう帰らないといけないので、帰ります。」

イケダ様はそう仰いましたけれど、そのとき。ようやく。

ようやく、アルディ様がお見えになったのです。
エレベーターから降りてきたアルディ様を見つけて、私はイケダ様にお伝えしました。
「いらっしゃいましたよ」と。

そのときのことです。

アルディ様に声をかける方がいらっしゃいました。

今まで、イケダ様とお話をしていて気がつかなかったのですが、先ほどの。
アルディ様がお部屋に通された女性が、そのエレベーターホールにいらっしゃったのです。

アルディ様は何か素っ気ない感じがしました。ひとことふたこと話をすると、
その女性は少し微笑んで、書類をお渡しになりました。

通常、こういう書類などをお渡しするのはホテルマンが一度お預かりします。
危険物が入っていないかどうかチェックするためです。
でも、その女性は、よほど親密なのでしょう。
そういった手間をあえて省いて、アルディ様に直接書類をお渡しになりました。

アルディ様。
イケダ様がいらっしゃいましたよ。

そう、お声がけしようと思った時のことです。

あと思った時には、もうお二人は抱擁していました。

正確には、女性がアルディ様に寄り添ったのです。

■オフレコにしてくださいね！01

その方がアルディ氏から離れますと、二言三言、その方と会話を交わされておりましたが、シャルル・ドウ・アルディ様は、まっすぐこちらをご覧になられていました。書類をお受け取りになり、そのまま足早にやって来られました。

その様子を見て…ああ、アルディ様がお待ちになられていたのは、あの女性ではなく、イケダ様だとまた確信したのです。

だって、彼は「マリナ！」とイケダ様の名前を大きく呼び、そして大股でイケダ様に近づくと、驚くイケダ様を抱き上げたのです。小脇に抱えていた書類が床に落ちるのもまったく気にせず。アルディ様はその青灰色の瞳をぎゅっと閉じてそして遂に会えた、とでも言いたげにイケダ様の髪に端正な顔を埋めて何かを囁いていました。

「シャルル！久しぶり。…でも、その大声はちょっと恥ずかしい」
イケダ様がそう仰ると、ようやく我に返ったかのようになり、
「書類、落ちちゃったよ」
と続けて仰るイケダ様の言葉に、少しだけ薄く微笑みました。

「順番はどうでもいいので、拾っておいてくれ」
シャルル・ドウ・アルディ様はそう私に言いました。イケダ様が腰を落として書類を拾う仕草を見せると、腕を掴んで語りかけました。
「マリナ、こっちを向いて。顔をよく見せて。」
その会話の内容から…アルディ様が長らくお待ちになっていた方は、本当に長いこと待っていた方だったことを知りました。

アルディ様とイケダ様はそこでいくつか会話を交わしていました。イケダ様に跪き、そしてイケダ様の顔をのぞき込んだりして、相当困らせておいででした。でも、アルディ様はその再会を味わっているのだと思いました。それくらい…アルディ様がまとう空気が甘く柔らかいと感じました。「ちょっとは成長したね」と言って、イケダ様の髪に触れました。あまりにも嬉しそうで…そして少しだけ切なさそうで、見ているこちらが少し…言葉をかけづらくなってしまふほどでした。

帰る帰らないと少しだけ押し問答をした結果、アルディ様は何かを申し出て、そしてイケダ様が頷きました。その答えがたいそう、お気に召したらしく、アルディ様は声を出して笑っていらっしゃいました。ああ、本当に何もかもが、違うなあと思いました。

そして部屋に戻るから書類は後で届けてくれ、と短く指示を出されると、アルディ様とイケダ様は、エレベーターホールに再び向かわれていきました。

その様子にはまったく隠微な感じはなくて、そのお、先ほどの女性の方のような雰囲気は感じられませんでした。でも、アルディ様がお待ちになって、本当に部屋に呼びたかったのは…イケダ様なのだと思います。アルディ様がイケダ様の背中に軽く手をあててたその様子が、あまりにも初々しくて私は思わず微笑んでしまいました。

ああ、もちろん、オフレコでお願いしますね、これ。

■オフレコにしてくださいね！02

それから、随分長い間、イケダ様はお部屋から出てきませんでした。楽しい会話をしているのだろうな、と思うと自然にこちらの頬も緩んでしまいます。アルディ様は部屋にお入りになってから、ルームサービスを注文されましたが、どれも2人分でしたので、ゆっくりどうぞ、その時間をゆっくり…楽しんでください、と心の中で思わざるを得ませんでした。アルディ様の一日は大変にハードです。当ホテルには本当に…休みに来ているだけ、という程度でした。それでもゆっくりしたスケジュールであると聞いて、私は愕然としたものです。一体、いつ体を休めているのだろう、と真剣に憂えてしまいました。

それくらい…アルディ様にはプライベートとビジネスの区別がなかったように思います。
それでも、アルディ様が待ち望んだ方に、当ホテルで再会することができたのだとしたら…それはとても光栄なことなのだ、と自分に言い聞かせました。

そして、イケダ様からお預かりした品を、まだアルディ様にお渡ししていないことに気がつき、どのタイミングでお渡ししたらいいのか思案しました。
イケダ様のメッセージカードと、小さな包みは、まだ手元に大事に保管されていました。
シャルル・ドウ・アルディ様がお帰りになった際にお渡しするように、と言われていたものの、当のご本人様にご来訪中にお渡しすべきかどうか、大変に思案しました。
それでも、マニュアル通りに、一定時間内に宛て人にお渡しするより他はなかったもので、私は、シャルル・ドウ・アルディ様からルームサービスがあったのをこれ幸いに、その時にお渡しすることにしました。

お届け物をするときには本当に気を遣います。
来客中の時のお届け物は…やはりタイミングを見計らわないといけません。
そうでないと思わぬ届け物に、ご宿泊の方が不快感を示したりすることも、ままありますからね。

ですから、アルディ様が深夜に、「シャンパンをこぼしてしまったので、床を清掃して欲しい」というコールがあったときに、このタイミングでお渡しを伺おうかと思いつきました。

正直、この長いシフトはきつかったのですが…
フランスの華と言われるシャルル・ドウ・アルディ様の担当になることができた光栄で、神経が高ぶっていたのかも知れません。

お届け物がありますので、とコールの後に一言添えて…
私はイケダ様のお荷物を一緒に届けることにしました。

尋ねてみると、アルディ様が出迎えました。
少しだけ…頬が紅潮して、何かに興奮していらっしやる節がありました。
私はそのお人形のような端正な顔立ちに見惚れながらも、アルディ様の指示で中に入りました。
部屋の玄関先では、シャンパンが水たまりになり、そこにはシャンパンボトルが空になって転がっていました。

何があったのかは、聞いてはいけないマニュアルです。

私は黙ってその場所を拭き取りました。

シャンパンの泡はまだ音を立てて立ち上っており、つい先ほど、そのシャンパンがこぼされたのだということが見て取れました。

そして…かすかに聞こえるシャワーの音から。
イケダ様がシャワールームを使用されていることを知り、私は少しだけ緊張しました。
情事の場所に行くわすことは珍しいことではありません。
でも、アルディ様からは…たとえ、先ほどの妖艶な女性との密着具合を目撃したとしてもそのような妄想は、到底できっこないと思ったのです。
特に、イケダ様とは…何となくではありますが、そう、アルディ様の片想いのような気がして、とてもそんな雰囲気には陥ったとは思えなかったのです。

アルディ様は、清掃が終わると、次に私に指示を出しました。
女性のスリーサイズで…イケダ様のお召し替えのオーダーだと知りました。
そしてそこで…
何かの理由で、イケダ様が、お召し物を汚してしまい、シャワーを浴びているのだと思いました。そしてそれはこの水浸しの床と関係があることも…

でも尋ねるわけにはいきません。
私はい、と答えてそのサイズをメモしました。

先ほどの妖艶な女性のサイズとは、まったく違う…幼い体型の方なのだと思いますが、それは私自身の感想ですから、そのように申し上げることはありませんでした。

アルディ様は私が作業中…じっと遠くを見ていました。
何かを思い出すかのような。そして何かを思いきるような。
そんな遠い視線で、私でさえもうっとりするような青灰色の瞳で、宙を見据えていました。

私は一連の作業が終わると、そこでようやく、口を開きました。

「お届け物があります」

「だれから」

「イケダ様からです」

そう言うと、アルディ様は、その遠くを見ていた視線を…こちらに移しました。
その眼光鋭い様子に、私は一ホテルマンということ忘れて、しばし見入ってしまいました。お恥ずかしい限りです。

ああ、これもオフレコということで…

■オフレコにしてくださいね！03

シャルル・ドウ・アルディ様はソファに座っていらっしゃいましたけれど、立ち上がって、私の差し出す包みをしばらく眺めていました。
まるで、触れると消えてしまう雪を眺めているかのようなでした。
カードと包みをどうぞ、と言って差し出すと、そのお声がけた私の声あまりにも大きかったのでしょうか、アルディ様は少しびっくり、として我に返ったようになり、そして包みをお受け取りになりました。
受け取りのサインを頂戴すると、私はアルディ様の様子を少しだけ観察しました。
日本語で書かれているそのメッセージは、確かにイケダ様ご本人様がお持ちになったものです。
間違い在りません。私が受け取りましたから。
彼はじっとメッセージを読んでいました。アルディ様にしては、とても長い時間をかけていました。
きっと、何度も何度も繰り返し読んでいたのだと思います。

一度で読めば用が済むメッセージを、そっと、彼は大事そうにその表面を撫でました。
そのカードを書いているイケダ様を撫でているような、そんな仕草でした。
愛おしむ、という日本語がぴったりだと思いました。
アルディ様は、イケダ様に恋しているのではなく…愛しているのだなと感じたのを記憶しています。
しかも、こよなく。

次に、彼は包みを開け始めました。
医師でもある彼のその手つきは繊細で、固く結ばれたリボンをほどき、そして中身を取り出しました。
ことん、と一つずつ、まるでクリスマスのプレゼントを楽しみに開くこどものように、細心の注意を払いながら、アルディ様はガラステーブルの机の上に取り出しました。

それはとても小さな、マトリョーシカでした。
パステルカラーで、彩色されたそれは、天使…でしょうか。
どことなくアルディ様に似ている、そんな手作りのマトリョーシカで、アルディ様は中を開き、入れ子になったそれらを取り出して、4つのマトリョーシカを机の上に並べました。

天使の喜怒哀楽を模した、その小さな人形達は愛らしく…そしてイケダ様が作成されたものだと思います。彼女の手先は、少しだけ着色料が残っていて、同じ色あいでしたから。

「全然、似てないよ、マリナ」
アルディ様はソファに座り、その机の上の人形達を眺めながら、ぼつりとつぶやきました。
そして…そして、私は次に驚いて、用件が無ければすぐに退室するべきところであることを、その瞬間は驚きのあまりに、立ちすくんでしまったのです。
アルディ様の綺麗な完璧なカーブを描いた頬に、涙が流れるのを見てしまったのです。

青灰色の瞳の端から、ほんの一筋、涙を流していました。
アルディ様は…自分が涙を流したことさえ、最初は気がついていませんでした。
それが哀しい涙ではなく…イケダ様の作品に心を動かされたのだと、そう察しました。
それくらい、その作品は愛しかったのです。
きっと、アルディ様の若い頃はこんなに美しく中性的で、泣いたり笑ったり楽しんだりするそんな方だったので、と思いました。
でもその表情は、イケダ様にしか見せない表情だったのかもしれませんが。
だから、アルディ様は全然似ていない、と言ったのでしょうか。
推測でしかありませんが…。
でも間違いなくそれは、イケダ様からみたアルディ様そのものだったのです。

私が拝見した人形達はとても良く…アルディ様に似ていました。
それでも長い年月会わなかったのでしょうか、お二人の時間の差を感じました。
きっと、イケダ様は長い時間会わなかったで、今のアルディ様を想像して作成したのだと思われるような人形の顔立ちでした。

でも、時間ではないと思います。
なぜって、あの邂逅の瞬間、私はそこで、アルディ様の冷静な面立ちが苦しそうに歪んで、イケダ様を強く抱きしめるのを見てしまいましたし…
イケダ様は相当驚かれていらっしゃいましたが、それでも、シャルル様に会いにこうしてやってきたことを思うと、お二人は会いたくても会えない理由があったのかもしれないと拝察しました。

「他に用事はない」
アルディ様はその人形を静かにしまいながら、そう仰いました。
バスルームのシャワー音が止む音がしたので、私は慌てて、失礼しました、また何かご用があったらお呼びください、と言って一礼をし、退室しました。
…アルディ様のその様子に少しどきどきしました。自分のことでもないのに。
退室するとき、「頼んだものは朝食と一緒に持ってきてくれ。朝食は2人分で」とだけ付け加えられていましたので、私は、はい、とだけ言って扉を閉めました。

あの後…お二人で長い夜を過ごすのであれば、アルディ様の涙も、想いも、すべてイケダ様に向けられたもので、そして今夜その長い念願が叶うのであれば、本当に素晴らしいのに、と祈りました。
折る。
ホテルマンの私がこんなことを言い出すのはおかしいのですが。
それくらいアルディ様…長年会いたい人に会えたという瞬間に立ち会えたという感動が私をそんな思いに駆り立てたのです。

これはあくまでも私の感想というか、想像と言いますか…
まあ根拠のないものですから、これはどうぞ記事になさらずにお願いいたしますね…

■オフレコにしてくださいね！04

それから少し経過して、私が持ち場に戻るのと前後して、アルディ様から内線電話が入ったということでした。先ほどオーダーされた注文のお召し替えのうち、サイズはそのままに、いくつかをデザイン変更したいということです。最初は、イケダ様が当初お召しになっていたものとあまり変わらないイメージのものでしたが、次に指定されたものは非常に女性らしい柔らかな印象をあたえるものでした。

きっと、長い間会わなかった期間を経てお話をするうちに、アルディ様の持つイケダ様のイメージが、少しだけ変わったのかもしれませんが、いえ、変わったのではなく、イケダ様の新たな魅力を加味したのでしょう。

業務時間中に思い出し笑いをしたことなく、後にも先にもそれっきりのことでした。

モーニングは1名追加で頼む、多めに。

朝早くに、追加オーダーが入りました。

アルディ様は先ほど2名分を追加していらっしゃいましたので、多めに、ですね、と念押ししました。

普段、アルディ様はあまり朝食をお召し上がりになりません。

そんな朝食のオーダーを承ったのは初めてのことで、それがイケダ様のご逗留によるものかと思うと、イケダ様がアルディ様にお与えになる影響というものは、大変に大きいのだ、と思いました。

私はシフト超過で疲れた顔を見せてはいけないと思い、冷たい水で顔を洗ってから、しゃきとしたつもりで、お部屋に伺いました。でも、つもりはつもりだったようです。

お部屋には、イケダ様が出られました。

今度はアルディ様がシャワーにでも入ってられる音がしました。

イケダ様は、バスローブ姿でした。

服を汚してしまったので、こんな格好でごめんなさい。

彼女は受け取りのサインを自分の名前でも良いのだろうか、と尋ねながらそう仰いました。

私は良いんですよ、お召し物の注文は伺っておりますから。

と微笑みました。

ほほえましい、という表現がぴったりでした。

ああ、アルディ様は本懐を遂げられたのでしょうか。それなら…良いのですが。

イケダ様は本当に若い、というよりは幼い印象の方でした。

こうして、ローブのサイズが合わなかったらしく、まるでお子様が大人用のローブにくるまれて波を泳いでいる、そんな感じでした。

「こんなに朝早くから、いろいろとお手配ありがとうございました。」

疲れた顔が出てしまったのかな、でもアルディ様の素敵なお手伝いをできるのであればとても光栄ですよ、と心の中で呟きました。

朝の光が、カーテンの端から部屋の中に差し込んできて、それはとても眩しかったのを覚えています。もう、朝なのですね、と思いました。そして朝までお二人はお過ごしあそばして…長い長い会えなかった時間を、埋めることができたのだろうか、きっとできたのだろうか、と感無量でした。

「いえ、いえ。おやすいご用ですよ。すぐには持ってこずに、朝のモーニングにお持ちするように、というご指示を受けてましたから」

私はそう言ってお召し物一式をイケダ様にお渡ししました。

イケダ様は少しだけ、ぼかんとした様子でした。

…当ホテルの準備の早さに感激されたのでしたら結構なことなのですが…

朝食の準備をさせていただき、そして、私は恭しくお辞儀をして退室しました。

マニュアル通り。完璧です。

ああ、本当に良かった。

良い朝ですね…

と思った瞬間のことです。

今、閉めたばかりの扉の向こうから。

「シャルルうううううううううう！！！！！！」

という呻きとも怒鳴り声ともつかないようなイケダ様の声が鳴り響き、私は握っていたサービス用の台車の握り手を思わず離してしまふようになりました。

そして、どンドン、と何かを踏みならす音がして…

一度閉めた扉は、お客様が開けるまでは入室してはいけない決まりです。
何があったのかは…知りたくても知ることが出来ませんでした。

教えてください、オフレコで。
一体、あそこで何があったんですか？

■オフレコにしてくださいね！05

お部屋にお食事を運んだ後、しばらくしてイケダ様がおひとりでロビーに下りてきました。
お召し物は当ホテルのブティックで慌てて用意したものですから、見間違えよう在りません。
イケダ様は…少し寝不足気味の顔をしていらっしゃいましたけれど、何となく、そう、何となくですが、顔つきが変わったような気がしました。お召し物の雰囲気も影響したのかもしれませんが。
これはアルディ様にも感じた印象ですけれども、やはり、この再会がお二人にもたらしたものはとても大きかったのだと思います。

「イケダ様」
帰りがけに、私は渡しておくようにと言われていた包みを持って、イケダ様に近づきました。
「ああ…お世話になりました。」
イケダ様は私の顔を覚えてくださったようで、少しだけ顔を赤くして、そう仰いました。
先ほどのうなり声の主と同一人とは思えず、私は自分の疲労による幻聴だと思うことにしました。
私は包みをお渡ししました。
「アルディ様から、こちらをお土産に持たせるように、ということでしたので」
それは当ホテルの季節限定ショコラでした。イケダ様が随分とお気にされていたあのショコラです。薔薇をかたどったそれは、当ホテルで人気のスイーツでしたから、若い女性のお土産にはぴったりでした。
「ありがとうございます。これ…もう一度食べたいと思っていました。」
イケダ様は嬉しそうに受け取りました。
昨日食べたが、とても美味しかった、と仰ってくださいました。

「…お会いになれて、良かったですね」
私は最後に、少しだけ、出しゃばったことを口に出しました。
若いお二人が、とても倅せそうに見えたからです。
心残りは、お二人が並んで微笑んでいるお姿を、シフト交替の前に拝見したかったことですね。
イケダ様は微笑みました。
とても、明るい微笑みでした。
この笑顔がアルディ様をずっと癒し続ける存在になってくだされば、とても嬉しいのに、と願いました。

「シャルルと会えて良かったです。…ありがとう」
彼女はそう言って、ホテルを出てお帰りになりました。
朝の日差しが強くなってきて…そして彼女を照らしました。
太陽のような方だなあ
そう思ったのを覚えています。

そして私のシフトも終わりを迎える時が来ました。
長いような、短いような、それでいて、とても思い出に残る時間でした。
この仕事を続けて短くはないものですから、たくさんのお客様に出会います。
幾人か、とても記憶に鮮明に残る方もいらっしゃるのですが、このお二人の顛末は私の中で最も思い出深い経験になりました。

後で聞いた話では、お部屋のお食事はすべて空になっていたそうです。
若いですね。私はなぞはもう朝食はたくさんは入りません。

次のシフトの者に、簡単に引継を済ませると、私はその日の業務を終えて、帰宅することになりました。
引継時間帯に、アルディ様からコールが入り、これから出かけるから車を回して欲しいという内容の指示が入りました。もうそこからは私の業務ではなく、後任の者が手配することとなりました。
少しだけ寂しかったのですが、仕方ありませんね。

――また、忙しい日々がアルディ様に待ち受けていることでしょう。
でも、それでも、彼は、きっと昨日と少しだけ違っているのだと思います。

このまま…イケダ様とアルディ様が、仲良くお出かけになる姿を拝見したかったのですが、それも叶わないままでした。
いつか、当ホテルに再び滞在してくださった時には、
宿泊者名簿にアルディ様とイケダ様が連名で記帳されて、そして関係を書く欄にはアルディ様がイケダ様のことを「妻」と書いてくださる日が来ると良いなと思いました。

ええ？
その後お二人は…ああ、そうなんですか…
それはそれは…

これで私の話はお終いです。
インタビューになりましたでしょうか？
オフレコの部分、多すぎて困ったなどと仰らないでくださいよ。

(FIN)

I-side 前編

初恋と最後の恋のちがいを、ご存じ？
初恋は、これが最後の恋だと思ふし
最後の恋は、これこそ初恋だと思ふもの
(トーベ・ヤンソン 【ムーミン谷の名言集】)

家族以外で自分の名前を、初めて呼び捨てにした異性は、忘れられないものだ。

いつだったか、すぐ下の弟がその説に賛同したことがあった。
たとえ、その相手が、初恋の相手でなくても、記憶に残るものだ。

確か、そんなようなことを言っていた。

でも、私は、その初めての言霊を発するその人が、初恋の人で、そして、最後の恋の相手だった。

「タケル！」

彼女は最初にそう言った。
それが、私の一生を左右するような言霊の呪縛となることに、私自身も気がつかなかった。

転入生の彼女は、父親の転勤の影響で、何度も転校を繰り返していた。
ここにも、ほんのわずかな時間しか居られないということを、最初から割り切ってそして理解していた。

彼女は茶色い髪と茶色い瞳の、色素の薄い人だった。
学生で、そう思うのは、私だけだったかも知れない。
とにかく、短い時間しか滞在しなかった。そう、「在籍」といよりも「滞在」だった。

彼女はアナウンス部に真っ先に入部し、そして、短い時間で昼休みの校内放送の花形アナウンサーになった。将来、報道関係に進みたい、と、目を輝かせて、誰にでも語った。

そんな彼女を、眩しいような、見てはいけないような光のような、そんな気持ちで見つめていたら。

彼女は不意に、私の名前を呼んだのだ。

「タケル！」と。

それが恋に堕ちた合図だったとは、気がつかなかった。その瞬間は。

■02

恋は忍が愉しみ
人に悟られぬが命ぞかし
(西沢一風)

顔が綺麗だ、とか。
気持ちの良い子だとか。

あの頃は。
そういう恋に堕ちる理由はいくらでもあった。

でも、彼女は。

声が、良かった。声が好きだった。

その澄んだ、物思いなんてない、声が好きだった。

昼休みの、ほんの短い時間に。

校内放送で、彼女の静かな時には弾んだ声を聞く。

他の同級生達が、おしゃべりに夢中になり、ついBGMになりがちなのその時間。

私は一生懸命、彼女の声がスピーカーから流れるその瞬間に全神経を傾けた。

とりとめのない天気の話。今週の行事や予定、そして自分の好きな音楽のことをちょっとだけ話すそのわずかな定められた時間が好きだった。

どういうわけか心が落ち着く一方で、その反面、さざめき立つ自分の何かを意識せざるを得なかった。

そして、彼女はすぐに去ってしまった。

義務教育ではないから、高等学校の転入転出は大変だ。それなのに、彼女は屈託なく笑った。

また、逢いましょう！と元氣よく。ひとりひとりに握手して去った。

タケル！

そう呼ばれた時のことは忘れない。彼女はほんの気まぐれに言ったのかもしれないけれど。

スピーカーから漏れる彼女の声ではなく、少しだけトーンの低い、彼女の声。

同じクラスの同級生とは、後になって思い出さないであろう、そんな少ない接触だった。

彼女のまぶしさが、とにかく私の毎日を彩り、毎日彼女の観察をすることが私の倅せだった。
倅せ。

毎日を凡庸と過ごしていた私が倅せと感じる瞬間があるなんて。

そう思うと不思議だった。

■03

本当に愛しているのだったら

黙っているというのは

たいへん頑固なひとりよがりだ

(太宰治 【新 ハムレット】)

これまでの人生は、おおむね倅せだったと思う。

穏やかな過程に生まれ落ちて。

三人兄弟の長男で、将来を憂えなければならない立場なのに、

三男が商才があることがわかり、長男の私と次男のすぐ下の弟は、その重圧から免れて育ってきた。

願わくは、三男がその敷かれたレールを厭わないことを祈るばかりなのだが、

その環境を喜んでいるものの、憂えている訳ではなかった様子を見て、何度となく安堵の吐息を漏らした。

でも、私にはその時すでに、やるべき最小限の義務は決まっていた。

弁護士になった。

そして、不動産王と言われる父を支えるために、主要な都心のビルのいくつかを管理して、そして、後継者として明るい道歩く

弟の後援をしながら、自分の好きな美学の道を歩む、というレールが自分自身で敷いた。

それは自分で選んだ道でもある。

野心高くこの茨の道を進む勇気も覚悟もなかった。

だから、すぐ下の弟が、経営難で行き詰まる画廊のオーナーを引き受けたのかは、最初はわからなかった。

程なくしてその画廊の経営を立て直したと聞き、少しながらも気持ちがさざめいた。

——自分だけが好きに生きている気がした。

こうして好きなように振る舞っているけれども、決して心は晴れやかになることの出来ない毎日に飽き飽きしていた。

池田由里奈に出会ったときに、その若さで進む道を自分で決めることの出来る自由さや柔軟さに、最初はとても戸惑いを感じた。

■04

人の世に生まるるや

一の約束を抱きて来たれり
人に愛せらるる事と、人を愛すること
これなり
(北村透谷 【桂川を許して情死に及ぶ】)

最初に交わした話題。
そう、自分も三人兄弟の長子で、彼女も三人姉妹の長女であるということからだった。
困っちゃうのよね、姉妹げんかが絶えなくて。闊達に笑った。笑い声も明るい。

そして「タケルの家は？どうなの？」と彼女が尋ねたものだから、まさか自分が話しかけられているとは思わず、すこしぼんやりしてしまっただと、はっとして、「何？」と尋ね直す。
聞き漏らすことはない。彼女の一挙手一投足、全部を見ていたから。
すると、その様子に彼女はおかしそうに笑った。
「タケルは本当にお花ちゃんだねえ。」
「お花ちゃん？」
「そ。ぼんやりとしていて、こう・・・ふわふわしていて捕らえどころがない。でも、そのくせ頑固でこだわりがあって。・・・絶対、研究職に向いていると思うわ。」

初めて言われた。

自分が、いつか哲学とが文芸方面に進みたいという淡い希望を持っていることは、誰にも言ったことがなかったから。このまま大学の法学部に進み、いずれは法律関係の職について父親の運営する仕事を継ぐのかな、とぼんやりそう思っていた。

確かに、自分は穏やかな気質だと思う。
逆に、言いたいことが言えないということもあったが。
彼女の発する呪文と言うべき言葉には、私の一生を決めるだけの揺るぎない力があつた。
そのきらきらする茶色の瞳で、彼女が言うと、それだけで夢は捨てなければ必ず実現できると思うことができた。

そんな彼女は短い期間ではあつたけれど、小さな竜巻を起こして去っていった。
またね、また逢おうね。と言って。
クラスの一人ずつに挨拶をして、去りゆく彼女をこのままここに留めておくにはどうしたら良いのだろう。
別れの瞬間まで、そんな稚拙な計画を想像し、そして、自分がまだ幼すぎることを思い知るだけだった。

「タケルはいつまでもそのままだのお花ちゃんできてね！それが、再会の目印だよ！」

・・・君は、僕に、このままで居ると言のかい？

残酷だなあ

そう思った。

——君を、好きになったままでいると言うの？

いいよ。君が望むなら。

彼女が去って、どれくら年月が経過しただろう。
私は弁護士になり、しばらくの間、父の顧問弁護士のところで厄介になつたあと。
学会へ提出した論文が認められて、思いもかけずに大学の講師の職がやって来た。
大学も、弁護士であるのに美学や哲学史の論文を書く変わり者を講師に迎えれば、話題を呼ぶと思つたらしい。

望んだ生活が始まった。

本に囲まれて、大学の講義をほんの何コマか受け持ち、そして、また論文を書いて研究する日々。
雇われ講師だったから、大学の煩わしい会議や昇進やいざこざはまったく気にならなかつた。
時折父の仕事を手伝う他は、この生活に埋もれることが許された。

このまま、ゆるゆると生きていければ、何も望むものはない。

そんな折に。

弁護士の同期会があると連絡が入った。

普段は行かない同期会。でも、2年近く苦楽をともにした仲間が今度、海外に移転するという。当分戻らないつもりだということなので、せめて送迎の言葉でもかけてやりたい。

きっかけは、ごく簡単だった。

同期会と言っても、全国津々浦々に散らばってしまっているから、人数はそれほど多くない。

都内にあるホテルのレストランの貸し切り個室会場。

そこに向くと、いかにも報道関係者という雰囲気の数人が、会場の前のソファで話し込んでいた。

どうやら、取材をしているようだ。

相手は、同期会の発起人であり、今はテレビなどでひっぱりだこの弁護士仲間だった。

なるほど。

時間に追われているのにこの会の発起人を引き受けるほど同期を大切にす彼は、開始の合間の短い時間を使って、こうして取材を一本引き受けたのだ。

昔からそうだったので、変わらないなと思って暫くの間眺めていた。

もう、取材は終わるところで、対談者の女性が立ち上がり、握手を交わしていた。

そして女性が振り返る。

目があって。ぎくり、とした。

いや。ぎくり、なんてものではない。

その時の、殴り付けられたような衝撃でこのまま脳震盪を起こすのではないかと思った。

茶色い髪、すこしウェーブのかかった派手すぎない髪型。

茶色の瞳。

きゅっと結んだ唇から、綺麗な白い歯が見えた。

笑ったのだ。こちらを見て。

・・・イワツキさん？

良く通る、明るい透明な声で。

彼女は、池田由里奈は、言った。

■05

人が心から恋するのは

ただ一度だけである

それが初恋だ

(ラ・ブリュイエール)

驚いて絶句する。

・・・イケダさん？

どういう風に尋ねたのかはわからなかった。

そんな、間が抜けたような声を出したと思う。

喉がひりついて、声が出なかった。

名前を尋ねるまでもなかった。

彼女に間違いなかった。

しばらく浮き世離れた生活を送っていたので、その後の彼女のことはほんの少ししかしらなかった。

大学を出てテレビ局に就職後、退社して、フリーになっていた。

その傍らで、ボランティアの朗読をしたり、自然環境保護活動を行ったり、とにかく精力的に活動している、と高校の卒業会誌の、卒業説活動報告の数行にそう記載してあったのを、大分前に読んだぎりだった。

ほんの少しの時間しかいなかったのに、高校ではずいぶんと貢献した立派な有名人扱いになっていた。夢を叶えたんだね。そう思うと。・・・その会誌だけは、捨てることが出来なかった。

その彼女が、目の前にいる。

「何、そんなにびっくりして。私、待っていたのよ、岩槻クンのこと」
彼女が笑った。ああ、同じ笑顔だ。私の記憶は正しかった。
「待ってた？僕を？」
「そう。」

彼女は短く簡潔に滑舌良く説明した。
今回、取材を行うにあたって、その人物の背景調査をした際に、同期に私がいると知ったようだ。
そして、私が今は美学の講師をしていることも知っていた。
学会誌で読んだらしい。
同一人かわからなかったので、取り寄せた高校の同窓会誌で間違いないと確認したと言った。
同期会が催されるのを知り、あえてこの時間に取材のセッティングをしたのだと、少し得意げに言った。
そして、今の私が元気に過ごしているという話を彼女はまるで自分のことのように喜んだ。

「大学で美学を教える弁護士！異色でいいわね！」
「じっくり何かをやり遂げる方が、向いていると思ったんだよ。」
お世辞でも嬉しかった。彼女からの声。これは、自分だけに向けられた言葉なのだ。
照れくさくなって、そう言う。

「そして、やっぱり、私が言ったとおりでしょ。タケルは、研究職に向いてるのよ。」
いつの間にか「岩槻さん」が「岩槻君」になりそして「タケル」になった。
その言霊と定めた呪文を、彼女がまた自分に向けて発するとは、思っていなかった。

不意打ちだ。

君は、わかってて言ってるのかな？

私の長らく静かに打ち寄せていた波が、この瞬間に大きいうねりになってしまったことを。
その波は、君が巻き起こしているのだということ。

「じゃ、行くね。会えて良かった。待ち伏せしたかいがあったわ。今度飲みましょう！」
と言って彼女は手を挙げて帰った。
同期会が始まるよ、と中ですでにできあがっていた友人が、声をかけてきたからだ。

お互いが交換した名刺を見て、彼女がまだ「池田由里奈」であることを知り、そしてほっとした。
■06

あなたの知らないところに
いろいろな人生がある
あなたの人生が
かけがえのないように
あなたの知らない人生も
また かけがえがない
人を愛するということは
知らない人生を知ることだ
(灰谷健次郎 【ひとりぼっちの動物園】)

その名刺は肌身離さず持ち歩いてきたから、そのうち大分すり切れてしまった。

・・・私からは連絡を取らなかった。

忙しい彼女のスケジュールに割り込むことはしなくなかったし、
何よりもこういうつながりを大事にする彼女は、たとえ大した繋がりでもなくとも、
きちんと返事をしてくるに違いなかった。
それは、あの高校の同窓会誌に彼女の活動を掲載された時に、十分証明できていた。
写真は掲載されていなかったら、この記事を掲載しても良いだろうか、と緊急で編集者が連絡を取ったに違いない。
それに快諾したくらいだから、私の連絡を無下に無視したり断ったりすることはないであろうと予測した。

それに、私自身がどうやって彼女に話をするのか、見当が付かなかったということがある。
ほんの一時同じ学舎で過ごしただけの間柄なのに、図々しくもアポイントを取って。
そして何をしたいのだろうか、という話になったときに、窮するのは目に見えていた。

私は人と違う時間を生きている、と良く言われる。
のんびりゆっくり、纏う空気が違うとも言われるが、それが贅辞でないことはよくわかっていた。

だから、彼女の時間と違うことを思い知らされるのが怖かったのだ。

時々名刺を出してみても、なぞってみる。すり切れてインクが薄くなった部分をなぞる。薄くなってしまった部分の文字はもちろんのこと、そのインクが刻まれた場所でさえ、すっかり覚えてしまった。――良い年齢の男が、何をやっているのだろう。苦笑する。毎回、名刺を見ては、同じ事を繰り返す。

彼女は私に、小さいけれど、とても大きな波紋を落とした。

だから、彼女からのメールが届いたときには、驚いた。でも、期待していた事が訪れて歓喜した。近くまで尋ねる用事があるから、食事でもしようということだった。私はすぐメールの返事を書いて、そして、送信ボタンを押そうとして躊躇った。このメールをいかに待ちわびていたかが、すぐ返信してはわかってしまう。何度かタイミングをも見計らっては躊躇い、そして少し時間を置くことにした。

送信しようとして躊躇う行為を何度か繰り返すと、2日ほど時間が経過してしまった。ようやく、そろそろ返事をしないと失礼にあたる時期になって、私は返信した。

すると。研究室を誰かがノックする音が聞こえ、出迎えると、池田由里奈が立っていた。

メールを送信して受信と同時にやって来たのかと思うくらい、絶妙のタイミングだった。また、声が干上がってしまう。彼女はいつも私を驚かせる。白衣のタケルだ！理科実験のときを思い出すよ！そんなことがあったのかどうかも私本人が忘れてしまっているのに、彼女は昔のことを細部まで良く覚えていた。「返事がないから、名刺の勤務先に押しかけてみた。」いたずらっ子のように笑う彼女は、その後、仕事がないので、食事に行こうと言った。

彼女曰く「奇襲攻撃よ」と言った突然の来訪で、目の前の女性が、本当に本当に本物で。夢を叶えた大人になった彼女であることが眩しく感じられた。自分のキャリアを自信に変えて、揺るぎない信念で毎日を忙しくも充実させているのだろう。そんな彼女は立っているだけで。微笑むだけで。こうして単なる級友と食事に行こうと誘うその行為だけで。…眩しい。そう、眩しいのだ。

茶色の瞳に茶色の髪その女性は、自分がこんなにも人を魅了させていることをわかっているのだろうか。少なくとも、仕事用ではない語り口やトーンが、昔の彼女そのまま。気さくで闊達であったことが、ますます・・・そう、ますます私が惹かれる原因になることは、わかっていなかったと思う。

私は再び恋に堕ちた。
「再び」というのは、少し違うかも知れない。
もう、それは始まっていたのだから。
同じ人に、より千尋の谷に堕ちるように。
覚悟もなく、恋をした。

■07

ひとを愛するということは
自分を愛するということなのだ
自分を愛することの出来ない者が
どうしてひとを愛することができようか
(高見順 【胸より胸に】)

彼女が私を「タケル」と名を口にする度に、遣る瀬無いという文字の入った積み木をひとつずつ積み上げていくかのような感覚に襲われる。積んでも積んでも決して頂上には至らない。積んだその先が、また次の頂上となる。

彼女との交流が始まった。

私が学会や講師の仕事そして親の用事を済ませるために都内に出た時に、都合が合えば一緒にお茶を飲んだり食事をする程度だ。本当に短い時間を過ごすだけ。でもその短い時間が永遠に続けば良いのに、と思う。その一方で、毎回短い時間であることにほっと安堵する。これ以上長く一緒にいると苦しくてじっとしてられない。これ以上長く居ると彼女の望む「穏やかな赴留」で居られる自信がない。単なる友人であるとかわりきっている事実を、歪曲してしまいそうになる。

彼女は始終良く喋った。そして酒を飲み、食べ、そして笑う。話を聞くことも上手で、あまり自分のことを話すことが得意でない私から、話を聞き出しては、まるっきり世界が違うわね、と言ってその茶色の目を丸くして驚いて見せた。彼女はエネルギーの固まりそのもののような人だった。

岩槻先生、最近愉しそうですね。
そう、言われたとき。ああ、確かに嬉しいよ、とつい答えなくなった。

私の、ゆっくりとした時間が、急に速度を上げてめまぐるしく変化しようとしていた。

そんなときだった。

彼女から、弟の画廊を紹介して欲しい、という申し入れがあった。
弟が画廊を営んでいることは、彼女に漏らしたことがあった。
先般、飛び入りで画廊の取材に訪れたのだが、アポイントがないとオーナーとは会えないと断られたという。オーナーと連絡がつくのを待つには時間がなく、その画廊をどうしても紹介したいのだという。

その頃、弟は傾きかけた画廊の経営を立て直して、小さいながらも絵付け教室などを開き、ゆるやかだけれども再生させている途中であった。私は、それならこちらから連絡を取ってみよ、と言った。
他ならぬ彼女の頼み事を、どうして断ることができようか。
例え、それが自分を利用しているということであったとしても、構わなかったし、古い友人として、実弟に電話一本するだけで事がおさまるのであれば、大したことはないように思えた。

彼女の望み通りに事が運んだらしいとわかったのは、しばらくして礼を述べたメールが届いたからだった。すぐにでも挨拶に行きたいのだが、どうにもならない案件が入っており、立て込んでいるという趣旨の内容も入っていた。別に良いよ、と私は短く返信した。彼女へのメールはいつも短めにしている。

弟にもこの取材はプラスだったようだ。程なくして、彼女の取材によって、大分客入りが増えたと嬉しそうに電話のむこうがわで彼が言うのを聞くと、珍しいね、お前がそこまで興奮して言うなんて、と。
少しだけ微笑んだ。
彼もあまりこういう喜怒哀楽を表に出すことが好きでない。
得意ではないという問題ではなく、好きでないのだ。

私も、そうだった。彼女に逢うまでは。

でも。

弟から、「教室の講師が盲腸になり、代役を捜している。誰かいないか」という困った連絡を受けたとき、ちょうど、私は彼女と会うために、都内に向かってるところだった。
大学構内に居らず、今日は戻らないので、適当な人間を捜すことが出来ないが、今日でなければ駄目なのか、といったようなことを尋ねたことを記憶している。
すると、今日中の話で大分急いでいるから、他を当たってみる、と言って、彼は電話を切った。

その「他を当たってみる」の「他」が彼女であったとは、後になって知った。
弟と彼女はその後連絡を取り合っていたようだった。知らなかった。
…冷静に考えてみれば、それは大して驚くことではない。
仕事の上で、取材をした相手とされた相手が面識を持ち、それが仕事の繋がりになるわけだから。
彼女のことから、丁寧な御礼を弟にもしたのだろう。礼儀正しいその様子が浮かぶようだった。

食事の待ち合わせには彼女の方が先に来ていて、電話を切るところだった。
思えば、これが弟からの連絡だったに違いない。
彼女はタケル！遅いよ！と時間びったりにやって来た私を軽く睨んだ。
そして、一本電話をかけてきて良いかな？と断ると、席を立った。

これも後になってわかったのだが、このとき、窮した弟の申し出に、彼女は自分の妹に電話をかけていたらしい。彼女の妹は絵心があり、漫画家であるというような話を聞いたことがあった。
すぐに彼女は戻ってきて、そしてその時は何も知らなかった私と彼女は、いつも通り、短くて楽しい会話に夢中になった。

後になって、それらの話を弟から聞かされたとき。
なぜ、彼女は私に何も話してくれなかったのだろう、と思った。

私は、初めて彼女を疑った。いや、疑うほどの間柄でもないから。
もっともっと違う感情だ。

弟と何かあったのかという野暮な疑問は持っていない。
でも、彼女は決して自分の仕事に口出しをさせない強さを持っていることを知った。
たとえ、目の前にいる男の弟であっても、ビジネスの話だということになれば、はっきり結果を出すまでは口に出さないポリシーを持っているのは、これまでの彼女との会話から、理解していたつもりだった。

そうだ。

私は初めて、嫉妬という感情を抱いたのだ。

ひとの生命を愛せない者に
自分の生命を愛せるわけではない
(吉川英治 【大岡越前】)

穏やかに生きろと。
君が言ったのではなかったのか。

それなのに、その同じ君が、どうしてこれほどまでに私に順良とは全く別の感情を植え付けるのか。
気紛れに、私を惑わして居るであれば、いっそそのまま放っておいてくれないか。

そう恨みがましく思う。

この激しい渦を彼女は身の内に持ったことがあるのだろうか。

そんな答えのない問答を繰り返していくうちに、私は決めた。

――彼女との連絡を絶つことにした。

もちろんそれなりに礼儀としては恥ずかしくない範囲での連絡は取り合う。

彼女は相変わらず、メーリングリストに入れて在るはずの、多数に向けたグリーティングメッセージを送って寄越す。フリーワードのメッセージ欄には「元気にしてる？」と書かれている。
弟の画廊では彼女の妹が時折講師のアルバイトを続けて居て、たまに彼女と妹が待ち合わせて出かけていった、という話を弟から聞いたりする。
その都度、私の心がさざめいた。
でも、それを抑えこんで、また静かな自分に戻るまでの時間が、徐々に短くなってきた頃のことだった。

彼女が取材をしたいと言ってきた。今度は、私についてだった。
先頃、私の論文が学会賞を受賞して、そのタイミングで私は講師から助教授に昇格したばかりだった。
かねてより会う都度「今度取材させて欲しい」と言っていたあの言葉は冗談でなかったらしい。

いつも君は突然だね。

棘のような台詞を思わず吐いた。

彼女は気がついたのだろうか。
無沙汰の非礼を詫び、そして、これまで同級生に対する平易な口調であったものが、仕事で用いるそれに变化した。
「都合良く連絡しているとはわかっているけれど」
彼女はそう言った。引き下がるつもりはないらしい。彼女らしくかった。
「良いよ。」
私は素っ気なく答えた。
友人ではなく、単なる研究者とそれを取材する報道人として取材するのであれば受けよう。
その代わり、謝礼はいらない。
そう言った。
彼女はそれは困ると言ったが、彼女から受け取りたいと思うものは何一つなかった。

たったひとつ、彼女の心を除いて。

それなら、取材の後、食事をしましょう。
これは私の奢りですからね！と彼女は努めて陽気に言って電話を切った。

時間よりかなり早く到着した。
取材と言うことなので、私はスーツを着て赴いた。
豪華なホテルのロビーに、すでに彼女はいた。
他の関係者や撮影者はいない。彼女だけだった。

取材の内容を復唱しているのだろうか。資料に目を通していただろう。
少しうつむいた感じが、以前より疲れているように見えたが、仕事が忙しいのかも知れない。
となると、彼女が無沙汰を詫びるのはお門違いのことであり、彼女が忙しくてそして元気に過ごしている証拠だと素直に受け止められなかった自分が恥ずかしかった。
声をかけると、彼女は顔を上げて笑った。
そして、再び、ごめんなさいと深々頭を下げて、これまでの無沙汰を詫びた。
私は微笑んだ。
「何のこと？こんな豪華なホテルのロビーでの光景にはそぐわないよ。ほら顔を上げて」
穏やかに、そう言った。極力「いつものタケル」で在ろうとした。

取材は短い時間で終わった。
主に論文のこと、受賞の感想。
異業種からの転身で、その視点から見た今の学会の事。
これまでも何件か受けた取材とほとんど同じ内容だった。
やはり彼女は取材のプロだ。同じ内容であっても、受け身でなく、彼女なりに勉強したのであろう、その知識をもって、対等に私に質問をしてきた。その茶色い瞳がこちらを見つめる度に、私の言葉にひとつひとつ頷くその白い顔に、取材中であることを忘れそうになってしまいそうになった。

「何か、話があったの？」
通り一遍の取材という感が拭えず、彼女にそう切り出してみた。
食事は済ませてきた、彼女がそう言ったので、場所をロビーからバーに移し、私たちは少しだけアルコールを摂取していた。
「タケルの方こそ。・・・聞いたわ。お母様、去年お亡くなりになってたなんて、私全然知らなかった。」
ああ、そのことか。
私は頷いた。
彼女には知らせなかったのだ。家族だけの密葬だった。ごく近い者にしか知らせていなかった。
「癌だったんだ。発見が遅くて、あつという間に逝ってしまった。
もう少し、親孝行したかったなとは思うけれど、年が年だしね。最後はみんなに看取られて逝ったし、本人しかわからないけれど倅せな人生だったと思うよ。」
そうして冷えたグラスに口をつけた。
彼女が誰からその話を聞いたのかは、だいたい見当がついていた。でも、それを口に出せば、私の中の激しい渦を再び呼び起こすことになりかねなかったのだから、黙っていることにした。聞いても詮無きことだ。
「人が死ぬのは、辛い」
大変ご愁傷様でした、と頭を少し下げた後。
彼女がぼつりと言った。
「特に、癌は辛い。もちろん他の病気や事故も辛いけれど。・・・癌は辛いね」
そう、繰り返した様子からすると、誰か身内か親しい人物を癌で亡くしたのかもしれない。
「残していく方も辛いけど、残される方も、辛い。どっちが辛いかは測れない。でも私は生きている。
・・・そういうことを考える年齢になったんだね」
このとき、アルコールが入っていたせいもあった。
私は思ったことをすぐ口に出さない。
でもこのときばかりはふと、漏らしてしまった。

イケダさんも癌で誰かを亡くしたの？

彼女はちょっとびっくりしたように茶色い目を開いた。うん、と回答した。
子供のような幼い回答だった。先ほどの滑舌良く喋る彼女とまるっきり違っていた。

それは誰？家族？友達？同僚？・・・それとも、恋人？

その質問はできなかった。
してはいけないと自分の中の渦が警告したから。

■09

この世の中のすべての不幸は
自分中心主義から始まるんですよ
(犬飼道子【あなたに今できること】)

「妹がね、言ったことがある。彼女も誰かに言われたらしいけれど。
――死者の残した愛は永遠なのですって。酷いよね、永遠なんて。」

それですべてがわかった。
愛しい誰かを、彼女は失ったのだ。永遠に。そしてその事実を彼女はまだ受け入れていない。

湿っぽい話になっちゃったね

彼女はそう言って笑った。これまでそういう話はしたことがなかった。
彼女は意識的に、話題を避けていたのかもしれない。
私は意識的に、彼女に恋人が居るかという話を避けていたから。おあいこだ。

そして、明日朝早いからそろそろ帰る、と彼女は言った。
私は「そう」と言って同じように席を立った。
彼女の顔色が良くないのが気になった。
疲れているのかもしれない。

また、会える？

エレベーターホールで、彼女がそう言った。
その心許ない声音に、私はどう返答しようか少し考えた。
本当は、もう、彼女と会うつもりはなかったから。
この恋は、秘めたる恋であるべきなのだという結論が、すでに出ていた。
友達の間までいれば、彼女を一生、ずっと、見続けることが出来る。
これから先、誰と恋愛して、誰と結婚しようと。誰かの子供を宿すことになったとしても。
私はそれら全部を、そのまま見続けたいと思うことにした。

「思うことにした」

この言葉は正しい。とても的確だ。
自然にわき上がる感情ではなく、その感情を私自身が作り上げることにした。

――その時。

半歩先に立っていた彼女の体が、ぐらっと傾いた。

倒れる。

そう思うより、私の体が先に動いた。彼女を抱き留める。
彼女の手を持っていた荷物が落ちそうになり、彼女がそれを落とさないように抱えたために、
彼女は体のバランスを失ったのだ。
私が彼女の体に触れるのは、これが初めてだった。
この瞬間、私の中で何かが、かちり、と音を立てた気がしたけれど、そんなことはまったく気にならないほど慌てていた。
顔面蒼白の彼女が、私の腕の中に居た。眉根を寄せて、じっと何かを堪えている。
脳貧血だ。すぐにわかった。それでも、手に持った資料のたくさん入った鞆を抱えている根性を褒めてやる気持ちはこれっぽっちもなかった。

「一体、君は、何をやってるんだ。」
私は自分の声が少し荒立たしいのを感じた。彼女がしゅんとして、うなだれたので、ちょっと息をついて怒りを露わにしないように極力穏やかに言った。
「睡眠薬を常用しているのに、疲労している体に空きっ腹でアルコール。
これじゃ、具合が悪くなくても仕方がないだろう。」
とにかく彼女を休ませなければならない。
ホテルの部屋を取れないかと持ちかけたら、具合が悪い病人は宿泊させられないと断られてしまった。
医務室で、彼女がこのところかなりハードな日々を送っていることや、睡眠薬を常用していることを聞いて愕然とした。

「仕方がないから、今日はここに泊まって。
鍵は、ポストに入れて置いてくれば良いから。」
ホテルから一番近いところは、私のマンションだった。
今は大学の近くに別の部屋を借りしてしまっているので、ここは都内に用事があつてかつ帰れない時だけしか使用しない。
時計を見れば、十分に終電に間に合う時間だった。
男の部屋に弱っている彼女を上げるのは少しマナー違反であると思ったが、これほどまでにふらふらしている彼女はタクシーに長時間乗ることさえ難しそうだった。
それにここは病院が近くにあるから、いざとなった時のために心強いだろう。
「誰か、呼んだ方が良い？」
私は水を差し出ししながら、彼女にそう言った。
滅多に使用しない空間になってしまったので、あいにくとペットボトルの水しかなかった。
ありがとう、と言って差し出した水を受けとった彼女の指が、私に触れた。
落ち着かない気持ちになる。

「まったく、無茶にもほどがあるよ」
私はその気持ちを誤魔化した。
いつになく饒舌にならざるを得なかった。
「君は一体、いつからそんな状態なの。」
「・・・」
彼女は答えなかった。
「いくら好きなことを仕事にしたからと言って、体力あつてのことだよ。わかってる？
少しはセーブすることも考えないと。」
その言葉にも、彼女は答えなかった。

もっと聞きたいことはたくさんあった。

私が彼女のことでつまらない物思いに耽っているときにも。
私と会ったりしている間にも。
彼女は眠れない日々を送り、わざとスケジュールを過密にして、日々忙しく飛び回っている姿が容易に想像できた。

「説教はこれで終わり。僕は帰るから。ここで今夜は眠って、酒を抜いてから、明日帰りな。」
少しうつむいた彼女に私は小さく息をついて、そう言った。
弱り切った子供のような、幼い表情だった。彼女が何も答えないほどうなだれている理由はわかっていた。
例の、癌で亡くした恋人のことを思いだしているのだ。

その人のことを語るときの、疲れた哀しい表情は、朗らかで闊達な彼女からは、とてもかけ離れていた。
そんな彼女を一人残すことは心苦しかったけれど。

私は、これ以上彼女と一緒に居ることができなかった。
一緒に居たら・・・
私は、この長らく瞑ってきた本当の目を開き、そしてその目を彼女に向けたら。
彼女に何もしないでいられる自信がまるでなかった。

じゃ帰るね。

そう言って、彼女をひとり、部屋に残した。

「タケル。」

帰り際、ソファに深く腰掛けて、額に手を当てて目を瞑っていた彼女が、私の名前を呼んだ。

「なに？」
「ごめん」

その「ごめん」の意味、今は聞かないよ。
そう呟いて、戸締まりを十分するように言い含めてから、扉を閉めた。

終電近くのこの通りはとても寂しいものだった。
見上げれば、夜の空に満月が浮かんでいた。
黄色いというよりは、オレンジ色、むしろ赤い月だった。

そして、見上げたついでに、マンションの自室を見上げた。
ちゃんと休まれば良いのだけれど。
具合が悪い上に、勝手の知らない部屋に押し込められて、かえって調子が悪くなってないだろうか。
自分の行動は最適なものであったと思うが、彼女にとって最良だったとは限らない。
部屋を見上げて。ぎくりとした。

・・・ユリナ！

心の中では何度も呟いたその名前を、私は初めて口に出して発音した。

マンションの部屋の電気は点いたままだった。そして、通りに面しているバルコニーには、彼女がいた。

彼女は月に向かって、咆哮していた。
声を立てずに、手すりを掴んで。
果てのない孤独を、今、月に向かって放出していた。
下から見上げるここからでも、発しない音が波動になって伝わると思えるくらい、彼女は声を出さずに。
慟哭していた。

私の足は、意志に反して今来た道に戻った。エレベーターのボタンは一度押せば良いのに、何度も叩いて目的の階数を壊れるほど押し、着くなり廊下を走った。
夜中だということをすっかり忘れた。
そこにいかに早く到達するかということを最優先事項とした。

鍵を閉めておけとあれほど念を押したのに、扉は開いたままだった。
靴を脱ぐのももどかしく、部屋に駆け上がる。
「ユリナ！」
私は窓辺の開いたままのガラス戸を見ると、ベランダに彼女の姿がないのでぎくりとして叫んだ。
彼女はベランダに座り込んでいた。そして、泣いていた。
「何してる！」
私は叫んだ。
彼女の体は夜風に吹かれて冷たくなっていた。
その茶色い瞳からは、いくつもいくつも涙が落ちていて、白い顔に幾筋も道をつけていた。
化粧が流され、これまでかぶっていた彼女の仕事用の顔から、あどけない彼女の素顔が垣間見えた。

彼女は激していた。
激しく嗚咽を漏らし、秘めたる思いという傷口から血が一斉に噴き出しているかのようだった。
苦しい、と彼女は言った。

どうして、どうして私を置いて逝ってしまったの。
どうして、どうして一緒に逝こうと言ってくれなかったの。
どうして、どうして、どうして・・・
彼女は繰り返した。何度も繰り返した。そして涙を流す。

私はその言葉から、彼女の愛した人が、癌ではなく、癌を苦にして自ら命を絶ったのではないかと思った。
彼女より、死へ誘う死神の手を取ったことが、彼女を深く傷つけていた。
そしてその傷はまだ癒えずこうして彼女は泣いているのだ。夜も眠れず、そのことを考えないようにスケジュールをわざと過密にしてなお、それは少しも薄れていないのだ。

ユリナ、もっと自分を好きになれ。

私はそう言った。ユリナはそこで初めて私を見た。
母の最期の言葉だった。
穏やかに生きる事はとても楽だ。でも、その穏やかさを捨てなければならない時もある。
それで辛くなったとしても。
その時、もっと自分を好きになれば、相手をもっと好きになることができる。

好きになれない。
彼女が言った。
私は生きている。そしてあの人は死んで永遠になってしまった。
私は永遠に彼を愛していくけれど、それでも・・・苦しい。そんな自分が苦しい、と言った。
そして、また泣いた。
支離滅裂なその言葉の意味を理路整然と組み立て直すことより、今は、彼女の涙と慟哭を止めたいと思った。

そして、私は、その渦に呑まれることになった。
あの、赤い月のせいかもしれない。

彼女に、キスをした。躊躇わなかった。この恋のために、自分の何かを捨てようと思った。
そして、私という人間を形成してきた静寂を捨てた。
彼女がほんのひととき、その悲しみから慰められるのであれば、私は喜んで私を捨てよう。そう思った。

「越留」
彼女は「タケル」と言わなかった。
かの人は私を「越留」と呼んだ。大人の女の声で。

あの、私が恋に堕ちた瞬間に鳴り響いた悶達な響きでなく、女が男を呼ぶ合図として、その言葉を発した。

■10

恋に狂うとは
言葉が重複している
恋とはすでに狂気なのだ
(ハイネ)

趙留、と彼女は言った。
助けて欲しい、と彼女は言った。

私は彼女の茶色い髪ごと乱れも気にせずにかき抱いた。
ああ、大丈夫だよ、大丈夫だから。

小さな子供をあやすように言った。
彼女の背中をさすった。
彼女は私の背中に腕を回し、そしてまた泣いた。

趙留。もう一度彼女が叫んだ。
もう言わなくて良いよ、と私は答える。

私と彼女は、深い闇の中に沈んでいった。

一緒に沈んだけれど、彼女を沈潜させたのは他ならない私だった。

・・・覚えているのは。

彼女の随喜でない落涙と、彼女の口から漏れる私でない男の名。

ただそのふたつだけ。

彼女とこうして激しく口付けを交わすことになるうとは思ってもいなかった。
沸き起こる強烈な雷撃とでも言うかのようなそんな劣情が、私を襲った。
もう、その時の私は「お花ちゃんのタケル」ではなかった。

ひとりの、永遠に手に入らない女性を慰撫する男でしかなかった。
その時、私の体に違う男の魂が宿ることを彼女が切望したとしても、一向に構わなかった。

彼女の背骨を軽くなで上げ、その滾る熱情を彼女に注いだ。
子猫のようにかじりつく彼女を愛おしく抱きしめた。
するりと逃げてしまいそうな彼女を、一瞬でも留めておきたかった。

――すべてが終わったとき、お互いに無言だった。

空が白んで鳥が鳴いていた。
彼女は起き上がって、身支度をした。

ごめんなさい。

そう言っただけだった。
そして、帰って行った。

私は彼女の名をもう一度口にした。
私は自分の名前も言ってみた。

身代わりでも良い。誰の名を呼ぼうと関係なかった。
私は彼女のために私を捨てると決心していたから。
腕の中にいるのは、他ならない彼女だったから。
それでも良いから「タケル！」と屈託なく笑う彼女にもう一度会いたかった。

今、激情に任せて、彼女を千尋の断崖から墮としたのに。
残酷なことをしてしまった。

彼女が私を求めたわけではない。私が彼女を求めたのだ。

だから君は悪くないよ。

そう声をかけた。
それでも、彼女はごめんと謝った。

これで彼女との縁が切れてしまったと思った。

■11

夜がこなければ 朝がこないように。
悲しみがなければ 喜びもないんです。
【谷川俊太郎】

彼女が去った後、乱れたシーツの海をひとり、うつぶせになった。
本当の海なら、このまま窒息して死ねるはずだった。
今、私がつたえ息絶えても、彼女は「彼」より悲しまないはずだ。
ひとつづつ、真珠のような涙を出してくれるのであれば、この恋は成就したと言えるのかも知れない。

シーツに彼女の温もりを捜したが、もうすっかり冷たくなってしまっていた。
自分の体温だけが残っているだけだった。
夢かも知れない。幻かも知れない。
でも、この腕に残る感触や。
彼女に刻みつけた印の感触だけが、翹望のあまり自分で生み出した想見でないことを告げていた。

ただ、彼女が愛おしかった。
ただ、彼女が哀しい人だと思った。

私はひとつ、吐息をついた。

この昂ぶりが、何一つ良い結果をもたらさないことを、よく解っていた。

彼女の悲しみを知ってしまったから、もう彼女に会えないと思った。
彼女の弱さにつけ込んでしまった。
だから、彼女はごめん、と謝った。

…謝るのは、私の方だったのに。

秘めたる恋にしようと決めた自分が、遠くなっていった。

私の生の鼓動は、彼女に移してあげることができただろうか。
明日から、また笑って毎日を送ってくれるだろうか。
無理をしないで、日々を充実して、安らかな眠りにつくことができるようになるだろうか。
…そして、ああした哀しい慟哭を、もうしなくても良いようになるのだろうか。

ただただ、憂えた。彼女を憂えた。
それが恋とか愛とかいう言葉で取り纏めるカテゴリであるのかどうか別として。

彼女には笑っていて欲しかった。

私がつたえ、その時傍に居なくても。

しばらくして、彼女から、先般の取材のお礼と、原稿ができあがったとメールで連絡が入った。
私はその原稿に目を通し、少しだけ手直しを依頼して返信した。
もう、会うこともないだろう。

あれから、随分時間が経過したような気がする。

それは私が、一度捨てた自分をもう一度、拾い上げたから。
ゆっくりとした時間の波に身を任せる、そんな静かな自分に戻ったから。

彼女を求め彼女を救いたいと思い、彼女の涙に動揺した私はもういなかった。
・・・赤い月はもう見る事がなかった。見たとしても、きっとそれももう違う月なのだ。

だから、彼女のメールの返信にも、先般のように、返信をためらうことはなかった。
ごく儀礼的に挨拶を交わし、あえて体調のことも尋ねなかった。

すると、彼女から、またすぐに返信があった。

こちらから送信するメールが、文字化けしてしまうと言う。
もう一度送信しても、駄目だというメールが入った。
それならば、FAXか郵送で届けます、と返答すると、彼女はすぐ修正原稿が欲しいという。

相変わらず、突然だね。

私は少し微笑んだ。
そして彼女がいつも通りのせっかちで毎日を慌ただしく生きていることを知って、
少しほっとして、少しがっかりして、そして心配になった。

この期に及んでも、私は、まだ彼女を案じていた。

男女の情欲が忘れられなかったというわけではない。
あの夜の記憶は封印したはずだった。
これ以上彼女を惑わすつもりはないし、自分も惑うつもりはなかった。

でも、次に彼女に逢ったときに。もしそんな機会があるのであれば。

彼女が私を「赴留」と呼ぶのか「タケル」と呼ぶのか。
それによって私はこの恋の行く末の路を見定めなければいけないと思った。

だから会わずにしようと思った。

見定める事なんてできないことはわかっていたから。
でも見定めなければならないこともわかっていたから。

だから、会わずにいればその結論は先延ばしにできると思った。

でも、彼女はやって来た。
原稿がすぐ欲しいと言って。

以前と同じ、唐突に彼女は私を訪ねて来た。
彼女は私の研究室にアポイントもなく入り込んだ。
警備や入室許可証をどうやってごまかして入ってきたのかわからなかった。
いたずらっ子のように彼女は少し微笑んで見せた。

私は、息を吞んで彼女を見たけれど。
次の瞬間には「やあ」と言って、微笑んだ。
仮面の笑みだった。
初めて作り笑いというものをしてみせた。

彼女は少し痩せた。そして、少し髪が伸びた。
そしてそして、相変わらずの茶色の瞳で、私を見た。

そうして言ったのだ。

「赴留」と。

——ユリナ。

この言葉の意味を君はわかっているのだろうか。
その重みを君は感じているのだろうか。

私は何度目かの恋に堕ちた。同じ人に恋をした。
生きている間、同じ女性に何度も恋するそんな運命を……喜んだ。

■12

——本当はどちらの名前でも良かった。

「タケル」でも「赴留」でも。
彼女の口から漏れるその「音」は、私を捉えてそしてまた、私の静寂や穏やかさや従順さといったものをすべて奪い去ってしまうのだ。

だから、逢うのが怖かった。それは認めよう。

彼女に再びあったその瞬間から、私の物思いは再び始まった。

これを運命と言うのであれば、喜んで受け入れたし、
これを宿命でないというのであれば、何度恋に堕ちたら、その荆棘を乗り越えることができるのかと考え続けたはずだ。

でも、もう、言葉などではなかった。

彼女が目の前にいて、そして私の名前を呼ぶ。それだけで、どうにもどうでも良くなってしまった。
それが、正直なところだった。

平静を装うのが精一杯だった。

私はプリントアウトした修正原稿を渡した。
その「渡す」という行為だけでも、私の腕や脚や判断力を鈍く重いものにさせた。
入り口に立って遠慮がちにこちらを見る彼女と距離が詰まることが、とても息苦しかった。

ありがとう

彼女は微笑んで、その書類を受けとった。

…やはり、近くで見ると、少し痩せた感じがする。

君は、まだ苦しんでいるのだろうか。
誰も傍に居ないのか。居ても安らげないのか。

「今日は時間がないから、食事はまた今度」
私の方がそうやって彼女に言うと、彼女は、
「そう、今日は一緒にご飯でも、と思ったのよ」
と少し笑って残念そうに言った。

研究棟の窓越しに見える外はもう暗くなってしまっていて、
すっかり日が落ちてしまっていた。
もう、そんなに日が短い季節になってしまったのだろうか。

それじゃ、雑誌に掲載されたら、その冊子を送るわね、と彼女は言って、
私に背を向けた。

「——ユリナ」

私は声をかけた。

イケダさん、ではなかった。
彼女の名前を呼んだ。

誰がその禁呪の封印を問いたのかと言ったら、他ならない私自身だった。

彼女は一瞬、歩みを止めた。

そして、「何？ 越留」と答えたのだ。
私の問いに、彼女は答えた。

このまま別れるのが惜しくなった。

理由は簡単だ。
私は彼女ともう少し話がしたいと思ったのだ。

「送っていくよ。外はもう暗い。」

私は上着と荷物を持って、研究室の扉に鍵をかけて戸締まりした。
警備員が見回りにくる関係で、滅多にここに施錠することはなかった扉を私は閉めた。
まるで、私自身の秘めたる想いを解放したかわりに、そこに鍵をかけるかのように。

空調の整えられた研究棟から出ると、彼女は少し身震いをした。
寒くなったね、と彼女は言った。
そして、空を見上げると、月が出ていると言った。

空には、…あのとときと、同じ赫い月が、出ていた。
寸分違わずではないけれど、私には同じに感じた。
自然現象でそのような発光になるとわかっていても、どういうわけか、これが仕組みられたかのような色に見えた。私への合図なのか。それとも…それとも、もっと違う何かなのだろうか。

私の車に乗り込んで、ありがとう、本当言うと助かっちゃったわと助手席で微笑む彼女がシートベルトを締めると。

私は車のエンジンをかけた。車内はエンジンをかけないと冷えた。
彼女はまたひとつ、身震いをした。
もう少しで暖まるから、と私がそう言うと、彼女はうん、と、幼い返事をして、
寒そうに腕をさすった。

エンジンをかけて、彼女の指定の場所をカーナビに指定するから、帰る場所を教えてくれないか、と言うと。
「帰る場所…ないよ。もう、なくなってしまった」
と自嘲的に言った。そしてすぐさまその言葉を否定した。
「ああ、今日はおかしいわ、私。」
軽く微笑んだ。そして、膝の上に掌をのせて、軽く握ったまま、空を見上げていた。

ここからだと月は、見えないね。

ぽつりとそう言った。

この間、私と彼女が背にした月を思い出しているのだろうか。
それとも、亡くしてしまった愛おしい人が現れる予兆として、その暁を待ち焦がれているのだろうか。

彼女には聞けなかった。

すると、彼女が「越留。お願いがある」と言った。

君のお願いなら、何でも。

私はそう言った。その言葉に込められた意味を、彼女が気づかなかったわけではない。

彼女は膝の上で、掌を握ったり開いたりしていた。何かを考えているようだ。そして、ぎゅっと両の掌を一度、強く握ると、思い切ったように、私に願った。

「あの月を、もう一度見せて欲しい」

その瞬間。

そう、それは瞬間だった。

暁と同じ速度だった。

私は、また、抛り捨てた。
拾うまでに時間がかかったそれを、私は一瞬で、また、捨て去った。

そして、シートベルトをもどかしげに外すと、彼女に覆い被さった。
彼女の茶色い瞳が閉じられ、そして私と彼女は沈黙した。
激しく唇を重ね、そして、私にはまた、違う男の魂が宿ることになる。
この月の暁が、私を依り代として誰かを呼び寄せた。

それが彼女の願いであるならば・・・叶えてやりたかった。

遠くで、エンジンの音と、音量を極力絞ったBGMだけが、聞こえるだけだった。

確かにここからは月は見えなかった。

その代わりに、真緒の暁だけが、車内に差し込んでいた。

■13

「あの月を、もう一度見せて欲しい」

彼女のその言葉は、単に本当に月が見たかっただけなのかもしれなかった。
でも私はそう解釈しなかった。…故意に。

そのまま、月の光の差し込む方向を目指して、車を走らせれば良かったのかもしれない。
そのまま、私の都内のマンションに連れて行って、月光浴を愉しめばそれで良かったのかもしれない。

でも、私は、唯一人の何度墮ちても後悔しないと思った彼女を、
このまま帰らせることはとうていできなかった。
…帰したくなかった。

そのまま、初めて口付けを交わしたマンションに連れて行った。
やはり、月はあのときと違う位置で輝いていたけれど、月の色は関係なく、
その月の光波が彼女と私を狂わせた。狂った居たのは、私だけだったのか。

お互いに無言なのはこの間と変わらなかった。
そして、また再び私と彼女は抱き合った。
正確には、私が彼女を抱きしめた。

そして、ユリナ、と彼女の名前を呼んだ。
その空間では、私は越留でもタケルでもない人物だった。
どう振る舞うのかさえわからない、「その人」になった。
強引に彼女を奪い、散らしそして乱した。

頬に髪に目に、唇に。私のこれまでの長い物思いを降らせてしまった。

ああ、わかっているよ。

これは、私一人が背負うべき罪なのだ。
彼女は悪くない。

何かを訴えるような、そんな満月の暁に私はそう語りかけた。
そして、その満月を待ち望んだ、彼女に、その思いをすべて注ぎ込んだ。

急速に駆け上っていく情動に、彼女は声を漏らした。
そして、また、私でないその人の名前を呼んだ。
全身に広がる一瞬の閃光が私の目を曇らせた。私はそのまま、彼女の中に沈んでいった。
彼女の底のない孤独と憐憫と後悔と・・・そして、その人への尽きない愛を見てしまった。

彼女の見開かれた潤んだ瞳から、また一筋、涙がこぼれ落ちた。
私はその涙を指ですくった。

――ユリナ。

君はどうしたら、心から安らげるのだろうか。

君はどうしたら、心から笑ってくれるのだろうか。

誰が傍に居ても。私が傍に居ても。きっと彼女は安らげないのだろう。
静かに眠ることができず、疲労して眠るという泥のような疲れが蓄積されて、
そして時折体調を崩し、復調して、また同じ事を繰り返すのだ。

私の腕の中で吐息をひとつ漏らした彼女が起き上がった。

シャワー、借りるわね。

そうしてすると、私の腕の中から出て行ってしまった。
腕を掴んで引き留めることもできたけれど、私はその淀みに微睡んでいるフリをした。

ややあって、彼女のすすり泣く声がバスルームから聞こえてきた。

彼女は今、何を想っているのだろうか。
彼女が今、誰を想っているのか知りたいようで知りたくなかった。

今、少なくともこの瞬間だけは、彼女が向き合う唯一の人という特別な位置にいるというのに。
・・・とても哀しかった。とても虚無だった。そして、とても彼女を愛おしいと思った。

私は良いから。

彼女を救って欲しい。彼女を赦してあげて欲しい。

名前だけしか知らない、その、私を器にした男に向かって、そう呟いた。

ややあって、彼女は濡れた髪で出てきた。帰ると言った。

もう遅いから。送るから、朝まで一緒に居ようと言うと、彼女は弱々しく淡く笑った。

「赴留は、誰か特別な人はいないの？」

彼女はまた「赴留」と言った。

そして、こんな話題に触れるのは初めてだったので、私は答えを探してしばし無言だった。彼女は、これを無言の肯定と受けとったようだ。

だったら、どうなの。

私はそういう曖昧な答えを返した。そして彼女の反応を待った。

彼女は言った。

最初は、事故だと言える。二回目は偶然から起こる気の迷いだったと言える。でも、その次からは、言い訳できなくなる。

少し悲しそうな顔で。彼女はそう諭した。
婉曲に、これは偶然から起こった気の迷いだと言いたいのだ。

違う。
気の迷いの徒花などではない。

私は心の中で反論した。

でも、その反論は、彼女を苦しめる言葉になるだけだった。

私は黙っていた。

どう答えて良いのか、うまい方法が見つからずに、途方に暮れた。

ユリナは笑った。
無理をお願いした。私が悪い。だから、忘れましょう。そうしましょう、と言った。

私は。

私は、また、彼女に照らされた孤独という月の光が、もう彼女に差し込まないように。

その孤独を引き受けよう。
そう、思った。

彼女の代わりに、その光を、私が受け止めよう。
彼女に差し込むべきだと彼女が信じ込んでいるその悲しみを、私が代わりに背負う。

———そう決めた。

白く光る彼女の裸身ごと、抱きしめた。
ゆっくり。
でも彼女が驚きで身を固くしたことを無視して。

そして、彼女に部屋の合い鍵を渡した。

月が見たくなったら、ここにまたおいで。

…連絡をくれれば僕はいつでもここに居るから。

そして、ちょっとだけ笑って、
「でもバルコニーには一人で出ては駄目だよ」と付け加えるのを忘れなかった。

■14

それから彼女は時々私のマンションに訪れるようになった。

私の不在時に来訪しているようだった。
決まって、満月の夜。
彼女は、出てはいけないと約束したバルコニーの端に座り、月を眺めて帰る。

やって来るときには連絡をするように、と言ったのに、それを知らせないものだから、
彼女の来訪時期を知ることができたのは随分後になってからだった。

たまたま、翌日の朝早く会合があることが決まっていた日に。
訪れた私がぎょっとするくらい、静かに。彼女は、窓辺に座って、軽く足を組んで、
空を眺めていた。

その様子があまりにも落ち着いて、楽しそうで、そして誰かと話をしているかのような錯覚を感じたので、私はしばらく声をかけるのを忘れて、彼女の背中だけを見つめていた。

彼女の背中。

背中だけでない。彼女は大人になった。
その茶色い髪の色は相変わらずだったけれど、もう制服も着ていないし、それに、それに、
振り返る彼女の視線がとても愛おしかった。

魅力的とか。蠱惑的とか。男を魅了するとか。
言い方はたくさんあったけれど。
私には「愛おしい」「愛すべき」人。
その言葉そのものだった。

あれ以来。

私は彼女を抱かなかった。

ときたま、彼女から「月見に、場所を借ります」というメールがあったときには、
わざとそこには行かなかった。
私がそこに同席してはいけない日にちに彼女はそこに向かった。

―――一月命日。

彼の月命日には、必ず、月が出ていようとなかろうと、そこで物思いに耽る。
そんな彼女を見ようものなら。
この身内に住まう獣を抑えることが出来ないであろうと思った。

もう、彼女のいない生活はあり得なかった。
彼女が、私の提供する場所で、安らぎを感じるのであれば、それも一生続いてくれますように、と。
祈り願うする先がわからないまま祈った。

どうしてなのか考えると切なくなるので、その思考を停止した。

ユリナ。

私は恋に墮ちて。そして愛に墮ちた。

この恋が。愛が成就しなくても、君の俸せだけを祈り続ける。
そういう運命の女性に出会えたことを感謝しようと思う。

そして。
どうか、どうか、自分を好きになって欲しい。
君は悪くない。
君は、罰せられない。

だから、昔の逝ってしまった人を偲ぶのは容認しよう。

でも

でもどうか。どうかどうか。

自分を好きになって欲しい。私を好きになって欲しいと思わない。
そのエネルギーを、「彼」ではなく彼女自身に出来るようになったときに。

彼女は解放されると思った。

その間、私が依り代となって彼女を慰めるのも、光栄と思っていた。
その間、彼女が私を特別な名前と呼ぶことも、一種の栄光と思っていた

ユリナ。

気がついていたらかな？

私はね。私は、君に出会った、あの瞬間から。

君という奇跡に恋していたのだよ。

立ち尽くす私の気配に気がついたのか、彼女が振り向いた。

「赴留」
彼女は微笑んだ。

電気も点けずに、夜空を愉しむ彼女の邪魔をしたくなくて、そのまま部屋のソファに腰掛けた。

月も星も今日はよく見えるよ。

また夜空を見上げながら、彼女はそう言った。
バルコニーに出てはいけないと何度も繰り返したから、彼女はその縁に腰をかけて背中を少し丸めて膝を抱えていた。とても幼い
仕草だった。
夜風に髪が揺らされて、茶色い髪の毛が軽やかに動いた。

上着も脱がずに、私は息を潜めて極力、動かないように努めた。
私の気配が、彼女の物思いを中断させることがないように。
それに私に気を取られなければ、私はその間、ずっと彼女を見つめていることが出来る。
こうして、静かに、いつまでも。

月の光を浴びて、彼女は誰かと会話をしている様を、ずっと見ていた。
彼女にはもう月の光が出て居ようが居まいが関係ないのだ。

ここに訪れるようになって、彼女は少し落ち着いてきた。
私が居ないときに訪れているからその変化はよくわからないが、
時折寄越すメールの間隔が間遠になっていることから想像できた。
彼女はもうここに来なくても、自分の気持ちの整理のする方法を覚えたようだった。

彼女はふつりと、ここに来なくなるのかも知れない。

少し寂しかったけれど、それが一番良いことなのだと思う。

あんな無茶な生活を続ければ、いつか彼女は破綻する。
精神か肉体の何れか一方が壊れる。

抱え込み忘れようとするより、こうして静かに月の夜を見上げながら夜空に向かって話をするのが良かったようだ。

だったら良いじゃないか。

それは私が願ったことではないか。

――忘れなくても良い。
でも自分を責めてはいけない。
自分で命を絶ってはいけない。その心を閉じ込めてはいけない。

私はそう何度も彼女に言おうと思って言えなかった言葉を反芻した。

ただ彼女に場所を提供して、そして私は彼女を見つめるだけだった。
この秘めた想いを口に出したら、それが終わりの時だとわかっていたから。
終わりにはとうていできなかった。この恋が最初で最後の想いだったから。

でも、彼女がこのままここにやってくることは、彼女の孤独が癒されないことを示す。
彼女を解放してやりたくて、解放しないでつなぎ止めることの方が、私には辛かった。

どうか、どうか倅せになって。

私は想いを込めて、彼女の背中に語りかけた。

この静かな時間もやがて終わりが来る。

いつか、再会するときもあるだろう。

その時には彼女はまた「タケル！」と言ってくれるのだろうか。

…それが、私への最高の贈り物だ。
その言霊が私の秘めた想いに楔を打ち、私の胸に永遠に刻まれるだろう。

私はその時を楽しみに待つことにするよ。

■15

その時のことだった。

彼女は言った。おもむろに。突然振り返って。

「おかえりなさい」

私は少し啞然とした。彼女は笑った。綺麗な笑顔で。

あれから随分大人になったけれど、少しも変わらない微笑みだった。
高校の時、初めて私を「タケル！」と呼んだ時と、同じ笑顔だった。

そこは「ただいま」と言うところよ。

彼女はそう言った。

そして、立ち上がり、足が痺れちゃったわ、待ちすぎて。と少し文句を言った。

「…おかえりなさい、たける」

彼女はそう言った。

私は目を見開いて少しの間ぼかんとしていたけれど、かすれた声で「…ただいま」と言った。
また彼女にはきちんと声が出せずにいた。

彼女はゆっくりとこちらに近づいてきた。

その言葉はやはり言霊だった。

今度は彼女は「タケル」でも「赴留」でもなく「たける」と発音した。
同じ音であったけれど、明らかに違っていた。

そして、私をその一言で動けなくするほど強い効力を持つ魔法のようなその言葉に。

私は目を瞑った。

彼女は、硬直した私の隣に座った。
ソファのスプリングが軋むのがわかった。

距離が近い。

彼女に触れるのは初めてではないけれど、彼女から私に触れるのは初めてだった。

彼女は、そっと私の手に触れた。おずおずと、躊躇うように。

私は少し身じろぎした。彼女の触れたその掌がじんわりと温かくなった気がした。
そこでようやく体の緊縛が解けていくのを感じた。

—ごめんなさい

彼女は始めにそう言った。

そして長い話を始めた。

ずっと、ずっと、甘えていた。
あなたにも。自分自身にも。

どうしてもどうしても抱えているには大きくなりすぎてしまったこの想いを
どうしていいのかわからなかった。

毎日毎日が苦しくて、悲しくて、思い出すのは楽しかった記憶だけで。
愛された記憶だけが残された気がした。そして私も残された。

その人が居ない現実を受け入れられなかった。

自分が好きになれなかった。
もう誰も好きになれないと思った。

・ ・ ・これから先。
心から愛おしいと言ってくれる人が現れても彼のように愛せないと思った。

でも違った。

あの蘇芳の月を見る度に、彼を失った日を思い出した。
切なくて最初は見ることもさえできなかった夜空を、見ても良いよとあなたが言った。
そして一緒に見てくれた。

だから月がでる度に、私は逝ってしまったあの人に語りかけてみた。

そして、上ばかり見ていたら。
誰かが前を向いて下も向いてご覧と囁いた気がした。
思い込みかも知れないけれど、あの人囁いたそんな気がした。

ふと、バルコニーに供養用の水と、小さな花が生けられていることに気がついた。
私が彼の後を追ってしまうのではないかと心配した人がいたことに気がついた。
バルコニーに出てはいけないと言った人が、そこに用意したのだとわかった。
花も水も絶やさないように定期的に交換してあった。

越留が私の悲しみと苦しみを、こっそり肩代わりしてくれていたことに、ようやく気がついた。

何も言わず、黙って見守ってくれてありがとう。
ごめんなさいと謝る言葉はもう言わない。

ありがとう。
ありがとう、たける。

私は、そこでようやく、彼女が苦悶から解放されつつあることを知った。

私のこの長くて秘めたる恋が、彼女の言葉で、何か違うものに変化した。
ああ、これは恋でなく、愛なんだと思った。

ユリナ、君を愛している。

私は声を出さずにそう言った。この秘めたる恋は愛に変わった。

秘めたる愛でも良い。

愛した人が倅せていてくれればそれが何よりの倅せなのだ。

それで、もう十分だと思った。

もう、この恋は彼女に知られてしまった。だからもう秘めたる恋ではなかった。
この愛が、最初で最後だろうと思った。

だからこれを。秘めたる愛を一生大切にしまおうと思った。

もう、これだけで私は十分生きていけると思った。

ありがとうを言うのは、こちらの方だよ。

私は微笑んだ。きっと、これまで誰にも見せたことのない笑みだったと思う。

彼女は笑った。その笑顔が好きだと笑った。

そして、私の掌に重ねられた小さな白い手に、ぎゅっと力が入った。

「――たける」

彼女は私をそう呼んだ。
もう一度。今度ははっきりと耳元で聞いたその声に、私は吐息をついた。

彼女の茶色い瞳があまりにも近くて、私は息を呑んだ。

君は、ちゃんとわかっているのかな。

私を呼ぶたびに、私から言葉が失われて、そして失われた言葉一つ一つが、この秘めた恋に蓄積される。
そしてそれが養分となって、この恋に大きな花が咲いたことを。
そしてその花は実がならないけれど、決して枯れることがなく咲き続けるであろうことも。
君はわかっているのだろうか。こんなにも愛おしいと思う気持ちを言葉に出来ないくらい、失われた言葉があまりにもたくさんありすぎることを。

「――たける。お願いがあるの」

彼女はそう言った。かつてのような仄暗い闇はなかった。

なんでも。君の願いであるなら叶えてあげよう。

私は今度は口に出してそう言った。

すると、彼女は私に顔を寄せて、静かに唇を重ねた。
彼女の唇が触れた先から、目もくらむような痺れが全身に広がった。
でもそれはとても甘美な痺れだった。

そうしてゆっくりと唇を離すと、彼女は私の目をのぞき込んだ。
さっきよりもっと茶色の瞳が近かった。

「――傍にいたい」

「それは駄目だ」

私は言った。彼女が悲しそうな顔をした。

駄目だ。ユリナ、それは駄目だ。

「僕が傍にいれば、君はいつも悲しい思いを思い出す。
僕はその時、君を安らかにさせてやる自信がない。
ひとたびこの気持ちを解放したら、穏やかな僕でいられなくなる。」

君をきつと傷つける。静かに君を見続ける僕でなくなる。
・・・君の傍に居られれば良い。でも、君は僕の傍にいてはいけない。」

最後の台詞はもう何を言っているのか解らなかった。

彼女が私の傍に居たいという。

でも、それは彼女を傷つける結果にしかかならない。
どんなに結論を想像しても、違う解は得られなかった。

たける

彼女がまた声をかけた。

駄目だ、駄目だよ。

その言葉をかけられる度に、私の秘めることにした気持ちが、一つずつ殻を剥がされいく。
無理に剥がされるのではなく、芽吹くその勢いを抑えきれずに、内側から殻を破るのだ。

傍に居て。

彼女はもう一度言った。
そして今度は両の頬を掴み、私に口付けした。
甘く切なく、心の底では待ち望んでいた接吻。
深く激しく、そしてそれでいて愛おしそうに彼女は私を愛撫した。

そして彼女は言った。

「私を愛して・・・私はたけるを愛したい。
あなたは。あなたは、あの人を好きなままで良いと言った。
だから私を愛して欲しい。
これから先。生きている私に隣り合ってくれる人がいるのなら・・・私はたけるが良い。」

ユリナ。

私は彼女を抱きしめた。

目から、涙がこぼれた。
彼女の瞳からも涙が落ちた。

今度は彼女は私の名前だけ呼んだ。

彼女は「愛している」でなく「愛したい」と言った。
だから、彼女の思いと私の思いは少しだけ違う。
ひょっとすると私は永遠に片思いなのかもしれない。
でも、この愛の重荷を受け止めることにした。

こうやって寄り添って眠る夜に。
彼女が涙を流したとしても、彼の名前を口に出しても良いと思う。
それが彼女であり、彼女の愛なのだから。
そして私にそういう自分ごと愛して欲しいと願う、運命と定めた愛おしい人がいる限り、
彼女の秘めたる愛を、一緒に抱えていこうと思う。

穏やかな風が私の中に吹き込んだ。
荒々しい渦であったそれは形を変えて、風になった。

私の中の静寂が戻った。

日々、穏やかな物言いですねと言われ、大学では相変わらず「お花ちゃん」と呼ばれる。

それでも。

その穏やかな風と光とそして彼女の笑顔と。

「たける」と彼女が柔和に呼びかける言霊がある限り。

私はこうやって穏やかで静かであり続けることができる。

空を見上げれば、月が出ていた。

君は今日もあのマンションに来ているのかな。

そうして、彼と話をしているのかな。

話し終わったら、私に「おかえり」と言って、私はそれに「ただいま」と答えよう。

君が来ていなくて私が先に到着したら、「おかえり」と微笑もう。
君が「ただいま」と間違に答えてくれることを期待して。

ユリナ、君の帰る場所になりたい。

愛している、という言葉はその言霊に奪われてしまったから。

今度は、君と私とで、それにかわる違う言葉を紡いでいこう。

(FIN)

J-side

■前編

杜宇子。なんでそんな不毛なの。

そう言ったら、彼女は頬を膨らませて怒った。
でも本当に怒ったら彼女は手が付けられないくらい恐ろしい。

彼女のそのむくれ方もとても美しい。
かわいらしいではなく、彼女の場合は美しいという言葉が使う方が正しい。

切れ長の瞳に、肌がとてもなめらかで綺麗だ。
くっきりした顔立ちに、濃い眉を整えてきりっとした印象だった。
睫が長くてボリュームがあるから、人形のようなと思う。
前ごと後ろに流して、本当は腰まである髪の毛をぐるぐるっと団子状にして「ひつつめ髪」にしている。最近この髪型が気に入っているようだ。

その小さい耳朶には、控えめなダイヤモンドピアスが光っている。

…ここにアルバイトに来るようになって、初めての給料を現金支給ではなくて、このピアスを買ってくれとねだったらしい。

こういうことに疎い航兄は、はいはい、と言って買い与えたに違いない。

馬鹿だなあ。

オレがそう言うと、杜宇子はむくれて反論をしたわけだ。

不毛だなあ

つくづく、そう思わずには居られない。

振り向いてくれない男を想い続けて、一体何年越しの片想いを続けて居るのだろう。

あんな奴はさっさと見切りを付ければ良いのに。
それで、さっさと、オレに乗り換えれば良いのに。

…最後の台詞はまだとっておきの言葉としてここで使わないことにした。

「浬。あなた最近、生意気よ。」
「生意気って・・・杜宇子とそれほど変わらないと思うけど。」
「年下のくせに生意気」

杜宇子が軽く浬を睨む。

その瞳が潤んでいて、少しどきりとした。
彼女の少し怒った顔が一番好きだった。
怒ったというか、怒ったフリをしている顔が好きだ。

「年下という事が生意気に繋がるとは思えないけど。
現に、オレは杜宇子よりずっと背も伸び出し。もう大学生も卒業して就職も決まってるし。」
「お父様の会社を継ぐんでしょ。就職と言えるかどうか、怪しいわ。」
「ひっでえ。オレはそう呟いた。
「これでもちゃんと就職活動したんだ。親父相手に面接することくらい恥ずかしいことってないぜ」

「『尊敬する人が誰ですか』と聞かれて私の名前を出したそうじゃないの!」

杜宇子の怒っているところは、不毛な恋を揶揄されたことでなく、どうやらそこだったらしい。

ああ、あれね。
慍は苦笑した。

「父親ですって言ったら、絶対採用されないと思ったから。」
「だからって・・・!」杜宇子が一気に冷たいジュースを飲み干した。

尊敬しているのは本当だ。

オレは杜宇子を尊敬している。凄いと思う。

自分はそんなに一人の人を想い続けることは出来ない。
つきあい始めると、途端に相手は自分を束縛し始めて、そして突然怒り出す。
だから人とのつきあいは短いものであるのだと思うことにした。

彼女の尊敬すべきところはその辛抱強さにあると思う。尊敬に値すると思う。
あんなに可愛いから、みんなにちやほやされて育つだろうに。
通常なら、こらえ性がなく育つところだ。

でも。彼女は芯のところでは、強かった。とても、強くしなやかだ。

…去年、母が死んだ。

癌だった。
発見されたときにはもう手遅れだった。

末っ子で、かわいがられていたと思う。
大分甘やかされもしたし、上の兄二人が家業を継がないと宣言してしまい、さっさと独立してしまっただけから、その溺愛ぶりに拍車がかかった。

それでも。そんなに愛されていて。
自分の母親の死に一番、悲しまなかったのは自分だと思う。
今まで愛情ばかりを注がれていたから、それがなくなることがどういうことなのか、理解できていなかった。
失って、しばらくしてその存在の大きさを確認して初めて、その大きさや重要性を感じる事ができるのだ。それが後悔ってやつだと思う。

でも今回は、その悲しみを表すことが出来なかった。
悲しいといよりも。
もう微笑んでくれないもう好物のカレーを作ってくれない動かない母親を見続けることが、いけないことのような気がした。
慟哭する父、むせび泣く兄たちを横目に、ひとり自分だけがぼつんと、そこに在った。

途方に暮れた子供のように。

ただただ、このぼかっと抜けた洞穴に吹く風を感じることで精一杯だった。

それを杜宇子が。彼女が一番最初に見つけた。
急変した母の元に駆けつけた航兄の代わりに、店の戸締まりをして店には置けない重要な書類を届けてくれたとき。
丁度、家に帰っていて、これからのこと相談しなくてはならないという場に彼女はやって来た。

「杜宇子」
オレは相も変わらず杜宇子は綺麗だな、なんて思っていた。
でも、杜宇子は、頭を軽く下げると、ご愁傷様でした、と大人の挨拶をした。
いつもは、いたずらっ子のように微笑んで、じゃれつくオレをあしらうのも大変だという顔をしているのに。

不思議な顔をしていたのだと思う。そんなオレの顔を見て、杜宇子はどうしたの、と呟いた。

「泣かなくて良い。悲しいフリもしなくて良い。
でもちゃんと見て。ちゃんとお母様にお別れをして来るのよ。
後悔しても良いけど、やらない後悔はいけない。」

その時、ああ、杜宇子ってこんなに強かったっけ、と思った。

彼女に言われたとおり、ひとりで病院に出向き、母と最後のお別れをした時に。

――不意に、涙が溢れた。

涙が溢れて止まらなくなった。
これが、近い人を亡くした時の、悲しすぎて涙が出ない嗟嘆だということに、ようやく気がついた。

そしてその悲嘆に気がついた杜宇子は、やっぱり凄いと思った。

そのことを後で、杜宇子に言うと、「人を観察するのは得意なのよ」と笑った。

私の片思い観察は筋金入りですからね、とは言わないのかい？

と言うと、彼女は睨んでそして軽く頬をつねられた。

いつも同じ内容でからかっているのに、このとき。

どういう訳か胸が痛んだ。

杜宇子。

オレはその時に、君に恋したことに気がつかなかったんだ。

杜宇子はとても不器用だ。
辛抱強くせに、不器用だ。

そして鈍感だ。

観察することに馴れていると言いながら、自分が観察されることにはちっとも気を払わない。
航兄の同級生で、もう何年も片思いをやっている。

初めて彼女に会ったのは、彼女が中学生の時だった。
うちでグループで定期テストの勉強会をしたことがあった。
航兄が連れてきた、女の子は兄を「ワタル!」と呼び捨てにしていた。

綺麗な子だな、と思った。

その時、小さいながらも、その時に「綺麗な人」と記憶に残っていた。

膝丈のスカートを翻して、とても嬉しそうに、でも端から見てもすぐにわかるくらい、
頬を紅潮させて、兄の顔を見つめているその様子がなんだか、とてもかわいらしかった。

大きくなって、再会したとき、今度は「凄く綺麗な人」と思った。
兄の画廊に、学校の帰り道に何気なく立ち寄った。
その時つきあっていた子との、待ち合わせまで時間つぶしだった。
だから中の様子もあまり見ないで、適当に腰掛けられてお茶を飲めて、そしてモバイルチェックができる場所を確保できればそれで良かった。

そこで。

杜宇子に再会した。
入り口でつんとすまして、座っている彼女を見て、ああ、あのときの子だと思った。

彼女は覚えていなかった。はじめまして、と言った。
オレは「初めてじゃないよ。一度会っている」
と言ったけれど、彼女は思い出せなかったらしい。

酷いなあ。

まあ そんなものか。

そして、彼女がセーラー服を着ていた頃、まだ髪の毛を緩く三つ編みをして、鞆には小さいストラップを校則違反だとわかっているのに付けていたことを伝えると、彼女は破顔した。大輪の花のような、そんなあでやかさがあつた。

大きくなったね、と彼女が言って、そこから、画廊がよいが始まった。彼女が、兄の経営する画廊で受付のアルバイトを始めたのだと、とても嬉しそうに言ったときに、兄も罪なことをするなあと思つた。だって、見れば解るじゃないか。

杜宇子は、まだ、兄のことを好きで一緒に居たくて、繋がりをもちたくて、一日中日の当たらない画廊に座り続けている。

受付嬢とののは結構ハードな仕事だ。座っているだけではない。来客があれば接客し、アポイントを取り、そして画廊内の清掃、お茶だし、戸締まりに日報、郵便物の仕分け等々・・・雑務はいろいろある。

杜宇子の家は裕福で、そんな微々たるアルバイト料を目的に働いているとはとうてい思えなかつた。

だから、彼女が兄との繋がりを絶ちたくなくて、このアルバイトを承諾していることはすぐにわかつた。

暇つぶしのようにふらっと画廊に訪れる演技をした。本当は毎日でも通つて彼女の横顔を眺めていたかつた。彼女は本当に綺麗になつた。でも綺麗になつた「原因」とも言える兄が彼女に気がつかない。まったく、気がついてない。

あの鈍感具合も相当なものだ。知つてて、杜宇子を雇つたのであるならばもっと始末が悪いけれど。

もっと悪いことに、兄は別の女に心を奪われてしまつた。絵付け教室の講師に時々訪れている小柄な女性だ。杜宇子の方がよほど綺麗なのに。

兄は絵付け教室がある日はどこかしら嬉しそうだ。あまり喜怒哀楽を出さない兄のことを杜宇子は良く承知している。彼女の教室は人気で、画廊の評判を落とさないように、杜宇子はいつもより少し早く来て、掃除を念入りにし、どんなに遅くなつても、片付けを完璧にやつていく。

兄の嬉しそうな顔を眺める度に、その気持ちのほんの少しだけでも、杜宇子に分けてやつてあげれば良いのにとさえ思う。

でも、杜宇子はずっと、見てるだけだ。そして自分ことのように喜んで、彼女の来ない日の静かな兄をまた、観察し続ける。ただ、それだけの日々を彼女は毎日送っている。

不毛だなあ

そこで初めて杜宇子に怒られた。

そんな杜宇子の耳には、兄に買ってもらったピアスが光る。

買ってもらったというのは語弊があるだろう。初めてのバイト代は現物支給にして欲しいと言つて、彼女がねだって買ってもらったものだ。しかもバイト代だから、それほど高価なものでもない。

よほど、彼女の身につけている服や化粧品や、ブレスレットなどの方が高いと思う。でも、杜宇子はこれを大事に大事に使っている。

毎日同じピアスをする、重たいでしょ、気持ちが。

そう言って、兄のいる前では、たくさんあるアクセサリーのうちのひとつ、というようなさりげなさを装ってピアスをはずす。兄の居ない日には必ずそのピアスを着ける。

「値段が高いものは品質を保証するだけであり、その真の価値を見つけ易くするための確率を上げるにすぎない」
彼女は哲学者めいてそう言った。つまり自分にはとても価値があるものだと言いたいのだ。

「杜宇子のそういうところは気がつかないと思うよ」
そう言うと
「気がついて欲しくてやっているわけじゃないよ」
と彼女は膨れて言う。

杜宇子は本当に不思議だ。

女の子というのは、みんな、自分の恋について語ることが好きだ。

でも杜宇子は決して自分から話さない。
兄の話題が出て、そうなんだ、くらいにしか表現しない。

こんなにこんなに長い時間、兄を眺めているというのに。

兄は他に好きな人がいて、その人をモデルにしてグラフィックデザイナーとして作品を描いている。
彼女はそれを知っている。
決して杜宇子はそのモデルにはならない。
杜宇子はそれも承知している。

彼女はこんなに綺麗なのに。

…だから、彼女に尋ねてみることにしている。
その行く末の見えない恋って、不毛で悲しくて辛くはないの？と。

それが彼女に現実を再認識させて、酷く傷つけることだとわかっている。
尋ねずにはいられなかった。

■中編

「そういうサトルこそ、彼女はいないの？」
突然話題を振られたので、少し驚いた。

「…居ないよ、今は。好きな子はいるけれど。」
「ふ～ん。サトルはもてるからね。でも、とっかえひっかえは駄目よ」
「したくてしているわけじゃ・・・。」
「そのうち、サトルにも、唯一の人が現れるから。その時に後悔しないようにね」

杜宇子の阿呆。

他の男に心を奪われている女というのは、どうしてこうも残酷で鈍感なのだろうか。

いつか兄に尋ねたことがあった。

「杜宇子が欲しい。気に入った。」

穏やかな気質の兄は、良いじゃないの、と言ってコーヒーカップに口をつけた。

兄さん、そこはコーヒーカップから口をはずすところだよ。
天気の話をしているわけではなく、杜宇子のお話をしているんだよ。

そう言おうと思ったけれど、兄はどこ吹く風だった。
だから、次に意地悪く言ってやった。

「それなら、あの、イケダとかいう講師でも良いよ」
兄はあることか。一瞬手を止めて、コーヒーカップから口をはずした。

かたん、とティーサーバーにカップを置いて、微笑んだ。
「駄目だ」
でも、目が笑ってなかった。その細身の眼鏡の奥の目が、少し怒っていた。
ああ、兄が怒っている。
そう思ったけれど、こちらも譲れなかった。

どうして杜宇子は「良いじゃないの」であの人は「駄目だ」なのか。
その違いがわからなかった。

「彼女はモノじゃない」
そう言い切った。でも、モノじゃないとあの人のことを言うのであれば、それなら、杜宇子は？
良いじゃないのと言われてしまった杜宇子はどうかの？

「それなら杜宇子をくれ」
「杜宇子もモノじゃない。サトル。決めるのは杜宇子だよ。」

兄さん。

どうして兄さんはどうして杜宇子の秘めたる恋に気がつかないの？
それとも兄さんはそうやって気がつかないフリをしているの？

「…彼女には倅せになって欲しいと思う。ずっと中学から一緒だったし。
だから、変なヤツに傷ついて欲しくない。
…でも、サトルなら良いと思うよ。何より彼女のことを好きなわけだしね。
…杜宇子のことを大事にしてやって。」

——何が「大事にしてやって」だ。

航兄は苦手だ。心の機微が今ひとつわからない。
それは彼が望んで喜怒哀楽を表に出さないようにしているからだ。
まだ長兄の方が年が離れているぶんだけ心砕いてくれる。

だから杜宇子の気持ちをわかっているのかわかっていないのか、それさえもよくわからない。

でも。

兄の気持ちを確認してどうするというのか。どうにもならないのに。
自分は傍観者なのに。杜宇子の恋の出演者ではなく観客にしか過ぎないのに。

その日、杜宇子は少し落ち込んでいた。

こここのところの日課だった。
最近では毎日ここに顔を出す。
画廊への地下階段を下り、受付に顔を出した。
受付では杜宇子が座っていた。

でも、その日の彼女は違っていた。
「サトル。いらしゃいませ」と言った台詞は同じだったけれども、花のような笑顔がしおれていた。

——まずいな。

そう思った。

何か、あったのだ。
彼女がいつものように悠然として座っていられないくらいなのが。

兄はこういうところは、ビジネスライクでかなり厳しい。
仕事にならない状態であれば、即座に「帰れ」というか、
その場で「もう、来なくて良いよ」と言ってしまう。

ちょっと出ようか、と言った。

まだ休憩時間ではない、という杜宇子に、
「ここはいずれオレのものになる。
だから、ちょっとくらい休憩時間を早めても未来のオーナーが良いというのだから、良いんだよ」

そう軽く言って、画廊の扉を「Closed」にして、外の空気を吸わせてやることにした。

「座ってばかりいると疲れるだろう」
杜宇子はちょっと笑った。
花のような笑顔とはかけ離れていた。

が弱い、少し吹けばしおれてしまうようなそんな感じがした。

胸が苦しくなった。

「この場所、良いだろ。気に入ってるんだ。」
わざと明るく言った。

画廊から道路一本隔てて、少し歩いた先にある、都内の廃校になった小学校の校庭。
校舎は文化財として立ち入り禁止になっていたものの、校庭は出入り自由だった。
今はフリースペースとして解放している。
いつもはそこでバスケをしたり、散歩の休憩をしたりする人で結構賑わっているのだが、今日は珍しくがらんとしていた。
こんな空間が、都内のど真ん中にある。それだけでも開放的な気分になり、空を見上げる。

杜宇子も同じように感じてくれれば良いのだけれど。そう思った。

最も近いベンチに腰を下ろして、途中で買った挽き立てコーヒーを差し出した。
彼女は「爪が割れて仕事に影響がある」と言って、自動販売機では飲み物は買わない。

入れ立てのコーヒーの香りがした。杜宇子はありがとうと受けとった。
その時に、指が触れた。ほんの短い一瞬だけ。
彼女のスクエア型に切りそろえられた爪が、オレの手を少しだけひっかいた。
ごめん、爪を伸ばして。杜宇子は謝った。

杜宇子、君のそのつつましいけれど一生懸命な気持ちは、兄さんに伝わってないんだよ。

兄さんはたとえ自動販売機で缶コーヒーを杜宇子が買ったとしても、品がなく仕事先で呑まなければ文句を言わない。
兄さんは、杜宇子の爪の先がほんの数ミリ欠けたことには気がつかない。
でも、その爪がかけたことによって、君の集中が途切れて仕事に差し障りがあるなら、冷たく切り離してしまう。そういう人をどうして好きになったの。

コーヒーのカップにはプラスチックの蓋が付けられていて、そこから直接飲めるようになっているのだけれど、彼女はそれはちょっとできないね、と笑って蓋を取った。そんな杜宇子の仕草やこだわりが愛おしいと思った。

彼女の長くて黒い髪が、少し揺れた。下を向いたからだ。

ぽつん、と彼女が涙を落とした。

コーヒーに涙が入った。

その涙が頬を伝わり涙が落下する瞬間は、まるで映画のワンシーンのように綺麗だった。
泣いている杜宇子は綺麗だと思った。
怒っているときよりも拗ねているときよりも。
不謹慎だけれど。
その耳に光るダイヤモンドよりも煌めく涙という名前の宝石を落とす彼女に、一瞬で心を奪われてしまった。

そして、彼女は初めて、自分から吐露した。

彼を怒らせてしまった、と。

彼女は言った。泣きながら言った。

黙って聞いてやることしかできなかつたら、コーヒーに口を付けずに、そのままカップを握りしめた。

ワタルを怒らせてしまった。
言ってはいけない言葉をしてしまった。
いつまで、あの人に片想いをしているのか、と。
これまでに困らせたことはあったけれど、怒らせたことはなかった。
怒ったワタルは…大人の男の人の顔だった。初めて見た。
それは、こんなに長い時間一緒に居るのに、一度も見たことがなかった。

「時間じゃない、そういう事なんだと思う」
彼女はそう言った。そしてまた涙を落とした。

それで何となくだけど、言葉の端々から想像した。

気の強い彼女のことだから、痺れを切らして、兄に尋ねたんだと思う。
杜宇子は、あれほど長い時間を見つめ続けることが出来るのに、兄のことになると同じように無言で居ることが出来なくなる。
そして、兄の大嫌いな「結果を得られない意見」というやつをぶちかましてしまったんだ。
そして、激怒した兄にこっぴどく撥ねつけられたんだ。
そう思った。

――馬鹿な杜宇子。

「それで、仲直りはできそうなの？」
「仲直り？…喧嘩にもならなかったわ」
杜宇子はしょんぼりしてそう言った。
よほどこたえに違いない。

兄は、その穏和な物腰から、凄く温厚な人物だと思われているけれど、本当はそうじゃない。
喜怒哀楽を出すことを良しとしないだけだ。
本当は、兄弟三人の中で、一番、激しやすいと思っている。

だから、勝手に踏み込んでくる人物には容赦しない。
兄のことだから、ぴしりと一言は二言言葉を言っただけで、あまり激昂しなかったと思う。
怒ってもすぐに修復できるように札を出すのが兄だ。
だからすぐに穏和な顔つきになって、悪いと思ってないのに「ごめん」くらいは言ったかもしれない。
それでも、杜宇子にとっては酷くショックなくらいには冷たく撥ね付けたのだろう。

だからこうして大抵のことには辛抱強い彼女が打ちひしがれているのだ。

「…杜宇子。あいつはやめろ。もう、やめろ。」

杜宇子を泣かせるヤツは赦さない。
たとえ兄でも。たとえ杜宇子がどんなに恋い焦がれている相手でも。

見つめ続け観察し続け、他の人を好きな兄さんの傍に居たいという杜宇子が悲しかった。
いつも杜宇子は決して泣かなかった。
自分を憐れんだり、悲しんだり、そしてその立場に酔いしれたりしない。

そういう彼女が愛おしいと思う。

これまで通り過ぎていったどんな人達よりも、愛おしいと思うし、心惹かれる。
そして、笑っている杜宇子が一番倅せであってくれば良いと思う。

それなのに。
彼女が涙を流すのは。
好きな相手を怒らせてしまった、という単純だけれどつまらない理由だけ。

そして、初めて、彼女が本当はいつもいつも傷ついていたことを知った。
本当は心の中で、ひとりで、いつも泣いて傷ついて、怒ってそしてまた泣いていたに違いない。
でも、それを口や態度に出したりしない。
その秘めたる恋をずっと大切な宝物にしてきたんだ。だから彼女からその恋を奪うことが出来ないのは十分にわかっていたけれど

でも。

杜宇子。

もう、良いよ。
君は十分、兄さんにその恋も時間も捧げたじゃないか。
これ以上、傷つかなくて良いよ。

兄さん。

傷ついて欲しくないと言った兄さん本人が、彼女を一番傷つけていたんだよ。
わかってる？わからないなら、良いよ。
わからないなら、オレが杜宇子の傍にいるから。

何も考えず、満杯になったままのコーヒーカップをぐしゃっと握りつぶした。
溢れたコーヒーが掌に注がれていたけれど、熱いと感じなかった。

今まで生きてきた中で一番、憤っていたから。

人間憤ると、感覚が麻痺するんだな。よく解ったよ。

そう、思った。

最初に杜宇子が悲鳴をあげた。

「何してるの！このコーヒー凄く熱いのに！
あぁ、冷やさないと！」
これに驚いて涙が止まったらしい。
彼女の持ち前の世話焼きが顔を出した。

大丈夫だよ、と言ったのに、彼女は画廊に戻って手を冷やさないといけないと主張した。
しびしび腰を上げる。
もう少しだけ彼女と一緒に居たかったけれど。

杜宇子と違ってオレは男だからね、平気なんだよ。

そう言うと、彼女は軽くにらみ返した。
「そういうところがお子様だって言うのよ」
泣いてすっきりしたらしい。杜宇子は少し落ち着いたようだった。
良かった。怪我の功名というやつだろうか。
「お子様じゃないよ」
そんなことを言いながら、とにかくすぐ冷やさないと、と救急箱のありかを一生懸命思い出そうとしている杜宇子の後ろをついて
行きながら、画廊への階段を下りていったとき。

「――イケダさん」

突然、杜宇子が足を止めた。

そこには、マリナ・イケダがいた。
今日は教室の日だった。忘れていた。

画廊が時間外に閉まっていたものの、中の照明は点いていたのでやがて誰かが戻ってくるかも知れないと思い直して扉の外で待つ
ていたということだった。

杜宇子は素直に待たせたことを詫びて、慌てて扉を開けた。
杜宇子が慌てる必要なんかないよ、その人に気を遣うことはないよ。
そう思った。

「今来たところなので。」
彼女は淡く笑った。

マリナ・イケダはとても小柄な女性だった。
本当はもっと身長があると思うのだが、とても小さく見える。
そしてとても幼く見える。
それは彼女が童顔であることに加えて、いつまでも夢を追いかける兄さん達と同じ、会社勤めでない職業の人独特の若い空気だ
った。
染めているわけでもないのに茶色の髪に、茶色の瞳。すごく色素が薄いと感じる。
彼女のゆっくり瞬くその様だけは、印象的だった。
でも、それだけだ。杜宇子の方がもっと綺麗だ。

こんにちは。

マリナがそう言ったので、素っ気なく挨拶を返した。
杜宇子は救急箱を探しに席を外した。

小さく笑って、お兄さんによく似ていますね、と彼女は言った。

…それは、どうも。兄弟ですから。

会話が續かないように、わざと口調を抑えて答える。

■後編

腹が立つのは、杜宇子がこの人のことを悪く言わないことだった。彼女は杜宇子よりも少し年下だ。だから、必然的に杜宇子より至らないところがたくさんあっても不思議ではない。でも、杜宇子は彼女のことを「いい人だ」と言う。ワタルのとんでもない仕事の依頼を引き受けてパリに行くし、なにより彼女の主催する教室はとても好評だし・・ワタルの絵のモデルだしね。彼女が最後は少しだけ悲しそうに言ったのを思い出した。

兄さんの趣味がよくわからない。

感想はそれだけだった。
人の好みはいろいろあるけれど…。

杜宇子がそんなことを言い、そのワタルの恋を応援するような節を口にするのをみると、どうにも好奇心が抑えきれなくなる。

手をやけどしてしまったので。少し冷やしてきます。

そう言って、少し席を外した。
洗面所で手を冷やして、あまり影響がないことを確認する。

そして、鏡の前に立つ自分を見た。

航兄によく似ている。よく、そう言われる。
兄弟だから、三人ともよく似ているけれど、顔立ちや骨格が一番似ているのは航兄だ。

その時の年齢そのままよ、杜宇子が懐かしそうに笑う。

…杜宇子がオレだけにその気持ちを隠さずに話をするのは、それは兄さんに似ているからなんだよね。

それはよくわかっていた。
本当は、彼にたくさん語りかけたいのに、そうできないから。だからオレに言ってるのでしょう。

そう思うと、どうにもならない切ない気持ちになる。
目の前の自分を乗り越えて、彼女が見ているのは、兄さんなのだ。
わかってるよ。わかってる。
杜宇子はそれでも、兄さんとは違うのだと認識してくれている。そして良い意味で区別している。
そういう大人な杜宇子が好きだったけれど・・・。

オレを兄さんの代わりにしても良いのに。
それで杜宇子がこちらを向いてくれるのなら、それでも良いのに。

洗面台から出てくると、マリナ・イケダは、最深部にある3枚の絵に見入っていた。
その画は、彼女がパリまで行って、買い付けをしてきた絵だった。
相当額の報酬を払おうと、航兄が言ったのだけれど、彼女は首を縦に振らなかったらしい。

その代わり、好きなときにこの絵を見に来ることを許可して欲しい、と言った。
兄は快諾した。
だから彼女はこうして頻繁に絵を見ている。
今日は絵付け教室の日だから、その前に眺めに早めに来たのだろう。

じっと、食い入るように見つめている。
何がそんなに良いのだろう。
確かに良い絵だとは思いますが。
そこまで心酔する理由があるのだろうかと思った。

絵が傷まないように直接照明をあてるのではなく、間接照明にしている。
彼女は目が弱いらしい。間接照明だとぼんやりするらしく、じっと見つめ続けて居た。

そして、こちらに気がつくと、だいじょうぶ？と声をかけてきた。

「…そんなにあの絵が、好きなんですか」
好奇心で、聞いてみることにした。そんなに思い入れのある絵であるならば、航兄に引き引き渡さなければ良かったのに。

彼女は少し笑った。
「好きと言いますか、気になるというのか・・・。」
彼女が口ごもった。

そして少しはにかんだように微笑んだ。彼女の微笑む姿は儂い。
教室で闊達に笑いながら精力的に人と接している講師の時の顔と違って。
どこか、苦しいことや悲しいことを若いときにすでに経験してしまった。
そんな笑い顔だ。

「時間じゃないんだ、と思う瞬間ですね」
「—意味がわからない」
そう言うと、ああ、言葉が足りませんでしたね、とマリナが言った。
「この画家はもう亡くなってしまっているそうです。でも、こんなに想いが残っていて、見方によっては 凄く満たされることもあるし、すごく落ち着かなくなるときもあります。
作品ってそういうものかと。
いつ、どんな気持ちで、どんな立場で見るかによって主観的にも客観的にもなれる。
…時間の経過を愉しむことが出来る絵というのはなかなか出会えないものですから」

時間じゃない、という彼女の台詞にどきりとした。

なぜなら、杜宇子も同じ事を言っていた。

時間が解決してくれることもあるけれど、時間に左右されない何かがあることを、杜宇子も彼女も承知しているんだと思
った。
杜宇子の場合は兄に対する恋であり、彼女の場合はこの絵画なのだろう。

杜宇子が救急箱を持ってきた。
そこで話は中断した。

杜宇子は彼女に、コーヒーをこぼした子供がいるので、大変だ、とこぼした。
その時に笑った彼女の笑顔は、もう、いつもの講師をしているときの笑顔だった。

あの儂くて、拙くて、そして自分よりもずっと年下に見えたその笑い顔はもうなかった。

兄さん。

兄さんが、どうして彼女を好きなのかが、少しだけ、解った気がするよ。

彼女は兄さんと似ている。だから、目が離せないんだ。
彼女は人ときちんと距離を取る。
礼儀正しく、そして屈託がない。
でも、決して自分の中には入れないのだ。
入れてくれるのはほんの一瞬。
自分と彼女が何かの感情を共有したときだけ、ほんの一瞬だ。
しかもそれは杜宇子もよくわかっていて、だから彼女を憎めない人だと言うのだ。

それでも杜宇子を愛おしいという気持ちは変わらないのけれど。

杜宇子は化粧もついでに直してきたようだ。
少し眼が赤かったけれど、もう、いつもの杜宇子だった。

——杜宇子、オレにしなよ。

いつか言おうと思っていた言葉を、言ってみた。
杜宇子はテーブルの上を水拭きしていた手を止めた。

今日は早い時間から画廊に来ていた。学校も休みに入った。

やることがないしね、と言った言葉を杜宇子は簡単に信用した。

店が開く前のほんの短い時間。
彼女はくるくるよく働いた。

商談用のテーブルに座ると、画廊全体がよく見える。
杜宇子もよく見える。

「何を？」
良く聞こえなかった、という風に彼女は首を傾げた。
「だから、オレにして。兄貴はやめて。」
「・・・言っている意味がわからないわ、サトル」
そう？ごく単純だよ。

杜宇子の傍に近寄る。
杜宇子がそこで初めて、言っていることがどういうことなのか気がついたようだ。
ノーガードってこと？それも心外だね。
そう苦笑して杜宇子の前に立った。

もう、身長も追い越した。あのときの小さなサトルじゃない。
大学では水泳部だったから、筋力では負けない。
杜宇子が「子供だわ」と言う要素はどこにもありはしないんだ。

「航兄はやめて、オレにして。オレなら杜宇子を泣かせない。オレなら杜宇子しか見ない。」
「・・・だからそういうところがお子様だというのよ」
杜宇子が困って言った。
「どこが？オレはもう子供じゃない。」
そう言って、杜宇子の手首を掴んだ。
小さく悲鳴を上げる杜宇子を、初めて抱きしめた。強引に抱きしめた。

彼女の髪から良い匂いがした。

ぎゅっと、彼女を抱きしめた。彼女は華奢だった。
こんなに小さかったっけ、と思った。

「サトル、ワタルと同じ匂いがする。」
杜宇子がそんなことを言ったものだから、ちょっと遣る瀬無くなった。
そして、オレの背中をぼんぼん、と軽く叩いた。
「・・・兄貴の代わりに良いよ。最初はそれでもアリでしょう。」
腕を緩めずにそう言うと、杜宇子はまた一つ、背中をさすった。

「ワタルの代わりはいない。・・・サトルの代わりもない」

「どうしたら杜宇子が悲しまないか、それを一緒に考えたい」
「サトル。サトルは、まだわかってないよ」

身を離して、杜宇子がそう言った。
泣きそうな顔をしていたが、笑っていた。

「私は恋に堕ちちゃったの。ワタルに恋しちゃったの。サトルじゃない。」
そう言った。

「良いよ、それでも。」
「良くないでしょ。私がいやなの。私は、ワタルがいい。サトルじゃ駄目。これが結論。」

どうして？
兄と似た顔をしていて、ちょっと年は下だけれど、一生懸命な杜宇子を好きなんだよ。
それが駄目な理由？ちっともわからない。

恋を新しく始めようと言っているのではなく今の恋をそのまま引き継いでくれれば良いと言っているのに、それでは駄目だという。

でも、それが彼女の理由なのだ。

どんなに似ていても、駄目なものは駄目なのだ。

「私はワタルを見ているだけで良い。いつかこちらを見てくれれば良いと思ってる。
でも、それは今でなくても良い。
・・・サトルと一緒に居れば、楽しくて懐かしくて、そしていろんな嫌なことを忘れられると思うけれど、それが私の望んでいる事じゃない」

杜宇子は言った。少し悲しそうに言った。

「じゃ 杜宇子の望んでいる事って何？」

そう言うと。杜宇子は微笑んだ。

「ワタルがワタル自身を好きになってくれること」

———やられた。

そう思った。がつん、と後ろから殴られた感じがした。

それは母の言葉だった。

自分を好きになりなさい、そうすれば相手のことをもっと好きになれる。
母はそう言った。

でも、その言葉の意味を、航兄は、自分に当てはめていなかった。
喜怒哀楽を殺し、そして穏やかに笑いながら自分のテリトリーには絶対に人を入れない。
そんな兄さんが初めて、自分の中に入れても良いよと思ったあの人は、兄さんと同じ人だった。
だからお互いがお互いの中には入っていけないのだ。
それでもその引力とでも言うかのような同極の力が兄さんを焦がして止まない。

杜宇子。
杜宇子は自分のことじゃなくて、兄さんのことを願うくらい、そんなところまで行ってしまったんだね。

杜宇子はだてに長い間兄さんを見つめ続けたわけじゃなかった。
兄さんがこっちを向いてくれればいいと、願いを込めていたわけではなかった。

兄さんが、もっと倅せになってくれればいいのに、と思っていた。

そんな物思いに答えてくれない人だとわかっていても、杜宇子はそれでも兄さんを思うんだね。

…きっと、その言葉は杜宇子に向けられた言葉なのだろう。

杜宇子、自分自身を好きになれ、と言ったのかもしれない。
そうして彼女は恋に堕ちて、兄さんはそうでないことに気がついた。

だから、傍に居て、ずっと見つめているだけなんだ。

…ずっと不毛だと言ってたけれど。杜宇子を一番傷つけていたのは、他ならぬ自分自身だった。

杜宇子はずっと大人だった。自分よりずっと大人だった。

きい、と扉が開く音がして、航兄が入って来た。
涙ぐんでいる杜宇子と、気まずい顔した愚弟を見て、航兄は顔を緊張させた。

「どうした。」

それは杜宇子に向かってかけられた言葉だった。
彼女は少し嬉しそうに微笑んだ。

「…見ちゃいけないものを見てしまって。驚いて、サトルに退治してもらおうと思ったら。飛ぶのよねえ あれ。騒いでいたら逃げてしまって。」
杜宇子はそう誤魔化した。

兄さんは少し黙っていたけれど、杜宇子が水場に戻ったのを確認すると、オレの頬をつねった。
「痛いよ！兄さん！」
オレが叫ぶと、彼はじっと目をのぞき込んだ。

「杜宇子を泣かせるな。…大事な同級生だ。」

いつから扉の外に居たのだろう。
航兄は。杜宇子の気持ちを知っているのだろうか。
知ってて答えられないから、知らないふりをしているのか。

杜宇子の恋は秘めた恋ではない。もう、オレが知ってしまったから。
でも、彼女の秘めた願いは、ずっと続く。兄さんが倅せになるまでずっと続く。

オレはそんな彼女をもう少しだけ見つめようと思う。

兄さんと杜宇子とオレの奇妙で切なくて、そしていつ終わるか予想できない関係は、いつかきつと、笑って話すときが来る。それはとても近いうちに。

オレが、杜宇子みたいに人を好きになることができれば。

その間まで、この恋は、秘めたる恋にしよう。

杜宇子、オレはまだ諦めていないし、杜宇子が倅せになって欲しいと思ってるし。
今回は完敗だったけれど、きっと、いつかは君がこっちを向いてくれるのかなと思って、
杜宇子をまた見続けることにするよ。

でも、もう不毛だなあとは言わないよ。

(FIN)

K-side

■ Allegretto

その人を好きになった瞬間というのは、今でも鮮やかに思い出すことができた。

私の好きになった人は、時計をしない人だった

「今、何時？」
私は自分に話しかけられていると気づくまでに、少し時間がかかってしまった。
なぜなら、先輩にみとれていたからだ。

自分の右手を差し示し、時間を教えて欲しいという先輩を凝視していた。

先輩はちょっと笑って、
「今、何時かわかる？オレ、時計を持ってなくて時間がわからないんだ」
慌てて、自分の左手を返し、腕時計の盤針を見た。
時刻を伝える。

ここは第7研修棟研究室講師控え室兼研究生ミーティングルーム
通称「たまり場」だ。

先輩は大学院生で、この研究室でも大学に残って欲しいと常々アプローチしているほどの人だ。
そんな凄い人なのに、傲慢でもなく人付き合いも良く、その上容姿端麗ときたものだから。

この研究室の入室を希望する女学生がいかに多いか、ということは容易にわかる。

黒いくせの強い髪に、淡麗な顔立ち。男臭さが全くなく、それでいて口は悪い。
お母様がフランス人だという。
確かに、異国の情緒が溢れている顔立ちだった。

II. Tempo Andante, ma rubato

いつだったか、フランスに論文を出す人がいて、英語訳と仏語訳の対比について、先輩に指導を受けていたことがあった。

たまり場では、そんな助け合い活動も行われる。

そのときに、彼は流暢なフランス語で、論文の不適切な箇所の単語をひとつずつ発音して話し出した。

私は、2度目の恋に堕ちた。
同じ人の声に、恋をしてしまった。

声や仕草に恋をするというのは、まったく情動的で、自分らしくないと思う。

こういう人も、居るんだなと思った。
同じ研究室に居られるだけで、奇跡だと思わなければならない。

穏やかで、日溜まりのような人。

彼女・・・とかいるのかな。

そんな話はしたことがない。
そんな話は聞いたことがない。

「君と話しているとほっとするよ。」

先輩が私にそんなことを言ったことがあった。

それって恋愛対象として、見てないってことでしょう。

おどけて言う私に、先輩は小さく笑った。

答えがないことが肯定の証だった。

私は、彼にそういう対象で見つめて欲しいのだろうか。

III. Vivacissimo - attacca -

時計をしなないと言っていた先輩が、実は以前はかなり熱心なコレクターであると知った。

たまり場はしばしば飲み会の会場になる。
持ち寄った乾き物やスナック菓子やビール缶やたばこの煙で、小さな会場は盛り上がっていた。

そんな席で、先輩に話が振られた。
大変な時計好きで、あれらはどうしたのかという質問に、先輩は少し困ったように笑った。

「時計を覗くと、時間を気にしている風で、いやだから」

彼女に怒られたか？という野卑な声に、先輩は　そういうわけではないけれど　と言って否定した。

でも、あなたをずっと覗いている私には、すぐにわかった。

カンというものは証明できないものであるけれど。

飲み過ぎた、と言って、研究室の屋上に何人かが夕涼みに来ていた。
私も先輩も、夜風に当たりにきたクチだ。

さっきの時計の話。

隣にいた先輩に、私は話しかけた。
これが最初で最後の、私から話しかけた会話だった。

時間に束縛されたくないってわかりますよ。

私がそう言うと、先輩はちょっと驚いたように目を見開いた。

「そういうことを言った人が、もう一人いる」

誰ですか。あなたの、恋しい人ですか。

私はその言葉を飲み込んだ。

「時計を覗るオレをみて、『時間に束縛されるようなら 無理して合わせなくても良いよ』といった人 がいてね。
オレは、つい、習慣になってたんだよね。
締め切りとか刻限とか。
それまで、お互いに、時間に関係なく、過ごしていた存在だけに、すごく衝撃でね。
そういうしがらみに影響されない人には、その動作はすごく悲し かったと思う。
まだ、そのときのことを引きずっている情けない状態なんだ」

ああ、先輩。

今、私に、私でない人への恋の告白をしたのを、わかっているでしょうか。

その人のために、時計をつけないという決心をして、それを何年も守っているわけですね。

夜空を遠く見る瞳が。

悲しそうだった。かわいそうな人だ。

私は、それっきり話しかけることができなかった。

IV. Finale: Allegro moderato

先輩がフランスの大学院に留学をすることが発覚して、研究室は騒然となった。
就職活動はしていなかったから、このまま大学院の研究室に残るものだとばかり思っていた。

もともと、いつか留学するつもりではあった、と彼は言った。

確かに、このタイミングで進路を決めるというのは、正しい選択だと思う。

だけど。

あっさり、日本での大学院生活を捨てて、遠い場所に行ってしまう彼を理解できなかった。
もっとも、私の理解なんてどうでも良いことなのだから、彼は彼の事情でここを去るのであれば、せめて気持ちよく見送らねばならない。

「寂しくなるね」

送別会でも言葉を交わさなかったけれど、ロッカーの片付けで、たまり場に訪れた先輩が、私にそう言った。

やっぱり私から話しかけることができずに、視線をそらして、学会論文を読みふけっているふりをした。

私は苦笑いした。

日本語、間違ってますよ。
それは私たちが言う台詞です。
あえて「私」ではなく「私たち」と強調していった。
そうすると、先輩は手を挙げて、その癖の強い黒髪に指を入れた。

困ったなあ

という仕草だ。仕草だけで、何を思っているのか、だいたい想像できるくらい、私は先輩をみてきたことになる。

その仕草が好きです。
その声が好きです。

あなたが、好きです。

だから、寂しい。

口には出せないその言葉を飲み込んで、平静を装った。

「君の声。知っている人にすごくよく似ているんだ。」

先輩はそう言った。

「ほら。いつも困ったような顔をして、オレと話すから。」

嫌われてるのか苦手に思われてるのかな、と思って、話しかけづ らかったけど。」

先輩はそう言って、ちょっと笑った。

「君の声、すごく良い声だと思う。」

私も、先輩の声、好きでしたよ。

もう、音声として発することはないけれど。

私の秘する恋はこれで終わった。

いいえ。

終わったことで秘することになるのかもしれない。

それでも。

時折、星空を眺めると、思い出す。

彼の声、彼の仕草、そして時計をしない理由について。

私が好きになった人は、時計をしない人だった。

(FIN)

■01

「また夜更かししていたのね」

姉はそう言った。

咎めるような台詞であったが、口調は静かであった。

それは私のことを愛しているから故の口煩い忠告などではなく、私のことに対して興味がないけれども、自分しかそれを口にする人物がこの家の中では誰も居ないからだと考えているからだ。

長姉である葎・マクドゥガルは、留守がちな当主の代わりにこの家を取り仕切っている。

若くして結婚した父の最初の子にあたる葎・マクドゥガルにすべてを託して彼はこの邸を留守にする。

葎は、その他の多くの妹達と姉は違っていた。

父が唯一信用している人間である。

信用・・・というよりかはむしろ、一番使える人間と思っているのかもしれない。

若い頃から大変な傑物として賞賛され続けて、今では大きな発言力を持つ地方の名士という称号では収まらないほどの成功者となっている父とは、滅多に口をきくことはない。

常に屋敷にいないし、帰邸したとしても彼の判断や署名を必要とする案件について取りかかる方が優先されたからだ。

家族の団らんの時間は、殆どない。

執務室と居室を往復するだけに近い時間を過ごす、慌ただしくまた出掛けて行ってしまふ。

葎の手腕でもってしても、静流そのものではないから、当主でなければならないことも存在する。

そういったものすら、最近では片付けておくようにと当主は言っているようなのだが、葎は線引きをしているようだった。

謙虚であるから、という理由ではないと思う。

葎という人物は、嫁いでなおマクドゥガル家を名乗っている。

正確には、彼女に婿養子が来たのだが、彼はマクドゥガル家の事業には携わっていなかった。

彼女も、華やかな場面には一切顔を出していない。

マクドゥガル家の当主夫人が不在であり、育児などが多忙につき、という理由で、夜会などの出席は免除されている。元々、そういった場所にはあまり興味がないらしく、彼女の申し出というよりも主張はあっさり承認されてしまっている。

それが葎のささやかな抵抗であるように思えた。

彼女は聡明ではあるがどことなく捉えどころがなく、心の内は妹である私やその他の妹達にもわからない人であった。

若くして結婚を決めて、あっさりと嫁いでしまったものの、子を産み育てながら彼女はマクドゥガル家に通って来る。子を連れてくることも殆どない。

だから、今でも彼女の居室は嫁ぐ前そのままになっていた。

それから、居室と執務室を兼ねるということで、別の部屋も専用に使っている。

・・・その部屋は、彼女の寝室からは遠く離れた場所であると言うのに、それでも葎はその部屋が良いと言い、誰もそれに反対することはなかった。

その部屋は客間として昔は使われていて、最後に使ったのは倬登を連れて行った波瑠佳という人物であった。

皆、忘れてしまっているかもしれないが。

彼はとても優しく親切な人であったことを覚えている。

ぼんやりとだけれども。

滞在していた時には、私は病が重く、彼がやって来たのと入れ違いに近いような状態で母方の祖父母の別邸で静養していたので殆ど彼のことを知らなかった。それでも温和であたたかい顔つきの人であったということは記憶していた。

父とまるで違うと思ったから、余計に覚えているのかもしれない。

父は・・・多くの娘達を得ながらも、彼の希望通りの娘というのは存在していない。

父の関心は、末子の倬登だけにある。

マクドゥガル家の娘達は幾人か結婚し、すでに子をもうけている者も居る。

けれども、静流は孫には興味がないようであった。

世間一般の感情を、彼に求めてはいけないのだと娘達は自分達に言い聞かせて育った。

それくらい、彼は特別であった。だから、彼がたったひとりだけの・・・妻と呼んだ人だけのことしか愛さないことに対して、無理はないことなのだと言理由を作りたがった。

彼は家族を持つことを望んでいたのに、それでも愛しい人が生んだ自分のこども達のことを愛でるためだけに生きる人生を選ばなかった。

何れも女兒であったからなのか、彼の関心はもっと別の何かに注がれているのかはわからない。

業が深い人だと思う。

哀れだと思う。

けれども、そう考えている時点で、父のことではなく自分自身のことを哀れんで可哀想だと嘆いているのだということはわかっていた。

私は・・・私達は、誰にも愛してもらえないから、可哀想なのだと言って陶醉しているだけなのだ。

でも、葎と当主はとても似ている。
それは誰もが認めていることであった。

けれども、葎では倬登の代わりになれない。

長姉である葎は男に生まれればと悔やまれるほどであったし、私達他の娘は「その他大勢」でしかなかった。

同じようにして母の腹から生まれて来たのに、みなが女兒であったから。

その母は倬登を産んで、間もなく儂くなってしまった。

結局、彼を胸に抱いて、長く続いた子を産み続ける獣のような生活から抜け出せるという時がやってきたというのに。

母は、倬登を産んで完全に壊れてしまった。

自分が男の子を産んだと認識できなかった。

それで何かが終わると思ったから壊れてしまったのだろうか。

その時の私はあまりにも幼くて、母の記憶は殆どない。

母は狂死した。このことをマクドゥガル家の者が口にすることはない。

邸の中を徘徊し、父が居ないと不安になって眠らなくなり、そして身体は衰弱していった。

誰も、それを止められなかった。

父と母は幼い頃からの顔見知りで、若くして結婚した。

そしてすぐに葎が生まれた。それ以降、彼女はせつせと子を孕み、生み続けた。

そのことを今でも癒やせない傷として抱え続けている者たちがいる。

私の姉や妹達の殆どは、自分達はいらぬ存在だと思っている。

はたして、そうだろうか。そうなのだろうか。

この家の宿業について理解できていないだけではないのだろうか。

そう思う瞬間が幾度かあった。明らかに、長姉と私達は違っている。

同じ父と母を持つのに、何もかもが違うのだ。

血縁だからわかりあえるというのは誤りである。

近しいからこそわかりあえないこともあるのだ。

皆、同じ過程を経て最後は諦めてしまう。

彼らに注目されたいがために様々なことに励むのは最初のうちだけだ。

次に失望し、怒りだし、恨み、そして諦める。

最後には、忘れた方が幸せなのだと思い、あてがわれた人の元に嫁ぐものの、マクドゥガル家との縁を切ることはできない。

その中に少しでも口答えしたり疑問を投げかけたりする者が居れば、もっと違うのだろうと思うが、私はそれを口にしない。

その姉は、結局、末弟の倬登のように愛されていない。

愛しているかどうかということについては、私達は愛されていると思うし、大変に恵まれていると思う。

嫁いでいった先で肩身の狭い思いをすることもなかったし、それまでも不自由を感じることはほとんどなく暮らしてこられた。それなのに、満たされないと彼女達は言うのだ。

満たされないとやっているのに。葎のようにはなれないと言っているのに。

葎のように生きることはできないと言う。

まったくおかしな話である。

そのものになれないと言っておきながら、どうしたらそんな風に振る舞えるのかと葎に尋ねるのだ。

そんな愚かな希望に縋っている妹達を見て、葎はいつも同じ態度で接した。

憤ったりすることもなかった。ただ、淡々としていた。

妹達の羨望も恨みも憂悶も・・・彼女はすべてひとりで引き受けた。

だから、彼女を嫌う者は多い。葎・マクドウガルという人は、決して弁解をしないから。

理解してもらえないのであればそれで良いと思っているようだ。

それが、彼女の生き方であった。

葎は、いつでもこの役割を交代すると言うのだが、それに手を伸ばした者は誰も居ない。

母もそれほど愚かな人ではなかった。

図書室に残された膨大な図書は、彼女のために当主が取りそろえたものである。

静流・マクドウガルの代になって、図書室を拡充しなければ収まりきれないほど大変な所蔵数となった。

けれども、私は知っている。

母の愛した書物で、特に幾度も繰り返し読んだ本は、当主の私室に大切に保管されているのだ。

誰も見ることはできない。誰も触れることができない。

それが父の愛し方なのだろうと思った。

■02

私はどういうわけか、あまり健康ではない。倬登と同じ症状であったが、幼い彼の方が重篤な状況であった。私は遠出したり無理をしなければ普通に屋敷内を出歩くこともできるし、体調も気候も良ければ、杜にも出られる。けれどもどうにもこの寒暖の差が身体に障るのだ。

毎日毎日、飽きもせず本を読むことができる。空想し、音楽を聴き、絵を描き、自分自身と話をするだけで一日を使い切ってしまう。

毎日が、その日限りで明日が必ずやって来るとは限らない。そして、今日という日はもう二度

とやって来ない。

皆は呆れるけれども、私はそうではなかった。自分の人生が他の者よりも短いだらうと、莫然と思っていたから。

そんな風に思うことすら黙認されていた。

好きなことばかりにしか興味を示さない私に誰も近寄らなくなった。

私は聞き分けの良い病人であったし、自分の身の回りのことを細々と気遣う必要のない環境にあった。これはマクドゥガル家に生まれたことに対して感謝しなければいけない。

私だけが好きなことをしていると言うけれども、私にしてみれば言い分はたくさんあった。

瑛菜は自分の好きなことだけして勝手だと、この間は食事の時間に言われてしまった。最後の抵抗であったのだろうか。

彼女は早々に家を出て行ってしまった。こんな家は嫌だと言っていたが、そういう者ほどこの家と自分を切り離すことができない。

・・・自分で選んだ路を歩いているのに、なぜ不満を持つのか理解できない。

嫌なら、引き返せば良いのだ。違う路に行けば良いのだ。

そういう風に不満を言うと、姉の菫は唇の端を少し曲げてただ黙って私をみるばかりだ。

「貴女は、倬登や絲と話が合いそうね」

絲のことは知っている。風変わりで有名な人である。そして、倬登は会わなくなって久しい。どんな人に成長しているのだろうか。彼は、この土地に戻ってくるのだろうか。わからなかった。倬登と菫は連絡を取り合っているようであったけれども、妹達にそれを知らせることもなかった。

ただ、生きてることだけはわかっている。私達にそれを教える必要もないだらうと思っている節があった。実際、誰一人として彼のことを詮索する者は居なかった。

「それしか路がない人も居るのだよ」

父が戻った時に時折呼び寄せられる菫姉の夫・・・つまり、私の義兄だけはこの屋敷に立ち寄る度に、私の部屋に寄ってくれた。

私の疑問に答えてくれる数少ないひとりであった。

どうしてこの人と姉が激しい恋に堕ちたのか、信じられなかった。いや、実際は信じていなかった。

大変に物静かな人で、学者肌の人だ。何かを研究しているようだけれども、来邸する時にはいつも大きな書類鞆を持ってやって来る。

その中身について尋ねたこともあったけれども、義兄は瑛菜さんがもっと元気になったら見せてあげると言った。

彼は私のことを瑛菜さんと呼び、長姉の夫という威厳を振りかざすことはない。

長女をこよなく愛していて、姉がこちらの雑事でかかり切りになっているので、娘は彼が育てているようなものであった。

その姉も、妊娠後期はマクドゥガル家に顔を出すことはなかった。結婚してすぐに出産したことは、マクドゥガル家の「口に出してはいけないこと」のひとつに挙げられている。

姉が身重の時に、この屋敷では寝泊まりすることはなかった。どんなに遅くなっても必ず自邸に戻っていった。

不便だからという理由ではないように思う。・・・母の姿を思い出すのだろう、と思った。

でも、姉は、婚姻式の時にはとても綺麗だったそうだ。

私は失調していて式に出られなかったのも、そんな姉の姿を見られないことだけは残念であった。

この家の陰惨とした空気が嫌いだと皆は言う。けれども、私は好きだった。誰も近寄らない。誰もやって来ない。湿った、重い、少し霞んだ空気が漂う杜も好きだったし、近くの河が真冬の時には夕日が反射してとても綺麗だと思った。

こういう言葉だけでしか表せない自分が悔しくて、私は本を読み、絵具を手に取り、音楽を愛した。

「少し、考え事をしていたの」

私は笑う。枕の上の身体が鉛のように重くて、私の身体は自分の命令に背くことばかり考えていると思った。

菫は私の寝台の脇に積み重なっている本の山に眼を向ける。姉の視線は、父にとってもよく似ている。紫電、と呼ばれる鋭い視線を持っていて、じっと見つめられると誰でも視線を逸らす。彼女が男子であったのなら、と悔やむのは静流・マクドゥガルだけではないはずであった。何を考えていたのか、と彼女は聞かなかった。姉の素晴らしいところはこんなところにも出ている。彼女は他人に意味のない質問しない。好奇心を満たすためだけの質問や会話は一切しないのだ。

「瑛菜」

「ねえ、菫姉様」

私は彼女の言葉を遮った。なぜなら、彼女が何を切り出すのかわかっていたからだ。

菫は、頃合いを見計らうなどという配慮はしない。更に私の遮りのための呼びかけを無視して、単刀直入に言った。

「主治医が気に入らないのなら自分から父上に言いなさい」

「私が気に入るかどうかは問題ではないでしょう」私は仰向けになって天井を眺める。

「どんな名医が来てくださっても、無理よ。私の身体は治せない」

菫は黙っていた。私が薬を飲まないと言われているのだろう。最初は放置していたけれども、それが長引いてきたのでとうとう菫が忠告しに来たのだ。彼女が私を心配して、ということではない。主治医がきちんと報酬に見合った働きをしていない原因が私にあるのだと知り、その原因を取り除きに来たのだ。

私が薬を拒否するのは副作用があるからだ。始終ぼんやりしてしまい、倦怠感が常につきまとう。食事の味がわからなくなり、足が浮腫む。でも、症状は緩和される。咳き込みは止まり、喉の腫れもなくなる。

でも。私は、私の時間を過ごすことができなくなる。大好きな本を読むこともできなくなるし、体調が良くなったとしても足の浮腫のせいで外に出られない。木々が季節の中で移ろう色や温度や匂いを感じることができない。これは、生きていけると言えるのだろうか。根治するわけではないから、この状態を生涯続けていかなければいけないのだろうか。そんなことは耐えられない。

「死にたいのなら、身辺整理しておくことね」

「整理するようなものは何もないわ」

私はそう返事をする。

律は、このままでは私はあまり永く生きられないと言っているのだ。

本人に向かって辛辣に事実を突きつける人ではあるが、押し付ける人ではなかった。

姉の口の利き方にも問題があるが、それを真に受けて言葉のとおりにしにしか解釈できない姉や妹達が哀れであった。この家の姉妹には溝があった。静かに深くけれども決して埋まることはない。

「私は、自分の名前が好きよ。エマと名付けてくださった父様に感謝する」

「Dieu est avec nous」という意味だ。神様は信じていないけれども、すべてを含む者という意味がある。

マクドウガル家には男子は殆どいない。生まれても早逝してしまうことが多かった。

ごく稀に、女子でも私のように虚弱体質のこどもが生まれるのだと言う。

自分がどうしてこの家の中で、幾人もの医師達の診察を受けているのか理由はわかっていた。

この家の者は病人を外に出すことを嫌う。でも、それだけではない。

母も、ぎりぎりまでこの館の中で暮らしていた。もうこれ以上はここに居たら死んでしまうという時までここに留まっていた。

だから、母方の祖父母は私が滞在していたときに、そのまま自分達と暮らさないかと持ちかけてきた。大勢の孫に囲まれて幸せな人生を歩む予定であった彼らは、私達がマクドウガル家の娘で到底・・・自分達の血筋であることを共有するような者たちではないことを知るまでに大変に時間をかけてしまっていた。でも、私は断った。朽ちるのなら、あの家で朽ちたい。それに、私の服用している様々な症状への薬や対策は、マクドウガルという莫大な財産と便宜を図ってもらえるだけの人間関係を持っていなければ手に入らないものばかりであった。死ぬのは怖くないと思っているのに、マクドウガル家を離れることが怖いとは、私の中の何がそうさせるのだろうか。それを見極めてみたかった。

・・・わかっている。

私に処方されている薬は、効能が認められれば倅登への処方薬になる。実験台とは思わないけれど、倅登もこんな風に苦しんでいるのだとしたら、とても哀れであると思った。

「この家の澱を全部引き受けられたのなら、私はそれで整理したことになるわ」

「瑛茉」

葎が溜息混じりに言った。

私は笑う。喉が乾燥して痛かった。

「最初から重いものを持っていると、それが当たり前のことだから、重いとは気がつかないわよね。軽くなって初めて重かったのだと気がつく。・・・私の身体も同じよ。思うとおりになってばかりの身体であったのなら、私、一睡もしないで本を読んで、写生して、詩を書いて・・・毎日毎日、飽きもせず同じ事を繰り返すの」

手を伸ばせば届く範囲に、私のすべてがあった。大好きな画集や詩集が床の上に積んである。書き散らかしたノートは幾冊めになるのか数えることをやめてしまった。気分によって万年筆のインクの色を変えるから、幾本も筆記具が転がっていた。激しく咳き込んだ時の為のタオルは肌に馴染んだものであったし、水差しは私の握力でも持てるように把手が低い位置にあるものだ。あたたかい飲み物を飲むときに味覚がわからない時に飲んで火傷をしないように、木製のマグカップをわざわざ特注で作って貰った。こんなに贅沢をしているのは、この屋敷で私だけだ。金品の問題ではない。

心を豊かに保つことができるというのは、なんて贅沢なのだろうと思う。

「薬を飲むとどうなるのか、もうわかったから必要ない。今度は、薬を飲まないとどれだけで死ぬのか・・・証明しないとイケないでしょう」

■03

「それは余り建設的ではない意見ね」

姉はそう言った。私は少し唸ってみせる。

ベッドの中で身体を伸ばした。関節が痛み、気懶かった。

けれども、頭の中ははっきりとしている。

「倅登も、私と同じ事を言うと思うわ。この薬、あまり良くないわよ。早く次の薬を開発した方が良いと思うし、症状を緩和させるだけではなく原因を調査した方が建設的ね」

私の言い分に、姉は黙っていた。

表情からは何も読み取れない。

私のベッドの近くで、両手に抱えた筐を持ったまま立っている姉の顔を見上げた。

同じ父と母から生まれたとは到底思えないほど、私と姉は違っていた。

どちらかと言うと、私はその他の姉妹とは似ている部分があるが、長姉とはまったく似ていない。

彼が幼い頃に別れたきりの倅登しか記憶にないが、彼は母親にとってもよく似ていた。

静流・マクドゥガルがこよなく愛する息子である。

そして、私の実弟である。

けれども、父は、私にメッセージカードは寄越すのに、自ら足を運んでこの部屋にやって来るこ

とはない。

でも私はそれで良いと思っている。父が私を気に懸けているのではない。私のことを思い出す人は、葎だけであるから、父の名前でカードを差し出しているのは、目の前の無表情に佇む女人なのだろうし、その予想は、きつと的中していることだろう。

でも、それでも良いのだ。

最初から期待するから、失望するのだとわかっているから。

最初から、これが私に与えられた普通なのだと知っていることにするから。

それが、葎と私の違いなのだろう。

それが、静流という傑物と娘の私の隔たりなのだろう。

葎と倅登の中間に位置する私を含めた多くのこども達には、マクドゥガル家のことを理解できるほど・・・何かに餓えることはなかったのだ。

私は、この家の男子が麒麟という聖獣に喩えられるのはおそらく、その飢餓感が表出しているからなのだろうと思う。

全てを手に入れても、満たされない。それが全部だとは思っていないからだ。そういう気質であったからこそ、この家は繁栄したのだけれども。

同時に、昔、この土地を開拓した時に力を合わせた男子達はちりぢりになってしまった。

ここではないどこかに行き着きたいという飢餓感がそうさせたのだ。

ひとつのところに留まることができなかったのだろう。

いつか再会するときのために、各々が吉兆を表す、空を駆ける獣の印の入ったものを身につけて自分達の出自を明らかにすることにしたのだと言われている。

でも、本当に駆けていきたかったのは・・・この土地にとどまることになった女達の方ではなかったのだろうかと思う。

そして外からやってきた女達は、この土地に住まう女達とは違い、耐えられなくなって狂う。私の母のように。

祖父母は静流のことを恨んだりしていなかった。

本当に母は父のことを愛していたのだろう。恨んでくれるなど言って結局実家に戻ることもなく、骸も戻ることもなかった。

今は、マクドゥガル家の墓地で静かに眠っている。

静かであるかどうかはわからないけれども。

親より先に子が逝くのは大変な哀しみであるのだと私に何度も言い聞かせていた。

静流・マクドゥガルという人の中には、狂気という名前の獣が棲んでいる。

ひとりの人を愛しすぎて、その他の者を愛せないという恐ろしい獣だ。

母が死んでなお、彼は何かを探し続けている。一体何を探しているのか・・・私が見届けることはないのだ。それが少しばかり残念であった。

姉は、両手に持っていた筐を部屋の隅のローチェストの上に置いた。わざと、私の手の届かない範囲に置いたのだと思う。私は姉の策略に乗ってみることにした。

「葎姉様。それは・・・？」

「いろいろよ」

「いろいろって・・・」

姉はその時、私をみて僅かに笑った。まだ夫人というには若い姉は、微笑むととても魅力的だと思われるのに、決してそうしない。いつも無愛想にしているのは・・・心の壁なのだろうと思う。

「倅登からの見舞いのメッセージカード。それから、お父様からは早く元気になりなさいという伝言。お祖母様やお祖父様からは、瑛菜が好きだと言ったので、ということで砂糖菓子の詰め合わせ。まだある。目録を読み上げましょうか」

「お姉様」

私は幼い時にしか使わなかった尊称で彼女を呼んだ。姉はたくさん居たから誰のことを言っているのかわからないからだ。でも、こうして二人だけの時には、私が姉と呼ぶのは葎・マクドゥガルだけなのだ。

「そういう細かい作意は私には通用しない」

私を気に懸ける人はいない。

姉にも家庭があるし、私にだけ拘っているわけにはいかない。

でも、なぜ、姉は多く居る妹達のひとりひとりに気を配るのか。

姉は気を持たせることはしない。事実しか言わない。

それが妹達の反感を煽るものであったとしても彼女はそれを気に病むことはしない。

「私は私の命を自由にしてはいけないの・・・？」

「瑛菜という名前をつけたのは・・・お母様よ」

姉が突然、そう言ったので私は身を起こした。

部屋の中で一日を過ごすことが多かったので、大きめの枕を用意してもらっていて、日頃運動をしない私の身体は同年代の者のそれよりずっと小さかった。

枕は私の背中をほとんどを覆い尽くして、まるで私の身体が埋もれてしまっているかようだ。

私は少し・・・いや、かなり、驚いていた。

しかし、それが姉の切札なのだろうと思った。

切札は、最後まで見せないものだ。

それを切札ということを知られないようにするものだ。

それがマクドゥガル家の家訓であった。それでも・・・姉は、私にこれまで黙っていたことを告げる気になったのは、私に対する最後の勝負なのだろうと思われた。

思っていたよりも、私には時間が残されていないらしい。

「父様が名付けたのは、私と倅登だけ。私は男子だと思われていたから。

その他は・・・みな、お母様が名付けた。女の子でがっかりしながらも、それでも嬉しそうだった。なぜだか、わかる？」

「少しだけ」

私は答えた。普段、こういう質問をしない姉が、私に向かって他の誰もが聞いたことのない話を始めるのだ。私は考えを巡らせた。いつものように、想像して自分の都合の良い結果を導き出すことはしない。思考を切り替える。

母は、女子で落胆しながらも、安堵していたのだ。父の愛が終わらないことを確認したから。たとえ子を産む道具のようだと邪揄されたとしても、彼女が男子を産むまでは彼女は彼の妻で居ることができた。

父は・・・静流は、自分の母を追い出した父、つまり私達の祖父を許さなかった。最後まで。彼が迎えた後妻が産んだのは、女子ばかりで、彼は様々な経緯を経て若くして当主の座に上りつめた。

その頃の話は、父は一切しない。でも、律なら何か聞いているのだろう。

静流・マクドゥガルが男子のみに拘る理由もそこにあるのだろうと思われた。

男子を産んだら終わりだと思っていたのかもしれない。

愛が、終わってしまうと思ったのかもしれない。

父の愛だけに縋るしかなかった母は、実家にも相談しなかった。

ただひとりで耐え抜き、そして崩れていった。生まれてから両親と過ごすより、夫と居た時間が長かった。どれほど、若くても。

律が言うと、不思議と傷つかなかった。

私が生まれて、母はがっかりしたのだ。ああ、そうだろうな、と思った。生まれた時から身体が弱くて、母の手元に居たことは、殆どなかった。

「けれども、母になってわかった。・・・女の子で、良かったと思ったと思う」

おや、と思った。姉はそのように推測で物を述べることはしない。

■04

姉は、チェストの上に置いた籠の中身を取り出していった。

優雅な動作は彼女が貴婦人そのものであることを示している。

彼女の申告どおり、カード類が多かったけれども、遠目から見ても皆、そこには一様に「瑛葉へ」と書かれていた。

「全てを抱える者という意味の名前を母様が思い浮かんだ時、私はあなたを抱いていた。母にはもう、抱き寄せる力はなかったから」

この家の風習はたくさんある。生まれたばかりの子どもを、同腹のこどもが抱くことによって健康と長寿を祈念するのだ。当然に、姉も私の誕生に立ち会ったのだろう。

そして、私が肚の中で揺蕩っていたときに・・・この子も女子なのだろうという予感めいた確信が彼女の中にあったと思われる。

ひとり産み落とす度にひとつずつ壊れていく母を眺めながら、彼女はどう思っていたのだろうか。

口数の少ない姉が、ぽつりぽつりと語った。

「瑛菜があまりにも小さくて、心配していた。早産だった。その前に、母は死産を経験していたから神経質になっていたのかもしれない」

そのことは、私も知っていた。

死産したのは男の子であったようだ。

当主とその妻の嘆きは大きかったと言われている。

・・・私のすぐ上の姉と私との差に少し開きがあるのは、そのためだ。

「もう良い、と言う父様に対して、母様が反論した。・・・あの夫婦で初めて諍いがあった」

思い出話は一切しない姉であるのに、彼女は私に昔を語って聞かせる。

これ以上産んだら、母が壊れると思ったのだろう。けれども、母は首を縦に振らなかった。肯定すれば、マクドゥガル家の血筋が絶えてしまう。

マクドゥガル家の親族会の会議録を、暇に任せて読むことがあった。

かなり昔に遡った。

そんな物好きは、私くらいだろう。

でもそこには、後継を巡って様々な議論が交わされた記録が残っていた。

長子継承として、葎に家を継がせたいと当主が主張したのにそれは認められなかった。遠戚の男子を養子にするという話もあったようだけれども、それも却下されている。

何事にも周到な父が、その時だけは立案した件を却下されていた。

「この家を見守るには女が必要で、この家を導くするには男が必要だということなのよね」

私の言葉に、葎は微笑む。苦笑いを含んでいた。決して、安らかな微笑みではない。

「性差は必要とされていない。ただ、その特徴が・・・マクドゥガル家のこれからを変えていくから」

私は、姉様の言葉にただ聞き入るだけであった。本当に・・・この時代に生まれなければ、彼女はもっと自由に生きられたのだろうと思う。

確かに、父が惜しむのは理解できた。

どうしてこの人がマクドゥガル家を継ぐのはいけないのだろうか。

どうしてこれほどまでにマクドゥガル家の男児の血を色濃く残している人が、君臨してはいけないのだろうか。

瑛菜の文字の中には、終わりという意味がある。

これで終わりという意味と、これから始まるという意味がある。

すべてを内包する者という名前であるのに、始まりと終わりを同時に孕む私の名前に込められた想いを想像すると、それだけで日が暮れていきそうになる。

もっと、母と話をしたかった。父は何も言わないだろう。

彼女は筐を置くと・・・静かに窓辺に移動した。

姉がこうして外の風景を眺めるといのはとても珍しいことであった。

無駄に時間を過ごすことはなかったから。だから、それが・・・景色を眺めることが無駄ではないのだと思っているのだろうと知った。姉にも、そんな時間が存在することが驚きであった。

これほど長い時間、一緒に居るといのに。私は、姉の何も知らないままで終わってしまいそうだった。

「産んだら終わりではない。そこから新しく始まるものがある」

「それが苦悩であっても？」

「苦悩と歓喜は表裏だから」

姉の言葉に何も言い返せなかった。母となった姉の言葉には重みがあった。

・・・他の姉や妹達が連れてくるこども達も愛おしいと思う。自分の姪にあたるのだから。けれども、騒がしい声は私の身体に障ると言ってここには近寄らせない。皆が遠のいていく場所がここであった。少女時代を一緒に過ごした者たちは、私を忘れて行く。マクドゥガル家のことを忘れられないでいるのに。それと正反対に、私とは疎遠になっていく。姉妹とはそういうものなのだろうか。世間一般の者たちや本の中に出てくる情愛とは違っていることはわかっている。でも、決して伝染する病ではないのに。それでも母になった彼女達は、私の脆弱さを疎んじる。

これが男子にしか伝わらない業病であることを知っているからだ。

私は・・・弱い肉体でもって、マクドゥガル家の者であることを証明している何とも奇妙な存在でしかなかった。でも、私はそれで良いと思っていた。

母という存在は、些細な心配でも取り除きたがるものであるのだと私なりに解釈していた。愛する者ができると、皆、そうなるのは当然だ。

全てのことから本能で子を守ろうとする。

それがたとえ自分の血肉をわけた姉妹であったとしても。

「倅登が戻っても、ここに誰も残っていなかったら退屈するでしょう」

私は姉の言葉に苦笑いをした。この人は飾ることを知らない。

彼が戻って来るのはまだ先のことだと言いたいらしい。

弟は、まだ嫁いでいない娘達が全員居なくなる頃に彼は戻ってくる。

その時期を待っているのか、それとも・・・それほど長い時間をかけなければ、彼は戻ってこれないのか。

どちらにしても、その時に私が居ないだろう。葎の言っているのは、そういうことなのだ。

「私も、何かを残せるのかしら」

私がそう言うと、姉は筐の中から最後に取り出したものを持って、近寄って来た。

そして無言でそれを私の前に差し出した。

最後に取り出すところが、姉らしかった。それは、希望という名前の贈り物であったが、彼女はそういう会話を楽しむことすらしなかった。

姉が私に苦言を呈するためにやって来たが、それ以外にも用事がなければこれほど長居することもなかった。いつも必要最小限の会話しかしていかない。

それなのに、彼女はとても律儀で、いつも決まった時間にやって来る。

定期的なものというのは、私は苦手だった。

それに慣れてしまうと、待ってしまうからだ。

それが当然だと思ってしまうからだ。

けれども、葎は違っていた。

用事があって訪問できないときは予め知らせてくれた。

姉は私を一度も失望させなかった。

それは、一冊のノートだった。

手作りのようで、綺麗に滕ってあったが姉の手の平に乗せるにはとても可愛らしい色使いであった。若い娘が使用するような・・・でも、大急ぎでこしらえたという感じがした。明るけれども落ち着いた風合いであった。象牙色の表紙に、朱く染められた綴り紐と葉、そして中身を捲ってみると白紙であった。

「瑛菜に」

「誰から？」

私はそれを一度閉じ、表紙を軽く手の平でなぞりながら言った。私の書き散らかした雑記帳を見つめながら、姉は素っ気なく言う。

「あの人から」

・・・姉が「あの人」というのはひとりだけである。彼女の夫のことを指し示す。

幸せそうに、もしくは幸せをひけらかすようにして配偶者の名前を呼ぶことはない。

いつも私のことを気に懸けてくれる、優しい義兄。私はありがとう、と言った。

「伝えておきます」

葎の声は少し強ばっていた。・・・姉でも緊張することがあるのだろうか、と思ったが、きっとそれは照れ隠しなのだろうと思われた。

熱烈な愛の表現は、葎には似合わない。けれども、誰も信用しないと有名な姉が、夫のことを語る時だけは声の調子が少しだけ変わるとは何ともおもしろい話であった。

私はくすくすと笑う。

「素敵な贈り物ね。これ、手作りでしょう。あの方が一生懸命作られたの？・・・でも中身は大

変に立派な紙質ね」

「それで書けば、長期保存ができるから」

私はそれで察した。それで、私に何かを書き残せと言うのだ。

一体、何を・・・

考えを整理しようとして、もう一度、渡された厚みのある冊子を見つめる。即席で整えられた冊子であるが、裏表紙に小さく文字が書いてあった。

「葎へ」と書いてある。

私はそれを姉に突き返そうとした。

「これは姉様に贈られた冊子でしょう」

「あの人からだ、と言った」

姉は受け取ろうとしなかった。私をじっと見つめる視線は鋭い。

彼女の視線はいつも怖いと言われているが、私はとても綺麗な切れ長の瞳が好きだった。

私が決して持ち合わせる事のない、この土地で生きていくのに必要とされる強い精神を感じさせてくれるから。

姉に捧げるべき冊子。これで、彼女は彼のために何かを書き綴っているのだろう。けれども、私にそれを一冊、取り分けてくれた。彼らの秘密を少し分けてくれた。

だから、私はそれを素直に受け取ることにした。

何を書くべきなのか、もう、決めていた。それは決して葎の思惑から外れていることはないだろう。

何となく、わかるのだ。

私と彼女は姉妹で、同じ土地で育ち、私は彼女によって育てられたのだから。

瑛菜、という名前がますます好きになった。

私の前に生まれてくるべき命も澱も一緒に、私は呑み込んでしまった者なのだろうと思われた。

でも、足掻くことに夢中になって、大事なものを見落としたと感じながら逝きたくなかった。

この冊子が全部埋まるまでは、死んではいけないのだという葎の声にならない励ましの声が、私の胸に響いた。

私はその冊子を胸に抱いた。

「姉様、ありがとう」

「床に転がしておくようなら、取り上げるからそのつもりで」

彼女はそれだけ言うと、それでは、と言って部屋を出て行ってしまった。

まったく愛想のない姉だ、と思った。

彼女が出て行くと、私は両肩で大きく溜息を味わう。そう。溜息すら私の中の楽しき自由であったのだ。

ひとたび外に出ればマクドゥガル家の子女として振る舞わなければいけない皆と違い、私はこの

家の中で自由に・・・涙を流し笑い、憤り、そして空想に耽って眠る。

姉は、本当はもっと別の話もあったのだろう。

私の命がそれほど長いものではないと承知しながらも、婚約式だけでも済ませて縁戚関係を結びたいと思っている家があることも知っていた。

私のことを妻と呼ぶ前に、私はその人のことをよく知る前にここから居なくなってしまうだろう。

そうしたいとすら思っていた。

この土地を離れて、場所を移し替えて生きていても、ここで暮らす以上にはきっと楽しくないだろうと思っていたから。

私はその時初めて、もう少し生きていたいな、と思った。

倬登・マクドゥガルが戻って来たのなら。彼は、どんな風にこの景色を見つめて感想を漏らすのだろうか。

母の墓の前で、どんな話をするのだろうか。彼は、どんな風に成長しているのだろうか。

でも。

見届ける役割は、姉の役割だ。私ではない。私にできることをするべきで、私にできないことを羨んでいる時間は私には残されていない。

姉が部屋を出て行って、私は暫く枕に背を凭せて目を瞑っていた。

長い会話ではなかったが、酷く疲れていた。前日の夜更かしも身体に堪えたが、今の会話を忘れないように、自分の中で幾度か繰り返した。

私は瑛菜・マクドゥガルである。父は静流・マクドゥガル。姉は律・マクドゥガル。そして、私とほとんど会話しなかった愛らしい弟の名前は倬登と言う。

それが、私を説明する僅かな描写。病弱で気難しくて・・・他の姉妹達ともうまく付き合うことのできない、つまらない人間だけれども。ひとつだけ、誇りに思うことがあった。

私は、マクドゥガル家が好きなのだ。この土地も。屋敷も。そして、母を愛しすぎた父が私を顧みなくても、弟と再会することもないままに命が終わってしまっても、この家の人達が好きなのだ。

■05

「それは？」

「瑛菜・レポート」

倅登が小脇に抱えている冊子に気がついて、登は彼を見上げた。エマ、いう名前は彼に紹介された多くの親族の中に見当たらない名前であった。

不思議そうな顔をして、彼の貌を見ながら彼の隣を歩く登に、ふと、視線を向けて彼は微笑んだ。

彼は恵風の君と呼ばれるほど温和な人であった。いつも微笑んでいる。

「登は知らなくて当然だよ。僕の姉で・・・僕が戻る前に逝去してしまったから、僕も直接話をした記憶はない」

登はそれで頷いた。幼い少女は聡くて、倅登の少ない言葉で次の行動を予測できる。

これから杜の先にある墓地に向かって歩いて行く途中のことであった。

今日は風が少し出ていて、倅登の散歩には不向きであった。

けれども、彼は登に外に出ないかと言って彼の方から外に出たがった。

きっと、明日か明後日にはまた熱を出すか激しく咳き込むのだろう。

「身体が弱い人で、ほとんどマクドゥガル家の敷地を出たことがなかったらしい。でも、随分と書き物を残してくれた。僕が今こうして散歩できるのも、瑛茉のおかげだよ」

登は軽く首を傾げる。会ったことのない人のおかげで、倅登が散歩できるという因果関係がわからなかった。書き物を残したというのであれば、今、倅登が持っているものは彼女の遺したものだろう。そうすると、遺品ということになるが、持ち出して良いような品ではないのという疑問が残る。

そんな彼女の考えを読み取ったかのように、倅登は風に柔らかな髪を靡かせながら、説明した。女性的ではあるが端正な貌が綻ぶ。

「・・・瑛茉は僕と同じ虚弱な体質で、いろいろと薬を調合して飲み続けていた。その中でも効能が高いものの処方方を僕も受けていたから、これでもかなり体質改善された方なのだよ」

「それなら、その瑛茉・レポートは処方が書かれたものなの？」

「いや」

倅登は軽く首を振った。彼は邸内では和装で通したが外出するときは三つ揃えの仕立てを着ている。今日の服装は少し落ち着いた色合いで、彼がこれから墓地に向かうのだと登はこの点からも察知した。

自分の服装が彼にそぐわない幼いものであることを恥じて、下を向く。

散歩と聞いて、場所を最初に確認すれば良かった、と思った。

「彼女はね、彼女しか書けないことを、書き綴ったんだ」

倅登はそう言って、風に目を細める。懐かしそうに、少し哀しそうに。

「どんな天候の翌日に失調するのか、薬の副作用で自分の身体がどうなっていくのか・・・どんな食事が身体に合って、食べ合わせが悪いものは何なのか・・・治療を受けなければどの程度衰

弱するのか、それはもう事細かに書き記した。本人でなければ決して書けない内容ばかりだ。それが、これ。このノート。僕はこれを瑛茉・レポートとして永年保存するように申請した。他のレポートとは少し違う内容だけれども、大変に注目すべき描写が幾つか書かれている」
もう会うことのない姉の遺した記録が、彼を生かしている。

登は彼の身体に寄り添うように挟まっている冊子に眼をやった。

風で、冊子の端が少しひらひらとはためいていた。表紙はしっかりしたものであるが、綴じ紐も葉もだいぶ古くなっており、変色してしまっていたが最初は鮮やかな光沢のある色であったのだろう。

模様や絵柄がついているものではなかったが、それでも若い人が書き綴ったのだとわかるような装丁であった。

「そんな大切なものを持ち出して良いの？」

「今日は特別。でもこっそり持ってきたので、内緒にしておいてくれ」

彼は空いた方の手を持ち上げて自分の手の平に人差し指をあてた。

彼は大変に悪戯好きで、時々こんな表情をして登を困惑させる。

「特別・・・」

「そう。今日はね、瑛茉の命日だから」

登はそれに頷いた。今日は朝から黒の布片がマクドゥガル家の中央の間にひっそりと掲げられていたからだ。これは簡易的な喪を表す。誰かの回忌であるのだろうということはわかっていたがそれが誰のものなのかということまでは知らなかった。

「・・・死の直前まで、綴ったらしい。最後まで書き終わると、それで満足したかのように彼女は逝ったようだね」

そして彼はそこで言葉を句切ると、空を見上げてぼつりと小さく言った。

「何かに満足すると安らかに逝けるものなのかな」

「倅登」

登は慌てて腕を伸ばし、彼の服の裾を掴んだ。上質の上着を握りしめても、彼がそれを振り払って消えてしまいそうな錯覚が登の顔を曇らせる。

そこで、彼は上を見て空を懐かしそうに見ることをやめて、彼女の顔を見て笑う。

「僕はまだ満足していないから」

だから逝かないのか。

だから、逝けないのか。

登にはそれを尋ねることができなかった。

彼が生命に固執している割には、生きていることそのものを謳歌しているわけではないのだと知っていたから。

どんなに悪戯を繰り返しても、それは彼を心から喜ばせているものではなく、一時の退屈や堪えきれなくなりそうな狂気や孤独への抵抗なのだとわかっているから。

「・・・僕にはたくさんの姉がいるけれども、皆、嫁いでしまってそれぞれに家庭がある。幸福かどうかは問題ではなく、新しい家に住まっていることによって新しく始まるのだと思うよ」その言葉が妙に重かったので、登は彼の貌を不安そうに見た。彼は、ここではないどこかに帰りたいと思っている。でも、ここにしか帰ってこられないとわかっている。

「だから未婚のまま亡くなった瑛茉は、母の墓の近くに葬られた」登は少し上を向いて、墓の配置を思い出そうとしていた。代々の当主とその夫人が並ぶが、比較的新しい墓標があったように記憶している。

「墓に行っても、本人には伝わらないかもしれないけれども。彼女は殆ど外の土地に出なかった。

それでも母方の祖父母の家にも静養に出ていたくらいで・・・あちらに引き取られていればもう少し違った人生であったのかもしれないね」

彼の言葉には含みがあったが、登には彼の真意はわからなかった。

でも、どこか寂しそうで・・・登はますます、彼の事が心配になってしまう。

年上で大人で、この家に君臨する当主である彼は、時々登より若い人に見えてしまう。

不安定で脆い。けれども、彼は決して自分の弱さをさらけ出して同情を得たいなどとは思わないのだ。

そんな登の様子を見て、倬登は静かに言う。

「人に忘れられていくというのは幸せなのだろうか不幸なのだろうか。そしてその幸不幸というのは誰にとってのものなのだろうか。僕はいつも考えてしまうよ、登。でもね・・・でも、こうして彼女が自分の身を捧げるようにして書き記したレポートがこれから役に立つ。僕だけではなく、後世・・・そうだな。天才的な頭脳を持つ医療に心得のある者がみたら、すぐさま解明してくれるのではないのだろうかとさえ思う。そういう想像はとても楽しくて、自分の人生よりずっと前から始まって、ずっと向こう側にまで続いている謎というものがとても興味深いと思うよ」

彼はいつになく饒舌であった。瑛茉・レポートを大事に抱え直していた。

「瑛茉という名前は始まりと終わり・・・すべてを含む者という意味だ。とても意味が深いね。長子でも末子でもないのに、始まりと終わりを経験した人が、文字を遺した。この家の女の人はこどもを残すことがこの家への最大の貢献だと思っているけれども、僕はこうやって別の形で残すものもあって良いと思ったよ」

「倬登は、その方に会って見たかったの？」

「そうだね。実は、その通りだ」

倬登は幼い口調で頷いた。

「ここを離れた時にはほとんど記憶はないけれども、姉の具合が思わしくないという話は聞き及んでいたもので、幾度か手紙を送った時、とても丁寧に返事がきて、大変に感心したことを覚えているよ」

そして倬登はもう一度空を見た。眩しそうにしながらも、彼は空に向かって言う。

「マクドゥガル家の男子は空を駆ける聖獣に喩えられるけれども、瑛茉も・・・姉上も、空に還ったのかな。レポートを読むと、この家のことが大変気に入っていたみたいだ。他の姉達とは違って、最後までここに居ると言った変わり者だったらしい」

そこまで言うと、彼はくすりと嗤った。

「あの葎・マクドゥガルを手こずらせたくらいだから、さぞかし・・・絲と気が合うだろうね」

「始まりと終わりを一緒に持っている人・・・」

「そう。誰でも始まって終わる。でも、瑛茉はそれを誰にでも訪れることにしなかった。そこが彼女の素晴らしいところであった」

彼は微笑む。

おそらく、ここに書いてある以上に苦しくて辛い闘病生活であっただろうと思われた。けれどもどれも客観的に書かれており自分への労りも慰めもまったく書き記されていなかった。・・・マクドゥガル家の女性らしい書き方であった。

倬登への返信も、自分の容態については触れなかった。今度はこういう煎じ薬を試してみてもどうか、蒸気を喉にあてて湿らせるのはどうかと言ったことばかりを書いていた。

その一方で、彼女はこれを遺した。書くことになった経緯は冒頭で書かれていたが、それはその冊子が本来の持ち主のところに戻らないで終わってしまうことを危惧したからで、それ以上の理由はなかったのだろう。けれども、瑛茉という人物の断片がそこにはあった。一瞬の、束の間の時間であったかもしれないが、彼女の遺した世界の中で、彼女が何を思ったのか・・・理解した。

「始まって終わる。物事の理だ。でも、終わって始まるものもあるし、終わらないまま始まるものもある。瑛茉という名前の人が居たことを・・・登にも知っておいて欲しい」

「はい」

彼女は素直に頷いた。まだこちらに来てからそれほど年月が経過しているわけではない。

だから、まだ固さが抜けていないが彼女は倬登が何を言いたいのか理解しているようだ。少なくとも理解できていなくても、それを理解しようと努力している。

それが、彼の中にある冷たくて昏くて底のない、瑛茉の言う「溝」を埋めていく。

「倬登と瑛茉様は・・・きっと、とても仲好しかったのね」

倬登はおや、と思った。仲良くなれたのだろうねと彼女が言わなかったからだ。

彼が何も言わなかったので、登は自分の言葉が足りていないことに気がつき、倬登に慌てて補足した。

「たとえ話さなくても・・・倬登はその方をよく知っているようだったし、いつか倬登がそれを読んでくれると思ったから書き残されたのでしょうし。・・・どれほど離れていても、そんな風に思い合えるものなのね」

その言葉を聞いて、彼は微笑んだ。登という少女はもう少し成長したら・・・どれほど素晴らしい貴婦人になるのだろうか。

哀しい環境の中で育ち、それを知った後に振れた精神を持ってもおかしくないのに。彼女の魂は健やかで、そしていつも彼に新しい風をもたらす。それが彼の命を縮めるような風であったとしても、彼はそれが嬉しかった。

「倬登が会いに来てくれたとわかって、喜ぶわ、きっと」

登はそう言って、倬登の隣に並んだ。不安そうな顔は消えていた。

久々の外出だ。彼女は倬登が自分を連れて散歩に出ることが何より嬉しいらしい。

「どうかな。・・・賭けても良いよ。先客が居るはずだ。もう戻ってくる頃かな。ひょっとするとこの路の途中で、すれ違うかもしれない」

「先客・・・」

「そう」

彼はくすくす笑う。

「いつも無愛想な顔をした人は、こっそり瑛茉の墓を綺麗に整えていることを僕は知っているよ」

彼はそう言うと、遠い向こうに眼を遣った。そして、ああ、正解だ、と言った。

路の遠くで人影が見える。ひとりだ。そして、相手もこちらに気がついたようであった。

無口で無表情で、決して誰も信用しない人で、倬登の姉にあたる人物は瑛茉の目から見ればとても苦悩を持った愛情深い人に描かれる。

きっと目礼だけして何をしてきたのかさえ言わないで、邸に戻ってしまうのだろう。けれども、確信できた。瑛茉の墓は母の墓と並んでおり、それらは綺麗に整えられているのだろう。午後か夕方には父が墓参りをすると聞いていたからだ。

しかし、理由はそれだけであろうか。人に指示すれば良いだけの話なのに、彼女はひとりで何をしながら・・・墓で時間を過ごすのだろうか。

ひょっとしたら、瑛茉と話をするのが楽しみだったのかもしれない。

あの姉が、定期的に病人を見舞うなどとはあり得ないからだ。病状を観察する目的もあったのかもしれないが、瑛茉はそれでも・・・姉を待った。そして葎は彼女のために、彼女に贈り物をした。

酷く遣り難い相手であった。彼の笑顔を一瞬で塗りつぶしてしまうような才覚の持ち主は、遠くから彼と登の姿を見ると、立ち止まった。相手も、倬登がこの時間にそろそろ現れるのだろうと予測していたのだろう。

まったく、遣り辛いな・・・彼はもう一度呟いた。

「倬登？」

「ほら、葎が向こうで待っている。・・・まったく律儀な人だな。より高位の者が通り過ぎるま

で自分は動かないつもりだ。ああいうところが嫌味なのだと誰か教えてあげれば良いのに」

「倅登」

登が彼に向かって窘めるように名前を呼ぶ。登は聡明であるが心優しい。

このような駆け引きには向かない人であった。

倅登は肩を竦める。

「登も、教えたとおりに膝を折って礼をしてあげてくれ。あの人はそういうところに煩いからね。・・・でも、墓地から戻ったら、彼女のために礼を言ってあげてくれ。それから、瑛茉のことを聞いてあげてくれると・・・僕はとても嬉しい」

それを聞くと、ぱっと彼女の顔が明るくなった。

葎のことを苦手になっているようであるが、それでも何とか意思疎通を図りたいと思っている登は倅登の提案を受け入れた。

葎も、葎のことを教えてくれと言うのであれば何も言わないだろうが、瑛茉のことを教えてくれと登が言えば・・・未来のマクドゥガル夫人がマクドゥガル家の家系関係を知りたいと興味を示したと思うだろうし、拒否することはないだろう。

始まりで終わり。

終わりは始まり。

倅登・マクドゥガルは。

そんな名前の方が、マクドゥガル家にもたらしたものは、ひとつではないのだな、と思った。

登の背中に手をあてた。

葎を発見して、登の顔と身体が緊張しているのがわかるが、彼は優しく彼女の背を軽く叩いた。

登は葎に向かって言うべき挨拶の言葉を口の中で復唱しながら歩くので精一杯であった。

倅登はそんな彼女の姿を見て・・・そして顔を綻ばせた。

そして反対側の小脇に抱えた瑛茉・レポートを今一度見つめる。

これはいつか、役に立つ。

倅登に対してではない。

もっと先の・・・

そう・・・

マクドゥガル家の紋を変えようと思うような豪胆な人間が当主になるのだとしたら。

その時はきっと・・・

(FIN)

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

N-side

彼女の名前は、ナコ。

自分の名前を説明するときに「菜っ葉の「菜」に「子」です」と言っていました。

「菜の花の『菜』に『子』でしょ」と尋ねると、彼女はちょっと頬を赤らめて「それでは、菜の花に失礼でしょ。あんなに綺麗なのに」と言いました。

名字が同じだったこともあり、名前順に配列された席の近くに配席されたのが、わたし達の始まる、きっかけでした。

(マリナ・イケダによる弔辞から抜粋)

■1通目

拝啓 マリナ様

この間は、素敵なグリーティングカードをありがとう。受け取りました。こちらは、病院内なので、プリンタがないこともあって、WEBによるグリーティングMailか、こうしてはがきに手書きでしたため投函するしか、近況をお伝え出来ません。

お許してください。

でも、インターネットの普及というのは、素晴らしいですね。

こうして地方の病院にいる私でも、あちこち飛び回るあなたに連絡をすることができます。

願わくば、あなたが携帯電話を持ち歩くようになって、出先の様々な風景を、私も送信して、映像を共有できるようになることを祈りつつ。

機械にとんと疎いあなたには、携帯電話を使いこなすことも難しいかもしれませんが。

(注意：わかっていると思うけど、批判しているのではないのよ。)

最近、マリナと過ごした日々を思い出すことが多くなりました。

女子の中学校時代というのは、一生の思い出で、共有する人が少ないほど、まるで「秘めたる恋」であるかのように、ずっとずっと後になっても思い出すのですね。

マリナ、返事をありがとう。病院での生活も慣れました。

遠い場所にあるので、お見舞いは不要です。

お気遣い、ありがとう。

こうして頻繁に連絡をもらうことが何よりのお見舞いです。

この間ね、教育実習で担当した生徒達から、千羽鶴とたくさんの手紙をもらいました。教育実習では、わたし達が過ごしたあの学舎で、懐かしくも新鮮な日々を送ったことは、前にも繰り返して繰り返して、お話したからわかっていると思うけど。

教職に就こうと思った時、教育実習は自分の母校に赴任することになるであろうという話をされたとき。

真っ先に、あの、マリナと一緒に過ごした短くも楽しい日々を思い出しました。

今時の子供達は、ゲームや塾や日々の生活に疲れ気味なので、ああやって、笑って泣いて、毎日を「どうやって過ごしたかわからないくらいにあっという間に過ぎる」という体験が少ないように、思います。

これについては、是非、あなたの意見をいただきたいところだわ。

ここまで書いて、少し疲れたので、休みます。

良い夢を見られると良いな。

夢、と言えば。

この間、あなたのマンガを拝見しました。
相変わらず・・・骨太のマンガね（笑）
言われたとおり、ちゃんと、読者アンケートは出しておきました。

夢をかなえたあなたが少し、羨ましい。

■Nから手紙02

拝啓 親愛なるマリナへ

この間、ユリナお姉さんが来てくれました。
有名なニュースキャスターになっているのに、依然と同じきさくな方でした。
近くまで取材で来ていたので、ということだったけれど。

後日、その取材の報道特集を見ると、この病院からずいぶん遠く離れた場所で撮影していたことがわかりました。
マリナからの口添えもあったのかな。
ありがとう。

ユリナさんは私のあこがれでした。
マリナと似ても似つかない方ですが、性格や気質は、そっくりね。

母校の講演会に、是非にという私のムリな御願いを聞き届けてくれて、ありがとう。
今になって思えば、教育実習生が、そんなコネ使って、有名人を呼び寄せることが
なんて無謀だったんだろうかと反省しきりです。

でも、そのときに担当した子供達から、自分たちの将来について、真剣に考えるようになりました、という話を聞くと、やっぱり、御願いで良かったのかな、と思っています。

ああ、マリナ。
ほんの短い時間だったけれど、恋の話もたくさんしたわよね。
あなたは、転校が多くて、そのときに好きになった男の子がいたようだけれど、
その後、どうなったのかしら。

聞くのを忘れていたわ。

「イケダコンビはダメだなあ、ちびっこで」

名字が一緒というだけでなく、身長も同じくらい小さかったわたし達は、良く「双子のようだ」と言われていたっけ。
病弱で、体が小さかった私を、ずいぶん助けてくれたのは、後にも先にも、マリナ、あなただけよ。

ああ、話がそれてしまった。

あなたの、冒険譚とでもいうような、転校先での数々の武勇伝を聞くのが好きだったわ。
今では世界的なバイオリニストの響谷薫も、あなたの友人なのよね？

私は、あなたの話を聞くたびに、自分も同じように、恋をしたり、わくわく冒険したり、
そして、落ち込んだり泣いたりすることを共有できるような気がします。

・・・
最近、寝ている時間が長くなってきたので、この辺で失礼するわね。

本当は、この手紙を書き上げるのに、10日ほど経過してしまいました。
同じコトを繰り返したり、支離滅裂な部分があったら、ご容赦ください。

マリナ。

手紙を書くことが難しくなってきたので、母親に代筆してもらっています。

いよいよ、お別れの時が近いのかもしれませんが。
私はまだ、どんな姿であれ、生きたいのだけれど。

ああ、お母さんが泣くので、この話はこれで終わり。

.....

また、間が空いてしまいました。
前回の手紙から、どれくらい時間が経過したのか、判別がつかなくなってきました。

寝ている時間が長くなっているからです。

マリナ。

最近になって思い出すのは、あなたがよく口にしていた言葉ばかりです。

中学校の、毎日を通すのが精一杯だったあの頃。
どうしてもっと、あなたの話を真摯に受け止めなかったのか、自分が恨めしいです。

菜の花畑を歩いていたとき。
「ナコの「菜」は菜の花のことですよ。良い季節の花だよ。こんなに黄色くて、しかも食べられる！愛でて食べられて、素敵な花だよ」

「ナコ、自分だけが我慢すれば良いというのは、間違いだよ。そんな我慢、されても相手は嬉しくない。だから、いやなことはいや、したいと思ったことは提案する、それくらいでないと、ダメだよ」

「反省はするけど、後悔はしない。人様に迷惑はかけない。これ、我が家の家訓なのよ」

ああ、思い出すだけでも、限りがないので、この辺にしておくけれど。

マリナからの受け売りで、今までの自分があるような気がします。
気が弱かったけど、健康で、こんなに長く病院にいることなんてこれまで、なかったのに。

マリナ。どれくらい時間が経過したのかしら。

とにかく、あの時期が、私の最高の瞬間でした。
ほんの短い期間しか在籍せずにすぐ転校してしまったあなたなのに、
こうして今になっても頼りを寄越してくれることを感謝します。

うつらうつらとする時間がまた、増えてきました。

今、私の言いたいのは、私に関わってくれたすべての人に「ありがとう」と伝えたいこと。
他の人より、きっと少ないであろう関係してくれたみんなに、ありがとうと伝えたい。

マリナ。

直接、逢って、ありがとうと言いたかったけれど。
私には、時間がないみたい。
こればかりは、恨んだこともあったけど、どうにもならないから。

そう言うと、あなたは何をかいてもここに来てしまうから。

この手紙は、しかるべきタイミングで投函してもらおうことにします。

この間言っていた、つらい恋はどうなりましたか。
愛する人に、本当に愛する人に、好きだとちゃんと言うんだよ。

やらない後悔より、やってしまった後悔、でしょ？

もう、耳から離れないよ、その言葉。

ふふふ。

・・・もう、休みます。

どうか、あなたの後悔しない人生を。

マリナ。
大好きだよ。

ありがとう。
ありがとう。

N

(FIN)

このお話を、20代で亡くなってしまった、同郷の友人に捧げます。

そして、この物語を切ないけれど、マリナとシャルルの恋物語の「裏」として
ご覧になってくださった方々に。

秘するが花 03 に出てきた、廃社のお話です。

▼以下 本編の抜粋です。

「ここは、地霊信仰と神道が融合しているところなんだ。」

シャルルは説明した。

「その昔、人間の男に懸想した女神が、思いあまって、男の妻を殺めた。殺人は大罪で、神籍を剥奪された女神が人間に堕ちて、これで男と添い遂げることができると思ったところ、大津波が発生した。海に出ていた男を救うために、自らの命を海神に捧げてこれを鎮め、この島を救ったということで、再び神籍に戻ったということだ。」

(秘するが花 03 恋泡思恋編)

こちらをご覧になってからの方が、なんとなくお話が続くかもしれません。

■01 朧 (おぼろ)

朧様が兄に懸想しているな

なんとなく気がついたのは、兄の妻のために特別に煎じ薬を調合したという話を聞いてからだ。

それは、義姉のためではなく、兄さんが喜ぶ姿がみたくてなのではないのかしらと思ったけれど。

神様の籍におわす御方に、そのような妄想を抱くことは畏れ多いことであった。

朧様は美しい。

産土神でもあられる朧様は、この森も海も山も民も、御護りくださっている。

海神より近しく、海神様の声をわたし達に伝え、そしてわたし達を護ってくれているオミナガミ（注釈：女の神のこと）様だ。

お前の兄は、本当に妻思いだね

朧様が謡うようにそう、言ったとき、その瞳がちょっとだけ悲しそうだったのを見逃さなかった。

巫女として小さいときからもう何年もお側に仕えていれば、そのくらいのことは察しがつく。

恋に堕ちるとはよく言ったものだ。

朧様は、恋に堕ちてしまったのだ。

なぜ、妻を持つ兄を目に留めたのかはわからなかった。

理由はきっとあったに違いない。

それは御方にしかわからないのかもしれない。

でも、それがひいては神籍を汚す結果になるであろうこともよくわかっていたはずだったのに。

そして、神が人間に恋をするということがどういう結果になるのかを、

わたし達は身をもって知ることになる。

■02甲夜 夜の区分 19時から21時

名は現実を表すと言うけれど、朧様は本当に月夜のような方だった。

いや、月夜見の神様の末裔でもあり、神籙でもあられる御方だから、当然なのだけれど。

巫女と言えは聞こえはよいが、たかだか下働き風情のわたしが朧様を形容することもできないのだけれど、本当に美しい方だった。

造作というよりはそのままう空気が清らかなのだ。

だから。

凡庸な兄に心奪われる朧様を理解できないと同時に、彼女が苦悩していることにも触れてはいけないのだと理解していた。

ある日。

兄が、お礼に、と言って、白い花の苗を持ってきた。

白い花卉の花は、朧様の御証である。

隴様はこの上なく嬉しそうに微笑んで、その苗を庭に植えた。

いくらわたしがやります、と言っても、自らの白い手で、一日かけて植えた。
彼女の私室からよく見える場所だった。

「早く咲くと良いわね 楽しみだわ」
と言った。

ああ、愚かな兄。

実直だけが取り柄で、唯ひたすら妻にしか目がいかない、愚かな人間。
ただ、単にお礼がしたかっただけなのでしょうけれども。

土地神様に贈り物をするということはすなわち願事を捧げる行為なのよ。

妹の私でさえ、義姉が余命幾ばくもないことがわかる。

隴様が毎日「作りたてが最も効果的だから」と言って兄さんを毎日来させているのは、
兄さんに毎日逢いたいからなのだ。

その煎じ薬も、苦しみを緩和するだけのもので、命の火を長く延ばすものではないことくらい、
義姉さん本人も、ムラのみんなもわかっているはず。

わかってないのは、兄さん、あなただけなのよ。

その言葉を、わたしは飲み込んではいき出すことはしなかった。

彼女がまとう神の光波が、やがてくすんでいき、その輝きを失いつつあることは、人間のわたしの目にも明らかになってきた。

神々しい輝きがなくなり、匂い立つような女の色香が朧様を包んでいた。

朧様。

わたしに秘め事をして、ムダなのです。
あなたは、秘め事を見定める側の方なのです。

幼いときよりあなた様に仕えて、あなただけを見てきたわたしには、こと、あなた様に関してだけは、誰よりも慧眼であるのですから。

■03乙夜 夜の区分 21時から23時

それは、兄が持ってきた白い花の苗が異常な成長速度で背を伸ばし、花を咲かそうとしていた時期のことだった。

わたしは、見てしまった。

海神様がお祀りされている社の暗がりです。

・・・兄と朧様が、激しく情欲を交わすその姿を。

朧様の白い太腿が暗闇で宙に浮かんでいた。

兄の吐息とも咆哮ともつかないような声が短く聞こえてくる。

それに呼応して、男ではない方の口から、陶然とした声が漏れてくる。

白い腕が、律動を繰り返す肩や背中に回されている。

その情交がお互いの合意の上のことであるということがはっきりと見て取れた。

お互いの昂ぶりを感じながら、やり合うそれではなかった。

貪るように抱合するその光景を、信じられない思いで見た。

朧様。

なぜ？

なぜなの？

それで、満足なの？

それで、想いが成就したと言えるの？

兄は、なぜ義姉を裏切ったのだろうか。

薬の調合の代価だとでも言われたのだろうか。

それとも、彼女の月夜のような美しさに溺れてしまったのだろうか。

それはもう、どうでも良いことだった。

知っても、そこには、戻れないからだ。

わたしは、人知れず泣いた。

命がつきようとしている義姉のために。

何か大いなる力に引っ張られて、引きずり込まれてしまった兄のために。

そして、仄暗い場所に、落ちてしまった朧様のために。

異変に気がついたときにはもう遅かった。

隴様は、もう、海神様の声が、聞こえなくなっていた。

■04丙夜 夜の区分 23時から01時

義姉が重篤な状態だと聞かされたのは、それから間もなくのことだった。

親族は集まるように、と言われて、呼びに来たムラ衆から聞かされて、愕然とした。

夜寝着であったわたしは上に羽織りをかぶっただけで髪も結わずに出立した。

山を降りて麓までの暗がりを行った。

月夜がわたしの足下を照らしてくれたから、松明を持って走らなくても、それほど苦ではなかった。

寝所に待らなければならないが、事情があって麓に行く、と短く伝えると、隴様は「そう」とだけ、
言っただけだった。

いつもどおりの、ふわふわした柔らかな声だった。

もう少し、しっかり彼女を観察していれば、その黒い瞳が灰暗く光っていたことに気がついたかもしれない。

程なくして麓に着いた。

わたしの生家はすでに兄が家督を継いでおり、兄夫婦が母屋に住んでいたが、

そこには見知った親戚筋が集まっていた。

義姉は。

それまで健康的で小麦色になった肌から、生気が漲っていた彼女とはまるっきり別人のようだった。

治らない病だとはわかっていた。

でも、これほど酷い状態で逝ってしまうのか。

わたしは、そのとき、疑ってしまったのだ。

枯れ木のような腕をとり、最後の吐息をはき出そうとする義姉に泣いてすがりつく兄の傍らで。

朧様、あなたは何を、彼女に飲ませたのですか。

■05丁夜 夜の区分 01時から03時

最初に、朧様が神籍から墜ちたということを言い出したのは、ほからなぬ兄だった。

妻の遺骸に、もう一度命を吹き込んで欲しいと念願したところ、断られたという。

私は、隴様は人の生死を司る系列の方ではないから、それは禁忌となって大罪にあたるので、できないはずだと諭した。

しかし、兄は聞かなかった。

境内の白い花が勢い咲く様を見て、生きとし生けるものを調整することができる方こそ、産土神であらせられるはずだ、と主張した。

兄の言動がおかしくなりはじめ、いつまでも義姉の遺骸を土に戻すことをしなかった。

あろうことか、海神様に直接お祈りして生き返らせてもらうので、禁域の海域に隴様と妻の遺骸を連れて行く、と言い出した。

ああ このとき

兄さんはもう、通常の判断ができなくなっていたのだ。

海が穢れるので、土で死んだ人間は
海に帰してはいけない。これは、ムラの掟だ。

海で死んだ者は海へ、土で死んだ者は土へ。

どうして、還る場所をわざわざ違えなければならないのだろう。

少なくとも、一度は肌を合わせた臙様に、そのような罵詈雑言を浴びせ、
拳げ句の果てには黄泉平坂に旅立とうとしている妻の亡骸を、
わざわざ汚すような行いをしようとする兄は、とうてい正気とは思えなかった。

一方で、臙様は。

一人祠に籠もって外に出ようとしなかった。

だから姿が消えてしまったとき、真っ先に遠目の輩（注釈：夜目・遠見ができる視力の良い者）に、

海神様の神域に誰か人影がないか、確認してもらうことにした。

予感的中した。

兄の船には、布をかけられた義姉の遺骸らしき物体と、臙様が兄とともに乗っていた。

臙様。

彼女は、ぼんやりと遠くを見据え、これから起こることに興味がないかのように放心していた。

いえ。

違う。

・・・あれは、海神様と対話しているときに見られる様子だ。

兄に懇願されて、自ら船に乗り込んだのか、無理矢理乗せられたのかは、ここからの距離ではわからなかったけれど。

朧様は、もう、神声はきこえない。
聞こえないはずなんだ。

兄さん。兄さん。
お願いだから、戻ってきて！！

わたしはあらん限りの声で、叫んだ。

■06戌夜 夜の区分 03時から05時

神域を穢してはいけない

それは何代にもわたり、言われ続けた言葉。

兄は、汚れを神の聖域に持ち込んでしまった。

土に還すべきの義姉。
神籙から墜ちた朧様。

海神様は穢れた供物では、願いを聞き入れてはくださらない。

前兆はすぐに現れた。

どん、と地面が大きく沈んだかと思うと、次に、海岸の波が、すーっとなだらかに海に吸い込まれていった。

わたしは青ざめた。

いけない。

はやく。はやく。高いところに移動しなければ！

年寄りや朧様の話には聞いていたけれど、
実際に遭遇するのは初めてだ。

これは神波（注釈：大津波のこと）だ。

ムラも小高い場所にあるので、まだ逃げるには、時間がある。
遠見の輩に短く要件を伝えて、ムラ長の元へ走らせた。

さほど時間は過ぎていなかったように思う。

波は、勢いよく引いていき、そして、次に大きく膨らんだ。

神波の白波がこの小さな島に向かってその牙を降ろそうとするまさにその瞬間。

ひゅっと、白い何かが、船の上からこぼれ落ちた。

強い風に長い髪がなびいている。

．．．． 朧様だ！

そう、思った時はもう遅かった。

あっと声をあげて、腰を浮かせたけれど、ここからは、ただ、海に墜ちていくのを眺めるだけが精一杯だった。

彼女の白い体は、あっという間に波に飲み込まれた。

風が強く、白波が立つこの入り組んだ湾は潮の流れが複雑で速い。
身を投げて助かった者はいない。

おまけに、神波の起こっているまさにその場所で、海に落ちたのだ。

たとえ、朧様でも生きていられないだろう。

それに、朧様はもうすでに、海神様の加護を受けられない身になってしまっていた。

普通の人間と変わらず、これから平穏な時の制限というものを受けなければならない運命であったはずだ。

運命というよりかは、自らまとった業とでも言った方が正しいのか。

波間に朧様の装束がちらっと見えた気がしたが、すぐに見えなくなってしまった。

波は、どんどん高さを増して、こちらに近づいてくる。

兄が乗った船が、大きく傾いた。

そして、島が飲み込まれる前に、その神波の高さに養分として吸い取られていくかのように、船の姿はすぐ見えなくなった。

わたしは。

そのとき、兄の名を呼ぶより、朧様の名前を呼んだ。

血の通った肉親よりも。

かわいそうな、義姉の遺骸を積んだ船よりも。

朧様の沈んでいく海が、ほんの一瞬、光った気がした。

■07月没

朧様の遺体は、打ち上げられることはなかった。

潮流激しい場所で沈んでしまったのですから、無理もないことだ。

船の残骸だけが、流木になって海岸に流れ着いていた。

兄は、気がついたときには、祠の前で咲く、白い花の群生の前にいたそうだ。

全身が海水に濡れていたもので、そこでようやく、自分が海の底に沈みかけたときに、誰かに助けられたのかを悟ったのだ。

愚かな兄。

かわいそうな、兄。

兄が哀れだった。

兄も朧様に魅入られなければ、こんな結果になることもなかった。

彼のその後、一生海に出ることはせず、集落から離れた山にこもり細々と暮らした。

山から下りてくることも滅多になかった。

でも、もっと哀れなのは、朧様なのだ。

ただ、彼女は、戀をしただけなのに。

どうしてもその人と添い遂げたいと思ったのに。

治る見込みのない病の義姉に、渡していた薬は、毒薬でもなんでもない。
ただの整腸剤だった。

でも。

神籬におわす方が、兄との逢瀬を念願したときに、
その大罪の業と引き替えに義姉の命の炎を縮めたかどうかは、わからないけれど。

兄と兄の愛する妻の穏やかな最後の生活を守ってあげたかったのも本当の気持ちだと思う。

その一方で、彼女が黄泉平坂を昇ってしまえば、兄が自分へ向いてくれると思わなかったとしたら、嘘になるかもしれないが。

もう確認しようがないことだった。

満月の夜になると、朧様を必ず思い出す。
朧月夜を見ると、なぜだか涙があふれ出す。

これから、命が枯れるまで、ずっとずっと思い出す。

人と同じように笑い、謡い、悲しみ、憂えた彼女はもう、居ない。

ここに在るのは、心得のある者が彫ったご神体だけ。
ちっとも似ていない。

兄が朧様に贈った、白い花だけは、どういうわけかろくに手入れもしていないのに成長し続け、
毎年白い大輪の花を咲かせ続けた。

朧姫がその命を対価にして、海神の怒りを鎮めたことにより、島の民や獣たちは、一夜にして海
に沈む難を逃れた。

生きとし生けるものを区別することなく救った行為はやがて認められ、これにより、彼女は死後、しばらくしてから神籍に戻された。

以来、朧神社の祖神として祀られるが、いくつか奇妙な伝説を残した。

女が男との恋の成就を願うと叶わないが、満月の夜に白い花を捧げて願うと叶うらしいということのみ、言い伝えられるようになった。

地殻変動により、廃村になるまで、この集落に残っていた言い伝えである。

境内には白い花が植わっており、色がついた花は、どういうわけか、何度植えても咲かなかった。

(FIN)

神様の籍に列せられる過程は省きました。

壮大なスケールのファンタジーになってしまうので(^^ゞ)

このO-sideですが、本当の「秘める恋」の持ち主は、名もなき主人公です。

朧姫。彼女は人間と神様の間、に位置してます。

こういう現人神様みたいな方がいたという地方の伝説は結構ありますよね。

まあ産土神ですから、何でもありということ。

朧姫は海神の声を聞く代弁者でもあります処女神ですので、異性との交流は御法度なのです。

この神社は、
シャルルとマリナが参拝した神社の伝説ですね。

神社の名前は「朧神社」にしました

だから「O」なのですが、その他に陰陽の基本である、表裏一体・輪廻・ゼロを表す象徴の文字として。

▼登場してますねココの話。

秘するが花 03 恋泡思恋編 40

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

●朱月蒼浪 01

空には赤い月が浮かんでいた。

こういう晩に私が漫ろ歩いていることを誰も知らない。

それは、もう何年も私だけの秘密だった。

何年なのだろうか。何十年なのだろうか。

それとも、もっと長い年月だろうか。

数を数えることをやめてしまって、だいぶ経過した。

やめてしまったことも忘れてしまうくらいの長い年月だった。

悠久とも言えるような時間を過ごす。

周囲の者達の命が廻る度に、私はひとり取り残される。

私にも赤い血潮が流れて居るのだ、と感じる瞬間がある。

それはとても僅かな機会であったが。

私にも、赤い血潮が流れて居るのだと思い出す瞬間がある。

それはごく稀であって、その前がいつだったのか、思い返すこともできないほど昔であったことしか覚えていないけれども。

人より長く生きていると、人より多くのことを記憶することになる。

私の中に流れている、太古からの智慧や記録は、私よりずっと前から繰り返す波の音を、いくつ数えたらこの思いは成就するのだろうか。

とても小さい波も、数えて良いのだろうか。

満ち潮が告げる白潮の端が、こちらに伸びてくるのを感じながら、わたしは彼に時間が来たことを告げる。

時折、私の仄暗い感情を反映したように、月が朱くなることがあった。

いつか、これらの現象について理路整然と説明できる者が現れるのだろう。

でも、今は居ない。

この島の巫女姫になって、長い年月が経過する。

私は、人であって人でない生き物だ。そう・・・神姫ではなく、生き物なのだ。供物にされないだけ良いとしなければいけないのだろうか。

観賞用の生き物と同じであった。

私に対して、私の知らない間に制約が多く作られていた。

触れてはいけない。

個人的な願い事を祈ってはいけない。

個で近付いてはいけない。

供物に動物の血肉を与えてはいけない。

・・・それなら、私は一体、何なのだろうか。

だから、朱い月の出る時に、私は海に出る。

不吉の極みとされた月夜に、海に出る。

誰一人外を出歩く者が居ない夜だ。

朱い月が出る時には、死者が海から還ると言われている。だから、皆、戸口をきっちりと締めて、一歩も外に出ない。

声さえ出すことを禁じるのだ。

ひっそりと、ただ、夜が明けるのを息を殺して待つ。

そして、外の物音についてはどんな音を聞いても、翌日以降語ってはいけないことになっている。

無音の月夜に、私は漫ろ歩く。唯一の、自分だけの時間であった。

ひとりで浜辺を歩き、ひとりで海に入る。そして自由に夜の魚たちと戯れて、浪に遊び、月に嗤う。

唯一・・・その瞬間だけ手に入れられる、私だけの世界に遊ぶ。

●朱月蒼浪02

朱い月が出ている時には、生き物は息を潜めてそれらを見ないようにする。

浪の上にこの月が浮かぶ時、死せる者が海から甦り、死にゆく者は海に還ると言われているからだ。

生死が交錯する一瞬の夜に、生き続ける者は触れてはならない。

だから、夜の海はとても静かだった。

夜船も出ていないし、波際を歩くものもない。

私は人々の作った神話や決まり事を否定してはいけない身だ。

誰に教えられたのでもないが、私はそういったことに口を開くことはしない。

なぜなら、ここに存在するだけの存在だから。

永く生きているから・・・それなりの知識や経験があるが、万能の神ではない。

熱が出て寝込むこともあるし、海の声が小さすぎて聞こえない時もある。

巫女や傍近く仕える者には、稀にそういったことに疑念を持つ者も居るが、私が何も言わないので、いつの間にか問うことをやめてしまうのが常だった。

わかっている。

皆が私に従うのは、代替が存在しないからだ。

私は月を見上げる。

月に変わりがないのに。

それでも、見てはいけない月と眺めて良い月が存在する。

その区別はどこからやって来るのだろうか。

私は正面に浮かぶ月を見た。浪が静かに・・・汐の満ち引きを知らせる。

独特の汐の香りと、不均一に打ち寄せる波の音・・・それだけが存在する。

私は飽きることなく、赤く輝く月を見つめ続けた。

本来なら、父なる海に祈りを捧げなければならないのに。

海は母ではなく、父だった。

他の者は、海に還るというのに。

私は還れない。

海は、私をここに縛り付ける。

そして、私を永遠に近い長い時間留まらせる。

月は満ち欠けるが、いつも変わらなかった。

もう何度もこんな赤い月を見た。

群青色の海の上に浮かぶ月は、赤い時には近く見える。

月明かりは禍々しく、見えざる者や喚ばざる者が集いやすい。

なるほど。確かに、こんな夜には生者は出歩いてはいけないのだろう。

でも。

これほど、美しいのに。

ただ、静かにそこに在るだけなのに。

いつもと変わらぬ月であるのに、朱く染まったというだけで、誰も見つめようとしない。

だから、私ひとりだけでも眺める。

禍つ月を見上げる。

・・・今日は満月だったので、更に朱い色を濃くした月が大きく見えた。

私は大きく息を吸った。

人より永く生きている。気味悪がる者はこの島には居ない。

私にしかできないことがあると知っているからだ。

そして、巫女姫を弑した島の運命を、伝承で知っているから。

だから、私を屠ることはしない。

その代わりに、人として扱わない。

皆、私の目を見ないし、困った時だけ傍寄ろうとする。

節目の行事の時には私を崇める祝いを欠かさないけれども、私の存在を疑問視する声は瞬殺される。

私が居ても居なくても、この海に変化はないのかもしれないと思うものは、この島にはひとりも居ない。

各島々にいる巫女たちを知っているからだ。

遠漁のために沖に出る僅かな舟に乗った者達が、その時に交わる他島の者と交わす短いやり取りだけが彼らの情報源だった。

同じ様に、巫女姫が居て、神事を司り、そして海が荒れる刻を予知する。

永く生きているから、島の毒草も薬草も知り尽くしている。

でも、ただ、それだけなのだ。

そして、巫女姫の交代について、誰も知らない。それは口伝されない。

私も・・・いつか、この命が消える刻には誰も覚えていないのだろうか。

それを思うと、こんな朱い月に歩きたくなる。でも、誰もそれを知らない。

●朱月蒼浪03

この島の者は誰も出てこない。

私は海から吹いてくる汐の混じった風に煽られた髪が、自分の目の前でひらつく様を眺めていた。

誰もが息を詰めて夜が明けることを祈る。

朱い月はとても不吉だと言われる。

月が堕ちてきそうなほどに近くに見えることも影響しているのだろう。

満ちては引いていく蒼い浪と同じであるのに。

満ち欠けを繰り返しているだけなのに。

こんな風に、時折何かを訴えるかのように、月は朱くなる。

禍々しいと畏れる理由がわからなかった。

だから、私は時折こうして何かに抗議したくなってしまうのかもしれない。
そんな感情さえ、忘れてしまった。
けれども・・・それを知っていたという記憶だけが私を支配する。
誰も私を支配できない。
父なる海神でさえ、私のすべてを支配できていない。

なぜなら。

こんな風にして、自分だけの秘密を持つことについて、父神は私を制御できないからだ。
人は私を神女とか巫女姫とか荒ぶる海の姫だとか、勝手気儘に好きなように呼ぶ。

けれども、私を名前で呼ぶ者が居る。

この島には今は数少ないが。

昔は、私も・・・名前で呼ばれていた。

それ以外に名前を持たなかった時があった。

それがいつの間にか、恐れ多いと言われるようになり、皆が尊称で私のことを呼ぶようになった。

次に、名前は真名であるから、軽々しく口にしてはいけないと言われた。

私が望んだことではないのに。

そういう・・・島の民が考案した、私の意思に関係しない決め事に、私は口を差し挟むことは出来ない。

なぜ、こういった尽きない想いを持たせたままにするのだろう。

巫女にはそういった資質は必要ではないように感じる。

けれども、感情がなくなってしまうたら、機微について把握できなくなるのだろうと推測していた。

神のおわす海を眺めながら、存在を問う瞬間を持つ巫女である私は、すでに・・・神を信じ切ることもできないし、神を否定することもできない中途半端な存在としてでしか、存在することができないのだ。

誰もが私を隴のような人だと言う。名前の通りだと言う。

しかし、私がどう想っているのか、何を感じているのか問いかける者は居ない。

私の器だけ存在すれば良かった。

資格や許可がない者が私に触れればたちまち壊死してしまうという妄信を信じている者達は、社を含む広すぎる屋敷をあてがった。

奉納という名前の隔離だった。

人と同じ邑に住むことは許されなかった。

人々は、私から人との近接を奪い、ただ、神姫であることを求めた。

だから、私は動いて生きている神体でしかなかった。

決して朽ちることがない器の中に居る私の魂は、すでに塵になってしまっていると言うのに。

寄せては返す波が、月光を受けて煌めいていた。

深夜であるのにも関わらず、月の朱い暁が海を照らして仄明るかった。

私は素足のままで、この海岸を歩いた。

海に足が浸る度に、足の甲が砂に沈む。

私は神そのものではないから、海を渡ることもできないし、潮位を変化させることもできない。

ましてや、この静謐を携える朱い月を、いつものとおりの色に戻すこともできない。

戻す。

・・・そうだろうか。

本当は、この朱い月が本来の姿で・・・いつもの月色が偽りではないのだろうか。

今の、私のように。

誰も見ていない或いは見てはいけない場所で、初めて、自分の荒々しい浪を吐き出す私に似ているから・・・あの月が、紅くなる時だけ私はこうしてひとり歩き回るのだろう。

●朱月蒼浪04

静かな・・・誰にも何にも荒立てられることのない浪を眺める。

夜の海には何ひとつ、なかった。

命のない海にあるのは、静かな波音と虚無のさざ波と・・・紅い月がそれらを照らし出しているのみであった。

紅い月光の下で輝く海浪は、いつもの白浪の色と違っていた。

私はいつの間にか、浪の数を数えることはやめてしまっていた。

果てのない生命を羨んだり妬んだり畏れたりする者は多い。

そして、自分が同じになれないと知ると私を蔑んで憐れむ。

次に、違うものだからと言って切り離す。

人の思考の過程はいつも同じであった。

希望と失望を幾度か繰り返し、そしてやがて無関心に陥る。

だから、私は失望する回数も数えなくなった。希望の回数も。

結果が明らかになっているからだ。

単調で昏い日々を過ごす。

夜の海の波音のように・・・不均一でありながら統一されたそれらに耳を澄ませることが私のつとめであった。

島の巫女神というものは、大変に崇敬される存在であるが、同時に、異質なものを受け入れることができない人々から隔離される存在である。

社をあてがわれていたとしても。

何も用事がないのに訪れる者は少ない。

何かを願って頼み事をしたいときや懸念事があるときにだけ、私を訪れる。

それから季節の行事や定期的な義務としての礼拝は怠らない彼らは、私が何を感じているのか何を欲しているのか、尋ねることすらしない。

もちろん、彼らは日々の糧や拝跪の代替として仕えることには疑問を感じていない。

しかし、個として私に近寄ろうという気持ちがまったくくない。

好奇心がないわけではないのだろうが、それでも・・・時折、こうしてささやかな抗いを持たなければ、私は私でなくなっていくような気がした。

私はこの海と島の守人であるのに。

それなのに、私だけが永遠に近い年月を生き続けていることについて、明確な答えがなかった。

神だから永遠を生きるのであれば、私は神ではない。

永遠ではなく、永遠に近い年月を生きているだけだった。

それはもっと短い命の者達から見れば、大差ないのかもしれない。

けれども。私は・・・

人であったのに。

人でなくなってしまった。

年を経る毎に、私の感情の波は穏やかになっていく。

・・・これは喜ばしいことではない。

鋭敏でなければ感じないものについて放棄することになるからだ。

なぜ、私は死を持つことが出来ないのだろうか。

なぜ、私は死を待つことが赦されないのだろうか。

しかし、神は疑問を答える役割を持たない。

また、紅い光を受けて昏く輝く海面を見た。

・・・今宵は凧だ。

風も海も穏やかで静まっている。

この季節では滅多にないことであった。

私は大きく息を吸った。

汐が、胸に吸い込まれていく。

私は人の子の器を持ったままである。

だから、呼気を止めれば息苦しいし、涙も出る。

怪我もするし病気もする。

けれども、それらで死に至らないだけだ。

完全に四肢を刻まれるか海にこの身を返すか・・・方法はいくらでもあるが、通常の人と違う死は、私の求める静寂ではない。

海で死んだ者は海に還り、土上で死んだ者は土に還る。

けれども、私はどこにも還ることが出来ない。

その代わりに、私ひとりだけに向けられた静寂という贅沢を抱えることにする。

小さすぎるのか大きすぎるのか、わからない。

しかし、海の浪と月の晃が私を苛むように、私ひとりを照らし私ひとりを打ち濡らす限り、私の密やかな出歩きは終わることはない。

●朱月蒼浪05

生命のない世界とは、こんな風なのだろうか。海鳥も夜魚も気配を隠している。汐の香りの中にも、生命の息吹を感じない。

打ち寄せる波の端に浮かぶ漂流物でさえ、息を潜めて今宵の成り行きを遣り過ごそうとしているかのようにだった。

私の歩いてきた砂の上の足跡は、浪がすべて消し去ってしまった。

体の重みで砂が沈む。

私が生きている証拠だ。

私はこうして・・・呼吸をして、赤い月を美しいと思う。

生ける命が除けて通ろうとする赤い月さえ・・・私には手の届かない願いのように見えた。

私は生きているのに。

私はこうして生きているのに。

・・・生きるために、心を殺す。臃々とした生を存える。

私はそこで足を止めた。

・・・沈む。

私はそこで海を見た。

・・・沈む。

なぜ、朱月の夜は出歩いてはいけないのかと言われているのか、私はそこでようやくわかったような気がした。

月光はいつもの色ではなく、緋の色を持っていた。

あの月と浪は・・・生きている者の血を呼び寄せなのだ。

生きているものの中に流れる汐を、呼ぶのだ。

海に引き込まれるから、赤い月の宵には出歩いてはいけない。

これは、真実だった。

海に呼ばれてしまうのだ。

海に還るべきものではない者も、海に近寄ってしまう。

だから・・・長い間の経験による口伝が消えて無くならないのはそれが真実だからだ。

この月も浪もいつもと変わらないのに。

なぜ、これほどまでに・・・心が揺れるのだろうか。

月明かりが星を消す。

乳白色の帯も見えないほど、明るい・・・禍々しい色が私を誘う。

生きている証を見せてみないか、と誘う。

誰も語りかけない私の中に、語りを注ぐ。

そして私は凧ぐ風の声を聴いた。

聞こえる・・・聞こえるから。

こちらにおいで、と言う声が聞こえる。

私は赤い月を仰いだ。

・・・そう。

おいで、と言われた。

私には人の聞こえない声が聞こえたり、人の見えないものが見えたりする。

人が届けられない声を伝えるのが私の存在の意味だから。

けれども。

私の声は人に届かない。

私の願いは人には聞こえない。

ここは浅瀬で浪の低い入り江だった。かなり遠くまで浅い砂浜が続くので、船も入らない。いや、入ってはいけない域だった。

少し離れた場所に、神岩がある。巫女姫である私に捧げられた岩だ。

この島は魚も貝も通年豊漁だった。

もちろん、磯貝や岩にこびりつく生物に至るまで、他の島より豊かであった。

他の島と比較することはなかったので、どれだけ豊かか、とは言えなかったが。それでも、他の巫女姫達の羨望の声が浪に乗って届くから。

・・・私は幸せ者だと誰もが言う。

妬みで頸を刎ねられることもない。

不老長寿の薬だとして血を抜かれることもない。

けれども・・・この島の民は、私の心の声を聴かない。

ただ、海神の尊い力を永遠に存続させるためにはどうしたら良いのだろうかと言う悩みを聞いて微笑むだけしかできない。

だからなのだろうか。

私は、海を見つめて・・・突然に湧いた思い付きを実行することにした。

●朱月蒼浪06

夜の海も風も浪も・・・僅かな時間だけかもしれないが・・・僅かな時間であっても私ひとりのものになる。

幼い頃、まだ人であった頃・・・私は破天荒で大人の言うことを聞かないこどもであった。してはいけないことを敢えて好んでやり遂げ、周囲を驚き呆れさせる事に夢中になっていたのかもしれない。そんな時もあった。

そんな時もあったことすら、忘れていた。

空に手を差し伸べるために木に登った時に・・・聞いたことのないような胸に染み入る声が人の姿もないのに聞こえてくるから、私はその声が聞きたくて木に登った。

周囲の者が話しかけない人が幾人か会合に混じっていることを知って、私はそのこども達に声をかけたくて夜遅くに寝具から抜け出し、大人達の寄り合いに忍び込んだところを発見されて大変に怒られた。

そんな時代もあったのだ。

それはまさしく私の生命が輝いていたのだろう。

こんな風にして、茫洋と揺蕩っているような生命ではなかったはずだ。

私はもう、こちらにもあちらにも渡れない狭間の生命として生きていくことになって久しくなった。

そのような私でも、まだ少しばかり心の内にあるものについて無頓着に受け入れようと思った。それが動機だ。行動に動機はあるが、動機に理由はない。

湧いて起こった感情が、この赤い月光に起因するものであるならば。

父なる海神も目を瞑らざるを得ない。海と月陽と大地は、皆互いに干渉しないものであるから。

だから私は海から上がって来た時。背後に回った月が更に朱く墜ちてきそうなほどに近い場所にあったので・・・濡れた腕を差し伸べて、自分の手の平の上に月を乗せた。

実際に乗っているわけではないが、この瞬間だけは・・・あの赤い月は私ひとりだけを見つめる。

肘から海雫が滴り落ちた。海に入るのは嫌いではない。巫女姫であり、海を護る神女であるから

、私は海に入り禊ぎをする。島にあっては、貴重な湧き水の溜まり池のひとつが私の体を浄めるためだけに使われる。・・・そんな事に使うのではなく、邑の者全員で使えと言うが、誰も私の言葉を聞かない。

恐れ多いと言う。・・・そして山に住む人語を知らない生き物たちすら、そこには寄りつかない。

持ちきれないほどの、抱えきれないほどの孤独が私を襲うが私はそれを面に出さない。

出せば、私の傍に近く仕える者たちに知れてしまう。

そして彼らはどうにもできないのだから。

人の子として生命をまっとうしたければ、彼らは私の憂悶などに関わってはいけないのだ。

海から上がる。禊のための軽い衣ではないから、海水を含んで大変に重かった。

夜の海は蒼くない。

ただ暗く・・・どちらが陸だか時折わからなくなる。

だから灯りなしには、夜の海には入ってはいけない。

山の斜面の邑がある場所は遠かった。

そこにぽつりぽつりと暁が見える。

こんな遅い時間に起きている者はほとんど居ないが、今日は夜漁の日であった。しかし赤い月が出たので、急遽取りやめになったのだ。

だから、準備をしたものの夜漁に出られなかった者達が幾人か居る。

彼らは海に出られない代わりに、網の直し、普段できない家事を屋内で仕上げているから、明け方まで灯りが点いているのであろう。

燃料は貴重であるから、それほど遅い時間まではあれらは灯っていないが。

私は濡れた顔を手で擦った。

そして、まばらに点灯するそれらの暁を星のようだと思った。

今、私の頭上に輝いているどんな星より、あそこで光る、人の暁の方がずっと・・・ずっと綺麗だと思った。

浪に押されて向かった場所に辿りつけなくなりそうになるが、ゆっくりと一步一步を踏みしめて私は陸に上がった。

海とは実に不思議なもので、清水に入る時と違う浮遊感がある。

蠢めいている漣がそうさせるのだろうか。

このまま沖まで・・・せめて・・・そう、あの岩場まで届けてくれないだろうかと思っていると、あっという間に汐が私の体を運んで行ってしまふ。

潮流によるものであるが、海には意思があるように思う瞬間である。

それなら。私の体を骸にして、このまま海の向こうまで連れて行って欲すれば良いのに。

赤い月にそんな願いをかけても・・・決して願いとして聞き入れられないだろうと承知してい

だが、私は海に潜りながら、生命の気配のない底に沈み、虚無の海底を眺める。

息苦しさや折り合いをつけながら、極力、海に潜む。

この瞬間だけ・・・私は、私の心の中のような深い闇と、静かに向き合うことができるような気がした。

呼吸するために海の上に向かうことが罪深いように思えた。

なぜなら、私は海の巫女姫で・・・長い年月を生きているというのに。

海巫女が海に入るのは神事だ。

それなのに。

人が出てはいけない夜の海に入り、神の声を聞く儀式を無視して、海を彷徨う。

呼吸しなければ生きていけず、沈みたいと思っているのに、沈んだままであることが怖くて・・・海から見える、人の子の朧を目印に陸の場所を確認するさもしい生命であると思ひ知る瞬間でもあるからだ。

●朱月蒼浪07

海に潜っている時には陸が恋しくなるのに、陸に戻ろうとすると海の浪の律に身を任せていたいと思う。

海で死んだ者は海に還り、土で死んだ者は土に還る。

そう言われているが、私はどこに復（かえ）るのだろうか。

そこからやって来た者ではないから、私には還る場所はなく・・・ただ深い虚無の海に吸い込まれて行き、私の死は死ではなく・・・永遠の孤独の中に場所を移すだけではないのだろうか。

そんなことを考えながら、海から上がった。

禊ぎの潜りではないから、岸には誰も居なかった。

いつもにこやかに嬉しそうに私を待つ侍女の姿もない。

私を待つ者は、居ない。

乾燥しているが軟らかくなるまで何度も手の平で撫でて熱を加えた拭き布で私の肌を包む者は居ない。

このまま消えて泡になっても、消えて浪になっても・・・誰も知らないのであれば。

・・・でも。私には死に方がわからなかった。私を縊ったり大量に血を流したりしたら当然に死ぬだろうが・・・試したことがないので、わからない。

そこで私は苦い笑いが込み上げて来た。

試す。

死を、試す。

私がそんなことを考えていると知ったら。

あの侍女が知ったら、卒倒するだろう。

込み上げて来たのは、虚無であった。

いつも朧々とした淡い笑みしか浮かべないと信じて疑わない者達には決して見せることのできない笑みを作る。

不死ではないが、不老の巫女が居て・・・なぜ、彼らは自分たちも同じになりたいと考えないのか思考を巡らせた。

死ねないというのは大変な苦痛を伴っていることを、経験してもいないのに感じているからなのだ。

死ぬことより死ねないことの方が恐ろしいのだろう。

理由は単純であった。

死とは堪え難い苦痛であるが、同時に安らぎでもあるからだ。

それを得られない私に対して、彼らは崇敬ではなく哀愍を持って私を奉る。

私は幾人も見送ってきた。そして新しい命を幾つも見届けてきた。

それなのに、今でも悟れない。

誰にも伝えられない。

だから、私は命の尊さや死の受容について教え伝えることはできなかった。

どんなに長い年月をかけてもわからないことがある。

その反対に、ある日突然に瞬時の悟りを得る時もある。

秘め事を持つ私には、知る権利はないのかも知れない。

陸に体が晒されると、濡れた衣に体温が奪われていくのを感じた。私が何も感じないかということそうでもないのだ。寒いと思ったり熱いと思ったり・・・そして哀しいとか寂しいとか感じる。でもそれを表出させない術を知っているからそう見えただけだ。ただ、それだけのことなのに。

誰も私の声を聞こうとしない。

私には神の声が聞こえると思っているのに。

見えざる者が見えても。

聞こえない声が聞こえても。

私が望むのは・・・

赤い月が見える。海の上に移る月の暁はゆらゆら揺れていて、輪郭を朧々にしていた。まるで、私のような。

朧々としている。

それは誰にも見られることのない禍々しさを見せている。

いつの間にか汐が満ちて、私の残した履物のすぐ近くにまで迫っていた。

あの草履は私に仕える侍女が編んだものであった。

細かい作業であるのに、暇を見つけては私の足に合うものをと願って作ったものだった。

ありがとう、嬉しいわ。

そう言うと、満面の笑みを浮かべて荒れた手を胸の前に合わせて私に感謝の拝を捧げる。

感謝するのは私の方なのに、彼女はありがとう、と言う。

こんな気持ちをくださってありがとうございます、と言う。

本当の私の心の内を見たら、彼女は失望するのだろうか。

それとも、嘆きを与えてくれてありがとう、とまた微笑むのだろうか。

滴る海の水が重かった。私の秘めたる思いを洗い流すどころか・・・ますます鮮やかにさせる海は、確かに恐ろしいほどまでに美しく静かだった。

●朱月蒼浪08

波の音が聞こえるが、この島に居る限り、それが聞こえない瞬間は一度もない。どんなに嵐の日でも、どんなに鎮まった日でも・・・こんな赤い月の暁に照らされる夜でも、浪は絶えずここに在った。

私は踝に浪を浸しながら、ただただ・・・気怠い体を立たせているばかりであった。

私には邑の暁は遠くでみるばかりで、経験することはできないだろう。

どれほど、手を伸ばしても。どれほど、焦がれても。

決して手の届かないものを熱望する。

あの赤い月もそうなのだろう。

赫く光る月は、いつもの月より近いのに遠く感じた。

近く見えるからこそ遠いのだとわかる。

近付きたいのに・・・浪に近付けないのだ。

浪に沈むことができるのに、月は浪と交わらない。

太陽と違う。

空が明るくなれば、月はそこに居るのに消えてしまう。

そう。・・・そこに居るのに。

時間が経過すると、姿が見えなくなってしまう。

それは私も同じであった。だからこれほど心惹かれるのだろうか。

いや、それは逆のことなのかもしれない。

浪が月に近付けないのだとしたら。

父なる神はあの赤い月と蒼い浪が交わることを望まないのかもしれないと思った。

神は私には何もこたえない。ただ、一方的に・・・ある日突然、時間も場所も選ばずに私に言葉を伝えるだけだ。禊ぎで海に入っても。清水に浮かんでも。それでも・・・それでも、私の声は誰にも届かない。

神の声は聞こえても、私の声は誰にも聞こえない。

そんなことを思っている私の肩が細かく震えていた。

海は全てを与えるが、全てを奪う。

還る場所ではあるが、拒絶されるときもある。海は私が還ることを拒む。

海神の姫神女と呼ばれているのに、私は海に還ることを許可されていない。海で死ぬことができない。

こうして、幾回か、海に沈んで見せているのに・・・私の肉体は、私が呼吸しないで重たい抜け殻となり、波の骸になることを拒む。

私が穢れを持っているから、なのだ。

清らかな存在ではない。あらゆる不浄をこの身に引き受けているから、私は御巫と呼ばれるのだ。見えざる者が生在る者に惹かれて魂を彷徨わせている様子を鮮明に見ることができるのに、私は、もう幼い時のように彼らに話しかけることをやめてしまっていた。

疲れてしまっていた。何もかもに。永遠という名前の檻が、私を生きているのか死んでいるのか判別しがたい状態で存在し続けることを強制する。

これを選ばれし者の幸いだと言った神官たちももう、この世には居ない。

永遠に海の波の数や、月の満ち欠けに鈍くなっていく私のどこが・・・一体、この状態のどこが、祝福されし神の恩恵ゆえの長命と言うのだろうか。

生命を育むこともない。老いることもない。

私の中にあるのは、虚無だけだ。

私の心の中は洞と同じで何も蓄えることが出来ない。

それなのに、こうして・・・寒さに震え、波を漂った後にやって来る体の重みを感じている。餓えも渇きも感じる。

なぜ、神は私からこういったものは取り除かなかったのだろうか。

何も感じないでいられるのであれば・・・私は島巫女であることに何ら疑問を持たないでいられたのに。

私は空を見上げた。私は・・・あの朱い月を睨み上げた。

私がこんな表情を知っていることを誰も知らない。

挑んでも手の届かない月に向かって、私は顎を突き出した。掬っても捉えることの出来ない波の上を漂う月の残映を見て・・・私は、少し唇を歪めた。

神の試練なのか、神の懲罰なのか・・・どちらでも良かった。

私は、理から外れた者であることに変わりはないのだから。

海に体を浸していると、他の島巫女達の戸惑いが波に混じっているのがわかった。感じるだけであったが。

そんな彼女たちも、こんな夜には海に入らない。

朱い月は不吉であるという話は、この島だけではなく、形を少しずつ変えながら他の島々でも言諭されている。

・・・私が最も長く生きて、最もその言い習わしについて疑問を強く持っている者であるからこそその所業であった。

これほど長い時間を生きているのに。

誰も、私の秘密に気がつかなかった。

善良すぎる島人たちは・・・私や神を疑わない。

●朱月蒼浪09

人にあらずるものと対話する時には、私はどういうわけか安堵していた。

瞞したり謀ったり・・・互いの心を試すようなことはしないからだ。

相手を求めないという律がそこにあった。

月であったり、波であったり・・・海に沈む魚や海草や、海鳥たちは・・・私のことは問わない。ただ、感情を交換するだけだ。

もうすぐ海が荒れそうだとか、今年の漁はどの程度沖で行った方が良いとか・・・そんな言葉を聞くことができるから、私は私でいられるのだ。

壊れそうになる魂を押しとどめて、自分はここに居なければならぬという義務にも似た感情で、自分がここにいる。

けれども・・・私は、私の声を誰にも伝えて欲しいとは思わないのである。

海鳥も、海草も、風も、砂も波でさえも、自分の意志を伝えようとしているのに。

私は、私の思いは誰にも伝えようとはしなかった。そうしようとは思わなかった。

私は、一度は陸に揚げられて、そのまますぐに、海に還され、酸素を与えられた海魚のように・・・息を大きく吸った。

私の居る場所は・・・ここで良いのかどうか、わからなかった。でも、ここしか知らなかった。

別の場所で生まれたのに、私の記憶はここしか・・・私の思い出はここにだけしか残っていない。そして、同胞の嘆きも喜びも・・・私には一瞬の痛みのような激しい痛みでしかなかった。

なぜ、私はここに辿り着いたのだろうか。

なぜ、私はこんな風に生まれたのだろうか。

もっと昔に・・・普通の女人として生涯を全うするはずであった。

こどもを作り、次の世代に託す命を嘆き・・・そして次に繋がる、命の唄を紡ぎつづけることが自分の使命だと思ふことのできる、そんな平凡な一生を過ごすことができたのかもしれないのに。

。

何が、私を・・・永遠に近い悠久に変えてしまったのだろうか。

父なる海神に問うても、こたえは、決して得られない問いであった。

それなのに。

人の子であるものの、抗えない光波の持ち主に、私が心動かされている。

私はただ・・・黙って、濡れた身体を赤い月の空の下に晒した。

身体に貼り付いた衣が私の胸の上で揺れて、大きく隆起していた。私はこうやって呼吸しているし、苦しさも感じる。海に沈めば、私は程なくして息絶える。

・・・普通の常人と変わらないのに、なぜ、私を特別だと言いつけるのだろうか。

傷の治りが人よりはやくからか。

誰も聞けない声を聞けるからか。

望めば・・・どんな命も拭き消すことができるからか。

なぜ、私を滅そうとする者がいないのだろうか・・・

私はそこまで考えて、目を閉じた。

考えることはやめよう、と何度も思ったはずなのに。

それなのに、考えてしまう。なぜなのだろう。いや・・・理由はわかっていた。

私が、人ではないからだ。

人ではないから、人のことを知りたいと思うのだからと思う。

そう思うと・・・私は身体が冷たくなるのを感じた。

なぜなのだろう。私は・・・私という人格を、私自身が肯定してやることができないでいた。

冷えも感じるし、餓えも暑さも・・・痛みも感じる。

けれども、私は、人であってはならないのだと言われて、今を生きている。

なぜなのだろう。

私が悪かったのだろうか。私の何に・・・原因があったのだろうか。

それを考えると、私は誰かの幸せを考えることができなかった。

私は・・・皆に使える巫女なのに。

この島のたったひとりの巫女なのに。

なぜなのだろう。

そうやって問い続けて・・・どれくらいの暗闇を歩いていたのだろうか。

見上げれば、月は朱く、波は緋暁を受けて禍々しいほどに明るく光り・・・

そして、こうやって自分を嘲る笑いを月と波に捧げるのだ。

●朱月蒼浪10

私は赤い月を見上げた。

赤い月と蒼い波は、決して交わらない。

空の蒼を映して、波は蒼く輝くからだ。

だから、こんな風にして赤い月の上る空の下は、蒼くならない。

赤い月の下にあるのは、闇浪でしかあり得ない。

蒼い波の上にあるのは、明るい太陽しかあり得ない。

私は大きく呼吸した。

私は呼吸しているのに。

誰も、私を生者と認めない。

なぜなのだろう。

・・・私は生きているのに。

終わりのない、生命を生きているのに。

けれども、生命あるものが出てはいけないと言われている赤い月の夜でなければ、こんな風に憤りに近い嘆きなのかさえわからない、吐息を漏らすことができないなんて。

定かであることは求められていない。

だから、私は・・・朧、という名前で呼ばれ続けるのだ。

本当の名前はもう必要ではなかった。

私の名前は、私にでさえ、忘れられて朽ちていき、海に還るのだから。

海に漂うというより、少し沖にある岩場まで潜ったが、私はそこで引き返すことにしたので、それほど長い時間、海に居たわけではなかった。

その先は潮流が激しく、一度引き込まれてしまえば戻って来られない場所のひとつであった。

だから、ここには誰も来ない。

特に、こんな夜には。

潮の流れが混じり合う場所で潜ると、どちらが陸なのか沖なのか、わからなくなるからだ。それに加えて、命の暁が眩しすぎて近寄ることもできない、憐れな昏き者たちが寄ってくるので、闇波に囚われやすくなってしまう。

・・・明かりを持って漁に出る以外に、ひとりで夜の海に出てはいけないと言われて、島の者は育つ。海の亡者に連れて行かれるという者も居れば、海の神に見初められて神人の側仕えとして召されるからだ、とか・・・諸説様々であったが、私はそれらを肯定も否定もしなかった。

ただ・・・夜の海には昼の海と違うものが居る、とだけ言った。

昼の海にはないものが、夜の海には存在する。

夜の海には蒼はないが赫がある。

それが凶つ神の持ち込む邪なものであるとは、誰も決めてはいけないことなのだ。

私は黙って海を今一度、振り返った。

次の赤い月の夜はまだ先のことになりそうだった。規則正しく現れるわけではない気紛れな月の出を、島の者は恐れる。潮が乱れると言って厭う。

けれども、私はその赤い月を待って、こうしてひとりで海にやって来る。

そろそろ、戻らなければ気配がないことを知って、邸の者が騒ぎ出すだろう。

私は振り切るように、海に背を向けようとして・・・そして数歩足を進めては、砂に埋もれる自分の足が吸い込まれて行くような感覚を確認するかのように歩みを止める。

自分の身体が、このまま砂に吸われて沈んでいったら・・・私はそこで、息絶えるのだろうか。それとも、死にたいと思う程に苦しいのだろうか。

・・・今より、もっと苦しいのだろうか。

神に背くに等しい思いを、私が密かに持ち続けているということは、誰も知らない。そう、誰も。

私はもう一度だけ、海と月に向き直った。

今度来るときは、赤くない月の夜か、蒼い波が静かな明け方に浄めを行うことになる。

そこで、私は振り返ろうとして・・・沙の音を聞いて、身体を硬くした。

あり得ないことが、起ころうとしていたから。

私は声を失って顔を強ばらせた。

誰も来ないはずであるのに、目の前に、彼が立っていたからだ。

●朱月蒼浪11

私は失敗に気付いた。自分が迂闊であったことに気がついた。

砂浜は広がり、誰かが近付いてこようものなら、沙を踏む音が聞こえて来るし、人には感じることでできない空気や浪の乱れが私に伝わってくるからだ。

・・・在らざる者たちは、姿をはっきりと現すこともあるが、そうではなく闇や浪に紛れて近寄ることもある。

脅威ではないが、隙があればあっという間に群がってくるモノを祓うだけで、祓うということは滅するということで・・・要するに、救う事が出来ないのだ。

しかもひとりで居れば対処できることも、人と一緒に居ることにより、その相手を危険に晒し、いらぬ乱れを起こす可能性は大きかった。

紅い月の夜には外に出てはいけない、と言われているはずの者が、何をここでしているのだろ

うか。

そして、私は、彼の近接にまったく注意を払っていなかったので・・・少しだけ眉を動かした。月光を背にしているので、私の表情は見えないだろうけれども、彼は私の不快な気配を察知したようであった。

すぐに膝を折り、彼は私の前に稽首した。砂に彼の身体が沈む。

そして、祓いのための誓辞を述べた後、彼はおもむろに「失礼します」と言って私の前で着物を脱ぎ始めた。腰紐を外せば上衣は簡単に脱ぐことができた。これは島の民の知恵である。風が強いので、胸元があまり開かないものを着る。そして、すぐに海に入ることができるように着脱が勘弁的で、さらなる作業の妨げにならないように袖元は絞りが入っていた。

彼が私に叩頭し、祝詞述べている間。

・・・その間、私は黙っていた。

私の持っている様々な権利配分に対しては、彼に何かを言ってはいけないのだ。何かを発せば、それは絶対的な命令を意味する。

私は、誰かと出会う瞬間に、私でなくなる。島の神巫女という身分になり、自分の想いや考えをすべて沈降させなければならない。

彼らが私に求めているのは、海神の依り代としての私であり、私自身と言葉を交わしたいと思うものはいない。

少なくとも・・・私の側女以外には。しかし、その側巫女の実兄にあたる目の前の男性は、私の声を聞こうとはしない。そういう能力は巫女が持ちあわせるもので、私の声は・・・この島の特殊な者たち以外には聞こえないと信じている。だから、私の声は聞こえない。・・・彼には、聞こえない。通り一遍の会話はできても、なぜ、私がここに居るのかは、彼にはわからない。

人の業というものが、私を遠ざけてしまうのだ。

私を理解できないように、様々に仕組みが作られているようであった。

・・・それなのに、なぜ、彼だけがここに居るのだろう・・・

紅い月の夜は外に出てはいけないのに。

私は彼をまじまじと見た。目の前に立っている人物は・・・私よりずっと背が高かった。海焼けした浅黒い肌に漆黒の瞳。潮で妬けた髪はそれでも黒々して月明かりの下で鈍い眊を放っていた。この島の者たちは同族婚であることが多いので、似たような顔立ちになりがちであったが、彼は誰とも違っていた。

何かに挑戦するかのような表情を浮かべ、常に周囲を見渡し、その若さで珍しいほど、海の潮目や風の変化に敏感であった。

網主としての才覚が十分にあった。潜るのも泳ぐのも誰よりも優れている。邑の女達はそんな彼

に待る事を期待しているが、彼の関心事は近くの女達に向くことはなかった。

しかし、そんな彼を狡猾だとか不遜だとか言って彼の妹にあたる、私の付巫女である娘はいつも憤慨してばかりいた。

私はふっと苦い笑いを浮かべる。私はこの島の巫女姫なのだ。それが、普通の女のようなことを考えている。まったく、おかしいではないか。普通の女になったこともないのに、そんな風に考えるなんて。

「朧様」

彼が再び膝をついた。砂の音がして彼の身体が沈む。・・・昔は、彼はまだ童衆であった。私の近くで遊び、妹と手を取って走り回っていたというのに。人は成長するものだ。そして私を置いて去って行く。海に還ってしまう。その時には、私の事などを少しも思い出さず、家族や愛するものや、残して逝く者たちへのことを考えて命を消していくというのに、彼らは生きていたいと願う時には・・・幸せになりたいと考える時には、いつも、私のことを思い出す。勝手であるけれども、そういった生き物を拒否することはできなかった。

彼は、私の身体の近くまで寄ると、再び礼を失することを詫びた。他の者が見たら、卒倒するだろう。それなのに、彼は平然と・・・私に近付いた。

私は巫女姫だから、男は触れてはいけないことになっている。特に、海潮に入った直後は禊ぎを終えた神事の後の身体であるので、穢れを招きやすいのだ。

●朱月蒼浪12

彼は腰元から手拭を取り出した。そして、私の膝から下をゆっくりと拭いだしたのだ。・・・彼の手が私の足首に触れて、私はぴくりと身体を動かした。

冷たくなった身体に伝わってくる彼の掌の温度があまりにも熱かったからだ。

それほど、私の身体は冷えていた。

彼は私の前に跪くと、その腿の上に私の足を乗せた。

単衣しか着ていない私の足元が見えたらしく、彼は俯きながら言った。

「穢れであることはわかっています。けれども、手当をしないと・・・」

私の身体を見て、彼はそう言った。

困惑していたが、動揺して取り乱すことはなかった。

ただ、そっと私の膝から脛を丁寧に拭い、脚の甲に至るまでを拭き清めた。

「痛みは、ございませんか」

ああ、これか・・・私は自分の手足を見た。

紅い月の夜に出歩いてはいけないという言葉には、理由があった。

紅い月の下では、光線の加減で見えないのだ。もしくは、月に気を取られて海面の様子に気を配れなくなるから・・・だから、特にこの海岸には夜は潜ってはいけないという暗黙の掟があった。

・・・月は海の底まで暁が弱くて届かない。

どんなに潜りに長けた者であっても、下の海底から突き出す岩場と海面の距離がわからず、潜った時に鋭い岩場に身体を擦り、怪我をする。

しかも、ここには針貝と呼ばれる小さな鋭く尖った貝がびっしりと岩場に貼り付いているのだ。これは煮詰めて飲むと肝に効くとされ、椀物に入れたりすると大変に美味であった。私の手足には、細かい切傷がいくつもできて、それが衣に吸われていた海水と混じり、紅い糸を引いて砂を同じ色に染めていた。乾きが遅いと思ったのは、私が血で濡れていたからだった。

彼の大きな手の平が、僅かに震えていた。私の足を乗せていた彼の大腿も、あっという間に血で染まった。

「そのままにしておいても問題ない。縫わねばならない傷はない」

私の言葉を聞いて、彼はまた私にひとつ声をかけてから私の足を下ろし、ゆっくりと立ち上がって私の両肘から手首までを丁寧に拭った。その手拭いはすでに真っ赤に染まり、汚れを拭き取るという機能はとうに失われているというのに。彼は、それでも私の手を拭き続けた。

無言で、溜息を時々漏らしながら、彼は眉を寄せて私の手当に集中していた。

その時に・・・私は、なぜ、彼が紅い月の夜に出てきたのか知った。

彼の腰には、貝壺が下がっていた。細かく袋状に編み込まれたもので、強度があり、素焼きの壺よりも軽かった。そして、貝を摘んだ後はそこに入れておくと、絞り口の位置を変えることで大きさを自由に変えることができるので、長時間潜る者たちには重宝されていた。重くなった貝壺を陸に揚げて潜り直さなくても良いからだ。その一方で、大量に取れるので、海が乱れると言って古老達は眉を顰めている代物であった。

彼は、夜に貝が口を開く習性を知っている。栄養が行き渡り肥えた貝は大きく開く。少しでも多くの餌を口にできるからだ。そして食事の時間は夜である。夜行性の貝であった。

だから夜間にこの貝に触れてはいけないのだ。

貝の淵が危険な刃物に変化するから。

しかし、本当は、夜にこの針貝を捕った方が大きな貝が密集する場所を狙えるのだ。日中は貝が堅く口を閉ざしており、摘取するには根元から削り取らないといけないのだが、夜間の口を開いた状態では、そこに刃をあてれば簡単に採取できるのだから。

彼は、それを摂りに来たのだ。たったひとりで。

・・・誰の為にそうしているのかは、わかっていた。

彼が深く愛する者は、肝も拗らせているときいていた。巫女姫の教える煎じ薬ではなく、いつに創られたのかわからないほど昔の効能さえよくわからない高価な薬を必要としているのだときいた。彼はその者のために・・・禁漁とされた夜の海に出てきたのだ。それなのに、気まずそうな様子はなかった。当然だとでも言いたそうであった。自分ができることをしないで居る事の

方が、彼にとっても怖いことだと感じているのだとわかった。

私は彼の上衣を脱いだ。彼が私に触れてはいけない。

「礼を言う」

「・・・邸までお送りいたします」

彼は私から視線を逸らしながら、そう言った。いらぬ、とは言えなかった。

私が黙ったままでいると、彼は私の手をそっと離し、自分の腰に手拭をねじり込むと、私の肩にまた自分の上衣を置いて、そこに手をあてて私の手を止めた。

「着ていてください。あまり役に立たないかもしれませんが・・・」

●朱月蒼浪13

「寒くはない」

「俺のために、頼みます。・・・あなた様は眩しすぎる」

彼は唇を噛んで、そう言った。誇り高い彼がそんな風に言ったので、私は顔を上げて・・・彼の表情を見つめた。足元で砂が鳴った。身体の向きを変えたからだ。

ああ、そうか。私はそこで気がついた。私は海水に濡れており、裸体に近い状態であった。海に入ったので、胸元も乱れていた。

これを見てはならないと幼い頃から教えられて来た者たちは、私に情欲を感じることはない。そういう存在として認識してはいけないと刷り込まれているからだ。

私はこの驕慢な青年が嫌いではなかった。崇りを恐れて何もできない者と少し違っていた。彼がそうやって度々掟を破るのは、彼自身のためではない。

「すまぬ。男に肌を見せてはいけないということを忘れていた」

私は黙って彼の申し出を受けることにした。

少しばかり意外だった。

私のことを、ひとりの女として見た彼が・・・まるで理解できなかった。

ごく稀に、そうやって、劣情をぶつけてこようとする者が現れるが、そういう者は・・・滅されるのだ。私ではないモノ達によって、なぶり殺しにされる。そして、海に還ることもできずに、骸は海にも土にもなれないで彷徨うことになるのだ。

彼がそうなることはなかった。なぜなら、彼は私を愛していないからだ。

器しかない私の洞のような中身を覗き込もうとするような禁忌を犯す行為をしたいと、彼は考えているわけではなかった。

「ひとりでお帰りになってはいけません」

彼はそう言うと、私の姿を見て、困った顔をした。なぜ、困っているのかがわからなかった。私を襲うような者は、今宵の月空の下には出てこない。誰も出歩いてはいけないのに・・・こう

して、私と彼だけがここで会話を交わしているのだから。

そして、意を決したように大きく息を吸うと、彼は私に向かって言った。

「これから俺がすることをお許してください。・・・咎めが必要なら受けます」

そう言って、彼は私に近寄った。紅い月夜の下で・・・浪が大きく鳴ったと思った次の瞬間には、私の視界がぐらりと揺れて月の位置が変わった。

驚く、という感情を味わったのはどれだけ久しぶりのことだろう。私は確かに・・・驚愕していた。自分の口から戸惑う声が漏れるのが聞こえた。

彼が、私をいきなり抱き上げたのだ。彼の筋骨隆々とした身体の中に、私は居た。何が起こったのか、しばし呆然とするが、目の前に彼の広い胸が広がっており・・・私は彼の胸の中に居るのだと理解した時には、もう、彼は歩き出していた。

背中と膝下に、彼の腕を感じて居たが、彼は私に視線を落とさずにそのまま前を向いて歩いていた。ふたりぶんの身体の重さを砂が受け止めて、自分ひとりでは聞くことのない大きな砂音が波音に混じって聞こえて来た。

「・・・あなたはこんなに軽いのですね・・・」

彼は掠れた声で言った。

「ひとりで歩ける」

どういうわけか、私の声も掠れていた。叱られた子どものように打ち萎れた声しか出なかった。しかし、それを聞いた彼は、そこで初めてこちらに視線を落とした。涼しげな目元に僅かに感情の波が見えた。

「傷に砂が入ります。そして、流れ出た、尊い神女の血は海に流すのが道理かもしれませんが、帰り道は長い。この海岸全部に血を落としてお戻りになられるおつもりですか」

「まもなく血は止まる」

私の声に、彼は軽く溜息をついた。

「海神の巫女姫とあろう御方が、つまらないことを仰らないでください。あなた様はおひとりしか居ない。この島の巫女姫です。この島の男女問わず命ずることができるのに、あなたはそうしない。・・・邑の娘の方が、まだ聞き分けが良いですよ」

「おまえ、妹と同じだな。・・・私に説教するのは、妹だけだと思っていた」

「説教ではありません。願いです。健やかにお過ごしいただき、この島を護ってください。・・・けれども、この島の平和を守る姫巫女様は、人の姿をした神様だと皆が言うけれども・・・俺はそうは思わない」

彼は、そこまで言うとなんにも無言になった。言い過ぎた、と思ったのだろうか。それとも何か謀を思いついたのだろうか。

「神様が人になったのではなく、人が、神様になったのだとしたら・・・」

「言ってはならぬ」

私はそこで厳しくその言葉を遮断した。

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

●朱月蒼浪 14

彼が重々しく言い出した言葉を、私は遮った。私を抱いていた腕がぴくりと緊張した。巫女がどこから来て、どこに還っていくのか、島人は論じてはいけないことになっている。今まで、そんなことを考え口にした者はいなかった。

存在そのものが揺らぐからだ。そして、この島の巫女は永らく交代がなかった。

「それ以上は禁だ。踏み込むな」

「・・・申し訳ありません」

「謝ることはない。しかし、越えてはいけない」

それから、私は彼の胸の中で肩を縮めた。父なる海神が、浪に乗った私と彼の会話を聞いていなければ良いのに、と思った。

そして、私はそっと忠告した。

「おまえが滅ぶのを見るのは忍びない。・・・妹も哀しむ」

「あれは、臙様に捧げました娘。妹とはいえ、もう長い間、同肚としての会話はしていません」

それに、俺は滅びませんよ、と彼が自信たっぷりに言ったので、私は嗤った。

人はいつか命を閉じる時が来る。

私を残し、命は巡り、そして彼も老いてやがて海に還るのだ。私を置いて。

「これほどまでに小さくて軽やかで邑娘よりも嫺やかな方を御守りするの、島の者のつとめです。島の男は皆、誇りに思っています」

私はその言葉に黙ったままだった。

いつもの・・・もっと言葉の少ない私しか知らない彼は、少し戸惑い昂揚しているように思えた。誰かに忠告することはしない。特別な何かを施すこともしない。

ただ・・・自分の身体から昇り立つ血の香気が私と彼に違った会話を交わすことを唆したのだろうと思った。

互いに、なぜ、ここに居るのかと理由を聞かなかった。

しかし、私はぼつりと言った。

「おまえの目的は果たさずに終わってしまったな」

夜の漁は禁忌とされているから、紅い月の時にしか、彼は誰にも知られずに針貝を採ることはできない。彼の腰元の貝壺は空のままだった。潜ろうとして、私を見かけたのだろう。彼も同じ様に潜れば・・・私のように切傷に塗れることを承知して、彼は潜ろうとしたのだ。

それほどまでに、愛おしい者が、彼には存在するのだ。

海から風が吹いてきたので、私は顔を上げた。彼は私を抱え上げて歩くことに疲弊することもなく、決して私の身体に眼を這わせることもせず、長い砂浜を横切っていく。

いつの間に、こんなに大人になっていたのだろう。

彼らを見てきたつもりであった。誰かを特別に思うことは禁じられていたし、そもそもそういう感情を持ってないと思っていた。

長い生命の間で、記憶に残る者は大勢居る。

けれども・・・自分の秘密を見られてしまうと、私が迂闊であったからだ。

必要があれば、そういう者たちが口伝でも伝え聞かせることのないように、命を滅してしまうのは簡単であった。それが手っ取り早い方法であった。

私はきれいな事だけでは済まされないことも行うことができる。

しかも、そう望んだ瞬間に、すぐさま実行できるのだ。

彼らは・・・私の知らないところで、大人になり、私の知らない者として私に接する。

「・・・臙様の目的は達成されたので、それで今宵は良いのです。俺は満足しています」

私は唇を噛んだ。私を邸に送れば、戻って来た頃にはもう海には潜れない。間もなく潮の流れが最も速い時間を迎えるからだ。

禁を犯し、言い伝えを無視し、それでもやって来たいと思い定めた紅い月の夜に・・・彼は諦めると言う。

今度はいつ朱月の夜を迎えるのか、わからない。

彼がこの機会を諦めるとは思えなかった。

・・・命の危険を考えながらも、彼は今一度・・・この海に来て、海に入るのだろうと容易に想

像できた。

それでも、彼は私になぜ、供も付けずにここに居るのか、尋ねなかった。私は何かをしたくてここに居るわけではなかった。ただ・・・誰も来ないから。誰も私を見ないから。だから、朱月蒼浪に浮かんで沈んでみたくなった。

父なる神は、月の神と見合わせて、苦笑していることだろう。

私は・・・人から神になった。神が形をかえて私の中に入り込んだのではなく、私は人であったから。最初から、人であり人で終わるから。

どれほど長い時間を生きていても、神は人のひとりひとりの心を知ることはできない。人はやがて死ぬからだ。知ったとしても、叶えたり言葉をかけてやることはできない。だから、在らざるモノが徘徊するのだ。救いを求めて、願いを届けたくて・・・それで彷徨う。

私は身体を震わせた。どうして震えるのかわからない。でも、私は人なのだ。

●朱月蒼浪15

血を流すし、身を震わせる。仙籍に入っているが、私はまだ・・・人の世に未練があった。私は人であると・・・私を抱く彼は私をそう言った。

私に触れる男はいない。この島では、誰も居ない。男であっても女であっても・・・私に触れられない。けれども、彼は笑って言った。

「・・・紅い月の夜に免じて、ご容赦ください。・・・俺は、あなた様をひとりそのまま置くことができなかつた。妹に叱られるから」

それは、言い訳かもしれない。

彼が針貝を採取するのに、私が邪魔であったと考えることもできた。

そして、誰も知らない私の行動を把握したと、内心、ほくそ笑んでいるのかもしれない。

それでも・・・それでも、良かった。

「臙、と呼べ」

私は小さくそう言った。彼は、そこで初めて立ち止まった。

「私の名前だ」

彼はぎゅっと形の良い、左右対称の唇を引いた。見目の良い彼の身体に触れたいと思う者は多いだろうと思った。島の若者達の噂話を聞くことに興味はなかつた。

「それは私の妻の名前です」

彼が、そう言ったので、私は下を向いた。

オボロはこの島では異質の存在であった。高貴な姫君であると言う。島の果てで・・・命の危険を感じ、彼女の血族が島に逃したのだ。

こういう者は多かつた。高貴な血筋の末裔が血脈を守るために、島に送るのだ。そして系譜を守り続ける。ここなら、外からやって来た者は居るが、外に出る者は少ないからだ。譜系を守ることが、最優先とされる。

彼女はいつか・・・この世を統べる者の血脈として名前が残る。

けれども、私には何も残らない。臙姫と言われているが、私は・・・私の名前さえ残らないで泡になっていくことを受け入れているはずなのに。

同じ名前の・・・同じ名前の娘は、彼の心を奪い、彼に何もかも投げ捨てようという気にさせ、そして・・・そして、彼を狂わせる。

この島には、私と同じ名前を持つ者は居ない。不遜とされるからだ。オボロだけが、私と同じ名前で・・・そして島からは疎まれているのに、彼は庇護しそして妻に迎えた。彼は、この島を統べるに相応しい人物であるのに。

「もっと前から、私の名前だ」

私は反論した。なぜ、彼がそのような事を言うのか・・・理由はわかっていたからだ。

「妻の籍を認めてください。あれは・・・妻は、病を持っている。あなた様の脅威にならない」

私は黙って居た。彼女が島に持ち込んだものは、多岐にわたる。そして・・・脅威にならないものは何一つ、なかつたからだ。

彼女の身に救う病は・・・いつか、思わぬ時に、この島の脅威となるだろう。それはわかっていることであつた。わかっていることで・・・そう・・・私には、わかっていた。

滅びを望んでいるわけではない。

私は嗤った。そして告げる。

「おまえの妻は私の名を奪い、そして海神に混乱をもたらした。けれども、おまえが望むのであ

るなら・・・私は」

そこまで言うと、彼は笑った。笑いながら、私に微笑んだ。紅い月を憶することなく見上げて・・・彼は挑むように言った。

「朧様。私は、あなたと妻を同じと思うことはありません。神の娘を娶ったとも思いません。あれは・・・ごく普通の・・・娘です」

私はそれを聞いて、頭を殴られたような衝撃を受けた。

咎を受けることを承知して、この男は自分の未来を決めたのだろうかと思うと・・・ただ、遣る瀬無くなった。

彼は私利私欲では動かない。利己的になるのは・・・彼女の為だけである。

・・・愛する者の為であるなら、自分の誇りを捨てる。

簡単に。

呆気なく。

自分を唯一の個と思わない。

それはこの島の特徴であった。

個は全であった。しかし全は個にならない。

自分は・・・己の存在だけを主張することはない。

しかし、朧の名前で何かを唱えれば、それは私の命令になるのだ。

彼は、それを知っていて・・・娶ったのだ。

私の名前を奪う者を。永らえることのできない命を。

私は、そっと・・・小さく言った。

「おまえの妻の名前であるが、私の名前だ。・・・忘れなきよう」

「御意のままに」

彼はそう言って、私に誓った。決して、私を裏切らないと。しかし、それは私ではなく、私の名前に誓ったに過ぎなかった。

●朱月蒼浪16

ひとりの男として、私を感じるか・・・尋ねることはできなかった。

彼には正規の手続きを経た末に得た妻が居る。

身分が高く、そして彼の籍に入れることのできないほどに高貴な姫を彼は娶った。

病に倒れ・・・彼の生業を支えることができないのに、彼はそれでも良いと言って彼女を招いた。

「オボロは幸せだな」

私はそう言った。私と同じ名前の娘を娶った彼を責める理由はなかった。ただ・・・たまたま、偶然に私と同じ名前の娘を見初めた・・・ただ、それだけであった。

それに理由を求める理由はなかった。

それは私の名前であったけれども、私のことではなかった。

それに彼は応える。

「あなた様と同じ名前で・・・幸せに思います。俺はあなたを娶れない代わりに、あなたと同じ名前の者を娶った」

彼の言葉に私は黙った。

私に焦がれたから、彼女を娶ったのではない。

わかっている。

彼女がどんな名前でも、彼は彼女に惹かれたのだろう。

私と同じ名前でなかったとしても。彼は・・・彼女を、唯一の人として欲したのだろうと思っていた。

人の定めの中には、抗えない約定が存在する。それに人は誰もが運命を感じるが、自分で定めたものだと思えることによって、その存在を認知するのだ。

一度だけ。

彼は・・・彼は、私に言ったことがあった。もっと幼い顔をした、少年の頃に。

「朧様。俺はあなたを妻にすることができますか」

私はその時に、何も答えなかった。その報いと答えが、今、ここに在った。

長い生の中で・・・彼だけが、私に尋ねた。

妻として良いか、と。

少女のままの姿で生き存えなければならない私に、彼は人生を添わせようとしたのだ。戯れであ

ったのかもしれない。気紛れに言ったのかもしれない。けれども、私には生涯唯一の・・・求婚の言葉であった。巫女が夫を取るというのは、死を意味する。けれども、巫女の後継を残すことまでは許されていた。自分の腹を割いた子かどうかは問題ではない。この島を護ることができる者を残せるかどうかなのだ。

・・・彼は、そこまで深く考えなかったのだろう。

そして、いつまでも年齢を感じさせない少女のままの私に、彼は何気ない言葉をかけただけにすぎない。

「俺の妻になってくれませんか」

誰も・・・誰も言わなかったのに。

私は、女の形をしているが、牝ではない。

特定の愛を受け入れることはしない。

春を驚ぐこともない。決して・・・誰とも交わらない。

それなのに、彼は無謀にもそう言ったのだ。

そして黙ったままの私に、頭を垂れた。

「分を過ぎた願いをかけました。・・・俺はこの島の異端ですが、あなたを慕う気持ちは皆と同じです」

そして、彼は私の前から姿を消した。折々には姿を見せるが、それでも、彼の気配を消してしまっただけだ。・・・そう。あの人を自分の妻にすると決めるより前の彼の消息を私は知らなかった。

妹が私の側に仕えるようになったが、彼女も兄の詳細を知らなかった。

でも、それで良いと思っていた。

私の中に漣として泡立つ感情は、あってはならないものであったから。

長い歴史の中で、そんな風にして・・・私を乱す者が居ても認めようと思っていた。それが、巫女姫としてのつとめだからだ。

誰に何を言われても、何をされても・・・神事を先行させると誓った者は、何よりもそれらを優先させる。私も同じであった。

彼より・・・巫女姫であることを選んだのだから。だから、彼がその後の人生を別の者と歩んでも、それは私を乱す要因にならない。それなのに。

それなのに・・・彼の妻は、私と同じ名前だという。

この島で、不遜極まりないと眉を顰める名前だ。それなのに、彼女が齎す莫大な利益が彼と彼女の妻問婚を正当化させた。

彼は夢中になった。高貴な姫が・・・自分の妻になったからだ。そして、その姫は、私と・・・この島で、唯一の、巫女姫と同じ名前を持っている。

彼に抱かれているのに、私の震えは止まらなかった。紅い月の下で・・・私は、自分の暗い炎に焼かれているのだ。今、彼に抱かれているこの瞬間に。

●朱月蒼浪17

彼は。

私の前で、オボロ、と妻の名前を呼ぶことはなかった。

それが島巫女に対し、どれほど蔑む行為なのかということを知っていたからだと思う。

・・・私は、問題視しなかったのに。彼は、私と彼の間にも生まれる問題より、世間一般の課題の方を重視した。

オボロは宮家に通じる高貴な血筋であると言う。それが、政治犯となった父の影響を受け、断絶の憂き目を避けるために、この島に流れ着いた。男子は皆、頸を刎ねられたのだという。彼女にも、許婚が居たが、入り婿になるために彼女の家系の籍に入れた途端に、頸を刎ねられたのだと言う。

不運としか言いようがなかった。

やんごとなき身分の者が・・・島に流れ着いて、病を持ち、そしてその島の男の妻になるしか生き残る方策がなかった。

そこに愛があったかどうかはわからない。そうであれば良いのに、と思うし、彼のあの態度から見ると、少なくとも彼はこよなく彼女を愛している。

彼女が生きている間には、家の復興は望めない。それなのに、彼は・・・彼は、彼女を欲した。

この後、彼らの間に生まれる血脈は・・・この世界を揺るがす存在になるのであろう。それを証明することは難しかったが、この島に居る限りは容易であった。

この島から出ていく者は居ない。だから、この島の血統は管理されており・・・確実な血筋として保証されるのだ。

彼女は、ここから外に出て行けないことを引き替えに、彼女の血筋を絶やさないことを約束させたのだ。

彼女と彼の間の子ができなくても・・・神事に仕える巫女の側女に彼の妹が居る。

それは、血族の断絶はあり得ないことを意味している。どこかの血筋が絶えても、巫女に仕えた者の血族が記録に残り、その者と少しでも血が繋がっている者は、親族として証明されるからだ。

この島で、音だけで呼ばれることは、蔑視されていることと同義だ。私には「朧」という名前があるが、彼女は、どんな文字であったのかさえ・・・逸れすら剥奪されて、島娘と同じ生を生きている。

健康で、幾人も子を産むことのできる娘を妻に迎えば良かったのに。

それなのに、彼は・・・それを放棄したのだ。

私は、彼の腕の中で溜息をついた。

ここで下ろせと言っても、彼は聞き入れないだろう。私の身体を見ても、私の吐息を聞いても・・・この晩だけの秘密だと知っていても、彼は私を姫御子としてしか扱わない。それが、島の者のつとめだからだ。

妻になってくれますかと言った少年はもう居ない。

私に向かって禁忌を越えてくれるだろうかと言った者は、もう居ない。

同じ肉の器であるけれども、私を抱く肉体は、もう、私の知っている光波の主ではないのだ・・・

それを感じるだけで、愛はないと知っていても、どこか私の心は平穏でいることはできなかった。

「朧様に触れる栄誉を生涯・・・忘れません」

彼はそう言った。前を向いたまま。私に言の葉を落とすことはしなかった。

逞しい身体の中に私は収まっていた。太陽の恵みを受けた腕も胸も・・・私ができることのできないものばかりであった。

彼は彼の妻に触れるのに、同じ様に私に触れたのに・・・それは神の奇跡だと考えている。

愚かな男だ、と思った。

それでも、他の数多居た、島の男達と違っていた。

彼らはどんなに餓えていても私に触れなかった。

そうしたことによって、自分のもたらす罪の深さの大きさが・・・自分が堪えきれないほどに大きいものだと知っていたからだ。

それなのに、彼は「栄誉だ」と言う。

これはまったく不思議なことで・・・とても認めがたいことであった。

自分を捨てて、何かをしたいと思う者が・・・存在しなかったのである。

それなのに・・・彼は、私を抱く。抱いて、海岸を横切る。もし他の者が遭遇したのであれば、付きの者と呼びにやるだろう。私に触れてはいけないからだ。

・・・触れてはいけないからだ。

こうやって傷ついているのに、その血さえ、触れてはいけないと誰が決めたのだろう。私ではなかった。それなのに。それなのに、彼は、この島の決め事を無視して私に触れて・・・私を抱き上げた。私の身体が眩しいと言い、私をひとりの島娘のように取り扱う彼を・・・私は特別と思わないでいると言う方が無理であると思った。

●朱月蒼浪18

私は彼の肩越しに浪を見た。浪の上の月を見た。大きく見える紅い月が、浪の表面を輝かせており、それはとても禍々しいけれども・・・とても美しい、と思った。誰に見られるわけでもないのに。それは、そこで輝いている。

私を軽々と抱き上げる腕の中で、私は身を竦めた。

「どこか痛みますか」

彼の声は掠れていた。
私を見下ろすことは、いけないのだと自分に禁じているようであった。

彼には妻が居て、私はこの島の巫女姫だった。

・・・それなのに、私と彼は秘密を共有した。

紅い月の夜には、海に出てはいけない。外の気配を感じてはいけない。

本来なら、こんな不吉な暁の夜には彼は妻と肌を温め合って夜着を湿らせ、外の気配さえ感じないほどに溺れた夜を過ごすはずであるのに。

・・・彼はそんな普通の睦みを放棄して、妻のために海に行こうとしていた。

私の身体の痛みはいつか消える。瑕も消える。

けれども、胸の奥の疼きはどうしたら消えるのだろうか。

この男も、いつかは海に還る。私は、そっと言った。

「・・・私の血を吸ったものはすべて焼いて灰にしろ。その灰も海に流してはいけない」

理由を言ってもわからないだろう。今もこうして滴下する血の粒に寄ってくるモノが見えていたのだったら、私を抱き上げたまま邸に連れて行こうとすることすらできないほど驚愕するに違いなかったから。でも、私は、彼が見えなくて良かったと思った。見えたのなら。感じたのなら、私を抱く腕の力を緩めて彼は私から離れて行ってしまおうから。

血の匂いに寄せられて、蠢く者たちの気配を感じていた。しかし危害を及ぼすようなモノは近付いてこない。

彼は、私の命令に不思議そうに首を傾げた。

「聖なる巫女姫の血を、海に還さないでどこに帰すのでしょうか」

私は嗤った。私の身体から流れ出る血は特に、在らざる者たちを酔わせるのだ。血に酔うのに、彼らは私に寄ろうとする。私に滅されることがわかっているのに、彼らは徘徊し命ある者たちの魂の温度を食らいつくそうとしている。

「・・・純潔を父神へ献上した。その代わりに、私の血は父を呼ぶ」

だから、軽々しく血を海に流してはいけないのだ、と言った。こう言っておけば、彼は私の言葉を守るだろう、と思った。謀りではなかった。確かに、私の血肉が父神を呼ぶのは本当だ。

しかも、それは特定の誰かの願いを叶える招喚ではなかった。それは必ず嵐を伴った。

そして、この程度の血では海神は目醒めない。

集うのは、血臭に酔って近づいて来る憐れな魂達だけであった。

「だから、私が望まない時に、私の血を海に流してはいけない」

そうですか、と彼は呟いた。

この時に、彼の表情をきちんと観察しておけば良かったと思った。

・・・彼は、その後までずっと、私の血を拭った手拭いと上衣を所持していたのだ。

家の奥深くにしまい込んで、自分の寝所の床下に隠して置いた。

・・・それが、その床の上に眠る病弱な妻の身体を蝕むことになるとは、まったく思っていなかったのだ。

何かに使えると思ったのだろうか。

けっしてしてはいけないと言われたことを、彼はしてしまったのだ。

私の望まない場所に落ちる血肉は、私の意図しないところでは単に餌でしかない。

私の血に酔って、弱った命を啜るモノが近寄ってきても、私の望まない血だまりにはそれらを守ってやる力は発生しない。

単に更に狂わせるだけでしかない。

もっと、早くに気がつけば良かった。

そして、彼女を生き返らせると懇願し、私がそれはできないと言うと・・・彼は、今度は海神に頼むと言って、その衣を纏い、手拭を握りしめて沖に出たのだ。それが何を招くのか、知っていたようで知らなかったようで・・・

しかし、私はその時には考えていなかったのだ。

こうやって神の崇りを畏れる気持ちを利用して、私は自分の愚かしさを隠そうとしたのだから。

私を取り上げて、自ら焼けば良かったのだ。しかし、彼の衣を自分で焼くことができなさそうだと思った私は、彼を謀って便利に使おうとした。その報いを、後になって受けることになったが、私は後悔しなかった。

そういう愚かな男だから・・・愛おしいのだから。

砂が途切れ、枯れ木で作った段を上ると、もうそこは石畳が続く邑への路であった。草鞋さえ履いていなかったのですか、と彼が溜息混じりに言った。私の潜った海は、岩が多く、海沓を履かなければ足場を確保できない場所だった。

そして、私の邸はこの坂道をずっと登ったところにあり、裸足で出歩くのは無謀だと私に彼は優しく諭した。

「・・・あなたは、この島のただ一人なのですよ」

私は遠くなっていく浪と紅い月を見つめて、その言葉を無視した。確かに、私はこの島で唯一の巫女神である。けれども、この島に居る誰もが唯一であり、代替という存在は居ない、といつも教えているのに。彼は、こんな風にして唯一とか特別とかいう価値を付したがった。

「・・・ただ一人なのですよ」

彼の妻と同じ名前を持つ私に、唯一と繰り返して囁く彼の齟齬を指摘してやった方が良いのだろうか。

彼の唯一と、私のそれは違う。私には唯一などは存在しない。皆が同じで、皆は等しい。皆が悉く尊いのだ、と言っているのに、そう教える私の中には唯一などというものは無いのだ。たとえ、父たる海神でさえ、私の本当の父ではなかったし、私の不遜な態度が神の逆鱗に触れてしまったのであれば、私はとうに塵になって消えているはずであった。

「あなた様が本当は・・・こんな風に無茶を為される方だと知っている者が居れば、こんな夜にひとり海におわすこともないでしょうに」

彼の腕に、少し力が入ったような気がしたが、それは坂道にさしかかり、傾斜が大きくなってきたからなのだと思うことにした。私は何かに期待してはいけないし、そんな必要もなかった。

彼は確かに、この島の異端であった。ごく稀に・・・血が凝り固まったかのようにして眉目の整った者が生まれる。彼も優しげな風貌をしていたが、彼の妹はそんな彼に対して何か思うところがあるようであった。

幼い時には、あれほど仲が良く、片時も離れないで過ごした同胞であるのに。

私の心中を察するほどに力があるわけでもないが、あの妹は私の気持ちに同調するようであった。彼が妻を娶った経緯を今でも許していないらしい。

日焼けした肌が闇の中でも艶やかに暁を照り返していた。

「・・・私が消えても次の巫女が出る」

彼はそこで初めて私を見た。正面から、ぐっと強い表情で、私を見下ろしたので、私は唇を閉じた。なぜ、彼の前では我が侷なこどものように、拙い言葉を繰り返してしまうのだろうか。

「朧様」

彼は私の名前を呼んだ。明らかに、彼の妻であるオボロに対するものと違う呼び方であった。

・・・浪の音がした。

海から上がって随分経過し、坂の上に入ってしまうと防風林のために波音は小さくなってしまいうるのに。

紅い月の下で、彼は私の顔を覗き込んだ。

「俺が今、こうして恐れ多くもお連れ申し上げている方は、島の希望なのです。島の平穏なのです。なぜ、わかってくださらないのか」

「おまえこそ思い上がるな」

私は彼にそう言った。彼の整った顔が一瞬歪んだ。彼の瞳の中に、一瞬だけ危険な暁が宿る。こうして自分を卑下しているが、彼は非常に誇り高く自分を侮る者を赦しはしないのだと承知していたが、それでも私は言った。

「私は巫女という役割を持っているだけだ。私が死ねば、次の巫女がやってくる。断続する時代もあるかもしれないが、それでもこの島が禁忌を犯して全てを海の底に沈めると父神が決めるまでは、巫女が島を護り続ける。それは私でない者でも務めることができる」

私は不老であるが、不死ではなかった。いつか・・・いつか、気の遠くなるような長い年月が一瞬だと思えるような必滅の定めを捨ててはいない。

こうして手足は傷つき血を流す。男の肌に触れれば身を縮めて緊張する。私は何ら他の島娘と変わらない肉の殻を持っている。それなのに、誰かと同じ速度で老いていき死んでいくことは許されていない。

私に何を期待しているのだろうか。この男は、私に何を求めているのだろうか。他の島の民のように、自分の家族を癒して欲しいと言うのだろうか。自分の漁が豊かであり続けるようにと願う

のだろうか。次にどの沖に出れば稀にしか捕れない魚を見つけることができるのかと尋ねるのだろうか。

まったく愚かしい。人々は、自分の願いをかけるときだけ私を唯一にする。そして、願いが聞き届けられなかった時や拒まれると私は黄泉神のように穢らわしいもので、海神の神の気紛れを受け継いだ人にあらざる海の獣の姫だと悪し様に言うのだ。

私は憤慨していた。静かに・・・憤りを燃やした。常に臍々としていて、まったく感情の波がないと言われている私が、この男の前では怒りを露わにする。

しかし、彼は私の顔をじっと哀しそうに見つめるだけであった。そして、静かに言った。

「・・・それでも、俺にとってはたったひとりの巫女姫だ。神を娶ろうと大それた言葉を持たせた、俺の海のような人なのに」

●朱月蒼浪20

「やめておけ」

私は唾った。海のような、という表現は、この島では最大限の敬意を表す。父であり母である海に喩える言葉は使い方によっては不敬にあたる。私は産土神や海神の代弁者である巫女という器であるが、神そのものと全く同列というわけではない。

誰も聞いては居ないだろう。こんなに赤い月の夜では、誰も出歩かない。しかし、彼は私にそうやって怖じ気づくことなく囁くのだ。

とても妻を持った男の言葉とは思えなかった。最愛の妻がいるのに、別の者に向かって、海のような人だと言う。これはオボロに対する不義であると詰られても仕方の無い行為だと、彼は承知しているはずであったのに。

「それ以上言えば、おまえではなく、おまえの家族に危害が及ぶ。妹巫女がおる故に、血筋を絶やすことはさせないが、滅するのは簡単だ」

私はそれだけ言うと、彼の胸に手をあてて、腰に力を入れた。

愚かな男の声に耳を傾けることによって、流れ出た血に迷いが混じり、私の力が及ばないモノを呼ぶ可能性があった。

「おろせ。・・・ひとりで歩ける」

身動きした私の身体を、彼が身体を屈め、その場で蹲り・・・私の身体を深く抱き締めたので、私は小さく声を漏らした。彼の腕や胸が私に更に近くなったので、私は眼を瞑った。

「・・・助けてください。オボロを助けてください」

彼はそう言って、私の耳に囁いた。私を地に下ろせば、私が逃げていくと思ったのだろうか。彼は危険なので、近付かないように、と他ならぬ彼の妹から何度も警告されていた。けれども、私はすでに妻帯している男ができることはたかが知れている、と一蹴してしまっていた。

彼は、今夜はもう・・・海に入れなかった。私の血が彼の身体に付いてしまっていたからだ。そんな身体で海に入れば、あっという間に・・・海底に引き摺られてしまう。

だから、彼に触れることを甘んじて受け止め、私は彼を邸まで送らせることにしたというのに。そうすれば、彼はもう今夜は海に入らないだろうと確信していたからだ。

しかし、彼の思惑はもっと別のところにあった。いや、私を見かけて、予定を変更したのだろうか。針貝を摘取ることよりも、もっと確実な方法で、妻を癒す方法を思いついたのだ。

「私は癒す方策は与えるが、奇蹟は起こせぬ」「いいえ、起こせます。あなたは巫女姫です」

私は絶句した。人の力の及ばないことをすることができる。けれども、人を守るための力はあっても、人を生かす力ではないのだ。

この島や海では、掟がある。海で死んだものは海に還し、土に死んだものは土に還す。病を治すことはできるかもしれないが、命を救ったり、永らえさせたりするような、消えゆく定めめの命の長さを調節することはできなかった。

オボロは、もう、消えゆく儂い命であった。それは彼にもわかっていたことであるのに。

なぜ・・・叶えてやれない願いを、囁くのだろうか。

「他の島人は治せるのに、余所者のオボロは治せないのですか」

「そうではない」

私は彼の身体に押しつぶされそうになりながら、声を詰まらせた。人の命を貴賤で定めることはしない。そんなものは、海の前ではまったく意味のないものだからだ。

ほんの少し、苦しみを和らげ、穏やかな時間を持つための方策はあるが、それ以外に・・・死にかけて命を甦らせることはできない。何より、彼女に生きるための強い積極的な欲求がなかった。死にたいとは思っていなかったが、生き存えて幸せになりたいと思う願いはなかった。

自分の血筋を守るために、不本意ながら島の者の妻になった、という動機によって、彼女の生命への渴望を希薄なものにさせていた。

しかし、それでも人は諦めない。だから、それが愛おしいと思い・・・人はそうやって誰かを想うのだということを肯定していたから・・・私は、朱月の海に潜ろうとした彼の行為を咎めることはやめようと思っていたのに。

「おまえの妻には、生きようという気力が足りない。口では生きると言っているが、その実は違っている」

「オボロを知らないからそのように言うのです。・・・あれは、もっと健康で肌焼けも厭わないでこの島で生きていこうと決めて俺に嫁いだのに・・・」

私は溜息をついた。高貴な身分の者が、いきなり、環境が違うと言うには大きすぎる未開の島に流れ着き、そして肌を焼きながら逞しく生きて行くには過酷な場所であった。それまでの食べ物も違うし気温も異なる。白い肌が健康的と思われる茶褐色の肌になる頃には、彼女の内なる臓は弱り切っていたのだ。茶の肌も、少し褪せた髪も・・・それは肝の臓が冒されていたから肌が黒くなり、髪が荒れていただけに過ぎない。

「都合良く解釈するおまえの熱意が・・・あの女を苦しめているとは思わないのか」

私は溜息混じりに言った。私の身体を抱き締めて、延命を懇願する男が愛しているのは、私と同じ名前の女であった。そして、その女は長くはなかった。

●朱月蒼浪21

彼が、己の言葉をそのままに信じているとは思えなかった。

運命の出会いではなかった。惹かれ合う男女が祝福された契りを結ぶ過程ではなかった。

・・・彼女には、定めた相手がいた。それでも、その相手と結ばれることはなかった。しかし、彼女はそれでは死ねなかったのだ。生き存えるために彼女は別の相手を・・・彼を選んだ。

それなのに、彼は自分の妻を助けようとする。

愚かとしか言いようがなかった。そこまで尽くす相手なのだろうか。人の言い交わしに私は介入しない。けれども、彼はどこか・・・私の心に何かを問いかけているような気がしてならなかった。

私は誰かのために心を動かすことはしない。

特定の何かのためだけに奇蹟を起こさない。

私は彼の腕に抱かれたまま、しばらく彼の苦悶に満ちた顔を眺めていた。なぜ、人は人の生に抗おうとするのだろうか。己だけで抗おうとすれば良いのに、なぜ、私や神に縋るのか。生きとし生けるものが終えなければならぬ命の終焉は、それほど恐ろしくて、受け入れがたいものなのか。

・・・いや、違う。自分自身の死や遠き縁者の者の死を受け入れているのに、自分の近い者のそれは受け入れられないのだ。

「巫女に生命を願ってはいけない。・・・わかっていることだろう」

直接、私に何かを願ってはいけない。それは契約を意味するのだから。無償で与えるわけにはいかなかった。だから、私は私に直接願いをかけてはいけないと言っているし、そういう者の言葉は聞こえないふりをした。

贅が必要であるとは言わない。けれども、何も失わずに何もかもを手に入れることはできないのだ。少なくとも、この島ではそう決められていた。

在らざるモノ達の魂を屑にしてしまうほどの霊力を使うということは、この島の均衡を崩してしまう可能性もあるということだ。

・・・同じ様に、死に行く者の命を呼び戻すことによって、本来あってはならない澱ができて、それが他に波及する。

私のように死にたくない、と言う者も居る。

私のように、不老でありたいと言う者も居る。

けれども、私のように肉体はそのままに魂が老いてしまったり、皆と同じように生命への希望や嘆きを共有することのできない生き物として生きたりすることが、それほど羨ましいことなのだろうか。

私は毎朝目が覚める度に、今日も死ねなかったと思う。私は毎日髪を梳いて貰う度に、今日も髪は黒いままだと嘆く。私は・・・毎日、毎月、毎年同じ事を考えながら季節を過ごす。これが、奇蹟を起こしていることに相当するのであれば・・・何と残酷なことなのだろうかと思うが、それを閉ざして私は生きていく。そんな私の沈んだ見えない心を見透かして、私は朧姫と言われるのだ。

あの赤い月のようにはっきりと凜然とした暁を決して持たない、霞んだままのとらえどころのない神姫として名前を呼ばれる度に・・・私の心はひとつずつ、段階を経て死んでいく。

「死に行く者を呼び戻したり・・・死んだものを還さないでいると、それはもう、次に目醒めた時には人でなくなる。魂は戻らないからだ」

「それでもいい」

絞り出すような声で、彼は呻いた。私の首筋に、彼の吐息が降り注いだ。決して触れてはならない巫女の肌に、彼は額を押し付ける。

「禁忌によってこの海に島が沈んでも良いと・・・おまえは言うのか」

私は眉を顰めて言った。確かに、この男は危険であった。

こんな風に、何が亡んでも良いと思うくらい、強い欲求を持つ者はこの島には居ない。

この島のモノ達の願いは小さかった。

特に、生きる者の願いはとてもささやかであった。

せいぜい、身の回りの継続しない小さな幸せを願うだけであった。

自分の家系が繁栄するように、とか。

将来を交わした娘と約束を反故にして別の娘を好きになってしまったとか・・・そういった類の願いを幾つか積み重ねるだけの人々が抱くような望みではなかった。

この男の願いは・・・明らかに違っていた。人の理を乱そうとしている。

・・・私はゆっくりと身体を起こした。これ以上、この男の身体に近付いて居れば、私の手足から流れ落ちる血雫が彼を蝕む。・・・こんな風にして強い願いを感じてしまうのも、赤い月の下で蒼い浪に泳いだ私の身体に触ったからだ。彼の気分が高揚しており、抗えない力に任せて自らを失っているのは明白であった。

私は、そうに違いないのだ、と思うことにしたのだ。

●朱月蒼浪22

彼の肩を押し分け、私は彼から身体を離す。

彼は力なく私を離れた。

傷ついた足の裏が坂道に触れるとひんやりとした感触とともに染みるような痛みが伴った。けれども、私はその痛覚が私を引き戻すのだと思い、痛みを顔に顰めることはしなかった。

「・・・そして、魂が戻ってきたとしても、死を見た者は、それ以前の者と同じではなくなる。

感じ方もものの見方も、そして何が大事なのかも変化する」「それでもいい」

彼は再びそう言った。私はもう、言葉にすることはなかった。巫女の忠告は単なる気休めであったりすることはない。

「おまえは」

私は、起き上がって蹲ったままの彼を見下ろした。自分の拳から血が落ちた。・・・自分の手を強く握りしめているので、切った手の平から血が滲み出し、指と指の間から乾ききらない衣から流れる海水と相まって地面に向かって零れ落ちていた。

いけない、と思っていた。怒りが喚ぶモノは厄介だ。

ただ、私のさざめく感情が山の木々の奥に眠るモノ達を呼んでいることはわかっていた。巫女の感情は、大地を揺り動かし海を乱し、空を曇らせる。だから、滅多なことで自分を見失ってはいけない。・・・私が朧と呼ばれるのは、それ故だ。

これほど長く生きていくと、その傾向が強くなる。

少しの感情の乱れが、律せなくなる。

逆かと思っていたが、そうではなかった。

長い時間を生きていけば、人や命について理解が深まり、多くの命を見届けることによってより静かに・・・海のような浪の不連続でさえ乱れていると感じるほどに穏やかになれると思っていた。

しかし、違っていた。

年月を経過するほど、人を理解できなくなっていくのだ。

同じ時間を共有できないから。同じ生命を分かつことができないから。私は・・・人の命の環から弾かれてしまったから。
だから。

私は、どんどん、人から遠退いていく。

その一方で、聴かざる者たちの声がより鮮明に聞こえるようになり、見えないモノはいつでもどこでも私の目の前に姿を現す。
だから、いけない、と思った。
私のこの乱れが・・・喚ばざるモノを喚び、招いてはいけないモノを招いてしまう。
私は・・・淡く灰かに静かに生きていくことが求められている。

「おまえは、逆罪を背負うと言っているようなものであることを、承知しているというのか」
妻と死に別れて再婚する者も多かった。この島では生涯ただひとりの者に添い遂げるといふ風習はなかった。血筋を残すためだけに、血族結婚となることも厭わない家もあった。
・・・だからこそ、彼は許婚と死に別れた彼女を娶ることができたのだから。

私は続けた。

「おまえはそれで満足だろうが、おまえの心根がこの島を滅す結果に近付けることになるのであれば、私は巫女として忠告する。・・・これが最後だ。
死による無を受け入れろ。虚を認めろ。・・・おまえの妻を海に還すことを躊躇うな。あの女は海に生まれた者ではないが、土に還さず、海に還すことは認めてやろう。けれども、器だけに固執すれば魂は彷徨うことになる」
私はそれだけを言うと、大きく溜息を漏らした。・・・赤い月が私を饒舌にさせているのだろうか。
この男の仄暗い炎は己だけではなく、この島そのものを焼き尽くしてしまう。
はやく鎮めなければならなかった。

彼はゆっくりと顔を上げた。彼の唇は震えていた。

そして、静かに・・・低い声で、私に尋ねる。もう、尋ねてはいけないと言っているのに、この男は私に問いかける。

「・・・俺が大罪を犯したからですか」

「痴れ者よ、さがれ」

私は語気を荒くした。

・・・これほど感情を律せない瞬間は、いったいどれくらい久しくなかったことなのだろう。
あの女が苦しむ結果になるというのに。彼自身も業火に灼かれるというのに。それなのに、それでも良いと願う彼の願いが脅威であった。父なる神は些細なことも見過ごさない。鷹揚な神も命の理には厳しかった。

●朱月蒼浪23

私の声は、もう、彼に届かなかった。どんなに引き止めたいと思っても、命は他者の自由にして良いものではない。本来死ななければならない者が死ぬ、ということはある得ないのだ。その瞬間が、その者の死なのだ。

どれほど不本意であったとしても、死を取り消すことはできない。だからこそ、人は懸命に生きるのだ。一度しかない、常に変化し、限りがあるものだから・・・輝いているのだ。

神巫女を娶ろうと思ったことは罪にならない。それは私が赦しているからだ。彼の妻問いに答えなかったことにより、それはなかったことになっていた。

「慢心は身を滅ぼす。おまえだけを滅ぼすことはできない。おまえの妹は御子神の傍巫女であるからだ。系列の者は抹消できない。それを知っているからそのような狼藉を・・・願ってはいけないことを巫女に向かって平然と言っているのだから・・・おまえではない者に禍が落ちる」

彼は坂道の石畳の上でしばし呆然と私を見上げていた。

・・・これで良いのだ、と思っていた。

彼の妻も、彼も救う事は出来ない。
私に依頼して断られたと思うだけなら、それでも良い。
私は人の呪詛では死なない。そして、私を殺したいほど憎んだり妬んだりする者はこの島には生まれえない。・・・そういう仕組みだからだ。
しかし、この男はいつか・・・いつか、この島を滅ぼすような罪を重ねていくことになるのだろうという予感があった。
この時に、彼を海に還してしまえば良かったのかもしれない。
けれども、私はそうできなかった。
彼の妹は私の側女だ。神事に仕える者の近親者に穢れを置いてはいけないことになっているが、穢れるから滅したということは正順ではなかった。

「あなたを愛おしいと思う者を、捨てるのですか。・・・私を愛おしいと思ってくださらないのですか」

彼の眦に涙が浮かんでいた。私は首を振った。

「島の巫女として愛おしく思う。憐れに思う。しかし、それ以上のことを願ってはいけない。赦しは一度だけだ。私の名を洗すのであれば、いつでも・・・滅びを喚ぶ者という烙印を押すぞ」

そこまで強く言ってから、私は少し・・・声調を落とした。

肩を落とした彼のあまりにも打ちひしがれた姿が・・・とても惨めで小さく感じたからだ。私のことをあれほど軽々と抱き上げた男は、私の目の前で、妻の治療を断られて、小さくか細く震えながら、項垂れていた。

彼の諦めを確実なものにするために、私は言った。

「私は誰か特定の者を愛でる心を持たない。だから、おまえの気持ちがわからない。けれども、だからと言って当たり前のことだとは考えていない」

彼はそこで、私を見上げた。

地を這い、絶望に身を灼いている男は、私のことをじっと見つめる。

・・・それが小さな嘘を孕んでいることを、彼は見抜いていたのだろうか。

誰かを強く愛することはない、と言っていた私の言葉を、彼は嘘だと感じていたのかもしれない。

しかし、それを問えば私は否定しただろう。また、驕る者の戯言だと言って遇うつもりであった。

彼は、しばらくの間、私を眺め回していた。

私よりずっと背が高く、体格も良く、私など捻り殺してしまうことは造作もないほどに逞しい青年は、私のことを見つめていた。ただ、見上げているばかりであった。

先ほどの、私が赤い月を眺め上げていたように、同じ様な視線で・・・虚ろな瞳を彷徨わせていた。所在なげな、寂しそうな瞳であった。

今宵、彼は妻のためにできることは何一つなかったと打ち萎れて邸に戻るのだろう。

針貝を取ることもなかったし、私との約束を取り付けることもできなかった。

どれほど金品を摘んでも、どれほど豪華な食を用意しても、彼の妻は健やかな肉体を取り戻すことは出来ないのだ。

「・・・あなたは知っているはずだ」

彼は、呻くように言った。その一言で・・・私は黙り込んでしまった。それまで、いつにない口数の多さに、私が何か・・・いつもと違うことを授けるのではないのかと期待しているかのような口振りであった。

彼の整った優しそうな顔が苦悶していた。

どこに行き着けば良いのかわからないという表情であった。

出口が分かっているのに、そこに行けばすべてが終わってしまうと知っているから、そこに行き着けないのだろうと思った。

どれほど教え諭しても、彼には、私の言葉は単なる煽りとししか聞こえなかった。
「あなたは・・・俺に言った。学を教え智慧を与え、この島の者を導く御方が・・・俺に言った。・・・己は尸（かばね）だと言った」

私は黙ったままだった。

遠い昔に、彼に言った言葉を思い出していた。確かに、私は一度だけ嘆いた。彼ら兄妹の前で、一言だけ言った。

永遠に健やかでいて欲しいと言われて、居たたまれなくなった私は独りごちたのだ。永遠を願われると私は激しく憤った。彼らの永遠と私のそれはまったく種類が違っていた。私の永遠は、文字通り・・・終わりも果てもないのだ。この渺茫とした海のような時間を生き続けろと願われて・・・私は、私を滅することはできないのだろうかと思案に考えるのだ。

彼は顔を上げて、言った。

切羽詰まった言葉に、私は拳を握りしめたまま、ただ無感動を装って、平然としている眼差しを作ることに集中した。

彼の妻の命は長くはない。

私と同じ名を名乗った咎だと言う者も居れば、彼の妻であることに耐えられないほど気位が高いからだと言う者も居た。

けれども、少なくとも、彼と彼女夫婦であり、どんなに心が通わなかったとしても、婚姻関係は記録に残るのだ。・・・この島ごと消え失せてしまわない限り。そして、いつか迎えに来るかも知れないという不確実な未来を待ち詫びて、彼女は自分の記録をこの島に残す代わりに・・・目の前の男の妻になったのだ。

「・・・あなたは肉の殻を捨てたいと思っている。オボロは肉だけを残せばそれで良いと思っている」

私はそこで彼の名前を呼んだ。背筋に緊張が走り、私の両腕と両足に邪なものが趨ったときと同じ悪寒を感じたからだ。身体が冷えたからではなかった。

彼の昏い欲が・・・私の体温を奪っていくのだ。触れていた時には、あれほどあたたかであったのに、彼の言葉が私の身体を芯から冷やしていく。

・・・彼が何を考えているのか知ったからだ。

誰も・・・誰も考えつかないことを、彼は私に打ち明けようとしている。

言っただけでいい、と遮ることができなかった。私の不用意な発言が彼を冥途に落としてしまったのであれば、私はそれを最後まで聞かなければならないと思ったからだ。しかし、もう一方で、長い間、朧姫と呼ばれて暮らしてきた自分の内なる声が、私にやめておけと囁く。

けれども。

いつもの通り、聞こえなかったふりをすることができなかったのだ。

「・・・おそれを知らぬ虚け者め」

私の罵りを彼は平然と受け止めた。しかし、彼は怯まなかった。

私の顔を見上げると唇を強く噛みすぎて白くなった彼の唇が動く。

彼はこの島には収まりきれないのだと思った。本来なら・・・ほとんど前例のない、離民としてこの島を出た方が良かったのだ。それなのに・・・彼はここに留まった。彼には彼の信念がある。そしてそれに基づいてここに残った。

「オボロの肉体にあなたが入り、俺んだら魂を呼んでやってくださいませんか」

「黙れ」

私は叫んだ。私の拳はぶるぶると大きく震えだした。怒りなのか恐怖なのか、わからなかった。私の言葉を聞かない者との会話が、これほど脅威であると思っていなかった。そういった経験をほとんどしていなかったからだ。長い時間を生きてはいたが、この島は他の島の争乱とは無関係の場所であった。

彼の言霊は最後まで述べられることによって・・・赤い月の下で呪禁となった。遮ることもできたのに。

私は・・・私の中の欲望を見透かされたかのようで、何も言えなかったのだ。彼の言葉を最後まで聞いてしまった。

「おまえは、何を言っているのかわかっているのか。正気なのか」
私の問いかけに、彼は嗤った。挑戦的であるのに、弱々しかった。
そんなことは昔から承知しているのに、という呆れた気配も含まれていた。
「もう狂っているのでしょうか」

彼はそう言った。

「卑しき身に落ちた者の内に・・・あなたに入れと言っているのです。しかし、永遠でなくなるかわりに、あなたは次の巫女を迎えても消滅することはない。永遠であるのに永遠ではない限りある肉体の中で・・・清い魂は生き続けるのです」

私は絶句した。言葉を失った。何も言うことができなかった。

・・・この男は狂っている。私ではなく、あの女を愛しているというのに、魂はなくても肉が残れば良いと言うのだから。

●朱月蒼浪25

「おまえは私もオボロも辱めたいと言っているのだぞ」

私の言葉に、彼は、そうですね、と言って頷いた。まるで他人事であった。

魂を失った者はすでに人ではない。一度魂が出てしまえば、その身体の持ち主が戻ったとしても、既に「そのもの」ではなくなってしまうのだ。そして、抜けている間に他のモノが入り込む可能性は十分にあった。そういう器を求めて徘徊するのが、在らざるモノたちなのだから。

「オボロの魂は手に入らない。あれの心は、俺の元にはない。・・・そして臃様の身体には・・・俺は触れられない。近く寄れる光波の縁とあなたは認めたのに、俺を寄せない。・・・ふたたりを等しく愛おしく思っているのではなく、どちらが最初であったのか・・・あなたは、ご存じのはずだ」

私は顔を背けた。もし、私がこの島に生まれて普通に育った島娘であるのなら、この言葉は自分への愛の言葉だと思っただろう。

自分を娶れなかったけれども、いつか一緒になろうと囁き、自分を忘れられないから同じ名前の者を、どんなに蔑位であっても寄せようと思った、と言ったら。

・・・普通の娘であれば、涙ぐんで彼の愛に縋ったはずだ。

海に還る者の骸は残らない。この島に残っているのは、名前と生没年とそれを記した墓標だけだ。墓の下には、亡骸はほとんど残っていない。皆、海に還るからだ。

その隙を彼は突いているのだ。

私とオボロは同じ名前だった。そしてこの島で生まれていないオボロは生年を記されることはない。明らかであってもそれは記さないのが為来りであった。

この島の者は・・・娶れない事情の者を、こうやって娶るのだ。

戸籍を用意し、名前を用意する。けれども、本来その名前を持っている者は、別の者であるのだ。けれども、海に還ってしまっているのです、後世の者が、その者かどうかを確認することはない。

。

血筋を残す為の苦肉の策であると言えた。

オボロはこどもを生めないだろう。

けれども、彼の縁者はたくさん存在する。

そのうちの適当なひとりを、オボロが生んだことにすれば、彼女の血脈は絶えないで残ることになる。

同じ様に・・・同じ様にして、オボロという名前の彼の妻について、彼は泡神さえ、産土神さえ謀ろうと言うのだ。

「おまえは、神の娘と、神に等しいと謳う貴人の娘を同時に妻に迎えたのか」

私の言葉に、彼はゆっくりと首を横に振った。

「俺の欲しいのは、魂も身体も愛することのできる妻です。

そして、最初の妻問いをした人のことが忘れられない。

・・・今も。今でも。その人が、人でなかったとしても、俺は・・・」

「黙れ」

私は肩を持ち上げた。

この男が、これほど愚かしい願いを持っているとは知らなかった。

・・・妻の病気快癒を願って禁忌の海に入るくらいであれば、黙認しようと思っていた。
そうではなかったのだ。

彼は、魂の妻を手に入れるために、器の妻を探し出してきたのだ。

私と同じ名前の者を。

そして、彼女は・・・妻の器ではなかった。

器量という問題ではない。

肉体しか・・・器しかない妻なのだ。

そこに愛があるのかどうかは、わからなかった。

そこまで聞いてはいなかった。けれども彼の愛が・・・この島の均衡を崩そうとしている。

それは間違いなかった。

それは確実であった。

・・・それでも、先ほどのように・・・彼が懇願した妻の治癒については、決して嘘ではない
と思いたかった。それは私だけの希望であったのかもしれない。

「妻を愛でるのに、理由が必要なのか」

私は溜息混じりにそう言った。

「夫を愛さない妻を愛するには、理由が必要です」

「それは神の許しや、神に対する申し開きが必要なのか」

相手がどんなに自分を愛していなくても、結婚できる。反対に、どんなに願っていても結ばれないこともある。彼はそつと言った。まるで秘密を明かすかのように。「添い遂げる相手として『おぼろ』という名前を決めてしまいました」

●朱月蒼浪26

私は思いつく限りの惘れの言葉をかけようと思ったが、もう何も言わないことにした。何を言っても、この男には通じないと思ったのだ。

決して願ってはいけないことを、彼は願っている。

そしてそれが実現するものだと思っている。

「ずっと秘めたままで消えてしまうのが、これほど怖いと思った事はありません。・・・オボロのことは愛おしいと思います。健康になって欲しいと思っている。そして彼女の願いを必ず守ると誓った。

それは偽りのない気持ちです。

私は彼女を妻とすることができて、どんなに反対されても良かったとしか思わないし、思えない」

「それなら、命が尽きるまで、己の妻を大事にしろ」

私とこれほど長く会話することができる者は居ない。なぜなら、私はいつも微笑んで居るか、彼らの他愛のない言葉に引きずり込まれないように、別のことを考えているからだ。

しかし、私が彼の言葉に耳を傾けているのは、彼の言葉に共感しているからではない。

・・・真摯に受け止めてよい言葉ではなかった。

なぜ、彼は・・・妻を娶った段階で、終わりにしなかったのだろうか。

なぜ、そこで満足できないのか。

なぜ、そこで幸せに対して陶然とすることができないのか。

まったく理解できなかった。何を心中で考えているのか、思考が読み取れない。・・・そうだ。彼の考えは・・・私は読み取ることが出来ない。・・・なぜなら、彼は光波の持ち主だから。

『光波により私を尸にするだろう。私はどこにも還れないから』

私は確かに、そう言った。

そして、幼い子どもが怯えてしまったことを憂えて、取り繕ったのだ。私は、その言葉が自分の意志に反して口を突いて出たことに狼狽していた。

そして言ったのだ。

『おまえが私を妻にすることと同じくらい、あり得ない話だ』と言った。

彼はそれをずっと覚えていて・・・私に妻問いをしたのだ。

まだ、少年の顔の時に。あり得ないことを実現することによって、私の予言を打ち破ろうとした。しかし、私はそれにこたえなかった。

・・・彼は、世迷い言を言っているのだ、と思っただけであった。

まだ少年であるから故の夢想を口に上らせているのだと思った。

しかし、違ったのだ。

私の見た光波は幻などではなかったのだ。次に彼を見た時には、逞しい青年に変化し、そして彼は変わってしまっていた。あの時に見た光は消えてしまっていた。

だから、私はそのままにしてしまっていた。・・・彼が命尽きるまで見守るだけで良いのだと思っていた。

私は・・・どこにも還りたくないと思っていたのだ。

海にも、土にも還りたくないと思っていたから、私を無に帰す人物を待ち望んでいたのだ。

自分を還す瞬間を待ち詫びた。次の巫女も残さなくて良いとさえ思っていた。私の次の巫女がここに降り立つとは思えなかったのだ。私が滅びないのは、だからなのだったと思った。次などはないのだ。だから滅びることができないのだ。

・・・私の方が、彼に縋っていたのだ。

光波の持ち主が、いつか、私を救ってくれと・・・そんな期待を持ってしまっていたから・・・だから私がこれを招いたのだと思うと、何も言えなかった。

私は拳をようやく解いて、彼にそっと言った。静かに・・・静かに。

彼の蹲って居る場所は、坂道の途中で・・・彼の身体越しに見える空には、まだ、赤い月が輝いていた。落ちてきそうなほどに近く大きく見える。けれども、月は近接しない。決して、海にも島にも近寄らない。ただ、寄っているように見えるだけだ。

「赤い月の宵には、外に出てはいけない。海に出てはいけない。・・・それを朱月蒼浪という。なぜなのか、おまえは知っている・・・」

私は続けた。彼は私を見上げているばかりであったが、私は続けた。

「・・・朱月下に蒼浪はない。朱月と蒼浪は同時に存在しない。・・・私とおまえのようだ。いか、同じ宵に朱月蒼浪は現れない。・・・つまり、あり得ないことが起こる夜をこのように言い表し、そして・・・決して交わらない男女の間柄を言う・・・」私はそれだけ言うと、大きく溜息を漏らした。私が何かに嘆くとは。・・・まったく、あり得ないことであった。

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

●朱月蒼浪27

「そんな夜に、世迷い言を放つおまえの正気は赤い月によって乱されていると思うことにする。
・・・愛しい、島の民人よ。私の言葉が聞こえているのなら、ここから去れ。
二度と、島巫女をそのような淫溺の眼で見えてはいけない。
・・・私の身体を案じてここまで連れてきてくれたことについては礼を言う。けれども、それ以上は踏み込んではいけない。
・・・私の言葉を多く聞きたければ、朱月に現れるのではなく、永く生きる。
・・・爪弾くような言葉を・・・長い時間生きて、集めろ」
拒絶の限りを尽くして、そう言った。
彼は、言葉を失ってただ黙るだけであった。
それが私の目的であった。彼に何も言わせない。言わせてはいけない。

私が朱月で彼が蒼浪なのか・・・それとも、その逆なのかはわからない。
浪は漣を変化させるけれども、月はどんなに色を変えても決して乱れないし墮ちてこない。それはもう、私が記憶する遠い昔からそうであった。
月は浪を呼ぶし、浪は月を誘う。けれども決して交わらない。
月の沈みにより一瞬だけ海際と月が交わるが、それは本当の目合いなどではないのだ。ただ・・・
人の眼にそう見えるだけなのだ。
海の端まで泳いでいっても、月と海の交わりを見ることは出来ない。そうしている内に月の消える朝になってしまうから。

彼の項垂れた肩が見えた。彼は彼の妻を愛し続けることで、平穏な生を過ごせば、それが最良なのだ。
私に迷ってはいけない。
島巫女の秘密に触れてはいけない。それは彼らを蔑視しているからではない。・・・滅したくないからだ。生涯、自分の生命について問い続ける彼らを愛おしいと思っていた。けれども、そう思っている瞬間に、私は、もう、彼らと同じ浪の上にはいないのだと思い知るのだ。

年月を経れば経るほど、私の中の「人としての何か」が失われていく。
私は人であったのに。人であったのに、人の心を忘れていく。忘れていくことを忘れていられれば、気にならなかったのに。苦悶しなかったのに。
・・・私は、失われていくことを、忘れることが出来ないのだ。
そして、失っていくことに気がつかなければもっと穏やかで居られたのに、私は・・・
考え込む私に、彼は静かに言った。教え諭されて、萎れているかと思ったのに。
「・・・淫靡の曇りに紛れたのなら、これほど固執しない」
夜風が吹いた。・・・しかし、それは明け方を知らせる風だった。海風と陸風が逆転する予を知らせる風であった。
あと幾度かこの風を受ければ、夜と昼は逆転する。季節によってそれは違う。
そして、赤い月は姿を消して、いつ再び現れるのかわからない。
彼は、自分の愛を成就するために、再び妻問いしたのではないのだろうか。彼と同じ時間を生きて、同じ時間軸で滅んでいくことのできる女を彼の生涯の妻と誓って傍に引き寄せたのではないのか。
私を獲たいから狂気に入るのか、オボロを救いたいから私が欲しいのか、彼はわからなかった。
そして、そこで、ふと、気がついた。
自分が、理解できない・・・解しようとしめない人間は、果たして、彼以外にいたのだろうか、ということについて。
私は思い返し、そしてそのこたえを自分自身に用意することができなくて、言葉を失った。
私を理解できない人間はいる。ほとんど全員だ。私の生命の時間と彼らのそれは違うから、それは仕方なかった。私の存在や、意図に共感し尽力してくれる者はいつの時代にも居た。けれども・・・それは、理解という名前で置き換えても良かったのかどうかと問われれば、私はわからない、と答えるしかなかった。
私は・・・見目は娘であるが、中身は老人であった。

ここで見守っている役割しか持っていない。

この島の中で、最も年老いて・・・死ぬべき頃合いを越えてなお、生きなければならない生を倦んでそれでも生きている朽ちた魂だけがここに残っている。

そこで。

私は。

言っではならないこたえを言ってしまった。

いや・・・言いたかったのだ。言っではならないから、その誘惑に負けてしまったと言えば、言い訳できた。今宵は、朱月蒼浪であったから。あっではならない夜であったから。

しかし・・・私は、ずっと・・・彼が何年も問い続けていながらもまったくこたえようとしなかった私の答えを、言葉にしたのだ。それは妻問いであった。

「おまえは、私の殻ではなく魂を妻としたいと問うのか・・・」

●朱月蒼浪28

そこで私は言葉を閉じた。これ以上は危険であった。危険としか言いようがなかった。

なぜならば・・・私は彼の申し出にこたえることにより、何が起きるか私は知らなかったからだ。

禁忌と呼ばれているものはいくつもある。

・・・島が沈んだり亡んだりしたことが、幾度かあった。

しかし、それは遠い昔であった。昔は、多かった。なぜなら、巫女達は人間に深く共感する存在であったからだ。皆、長い年月を体感することもなく、普通の人間の心を持ったまま巫女になり、そのことについて疑問を持ち続けている若い島巫女の居る島に限って亡んだ。そこで何が起こったのかは詳細不明だ。島がすべて滅んだ後には何も残っていないから。

そして巫女に関することは形や文字に残してはいけないから。

彼が過去の思い出から抜け出せていないのか、それとも妻を救いたいから故の偽りの約束を求めているのか、わからなかった。どちらなのか、それは私にはもう・・・関係のないことなのだからと思っているのに、なぜ、そんな言葉が口に上ったのか、理由を探そうとした。

私はこの島で朧姫と呼ばれている。なぜなら、感情の起伏が乏しくいつも朧々としており・・・その姿が朦朧とした春霞のようだと称されているからであった。

この島が亡んでいないのは、禁忌を犯した巫女が居ないからだ。だから存在する。当然のようでそれは難しい。人と歩み寄ったときに、決して何も感じない巫女は必要とされないし、役割を果たすことができないのだから。

彼は赤い月の下で・・・私を見つめていた。これほど強く激しく見つめる視線に私は顔を背けた。受け入れたら、この島は終わる。たくさんの人の命も、彼の妹の朗らかな笑顔も、一瞬で・・・一晩で沈むのだ。

彼は私を見上げながら、そっと言った。誰も聞いていないのに、誰かが聞いているかのような怯えが、そこにはあった。

「俺は妻を助けたい。けれども、あなたが欲しい。死にたいと思っているのに死ねない者と、死ねないと思っているのに死に瀕する者が俺の目の前に居る。俺はあなたの感情を色が付いた浪のように見ることが出来たのに、今は見えない。・・・それは、あなたが・・・」

「赤い月と蒼い浪が両方存在する瞬間はやってこない」

私はそれだけを言うと、彼に向けて顎を上げた。

彼はこれほど否定しているのに、なぜそれでも・・・それでも諦めないのだろうか。人の命を人が左右してはいけない。病んだ肉体を癒すことと、去りゆくべき命を無理矢理連れ戻すことはまったく性質が違うものだ。私や薬師が煎じる薬湯や薬草では若干の期間を永らえることはできても根本的な治療にはならない。そういう処置はしないことになっていた。本人の生活改善によって快癒するのであればそれは手助けできた。けれども、自分が望まないで誰かの手を借りて治癒する病というものは、繰り返すのである。幾度も、幾度も。

しかし、彼は掟を破る。こうして、頻繁に。決して出てはいけない海に出ようとする。それは、間違いなく彼の妻のためなのだ。どんなに、彼の妹が眉を顰めようとも、そこには間違いなく・・・彼の意思が働いている。

私は私の物思いを洗い流すために、海に出た。肌が傷ついても厭わなかった。なぜなら、そうでなければ私は自分の物思いを出すことができなかつたからだ。誰かに診て欲しいと思ったわけではない。

それなのに。

彼は・・・誰かのために海に出ようとした。それが誰の為であっても、それこそが人なのだと思う。私がとうに忘れてしまった感情を彼は持ち合わせており、そしてそれは私を大きく揺さぶるのだ。

自分の為ではなく、誰かのために、人の生を呼び戻したいと言う。それが、誰の為であっても。私は眼を瞑った。呼吸が乱れる。近く落ちそうな程大きく見える月が赤く・・・私と彼を照らし出していた。夜の空の下に照らされる彼の横顔は苦悩に満ちていた。けれども・・・眼が話せなかつた。彼から顔を背けているのに、私は彼の吐息に耳を傾け、彼の仕草に全身の集中を傾けていた。

決して浴びてはならない赤い月光の下で、彼と私は・・・あつてはならない会話を交わしていたのである。

彼は私に妻問いし、私は彼の妻問いを復唱した。・・・これは男女の理であつた。復唱すればそれは受諾を意味する。しまった、と思つた。しかし失敗だとは思わなかつた。憐れみと愛おしみだけでは私は動かされない。私の中で・・・何かが蠢いたのだ。もう死んでしまつて滅されたと思つていた感情の波が私の中でさざめいたのだ。

私は静かに言つた。

「・・・光波の持ち主よ。私の声を聞け。聞こえなくても耳を敬てろ」

私を滅す者が私に声を届ける。私は大きく息を吸つた。そして身体を震わせた。

●朱月蒼浪29

私の声が届かなくても、私は彼に伝えるべきだと思つた。

確証はないし根拠もない。

けれども、命を延ばしたり縮めたりすることはしてはいけないのだ。

人だけではなく、あらゆる命の長さは・・・誰かが決めて良いものではない。

「光波の主は、本来、次を継承する巫女の雛のことを指す。けれども、私は見誤つた。おまえは巫になれぬ」

巫は女でなければならぬということもない。昔には、男の巫子もいたのだ。

そして私はひとつ説明を落とした。漏らしたのではない。敢えて・・・言わなかつた。光波の主は、巫女の継承者であるという意味だけではなく・・・古巫女を滅ぼす存在なのだ。

同時には存在しないのだ。雛が孵ると前の世代の巫女は消滅する。どんな形で消えるのかは、わからない。けれども、確実に・・・交代する。そしてその記憶を受け継ぐのだ。知識や経験から得た智慧が移行する。

しかし、それは人でなくなることを意味する。

雛のまま孵らずに人としての一生を終えた者もいるだろう。私も・・・目覚めに誰も気がつかなければ、奇矯な者として抹消される運命にあつたのだろうと思う。私は、彼を巫にできなかつた。

その時に、私が何かの拍子に消えてしまい、この島が消えてしまえばそれも定めだという狂気の種が私のなかにあつたことも理由に挙げられる。けれども、あの・・・仲の良い固い絆で結ばれた幼い兄妹を引き離し、周囲の者と違う時間の中に彼らを巻き込むことが、どうしてもできなかつたのだ。

だから、彼が大人になるまで他の者には言わなかつた。彼が光波の主だと、誰にも漏らさずに私の秘めたる終い事にしたのだ。唯一、本人には伝えたが、それを今でも覚えているとは思つていなかつた。

彼は私の言葉に首を振つた。

「あなたは間違えない。・・・理由があつて、俺が妻を娶り資格がなくなる年齢になるまで待つたとしか思えない」

彼は、ゆっくりと立ち上がった。

坂道で、彼の方が下方にあつたのに、上背がある彼は私より月に近かつた。

「今ここで・・・あなたを縊り殺したら、この島は滅びますか」

彼の声は掠れていた。そして、眼は充血し、私の顔を食い入るように眺めていた。こうして私の顔を見る者は居ない。何時も私は彼らの望むような喜怒哀楽に溢れた豊かな感情を見せることは

ないからだ。いつものように・・・茫洋とした漫然とした笑みを浮かべて、私はいつもの「朧姫」を演じればルデ良かったのかもしれない。けれども・・・彼の言葉に私は黙ったままだった。

彼の言うとおりに、彼が妻を得ることが、彼の幸せであると思っていた。しかし、そうではなかったのだ。彼は・・・自分が選択できなかったことに苦悩していたのだ。

巫として生きるか、人として生きるのか・・・彼は自分で選べなかったから・・・こんな風にして憤り、神や巫女である私に対して疑問を投げかけているのだ。

それも、選択のひとつだというのに。彼はそれに触れなかった。

だから、私は嗤った。彼は私を憎んでいるのだろうと思った。人によって生を左右してはいけないと教える私が、彼の人生を左右させたのだから。

この島の若者は、皆、彼を崇敬している。眉を顰める大人も居るが、彼は間違いなくこの島に新しい風を齎した人物なのだ。どれほど卑しい身分の者を妻に持ったとしても、それで彼の価値は損なわれない。傍巫女の妹を持ち、莫大な資産を彼一人で捻出し、そして島から出ていくことのできない鬱屈する若い者たちの行き場のない悶えを解決するのだから。

私は首を傾げる。

なぜ、私にそれを尋ねるのだろうか。

わからなかった。でも、自然に微笑みが浮かんでくる。嘲笑ではなく、ただ・・・赤い月の下で、笑みが湧いて生くるのだ。彼のためだけの綻びに、彼は気がつかなくても、それでも・・・私は首を僅かに傾げた。もう、身体は寒くなかった。手の平や足の傷も痛みを感じない。

間もなく、夜が明ける。

私のいつもの日常が戻ってくるだけだ。

これほど感情を露わにすることはもう、ないだろう。

だから、彼の望みを叶えてやるのは今のうちだけだった。

「それも父神は受け入れるだろう。やるなら、今のうちだ。・・・間もなく、夜が明けたら、人が外に出てくる」

「それでは、駄目だ。そうしたら・・・あなたは、戻って来ない」

私は溜息を漏らした。意気地のない男だと罵ることもできた。しかし、彼蝸螺にも言葉をかけないことが、最良なのだ。女を知り、妻を娶って彼はそこで気がついたのだろう。・・・自分の血肉では海は湧かず、巫子としての資格がなくなってしまったことを・・・それまでは、彼が海に入れば海は凪ぎ、彼が山に入れば風が止んでいた。周囲は気がついて居なかったが、本人は薄々感づいていただろう。自分が、他の者と違うことに。そして、それは何時も傍らに居る妹が引き起こしている奇蹟だと考えようとしていても、そうではないらしいということに。

●朱月蒼浪30

「私を辱めるために、妻を助けたいというのであれば、私は関与しない。・・・おまえが神に挑戦するのであれば、私はそれを受けるだけだ」

拒絶の言葉に、彼は首を振った。切迫した声音だった。

「妻を愛おしく思います。たとえ、あなたが俺を拒んだ果てに得た妻であっても。

でも、この島は長い間同じでありすぎた。これを変えるには・・・巫女の家系を用意するしかありません」

私は唇が震えるのを感じた。この男が、何を考えているのか・・・その言葉で、察知したからだ。彼は続けて言った。

私が肩を震わせていることを知っていたのに。彼の妹であれば、私の震えに真っ先に気がつくのに。彼は、知っているのに、敢えて、私を赤い月の下に晒す。誰に語っているのだろう。私なのだろうか。それとも・・・あり得ない朱月の暁をもたらず、気紛れな月夜見の神にでも語っているのだろうか。

「オボロは今は卑しい身分となって籍を剥奪されています。しかし、夫である俺の血筋から傍巫女が出て、俺と妻の間に巫女が生まれれば・・・巫女は外から来るものではなく、島から生まれる者であり、突然に誕生するのではなく、巫女の家系から代々輩出されるという掟が生まれる。人の命の短さしか継承できないが、それでも・・・永遠に近い生命を生きる巫女ではなく、人の命の短さを知る巫女を出すことによって・・・人は変わるのです。人と神の融合です。・・・オボロの家系はそういうことによって、記録から抹消されることはなくなる。巫女の祖になるのですから」

「おまえは島を滅ぼしたいのか」

「あなたを滅ぼしたくないだけです」

私は言葉を失った。この島から、巫女を出す。生まれながらの巫女であり、最初からそのように教育された者を出す。

……資質と教育は受け継がれるものであり、どの家も自分のこどもが次世代の巫女になるという願いを捨て、巫女になれないであろうという年齢を超えなければ結婚できないという悪しき風習を捨てることができる。必然的に、若い衆が増える……一時的であるかもしれないけれども。

他の島では祖となる巫女の次の巫女からは、巫女が次の巫女を選ぶ。巫女が出なければ、余所から巫女がやってくる。

血筋はまったく影響しない。

彼女達は……自分が見える光波に導かれて、そのように巫女を選んでいた。

余所から連れてくることはない。

最初はそうであった。余所からやってくる余所者の巫女を受け入れるまでに島人たちは長い時間を要した。その間に年を取らないいつまでも同じ姿の不老の巫女を目の当たりにして、神事を信じるようになるのだ。

巫女の居ない、もしくは居なくなってしまった島には、派遣されて雛が島巫女になる。

私のように。

けれども、それはいつしか……長い時間を経過することによって、形骸化してしまった。

なぜなら、どの島も……島に入ることはできても、島から巫女が出ていくことはできないからだ。

私のように……別の場所で生まれ育った者が島巫女として配されたのは遠い昔のことであった。彼は外の情報を得ていたとしか思えなかった。……私の知らない彼が少年から青年になるまでの間に、彼はそこまで情報収集していたのだろうか。私は喉元に込み上げる驚愕を押しえ込んだ。

彼が単独でこれを調査したのかと思うと……彼に対して警戒せざるを得ないと思った。

彼は、自分の家から聖なる巫女を出したいがために、オボロを妻にし、そして私にその器に入れている。そのために、オボロを癒せと私に言う。

彼が愛しているのは、何なのだろう。

オボロでもなく私でもないような気がした。

「俺の言葉が聞こえなくても良い。……今は、まだ。けれども、果てのない悠久の時間を過ごす巫女と、人と同じ生命の長さだけしか生きられない巫女と……どちらに永遠を感じるのか、あなたは知っている」

そうだ。私は知っている。永遠とは、いつか終わるから永遠を知るのだ。永遠は、永遠ではないから……永遠なのだ。未来永劫という言葉は、その者の生命が終わる瞬間までしか計測することができない。だから、永遠というのは限りがあることと表裏一体なのだ。

私は海水に湿った髪を掻き上げた。ずっしりと重かったが、彼はそれらを含めて私の身体をここまで運んだのだ。

「短い命です。俺の命はあなたより短い。俺の妻の命はもっと短い。けれども……異端の思惑を持つ俺のようなものはもう二度と、出てこない」

●朱月蒼浪31

不毛な会話を続ける気になれなかった。

私と彼は、結ばれない縁なのだ。

それを彼も承知しているのに、なぜ、彼はこうも話を繰り返すのだろうか。

そして、恐ろしい願いを持っていることをなぜ私に打ち明けるのか……わからなかった。や

はり、彼をこのまま滅してしまおうか、とさえ思った。明日になっても、この夜が明けても、彼の考えが変わることはないだろう。……家に戻れば彼の妻が戻らない彼を待っているかもしれないのに。それでも、彼は愚かにも私に語りかけようとしている。彼が欲しいのは、本当に魂も肉も彼だけを愛する妻なのではなく、もっと大それた野望を持っているのだ。

彼は締まった頬を軽く自分の手の甲で拭った。挑むような目付きは、昔のままだった。

「あなたは俺の問いにこたえた。その答えを返す時まで・・・俺は諦めない」

私は唇を噛んだ。なぜ、彼の言葉に唱和してしまったのだろう。そしてすぐさま、それは違うと否定したのに、彼はそれで納得しなかった。納得していなかった。

私はそっと言った。頬を撫でる風の向きが変わった。間もなく、朝がやってくる合図であった。

「蒼浪の男よ。朱月を求めるのか」

「あなたが俺を滅さない限りは」

彼は知っているのだ。私はその気になれば、私は彼をいとも容易く彼の命を奪うことができることを。

人の命を左右してはいけない、と言っている私が、命を奪う。命でないものも滅する。それを、彼は誰にも教えられることなく、悟っているのだ。

「誰かを救いたいために、誰かを犠牲にする。それを理と言う、愚かな男の妻になるつもりはない。私は海神の娘であり、この身は人の形をしているが、すでに人ではないのだ」

「俺は何度でも、赤い月の海に出る。そして、満願成就を祈願して、海に入り、針貝に血肉を捧げる。それに意味がなくても」

私は溜息を漏らした。彼がここまで思い悩んでいるのは、なぜなのだろうか。妻を救いたいと懇願した言葉に嘘偽りはないと思われた。けれども、それ以上にもっと違う何かが、彼を動かしているように思えた。

彼は自分の身体についた砂を払った。そして、私の血が染みついた衣を眺めていたが、やがて黙ったままの私に言った。

「俺とあなたの秘密です。朱月蒼浪・・・成就しない願いをそのように言うのであれば、俺はそれを成就する為のまじない句に変えてみせる」

彼はそこまで言うと、いつもの通りに頭を下げた。

「お戻りください。皆が起き出す時間です。・・・そのお姿で戻れば、妹は心配するでしょう」言われなくてもそうする、と冷たい返事をする事ができなかった。

なぜ、彼はこうまでして熱情を捧げるのだろうか。恐ろしい彼の願いを耳にしてしまった私はまだ全身の緊張がほぐれていなかった。

しかし、彼に背中を向けると、坂道を上り始めた。確かに、皆が起き出す時間である。私の姿がなければ、邸の者が激しく咎められることになる。自分の身は守れるので、宿直は必要ではないと言って、朱月の夜には皆が邸内に入るようにと言ったのは、他ならない私であった。

背中を向けても、彼は私を見ているような気がした。冷え切った身体に震えが趨る。

・・・それが何の震えなのかは、私はまだわかっていなかった。

思いもかけず、男の肌に触れたからだろうか。それとも、誰も居ないと思っていた朱月の夜に、この男に会ってしまったからだろうか。

しかし、振り返ってはいけないと思った。振り返れば、彼の思惑に賛同したことになってしまう。

「・・・今宵のあなたは俺に問うてばかりであった。人を諭す巫女姫であるのに。それが本来のあなたであるならば、俺は何度でも海に出る。あなたが来てくれるまで、何度も朱月蒼浪に出る。

・・・誰も答えてくれないと思わないで欲しい。俺にはこたえがわからないかもしれないけれども、あなたは・・・ひとりきりではない」

私は歩みを止めた。

愚かな男だ、と罵倒する言葉が出てこない。私を辱める言葉だと憤ることもできない。

なぜなのだろう。立ち止まり迷って・・・無理に感情を押し殺すことはないのだと彼が言う。同じ事を言った者は幾人が居た。けれども私は、それを聞いて微笑みながら聞き流すしかしてこなかった。手足が酷く痛んだ。それは切傷によるものではなく・・・私の身体から血が流れ出ていることを、認めざるを得ないから、痛むのだ。

この身は人ではない、と自分で言っておきながら、自分の言葉に傷ついていたのだ。私は血を流し、傷つく心を持っているのに、誰にも・・・誰にも問いかけることができないことが、これほど酷く寂しく辛いのだと、誰にも言わなかったことについて・・・彼は知っていたから。

●朱月蒼浪32

「・・・肝に効く薬を煎じてやる。陽が高くなったら取りに來い。預けておく」

私はそれだけを言うのがやっとならなかつた。彼の険しい顔が和らぐ空気を感じたからだ。あの男は、あの女を愛している。それだけが事実だ。禁忌の夜海に出るほど、あの女を愛おしいと思っている男が、私を邸まで送り届けた。それだけのことであつた。針貝に身体を傷つける必要はない。それらを煮詰めて効能を高めたものが私の手元にあり、方法さえ知っていれば同じ効果を持つ薬湯を草木から煎じることができた。私はその方法を秘匿するつもりはなかつたので、いつでも願えば教えてやっていた。

明日には海が荒れる。
私が海で血を流したからだ。
私の血肉で父神は目醒める。しかし、あの程度では海が僅かに荒れるだけだ。
地にもいくつか落としてしまつたが、朝が近いので、血に酔つた在らざるモノが押し寄せてくる心配もなかつた。
だから、彼はもうしばらく海に入ることはできない。
針貝は繊細で、海が汚れると夜でも口を閉じてしまう。
だから荒れが終わつても、しばらくは採取できないだろう。

朱月蒼浪とは、叶わない願いを指し示す・・・。
私は海に向かつて問い続けた。自分の孤独を嘆いた。
・・・そして、私は願つてしまった。
赤い月を、海の底から見上げて、願つてしまった。
自分のことを、願つてしまった。
それに対して、彼の身に何かが宿り、私の問いに答えたのであれば・・・私は彼の問いに答える必要があるように思つて仕方が無かつた。
しかし、それは答えてはいけない。
彼の妻になると承諾することはできない。自分の殻を捨てて、彼の妻の中に入ることによって、彼の妻の魂は永遠に彷徨うことになるからだ。彼はそれでも良いと言う。そこに愛はないのだろうか。愛おしいと思う妻の魂が、海に彷徨つていたら、彼はそれでも幸せになれるのだろうか。
「妻の求める魂は海にあります。だから、妻も海に還るのではなく、海上を彷徨うことを願つている。安らかになるより、もう一度出會いたいと思う相手の魂を求めることを願つている。・・・俺はそんな女の身体を抱き、病を案じ、薬になるような食べ物を調達することしかできない」
「人は、それを愛と呼ぶのだ。・・・おまえの思い描いた愛とは違ふかもしれないが、おまえは確かにあの女を愛しているのだから。・・・大事にしろ」

彼のことをオボロはいつか愛するようになる。
それが情というものだ。・・・長い年月肌を寄せ合つていれば、きっと、彼と彼女は眞の夫婦となり、互いを慈しむようになる。
憎んでいるわけではないのだから。
私はそんな男女を幾組も見つめてきた。
背中を向けたまま、私はそつと言つた。もう、行かなければならない。私の居る場所はここではない。昏いけれども神事のために用意された、私ひとりでは豪華と言うには広すぎる邸の中で、私は今日も座つて微笑み、黙つたまま海を見続けるのだ。
「・・・オボロは俺を愛さない。愛している振りをしているだけだ」
彼は吐き捨てるように、そう言つた。私は歩みを止めて・・・また、彼に振り返つた。赤い月の色は薄くなり、彼の頭上の空は朝が近いことを知らせていた。
「あれは俺に組敷かれながら、唇が切れるまで齒を食いしぼり、ただ自分の願いが成就されることを俺に託しているだけだ。
いつか、家名を復活させ、自分と言ひ交わした男の魂と同じ様に海を彷徨うことを願つている。決して、安らかにならうとは思つていない。
あの女の愛している魂は、安らかになれない。
・・・罪人として頸を刎ねられたからだ」

私は彼の顔を見つめた。
刎ねられた者は、決して還ることが出来ない。
大地や海を大量の血で汚した者は、還ることは許されないのだ。貴人は皆、縊死を選択させられるのはこのためである。彼らの尊い血肉が海を汚せば海は荒れる。海神を呼ぶのではなく、海神

を起こらせるのだ。大地に流れれば、そこは汚染されて土地神が荒れる。巫女の血肉で神を呼び覚ます類のものではない。

「あれは愛していないどころか、俺を憎んでいる。決して許しはしないと思っている。そして、それでも自分の願いを成就させるために、俺の申し出を受けた。いつでも好きな時に殺せと言ったら、それはしない、と言った。あの人と同じように、海を彷徨う魂になっては困ると言った」私は彼の言葉の先を感じ取った。彼は彼の秘密を明かしたのだ。朱月の下で。

●朱月蒼浪33

オボロがこの島にやって来たいきさつを思い出していた。沖で漂流していたところを見つけたので、島への逗留を希望する貴人の家系の船を寄せたいのだが、と言ってきたのは他ならない彼の船であった。貴賤は関係ないが、その後の定めを考えると一時的な逗留であることが望ましい、と邑長は回答したが、彼はその後、彼女を妻に娶ると言い出して島衆達を驚かせた。余所者であっても、島の者と婚姻すれば戸籍が用意される。しかし、彼女の特異な事情から、彼女は身分を剥奪されるということも承知の上であると彼は主張した。そして、幼なじみの若い島頭や船頭たちを説き伏せ、彼は自分の願いを叶えてしまったのだ。

彼は苦渋に満ちた顔を私に向けた。日に焼けてはいるがまだ年若い青年は、私に告白した。ずっと、誰にも言えなかったことなのだろう。おそろおそろ、声に出した。

「・・・俺が、あの人を首を刎ねたのです」やはり、と思った。私は瞼を瞬かせた。何事にも躊躇しない彼が、言葉を吐き出すまでに時間がかかった。だから、それは彼の中で秘めたる深刻な問題としてずっとしまっていたものだろうと察した。しかし、思った通りの言葉であったので、私はただ、彼を見つめるだけであった。そこで話が終わるのか、もっと続くのか、それすら推し量ることができなかった。

私が彼のその後を知らなかったのには、理由がある。彼はしばしば、遠洋の漁に出てしまっていたからだ。長期の不在が多かった。命を失うような危険な漁であったが、彼の持ち帰るものはこの島の近くでは手に入らないものばかりであった。しかも、彼はそれらの鮮度が傷むことを懸念して、近隣の島の民の船に近付き、物資と交換するということを知ってきたのだ。そしてそんな彼に魅了されて、最初は彼だけの船であったのに、いつの間にか・・・彼に遵う年若の者たちの船が集い、大きな集団になっていた。

・・・その時に、出会ったのだろう。彼女を乗せた船と遭遇したのは、そんな経緯があったからなのだ。一縷の希望を託し、彼女は海に出た。沿岸に逃れれば、別の地方に行けると思ったらしいが、海の潮はそれほど単純ではなかった。潮が乱れ、水や食糧が尽きそうになったときに・・・彼と彼女は出会ったのだ。

ひとり、漕ぎ出でてやってきた彼の船と、彼女の船が遭遇したのだ。

彼は人を遵える立場になっても、つねに一番船であった。一番船とは、他の集団より先に出て潮や風の流れを調べてくる役割を持っている船のことだ。最も危険な役割を自分で引き受けていた。それが皆の命を守ることだと思っているようであった。頭の居ない身体だけが残された船衆の方がよほど危険だと言うのに。

「・・・あの人はまだ、生きていた。刎ねきれずに首が胴と繋がっていた。

オボロは、混乱の中で彼を連れ出したと言っていた。

それでも、瀕死の状態、大量の血が流れてしまっていて・・・肉も切られてもう・・・もう駄目だとひとめでわかった」

そこで彼は彼女に言ったのだろう。楽にしてやれ、と。位が高く、誰も彼女に宣告できない中で、彼は彼女に事実を言ったのだ。助けてやれない。これ以上苦しむ前に、楽にしてやれ、と。口から血泡を吹き、意識もなく、ただ呻くばかりの許婚の姿を見て、彼女はそれでも嫌だ、と言ったのだ。離れるくらいなら、自分も死ぬ、と言ったのだろう。しかし、彼女には託された望みがあり、そのために死ぬことはできなかった。彼は、海の倅いに従って、その者の首を刎ねた。罪人も首を刎ねて決して復活しないようにするのが習わしであるが、同じ様に海の上で死ぬ者は、末路が二通り存在する。海に還るか、海の上を彷徨うか、だ。魂は消滅することなく彷徨い続けて、器を求める。それは永遠かもしれないし、私のような島巫女の浄化にあって安息を得る者も居る。しかし、会話ができるのは、彷徨う魂だけであった。海に還れば・・・もう、その者を愛おしいと思うものと触れあうこともできないし、会話することもできなくなる。そういった意志がなくなってしまふからだ。無になり海の泡になる。それが海に還るということだ。

●朱月蒼浪34

しかし、それを望まないと言ったのだ。

オボロとオボロの愛する男は、また会いたいと願った。

だから、彼に彷徨っても良いのだと言ったのだろうと思う。

彼には理解し難い出来事であったのだろう。

島の者にとっては、海に還ることが最良の安息であったのだから。

今生で結ばれなければ、海の上で再会しようと言ったのだろう。

そしてオボロの唯一の人は、彼女の成すべきことを果たせと言って、彼に頸を刎ねろと言ったのだろうと推測された。そしてきっと、それは憶測ではなく、事実なのだろう。

それを略奪と陵辱と言うのであれば、きっとそうであったのだろう。

自分の愛する男を刎ねた彼に従うしか生きる方法がなかったとしたら。

彼は申し出たのだろう。仲間の船が来る前に。

まだ血臭の漂う船の中で、彼の骸に取りすがる彼女に、手早く言った。

海の上で誓った約束は、決して破れない。

だから、俺と約束しろ、と。

俺の妻になり、島に上がり、そしてそこで血筋を残せ。子どもを産まなくても良い。籍が残るだけで血が残ったことになる。それが島の掟だ。

同乗する船の付き人も暮らせる場所を用意してやる。そこで時期を待て。

俺の島には、彷徨う者たちの声を聞くことができる巫女が居るから、と・・・。

彼女にとっては取引でも約束でもなかった。もう、そうするしかなかったのだ。

死にたいのに、死ねない。けれども・・・もう一度、会いたいから。

「・・・禁域を越えてその先の沖に出て行き・・・果てに近い場所で俺はオボロを連れ帰った」

彼はそれだけを言うと、とても疲労した顔を、空に向けた。

「人を弑した俺が、幸せになれるとは思っていないし、オボロとはそういう関係だ。そこに愛はない。あるのは互いの利益だけで・・・彼女はいつでも俺を殺してよいことになっている」

海の上で交わした約束は、破ることができない。

彼はそれを承知の上で、彼女を連れて帰ってきた。

私が先ほど、オボロは島で生まれた者ではないが海に還ることは認めてやろうと言った時に、彼が複雑な顔をした理由がわかった。

彼女は、海に還ることを望んでいないのだ。

「・・・弑したのではなく楽にしてやったのだ、と理解する日が来るだろう」「彼女にそんな時間はありません。・・・理解して欲しいとも思わない」

それなら、一体、誰が彼を理解し、支えるというのだろうか。私はそこで唇を噛んだ。彼が、なぜ、そんな大いなる告白を漏らしたのか・・・わかったからだ。

「彼女の肉が朽ちるまえに、あなたに決断して欲しいのです。・・・俺の妻になるか・・・俺に首を刎ねられて海に還るか・・・」

「今のまま、という選択肢はないのだな」

彼は眉を寄せて、首を振った。

「俺が生まれてしまったことを不運と嘆いてください。俺にその身を捧げてください。・・・赤い月の下でなければあなたは安らげない。いや、もっと苦悶している。それを俺は眺めながら・・・死んでいくことができない」

この男の歪んだ愛が、とても・・・そう、とても哀しかった。

なぜ、こんな風に極端でしか居られないのだろうか。

妻を持ち、それで満足できないのだろうか。

人とは・・・人の業とはこれほど深く昏く苦いものなのだろうか。

「まったく話にならない」

私はそれだけを言うと、やはり彼に背中を向ける。

「・・・今日、あなたを抱いて確信した。これほど小さき人にこの島を全部背負わせてしまったことが、どれほど罪深いことなのか・・・俺達の声は聞こえるのに、あなたの声が聞こえない。それが俺には苦しい」

「然るべき時に申請しろ。籍は認める。しかし、その時にはオボロという名前を捨てることになるから、あの女がそれを許諾すればいつでも・・・籍を与えることができる」

彷徨う魂には名前はない。けれども、自分が忘れてはいけない者の名前は覚えているのだと言う。互いに互いの名前を忘れてしまった魂同士が・・・また引き合うのは奇蹟に近いことであった。その名前を失ってしまうと聞けば、彼女は決して承諾しないだろうと思った。

妻を思う男を演じたままであれば、これほど波立たなかったのに。なぜ、彼は赤い月に酔ったように私に重大な告白をするのだろうか。私は目を見開いた。

・・・違う。月に酔ったのではない。私の血に、酔ったのだ。

●朱月蒼浪35

私の血に塗れた彼を振り返り、私は念押しした。

「くれぐれも、その血を残さないように。・・・焼却するように。灰も流してはいけない」

これほど私の血に触れる者が居なかったので、気がつかなかった。在らざるモノが先ほどから寄ってこないのは、朝が近いからではなく・・・光波の持ち主の彼に私の血が付着したからだ。すでに彼は純潔を捨て資格を失ってしまったが、彼の肉に私の血が混じり、それで彼は昂揚しているのだ。

しまった、と思った。

あと少し待てば、彼も老いて死に、そして海に還る。その時を待てば良いと思っていたが、それでは駄目なのだ。

・・・彼の身体から魂が離れても、彼の肉体を求めるモノが蠢く。彼に魂が入っているから近寄ったり影響を及ぼしたりすることはないが、問題はその先であった。

彼の魂が抜けてしまった時。

肉体が朽ちなかったら。

海に流しても、海神が彼を泡にすることを拒んだら。

・・・幾度となく危険な漁に出ても、彼が命を失わないのは、海神に祝福されているのではなく、光波の影響で誰も手出しできないからだ。

荒れた海の中に居ても、彼は守護されている。次の巫女を出すために必要な血肉だからだ。

彼は、海に還れない者なのだ・・・

海に流しても、土に埋めても、彼はあるべき場所に還れない。

雛のまま孵らなかつたから。

私は、彼が、そのまま人としての生を終わらせれば良かった。

だから、彼が妻を娶り巫子としての資質を失うのを待っていた。

しかし、考えなかつたのだ。私は、考えていなかった。

彼は男の光波の持ち主であった。

女御子と違う結果になるかもしれないと考えなかつた私の至らなさのせいで・・・彼は・・・

私が光波の持ち主だと告げなければ、彼は自覚することもなかつただろう。

なぜ、自分は危険な一番船に乗っているのに、まったく傷つかないのか・・・。
なぜ、自分は赤い月の夜に、私に同調するかのようによびよって秘密を喋るのか・・・。

「朦朧。この島は平和だ。平和すぎるくらいに。・・・けれども、そこにはあなた様の苦悶があるからで、それは本当の和ではない。昏きモノを喚ぶ闇巫でもあるあなたの真の姿を人に晒すことを、躊躇わないでください」

彼はそれだけを言うと、踵を返して坂道を下っていった。
私はその足音だけを聞いていた。彼に背中を向けたままであったから、音だけを聞いていた。
浪の音と、彼の足音だけを聞いて・・・私は眼を閉じた。
赤い月が、私と彼のやり取りをすべて見ていた。誰も見ていなかったわけではない。
彼が、赤い月の夜に海に出てきたのは、私と話をするためだろうか。
妻のために禁忌の海に出ようと思ったのか。
・・・どちらでも良かった。

彼を次の巫と選んで亡べば良かったのだろうか。しかし、彼のあの気質では、この島はあっという間に滅んでしまう。何より、万物の等しい愛ではなく、彼はある特定の者たちへの愛しか見えていない。それが人というものであるのだけれども。
巫子として生きていくためには、そういったことも教えなければならなかったのだろう。だから、光波の持ち主達はすべてばらばらでいるわけではないのだ。人としての愛と、神としての愛の区別をすることができ、そして区別することは理解出来ても実践できない苦悶を知る者だけが、巫子となるのだから。

月光が薄らいで・・・私は朝がやって来たことを知った。私は彼と反対方向に・・・坂を登っていった。滴下した血は薄く、日が昇り気温が上がればそれは消えてしまうだろう。遠く聞こえて来る波の音が・・・また、いつもの通り朝の潮の到来を告げていた。邸の奥の木々からは朝鳥が鳴き始め、赤い月の光は徐々に淡くなっていく。これほど長い時間を眺める朱月も珍しかった。まるで・・・私と彼の秘めたる会話が終わるまで待っていたかのように。

そこで、ぽつり、と私の足元に、何かが音をたてて墮ちた。血雫ではない。海雫でもなかった。・・・雨だろうか。空を見上げたが、今日は快晴になりそうな緋空であった。そこで私は気がついた。その雫が・・・私の頬を濡らす涙であったことに。熱く止めどもなく流れる涙は、私の浪であった。

●朱月蒼浪36

彼が妻を愛おしく思う、と言った時に、私の胸に何かが刺さったような、小さな痛みが走ったのはなぜなのだろう。
彼は特定の者しか愛せないのではない。
それは、私の方だ。
私は、誰かを愛することを忘れてしまった。いいや、知らなかった。
幼い時にもう私は巫女筋であると認められて、皆から隔離されて育った。そしてこの姿になって成長が止まった刻にはもう、私は人と違う時間を生きていた。
だから、皆が・・・この島の者が私に注ぐ畏敬の念や慈しみの愛を、ただ漫然として受け止めていただけであった。
それを返す方法を知らなかったからだ。
誰かを愛するというのは、どういうことなのかわからなかった。
だから・・・皆を平等に愛せるのだと錯覚した。

それなのに、孤独を感じるとは何と言う皮肉なのだろう。
それなのに、秘密を持ちたくて、朱月蒼浪に潜る私を見て、彼はどう思ったのだろうか。

私の眦に浮かぶのは、単なる熱い水なのだろうか。それなら、なぜ、私の眼に浮かぶのか。

彼の意図が理解できないのではなく、理解すると怖かったから、聞こえないふりをしていただけなのだ。私は・・・
涙を拭わずに、ただ、流れるままにしていた。

赤い月はもう、消えていた。その代わりに、空は白んできて・・・月の輪郭を淡くさせていた。月はそこにあるのに・・・日が昇ると見えなくなり、いつの間にか沈んでいく。海の上にぽっかりと浮かんでいた月が・・・今はもう、どこにも居なかった。

私はまた歩いた。邸に戻らなければ皆が心配する。この格好だ。そのまま湯殿に入ればわからなかったが、聡い傍巫女は気がつくだろう。私が何をしてきたのかということについて。塩水に浸った衣を見て、何かを察するかもしれないが、何も言わないのだろうなと思った。私に意見するものはこの島には居ない。

ただひとりだけ・・・彼だけが、私を咎めるのだ。

「あなたはたったひとりの方なのですから」

彼はそう言って私をひとりの人として扱う。

口では巫女姫や神巫女と言うが、彼は始終、私を・・・島娘のように扱った。

そして気がついたのだ。

私と彼は・・・特別な時間を共有してしまったのだ、と。

妻を持つ男に私が思いを馳せるとは決してあってはならないことであった。

彼がひとりで抱えてきた孤独を感じ、私は胸が苦しくなった。

それは、私が抱えているものと同質のものであった。

彼は、敢えて暗闇に手を伸ばしたのだ。・・・自分の孤独を癒す水ではなく、渴きを増長するだけの塩水だとわかっている・・・それを飲み干してしまったのだ。私は流れ出る私の海水を拭えなかった。

父神は、私の悶えを聞き入れてはく下さらない。答えは、誰も出せない。

私自身が・・・答えを導き出さなければならないのだから。

・・・海が荒れる。

はやく、遠見の者に知らせなければならない。私の血を吸って、海は潮の流れを変えるだろう。その先に皆を行かせてはいけない。

・・・あなたの苦悶の上に成立する和は本当の和ではない・・・

彼の言葉が胸に痛かった。それなら、どうすれば良かったと言うのだろうか。

彼は自分を憎んでいる相手を妻にした。

皆が羨むほど彼が愛でているとされている妻からは、愛されていないと感じている。彼女の名前を聞いたときに、彼は何を思ったのだろうか。魔が差したという言い方をした方が良いのだろうか。大罪の焔に焼かれることを選んだ彼は・・・何をしようとしているのだろうか。

海に還れないと悟った時に、彼は何を考え、何を問い、そして・・・どんな答えを導いたのか。

私はそこで初めて涙を拭った。熱かった。私の中で、何かが洗い流された様な気がした。海の底を漂っても、決して洗えなかった私の煩惱が・・・こんな場所で、月の消散する様を眺めながら洗い落とされるとは・・・

悟りというもの、ふとした瞬間に訪れるものだ、と皆に言っているのに、私は、今、初めて悟ったのだ。

人の気持ちは、まったく朱月蒼浪であり・・・決してあり得ないことを引き起こすのだと・・・

・そして私もかつては人であったのだ、と。

●朱月蒼浪37

「染みますか」

「いいや」

私の背中を柔布で撫でながら、彼女の問いに私は首を振った。

思った通りで、帰邸した私の姿を見つけると、傍巫女の彼女は「湯を沸かしてあります」と言って私を湯殿に導いた。

白い砂利道と砂道を越えていくと、彼女は泉の近くで座って私を待っていた。

けれども、どこで何をしていたのかは尋ねなかった。

血に濡れた私の衣を脱がせると、手早く丸めて・・・彼女は焼きます、とだけ言った。

そしていつもより少し温めの湯に私を入れると、暫くして私の背を流すと言って入ってきた。この島でこれほど湯をふんだんに使うことができるのは限られた者だけであった。他の者は湯に浸りたければ共同浴場に行くか、岩場から湧き上がる熱湯に満ち潮が入るのを待ってそれに浸かる。好きな時に好きなだけ入ることができるのは贅沢なことであり、私はそれすら当然のように思っていた昨日までの自分を嗤った。普段は、湯に浸かるときも素膚になることはない。薄い衣を着て肌の露出を防ぐ。けれども私はすべてを脱ぎ、直接湯に浸った。
・・・男の肌に触れてしまったからだ。
これで暫く潔斎のために籠もらなければならない。
彼に会わなくて良いのかと思うと、少しだけ安堵したが、同じくらい少しだけ何か残念に思う気持ちが湧いたが、私はそれを胸にしまい込んだ。

私が立ち上がるのにあわせて、彼女は湯桶に汲んだ湯を私の肩から掛け流した。
「後で薬膏をお持ちします」
私は無言で軽く頷いた。
空は蒼を迎えており、島にはいつもの朝がやって来ていた。
私は時間をかけて、湯に浸った。血を落とす必要があったからだ。血は酒と同じだ。熱せられれば無害になる。
・・・湯殿から見える空は、蒼かった。皆が働く時間に、私はこうして湯を浴びる。

「・・・朦朧にお目通りしたいと言う者が来ておりますが」
彼女はそっと言った。それが誰であるか、私にはわかっていた。
取り次ぎの間で誰が私を待っているのか、私は知っていた。
この敷地に入り込んだ時に、すでに気配に気がついた。

・・・今まで、彼の気配を察知することができなかったと言うのに、今度は彼の息遣いさえ聞こえて来そうなほどに近くに感じる。

私は首を横に振った。
「潔斎中だ。・・・誰にも会わぬ」
「わかりました」
「その代わりに肝に聞く薬粉と煎じ茶を持たせてやれ」
「わかりました」
彼女に背中を向けていたものの、少なからず彼女が驚いていることがわかった。
それでも、彼女は私の命に従って頷いた。

ただ、一言だけ私に忠告した。
「・・・あの男はいけません」
彼女は、私の背中に向けて、ぽつりと言った。私は薄く嗤った。
「おまえの兄は・・・本当に妻思いだな」
この時間は皆が行動を始める時間である。そこにこうやって社に来るのは信心深く、一仕事の前に詣でることを習慣としている者か、火急の用事を持つ者だけであった。
乾いた柔布で私の肌に乗った湯を拭き取っていた彼女の手が一瞬止まった。
私は彼女に向き直った。
・・・彼とよく似た瞳が私を見上げていた。
あの時の幼子は、今は娘となりこうして私に仕えている。誰かの妻になることを拒否し、兄からは神に捧げた娘ですからと言われる憐れな娘を・・・私は見放すことはできなかった。
「おまえの想像は現実にならない。・・・それは朱月蒼浪だからだ」
「朱月蒼浪・・・」彼女は唇に聞き慣れない言葉を乗せて、繰り返した。
私は微笑む。いつもの・・・穏やかな笑みであり、それは私の仮面であった。
「そうだ。・・・願ってはいけないことや、決して実現しないことを言う。交わらない朱月と蒼浪が出会うことは、決して・・・ないのだから」
朱を受けて海が蒼くなることはない。

●朱月蒼浪38

彼女は脱衣床の上で私に衣を着せながら、少し考えていたようだった。

昨晩は赤い月が出ていた。

私が朱月蒼浪のことを言ったのは、それと関連があるのだろうと思っているようだった。

それで、私が何をしていたのか・・・薄々わかってはいるのだろう。

しかし、私がいつになく否定的な言葉を述べたので、彼女の中で何か感じるがあったようだ。

「・・・朦様。朦様は、蒼浪という意味に、老いて髪に艶がなくなることという意味があるのをご存じですか」

私は伸ばしていた腕を下ろしながら、彼女の言葉を聞いていた。

私は黙ったままだった。

私に肯定や否定の言葉は求めない。

それが傍巫女だ。

だから、それは彼女の眩きなのだろうと思っていた。

しかし、違っていた。彼女は言った。

「・・・朱月は赤子を指すとも言われています。

つまり・・・生まれ落ちた時から死ぬ時まで、という意味があり・・・永遠にひとりの者だけを愛するという意味があるそうです」

私は男女の愛についてよく知らなかったのだから、そのような言い交わしの言葉があるとは知らなかった。

私は彼女の顔を食い入るように見つめた。

彼女も男女のことはよく知らないのですけれども、と前置きをして、静かに言った。

「だから、男女が愛を誓う時には、朱月蒼浪・・・私とあなたは朱月蒼浪なのだ、という言い方をします。交わらないあり得ないことが起きた、と・・・奇蹟のような出会いが起きて、その月と浪に誓って・・・互いに惹き合い、そして永遠にあなただけを愛する、という意味です・・・」

私はそこで唇を結んだ。

何ということだろう。

・・・私は、彼に愛を誓ったのか。

決して交わらない月と浪であるから諦めるように、と言ったつもりであったのに・・・私は、私の言霊に彼への愛を誓ったと言うのか。

私がほとんど喋らないのは、私の言葉には霊力があり、少なからず在らざるモノを喚んでしまうからだ。

そして私は私の言葉でそれらを滅することもできる。

それなのに、赤い月の下で私は様々な言葉を述べた。人である彼の前で・・・

彼はどんな気持ちで・・・私が朱月蒼浪であると言ったことに対してどんな気持ちでいたのだろうか。

あり得ないことだという意味で言ったのに。私は繰り返し・・・彼に永遠の愛を誓ってしまったのか。

私は愕然とした。

それでも、彼は神の娘が約束したことだから、と言わなかった。

私は島巫女だ。

意図せずして述べた言葉ですら、責を持たなければならない。

私が望まない血を海に流してはいけないということと同じであった。

私は、私の言葉が及ぼす影響を考えると、何も口に出さずにただ微笑んで居るだけが最も和を呼ぶ方策なのだと思っていたから・・・だから口数を減らし何も感じないように生きていたというのに・・・。

私は唇を手の平で押さえた。もう溢れてしまった言葉は戻すことはできなかった。これが、定めなのだろうか。宿世を結ぶ詞を意図せずして述べてしまったのだろうか。

そんな私の様子を見つめながら、彼女は・・・私の傍巫女はどうしたのか、と尋ねなかった。

「穢れを払うには、3日籠もらなければなりません。支度をしてきます・・・」

何をもって穢れと言うのだろうか。

私の不用意な言葉だろうか。

彼の肌だろうか。

・・・それとも・・・巫女姫でありながら、人の心を吹き込まれてしまった私の過ちか私そのものが穢れなのだろうか・・・

そんな私の様子を見て、何か失言があったのだろうかと思ったらしい。彼女は私に詫びた。

「・・・男女の契り事を、聖なる湯殿で述べてしまいました。お許してください・・・」

私はその言葉に赦しを与える代わりに、そっと言った。

「・・・海が荒れる。今宵の夜漁には出ないように・・・」

私は、ただそれだけと言うのがやっとであった。

そして後の支度は自分でできるので、はやく知らせを送れ、と彼女に告げる。

でも、と顔を上げた彼女から、柔布を取り上げて、私ははやくしなさいと言った。

その時に布を持った指先が震えているのを感じた。

しかし彼女は私のそんな様子を見ると、立ち上がって、先伝に知らせると言って湯殿を出て行った。

髪を洗い、巻き上げたままで私は自分の喉元に触れる。

彼が・・・私に触れた部分が、熱かった。

そして恐ろしい誓いの言葉を吐き出してしまった自分の喉が潰れて、今度声が出なくなれば良いのに、とさえ思った。

恐ろしい・・・

そうだろうか。

私は、ふと、そこで思った。

私が朱月の下で・・・彼に何かを言ったのは、彼があ海に出てこなければ成立しなかった。

決して赤い月の夜には外に出てはいけないと言われているのに。

彼は・・・海に出ようとした。

愛する妻のために。

彼は海に出ようとした。

あの時の彼の激情は、私の血に酔ったものであれば、私の誓いは・・・無効だ。彼が望まなければ、それは効力を持たない。

彼には妻が居り、その者以外と永遠を誓ってはいけない立場にある。

そしてそこで思い至った。私は本当に望んでいなかったのだろうか。

彼が激しい感情を剥き出しにして、自分に添ってくれと言った時。

私は、そこで彼を滅することができたのに。不敬な男の命を奪うことは簡単であったのに。

・・・そうしなかった。いや、違う。・・・そうできなかったのだ。

彼は光波の持ち主で、彼の命を私が奪うことはできない。海神でさえ彼を浪に沈めることができなかったのだから。

その彼は・・・私の血で酔うのだろうか。

思ってもいないことを叫ぶ程に、気を違えてしまったのだろうか。

●朱月蒼浪39

私は身体を震わせた。・・・いつもと変わりのない朝であったのに、私は空の青さが怖かった。雲が浮かんでいる。今、海を見れば蒼いのだろう。どこまでも、蒼い海が広がっているのだろう。

空も海も月さえも、私の一部であったのに・・・なぜ、私はこれほど胸が苦しくなるのだろうか。

手が届きそうなのに、届かなかった。

そして、この邸内で傍巫女である妹から冷たく帰邸を命じられている彼の落胆した光波を感じて、私は大きく息を吸った。

彼は愚かな人の子だ。

・・・自分の妻を愛するのに理由を求める愚かな青年だ。

彼と彼女こそ、朱月蒼浪ではないか。決して出会うことのない海で、出会った。理由はどうであれ夫婦の契りを交わし、肌を重ねる日々を愛おしむことに、なぜ疑問を持つのだろうか。

しかし、彼はそうではないと言う。

私はその言葉を信じなかったのに・・・彼に愛の言葉を投げてしまった。

知らなかったからとは言えない。彼の何とも言えない複雑な表情の意味を、今になってようやく思い知ったのだ。

これで私の言霊に引き寄せられて、彼女への愛を消し去ることになってしまえば・・・それは私の責であった。

村の娘達の中で、思い詰めた者は、恋しい男を俘虜にする薬を煎じてくれとこっそり訪ねてくることがあったが、私はそのような薬はない、といつも言っていた。

相手の心を動かすのは、心を込めた愛の言葉だけであるから、気持ちを込めて相手を見つめ、自分の願いを告げよ、とだけ言い続ける。それでも受け入れられなかったら、海に流せと言った。

苦しい思いは父神が受けてくださるから、と言った。

それなのに。私は言葉を彼に投げてしまったのだ。

・・・妻問いより厄介であった。

私の中で浪がさざめいていた。これまで決して誰も私に問いかけることはなかったのに、彼は問うたのだ。

あなたは、それで良いのか、と。

私は腰紐を結び、結い上げていた髪を解いた。

黒い髪が私の肩や背中に広がった。いつもなら、ここに柔布をあてて湿りを取る役割の巫女は、私の命によってこの場に居なかった。

今、ここに居れば・・・私の顔を見て驚くだろう。

私は微笑みしか浮かべない朧月夜の姫である。

それなのに・・・私は私が、もっと違う表情を浮かべることができることを、知ってしまった。

・・・蒼浪とは、老いて艶のなくなった髪を言います・・・

傍巫女の言葉が響いていた。

永遠に近い年月を生きている私と、一瞬しか生きられない生を持つ人の子は、決して交わらない。

けれども、彼は光波の主で・・・

私は心に過ぎるものを沈めて置くことができなかった。

・・・何かが、起きるかもしれない。

奇蹟が起きるかもしれない。何かが、変わるのかもしれない。

その時が・・・

私が愚かな願いを持ってしまった瞬間であった。

朱月蒼浪を交わした彼には、妻が居る。

そして、彼の真意が推し量れない。

妻を海に還すのではなく、魂を彷徨わせたいと考える愚かしい願いを持つ男だ。

・・・だから、惹かれるのだ。彼がわからないから。彼はまだ・・・何かを隠している。

彼が私の肌に触れた時。躊躇いもせず、私の肩に貌を寄せた彼の熱を受けて、私は震えた。常少女に触れる罪深き者を咎めることもせずに・・・ただ、私は驚きそして僅かであったけれども激した。彼が・・・彼が、禁忌を恐れぬ男であったからだ。あの時に私を見上げた幼い童が、私に触れそうになったから。

・・・滅びを招く者に気を奪われた。

言葉を与えるというのは、その言葉の持ち主に自分の魂を分け与えるということと同じであった。だから、妻問いは唱和し、復唱する。そうすることによって互いの魂を混じり合わせる働きを持っているからだ。

私の髪が白くなり艶がなくなっても・・・彼は私を貶まないのだろうか。

彼は、私を妻にしたいと言う。しかし、その先は・・・何をしたいのかが、わからなかった。そ

れを知るためには、彼と言葉を交わさなければならなかったが、私はそれ以上踏み込んではいけないという内なる声に引き止められていた。

いけない。

そう思った時には、もう、遅かった。

私の中の・・・決して波立たない蒼浪に・・・赤い月が墮ちた。

そして私は湯殿の天井を見上げた。もう月は見えない。赤い月は当分やって来ないが、それは夢ではなく・・・私が流した血によって、海は今夜から荒れるだろうと思った。そして時折、荒れるのだろう。私は赤い月の夜だけではなく・・・度々、自分が神女であることを忘れて海に潜るのだろうと思った。忘れることなどはできないから、一瞬だけ・・・自分が只人であることを確認するかのよう、息苦しさや切傷を確認するために、潜るのだろう。

・・・彼の気配が遠退いていった。

邸から出て、希少な薬壺を胸に抱き、自分の家に戻るのだろう。彼の妻が待つ、自分の家に。

・・・胸が痛んだ。

私は・・・人から遠退いていく自分を哀しんでいたのに・・・今は、彼の気配が遠退くことを哀しんでいる。

彼は・・・今宵も、海が荒れると聞いているのに、海に入るのだろう。そういう男だ。そして海の神は彼の命を奪うことができない。滅びの神なのか、新しい風をもたらす遣いなのか・・・まったくわからなかった。しかし、これだけは言えた。

・・・彼は、私の言葉を持って行ってしまった。

それが何を意味するのか・・・私にはわかっているようでわからなかった。

駄目だと言われたのに。

いけない、と言われたのに。

それなのに・・・この悶えの行方を見定めてみよう、と思った。

私の命は、まだ・・・輝いているのだと証明したかったのだろうと思った。

しかし、私は彼に照らされなければ輝きを確認することができないのだろう。

陽に照らされる蒼浪のように。時折赤くなる月のように。

私の名前は朧だ。はっきりと縁を象ることができないぼんやりとした生を生きることを決められた名前であった。

この島の巫女と言われて・・・もう久しい。

数を数えることをやめてしまってから長い年月が経過している。

それなのに。

私は・・・蒼い空を見上げて、次の赤い月はいつ出るのだろうか、と考え始めていた。私の秘密が一つずつ増えるたびに・・・私は秘めたる思いを海に流す。朱月蒼浪の人のことを考えながら。私ではない誰かのことを想いながら泳ぐ海は・・・とても冷たいのだろうと思った。父なる神が、私をそのまま海底に沈めてくれれば良いのにとさえ思った。

しかし・・・私は慣れた渡り廊下の板を踏みしめながら、考えていた。

彼が持ち帰った薬は鮮度が重要であった。

いくらも持たせていないだろうから、また新たに調合してやらなければならない。・・・また、会える。

もう会わないと決めただけなのに、私は自分の気持ちが海の沖天気のように変わってしまっ

いることに気がついた。

禊ぎを終えるころ、彼はまたこの邸にやって来るだろう。そして私は・・・少しずつ、心を彼に吸われていくのだ。私が発した言葉をたぐりよせるように、彼は私の中の何かを少しずつ・・・手繰り寄せて、いつか・・・私の中身全部を取り上げてしまうだろう。

その時。私はその時、本当に永遠の安らぎを感じて海に還ることが出来るのかもしれない、と思った。

これが一体何と言うべき情であるのか・・・私はもう知ってしまっていた。

彼の秘密に挑んでみよう、という気持ちになっていた。

私は、私という存在を残すために、父神に背く行為をしてしまうのかもしれない。

それでも良かった。島は滅びない。光波の主が居るからだ。私が滅んでも島は沈まない。

・・・そこで私は嗤う。島が滅ばないという確信がなければ、私の心は動かなかったはずだ。それなのに、これほど軽々しく・・・自分はあっさりとは呆気なく、幾歳も奉ってきた海神その人の娘巫女であるという立場を捨ててみようという気になっていた。

なぜなのだろうか。

彼はその答えを知っているのだろうか。

私は・・・その答えを導き出すことが出来るのだろうか。

愚かな男が妻のために仕事を放棄してやって来た、と怒りの言葉を口にしながら、私の傍巫女が廊下の反対側からやって来た。そして私の姿を見ると、とたんに険しい顔を戻し、私に微笑んだ。

彼女は、私の昏い影を知らない。

薬を刷り込むのを手伝いましょう、と彼女は申し出た。

私は頼む、と頷き・・・そして言った。

「禊ぎの間、薬の調合をする。用意して欲しい」

彼女は珍しいですね、と言った。

何かをしながら禊ぎの時間を過ごすことは、私にとっては珍しいことのようにだ。

しかし、そうしなければ私は・・・ひとりの時間を過ごすことができなさそうだと思っていた。

私は、私の知らない私を皆が知っていることに驚いていた。私は、何も考えずにただ祈りを捧げる巫女であったはずなのに・・・何かが変わってしまっていた。

「臈様。・・・具合が悪いのですか」

「いや、私は・・・どこも悪くない」

私は、それだけを言うと祈りの間に入ると言った。

まだ髪が乾いておりません、と戸惑いながら声をかける彼女の声を後ろに、私はゆっくりと・・・歩き始めていた。幾度も通った廊下であるのに・・・どこか・・・無限に続く道への入り口のような気がしていた。出口のない、恋に向かって私は足を踏み入れたのだ、と感じながら・・・それでも、どこか晴れやかな気持ちで歩き始めた。

(FIN)

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

■朧雨 01

雨が降ると、ここでは、普段の決まり事が通用しなくなる。

この一体では常に潮流が激しく変化し、季節によってもそれは変わりゆく。

そして、海の流れを読むことに長けている者であってもなかなか読み取ることのできない潮目がいくつも不規則に発生するからだ。

そんな中で、遠くを見渡せない雨が降って波が乱れると、島の生きとし生けるものはすべてひっそりと身を縮ませて、雨神が過ぎ去るのを待った。

一見穏やかな波に見えるが、その下では、海神の嘆きの涙にも似た激しい渦巻きが入り乱れていることを十分承知していたから、島の民は決して海に出ない。

この時は、海では殺生をしてはいけないことになっているし、たとえ、無理をして漁に出ても、生命そのものが息を潜めて海底深くに沈んでいるわけだから、何かを得て戻ってくることはなかった。

魂なき骸となって、帰島したいと考える粹狂な願いを持っていれば、雨の海に漁に出るという行為は別の意味があったが。

長雨が續くと、島の民は生計を維持できなくなる。

長い歴史からそれをよく承知していたので、常に備蓄することも忘れていなかったし、山に入って猟をすることもあった。

そんなときは、山の者は、決して山に入らない。

この島では、山の者と海の者は相容れない。

海に出て漁をする者を海の者、山に出て猟をする者を山の者と言って私たちは区別していた。

それは区別ではなく、差別でもあった。

海に囲まれたこの土地でどちらが優れているのか、どちらが素晴らしいのかと考えることは愚問であると、この島の巫女姫はいつも教え解くのに。

その時には一瞬和解したかのように見えるが、それでもすぐに諍いが始まってしまう。

人と人の争いには、有益無益より感情が優先される。

このことについて、朧様はいつも憂えている。それに気が付いているのに、それでも止めることの出来ない人間を、彼女は捨てることができない。

かつて、朧様も人であったから。

今は、海神の代理人として、貴き存在になり、神仙の籍に入って、人と違う生命の環のなかにおわす、この島でたったひとりの現人神は、いつも美しい貌を曇らせて、このことについて胸を痛

めていた。

生きとし生けるものたちは、平等ではない。

平等であるはずなのに、そうではない。

理不尽な死もあり、思いがけないことで簡単に人は死ぬ。

海に入ることのできない者に対し、海での漁を生業としている者は傲慢だった。

山の者は遠見ができるし、普段沖に出ている者たちに代わり、この朧様の屋敷を守ったり、手入れをしたりしてくれる。

それなのに、彼らはずっと別の集落を作り、ひっそりと生きている。

海に入らないという誓いを立てた一族の末裔なのだという。

朧様がやって来るずっと前からの誓いであるらしい。

昔、海神様の怒りを受けたとか、あつてはならぬ業罪を背負っているからだとか、諸説はたくさんあったが、それらを知るものは、山の者のうちでもごく限られた者だけだった。

彼らは、余所の血を入れることはあっても、決して外には出て行こうとしない。

彼らは海の者たちと交わらないし、影のようにひっそりと生きている。

遠視を多く輩出するので、彼らは別の意味で役に立っていたが。

それでも、私はそのこの邑の出ではなかったもので、詳細はわからなかった。

「私のことを月夜見の化身と言ひ、海神の娘と呼ぶように・・・その都度、必要に応じて理由というものは変わるものだ」

朧様はそう言って淡く微笑む。

いつもとらえどころのない、とても淡い雰囲気を持つ朧様に仕えることができる私は果報者だ、と言われて送り出されてきた。

狭い島に住みながら、私は家族と疎遠になった。

それでも日々、こうして年月を経てもまったく変わらない美しい姫神様の元で、季節を数えることをやめてしまった御方のために、私が季節の巡りを数えはじめることになってから、どれくらい、季節は巡ったのだろうかと思うほどに長い年月が経過していた。

突然降り出した雨に、私は館の扉を閉め始めているところだった。

朧様は巫女姫でおわすが、普段は常人の暮らしと何ら変わらない生活を送っている。

夜になれば眠るし、強い日差しに当たれば、すぐに白くなるものの日焼けもする。

けれども・・・私は、ここに仕えることになってから、一度も彼女の御髪を切り揃えたことがなかった。

彼女の美しい黒髪は、日と夕に焼けた島の者が持ち得ない美しい漆黒の髪だった。

この島の娘であるなら、誰もが一度は憧れる。

・・・こうやって、巫女姫と共存する島の奇異な出来事について、誰もが何も感じないでいるということではなかった。

けれども、彼女はそれ以上に、この島に、この島の民に、恵みをもたらし続け居るから。

■ 隴雨 02

「中に入りなさい」

隴様がはっきりとそう言ったので、私は持っていた箒を取り落としそうになった。

私はその時、散り葉をかき寄せているところであり、遠くまで敷き詰められた白砂が先般の強風で散ってしまったので、また敷き詰めなければならないと考え事をしている最中のことであった。

普段、彼女の身の回りの世話は私の役割だった。

私はそのために、彼女に仕えている。

もちろん私ひとりだけでは広大な敷地の管理もできないし、神事を裨輔する役割が主であるから、その他大勢の者たちが、自分の生業とは別に、この館に何らかの役割を分担して持ち合わせていた。

彼女は生き神であるから、島の者全員が、不平不満を持つことはなかった。

全員が同じ価値観を持つとは限らないので、快く思わない者もいたのかもしれないが、それを口に出せば、小さなこの島は、一晩で海の底に沈んでしまうだろうという具体的な脅威の前では、言葉を音に出すことはしなかった。いや、できなかった。

彼女は人であったのに、人ではなくなった。

どんなに強い日差しの下でも、彼女の肌はきめ細かく白いままだった。

髪も瞳も瑞々しく若いままで、少女の姿のままであった。声も。睫の先までが生命に溢れている。

けれども、彼女は自然の理の環から外れてしまったのだ。

それを海神の祝福だと誰もが言うが、彼女はそうは思っていないような気がしてならなかった。

何か自分の事について感情を伝えることはなかった。

滅多なことがなければ邸の外に出ることはなかった。

それなのに、気が付けば誰もが近付くことのできない断崖絶壁に立っていたり、島の先に浮かぶ幾つもの岩島の上で鳥と戯れていたりする姿を見て、私はその都度、危ぶんで気を揉んだ。

彼女はそんなことでは死にはしない。

誰も彼女を傷つけることができない。

こうしてあの方は・・・気の遠くなるような年月を数えることをやめたのだと思うと。幾歳も過ごしてきたのかと思うと、彼女の安らぎは一体なんだろうと思うこともあった。だから、漣のようにしか微笑まないのだろうと思った。

彼女は大きな天変地異の時にしか、気象については予告しなかった。つまり、人々の日々の暮らしにかかる天候の乱れや予測は行わなかったのだ。

人がそれに慣れるといけないから。

「・・・雨が降る」

彼女は私にそう言った。

私は驚いて・・・本当に驚いて、手を止めて、私の主の姿を見つめた。

先頃、彼女が神になった年齢を超えたことに気が付いた。

かの方が成長していく姿を見つめた者は、誰も居ない。そう・・・誰も。

それは彼女とともに年を取る者がいないから。彼女は年齢を重ねないから。

彼女はそうなった瞬間については多くを語らない。

「気が付いたらそうになっていた」とだけ繰り返して答えることにしているようだった。

臙様は、いつも私を下女としては扱わない。

一友人のように。ひとりの昔から知る上下関係はないと彼女は言うが、それでも、この島にたったひとりだけしか居ない姫巫女に対して、対等であろうという人は一人しか居ない。私の知る限り。

空を見上げれば、果てしない蒼が続き、雨の気配はまるでなかったものだから、私は顎を上げたままで彼女に問おうと思ったけれども、口を噤んだ。

臙様の識には、誤りはない。

だから、彼女はあまり話をしない。

そのひとつひとつの言葉に、誰もが耳を傾けて、そして彼女のもたらす恵みや未来を享受しようとする。

彼女は長い時間をかけて、悪いことも良いこともすべて受け入れる土壌を創り上げた。

人間は欲深で、そして脆弱であると彼女は知っていた。

且つ、私は、彼女が絶望していることを知っている。

だから、弱さを受け入れろと・・・彼女は静かに、忍耐強く民に教え続けた。

ここは楽園ではない。

雨が降れば海に出ることのできない者たちはどうやって過ごそうかと悩むし、大潮の日に悪風が吹けば海際の集落の者は岸に置いた船をより遠くの砂丘に置かなければならない。

私は、雨とは無関係の穏やかな空の蒼を見上げていたけれども、すぐに、返事をして邸内に戻ることにした。目の前の真実より彼女の言葉の方が絶対だった。

少なくとも、私には。

私には、彼女の言葉に偽りを感じる理由は存在しない。

「まだ途中なのですが・・・」

私が邸内に入る階段を上りながら、その先に佇む、この島の巫女姫に声をかけた。

「明日で構わない」

先ほどのはっきりとした口調は終わり、彼女はまた柔らかな語調で私に微笑んだ。

「・・・俄雨だけは、私の手に負えない」

「朧様が手に負えないこともあるのですか」

私は驚いて顔を上げた。

振り返って、諦め悪く空の色を確かめていた私は、また、もう一度、驚いて声を立ててしまった。

彼女は騒がしい空気は好まない。

何かを好きだとか好きではないとはっきりと聞いたことはなかったけれども、彼女は静けさを何より望んでいるのだと、何となくであるがわかっていた。

自分を律することができなかつた私は、手の平を口元にあてて、少しだけ唇を噛んだ。

黒い髪のが、僅かだけれども風に揺れた。

彼女は本当に美しい。

そして本当に・・・孤独だった。

孤独を癒して遣ろうというおこがましい感情は持ち合わせていない。

朧姫を救うことができる者は、この島には居ない。

永遠に近い長い年月を生きる彼らは皆、こんなふうに関心の漣を消し去らなければ、永遠を生きられないのだろうということはわかった。

それを羨む者も多かったけれど、私は、私の短い生命が続く限り、彼女の傍に居たいと願い、自分の意志でここに居る。

彼女は笑った。そうだ、と言って頷いた。

「突然訪れる雨は、気配を消し去るから。・・・私はこの瞬間だけは、声を聞くことができなくなる」

成る程、と私は納得した。

朧姫は草木と対話したり、見えないものと対峙することができた。それ以上のこともできる。

彼女は神姫なのだから。

海神に愛された、人の世に遣わされた者であるのだから。

私はその奇蹟を幾度か見たことがあった。

その力でもって、彼女はたったひとりで、この島を護っている。

彼女はそれを施しだとは思っていない。他の島姫達の中には、神のごとく君臨して、政にも口を差し挟む者も居ると聞くことがあった。滅多に外から情報が流れてくることはなかったが、それでも、時折流れ着く島船の者たちからそのような小話を人伝に聞いたり、直接聞いたりすることがあった。

彼らは自分の籍のない島を訪れると、最初に各々の邑の長に挨拶をする前に、島の姫巫女に挨拶をすることになっていた。

その時に、敬意とこの島であったことを秘密にする誓約を引き替えにして、御子神のみ作ることのできる仙薬とも霊薬とも言われる希有な丸薬や煎じ薬を手に入れることができた。また、どんな飢饉にも耐えうる種を授けられた。

巫女姫が赦した者でなければ、余所者は島から出ていくことはできない。

そして、約束を違えば、待っているものは・・・海の糧になることだけだった。

海に生きる者たちは、それを良く知っている。巫女姫との取り交わしがいかに神聖なものであるかを知っているからこそ、この邸はいつも静かなのだ。

私は手を後ろに組んで、静かに空を見つめる黒髪の姫に声をかけた。

「それなら、最初に館にお入りになってください。・・・貴女の声の聞こえない雨など、禍々しいだけですから」

「不吉とは思わない」

彼女の声は涼やかでよく通る。しかし声量は小さかった。

柔らかく緩い口調で話をする。口数は少ないが、会話を厭っているわけではなかった。彼女は言葉を使わなくても会話できるのだ。

言葉を使う人間以外の、命ある者たちと常に会話している。

「私が人に戻る瞬間は・・・この時だけしかないのだから」

私はぎゅっと胸を押さえた。自分の胸が突然、苦しくなったのだ。

どういう言葉をかけたら良いのか、判らなかった。

余りにも、臃様が哀しそうだったから。そして同時に、嬉しそうだったから。

俄雨は突然降り出す雨で、そして彼女はその瞬間だけは、声が聞こえないと言う。

不均一な雨の音が、彼女に届けられる様々な声音を濁していくからだろうと予測できた。

そういえば、俄雨の予言も、彼女は一切行わなかった。

恵みの雨であることが多く、短い時間で大量に水を得ることができたので、島の者は長雨より重宝していた。

誰も・・・この瞬間の朧姫のことなどは考えないだろう。

だから彼女は哀しそうな顔をする。誰も彼女を思い出さない瞬間だから。

朧様は天候の予言はしない。気まぐれな雨がすべてを降り注ぎ満たされるまで、彼女はひとりきりになる。

誰の声も聞こえなくなる。

ひょっとしたら、人の言葉も聞こえないのかもしれない。

私は、俄雨の時に彼女と会話した記憶を引き出そうと思ったけれども、ひとつもなかったことに気が付いた。確かに、朧姫は、俄雨の時には姿を現さなかった。

でも、彼女がなぜ嬉しそうにしているのかも理解できた。すべては理解できないけれど、理由がわかっていたように思う。

自分たちの恩恵のみを考える俄雨の時間だけは・・・朧様は、朧様になる。

だから、嬉しいのだ。

同時に・・・誰からも忘れ去られてしまうから、寂しいのだと思った。

「お喋りが過ぎた。内密にするように」

彼女はそう言って、私に背中を向けると、邸の奥深くに姿を消した。

■朧雨03

これほど長い時間を一緒に過ごしているというのに、この島の巫女姫はまったく不思議な存在だった。

ふと気が付くと、姿が見えない。

ひとりで出歩いても危険がないこの島では、どこに行っても特段に彼女の問題になることはない。

けれども、朧様は特別な存在の方で・・・彼女の恩恵に縋るだけでは飽き足らずに、何もかもを手に入れたいと思うものは少なからず存在するのだ。

それが、生きていようがそうでなかろうが関係なく。

彼女のように永遠を生きる存在の生き肝を煎じて飲みたいという、愚かな思い付きに囚われた輩がいる。少なからず存在する。

手続きを経ずにこの島に乗り込み、そして決して帰れないという運命を進んでいった者たちの末路を何度か見てきた。気の遠くなるような長い年月を生きてきた御方にとっては日常的事と思えるくらいの頻度であるのかもしれない。私でさえそう思うのだから。

この間も。

この島を自由に行き渡る臙様に会いたい、と目通りを願った者が彼女の前に突然姿を現すという狼藉を働いたことがあった。

彼女が活着ている限り、これは続くのだろう。

彼女はそんな仄暗い面を・・・決して島の人に見せることはしなかった。

ただ、穏やかに微笑むだけである。

静かに、ひとりで何もかもを抱えているような気がしてならない。

そんな彼女の心の安らぎになれば良いと思い、私は邸内の庭にたくさんの花を植えたが、それでも臙姫の顔は朗らかに微笑むことはなかった。ただ静かに、ありがとう、と礼を言っただけだった。巫女姫から礼を述べることは滅多にないことである。けれども、それがもったいないことだと思い平伏しながらも、どこか、彼女はどのように満たされないのだろうか、ほんの少しだけそんなことを思っていた。

私の何が気に入ったかと言うと、彼女曰く「疑問を持つところ」だそうである。私は彼女の存在を否定していないし、とても光栄な立場にあることをとても誇りに思っている。けれども、皆のように・・・ただ、海神の娘として崇められているだけではなく、内なる一番深い場所に、何かを秘めているのではないのかなと思うことがあった。

それを口に出すことはなかったけれども。

やがてすぐに強い雨の匂いが風に乗って、あたりに充満した。

私は慌てて脚を早めた。

間もなく、嵐のような強雨が訪れる。

この島に住む者たちは皆、身体で覚える風であった。遠視のものでなければ視られない距離ではなく、私たちにも十分に推し量れる湿った風が吹いていた。

そして、どうして早くしろ、と臙様が言ったのかも、わかった。

邸内は薄暗かった。この時間は祈りの時間ではないから、入り口に入って次の間を越えた奥にある祈りの間から、話し声がしたからだ。

私はぎくりとして脚を止めた。

・・・今、この屋敷の中で、しかもこの祈りの間に足を踏み入れることができるのは、臙様と、臙様にお仕えする私だけである。

臙様は祈祷する時間だ。

一日の時間のうち、誰とも会話を交えてはいけない時間がある。

今はちょうどその刻限にさしかかるところだった。

ほんの僅かな時間であったけれども、彼女はしばしばこの祈りの後に、預言をしたり誰かに忠告したり・・・言葉を伝えることがあり、私はそれを記憶して、他の者たちに伝える。書き留めることはしない。記憶するのだ。

私が選ばれた理由はそこにある。耳が良く、記憶することがあまり苦ではない。脚色をしないかわりに、言ったとおりの言葉しか伝えないので、意味が理解できない、と邑の者たちからは無愛想な巫女だと陰口をたたかれているが。

朧様には何度も驚かされるが、今回もまた私は驚愕で脚を止めた。

裸足で廊下を歩く自分が、一瞬、後ろに重心を反らしたので、ぎしりと板が鳴る音がした。しかし朧様はここを歩いていても、音を立てない。

その彼女が・・・階段を上りきった場所にある、御上の間（吹き抜けがあり、玄関を上がってすぐの間のことが多い）に座り込んでいたからだ。

祈る前に禊ぎの儀式を簡略化したものを行う。

一度外に出たら、結界から外れて穢れてしまうということで、祈りの間に入る前に手や脚を清める場所としてここを使うが、彼女は最初から・・・外に出ていなかったではなかったはずではなかっただろうか。

私は自慢の記憶力を駆使して、すぐ先ほどの出来事を思い出そうとしたが、うまく思い出せなかった。

祈りの間に入ったと思っていたのに。

彼女は居住まいを正して、座って居た。ここは彼女の汚れを祓う場所ではあったが、そうやって座って何かをする場所ではなかった。・・・高い天井が風に揺れて僅かに音がするばかりであるが、今は人払いをしているので大変に静かであった。

それなのに。

私は息を呑んだ。

なぜならば、朧様の前には・・・誰かが座っていたからだった。

外は明るいはずなのに、邸内は薄暗かった。必要最小限の照明だけしか点さないからだ。姫巫女の瞑想を妨げないためのものであったが、私はそれを後悔した。

もっと灯りがなければ、朧様の前に誰が座っているのか、こちらからは見えないのだ。

私は日の光を背にして立っていたので、薄暗い室内を眼を細めて見つめた。

私にとって最も大事であるのは朧姫だ。彼女の身の安全を確保することが私の務めであるのだから。

そしてまたそこで、しまったと思った。

庭掃除をする都合上、守り刀を置いて来てしまったのだ。これでは御身を守れない。

・・・最悪の事態となるまえに、私が盾となって御守りするしかない。

嫺やかで静かで、いつも朧気に微笑む彼女は、誰もを守るが誰にも守られていない。

海神様よ。朧様の父神様よ。彼女を・・・どうしてそんなふうにして彼女に試練ばかりお与えになるのですか。

私は朧様の声を反芻していた。

おまえは、疑問を持つから人と違うのね

いいえ、違う。朧様の前でだから、疑問をぶつけることができるのだ。

何度尋ねても、海の神様は何も応えてくれない。だから、朧様にみんなが尋ねる。みんなが救いを求める。

でも、私はもっと違うことを朧様から教えて欲しいから。だから、いつも尋ねるのだ。

私の身体中から汗が噴き出した。

同時に、外では激しく雨が降り出した。

■朧雨04

雨音は激しく轟音にも近い厳つ霊となって、この館にも、この島の誰にも平等に雨を降らせた。通り雨だから、すぐに鎮まるかもしれない。

しかし、私には、この雨音に乗じて、朧姫の傍に誰かが・・・気配を殺して近付かなければならぬような輩が彼女に寄ることの可能性について、失念したいたことを悔いる瞬間だった。

湿り雨と言うには激しすぎた。

空が落ちてくるのではないのかと思うくらいの重みのある水雨があらゆる気配を抹消してしまっていた。

地を打ち、屋根を打ち、雨は激しく・・・降り注ぐ。

だから、私は何も気がつかなかった。

私には特別な力は備わっていない。

けれども、彼女の僅かな様子の違いを知ることはできる。

いつも、いつでも・・・いつまでも彼女を見守る役目を持っているから。

それは決して労苦ではなかった。

哀しいと感じることもなかったし、私の誇りと喜びが私を生かしていることに対して満足していた。

だから、わかるのだ。

時折、朧様は・・・ふとした瞬間に顔を上げる時があった。その瞬間の予兆に私はまったく気がつかない。

ある時、突然に。それはやって来る。

そして、そんな時には、きまって、私を払う。

朧姫は私を遠ざける。

小さな用事を言い付けることがあったし、今行く必要のない遠い場所に遣いに行かせることもあった。

そんなときは決まって・・・朧様は人に言えない何かを背負っているのだと感じた。

寂しいとは思わない。けれども。

私にも手伝うことができるのであれば、喜んで分かちあいたかった。

海神の娘巫女と呼ばれている彼女には、たくさんの呼び名があった。

けれども、どれも気に入っていないように思えたが、どれも受け入れていた彼女を、私はいつも見つめ続けた。

これは、一般的に言われている恋をいうものであれば、そうなのかもしれない。

でも、邑の男女に見受けられるような・・・そんな関係とは違う。私が一方的に彼女を見ているだけであったから。

その人が、憂いに満ちた表情で遠くを見つめる。海を思い出すように。

こんなに近い場所に、海があるのに。

彼女は海に還りたいと言う。

そんな時には苦しくなって、私は思わず言ってしまうのだ。

「私が貴女様の海になれませんか。・・・浪でも良いから」

そう言うと、彼女は淡く微笑んで、ありがとうと言った。

感謝の言葉は海神に捧げるべきだと教えられている。

私は、驚いて、自分に向けられた言霊が海に還るように祈りの言葉を向ける。

分不相応の余り有る喜びに対しては、海に戻るのが為来りであった。

倅せは、海に感謝することで大きくなって戻ってくる。

そう教えられたから。

だから、私は毎朝毎晩の祈りの時間には、倅せを海に還すことにしている。

私は毎日海に還す。

彼女と一緒に居られるだけで、倅せだからだ。

その一方で、なぜ、彼女がそれほど憂いに満ちた表情を見せるのか・・・

私には生涯わからないのかもしれないと思った。

でもそれでも良かった。
彼女の傍に居られるのだから。

でも、誰も知らない・・・誰も知らない。
彼女の憂悶を。
彼女の咨嘆を。

先ほどの彼女の指示の中で私が黙って従った理由がそこにあった。
明らかに、何かを感じ取って・・・私を遠ざけようとしている。
それは私が煩わしいからではない。
きっと・・・哀しいからなのだろうと思った。

こんな強い俄雨は、朧姫に似ている。
本当はこんな雨のように激しい人なのかもしれないと思う程なのに。
それでも茫洋とした状態を見せ続ける朧様の悲哀を感じるから。
だから、似ていると思わざるを得ない。
痴がましいけれども。わかっているけれども。
そういう言葉でしか、私は・・・彼女と共有しているものを感じることが出来ない。
その彼女が、相見えている存在が、私の目の前に現れた。
朧様。その者は、貴女の・・・貴女が必要とする者なのですか。

■朧雨05

その者が、「山の坊」であることは、すぐにわかった。
・・・獣の匂いがするからだ。

毛と皮の匂いだった。

そして、鞣してなお、はぎ取ることのできなかつた腐肉の匂いが立ちこめる。ここは清らかな朧様の屋敷なのに。私は顔を顰めた。雨の匂いと相まって、何とも言えない籠もった空気が私の肌を粟立たせた。

山には、獣や毒蛇が居る。だから、身を守るために毛皮を身につけているのだ。そして私達は・・・彼らと顔を合わせてはいけない。そう言われて育った。だから、島の者は、この生きていながら生きていない者たちの存在を知っていながらも、知らないふりをし続けている。

この島には、海に出られない者が居る。海の様子を観察し、遠くまで見渡すことのできる「遠の眼」を持った者や、浪や昊の変化を匂いで感じることのできる「微の翼（※鼻梁のこと）」などが居る。いつもすべての衆が揃っているわけではないし、皆、山に籠もり滅多なことがなけれ

ば郷に降りてこないで、今、そういった衆が何人居るのかはわからなかった。けれども、彼らは皆、獣のように山を駆け、獣のように獣を捕って暮らし、僅かな者だけが獣肉と魚肉を交換するために郷の者と交流する。

それは、こんな雨の日に限られていた。

海の者は漁に出られない代わりに、保存用として加工した魚を山の者に分け与える。山の者は、それを交換して山肉や山菜を分け与える。

交わらないように、生きている。山の者は、海に出られない。ここで生涯、海に焦がれて・・・海を見つめながら、山の中で息を潜めて生きていく。

どれだけの規模の集落なのか、私のような下々の者は知る術が無かった。

・・・でも、源はひとつであった。

山の者は、山から生まれるのではない。海の者から生まれた奇能力を持った者が、山の者に引き渡される。捧げられるのではない。下賜されるのだ。

手に余った親が、こどもを山に捨てるのだ。香りに過敏に泣き、海を懼れて入ろうとせず、遠くを見つめて予言めいた言葉を繰り返す、聞こえない声に怯えて喚くこども達を山に捨てる。それを、山の者が拾い上げて育てるのだ。

人に、貴賤はないのよ、と朧姫がいつも言うのに。ここでは、それが横行していた。

だから、山の者は土に還るしかない。この島の者は皆、海に還りたがる。

死んですぐに、もしくは死ぬ直前に海に流されることを祈る。そこで、海の永久に呑まれながら、海の糧になることを望んでいる。

そうすれば、また、海から戻って来られる・・・つまり、次に女の海に宿り、女の子宮という名前の海に入り、この島に戻ってくるができるのだと考えられているからだ。

朧様が、童を館に集めているのは、そのためだ。幼い頃から・・・親の情を深く受けて離れることを恨んだり哀しんだりするより前の段階の幼いこども達を、集めて感覚に聡い者を見分ける。そして、その烙印を押されたこどもの親は・・・しばし愕然とし、生きていてくれるのなら、若くして海に還されるよりは良いのだと納得し、そしてしかるべき晩に、月と海が見守る夜・・・こどもが寝ている間に、山に彼らを置き去りにする。

朧様がやって来る前はこれらのこども達は、抹消されていたようだ。今と同じ様に記録にも残らないが、存在そのものが本当に滅されていたようであった。

だから、彼らは誰と誰が血族で、山の者のうち、誰と誰が本当は近すぎる縁であるのかという分別がないと言われている。必要であれば、妹とも姉とも交わると言われている。姉なのか妹なのかわからないからだ。

だから、山の者は・・・獣の民と言われて、蔑まれていた。

そこで生まれたこどもと、山に置き去りにされたこどもとでは分け隔て無く育てられると聞く。

実際のところは、わからない。まったく・・・わからない。

山に捧げたのだ、と親たちは言う。それで自分を納得させようとしている。でも、夜な夜な・・・その行為を悔いて、親が山を彷徨う。遠見はそれを予見し、来てはいけない禁域に入ろうとする者を押し留める。

生きてるとわかっていながら会えない歎きと、この島では生きてはいけないとされて滅される哀しみと・・・どちらがより心穏やかになれるのだろうか。

そう思ったが、子を持たない私には、わからない感情であった。

でも、わかっていることはある。

朧姫は階級を作るつもりはなく、ただ、死ぬ運命にあったこども達を救いたいがために、島の者としての役割を持たせ、彼女はその繋ぎになることにしたのだ、と。

山の者と海の者が交流するのは、決まってこの邸の砂利の敷かれた庭とされていた。市のようなものだ。斜面を登り切ったところにある、この邸は、山の麓であり、海が見える場所であった。ここを中継点として、一時だけ・・・彼らは交流する。その際には、目を合わせることはない。山の者は、覆面をしてその上から鍔の広い編み帽を被り、そして手足の先を濃い染め色の布で巻いている。どんなに暑い日でも、それはまったく変更されない。

絶大な偉力を持つ朧様は、それでも長い時間をかけて、この仕組みを作り上げた。なぜ、海の者に、海に生きられない者が生まれるのか、知りたかったのかもしれない。そして、異形とされて失う命が少しでも減少するように・・・長い時間をかけて、創り上げたのだろうと思った。

■朧雨06

どこの家にでも、そんな話は存在する。突然なる変異であった。

だから、山憑きの家だと蔑まれることはない。

皆が経験していることであったからだ。

代を遡れば、皆、同じ血脈に行き当たる。そして、朧様はその代替わりをすべて記憶している。誰かに言う事のできない血も、皆、知っている。この島は、いつも清らかであるわけではない。それは私にもわかる事であった。朧様は、その清濁全てを・・・身に引き受けている。哀しみも、歓びも・・・憂いも憎しみもすべて。

だから、朧様が山に入るように指示する指先が己のこどもに向けられることを懼れながらも、誰も彼女を怖がらない。

・・・どこかで、「ああ、そうだったのだ」とほっとしているからだ。

自分は悪くない。自分は・・・穢れていない。そう思いたいから。自分には負えないことを、朧様に押し付けている。不満そうな顔をする私に、姫は微笑む。

儂い、輪郭の淡い微笑みであったけれども、彼女の中にそうするのだと決めた思いを感じていた。

「・・・生きていくということを、こういう時に感じるから」

私はその言葉に詰まってしまった。

朧様を、誰も、生きていくひとりの女人だと思っている者は、居ない。

彼女の夫になる者は居ないし、まして男女の契りの対象にしようと思う者は皆無であった。彼女は、神姫であったのだから。傷つけば、この島は沈む。この島は滅びる。そんな豪胆な試しを実行しようとする者は、居なかった。幾度も、彼女が起こす奇跡を目の当たりにしていたからだ。

その朧様に・・・こんな雨の日に、気配を雨に流して訪れようとする山の者がいるとは思わずに、私は狼狽えて、一步、足を引いてしまった。

板張りの床が湿気で、思ったより大きな音を立てた。

雨の日は、気配が乱れる。朧様はそもそも、気配を感じさせないし・・・

外から来る輩は、砂利を踏みしめるので騒がしい音を立てるからすぐわかる。

でも。

山の者だけは、私には気配がわからなかった。

天気が良くても、海が荒れて風が強くと漁に出られない日に、僅かに感じる獣の気配を記憶しているだけでしかない。

でも・・・それが、常にこの邸の周囲に居るので、気配や匂いに慣れてしまっていたのだと考えた事は無かった。

だから、この白雨の瞬間に・・・それを悟り、私はただ狼狽するだけであった。

そこで、ふと、思ったからだ。私も・・・私の家にも、山の者が存在するのであれば、目の前に居る存在は、私の血族なのかもしれない、と。そう思ってしまったからだ。

衛生管理が徹底されているとは言えない場所で、出産をすればどんな結果が待っているのか、子を持たない私でも知っていた。汐の溢れる場所で、海の近い小屋で女は出産する。すぐに穢れを洗い清めるためだ。朧様は、それを自分のために作られた清水の井戸水を使うように、と言っていたけれども。産湯は沸騰され、ふんだんに使うことはできないとされる清水を更に除菌して使われる。でも、それ以降は・・・新生児は決して清潔とは言えない場所で過ごすこともある。後産で苦しむ女から流れ出る汚濁を、海に流す為だ。

母の愛というものは、決して終わることはない。自分の産んだ子はもちろんのこと、孕んだ子は生死に関わらず覚えているものだ。いつ・・・自分の海に宿ったのかさえ記憶している。

そんな過程を経てそれでも生きていく山の者のことを、邑の者と少し違う観点を持っているのだと知ると、朧様は私に微笑んだ。

「おまえは、やはり、私が思ったとおりだ」

何をどう、思ったのかはわからない。けれども、朧様の期待に応えることができたのだという喜びだけは私の中に残ったのだ。

それなのに。

・・・今、座している神姫の前に、決して対峙してはいけない存在が居る。

「お前は誰だ」

わかっているのに、そう、言ってしまった。

雨が・・・激しく降り注ぎ、私の言葉はかき消された。

雨は、朧様を滅ぼす。彼女を守っている気配を滅してしまおう。そう思った。

けれども。

私の目の前に居る朧様は、獣の皮を纏った者の正面に居ながら・・・まったく怯える風ではなかった。

顔を隠して更に布を巻き、完全に海眺から遮断された、山眺しか知らない者を眼の間にして・・・朧様は、ただ、静かに座って居るだけであった。

こんな白雨の日は、武警団はやって来ない。それは名ばかりだから。

異訪者を、力に寄って取り除こうとする宿直の者たちが、今は居ない。

私は全身の力を考えることに全て寄せることにした。・・・彼女を守らなければならない。そう思ったからだ。それは私の・・・これまでの経験から生まれてくるものではなく、本能的なものであった。私は、朧姫より多くを生きていないのに。それなのに、守らなくてはいけない、と思ってしまう。これは・・・仕組まれた欲求なのか、それとも・・・それとも、私が彼女のことを、心の底からそう思っているからなのか、それすら判断できないほどに、私は焦っていた。

■朧雨07

朧様が私の名前を呼んだ。

私は、はい、と勢いよく応える。どんなに鬱屈した時でも、どんなに体調が思わしく無いときでも。かの貴人に呼ばれた時には、私はいつも豁达な返事をすることにしている。それが私の唯一の特徴だからだ。

・・・長い時間を生きている朧様には幾人もの巫女も側仕えの水仕女も居る。私の他にも、この屋敷にはいろいろな用事を済ませるに必要な人材が闊歩している。けれども、皆、同じだ。彼女に仕えて、年老いて身体が言うことを聞かなくなれば退く。そして、次のものに「いつも通り」であることを教えて、海に還って行く。

だから、彼女にとって、日々の生活に誰もが必要不可欠であるかもしれないが、いつでも交代がきく者ばかりである。

もちろん、これほど小さい島であるけれども各々思うところがあり、朧姫という尊い海神の姫君の唯一になりたくなくて、己を主張することもある。でも、それは彼女には響かない。彼女は否定も肯定もしないが、受け入れることはしない。

・・・私は、朧様の永年の時の中で、私だけが唯一、そうすることができることがある。それは、彼女だけを見つめることだ。

家族を愛おしいと思うが、この御方のために捧げろというのであれば、家族を捨てることも厭わないだろう。私の心はどこか穢れている。でも、穢れているから透き通った綺麗な存在を守らなくてはいけないのだという心を強く持つことが出来るのだと確信している。

そんな朧様の前で、失態を見せてしまった、と気がついた時には、彼女は私に鋭く言った。

「名を尋ねてはいけない。男と女が・・・名を名乗る間柄になるには、夫婦になるしかない」

・・・そこに居る者に、朧様は視線を戻す。見知らぬ者であった。そして、それが男であったのか、と唇を噛む。巫女は、軽々しく異性と言葉を交わしてはいけないことになっているからだ。

「座れ。少し人払いを頼む」

彼女の声が雨に混じって聞こえるが、雨の音があったとしても良く聞こえた。澄んだ海のような声だ。娘の若い声であるのに、落ち着いて年を重ねた者だけに許された声の調子を持っている。私は少し離れた場所で跪いた。その卑しき身なりの者に屈したのではない。・・・朧姫の意志を尊重しただけだ。

頭を垂れたが、それでもその人物の様子を窺う。濡れた雨に混じって、普段は嗅ぐことのない毛や皮の匂いが立ちこめていたが、朧姫はまったく気にしていない様子であった。

私はできるだけ表情を動かさないようにしていたが、それでも思っていることは彼女にはお見通しのようなようであった。だから、私すら人払いの対象にせず、座れと命じたのである。彼女に危害を加える者でないとは言い切れない。そして、姫はその者と顔見知りであるようであったが、私は初めて対面することに私が驚いていることも、朧様は知っている。

全てを知っているわけではないのだと承知していたことであつたが、永の年月を過ごしてきて、それでも他の人と少し違う扱いを受けていたことに対して自分がどれほど誇りを持って生きてきたのかということを知り知る。

誰も近寄ることのできないはずの場所に誰かが居る。

それも、朧様が許可したからだ。

・・・朧様の前に、人の影を見て、私は口を噤む。

良いとか悪いとかいう問題ではなかった。彼女が命じる事柄は絶対だ。

逆らう意味が無い。

彼女は、この島の姫神様なのだ。

彼女の意志は、産土の神や海神の神の意志なのだから。

だれも彼女に反論しないし、異議を唱えることもない。それが彼女をますます孤独にさせるとわかっているのに。

だから、時折私は朧様に意見する。それが怒りに触れて滅せられても構わないと思った。海に還ることはとうに放棄している。

この人の代替はいないのだ。

たとえ、もし、万が一・・・他から新しい巫女が遣わされたとしても、この人はたった一人だけである。

その人を守るのが私の役割だ。腕っ節が強いわけでもなく護身の術を持っているわけでもない。しかし、いざとなったら衝立となって、この身で彼女を守ることはできる。使い捨ての命にしてはいけないと言われるが、私の主のためであるのならば、それも良いと思っている。

でも。

私は、朧様の唯一ではない。私には朧様は唯一だけれども。

巫女の倅いとして、こういう風に、独占したいと思う事は邪であると習って参じている。

けれども、朧様はとても孤独だ。誰にも理解されずに居るのに、長い年月をじっと・・・ひとりで耐えている。だから。

限られた生であるかもしれないけれども、私は朧様の気持ちを少しでも理解したいと思った。同じにはなれない。それはわかっている。けれども、苦しんでいる瞬間に、一緒に居ることしかできないけれども。それでも、そのことによって朧様の唯一の記憶になるよりかは、いつか朽ちるかもしれないけれども・・・共有する人間がいても良いのではないのだろうかと思った。

■朧雨 08

決して安らがない運命を持つ者を目の前にして、私は身体を強ばらせていた。

様々な意味で、驚愕していた。

朧様が、まったく動じていない。

ということは、つまり、こうして獣の輩は度々ここを訪れているか、別の場所で相見えているのだ。

存在を無視していないことは知っていたが、こうして対面し声を交わすほどの近接の許諾を与えていたことに驚きを隠せなかった。

私の知らないところで。

これは、嫉妬だ、と思った。すぐに、その感情の名前を思いついた。

けれども、このような鄙陋の者を傍近くに呼び寄せる朧様の考えを理解しようとする。

邑の男女の諍いのような独占欲が、私の中にはびこっていたのだ。いつの間にか。それらを軽蔑し、なぜ、誰かに固執するのだろうかという疑問に思い、自分は決してそんな感情は持たないだろうと決めていたというのに。

私の崇拜は、いつの間にか・・・穢れてしまったのだろうか。

しかも、この賤しい民の出現によって、私の心が乱されるのだろうか。

側仕えの巫女の心の乱れは、臙様の執り行う神事に影響する。

産土の神に祈りを捧げる時に、周囲が乱れていると、無の境地に入る臙様はそちらに同調してしまうからだ。

言われた通りに、人払いをした。人払い、と言っても、最低限ひとり側仕えが存在しないと成立しない。

それを私に命じた臙様に対し、嬉しく思うどころか・・・私はとても胸が痛くなった。

それを顔に出さないように、心を落ち着けようとする。

・・・激しい雨音が、私の心の漣を消してくれるだろうという、根拠の無い期待がそこにはあった。

私の中にある臙様への信愛と崇愛の情は、誰と比較することもできないし誰かに劣っているとは思っていない。

比べたら、それは愛でなくなるからだ。

そして、海神への信奉も同じ様に、自分の中で揺らぐことのない場所に設置されて初めて・・・海神に近い臙様の近くに居ることのできる資格になるのだ。

私は、自分が臙様と同じ性で良かったと思う。

なぜなら、彼女の傍に居られるからだ。

臙姫の傍近くに居ることができる者は、未婚の女子だけである。

下男とされる者でさえ、男は彼女の近くに寄れない。

寄ろうと思っても、寄ることが出来ないのだ。

海神の神の妻が、なかなか会えない夫神との間を歎いて、男女の仲を神事に持ち込むことを禁じたと言われているが、本当のところはわからない。

海神の父神は、妻を得ることなく子を培ったと言われる説もあるし、巫女姫は本当は娘という立場ではなく、海神の妻なのだという説もあるようであった。

しかし、それを知ることができるのは、私が臙様によって学を授けられ、巫女となって他の島々の様子を記した文書を見ることが出来るからなのだ。

他のものは、こんなことを知ることもなく、存在すら知ることもなく生涯を終える。

だから。

私は、巫女の傍巫女として・・・私の命が終わるまで、ずっと、彼女の姿を見ることが出来る。

狂気と言われても、それでも良かった。

あの孤独な魂を、私が傍で癒やせるとは思わないが、それでも・・・ほんの一瞬、私のことを思い出して一緒に微笑んでくださるだけで、私はそれだけで良いのだ。
勝手な願いであった。だから、それを独りよがりになくならなかった。
隴様の望むことは全部叶えたかったし、彼女の哀しむものについては全部解決してみせたかった。
。
私は、他の・・・隴様が気の遠くなるような年月を生きてきた中で接した他の者と私が違うのだ、と欲しかったのだ。
生きているという証は、こんな風に、誰もが違った証の立て方をする。
私の兄のように・・・愚かしい生き方しかできない者も居る。
でも、それでもあの人には自分の生き様に後悔をしていないのだろうと思う。
だからこそ、まだ、兄、と呼ぶことを・・・私を妹、と呼ぶことを・・・私は自分に赦しているのだ。
彼女の命には終わりが無い。でも、私には終わりが有る。
隴様にとっては、ほんの一瞬、交わるだけの短い時間かもしれない。
でも、私には、生涯、彼女の傍に居て、この島のことを眺め続ける彼女の横顔を見つめることが、最上の幸せなのだ。
私に生きる意味を与えてくれた人である。私に、生きてても良いのだと言ってくれた人でもある。

その人が。

私の知らない者を招き入れた。この館には結界があり、主が招かなければ四方に張り巡らせた白石が音を立てることになる。けれども、雨の音に混じって消えてしまったのか、それとも・・・隴様が自ら、この白雨に乗じて招いたのか、私は知りたい、と思ってしまった。主の判断について、私はあろうことか、その先を覗いてみようという邪な気持ちを持ってしまったのだ。

■隴雨 09

人払いを、と言って私を残した理由を、今、聞くことはできない。
たとえどんなに賤しいものであったとしても・・・獣と生きる山の民であったとしても、隴様が話をするとした以上、この者は邸の客人なのだ。
彼女の居る神域であるこの場所に入ることを許された人物であるから、私はその者に無礼を働くことは出来ない。
この島でたったひとりしか存在しない、海神の姫御巫は、いつもと変わらない口調で言った。
「それで、今日は何用なのだ」

言葉や態度は制御できる。

しかし、私の心の中を知ることのできる唯一の主は、今は、私を見ていない。

私の心の中の物思いは、私自身、どうにか落ち着けようと思うばかりで、それ以上の感情を持つことが出来ない。

私は、心の中でさざめく心を落ち着かせようと、床の間に座ったまま、自分の腿の上で両手を強く握る。

爪が手の平に食い込んだが、その痛みだけでは私の動揺は去って行かなかった。

・・・朧様の少ない言葉から、その者がここに訪れるのは初めてのことでないのだと思った。そうすると、私の頬が熱くなっていくのを感じる。

彼女の世話をしている傍巫女であるのに、私は、朧様のすべてを知っているわけではなかったのだ。

これほど、長い年月を生きているのであれば、彼女が持っている独特の脈というものが存在するのだろうとは思っていた。

けれども、それが、山の坊たちにまで・・・どこまで及んでいることなのか、私ははっきりと確認したわけではなかったから。

いや、それは言い訳でしかなかった。

邑の者たちが、相手の心が変わってしまったと歎き、朧様に救いを求めてやって来ることを私は内心、嘲っていた。哀れだと思う。自分の感情に翻弄されて、相手の顔色を窺う様子は、皆、同じだった。滑稽としか言いようのない悩みは、生涯続くわけでは無い。

その心の乱れを、あろうことか、島巫女様に鎮めてもらえらると思っっている者たちの愚かさが私には理解できなかった。

けれども、今、私は彼らと同じ貌をしていると思った。

朧様に顔を見られなくて良かった、と思った。

いつも近いところにいると思っていた。

傍に居るだけで私は満たされた。

この世で、他の女が味わうようなことは経験できなくても、私は、私の命を祈りにすることができた。

海神ではなく、朧様にお仕えしているのだと思って生きている。それが罪であるのならば、すぐさま、私は巖つ霊（雷のこと）に打たれて命を海に還すこともなく死ぬだろうが、それでも良かった。でも私は、生きている。だから、朧様に命を捧げようと思った。

私は、そのために生まれたのかもしれないとさえ、思うほどに。

そして、その一方では、邪な気持ちを持った。

人は、言葉にしなければ、神には届かない。

声に出すと神や朧様に聞こえてしまうから、本当にそうしたいと思ったことは誰も口にださな

いが、黙っていることはできなくて、とうとう、心を元に戻す方法を教示して欲しいと朧様に
縋る。

でも、朧様にも癒やせないものがある。

それが、こういう物思いであった。

落ち着かせることはできる。でも忘れさせることはできない。

できないのではなくて・・・本当は、そうしないのだろうと思っているが。

本当は人の魂さえ、彼女は自在に動かすことができるのだろうと思っていた。

でも、そうしない。

それは、彼女が、この島とこの島の民を愛しているからだ。それから、見えざるモノに対しても
哀愍をもって接していることも、私はわかるようになってきた。

だから、そんな彼女の手で、最後に私は海に還るのが希望であった。他の老いた傍巫女達のよ
うに、同じ様に・・・彼女に送って貰いたいと願っている。

朧様に見送られる自分の最期に、やはり彼女が居てくれるという期待を勝手に持ってしまったの
だ。

そして、今も、こんな時でも・・・私は、朧様に自分の望みばかりを押し付けようとしたことを
恥じて顔を赤くした。

私は、彼女を置き去りにすることで私の命に意味を持たせようとしたのかもしれない。

朧様が、私以外の誰かに親しく口をきくことにこれほど葛藤を感じながらも、私はそれでも・・・
・彼女と一緒に命を終えるということについて思うことができなかった。

そんな何とも残酷な願いを口に出したことはない。聞こえてしまうからだ。

そして、彼女を見送るということは、あり得ない。

この島の存在がなくなってしまうことと同義だから。私は彼女をととても好きであったが、好きと
いう感情以上に生きていてくれることに奇蹟すら感じているが、私は同じくらいにこの島が好
きだった。

だから、私は、知らない。

永遠に生き続ける美しい巫女姫の心中は、どのようになっているのか、誰も知らない。

その邪な願いが・・・今になって、私の身体を激しく刺し貫くのだ。

■朧雨 10

蒸した空気の中で、ただ・・・その人の声だけが涼やかであった。

朧様はまったく動じず、焦らずに言った。

「間もなく雨が止む」

雨が止んでしまえば、雨に紛れて退出することはできなくなる。
だから、その前に用件を済ませてしまえということだろうと思った。

本来なら、臙様の居る座より少し低く作られた渡り廊下で控えていなければならない。

しかし、私は黙って彼女の居る室と廊下の縁に腰を落とした。

・・・あってはならないことである。こういう境に身を置くと、あちらとこちらの境界を穢すことになると言われている。

だから、皆、板の間の接ぎを踏まない。

けれども、そんなことより臙様の方が大事であった。

私にとっては・・・それは大それたことではなかった。

あの世とこの世を結ぶ大事な巫女姫が駄目だと言わない限り、私はそこに幾度でも踏み込むつもりであった。

傲慢であると思う。

自分は特別だとは思っていないけれども、特別な誰かのために何かしたいと思うことは・・・巫女にあってはならない質であるのかもしれない。

でも、それでも、私は言われたことだけに従う者であることができなかった。

咎めは受ける。

でも、臙様の安全の方が、大事である。

私が知らない者を臙様が知っていたとしても。

私が赦さなくても、臙様が赦していたとしても。

彼女にはかわりが存在しない。

たったひとりの巫女姫様に何か良からぬことをしようと試みるものは居ないだろうが、それでも安心できなかった。

獣の皮を纏ったもの達への対処方法を、詳しくはわかっていなかったからだ。

そのような者が、ここに立ち入るとは考えていなかったから。

獣の皮の下にある人皮さえ、本当は衣で・・・その下にある本当の姿は、在らざるモノであったなら、もう、防ぎきれないのだから。

私は腰を半分浮かせたままで、じっと中腰の疲弊感に耐えた。

同じ座に上ることができないが、低き場所に座っていれば背中を向けて座らざるを得ないので、何かが起こった時にすぐに対応できない。

ちらりと見ただけであったが、その者の雨に濡れた腕は若かった。

名前を問うてはいけない、と言っていたところを見ると、まだ妻問い前（未婚者のこと）であるのだろう。

それは、山の者であっても同じであるらしかった。

島の者は、ほとんどが顔見知りだ。

どこの家の者であるのか、わからない者は居ない。

だから、妻問いや夫問いの時には、知っている間柄であっても改めて名前を尋ねるのだ。

激しい雨音で、館中が胴震いしているかのような音が響き渡る。

その中で・・・獣の皮を被った者が、おもむろに口を開いた。臙様と対峙して、頭を垂れることもせず、ただ、足を組み両膝の上に自分の手を置いて腹の前には何も置かない。

・・・それが山の民特有の、尊敬の表現であるとわかった。獣は腹を見せない。自分の弱みを見せて相手に敬意を払っているのだ。

それは山犬と同じであった。

そして、私達の儀礼と何もかもが違う。違うから、蔑んでも良いというものではないが、違和について何も感じないでいると言う方が無理だった。

臙様が、なぜ、このような者たちを相手にするのが、わからない。

「・・・視たことのないものが出た」

雨の勢いが、ふっと静まった瞬間のことであった。声が聞こえてきて・・・私は緊張が高まった時にそのように、山の者の声を聞いたので危うく声を漏らしそうになってしまった。まだ若く・・・私の兄より年が下であろう。

私は背中を向けていなければならないのに、そっと・・・山の坊を斜めに見た。

普通の雨の日であれば、室内は灯りを持ち込まなければ薄暗いままであるが今日は白雨であった。・・・空が明るいのに、激しい雨が降ってそれが銀色に輝いている。だから普段暗がりになるはずの、部屋の奥に座る臙様の白い顔や黒く艶やかな御髪の前に座る男が、獣の被り物を脱ぎはしないが両手で広げてその締まった腹を見せている様子がわかって、私は眉を顰める。

見惚れるほどの体軀であるかもしれないが、巫女姫の前で素膚を晒すという無謀且つ愚かな行為を平然とやってのける者に呆れ果てていた。

かろうじて下履きは履いているが、上半身はとても薄い衣しか纏っておらず、それも雨で濡れているので身体に貼り付いている。

・・・落ち着いた物腰であったが、よくよく見てみればとても若い衆であった。

臙様は、質問する。

「遠の眼がそう言っているのか」

「違う。『夜追い』だ」

敬意を表することもできない口の利き方がとても野卑に見えた。・・・私は、目の前で、私の知らない者と少なからず面識がある臙様を非難することはせず、ただ、その者がいかに賤しいかということを観察している、矮小な付き人であることを認めながら、それでも・・・なぜ、この雨の日に限って臙姫を訪ねてやって来たのかという理由をその男が持ち込んだのは、臙様に解決し

て欲しいからなのだと気がついたので、そのまま飛び出すこともせずに、ただ様子を見ているばかりであった。

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

■朧雨 11

「夜追い」とは、文字通りの者だ。夜を追う者のことで、夢で視たものを鮮明に覚えている。普段、見たものは忘れるか部分的にしか覚えていないことが多いというのに。そして、徐々に夢と現を行き来して、いつかは夢の住人になってしまう定めを持った者のことだ。

・・・最後は、海に戻れないまま、命を散らす。

海に還ることができない山の坊達の中でも最も哀れな者であるとされていた。

・・・人はそんな風にして自分の立っている場所に高低を作らなければ生きていけないのだろうか。

誰とも話をしない時間が長くなり、夢で見た描写を誰かに伝えるだけの時間が唯一、誰かと交わる時間で・・・それ以外の時間は寝ているのか醒めているのかさえ判別できない。生きているのか死んでいるのかわからない状態は長くは続かない。皆、短命で終わり大きな夢見を越えると必ず命を落とす。「夜追い」が巫女と違うとされているのは、それが何を指し示しているのか、本人達にはわからないからだと言われていた。

・・・幾代にひとりかふたりしか生まれないとされている。

複数人居ても、せいぜいふたり程度でその命は短いと言われていた。命が短く、そして誰にも死期がわからない。・・・眠っていると思ったら、それは命絶えた後であったという死に際しか存在しない。

私も、朧様の側仕えになって初めて知った。そういう者が存在するのだと。賤しいと蔑まれている者の中にもさらに階級があるが、この島で存在するそれらよりはもっと寛容であると聞いた。でも、それらは・・・私には絵空事と同じであった。

朧姫にはそうではなかった。現実のものとして、彼女はこうして交流を絶やしていない。長い年月を生きているうちに、その名のとおり朧になっていく関係もあるということは致し方ないと思う。それが人の世の倅いなのだ。

どれほど親しくても、永遠は存在しない。人はやがて死んでしまうからだ。

朧様を置いて。どれほど対等であっても、命の永さの前では、等しくない事実を突きつけられて平然としていられる者は少ないだろう。

私は・・・そんな朧様の永遠の中の一瞬であるかもしれないけれども。

それでも、彼女の傍に居て、こうしてお仕えできて・・・いつか、海に戻った私の名前や姿を思い出してくれればそれで良いと思っていた。

特別になりたいと思うが、特別でなければならぬということに固執しているわけではなかった。私は、朧様の傍で生きていることで、私であることができたのだから。

朧様は、御自身と重ねているのかもしれないと思った。

傍巫女にはいくつも規範があり規定された判りがある。

そのうちのひとつに・・・推測でものを言っではいけないということがある。

考えて何かを言うのは合議の後だけである。側仕えの者が朧様に何か意見したり何か問題提起しては、それらは成立しなくなってしまう。

・・・昔は、言葉を発する事が出来ない者だけが朧様の傍に仕えた時代もあったようだが。

それらは皆、山の坊であったことから制度が撤廃されて、島の者に限定して就くことができるとされた。誰がどう決めたかではなくて、どのようにしてそうなったのかが必要とされる場所なのだから・・・それについて理由や理屈は必要とされないのだろう。

朧様は、皆が決めた事には口出しをしない。彼女は海神の娘だからだ。

人と交わっではいけないし、人の考えに左右されて自分の口にする言葉を違えてはいけないとされている。

こうして考えてみると、人も朧様も・・・皆、そうしてはいけないということばかり遵守して・・・自由裁量とされた部分がいかに狭いのかという事がわかる。

このことについては、誰かが何かについて考えたことを自由に述べてはいけないのだ。

まだ。

まだ・・・その時期ではない。

朧様が何も語らない限り、それはまだ「その時期」ではないのだ。

■朧雨 12

雨が・・・雨が、すべての気配を消してしまうかのように、ひときわ強く叩きつけるように降って来た。

朧様は、雨は自分の思い通りにならないと言ったが、彼女は本当は・・・雨さえも自在に操れるのではないのかと思った瞬間であった。

この島の巫女姫は、他の島とは違う。

代替わりをしない、永遠を生きる彼女は・・・一体何を望んでいるのだろうか。

雨の来訪を知り、嵐を予知し、山の坊と会話し・・・そして彼女は何をしようとしているのか。

毎日が永遠の一部であり、永遠の中では毎日には本当に僅かな砂粒に等しいと言うのに、朧様はまたか、という表情を作ることはない。

その先に何かがあると信じていらっしやる。

彼女は、同じ日々はないのだと強く願っているのだ。

あれほど、臃々たる態度で日々を漂っているように見えるのに、まだ希望を捨てずにいる。永遠の中で陥りやすい痲痺という名の怠惰を彼女は決して受け入れない。私は疑わない。この姫だから、永遠があるのだ。この人だから、傍に居たいのだ。寄せては返す波のようにとらえ所のない姫神を、私は誰よりも愛おしんでいた。私の知らないことを知っている。私の知らない者を館に呼び寄せる。それですら愛おしい。愚かな私の兄の渴望と違っているのは、臃姫が自分のために動くことはないからだ。彼女はいつも、この島と島の民のことを考える。

「夜追いが何を見たのか」
通った声で、彼女がそう言った。臃様は誰かを急かすような真似はしない。彼女には刻限というものはないから。しかし今回は違っていた。彼女は、雨が間もなく通り過ぎることを知っている。だから急いでいるのだ。獣の皮を纏った山の者は、問いに応えた。聞くほどに、彼は若いのだと思わざるを得ない。声には張りがあり、淀みなく応じていることから、彼は生まれた時から山の者として生きているのだろうと思われた。これはとても珍しいことであると言う。誰もが持っているというわけではない力を持っている者は賤しき者とされているし、更に集団の中でも力の強弱によって決め事があるらしい。私が「らしい」と言っているのは、伝え聞いた話でしか知らないのに、実際に目にしたことはなかったからだ。彼はしばらく黙っていたが、やがて思い切ったように言った。黙っているためにその場に座っているわけではないと考えたようだ。何を懸念してそのように躊躇ったのか、私には顔が見えなかったので推測することはできなかった。彼は言う。言ってしまうえば現実になるのだと、自分で招いてしまうのだと覚悟しているかのようであった。それで余り良くない知らせであることはわかった。私は自分の膝の上に乗せた両手を強く握りしめる。息を殺し、耳を澄ませ、私は聞いてはいけないことであるとわかっているのに・・・彼の言葉に神経を集中させた。

「・・・銀の雨が昼と夜に続けて四晩降った時。海が濁ります」

これには、朧姫も驚いたようであった。

「なんと・・・」

溜息混じりに彼女の驚きの声が聞こえてきた。朧様が心を乱されている。

私は、そのことよりも・・・誰にも見せたことのない彼女の驚愕の表情は、どれだけ美しいのだろうか、と思った。

そして、その朧様のお顔の様子を独り占めしている賤しき者のことを・・・どういふわけかとても憎らしく思ってしまう。

憎いという感情は正直なところ、あまり意味を理解していない。

けれども、これが憎いということなのだろうと思った。

私が知らないものを知り、私が共有していないものを共有している。

ただ御傍に居られるだけで良いと心穏やかに朗らかに過ごしていた私の心を乱す。

・・・朧様の心を乱すからだ。

■朧雨 13

海が濁ると聞いて、私は腰を浮かせかけた。

けれども、朧様からの指示はなかった。

私の名前を呼んで、自分の考えを実行に移すための命令はなかった。

だから、その言葉に驚いて動揺した自分を恥じた。朧姫はどんなに驚いても、決して判断を誤るようなことはしない。

海が濁る、というのは文字通りだ。

常に対流しているはずの海が、透明でなくなる。

海に囲まれたこの島ではあり得ないことで、これは凶兆そのものであった。

魚は寄りつかなくなり、海流に濁りが乗るのでそこに居る魚は新鮮な海水を取り込むことができなくなってやがて死に至る。

死んだ魚が打ち上げられて喜ぶのは鳥たちと海辺にまで寄ることのできる豪胆な獣だけだ。

それも最初のうちだけで、腐敗した死骸に寄る生物は居なくなってしまう。

海に戻せば、それらがまた澱みを呼び込む。

元通り漁に出られるようになるのは先の話になってしまう。

だから、島の者は総出でこれらを土に還す。

老若男女問わない。少しでも早く死骸を焼いて土に戻す作業に没頭する。

海で死んだもの達であるのに、土に還さなければ海が汚れたままになってしまう。

私の祖母が若い時に、その現象が起きたと言っていた。

けれども、その時には朧様の機転で、予め準備ができていた。

その浜以外の浜に舟を移して漁を続けながら撤去作業をすることができたのだ。被害も大きくなかったと言っていたが、その年に捕れる魚の量はかなり減ってしまったと言っていた。

この現象が起きた時に厄介なのは、その時だけを凌げば良いという問題ではないことだ。その影響は次の季節にも巡ってくる。

二年経過しなければ本当にいつも通りの季節が巡ってきたのかわからないと言われていた。

すべてが遠い昔のことであり、経緯を知っている者は殆ど居ない。

こうして、思い出を語る者が居たなという誰かの記憶にしか残っていない。

「それで、それはどこの浜だ」

「それがわからないのです」

「何だと」

朧様はその者の答えに不満足であったようだ。

「他は何と言っているのだ」

「その者は・・・竭きました」

なぜ、わかっていることを朧様がお尋ねになったのかわからないと言ったような声音であった。私は少し苛立った。

朧様は姫御子であらせられるが、万能ではない。だからこそ、彼女は姫神なのだ。人を労り、生き物を愛でて、この世とあの世の理を繋ぐ方である。

それを理解していないのではない彼が、朧様を軽視することは許しがたいことであると思えた。

それに、朧様に対して不遜な態度が見え隠れしていた。

夜追いが大きな予見をした後に命を燃やしてしまうことは考えられないことではない。

それに、これほど大きなモノを視たとしたら、その者は自分の命と引き替えにしたのだろうと思われる。

けれども、朧様はまずその予言の詳細を聞く前に、その者に言った。

「手厚く葬ってやってくれ。大きな夜の夢を追わなければもっと長く生きられた」

「その者の使命であり定められていたのでしょう。海神様の声を聞いたのですから、憐れむことは必要ありません」

私は唇が切れてしまいそうになるほど噛んだ。奥歯が、ぎしりと音を立てる。

これほどの不遜者を朧様の目の前に座らせていることを傍観するしかない私自身が不甲斐なかった。

「・・・夜を追うものは、海を追うものと昔は言っていた。夜追いではなく海追い、と昔は呼んだ」

朧様は静かに、苛立つ風でもなくそう言った。

「海を追う。海に入れないのに。

・・・それなのに、こんな雨が続けば・・・海に還すこともできないな・・・」

掠れた声だった。

朧様は、心が柔らかい。

長く生きているのに、今でも生きている者への愛を忘れていない。

気が遠くなるほどの数の命を見てきたはずなのに。

死にゆく者への鎮魂を忘れない。哀しみを、忘れない。

「朧様。

海に戻れぬ者として生きた者です。夜を追う者は夜に戻れぬ者。

そして海を追うのに海に戻れぬ者。

だからこそ、海を焦がれる渴望が夜を追わせるのです」

その者の言う事は当然であったが、私は素直に受け入れられない言葉であった。なぜなのだろう。この島に、姫御巫に向かって教え諭す者が居るからだろうか。

■朧雨 14

「その者を篤く葬ってくれ」

「海神姫が哀しまれたということが、何よりの報いです」

その者の高飛車な態度が私を苛立たせた。

声や姿勢からかなり若い青年であることがわかった。

山の者は邑から出された幼子であることも多かったが、このくらいの年齢の者では私の記憶になかったから、山の生まれであることは間違いなかった。

それなのに、これほど自信に満ちた態度で朧様と対等に話をし、そして朧様が決して嫌悪していないことに私は・・・酷く驚き、その状況を受け入れられない気持ちになってしまった。

これほど長く島を護ってきた御子神様であれば、尊称も多いがそれ以上に、私の知らない神務もあるだろうと思っていた。

彼女がふらりと姿を消すことがある。皆が侍り部屋に居るのに、彼女の姿が消えてしまうことがあった。

その時には何も報告はなかったが、朧姫は・・・人ではない何かに会いに行っているのだと、教えられた。

それは海神様かもしれない。けれども、朧様は何も言わなかったし、誰も何をしているのかと朧姫に聞くことはなかった。

・ ・ そのうちの選択肢のひとつが、この山の民であったとしたら。

賤しき者たちとの交流を朧様が許容していることに、私は理由を見つけたくなってしまった。

わかっている。

少し冷静になってみれば、わかることなのだ。

私が、それほど心を乱す程には、朧様は私のことで心を乱されることはない。

傍巫女に心を寄せることなどあってはならないことだから、それで良いと思っている。

でも。

誰にも心を寄せない方だから、私は安心していられたのだ。

誰にも心を寄せないから。

だから、誰か特定の者に対して特別扱いするような方ではないという、根拠のない信頼が私を支えていた。

私は、朧様の唯一や特別や絶対にならないかわりに、私以外の他の者も同じように唯一や特別や絶対という称号を与えられることはないと思っていたから。

だから、私は屈託無く笑って居られたのだと思った。

■朧雨 15

けれども、朧様は少し哀しそうだった。

妄信からくる確信ではなかった。

海巫女様である彼女は、海に戻れない者に対しても、海に戻っていく者たちと同じ様に接するのだと知っていた。

でも、海に戻れない者というのは、私の知っている、私の生きてきた場所ではほとんど存在しなかった。

皆が、海に戻りたがるから。

皆が、海に還りたがるから。

彼女はいつもとらえ所がなく、感情の起伏に乏しいような方であったけれども、哀しみに関しては別であった。

激しく感情を揺さぶられる内面を、隠していらっしゃるのだとわかるまでに、それほど多くの時間は必要ではなかった。

彼女は情を捨ててしまったわけではないのだ。決して。

彼女の中には、気の遠くなるような年月を過ごしてきた後に浪の底に沈めてしまった秘めたる思いがいくつも・・・あるのだ。

私の生まれるずっと前から朧様はここに居た。

出会ってきた様々なことに対して無感動でいるからここにおわすというわけではない。

朧様だからこそ・・・この島の姫巫女でいらっしやることのできるのだ。

ひとの形をした器なのではない。

何を言っても感じないというわけではない。

人知れず行っている様々な祀り事について、彼女は何も言わない。

おひとりで執り行っている多くの礼参について、彼女は多くを語らない。

傍に仕えるようになって、わかったことが数え切れないほど多かった。

だから、少しでも、ほんの少しでも、彼女の一部を引き受けたかった。

私が姫巫女の代わりにできることは、ない。

それはわかっている。

けれども、彼女の憂いを分かち会ったり、彼女に喜びを届けたり・・・そう、私は伝令で良かった。一部になりたいとは思わない。けれども、彼女に何かを届ける役割が欲しかった。

ただ、この透明でありながらも決して心の内を見ることのできない孤独な人と一緒に居たかった。

私は、彼女が姫神だから慕っているのではない。

傍に仕えるようになって、わかった。

彼女は美しく、優しく、儂い。

島の男達は一度は彼女に心を奪われる。

決して手の届かない人として。そして諦めることを知る。

それから島の女達は、他の女に懸想する男であるより、朧様に崇敬の念を抱き続ける男を選ぶ。

朧様に対して不遜な男は・・・私の兄くらいだ。

だから、私は兄以外にこれほど朧様と対等に話をする者を知らなかった。

邑長達は朧様の容姿よりも遙かに年老いた風情であるのに、決して彼女と顔を合わせないように平身低頭して話をする。

だから私は思うのだ。

朧様は・・・この島で、彼女と対等に話ができる者がいないから、誰にも心を見せないのだろう、と。

朧様は続ける。

「・・・濁りの件は対処できる。それよりも、腑に落ちないことがある」

私は自分の肩が動くのを感じた。

気配をできるだけ静かにしながら待らなければいけない。

それが傍巫女の努めだ。

そしてそれができなければ役割として成立しない。

それなのに、この瞬間だけは。

私はこれまで自分が経験したことのない事柄ばかりに気を取られてしまい、自分の役割について一番に考えられなかった。

島の存続に関わる夜迫いの話よりも、朧様が疑問に思うことがあるとしたら。

それは一体、どんなことなのだろうか。

■朧雨 16

「尊き神巫女であるなら、承知しているかと思う」

彼の言葉に驚いたり憤ったりすることなく、朧様は返答する。

どこかこの会話を・・・不謹慎ながらも楽しんでいるように思えるのは、私の幻聴なのかもしれない。

けれども、朧様はいつになく言葉が多かった。

すでにわかっているであろうと指摘されているのに、それでも問いかける。

その者の言う通りであると思った。

何もかもを見とおしていらっしゃるのに、敢えて・・・人の子に語らせる。

朧姫は黙ったままであった。

・・・雨が思い出したように激しく鳴り響き、屋敷を包んだ。

彼女の感情に揺れて、雨も可変するのかもしれない。

白雨という名前の激しい雨は、それでも空が白く輝き、雨は銀に暁る。

まるで、朧様のように。

朧様は天候の予知はしても天候を自由に変更することはなかった。

空神の神子は別に居るのだと言う。

彼女は万能ではない。でも、それだからこそこの島にいらっしゃるのだろうと思う。人と神の間に位置する方は、雨に気にせず話を促した。

それまで傲然とした態度を取っていた獣の者は、躊躇っているのだと気がついた。これ以上、雨に乗じて彼の気配を他の者に隠しておくことはできない。私は、雨が止みそうな気配を感じた。

早く雨が上がって・・・この賤しき者が去ってくれば良いのにと一方、彼が一体何を言い及んでいるのだろうか疑問に思った。雨は煩わしいけれども、朧様の心の内を表しているのかもしれないと思うと、それは恵みの雨のように感じる。

けれども、夜追いが言い残した言葉は絶対だ。これまでにない、長雨になるという。私がそんなことを考えていると、不意に、男が口を開いた。その口調はとても若くて、思っているよりもずっと若い男なのだろうと予測がついた。それまでの話は、彼が予め話してこななければならないと定めて持ち込んだものであるが、今から話することは・・・ひょっとしたら、山の者達と決めてきたことではないのかもしれない。「・・・これから雨が續けば、死んだ夜追いは焼けない。海にも戻せない。土に埋める前に焼いて灰は海風に流してやりたい。一度も、海に入れなかったから」彼の言葉に、朧様は黙ったままであった。「・・・海に戻れない者であるのに、海に戻したいと言うのか」朧様の返事に、彼は否、と答えた。

「これを見るために死んだとしたら、哀れすぎる。あいつは・・・俺の・・・」彼がそこまで言うと、私はなるほど、と合点した。どれだけそういうことに疎い私でも、何となく事情が察せられる。

この男と、夜追いの者は、近しい存在だったのだ。同胞なのかそれとも言い交わした仲なのか・・・どちらでも関係のないことと行ってしまえばそれまでであったが、この男も所詮は人の子なのだと感じる。

愚かな人々よ、と私が蔑む謂れはない。けれども、情が禁を破らせるのだ。

朧様に何かを願ってはいけない。誓願とは、何かを贅に捧げて得るものであり、奇蹟などではないのだ。命や自然の理を守るために存在し、それらをねじ曲げるような願い事については朧様は聞き入れ

ない。

「夜追いの魂はもうここにはない。器を早く焼くか埋めるかしなければ、山中を彷徨くモノに喰われるぞ」

彼女は忠告したが、彼はそれで引き下がることはなかった。

「この雨では焼けない。土に埋めても流れて出てきてしまう。このまま・・・獣と蟲に喰われて、朽ちる姿を見るのは忍びない」

彼はそこまで言うと、次には絞り出すように言う。

「彼女は恨み言も歎き事も言わなかった。いつも海を見ながら何も言わなかった。眠ればいつ夢事が自分の命を持っていくのかわからないのに、島の役に立ちたいと言ってばかりの、欲のない娘だった」

彼の言葉の間には、切ない思いが溢れて・・・まるでこの白雨のように止めることもできず激しくなるばかりであるようだった。

「おまえが彼女に生まれた意味を持たせてやることはできない」

朧様は静かに言ったが彼は諦めなかった。

愚かしいと本人も承知しているようであった。ごつり、と床を叩く音がした。やり場のない思いを彼は激しく床にたたき付けたのだ。

■朧雨 17

「そんなことはわかっている」

彼は吐き出すように怒ったように言った。

「長雨によって朽ちた者の哀れな姿を見たことがあるだろう。女の装いも知らないで死んだ女の亡骸をあなたの力で灰にして欲しいのだ。これ以上、あの骸を辱めることはできぬ。せめて・・・誰の夢にも残らぬ者であったのなら、せめて、死ぬ前の晩まで笑っていた姿を留めてやりたい」

「それはおまえの希望であって、あの者の希望ではない。残された者が死者の代弁をしてはいけない。わかっているだろう」

朧様の言っていることは正しかった。

雨によって骸を焼けなかったとしたら、それは摂理なのだ。

その者は、蟲や獣達の糧となり苗床となって山に戻るだけなのだ。

海からやって来た者ではないのだから、海に還ることもできないことはわかっているはずであるのに、どうして・・・彼女を海に戻してやりたいと彼は願うのだろうか。

「そうだ。俺の希望だ」

彼は大きく息を吸って、震える声で言った。しかし、できるだけ平静を装っていた。

「この重大な事実を持ち込んだ褒美をくれ。・・・雨が上がる前に決めてくれ。山の民は、巫女姫を謀ることはしない。けれども、島の者に等しく憫れみを持って慈しんでくれるのなら・・・
去った者も哀れんでくれ」

私は・・・彼は何と愚かなことを言っているのだろう、と思った。

自分の近い者への弔いを、特別に計らって遣ってくれと願う者は彼だけではなかった。

けれども臙様は丁寧に悔やみの言葉をかけるがそれ以上のことはしない。それが邑長であっても、神事を手伝う巫女であっても同じであった。

しかも、彼は褒美として・・・特別な送りを彼女に執り行えと言うのだ。

なぜ、そんな事が言えるのだろう。

人は、なぜ、そうやって愚かだとわかっているのに愚かになってしまうのだろうか。

そんなことをしても、その夜追いは戻って来ない。

私は、ぎゅっと膝の上で拳を握った。

このまま、部屋に入ってあの男を叱ってやりたい気持ちになった。けれども、臙様はそれを許さない。彼女が私を呼ばない限り、私は傍に座って居るだけしかできなかった。

そんな彼の言葉に、臙様は穏やかに言う。

「断ったらどうするつもりだ」

彼は躊躇いなく言った。

「あなたの首をいただく」

えっと私は声を出しそうになった。

しまった、と思った。

この島には帯刀の習慣はない。

刃物や武器になるものは持たない平和な島なのだから。

漁に出るときにのみ使用する。そして調理するときだけに使用するので、護身用のそれはほとんど存在していない。

男衆を呼ぶには時間がなかった。それに、臙様をひとりにしておけない。

私の身体には緊張が走った。

誰かに知らせることもできない。・・・それなら。

「なるほど。巫女娘を縊る度胸がおまえにあるのだとしたら・・・それは必然なのかもしれぬな

」

「隴様！」

私は彼女の言葉を聞いて、思わず声を出した。

私が危険だと思ったのは、その男の物騒な物言いを案じたからではない。

・・・隴様がここで縊られても構わないと思っているからだ。

隴様は。

自分で命を絶とうとは考えてはいないが、命を惜しんでいるわけでもなかった。

だから、これで彼女が縊られて死んでも構わないと・・・哀れむべき島の者に断たれるのであればそれでも良いと思っているのだと・・・彼女はそう思っているからだ。

邪な欲に駆られた者の攻撃には毅然として立ち向かうのに。

情愛に溺れる者の前では、隴様はとても儚かった。

■隴雨 18

彼が立ち上がる音が聞こえたので、私はもうそれ以上、自分の役割のことを考えることができなくなってしまった。

傍巫女としては失格だと承知している。

隴様の命令がないのに、その場から動くということは命令に逆らったということだ。

どんなに理不尽でも、どんなに危険でも・・・主の言う事を違えることはしてはいけないことなのだ。

でも、私は動物ではない。隴様の危険を防ぐことの方が、隴様の命令に背かず従うことよりも重要なことであった。

たとえ・・・それで隴様の傍に居られなくなったとしても、私は彼女に生きていて欲しかった。

私の方が、先に逝きたかった。

彼女に見送られて海に還るのが、私の密かな願いであったのだ。

誰も見送らなくても良い。嫁ぐつもりもなかったし、子を孕む願望もない。

ただ、静かに・・・他愛もない話を繰り返しながら、こんな雨の日の出来事を思い出話にして息絶えたい。

それが私の望みだった。

そんな願望を持って朧姫にお仕えするという事は、とても恐れ多いことであつたけれども。

朧様が駆け引きをすることはない。

だから・・・彼の真意を問い質そうとしているのだということはわかつていた。

けれども、それが度を超していると思った。

この雨のせいで・・・この雨が、朧様を狂わせているのだろうか。

永遠を約束された稀有な・・・綺麗な海姫は永遠を捨てて雨に消えようとしているのか。

海に溶けるのではなく、雨に・・・雨に吸い込まれて行きそうな気配を感じて、私は思わず身体を動かした。

海に還るのであれば、私は納得できただろう。その瞬間はそうでなかったとしても。

でも、彼女は雨に還ってしまうのかもしれないと思うと、遣りきれなくなり、ただ身体が落ち着かないほどのざわめきを感じる。

考えなしであつたかもしれない。

浅はかだと責められても仕方がない。

けれども、私は自分の中に湧き上がる浪のうねりのような大きな力に抗うことができなかつた。

傍巫女とは、霊力がある者のことを指し示すのではない。

ただ、巫女姫の朧様にお仕えするために用意された職名であつた。

海で生きる女達には、学問は必要ない。

子を産み育て、夫や嫁いだ先の家族を敬うことが重視された。

汐や風を読む聡い者は疎まれた。それは巫女達の仕事であつた。

少しでも好奇心が旺盛であると認識され、誰も気がつかないことに敏感であれば「山に行かせる」か「巫女にするか」で揉めた。

私はそんな中で、自分から、傍巫女になりたいと言ひ出した者であつた。

言ひ出さなければ山に埋められていたかもしれない。

だから、私は聡くもないし、特別な何かが存在する者ではない。

ただ・・・朧様の傍に居たかつた。

ただ、知りたかつた。

朧様がどうして時折哀しそうな顔をするのか知りたかつた。

朧様がどうして時折永遠を放棄しそうになるのか知りたかつた。

見たことがないほど、綺麗で・・・決して年を取らないけれども何も語らない静かな人のことが

気になって仕方が無かった。

私は、その何れからも外れた者である。

幼い時から、この方の憂い顔を忘れたことはなかった。

朧様が微笑む姿を見たくてこの職に志願した。

他の女達のような幸せはないのだと言われたが、それでも良かった。

・・・それでも良かったのだ。

命を繋ぐことよりも、永遠と呼ばれる人の微笑みを見たかったから。

■朧雨 19

「朧様！」

私は、計算も予測も全てを放棄して次の間に入った。

戸を引き、強雨の中でぱちんと弾けるような音がしたと思った時には、身体を乗り出していた。

それは扉を勢いよく開いてしまった不作法を表す音なのか、男のヒ首が閃く音なのか・・・よくわからなかった。

とにかく、朧様を守らなくてはいけないという気持ちが先立った。

守ってくれとあの方は言ったことはなかった。

だから、余計に切なくなった。

皆を守ってくださる姫御子は、守って欲しいと思わなかった。

ただ、守りたかった。

私の代わりはたくさん居るが、彼女の代わりは誰も務まらない。

命を粗末にしてはいけないと

それなのに、この島で一番、自分の命を軽んじている人であった。

自分の命は、誰よりも劣っていると思っている人だから。

誰よりも、自分が最も低き場所に居ると知っている人だから。

だからこそ・・・私は彼女の傍居で生きていたいと思うのだ。

だからこそ・・・彼女を守りたいと思うのだ。

私が顔を出すと、衿を強い力で引き寄せられて・・・

隴様が私の名前を強く呼んだのと、身体が自分の思っていない方向に引かれたのは同時であった。

巫女の衿を引く者は居ない。

海に暮らす者は心得ている。

巫女に自分から触れる者は居ない。

だから・・・まったく予測していなかった。でもそれは言い訳にしかならない。

隴様が特別に庇護する者を作らず、特別な役職を設けて巫女達に授けることがなかったのか、こんな時を予想していたからなのだと思う。

私の事を、獣のように扱う者が居るとは・・・考えていなかったからだ。

雨は怖い。

こんな風に、獣の匂いや危険を察知する感覚が薄れるからだ。

海の匂いも雨の匂いにかき消される。

私達を守護してくれると思われた海は、私達に禱りを求めるのに超越を妨げることはしない。

隴様は・・・

永遠を生きているのに、隴様は永遠を手放そうとしている。

私が、決して立ち入ってはいけないとされる場所である一段低い場所から、彼らの話している場所に上がることの罪深さを感じるより前に、私は強い力に引き寄せられてただ、声を失いながら背中ごと引き摺られる勢いに言葉を失う。

■隴雨 20

床の間を登り上がったと自覚するより前に、私は自分の身体が強い力で自分の意図した方向に進むことを阻まれていた。

それを感じる前に、すべてが動いていた。

そうなのだ、と思うよりも・・・私は自分の背中から身を傾けていた。

普段はこんな目線で天井を見上げたりしない。

抗えない荒々しい力で私の身体は僅かに浮かんだようにさえ感じた。

・・・それが、あの獣の皮を被った男によってもたらされたものであるとわかった途端。私は自分の喉元から声が漏れるのを聞いた。

雨に濡れた獣の匂いが強くなった。

そして私の首元に冷たくて硬い質感が近寄った。

ひたり、と音がする。

肌の上に乗る刃は、私が感じたことのないほどに冷たくて、瞬時に私の肌の冷却していく。

それで、私は彼が山の坊であることを実感した。

刃物を持つことができる時と、それを研ぐことができる者は限られている。

この島には研ぎ師の家系は二家しか存在しない。

島の表側と裏側のそれぞれに存在するだけだ。

他の島との交流でしか手に入らない品を、この島では代々受け継ぐ。島の海岸に流れ着いたものも若干は存在するが、この島には武器は存在しない。

漁に出るときの武具も貝や海獣の牙を研いだものばかりで耐久性から考えると、とても永遠を生きることはできないものばかりであった。

それらを磨いで、使用できるに値するものに仕上げる家系は存在する。

でも、それらには、自分達の責任で磨いだという証が刻印されている。

今、私の目の前で光っているそれは、そういった島の掟と違った品であるのだということが私を驚かせていた。

確かに。

山の土で造った竈から鍛えられる刃物や刀は幾年を経過してもまったく遜色ないのだと聞いたことがあった。

しかしながら、彼らが島の民に鋭利な刃物を提供するのはごく稀で・・・邑の者は、流れ着いた鈍の刃や、毀れてしまった刃を山の民に捧げると、忘れた頃に研がれて戻ってくるのだと聞いたのはそれほど遠い昔のことではなかった。

でも、目の前で光るそれは、私の喉の皮膚など綺麗に引き裂いてしまいそうな程に鋭利であった。

私は、その危険を承知していた。

なぜなら、最近になって島の研ぎ師の者たちが報酬を声高に訴えるようになったことを聞いていたからだ。

次代を引き継ぐための息子達が、これまでのやり方に異を唱えたのだ。貴重な刃物を研ぐ技術を継承してるのにも関わらず、十分な報酬が得られていないと言い出した。

私には、わかっていた。

それを声高に訴えるようになったいきさつの中には、私の兄の存在が色濃いことを。

・・・私の兄は、この島を滅ぼしたいのだろうか。これまでの決まり事について、疑問を投げかける異端であったのに、朧様は彼を放置している。

傍巫女の親族だから、粗雑には扱えないという不文律というか掟について朧様が憂えているのであれば無用であると私は幾度か言ったことがあった。

幼い時から身を寄せ合ってきた兄妹であったが、彼の行動について私が援護する必要もないと思っていた。

私と兄は、所詮は違う人間だからだ。彼の考えを理解して、朧姫に伝える義務は私にはない。でも、兄のことを突き放すこともできないのだろうと朧様が労ってくださっていることもわかった。板挟みになった私のことを心配してくれるのであれば・・・私はそれでもう、十分であると思えた。

この島の者は海に還り、命を巡らせる。

だから。

兄のような粗暴な考えを持つ者を、彼女が慈しむ理由はないのだ。

だから。

私は、島の理が通用しないその刃に驚いた。

・・・貝と、獣の牙と、その昔、誰かが手に入れた刃を継ぎ合わせたそれはとても見窄らしいものであったけれども、私が見たこともないほど研ぎ澄まされて手入れが行き届いていた。異種の刃を接いであるから、斑に見えた。けれども、それらの刃の隙間を感じさせない程、形が整えられていた。

そして、刃は薄く・・・触れれば音を立てずに切れてしまいそうなほどに薄く尖っていた。

湿気の籠もった空気に触れて、それは獣の血の匂いを放っていた。

いけない、と思った。

この場所で血を流して良いのは、巫女の月澱だけだ。

子を成すこともないのに、汐の満ち引きによって左右される女の身体を朧様は愛おしんだ。

穢れではないのだからと言って、彼女はその状態の巫女達を遠ざけることは極力避けるようにと言った。

極力、と言っているのは。

その時に、流れる血に酔って集まるモノが居るからだ。

そうではない血が、この館の中で流れるのであれば、私の血であって欲しくなかった。ここを私の穢れた血で汚したくなかった。

朧様の歩く場所。

朧様の見る内庭。

そんな場所を私の血で汚したくなかった。

だから。

朧様の迷惑になるのであれば、このまま刃に向かって首を差し出すべきだと考えたのに。

私は、身体を引いてしまった。

彼の獣の皮に向かって、背中を倒してしまったのだ。

・・・私の名前を、朧様が呼んだ。

ああ、待っていたのです。

私は、目を閉じた。

白雨の騒ぎの中で、私の命が消えてしまったとしても。

白雨を見るたびに、朧様が私を思い出してくれるのであれば。

巫女でないものの血を流してはいけない場所で、巫女である私の血を流すだけで終わることのできる案件であれば、私はそれで満足できると思った。

朧様の命を緘ると言う、愚かな考えを持つ者が。

私の命で考えを覆すのであれば、それも私の役割なのだろうと納得ができた。

私の命は、朧様に捧げている。親でもなく、兄でもなく・・・私は、私の命を自由に・・・私が決めた人のために使うことができる。それがどれほど自由であることなのか、私は知っていた。だから、この時に、使う瞬間が来たのだ、と思った。

でも。暗い気持ちもあった。私がここで死んだら、朧様は私を覚えていてくれるだろうかという邪な気持ちだ。私は傍巫女であるのに・・・こんな風にして私の願いを捨てることができないでいる。

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

■朧雨 21

朧様が類稀な人であると感じるのは、不老であるという点だけではない。
他の者は彼女が引き起こす奇蹟を見たことは殆どないからだ。

奇蹟は、余興ではないのだ。

彼女はそう言うことが多かったが、私の前では幾度か、誰にも使うことのできない力を見せることがあった。

彼女は人の理と違う世界で生きている。

その肌の白さや髪の色や・・・誰にも真似できない美しさから彼女が神姫であるのだと言っているのではないことを、私は知っている。

彼女の住まうこの館には、白い花だけが咲く。

中には、滅多に咲かせることのない花もある。

獣は彼女に集い、花は彼女に向かって散る。

獣の肉を口にすることもないけれども、捧げられた獣肉を他の者に分け与えて、その夜は捧げられた血肉に祈りを捧げ、海に還す。

彼女は、そんなことを繰り返して生きてきた。

ひとりで。

ずっと。

ずっと、ひとりで。

生きるということは、何と重いことなのだろうと思った。

死ねない、ということは・・・何と哀しいことなのだろうと思った。

次に託せるかどうかというのは、それほど大きいことなのだと知った。

彼女はこの島で唯一であり、他に代替は存在しない。

この世の生き物が、永遠について放棄しているのは、きっと・・・そういうことなのだろうと思った。

番わなければ生きていけない仕組みにしたのは・・・孤独をひとりで受け止めることができないのだろうと神が定めたからなのだろう。

そして、同じ質では受け止めきれないのだろうと思ったのかもしれない。

自分と違うから、求め合い、惹かれ会う。

そんなことを神は期待したのだろう。

でも、私は朧様と同じ性でありながら、朧様に強烈に惹かれる。

男女の情熱ではない。

肉欲は感じない。

しかし。

どうして、彼女はこれほどまでに遠く感じ、彼女はなぜこれほどまでに孤独を感じるのか・・・それが知りたいだけだ。

海の浪が満ち引きするのはなぜなのか知りたがるように。

月が満ち欠けする理由を知りたがるように。

私は、今の自分に満足するのではなく、問いかけていたい者であるのかもしれない。

人と違うということについて、誇らしいとは思わない。

邑の娘達のように、誰かに恋し、誰かに嫁ぎ、誰かの子を生んで自分の生きた証を残すことに躍起になることができなかった。

むしろ、私の親や兄が感じているように、私は私を恥じている。

好奇心が旺盛で、人の情動に疎く、そして姫神様の憂いに近付きたいからと言い放って、家を捨ててしまった人間だ。

兄の方が風変わりであったけれども、余程・・・あの家を捨てられていない、最も人に近い人だとは思う。

死ぬのは簡単だ。

でも、死ねないのは・・・簡単ではない。

生きるのは簡単だ。

でも、生き抜くことは・・・易しいことではない。

私は、それを感じた。

ずっと身を倒せば、この命は絶える。

これで自分が死ぬかもしれないと思った。

でも、怖くなかった。

朧様を救うことになれば、この血は濁らない。

汐になって朧様の浪になる。

私は、そのために傍に居るのだ。

朧様を守り、彼女の日々を見守り・・・そして消える時には、彼女のために消えたかった。自分

の祈りが・・・自分の命が、彼女のために燃やされ尽くすのであれば、それは私が願ったことそのものであった。

■ 隴雨 22

「やめろ」

それは私に向かって言った言葉なのか、獣の主に向かって言ったのかわからなかった。隴様が、誰か若しくは何かについて、その行動を止める発言をすることはなかったからだ。

長くお仕えしていると思っていたけれど。

彼女の何も知らないままでいたのだろうと思うと、その事の方が切迫した現状の惑いよりも先行された。

私は隴様を見た。

いや・・・隴様のおわす方向にしか、視線を向けることができなかったのだ。

首を絞められ、声も出なかった。

命の危機について恐怖するより、この館を私の血で汚すことの方が恐ろしかった。

浅はかだと罵られても良かった。

私は、思慮が浅い。

隴様のことを優先に考える。

でも傍巫女ならそれは当然のことだ。

主を守り抜くことは、この島を護ることだ。私は誇りを持って彼女に仕えている。

でも。

どんなに皆が心を砕いて彼女を御守りしようとしても、当人である隴様が命を失うことについて恐怖していないのだから手に負えなかった。

まるで、その時を待っているかのようだ。

傍巫女が命を惜しんでも惜しまなくても、姫御子である隴様の命は危うくなる。

だから、彼女を囲む者たちには、命に対する尊さを知っているものの、隴様と引き替えにするような愚行に走らないように家族がいない者が優先されて配属される。

私のように自ら志願して就けるような就きやすい職ではない。

つまり、私達・・・傍に仕える巫女達は、命について迷いを持ってはいけない者しかねない。海に生きる者たちが、海での漁を生業にしないで陸に上がることは何を意味しているのか、わか

らない島民ではなかった。

海を捨てたり穢したりする者は、命を惜しむ行為とされて、蔑視された。

この島で、数少ない島人の禁忌とされているもののひとつだ。

でも、傍巫女になるのは、これとは少し違う。

どこにも嫁がないうちに巫女とされた未婚の者か、子がいない寡婦しか巫女になれなかった。なぜなら、臙様のために命を捨てる覚悟が求められるからだ。

確かに、自由に海に潜れなくなる。

好きな時に好きなだけ海に入ることはなくなる。

海に還れなくなることを覚悟した。皆に何度も念押しされた。

・・・それでも私は納得してここにやって来た。

坂の上の館に住まう、永遠を持っている神様のような人の傍で海を眺めるだけで幸せであった。

その中でも更に役割が分かれていたが、臙様はあえてそのような分断の言葉をかけることはなかった。

上下を作らない限りは、臙様は島の者の決定を優先させる。

もし、島人やたとえ山の民であったとしても、彼女は人の行為を止めさせることはしない。

仲裁もしなければ、誰かを嗾けることもしない。

この島の者が傷つき傷つけ、誰かを弑しても臙様はただ弔うだけであった。

彼の手が止まる。

背中に、濡れた皮の感触があり獣の強い匂いが立ち上った。

「ここで殺生は禁じられている。でも、貴女様のお役に立てる日が来るだろうかと夜を追って戻れなくなる日を待ち詫びる哀れな者がいることを忘れてくれるな。情けをかけることはできないと言うのであれば・・・今、ここで・・・この傍巫女を殺す。そうすれば、同じ様に・・・永の雨で身体を焼けぬまま朽ちて行く姿に少しは心動かされるでしょうか」

「臙様を試すな。賤しき者め」

私は呟いた。

彼は若かったが、男の力には叶わない。

こういうときに、私は自分がなぜ、屈強な身体の輩に生まれつかなかったのだろうかと思う。

でも、それでは臙様の傍に居られないわけであるから、私はこの相反する思いが同時に湧き上がっていることに困惑する。命が危ういという際なのに、私はそんなことを考えて、目の前で立ち上がることもせず座ったままの臙様をぼんやりと眺めた。

襟元が締め、呼吸が苦しくなってきたがそれでも、臙様は静かに私と男の様子を見上げているだけであった。

「身体を腐らせ、獣と蟲に喰われて土に還る死人になったら、もう、どこにも還れない。海にも、土にも還れない」

その言葉に、朧様は静かに首を振った。

「海に還せば海のもものが屍肉を喰らう。土に還せば土に生きる者がそれを喰らう。その違いだけだ。灰にしたからといって、その者が安らかになるとは限らない」

「それは貴女がいつか海に還る姫巫女だから」

彼は呻くように言った。

「還る場所はここなのだ、とわかって死ぬのと・・・そうではない者との違いを、貴女様はおわかりにならない」

「海を見て、山に棲み、土に還る者よ」

彼女は静かに言った。

この場で、落ち着いているのは朧様だけであった。

私の命は、この獣の男の腕の中にある。

けれども、私はどんなに平凡であったとしても、巫女姫に仕える傍巫女である。

獣の男は私や朧姫を傷つけば生きてここから出ることはできない。

この屋敷の周囲に、なぜ、白砂が敷き巡らされているのか、知らない者はいない。

白い砂が赤く血で汚れば、それだけで海は荒れる。

だから月澱の巫女は白い砂を歩くことはできない。

このような理由から、敷き詰めるのは傍巫女の役割ではなく男衆の役割なのだ。

朧姫の寝所を血で汚してはいけない。それは皆が知っていることだ。

それなのに。

・・・彼はそれすら覚悟してやって来たのだろうか。

だとしたら、何と愚かな行為なのだろうと思った。これを島人が知れば、憤りに任せて、山の民の集落を山ごと焼き払ってしまうかもしれない。

この島でたったひとりしかいない姫巫女の首を刎ねようとする者が存在するとは。

「私が死んでも海巫女様に加護はあり続ける」

私は呟く。この男が何を思っているかわからなかったが、私の中に昏い期待が湧く前に、私は私にもどりたかった。

・・・朧様が私を特別に愛でてくださっているのかもしれないという、愚かな・・・大それた期待だった。

この状況で正常な判断は難しい。

けれども、私は頭のどこかで冷え切った部分があるのを感じていた。

私の命は・・・朧様の中で、どれだけ重いのだろうかとちらりと思ってしまったのである。

命に軽重はなく、たったひとつの命であるから生命は美しいのだと朧様はいつも言う。

尊いのは命が重いからではない。

どの命が優先されて、どの命が捨てて良いというものではないのだと教えられた。

誰にでも、たったひとつしか存在しないからなのだ、と海の姫は言う。

だからこそ、思い知るのだ。

彼女の命は、皆の祈りである。誰も遮断することはできないし、誰も彼女の命を軽んじることもできない。

永遠を生きる人は、永遠の重さも哀しみも知っている。だからこそ、命について尊い理由を「たったひとつしかないから」と言うのだ。

皆が等しいわけではない。不慮の事故や病で死ぬ者も居る。

不公平だと思うのは、他者よりも短い命や満足しきれない人生であるからだ。

この島で命を持っている者は、海神様や朧様の前では、誤魔化したり飾ったりすることができない。

「島に生きるのは、皆、同じだ。おまえもここで生きるのなら、朧様に挑むのはやめろ」

私の言葉に彼がいきなり嗤ったので、私は肩を強ばらせた。

項にちりちりと焦げ付くような痛みを感じる。

これは危険を知らせているからだ。

私の背中に死が訪れている。

そして、私の背で嗤っているのだ。

殺気、というものは・・・こういう気配をいうのだ。

しかも、在らざるモノの気配ではなく・・・人の持つ瘴気というものを肌で感じて、ただ、肌を粟立たせることもできず神経を麻痺させるばかりであった。

それは、獣に近かった。獣の皮の匂いが強く漂っているからそう思うのだろうか。

自分の中の本能が警告する。この男は危険だ、と言っている。でも、抗うことができない。私の自由は奪われており、彼の持つ刃が私の喉元で硬い光を放っているからだ。

「暴れると苦しむぞ。・・・この刀は暫く研いでいない。この島の愚かものが、研ぎ技を独占しようとしたからだ。だから、獣は鈍の刀で死にきれず、苦しんで死ぬ。頭が喉を砕いてやらなければ、死ねなくなってしまった」

私は息を呑んだ。

その言葉に、心当たりがあったからだ。

この島の若い継承者達に、報酬を要求することは当然で特権であるのだと吹いて回る集団が出て

きていると聞いた。・・・その中心は、私の兄であると聞いて私はその真偽を確かめるまでもなく、兄の仕業なのだと確信した。

あの人は、この島を変えてしまう。あの人は、危険だ。それなのに、隴様は兄を排除しない。私がああ男の妹であるためなのなら・・・私は、ここに存在してはいけないのかもしれない。

■隴雨 24

だから、私は一度だけ眼を強く瞑ると、ぐっと顎を引いた。

覚悟ができていると言えは嘘になる。

私には、覚悟などはできていなかった。

まだ死にたくなかった。でも、隴様のために死ぬという理由があるのであれば、ここで死んでも無念だとは思わない。

彼女の唯一になるのであれば。

彼女が、死を恐怖してくれるのであれば。・・・私は、そう納得して死ぬことができる。

いっそのこと、彼女が私に「死ね」と命令してくれれば良いのにとすら思った。

自分の命の終わりを自分で決めることがこれほど・・・躊躇いを感じるものであるとは、知らなかった。

なぜ、彼女が「命の尊卑ではなく、命はひとつしかないから尊いのだ」と言い続けるのか、その理由がわかった。

私は、心のどこかで考えていたのだ。

最も尊い命を持つ人が、どれだけ命は皆等しいのだと言っても少しも心に響くことはないのに、と思ったのだ。

私は、隴様の言葉を疑っているのではなく、私の命そのものが隴様と等しいと思えることができないでいたから。

だから、決めた。

この人の為に死ぬことで私は理由を探そう、と。

死んだらそんなことを考えることもないだろう。それはわかっている。

けれども、私は胸の中に燃っている疑問をこの白雨のように勢いよく洗い流してしまいたいと思っているのか・・・そうではないのかと思っているのか、よくわからなくなってきた。

でも。

ひとつだけ、確かなことがある。

ひとつだけ、言い切ることができる。

私は、隴様を助けたい。

彼女は稀なる力を持っているけれども。
彼女は、自分自身を助けたりはしない。
自分の命を守るために、自分の力を使ったりはしない。
それだけは・・・私の絶対の確信だった。
私が私であることと同じくらいに、間違いようのない事実であった。
それが危うくて私はいつも心配で落ち着かなくなる。

そんな風に思った私は、この瞬間をおののきながらも拒否することはできなかった。
私の命は、朧様より優先されない。
それは、私が決めたことだ。
私の命は、私が決める。
朧姫でも私ではない誰かが決めることはなかった。
私の命は私だけのものである。

自分の命が、誰かによって絶たれようとした瞬間であった。
だから。
自分から身を倒した。
私の命によって朧様が自分を慈しむことができるのであれば。
そして、私が数多通り過ぎていった命の中で、記憶に残ってくださるような何かを伝えることが・・・できるのであれば、私はそれで私として残ることができるのだろうと思った。
子を残すこともない。血の系譜を伝えることもない。

■朧雨 25

「痴れ者よ。思い知るがいい」
私はそう呟いた。

私が最期に発する言葉がこれで終わるのは口惜しいが、それでも・・・朧様の目の前で死ぬるのであれば、私は最上の最善の死であると受け入れることができた。
だから、言った。
それが呪詛に寄ったものであるとわかっていた。
誰かに対して憤りを感じながら述べてはいけない。
私には神聖なる力は備わっていないかもしれないけれども、朧様に近いような感覚で感じることができる。
何も言うてはいけない。彼を刺激してはいけない。

私の中の生存本能がそのように私に忠告する。

しかし、言わずにはいられなかった。

私の首が切られた後、朧様の安全が確保されるという約束を交わしているわけではない。
私の命と血が朧姫を救うことができるという確約はどこにもないのだ。

私はとても狡い人間だ。

なぜなら、自分のことしか考えていないと思ったからだ。

私の愚かな兄のことを嗤えない。

そうだ。

あの人のことを蔑むことはできないほど、私は愚かしい。

この命を失う間際という時になって・・・私は自分の命が朧様に影響することを願ってしまった。

愚かであるとは思っている。

そして、何代にも渡って同じ様に愚かな願いを捧げてしまった者がいるのだろうと思った。

多くの者と私が同じになる瞬間であった。

私は自分が誰もと違うと思わないように自分を律し続けたけれども、その私はこの男と同じ様に、私は獣であると自分で明かすようなものだ。

簡単に死ぬのは、朧様を哀しませる。

それを傍巫女の私が敢えて行うのであれば私はこれまでの私を否定するのだろう。

獣の男の言っている、夜追いの女と同じ心残りを感じて私は命を投げるのだろうと思った。

どこに還るのかわからない。私は海で死ねないから、海に還ることはできない。だから、どこに還るのか・・・それだけを疑問に思いながら死ぬのだろう。

そして「それだけ」と言い切れない物思いが、私をこの島のあらゆるモノになってしまうのかもしれないという不安をいっそうかき立てるのだ。

朧様を守りたいと思った「それ」と同じになってしまう。

でも・・・

私は、それでも良いと思ったのだ。

私の命を、この場で使っても良いと思ったのだ。

摩耗するだけの命であれば、私はもうそれはいらなかった。

「朧様」

最期の言葉は、私が最も・・・敬愛する人ではなく、最も心配する人の名前であった。

私は神の名前も私の主人の名前も区別しない。

私の中に在る、私を支える存在の名前は、たったひとつであった。

あの兄の妹であるという痛みを忘れることができるほどの人の傍で・・・私は私の澱を濯ぐことに専念してしまったのかもしれない。

私は笑う。私の背中に感じる、獣の気配に、ただ、笑う。

「私を刎ねろ」

思い切って言った。命乞いをするつもりはまったくない。

山の坊（※「坊」とは「至らない者」を表し、一般成人に及ばない権利権限しか持ち得ない下層民をこのように呼び習わした）に自分の命が大事なのだと訴えるほど私は自分の命を高価であるとは考えていなかった。

・・・いや、そうではないのかもしれない。

あの人の血筋であることを、ここで否定したかったのかもしれない。

生きることに貪欲で、どんな手段を使っても生きることを優先させる狡猾な兄と同列にされるのが、私は我慢できなかったのだ。

■ 朧雨 26

私は続けて言った。

「截るなら早くしろ。命乞いなどはしない」

私は黙ったままの男に言った。

特別な力を持っていなくてもわかる。

この男は、殺すことを楽しむ者ではない。

生きるために仕方なく山の獣を捕るだけで、血の流れを心地好いとは思っていない。

だから、私の言葉に何も言わないのだ。

その一方で、この男なら躊躇いもなく刃を横に引くのだろうという確信もあった。

とても静かだからだ。

この男は、私の兄が時折見せる昏い瞳と同じ質のものを持ち合わせている。

背中越しにしかわからなかったけれども。

この男は、誰かを脅すことは初めてであったのだろうとさえ思えた。

私は早く死にたいのか、そうではないのか・・・迷う時間が訪れることが怖かった。

この島の者達は、皆、海に還ると言う。

けれども、海に還ったその後はどうなるのかということについて、誰も何も言い伝えたりしない。

死んだら・・・その先はどうなるのだろうか。

海に還ったら、その後はどうなるのだろうか。

誰もそのことを疑問に思わない。尋ねたり、調べたりすることはない。

「海に還れなくなるぞ」

私は嗤った。

なぜ、彼は私を殺そうとしているのに、そんなことを尋ねるのだろうか。

私は彼が理解出来なかった。

死と生の間際にあって、私の憂悶の時間を敢えて設けているように思える。

それでいて、殺すことに躊躇いはない。

まったく矛盾するものを同時に存在させることができるこの者について、私はまったく何も知らなかった。

朧様は前から知り合いであった。

私が知らないから事実ではないのだとは思わない。

私が知らない事実であった。それだけだ。・・・それだけのことなのだ。

私はそれを知らなかった。

朧様の全部を知っている気になってしまっていて、その実そうではなかったのだということについて失望し、そして私は新たに彼女のために命を捧げるということでそれを濯ごうと思っていた。

彼に対して嗤ったのではない。

愚かしい私について、嗤ったのだ。

首と胴が離れるのは、この世で最も苦しい痛みなのだという。

海で溺れ死ぬより、斬首される事の方が苦しいと言われる。

だから、皆は海で死ぬことを懼れない。

自分で体感したことではないのに。

皆は、自分の死が、他の誰かの死より酷くはないのだと思って死ぬ。

命はひとつしかない。

だから、死も、ひとつしかない。

それなのに、そこに尊卑を設けなければ死ねない者たちの悲しさを、私はよく知っていたから。

だから、何も言えなかった。

ひとつしかないから、命や死に意味を持たせたいとか・・・最も尊いのだと順位をつけたいのかももしれない。けれども、それは海姫の前ではまったく無駄な作業でしかなかった。

私は身を傾けた。

いつ、彼が私の首に横筋を引いても良いと覚悟していた。

・・・死ぬという瞬間に意味を持たせたら、死ねないと思った。

敢えて、朧姫の方を見ない。彼女に救いを求めたら・・・私はこれまでの私を拒絶することになる。

朧姫を尊び、彼女のためなら自分の命も惜しくないと思った私自身を辱めることはできないと思った。

・・・朧姫のことより、自分の生きてきた様や死ぬまでの路について拘る私が恥ずかしかった。誰とも違うと思っていながら、結局は、誰もと同じなのだ。

心の根は・・・島の民のそのものであって、そこに「島巫女であるから」とか「朧様を思っているから」とかいう装飾が入っているかどうかというだけの違いであって・・・結局は「生きていることに、更に神の加護を受けたい」という邪な奇蹟を願っているだけに過ぎない矮小な民であるのだ。

■朧雨 27

私は目の前の刃が自分の命を奪うのだと思うと、何だか寂しくなった。

私の命はひとつしかない。尊いということではない。

この男の穢れた刃にくれてやるのが、ただ哀しかった。

朧様を守る為の命だと思っている。

それなのに、朧様を試すための命になってしまうことが、どうにも・・・身体の中から言い様のない気持ちが湧き上がってきて、私を乱していく。

「生きるためという理由以外で命を奪うことを恐れぬ痴れ者よ。

・・・獣の脂と血で汚れた、切れぬ刀で私の首を落としてみる。

その代わりに、一振りですごせ。でなければ・・・私がおまえを殺す」

命乞いをしてしても伝わる相手ではないとわかっていた。

だから、私はこの雨が降り止む前に、この命が尽きるのかももしれないと思った。

雨が止めば、この男の気配に気がついた者たちに囲まれてしまう。

彼は、人知れず気配を雨に紛れさせて朧様に重大な話を報告しにやって来たのである。
そしてもうひとつの目的である、抜殻になった夜追いの屍を焼いて海に還してやるという大それたことが達成できていなかった。

駆け引きなど、私は知らない。誰かにこの命が大事なのだと説くつもりもない。
しかし、私が残せるものが何もないことが怖かった。
朧様に忘れられてしまうことが一番、怖かった。
命の尊さを教える朧様の命がどれほど輝いているのか、朧様は考えたことがないのだ。
短い命だから素晴らしいのではない。
長い命だからくすんでいるということもない。
彼女の命もたったひとつで、それを彼女はわかりになっていない。

「山に還れ。海に還れないのなら、山に戻れ」
私はそれだけを言って、思いを決めた。

それが、私が自分から身を倒した瞬間に思ったことすべてであった。
多くを考えてはいけないのだと思った。
もっとも、多くのことを考える余裕などはなかったけれども。
暫く会っていない家族のことよりも、目の前にいる人の心に触れられないままに死ぬことの方が私を動揺させる。確かに、永く生きたいと思った。
ずっとずっと、朧姫の傍にいたいと思っていた。

この身体が老いていっても。
やがて肉が朽ちていっても。
それでも、傍に居たかった。
私が仕えているのは朧姫で・・・産土の神でも海神の父王でもなかった。

彼の驚いたような、呆れたような気配を感じる。
日々、感覚を研ぎ澄ませるような訓練を続けていれば容易に感じる気配であった。
獣を狩る山の者たちは気配を消すことには長けているが自分の感情を殺すことには慣れていない。
。

その時。
静かだけれども、重く、沈鬱な声で透き通った声の持ち主が声を出した。
「やめろ」

私の葛藤とは別に、朧様が・・・もう一度だけそう言った。

彼女が誰かにやめろと命じるのは実に珍しいことであった。

だから、私はもう、それだけ良いのだと思った。そう、思えた。

そう思わなければ、私の愚行から招いたこの事態に対して、朧姫が皆に申し開きできないからだ。

私の背後で男が薄く嗤う。男の体温で、濡れた獣の独特の匂いが私に移ってくる。私は刃は怖くないが、海にはない存在が怖かった。

海に身体を浸しても、海神様はこの匂いを浄めてくださらないのだろうなとさえ思えてくる。

「聖なる海神の巫女姫。数多の呼び名があなたをどれだけ長くこの島に居たのかを表しているが・・・それでも満足しきれない姫を支えたいと思う者の命はどれほど軽いのか、ここで示してみよう」

「朧様、この男の言う事に耳を貸してはいけません」

そういうと、私は自分の首を更に前に突き出して命を差し出した。

斜めに彼の肩を睨み付ける。衿が首から離れて、私の項にひやりとした湿った空気が寄って来た。

男には見せない部位を見せて恥じらいに頬を染める余裕などはなかった。この男の目からは悲しさと怒りと・・・それから殺気が漲っていたからだ。

■朧雨 28

だから私はここから逃れられないと思った。そのつもりもなかったけれども。

朧様が、この男に「やめろ」と言ってくださったのか、それとも私に命を捨てるような行為を煽るような行為をやめろと言っているのか、わからなかった。

ただ、朧様だけが・・・静かであった。

彼女は、生死に関与してはいけないのだと思う。

私の想像した通りの行動であった。

私の命などでは彼女は心を動かされない。

誰にも、心を動かされない。

だからこそ永遠の巫女姫なのだ。

永遠を生きる人と神の間に御座す方なのだ。

誰にも、心を奪われることがないから、彼女は朧姫なのだ。

・・・そう思った時のことであった。

彼の腕に力が込められて、本当に私の血でもって実行に移したのだ、と悟った瞬間。

そのとき。

すべての音が止まった。

すべて、というのは本当にすべてであった。

ここにある、あらゆる音が消えた。

彼の哀しみも、私の苛立ちも・・・激しく降り注いでいた雨の音すら止んだ。

遠くで当たり前のように聞こえて来る絶え間ない波の音すら・・・消えた。

いつもあるものが・・・そこにはないと知って目を見開いた時。

私は、それを引き起こしたのが誰であるのか、すぐにわかった。

朧様だ。

私は、彼女を見た。

その時の彼女の顔を、私は忘れることができなかった。

いつも茫洋として・・・感情を顔に浮かべることのない人が・・・

その時だけは、はっきりと私の方を見て、哀しそうな顔をしていた。今にも、泣きそうな少女の顔をしていた。永遠の・・・娘の姿のままで居ながら、魂だけが成長していった人は、私の顔を見ながら・・・ただ静かに深く哀しんでいるだけではなく心の浪を立たせて嘆きを漂わせていた。

この人は、何も感じていないのではない。

そう思った。

それよりも愕いたのは、雨が・・・今で不均一に、けれども激しく降っていた雨が、一瞬、止んだのだ。

私が上を向いて天井から伝わってくる雨音が鎮まったことに対する異変に目を遣った時にはもう・・・再び、雨が激しくどっと屋根を叩いていた。

そして朧様はいつもの通り、美しい顔に変化を加えずにただ私と彼の姿を見ているだけであった。

驚きはまだ、続いていた。

雨が再び降り始めると、男があっと声を出したのだ。あまりの驚きのために・・・彼は私を掴んでいた腕から力を抜いた。

私は前のめりになり、床に勢いよく倒れ混んで膝を激しく打った。本能で咄嗟に両手をついたが

、私の髪は乱れて私の手の平に影を落としていた。

「・・・姫」

彼が呻き声を上げた。

そして、同時に私の頭の上から、ばらばらと砂が墜ちてきたので、私は思わず目を瞑った。

それは・・・墜ちて来るはずのないものであった。

山の者は海に入らない。

砂を浴びることはないから、彼の衣類に入り込んだそれらがヒ首を抜いた時にこぼれ落ちたということはありません。

ここに来るまでの白砂が混じっているのか。いや、違う。

よく知る魔除けの白砂ではなかった。

第一・・・雨が降って水を吸った砂はこんな風にこぼれ落ちることはない。

様々な色が混じって・・・まるで、裏の浜の砂であるかのようにだった。

底が深すぎて誰も遊泳してはいけないとされる場所の砂は、ちょうどこんな風に混じった色が多く、そして粒が細かい。

この島の浜は各々砂の色が違う。

なぜそうであるのかはわからないが、砂の色を見れば、どこの浜から来たのかすぐにわかるほどであった。

私は顔を上げた。

朧様の傍巫女でありながら、彼女の安否を最初に考えなければいけない者であるのに。

私は・・・好奇心に負けて上を振り仰ぐ。

そして、呆然とした。

■朧雨 29

私の上に、白雨の代わりに降って来た砂雨は・・・男のヒ首から漏れるものであった。

獣の被りものの下からでも、彼の驚愕がわかった。私を捉えたままの格好で、ただ、立ち尽くしていた。

雨の中で、彼の愕く呻き声は白雨にかき消されていたが、同じ様な声から私からも飛び出していたかもしれない。もし、その不思議な現象の瞬間を目にしていれば。

私が見上げた時には、それはすべて終わってしまっていた。

頬にも髪にも・・・私の上に雨のように砂が降り注いだ。私は目を瞠る。

何があったのかわからなかった。しかし、それは彼も同じであった。

刃が・・・刃が、すべて砂になって墜ちたのだと知った。

なぜなら、彼の持っているのは刃のない柄だけであった。その先についていた刃は、すべてなくなっていた。いや、違う。

砂が纏っていたから。まだ、墜ちきる前の砂が、そこから突如として出てきたのだ。

・・・刃がこぼれ落ちたのではない。砂になったのだ。刃が、砂に。

私はそれを誰がやったのか、どうしてそうなったのかわかっていた。

「・・・やめろと忠告はしたぞ」

朧様は静かにそう言った。私と彼は、海神の姫御子を凝視する。

きっと、同じ貌をしていたのだろう。私と彼は。

自分ひとりではまるで考えつかないような事が起きている。

そしてそれを起こしたのは・・・目の前の、永遠を生きる人であった。

この島の宝。この島の生き神。この島の・・・絶望も希望も呑み込んだ人。

そうだ。彼女は、決して神ではない。しかし、決して・・・人でもない。人はこんなことはできない。

彼女は、男の持っていた刃を一瞬で・・・そう。彼女は刃を砂にしてしまった。

それを使った時。だから、白雨が止まったのだ。音がなくなり、彼女は静かに奇蹟を見せた。奇蹟という言葉では足りない。彼女の力はまさに・・・海神が授けた稀なる力であった。

「朧様・・・」

私の声は小さく掠れていた。自分の声ではないような気がする。

私のよく知る、朧様の姿であった。

華奢な身体で姿勢良く座っている姿は、高貴な姫君の姿そのものであった。

この島で生きれば、高貴という概念は存在しない。

最も尊いのは、目の前にいらっしゃる島姫であるからだ。

しかし誰にもわかることがある。

自分と違うということは、誰にでもわかるのだ。

見目の問題ではない。彼女は、彼女を作っている内なるものそのものが違っているのだと・・・
こういう瞬間に悟る。

違っているのだと知る瞬間は、これほどまでに胸が痛いのだと思っていなかった。

朧様と私は違っていることが当たり前で前提なのだから。

私にはできないことが、彼女にはできる。

でも。

彼女にできないことが、私にはできない。

・・・違っていることが哀しいのではない。

比べることそのものが間違っているから。

でも、彼女が力を使うたびに、それを人に見せる瞬間に出会すたびに、彼女は哀しむのだ。

生死に関わらないと言っていたのに。

彼女は、どんな生き物の生死の変更にも関わらないと言っていたのに。

・・・その理を曲げたのだ。

彼女は微笑んでいた。淡く、薄く。いつもの通りであった。

結果的に私の命を救ったけれども、隴様はそれを認めないだろう。

雨を操ることもできるのに。

刃を砂にかえることはできるのに。

彼女は、海の穢れを塞ぎ止めるのではなく、受け入れながらも被害を最小限にしようとする彼女の考えを・・・私は愚かな言葉と態度でもって踏みにじったのだ。

隴様の考えを。

これまでずっと貫いてきた考えを。

それを、私が壊してしまったのだ。

■隴雨 30

「どうして・・・」

同じ様に、掠れた声が聞こえた。

私と同じ様に、彼も驚愕している。

私は彼女の起こす不思議な現象を幾度か見たことがある。

しかし、それらはやむを得ない状況であった時ばかりである。

彼女がふらりとどこかに居なくなってしまう時は、きっと・・・ひとりで何かを解決しているのだろうと思っていたから。

でも、そこに私も立ち会うことを求めていた。

ひとりにしておけないから。彼女をひとりにしたら・・・きっと自分のことを赦せなくなると思

った。

いつも。

どんな時でも。

朧様は何も見せようとしな。

この穏やかな生活の下で何が行われているのかということ。

この島の民達が、なぜ、不老である彼女をこれほどまでに島守りの姫として尊ぶのか、彼はわかっていないのだ。

彼女が美しく不老であり、薬草を煎じることができるからという存在であるから、という理由だけではない。

見えないモノ達が、この島には存在する。魂を失って・・・もしくは、魂だけになって彷徨う哀れな・・・たったひとつしかない命を手放してしまった若しくは手放さざるを得なかったモノを見ることができる。

そして、彼女はこの島を護っている。私達だけを守っているのではない。

この海の上に浮かぶ小さな島の上で生きる者たちすべてが彼女の守りたいものであるのだ。

同じ種は同じ種を守るが、同じ種を同時に見捨てる。

今、私が味わっているこんな状況のように。

だから。

彼女が人の子の前で、彼女だけしか使えないものを彼女が見せる時はやって来ない。誰も、奇蹟を目の前にしないのに、それでも彼女を神女として崇める。

それがどうしてなのか・・・彼は知らない。

朧様は上を見上げて、雨の音に聞き入っていた。

「間もなく雨が上がる。行け」

それは男に対して言った言葉だ。間もなく、雨が過ぎていく。そして、終わる間もなく次の雨がやって来て、夜追いが視た長い雨がやって来るのだろう。

この白雨は、その先触れの雨であったのだ。

彼はまだ呆然として急に軽くなってしまった自分の刃の柄を握ったままであった。

降り下ろすこともなく、ただ、そのままの姿勢で驚愕していた。

それで、彼が若すぎる男であることがわかった。

彼女と幾度も対話しているはずなのだが、その不遜な態度も、神を恐れぬ希望を口にする浅はかさも・・・皆、彼が朧様の巫女姫として認めていないからなのだと知る。

口伝で、彼女の功績については幾度も聞かされているはずなのに、彼はそれを信じようとしなかった。

そして、彼女にこの島の危機を伝えにやってきた。

彼は一体、何を望んでいるのだろう。

島が静かに元通りになるために穢れを祓って欲しいのか、夜追いを安らかにして欲しいのか・ ・ ・
・ いや、決まっている。

彼は神など信じていない。

その目つきを私は知っている。

彼と同じ視線を持っている者を、私は身近によく知っている。

隴様の力に縋るのに、隴様を信じない。永遠を信じない。

「おまえが永らく愛した刀を・ ・ ・すまないな」

隴様がそう言ったので、そこでようやく彼は嗤った。

腕を動かし、柄を懐に収めた。その先に在ったものはすでに何もなくなっていた。

「どうせ鈍だ。獲物を一撃で逝かせてやることはできない」

私は倒れた身体を起こして、床の上に正しく座ろうとしたが、ぐらりと身体が揺れて片手を床についてしまう。

隴様の前で、乱れた姿勢で居続けることは自分に許していない。私は慌てて身体を今一度起こそうとするが、力が入らなかった。

・ ・ ・自分の生死に直面すると、人はこうして脱力し虚無を感じる。失いそうになる命が戻って来たというのに、歓喜したり安堵したりすることはない。ただ、力を失うだけだ。

隴様を庇って身を捧げなければいけない立場であり職責であるのに、それらを遂行しようという気持ちと、身体の内は相反していた。

私は自分の命を惜しむ矮小で薄汚い人間で、山の者たちを嗤う立場にはないのだ。

「命を惜しめ。簡単に捨て去る命に興味はない」

私はそれを聞くと、唇を噛んだ。それは私に向かって言ったのだ。隴様は、哀しんでいる。私が簡単に命を投げ出そうとしたから。そして、彼が簡単に命を奪おうとしたから。

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

■朧雨 31

朧様は溜息を漏らした。

私は再び驚く。今日は驚いてばかりであった。

朧様は・・・そんな仕草を滅多に見せることはない。

誰かに失望した様を見せることはない。

だから、それは私に対しての失望であると思った。そうに違いないと思った。

彼女には特別は存在しない。

どれほど、朧姫の特別になりたくても、誰もそうなることはないという一種の安堵が、私の中にある。

そしてその邪な安堵の中に、僅かな希望が埋もれている。

ひょっとしたら、私は朧様に何かを伝える命になるかもしれないという期待であった。

何を根拠にそんなことを考えつくのか、自分でもわからない。

でも、自分のひとつしかない命について、ひとつしかないのだからと教えてくれた人に私は何かを返したかった。

海に身体が還るように、私の表しきれない朧様へ捧げるべき気持ちが・・・行き場がなくなってしまうことが、怖かった。

だから、それを拒絶されたような気持ちになってしまった。

朧様は誰かに期待しないし、誰かに絶望することもない。

わかっているのに・・・彼女の哀しそうな歎息の音が白雨の雨垂れに混じって聞こえると、ただ、それだけで胸が締め付けられて酷く痛む。

「朧様」

私は絞り出すような声で主の名前を言うのがやっとであった。

呼吸が苦しい。

腑が大きくけれども細かく揺さぶられているように感じる。

浪に揺れるのとは違う。

心に乱れを持つことは禁じられている。しかし、私は自分が激しく動揺していることを認めざるを得ない。

期待通りの傍巫女でないことはわかっている。

・・・わかっている。

私は、他の巫女達と相容れない存在だ。

特殊で選ばれた存在という意味ではない。

その逆だ。

平凡で、矮小で・・・あまりにも普通でありすぎる、ただの側仕えの巫女であった。巫女という職すら痴がましいと言われる。でも、私は臙様の傍巫女だ。ここでしか生きていかないと決めた。

生きていけないのではない。・・・ここ以外では生きないと決めたのだから。

私は、変わり者だ。

気難しくて、疑問に思ったことは追求しないと気が済まない。

ひとりでいる孤独にも鈍感だ。恋や愛などという年頃の娘が囁く言葉や経験を知らない。

気の利いた言葉も言えず、先回りして何かをするとその半分くらいは良かれと思ったことと反対の結果に終わる。

臙姫は・・・

その私を特別に愛でることもなかったけれども、特別に厭うこともなかった。

だから、私が感じている他の誰もと違う感覚を、臙様の前でなら自分の意識が過剰なのだと思い飛ばすことができた。

他の者に冷たくされても。それがどうした、と思えた。巫女としての仲間意識はあったが、いざとなったら・・・私は他の巫女を全員見捨てても、臙姫を助けるだろう。

此の世が果てても良い。この島が禁忌を犯して沈んでも良い。

濁りが何だ。

夜追いの者が命を賭けて臙様に危機を伝えても、それは私には関係の無いことだと笑い飛ばす冷酷さが私には存在している。

どんなに海が濁っても、島人達は臙様に縋って生き延びて、この時期を遣り過ごすだけだ。山の民は僅かな期間だけ、狩りができないだけだ。山菜などの保存食で遣り過ごすことができるし、それを発案したのは臙姫だ。

何事も備えあれと言って、乾燥させた保存食や薬葉を備蓄することを奨励したのは、邑長ではなく臙様なのだ。

そして、皆は等しく臙様の加護を受けているというのに。

・・・皆は・・・それが当然であるかのように、臙様に都合の良い時に、都合の良いやり方で縋る。

・・・臙姫が滅するのは、我慢ならなかった。

この島の者は、臙様が居るから、永遠に平穏だと思っている。

臙様が居るから、ではない。

臙様が守っているから・・・ひとりで孤独に耐えて守っているから・・・

誰にも恨みを言う事もなく、ただ、何も求めずにこの島を護っていらっしゃるから、島は生きているのだということを、皆は忘れてしまっている。

私は、それを少しばかり理解できていると思っていた。

その私が、朧様に溜息をもたらしてしまったのかと思うと・・・この白雨が屋根を貫いて、そのまま私の身体を射貫いてしまえば良いのにとさえ思えた。それくらい、痛かった。心も、身体も。

■朧雨 32

朧姫は、獣の男に言った。

「・・・雨は私の自由にならない。だから、早く行け」

優しい嘘だ、と思った。

彼女は雨を止めた。朧雨ではなく、激しく降る白雨を止めて・・・彼の持ち込んだ命を奪う道具を砂にかえてしまった。

確かに、彼女には天候の始まりと終わりを変更することはできないのかもしれない。けれども、島を護る巫女姫は、雨を止め、刃を塵にすることができる。

これが、この御方の力だ。こんなことができるのに、彼女はいつも波間を漂っているような表情を浮かべて、ただ静かに毎日を浪の音を数えて暮らしている。

でもそれはもう、いつもの・・・私のよく知る朧様であった。

しかし、いつもと少し違うようにも見えた。

その名前のように朧に笑う方は、遣る瀬無い気持ちの行き場を探しているように見える。

同じ様子であった。雨が降る前と同じであった。

それなのに、どこかが違う。

いいや、違うのは私の方なのだ。朧様は変わらない。私が傍にいても変わらない。だから、それが嬉しくて・・・誰にも左右されない彼女の傍に居たかった。

変わり者の私を普通に扱ってくれた。彼女の前では誰もがみな同じであった。

彼女は私の特別であったが、私は彼女の特別ではない。

死の間際だと思って何かを期待してしまった私の方が愚かなのだ。

でも、私の心の中に僅かに・・・疼痛が生まれた。

彼女が変わってしまったのではない。

私が変わってしまったのだと知った。

私の知らない賤しき山の民と言葉を交わす朧様に驚いた。

全てを知っていると思った私の愚かしさが、私を落胆させた。

朧様はこの島の神子様だ。

少し考えれば思い至るはずだ。

彼女が海の民だけしか知らないということはない。言葉を交わさないということはない。山の坊達の、獣のような能力は朧様のそれとは違っているから、巫女長を介してしか接触しないと思っていた。

・・・わかっていたはずなのに。

頭では、理解していた。そして、理解しきれていると思っていた。

直接、彼女と話をすることができる男がいるということが私を焦らせた。

私の知っている限りでは、ごく数人しか存在しない。

そのうちのひとりが、私の兄であった。

最近では、私が激しく咎めたので、朧様が御座す時には館に顔を出すこともない。

私は自分の命は捨てても良いと思ったのに、それでも朧様が心を動かしてくれれば良いのにと思っていた。命の煌めきを知って欲しいと願ったのに、命を使って試してしまった。

私の背後で、男は笑った。

暫くの間、驚愕していたようだったが、豪胆とも言える気質なのだろう。

そうでもなければ、こんな風に雨に混じって大それたことを口にするためにやって来る理由はない。

「俺の願いは叶うのか。朧姫。この女のために、神の力を使ってしまった神人よ。神霊の美坐から遠く離れてしまうかもしれないとは思わなかったのか」

「思わぬよ」

朧姫は薄く笑った。

彼女の綻びは、いつものそれと明らかに違っていた。

白い顔が緩み、花が咲くかのように艶やかにそれでいて清かに彼女は微笑む。

私は彼女の微笑に見入ってしまう。

濡れたような黒髪と大きな瞳が僅かに揺れる。華奢な首も手首も滑らかであった。手や足の甲まできめ細かい肌なので、薄暗い部屋の中でも・・・こうして白雨の中にあっても仄明るく光っている。

老若男女を問うことはなく、誰もが彼女の美しさに吸い込まれて行く。

ただ、それが・・・自分がいくら年齢を重ねても決して損なわれることも衰えることもない永遠に近い命から湧き上がる美しさなのだということについて考える者はほとんど居ない。

彼女は海に還れない。まだ、還れない。

「私は神ではない。元々人の子であったのだから。首を刎ねれば死ぬし、夜追いのように濁りを読むこともない。できないことの方が多いのだ」

「島姫よ」

男は言った。

「俺は言ったはずだ。夜追いを弔いたい、と。雨を止めることができるのであれば、その力をもう一度使ってはくれぬか」

「・・・なぜ、それほどまでにその者を海に戻したいと思うのか理由を言え」

彼は意外そうに返事をした。

「あなたが問うのですか。全てを見とおしている方が。・・・それとも、そこに居る傍巫女に聞かせてやりたいのですか。真実を」

隴様は黙って唇の端を少し曲げたままだった。それが、肯定を表していた。

■隴雨 33

「島姫にできないことができる者を愛おしんでくれ。

・・・山の者は皆、あなたを愛おしんでいる。哀れんでいる。そして、一緒に生きると決めている。海に還れないから仕方が無いとは思っていない」

彼は、愚かな願いを口にした。

言葉遣いや身振りから、それほど下卑た者ではないとはわかっていることであった。

隴様にとって、話をするのはこれが初めての相手ではないとわかったから。

私の知らない所で、知らない場所で・・・彼と隴様がどんな会話を交わし、私の知らない取り決めを幾度も交わしていたのかと思うと心が切れそうになる。

折れるのではない。

千切れそうになるのだ。両端から大きく引かれて裂ける。

しかし、その場所から折れて切断されるのであれば、どれほど平穏であっただろうか。

部分を残し引き裂かれるような・・・それは長引き疼く。

そんな痛みは他には存在しない。

こんな白雨が降り注ぐ日には、引き潮にあわせて浜に出ると、我恋貝が点在する。

誰かを思う者はそれに触れてはいけないとされている貝が打ち上げられる。

誰かを思う幻の貝ではない。

そして、それは特定の貝の種を指し示しているのではない。

浜に打ち上げられて上下の貝が割れてしまったものが、岸に打ち寄せられる時に対を失ってしまうから、そのように言うのだ。

元々一対であったものが抗えない浪の力によって二つに離かれてしまうからだ。

相手を恋しがるとはなく自分の半身を・・・欠けた自分そのものを失って哀しむから我恋貝と名前がついた。

白雨は美しいが恐ろしい。

激しい雨によって海の表面が濁り、潮流を読むことができなくなる。

生き物たちの動きや植物の実りを期待することはできない。

雨の予感があってから雨を迎えるのと、突然予告もなく空は明るいのに雨が降るのとでは全てが違う。

片割れが見つからないことや、失ってしまったことに対する痛みは計り知れないだろう。

けれども・・・自分の片割れの貝だと思っていたものが、そうではなかった時の不整合による痛みは、自分だけではなく相手にも苦痛を感じさせるのだと知った。

朧様の片割れの貝は、どこに在るのだろう。

私はそれを探すことを最初から放棄している。合わせ貝として生まれなかったのだと思っているから少しも哀しくない。

だから。

私は傲慢になっていた。

獣の皮を被った男よりも、私の方が朧様により近いと思った。

同質であるという意味ではない。

彼女のことを目の前の野卑な男よりも長い時間、全身全霊で彼女を見つめ続けてきたから。それは誰とも何とも比べられることができないと考えていた。

私の中の拠り所だった。

私が私を好きでいられる唯一の箇所であった。

朧様に対する尊崇の念は、私の中でどこまでも純粹だった。

この白雨のように銀色に輝き、そしてどこに降り注いでも決して色を変えることなく輝く奇蹟の雨であったのだ。

たとえ、それが我恋貝を呼ぶことになっても。

それが皆の暮らしを脅かす予知できない雨であったとしても。

この白雨に酔って、私は・・・自分が片貝であることを忘れて、双貝であると思ってしまった。

それが、朧様に哀しみをもたらしてしまった。

それなのに、彼女は私の目の前で、見せてはいけない奇蹟を起こしてしまったのだ。

奇蹟というには、偶然を伴っていなかった。

ただ、彼女が望んだから。

突然にやってきた。

男は言った。

「夜追いの女はあなたを慕っていた。一度も会話することはなかったのに。

夜を追うのはあなたのためだと思っていた。そしてこんな自分でも役に立てると言った。・・・
使い捨てにするな。夜を追う者は、夜が怖くて不眠になる。眠ったら、そのまま死ぬかもしれないと思うからだ。朝を迎えられないと思うから、夜、眠れなくなる。昼に眠り、夜はただ夜が明けるのを待つ。・・・生きていたいと思う性を越えた者は、どれほど賤しくても心は賤しくないのだとあなたが認めなかったら・・・報われない」

「その報いのために、海に流したいのか」

彼女の答えに、彼は苦笑いした。わかっているのになぜ尋ねるのか、と批判するような顔つきであった。

■ 隴雨 34

顔の殆どが覆われているので、気配でしか判断することができない。

けれども、唇の造作や顎の締まった線などから、彼が年老いた者ではなく、まだ相当に若い者なのだということがわかる。

皮膚の張り、声の調子、動作の機敏さ・・・どれに着目しても彼が私とそれほど変わらない年齢であるのだということは明白であった。

「隴様の責任ではない」

私は絞り出すようにそう言った。

かっとなっていた。

こんなに打ちひしがれていたとしても、彼女を貶めるような言葉には反応してしまう。

「忌み子は死ぬしかない。けれども、おまえ達が山で生きることをお許しくださったのは隴様だ」

「神姫の赦しがなければ生きていけない命を、なぜ困うのか」

「違う」

私は切迫した声を出してしまう。

傍巫女は常に冷静で平穩でなければいけないと思っていた。

そしてそう教えられていたし、そのようにするべきだと理解している。

勿論、それは隴様の傍に居る者すべてに求められていた。

しかし、私にはそれは必要最低限でしかない。

隴様を守ることが最優先事項であるのに、心の平穩や平靜を求められることが神姫に使える巫女の資質だと言われると・・・ただただ苦笑いを浮かべたくなる。

目的と手段が逆転してしまっている。

そう思えるからだ。

何より、隴様の前で彼女の存在に疑問を投げかけるような存在が、この島には兄以外にも居るのだということを知って・・・私の心中は複雑であった。

困惑しているのか、腹立たしいのかわからない。

ただ、わかることは・・・私の中で、そのことは決して歓迎しているということではないということだ。

そして、それを臙様は容認している。

私は、私なりに理由を持とうとしていた。

彼女は、命を奪うことを日常としていない。私達に見えないモノについてどうやって扱っているのか彼女の口から語られることはない。

この世には正義は存在しないと思っているから。

悪の側から見れば善は悪であるから。

臙様はわかっているらしい。御自身の行っていることがまったく良いことであるのだとは言い切れないことを。

「生きることを許可した者だけが生きる場所ではない。私達が勝手に自分の都合で生命を決めているからだ。それがわからぬから愚か者だと言うのだ」

私は負けずに彼に口答えした。

臙様を不愉快にするだけで結論のでない問答を繰り返すことほど無駄なものはない。ただ、自分達の憤りをぶつきたいだけだ。確信がなく、証拠もない事柄を臙様に答えて欲しいと思っているのであれば・・・それは、違っていることだと思っていた。

「・・・神姫に側仕えして、神になったつもりか？」

彼は私に冷たくそう言った。私はかっと頬が熱くなった。起き上がり、彼の目の間に立つ。

・・・肩幅は私より広い。私より背が高い。そして目付きは鋭かった。

山の民特有の匂いがする。

被り物をしていてもわかるほど・・・彼は整った顔をしている。この島の者には珍しい顔立ちだ。美醜については疎い私であったけれども、兄に群がる女達を見てきたために、自然に身構えてしまう。

つまり、私が身構える男は大抵が私の気に入らない相手であるということだ。

「私はそこまで自惚れるほど大事にしたいものがない。・・・臙様以外」

「そうか」

彼は嗤う。若いのに、頭の切れる男だと思った。私の兄を思い起こさせる。

だから嫌悪感を持つ。

彼が山の民であってもそうでなかったとしても、ここではないどこかで出会っていたのだとしたら、私は彼には近寄らなかつたらう。

すべて、あり得ない話であったが。

精一杯の強がりであった。彼が、砂にされた刃しか持っていないということはありません。獣を狩る者たちは、常に予備を持つ。薬の予備、刀の予備・・・様々に用意する。次にいつ手に入る

からわからないからだ。だから、彼らは自分の身にそれを置くと言う。

・・・命の予備はないから。

「俺にもそういう存在があった。・・・すべて過去になってしまうが」
私は黙った。私には経験することないのだろう。自分の命が灰になってしまうかもしれない、この白雨が最後の雨になるかもしれないと思いながらも、願ってはいけないことを口にする日は・・・やって来ない。

隴様に私が願うことはないからだ。願うとしたら、ただひとつだ。

彼女に、生きていて欲しいと思う。

本当の意味で。ただ生き存えているのではなく、心を持って生きて欲しかった。

■隴雨 35

「館の裏から出る。いつものように」
隴様が私と男の会話に割って入ってきた。
私は、その言葉を聞いて胸が苦しくなった。

いつものように。いつものように・・・。

彼女の言葉の隅々まで私の心に響き渡る。
けれども、同時に、私の心の小さな襞にまで突き刺さる。
私の知らない時間があったのだ。
私の知らない間に。
私の知らないところで。

だから、私はそこで気がついた。ようやく、気がついた。
いいや、違う。
認めたくなかっただけであった。
最初から、わかっていた。
隴様に低頭しない男が慣れた様子で館に上がり込んでいることも。
人気のない頃合いを見はからってやって来たのは、偶然ではない。
いつ、どんな時にこの館が手薄になるのか知っているからだ。

隴様が許可しなければ、張り巡らした白砂は黒く汚れる。
それは魔除けでもあるが不審者が入り込まないための策でもあった。

口惜しいことではあったが、この館には、在らざるモノだけが酔ってやって来るわけではないのだ。

だから、認めざるを得なかった。

部外者で、思いもよらない来訪者は自分の方であったのだ。

朧様と男だけであったのなら、朧様はうまく切り抜けたのかもしれない。

しかし、私が居たから・・・私が、彼女の妨げになっていたのだ。

愕然としている私の傍らで、彼は跪いた。

床の上で座っている私の背後で気配が動く。

退室するときだけは礼を取ったのだろう。

彼の目的は満たされなかったけれども。

・・・天から降り注ぐ雨の音が少しずつ柔らかく静かになってきた。

間もなく、雨が止まる。

降り終わるのではない。

中断するだけだ。

これは予兆でしかない。

男の持ち込んだ情報が正しければ、この後、海が濁るほどの長雨が続く。

雨が降るといふだけの予言を視るだけで命を捧げる者が、この島には存在するのだ。

彼は、それを主張したかったのだろうか。

朧様にわかって欲しかったのだろうか。

しかし、彼女が知らないということはない。

彼女は、この島の何よりも誰よりも長く生きている。

「・・・道すがら、裏の白花を持っていけ」

「・・・朧様・・・！」

私は声を上げた。悲鳴に近かった。

その声で、誰か他の傍巫女がやって来てしまうかもしれないと思うことすらできなかった。

裏の白花と言ったら、それはひとつしかない。

七年に一度しか咲かない白い花のことを言っている。

七年に一度しか咲かない。そして、私は花の名前はわからない。

けれども、それが満開になった時に摘み取り、萼を煎じると万病に効くと言われている。

朧様の煎じ薬の中でも、特に貴重な品のひとつであった。

なぜなら。

隣接する場所に同種の蕾があると、それらは半開きで墜ちてしまうからだ。

だから、開花の時期が近付くと、一つを残して全部を裁ち落としてしまう。

残酷なことだとはわかっている。でも、そのたったひとつで多くの者が救われる。

朧様は自ら、それを切り落とす。本当は、花々の悲鳴すら聞こえているのかもしれない。でも、彼女は何も言わない。

哀しそうな顔をするでもない。

彼女がその時にどんな表情を浮かべているのかは、誰も知らない。

皆が知らない間に切り落としてしまう。

朝の清掃の時に、蕾が墜ちて散乱している様を見て、他の者たちは、この時期がやって来たのだと知るのだ。

命はひとつしかないから、己で絶ってはいけないと言う朧様は・・・多くの命を救うために、この時だけは多くの命を散らすのだ。それがどれほど苦しいことなのか、私には計り知れないが、彼女はきっととても苦しいのだろうと思った。

■朧雨 36

「それはいけません」

あの白花一輪で、どれほど多くの者が救われることだろう。

そして、この先、七回年が巡らないと、もう一度手に入れることはできないのだ。

あの一輪で、七年を保たせる。

それがどれほどのことなのか、私は知っている。

最初のうちは良い。

ふんだんに使えるから。

摘み取ったばかりだからと、皆の気持ちに余裕がある。

いつでも使えると思うからそれほど多くの需要もないから当然に供給も生じない。

けれども。

次の七巡りの年までは生きていられないだろうと思うような重篤な病を得てしまった者や・・・神秘の奇蹟を望まなければいられない者が後を絶たなくなってくるのだ。

去年がそうであった。

流行病で多くの者が死んだ。

朧様は煎じ薬を更に細かく小さくして皆に分け与えたけれども、等しく同じ効果が現れるとは限らなかった。衰弱している者や、体力がないこどもや老者はかなりの数が死んだ。

こんな小さな島にも、流行病というのは存在する。

病源を持ち込まれることは殆どないが、ごく稀に訪れる外から運び込まれた人であったり物質であったり・・・とにかくそれらが作用して、この島に小さな罅を入れるのだ。それは小さくても、すぐに大きな割れ目になる。

だから、私は慌てて言った。

朧様が考えを改めるように・・・私はすぐさま反論した。

「お手元に煎じ薬がないと皆が荒れます。海の濁り以前に・・・この島の中が荒れてしまいます」

その薬がなければ朧姫は存在意義がないというわけではない。

そうではない。

彼女は他の手段でたくさんの奇蹟を起こすことができる。

朧様はそう思っていなかったとしても、私や島人には奇蹟に見える。

皆が畏れているのは、その煎じ薬がなくなることではない。

その白花は象徴でしかない。

定期的に開花し、朧様は変わらないお姿で変わらない手順で、変わりなく一輪を生かすために他の花を殺す。

それが続いているとわかるから、皆は安堵するのだ。

いつもの通りであること。変化しないことが求められている。それは、例えば、兄のような者にとっては堪え難い苦痛なのだろうと思われた。

「死んだ者は生き返りません。朧様が常々仰っていることではありませんか」

私はつい、責め立てるような口調になってしまう。

語気が強くなってしまふのを抑えられなかった。

そんな私の言葉に、彼女は静かにこれまでと変わらずに言った。

「生き返らせるつもりはない」

朧様は鷹揚に答えた。私は危うい、と思った。

生き返らせるつもりはない、ということは、生き返らせようと思えばできるということなのだ。

朧様が迂闊にそのようなことを口にするとは考えられない。何かお考えがあるのだと思おうとした。

けれども、目の前の山の男が何か勘ぐらなければ良いのにと思う方が先であった。

私は、彼の貌を仰ぎ見る。

けれども、相も変わらず彼の貌は獣の皮の下にあった。

彼らは、山に降りてくる時だけ、獣の被り物をする。

だから斑に日焼けすることはなかったが、彼の浅黒い肌は海の男の日焼けとは違う性質のもの

であった。

潮に灼かれないので、その肌は水気を失わず若々しいままであった。

彼らの肌はきめ細かい。

朧様の肌と比べることはできないけれど。

それは、山で採れる樹脂を肌に塗っているからだ。

獣に気配を悟られずに仕留めるために、人の気配を消す。

それが白雨を弾いていた。

彼は異質だと感じる。

そんな些細なところからでも大きな違いがあった。

獣の匂いに慣れてしまったのだろうか。私の鼻腔には、何とも言えない華やぎを持った匂いが入り込んでくる。・・・私はそれを知っていた。朧様の髪に使う香油と同質の匂いであった。

毎日、毎日。

御子神様の髪に触れていた。小さな容器に含まれる香油がいつも切れる頃には補充されている不思議を、私は朧様の奇蹟だと思っていた。でも違うのだ。山の民が、捧げ物をしているのだ。私は言葉を失った。

捧げ物をするということは、何か、願い事をするということだ。朧姫は、一体、彼らの何を・・・どんな声を聞いたのだろうか。

■朧雨 37

朧様は、そこで目を細めて、天井を見上げた。

・・・雨が、間もなく小降りになるのだ。その瞬間が迫っている。

勢いよく音を立てて降り落ちていた雨の勢いは徐々に鎮まっていた。

白雨は突然に降り出すと止むときも時間をかけることはない。

あっという間に去ってしまう。

その後に晴れ間が広がるのが常であったが、今回はきっと曇天のまま夜を迎えることになるのだろう。

長雨が続くと、気温が上がらないので育てている食物も育たない。獣も姿を現さない。最悪なのは、海に出られないことだ。雨だけであれば普段通りの生活であろうが、濁るとなれば海に出られない。

私がすべきことは、こんな風にして彼を睨み上げることではない。朧様の指示に従って、対策を講じるように邑長に伝言しなければならない。

そして朧様は私に向かって言った。

「場所を教えてやれ」

私は最初、何を言われたのかわからなかった。

けれども、朧様が私の返事を待ってそのまま私を見ていたので・・・それが空耳ではないことを知った。

私は絶句して、次に唇を震わせた。

失望したわけではなかったが、私にあの男を外に出す手引きをしろと命令した朧様の意図がわからなかった。

私の知らない朧様がいらっしゃる。

少なくともこの空間の中では、私だけが、知らない。

朧様は知っているのだ。私が嫌だと言って彼女の命令に従わないことはないのだということ。確かに私は彼女に逆らうことはない。なぜなら、彼女の願いを聞き届けることが私の役割だから。役割だから・・・いいえ、そうではない。彼女の声を聞くことが私の喜びであり、生きている証であったからだ。

しかし、私はこの時、彼女に聞き返した。反論したいのではないけれども、聞き返した。私は、朧様に。聞き返した。

「朧様は、島の者より、骸を大事にするのですか」

「骸と言うな！」

彼が押し殺した声で、私に言った。脅すような声ではなく悲鳴に近い声であった。それでも、荒げる声でなかったのは彼の最後の理性であったのだろうか。

「彼女のことを抜殻と言うな」

「それほどまでに惜しい夜追いであれば、なぜ逃げなかった」

私は負けずに言った。ここで縊り殺されても良いと思っていた。

私は、朧様の傍巫女になって幾つか知ったことがあった。

この島には、やって来る者は殆ど居ないが、出て行く者はもっと低い頻度で存在する。

大抵が、ここで生きていけないと思いつつもそれでも生きていたいと思った者ばかりで、それはひとりではないことが多かった。

許されない間柄の者たち、とか。

生まれてはいけない命を宿した者、とか。

とにかく、某かの理由でこの島で生きていくことができないと感じた者たちは、人目を忍んで沖に出る。

深夜の・・・誰も海に出ない時間を見はからって。

でも、その先はどうなったのかは誰も知らない。

彼らが、海の床に沈んでしまったのか、出て行きたいと願った先に行き着いたのかは、誰も知ら

ない。

誰も戻って来ないからだ。

この島には禁忌とされていることが幾つかあるが、それを行ったら死ぬというわけではない。この島に戻れないだけだ。でも。人は死ぬ時には生まれた場所を思い出す。あの場所に戻りたいと願う。

だから、夜追いの者は・・・元々は海の民であったのだろうと思われた。

海に還りたいと強烈に思ったのだろう。そして、男はその願いを叶えるためにここにやって来た。

言葉を伝えるために志願したのかもしれない。海姫様に言葉を伝えるだけの役割であったはずなのに。それ以上のことを求めた。

それを咎めても良いはずであるのに、隴様はそうしない。

言っても詮無きことである。

もう、夜追いは戻らない。夜を追ったまま、魂は遠くに行ってしまった。そういう者の魂は呼び寄せても戻らない。だからこそ、皆は海に還りたがるのだ。

戻れなくなる前に、戻ろうとするのだ。

彼は私の言葉に低く呻いた。

「誰も愛さない貴女にはわからないだろう」

「おい」

私はそれを聞いて、ぶつりと何かが切れる音を聞いた。所作がどうか、相手に対して危険を感じるとかいうことはすっかり忘れ果てた。

私は勢いよく立ち上がると、男の目の前に立った。足元が乱れていたが、そんなことは気にならなかった。

「・・・お前は心まで賤しいのか。隴様に求めるな。それを、求めるな」

■隴雨 38

私は憤っていた。憤慨で身体を震わせる。

誰に、何に・・・憤っているのか。それは瞭然であった。

自分自身に、だ。

彼女に、誰も愛していないのだと言うのは簡単だ。責めるのも簡単だ。でも、何をもって責めるのだろうか。

・・・彼女は姫御子だ。

彼女が、たったひとりだけを特別扱いするというようなことはない。

長い年月の間に、そのようなこともあったのかもしれない。

けれども、私は知らない。

私の知っている朧様は、誰にでも優しく、誰にでも冷たかった。

それが朧姫であった。

それだからこそ、海の神の巫女姫であった。

これほど多くの言葉で彼女を飾っても、彼女はたったひとりである。

私が見ている朧様と、彼が見ている朧姫は違うのだろうということも理解できている。

けれども。

あのひとひらの花瓣を得るために、どれほど皆が丹精込めて樹木に水を遣り、成長を楽しみにしているのか朧様は知っているはずなのだ。

それなのに、死んだ者に手向けるために、それを折れと言う。

そして、その手伝いを私にしろと仰る。

私は、自分がその命令に従わないことはないだろうと思った。

自分のことであつたけれども、私は抗わないだろうと確信している。

そういう時には私は私のことを、別の者のように思えてくる。

そんな風に、朧様のことを思う自分は自分自身では内のだと思っていたかつたのかもしれない。

傍巫女には暗黙知を求められる。その一つが、朧姫に理を問い質してはいけないということであつた。彼女は神ではない。神と人の間に立つ方だ。

その方は、神の側と人の側と両方を見ることが出来る。けれども、こちらを見てくださいと強制的に求めることはしてはいけないとされていた。

けれども。

私は、彼女に。聞いてしまうのだ。

「なぜ」「どうして」と尋ねてはいけないことになっている。

けれども、彼女に対して私はいつも問いかけをしていた。

どうしてこの館には白い花しか咲かないのか、とか。

海に還りたいと思うのはどうしてなのか、とか。

悟りを持った者でなければ、答えていただいても理解することが難しいと思われる問いばかりを朧様にしていた。

彼女は面倒がらずに、ひとつひとつ教えてくれた。

そしてそれが絶対の答えではないということも、教えてくださった。

「その時の最善が永遠に最上であるとは限らない」

彼女はよくそう言った。

長い時間を生きているからこそ言える言葉だった。

だから、彼女に対して聞いてはいけないことが存在する。

それは「誰を最も愛しているのか」と優劣をつけさせるような問いをすることだ。

問うた瞬間に滅されるような禁忌ではなかったが、それでも彼女に対して一番とか最上を求めたり位置づけたりするのは愚かしい人間の行うことであるとされていたし、実際に、私もその通りだと思っていた。

「おい、傍巫女。お前やお前達がその人を追いつめていると・・・少しも疑問に思わないのか」彼の問いが今度は私に向けられたので、私はかなり不機嫌な顔をして男を見つめる。出で立ちを見なくても、山の者であることは頷けた。

島の者は、こんな風に朧姫を粗雑に扱うことはしない。

彼女はどんな時でも崇敬の対象であったから。

彼女に愛されたいと願うことは恐れ多いことであつたし、愛されたいと願ってしまえば・・・その者の行く先というのは、決して開けた海などではないことはわかっていたから。

禁を犯してまで、彼女に触れる者は居ない。

しかし、時折、ふと思うのだ。

禁忌は誰が作ったのだろうか。なぜ、作られたのだろうか、と。

同じ事を・・・朧様に私が質問したようなことを、男は私に質問し、私はそれに答える事が出来ない。

■朧雨 39

彼は落ち着きを取り戻したようで、少し笑みを浮かべていた。

緊張のある日々を送っているのだろうと思われた。誰か人がやって来たらどうしようという焦燥を感じさせなかった。緊迫した空気を読む生活を送る山の坊は、背筋を正した。

「女。案内しろ」

居丈高な物言いに、私はむっとした。

抗議というには稚拙な私の文句を無視していたからだ。

私は彼を睨む。

脅えた顔を見せてしまったら、終わりだ。

彼を恐ろしいと思ったら、そこで上下関係ができてしまう。

居竦むことは相手に命を差し出すことと同じだ。

望んでもいないのに。

望まないのに、命を奪われるのだ。

わかっているのに。

そこから、動けなくなってしまう。

私の不満そうな顔を見て、彼はまた低く嗤う。

雨が遠くなっていくにつれて、彼は何を思い定めていたことを思い出してきたらしい。

それとも・・・私の様子を楽しんでいたのだろうか。そうだとしたら、私は朧様の見えないところで何をするのかわからなかった。私は、朧様ではない。巫女として日々を過ごしているが、神の声を聞いているわけではない。ただ、神の声を聞く人のお世話をする者で、巫女の傍に仕える者だから傍巫女と言われるだけである。

それを、何を勘違いしたのか・・・巫女の力を得たのだと錯覚した兄が、私に潮目を読めと言ってきたので諍いになったのはつい最近のことであった。

男は信用ならない、と強く感じていた。特に、朧様に近付きたい者は私に近付こうとする。その他の傍巫女達にも。

けれども、それすら朧様は知っている。巫女達はそれを知っているから、何もかもを秘匿する。

「ひとりで生きていくことが強いというわけではない。己以外の誰かを愛するのは・・・弱いからではない。おまえは、それがわからぬのか」

朧様のような言い方をする、と思った。

けれども、彼と彼女の会話の中で、私が部外者であることを認めるのはどうにも遣る瀬無かった。

他の者との会話では、私はこんな風には思わない。

「それはおまえが自分に都合の良い理由をこしらえているだけだろう」

私は極力、抑揚なく言った。

彼に対して心を乱されることはない。

現在の状況と反することかもしれないが、私は虚勢を見せることでしか抗えない。

つまり、乱されていることを認めていながらも、私はそれを隠そうとしているのだ。

・・・この雨のように。

明るいののに、雨が降る。

雨が降るのに、空は明るい。

同時に存在することはできない存在が、洗い流していく。その狭間の、見えていなかった問いと。

彼は私の言葉に、ふと、嗤った。

「おまえ、面白いな。・・・傍巫女を追われると脅えないのか」

「山の賤しき者に私の一生を決める事は出来ない」

「貴賤では測れない・・・わかっているだろう」

私はそれでぐっと言葉に詰まってしまう。

この島には、貴賤は存在しないことになっている。でも、それは建前だ。

同じ世界で生きているのであれば、人には役割が必要で・・・そして我々は、日々を生きているだけではない。

命は、雨のようにただ降り落ちるだけではないのだ。

白雨のように・・・矛盾を孕み、そして問い続ける。

この白雨が終わったら、どうなるのか、と。

この白雨が終わらなかつたら、どうなるのだろうか、と。

「魂や生き様は人それぞれだが、各々納得するとは限らない。だからこそ、おまえはここにいるのだろう。山の民」

「なるほど」

彼はそう言って嗤った。

けれども、その時に、ふと、朧様に向かって顔を傾けた。引き締まった顎に、喉の線が締まっていて、彼がまだ若いことを表している。

しかし。若いからこそその愚言であったのだとしたら。

山の民には、こちらの居住空間というのはとても・・・とても愚かしい世界なのだろうと思われた。

「この傍巫女を案内係にしても良いのだな。・・・もう行くが、この女を貰い受けても良いだろうか」

私は絶句した。

まるで想像できなかった言葉に、声を漏らす。

「彼女が望むのなら」

そこで、朧姫は声を発したが、それはとても・・・興味深そうな声であった。

私は、涙が出そうになる。

彼女が思いを入れることは、ほとんどなかった。

その男だけに対して違う行動を取っているとは思わなかったが、それでも私に対する態度と違っていた。

私は、驕っていたのだ。

すべてを知っていると。

彼女の、何もかもを理解していると・・・

自分は、特別であると過信していた。

それを覆されて、私は焦っている。

それを男に見透かされて、私は憤りという名前に変換しているだけなのだ。

私が思うほどに、彼女は私を必要としていない。

それはわかっている。わかりきっていることである。

でも、それを声にされて、それを耳にして。

私は・・・そうですか、と朗らかに微笑むことができなかった。

切り捨てられたとは思わない。朧様は、傍巫女については、自分の支配を永遠にすることを望まない。

・・・他に愛する者があった時には、その職を辞することができる。

永遠に彼女やこの社に縛られることを望まない。

去りたくなったら去れば良い。

訪れたくなったら訪れれば良い。

彼女はそう思っているようであった。

周囲が定めた規範の方が、厳しかった。

けれども、彼女はそれについて厳しすぎると文句を言ったことはない。

いつの時にも・・・彼女は定めを提示することはなかった。

彼女が神でありながら、神ではないと思う理由はここにあった。

神は人の生に時折干渉しようとするが、朧様はまったくそういったことには干渉しようとし
ない。

人でありながら神であり、神でありながら人であるから・・・そういう行動しか選択できないの
かもしれない。

そう思っていた。

私は、私が思うほどに隴様が私の存在を求めているのに、わかっているのに・・・失望した。

わかっているのだ。

詮無きことであることも。

自分の中の、煩悶は隴様には関与しないし、影響されない。わかっているのに・・・私はそこに餓えていたのだ。

しかし、ここまでは何も憤りを感じることはなかった。

隴様に見返りを求めたら、私は私でなくなるから。

だから、彼女の思う私への必要の度合いと私のそれが違っていても・・・それは同じでなかったからなお良かったと思う程度であった。

でも。

それをこの男が見透かした。それが腹立たしい。

賤しい事は考えていない。

卑しきことであるとされるようなことは考えないし、願わない。

でも。

私の闇の始まりは、誰も知らない。誰にも知られてはいけない。

清らかな生活だけで生涯を送れるとは思わない。

時には憤ったり妬んだり・・・人は、そんなことを捨てられないからこそ人なのだ。

だから隴様には人であって欲しかった。人の持つ負の感情を忘れて欲しくなかった。

それがあってこそ、希望があるから。

光と闇は一体だった。

海が荒れるのは、海が静かな刻を知っているからで、海の静寂を保つ為に、海がもたらした嵐は必要なのだと思った。

光があるから、闇があるのだ。

荒れる海があるから、静かな海が存在する。

けれども。

隴様は、ふっと小さく嗤った。

そして、私が凝視しているのを承知の上で・・・彼女は、私の望む言葉を言った。それは、私に対して媚びているのではなくて・・・ただ、彼女が思ったことを行っただけなのだと思われた。

そう思いたかったのかも知れないが。

「しかし、その傍巫女を失うと私の生活が狂うので・・・まだ、手放せない」

ああ。

私は。今、ここで弊えても良いと、この瞬間に思った。そう、思った。

```
#next_pages_container { width: 5px; hight: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

■朧雨 41

人が生きようと思う理由は、様々である。

子のためとか。

夫や妻のため、家族のため・・・とか。

私は、朧様のために生きるのだと思ったが、そうではなかった。

皆、誰かのためや何かのために生きる理由を付しているだけであるが、それはすべて自分自身のためであるのだ。

人は何と愚かしいのだろうと思う。

しかし、私もその愚かな人の子なのだ。

獣の方が余程・・・隠し事をしないで自分の生命を維持するために生きている様を曝け出していると思う。

私が朧様を必要としているのに。

朧様は、私を必要だと言ってくれた。

彼女にたったひとは存在しない。

皆の姫様で、皆の希望で・・・皆に等しく愛を捧げるたったひとりの人は、永遠に孤独であることや静寂の面を被ることについて何も不平を口にしない。

元は人であった方であるから、彼女にも生きる理由があり、彼女も生きたいと願ったこともあったであろう。

でも。

今、私の気持ちを汲み取って・・・朧様は私に慈愛の雨を降らせた。

白雨の様に。

白い、銀に暁る雨を私に降らせる。神の涙のような雨を浴びる。そして、濡れた場所から私の強ばった心が解けていく。

朧様は、それを承知の上で・・・私にも雨を降らせるのだ。

「・・・使い方はその者から聞け」

朧様はそう言った。そして、私に言う。

「海が濁るといっているのであればそれなりに対策を講じなければならない。これから人を呼ぶ」
私は黙り込んだ。

隴様がこれから人を集めるので、気付かれない間に館を出て行けと言っているのだ。

私とその片棒を担ぐことを、彼女は良いことだと思っははいない。正しいことであるのならば、
彼女は正門から彼を帰すだろう。

私はもう、何も言う事が出来なくなってしまった。

でも、ただ一言だけ・・・言った。

絞り出すような声であったが、決して捻出した言葉ではない。

今、言わなければいけないと思った。

何かに衝き動かされるようにして、私はそつと言う。

白雨のせいだろうか。

あの銀箭が私を狂わせるのだろうか。

いいや。

違う。

狂っているのではない。

私の曇った眼を隴様が洗い清めてくださったのだ。

そう思った。

自分の為に生きろと彼女は言う。

私は、隴様のために死にたいと思う。

けれども、その狭間にある隴様の問いかけに、私は考えたことはなかったのだ。

隴様のために、生きるという本当の意味を。

自分のために、生きるということの重さを。

そして、私のために・・・彼女は、これまでの彼女のやり方を曲げたのだ。

誰かに対して必要だと言ったことはない。

彼女は、誰かに対して・・・困ると言ったことはない。

それが綻びと呼ぶような類の変化であったとしても。

私は、私の中でうねりに変わる喜びを隠すことができなかった。

だから、そのまま浮かれた気分で居ることがないように・・・戒めのつもりで、自分自身に対し
て言うかのように、隴様に言った。

「隴様が良いと言うのであれば、私はそれに従います。でも、私が選んだのです。どうか、それ
を忘れないでください。命じられたからという理由を言い訳にしたくないのです。隴様・・・
私は・・・私達は雨を止めることも降らせることもできない。でも、代わりに、人は・・・愚か
だけれども、白雨を浴びたり、白雨を畏れたりするけれども・・・それでも、人には生きる意味

と理由と必要を知りたいと思うからこそ、そうするのです」
この男の愚かしい願いも。私の卑しき願いも。
みな、この白雨に濡れて明らかになり、そして洗い流されていく。
そうして流れた願いを・・・海巫女が拾い上げる。
それでは、朧様の願いはどこに行き着くのだろう。

■朧雨 42

私の言葉に、彼女は微笑んだ。
一瞬だけ。

・・・あの白い花のように、ふわりと淡く儂く笑う。

ああ、彼女は本当に美しい。
そう思った。
顔貌ではない。
彼女の透き通るような魂が見え隠れするから。
特に、微笑んだ時に。

いつも笑っていて欲しい。

それが私の生きる理由というより、生きる糧なのだ。
そうだ。
誰しも、生きる理由を知りたいと思うが、私は生きる糧を得たい。
生きるために厳しい巫女の生活を選んだ。
それを選ばなくても、生きていられたけれども私は巫女姫の傍に居たかった。
ただ、それだけで良かったのだ。

「持って行け。それは、報酬だ。
おまえは島の危機を伝えに来た。
それを言わないということもできたのに。
・・・恨みも辛みもすべて流した夜追いの最期の言葉、確かに聞いたぞ」
柔らかい朧様の声が響いた。
彼女の言葉の最後が気になった。
しかし、時間が無かった。
これ以上、この場所に男を置いておくわけにはいかない。
元々、ここは男子禁制の床部屋である。

隴様が外部の者と公式に謁見する場所は、本当はもっと違う場所で行われる。
だからこそ、私は油断してしまっていたのだが。

「隴様」

私はまた声を出した。

人の気配を遠くで感じたからだ。

雨が間もなく上がる。

浪が雨に影響されて、潮が読めないのだろう。

遠見の者すら見えない潮の流れを隴様だけが知ることができる。

だから邑長が人を寄越して、隴様に意見を求めてきたのだと思った。

空気が動く。

慌ただしく人の声や気配がどっと勢いを増して押し寄せてきた。

私でも感じられた。特殊な能力は私には・・・ないと思う。

けれども、隴様の様子から、気配を察知する。

彼女が僅かに綺麗な眉を動かしたから。

完璧な曲線を持った右肩を少しだけ持ち上げたから。

その僅かな仕草で、私は様々なことを知る。

「おい」

私は声をかけた。

不本意であるが、この獣の皮を被った男を逃がしてやらなければならない。

男子禁制の場所に男子が入れば、それは咎めを受けることになる。

浄化するために何をするのかと言え、焼くのだ。

山の民であれば、山ごと焼くこともあるだろう。

賤しき者と蔑まされている者たちは、しばしば、隴様の知らないところで焼かれることもあった
ようだ。

理由は単純であった。

思うように魚が捕れなかった時や、流行病が起こった時など、禍は山からやってくるという考え
がそうさせるのだ。

そのことに対して隴様が憤りを含めて訴えても、誰も戻って来ない。

自分の捨てた子が居るかもしれないのに。

人は、不浄だと言って山の坊を焼く。

まるで、捕った魚を調理するかのよう。ここ最近ではそんなこともなかったが、それでも過去の
歴史を聞く度に・・・人は獣と同じで、共食いするのだと思った。

生きるために。生き抜くためにやむを得ないことであると理由を作るのだ。

人は、そういうものだ。私も、そうである。私が他の誰もと違うのだという理由を、探したいだけなのだ。そう思うと、ただ、胸が苦しくなるばかりであった。

朧様が望まないことは、私も望まない。

だから、この男を生かしてやる。

男子の立ち入りを禁止している場所に山の坊を入れているとなれば、朧様への疑惑が持ち上がることは間違いない。それでなくても・・・私の兄は、朧様への絶対的な信頼を疑うような言動を繰り返しており、困ったことに彼に賛同する若衆が少なくとも複数人は存在するのだ。焼かれるべきは、彼らであるのだろうかもしれないが、そうはいかなかった。

■朧雨 43

朧様をひとり残すことに懸念はあったが、今はそうは言ってもらえない。

彼女はいざとなったら身を守ることができるが、こちらは・・・この男と一緒に居るところを誰かに見られてしまえば、私の言い訳などは通用しないとわかっていた。

私には、何もかもを曝け出す傍巫女の仲間はいないから。

私の兄のことで、皆が私を敬遠する。

朧様の存在に疑問を投げかけるものの、彼は確実に・・・島の中で力を得ていった。

今は、あまり顔を合わせることもないが、それはどれほどの影響力であるのか考えるだけでも憂鬱であった。

傍巫女になってしまえば、親きょうだいとの関わりは疎遠になる。

けれども、狭い島のことであるから、彼の所業は耳に入っていた。

幼い時には、片時も離れることのないほどに一緒に居た間柄であるのに。

いつから、どこから・・・それは変わってしまったのだろうか。

幼い時に、この社に呼ばれて。

朧様に、初めて近く寄った。

その時から。

私達は、そこから変わってしまった。

どちらも、朧姫に魅せられて・・・そして変わってしまった。

それまでは、兄の考えていることがわかった。

でも、それ以降は、わからなくなってしまった。

どこでどう別れてしまったのか、それすら思い出せない。

私は、ぎゅっと拳を作って、それでも力をこめて獣の男に言った。
彼を助けるのではない。

朧様に対する、謂れのない言いがかりを避けるためだ。

「こちらへ」

男はすっと息を吸い、そして朧姫に今一度、視線を向けた。

「島の巫女神よ。あなたは、そこまでして、人に何を求めるのか」

彼女はそれに応えた。

うっすらと微笑みを浮かべながら。

「人に求めるのではない。己に求めているだけだ」

「そうか」

それを聞くと、彼は深く頷いた。

そして、右腕を折り、軽く会釈した。

彼の利き腕であった。

利き腕を曲げるということは、相手への信頼の情や尊敬の念を表す。

どんな時でも、彼らは狩る時の利き腕を他の用途で使うことはない。

ただ唯一・・・例外がある。

彼らの尊崇する人物へ相対する時には・・・狩るのではない目的で腕を曲げ、そして頭を垂れるのだと言う。

私は、それを初めて見た。

・・・それほど、その夜追いは愛されていたのだろうか。

彼の生を捧げるほどに。

その者の生は、尊ぶほどであったのだろうか。

朧様に向かってあれほどの言葉を並べて、そのまま何もないうままで居られるとは思っていなかっただろう。

それなのに、彼はそれを実行した。

「聖なる海の姫神よ。・・・あなたに、死が訪れることを」

私は目を開き、瞠った。

それが、山の者の最高の讃辞であったとしても。

朧姫に死が訪れることを願い、声に出す者が居るとは。

この場合には、「最高であり最善の生であらんことを」と言うのは習わしだ。

けれども、彼は死を願った。

雨の下で、そのような事を言う。
私は咎め立てしようと思って口を開いた。

・・・声を出せなかった。

彼女が、死を願っているのだとしたら。
生きていることを倦んでいるのだとしたら。
私は、そのことについて語ったことはなかった。
朧姫は、死にたいのか。
それとも。
朧姫は、生きたいのか。
それすら、私は考えて居なかったのだから。

■朧雨 44

私はその時に、その言葉の意味を聞くことはできなかった。
ただ、この者を早く遠ざけなければいけない、と思っていた。

でも、同時にわかっていたことがあった。

きっと、後になって悔やむのだろうと思った。
この男を生かしたまま、逃がしてやることはないと思っていたし、今でもそう思っている。
死への罪悪感も嫌悪感もなかった。
傍巫女であるから、生き物の生死に関わることは少ないと思われているが実際はそうではない。
・・・巫女であれば、普通の人生を送るよりも、もっと多くの生死を目の当たりにする。

十分過ぎると思える生も、理不尽な死も。
全部を見ることになる。巫女とは、そういう職だ。だから宿下がりも滅多なことが無い限り頻繁には戻れない。
こんなに小さな島の出来事なのに、ここで流れる時間も空間も隔離され、そんな世界が続いていく。主が永遠を生きる海巫女だから。
神は、この場所の時を止めたり進めたり気儘にその力を振るう。
それは一見、不連続で不条理であるように思えるが、実際には、そうではなく因果も秩序も存在し、私達が気がつかないだけであるとしたら。
この館の中では幾度か目撃することがある。

それが、朧姫の傍にいるということなのだ。

私は男に言った。

気が進まないが、私の好む好まないは関係がない。

人に見られれば取り返しがつかない騒ぎになるだろう。

何しろ、主本人が男子禁制の間に男を上げ入れ、そして一輪しか咲かない白い花を持ち出す許可を出す。

それが知られば、朧様はただ微笑んでいるだけではいけない。

「行くぞ。・・・朧様の与えたものを、粗末にするな」

その時。

朧様は、私に向かって言った。

まっすぐに、私を見て・・・

いつも遠くを見ている方が、その時だけは私を見た。

「砺波」

・・・私の名前であった。

見知らぬ男女の会話の中で、名前を知らせる行為は良からぬ事とされている。

妻問いを表すので、見知らぬ異性の前では決して明かしてはいけない私の名前を彼女は言った。

その時、私と朧様の目が合った。

朧様の、綺麗な二重の曲線を描いた瞳が私をじっと見つめている。

朧様には私はどう映っているのだろうか。

驚いた顔しか浮かべていない私の表情の中に、何を読み取ったのだろうか。

疑問ばかりであった。けれども、問いがあるからこそ人は考え、確かめ、そして希望も失望も味わう。

私の中に、希望と絶望を感じたのかもしれない。

彼女は生きていたいと思わないのに、他者には生きろ、と言う。

なぜなのか。

骸にさえ生きろ、と言う。彼女の生死は、人の世のそれとは違うのだ。

魂が消滅して初めて死を迎える。肉体の死ではない。滅びの時について、彼女は違う価値観を持っている。

しかし。

彼女の囁きの意味を理解できるのは、一体・・・いつになるのだろうか。

「私とおまえだけの秘密だ。白雨の秘密だ」

秘密、という言葉は・・・どうしてこれほどまでに艶めかしく密やかな温度と色で私を魅了するのだろうか。

死を間近に迎えた時に・・・死を目の前にした時に、私は自分のことしか考えられなかった。けれども、隴様は違っていた。

彼女が視た色も温度も知りたかった。

隴様になりたいのではない。隴様の傍に居たかった。そうしたら、私は私も生きていても良いのかもしれないと思えたから。そして、隴様のために命を投げ出す勇気を持って私は誇り高く生きたり死んだりすることができる、と都合の良いことを考えてしまったのだ。

それなのに、隴様はそれには触れなかった。責めても良かったのに。

私にとって・・・たったひとりの家族であった。血が繋がっているかどうか、という問題ではない。私にとって、帰る場所はここしかなかった。もう、ここでしか生きていたくなかった。

■隴雨 45

白雨の秘密、と言われてしまった。

もう、何も言えなかった。

摺理に因る現象に対して、秘密にするかどうかは因果関係は存在しない。

つまり、隴姫は・・・私の名前を出すことで私を縛った。

このことで隴様と私とそして獣の皮を被った男との間で言霊の密約ができてしまった。

だからすまないと言ったのだ。

私の名前を利用した。それをすまないと言ったのだ。

私はまったく気にしていない。

この島では・・・名前の精製を知ると言霊を得られると言われている。

海に還った者が、名前を持たない墓標を持つのはそのためだ。

家族しか真名を知らない。

そして誰にも知られないで死ぬ者も居る。

隴様は全部を知るわけではない。けれども、言わないだけで、知っているのだ。

私の気鬱も。私以外の者の良い欲求も。

私の名を呼んだ。

それは、全てを表す。

私の秘密も。私の存在も。そして、目の前に居る彼に知らしめることによる憂いも知っていた。

邪な心を持つ者であれば、私を名前で縛る。

朧様の傍巫女達は、それまでの巫女になる前の名前で呼ばれることはない。

その名前で婚姻関係を強いられることを避けるから。

「砺波。私の雨を引き受けてくれるか」

「・・・いつも通り命令されれば」

冷たい応えと聞こえたのだろうか。

しかし、私は彼女の存在に疑問を思ったり否定したりすることはしない。

指示されればその通りに動いた。

けれども、彼女は私の頼んだのだ。

対等な者として。

私の名前を呼んだ。

・・・私の名を口にした。

彼女は淡く微笑む。いつもの通りに。

「命じているのではない。頼んでいるのだ。あの花をその男に渡せ」

私はもう・・・この島に降り注ぐすべての雨が私に降れば良いのに、と思った。

この方の傍に居るということを選んだのは、私だ。

だから、私は男に言った。

「急げ。間もなく雨が止む。・・・そうしたら、ここから出られなくなる」

獣の皮を纏った男は僅かに頷いた。

そして、朧姫に向かって、彼は軽く会釈をした。

普段の私であるのなら、礼を尽くさぬ野卑な者め、と蔑んだかもしれない。

山の者たちは、ここと違う為来りで生きている。違うから卑しいのだという気持ちを持ち続けたのだろう。

けれども。

この男には、摂理を曲げてまで海に還してやりたい者が居る。

山に生きる者は、海を恋しがらないということではないのだ。

帰れないとわかっているから・・・海を見ないで生きているだけなのだ。

それは私も同じではないのか、と思った。

愚かしい願いをかけて、朧様に期待していた。自分にも期待していた。

それを叶えるのも選択するのも朧様に任せきりにしてしまっていた。

でも。

今、命を助けられて。今、彼女が私の名前を呼んで。

私は何かがふっと自分の身体から削ぎ落とされるような気になった。

そして悟った。

・・・それ以上のことを望んではいけないと思った。

「雨に紛れて行け。そして、もう二度と・・・こんなに空が明るい時に来てはいけない。たとえ、それが白雨であっても」

私はそう言って、部屋を出た。朧様をひとりにしておくことを心配したが、他ならぬ彼女の頼みであった。聞き入れない理由もないし、私には抗う意思がなかった。

何も願わない海姫が願うことは自分自身のことではなくいつも他の命のことばかりである。

彼女がいつか・・・自分自身のために何かを欲することがあれば。

その時、私は一体何をどう感じるのだろうか。・・・その時も、あの方の傍に居られるのだろうか。

そう思った。

邸の中心にあるこの部屋から外に行くまでには、いくつかの部屋の前を通らなければならない。私は作業人達が使う時だけ開かれる裏戸口へ足を運ぶことにする。頭の中で道順と人に見られないで通り抜けるための手順を考えながら、私は男に言った。

「ついて来い」

そして、部屋を出た。

■朧雨 46

私と男が部屋を出ると、待っていたかのように雨の勢いが激しくなった。先ほどは小雨であったのに。これほどまでに空が明るく雨が降り続くのはやはり男の言ったように海の濁る前兆なのかもしれない。

吉兆にも凶兆にも受け止められる銀箭は、勢いを増してきた。

けれども、それらは大粒の雨ではなかった。ただ、激しく弱く細い糸が無数に地に向かって墜ちる。

・・・これも朧様のしていることなのだろうか。

男の気配を隠すために、すでに止んでも良い頃合いの雨を、長引かせているのだろうか。

外廊下に出ると、土埃が雨を吸って舞い上がった時の匂いを感じた。

そこには雨の湿った空気があった。海の湿りとは違う。

私がいつも当たり前感じていた海の匂いではなく、雨の匂いであった。

「こちらへ」

私は声を低くして男を連れ出した。

考えた通りの手順で、誰にも会わずに外に出ることができそうであった。

そして、その途中で・・・大事なもうひとつの用事を済ませることにする。

私は周囲を注意深く見回した。雨音で人の足音が聞こえない。こちらの気配が消えるということは、他の人間の気配も消えるということだ。

私は素足のままで、入側と濡れ縁を踏むと、そのまま外に出た。履物を探している時間はない。傍巫女が足を汚すという行為は許されないが、それも仕方の無いことであった。私には・・・臙様との約束を守る方が大事で、紀律を護るのは臙様を守る為だからと考えている。

だから。

彼女の為に、決まり事を破ることに對して躊躇いはなかった。

私を縛る事が出来るのは臙姫だけである。彼女が居るから、この島で息をすることができる。

私の昏い想いや独りよがりの憂いなどは臙様の言葉一つで洗い流されてしまう。

彼女は、白雨のような人だ。

白雨は・・・空は明るいのに、雨は地を濡らし、海に紋を作らせる。

臙姫は、そうやって私に雨と陽を同時にもたらす。

私の中の、私だけしか解決することのできない問いについて、彼女はそっと手を差し伸べたのだ。

私の命を救い、私の祈りを聞き・・・傍に居ても良いのだと言った。

だから、私は行動する。

まだ雨が降っていたので、私の衣は雨を吸い始めた。たちまち濡れて肩口が重くなってくる。けれども、雨はどこか優しくかった。そして、雨を怖いとは思えなかった。

男も私に続き、音も小さく地面に降り立つ。

懐に忍ばせていたのだろう。折り畳んで小さくなった履物を手早く着用する。

その手際が余りにも良くて・・・少し哀しくなった。

彼らはこうして建物の中で長居をする生活をしていないのだ。自分の持ち物を置いて歩き回ることとはしない。履物でさえ。

島の者と明らかに違う習慣であった。・・・元は、島の民の子であるだろうに。

私はそのまま地面に降り立ち、白い玉砂利の上を歩く。臙様のいらっしゃる邸の周囲には、このように白い砂利と白い砂が敷き詰められている。

一種の魔除けのようなものであるが、それが雨によって濡れていた。乾いた砂の感覚もなかった。

ここには目隠しになる頃良い背丈の樹木が植わっている。・・・外からはこちらが見えない。

そして、私は自分の脚の汚れも衣の湿りも気にせず、まっすぐ目的の場所に足を運ぶ。

ここは、白い花が咲く。同じ苗から育てても、決して色がつくことはない。

様々な種類の様々な白い花が雨を避けて、花瓣を凋ませていた。

私は更に足を進ませていく。

足元の薬草を踏まないように気を付ける。朧様の作る煎じ薬の素になるものばかりであった。調合を巫女達に教え、島の者にも知識を分け与えることを惜しまない。

しかし、朧様の手で作られる薬だけが最も効能が良かった。

けれども、永遠の命や若さを手に入れるためのものではない。生命力を助けるためだけのものであり、それ以上のことを朧様はしない。

すべての生命には終わりがあるから美しいのだと思っていることは明白であった。

あった。

私は奥に進み、目的のものを見つける。それほど時間はかからない。周囲に何も花がないから、すぐにわかるのだ。

その時だけは、私は足を止めそうになった。けれども、雨が私の後戻りを阻む。

朧様が・・・自ら花を摘み取り、その花だけを残す。

常時咲いているわけではない、白い・・・白い花を今度は私が摘み取ってしまうのだ。

■朧雨 47

その華を目にすると、躊躇うかもしれないと思っていたが、実際はそうでもなかった。

島の者が縫って欲しがる万能の薬の源になる花。一輪あれば、どれほどの分量が作れるのか。しかし朧様は大量に煎じることはしない。

乾燥させ、粉状にしたものを本当に僅かに使うだけであった。

私のような大雑把な者から見れば、それは慎重すぎるほどであったので、いつであったか訊ねたことがあった。

分量を違えて多く入れたら、どうなるのか、と。

すると朧様は艶やかに微笑んだ。そして、少し首を傾げて言った。

「舐めただけで死ぬ。死骸は腐らない。薬は毒にもなるということだ」

彼女はそう言った。

強い薬は加減を知らない、と言った。過去に何かあったのだろうか。その華を残す為だけに摘み取った花々は同じ様な薬効を持たないのだと言われている。

朧様がそれすら摘み取るからなのか・・・

彼女のまわりにある不思議な出来事についてひとつひとつを挙げてみれば数え切れない。

だから傍巫女達は、いつしか訊ねることをやめてしまう。

けれども、私はそうしなかった。聞かなければならないということもない事まで質問した。朧様はそれにひとつひとつ丁寧に答えてくださる。

答えに窮するようなこともあっただろう。

しかし、朧様は逃げたり放り出したりしない。

自分の命を自ら断つことはしない。

どれほど生きていくことに飽きていたとしても。

だから、私が自分の命を投げ出そうとした時・・・朧様は私に初めて「それは違うのだ」と教えたのだ。

私は雨に濡れたその白い華を見つめる。

この華だけは・・・雨に濡れても凋まない。朧様が頃合いを見て摘み取るまで、ずっと満開の状態を続ける。

気味が悪いと言う者も居るから朧様はそれらの世話を少数の者にしか任せない。

私もそのひとりであった。それを誉れと思ったが、自惚れてはいけないと自戒していた。

私は朧様を中心に回っていたが、朧様は決してそうではない。

それを知っていなければ、傍巫女は務まらない。彼女の稀なる能力は、彼女が海神様から授けられたものであり私の能力ではない。私には奇蹟を起こすことも、神と対話することもできない。

その代わり、嘆きを聞くこともない。

どちらが良いのだろう。

持っている者と、持っていない者と。

全てを持っている者は、その全ての中に孤独も含まれているのだと知っているのだろうか。

「少し待て」

私はそっと白い花瓣に手を伸ばした。

私の視線と同じ高さにそれは位置している。どういう采配でそれが選ばれたのかはわからない。けれども、その他の命を散らせて残ったたった一輪であった。朧様が毎回手折ることになっている薬花を・・・私が散らせてしまう。

後悔はしていない。

私は、私のすべき事とするだけだ。

私は濡れた手で一度だけ、その華に礼を取った。腕を軽く交差し自分の胸にあてる。自分の命の温度を感じてから、それに触れる。

・・・まじないめいた仕草であったが、この命は私が貰い受けるから。

命を摘む時には、巫女達はこのような礼を取る。

自分以外の命に感謝をし、祈りを捧げ、そして海に還れますようにと呟く。

海で生まれた命ではないが、土に還り地下を通して水が海に流れて海に繋がるように。

万物は海からやって来た。だから、命は海を恋しがるといえるだろう。還りたいという欲求があるのは、海の一部だからだ。

血も肉もすべて・・・海に戻す。それがこの島の考えだ。

そして私が躊躇いもなく白い花瓣に手を伸ばした時。

後ろで控えていたはずの男が、私の手首を掴んだ。
私は驚いて身体を強ばらせた。異性に触れてはいけない。
私は朧姫に仕える者だ。

私は声を出すこともできず、近い場所に男の身体があったのでただ身を退くばかりであった。
けれども、男は・・・私の手首を掴んだままで言った。
強い力であった。
抗えない。
腕の筋が見えて、私と違う生き物であることを思い知る。
私も普段は力仕事なども行うが、彼の腕の強さはその比ではなかった。

■朧雨 48

「もう、良い」

「何を言う」

私はそう言ってせせら笑った。

この華がどれほどの力を持っているのか、私は知っている。その花瓣に触れただけでも、人によっては爛れを起こすほどの作用があるのだ。

「薬は毒にもなるから」

朧様が言っていた言葉は、その通りのことなのだ。

朧様が手折るから、その華は薬になる。けれども、私が手折ったら・・・私はその華の汁を指先に付けるだけで指が腐り墜ちてしまうかもしれない。いや、腐らずに墜ちるのだろう。

可憐で美しい花であった。新参者の巫女でこの華の開花時期に居合わせることができた者などは、その美しさに度々足を運んで眺めているようであったが、決して近寄ってはいけないのだと言われている。

世話を少人数の者にしか任せないのは、そういう理由からだ。

思慮なくその華に触れれば、何が起きるかわからない。そういう植物が、この館の中には何種類が存在する。

これもそのひとつだ。

虫も付かず、鳥も蜜を吸いに来ない。

それは美しすぎるからではなく毒性が強いからだ。

加減を知らない生き物が触れれば・・・たちまち命を散らすことになってしまう。

「ここでおまえが考えを改めても・・・私は、朧様の・・・主の言葉を実行するだけだ」
私はそう言うと、反対側の私の手と腕を使う。

男の手の平は熱かった。

それに胸を躍らせ鼓動を滾らせるほど・・・私は愚かでもないし、ここではないどこかに行き着きたいとは思っていなかった。

私は、ここで満足している。

ここで生きるには、まだ、足りないと思っている。

これまでの会話の中で、彼が考えを取り下げることにはしないのだと承知していた。

それなのに。

私が白き華に手を伸ばすのを阻んだ理由があった。

ひとつしかないけれども。

・・・逝ってしまった夜追いに影響するからなのだろう。

それ以外に、理由は考えられなかった。

たとえ・・・その華を素手で摘んだのなら、その手は爛れ墜ちて行くだけであるのだとわかっていたとしても、私は後悔しなかった。

華を摘むことができるのは、常少女だけだ。

男が摘むことはできない。その前に、枯れてしまう。

乙女が正しくて男が正しくないということではない。ただ、そういう性質なのだ。その華は、そうして生きているから。

男の力強さに萎れるのだ。

男性が触れてはいけない場所とされているが、この館が特別なだけであった。

逆に、年が明けると男しか出入りできない社は賑わう。

そこは女社と言われており、男女が通ると社神が憤り、海が荒れると言われている。男女が契りの約束を交わすと、その社は沈むと言われている。

朧様が御座すこの島でも、今ではあちこちで土地神やそれに近い信仰が漂うようになった。

この島では、朧様しか信じてはいけないと彼女は言わない。決して、言わない。

信じるものが多めに広がってもそれは自然のことなのだと言っている。

この白雨の後、そのような声は大きくなっていくことだろう。

朧姫の神性について疑問を口に出すのは、私の兄ぐらいなのだと思っていた。

けれども。

そうではなかった。

そうではなかったのだ。

私は、声を潜めて言った。

「離せ」

「おまえは、それで良いのか」

彼の言葉に私は嘲りの表情を浮かべた。

雨に濡れて・・・私の顔も濡れていた。伸びた前髪は横髪と一緒に束ねられていたが、それでも額の生え際の短く柔らかい毛が・・・雨を吸って伸び・・・そして私の額の上で跳る。

「私は関係しない。・・・ここで怖じ気づいたか。全てを生かし、全てを殺す華を望んだのは、卑しき山の民であるというのに」

それを聞いて、彼はうっすらと嗤った。私がどれほど、その腕を振り払おうとしても彼は私の手を離さなかった。傍巫女の肌に触れる者は・・・詛われても仕方が無い。それなのに、彼はそれを怖がらない。

その理由が・・・わかった。私が、次の瞬間、顔をあげて彼を睨んだ時に。

■ 隴雨 49

敢えてそう言わなければ覚悟できなかった。

細くなってきた雨の中で、私は獣の男と睨み合っていた。

いや、目元が被り物で隠れていたのもそれは正しい表現ではない。

そうだ。私の心は乱れている。

この白雨のように私の心は乱れている。

空は明るいのに。激しい雨を降らせる白雨が、間もなく去ろうとしていた。

雨が乱れるのではなく、雨に打たれた草木や花や浪が乱れる。

私はもっと小さな生き物だ。

それらよりももっと小さいから・・・これほど激しく揺さぶられるのだろう。

私は、腹立たしいと思っていた。

私が隴様を独占できるとは思っていないし、そうしたいとは思わない。

ただ、この白花が咲き、そして落ち、人々の体内に入ってその命の役割を果たす時まで一緒に見守ることができるのだと思う誇りが私を存続させる。

たとえ、私が朽ちても。私の魂は朽ちない。

けれども、私が私の中で探求し続けたことを目の前の男が容易く乗り越えていったような気がしたから。

だからなのだろうか。

彼の無謀さについて、私は鈍感であると思った。

私の兄よりも彼の方がまだ常識的だと思ってしまうのは、私が兄に対して決別に近い気持ちを持っているからなのかもしれない。

同父母から生まれた、年も近い兄妹であるというのに。

私と、兄は、まったく違ってしまった。

途中までは一緒だったのに。

いつの間にか、違ってしまった。

どこでどう変化したのだろうか。

それすらわからなかった程、近かった。近い場所に居た。

近すぎるから・・・変化や兆しに気がつかなかった。

それは私が迂闊であったからなのかもしれないが、彼の・・・兄の心にも、仄暗い気持ちが存在しているから私達は違ってしまったのだ。

「おまえが捨て身であるのはわかったが、それは俺には・・・夜追いの者には重い手向けだ」
彼はそう言った。

私は、彼から振り払うようにして引き剥がした腕を自分の身体に寄せた。

臙様の命令によって花を素手で千切り、そして腕が落ちるのであれば躊躇わなかつたらう。

しかし、どこの誰の捨て童であったのかさえわからないような者によって腕を折られることは躊躇った。

私の中で、優劣ができてしまった。

私は、横を向いた。

髪を束ねていた薄白の髪環が雨に濡れて、私の髪を乱した。

まるで、私の気持ちそのものをそこで表現するかのようであった。

本当は、そうして心を荒らされることを望んでいないというのに。

私は、それを受け入れてしまったのだ。

臙様が望んでいるから。

でも、臙様が望んでいるからそうするのではない。私がそうしようと思ったからだ。

臙様に決断を委ねたわけではなかった。そしてそのことで彼女が気に病む事の方が・・・怖かった。

もし。

ここで、その白華の影響を私が受けたとしたら。

臙様は、次から私の顔を見て話をするような位置に私を据え置いてくださることはないのだろう

と思った。

傍巫女の職にあって、不慮の事故で身体が欠損してしまったり内臓が病んでしまった者について、隴様は彼らを解雇することはなかった。

より軽い仕事に就くことをお許しになった。

けれども。

慈悲だけではない思惑があって、隴様は館にそういった者さえお残しになるというのは・・・何か考えがあってのことなのだと確信している。

だから。

私は、男を目の前にして嘲ら笑った。

・・・隴様は、私に試練を与えたのか。そもそも、与えたのは隴さまではなくもっと・・・人為的なものを感じるの、私の気のせいなのだろうか。

少し距離を置いて、私は言った。小さく微笑む。

「山の坊よ。・・・それを差し出せ。はやく」

彼は、何を言われているのかわからずに無言であった。

私はそれを確かめたわけではないが、それを確かめて少し安堵する。

■隴雨 50

どうして彼がそれほど横柄なのか、顔を近くで見たときに、理解できた。

しかし、雨が上がるのはもう間もなくのことであった。

彼の貌に気を遣う時間はない。

けれども、彼は言った。

「この華はおかしい。雨なのに萎れない。虫が食った後もない。・・・そういう時には気を付けなければならない」

彼は自分の疑問を口にした。

けれども、この華の薬効を事細かに説明している猶予はなかった。

この男の理解は必要ではない。

私は手早く言った。

手首に、少しひりつく痛みがあった。

「・・・おい。それをよこせ」

それ、と言われて彼は訝しげな顔をした。

「お前の持っている、それだ。・・・そう。あの時の砂だ。袖に残っているのならそれを出せ」

彼は弾かれたように袖に腕を伸ばした。

何を寄越せと言っているのか、わかったらしい。

山の民は、袖の締まった衣服を身につけるということであったが、彼は袖口に仕込んだヒ首を隠すために、海の者と同じ様な衣服を着ている。

けれども、決して洗練されたものではなくそれしか持っていないのだろうと思われた。

着衣に気を配っているのは、匂いによって獲物が逃げてしまう。

だからなのだろう。とても簡素な服装であった。

臙様の清らかな衣に対峙するための装いとは思えなかった。

しかし、臙様は最初からわかっていたのだろうなと思う。

彼が、何を隠して・・・何を願うためにここにやって来たのか、察しがついていたのではないのだろうか。

彼の手の平が差し出された。

僅かに残っている一握りの砂。

私はそれを掴むと、自分の指先に刷り込んだ。

雨を含み、それらは粘りのある液体に変化する。やはり。

これは、私のよく知るものだ。普段は臙様が煎じて粉状にし保管しているもので・・・毒性の強い薬草を扱うとき、巫女達にそれを刷り込ませてから作業させる半固形の塗り薬と同じ匂いがした。

何を元に作っているのか、臙様は言わなかった。

ただ、これは海に還らなかったものだから、と言った。

ああ、そうなのだ。

私は理解した。

臙様を変えたそれは・・・元は刀であったものだ。

そして、それにはこの島の研ぎ石で研磨された材料であった。どんなに粗末なものであっても、そこに・・・海の砂に擬態した砂があるのだ。

傍目には、それはよく知る海岸の砂にしか見えない。けれども。

どんなに海に還りたくても、それは海のものではない。

・・・海からやって来た者は、海に還る。

海で死んだものは、海に還る。

・・・たとえそれがどんなものであっても。

その言葉が正しければ、これは唯一・・・あの白い花に素手で触れても影響しないものであると

言えた。

私はそれを両手で馴染ませながら、素っ気なく言ってやる。

そう言わなければ気が済まなかった。

「隴様のためなら、指を落としても構わないが。

お前ごときのために、腕を落として隴様の傍巫女を返上しなければならないのは気に入らないし、納得できない」

私はそれだけ言うと、皮膚が露出していないことを確かめて腕を差し伸べた。

雨に濡れて、せっかく塗布した砂が流れてしまう。

・・・小雨であったのも助かった。

しかし、それは偶然ではないと思った。

雨が上がる直前に、隴様が私とこの男を部屋から出したのは・・・この機会を狙っていたからなのだろうと思うと、彼女の中でどのような現象を差配しているのかという境界が、私にはわからなくなってきてしまう。

果たして、彼女は神なのか、人なのか・・・それとも、もっと別の存在なのだろうか・・・。

私にはどれでも構わないことであった。隴様は隴様で、私がお仕えするただひとりの巫女姫だ。

私は彼女を信じて、腕を伸ばし、その華奢な花蓋を・・・摘んだ。

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

■朧雨 51

私が疑えば、きっとその華に冒されるか指が落ちただろう。
摘み取りの時に、躊躇って勢いを失えば、その汁が人の肌を穢す。
逆に慎重さを失っていたら、雨に濡れて華はすぐさま枯れてしまうだろう。
雨に濡れても萎れない花であるのに摘み落ちると見る間に萎れて行く。
朧様の手順を見てきた私だからできることであった。
常少女であるかどうかは条件の優先順位は低いと思った。
乙女であるかというより、朧様をどこまで信じるか・・・それが問題であったように思われた。

私の愚かさが・・・私が朧様をどれほど信頼しているかが私を救ったのだとしたら。
私が呼吸し目覚めている間・・・いや、眠っている時間でさえも、朧様のことを考え、朧様が微笑んでいる時間が少しでも今より長く在って欲しいと願うことが私の魂を蝕むのだと知っても。
それでも、やめることはできない。

命を愛でる姫でありながら、命を摘むことのできる人であった。
私達の目に見ることのできない、在らざるモノに対して、彼女はいつもひとりで向き合っている。
。 どういう風に退けているのか詳細を知るものはとても少ない。
・・・彼女は、明るい場所だけではなく、昏い海も知っている人だ。
それなのに、ひとりで生き抜き、そして耐えている。

誰も彼女と同じ速度で生きることはない。
たったひとりの・・・この島のたったひとつの「永遠」なのだ。

私は自分の懐から布を出した。用意してあったわけではない。
雨に朧様が濡れてはいけないと思い、大きな拭き布を用意する前の荒拭きの布（※濡れた雫を拭くもの。水が神域に滴り落ちるのは不吉とされるので雨時の外出時に必ず持ち運ぶ）であった。
本来なら、朧様のために使われる布である。
あの方の艶やかな髪が水気を含み身体が冷えるのを防ぐためだ。
私はそれに手早く摘んだ花を包んだ。
粗い目の布に水気と花の香りが広がっていく。
そして、私が覆った砂の染みが付着して、それも醜く模様を作りながら布の上を伸張していく。

私の気持ちなどは知らないで。

この男は、無神経にただ息を潜めて私の手の中の・・・この島の者を幾人も救う事のできる華を見つめていた。

柔らかな布に包まれて、膨らみを残したままの布ごと私は差し出した。

腹立たしいが、致し方なかった。

大勢の者を救う事が出来るのに。

朧様はこの愚かな男を苦悶から救ってやるためだけに・・・その華を落とせと仰った。だから私は華を落とす。

朧姫に言われたから、ただ妄信的にそうするのではない。そうではない。

・・・それに荷担すれば、私は朧様に近付けると思った。

秘密を共有できると思ったのだ。

でも、違った。

違うのだ。

・・・朧様と一步遠くなってしまった。

だから、私は苛立たしいのだ。

それを、この男に向けて発散しようとしているだけなのも十分承知していることであった。

哀しく息苦しいほどに、わかっていた。

「・・・これを骸の上に置け。

誰も触れてはいけない。

風の入らない密閉した部屋の中であれば・・・効力はかなり保つ。

しかし、その骸と一緒に居てはいけない。

そこから出す時は鼻や耳や口を覆え。

眼は剥き出しにするな。

そしてこの華を転用しようとせず、屍と一緒に焼くのだ。煙も吸ってはいけない。

・・・お前は今、わかっているはずだ。虫も獣も寄りつかない時は危険だ、と」

私は手早く取り扱い方法を言った。

男が覚えていようが聞き取れなからうが関係ないと思ったが、言わないでおくことはできない。

そして男の懐にそれを押し込んだ。

それほど危険な華であるのだと彼が最初に私に言ったはずなのに、彼は無防備にそれを胸にあてて、ただ黙って・・・立っているばかりであった。

私は朧様のように、奇蹟を見せることはできない。そういうことは望まないし、できなくて当然で・・・そして、私は奇蹟を起こす者ではなく、奇蹟を願うものではなく・・・奇蹟などはないのだと信じて居る者に近いのかもしれないと思っていた。この獣の男がそう思っているように。

朧様の起こす奇蹟は、本当は奇蹟ではないのかもしれないが、私はそれでも構わなかった。

「持っていけ。そして、はやく消えろ」
私の言葉に、彼は我に返ったようだった。
もうどんな憤りも彼に向けることはなかった。ただ、無表情に言う。

禁忌の華を摘んでしまった後に、自分の処置や行動が正しかったのだとわかって急に気が大きくなってしまったのかもしれない。
自分を過信してはいけない。
この後、何が起こるか分からない。

変化とは、一瞬で終わるものではないし、始まるものでもない。

その瞬間に訪れないこともあるのだから。

「それに包まれている間は、影響はない。そして、布が乾燥してしまう前に事を終わらせろ。
・・・華は水を吸っている時はそれほど匂いが出ないが、乾燥すると強く香る。
ゆめゆめ忘れるな。
それを狙う・・・獣でも蟲でもないモノ達がやって来るから」
私はそれだけしか言えなかった。
全部を知っているわけではないが、このようにモノを知らない者に忠告するのは巫女の役目だ。
具体的にどうあるべきか、どうしなければならないのかということには触れることはない。
だから今回は特別なのだ。
わかっているのか、この男は。
私は呆れてしまった。

巫女の与える言葉は・・・その巫女に少しも神力が宿っていなかったとしても、巫女として朧様に祝福されている以上は、言葉に寄せられるモノが居るのだ。

「何一つ、残すな。全部、風と海に流せ」
私はそう言った。
確か・・・山の民は、番っている相手が死ぬか、近しい親族が死ぬと、その遺骨や灰や持ち物を自分の身につける習慣であった。
それも駄目だ。
朧様のお心は無駄にするな、と強く忠告した。

この男が、私のことを猜疑心の溢れる愚かな巫女だと思っても平気だった。

けれども、私は言うだけは言わなければならない。

それが聞こえているかどうかは別だ。

彼の心に聞こえるかどうかは・・・私ではなく彼が決めることだ。

そういう風に言い訳をして、私は私を誤魔化した。

朧様のように辛抱強く彼に言い続ける胆力はなかった。

朧様とこの男に・・・私の知らない会話が存在したのだと思うだけで哀しくなる。私は信用されていなかったのだろうかと思自身を疑ってしまいたくなる。

私が説明を不足したことによって誰かの命が消えてしまったのなら、朧様は少しは胸が痛むのだろうか。

一瞬だけそう思った。

でも私はそうしなかった。

ふと、考えたからだ。

そんなことを望む邪な気持ちを持った私のことを朧様は見てくれることはないと思ったから。

天と地と海と・・・空も風も月も陽の光も・・・そして白雨とさえ会話できる稀有な人の気持ちを、これ以上傷つけたくなかった。

砂粒ひとつほどにも。彼女に濁りを持たせたくなかった。

山の者は、肉体の死にそれほど固執しないと聞いていたが、彼は違った。

・・・その夜追いの者は、相当に愛されていたのだろう。

彼の命を懸けてもよいほどに。

朧姫という御子神に願いを捧げるということは、何かを犠牲にするということだ。

彼は一体・・・何を捧げたのか。

夜追いの者の最期の言葉は供物ではない。

それは、単に残った言葉でしかない。

それをどう解釈するのか・・・それをどう朧姫に伝えるのかは、残った者の役割だ。

しかし、彼は・・・大それた願いを持って、彼女に願い事をした。

彼は・・・何を捧げたのだろうか。

私はふと、それが気になり・・・そして、顔を上げると、息を呑んだ。

彼が・・・男が、獣の被りものを・・・逞しい腕を上げて、ゆっくりと手の平で自分の背面に押し流したからだ。

先ほど、下から見上げた時にちらりと覗かせた彼の貌が、白雨の明るい空の下で露わになった。……山の者たちは、普段、顔を見せることはない。島の民が捨てた子供達が居るからだ。誰かと酷似している顔立ちの者が山裾から降りてきたとしたら、それはただ混乱しかもたらさない。親は、一度は子供を捨てるのに、それでも忘れられないのだろう。時折、そっと入ってはいけない極限の場所まで山に入り、じっと山を眺めている者が居る。そういう時には、誰も声をかけてはいけないことになっており、どの家からどの者の子や肉親が山に入っていったのかを知るところになる。

だから、彼らは顔を隠す。

そして、言葉も少ない。

余程の用事がなければ、特定の者しか山からやって来ない。

……正確に人数を把握している者は居ないか、ごく少数だけであろう。その中には、朧様も入っていることであっただろうが。

彼らが顔を島者に見せることは、殆どなかった。

「おまえは、『寄せ者』なのだな」

私は呟いた。彼の額には、この島の者にはない特徴があった。

年は若かった。私や兄と同じくらいの年齢だろうと推測される。声やむき出した肌が若いので、きっとそのくらいだろうと思っていた通りであった。

寄せ者というのは、外から来た者のことである。

ごく稀に、そういう者が住み着くことがあった。私の兄嫁のように。

しかし、外の者は島の者になれない。集落を作る程の人数は存在しない。

だから、山に入るのだ。閉鎖的な島の者の中で生きるより、区別されて生きる、常に弾かれた者たちで構成される山の者として……海を捨てるのだ。

近隣の島で生きられなくなった者が流れ着いてきたり、瀕死の状態で海に流された者であったり……他の島で沖合に出て流されてそのまま帰ろうとしない者たちのことであった。

彼がなぜ、寄せ者であるのかということがわかったかと言うと、島の者にはない特徴が額にあったからだ。

彼の額には、入れ墨が施されている。これは外の島の者の風習であると聞いたことがあった。家紋のようなもので、その家によって違うらしい。そして嫁した者は更に額に紋を描き足す。それは特殊な染料でできており、海で溺れて死んでも土に埋めても、そこだけは腐敗することなく残るのだと言う。

彼が、蟲や獸が喰わないという花に敏感であった理由がここで明らかになった。
その島はとても近い場所にあり、こことよく気候が似ていると言われている。
私はそこに言った事がなかったが、僅かに情報交換をする者たちの中で伝えられていることであ
った。

しかし、島同士の者は互いの島に足を踏み入れない。

情報交換は海の上で行われる。

全ての取引や会議も同じであり、島巫女に至っては場所を移動しなくても会話ができるからま
たく不便はなかった。

自分の額にある染料がこの島にあると確信していたからだ。

どんな形であるのか知らないのは、彼が男で余所者だからだ。

そして、その島で過ごした時間は短く記憶が定かではないのだろうと思われた。

彫りが深いが涼しげな目元をした者で、額の紋は見事な細工であった。鼻筋は高く、眉裾が
長い。頬骨はそれほど高くはなかった。何がどう違うという、はっきりとした特徴を挙げるこ
とはできなかったが、額の入れ墨を見なくても彼がこの島の者ではないことがわかった。

実際に見たのは、初めてのことであった。

打ち寄せられるように島に寄ってくるから、寄せ者と呼ばれる。

しかし、こんな寄せ者は知らなかった。私が全てを知っているわけではなかったが、それ
でも・・・話に聞く事もあったのかもしれないのに。

「俺を孕んでいる時に、母はここにやって来た。そして山に入った」

ああ、そうか、と思った。

自分の生まれた島を捨ててきたのだ。

胎に彼を宿しているというのに。

その子は、島の男との間にできた子であろうに。

相手も男も、生まれた島も捨てて・・・寄せ者としてこの島にやって来たのだ。

私は嗤う。

「島を捨ててきたのに、その島での風習が忘れられず、ここで生まれたおまえに紋を彫ったのか
」

「俺の母は彫り師の家の者だったから」

彼は言葉少なに言った。だった、と過去形を使っているということは、もう故人であるのだら
う。確か、彫り物をするのはその島では傍巫女の職のひとつであると聞いたことがあった。

すると、この男の母は傍巫女を辞して嫁したのか・・・それとも・・・

私が黙って居ると、彼はまた言った。

「成就しない関係の男の子を身籠もった。しかし、諦めきれずに死ぬしかないと思って海に入り、そして死にきれないで流れ着いた。島を捨てて、山に入り、それでもなお・・・生まれた俺に紋を彫った」

「業の深いことだ」

私は吐き捨てるように言う。死人の悪口を言うつもりはないが、そこまで固執するのが母という生き物の性なのだろうか。

そんな紋を彫れば、彼はこの島で生涯を寄せ者として過ごすことになる。それは事実であったが、生まれたばかりの赤子は他の赤子と同じ様に扱うこの島の風習を知らなかったわけではなからう。

彼は小雨の中で続ける。

「母はその後、山の坊の妻となってもうひとり子を産んだ。・・・それが夜追いだ」

あっと私は声を出しそうになった。

そうだったのだ。

私は彼のこれまでの言動を思い返し、様々なことに合点した。

■ 隴雨 54

肚に宿った子ごと海に沈んでしまおうと思ったのに、その女はまた別の男の妻となり、子を産んだ。

寄せ者の女がこの島で生きていくためには、手っ取り早い方法である。

業が深いのに、生に執着する。

愛だけに生きられず、恋着する。

それが人というものなのだろうか。

それが母というものなのだろうか。

そして、その子は夜追いとして生きることになった。

何という巡り合わせなのだろう。

島を捨てた女は、巫女職も捨ててそして・・・

「だから、そいつは俺の妹だ」

彼は言う。

・・・先ほどまで強く降っていた雨が、柔らかくなって彼に降り注いだ。
彼の頬に雨滴が落ち、それが滑り落ちて・・・泣いているように見えた。

巫女に仕える職の家に生まれ、傍巫女として仕え、そして他人のこどもや誰かの妻になる女達の額に紋を彫る。

しかし、自分の額に紋が加わることはない。自分のこどもに喜びの紋を刻むこともない。そこに、ふと、闇が生まれたのかもしれない。

只人になって・・・女ははじめて自分の紋を子に託したのだ。

・・・ふと、思った。

その時の染料の調合を知っているのはその女であったとしても。

望まれない子に託す母の願いを成就するためには、材料が必要である。

この島の材であるならば、あの白い華しかない。

決して消えぬ痣のように残り、腐敗することのない素材で描く・・・。

朧様は、そこでも手を貸したのだろうか。

命を奪ってはいけないと言い続ける彼女は、そんな人の愚かな願いにも耳を傾けたのだろうか。

だから、その白花を今一度・・・使うことにしたのか。

この島で生きていく上にはまったく必要のない、他島の者であるという証を刻む理由と動機が私にはわからなかった。

「女にしか伝授できない調合がある。それを使って、俺には相手の男の紋を刻み、妹には自分の家の紋を・・・母と同じ紋を入れて、そのまますぐに妹を産んで死んだ。死体は、獣も蟲も喰わず、結局焼いた」

・・・だから、彼は妹の死体を焼こうとしたのか。

他の男の妻になったのに、彼の母は・・・この島ではなく、捨てた島の存在を遺した。

捨ててきた島の者が、この男と妹の紋を見れば、どの家とどの家が関与しているのかすぐにわかってしまうだろう。

彼が殊更に深く顔を見せようとしない理由も、人前に現れないようにしているのも・・・山の坊だからという理由だけではなかったのだ。

「女にしか伝わらない技術はもう誰も継承していない。だから、俺が死ねば・・・すべてが終わる」

「紋が死体が腐らせないのであれば、白花は必要ないのではないか」

私は疑問を口に出した。

ここまでして白花を摘まなくても、彼女の死骸は焼くまで誰も寄せ付けずなのではないのだろうか。

彼はゆっくりと首を横に振った。

「島を出るまで、長年、彫り師として染料を調合し、そしてそれを使ってきた者だからそうなのだけだ。夜追いは違う。額を遺し、手先は色に変化してきた。だから俺は・・・夜追いの言葉を伝える役割を買って出た」

「それで、全部を焼くためにはこの雨の中では・・・不都合だということか」

「濁った海に流すのも忍びない。あいつは俺と違って・・・この島の子だ。一度も、海に出られなかったが。母の業を引き継ぎ、その死まで穢される必要はない」

それでは、彼の感情だけで動いていたというのか。私は深く息を吸った。

島の者ではない証が遺されていたら、いつかきっと他島の者の耳に入る。

それを防ぐために、朧様に浄めてもらうことも考えたかもしれないが、そこまでして遺したものをなかったことにすることはできないのだと朧様なら言いそうであった。

「あいつは言っていた。中途の命である、と。そういう風に思う必要はないのに。義父も母の死後にすぐに死に、それからずっと・・・ふたりでやってきた」

そして彼は自嘲的に嗤う。

「島の者に蔑まれる者たちが生きる為に、更に蔑むべき存在を作る。人とはそういうものだ。そして、俺達は・・・自分の咎ではないことで罰せられた。生まれてはいけない命だと言われ続けて・・・そして妹はそれでも夜を追って死んだ」

■朧雨 55

「兄妹という情はわからない」

私は言った。

少なくとも、私にはわからない。

私の兄にはそのような感情が湧かない。助け合って、支え合って生きるということをしてきたはずなのに、それは遠い昔のことになってしまっていた。

私は朧様の傍巫女になることを選び、兄は違う路を歩くことを選んだ。

もう、わかり合うこともないだろう。

狭い島のことだから、話をすることもあるが、それは必要最低限のことだけだ。

できることなら、私の記憶も記録も抹消できないだろうかと思うほど、兄の所業を恥じていた。

労って慈しみあって生きることはもうないだろうと思っている。

すると、彼は嘲ら笑った。

先ほどの妹のことについて語る時の、優しくもの悲しい表情は消えていた。

「おまえが『トナミ』か。あの男の妹だというのに、随分と違うな」

私は顔を上げた。

この男が、私の名前を朧様が呼ぶのを聞いたときに、一瞬だけはっとしたように身体を止めたことを思い出した。

彼は、名前を知らないのではなく、私を知らないだけであったのだ。

彼の言う「あの男」というのはひとりしかいない。

私の兄のことだ。兄は、私にはひとりしかいない。

私の中で、警戒しろという声が響く。

彼は私の兄を知っている。

山の坊であるから油断していた私が悪かった。

あの人は良い意味でも悪い意味でも名が知れてしまっている。

私はそれを恥じている。とても。しかし、この島を捨てることはしない。

なぜなら、ここには朧様がいらっしゃるからだ。

「あの男を知っているのなら、余計なことは聞くな」

私は低く呟いた。これほど慈愛の深い兄妹の前では、私は変わった者であることだろう。島の者は総じて、情愛に深くどの家も邑も結束が固く、どんな状況でも弱者を見捨てない。・・・山に捨てる子以外は。

彼は珍しそうに私を眺め回した。先ほど私を殺そうとした男であるのに。今度は、私の存在を興味深そうに観察している。まったく苛立たしい。

「・・・彫りには細かく小さく尖った金ものが必要で、それを研ぐために母は島人の研屋に人伝に依頼していた。潮風で錆びるからだ。唯一、あの島から持ち出したものだ」

・・・私の実家の近くに、研屋がある。そして山の者を出したことがあるその家は、山の者たちに好意的で・・・破格の廉価で刀を研いでやっていた。

魚や獣や菜を切る刃は各々研ぎ方が違う。

だから家に研ぎ石があったとしても、結局は潮風にやられて錆びる。

もっとも、金物はこの島では殆ど手に入らない。

だから、この男のように獣の骨を繋ぎ、時には島の石を鋭く研いで使うのだ。

最近では、兄は妻の助言から、白砂を高温で溶かして刃物状に尖らせることに成功していた。

・・・私はじわり、と汗をかき始めていた。

兄は小さい頃からその場所に出入りしていた。子供達は神域と危険な場所だと定められた場所以外は、どんなところも出入りが自由であった。これは島の者がこどもは皆の共有の宝だと考えているからだ。

こどもを所有しない。

でも、だからこそ、時々・・・こどもを捨てる。

島の哀れで愚かな考え方だった。

彼が何を言いたいのか、わかった。

彼と兄はその頃からの知り合いなのだ。

その時には直接面識がなかったとしても。

そして、兄がどうして塑性や加工にあれほど深く知識を持っていたのかも・・・察知した。

この島の技術ではない何かを、彫り針から得たのだろうと思った。

ここに金物が入ってこないのは、運び込んでも潮風でやられてしまうからだ。

しかし。

細い針の金の状態になったものであるのなら、軽量でかつ持ち運びが楽である。塊を溶かすこともなく、加工が完了したものを島を幾つも巡回して数本手に入れるだけで大変な労苦をそれらと引き替えることもなくなる。大きく溶かすより、小さいものを溶かした方が燃料も多くを必要としない。

兄が、唆したのか。

疑問が幾つも生まれては消えていく。

海の泡のようにそれは無限に増えていく。

兄は言ったのか。

哀れな山の者に・・・朧様のおわす館の中には秘密があるのだ、と。

雨の日には人が少なくなり気配が消えるので朧様に会うことができるのだ、と。

私の兄だから、そんなことはないのだと言い切れなかった。

私の兄だからこそ、そんなことをしでかすかもしれないと思った。

確かに・・・この華から作った塗り薬を金物に付着させれば錆びることはない。
人々の薬として使っていた華であるが、そのような使い方を考える者は居なかった。

兄は、この男を使って試したのだろうか。それとも、この男が試されてやったのだろうか。
どちらにしても・・・利害が一致したのだろう。

朧様の慈悲の心に縋っているふりをしながら、彼らはこの島の掟や理やあろうことか海神の娘の
慈愛を弄んだのだ。

私は怒るより呆れてしまった。

ただ・・・彼らの愚かしさを目の当たりにして、どうにもならないほど理解できないと悟った
時に、人は・・・諦めてしまうのだと思った。

私の努めは、朧様の傍巫女をまっとうすることである。

彼らの気持ちを変えることではない。

どんなものからも護るということではなく、どんなものがやって来ても驚いたり逃げ出したりす
ることはしない。

それが、私という者の私自身が決めた役割だ。

兄から私のことを聞いていたのだろうか。

私がそんな話を聞いても、手引きするような者ではないことは、承知の上であったようだ。

「妹が傍巫女か」

「放っておけ。私は私だ」

私はむっとして言った。

「同じ兄妹でも違うものなのだな」

「当たり前だ」

私は言ってやった。

「あの男には注意することだ。信用すれば、それをまったく違った形で返す男だ」

「随分と手厳しいな」

ああ、もう、このことを話すだけでも心に波風が立つ。苛立った気持ちで神所に居るわけにはい
かない。

私は首を振った。

どうして・・・人は、人のために愚かしくなってしまうのだろう。

そして自分のために人は狂うことが出来るのだろう。

結局、この男も自分の気持ちを整理したいだけではないのか。

妹の夜追いは死んでしまった。彼はたったひとり取り残される孤独から救われたくて、このよう
な愚行を働いたのだから。

妹がそう望んだとは思えない。

夜が明ける前に永遠の眠りを得ることができて、安堵したのかもしれない。

本当のところは本人ではないのだからわからない。

この島の者になりたくて、この島の男の子を孕んだのに、彼の母はまた・・・山でしか生きられない、海に還れない子を産んだ。その時の驚愕はいかばかりかと思うと、哀れに思う。けれども、それで何をしても良いというわけではない。

自分の捨ててきたものに対して固執するのであるならば、なぜ島を捨てようと思ったのだろう。海に身を浸して海に還ろうとして・・・そして死にきれなかった。死にたかったのかどうかも、そもそもわからない。別の島に寄り生き延びようとしたのであるならば尚更、なぜ、捨てきれなかったのか。

戻りたいと思うのであるならば。戻れば良かったのだ。

この島に余計なものを持ち込み、余計な後始末を自分の子らに勝手に押し付けて逝ってしまったのに・・・それでも彼は自分の運命を受け入れている。

彼の何が、兄と共鳴したのか。

それも興味がなかった。

ただ、臙様を脅かすものであれば、私は許さない。

この白雨が許したとしても、私はただ否定するだけだ。

「トナミ、布はきつと返す」

「いや、布ごと焼くのだ。すべて焼け。・・・お前の望み通りに。

ここにはもう来るな。少なくとも、私の目の前には現れるな」

私は言った。強くきつく言った。

人が何かを遺したがる時には、いつも決まって、それを託したい相手がいるからだ。彼は孤独に打ち克つために、それを焼かなければならない。

それから私は彼を拒絶した。

「私の名前を呼ぶな。卑しき山の民よ。心根を腐らせるのであるならば、おまえも炎と一緒に焼かれろ」

「気高き傍巫女。おまえはいつか・・・彼女を焼けるのか」

彼はそう言ったので、私は口を噤む。

「いつか、彼女が永遠でなくなり、滅びる時が来た時。おまえは、骸を焼くことができるのか。愛おしみ、生きていて欲しいと願い、何もしてやれなかったと悔やみながらも生きていかなければいけない時。おまえは・・・あの人を心から楽にしてやるために、自分がずっと苦悩することになったとしても良いと思えるのか」

「臙様は死なない」

「それは答えではない」

彼はそれだけ言うと、両腕を上げて、また、被り物を深く被った。

人の気配を感じたからだ。

それはつまり、雨が間もなくもっと小さくなることを示す。

けれどもそれは雨上がりの青空を呼び込むことはない。

これから・・・大きな禍がやって来る。

海が濁る。

それは大きな問題であったが、対処できないものではない。

「・・・あの男を信用しているつもりもない」

彼は低く言った。

「金物が少なくなってきた。そして、研ぎ料をいつもより高く定めなおし、この島で独占しようとしている。それを提案したのは、あの男だ。

・・・彫り師は研ぎ師でもあるからな。漏れ聞いた技術を独占しようとするのは・・・この島の者らしくない考え方だ。俺は嫌いではないが、あの男には味方と同じ数だけ敵もいる」

■ 朧雨 57

彼が去って行ってしまった時。

私は、ただぼんやりと白雨の名残に打たれていた。

激しい雨であったのにいつの間にか激しさは遠のき、穏やかな小雨に変化していた。

それでも、空は明るくて、この雨がいつもの雨と違うのだと思いながら目を細めた。

彼が言い残していった言葉を思い返す。

「俺はまたここに来る。トナミ、俺はあんたが気に入った。変わり者の傍巫女よ。また会おう」

「断る」

私はそう言ったのに、彼はまったく聞いていなかった。

彼の母も別の島で傍巫女であったのだから。

私に興味があるのではなく、私の職に興味があるのだ。

男性と交わることのない生を選んだ私は、もうそれ以上彼と顔を合わせることはしたくはないと考えていた。

しかし。

私の心の海に濁りを与えた。

彼は、私に疑惑と猜疑の存在があることを知らしめた。

自分が朧様のために死にたいと思っていることも。

自分が朧様のためにと行ってそれを言い訳にしていることも。

皆、白雨のもとに明らかになってしまった。

だから、もう、会いたくなかった。

彼は私の醜い部分を曝け出す。愚かしい卑しい者と口で言っておきながら、最も愚かで卑しいのは他ならない自分自身なのだと思い知ったから。

自分が朧様は決して私が知らない者と会話することもないという絶対の自信が打ち砕かれた。

「俺とあんたは同じだ。ここではないどこかなどはないと思っているのに、どこか違う海を探す。ああ、やはりあんたは、あの人の妹だよ。そういうところは・・・似ているな」

私が睨むと、彼は何も言わず急に背を向けてこの場を勢いよく離れて行った。

私の渡した白花の包みを抱いていた。

これから彼は、海の濁りが消えるまで・・・雨が止むまで、骸と過ごすのだろう。彼だけが彼女の傍にすることができる。そして、華の匂いを嗅ぎながら・・・彼はその躰が、彫り物に使われた染料で耐性ができていることを良いことに、夜追いと言葉のない会話を繰り返すのだろう。

ようやく・・・何もかもから解き放たれて自由になった魂の抜殻を見ながら。

そこに長居すれば、彼の身体もいつか焼かなければならなくなることを承知の上で。

土にも、海にも還れなくなることを承知しながら、彼は妹を弔う。

私は、それほどまでに兄に愛されていない。

私も、それほどには兄を愛していない。

支え合って、手を握りあって・・・朧様を見上げて見惚れていた日々はもう帰ってこない。

私は朧様の近くで生きることにした。そして彼はもっと違う方法で朧様を忘れないことにした。

それがたとえ、誰を傷つけても。誰を瞞しても。誤魔化しても逃れられないと思いながらも、それでも昏い焰を消し去ることはできない。

私は、見知らぬ夜追いのことを思った。

海追いと呼ばれていた・・・夢を見ながら未来を見る者のことを思った。

夢の終わりに、言葉を発し、それきり息途絶える定めのが、居る。

滅多に生まれることはないと聞いていた。

でも、重大な島の危機を彼は放置せず、それを取引の道具に使わなかった。

何かを捧げなければ、朧様は願いを聞くことはない。
そして、何でも願いが叶うということではない。
彼は・・・彼の妹を見送るために、自分の命を差し出した。
これから先にはずっと孤独であることを知りながら・・・妹の骸を焼きたいと願った。灰にして、
風に乗せて海に戻したいと思った。
そして。彼女の骸を長雨の間だけは独り占めしたいと願ったのだ。
その間、彼はどんな話をするのだろうか。
ただ黙って・・・ひとり孤独と向き合うのだろうか。
己と血が繋がった妹の顔を見ながら。
彼は、自分がひとり残されたことについて何か思うのだろうか。
彼の供物は様々であった。
それほどまでにしても・・・彼女を安らがせたいと思った兄としての哀切極まりない感情をあの男
は持っている。

・・・私には持てない感情であった。

雨が小さくなり、朧様が何か指示を出したのだろう。
急に館が慌ただしくなった。

■朧雨 58

ひとり、残されて私は生け籠の狭間で立ち止まったままだった。
雨で砂利を敷き詰めた周囲は、濡れて少し色を落としていたものの、空の明るさを反射して輝いていた。

これまで私が見たことがないほどの白い輝きであった。

消えゆく命を見送ることは辛いことだ。

でも。

いつ消えるかわからない命と一緒に居るのは同じくらい辛いことなのだろうと思った。

ただ、その時を迎えるだけ。

待つだけ。

いっその事、ここで終わりにしたいと思ったこともあっただろうに。

それまでの白雨が激しすぎると感じていたのに、去って行くときにはもう去ってしまうのか、と思うのと同じであった。

この島で生きるいきものの命は、朧様の命の長さよりもずっと短い。
彼女より長いのは、太陽と空と月と・・・海と島そのものだけであるとさえ思われた。

これほど小さい島であるのに、私の知らない邑があり、私の知らない命が終わる。

夜が明けて、夜が更ける。
日が昇り、日が暮れる。
潮が引き、汐が満ちる。

毎日、それを繰り返して・・・その声を、朧様は聞き続けている。
始まりの声も終わりの溜息も。朧様には聞こえている。

風が吹いていく。雨上がりの温度差がもたらす風だ。

私は、何もかもから置いて行かれる。
島の者たちの「今」からも。そして、山の者たちの「今」からも。
声を聞くことはできない。私には何も備わっていない。
海神様が私に・・・誰かと何かを共有することをお求めになっていないから。

でも思うのだ。特別な何かを備わっていないからこそ聞こえる声や風があるのではないのだから、と。

私は平凡で何も持ち合わせていないことに苛立つことがある。でも、それが私の基準で、私はそれをもって・・・生きることについて考えよ、と問われているのであれば。

永遠とされる朧姫の傍で、永遠ではない私の何が役に立つかはわからなかったけれども。

朧様と生きたいと思った。孤独を知り、昏い闇夜を見上げ、月が出れば一緒に眺め・・・海の浪に身体を浸す。

私の命が続く限り。
私の命が・・・朧様の傍に居て良いのだと許されている限り。

疑うことは簡単だ。
そしてそれは自分を正当化して居るからこそ思えることであった。
私は自分が正しいと思わない。

疑うことを否定するのではなく、疑うからこそいのちなのだ・・・
誤るから・・・いのちなのだ。

私は、私の命の中で問いと答えを繰り返す。
朧姫という永遠の命の傍で。
私は、まだそれを解決に導いていない。
私の命はひとつだけで、繰り返すことはない。
だからこそ・・・私は私でありたい。

「・・・解決したか」
人の気配だと思ったのは、朧様であった。
渡り廊下の柱に凭れ掛り、彼女は腕を組んで私を見ていた。
人よりももっと近いところに居た。

美しい光景であった。
途切れ途切れの雨の中で・・・漆黒の髪を持ち、濡れたような瞳を大きく見開かせて彼女は佇んでいた。
朧様が、雨の時に人前に出ない理由がわかった。
今になって。朧様は、私の顛末を見送る。

■朧雨 59 (最終回)

私は静かに言う。
「解決・・・それにはほど遠いかもしれませんが。
・・・雨の終わりには相応しいのかもしれませんが」
「そうか」
朧様は、渡り廊下の隅で・・・ひっそりと佇んでいた。
いつから居たのだろう。
私を知る限りで、最も清らかで最も美しい人は・・・いつの間にか、私の背後に居た。
驚くことはあっても、非難することはない。
彼女には、すべてわかっていたことなのだろうか。
雨は終わりそうで終わらない。
これから起こることを知らされても彼女は動じることはなく、いつもと同じ様に落ち着き払った様子であった。ただ静かに・・・彼女は見守り続けるのだろう。

「・・・見守るのが私達の役目だ。ただ、それだけだ」

彼女は小さくそう言った。私は何も言う事が出来なかった。

そうですか、と言うことすらできなかった。

彼女と同じ様に、島には各々巫女姫が居る。そして海を通じて彼女達は会話する。

彼女は、私達、と言った。

・・・きっと、託されたのだろうなと思った。

身重の女が流れ着くほど島と島の間は近い距離にあるわけではない。

何かの加護があったとしか考えられなかった。

傍巫女が孕んだのだ。それは禁忌以前の問題で、あってはならないことであった。それなのに生き存えて、この島で生きた。たとえ、彼らが島の者になりきれなかったとしても。

海に還れないとわかっていたのに。

それでも、生きた。

臙様は咎めなかった。

ここで生きることを許した。

たとえそれで・・・この島が変化したとしても、彼女は命を奪わなかった。

その女が外から持ち込んだものの大きさを知っていながら。

理由は簡単だ。

命の重さを知っているから。

儂さを知っているから。

臙様は様々な命の願いを引き受けている。願いを叶えるという意味ではない。命が始まり、終わっていく一部始終を見つめて過ごす。そして、決して・・・自分を引き受けて欲しいとは言わない。

あの男の母は、巫女姫の心の中を覗いてしまったのだろうか。

そして逃げ出したのか。

誰かを愛したくなって、自分の命を残したくなって・・・

わからない。けれども・・・島を捨てきれず、還ることもできない者の悲哀を臙様が聞いていらしたとしたら。

私は自分の主に向かって微笑んだ。

「私は、貴女様を見るだけです。これからも、ずっと。傍におります。これまでそうしてきたように。」

私はそれだけを言うと、背筋を伸ばし、そして言った。

「雨に濡れてしまいます。中にお入りください」

表情を変えないで、臙姫は私に軽く首を傾げるだけだ。

いつもの通り、彼女は穏やかに静かに・・・雨を眺めた。

彼女の心は、この雨のようにいつも泣いているような気がした。

空は明るいのに、雨は降り続ける。

彼女の雨は・・・いつ、止むのだろうか。

「これから邑長と会合だ。・・・雑事が増える」

「心得ています」

私はそう言った。朧様は彼らの会合には口を差し挟むことはしない。ただ黙っているだけだ。決め事には荷担しない。けれども、彼女は海の濁りについて対応できる限りのことをするのだろう。

そして、それでも海に出るという者を、止めることはしない。

相反する行動のようであるが、海巫女はそうやってこの島を見守って来た。

気の遠くなるような年月を、ずっとそうやって過ごしてきた。

「行くぞ」

彼女はそう言った。私はい、と頷いた。

私は、彼女の傍に居る。

彼女の白雨がそれで止むとは限らないが・・・彼女の昊に晴れ間が広がる気配を彼女が感ずるように、と祈り続ける。

私は朧様の後に随って、そのまま館の中に入った。

そして。

・・・夜追いの言葉の通りの惨事が起こった。海が濁り、人々は混乱した。それでも朧様は淡々と日々を過ごした。いつもの通りに。

兄は海を鎮めろと朧姫に訴えたが、朧様は聞き入れなかった。

それが兄を更に執着させることになったとしても。

彼女は・・・ただ、海を眺め続ける。

山から煙が上がった時。

雨は止み、海は静かに元通りになっていた。

そして・・・その煙が止み、皆が待ち望んだいつもの通りの朝に・・・私があの時にくれてやった

布が、雨上がりの樹の近くで見つかった時。

館の樹に、白い華が蕾をつけた。

私は今日も、華の世話をする。

この島の海神の娘のために。

(FIN)

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

■01

「どっちの味方なの」

これはアンジェの決り文句だ。

アンジェがマリナと不仲なのは有名な話で・・・不愉快な話を耳にしたアンジェは決まって僕を呼び出して、その都度、詰問する。

それは僕が言っていることでもないのに、あたかも僕自身がそう言っているような勢いでアンジェは憤る。

「どっちの味方なのよ」

僕は困って返答に詰まる。

その様子が、ますます彼女の癪に障る。

「ああ、あんたは一体どうしてそんな風に・・・いつも煮え切らないのよ」

白黒はっきりつけると言われる僕の方が、困るのだけれども。

でも、怒っている顔のアンジェは最高に愛らしい。

頬が紅潮して、目が見開いていてますます大きく見える。

「僕が言っているわけではないよ」

「あんたはそれで、その場で聞いているだけなの？」

生粋のお嬢様であるはずのアンジェは時折こうやって口調が荒くなる。

ま、それにも理由があるからなのだけれども・・・

僕はアンジェの顔を見上げた。

黙って居ればお人形さんのように愛らしいのに、彼女はとても情っ張りだ。

その姿がマリナととても良く似ていると言ったら、彼女は僕に張り手を喰らわすのだろう。

「アルディ家の家訓を知らないの！やられたら倍返しよ！」

・・・シャルルがアンジェをこよなく愛する要因が、マリナと気質が似ていることだと知っているのかそうでないのか、アンジェはいまひとつわからないところがある。

しかし僕とアンジェは互いに違う人間だから、わからないところがあっても仕方が無いと思ったりもする。

僕とアンジェは年齢が離れているけれども、対等に口を利く僕に、アンジェはいつも大人の態度を取らない。

というより、僕より小さいこどものような喧嘩を仕掛けてくる。

仕掛けられた喧嘩は受ける、と言われて育ったけれども。

アンジェはどうも、アンジェから喧嘩を吹っ掛けているような気がしてならない。

けれども、それを指摘するとまた怒り出して、最後には地団駄を踏む。

その姿さえ、マリナに似ていると言ったら、彼女は憤死とか悶死とかしてしまいそうだった。

「いい加減、マリナを意識するのはやめたら？」

過剰反応についてはこの間シャルルが論文を・・・いて！」

アンジェがそこで僕の額を素早い動作で平手で打ったので、僕はあやうく舌を噛みそうになった。

軽く睨みただけれど、そんなことくらいで怯むアンジェではなかった。

でも、一応、言ってみる。

「アンジェ、危ないじゃないか」

「それくらい除けられなくて、どうするのよ。運動神経の鈍い者は、あたしの周りに存在しないわよ」

僕の抗議はあえなく却下された。

アンジェは辛辣にそう言うと、次に嘲ら笑った。

まったく、あの口調は、シャルル・ドゥ・アルディ譲りと言うしかなかった。

彼女は誇り高くて、いつも気難しい。

そして、彼女の中心にはシャルルしか存在しない。

■02

だから、今回もまたアンジェの機嫌を損なう出来事があって、それでやり場のない憤りを発散させないと済まされないという状況であったようだ、というところまで推測できたのだけれども。真っ先に、僕のところにやって来るとするのは、アンジェがそれだけ僕を信頼しているということなのだろうか、と思うと少し嬉しくなる。

その様子を、彼女はくるくるとよく動く大きな瞳で非難した。

「あんたに甘えているわけじゃないのよ。・・・暇そうにしている手頃な人で、かつ、あたしのことを少しも理解しないあんたに、呆れ返るほど辛抱強く言い聞かせて遣っているのよ」なるほど。

つまりは、誰も彼女の憤懣に聞く耳を持たないのだろうということか。

僕が微笑むと、アンジェはまた、憤怒の焰で僕を燃やし尽くしそうになるほどの感情をぶつけるのだ。

僕が、彼女が何を言っても、決して弱音を吐かないことを承知しているらしい。

それは僕のことを理解してくれていると思って嬉しくなる一方で、アンジェは僕が彼女を理解していると固く信じているので、それには哀しくなって消沈してしまう。

彼女は気儘なアルディ家のお姫様だ。

あの、シャルル・ドゥ・アルディの愛嬢であり、特別の思い入れがある。

けれども、アンジェは、シャルルから愛されているのは、彼女の存在そのものというよりも、彼女がマリナの娘だからなのだということに気がついていて、そのことに深く傷付いていた。

シャルルも、もう少し・・・アンジェに夢を見させてあげても良いと思うのだけれども。

ああ、こんな風にシャルルを非難してはいけないのだった。

なにせ、彼は、フランスの華であり、この家の主であるのだから。

長い放浪と糾弾を経て、彼は今の地位に居る。

その昔の当主の仕事よりだいぶ質も量も変わったけれども、忙しいことには変わりがない。

だから、少しでも時間が空くと、思い切りアンジェを甘やかす。

それが彼女を淋しくさせていることに、シャルルは気がついて居るのだろうか。

どんなに愛していても、マリナへの愛とは違うことに、アンジェは気がついて居ないわけではない。

でも、彼が絶対だと言って、彼はアンジェの運命の人だと宣言するのだ。

そう言われると、僕は胸がきゅっと締め付けられるような感覚を覚える。

瞬時に力強い締め付けではない。じわじわと・・・それでいて苦しくて耐えられないと思う直前で、それが和らぐ。

それは、アンジェが満面の笑みでシャルルとの時間について、細かく僕に報告するからだ。

どんな仕草をしたのか、どんな話をしたのか、アンジェのその時の服装についてどんな誉め言葉を遣ったのか・・・シャルルの行動の逐一を僕に言う。

アンジェは、細かい様子を僕に言うことによって、どんどん生き生きとしてくる。

彼女の薔薇色の頬や、きらきらとした瞳や、シャルルの口調を真似する健気さも僕にとってはすべて愛おしい要素にしかならない。

でも、全部を肯定するとアンジェは不機嫌になる。

シャルルが、マリナのことを話した、と僕に報告するからいけないんだ。

アンジェは気に入らないことも均等に報告する。

それは彼女の素晴らしいところなのかもしれない。

だって、彼女は自分の気に入ったことや、耳に良い言葉しか受け入れないわけではないから。

どんなに不機嫌になったとしても、どんなに消沈したとしても、彼女はそれでも、シャルルの全部を知りたいと思っている。

それは、アルディ家の血がそうさせるのかもしれないけれど・・・

アンジェのいじらしい様子が、僕に微笑みをもたらす。

嗤った、とアンジェは怒るけれど。

「あんたを見ていると、苛々するのよ」

アンジェは僕に関しては容赦がないというか、遠慮した物言いはしない。

でも僕はそんな言葉では傷つかない。

彼女は傷つかない言葉でもって僕に関わろうとする。

その手段があまりにも拙いから、ますます、もっと見つめていたくなってしまう。

愛と憎は表裏一体だけど、決して逆の意味を持っているわけではない。

愛の裏側は憎だけれども、愛をすることの反意は無関心であると僕は思っている。

だから、アンジェは優しいのだと思う。

彼女は不器用だけれども、誰かと関わろうとしている。

常に。

いつも。

あの気難しいシャルルが、アンジェをこよなく愛しているのは、そういうところなのだろう。

どんなに落胆しても消沈しても絶望しても決して希望を失わない。

そして何度でも繰り返す。

アルディ家の者は、どこか特殊というか奇妙で、決して反復することはない。

だから、自分の求めた答えを用意できない者は排除して、少しでも自分の中の関係者名簿から削除しようとする傾向にある。

それではいけない、とマリナは言う。

かつて、彼女も、名前だけを列挙した名簿を所有していたという。

でも、それは未来を紡がない、と言った。

「出会いがあって別れがあって、別れてまた出会う。

それを簿にはしてはいけない。記録にはしてはいけない。

思い出や記憶という人の心の中に保存すべきものは、そこにしまわなければならない」

マリナの言葉を聞いて、アンジェは何か思ったのだろうか。

それ以来、僕に対しては、無視することはなかった。

それまでは存在そのものを否定していたのに。

それとも、彼女の過去にリンクするのだろうか。

どちらにしても、それはアンジェの中にだけ存在する理由であった。

僕が彼女に虐げられても、それでも彼女を見続けることをやめないように。

彼女には、彼女の目的と理由がある。

生きるという結論に向かって。

彼女の、膨大な記憶容量には、アンジェが一生で接する者の名前や国籍や最終更新年月日や・・・そのほか様々な情報について、忘れることは決してないというのに、アンジェはいつも、それらについて思考していないかのように振る舞う。

つまり、誰に対しても無関心ではられないのだ。

数多存在する使用人であったり、学友であったり・・・誰が、どんな風を感じているのかまでつぶさに観察しようとするから、彼女の神経は摩耗してしまう。

それが、マリナにとっても似ていて、シャルルと近い性質なのにも関わらず、彼女を彼女たらしめているのだと知ってか知らずか・・・

いや、彼女はきっと知っているのだと思う。

優しく、優しすぎて、優しくなれない人が、ここに居る。だから僕はここに居る。

■04

アンジェの憤りが始まったのは、彼女が薔薇園に植えられた彼女の薔薇を摘み取ろうとして、僕がその薔薇はまだ少し早いのではないのかと忠告したからだ。

こんなに朝早くから彼女が起き出すのは、まったく珍しいことだ。

彼女が早朝から起き出して庭を散策するのは、僕の知る限り、シャルルの誕生日と自分の誕生日くらいだ。

アンジェは朝露に濡れた薔薇をうっとり眺めていた。

天使の降臨のようだった。

アンジェは本当に可愛らしい。

柔らかい髪に、薔薇色の頬。朝露に濡れたような瑞々しい唇に、華奢な体に細い首。

こめかみから顎にかけての線が極めて美しく、長い睫毛が瞬きする度に音を立てるようだった。

彼女の名前がアンジェというのもその通りだと思うくらい、彼女はこの世のものと隔絶しているのだと思う。

見惚れている僕に向かって、アンジェが言った。

「あたしの薔薇よ。シャルルが、あたしのためだけに開発してくれた薔薇なのよ」

エバーグリーンという名前の薔薇は、アンジェのためにシャルルが創ったものだ。

柔らかい翠色のそれは、近寄ると微かに甘い清純な香りがする。

まるでアンジェのような香りだ。

その他の薔薇は、皆、一様に名前がついている。

どんな品種でも同じ名前だ。

それらは「ファミ・ファタル」と名付けられて、決して外に出ることはない。

アンジェは欲深なようで、大変に無欲だった。

エバーグリーンを後生大事にしている。たった一つだけを。

僕がもしアンジェなら、もっとたくさんの品種をシャルルに創って欲しいとねだると思う。

その時は、マリナのことではなくアンジェのことを考えているからだ。

彼の知性溢れる、常人の及ぶところではない頭脳は常に様々なことを考え続けて居る。

人間嫌いで有名な彼が、唯一、想い続ける相手がマリナであった。

まるで彼だけが夢中になっているかのように、マリナは彼に対してとても距離を保っている。

それがアンジェの気に入らないものであることを承知しているようだ。

でも、それが長い時間をかけて彼と彼女が出した結論であって、シャルルはそれを受け入れているように思う。

だから、今でも、彼らは恋人になりたての者同士のように大変に愛情深く初々しいままでいるのだろうな、と思った。

シャルルは幼い時から家族に恵まれていなかったから、こういう穏やかな時間が長く続いていることに多少、戸惑っていたようだけれども。

「なぜ、シャルルはあんな女に夢中なのかしら」

アンジェはまた独り呟いた。

「アンジェ。アンジェの薔薇にそんな暴言を浴びせたら・・・花がかわいそうだよ」

「うるさいわね」

きっと僕を睨み付けるけれども、それがまた愛らしさを失っていないので、僕は苦笑した。

手放して愛すべき存在というものは、どんな状況でもどんな精神状態でも、何とも愛おしい。

「その薔薇はまだ早いとか、薔薇が哀しむようなことをするなとか・・・あんたの忠告はおせっかいと言うのよ。あたしはそんなこと最初からわかっているのだから、しばらく黙っていなさいよ」

僕は肩を竦める。気難しい我が侘な姫は、僕が傍らに居ることは否定しないのに、僕が話しかけると怒り出す。でも、それでもアンジェは僕を遠ざけない。だから僕は彼女の傍に居る。

■05

「アンジェは、シャルルを独り占めしたいの？」

あれこれと大きな瞳をきらきら動かして、最高の状態の薔薇を探すアンジェの背中に僕は尋ねた。

シャルルから手ほどきを受けていないから、彼女は薔薇を探すのに四苦八苦している。

本当は、その場で「最高か」どうなのかはわからない。

そのもっと前から、いつ頃に開花の時期なのか、ひとつひとつを丹念に調べて、その時期が到来

した時に、更にその中で最高の状態の薔薇を選ぶのだ。

だから、アンジェのように、気まぐれにその日突然薔薇を選ぶことなんて、至難の業なのだ。だって、これだけたくさんの薔薇が咲き乱れているのだから、ひとつひとつを眺めながら選び取る時間は膨大になる。

わかっているんだ。

彼女は、シャルルが薔薇を選ぶ方法を知っている。

彼女の知能は低くはない。

アンジェは、でも、それでもシャルルに褒められたくて、ひとりでこうして時間をかけて薔薇を選ぶのだ。

いつの間に覚えたのかな。

さすがだね。

たった一言だけ。

たったひとつの誉め言葉だけが、欲しいだけなのだ。

もっともっと……と、願えば良いのに。

彼女は、そう願って良い資格がある。

それなのに、貪欲に求めない。

ひとつが成就するまで、それだけに固執する。

アンジェがいじらしいと思うのは、そんなところだった。

そういう風に言って欲しくて、彼女は朝の庭園をひとりで彷徨うのだから。

僕の問いに、彼女は肩をぴくりと動かした。

彼女の髪が持ち上がったので、それが凶星なのだと確信した。

でも、彼女は首を振った。

あんまり大きく頭を振ったので、彼女の髪がばさばさと音をたてた。

まるで、天使が羽ばたくときの音のようだった。

アンジェは、その名の通り、天使だった。

シャルルの天使だけれども、彼女は僕にも天使に見える。

どうして彼女のアンジェという名前をつけたのか、聞いてはいたけれども、彼女は本当に天使だった。

天使のような、という感想ではない。

アンジェは天使そのものなのだ。

シャルルがどうして彼女を「オレの天使」と言うのか、僕は理由を知っている。

そう呼んでいる愛すべき存在が居るのに、シャルルは決して鎮まらない。

マリナでさえも彼を常に安らがせることが出来ない。

だから・・・だから、マリナは彼女を生み出したのだと理解している。

マリナはシャルルのファム・ファタルだ。

その存在が生涯を伴いすると誓ったのに、それでもシャルルは薔薇の品種改良を続ける。

それらすべてにファム・ファタルと名前をつける。

でも、それが終わることはない。

たぶん、終わることはない。

■06

「独り占めしたいと思う瞬間に、独り占めできないことを認めたようなものだ」

彼女は諳んじる歌の一節のように、そう言った。

僕はアンジェの声が好きだった。

まったく違和感のない、心地好い音楽のような声。

柔らかいのに、一度聞いたら忘れない声。

・・・完璧な発音であるのに、彼女の声は独特であった。

僕は、その瞬間に背筋が泡立つ。

畏れを感じているわけではない。

彼女の声が。

彼女の声、皆を癒し惑わす。

すべてを凌駕するからだ。

すべてを散逸させるからだ。

それはシャルルの声に似ている。

男性の経験を積んだ人物であるのに、彼の声は皆に行き渡るように計算された波長で発せられる。

それなのに、マリナやアンジェの前では、彼は不特定多数に対する接遇方法と違うのだ。

当たり前かも知れない。

彼女達は、彼の特別なのだ。

特別という言葉では言い表すことは出来ないのだから。

彼女は、フランスの華の「オレの天使」と言わしめるだけの人物なのだ。

親族会からどんなに反対されても、東洋人であるマリナ・イケダの娘であるアンジェは、肯定されるべき存在であった。

アンジェの中で、僕がアンジェにとって、シャルルの次のそのまた次の・・・もっと遠い存在であることに不満はない。

と、いうより、不満がない。

だって、僕は・・・僕の生まれて来た理由を知っているから。

「独り占めしたいけれども、シャルルはそれを望んでない」

アンジェは溜息混じりにそう言った。

僕は何も言えなくなってしまった。

だって、彼女の本当に望むことを僕は叶えてあげることが出来ないし、シャルルにそのことを告げることもすら禁じられているのだから。

つまり、僕に吐露する彼女の願いは、シャルルに伝わることはないのだ。

なぜ、彼に伝えることが出来ないのだろうか。

アンジェは、シャルルに彼女の気持ちを伝える権利と義務がある。

シャルルは常に、彼女の願いについて思いを馳せているのだから。

でも自分の望む事が、シャルルを幸せにすることに直結しないとアンジェはわかっているから。

だから、アンジェは何も言わないのだ。

だから、アンジェは何も言えないのだ。

アンジェはどうしてもっと我が侘に、シャルルに願い事を言うことが出来ないのだろうか。

彼女の喜ぶ顔が見たくて、シャルルはファム・ファタルと言う名前しかつけない品種改良の薔薇のなかに、「エバーグリーン」という名前の薔薇を創りだした。

彼が。

シャルルが。

ひとりだけしか愛せないという彼の芯根の表れであるはずの「ファム・ファタル」たちの中で、たったひとつだけ咲き乱れる「エバーグリーン」の意味について、アンジェがわからないはずはないと思う。

シャルルは彼の心の妻であり生涯の妻になるマリナの他に、誰かを愛することを認めたのに。

それが、シャルルを哀しませる。

それが、アンジェを哀しませる。

シャルルがアンジェのことを気にかけるのは、彼女が愛した人そのものではなく、彼の因子を含んでいるからだ。

少なくとも、アンジェはそう確信している。

彼女が、マリナでもなく、シャルルが愛した者達との誰も重なることなく、彼女が彼女だけしかシャルルのなかで占有できない場所に存在することを、アンジェや知っているのに。

それを、確かめたがるのだ。

それは、マリナの性質ではなく、シャルルの質だとアンジェはわかっているから。

好んで隠そうとしないでシャルルにそれをもって問いかけるのだ。

彼がそれを受け入れると知っているから。

でも、それをシャルルが受け入れても、アンジェは安らがない。

シャルルが運命の人を得ても決して完璧な安らぎを得られないように。

アンジェはシャルルを得ても決して安らがない。

完璧な安らぎを与えることは出来ないし、完璧な安らぎを創り出すことはできないと悟ったのだ。

。

■07

「アンジェは、アンジェだけしかできないことがたくさんあるってことを、よく知っていると思うけれど」

僕がそう言うと、彼女はますます憤る。

でも、彼女がそうやって感情に漣を立てるのは、それが正解だからだ。

何度叱られても怒られても、僕はアンジェにそう言ってしまう。

これはなぜなのだろうか。

他の人には感じないものを感じるからだろうか。

彼女は多くの者から愛されている。

それなのに、孤独を感じている。

どんなにカズヤやダイや・・・彼女の誕生を心から祝う者達が、彼女に会いにやって来ていることを知っていても、それでも彼女は時折どうしようも抑えきれない哀しみを放出させないと、自

分を保てなくなりそうだと言う。

最愛のシャルルから、讃辞や愛に溢れたキスを受けても、彼女はそれでも満たされない。

だから、他の人は「あんなに愛されているアンジェは幸せだ」と決めつける。

でも、アンジェはその言葉を聞いてまた傷つく。

当人の幸せは当人が決める事で、誰か他の人がそうであると定めることはできやしない。

「わかっているわよ。だからこうしてシャルルのために薔薇を摘むの」

少しふて腐れたような声が聞こえてきた。

彼女はこちらに顔を向けずに、一心不乱に薔薇の蕾を探しているからだった。

彼女はどうやら、彼が目醒める直前に花開く薔薇ではなく、蕾を捧げるつもりらしい。

なるほど。

それではシャルルはその薔薇が満開になるまで、新しい薔薇を用意することができない。

「それなら・・・ああ・・・そっちじゃなく、少し離れたあちらが・・・」

「ああ、もう、少しは黙って居られないの」

アンジェがとうとう痙攣を起こした。

きっと僕を睨みながら、振り返った。

彼女のふわふわのドレスと、ふさふさの髪がばさりと音をたてた。それだけ勢いよく振り返ったのだ。

険を含んだ目が僕を見る。

僕はどきりとして口を閉ざした。

彼女の頬は紅潮していて、そして目元に怒りではなく嘆きが浮かんでいたからだった。

柔らかい唇はきゅっときつく結ばれていて、ずっと伸びた鼻がつんと上を向いていた。

天使が僕に何かを訴えようとしていた。

彼女の背中には、羽が見える。

名前の通りだった。

僕はアンジェのそんな様子にすっかり心を奪われてしまっていたが、彼女はそれどころではなかったらしい。

「あたしはあたししかできないことをしているの。

あんたの言うとおりにしていたら、楽かもしれないけれどもそれじゃ駄目なのよ。

ひとりじゃ何もできないあたしなんて、いらないの。・・・そんなことくらいわからないの？」

その勢いの激しさに、僕は彼女を鎮めようと、アンジェに近寄った。

「アンジェ、落ち着いて」

「放っておいてよ」

アンジェはとうとう、小さな足で激しく地面を踏みならして憤りを噴出させた。

そして、近寄った僕の両肩を激しく押した。僕はその作用で地面に激しく腰を打ち付けてしまった。

でも、痛みはなかった。

アルディ家の薔薇のために用意された上質の腐葉土が盛られた柔らかい地面ではせいぜい服が汚れるくらいだった。

「あたしはね、シャルルの天使なのよ。

あたしはシャルルを安らかにするために生まれて来た。

それなのに、シャルルは、哀しそうな顔をするのをやめはしない。

シャルルは何でも持っているけれど、何にも持っていないと思っている。

持つことによって喪失を感じている。

家族ができて大人になっても、当主になって何でも持つことが出来たけれど、彼はいつも孤独を感じている。・・・手に入れたものと同じくらい、失ったものがあるからよ」

そして、そこで大きく息をついた。

小さく、ぽつりと地面にその続きの言葉を落とした。

空に向かって言うてはいけない、とアンジェは知っていた。

誰にも教えられていないのに。

彼女は、天から舞い降りた天使だから、空に自分の言葉を還してはいけないのだと知っていた。

彼女の嘆きを知っているのは・・・このエバーグリーンと名付けられた薔薇と、僕だけだった。

「シャルルは捨てちゃったの。

・・・シャルルが誰かを幸せにすることで幸せになれるということを彼は手放してしまったの」

アンジェは俯いて、それだけを言った。

僕は何も言ってあげることができなかった。

彼の究極の愛が、相手が生きて幸せであれば自分は傍らにいらなくても良いという愛だと、アンジェは知っているのだ。

シャルルはマリナを愛しすぎている。

独り占めできないほどに。

自分で幸せにすることが、自分が幸せになることだとは思っていない。

渴望するほど愛を溢れさせているのに、それでもそれを誰かに受け止めてもらいたいと思っていない。

マリナ以外は。彼のファム・ファタル以外には。

マリナにそれを受け止める器が大きいから、彼は壊れることなく、無限に愛を注ぎ続けることが出来る。

でも、幸せになれと言うけれど幸せにしてやるとは言わない。

僕は、少しだけシャルルの気持ちがわかる。

僕だって、アンジェが笑っていてくれれば、とても幸福な気持ちになる。

歎いていれば哀しいし、怒っていればそれを排除してやりたいと思う。

でも、僕を選んで欲しいという気持ちは、二の次なんだ。

「シャルルはマリナやアンジェを十分・・・幸せにしていると思うよ」

また彼女を憤らせるとわかっていたけれども・・・僕からは陳腐な慰めの言葉しか出なかった。

■09

「そんなことわかっているわよ」

彼女は首筋まで桜色に染めながら、耳を赤くして僕に叫んだ。

「それじゃだめなのよ。シャルルが幸せにならないと、だめなのよ」

「それなら、アンジェの幸せはどこにあるんだよ」

僕は堪えきれなくなってそう言った。

「シャルルのことばかり考えて、シャルルの幸せのことばかり願っていて、アンジェはそれじゃ・・・シャルルと同じだよ」

「少し、黙っていてよ！」

アンジェはとうとう、後ろに倒れて地面に腰をついてしまった僕に向かって、涙を流しながらつかみかかった。

彼女は感情を制御できない時があった。

こんな風に、正しいとわかっているのにそれを認めたくないときによく現れた。

天使のように愛らしい彼女が、大粒の涙を流しながら、頬を染めて僕に近づいて来る。

意地悪したいわけじゃない。

アンジェに笑っていて欲しいだけだった。

それなのに、アンジェはいつもいつも・・・僕に向かって来るときは、怒っているか、つんと

横を向いて哀しそうに唇を尖らせるかのどちらかであることが多かった。

アンジェが僕の肩を強く押した。柔らかい手の平が僕の両肩を押したので、泥のついた革靴ごと、僕の両足が地面から浮いた。

「あんたはこんな風にしてあたしに負けてしまうくせに。

あんたはこんなに小さいのに。

あたしはあんたを見ていると苛つくの」

アンジェは興奮気味に言った。

「あんたは皆から愛されている。

シャルルにも、マリナにも。

でもあたしは皆から愛されたいのではない。

だったら、シャルルをちょうだいよ。

あたしに、ちょうだいよ。・・・ひとりくらい、くれたって、良いじゃない」

「ああ、アンジェ・・・」

僕は小さな悲鳴をあげた。

彼女がつかみかかって来て、バランスを崩したので、そのまま僕の上に墜ちてきたからだ。

天使が、僕の上に降りてきた。

そんなことを思ったのも束の間であった。

僕は更に視線を移動させることになったからだ。

すぐ目の前にはアンジェの髪と、ドレスの柄と・・・そして空の色が見えた。

彼女の重みを感じて僕は転倒し、それでも彼女の体を抱き留めて、背中を軽く曲げた。

地面に体を打ち付けた痛みは感じなかった。

柔らかい地面が僕とアンジェを受け止める。

だから、震動があったなと感じた次の瞬間には、僕の視界の中にあつた青色が、分配率を変えて目の前に広がった様が見えた。仰向けに転倒したからだ、と思ったけれども、どこか他人めいていた説明に、自分自身の体がついていかなかった。

僕は彼女を受け止めるだけで精一杯だった。

彼女の髪の間から見える空が妙に濃い青で・・・朝が過ぎ去ろうとしていたのだと悟った。

シャルルの瞳のような、薄い青灰の世界が終わろうとしていた。

ふわりとアンジェの髪から、甘い香りがして、僕は少しどきりとした。

彼女がこれほどまでに僕に近寄ることはほとんどないことだから。

■10

僕の頬に、大粒の雨が降ってきた。

でも、それはとても熱かった。

雨じゃない。空から降って来たのではない。もっと近いところからだ。

それは、アンジェの涙だった。

ばさばさと長い密集した睫を瞬かせるたびに大きな粒子が僕の顔に注がれる。

尻もちをついた僕は、土に近付いたので、足元に残る匂いがいつもの薔薇の香りと少し違うことを発見した。

そんなことを考えている余裕はなかったのに。

僕は、アンジェの体を受け止めきれないほどまだ小さいのだと痛感する。

彼女は涙声で、切れ切れに言った。

「あたしはシャルルの天使なのよ。天使が天使を呼び寄せたのよ。

マリナひとりだけではシャルルの餓えは癒やせない。

だから、あたしが生まれて来た。

生まれる最初から・・・ううん、その前から、シャルルが手放しで何も遠慮しないで愛せる存在が必要だったから、あたしが居る」

「アンジェにそういうことは求めているよ。シャルルはただ・・・」

「じゃ、あんたは何のために生まれて来たのよ」

アンジェの言葉に、僕は黙ってしまった。

黙ったままの僕に、また、大きな雨粒が堕ちた。

落音がするほどに。

彼女の体内の水分が全部出てしまいそうなほどに、大粒の雨が降った。

彼女が僕に問いかけるけれど、それはきっと、彼女自身の質問なのだろうと思った。

アンジェは、僕が喋ると怒り出すのに、黙って居ると更に憤る。

込み上げる感情の勢いを、抑えることができないのだ。

矛盾しているけれども、彼女にはちゃんと憤る理由があるのだ。

それが僕に理解できないのが、ちょっぴり哀しい。

彼女が何をそんな風に哀しく思っているのか、少しだけでも、引き受けることは出来ないのだろうか。

「ねえ、アンジェ」

「煩いわね」

アンジェはそう言うと、背中を伸ばして彼女が地面に触れないようにするだけで全身の力を使い果たしそうになっている僕の首にしがみついたので、僕は何も言うことが出来なくなってしまった。

彼女の涙がどんどん、僕の首筋に流れ落ちて伝わってくる。

しかし、それは慈愛の抱擁などではない。

それに、僕が愛おしくてそうしているわけではない。

わかっているよ、アンジェ。

僕は、黙ったままで彼女の嵐が過ぎ去るのを、ただ・・・じっと傍にいて、そこで呼吸するだけしかできなかった。

「・・・あんたにあたしの泣き顔を見せるのが、気に入らないだけよ」

彼女は気丈にもそう言うと、僕の肩の上に顎を乗せて、啜り上げる声をそのままに嗚咽を漏らし始めた。

僕はしばらくそのまま居たかった。アンジェが近い場所にいるからだ。でも、彼女は泣いている。だから、とても動揺していた。怒ったり泣いたり困ったことばかり言う彼女であったけれども、それでも、彼女の笑顔はとびきりなのだ。それがシャルルを微笑ませる、最高の薔薇なのだ。

どんな薔薇の花よりも、アンジェがシャルルに向かっていくことが、どれほど・・・どれほど大きな意味を持つのかアンジェはわかっているのに、それを受け入れようとしない。

■11

僕は大きく息を吸った。

アンジェはどんなに僕より年上でも、女の子なのだ。

僕は、彼女を守ってやらなくてはいけない。

どんなに、僕より体が大きくて僕より賢くて、僕より何もかもが勝っていても。

アンジェは孤独を感じている。

だから、彼女を守らなくてはいけない。

彼女の涙の源すべてから。

違うかな。

守ってあげたいのだ。

そうしなくてはいけない義務ではなくて、そうしたいから、そうするのだ。

何もできなくても、一緒にいたい。

彼女の秘めたる想いを知っているのは僕だけではないかも知れないけれど、彼女の傍にいたい。

アンジェは、可愛らしくてそしてとても傷つきやすい。

マリナを嫌悪しているようでそれは愛情の裏返しだって、聡い彼女は気がついてはいるはずだった。

これはマリナがいつも言っていることだった。

何ができるか、ではなくて・・・何をしたいのかが人を動かすのだ、と。

これは、アンジェが怒るかもしれないけれど、僕はそのマリナの言う通りだと思った。

「アンジェ」

言葉にならない声で、何かを呻きながら僕の背中に腕を回し、涙をぼろぼろと落とすアンジェの背中に腕を回すことすらできない僕は、そっと言った。

両手で地面を支えていなければ、このまま僕とアンジェは転倒しそうになりそうな姿勢であったからだ。

僕にしがみついて泣くアンジェは、僕よりずっとずっと幼い小さい子のように、震えていた。

どうやって伝えて良いのかわからなかったけれど、わかっていることがひとつだけある。

僕には、アンジェが必要で、アンジェにはこうやって嘆きをぶつける相手が必要だということだ

った。

だから、アンジェに言った。

また彼女は怒り出すかもしれないけれど、それでも泣いているよりずっとましだった。

ひとりで、最高の状態の薔薇を探すアンジェ。

ひとりで、シャルルの笑顔を願うアンジェ。

ひとりで・・・ひとりで泣こうとするアンジェ。

何もかもを目に焼きつけておきたいと思う。

「僕が生まれて来たのには、理由がある。僕は生まれて良かったと思っているよ。

だって、アンジェに会えたから。・・・僕は、アンジェに会うために、生まれて来たから」
アンジェの声が止まった。

僕の声は、彼女に届いたらしい。

少なくとも涙を止める作用はあったようだ。

でも彼女は僕にぽつりと涙声で反論した。

「最高に笑えない冗談ね」

辛辣なところは、シャルルにそっくりだった。

■12

「僕の話は、独り占めして良いんだよ、アンジェ」

「あんたじゃ、力不足よ」

彼女は僕を否定する。

確かにそうだ。僕は頷いた。

「そうだけれどもさ。僕だって、シャルルと同じくらい、アンジェが大好きなんだ」

そうった途端、ぴしゃりと額を叩かれたので、両目を瞑った。

そして、すぐに、ふわりと体が軽くなる。

僕は勢いよく瞑った眼を慌てて開けた。

彼女の気配が遠退いてしまったからだ。

消えてしまいそうな儚い容姿のアンジェであったけれども、そうではなかった。

アンジェが立ち上がったのだ。

見上げると、僕から彼女は離れて、シャルルとよく似た目付きで僕を見下ろしていた。

でも、そこには侮蔑は含まれていなかった。

どちらかという、呆れていると言った方が良さそうな表情だった。

裾についた泥に貌を顰めながら、彼女は涙を両手の甲で交互に拭いた。

「さっさと立ち上がりなさいよ。情けない」

彼女の瞳に涙はなかった。でも、涙の名残はたくさん残っていた。

それから、僕の言葉に答える。嘲ら笑った。

その仕草は、本当に・・あのフランスの華によく似ていた。

「あんたは嘘つきだから。信じないわ」

「アンジェ、僕は、嘘は言わない」

慌ててそう言ったけれども、アンジェは僕の前で腰に両手を当てて、いわゆる仁王立ちになって僕に少しだけ顔を近付けた。

先ほどまでわんわん泣いていたのに、いつの間にかいつもの彼女に戻っていた。

どうも、僕は彼女の事ばかりを見過ぎて、彼女のことについて疎くなってしまっているようだった。

これはシャルルにも忠告されていることだけれども。

でも、それでも、どうしてもアンジェを守ってやりたいとか、傍に居たいとかいう気持ちが大きくなりすぎてしまっているのは、自分でも認めないといけないな、と思った。

彼女はぴくりと唇を動かして、大きな目を少しだけ見開いた。目元がまだ赤かった。

頬が涙でひりつくのだろうと思ったので、僕は思わず彼女に手を伸ばした。

すると、途端にぴしゃりと僕の手の甲をアンジェが打ったので、僕の片手はまた地面の上に乗ってしまった。

「そんな泥だらけの手で、あたしに触れないでよ」

彼女だって、ドレスを泥だらけにしているというのに。

それでも、その誇り高さはまったくどうしようもないほど・・・羨ましくなってしまうほど、彼にそっくりであった。

でも、それから次に、彼女はほおっと溜息を漏らした。しょうがないわね、と言って、小さな肩を持ち上げる。

「いつまでそこに座って居るつもりなのよ。早くしないと・・・薔薇が開花してしまうでしょう」

それから、白くて綺麗な手の平を、僕の顔の前に差し出したのだ。

桜色の爪が陽の光を受けて、きらりと輝いた。

アンジェは気性が激しいけれども、こういう優しいところをたくさん持っている。

それを僕は知っているから、どんなに疎まれても、一緒に居たくなってしまうのだ。

少しでも多くの時間を、彼女と一緒に居たいと思うのは・・・どうしてなのだろうか。

やっぱり、それは抗えないのかな。

逆らうつもりはなかったけれども。

「ありがとう、アンジェ。僕は大丈夫だ」

でも、僕は彼女の手を取らなかった。彼女の手が汚れてしまうからだ。

それは僕の本意ではない。

一緒に居たいとは思っているけれど、一緒に泥まみれになって欲しいとは思わない。

そう言ったのに。

アンジェは、僕の手をぎゅっと掴んだのだ。

僕は助けて欲しくて手を伸ばしたのではない。

アンジェの涙を拭きたかっただけだった。

「アンジェ、だめだよ。汚れるよ」

「うるさいわね、本当に、あんたは・・・あの女みたいに口煩い」

彼女はそう言いながら、僕を引っ張り上げた。

僕の体はあっという間に持ち上げられて、勢いよく体が浮いた。

その反動で、両足を地面に立たせた時には、アンジェはもう、僕ではなくエバーグリーンの方を見ていた。

綺麗な横顔だな、と思った。

彼女はマリナとシャルルの娘だ。愛されていないわけではない。

それなのに、シャルルにだけ愛を注ぐことで、シャルルの狂気を癒そうとしている。

それでも、彼は決して鎮まらないのに。

アンジェのそんな気持ちを知っているから、マリナはいつも笑って彼女の好きにさせている。

どんなに罵られても、アンジェが冷たくあしらっても、しょうがないわね、と言って笑う。

この家には、マリナの笑顔が必要だって、アンジェにもわかっていると思うよ。

僕がそう言うと、マリナは僕の頭を撫でて、苦しくなるくらい強く抱きしめる。

アンジェをよろしくね、と言って、マリナは微笑む。

彼女は、泥のついた手で、薔薇に触れることはしない。

花瓣が汚れるからだ。

でも、それでもシャルルのために最高の状態の薔薇を摘み取ろうとする気持ちは失われていなかった。

僕は、彼女の手の手を握り直した。

天使のようなアンジェが、本当に・・・薔薇に吸い込まれてしまうような気がした。

僕はアンジェがシャルルを好きでも、誰か他のひとを好きになっても、アンジェの傍にいる。

そう決めたからだ。

マリナがこの家に必要なように、僕にも、この家にも、アンジェは必要なのだから。

「・・・そろそろあたしを解放してよ。あたしはね、あんたに拘っている暇はないのよ」

アンジェの注意は、もう、すでにすっかり薔薇に移ってしまっていた。

「シャルルはアンジェが薔薇を持って行けば、喜ぶと思うけれど・・・アンジェがマリナと並んでお茶するだけでも、喜ぶと思うよ」

僕がまた差し出口を挟んだものだから、アンジェは僕の手を振り払おうとした。

「いやよ。なぜ、あたしがそこまで譲歩しないといけないのよ」

「アンジェ」

僕は我慢強く言った。

「それは、アンジェしかできないことだよ。僕のことを、誰からも愛されているって言うけれど、アンジェの方が、皆から愛されているよ」

「比べる問題じゃないでしょう」

アンジェが顔を顰めた。

彼女もそうだけれども、この家の人間は、誰かと愛を比較されることを極端に嫌う。

でも。アンジェはちょっと違っていた。

■14

彼女は望まれて・・・生まれた。

彼女は、シャルルが満たされなかった、家族の愛というものをシャルルに与えることが出来るからだ。

だから、彼女がシャルルを求めるのには、理由がある。

この世で最高の男性を父に持ち、そして彼の孤独を癒すことのできる数少ない人物のアンジェは知っている。

彼女がシャルルの娘だから、彼はアンジェを溺愛するのではない。

アンジェは・・・彼女がマリナの娘だから、彼女をこよなく愛しているのだと、わかっているのだ。

それが気に入らないのだ。

シャルルが手放しで自分の娘であることを喜べば、もっと違った関係になるのかもしれない。

けれども、シャルルは自分の血族であるからということではなく、マリナという彼の運命の人の娘だから、アンジェを愛している。

それが、アンジェを寂しくさせる。哀しくさせる。切なくさせる。

だから、僕が生まれて来た。

アンジェそのものを愛する存在として。

彼女が誰の娘でも関係ない。

アンジェだから、僕は彼女が愛おしいと思うのだ。

それが仕組まれたことであっても、僕はまったく動揺しない。

アンジェを愛するために、生まれて来たのであれば。

それをまっとうしようと思う。

可哀想な、可憐な天使は僕の傍で、泣いたり笑ったりする。

誰よりも、何よりも、アンジェしか見えなくて、彼女が幸せであることを祈るために僕が生まれて来たのであれば・・・それで良いと思う。

・・・彼女には、そういったことは関係ないと思えるくらい、近い場所に居る者が必要だったから。

今度は、僕が涙ぐむ番であった。

アンジェが好きで、好きで、理由も必要もなく好きで、それでいて、彼女に共鳴してしまう。

理由を考えたことはない。

生まれて、意識を持った最初に映ったのはアンジェのあどけない顔だった。

僕の記憶に残る、最初の記録。そして、それ以来、彼女はいつも・・・僕を覗き込んでいる。

僕の心の中を覗いているというよりかはむしろ、自分自身の中を覗いているのだらうと思った。

胸が締め付けられるほどに苦しい思いを、生まれて、意識を持ってからずっと持っている僕に対して、憐れみの瞳を向ける。でも僕は決して不幸ではないのだから。

だって、アンジェをずっと見ていられるから。

「アンジェ、もう少し待っていてよ。僕は、すぐに大きくなるから」

「あんたの成長を待っていたら、あたしはもう取り返しがつかないくらい年寄りになってしまうわ」

アンジェはそう言って大きな溜息をついた。

「あんたはやっぱり、少しおかしいわよ」

「そうだろうね・・・だって、この家で育ったのだから」

「あたしまで否定するような言い方をしないで」

彼女の言葉に、僕は肩を竦める。

そうして、そこでようやく僕は彼女の視線まで移動することにした。

要するに、立ち上がったのだ。

僕の目線のずっと上に、彼女はいる。

でも、間もなく、それは解消される。僕は、彼女を守るために生まれたのだから。

■15

「忘れることも、諦めることもできないから、現状維持しかできない」

アンジェはもう一度、ぐい、と自分の濡れた頬を拭った。

「忘れることなんてできないのは、アンジェが一番よくわかっていると思うけれど。

それに、諦める必要はないよ。だって、アンジェは、シャルルの天使なのだから」

「あんたは、一体、どちらの味方なのよ」

少しばかり呆れた口調で、彼女はそう言った。

僕ははっきりと言った。

即答した。

間を持つ必要はなかった。

「僕はアンジェのエバーグリーンだから」

「自惚れないで」

アンジェはそう言って、憤慨した口調で言った。

「あたしの場所を勝手に決めないで。あたしが必要な場所を勝手に用意しないで」

「うん・・・そうだけれど、僕はアンジェのためにいるのだから」

どんなに手酷い仕打ちを受けても、どんなに哀しい言葉を浴びせられても、僕はやっぱり、アンジェが好きだ。

彼女がシャルルを恋い焦がれるのは、シャルルの天使だからだ。

シャルルがマリナと一緒に居たいと思う強烈な願いが、アンジェの中にも流れているのだ。

アンジェの想いの相手が、シャルルだからではなく、シャルルと同じ強い願いがアンジェを動かしているのだと、彼女はちゃんと、わかっている。

だから行き場のない憤りを感じているのだ。

秘めないことにした想いは・・・実は、秘めたる想いであることを、アンジェは理解しているから。

「どうして？僕は、いつも変わらずに、アンジェが好きだし・・・どんな時も、どんなことがあっても、アンジェのことを気にかけることはやめられないと思うよ。それを、シャルルが願いをこめたエバーグリーンという薔薇に誓って、同じであり続けることをアンジェに約束しては駄目なの？」

「駄目よ」

アンジェはそう言って、大きな溜息をついた。

深く、深く。

こちらが溜息の出るほど、遣る瀬無い吐息だった。

「あんたが、いつか・・・エバーグリーンより・・・どんなに変わらない存在より、あんただけのファミ・ファタルを見つけるだろうから。その時に、今の誓いで苦しむに決まっているから」僕は、涙が出そうになった。

くっ、と、僅かに音を立てた喉元に込み上げる声と声ではない何かを勢いよく呑み込んだ。

アンジェは傲慢で我が侷で手が付けられないほど勝ち気だけれど。

．．．．でも。

この上なく傲慢なアンジェは、この上なく優しい。

「あんたも、いつか見つける。自分のファミ・ファタルを探す。そして、その人をずっと．．．生涯、想い続ける。成就するかどうかは関係ない。それでも、その人の幸せを願う」

アンジェはそう言って笑った。

驚くほど、大人の中の微笑みだった。

アンジェは天使であるのに。無垢な童女で居続けることを、アンジェは放棄した。

彼女は、知っている．．．．アンジェの思い通りにならない未来が、確実に訪れることを。

■16

「僕は、僕のファミ・ファタルを見つかる前に、僕のエバーグリーンが幸せになって欲しいと思っている」

僕がそう言うと、アンジェは鼻白んだ。

「あんたの都合にあたしは左右されない」

「影響されなくて良い。僕が、好きでそうしているだけなのだから」

僕は困ってしまった。

アンジェに何かを求めたりするつもりはない。ただ、アンジェが幸せに笑っている時間が長ければ、僕はそれで満足だった。

僕の中のアンジェの記憶は、色褪せない。

古くならないからだ。

どんなに記録が蓄積されても、僕の中の過去記録はそれっきり更新されないというわけではないから。

これは他の人と少し違うのかもしれない。

遣る瀬無い僕やアンジェの気持ちが、褪せない代わりに。

いつまでも．．．いつまでも同じ色を持ち続ける目の前の薔薇のように、僕とアンジェはいつまでも．．．鮮やかにはっきりと、誰かを思慕することを捨てられずに過ごすのだ。

アンジェは横を向いた。

再び、彼女だけの薔薇に目を向けた。

僕は、僕だけを見て欲しいとは思わない。横顔のアンジェの瞳が好きだからだ。

きっと．．．シャルルも、マリナをこんな気持ちで眺めていたのだろうと思う。

かつて。

自分ではない誰かを想って、泣いたり憂えたりする人を、どんなに諦めようと思っても、そうできなかったシャルルは、とうとうその気持ちを捨て去ることが出来なかった。

忘れられないのはアルディの者の性質であった。

どんなに忘れようとしても、切り捨てることが出来なかった。

だから。

アンジェの中にも、同じ様に、忘れられない、ひとつのことに固執する気質が受け継がれている。

アンジェはわかっているのだろうか。

マリナは非常に小柄だから、アンジェを出産するときだって、相当に大変だったはずだ。

生命を自分の中に格納して、新しく生み出すということは、とても・・・想像を絶する奇蹟なのだ、アンジェは知っているはずなのに。

マリナと必要以上に距離を置く。いや、他人であることを演じているような気がする。

それがシャルルを哀しませる行為だと知っているのに。

アンジェは・・・どうしても、受け入れられないのだ。

どうあっても、シャルルを求める気持ちを、忘れることが出来ない。

でもね。

アンジェ。

それはね、シャルルがマリナ・イケダというファム・ファタルを死ぬほど愛して居ると思う感情と。何年も経過してなお、シャルルを自分の中の特別な存在として忘れないようにしていたマリナの努力と。

その二つが重なり合った結果なのだと、アンジェはわかっていると思うよ。

僕がそう言うと、きっとアンジェはまた怒って地団太を踏むのだろうけれども。

■17

アンジェにはいつも笑っていて欲しい。

涙を流す様はとても・・・切なくなってしまうから。

彼女は、大粒の涙の名残を、またひとつ頬に落とした。

でも、それはもう更新されることはなかった。

長い睫の先に溜まっていた最後の嘆きをひとつ、溢し落とす。

その些細な仕草が、僕の胸を痛ませる。

彼女に同調するのであれば、アンジェは僕を必要としないのだろう。

マリナは酷い人だよ、と言ったり、シャルルがアンジェをもっと大事にすれば良いのにといい

たりするような発言をすれば、僕は逆にアンジェに窘められてしまう。でも、わかっているけれども、アンジェだけが、僕には特別に見えるのだ。

シャルルが、マリナを運命の人だと定めた瞬間に、無色無機質の世界が、有色になったように。僕はアンジェを通してこの素晴らしい世界を素晴らしいと思える。

そして彼女は気恥ずかしそうに横を向いた。

「何よ、あんたがあたしに何を言っても、あたしは少しも悪いことはしていない。シャルルの天使は、あたしだけなのよ」

「・・・そうなのか？」

不意に、低いテノールが響いて、僕とアンジェはぎょっとして声の方を振り返った。

僕の視界の中にでもなく、アンジェのそれの中にも居なかった声・・・つまり、薔薇の植垣の奥から出てきた人物が居た。

エバーグリーンは全体的に背が高いので、そこに誰かがいるとは・・・気がつかなかった。

「シャルル！」

朝の陽光の下に現れることは滅多にない人物がそこには居た。

そして、アンジェを泣き顔から笑顔に、瞬時に変更させてしまう人物。

この家の主。

自由にこの館を歩き回ることが出来る唯一の人。

いや、違った。

唯一、という言葉は不適切だった。

「マリナ以外に」という言葉を付加しなければいけなかった。

憂いを含んだ青灰色の瞳と日に透けそうな白い肌と、経年してなお白金の髪は褪せることなく輝く、フランスの華がそこにいた。

太腿まである丈の長い軽い上着を羽織っているけれども、その下は軽装だった。

普段、私服でも人前に出るときには私邸自邸問わずに、きっちりと服を身につけるシャルル・ドゥ・アルディが、今朝は・・・とても緩やかだなという印象を持った。

慌てて庭に出てきたという風情だった。

僕は口を噤んだ。

彼をよく知っているから。

そして、彼女は彼の姿を目にした瞬間、もう、僕の事なんて目に入らないと知っていたから。

・・・シャルル・ドゥ・アルディだった。

彼はとても不機嫌そうな顔をしていた。

狡いとは思わない。

だって、ここは彼の家なのだから。

アンジェは、少しばかり驚いていた。だって、こんな朝早い時間にシャルルが起き出すなんて、数えるほどで・・・それはあり得ないからだ。

彼がそうするのは、余程仕事が忙しくて、朝の出発が早いので起きられないと観念したときか、マリナの誕生日くらいだったから。

■18

シャルルは少し距離を置いて、僕とアンジェを眺め回した後、低い声で言った。
おはようの挨拶もなかったの、彼は一体、いつからそこに居たのだろうかと思った。

「オレの天使はアンジェであるという部分は正確だけれども。アンジェだけがオレの天使であるとは限らない」

「シャルル、あたしのことが嫌いなの？」

彼の言葉は、絶対だ。

アンジェは一瞬にして哀しそうな顔になった。

さっきようやく、涙をとめたばかりであったのに。

僕が抗議しようとして息を大きく吸った瞬間。

シャルルは綺麗な顔を向けて、更にうっとりするほど優しい微笑みをアンジェに向けた。

アンジェの大きな瞳から、涙が今にも零れそうになる。

頬や唇が、細かく震えるのがわかった。

アンジェは確かに、シャルルの天使なのだ。

誰にも見せない優しい表情で、どんなにアンジェが困った願いを口にしても、決して怒ることはない。それどころか、そういった感情をぶつけてくるアンジェが愛おしくてたまらないという様子だった。

手放して愛情を注ぐことが出来る人物が、シャルルには必要だった。

マリナは確かにシャルルの運命の人だけれども、愛おしむというよりかは・・・今でも激しく愛して居るといふ感じに見えた。

だから、シャルルが向ける、マリナとアンジェに対する愛というものは、違っているようだった。それでも同じ愛であることには変わりがないのだろうけれども。

それに、それがかえって彼を安らぎに導いているのだと、アンジェはわからないのだろうか。

アンジェがシャルルの天使であり、そして、シャルルはアンジェの天使だ。

彼の一言でアンジェは落ち込んだり泣いたり笑ったりする。

僕は、アンジェをなかなか、笑顔にさせることができない。

シャルル・ドウ・アルディは、やれやれといった様子で肩を竦めた。

白金の髪が揺れる。陽光を受けて、プラチナ・ブロンドがさらに明るく輝いた。

「アンジェ。唯一であることがアンジェの唯一の価値ではない」

「あたしは、シャルルの唯一になりたいのよ」

その言葉に、シャルルは薄く笑った。

「オレの天使であることが、他のすべてのことより劣るとでも？」

アンジェは黙った。

彼が唯一と定めることは、特別な事であると、彼女自身がよく知っているからだ。

それから、シャルルが「オレの」と言って、特定した誰かや何かを、自分の大事にしているものであると公言することは、滅多にないことであるからだ。

アンジェが口籠もっていると、シャルルは薄い唇の端をちょっと持ち上げて、満足そうに笑った。

彼を言い負かすことができるようにならなければ、まだまだシャルルを夢中にさせることなんてできやしない。

どんなに理不尽で理屈がなくても、シャルルはマリナの言い分には口を閉ざしてしまうのだから。

「朝から庭が騒がしいから様子を見に行けと言われて、やって来てみれば・・・」

彼はアンジェを青灰色の瞳で見つめる。アンジェは小さくなって俯いた。

広大なアルディ邸で、騒がしいかどうかなんてわかるわけない。

これは口実で、アンジェが朝早く屋敷を抜け出して出歩いていることは、大人達には筒抜けなのだ。その証拠に、この時間になっても、通常配備されている庭師や使用人達の姿がまったく見えなかった。

■19

彼は誰かに命令されて、朝早くから起き出してくるような人ではないから、それを言ったのが誰だったのか、アンジェは察しがついていたらしい。

彼女があまりにも過剰反応するので、シャルルはできるだけその人の名前を言わないようにしていたのだけれども、それでも、存在しないということではなく、彼の唯一の人の存在を認めないわけにはいかない。

アンジェは、彼に最高の状態の薔薇を持参して目覚めを促そうとした。

でも、そんなことをしなくても声をかけるだけで彼を不機嫌にはさせながらも朝の庭園に送り出すことが出来る人が居る。

「アンジェはシャルルに薔薇を持って行こうとしたんだ。・・・久々に、皆が揃っているから、朝の食卓にも飾ろうと思って、それで僕も手伝うことにしたんだ」

僕がそう言うと、シャルルはちらりと僕の方を見た。

冷ややかな視線だった。

「おい。・・・アンジェを泣かせるなよ」

シャルルの不機嫌は、朝の寝起きのことではなく、そこにも原因があったらしい。

僕は唇を尖らせた。

何も言い返せない。

アンジェがその場で立ち尽くして、地面を見つめ、両手はぎゅっと握られたままだったので、シャルルはひとつ、吐息を漏らした。

「アンジェ」

「シャルルが喜ぶ顔が、見たかっただけよ」

アンジェはそう言った。

ごめんなさい、とは言わなかった。

この強情さは、やはりアルディ家の特有の気質らしい。

誰にも教わらないのに、彼女はそう言って横を向く。

「オレも、アンジェの喜ぶ顔が見たいよ」

そう言って、彼は彼女に近寄り、アンジェの小さな肩を抱きしめた。

「シャルル。泥だらけなの」

そう言いながらも、アンジェはシャルルの背中に手を回した。

良いよ、アンジェなら、とシャルルが言うと、彼女は彼の胸の中に顔を埋めた。

回りきらなかったけれども、彼の胸の中で、天使という名前の女の子は、そこでようやく水に戻して貰った魚のように、安堵の呼吸を始めた。

シャルルがアンジェの背中や頭を軽く撫でた。

大きな手の平だった。

僕は彼女にすることができない仕草だった。

まだ、僕は小さすぎたし幼すぎた。早く大人になって、アンジェを守ってやりたいのに。

「シャルルは狡い」

アンジェはそう言った。あっという間に彼女の哀感を払拭してしまった。

一時的かもしれないけれども、彼女はこれで暫くの間は機嫌良く過ごすことが出来るのだろう。

「そうかな・・・オレをここに引っ張り出したアンジェの方が、狡いと思うがね。

君に勝てるアルディ家の男子はいないのだろうね」

そう言って、彼は僕の方を見た。

「彼女を泣かせた罰だ。・・・アンジェを着替えさせて、居間にエスコートしろ。

今日の朝食に飾る薔薇は・・・エバーグリーンだ。人数分、卓上に添えるように」

僕はえっと言って、声を上げた。難問ばかりだったからだ。

シャルルと朝食を取るためだけに着るドレスを選ぶアンジェを急かしてまた怒られそうだし、人数分の、最高の状態の薔薇をこれから用意するのも大変に忙しい。

「提案を採用する。準備に入れ」

彼は僕の抗議は受け付けないと言わんばかりに短くそう言った。

それでも言わずには居られない。

準備に入れというのは、単にアンジェを自室に戻すだけではない。

席配置に彼女が文句を言わないように考えたり、昨夜シャルルが指定していたテーブルクロスや食器の色と薔薇が調和の取れていないものであったりしないか確認したりするのは僕がやれ、とシャルルが言ったからだ。

でも、それは彼が当主として差配することになっているもので、他の者には任せたりしない。

「シャルルはアンジェばかり可愛がって、酷いよ。差別だ」

僕がそう言うと、シャルルは嘲ら笑った。

「差別ではない。区別だ。

・・・お前もアルディ家の男子なのだから、それくらい理解しろ」

それだけ言うと、シャルルはアンジェの手を引いて、屋敷に戻ろうと言った。アンジェはシャルルの手を握り、頬を染めて無邪気に喜んでいる。

「シャルルの隣が良い。久々に一緒に食事するのだから。食後のティーはあたしが選んでも良いの？」

「今日だけは譲ってやろう」

シャルルの言葉に、アンジェはすっかり満足したようだった。

そしてシャルルは僕にちらりと合図を送る。

シャルルの隣に座るのは、いつも、マリナだ。僕は肩を竦めた。

お腹が空いたと喚くマリナを宥めて、皆が揃うまで待つようにと言うのも、僕の役割だとシャルルは無言で言っているのだ。

僕はますます頬を赤くして、アンジェとシャルルを交互に見た。

シャルルは僕に背を向けると、さっさと館に向かって歩き始めようとしたけれど、僕に追加で言った。

「不平があるなら、食後に聞こう。plaintiff's claim（原告の言い分、申し立て）は手短かに頼む」
えっと僕は声を上げた。

そもそも、僕の申し立ては、たくさんの手に余るいろんな面倒なことをやらなくてはいけないことに対するものであるから、それらが全部終わった食後に話を聞く、というのは「全部やれ」ということと同じことなのだ。

そして、僕の文句を、不平不満だと言う「plaintiff」と言って片付けるシャルルが、どうして食後に話を聞こうと言ったのか、僕は知っていた。

どんなにアンジェを愛していても、シャルルはいつも気にかけてくれているからだ。

僕との時間を持つと、と彼は言ったのだ。
そう言われてしまえば、僕は何も言えなくなる。
不満なんて、持っていない。
僕はアンジェの一番近い場所に居るのだから。
そんなことはわかっているはずなのに。
シャルルは、そう言って僕を揶揄う。

「オレの天使はアンジェだが、オレには・・・オレ達には、輝きという名前の希望が居るな」
僕は唇をぐっと噛んだ。シャルルが、僕のことを希望と言った。
それから、彼はアンジェと繋いだ手と反対側の手の平を持ち上げた。

「ほら」
アンジェの言うとおりで。
シャルルは狡い。
こうやって僕もアンジェもシャルルの一言やちょっとした仕草であつという間に和らいでいる。

だからね、シャルル。
僕がこんな小さなことで嬉しくなってしまうのと同じ様に、アンジェにもシャルルにも、笑顔で居て欲しいんだ。もちろん、マリナにも。

「・・・泥がついてしまうよ」
僕の小さな声を言った。それだけ言うのがやっとだった。
彼はくすりと声を漏らして笑った。
「泥だらけの天使は、気にしていなかったようだが」
「あら、シャルルが良いと思わなければ、最初からそう言えば良いのよ」
僕とシャルルの天使はそう言って横を向いた。
そして、僕の方をちらりと見た。
シャルルにそっくりな視線だった。

「何しているの。リュシアン。・・・行くわよ」
アンジェが僕の名前を呼ぶ。
僕は嬉しくなって・・・彼らに駆け寄る。
そして、シャルルの長く細い神経質そうな指先に僕の泥だらけの指を乗せた。
すると、シャルルは苦笑いをした。
「オレは朝起こされて、こうしてオレのこども達を迎えに来なければならないことを、誰に訴えれば良いのかな」
「それはマリナでしょう」
アンジェがつっけんどんにそう言った。

普段、自分からマリナのことを口にするのではないのに。
彼を喜ばせるために、アンジェはマリナを受け入れている。
決して出て行けとは言わない。
面倒だとか、嫌だとかいうことを我慢できるほど、シャルルが好きだからだ。
そして、ここ環境や時間を大事にしたいと思う気持ちはみんな、同じだから。
僕はそれを見て、嬉しくなって、シャルルの腕にぶら下がった。
彼は見た目より腕の筋肉が発達していて、ちょっと持ち上げるだけで僕の足は宙を浮いてしまう。

僕ははやく大きくなって、アンジェを守りたいと思っている。
早く大人になりたかったけれども。
まだ、こどもでいいや、と思った。

「マリナそっくりの笑い方、やめなさいよ」
アンジェが僕を横目で睨んだ。
でも、冷たい言い方ではなかった。
どこか、少しばかり楽しそうだった。

「天使と希望が両手にある・・・ああ、これは大変だな」
シャルルはそう言ったけれど、嬉しそうだった。
かつて、マリナが、シャルルは何でも持っているけれど、孤独も神様から与えられたのだと言った。だからだろうか。
僕は、アンジェの睨になりたいと思う。
輝きという名前を持って生まれたからには、アンジェの笑顔を照らしていたいと思う。
何だろう。
僕はとんでもなく・・・とても、マリナに似ていると言われるけれども、アンジェを理屈もなく理由もなく大事にしたいと思う気持ちは、まさしくシャルルから受け継いだものだと確信できた。

やっぱり、僕はシャルル・ドウ・アルディとマリナの息子だった。
だって、もう、昼食後に約束した申し立てという名前の団欒を、どう過ごそうかと考え始めていたのだから。
その一方で、アンジェが楽しそうにしていると、つい笑顔になってしまう。
ああ、本当に彼女は可愛らしいなと思う。
ずっと年上の姉のことをそんな風に思ったら、おかしいだろうか。
そんなことはないと思った。
シャルルがアンジェをこよなく愛するのは、やっぱりマリナの娘だからで・・・こんな風に、穏やかに睨に満ちた日々をシャルルに与えることができるのは、アンジェだからできることなのだ。

から。

アンジェの用意するティーと、僕達の用意した薔薇と・・・そしてマリナが居れば、この家はいつも明るく、暁に満ちている。

空は、明るくなって、すっかり朝の支度を整え終えていた。

僕は目を細めて、空を見上げた。

脇では、楽しそうにお喋りを始めるアンジェとそれを黙って聞いているシャルルが居る。

いつか・・・いつか、皆で、手を繋いでこうしてアルディ邸を歩くことが出来ると良いなと思った。

その時には、もっと人数が増えていれば良いのに、と思った。

でも、今日はこれで満足することにした。

マリナはきっと、首を長くして待っていることだろう。

厄介な役割を仰せつかった僕の困った様子を見て、マリナは笑うのだろう。

庭に出るための入り口に、とても小柄な茶色の髪の人姿が見えた。

シャルルだけをたたき起こして、自分は休んでいるのかと思ったら。

僕はちょっと笑ってしまった。この先に何が起こるのか想像できたからだ。

きっと、仲間はずれにされたと言って理不尽に怒るのかもしれない。

アンジェはマリナにシャルルの扱いについて小言を言うのだろうし、マリナは朝食まで待てないから厨房につまみ食いをしに行こうと僕を連れ出そうとするのだろう。

そしてそんな様子を見て、シャルルはますます不機嫌な顔をしながらも、朝食の準備をして来いと僕への指示を念押しするのだろうと思った。

アルディ邸の、ちょっと遅いけれども賑やかな朝が始まろうとしていた。

今日も一日、元気に過ごすことができそうだった。

(FIN)

■01

隔離された病棟の最上階の滞在人が、ルイ・ドウ・アルディであると聞いた時。

私は厄介な仕事を引き受けてしまったと思った。

単に配属された、というだけではない作用を感じた。

ここはアルディ家がほとんどを出資している研究所であり、その研究所長の肩書きを持つフランスの華の令息であるルイ・ドウ・アルディが、アルディ邸のボイラー爆発事故に巻き込まれて、重篤な状態になったという情報は、この国のすべてに瞬時に行き渡った。

報道陣をシャットアウトし、そして治療に専念すると宣言したのは、他でもないフランスの華の発言だった。

政財界に大きな影響を与え続けているアルディ家当主の発言は、この国の情報網をすべて網羅していたからこそ作用した発言だった。

彼の一言で、報道陣の取材申し込みはなくなり、そしてルイ・ドウ・アルディの快癒を願って研究所の敷地を隔てる柵越しに集まる熱狂的な信者とでも言えば良いかのような信奉者達は、忽然と姿を消した。

それがアルディ家当主の実力なのだと思うと、身震いした。

あの家柄にまつわる伝説は、清いものばかりではない。後ろ暗い話も聞き及んでいる。

だからこそ、積極的に関わり合いになりたいとは思うことはなかった。

それなのに。

この研究所で、出世や抜きん出た業績を望まない私に白羽の矢が当たったのはまったくもって不可解だった。

しかし、指示書を見つめると、なるほどと頷けた。

アルディ家は代々親日家で、邸内では日本語が第一言語として周知徹底されている。

私は日系であり、日本語はそれほど堪能ではないけれども日常会話には不自由しない程度に会得していたから。

だから私に彼の世話を任されたのだという理由を聞いて、それなら致し方ないと思ったのだ。

十分過ぎるほどの報酬と、時間外労働に対する手当、そして厳重を越して絶対的な守秘義務への誓約書への署名を経て、私はルイ・ドウ・アルディの専属の介添人となった。

身元も調べられているのはわかった。

ルイ・ドウ・アルディに対して看護期間が経過するまでは、自宅に戻ることをすら許可されなか

った。

恵まれた環境の中で、私は、籠の鳥になってしまったと感じてそれを否定することすら許可されなかった。

■02

どうして・・・

この研究所が他国である、遠いあの国の言語や文化を重要視しているのか、最初は理解できなかった。

そして入所時にスタッフは必ず研修を受ける。

研修と呼ぶには長い時間を過ごすうちに、この区画は特別なのだと・・・

皆がその情報を受け取る。

あの東洋の最果ての国から得る様々な恩恵を得る代わりに自分たちに課せられた義務を知る瞬間でもある。

クロス・グループによる医療機器の独占市場とは別に、あの国は、万能細胞についての特許を取得しており、現在もその覇権について、他国と争いを続けている。

万能細胞という表現自体も、もう後世の表現でしかなかった。

この研究所はまったく異質だった。

あの国の万能細胞への開発速度は驚異的だった。

しかし、それがこの施設を維持する理由にはならない。

ひとえに、出資の大半を担っているアルディ家の意向が影響していた。

国立でない一私設だからこそ、特殊な環境を維持していられるのだ。

アルディ家が保つ、重大な研究成果の実用化という理由がなければ、ここは存続しなかった。

高額報酬と、その後の将来への約束を考えると、これは受けてはならない契約とは言いがたかった。

唯一重視されるのは、「そこで起こったことは口外してはいけない」という事だけだった。

私がなぜ選ばれたのかというと。

入所時にも提出していたし、定期的に更新される身上書から、明らかであったのだと思う。縁故が存在しないということと、私の容姿が・・・日系である血筋から選ばれたのだろうか、ということも何となく理解していた。

この国には珍しく、出資者であり希なる人として国内外から特別扱いを受けているシャルル・ドゥ・アルディは、大変な親日家として有名だったから。

その息子のルイ・ドゥ・アルディの看護には、日本の最先端の医療器具が使用されているし、その使用について、開発業者へ直接問い合わせをしないといけないという理由から、私が直接コンタクトをとって使用方法などの詳細な説明を受けることが可能だと言うことが選ばれた理由なのだった。

日本の医療世界は最先端を走っている。

その中でも、クロス・グループの開発する医療ネットワークには、世界の誰もが手を伸ばしながらその先に行くことができない分野だった。

だからこそ。

ひとつおりの事情説明を受けたとき。

私はなぜ、日本という国について、この施設が拘るのかようやく理解できた。

クロス・グループの会長の孫娘であるヒカル・クロスがアルディ家に養女同然に滞在していること。

そして、彼女がルイ・ドゥ・アルディの看護に加わること。

そして、覚醒したばかりのルイ・ドゥ・アルディは日本語にしか反応しないこと。

だからこそ、私が選ばれたのだ。

そしていくつかの公表された事実に驚愕していた。

そこで報じられる事実について何らコメントをしない、と契約書にサインさせられたからだった。

これまで、実弟の存在を公に話すことは滅多なことではなかったアルディ家当主が、彼の实弟と共に息子のルイが参画していた事業を引継、ルイが治療に専念することを宣言した。

ルイ・ドゥ・アルディの治療経過への公式発表とヒカル・クロスという存在がここでようやく公にシャルルの恋人として肯定されるような報道に彼が否定とも肯定とも取れないような曖昧な発言をしたのがほぼ同時であったことにも、大きな話題になった。

しかし、アルディ氏にとってみれば、それは絶妙のタイミングであり、そしてルイ・ドゥ・アルディの婚約者としての報道は誤報で・・・シャルルの定めた恋人として広く周知するに足りるきっかけとなったに過ぎなかった。

しかし私はそういった話にはあまり興味がなかった。

そこから得られる情報は、ヒカル・クロスが家族でもないのに、ルイに面会できる数少ないリストの中の筆頭であることと、私が介助すべき人物が、口外をしてはならないと誓約させられる程に何か重大な状況にあるのだということが確認できれば、それで良かったのだ。

この研究所の治療棟には、各界の著名な人物が頻繁に出入りしている。

また、重篤な病を保つ者たちも。

だから貧富の差に関係なく、この病棟で起こったことは決して口にしてはいけないのだということとは浸透していたし、だからこそ、他の病院などでは支払われることのできない高額な報酬を受け取ることができるのだと思っていた。

それは間違いではなかった。

■03

ルイ・ドゥ・アルディの病棟は・・・そう。病室ではなく病棟だった。

ひとつのフロアがそのまま彼のためだけの空間になった。

出入りを許されているのは、毎日変わるパスワードの配布を許された私を含めて、数少ない必要最小限のスタッフと、ルイ・ドゥ・アルディの親族だけであった。

IDチップシールは毎日回収されて、誰も入り込めないように厳重な監視の下に置かれた。

淡い壁紙の貼られた病室は、天井が高く広く作られており、とても治療を要する者のための室というものではなく、ただひたすら豪華だった。

最新の機器設備に、贅を尽くした内装。雑菌を避けるために滅菌シートがベッドの周りに張り巡らされて、彼の体温や心音を測定する装置がなければ、ここが治療棟とはとても思えないほどの空間だった。

私はここに務め始めてかなり経過するが、ここに入ったのは初めてのことだった。

少なからず驚いたが、驚愕やその他の表情を大袈裟に表現しない東洋人の顔立ちと文化が役に立った。

私以外の者たちは普段話をするのができない程の、世界で最も優れた技術や教育を受けているスタッフが揃っていた。

ルイのためだけに用意された病棟は、夢のような場所だった。

始終静かであるが、彼の覚醒を促すために時間を決めてクラシック音楽が流れ、彼のために最高の状態の薔薇が滅菌されて、毎朝届けられる。

彼は滅菌シートで覆われたベッドで昏睡と覚醒を繰り返しているから、その薔薇の香りは楽しむことはないのに。

手術は成功だった。

それなのに、彼は目覚めの時間をほとんど持たない。

眠っている彼はまったく人形のように美しかった。

特殊な装置を備えた最高の施設であったのに、私の仕事と言えば、彼の身なりを整えてやり、枕を取り替え、鬱血しないように体位を少しずつ変えてやることだった。
大変に負担の軽い仕事であった。

眠ったきりの彼の世話をしている時間はほとんどなかった。

おそらく彼は誇り高く、医師としての知識も兼ね備えていたから、他者から世話を受けることに對して大変な恥辱だと考えて居たのかもしれない。

けれどもそれが彼の回復の糧になったのだから私はそれを素直に喜んだ。

これはビジネスであり、私は最低限の言葉をかける以外はできるだけ彼に言葉をかけないようにしていた。目覚めて、知らない者が気安く声をかけたら戸惑うのは当たり前のことだから。それは幾人もの人々の生死を見送ってきたからこそ、断言できることであった。

規則的に目覚めるようになってからは、彼は素晴らしい速度で回復していった。

栄養チューブが外れ、様々に取り付けられた彼の生命を確認する装置が外された。鍛え上げられた肉体だと強靱な精神が、彼を死地からこちらに呼び戻したのだ。

何もかもが素晴らしい人物だった。

彼は星辰の子と呼ばれている。

天体を遵えるという意味だ。

何もかもに恵まれている彼は、何かもを失ったはずなのに、こうして奇跡的に生還した。

背中の酷い火傷も炎症が治まり、幾度か移植手術を施せば日常生活に支障はない程度に回復できるだろう。うつぶせになっている時間も減った。

破れた鼓膜も戻ると聞いた。

私の呼び掛けに彼は応じていた。

物憂げな、上品な・・・高い知性を湛えた青灰色の瞳は、日を追う毎にその光を強くしていった。

けれども、彼は言葉を発しなかった。

聞こえていないわけではなさそうだった。

しかし、覚醒時の彼は・・・いつも心許なげに視線を彷徨わせている。誰かを探しているかのようだった。しかしここは面会謝絶で、限られた者も、彼と直接会話をすることができない。

滅菌処理をしているから、という理由であったが、その他に理由がいくつかあった。

彼の意識混濁を心配してのことだった。ルイは日本語にしか反応しない。

精神的なものであるということであったが、私は、そのまま曖昧な指示に従うことにした。

何より、高名な医師として名高いシャルルの実息であるのだから、そのアルディ氏の指示に従わないという理由はなかった。

彼は痛みも不快も訴えない。ただじっと耐えているだけだった。それが少し気になった。

誇り高く、強い精神を持ち合わせている人物ほど、重篤な症状を見逃しがちになる。

だからこそ、私は日々彼を観察することを命じられたのだ。

高価な医療機器に触れることより、ルイという繊細でいつ壊れてもおかしくないような美しい麗人の看護にあたることに対して少しばかり慢心していた。

見事な金髪に、深い知性を秘めた青灰色の瞳。

擦過傷も火傷も彼の美貌を損なうことはなかった。

鍛えた鋼のような肉体はかなり筋肉が削げてしまったが、やがてそれは元に戻るだろう。彼はとにかく若かった。

夢幻の世界を彷徨っているかのような不安定な日々を過ごしたが、命に別状はなかった。

彼には生きる意志があり、そして何か強い決意が彼を生き存えさせていた。

それが何なのか、詮索する権利は私にはなかった。静観するだけの日々であるが、とにかく・・・このような患者を見守るのは初めてのことだった。

介助は必要であったものの、普段通りの生活ができるようになったルイが、アルディさんと呼ぶと反応するのに、ルイと彼の名前を呼ぶと知らない顔をする。それだけが気になった。特定の音に反応しないという症例は聞いたことがなかったからだ。

そして、彼はあえてその名前に反応していないのだと思った。いつだったか、経験があった。自分ではない誰かであると強く思い込みすぎて・・・自分の本当の名前や姿を拒否してしまう者がいた。こういう、昏倒する事故をきっかけにして、人間は、奥底に秘めた想いを露頭させることがある。私の専門は医療機器操作ではなくそちらの方だった。

つまり、事故に遭遇した人の心の痛みを和らげることをもっぱらの業務としていた。

・・・私が表情のあまりでない東洋人の顔立ちをしていることと、あまり口数が多い方ではなく、秘密を誰かに漏らすほど親しい人間がいないことが、幸いした。

この国で、私の民族が認められるのは大変に苦勞する。

特にこの研究所では、そういった差別や区別はないほうであったけれども、それでも時折どうしようもなく遣る瀬無くなることがあった。

この仕事が楽であると思ったのは、肉体的負担のことを言っているのではない。

就労時間は守られていたが交替の者はめまぐるしく変わっていった。

きっと、ルイの気に入らない看護師であるか、彼の世話に関して失敗したのだろう。

私もいつ、その立場になるかわからなかったから、彼らを嗤うことはできなかった。

■04

彼が眠っているときには来客が必ずあった。

まるでそれを見はからっているかのように。

逆に、彼が目覚めている時に訪れて、彼の言葉や指示や感想を尋ねたがる人物達は、次回以降からは「次」はなく、完全に締め出された。それ故に、彼には眠っている時にしか会えない法則が

浸透していった。

それほど長い時間は要しなかったので、私はそれを無言で受け入れた。

ルイ・ドウ・アルディの眠っている間に訪れる人間は、必然的に決まった者になった。この施設の最も強い権限を持つ人物であり、彼の血族であるフランスの華の指示であることは、明らかであった。

それがルールとなり、敏感に暗黙知について了承した人物だけが、彼の近くに寄ることができた。

彼の生存や、快復の度合いを確認するだけで安堵する人物だけが、彼の近くで彼の吐息を確認することができた。

規則正しい睡眠になってからは、かなりたくさんの人物が彼を訪れていく。しかし、誰もが彼に話しかけてはいかない。

意識がなくても、話しかけてください。

無意識の状態は何も考えているわけではなく、逆に目覚めたままの状態と同じなのですから。

私はいつもそう言うことにしていたが、今回ばかりは、来訪者達にそうは言わなかった。彼らも心得ていた。

今回は特殊な事情によるものであり、通常の、私が「普通」と考えて居る快癒への近道とは違った道を選ばなければ、彼は決して良くなるまいだろうと私も納得したからだった。

肉体が癒えても、彼の魂は戻って来ない。

決して私は口に出すことができなかつたが、彼の症状については明らかだった。

多年に渡る深い嗟嘆が、彼を彼ではない人物に変化させてしまっていた。

彼は今・・・本当になりたかつたものになっている。

戻りたい過去に戻るのではなく、なりたかつたものになって、何かを得ようとしている。

私は奇妙な患者を請け負ってしまったと思うことはしないようにしていた。彼は誇り高くそして穢れなき魂を得て、誰もから望まれた素晴らしい肉体に植え付けられたと信じて居る。固く、強く。

だから、負傷を癒すことに対して彼は協力的であった。通常の倍近い速度で彼は快癒していく。誰もが目を見張る快復力には、彼の精神力も影響していた。

漏れ聞いたところによると、この国でも屈指の名門であるアルディ家では、強い精神力を持つ者が厚遇されると言う。そして当主はそれらの者を束ねて行く必要があり、今の当主であるアルディ氏は、生死をかけてそれを手に入れたという話はまだ記憶に新しい。その息子であるルイが、

彼の気質を引き継いでいないわけはなかった。

良く似た顔立ちの青年は、少し髪が伸びて、どんどん・・・今の当主の若い頃に似てきている。

アルディ氏の若き日の映像や画像はほとんど流出することはなかったが、それでもこの国の有名人でもある彼の若き日の姿の画像を何度か見たことがあった。

大変に良く似ていた。

もっと若い頃は、少女と見紛う神々しいまでに、性別を超えた美中の美を備えていたという。

そんな中で。

彼が眠っている姿と、回復の経過報告だけを確認するだけで満足しない人物が居た。

それが、ヒカル・クロスだった。

やがて、彼の義母となる立場の人間であるのに、まるで、恋人の安否を心配するかのよう、彼女は毎日何時間もここで過ごしていた。

茶色の髪に茶色の瞳の娘は、とても若く見えた。

生命の息吹に溢れている彼女は、物腰は洗練されており、ルイの見舞いに訪れる者たちと同じ空気を纏っていた。

彼女は日本国籍を持っているということであったが、フランス語も堪能だった。

しかしここでの決まり事のうち、日本語しか使用しないということについて、一番遵守していたのは彼女であったように思う。

・・・おそらく、彼女はパリに住まいながら、日常は日本語で過ごしているのだろうと思った。きっと彼とそれほど年齢が離れていないだろう。

自分の息子より年若い娘を運命の人と定めたアルディ氏のことを痛ましい人だと言う者はいなかった。

彼の家は代々多情で有名だったから。

そんな彼が二度と結婚しないと思われていたのに、突然、長らく彼を理解してきた娘と結婚するという話を匂わせた話を公にし始めたので、どんなに稀な才を持った人物なのだろうか、と思っていたが、彼女はごく普通の人間であった。

確かに、彼女は、フランス人の祖母を持ち、世界にも名を知られるようになったクロス・グループの末裔である。

そしてクロス・グループとアルディ家は今では切り離すことのできないほど、深い繋がりがあり、元々は、アルディ氏とヒカル・クロスの父親が親友であったということであった。

彼女の両親はすでに居ないということであった。しかし死亡した、とは誰も口にしなかった。

彼女は、あの不幸な墜落事故の遺族でもある。あの海に沈んだ者を待つ者は、彼女だけではないし、まだ様々な問題が解決されていないので、公式な見解として「死亡した」という言葉は慎むように配慮されていた。

帰って来ない親友夫妻の娘を手元に引き取り・・・そして彼は恋に堕ちた。

年齢も国籍も何もかもを越えて、待つ者同士身を寄せ合っただけなのかもしれないが、言葉にしがたい強い絆が彼らを結びつけていることには間違いなかった。

・・・それなのに、シャルルとヒカル・クロスは連れ立って、ここにやってくることはなかった。

必ず、彼らはひとりでやって来た。

アルディ氏の実弟であるミシェル・ドウ・アルディも然りであったが、彼らはいつも・・・単独でやって来る。

ルイの教育係であり、長らく彼を息子同然に養育してきたとされているミシェル氏は、時折の覚醒中にも室内に入り、ひとことふたこと話をしているようであったが、その際には誰も立ち入らせないので、何の話をしているのかよくわからなかった。

そしてシャルル氏は、彼の睡臥の際に、肉体の診察のみを行っているようである。

時間が経過していくにつれて、シャルル氏が躰の診察を。

そしてミシェル氏が精神状態の確認をしているのだろうということに気が付いた。

私はルイを直接世話している人間であるが、その役割を持つ私にでさえ、それは秘匿された。

そんな中、ヒカル・クロスは、彼が眠っていようが起きていようが、毎日のように姿を見せた。彼の意識が戻って、命に別状はないという診断が下りた日には、まだ面会できないと言うのに、彼の眠る部屋の扉の外で、何時間も涙ぐんでいた。

ヒカル・クロスとルイは幼なじみだと事情を聞いて、納得した。

彼らは兄妹同然なのだろうと解釈した。

彼女はすでに日本よりフランスで過ごす時間の方が長く、つい最近まで、アルディ邸に滞在していたのだと言う。

今は日本に戻っているようであるが、それでもフランスに来訪中にルイの事故に遭遇し、滞在期間を延長しているのだということであった。

それなら、ルイと一緒に過ごす時間が最も長かった人物であり、彼女には家族同然であるという理由から、これほどまでに心配しているのだろうと領けた。

私は極力、彼女と話をしないように、配慮した。

彼女も何か、言い含められているらしかった。ルイには決して話しかけなかった。

偏光硝子で調光されている大きな窓硝子越しに見える彼の眠っている姿を見詰め続けているか、彼が目覚めている時には、大きく手を振って彼女は明るく微笑んで居る。だいじょうぶよ、と声にならない声で、彼に話しかけるが、分厚い硝子越しには、彼女の声は届かない。

中に入れば話はできるが、ヒカル・クロスはあえてそうしなかった。

彼は鼓膜が破れており、大きな音は禁物だった。

女性の甲高い声というものは、彼には障りになりこそすれ、癒しの音楽には鳴らない。だから非常に一方的な伝達方法であったけれども、彼女は、硝子越しに手をあてて、少しでも彼に近く寄れるように顔を近づけて、彼の様子をただひたすら網膜に焼きつけているかのように立っているだけだった。

彼女はいつも微笑んで彼に笑顔を贈る。はやく話がしたい、と言うのに。彼女は、ルイの眠っている時には苦しそうに涙ぐんで彼の姿を見つめていた。これは私の職業から来る勘であり根拠がなかったが、彼女はこうして、窓硝子越しに、誰かを見つめるということを過去に経験しているように思えて仕方がなかった。こういう場面に、他でも遭遇しており、これが初めての経験ではないように思えた。

両の手の平を硝子窓に添えるときに、彼女はいつも躊躇う。手の平に伝わる硬質な冷たさに毎回、驚いて躊躇って、それでもルイの様子を近く見つめていたいという欲求を優先し、額を押し当てるように近く顔を寄せる。しかし、それがとても辛そうに見えるのだ。良く磨かれたそれらを汚してしまうかもしれないという気遣いではなく・・・何か、彼女はこうして自分の言葉を相手に伝えられず、ただ、見つめるだけであった記憶が呼び起こされているらしかった。

■05

彼と彼女の見えざる絆について、誰もが強烈な存在感を感じたかもしれない。しかし、ヒカル・クロスは、彼の父であるシャルル・ドゥ・アルディの恋人であり、未来のアルディ夫人として遇される存在であった。それはすでに公表されていることだった。親子ほどに年齢が離れているのに。彼女を幼いときから育てた親にも等しいアルディ氏と恋に堕ちたヒカル・クロスはアルディ家の者たちも含めて、とても静かだった。若い者に特有の蠕動を感じなかった。ただ・・・ルイ・ドゥ・アルディの安否を案じ、そして彼の呼吸を確かめるだけに日々こうして来棟する彼女に、酷い人だと言って責め立てる者はひとりも存在しなかった。

実息の安否確認だけでも大きな情報であるのに。彼らには、もう・・・こたえが出ていたのだろうと思えるほどに、静かな時間を過ごしていた。まったく関係しないと言うかのような、静寂がそこにはあった。だからこそ、ルイ・ドゥ・アルディという人物に伽藍を感じる。蛻を感じる。

長い時間、彼と過ごした人物はおそらく、ヒカル・クロスだけであろう。それは容易に推測で

きた。

年齢が近く、彼は、いつも留学したり諸外国を遊学している身分であったので、誰かと一緒に過ごす時間はほとんどなかったはずだった。

たとえ、彼の親族であったとしても。

けれども、彼は、いつも拠点をフランスのパリに置いていた。それが何を意味しているのか・・・

ここに書いてある、カルテに記述された生育環境による空気圧の好適について述べる以外に、彼がパリに留まった意味を証明する者はいない。

少し考えれば、わかるはずだった。

彼が、決して、アルディ家から離れなかった理由が・・・

当主の後継者としての責務からだけではなく、もっと別の理由があったということ、私は気が付いてしまった。

だからと言って、それを世紀の発見のように声高に述べるつもりはなかった。

・・・彼の愛が・・・彼の回復を増長する要素であったとしても。

それは、決して、現実では再現されない倖せなのだ。

だから、彼の回復や生きる理由を与えるためだけに、虚構の愛を演出する者として荷担するつもりはなかった。

彼は誇り高く、それを知れば・・・すぐさま、彼はその状況を却下するために全神経を使うようになるだろう。まだ癒えていないのに。彼は、そのために、命を削っても躊躇わないだろう。それほどに、誇り高い人物であることは、これまでの接触で理解していたつもりだった。

■06

彼女は毎日やって来た。

晴れても、雨でも、まったく関係なかった。どんなに荒れた天候の時にでも必ずやって来る。

当然のことながら、私とは面識を持つようになった。けれども、彼女は目が合っても静かに頭を下げるだけで、私に話しかけることはなかった。

誰かに禁じられているらしい。

気になったのは、彼女がいつも長袖を着ていることだった。

直射日光に弱い体質であるのか、と思ったがどうやらそうではないらしい。

どうも、定期的に血液を抜いているらしかった。

それも少量を頻繁に採取しているようだ。

人工透析を受けているのか、それとも血液検査をしないとならない重篤な病なのか・・・しかし彼女はいたって健康体であるかのようにだったので、その可能性もなかった。

それが分かったのは、彼女の袖から血液が流れ出しており、廊下で立ち往生しているところに私

が出くわしたのだ。

私は持っていたシリコン・グローブのジェルを手に塗りつけながら駆け寄った。

ジェル状のそれは、皮膚に吸着するとゴム手袋のように表面に張り付く性質を持っている。そしてある一定時間を経過すると剥離し、一定の方向に一定時間力を加えるとこれも簡単に分離した。これはルイ・ドゥ・アルディが開発したものであるということであった。どんな場所でも決して劣化しない製品になるまでには時間がかかったようだが、彼は・・・大変に素晴らしい才能を持っていると確信する。

私が慌てて近付くと、彼女はちょっと困ったようにブラウスの裾を捲っていた。

「ああ、大丈夫です」

ヒカル・クロスの声は柔らかく、そして若い娘特有の声質を持っていた。

茶色のうねりの強いくせのある髪に、大きな茶色の瞳が印象的だった。

初めて聞く彼女の声に、私は一瞬だけ辟易ろいだ。

もっと落ち着きのある声かと思っていたのだ。しかし彼女は完璧なフランス語を話していた。

そして、彼女は本当は大変に若いのだということを改めて知った。

肌理の細かい肌や、髪の色、そして何より伸びた腕の線の細さが、彼女の年齢を推測させた。

まだ、成人してそれほど経過していないのだろう。

彼女は腕から血を流していた。

止血テープがうまく貼れていなかったらしい。

動いた拍子に、圧迫されて血液が流れ出てしまったのだ。

手早く、持っていたガーゼを取り出して、止血した。

あっという間にそれらが朱く染まる。私は強く圧迫すると、そのまま腕を持ち上げながら、もう片方の手でテープを出した。

ポケットに何があるのか、見なくてもわかる。視線は彼女に向けたままだった。

彼女からは僅かに薔薇の香りがした。大変に品の良い東洋人であるというしか表現しようがなかった。

しかし、彼女は世間一般の若者と違っていた。・・・その腕の採血痕があまりにも多いので、私はだから眼を逸らすことができなかったのだから。

細い長い腕には、内出血している痕が転々とあった。採血技術は今は大変に発達しているのに、これほどまでに何をどうしたら、痕が残るのだろう。

私の視線に気が付いて、ヒカル・クロスは気恥ずかしそうに笑った。

「あまり見ないでください」

私は小さく謝罪した。ここでは大きな声はもちろん、会話も禁じられている。

鼓膜を損傷しているルイ・ドゥ・アルディのことを考慮してのことだった。

どんなに防音装置が優れていたとしても、彼には完全な静寂が必要であった。

「綺麗なものではないから」彼女はそう言って笑った。私がまた謝罪したからだ。

年頃の娘が長袖を着る気温ではなかった。それなのに、彼女はそうして素膚を隠している。それについて考えが及ばなかったことを申し訳なく思った。

どういうわけか、彼女はとても親しみやすい印象を与える。

少なくとも、フランスの華や、彼の実弟には、こんな風に近寄れない。

私が手早く止血テープを貼り付けると、彼女はありがとうと言って笑った。

「床を汚してしまった」

ヒカルが酷くそれを気にしていたので、私はあとで片付けると言ったが、彼女はそれでも気にしている様子だった。

彼女の血液は何かに汚染されているのだろうか。私はグローブの装着を外そうとしていたがそれをやめた。

彼女の服は鮮血に染まっていた。

それでも、片腕だけ巻き上げている状態であったが、薄い花柄のそれは、彼女に良く似合っていると思った。

「ちょっと動かないで・・・」

私はそう言うと、跪き、自分のハンカチを取り出して、それらを丁寧に拭き清めた。あとで消毒しておけば、問題ないだろう。

その間、彼女は立ったままで、片腕にもう片方の指を押さえたまま、じっと様子を見つめていた。

足元の靴もかなり高価なものであったが、清楚であった。私はますます、ヒカル・クロスという人物は謎めいていると思った。

しかし多くを穿鑿する気はなかった。それはしてはいけないことのリストの筆頭に挙げられるからだ。私は仕事をしに来ているのであって、人間観察を生業としているわけではなかった。

「そのハンカチ・・・」

私は良いのですよ、と言った。彼女のこの靴片方分にも到底及ばない値段のものであったし、こんな時であった。清掃員を呼んで清掃する時間が惜しかった。というよりもむしろ、彼女の腕の痕を誰かに見せては彼女が気の毒だと思ったのだ。

「今度、弁償させてください」

彼女は申し訳なさそうに言った。

私がハンカチを取り出し、床に広げた時に、彼女は小さな悲鳴を上げた。そして、当然だとは思わず、それはいけない、と言って私を押しとどめようとした。

それだけで十分だった。

この人は、良識のある人物だと思ったからだ。

私は職業柄、多くの人々と接する機会があるが、それでも高慢さに辟易することもあった。心が貧しい者たちは、自分以外の者の奉仕を当然のものだと考えていることが多かった。でも、いち

いち気にしてはこちらも仕事が成立しない。

私の無愛想さはそこから来ているのかもしれない。

誰か特定の患者に深入りしてはいけない。そう考えていた。

それは私が深入りされたくないからという理由が大きかったが。

しかし、ヒカル・クロスという若い娘は大変に恐縮し、私の名前を名札で確認すると、いつも会っていますね、と言って笑った。

「ヒカル・クロスです」

彼女はそう言って自分の名前を名乗った。もう知っていますよ、と言って私は微笑んだ。

「私の血液は、ちょっと特殊なので・・・こうした血液を拭いたものは、勝手に捨ててはいけないことになっているのです」

彼女はそう言って事情を説明した。だからそのハンカチは自分にくれないか、と言ったのだ。床を拭いたものであるし、どうせ焼却処分をしてしまうのだから気にしないようにと言ったがそれでも彼女は首を縦に振らなかった。

「どうしてもそうしなければならないのです」

困った顔をするものだから、私は、そうですかと言って、ポケットから小さなビニールの袋を取り出し、それに入れてやった。そしてそれをヒカル・クロスに渡してやると、彼女は微笑んだ。

「凄いわ。何でもお持ちなのですね」「たまたまですよ」私はそう言った。

医療用の小物を取り纏めるときに便利であったので、そのまま持ち歩いていたことが幸いした。

■07

「どうか、内密に」

それがヒカル・クロスとの遣りとりの最初であった。

彼女は私に繰り返し懇願した。

もっとずっと後になって、彼女がなぜあの時、自分の体液に拘るのか理由を知るようになったが、この時の私には、彼女が何かの病に感染でもしているのだろうと思った程度だった。

扱いは慣れている。

空気感染することもなさそうだし、正しい知識があれば、特段に問題になるようなものではなさそうだった。

彼女が慌てている様子ではなかったので、私は吐息をついた。抗体検査は定期的に受けていた。

「その出血は尋常ならざる状態ですよ、マドモアゼル」

そう言うと、彼女は少しはにかんだ。

この件は内密にして欲しいという彼女の言葉を私が承諾したからだ。

「若いお嬢さんが、そのような針痕を残すと・・・哀しむ人が居るでしょう」

それでもやらなければならない病であったのなら、この時の私の言葉はとても思慮を欠いた発

言だったのかもしれない。

しかし彼女の落ち着き払った態度や、私に全幅の信頼を置くかのような態度が気になっていた。この治療棟から情報が漏洩することは皆無だった。そしてその仕組みを作ったのは、彼女の未来の夫になるべきシャルル・ドウ・アルディであり、システム制御に関してはルイ・ドウ・アルディによるところの功績が大きかった。つまり、この棟は、彼らの合作でもあるのだ。

皆が、完全に管理されたIDチップシーツを装着し、棟内に居る時にはどこで何をしているのか把握できるシステムになっている。

やはりこれも後になって思い返したことであったが、ルイの考案した事柄にはすべて、シャルル・ドウ・アルディが関与していたように思う。

それに、彼の教育係であり、シャルル・ドウ・アルディの実弟であるミシェル・ドウ・アルディの名前も連なっていることが多かった。

これほどアルディ家の結束が固いのであれば、あの家柄は安泰であろうと思った矢先の・・・不幸な事故がルイを襲ったのだ。

そんな中に、彼女の存在は、まったく異質でありながら、ようやく姿を現したという感じがしないでもなかった。

彼女は、長らくアルディ家で養われており、アルディ家の当主であるシャルルと彼女に父は親友であったと言う。

そして、クロス・グループの孫娘でもある彼女は、まったく真相の令嬢として育てられた。彼女の両親が彼女だけを残して、不幸な航空機事故で未だ行方不明であることから、彼が引き取り養い育てていたのだという。

一時期はルイ・ドウ・アルディの婚約者として紹介もされている。

それなのに、彼女は親子ほどに年齢の離れたシャルルと婚姻すると言う発表がなされたが、徹底された情報操作が行われ、それらに対する記事はまったく明らかにされることはなかった。もちろん、この研究所の中にも箝口令が敷かれ、情報管理が徹底して行われた結果、彼女はこの棟に直接入ることの出来るパスコードを手に入れることができた。

真実と情報は違うのだということを私は思い知った。

しかしそういったことをまったく考慮に入れていないヒカル・クロスの場合には、打算というものとかけ離れており・・・駆け引きを知らない様子であった。

彼女の気質であるのだろうが、あの高名なアルディ家の教育は完全に分化されていたのだとわかる。ルイ・ドウ・アルディとヒカル・クロスは何もかもが違っていただけだ。

私は苦笑した。

私は秘密を漏らす誰かさえないので、心配は無用だと言った。

「それに・・・そんなことをしても、なんら得にはなりませんからね」

私は苦笑してそう言った。損得勘定をしても何もならない。一時の好奇心や利益に目を眩ませて

現在の職を失うような結果になっては何もならないことは、少し考えればわかることだろう。

・・・私はもう、そんな風にして自己保身に計算を巡らせる年齢になってしまっていた。

しかし、彼女はそうではなかった。

彼女はその言葉を聞いて、微笑んだ。

笑うと、とても幼い。彼女は若く見えるのではなく幼く見えた。

きっと・・・彼女が東洋人の特徴を濃く持っているからだろう。

「でも、約束してください。後で必ず適切な処置を受けることを。・・・何かがあってからでは遅いですからね」

そう言って、私の微笑みに彼女は頷いた。

どういうわけか、彼女はこれほど年若く経験も少ないだろうに、人を安堵させる空気を持っていた。清麗な空気が彼女の全身を包んでいる。そんな感じがする。

大きな苦労があったのだろうと予想できた。しかし彼女はそれを滲み出すことはしなかった。それはシャルル・ドゥ・アルディの教育の賜なのだろう。

彼女の仕種ひとつひとつが洗練されており、静かな所作で始まっては終わった。

それなのに、生命の強さを感じる。これは彼女の持っている素養に大きく影響するのだろうと思った。彼女は、太陽のような・・・いや、万人に照らし出す陽光のような人で、その名前のとおり、暁輝く存在であるのだと、僅かな会話でそう思うようになる。

私は極力彼女を刺激しないように、それでいて、大切な来賓に対して失礼のないように言った。

「今日はもうお戻りになられて、少し躰を休めた方が良いです。・・・これ以上の失血は貴女健康を害する怖れがある」

彼女は眼を細めて、気恥ずかしそうに笑った。

「ありがとう。でも、ルイの顔をほんの少しだけでも見てから・・・それではいけないからしら」

彼女がそこまでしてここに来棟することに大きな意味があると思った私は、しばらく考えるふりをして、顎に指を伸ばして考えるふりをした。

即答すれば、彼女は自分の申し出を引き下げるだろうと思ったからだ。

また、誰かの判断を求めるように、この場での回答を保留にすれば、彼女は同じようにやはり今日はやめておく、と言うであろうと思った。

天候が悪くても、ここにやってくる彼女にとって、彼女の体調というものは、ルイ・ドゥ・アルディの様子を窺うことを中止する理由にならないと思った。

■08

それから、ヒカル・クロスとの暗黙の交流が始まった。

何がどう変化したのかというと、あまり変化はなかった。

けれども、彼女が来訪する時間はいつも決まった時間になり、そして私が彼女を待ち受ける時間は、交替シフトの赦す限り同じ時間になった。

それでも、目が合えば黙礼は欠かさず行っていた。これは彼女の生国で奨励されている伝統的な儀礼であった。言葉を交わさなくても、静かな礼節がそこにあった。

それは私の家系も同じように美德とされていた事柄であったが、なかなか浸透しなかったことを思い出した。

それを徹底したアルディ家というのは一体どんな生活を普段の生活としているのか、興味が沸いたが、すぐにそれは沈静化した。

クライアントの秘密を嗅ぎ廻るのは御法度であるし、好奇心を持ち合わせたことそのものが今のポジションを危うくさせることは、わかっていた。

深入りしてはいけない、と経験上わかっていた。ここに集うような者たちの秘密は、己の秘密のようにしてはいけないことを……ただ、通り過ぎるだけで留めて置いてはいけないのだと理解していた。

それでも、ヒカル・クロスは興味深い人物であった。まだ年若いのに、日々の習慣を守り、そして決してルイ・ドゥ・アルディと会話しない。彼がそこまで回復しているわけではないということもあったが、積極的に会話しないように努めているように見えた。

だがしかし、望んでいないということではない。

回復の程度については把握しているのか、誰かに詰め寄って尋ねることはしなかった。

主治医が彼の父であり、彼女の近い人間であるアルディ家当主であるのだから、それは当然のことであったのだが。

それでも実際に世話をしている人間に様子を尋ねたがるのが人の常であるように思っていたので、彼女の距離の置き方が非常に気になっていた。

同時に、ルイ・ドゥ・アルディも彼女に話しかけることはなかった。

しかし、私は気がついていて。

ヒカル・クロスが彼を訪ねる時間には、ルイはいつも覚醒しているのだ。

それなのに、微睡んでいる様子を彼女に見せる。

非常に誇り高い人物であると聞いていたから、睡眠中の様子を誰かに閲覧されることに対しては拒絶を示すと思っていたのに。

そうではなかった。

このふたりの関係は、あにいもうと以上の強い絆が存在する、と思わざるを得なかった。

それなのに、言葉を交わすどころか……彼らは決して近寄ろうとしなかった。

彼女と彼は単調な作業を繰り返す。毎日……互いの視線を避けるのに、互いの気配を確認している。なぜなのだろう。好奇心と言うには……その秘密は重すぎた。

秘めたる思いと言うには、それ以上に、秘することを重く課していた。
若い彼らの目に見えない緊迫した空気が、私を落ち着かなくさせていた。
彼と彼女は恋人同士ではないのだろうか。

そう、疑われても仕方がなかった。

過去に・・・婚約者として報道されたことがあったが、そういった関係から解消して、彼女が父親に乗り換えているという軽薄さも感じなかった。

彼女は、心から、ルイ・ドゥ・アルディを心配して、日参している。

それを、ルイ・ドゥ・アルディは知っている。けれども、彼女と彼は会話を交わすことはしない。

・・・彼女は彼の状況について、全部把握していないのではないのだろうかという疑問がよぎった瞬間でもあった。

しかし、私が彼女に話しかけることはあり得ない。

それは固く禁じられているからだ。

研究所で治療する対象者は滞在者と呼ばれ、患者と呼ばれることはない。

滞在者の親族には規定によって話しかけることはしない。

私の雇い主はこの特殊な研究所であり、標準から逸脱した報酬を得ているのは・・・ここで知り得た秘密を遵守するという未来までの束縛を私自身が約束しているからだ。

それでも。

日々、ルイ・ドゥ・アルディの顔が穏やかになる。

日々、意識が戻るにつれて、誰かを探すように青灰色の瞳を彷徨わせる。

その時間に覚醒するのは、やはり彼女を待っているからだ。

驚異的な速度で回復する彼の姿を見たいとヒカル・クロスが訪れるのに、彼は彼女に横臥する姿しか見せなかった。

なぜなのだろう。まるで、眠りを覚醒させるのは、彼女であると訴えているかのようだった。

世が世なら、彼は・・・眠りの杜の美女ならぬ、眠りの杜の王子なのだろうな、と思った。

しかし彼は望んで微睡んでいる。彼女と話をしないことを理由とする目的を自ら創りだしていた。

私は嗤う。

陳腐な言葉でしか彼らの関係を表現できない自分の語彙力に嗤う。

それでも。

普通の・・・ごく一般的な言葉では、彼らは表現できないのだ。

彼女の真摯な眼差しが彼に注がれるが、彼はそれを無視して眼を瞑る。

それなのに・・・彼女の気配が消えると、足音が消えると・・・彼は瞳を彷徨わせて、彼女の痕跡を探すのだ。これはなんと行って良いのか・・・傍観者の私には大変に胸の潰れるようなすれ違いであった。

でも、私は、彼に尋ねることは出来ない。それを尋ねたら、彼と彼女の距離は縮まるかもしれない。しかし、彼女はすでに・・・ルイ・ドウ・アルディではない人物の恋の相手であった。

■09

見つめ合うことを放棄した・・・触れあうことをやめることによって魂の交合を行っているとしたら。

それは秘めたる恋を越えて、もっと違う何かになるのかもしれないという実験を行っているかのように、彼と彼女は沈黙の会話を続けていた。

彼女は気付いているのかもしれない。彼がいつも来訪する度に意識のない日々が続き、決して会話できないことについて、疑念を抱いているのかもしれない。

しかし、私が観察する限りでは、彼女はいつも決まった時間に遣ってきて、いつも決まった時間に帰っていく。できる限りここに来ることを課しているようで、そうすることによって、彼の快癒祈願をしているかのような・・・そう。それは礼拝のようにも見えた。

その間にも季節は変わり、彼の体調は回復に向かっていた。

相変わらず口数は少なかった。

完全に空調管理された滅菌棟であっても季節の移り変わりや気圧の僅かな変化に影響しないというわけでもない場所に設置された場所にここは存在していた。

それらに引き摺られない程に体力が戻り、様々な失われた細胞が再生を始め、損傷した部分が再び機能し始める頃になると、彼は起き上がって覚醒している時間を増やしていった。

まるで、自分で管理しているようだった。

そして彼は酷く無口だった。

熱風に晒された咽喉部の一部の損傷によって、彼はしばらく声を発することもなかったが、ようやく回復した時期を迎えたかと思えば、彼は短い言葉しか発しない。

誰とも会話しなかった。

必要最小限の言葉しか使わない。挨拶も交わさない。

しかも、彼は医療知識もあったので、痛みや疼きなどの主観的な症状を告げることはなく、投薬の量や間隔の変更をぽつりぽつりと言うだけであった。

広範囲にわたって移植手術や再生治療を幾度も繰り返しているから、酷く痛むはずであるのに、彼は何も言わなかった。

そのうち躰の方が悲鳴を上げて、長時間眠る日々がかなり長い時間続いたが、それは彼が生きているという証拠でもあった。

若さとは脅威で、彼の肉体は素晴らしい速度で回復していった。

やがてある時期から、彼は起き上がってタブレット端末などで読書をするようになった。

柔らかい枕を背あてにして、握力の訓練や断裂した筋肉の機能回復訓練に大変役だったそれは、ヒカル・クロスから差し入れられたものだった。

彼が大変な読書家であるということは容易に想像できた。

彼はもの凄い速読で記憶しているようだった。

毎日のように更新されるそれらの情報は、ヒカル・クロスから入手されていると思われた。彼女は、彼の好む分野を知っているのだ。一体、いつ、そのような作業時間を捻出しているのだろうか。私は彼らの時間軸は、私のそれとまったく違うサイクルで展開されているのだと知り・・・そして感嘆する。こんな稀なる逸材が、これからの世を動かすのだろうかということを目の当たりにして・・・そしてそれは叶わない夢などではないことを、神託にも似た荘厳な痺れとともに感じる瞬間が多々あった。

私は充電電池を交換する役割が増えて、そしてルイはそれを私だけに任せるのだとしばらく後に知った。私の勤務時間中に訪れるバッテリー警告のランプは、勤務開始と最後に必ず発生した。つまり、彼は、私の在勤時にだけ、ヒカル・クロスから贈られたそれを使用し、彼の私生活を垣間見せるのだ。どれだけの量を読み込めばそれほどの短時間でバッテリーが切れてしまうのだろうかと内心呆れたが、それは最初のうちだけであった。彼の記憶容量は無限で、一度記録してしまえばそれを思い返して思考に耽ることは用意なのだという思考過程を知ってようやくわかった。私の居るときには集中して無防備になり、その状態を他の者に見せたくないのだという彼の意図を知ると、彼の誇り高さに唸るばかりであった。

彼の脳は、少しも損傷していないで自己の前のままに機能しているかのように思われた。

・・・ある課題を除いては。

医療機器に影響があるので常時接続はできないが、彼は私にだけそれを許可した。

他の交代要員には決して何かを許可させることはなかったと聞き、私はあの気難しい滞在者が、私の何を気に入ったのか少しも理解することができなかった。

ただ・・・ヒカル・クロスと言葉を交わし、そして彼女の窮地をほんの少しだけ助けてやったという程度であるのに。彼はその場所に居合わせていなかったのに、何もかも知っているようだった。

彼に対する世話の程度が気に入ったのではなく、彼女と・・・少しばかり関わったというだけで、ルイは私を選んだのだ。

そこまで彼女を想いながら、彼はどうしてヒカルに声をかけないのだろうか。彼女は待っているのに。彼から、おいで、と呼び寄せることを待って・・・毎日、彼の微睡みの中に現れる。このような行き違いを毎日続けて、彼女は神経が参ってしまわないのだろうかと考える時もあったが、大人しく従順そうな少女と言っても良いような容姿のヒカル・クロスは、不壊の魂を持っていた。我慢強く、日々、ルイが横たわっている姿だけを見つめる。しかし僅かな変化・・・そう、たとえば、彼の頬に少し赤みが増してきたとか。彼の削げた頬がほんの少しふっくらしてきたこととか。表面の皮膚の裂傷が回復してきたとか。

そんな瑣細な変化に安堵し、そして帰っていく。それだけで良いと・・・生きていることだけで

喜びであると全身で訴えていた。

不思議なことに、アルディ家の構成員は皆、単独で訪れる。ヒカル・クロスもそうであった。彼らは連れ立ってやって来ない。騒がしい音は彼の鼓膜に良い影響は与えないと理解しているからこそなのか、それとも・・・もっと大きな波紋を与えて今度こそ彼が戻ってこれないように仕向ける真似は避けたいと考えているからなのか。

どちらにしても、ルイ・ドゥ・アルディは星辰の子と呼ばれ、あらゆる天体を遵えるという美称を持っているが、そのとおりに・・・誰もが彼を失いたくないという意図が作用しているからこそなのだ、という私なりの妙な納得があった。

これほど寡黙な人物は今まで見たことがなかった。すでに長い時間を共有しているのに、まったく・・・ルイ・ドゥ・アルディという人物がどんな人間なのか、謎めいた人物であること以外にはわからなかった。

届かない想いを抱えながら、他者の前では平然としている。そして僅かな・・・ヒカル・クロスが来訪してその気配が消えゆく瞬間だけ、心許ない風に視線を彷徨わせて彼女を探す。私が知っているのは、大変な読書家で天才で、そして選ばれて何もかもを持っているのに、彼は何も持っていないと感じていることだけであった。

どれほどの見舞いの品やメッセージカードが届いても、それらで彼は癒されない。

徐々に彼の眼孔に鋭さが戻ってくる頃。彼の肉体も回復に向かい、そして彼はとても睡眠時間が短い人間で、本来ならこうして長い時間ひとつのところに留まっているような性質の人ではないことも知った。本人の様子からわかったこともあったが、周囲の彼に関する関心は大変なもので、時間の経過とともに人々の記憶から消去される類の人間ではないのだと改めてそう思った。彼はフランスの華の血を引く後継者であり、そしてたったひとりしか存在しない星辰の子なのだから。多方面にその名を轟かせ、長い時間をかけて彼はアルディ家の反映に尽力し続けた。おそらく、復帰後も同じように黙々と淡々と過ごすのだろう。

私が周囲の情報や彼自身の様子からだけではない事柄からわかったことと言えば。

・・・彼には、彼女が必要なのだ。死ねないほど、愛しているのだ。あの人を。

それだけはわかった。死ぬほど愛しているという言葉もあるだろう。でも、彼は死ねないほど、彼女を愛しているのだ。自分の血族よりも。自分自身よりも。

だからこそ、彼女と言葉を交わさないことを自分に課し、それを無言のうちにヒカル・クロスは承諾しているのだと思った。

ルイ・ドゥ・アルディの感じている情と、彼女のそれは違うのだろう。

だから、言葉を交わさないのだろう。

同じ敷地で長い時間を一緒に過ごしながら、同じ質の愛ではない感情の交叉は、互いをどれほど傷つけるのだろうか。それは私にはとても想像のできないことであった。

若いふたりはそれらを知りながら。相手の愛慕に応えられないことを知っていながら、それでもこうして日々巡り会いを繰り返す。私は胸が潰れそうになった。

男女の愛恋と言い切るには難しい、癒しがたい傷がそこにあったからだ。

肉体の傷は癒えても、魂の癒しを迎えることが出来ない。だから、彼は誰とも話をしないのだろうと察した。私は彼に向けて言葉をもっとかけるようにと心がけていた留意事項を削除した。

ルイ・ドウ・アルディには沈黙が必要で、ヒカルという名前の暁だけを欲している闇の住人であることを彼自身が定めてしまっているのであれば、誰も彼を救うことは出来ないのだろうと思った。

ただひとり。ヒカル・クロスだけが彼を癒すことができるのに、癒しの暁を持つ彼女は彼に近寄れない。

■10

他者の詮索というものは、時に必要な助走になることもあるが、その大半は思い通りにならないこと・・・つまり、最良の結果と違う場所に行き着くことになる原因になることが多かった。

それに私は彼と彼女のごく一部しか知らないし、彼らから直接聞いたわけでもない。私自身の好奇心を満たすために、今の状況を覆すことを代償とするには危険すぎる秘密であったし、特に・・・ルイ・ドウ・アルディは・・・彼はそれを望んでいないのだろうと思った。

相も変わらずヒカル・クロスは毎日やって来る。それをルイ・ドウ・アルディが認識していることは間違いないのだが、それについて彼女は気がついているのだろうか。

ほんの少し・・・本当に、ほんの少しだけ遅れて来棟する彼女の気配を感じようと彼が神経を傾けていることを、彼女が知ったとしたら。

彼は、その瞬間、彼女を全身で欲することをやめてしまうのかもしれない。

これほど若いふたりが、どうして触れることすらできないのか、私は黙って見つめるだけであった。それしかできないし、それ以上のことができる立場にもない。

大人になるというのはこういうことなのかと思った。傍観することは忍耐を必要とする。

しかしそうしなければこのふたりのこたえは出ないのだろう。

・・・彼は回復している。徐々に肉体は戻りつつあった。あの事故によって焦げた髪は切り落とされていたが、それが再び伸びて見事な金色を取り戻していた。

いや、以前より長くなった。しかし、無粋という言葉からは縁遠いほど美しく滑らかな金の髪が蘇っていた。

皮膚の移植は成功して癒着の具合も良かったし、骨折や打撲はもうほとんど完治していた。何より、彼の若い鍛えられた肉体が今回、彼の命を救ったのだ。そして、最新の医療が彼の回復を

支えている。

・・・再生医療の最先端の技術を持つこの研究所では、彼の治療が最優先事項とされていた。彼はこの国の将来を担うほどの優れた逸材であり、あのアルディ家の後継者であるのだからその待遇は当然であった。

しかし人の出入りを極力抑えた環境が整えられ、安定した容態を確保することができるようになったため、更に人員の往来については管理徹底されるようになった。

・・・ルイ・ドゥ・アルディの覚醒時間が長くなっているからだ。

ヒカル・クロスが、時折姿を見せなくなることがあったのは、この頃からだった。

どうしても来棟できない時には、彼は私がある時担当している職員に、控えめに言付けしていく。ルイが目覚めたら、伝えて欲しい、と言って去って行く。

そして彼はそれを後ほど聞いて無言のまま僅かに頷き、ヒカルの不在を承知するのだ。

物憂げな青灰色の瞳が澱む。明らかに、失望している眺だった。私たちのような職に就いている者たちは、相手と言葉による会話という手段を使用しなくても十分に意思疎通ができることがあった。しかしながら、彼女に彼の無言の囁きは伝わらない。私は切なくて・・・彼の瞳を見つめて観察するという行為が苦しくなってきた。

なぜ、こうまでして彼女を求めているのに・・・彼女の言葉を求めているのに、彼はそれを伝えることをやめてしまったのだろうか。

燃えて焼き尽くすような烈しさを持ちながら、彼は静かに・・・炎を燃やし続ける。

絶やさないように。静かに。けれどもそれは決して消えない。

そんな日が、何度も続いた。そう、何度も。

私は彼と彼女の間が少しも縮まらないことに対して諦めにも似た気持ちを持つようになっていった。彼は驚異的な速さで回復しているのに、まったく時間軸が違っているかのように、彼と彼女の間の時間はゆっくりと動くどころか・・・停止したままだった。

それは気の遠くなるような繰り返しだった。

季節は移り変わり・・・そして彼女の着衣が一枚一枚羽を滑り墮としていくかのように薄くなっていく季節に、彼はこの棟を出ることになった。

機能回復の運動も始まっていたし、投薬量も減っていった。相変わらず食は細かったがそれは元からのようだった。

彼は激しい訓練で肉体を鍛えるために完全な食事管理をしていたことに加えて、味覚に優れていたもので、損傷していないその感覚が、味気ない食事に不平を漏らしていたのだろう。

全てが元通りというわけではなかったが、滅菌状態の部屋から出ても問題ないと診断されて・・・そして、彼はその先の段階に進むことになった。

ここまで、長い間担当していると自然に情が湧くものであり、家族に感じる連帯感のようなもの

を持つことがしばしばあったが、彼と私の間にはそれはなかった。

私が彼に対して何も語りかけないことを貫いたからなのか、何も語らないことを彼が貫いたからなのか、理由はわからなかったが、互いに深く干渉しないという決まり事がいつしか生まれていたようだった。

・・・日々の彼の生活を細かく思い返しても、そこには何も残らなかった。

それはとても不思議なくらいにまったく蓄積されなかった。彼の在棟している毎日を細かく記録しているのに、それでも私はその過程を思い出すことはなかった。

ただ思い返すのは、彼の切ない遣る瀬無い青灰色の瞳がヒカル・クロスの姿と気配を求めて彷徨う姿ばかりであった。美しく儂く・・・声をかければすぐに霧散してしまう空気のように、張り詰めた何か。誰も近寄せないほどに冷たい雰囲気を持つ彼が一瞬だけ瞳を細めて表情を緩める。まるで冬眠を強いられている眠りの杜の住人のようだと思ったのは、間違いではなかった。

これほどの麗人であり、肉体的にも滅多に遭遇できないほどの回復ぶりを見てきたし、それに彼に施されている治療は、世界最高の治療と言っても過言ではなかった。私の持ち合わせている経験や知識ではとうてい理解しかねる様々な処置を施されている彼の一端しか私は知らない。

ただ・・・彼に繋がれた装置がひとつずつ外されて、彼が何かに凭れていたとしても自力で立ち上がることができるようになる様を見届けるだけしかできなかった。

彼は無言で、長らく動かしていない筋肉が硬直している故に感じる痛みも越えて・・・一度も。そう、ただの一度も何か後退的な言葉を発することはなかった。強靱な肉体の持ち主だと思っていたが、それ以上に、彼は不屈の精神を持ち合わせている。これには感嘆するばかりであった。

だから。・・・彼の愛も、きっとそうなのだろうと思った。

■11

まったく縮まらないふたりの距離に、苛立つどころか・・・私は平穏さえ覚えていた。

彼らの間は、変化しない。

脆くか弱いように見えて、長い間、彼らはそうして重ね合うことのない時間を過ごしてきたのだとを感じる。

それは、彼と彼女がこの事態についてまったく・・・突虚として訪れた苦痛だと感じていないように見て取れたからだ。

なぜ、どうしてといった、理不尽に対する不満をヒカルに感じなかった。ただ・・・彼女は本当に彼のことを案じ、何かを求めることも見返りも持たずにただ、彼の姿を眺めるだけだった。

そんな時間さえ、彼らは無為であるとは思っていないようだった。

不思議ではあったが、私はどこか嬉しかった。

彼らは若い者に多く見られる愛や恋の熱に浮かされるような昂揚感が必要としていない。静かだけれども一途で激しく唯一の・・・強い感情が、ここに存在しているからだ。目に見えない根拠のないものに対する揺るぎのない信念に近い何かがある、確かにあった。

しかしその静寂に変化が訪れた。

ルイ・ドウ・アルディがこの棟を出て、アルディ家の私邸のひとつに移動するということが決定となったからだ。ここからそれほど遠くはない。

けれども、ここではない場所に移るということであった。

それが良いのかもしれない。

私は内心この予定を大いに歓迎した。

私が決める事ではなく、彼の主治医がそれを許可したのだが。

・・・本来、短期的な滞在しか許可されないこの階にこれほど長く滞在するのは彼が初めてのことであっただろう。

それに加えて、彼は誰とも必要最小限の会話しかしない。

彼の復帰を促すためには、環境の変化は必要であった。覚醒している時間が長くなって来たとはいえ、彼はまだ一日のうち、半分眠って半分起きているような状態である。

最初の変化は・・・ヒカル・クロスからだった。

彼の治療や万が一の時に備えての様々な対策や課題についてすべてが解消された時。

間もなく、彼がここを出るという日が数えるばかりになったときだった。

騒々しい準備はなかった。全てのせわしなさはこの階ではない場所で稼働していた。

・・・私はこの施設の被雇用者であるから、業務はこれで終了することになる。

当然に、ルイ・ドウ・アルディの担当を外れて、その抜けた枠に新しい患者があてられるだけであった。

彼には別れの言葉も何も告げずに居た。そういったことに感慨深くなるような人物ではないと知っていたからだ。彼の周囲に群がる者たちは、彼と言葉を交わそうとしていることが多い。

しかし、この棟では、彼から話しかけられない限り、私的会話はしてはいけないことになっていた。

それに・・・彼の回復を心から祈念している者たちは、みな、彼と会話しなかった。

主治医のシャルル・ドウ・アルディはルイが完全に意識がない時にしか近付かない。どこで見ているのか、彼の本当の眠りを察知してやって来る。

だからヒカル・クロスを同伴してはやって来ないのだった。彼らは示し合わせたかのように、単独でやって来る。ルイの叔父であり教育係のミシェルに至っては、室内にさえ入ろうとしなかった。

「お世話になりました」

茶色の髪の娘は私の姿を見つけると、廊下を歩く速度を少し変えて、私に向かってまっすぐ歩いてきた。

そして、目の前に立つと、彼女は日本式に礼を述べた。

私は微笑んだ。

「仕事ですから」

「いいえ・・・あなたには色々と・・・それ以上のことをお願いしてばかりでした」

私がルイ・ドゥ・アルディのタブレット端末使用を補助していることを彼女はどこからか聞きつけ来たらしい。

大きな瞳がくるり、と動いた。まだ若い。化粧をほとんどしていない若々しい頬が綻んだ。

「いつか、きちんとお礼を述べようと思っていたのだけれども・・・」

「業務に対する対価は得ていますから。マドモアゼル」

私はそう言って、恐縮する彼女の礼の言葉を流そうとした。

彼女が曖昧に言っている『いろいろ』というのは、先般の私が処置してやったあのことも含まれているようだった。

人に言わない秘密を持つことの苦しさを彼女は知っているのだな、と思った。

その瞬間だけは、彼女の穏やかな表情が少しだけ曇ったからだ。

だから私は淡々といつも使っている言葉を述べた。

「難しいことを為し遂げたわけではないですから。いつものとおりに過ごしました。

とてもよいクライアントです。まったく問題は発生しなかった」

彼らと対等であるかのような振る舞いはするつもりはない。

感謝されたいわけでもない。

ただ・・・そう、残念なのは、彼らの動かない静寂の中にある愛というだけでは片付けられないものをもう少しだけ見ていたかった、と思ったことくらいだ。

しかしこういう出会いには中途の別れが附随する。

誰かの結末を見届けるというのはできない。

その人そのものではないのだから。そして、私の結末も、彼らが見ることはないのだ。

それが人生であり生活であり・・・人が個であり孤であるかもしれないという証明のように考えていた。

「ルイは貴方のことをだいぶ気に入っていたようだったけれども」

彼女はそう言って私を見上げた。いいえ、と私は首を振る。

ヒカル・・・貴女だけしか見ていない彼のことをそんな風に言うてはいけない。

■12

「私はただ見ているだけですよ。・・・彼の容態を。それが仕事ですから」

私は繰り返しそう言った。

それ以上のものは彼に求めていないし、彼女にも求めていない。

けれども、ヒカル・クロスは彼女の感謝の念を込めて、また礼を言った。

先ほど最後の勤務を終えて廊下に出てきたところに、彼女と出くわしたのだ。

後は、彼の移転先に一度だけ行くだけだ。・・・環境が整えられているかどうかを確認するだけの短時間で終わる作業であったが、出張扱いをさせてくれるという異例の好待遇に私は苦笑したものだ。

それほど必要な逸材である彼を移設することに周囲は神経質になっている。

シャルル・ドゥ・アルディの意向通り物事は運ぶのだろうと思っているし、きっとそうなるのだろう。彼はフランスの華で・・・できないことはないと言われているくらいのこの国の重要人物なのだから。

ルイの回復は素晴らしい。この時期は適切かつ的確であった。彼はこのまま滅菌棟を出ても、十分に回復へ向かうはずである。・・・ただ一つの問題を除いては。

ヒカル・クロスは私が出てくるのを待っていたのかもしれない、と思った。

こんな風にして彼女の近くに寄って、まじまじと彼女の顔を見るのは久しぶりのことであったが・・・私は気がついたことを口にした。今は勤務終了のタイムスタンプを更新していないから勤務中であることに変わりがないのだが、いや、もう、誰も咎める者はいないだろう。私は誰も周囲に居ないことをそつと確認したうえで、彼女に質問した。

これも不必要な行為であったが、それでも私は医療に携わる者として、気に懸ける義務があると考えていた。好奇心などではないことを伝えるために、事務的に淡々と言った。

「どこか具合が悪いのですか？顔色が・・・」

彼女はああ、と言って頷いた。

ヒカルの顔はこころなしか青ざめていた。彼女の茶色の瞳が、以前見た時より大きくなっていることに気がついていて、・・・少し痩せたからだ。希望を失ったりしない強い眊を満たした彼女は生命そのものであるようだ。それなのに、体に異変をきたしている。

そして、化粧気がないので、更に白く見える。

彼女は東洋人の特質がよく現れているので、失念してしまっていた。

象牙色の肌は決して白くならない。ルイのように白皙ではない肌が美しいと思っていたのに。彼女の顔と手の抜けるような白さが気になったのが、今になってからだなんて。

・・・顔色が優れないのだ。

ただ見ているだけだと言った傍から、私は恐縮した。彼女のことは決して見ていなかったのだ。彼と彼女のことを見つめていたのに、ルイの容態は仕事として観察していたのに。・・・彼女のことはまるで気がつかなかった。

「いつからなのですか」

そこまで言う前から、私は思い当たる節に気がついて、自分自身の言葉に閉口した。

彼女の状態が・・・

私の知っているある薬剤の副作用によく似ていたことに気がついたからだ。

最近開発されたものだ。

貧血気味の血の気のない貌、血管が脆くなり止められないほどに溢れる血、食欲不振・・・まさか、と思った。

この業務が終わったら、その治療方法に関し、さらなる研修を受ける予定であった私は、非番の時や空いた時間に研修に必要な書類に目を通していたというのに。

しかし、それはここではない遠い実験棟で行われていることであると認識していた。

私は・・・目の前の人物にそれが当てはまるかどうかなどは、まったく考えていなかったのだから。

彼女はそこで私の思考を読み取ったかのように、そっと自分の唇に人差し指を乗せた。

「どうかご内密に。・・・ああ、これで貴方と私の秘密はふたつになりました」

なんとと言う魅力的な娘なのだろうと思った。愛慾の対象という意味ではない。

彼女をシャルル・ドゥ・アルディやルイがこよなく愛する理由が、そこにあった。彼女は・・・私に秘密を持つと言うのに、それを自分一人の秘めたる想いにするのではなく、共有しようと持ちかけたのだ。

何を言葉にし、何を伝えるべきか、そして何を秘めるべきか・・・彼女はこの若さで知っていた。私は黙り込んでしまった。

彼女は再生医療の母床になることを承諾したのだ。時々訪れる時刻が遅くなったりした日の数日後は必ずルイの治療が行われていた。

単なる私事都合などによる遅延などではなかったのだ。

・・・すべてに符合する。

なぜ、彼は彼女の姿を求めるのか。

何も・・・苦痛も不満も漏らさずに治療を受けるのか。

愛しているから姿を探すという言葉ではない、それ以上の強い想いを感じて・・・私はただ沈黙するだけであった。

この二人の絆は、強くて、痛いほどに強くて・・・

そしてルイ・ドゥ・アルディの願いは叶わない。

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

■13

ルイ・ドゥ・アルディが治療期間を終えて棟を出る時がやってきたが、それはあっさりとしたものだった。

徹底された情報管理故のことであつたが、それでも・・・星辰の子と呼ばれ、フランスの華の子息であり、稀なる才を持つ美貌の青年の出立を惜しむ声は少なくはなかつた。ここは医療を施す場所であるから、長居することについて願いを口にすることは禁忌とされている。

けれども、明らかに失望する者たちが居て、私は彼の孤独をより深く知るだけになった。

ルイ・ドゥ・アルディは存在するだけで周囲に影響をもたらす。

名前のおりである。

太陽であり、星辰である。周囲の天体をあまねく遵えて・・・そして彼自身はどこに行くのだろうかと思った。

そんな中で、ヒカル・クロスは一条の閃光なのかもしれないと想像する。彼にとっては絶対の・・・不変の存在。運命の人という言葉があるが、彼にとって、彼女はまさしく・・・運命の人なのだろう。

何かを聞いたわけでもない。

それでも、ルイ・ドゥ・アルディから迸る切ない思いを隠しながら、ヒカルの来訪を待っている言葉のない日々を終えて、彼はどこに行きつくのだろうかと思った。だからここを出て・・・ヒカル・クロスと会話をする時に、彼のその先のことを考えると胸が痛んだ。

私は傍観者でしかないし、彼の一面しか知らない。

完全に管理された場所を出て、ルイは復帰のための訓練期間に入る。

医療分野にも詳しい彼であるならば、おそらく最速でその期間を終えてしまうのだろう。

筋肉が少しずつ戻り、皮膚も綺麗になった。それでもまだ・・・世間を賑わせていた頃の彼の容姿とはほど遠いので、誇り高い彼は決して人前に出ようとしないのだろうが、それも短い時間で解消される問題にならない問題であつた。

肉体は癒えているが、彼女との距離は縮まっていない。

しかし私は最後までそれを見届けることはできないだろう。次の滞在者への対応シフトがすでに組み込まれており、私がルイに関わるのはあと1度だけ・・・そう。彼が移動した後に、彼のための医療設備のチェックで彼の滞在先である邸宅に行くときだけであつた。準備はすべて完璧に整っているはずであつたから、それが異常の無い快適な環境であることをいくつかの項目において点検し、最終的に確認のサインをするだけで良い、至極簡単な点検作業をするだけで終わる。それで、彼との関わりも終了する。

これまで、対象について何かを考えないようにしていた。

私だって人間だから、思い出に残る相手も居れば、そうではない記憶もあった。けれども、それでは均等に扱えない。

空気と同じで、誰かに縋ったり靠れたりしていると感じさせないサービスが必要であると徹底的に教育されている私たちスタッフには誰かに固執したり何かに執着してはいけないのだと教えられる。

まるでルイ・ドゥ・アルディのようだ。そこが彼の満足していた点なのだろうと。彼も何かに執着したりしていないようだった。

その生命さえも。彼は、なぜ自分が生きているのだろうと思っている節があった。それでいて現状の自己の状況を把握し受け入れ、機能改善に努めている。それはヒカル・クロスが来訪しているからだ。彼女が毎日状況を確認しに、訪れているからだ。

それを、彼女は理解しているのだろうか。

ここを出て・・・ルイとヒカルが言葉を交わす時が来たら、彼女は何て言うのだろうか。これまでずっと会話をしない日々を送ってきた。おかしいとは思っているのだろうが、それも彼が声帯を損傷しているから会話できないと聞いて納得しているらしかった。

筆談でも良い。傍に行って触れたい。

そういう願いそのものを、彼女は持ち合わせていないようだった。

従順で我慢強く、それでいて決して怠惰にならない。

どんな悪天候の時にでも、体調不良でも、彼女は彼に逢いにやって来る。

それがどれだけ彼の支えになっているのかについては考えていないらしかった。

純真で寡欲な彼女の来訪をどれだけルイが待ち焦がれているのか、彼女は知らない。

だから。

あのふたりが、会話を交わすことになり、穏やかで静かな時間を過ごすことが出来れば良いのと思ったけれども、その先の未来が・・・決して明るく開けているものではないのだろうという予感めいたものを感じていた。根拠がないのに。私には、それを見届ける機会はない。けれども、ただ、ただ・・・あの若いふたりが本当の意味で、恋ではなく愛に近い感情を持って想い合っていることだけは理解できたし、それを垣間見て・・・それ以上彼らの傍にいてはいけないのだろうなと思っていた。深入りは良くない。彼らの顛末を見届けることはできないが、せめて静かに・・・一瞬だけ交わった時間の中だけかもしれないが、彼らを案じることを赦されたのだから、それに念心しようと決めた。

■14

滅多にない外出の話がやって来た。

ルイ・ドゥ・アルディがここを出て、アルディ家の用意する私邸に移った直後のことだった。私に環境チェックの依頼が入ったのだ。特に何をやる作業でもなかったが、私はふたつ返事でそれ

を承諾した。契約外の業務であったが、内容は至って簡単でそれほど拘束されるものではないと判断したからだ。

それに断っても業務命令が出ることになるだろうと予想していた。

アルディ家の私邸のひとつであるその館は、医療施設が十分に敷設されており、余程・・・こちらの施設より充実していることであつたらう。あのシャルル・ドゥ・アルディの私邸なのだから。

彼はまだ昏睡と覚醒を繰り返している。けれども、ここに居続けることで生じる様々な問題解決に着手できないのだろうと彼の主治医は思つたらしい。

長い間・・・彼を見守り続けたアルディ氏の判断は絶対だった。

彼が施設を出るときには、完全に秘密裏に行われ、私が次に出勤した時にはすでに彼はそこには居なかつた。具体的な移動の日にちさえ明らかにされていなかったとは関係者たちの失望は大きかつたはずだった。

それに、彼には最先端の再生医療が施されており、研究者であるならば、誰もが経過を見つめていたいと願つたことだろう。しかしそれは中断された。

穏やかで静かな時間を・・・本当の意味で迎える準備が整つたのだ。

ここに居れば完全看護であつたが、アルディ氏もヒカル・クロスも限られた時間でしか来棟できない。

私邸に移り、ごく限られたスタッフに囲まれて、よく見知つた者たちに囲まれて過ごす時間が彼には必要であつた。

特に・・・特にヒカル・クロスと会話をしようとしなない彼は、ここに居る限り変化しないだろう。

彼女に触れてはいけないと言ひ聞かせているかのような頑なな態度の彼の真意を知ることはできなかったが・・・それでも環境が変わることは賛成だった。

私は淡々と仕事を進めることにした。だから、アルディ家の私邸が館というよりかはむしろ城と言つた方が正しいほどに広大であつたとしても驚かなかつた。

彼の家はこれほどの規模の不動産をいくつも所有している。莫大な財があり、彼らの仲からいづれ・・・この国の頂点に立つ者が輩出されるのは時間の問題だろうと言われていた。しかし、その最も大きな期待を得ていたアルディ氏は政事には表面的には関与しなかつた。発言権は絶大なものがあると言うことはまことしやかな噂であつたがおそらく真実なのだろう。

その証拠に、アルディ邸で起きた不幸な事故の報道はほとんど成されず、世間では静かで退屈とさえ言われる日々が流れて居るが実際にはそうではないことを・・・承知していた私は、ルイ・ドゥ・アルディの孤独をますます知るばかりであつた。

これほどの家柄に生まれたのに。

彼はとても孤独であつた。

その言葉しか思いつかないくらいだ。

それが彼に必要な要素であつたとしても。彼は星辰の子であるのに。

・・・誰かに会いたいと零したことは一度も無かった。あれほどの苦痛を耐え抜いたのに、彼は逢いたい人の名前を決して漏らさなかった。躰が弱ると精神も弱る。けれども、彼にはそれは当てはまらない。

強靱な精神力で彼はこの苦難を乗り越えている。それなのに・・・ヒカル・クロスと言葉を交わさない。

だからアルディ家の保有する私邸のひとつにたどり着いたときに、私はヒカル・クロスの出迎えに安堵した。

入り口の門前で手続きを済ませて私がエントランスに入ると、それを待ち構えていたかのようにヒカル・クロスが足早に私に近づいて来た。

彼女はこの場所をよく知っているようで、慣れない空間に辟易して供の者を希望しているといった風情ではなかった。

彼女は待っていた、と言った。

しかし少し驚いていた。

研究所から来訪があるとは知っていたが、私が来館するとは聞いていなかったらしい。

彼女もここでルイに会うのは初回だと言うことであった。

「奇遇ですね。点検に来館する方が居るとはきいていたのですが、まさか貴方がいらっしゃるとは・・・」

いいや、奇遇などではなかった。

取りはからった者が居ることは知っていた。

私の勤務サイクルを知っており、ヒカル・クロスと言葉を交わしたことがあると知っている人物はただひとりしか居ない。

違う建物の中で見る彼女は昂揚していると言っはいたが、とても落ち着いて見えた。

やはり、ああいった医療施設に長く通うことを良しとしない判断は正解だったようだ。特に家族関係が特殊であると思われるアルディ家の者たちには、静かに・・・血族だけで集う空間が必要なのだろうと解釈した。

彼女にとって、ルイの存在はささやかなものではないのだ。

「少し緊張します。だから貴方が居てくれてほっとしたと言いますか・・・」

ヒカルがそう言って恥ずかしそうに笑った。

「ルイと話ができると聞いて、朝から本当に・・・朝から落ち着かなくて」

彼女がそう言って私を見上げた。彼の目覚は遅い時間であることが常だったから、彼女はそれまで待機していたようだった。

完全に人の出入りが管理されている空間で、ヒカルだけが自在にこの館の中を行き来できるようであった。彼女はアルディ家の家族も同然の待遇を受けているらしかった。

昂揚を抑えきれないほど、彼女はまだ若いのだと思った。そして、ルイはそんな朝を迎えて、どのように感じているのだろうかと思像する。

「私が先に話をしてきてもいいでしょうか」「どうぞ」
私の返答にノンはあり得ない。彼女の希望は慎ましやかすぎて・・・私は思わず微笑んでしまった。

■15

微笑ましいという言葉が相応しい彼女の笑顔だった。
待ちきれない喜びが全身に溢れて彼女を落ち着かなくさせている。
「やはり貴方が先に・・・」
そこで自分の我が侷な申し出があっさりと承認されてしまったことにヒカル・クロスは少し臆していた。
彼女はそうやって自分の意見を真っ先に挙げる人物ではないのだろうと思った。
しかし同時に少しばかり不憫に思った。
彼女はルイ・ドゥ・アルディとの時間を余りにも長い間待ち望んでいたと言うのに。
その瞬間を分かち会う人物が少ない。
ここにはシャルル・ドゥ・アルディも、アルディ家に縁の者も気配を見せなかった。
いや・・・気配だけは存在するが、姿が見当たらない。
まるで彼女の空気になって、私の視界に移らないだけなのかも知れないと思わせる独特の空気がここにはある。
彼女はよい意味で平凡であった。凡愚ということではない。
あの薔薇の家で育ちながら、その世界だけしか知らないということではなかった。
私のような者は空気のような存在としか見なされない階級の家柄に近く縁を結びながら、彼女は私のことを記憶していた。
その他大勢に取り囲まれていながら、彼女は決して接した相手によって態度を変えることをしない。
自分の領域を守るために欲行われる、周囲に目を配らないということを選択する人物ではないのだと思った。

だからかもしれない。
私は首を振る。
私が先である必要は無い。
こういう優先順位の交替は苦にならない。
「いいえ・・・今日は、貴女が・・・最初が良いと思うのです。それに私は彼の周辺施設を確認しに訪れただけですから」

茶色の髪と茶色の瞳が揺れて、若々しいヒカルの頬が灰かに上気していく。
こちらまで笑みを誘われる。
そして幸せな気持ちになる。

彼女はきっと、常にそういう雰囲気というか空気を保っている人物なのだろうと思った。人は、こうした気持ちを忘れていることを思い出すことによってまた繰り返し微笑む事が出来る。それをよく知っている。何度も失い、何度も思い起こして、そこであるとき突然自分にとって必要不可欠のものであると気がつくものがある。それが微笑みであり・・・こうして誰かを想う気持ちであるのだろうと思った。優しすぎるねと言われるが、それでも私はその希望の暁をもち続けているかどうかを大きく左右する要因であると思っていた。優しすぎるだけでは生きていけないが、優しくなければ生きていけない。

彼女がなぜ、永遠の暁という名前を持っているのか理由が少しだけわかったような気がした。ヒカルはアルディ家の者にとって、永遠の暁なのだ。路を指し示すのではなく、路を照らし、その者にとって必要な暁を注ぐ。根拠のない憶測はしない主義であると聞いている。私にとって・・・ヒカル・クロスは単なるクライアントでしかなかったが、それ以上であった。もう認めないわけにはいかなかった。彼女から目が離せないのだ。我慢できないほどに狂喜し、約束の時刻よりもっと前からその瞬間を待ち侘びるのに。いつも相手のことを優先するのにそれすらできないほどに彼女は彼に会いたいと思っているのに。それでも・・・こうして我慢してその時を待ち侘びる。

こういう時代が私にもあったのだろうかとか過去を振り返りたくなる。こういう時代が私にも訪れるのだろうかとか未来を見上げたくなる。

・・・年若い彼女は私に・・・希望を期待させる。

彼女はただ路を照らすだけではなく、救うことが出来るのかもしれない、と。暁が濃ければ影も濃くなるけれども、彼女の暁は少し違うような気がした。私のように言語能力に長けていない者が表現することはできないが。ヒカル・クロスは眩しくて生命に満ちていて・・・そして・・・ルイ・ドウ・アルディそのものを焼き尽くす存在なのかもしれないと思った。

彼女はどうやって育ってきたのだろうと興味を持ってしまいそうになるくらいに。彼女は何を考えているのだろうかと考えてしまいそうになるくらいに。

あの、ルイ・ドウ・アルディが唯一・・・面会を許した親族ではない者がここで彼のことを案じ、身を躍らせ、そして彼がこれから快癒に向かって行き・・・やがて・・・静かだけれどもこれまでのように、この館を包んでいる薔薇の香りのように空気だけになっていき空気に溶ける存在

になり・・・ふたりはそうして会話にならない会話を繰り返していくのだろうと思った。
長い時間を一緒に過ごせばそれで成立する関係ではない。
愛よりも深く・・・恋よりも激しく・・・そしてそれでいて形のない霧のような存在。
ああ、そうだ。彼らの関係は暁霧に似ている。暁の霧だ。

■16

暁霧が夜霧と違うのは・・・日が昇るにつれて継続できないところにある。
朝立ちこめる霧は、必ず消える。
夜霧と違う。
夜は朝に続くが、朝は昼がある。
だから暁霧は夜霧より短い。そして必ず消えてしまう。

存在を継続することができない前提で、存在する空気のような・・・それでいて目に見える粒子に近い存在。水でありながら浮遊する存在。

それが彼らなのだろうと思った。
だから。
暁霧は彼女と彼の・・・危うい無言の対話に似ていると思った。
会話を交わしていないのに、彼らには時間が成立する。
それは長くは続かないが繰り返されるのだ。

ルイ・ドゥ・アルディは何度も何度も・・・毎日毎日彼女を待ち侘びるという事だけに専念できる自由を享受した。
これまでの彼にはそんな時間はなかったはずだった。
星辰の子と呼ばれて、彼は彼だけの時間は存在しない生命を受け入れた。
自由はなく、友も作らず、彼は何かに向かってすべてを捨てて生きてきたように思える。最初、
負傷した躰を見て驚いた。
完璧に整えられた体軀であったからだ。
しかもかなり訓練していると思った。
そうなるまでには、厳しい食事制限や鍛練を必要とすることは誰の目にも明らかだった。
とても禁欲的でそれでいてそれらを面に出さずに黙々と遂行する彼の精神力というか生命力というか・・・それに驚歎するばかりであった。
その彼が唯一、来訪を待ち侘びる人物がいる。
父でもなく、教育係の叔父でもなく、ヒカル・クロスだ。

私は微笑んだ。
ヒカル・クロスへの返礼として。

しかしその先を知っていた。

けれども微笑んだ。

彼女に虚の笑みを向けたと知れば、どれほど残酷な仮面であったのか・・・彼女は後に思い知る
ことになるのだろうと思った。

この家の者は憐れみも哀しみも必要としていない。

でも彼女には必要な感情で・・・彼女はそういった情さえ捨てきれないのだろうと
思っていた。それはおそらく間違いではない。

私を恨むのかも知れない。

私を憎むのかも知れない。

けれども、今、この瞬間に彼女の感情について私はそれを否定することはできなかったのだ。

会いたい人にようやく会える。この喜びは何にも代えがたいものである。

ヒカル・クロスの考えていることの一部がわかるような気がした。

彼と交わした最後の会話を思い出す。

彼の微妙な変化を思い出す。

生きていればそれで良いと思うのに、次には言葉を交わし視線を絡めたいと思うようになる
自分に憂える。

そして・・・彼の最後の言葉や動作について正確に理解していなかったことを何度も恥じ、悔
やみ・・・そして彼との次の会話では細微に至るまで決して見落とすまいと心に誓う。

彼女は今、きっとそのように考えているはずであった。

だから、彼から招かれないから。だから彼女は彼に話しかけなかった。

逸る気持ちを堪えて、それでも・・・それでも会いたいと願っているというのに。

身を切られるように切ない思いを抱きながらも、このふたりがどうして・・・世間によくある恋
人同士のように振る舞えないのかと考えないようにした。

彼らは・・・理由もなくそうしているわけではないのだから。

だからこそ、ヒカル・クロスのこの瞬間に私が立ち会うような状況が訪れたことについて考え
ざるを得なかった。

「彼のために揃えたものをひとつひとつ説明したいの。押しつけにならないように話すには、ど
うしたら良いのかしら。ああ、それから・・・タブレットへのダウンロードを補助して
くださったのは貴方であったとか・・・今頃こんな事を話して・・・呆れていること
でしょうね」

「いいえ、少しも」

私はまた微笑んだ。彼女が動揺していることは明白だった。

ヒカルの昂揚に付き合う必要は無かったが、私は彼女の清麗な温かさに触れて、彼女のような人

物がルイ・ドゥ・アルディに寄り添って微笑む未来がすぐに訪れれば良いのに、とさえ願うようになっていた。

私の業務時間は終了していない。

こうして言葉を交わしてはいけないという約束事がまだ適用されていた。

それでも・・・それでも私は彼女と彼を見届けようと思っていた。

それが誰の望みなのかも私は知っていたから。

職務を越えた対応であることは知っていた。けれども。

私自身が知りたかったのだ。

彼らが・・・特に、ヒカル・クロスがどんなこたえを出すのだろうか、ということについて、このままでいることができなかった。

■17

「待っていますよ。彼は・・・きっと・・・」

私はそう言った。

気休めなどではない。

彼は本当に彼女を待ち侘びているのだ。

私の言葉は、ヒカル・クロスの背中を押した。

本当に触れるわけにはいかない華奢な彼女の背中に触れる仕種をして、私はヒカルを送り出した。彼女は貴人だ。

世間の者から見れば夢のようだと思われるような生活を送りながらも、一般の生活も知っている風変わりな人は・・・アルディ家に大きな波を及ぼし強い暁でもって変革をもたらすのだろうと期待させるに十分な人物だった。

そうでないかもしれないけれども、彼女はいずれ・・・アルディ家にはなくてはならない存在になることは明らかであった。

彼女に配置されている人員を見れば明らかだった。

いつも彼女はひとりで行動しているように見えるが本当はそうではない。

幾重ものセキュリティチェックを受けて、私のような者にさえ身辺調査を施すほどに、彼らは細心の注意を払っているのに。

いや、だからこそ、「ヒカル・クロスはひとりであること」を見せかけているのだ。

彼女に意識されないように幾人もついて回っている。

要人になればなるほど・・・その縁の者も自由を剥奪されていく。

ルイ・ドゥ・アルディは生まれながらにそのような状況であったのだろうが、ヒカルクロスは少なくとも、生まれてからこの瞬間までそれが継続していたという風情ではなかった。それなのに。また彼女は戻ってきた。豪奢な生活を望んでのことではなかったのだろう。それはよく分かった。誰も好きこのんで自由でなくなることを選びはしない。そして今、彼女はここに居る。

それが私を動かすのだ。彼女はとても魅力的でその先を見てみたいと思わせる人であった。黙々と日々、ルイ・ドゥ・アルディを見舞いながらも自分の失調については何も訴えなかった。我慢強く待ち続ける強さを持っている。

私は深入りしすぎだとは思った。

それでも・・・。

彼女が単独で何かを話すことが出来るのはルイの見舞いの時と、今、この瞬間だけなのかもしれない。

彼女には自由や・・・孤独の笑み栄ゆ様を見せることは許されなかった。

それはルイ・ドゥ・アルディも同じであった。

可哀想だと思った。しかし憐れみを彼は必要としていない。

自分で選んだ路だからと言って冷笑するのだろうと容易に想像がつく。

彼女たちの年齢ではあり得ない、どうにもならない制限された環境に悶えながら、それでも生きている。

■17

「待っていますよ。彼は・・・きっと・・・」

私はそう言った。

気休めなどではない。

彼は本当に彼女を待ち侘びているのだ。

私の言葉は、ヒカル・クロスの背中を押した。

本当に触れるわけにはいかない華奢な彼女の背中に触れる仕種をして、私はヒカルを送り出した。彼女は貴人だ。

世間の者から見れば夢のようだと思われるような生活を送りながらも、一般の生活も知っている風変わりな人は・・・アルディ家に大きな波を及ぼし強い暁でもって変革をもたらすのだろうと期待させるに十分な人物だった。

そうでないかもしれないけれども、彼女はいずれ・・・アルディ家にはなくてはならない存在になることは明らかであった。

彼女に配置されている人員を見れば明らかだった。

いつも彼女はひとりで行動しているように見えるが本当はそうではない。

幾重ものセキュリティチェックを受けて、私のような者にでさえ身辺調査を施すほどに、ルイとヒカルを取り巻く「彼ら」は細心の注意を払っているのに。

いや、だからこそ、「ヒカル・クロスはひとりであること」を見せかけているのだ。

彼女に意識されないように幾人もついて回っている。

要人になればなるほど・・・その縁の者も自由を剥奪されていく。

一挙手一投足に注意が払われて、何をするにも意味をもたなければならなくなる。

ルイ・ドゥ・アルディは生まれながらにそのような状況であったのだろうが、ヒカルは少なくとも、生まれてからこの瞬間までそれが継続していたという風情ではなかった。

それなのに。

また彼女は戻ってきた。

豪華な生活を望んでのことではなかったのだろう。それはよく分かった。誰も好きこのんで自由でなくなることを選びはしない。

そして今、彼女はここに居る。それが私を動かすのだ。彼女はとても魅力的で、その先を見てみたいと思わせる人であった。

彼女は黙々と日々、ルイ・ドゥ・アルディを見舞いながらも自分の失調については何も訴えなかった。

我慢強く待ち続ける強さを持っている。

私は深入りしすぎだと思った。

それでも……。

彼女が単独で何かを話すことができるのはルイの見舞いの時と、今、この瞬間だけなのかもしれない。

彼女には自由や……孤独の笑み栄ゆ様を見せることは許されなかった。

それはルイ・ドゥ・アルディも同じであった。

可哀想だと思った。しかし憐れみを彼は必要としていない。

自分で選んだ路だからと言って冷笑するのだろうと容易に想像がつく。

彼らではどうにもならない制限された環境に悶えながら、それでも彼らは生きている。

「そうだと良いなと思っています」

彼女はそう言って微笑んだ。なぜ、彼が彼女に何も言わなかったのかも、その理由を詰問するつもりはないようだった。

……この館はとても静かだった。何もかもが夢のようであったと思わせるほどに。ここを一步出れば、私はいつもの……慌ただしい分刻みの勤務に戻り、それらに神経を注いで疲労した躰を休めて休日を指折り数えて楽しみにするだけを繰り返す日々を送っている現実に戻る。

しかし。

夢のような……霧のような瞬間であるからこそ。

私は、彼女を見届ける必要があった。そう感じていた。だから、順番を譲った。

「そろそろ時間では？」

私は彼女を促した。その瞬間が訪れているのに、彼女は足踏みをしている。ルイは待っているというのに。あの施設から出て……彼のよく知るアルディの私邸のひとつに戻って来た。だからこそ彼はもう、昏倒を理由にしてヒカル・クロスと離れていることのできない時期にさしかかっ

ていた。

それを微妙に感じ取って、ヒカル・クロスが躊躇いを感じているのだろうと推測した。それはおそらく当たっているだろうと思った。

ヒカル・クロスは頬に茶色の髪を散らせて、ぱっと顔を上げて横を向いた。彼の居る室の方角だろう。廊下を渡って、螺旋階段を昇り、そしてその先の部屋に行くのだろう。……この棟の反対側にも、同じ様な設計の部屋があると聞いていた。査収対象になった双塔に誰が住まっているのか……それはしてはいけない想像であったが、ヒカル・クロスは知っているようだった。それほど深くこの家に関わっていながら、彼女には何も知らされていないというこの事態について、私が意見したり感想を漏らしたりすることは許可されていない。

「私の用事があるのは、治療室のみです。そして最後に彼の居室を少しだけ回覧して私は戻ります。何か……何か気になることがあったら、その間に声をかけてください。私はいつでも構いませんので」

そう言うと、ヒカルは嬉しそうに笑った。

「ありがとう。仕事の邪魔をしてしまいました」

「いいえ、少しも。だから、気遣いは無用です」

それから私はヒカル・クロスとの短い会話を終わらせる前に、ひとつだけ気になることを口にした。

「……体調はもう戻りましたか」

その問い掛けに、彼女は少し意外だというように大きな瞳を更に大きくして見せた。

「体調……」

「貴女は自分の心配をすることも忘れてはいけませんよ」

私はそれだけ言った。彼女がここでは何も言えないことを承知していたからだ。私とヒカルが数回会話を往来させていることに蠢く気配を感じた。それほど、彼女の行動というもの厳しく制限されているのだろうと思った。

難しい時期でもあったのでそれは致し方がないことだった。しかしアルディ家の私邸の中でさえ、彼女は限られた時間の中でしか生きることが出来ない。

ルイの容態が安定し、復帰に向けて様々なプログラムが計画されているという時期だからこのことなのかもしれないが……

ヒカル・クロスの所為でさえ注意を払わなければならない体勢に彼女も疑問を持っているのかも知れない。

それはすべて憶測でしかないけれども。

彼女は暫く考えていたが、やがて、軽く……腕を押さえて、小さな顎を引いて私を見た。

それは私が止血をしてやった側の腕だった。彼女のきちんと憶えていた。自分のことを気にかける人物がこんなところに存在するとは考えていなかった、そんな小さな驚きを発していた。

いや……自分のことより他者のことが気になるあまりのことであったから、私は気を悪くするどころか気の毒になってしまった。彼女は、心配することが多すぎた日々を過ごしていたのだ、と思った。確かにそうだ。

ルイ・ドゥ・アルディは快癒に向かっているとは言えども、まだまだ・・・完全に復帰するには遠い状況にあるのだから。

「はい」

それが彼女の精一杯の返答であった。

「さ、言って」私はそつと言った。ヒカル・クロスの時間にこれほど割り込んではいけないと思ったからだ。

逸る気持ちと戸惑う気持ちを抑えながら、彼女は私とほんの僅かな共有時間を持つことを許可した。

それだけで、十分だと思った。

彼女はこれで私を思い出さだろう。

ルイ・ドゥ・アルディの部屋から出てきたときに、彼女がひとりではないと出す。それを記憶していてくれればそれで良かった。

■18

それでは自分に行く、と言ったときの彼女の顔はこの上なく倅せそうであった。

私は幾度もそういう表情を見送ってきた。

生きるということに対して希望や期待を持って・・・昂揚する者達の背中を見送ってきた。

でも今回ばかりは複雑であった。

その希望が決して彼女の望む結末にならないことを知っていたから。

人は誰もが、期待や希望を持って生きている。

絶望や失望だけでは生きていけないからだ。

彼女が特殊であると思うところは・・・常に希望を抱き続けているところにある。

けれども、前者が後者が変わるとき。

彼らはどういう風にならぬか、それらが新たな希望になることもあれば、覆しがたい失意になることもあるという、違った結果になる。

私は残酷な測定人であると思わざるを得なかった。

好奇心で見届けたいわけではなかったが・・・それでも、彼女の行く先について考えると決して楽しい気分にはならなかった。

逢いたい人に逢える。言葉を交わすことが出来る。

その幸せを味わうことができる。そしてそれがどれほど奇跡的なことなのか、身を以て知る。

そして・・・絶望を知る。

私はヒカル・クロスの背中を見送った。

彼女の心躍る様子を詳細なまでに見つめて・・・この役割を私に与えた人物について少しばかり文句を言いたい気持ちになった。

なぜ、私なのかは問わない。

けれども、なぜ、彼女なのだろうか。

事実を知らされないで・・・そして彼女が味わう絶望の大きさを測れと言われているかのように思えて仕方がなかった。

ぎりぎりに生きている彼女の生命の煌めきが、あまりにも眩しかった。

あの若さで彼女は生も死も知っていた。そして誰かを失う哀しみも、誰かを待つ喜びも知っていた。

そう・・・彼女に対して、何か特別な思いを感じていたとしたら。

これから彼女の受ける試練とも言うべき・・・そんな靄を纏っているのが見える。

それは私だけなのかも知れない。

けれども・・・私が、今日、今、この瞬間に・・・ここに存在するのは何か意味があることなのだと思いたいのかも知れない。

だから。私が救われたかったのかも知れない。

生きるという執着に疲れていた私は・・・生きることそのものに夢中になっているヒカル・クロスに救いを願っていたのかも知れない。

彼女に贖罪を求めていたのかも知れない。

うねりの強い茶色の髪を見る度に。

■19

そこから先の時間は長いようで短いようで・・・私にはとても奇妙な時間が経過した。何度も時計を見るが、それでも先ほど確認した時から僅かしか時間が経過しておらず、自分の作業も遅々として進まないことに苛立ちを感じるが、ぶつけようのない癩癩はそのまま自分の中にしまい込んだ。

周辺の設定チェックも終わった。

簡単なものであったからそれほど時間を要するものではなかった。

無期限に誰かを待つ、というのはこれほどまでに・・・不安で寂しく、少しの先も見えない闇どころか霧のような気がしてならない。

ルイ・ドウ・アルディはどれほど長い時間をこんな風にして過ごしたのだろう。

彼女を待ち続けて・・・彼女が振り向くのを、彼女が気がつくのを待つて待つて・・・気が遠くなるほど彼は待ったのだろう。

何とかその想いを成就させてやりたいとは思うことはやめた。

人の気持ちは誰かの思いの通りにならないからだ。

特に、彼らの長い時間の中の一瞬しか交わらない私のような者がそんな風に彼らについて願いをかけていることを知れば、誇り高いルイは即座に・・・愛することをやめられない自分自身の命を絶つくらいはやりかねなかった。

私は窓から見える外の景色に驚歎した。

私邸がこれほど素晴らしい設備と美観を持つアルディ家で・・・できないことはないだろう。

広がる杜、手入れされた芝生、噴水は年代を感じさせながらもそれが極めて周囲の風景と合致して一枚の絵画のようであった。

内部の調度品は私が見ても値段のつけられなさそうなものばかりで、一体どんな貴人が幾人ここに住んでいるのだろうかと思わせるほどの部屋数であった。

それなのに、最新の設備がこの館を張り巡らせていた。

・・・彼がここに移設された理由に何となく気がついていた。

これはこの施設を見なければ確信には至らなかつただろう。

完全に防音が施され、遮光に関しても完璧に制御されていた。

監視装置に指紋認証装置が隠された場所に付属されているドアノブ。

・・・何もかもが、異常なほどにあることに対して配慮されている。

私はこの家に何があって、何がないのか・・・気がついていた。

時計はあるがカレンダーはない。鏡がない。

情報伝達するための手段・・・メディア媒体が限られている。

大型フィルムスクリーンはあるがテレビ端子に接続されていない。

彼女は気がつくはずだ。

彼女がなぜ、アルディ家のサーバーだけにしか接続できないタブレット端末の更新のみ許可されていたのか。・・・彼がそこでしか情報を得ることが出来ないことについても。

ヒカル・クロスがルイとの面会を終えた後、彼女は私に声をかけることになっていた。ルイの居室の続きの間に設置されている備品や環境を確認するために・・・私はヒカルと交替することとなっていた。

そのヒカルがまだ出てこなかった。

・・・長い時間の接見は避けるようにと言われているはずだ。

彼はまだ・・・覚醒と昏睡を繰り返しているから。

気配はまったく窺い知ることが出来ない。

私のやることは全て終わってしまって、ただ、ぼんやり、渡り廊下の窓から見える邸内の杜や反

対側の棟や・・・その中間にある小さな低層の離れを眺めていることにも疲れてきた頃。・・・私が溜息をついた時だった。

かたり、と音がした。

私はその音を待っていたのに・・・いざ、それが私に訪れると少しばかり動揺していた。廊下に出されていた観賞用の椅子でさえ、分不相応であったが、そこでしか待つことが出来なかった。それ以外は、エントランスまで出て行かなければならない。それでは、ヒカル・クロスと話ができなかったし、私の本来の目的を遂行するために、またこちらの棟に入るための手続きを取り直すことも躊躇われた。

時計を見る。反射的なものだ。何か事態が発生したときには必ず時刻を聞かれるという長い習慣が私にそうさせていた。

・・・それほど長い時間が経過したわけではなかったことに気がつき、またひとつ驚愕が私に降って来た。

・・・正面の一番大きな扉が僅かに開き、そこから・・・静かにヒカル・クロスが出てきたので、私は腰を浮かせて、書類ケースを持ち直した。

掌に汗が滲んでいた。暑くはないのに。

幽鬼のような青ざめた顔で、彼女が出てきた。

・・・しかし、脚が痙攣しているのだろう。何かに凭れ掛らなければ扉から躰を話すことが出来ないほどに・・・彼女は脱力しているのだ、とすぐにわかった。私は書類ケースも最小限の手荷物も椅子の上に放りだし、彼女に向かって足早に近付いた。

「大丈夫ですか」

大丈夫な人間には決して問わない言葉をかけた。

ほんの少し前に彼女とは別人なほど、憔悴していた。

櫻色の唇は色が抜け、脳貧血を起こしているかのように顔は青白い。

指先も肩も、彼女に触れなくても小刻みに痙攣しているのがわかった。

最初、彼女は私の声も聞こえていなかった。ただ・・・ただ茶色の瞳は空を見ているだけだったし、呼吸をしなければ息絶えてしまうということすら忘れてしまっているようだった。

「しっかりしなさい」私は少し強い口調でそう言った。咎められても良かった。

今は・・・彼女をこちらに戻すことが必要だった。

しかし彼女は扉のノブ下に施された指紋認証のプレートに自分の指を乗せることを忘れていなかった。

この扉は、そうしなければ施錠できないからだ。

しかし、彼女は・・・手が痙攣しているので、指先がかちかちと鳴るだけでただ触れるだけのセンサーに照準を合わせることができないでいた。

「おかしいわ・・・」

掠れた声で彼女はそう言いながら、自分の反対側の手で震える手首を掴むが、それは意味を成さなかった。

「おかしいわ・・・」

ヒカルはもう一度そう言った。唇を噛んで、再試するが、どうしてもうまくいかない。立っていることもできずに、扉に肩をあててノブに覆い被さるようにして彼女はそれに固執した。

「失礼」

私はとうとう・・・脇でそのまま傍観することができずに、彼女を補助してやることにした。邸内の者は、限られた者でなければこの階層までやって来ることができない。それはあの治療棟でも同じ事だった。ヒカル・クロスは人払いをしてあったのだろう。誰も・・・彼女の異変を察知して寄ってこなかったからだ。

しかし、気付かれないように設置してある監視カメラが彼女の姿を発見して、誰かがここにやって来るのも間もなくのことだろうと思った。

けれども。

彼女の動揺の度合いが尋常ならざるものであったので、私は・・・私は遂に、霧を掻き分けてその先に手を伸ばすことにしてしまったのだ。

私は彼女の手首に軽く自分の手を添えて、反対側の手で彼女の震える腕を掴んだ。

そして、ぎょっとして・・・指先の力を抜きそうになって、そして慌てて、彼女の腕と手首に適切に加圧した。

私が驚いたのは・・・ヒカル・クロス・・・彼女の腕が、細くなっていたからだ。

手首もそうだった。私は注意深い方であると思っていたが、その対象は限られているのだと思い知った。

この間、止血して遣った時よりも。

そして、彼女の軀に触れて、彼女がとても弱っていると確信した。

彼女がなぜ、あれほど幼く見えるのか。若いからではない。

痩せて・・・目が大きくなり、そしてそれを隠すために、髪を下ろし、さらにそれが彼女を童女のように見せていたのだ。

・・・何が、彼と彼女の行く末を祈ってみたい、だ。

私は内心、激しく自己嫌悪した。

彼女のこの憔悴ぶりに気がつかなかったのは、私が彼女の本来の姿を見ていなかったからだ。毎日のように、シフトが合えば彼女の姿を見かけていたのに。

それなのに・・・彼女を待つルイ・ドゥ・アルディの様子はつぶさに観察していたのに、治療を補助した彼女の様子についてはそうではなかった。

若者の体型の変化について知識が甘いと言われればそれまでであったが、彼女は巧みにそれらを隠していた。

ひとりに来ていたのは・誰かと並ばないようにするためであった。

長袖を着ているのは、彼女の腕の穿刺痕を見せないためだった。

暁の霧の先を見てしまった彼女は・・・・

激しく揺さぶられていた。

■20

「ゆっくり・・・・そう。急がなくて良い。ゆっくり呼吸して」

私は今まで自分の座っていた椅子に彼女を腰掛けさせた。

手首から指先まで異常に冷たかった。

そして濡れた感じを憶えて、

俯いた彼女の頬は濡れていた。胸元に濃いシミができていた。それは彼女が落とした涙の痕跡であった。

私はポケットからハンカチーフを取り出して彼女に渡した。

「これを使って」

すると彼女は首を横に振った。

「良いから。返さなくて良いから」

私はそう言って彼女の手布を握らせたが、彼女の指先はまだ細かく震えていて、その布端を掴むことさえままならなかった。

・・・私は失礼、ともう一度言ってから、彼女の指先にそれを滑り込ませた。

私のような身分の者が、彼女の頬に堕ちる雫を拭いて良いとは思えなかった。

酷だとは思ったが、少なくとも、今この瞬間だけは、彼女は自分自身で涙を振り払わなくてはいけない人なのだ。

ヒカルは血の気の引いた顔を俯かせて、ただじっと黙っているばかりであった。

瞬きさえ忘れてしまっているようだった。私はこういった状態に陥った者を幾人も見てきた。だから、それがどうしてなのかもわかっていた。

そして彼女がそこから抜け出そうとしていることもわかった。

「・・・ああ・・・また、貴方に借り物をしてしまいました」

ハンカチの感触によろやく気がついたヒカルは、それだけ言うと、大きく深呼吸をし、直ぐ様次に大きな溜息を落とした。眼を瞑り・・僅かな時間で幾歳も年齢を重ねてしまったかのような疲れた表情で、眉根を寄せた。

あれほど、喜びに満ちた表情をしていたのに。あれほど、彼との対顔を心待ちにしていたのに。

私は、残酷なことをしたと思った。酷く、後ろめたかった。

彼女がこうなることを承知していながら、私は彼女に微笑み、送り出したのだ。

行くな、と言っても彼女はそれでも行っただろう。

だからそうした、というのは後付けの言い訳にしかない。

「彼はずっと貴女を待っていた」

そう言うと、彼女はそこで初めて顔を上げた。

萎れた花のように、それでも彼女の顔は生気が僅かに点っていた。どれほど憔悴していたとしても、それでも彼女は・・・踏みとどまっていた。

まだ、この場所に。

まだ、この場所に。

ヒカル・クロスは健康で善良な精神の持ち主であった。だからこそこれだけの打撃で済んだのだ。

「・・貴方は、わかっていたのね」

それは恨みの少しも籠もっていない声だった。私は目を伏せた。

「すみません」

謝っても仕方の無いことだ。箝口令が敷かれ、彼に関する情報は口外してはいけないときつく言われていた。誰に聞かれても答えてはいけないと規定された。

伝えたくても伝える術がなかった。しかしそれを言い訳にして免罪を得ようとは思わない。

「良いの。貴方が悪いのではない。・・・誰も、悪くない」

そう言うと、彼女はしばらくの間、押し黙ったままだったが、すぐに私に声を漏らした。

「貴方のお仕事を始めてください」

「いいえ、貴女をひとりにしておくことはできない」

彼女はそれを聞くと、淡く微笑んだ。儂い微笑みだった。

そこでよろやく・・・ヒカルは私の方を向いた。

こちらに戻って来た光を彼女の茶色の瞳の中に感じて、私は安堵の吐息を出した。

彼女の座っている場所に跪いたまま、彼女に向かって声をかける。長い会話は禁物だ。けれども、会話を絶やしてはいけない。

「・・・私だけ、わかっていたのね」

ヒカル・クロスはぽつりとそう言った。彼女は恥じていた。目元が朱く、そして唇を強く噛んでいた。

顔色が蒼白になっていたのも、その様は、東洋人というよりかはむしろ、おとぎ話に出てくる・・眠りにつく前の姫君のようであった。朱い唇に白い肌。大きな瞳に、癖のある茶色の髪。完璧なフランス語を操るのに、日本語も自在に話すことができる。彼女は、この薔薇の家の者に寄り

添うために育てられた永遠の暁という名前の救いなのだろうと思った。

なぜ、シャルル・ドウ・アルディが彼女を人前に出すことをほとんどせず・・・邸内で密かに守り育てていたのか、理由がわかったような気がした。

ルイ・ドウ・アルディでなくても、誰でも心惹かれるだろう。

少なくとも、戻れない路に踏み込んだことのある人間にとっては、彼女はとても眩しい存在であるように思えた。

「なぜ、シャルルが私ひとりだけで行きなさいと言ったのか、ミシェルもシャルルも彼が眠っている間でしか訪れないのか・・・ふたり一緒には彼の元を訪ねない理由も・・・どうしてなのか、わかった」

「彼らを責めてはいけない」

「いいえ、責めるべき人間は彼らではない」

ヒカルはそれだけ言うと、どンドン音を落としていった。

語尾が小さくなっていく。

「・・・彼は、戻ってくるの？」

彼女は私に尋ねたのか、自分自身に問うたのかわからないほど小さな声でそう呟いた。私は黙っていた。気休めを言うことは容易い。

けれども、それでは彼も彼女も本当の意味で向き合うことができない。

私は言葉を選んで慎重に言った。踏み込んでしまう時は簡単だった。

・・・でもそれは越えてはいけない場所のぎりぎりである。

私の職責では、私の言葉にはなんら責を持たせることができないのだから。

けれども、彼女には今、何かが必要であった。ひとりで立ち直り、ひとりで軌道修正し、ひとりで彼を支えて行く勇気と気力が持てるのはまだ少し先の話だ。

「それは貴女次第」

私がそう言うと、彼女は泣きそうな顔をした。

わかっていることを他者から告げられる時、人は堪えきれない激情の波を留めて置くことができない。勢いよく・・・彼女の何かが吹き出すのを感じた。

茶色の瞳が潤んで、あっという間に涙が浮かんでくる。

しかし彼女はそれをぐっと呑み込んだ。唇を横に引いて、彼女は少し上を向き、顎を震わせて瞳をきつく閉じた。涙が溢れないようにしているのだと思ったので、私は少し早口に囁いた。

「泣いても良いのです。・・・泣いてしまって楽になった方が良い」

「楽になりたくないの」

ヒカル・クロスはそう言って、大きく深呼吸をした。

「楽になりたいとは思わない」

そこで私の差し出したハンカチを、彼女はぐっと強く握った。

「ルイ・・・」

彼女は、そこで初めて・・・彼の名前を大事そうに呼んだ。

それはこの階層では聞こえない。

彼に呼び掛けてもそれは届かない名前だった。

ヒカルの待ち望んだ・・・金の髪の色青灰色の瞳の彼は、ルイ・ドウ・アルディという名前ではなく、シャルル・ドウ・アルディであったから。

彼は夢幻の世界に落ち込んでしまったから。

「・・・場所を変えましょうか」私の提案に彼女はしばらく反応しなかった。

■21

彼女は頭を振った。

彼女はここを離れられないと言った。

「彼がまた私を呼ぶかもしれない」

私は言葉に詰まった。

彼女の言うところの・・・彼、というのはどちらのことなのだろう。

ルイとしての彼なのか、シャルルとしての彼なのか・・・

しかし私は動揺を隠して、そっと言った。大事なと安堵させるように。

「彼は、今、退室したばかりの貴女を呼び戻すような気質の人間ではないでしょう。それは貴女が一番よくわかっていると思いますよ」

彼女の受け取り方や、どう思っているかについて聞き取りすることができなかった。それほど彼女は乱されていたから。

・・・ヒカル・クロスがこの事実を知らないままであることは、承知していた。

彼女は彼の家族ではないから・・・血族ではないから、きっと知らされていないのだろうと類推することが出来た。

もっと複雑な事情があり、彼女には知らされていなかったのか・・・それとも、彼女が気付くまで沈黙することを求められたのか・・・それはどちらも結論は同じで在った。

この瞬間まで、彼女は知らされていなかったのだ。

・・・彼の中に、「シャルル・ドウ・アルディ」がいることを。

彼女はそれでもしきりにあちらを・・・彼の居室の方角を見ていた。

「やはり、ここは少し体を横にした方が良いでしょう・・・そうだ、少し外の空気を吸いに行きましょう」

私はそう彼女に提案した。

軽率な言葉であったかもしれない。

けれども、彼女をここに放置しておくことはできなかった。

階下に行けば、担当する係の者が待機しているはずだった。

彼女の蒼白な顔や尋常ではない様子を知れば、適切な処置をすることができるスタッフが揃って

いるはずであった。

そうですね、と言った彼女がふと・・・不安そうに私を見上げたので、私は彼女の茶色の瞳を、思わずじっと見つめてしまった。

礼を失する無遠慮な行為であると承知していたのだけれども。

彼女は完璧なフランス語を話す事ができるが、顔立ちや容姿は東洋人のそれだった。しかし、仏人の血が入っているということで、どうにも・・・不思議な雰囲気を持った人に見える。

彼女はまだ若いのに。

どこか・・・懐かしさを感じさせるようなそんな印象を与える。

それは私の持つ同じような血がそう思わせているのだろうか。

それが彼女の持つ稀なる能力のせいなのかどうかは、この時の私は知らなかったし、その後に事情を聞いた後になっても、あの郷愁感について説明できなかった。ただ、この人をこのままここに置いていけないと思った。

酷く心細そうで、そして彼女は誰かに置いて行かれることを既に経験していると思った。

別れが来るとは思わずに相手を送り出して・・・そしてそれが最後になってしまった時。

人は、その瞬間を何度も繰り返すのだ。

幾通りものその先を夢みるのだ。

もう二度と、同じ場面を再現できないとわかっているのに、あの時にああすれば、どういう未来があったのだろうかという虚しい夢想に耽る。

そしてそれは実現しない未来であることを確認する作業を続ける。

それでも繰り返す。

私は囁いた。

「・・・ここにいつまでも貴女が居ることを彼が知れば、彼はとても・・・哀しむでしょう。それから、なぜ、ルイの傍に行かないのかと言うでしょう。いつもそうであったから。・・・だから、ここは私の申し出を受け入れてください」

早口で囁く。悪魔のような呟きだろうと思った。

彼女の中に、霧がかかっている。驚愕という名前のそれは、目に見えて彼女の視界を阻んで居る。閉じ込められて・・・そしてどこまで行きつけば先が見えるのかまったく不知の世界に彼女はひとり、放り投げられてしまったのだから。

「それとも、誰かを呼びますか」

私が言うと、彼女は首を横に振った。

「シャルルの耳に及ぶ。それは避けたい」

ここで彼女の言う「シャルル」は、ここに居る「シャルル」ではない。

シャルル・ドゥ・アルディはこうなることを予見していたのだろうか。だから、私がここに居るのだろうか。それとも・・・その「シャルル」はどちらのシャルルなのだろうか。それすらわからない霧の中に、私も足を踏み入れてしまったらしい。

結局、彼女は私の申し出を承諾し、一度は深く沈んだ椅子から立ち上がって螺旋階段を降りることにした。

彼女はひとりで立ってられないほどの衝撃を受けており、手摺りに両手を添えて一步一步慎重に降りたとしても、その足先すら震えている状況だったので・・・私はやむなく、彼女の反対側に廻り、ヒカル・クロスの腕に自分の腕を回して、彼女を介助しながら降下することになった。この姿をルイ・ドゥ・アルディが見れば良い顔はしないはずであった。

ヒカルに話かける者がいないのは、そういう規定も影響したが、彼が明らかに不機嫌そうな顔つきになったからだ。

感情を表すというのは良い兆候であったが、負の情ばかりを表出させるというのは逆の刺激にしかならない。

それで彼女には誰も・・・話しかけないように申しお送りがあったのだ。

これらから、彼がいかにも・・・ヒカルという人物を懇望しているのかということもよくわかったが、私や私たちには、どうにもできない問題であった。

螺旋階段に添ってステンドグラスが見事な色彩を階段に落としていた。

大変に幻想的な荘厳な空気の中で、彼女はそこに行きついたらばかりなのに。

今度は、壮絶な駭きと嘆きを伴って、下降していく。

まるで、天使が下界に降りるときのように。

神が遣わした天使は、希望に満ちて下界に降りたのだろうか。

私はそうは思っていなかった。

天界とは違う人の哀しい性（さが）を問うために・・・彼らはそれでも微笑みを絶やさず、どこにでも行く。

ヒカル・クロスは確かに、清純であったが、彼女はそういった・・・負の情動について理解があるように思えた。彼女は知らないことによる純粹さを誇っているわけではない。逆に・・・自分は背徳の天使なのではないのだろうかと思っているようなそんな一歩引いたものを持っているように思える。

彼女の均律とは言えない不規則な蹠跟めいた足音が響く。

アルディ家の者であれば、こんな時も毅然としていろと教育されたのだろう。

実際、アルディの名前を持つ者が幾人も彼を訪れたが、それでも皆一様に、背筋を伸ばし、無表情で、硬い表情であったけれどもそれでも自分の乱れを誰かに悟られることのないように退室していった様子を何度も見ていた。

何かが凝る。

そう思った。

「・・・貴方がいてくれて良かった」

ヒカル・クロスは螺旋階段をひとつずつ、注意深く降りながらそう言った。

「光栄ですね」

私はそう言って微笑んだ。ぎゅっと彼女の腕が縮小した。

そんな中で、彼女は一条の閃光だと思った。

高貴な家柄には時折・・・こういう人が必要だった。

澱みを正す人物。

凝り固まって、凝結するが故に発生する澱を洗い流す人物が必要なのだと思った。

この家の人達は、みな、一様に同じ様な顔つきをしている。

・・・血が濃くなっているからだ。

そして血統を重んじる余り、血族結婚だけではなく遺伝子の操作まで行うようになった。特質をより濃く残すためだめだけに。・・・いや、果たしてそうだろうか。もっと別の目的があったように思うが、ルイ・ドゥ・アルディはアルディ家の特質を最も色濃く残している。

彼らの中には血の濃さとか親族の情は存在しない。

自分と同じ質を持つことだけ。

それを最重要視する。

神だの愛だの・・・それらを重要視するのは彼らが満たされているからだ。

彼の一族は満たされないという質を持って生き存えている。

それなのに、ヒカルのような存在を望む。・・・アルディ氏が・・・あの家の当主が誰とも再婚しないで、唯ひたすらに今、目の前にいる、少女と言ってもよいような娘に愛を注ぐのは、致し方ないことなのかもしれないと思った。

昶・・・

そう。

永遠の暁のような彼女の陽光を必要としているのだろうと思った。

影が濃ければより強い光を必要とすることは、彼らは承知であると思った。

それは私の口出しをするところではなかったかもしれないけれども。

偽善でも欺瞞でもなく・・・彼らは彼女を必要としている。

喉から手が出るほど欲しい存在なのだろうと思った。これほど長い年月彼らと一緒に居て、それでも尚、暁を失わない希有な存在。そして・・・ルイ・ドゥ・アルディは彼女をただひとりと定めている。

生涯、ただひとりの人として定めてしまっている。だからこそ、こんな舞台が用意されている。

舞台というには哀しい・・・苦しい。

■23

先ほどは軽やかに上がっていった階段であったが、帰り道はひどく沈鬱な面持ちであった。

ヒカル・クロスは近づいて来た者に、しばらく私と話をするから庭に出ると言って人払いをした

。
彼女はそういったことにも柔和に穏やかに人を払うのだと知り、そんなヒカルを好ましく思った。
。
彼女は誰かを思い遣ることを知っている人だと思うと、彼の現状にこれほど酷く打ちのめされているのも仕方のないことだと思わざるを得ない。

高慢に同等と思わずに罵る者達を知っている。そういう者に辟易し、必要以上に口を利かないようにしているのは私のささやかな誇りであり抗いであった。

けれども彼女にはどういうわけか干渉したくなってしまう。

「余計な事であるのに。お引き受けいただきまして感謝します」

彼女の大人びた口調が少し哀しかった。

私は極力笑顔と平静を崩さずに、彼女言った。

「ご自身の心配について晴れやかにする方が、最初ですよ」

そう言うと、ヒカルは立ち止まった。螺旋階段を下がりきったところで、渡り廊下を少し歩くと、小さな内庭に出る。噴水があり、そこから清らかな泉水が吹き出す音が聞こえて来た。水の音は人を安堵させる効果がある。これは人の体がそういう作りだからなのだが、彼女は足元を見て、俯いたまま押し黙っていた。泉の音を聞いているわけではなく、内なる声に耳を傾けているようだった。

私はヒカルの腕に軽く手をあてた。ルイ・ドウ・アルディが見れば決して良い顔をしないだろうと思う。

それでも、彼女には誰かの体温が必要だった。

しかし今一番傍にいて欲しい人間は彼女を一番悩ませるのだろうと思う。この家の人間でない誰かと一緒に居たいのだろうな、と私は彼女の様子を見つめながら考えていた。

皆が瞞っていたわけではない。誰も、嘘はついていない。

ただ、ヒカルが気がつくまでは積極的開示をしないようにと言い伝えられており、私たちのような職の者は、余計な付加情報を迂闊に他者に与えることは禁じられている。ルイ・ドウ・アルディと呼んでも彼が応えないことについて最初に気がついたのはミシェルであった。それからミシェルは教育係として当主に相談をしたのだろう。程なくして、今のまま・・・彼が混沌とした状態から抜け出すまでは体の復旧の方が先で在るという判断が下された。

放置していたわけではない。

彼が心を閉ざしてしまった。

これは彼の責任ではない。

彼はそこまで弱くない。

誇り高く大変に知能の高い星辰の子は、生還したのだ。

ルイ・ドウ・アルディという存在は、彼の中では彼自身ではない者、という認識になっている。

何年にも渡る強い信念が崩れそうになるほどの大きな事故に遭遇してしまったことは彼の責任で

はない。

ヒカル・クロスは、自分の事は構わずに、残ったルイの様子を見てきてくれ、と人を遣らせた。その時にルイと言わずにヒカルは少し間を置いて「彼を頼む」と言った。彼女の苦しい言葉の選択が始まったのだと思った。

この館に居る間は、彼女はルイの婚約者のヒカル・クロスになり、シャルルと他愛のない会話をして、結婚式までの日取りを相談するなどして、養父代わりのシャルルと時間を過ごすことになるのだ。

ルイが姿を見せない、と金の髪で彼は老成した口調でそう言い、ヒカルが彼に困ったように微笑むのだろう。

容易に想像できた。

それは、彼が望んだことだからだ。

しばらくの間は、意識が混濁している時にはそれが顕著であったので、ヒカルは病室に入室できなかった。

その間に、彼女は毎日ただ彼を見つめるだけの日々を送った。

「なぜ、彼はシャルルになってしまうの」

「彼は戻る場所がないからですよ……」

私は彼女が答えを知っているように思った。私の言葉に反論しなかったからだ。

「だから、彼は違う未来を生きるために懸命なのです」

「過去に戻らず未来に生きるため？」

「そう。だから、彼はきっと良くなると、貴女だけは信じ続けてください」

私は残酷なことを言っていると思った。

彼女が驚くほど細って弱ってしまっている理由はわかっていた。

尋常ならぬ採血の仕方、彼女がいつも長袖を着ている理由。時折、腰や脇腹を押さえている理由。血液や体液が漏れることを懼れる仕種。

彼女がやって来られない日の数日後には、決まって彼に大がかりな治療が施された。そして、ルイに施されている再生医療は、まだどこも実現させていない未知なる治療方法だった。人体に適用させるまでに至っていない、この世の理を覆してしまうような医療方法で、彼は復活しようとしている。

しかし、それでは彼の魂は戻って来ないのだ。肉体が戻ったとしても、彼は……ルイ・ドゥ・アルディと呼ばれても顔を上げない。

シャルルが姿を見せないのは、多忙を決めていることもあるが、それだけではなかった。対峙してはいけないからだ。

そして、ヒカル・クロスは彼女は命を削って、彼を救おうとしている。

それなのに、更に加えて、彼の魂も救って遣って欲しいと言い募る私はとても残酷で冷酷だと思った。

彼女は彼にとっての永遠の暁なのだ。たったひとりしか居ないのだ。

幼い時から一緒であったと言う。彼の孤独を傍で最も長い時間共有していた彼女だけが、彼の渴望するものそのものであり、彼はそれ以外は本当はいらなかったのではないのだろうかと思える。

「彼はやり直すつもりではなくて、新しい未来を夢想しているのだと思います」

私は根拠がないことを口にしないつもりであったが、彼女にそう言った。

気休めや其の場凌ぎの言葉は人から希望を与えるが、奪う役割も持っているからだ。これは希望ではなく絶望になるかもしれないと思いながら、ヒカル・クロスの手を取り、歩行を促しながら長い渡り廊下を見遣った。

彼女の顔を見ることができなかったからだ。

「だから、彼は過去体験したことを再現したり・・繰り返さないでしょう？」

ヒカルは黙ったままだった。心当たりがあるようであった。

私は噴水の前に彼女を連れてきた。外の空気にあたった方が良さそうだが、ここは薔薇の香りが強くて・・・ヒカルの体調に影響を与えるかもしれないなと思ったが彼女は大きく息を吸うと、ほっと一息だけ溜息を漏らした。

「ファム・ファタル・・・」

運命の人という意味であったが、それが薔薇の名前であることをヒカルは私に教えた。

噴水の縁に座り、水飛沫がかからない場所で、彼女は腰を下ろして膝の上に手をやった。姿勢良く座って居る年若い貴婦人は、両手をぎゅっと握った。

「ルイには、今、霧がかかっているのね」

「そうです。目の間にあるものが、霧で見えなくなっているだけです。そこに存在することは認識している。幻を見ているわけではなく、彼は、彼なりに自己と決着をつけようと考えていると思います。・・・私はそういった専門ではないので、私見でしかありませんが」

私は推測を言わないことにしているのに、その決め事を破って、更に言った。

茶色の髪の下で、茶色の瞳が私を見ていた。この人は、眼を逸らしたり動揺したりしないで、事態を受け止めようとしている。強い人だ。

だから、禁を破って言うことにした。

「彼をルイにするのもシャルルにするのも、貴女次第です。ヒカル・クロス。これから貴女とどう過ごすか、それが彼に影響します。ルイとして生きるか、シャルルとして生きるか。・・・両方は存在しない。彼は誇り高いから」

「私が・・・」

そうだ、と私は大きく強く頷いた。

「彼の霧は暁霧です。暁の霧です。晴れゆく直前の靄です。暁霧は必ず晴れます。更けていく夜

霧ではなく・・・必ず、明るくなる。そういう霧の中で差し出した彼の腕を振り払わないでください」

ヒカルの顔が曇った。私は残酷なことを言っている。わかっている。

彼女の愛は、ルイではない人物に向いている。

そして彼女に、別の大きな愛でルイを救って遣って欲しいと願う私の愚かな言葉が、彼女をこれからずっと苦しめることになるのだろうと思った。

■24

彼女を極限に追いやるつもりはなかった。

文字通り、彼女は暁だからだ。

彼にとって、そこにあると信じて居る唯一の存在である。

私は知っている。

彼女の到着を待つ彼の姿を知っている。

彼が少しでも有意義な時間を過ごせるように、彼女がタブレット端末から読み物をダウンロードできるように手配していることも知っている。

彼が彼女が来ないときの僅かな表情の差を私は知っている。

どうしようもなく・・・彼が彼女を愛しているのだと、知っている。

それでも、私では彼と彼女を救ってやることはできない。

彼女はぼんやりと・・・噴水から湧き上がる細かい水粒子を眺めていた。飛沫というには細かいそれは霧散しており、暁霧について連想しているのだろうと思った。

茶色の瞳が、宙をさまよう。彼女が激しい思いを内に秘めて、何かを思い定めようとしている時間であった。

私もしばらく黙ったままだった。

人の葛藤の時間というのは、外から見てとても静かなものだ。

考えに耽るので、体も表情も動かない。

けれども激しく体が緊張し、視線は遠くをみるようになり、何も聞こえなくなっていく。それでも・・・心の内では、何度も同じ結論になるのに、それらを深く考えてはもっと違う方法もあるのではないのだろうか考える。

彼女も、今まさに・・・その瞬間を迎えていた。

・・・噴水の音と、風がそよいで周囲の植樹の葉を擦るように流れていく音だけが聞こえてきた。風向きが変わり、噴水の水飛沫が彼女の足にかかったが、ヒカル・クロスはまったく気にしない様子で無言で座っていた。

それほど長い時間ではない。彼女はこうしてどんな場所でもどんな時でも、結論が出るまで深い沈降を何度も繰り返して考えるのだ。

しかし、彼女の中ではこたえは出ているように思った。

当然だ。シャルル・ドウ・アルディは実際に存在するし、ルイ・ドウ・アルディがこのままで居て良いという状況ではなかった。長引けば、いくらアルディ家の秘匿事項だとは言え、情報が漏れていく可能性も高かった。

そうしてしばらく時間が経過した。それでも私はそこから動かずに、彼女の様子をじっと見守っていた。

時折・・・誰かが渡り廊下から様子を窺っている気配を感じたが、それはすぐに消えた。彼女はアルディ家の要人で、見知らぬ者である私と長時間話し込むことは許可されていない立場の人間だった。

ルイの療養に関しては完全に秘密とされていたが、私とその緘黙を破りそうな人間に見えたのだろう。私はアルディ家の人間ではないのだから、仕方の無いことであった。

彼女はふと、顔を上げた。そして、そういった人の気配がなくなった瞬間であることを確認してから・・・そっと静かに私に言った。

「ルイが。・・・彼が」

彼女は少し首を傾けて微笑んだ。哀しい・・・とても哀しそうな顔だった。

「微笑むの」

私はまだ押し黙ったままそれを聞いた。

なぜなら、彼女がとても切ない表情を浮かべたからだ。

まだ年若い彼女がこれほどまでに哀しそうな顔をして・・・何もかもを受け入れたような顔を見せる。

若いからこそ、それが際だった。

そしてその原因を作ったのは、他ならない私であった。

「彼が微笑むの。ほとんど彼は笑わない。でも・・・笑うの。綺麗な笑顔って、ああいう笑みを言うのね」

「そうですね」

彼の笑顔。

ヒカル・クロスは長い時間を彼と共有しているのに、ほとんどそれを見たことがないのだと知った。

それほど、ルイは日々切れそうな糸の張り巡らしていたのだろうかと思うと・・・私は浅はかな言葉を言ってしまったと後悔し始めていた。

その時。

ヒカルの顔がぐっと苦悶に満ちた顔になった。

唇が細かく震えて・・・呼吸が乱れる。込み上げてくる激しい感情を抑えているのがわかった。頬が動き、歯を食いしばって堪え忍んでいるのがここからでもよくわかった。

「言いたくないことがあったら言わなくても良い。

でも、言わないと楽にならないことは言ってしまいなさい」

私は声をかける。

そんなことは彼女は承知していることだろうと思ったが、敢えて言った。

彼女が上を向く。空を眺めているのではない。

・・・涙を堪えているのだ。

「ヒカル、それはいけない」

私は声をかけた。彼女が眉を寄せて・・・涙を堪えている時、また・・・握っている手の平が細かく痙攣し始めたのだ。

「泣くのを堪えたいのはわかる。けれども、自分の身体の声聞きなさい。・・・涙を出したいから貴女は涙を流す。

貴女が貴女自身の内なる声を聞いてやらないで、誰が聞くといいのですか。

体の叫びを無視したり抑制してはいけない」

その瞬間、ヒカル・クロスの大きな茶色の瞳から、涙が流れ始めた。

突如という言葉はこういった時に使うのだと・・・ぼんやり、そう思った。

「ルイが・・・」

掠れた声で絞り出すように、彼女がそう言い始めた。

涙が頬を伝わり、顎を伝わっていくつも彼女の手の上に落ちていく。ぱたぱたと音を立てていた。大粒の雨であった。霧のような涙ではない。

彼女の心の内のような、激しいそれが堰を切ったように現れた。

そして彼女は歔歔しながら言った。

何度も、ルイが、と言った。

もう、次に来るときには、ルイと言えない金の髪のある人のことを考えながら、ヒカルは涙を流していた。

「ルイが・・・笑うの。シャルル、と声をかけると笑うの。

彼は私の前では微笑まないのに。私の前で優しい表情にならないのに。

けれども・・・私がシャルルと呼ぶと、彼は・・・微笑むの」

そこで私は気がついた。彼女の相反する欲求に苦しんでいる理由が垣間見えた。

息をする間もなく、彼女は言った。幼子のように、涙を零しながら。

「私は彼がルイ・ドウ・アルディであることを知っていて・・・誰もそう呼ばなくても私だけは彼をルイと呼ばなくてははいけないのに。

・・・それでも・・・それでも、私はシャルルと呼ぶ。穏やかな表情を浮かべる彼にシャルルと言うと、彼は嬉しそうに笑う」

そこで彼女は嗚咽を漏らした。

静かな・・・噴水の音と、乱れた落涙の音が入り交じり、そこにヒカルの嗟歎の音が混じった。

「こんな時なのに・・・私は・・・私は・・・なんて罪深いのだろう」

暁霧に包まれていたのは、ルイ・ドウ・アルディだけではなかった。

ここにもひとり・・・深い悲しみの霧に包まれた人が、居た。

私は何も言うことが出来ずに、ただ、彼女の落涙する顔を眺めて、哀声を聞くだけしかできなかった。背中を擦ってやることも、彼女の頭を撫でてやることもできなかった。

ただ、傍に居るだけだった。

■25

彼女が惑いに揺れているのは、痛いほどよくわかった。

茶色の髪のが揺れて・・・長い睫は湿っていた。

細かく震える体を優しく抱く人物は、ここには居ない。

私はそうしてはいけないのだと思った。

そこに関わってはいけないから。

そこに居てはいけないから。

やがて明ける霧の中に、私は存在してはいけない。

・・・どうして、彼女はここに居るのかというこたえは、彼女が出さなければいけない。

彼女が得ることが出来なかったルイ・ドウ・アルディの微笑みを・・・今、得ていることに対して、彼女は戸惑っていた。

ルイは彼女に冷たかったのではない。そうしなければ彼女が彼女で在ることができないと判断したからだ。

何よりも・・・自分自身よりも愛おしい存在に出会ってしまったから。

ただ、それだけなのだ。

彼は彼女だけを求めていたから・・・だから、彼女に微笑みを漏らさなかったのだ。

それを今、彼女が求めているとしたら。

彼がタブレット端末で閲覧している膨大な文字量を知っているヒカル。

彼の脳細胞は決して死滅したり減衰しているわけではないと知っているヒカル。

意識がなくても、毎日訪れることに意味があると思って、自分の体調を二の次にして彼を見舞うヒカル。

誰よりも、誰よりも彼女のことを愛して求めている人物の求めに応じて、彼女は黙って姿を見せる。

そういうヒカルを・・・ルイはこよなく愛しているのだ。

家族よりも。自分自身よりも。

だから、彼女が見たいと願っていた微笑みを見せるために。

彼は、ルイであることを捨てた。彼は、シャルルになった。

それが理由だ。

彼は見返りは求めていない。

ただ、欲しいのはヒカル・クロスの笑顔だけだった。

だから、彼は・・・シャルルになり、ルイとヒカルの未来を祝うシャルルになった。

まったく矛盾するのに。

それでも、「彼」はヒカルと永遠を誓い合うことができないのに。

彼女は彼等にとって・・・彼にとって永遠の昶だ。

文字通りに。

この歯痒さを誰に伝えれば良いのだろうか。

シャルル・ドウ・アルディと名乗るルイにだろうか。彼を責めても・・・彼は戻ってこない。

そもそも、彼を戻したいのだろうか。

シャルルの影として生涯彼に側仕えすることに活用できると、あの家の者達は思わないのだろうか。

・・・私の知っている、シャルルとミシェルという双子の人物はそうは思っていないようだった。

一方は彼の父であり、もう一方は彼の教育係として長い時間・・・彼を見守って来た。

彼等は、ルイ・ドウ・アルディを新しい薔薇の種になると考えているようだった。

私の考えは・・・間違っていないと思う。

「私は・・・」

ヒカル・クロスはそう言って、しばし無言の時間を持った。

彼女が黙り込む時間は決して無駄ではない。

その瞬間に、彼女は様々なことを考えているからだ。

それを思い浮かべることができたのに。

それなのに、シャルルは・・・ルイはそうしない。

彼等の思い描く理想像に固執しない。

この愛が、どれほど・・・どれほど、透き通った愛なのか、触れる人物にしかわからない。

汚れた欲望ではない。

乱れた霧ではない。

でも・・・でも、それらに関わる人物達の哀しみや苦しみを浄化できないほどに、この澱は澱んでいたから。

ルイは、それらを一身に引き受けようとしたから。

だから・・・

私はヒカルに声をかけた。

彼等は生きなくては・・・生きなくてはいけない。

どんなに、苦しくても。

ルイはそれを知っている。

アルディ家の濁りを知っている。

そしてそんな状態の家が浄化できるのは、ヒカル・クロスを迎えることで・・・彼等の闇に想う深淵を浄化できる人物が、彼等を救うことができると承知している者達の承認があってこそ、ということも知っている。

「ルイの笑顔が欲しい」

彼女はそう言った。私は付け足した。

「貴女に迎え入れられない微笑みでも？」

「私はそれは厭わない。・・・誰かではなく自分を尊重する人の願いは尊重すべきだ」

彼女はそう言った。

でも、そこにはヒカル・クロスの願いは申請されていない。

■26

私は彼女が大粒の涙を落とすのをただ眺めるだけだった。

彼女の涙を拭くのは、私ではないのだ。

彼女の涙を指先の乗せて良いのは、私ではないのだから。

「ルイはルイだけの笑顔を持っていて・・・そして私にそれを向けてくれなくても、良い。彼はルイだから」

彼女はそう言ってまたひとつ、涙を溢した。

私は違う、と彼女に言えなかった。

ヒカルのためだけの笑顔を向けたいから、彼は彼でなくなったのに、と言えなかった。

彼女は手の甲で自分の頬を拭った。何度も、何度も。

手の平と甲と両側を交互に使いながら、それでも溢れる涙を受け止めきれずに、彼女の手首を伝ってそれらは彼女の長袖の中に消えて行く。

私の与えた布きれはそれ以下の役割しか持たなかった。

彼女はそれを膝に置いたまま・・・咽び泣いた。

「ごめんなさい」

彼女は謝罪した。最初、何を謝っているのかわからなかったが、彼女が見苦しい姿を見せてしまったと感じて恐縮しているからなのだと思いついた時には、彼女は両手で顔を覆ってしまっていた時だった。それでも涙が・・・彼女の内なる訴えは止まらなかったのだ。

いったい、どれだけの長い時間を彼女はこうして堪えていたのだろうか。

「誰かの前で泣くのは慣れていなくて・・・」

私は切れ切れにそう言う彼女に微笑んだ。静かに。

「それにはやり方というものもありません。

誰も教えないし、誰も同じではない。

彼が貴女に微笑みを見せないのは、その方法を知らないから。貴女と同じです」

そう言うと、彼女は肩を震わせて、両手を持ち上げた。

・・・涙に濡れた顔が大きな瞳を連れて私の前に現れた。

彼女の瞳は澄んでいて・・・そしてまっすぐにこちらを躊躇いもなく見つめるものだから、私の方が気後れしてしまいそうなほどであった。

あまりにも驚いた顔をしているので、私は何かあったのかと尋ねることさえできなかった。何か、気に染まない言葉でも投げかけてしまったのだろうか。

彼女は私のそんな表情を読んだようだった。違うのです、と言って、また、涙を拭いた。しかし、その大きな瞳にはもう新たに湧き出る雫はなかった。

「貴方の言葉は・・・私の懐かしい人と同じだったから」

「懐かしい人？」

「そう。いつか、逢いたい人。泣いたらまた逢えないよと言ったから・・・私は泣かないでいようと思いつけることができた」

そこで私は言葉に詰まった。

人が、こういう口調で「いつか逢いたい人」と言う時は、大抵が故人であったり、もう2度と・・・呼吸をしている間には逢うことが出来ない人物を示すことが多いからだ。

彼女の逢いたい人は、もうこの世界には居ないのだと彼女は何となく承知しているもののそれを曖昧に濁している言葉を使用していることから、それはまだ・・・彼女の中で確定し切れていない事項なのだとわかった。

彼女がアルディ家で養われることになった、両親の不在に起因するものだということがわかる。

彼女は若くて・・・彼女の憂いは多くの要素は持ち得ない。

ルイが彼女に惹かれるのが、何となくわかった。

彼女は誰かの為になら涙を散らすのだ。

決して自分の為には涙を流さない。

彼が抱えている苦しみを、ヒカルという媒体を通して彼は放出するのだろうと思った。

だから彼女に微笑みを見せず・・・いつも哀しそうな顔を浮かばせる結果になっても、ルイは彼女を必要としているのだ。

そして、ぎりぎりのところまでやって来てしまったから・・・彼は霧の中から、出てくることが出来ない。いや、出てこようとししないのだ。

彼女を哀しませ続けることができなくなったから。

彼は・・・極限に辿り着いてしまったから。

「誰も教えてくれないこと・・・だから、私は自分で見つけなければいけない・・・」

彼女は呟いた。

深い思考の底で、光は見えるのにその実像を捉えることが出来ないようであった。

それでも、霧の先が見えたらしい。

彼女の瞳に生気が宿りはじめていた。

ぎゅっと唇を横に惹いて、強く噛んでいた。

何度か体を斜めにして、頭を前後に僅かに揺らす。

瞬きの速度が極端に落ち、手の平はまた膝の上に置かれて、私の差し出したハンカチはとうに皺だらけの布きれになってしまっていた。

「・・・ルイに会いたい」

彼女はそう言って強く目を閉じた。

・・・一筋、また涙が落ちたがそれは最後の迸りであった。

彼女は詰まった声で、もう一度言った。

「ルイに会いたい」

「そう強く思っていれば・・・きっと、実現できます」

私はそう言った。

愚かなことを囁いたことを後悔していた。

ほんの少しばかり。

彼女は、最初からこたえを持っていたというのに。

私が何も言わなくても、彼女はきっと・・・それほど時間をかけずに、彼女の結論を導き出していたと思う。

でも、・・・あれほど震える彼女をそのままにしておけなかった。

私が、ここに呼ばれた理由と役割について考えることを放棄していると思ったからだ。自分の都合と満足であったのかもしれない。けれども、それでも彼女に言わずには居られなかった。

「まずは、貴女が健康になることです。それから・・・貴女が貴女で居ること」

私は最後の助言をした。いや、助言ではない。

きっと・・・私が、彼女にそうして欲しいと思っている願いを勝手に口にしているだけであった。

採用するかしないかは、彼女の自由と選択であるが。

彼女の溜息さえ、涙さえ欲しいと思ったルイ・ドゥ・アルディの思いを受信しているような気になった。

なぜそれほど彼が彼女を愛しているという言葉以上に求めているのか、それが垣間見えてきた。

ああ、もう少しだ。

霧は、必ず晴れる。暁霧は必ず晴れるのだ。だから・・・彼女と彼が互いに手を伸ばして・・・霧の中で伸ばした指先が触れあい、温度を感じ、見えなくても互いの存在を認識することができるようになれば、彼はきっと目覚めると信じたい。

少なくとも、ヒカル・クロスの霧は晴れつつある。

彼の苦悩も哀しみも受け止めて・・・彼女の支えによって、彼はきっと戻ってくる。フランスの華としてではなく、星辰の子として戻ってくる。

私は強くそう願った。私の願いや希望というものはまったく不必要であったけれども。

■27

彼女はそこで初めて頬を綻ばせた。

「貴方は優しい人ですね」

「いいえ、少しも」

私がそう言うと、ヒカル・クロスは頭を振った。

「沈黙を知っている人は優しいのだと思います」

彼女の深い意味の言葉に、私はそうですかと適当な相づちを打つことは出来なかった。

彼女は握りしめていたハンカチによく気を注ぐようになった。

「洗ってお返しします」

「いいえ、差し上げますよ。・・・きっと、私の手元にない方が、良いでしょうから」

彼女が水からの血液が流れ出るのを気にしていたということは、涙さえも、彼女の配慮しなければならない跡始末のひとつなのだろうと予想できたからだ。

洗って返すということは、彼女はしないだろう。焼却処分にして、何倍もの値段のする品を新しく用意するのだろうと思った。

「それでは無遠慮すぎます」

ヒカルが顔を曇らせた。まだ頬は濡れているのに、私のことを気遣いだした。

良い兆候なのか悪い兆しなのかわからない。

「誰にも教えてもらえないことがあるということを知っている人は・・・優しい人ばかりです。

少なくとも、私の知っている人達は皆、優しい」

「その中にはルイ・ドウ・アルディも含まれているのですね」

もちろんです、と言って彼女は笑った。

「自分で気がつけ、と彼はずっと私に言っていた。

繰り返し、繰り返し。

彼は何度も繰り返すことはしないのに。だから、そこに込められた意味にはやく返事をしていれば・・・」

そこで口を噤んだヒカル・クロスは、最後の一滴を瞳から落とした。

それは残渣であった。彼女の涙はここですべて流された。

「私の方が、霧の中に居たのに。ルイはそこに手を差し伸べた。差し伸べ続けた。気が遠くなるほど長い年月をずっと・・・今度は私がそうする」

彼女と彼の間には何があったのか、詳細はわからない。けれども、彼女は彼を救いたいと思っている。それは確実だった。

彼がルイ・ドウ・アルディとなるには何かのきっかけが必要だと考えていた。

それは強い衝撃に近い負荷で、それに彼が耐えられる状況がなければ・・・難しいと思われた。

緩やかな回復はあり得ないというのが医療チームの結論だった。

だから、彼の望む状態に置くことで・・・彼は回復に努めるのだ。

ヒカル・クロスが毎日彼を訪れていることや、アルディ家の当主としてのつとめなどを果たさなければならないという強い念が、彼をこれほどはやい回復に導いたのだから。

しかしヒカル・クロスは、シャルル・ドウ・アルディの知人夫妻の娘であると言うのに・・・ルイは不思議なことに、ヒカルの存在は、実年齢そのままに認識しているのだ。

彼女の母親とヒカルを間違えたり、時間を誤認することはなかった。

ヒカルだけは・・・現実なのだ。彼が望んでいるヒカル・クロスは、彼の夢の中に居るのではなく、目の前に存在する実体のある彼女そのものなのだとなると・・・どうにも苦しくなる。

ルイはどこにも戻れないから。

彼を愛するヒカル・クロスという存在だけが彼の希望であり願望であるのだ。

矛盾する状況に、いつか・・・気がつくのだろうか。

実弟と呼ばれるミシェルとの間にあった、フランスを湧かせた当主争奪の顛末を彼は知らない。だから、ミシェルとシャルルとの間で交わされる無機質だけれども何かを共有するような間合いについて彼はほとんど経験していないはずなのだから。

彼がヒカル・クロスとほとんど年齢の変わらない若い肉体を持っていることに気がつくだろう。

そして彼は・・・白金ではなく、見事な金の髪を持っていることに気がつくだろう。

彼がシャルルになってしまったら、ヒカルと結ばれない。永遠に。

けれども、ルイに戻っても、ヒカルはルイとは結ばれない。

永遠に、彼の焦がれる相手は手に入らない。

それなのに、彼を呼び戻しなさいと言うのは、ヒカルにとって酷な話以外の何ものでも無い。

どうしたら・・・彼はどうしたら穏やかになるのだろうか。いや、彼はそうでない方が幸せなのだろう。

ここまで誰かひとりだけを定めて・・・切実に求めているのに、結論は同じで、彼等は決して結ばれることはない。ヒカルが心変わりしてルイに向き合うという可能性もあったが、そこまでは・・・また、さらにたくさんの時間が必要になるのだろうか、という気がした。

彼女は情愛深い人間だ。でも、憐れみと愛の情の違いを知っている。はっきりと。

妹でもない。親族でもない。・・・彼女は、彼にとって、永遠の昶なのだ。それ以上でもそれ以下でもそれ以外でもない。

ただ、唯一絶対で・・・それがなければ彼は生きていけない。

愛が得られなくても彼女が生きていることが彼を生かすのだ。

「・・・彼がこちらに戻るにはきっかけが必要です。でも、それはタイミングがある。今はまだはやい」

私は最後の助言を彼女に付した。

「私はこれ以上のこともわからないし・・・貴女にはもっと詳しく分析できる相手が傍にいないでしょうから。でも、彼を長い時間見てきて・・・これだけは言えます」

私は早口で言った。時間をかけすぎた。あまり話し込むと、咎められるだろう。

もうここには立ち入ることは出来ないと思った。声もかからないだろう。

けれども・・・けれども、彼女と話をするのはこれが最後であるという予感が私を焦らせた。

伝えきれない。

彼の切ない思いを代弁しても、彼女にありのままを伝えることができないだろう。

「彼は・・・彼は自分自身よりも貴女が大切なのです。誰でもない。貴女です。だから、それを

「忘れないで・・・」

私はそれだけ言うのがやっとだった。具体的な治療方法などを喋っても虚しいだけで、それはルイに適用できないことはわかっていたからだ。

「彼と時間を重ねてください。共有する時間が長いほど・・・彼は戻りやすくなる」

そこで、私の言葉は遮られた。建物の影から、人が出てきたのだ。この館のスタッフだった。ヒカルを迎えに来たのだとわかった。

彼女は長い時間、外で雑談に興じて時間を忘れるということを許可されていない。身体中に残る穿刺の痕から・・・相当、抵抗力が落ちているだろうと思われた。紫外線も、外気も、雑菌も彼女には大敵なのだ。

「再生治療で彼の肉体が癒えても、彼の魂を癒すのは、霧の中の彼を救うのは、貴女が彼の気配を感じて・・・そこに同じ様に腕を差し伸べることです。ただ、それだけです」

「わかった」

短いけれども、はっきりと彼女はそう言った。幼い返答になったのは・・・もう、それ以上話ができないと悟ったからだ。

私とヒカルの会話が聞こえる範囲にまで、人が入ってきたからだ。

それまで静かであった館に、複数の人の気配を感じた。

単なる設備調整のために訪れた、研究棟の一スタッフが、異常な滞在時間を経過して退館していない、と私に貼られたIDチップシールが警告波を出したのだろう。

「いつか、必ずこのハンカチをお返しします」

もう、私とヒカル・クロスの接点はなくなるのだろうと思ったのに。

彼女はそう、私に約束した。

刺繍も何もない、布きれだ。それには意味が無い。

市販のものであるから、焼却して欲しいと言った。彼女は唇の端を持ち上げた。

穏やかな・・・涙の跡が残っているが、もうそこには・・・誰にも涙を見せないヒカル・クロスが居た。

近づいて来た者が、来館者がヒカルを待っていると言った。

その時に、スタッフは来館者の名前を言わなかった。

・・・シャルル・ドウ・アルディだな、と感じた。

ここでシャルルはふたり存在してはいけない。

だから。

だから、よくよく申し送りされていて、ここではシャルルの存在はないものとして扱われるのだ

。

・・・この館は彼の私邸であるのに。

その空間の中で・・・彼の息子であるルイを治療するために、シャルルは存在を消す。

気配を消す。

ルイに対して、シャルルと呼ぶことをヒカルに許可する。

彼と彼女だけの時間を持つことを赦す。

誰も悪くないのに。

誰にも責はないのに。

なぜこんな風に・・・誰もが血や涙を流しているのだろうか。

静かな、薔薇の香りの漂う館は、穏やかになるために鎮まるために存在しているのではないのか。歴史の古い・・・緩やかな優しい時間を過ごすために、この場所があるはずなのに。

ヒカル・クロスは私と少し距離を置いて背中を向けた。

小さな声で、やり取りをいくつかして打ち合わせをしたあと、彼女は私に振り返った。

「私、ここで失礼します」

本当に申し訳なさそうに言うので、彼女の都合で私が振り回されていると感じないようにつとめて明るく言った。

彼女の目元は少し濡れていたが、朱も混じっていた。

私はそれで察しがついた。

「こちらは大丈夫です。退館の手続きも必要ですから・・・」

時間がかかるので、先に行っていてください、と言った。

一般の訪問の方がより厳しいセキュリティであることは通常の道理であった。

不思議なのは、入るときにのみ厳しいところがほとんどであるのに、ここでは出る時も厳しいチェックを受けることにあった。

これまでの激流が逆巻くそこに入り込んでしまったかのように、勢いよくこれまでの澱みを噴出させたヒカル・クロスはすでに落ち着きを取り戻していた。

・・・こういう人達は気の毒だと思った。私が哀れむことではないのだが・・・人前で泣いたり、取り乱したりすることができない。

どんなに泣きはらした顔をしていても、泣いていないと言い続けなければならない。

どれほど話を継続したいと思っても、彼女はそれを諦めなければならなかった。

本当は私と話をしたかったのだろう。うぬぼれではない。

彼女が私と持ちたいと思った会話は・・・

彼女がこれからの方策を講じるための相談ではない。

ただ・・・ただ、彼女の嘆きを目の前にした数少ない者のひとりが私であるという認識はあった。

彼女はそれ以上踏み込んではいけないというぎりぎりの境界を知っていると思った。

私との距離をそれ以上縮めてはいけないと思ったようだ。

名残を惜しんではいけない。そうしてしまえば、ヒカルはきっと心を残すからだ。

彼女のような、別れを極度に懼れる者の憂いになってはいけないと思った。

人は出会い別れそしてまた出会いそれからまた別れる。

繰り返すということを意識しないままに繰り返す。

ルイ・ドウ・アルディのように反復を厭う者は、綻んでいくことがわかっているのにそれでもやめることはできないのだ。

ルイ・ドウ・アルディは・・・繰り返し、ヒカルを愛するのだろう。

何度も、何度も。

彼女を繰り返し愛して更に深いところに堕ちていく。

彼の霧はまだ・・・晴れない。

「それでは、ひとつ・・・御願いを聞いてもらえませんか」

命令することもできるのに、彼女は私に向かってそう言った。

奥ゆかしい気質はどこで養われたのだろうか。

誇り高いアルディ家の者は冷笑するかもしれない。

彼女のそういった素地は見苦しいと言うかもしれない。

けれども、私にはこの上なく好ましく見えた。

ルイが彼女を愛するのはごく自然の成り行きであり、そして彼女だからこそ彼は深く激しく永らくヒカルを求め続けるのだろうと思った。

彼女は・・・そこで私の差し出したハンカチを取り出した。

「貴方からの借り物を利用してごめんなさい」

彼女はそう言って最初に謝った。

「いいえ、それは既に貴女のものですよ、ヒカル・クロス」

私がそう言ったので、ヒカルは僅かに微笑んだ。ありがとう、と言った。

私に差し出されたのは、私が差し出した布であった。彼女の涙を拭う役割を果たすことが出来なかったが、大きく強い皺が幾筋も入り、彼女は手の平でそれをそっと丁寧に伸ばした。

「本当にごめんなさい」

彼女がまた謝罪した。

私ではなく・・・彼女の手の平の、涙の染みが多く残るそれに向かって言った。

目元を拭去することはなかったが、彼女の大粒の涙は、そこに彼女の膝や手の平に落ち続けて・・・そしてそれはヒカルの涙を幾粒か、受け止めた。

彼女は伏し目がちにそれを眺めていたけれども・・・やがて、言った。

あまり時間がないことは彼女が一番よく承知している。

本当なら、少しでもはやく、先ほど到着した・・・彼女を待ち受けている人物に会いたいはずだった。

それでも、ヒカルはじっとハンカチを眺めて、そして次に私に差し出した。

私はそれを受け取った。

手の平にこぼれ落ちるように布の感触が滑り込んでくるが、少し重みを感じた。

彼女の涙の分だけ、湿って重くなったのだ。

・・・重量を感じるのは、それだけではないのだろうが、私は黙ってそれを受け取ることにした。

そして実行した。

彼女の哀しみを少しでも受け止められれば、それだけで満足である。

自分の身体から零れる液体について極端に気を遣っている彼女は・・・いつか、医療業界の聖母と言われる存在になるのだろうかという気がした。

彼女でなくても。この家から、きっとそういう存在が輩出されるのだろうかという根拠のない空想が私の頭を過ぎった。

「これを、シャルルに持って行ってくれますか」

「このハンカチを？」

私は少し驚いて、尋ね返してしまった。ヒカルはそうだ、と言って頷いた。

茶色の髪が少し動いて、御願いますと頭を下げたヒカルがそこに居たので、私は慌ててそんなことをしないでくれ、と言った。

日本式のそれは・・・最高の敬意を払う行為のひとつだ。

私ごときに、ヒカル・クロスが頭を低くすることは、彼女が満足しても、周囲が驚愕するだけだ。

そこには私も含まれている。

私は驚いて、思わず受け取ったハンカチを握りしめてしまう。・・・少しひんやりしていた。

「届けてくれればわかると思います。・・・まずは、そこから始めたいと思います」

彼女がそう言ったので、私はノンと言えなかった。

頼みと言った彼女の気持ちが・・・どうにも切なかったからだ。

始める、と言ったヒカルの言葉はそれでもしっかりしていた。はっきりとそう言った。先ほどはあれほど取り乱していたのに、今はもう・・・静かに、事実を受け入れていた。

強い人だ。

そう思った。

反骨の魂を持つばかりが、強いということではない。

何にも抗うということが、強いということではない。

受け入れる強さが彼女にはあった。

それはとても固い決心であることは明白であった。

彼女は先ほど、ルイのことを「シャルル」と言った。

言い淀むことなく、そう言った。

そして・・・届けてくれればわかると言う。

彼には、思い出がないから、それを指し示されても、わからないかもしれないのに。

わかる、と言い切った。

彼を信頼しているのだろう。そして、彼と彼女が過ごした時間を信じているのだ。

彼女は・・・目の前にある自分への課題を受け入れて、次に進もうとしている。

これほど短時間で彼女はそう考えることが出来る。

若いからだろうか。

これからの未来への時間がたくさんあるから、その場から逃げても良かったのに。

今日は何も考えられないから、出直すと言うことも出来たのに。

哀しみを包み込むように、彼女は・・・

ああ、そうか

私は悟った。

彼女は確かに霧だ。

ヒカル・クロスは、ルイ・ドゥ・アルディの暁霧だ。

目の前を晦ます霧ではなく・・・彼の苦悩を包み込む霧なのだ。

誇り高いルイの摩耗した魂を呼び寄せるために、彼女は一度・・・彼の姿を包もうとしているのだ。

私はそこで妙に納得していた。

だから彼女の申し出を受け入れることにした。ノンと言うつもりもなかったが、彼女の気持ちを・・・一緒に彼に届けて欲しいという彼女の依頼を受けることにした。

「私ができるのは、届けることだけですよ」

目の前の茶色の髪の色茶色の眸の娘に、私はそう言った。

責任逃れの念押しではない。

彼女には伝わったようだった。

軽く顎を引くと、彼女は「御願います」と言ってまた頭を下げた。

なぜ、アルディ家の者達が彼女に強く惹かれ、そして求めざるを得ないのか・・・少しわかったような気がした。

彼女は、彼等の暁霧なのだ。

永遠の暁でありながら、彼女はすべてを浄化しそして更に強い光でその者を包み込んで・・・癒すのだ。

目覚の時まで、誰も彼に触れることのないように。

ルイ・ドウ・アルディは・・・彼は暁霧の中で微睡んでいる。

・・・その暁霧そのものが、彼を晴れた昊の下に導引していることに気がつくだろうか。

星辰の子の帰還は近い、と思った。

それは少し違うかもしれない。

私が、そうであって欲しいと願ったのだ。

彼の夢が・・・終わりを告げなければ彼は永遠に安らげるかもしれないが、彼が彷徨いから戻り、そしてヒカルの暁に目を細めて・・・皮肉げな微笑みを浮かべることをヒカルが願っているから。

そして、何よりルイ・ドウ・アルディが・・・彼女に心からの微笑みを・・・ルイ・ドウ・アルディとして捧げることができるようになりたいと、彼が望んでいるから。

ルイ・ドウ・アルディ。

私は心の中でそっと言った。

螺旋階段の階段を昇った先の静かな部屋で身を横たえながら、ヒカルの気配を待ち続ける星辰の子に聞こえると良いのに、と思いながら言った。

貴方は孤独ではない。

孤独だけれども、それを知っている人間がここに居る。

ヒカルは、ルイ・ドウ・アルディの孤独と悲哀を知っている。

だから、彼女に導かれて・・・委ねてみないか。

■29

ヒカル・クロスの背中を見送った後、私は彼女からの依頼を受けたために、退館時間を延長して欲しいと係の者に告げた。

ヒカル・クロスの許可があったのでそれは口頭による申請で十分であった。

・・・来た道に戻る。

長い渡り廊下を今度は・・・ひとりで歩いた。

往路も復路も違う状況であったが、今回は・・・往復はひとりきりであった。

それは最初からわか孤独な往路というものを、感慨深く感じる。

きっと・・・おそらく、彼女は館の入り口で彼女を待つ人物に向かっているのだろうと思った。

哀しみと・・・苦しみと・・・そして強い引力でもって、その人物の胸に飛び込むのだろうと思った。彼女の運命の人は、彼女を運命の人と定めたのだ。

けれども・・・ルイ・ドゥ・アルディの運命の人であるヒカル・クロスは、彼を運命の人と定めなかった。

それは往々にしてあることだけれど、それでも・・・私はその定め残酷さについて深く感じる。

どうして、ルイ・ドゥ・アルディの愛は成就しないのだろう。

もっと違う愛が彼女に生まれたのだろう。

彼が欲しいのは、それではないというのに。

しかし、何もないよりあるほうが良いと考えるには、彼は誇り高すぎた。

彼の欲しいものがないのであれば、意味が無い。

少し種の異なった「それ」がどんなに溢れていても、それは「ない」と同じなのだ。

彼の求めているものはひとつだけ・・・たったひとりからしか得られないものだから。

静かに、螺旋階段を登り切る。

私はその音さえ、その温度さえ・・・これきりであることを念頭に置いて歩んだ。ヒカルがもたらした「もう一度」という反復について感謝しながら、私は歩く。

・・・もう二度と、星辰の子には逢えないと思っていたからだ。

私がここに呼ばれた理由を考えるにつけ、彼にはもう二度と会見することはないと考えていた。よくあることだ。

ある日、出勤してみれば、そこに数時間前まで居た人が、居ないという場面に私は幾度も出会った。

だからあの棟を出て、こんな風にもう一度会う人物が居るとは私にとってはまったく特殊な例であった。それはいつものことであった。

互いにもう二度と会わない方が良いという職に就いている私は・・・先ほども彼に会わずに退却しようとしたのに。

・・・まったく、あのヒカル・クロスという人物は不思議な人だと思う。

他の者がそれを言えば無謀な願い事だと思わざるを得ないのに。彼女の言葉は精霊の囁きのようになさやかであり、それでいて叶えてやりたいと思ってしまう。

・・・彼らもこんな風にして、彼女の小さな声を聞き分けたのだろうか。

彼女は自分の願いは口にしない。

誰かのために、いつも動いている。いつも何かを考えている。

これまでの様子からそんな人なのだろうな、と思った。

そしてそれは間違いではないだろう。

螺旋階段の途中にある踊り場で少し呼吸を整える。

彼に会うときはとても緊張する。

こればかりは何度経験しても慣れないことであった。

階段を上りきって、少し歩き、ヒカルの座り込んでいた椅子を横切る。

まだ、彼女の温度がそこにあるようであった。

私は今一度・・・彼女が震えながら降りた階段を上りそしてまた陽が移動して薄暗くなった廊下の中を歩き始めた。

そしてもう会うこともないと思っていただけに、今日、もう一度彼と言葉を交わすことになるうとは思ってもみなかった。

私の手の中には、彼女の託したハンカチが握られているだけだった。肩には提出に必要な書き込みの終わった書類がいくつか入っているがごく軽い鞆を提げていた。

不格好な仕事鞆を持ち歩く私を見て、彼がなんと言うのか想像できた。それくらいは暗記できないのかな、と薄笑するのだろうと思った。

しかしそれは彼なりの気遣いであり、決して嘲笑しているわけではないと気付くまでに少し時間がかかってしまったけれども。

奥の部屋の前に行きつくと、私は立ち止まった。

ここは生体認証により施錠されているはずであった。先ほど、ヒカルが施錠していった。何度も何度も指を合わせて、動揺しながらも彼女が蒼白な横顔を私に見せたのは、つい先ほどの話であった。

・・・誰か人を呼ばなくてはならないだろうか。

私にはそういった権限はないので、認証装置をいじり回すつもりはなかった。

しかし、かちり、という小さな開錠音がしたので、私は周囲を見回した。

遠隔操作で開錠されたタイミングに居合わせたのだろうか。

・・・この家のあらゆる場所に監視カメラが内蔵されていることは承知していた。ヒカル・クロスが中庭に出るといのは予定されていないのに、係の者が見はからってやって来たことを考えると、それはこの館では当然の設備なのだということは察知できた。

私はあまり驚くことなく、そのまま入室することにした。

これを手配したのが誰であるのか、おおよそ想像できたからだ。

生体認証による施錠装置は、遠隔操作できる場合にはふたつの事情しか存在しない。故障や緊急避難の時によるものと・・・マスタ権限で強請開錠するときだ。

おそらく、この家のマスタ権限を持つ者で・・・ヒカルの話を聞き、その命令ができる人物の仕

業だろうと思った。

その人物は・・・決して彼に会うことはない。

入室すると声をかけた。

彼は奥の寝室にいるから、その声は聞こえない。

けれども最低限の礼儀は必要であった。

もうここには入ることはないだろう。

幾度も通う理由はなかった。

だから、ひとつひとつを記憶していく。

優美な家具や仄かに漂う薔薇の香気や・・・何もかもが異世界の雑誌や映画の世界で出てくるようなものばかりであった。

しかしそれらが本物であると理解できるのは何より嗅覚や触覚に刺激されるからだ。視覚や聴覚だけしか得られない情報と異なり、これらは・・・すべて、ルイ・ドウ・アルディの為に整えられたものなのだと理解できる。

空気が柔らかく感じるのは、湿度と温度が完璧に調整されているからだ。

上質のカーテンが僅かに揺らいたのは、私が入室することによって中の空気圧が変化したからだ。ここは完全なる防音が施されているようだった。

彼女はここを独りで通り抜け・・・そして戻って来た。彼の変化を初めて知って、驚愕しながらも普通を装って帰って行った。会いたいと思っていた人物に再会したのに、彼女は会いたいと思っていた人物に会えなかった。

極限まで痩せた彼の顔が少し戻ってくる都度、私は彼にそろそろ、彼女に会ったらどうかと言いかけて何度もやめたことを思い出した。

見ているだけで苦しくなる恋というのは、存在するのだと痛感する。

自分の恋ではないのに。

秘めたる想いというものは、なぜこれほどまでに・・・痛々しいものなのだろうか。

私は歩みを進めて中に入っていった。

奥で人の気配がする。

彼がそこに居るのは明らかだった。

私は身なりを整えた。

何をどうするわけでもないが、私の気がつかないことに彼は気がつき、彼の観察は細部に至るまで鋭いからだ。暫く振りに対面するので、少し緊張する。

彼は、僅かな事実から彼は様々なことを知ることができる。

私がヒカル・クロスと話してきたことも、その内容すら把握できてしまう。

仕種や表情から、容易に判断できるらしい。

だから彼には迂闊に興味本位で近付くことはできない。

彼は、この館に移動したばかりであるので、何となくすべての調度品などが彼の納得する位置でないように思われた。

そして、少し動かした新しい形跡があった。

おそらく、ヒカル・クロスが自分自身で気がついた幾つかを動かしたのだろうと思われた。

しかし、それはルイ・ドゥ・アルディの嗜好ではないことを知り、ヒカルは更に心を痛めたことだろう。

「シャルル。入室します」

私はそれだけを短く言って、返事がなかったものの寝室に入っていった。

もう、彼には生命を維持し経過を見守る機器は接続されていない。

点滴も外されて、衰えた筋肉や移植された皮膚の調整のみが優先事項とされた。

彼は美貌の持ち主であり、素晴らしい体軀を備えていた。

加えて高い知性も。

見事な金の髪は絹糸のように柔らかだし、整った顔は幸い事故の影響を受けなかった。

致命的な頭部損傷はなかったが、髪が焼けてしまったので切り落とさざるを得なかったが、それも今は伸びていた。

視力にも異常は無い。

しかし、吹き飛ばされて追突した衝撃と熱風を吸ったために肺の一部と内臓を若干損傷した。

開腹手術を行い、内臓の幾つかを治療した時の傷も、形成外科手術でほとんど傷口がわからないようになった。

首の付け根から腰まで受けた火傷も今は再生医療によって仰向けに横たわっても良い時間ができた。骨折は完治している。神経には奇跡的に損傷はほとんど無かった。

その他全てが順調に回復している。

それなのに、彼はつまらなさそうにしていた。

・・・それなのに。

何もかもを手に入れたはずの彼はそれでも、いつも孤独を抱えて生きている。

「・・・君が来るということは、何か不具合でも？」

それが第一声だった。

私は極力落ち着いた声を出した。

「不具合でないことを報告しに来ただけです」

彼は顔を顰めた。

すっかり回復して、移植された皮膚は、元の彼の肌になんて近くなっていた。

驚異的な回復力である。

強靱な肉体と若さとそして彼が元々そういった耐性に強い性質を遺伝的に引き継いでいるが故の奇蹟であった。

大きなベッドに横たわるルイ・ドゥ・アルディが居た。いや、シャルル・ドゥ・アルディだった。

その姿は、最後に見た彼からすると比べものにならないほど穏やかだった。

ヒカル・クロスと話ができたせいだろうか。

彼は彼の意識があるうちに訪れる人物達がいつも決まって同じであることに、心中傷ついていたのかもしれない。

この家の者達は、執着してはいけないと言われて育つそうだ。

その一方で、目指す目標にだけは固執しどんな手段を採択しても遂行するという気質も持ち合わせている。

私はルイ本人ではないから、彼の心の中やすべてを理解することはできないが、それでも年若い彼がどんな人生を歩んできたのか、垣間見えた気がする。

酷く孤独であったのだろうと思った。

それを憐れまれることを何より厭う誇り高さも持っている。

誰かを頼ったり縋ったりすることは一切しないと決めてしまっている。

それなのに・・・それなのに、彼が唯一、手を伸ばした相手は、決して手の届かない相手だった。

金の髪の下で、彼は青灰色の瞳を私に向けていた。

きっと、長くなりはじめた彼の髪の色は、彼の霧の中では白金に見えるに違いない。

「退棟おめでとうございます。それだけを伝えに」

「違うな。

・・・君は何か別の目的があって来た。

・・・君の用件ではなさそうだ。

誰かに何かを頼まれたのか？」

毎度のことであるが、彼の観察眼には舌を巻く。

誤魔化したり繕ったりすることを彼は許可しない。

どうしてわかるのか、と言うような表情を浮かべていたのだろう。

彼は薄く笑った。

「君が君の職務のためにここに来ることはあり得ないから」

寝台に身を横たえて、上半身を起こした状態のまま、上質の軽い素材の羽織りものに袖を通さずに体を覆っていた。

毛布も静電気が発生しない軽いもので、体に負担をかけないようにするための配慮がなされていた。

・・・僅かに、ポプリのような香りがしていたが、彼が少し身動きするとかさりという僅かな乾燥音とともに馥郁な空気が散ったので、枕にポプリが入っているのだろうと思った。

膝上には、タブレット端末が置いてあった。

彼の手すさびにということと、指先の訓練のためにヒカル・クロスが用意したものだだった。

彼は大変な読書家であった。

今も、私の話を聞きながら、用意された世界の中だけしか閲覧出来ないことを承知の上で、彼はあらゆる文献に目を通す。

現在の状況や情勢については、広大な情報の海にアクセスできないことに、彼はあまり不満を漏らさなかった。

本当は・・・彼は世俗から離れた静かな場所で、読書をして終日を過ごしたいという願望があるらしかった。

しかし、それはルイの希望なのか、シャルルならそう思うだろうという予測から来る行動なのか、私には判別がつかなかった。

「クロス嬢から頼まれました」

青灰色の視線が私に再び移った。

「ヒカルが？」

興味なさそうにしていたルイの表情が少しだけ変化した。私は頷いた。

「はい。貴方に・・・渡して欲しいと」

そう言って、私は持っていたハンカチを差し出した。

近くに寄ることの許可は求めなかった。

彼にとって、ヒカル・クロスは最優先なのだ。

今のルイの中では、彼女はルイ・ドゥ・アルディの婚約者で、愛した友人夫婦の忘れ形見で・・・それ以上の感情は持つてはいけないのだと言い聞かせて煩悶するアルディ家当主なのだから。

まるっきり、家の当主としての努めは切り捨てられてしまっていた。ミシェルという実弟がおり、ルイが居るから心配していないという素振りを見せていたが内心は気になっているのだろうと思った。しかし体がどうにも思うようにならないので、彼は復調に専念することにしたのだ。本当は・・・今すぐにでもここから出て行って業務に戻りたいと思っているのは明白であった。しかし、それはルイとしてではなく、シャルルとして、だった。

私はベッドの近くまで寄って差し出したそれを受け取ると、彼はその重みに耐えかねるかのよう、ぱたん、と手の平を上に向けて、腿の上に落とした。

しかし私が落としたハンカチは彼の手の平からこぼれ落ちることはなかった。

ヒカルから渡されたものを粗末に扱うことができないのは、ルイもシャルルも同じであるらしい。

私は無言でいた。

ただ、何もしないで直立不動では居られなかったので、気忙しそうに視線を動かし、何か些事で良いのでできることを探した後に、彼の足元の毛布の裾が僅かに乱れていたのを、それを整えることにした。

彼の顔を正面から見ることはしなかった。

今、彼はルイとシャルルを往復している。

素っ気なさそうな顔と苦悶に満ちた顔と・・・哀しそうなそれでいて彼女の意図を探ろうとするような挑戦的な顔と・・・様々に表情を変える。

もちろん、普通の者が見たらそれは僅かな差であるが、こうして長い時間彼を見つめ続けて居ると、その微妙な表情が、実は大きな変化をもたらしていることに気がつくのだ。

しばらく彼はそれを黙って見つめていた。

頭の中で、目に見える物体から得られる情報から様々なことを類推しているのだと思った。

■31

その布の切れ端は、何の変哲もなかった。

明らかにヒカル・クロスの所有物ではないものであるのに。

彼はそれを受け取ると・・・しばらくの間、じっとそれを観察していた。

彼はすぐにわかっただろう。

それが涙で湿っていることに。

それから、私がそれを手渡した時の表情と仕種で、それが私のハンカチで、私が彼女の涙を見た証になることを彼は瞬時に判断したのだ。

誰しも自分の所有物を他者に手渡す時には、どこことなく粗雑に扱う傾向にあるからだ。私のものではなかったのであれば、私は彼の方にハンカチの裾を向けて渡したと思ったが、それは後になって思いついた彼の指摘の理由のひとつにしかならなかった。

「ヒカルは人前では泣かないのだが」

彼の声は困惑を含んでいた。

彼は整った顔を曇らせた。

シャルル・ドウ・アルディなら・・・きっとそんな風にして、彼女のことを憂えるのだろう。

「彼女を呼び戻しますか」

「いや、必要ない。・・・ルイが居るから」

最後の言葉に少しばかり間があった。

「彼女には、ルイが居るから」

彼は繰り返した。自分にそう言い含めているかのように、静かな声で。

「彼女は滅多なことでは人前では泣かない。

・・・そうすることが自分にできる唯一のことだと思っているようだ」

彼はそう言った。

そしてそのまま暫く考えに耽っていた。

いつものことだ。

彼は何かを思いつくと、途端に周囲が見えなくなってしまう。

何時間でもそうしている。

私やその他の者達と考える速度がまったく異なる、新しい薔薇の種である星辰の子は、今になってようやく・・・ヒカルのことだけについて没頭することができるようになった。

「ヒカルが何を哀しんでいるのか、これだけでは情報が足りない」

彼はやがて呟いた。私はこの言葉が出るまでに、傍にあった椅子を引き寄せて、彼の斜め右側に座った。近い距離で座ることが出来るのは、ヒカル・クロスだけだ。

私はまったくの部外者で・・・そして、ただ眺めているだけしかできなかった。

「私には理由は述べませんでした」

「嘘をつくときにはもう少しましな言葉を用意しておくことだ」

あっさりと言われてしまったので、私は苦い笑いを浮かべる。

彼にあっては、何も隠し事ができなかった。

しかし全てを述べることはできなかった。

私は頭を掻いて、正直に言った。真実を隠すときには、事実を割愛して言うに限る。不必要な情報は付け加える必要はなかった。

「ルイ・ドウ・アルディが解決してくれるでしょう。・・・彼女は、彼の笑顔が見たい、と言って感極まって涙を流した。それだけです」

「それは難しい注文かもしれないな」

彼は微笑んだ。

「しかし、他ならない彼女の願いであれば、ルイはきっと・・・その通りにするのだろう。彼はいつもそうだから」

私はその言葉を聞いて、切なくなってしまった。言葉が出てこなかった。
彼の微笑みが欲しいというヒカルに微笑む彼は、霧の中の住人なのだ。
それをヒカルが憂えて慟哭することについて、彼は知らない。
それほど・・・彼女がどれほど彼を大事にしているのか、彼は知らない。

「体液を含んでいるので、焼却処分にしてするつもりですが、その前に、貴方に渡して指示を仰げと言われましたので」

「彼女の分析は終了している。やむを得ないが、それは焼却してくれ」
彼はそう言ってハンカチの表面をそっと撫でた。

「・・・秘密を抱えるというのは苦しいことだ。それをどこまで守り通せるかによって秘密になるかそうでなくなるかが決まる」

「つまり、秘めたるものは、秘めたるがままにしておくことが良いと言うことでしょうか」
「そういう言い方も出来るな」

彼はそう言って含み笑いをした。物憂げな上品な青灰色の瞳が煌めいた。

「ヒカルの秘密は、君の中に留めておいてくれ。それを共有することについてはすでにヒカルと君との間で協議済みだろう？」

「そして貴方にも共有して欲しいから・・・クロス嬢は貴方にハンカチを渡してくれと頼んだの
でしょうね」

彼は嬉しそうな笑みを見せた。私は立ち上がると、彼からそれを受け取った。
これで彼女の言葉が、彼の中に墜ちて、紋を広げることができるだろうか。

彼女は言ったのだ。

「ルイ・ドゥ・アルディの笑顔が見たい」と。

それは、シャルル・ドゥ・アルディのそれではなく、ルイとしての微笑みであることを、彼はまだ認識していない。

私はそのまま自分の荷物を持った。それほど多くはない。

「そろそろ交代の時間なので、失礼します」

「そうか。・・・ルイには言い含めておく。彼女を哀しませることは許さない」

彼はそこで溜息を漏らした。

「これからもヒカルが涙を見せる度に、こうしてひっそりとオレだけに告解するのは・・・これで最後にして欲しいものだ」

「ルイの笑顔が彼女の涙を止める最高の術であることに、彼も間もなく気がつくでしょう」
私はそれだけ言った。

それ以上言えば、彼にいろいろと指摘されかねないと思ったからだ。

私は交代の時間だと偽った。ここには単に、最終確認のために訪れただけだ。

もう・・・彼と逢うことはない。

それでも、良かった。

私の勤務先の最高権力者はシャルル・ドゥ・アルディであるから、まったく縁が切れてしまうと

いうことではなかった。

どこかで・・・きっと、どこかでまた逢えるだろう。

その時には、私の事は忘れていいのかもわからないが。

私は霧の中に住まうルイ・ドゥ・アルディとだけ出会ったのだから、霧が晴れば、彼は忘れてしまおうと思った。

だから、最後にひとつだけ・・・彼に質問することにした。

「シャルル。・・・ひとつ、質問して宜しいでしょうか」

「手短に」

私は丁寧に言った。

彼に・・・伝わりますようにと願いながら。

人には、言ってはならない秘密がある。

秘めたる想いは、口にしてはいけない。

彼は、ずっとそれを守ってきた。

彼女に愛して居ると伝えないまま、彼はそのまま戻れない路を彷徨うには不憫すぎた。

「・・・シャルル。貴方には、愛する人は居ますか？」

「ファム・ファタルと呼んだ人は居たよ」

「それは誰ですか？」

「ヒカルの母親。彼女は永遠の暁という名前の娘を残した。それがヒカルだ」

ここで、本当のシャルルなら、ファム・ファタルの永遠の不在について述べなかつただろう。

まだ、生きていたいからだ。

どこかで生きていたのなら、それで良いと思い、生きていない事実を認めるには諦めきれないからだ。

・・・それが、愛だからだ。

過去にできないから。

未来を生きるために、ルイはシャルル・ドゥ・アルディになった。

この事実・・・いつか到達して欲しいと思った。

「彼女を泣かせる仕方の無い息子とヒカルは婚約して・・・いつか、ランスの教会で式を挙げる。そうならば、オレの役割は終わって・・・静かに・・・ただ静かに・・・」

そこで彼はまた沈黙した。

また、深い思索の旅に出てしまったようだった。

きっと、彼の中で今が最も幸せな瞬間なのだろうと思った。

シャルルに息子と認められ、愛するヒカル・クロスと結婚し、そして当主の座に昇る。

けれども、彼にはその先がない。未来を作るために、未来を作らない。そんな彼は暁の霧に入り込んでしまった。自分でわかっているからだろう。それが苦しかった。彼はどうしてそんな風にしか生きられなかったのだろうか。

■32

私は彼の思考の妨げにならないように、そっと部屋を出た。

扉を閉めると、僅かにかちりと自動施錠されると音がした。

・・・先ほどと同じであった。ヒカル時には、彼女による施錠が必要であったのに。

ルイはいつもの通り、自分の霧の中に入り込んでしまった。だからこそ、ヒカルが必要なのだろう。

また、彼女はいつも通り無休で彼の元に通い続けるのだろうと思った。

・・・指示があったので、焼却処分するために、ハンカチは私がそっと彼の手の中から抜き取った。

また、これは私の手元に戻って来たが、それは既に私の所有物ではなくなっていた。

彼女の涙を含み、彼の手の温度を受け、そしてまた傍観者の私の元に戻って当事者になることから離れたそれを・・・彼らはいつか、思い出すことがあるのだろうか。

こんな関わり方でしか関わることを赦されない者が居るということを、知って欲しいというわけではない。

でも、ルイ・ドゥ・アルディの暁霧が晴れやかになって欲しいと思った。

彼女しかできないことだったから。

私は、戻れない路に向かって、彼女の背中を断りもなく押してしまったような気持ちでいた。

・・・もと来た路を帰る。

この往復は、私にとってはそれほど長い道のりではなかった。

途中ですれ違う人はいなかった。

この経路を使う者は、限られている。

本来なら、私のような使用人は通ることのできない場所であった。

そうしなさい、と指示されない限りは。

私はおそらくもう二度と通ることのない路を歩いた。

他の者と私が少しばかり違ったのは、日本語を解することができるということと、この風貌・・・

・それから、彼が心の奥底で恐れている「感染」の危機に晒されない人種の者であるからだ。

そして、ヒカル・クロスと少しだけ会話をした。

これが大きく左右したのだ。

私は私の役割を全うしたと思ってはいない。

彼らに問題を投げかけただけでしかない。

噴水の近くで、大粒の涙を溢してルイ・ドゥ・アルディの笑顔を求めたヒカルの姿はもう、そこには無かった。

螺旋階段をひとりで降下することができなかったヒカルは、次に来た時には静かに淋しそうに、けれどもそれでも次への期待を捨てることなく、毎日を繰り返して、ルイとの思い出を蓄積させていくのだろうと思った。

私は、静かに分不相応な廊下を歩いた。

私のためだけに用意された静寂だった。

・・・エントランスまで戻る。

城と呼んだ方が良さそうな瀟灑な館は、出入りの折にはこの場所を通り過ぎなければならない。安全上の問題なのかもしれないが、その他に・・・もうひとつ、この館には秘密があることを私は知っていた。

エントランスの向こう側に続いている道は、先ほど私が歩んできた渡り廊下と同じであった。合わせ鏡のように。

ずっと・・・戻って来たはずなのに、その奥がある不思議な空間を見つめながら歩く。

・・・反対側の棟があるのだ。

完全に左右対称でありながら、居室が対面しない設計になっていた。

それでいて美観を全く損なっていない。

この一族は美を重んじるようであるが、これほど徹底していると、どこか夢の国に迷い込んだ気にさせられる。

眠りの霧に包まれた、幻の城。

ここに集う者達はどこか顔が似通っていて、それでいて個を主張するあまり深く沈降する。

ヒカル・クロスの姿はすでに無かった。

迎いの車の中で酷く憔悴しながらも、同乗している相手を気遣って微笑んでいるのだろうと思った。

本当にシャルル・ドゥ・アルディに彼女が泣いた証を見せたのであれば、彼は一体どうするのだろうか。

おそらく、ルイとは違うやり方で、彼女を慰撫するのだろうと思った。

同じにはなれなから、同じになりたいと思うのだ。

彼には過去がないから、過去に匹敵する未来を作ろうとするのだ。

しかし、本当にそうだろうか。

ルイ・ドウ・アルディとヒカル・クロスの重ねた年月はまったくなかったのだろうか。

私は・・・それはないと思っている。

それなら、ヒカルはあれほど涕涙にむせぶこともなかっただろう。

そんなことを考えながら歩みを進めていると、反対側の渡り廊下にまで出てしまった。

・・・私にはそちらの棟に入る権限はないので、足を止めて踵を返した。

何もかもが、先ほどの風景と左右対称であるだけで、まったく同じ作りであったけれども、こちらの方がどことなく古かった。本来は、こちら側のみであったのだろう。

双子のような設計の構造。それでいて、片方はもう片方に気がつかない。

・・・設計者の意図について考えるまでもなかった。

おそらく、その思考の持ち主であろう人物が、向こう側から歩いてきたからである。

誰も供をつけていなかった。

この館の中では、自由に・・・気儘に漫ろ歩くのだろう。彼はそういう人物だから。

彼は歩きながら薄い唇に、煙草を啜っていた。

ここは禁煙であると聞いていたのに。

彼には適用できないらしい。

白金の髪の色青灰色の瞳の人は・・・私に気がついてはいたはずであるのに、私が誰であるか記憶しているはずなのに、私に目を遣ると、煙草を口から離して指先に移動させた。

「こちらあての来客はないはずだ」

低い、艶やかを通り越して妖しいまでに美しいバリトンが彼の唇から漏れて、響いた。

「失礼。道に迷いました」

「惑った、の間違いではないのかな」

彼は即答した。

恐ろしく頭の切れる男だという印象を受けた。

ルイやシャルルと同じ貌を持っているのに、彼はどこか違っていた。

危うい気を放っている。

私はその人物を知っていた。

とても良く知っている。

「君の名前はこちらの来棟予定者の中に入っていない。あと数歩進めば、警報が鳴り君は不審人物として連れ去られる結果になるので、そのつもりで」

ミシェル・ドゥ・アルディはそう言って微笑んだ。

しかし、青灰色の双眸は少しも微笑んでいなかった。

引き返せ、とかなり直接的に言われたことに対して憤慨しているのではない。

ただ・・・この人はどこまでも底のない闇にいるような印象を受けるので、吸い込まれていきそうになる。

■33

彼はあちら側の棟から出てきた。

と、いうことは、誰かと会っていたのだろうか。

治療棟は完全禁煙であったので、彼の喫煙する姿は見たことがなかったが、すれ違う際に僅かな風に乗る香りが、シャルルと違うのだという目印になった。

彼はルイ・ドゥ・アルディの教育係だ。

そして、アルディ家当主の実弟である。

一卵性双生児であるので、かなり似通った顔立ちをしていたが、まったくそのもの、ということではなかった。

ふたりが並べば違いにわかるだろう。

彼らはとてもよく似ているが、その反面、同じ顔立ちであるが故にその違いは顕著であった。

その違いのひとつに、喫煙癖があるのではないのかと思う。

彼はひっきりなしに煙草を吸う。

ルイもそうであったようだ。

・・・何か不安に思う事があるのだろうか。

それとも心に根付いてしまうほどの憤りを隠しているのだろうか。

喫煙者の多くに見受けられる、心の平穏についての陰事は様々だ。

不安、憤怒そして哀しみ・・・

彼は一体何を隠して煙の向こうに消えようとしているのだろう。

物憂げで冷たい青灰色の瞳は、こちらをちらりと見る。

これ以上その先に行ってはいけないという忠告であった。

私は彼と同じ向きに体を反転させた。

その時、ちょうど彼と肩を並べて歩くことになったので、私は一歩引いて少し後ろを歩く。

「・・・驚かないのもつまらないな」

「驚くのも予想道りでつまらないと思いますよ」

彼は同じ顔立ちの住人を幾人も見て、動揺しないでいられる私が珍しいと言った。

きっと、ルイも経年するとこのような顔つきになるのだろう。

まったく年齢を感じさせない若々しい印象のミシェル・ドゥ・アルディは、私を横目で見ると、煙草を銜え直し、そして持っていたライターで火をつけた。

歩きながらの仕草であるのに、それがとても優美で慣れた仕草であったので、私はしばし無言で彼の流れるような動作に見入っていた。

彼は一度だけ肺に煙を入れると、それで満足したかのように顎をあげて煙を吐いた。

神経質そうな指先に細身の煙草が携えられたが、彼はそれに執着していないようだった。

エントランスのごく一部のスペースだけで喫煙が許可されているらしい。

そしてそこはミシエルの定位置のようだった。

慣れた様子で、彼はそこにまっすぐ歩いて行く。

私はそのまま、彼の後について行った。

「君にも許可するよ」

彼は私の方を見ないでそう言ったが、私は首を横に振った。

頭上で軽くモーター音が鳴った。強力な換気装置が作動したようだ。

けれども、それはとても静かで、私の知恵ではどうやって作動しているのかさえ理解できないような仕組みが施されていた。

「私は喫煙しませんので」

丁寧に断ったつもりだったが、彼は綺麗な眉を少しだけ動かし、「そうか」と言っただけでまた新しい煙草を吸うために、たった今、火をつけたばかりの煙草を捨てた。

そして彼は嗤う。誰かに喫煙を奨めるのは、愚かしい行為を懺悔したい気持ちに駆られる罪人と同じなのかもしれないな、と独りごちた。

ミシェル・ドゥ・アルディは、ルイの教育係であるが、彼とは距離を置いている。

そして、彼はいつも遠くからでしかルイを見舞わない。

見舞うという行為ではなく観察しにやって来ているかのようであった。

どこか他人と距離を置きたがる彼は、ルイにとってもよく似ていると思ったし、ルイの教育係でもあり、生まれた時から一緒であるのであれば、彼はミシエルの影響を強く受けているのも頷けた。

白金の髪と、経年した大人の男性の顔である以外は、彼と・・・ルイとほとんど同じであった。ただ、彼はどこか全身から殺気が出ていていると言うのだろうか、どこにも誰も入り込む隙がなかった。

「彼は良くなるでしょう」

「オレには興味がないことだ」

彼はそう言って煙草を吸ったが、私の方を冷たい青灰色の瞳で注視していたので、その言葉は言った通りの意味ではないと思った。

だから、私は続けることにした。

これは、文字にしてはいけないからだ。記録にしてはいけないからだ。

でも、誰かに伝え残さなければならないと思った。

「彼は彼女と時間を過ごすことによって、やがて、思い出すでしょう。彼と彼女だけの時間は、決して少ないものでもなく内容の薄いものでもなかったことに」

「それで彼が蘇る確率を示すことにはならないよ」

ミシェルが皮肉っぽくそう言ったので、私は少し微笑んだ。しかし大変に緊張していた。

これほど知能が高い人物と会話すると、通常は、会話にならないことがほとんどだ。

だから、彼らは同じ血肉か近いものだけで集うのだ。もう、傷つきたくないから。

自分が歩み寄っても決して理解してもらえないという苦悶を代々、その遺伝子の中に受け継いでしまったから。

「彼は優因子を多く持つから。あのままにしておくには惜しい。何しろ、莫大な投資と時間を費やしているから」

ミシェルは冷たくそう言った。

けれども、その言葉は多かった。

彼の私見も交えた発言だった。

だから、私にはそれが、「彼が早く良くなりますように」というミシエルの祈りの言葉に聞こえた。

やがて、ミシェルは煙草を吸い終わると、まったく未練もなくそれを捨てて、そして次の煙草を取り出した。

彼は半分程度しか口をつけないらしい。

彼の喫煙癖は相当なものであると推測する。

ひっきりなしに吸っているが、この邸では、禁煙だ。

邸内に居る時間の長短は別として、彼にとっては、だいぶ断煙していたのだろう。

「確実に、彼は戻りつつあります」

「なぜ、そう言えるのか？根拠を言えよ」

ミシェルは私にそう言った。根拠がないものは信じないというアルディ家の者らしい発言であった。私は・・・彼が私の土壌にまで視線を下げて話をしていることを感じた。そうしてなお、彼に関する情報を知りたいのだとミシェルが言っているような気がした。モニター越しから聞こえる音声や画像ではなく、彼らを外側から見つめる人間からの見解を求めているのだろうと思った。

私は言葉を選んで、ゆっくりと言った。

時間を稼いで焦らしているつもりはなかった。

かちり、とまたミシェルがライターで煙草に火を灯す。

「彼の中での時間経過が正常だからです。もし、彼がシャルル・ドウ・アルディであるのなら・・・まず、ヒカル・クロスを彼女と認識しないでしょう。

なぜならシャルルであるならば、彼の最愛の友人夫妻が戻らないことを受け入れられないからです。

ところが、彼は、過去に戻らず、不仲と言われた彼と父の確執を忘れて・・・そうでありたいと願う未来を夢みている。

・・・もし、本当のシャルルであるならば、ああいう言い方はしない。

本当のシャルルであるならば・・・確実に、過去に戻ったところから始まるからです。

それなのに、彼は『今』から始まっている。

・・・それは彼が・・・ルイが、事実を受け入れる今を生きているからです」

ヒカル・クロスが涙を流した事を憂える。

そしてルイとヒカルが結ばれて、新しい未来を築くことを願っている。

そう・・・彼は過去に戻らず、未来への期待を多く口にしたのだから。

「・・・もし、シャルルであるならば、彼のファミ・ファタルとヒカル・クロスを間違えると思うのです。だから、彼は夏になると彼女を遠ざけるのだから。・・・でも、彼はヒカル・クロスを間違えなかった。彼女の到来を待った。言葉を交わさなくても、待ち続ける・・・そういう時間を永らく過ごしてきて、彼はそれが身に染みているから」

「つまり、彼のファミ・ファタルはたったひとりだけだと言うのか」

ミシェルが低い、魅惑的な声で呟いた。私はそうだ、と言って頷いた。

「ここからは、私の感想です。

・・・ファミ・ファタルとは、生涯にただひとりだけの人のことではないと思います。

シャルルはそれを知っている。でも、ルイはひとりだけしか知らない。

そこが、彼とシャルルを大きく別つところだ」

私はそこまで言って、無言でいるミシェルの横顔をじっと見つめた。

彼はどこか遠くをみており・・・その頭の中で、高速で計算が始まっているのだと知ったので、私は声をかけることはしないで、ただしばらく無言で立ち尽くしてしまっていた。

・・・薔薇の香りがする風が流れてきた。

自分が懸命であったので、微風に気がつかなかったが・・・ここはずっと薔薇の香りが流れている。

ヒカル・クロスが懐かしそうに目を細める香りであった。

古い・・・思い入れのある古城と呼ぶに相応しい格式高い館の中で、彼は何を思っているのだろうか。そして彼女は何を決意したのだろうか。

■34

私の様子に気がついたミシェルが説明を加えることによって、彼の思考は中断されたことを私に告げた。

つまり、彼の考え事に耽る時間が終わり、再び私に向き直ったのだ。

乱れのない線を保持する顎が僅かに動いた。

「・・・なるほど。

シャルルにとって、ヒカルの存在は唯一絶対ではないが、ルイにはそれしか存在しない、ということなのか」

私は頷いた。

「そこに、彼が気がつけば・・・」

私は口を閉ざした。それは、ミシェル・ドウ・アルディにはとうに承知の事柄だと思ったからだ。

その証拠に、彼は再び、優雅に煙草を吸い始めていた。

自分の想定したことが、他者も安易に予想できたことに対して少しばかり傷歎しているかのようにも見えた。

「シャルルは幾通りもの未来を選ぶ揺らぎを受け入れる。

けれども、ルイにはそれがない。

・・・そこが、シャルルが当主を譲らない理由なのか」

私は黙ったままだった。

彼は、私の意見や相づちは必要としていないからだ。

これほど似通った顔立ちの一族なのに・・・こうして見てみると彼らはとても似てはいるが皆、それぞれに違っていた。

ルイは黄金の髪をしているし、生真面目な印象を受ける。

ミシェルはシャルルより極限を好む性質のようである。

シャルルは・・・愛を知って、ヒカルという存在を得て、他のふたりよりもどこか輪郭が柔らかい気がする。

容姿だけではなく、各々、生い立ちが違う。そして、それぞれが唯一や絶対と定めるものが違う

からこそ、こんな風に違う印象を受けるのだろうと思った。
だから、ヒカル・クロスは、皆、各々に見分けていると思った。

彼女は聡いとは言えないが愚かではない。
そして、人の心の機微に敏感であった。

・・・人が人を愛おしむ条件として、その素質は不要とは言えなかった。

だからこそ、彼女が誰よりも、何よりも、この不思議な家に受け入れられるのだろうと思った。
彼らを深く知らない者は、彼らを見分けることが出来ない。
けれども、彼らはそういった者ではなく・・・彼らの本質を分ける者を求めているのだろうと思
った。

「あなたは、彼が戻ってくると確信しているのですね」

「理由がないから」

彼はそう言って微笑んだ。即答だった。

その答えしかない、と彼は断言したのだ。

ルイ・ドウ・アルディが彼の主張をそのまま消し去ることはない、とミシェルは断言する。
その絶大なる信頼にも似た確信は、どこから来るのだろう。
ルイ・ドウ・アルディが必ず復活する、とミシェル・ドウ・アルディはここで公言する。
その根拠は・・・一体、何なのだろうか。

「ルイ・ドウ・アルディが戻らない可能性も考える」

ミシェル・ドウ・アルディは嗤った。

「君がそう言うだけだよ。・・・そのような結末は、誰も想定していない」

彼は、私がこの先に、誰かにこの話をして誰も採用しないと宣言したのだ。

誰に言っても、この話は霧を掴むような話で、信用されないと言う。

けれども。

誰に言っても、この話は霧のような話で・・・それでいて核心に触れる。

それらを。

すべてを企てたのは・・・

シャルルなのだろうか。

それとも。

ミシェルなのだろうか。

ヒカルを悩ませて、ルイを惑わせて、その先にある未来を信じる者たちの理由はそれぞれだ。けれども、道化のような役割しか与えられず、それでいて、己の生命の意味について深く問う者達へのこたえは、どのように与えれば良いのだろうか。

「・・・与えるのではない。自発するのを待て」

ミシェル・ドウ・アルディは私の思考を読み取って、そう言った。

彼らが自分でこたえを出すのを見届けろ、と言う。

間違っていたとしても。

自分の予想と違っていても。

それでも、彼らの行く先を見ろ、とミシェル・ドウ・アルディは言うのだ。

なぜなのだろうか。

シャルルよりもヒカルよりも・・・ミシエルの言葉は、誰かと比べてはいけない気がした。

■35

「それで、私を遣わしたのですか」

私は聞くまいと思っていたことを、尋ねてみる気になった。

彼が、ルイ・ドウ・アルディの居棟と反対側の廊下から出てきたからだ。

同じような構造であるのならば、その棟にも、誰か・・・霧の国の住人がいるのかもしれない、と思ったのだ。

その証拠に、シャルルとミシェルは同時にここに存在しない。

ヒカル・クロスを迎えに来たと思われるシャルルは、彼女を連れて、エントランスで引き返してしまった。

ルイ・ドウ・アルディがシャルルであるならば、シャルルと、ミシェルと、もうひとり・・・誰か別の者が存在することになる。

それは矛盾していたから。

だから、彼らは互いに顔を合わせない。

・・・ここには、ミシェルは様子を見に来ることはないと思っていた。

「何のことかな」

彼はごくありふれた言葉で返答したので、私は軽く首を振った。

「無言で役割分担をするのは、必要だからでしょう。・・・私にはまったく関係のないことです。与えられた指示のとおり職務を遂行するだけですから」

「君の推測はいくつか、情報が足りないために、誤っている。修正をするべきだ」

ミシェルは煙草の煙を吐き出しながら、そう言った。

しかし、青灰色の伶俐な瞳はほんの少しばかりこの状況を楽しんでいるようにも見えた。

彼に意見しない私の回答が、彼は気に入ったようだった。もう少し、話をする気になったらしい。

気難しく誇り高く高い知能ゆえに誰にも理解されないという孤独を抱える薔薇の家の人は、私にそっと言った。

教えてやろう、と言いながら。

「年齢が下だが、叔父にあたる人物もとてもシャルルに似ていてね・・・。

気質がだいぶ違うので、話をしたり近くに寄ったりすると別人だとわかるのだが。それに、我々の・・・ルイの曾祖父にあたる人物は多情な人物で、その他にも異母兄弟姉妹が多く存在する。従妹のジル・ド・ラ・ロシェルもシャルルの影武者をしていたくらいなので、顔立ちが似通っている者達は、たくさん存在する」

「それでも、ルイが認識する親しい者は、そう多くないと思うのですが。・・・もっとも親しい方は、貴方かと思うのですが。・・・いかがでしょうか」

「教育係だからね」

ミシェルは肩を竦めてそう言った。

彼は口数が多い方ではないと聞く。

それなのに、これほどまでに重大な秘匿事項を私に話して・・・それでなお、自信に満ちあふれているのは、彼がアルディ家の中で大変な功績を抱えていながら、当主の実弟であるのにも関わらず、表舞台にほとんど姿を現さないことと関連しているのだろう。

彼は、華やかな光の世界を捨てて、星辰の子を創り出すことに没頭したのだ。

教育係となり、幼い頃から英才教育を施し、最高の環境を与えた。

ただ、愛というものは与えなかった。

何かに執着するあまりに、何もかもを捨てることがないように。

・・・あの研究所で密かに続けられているプロジェクトにミシェルが関わっていることも知っていた。

そこに、ルイが加わらないことにも疑問があったが、そこは私の踏み入れることの出来る領域ではなかったので、余計な詮索はしないことに決めていた。

それも影響しているのだろうか。

彼には彼の囁きを聴き取る者が必要であるように思えた。

大変に高い知能指数を持つ者は、他者と会話が續かない。その中で、シャルルとルイは、彼の問いかけに答えることができる。

そのうち、ルイは消え・・・シャルルはミシェルと親しく会話しない。

兄弟であるからなのかもしれない。

近い存在ほど、遠いものだ。

「私をここに呼び寄せたのは、ミシェル、貴方でしょう。

・・・それについてどうこう言うつもりはありません。

あの研究所は、アルディ家の出資で成立しているのだから」

「君のその割り切り具合を評価しよう」

ミシェルは面白そうにそう言った。彼はすべての事柄を愉しむことができるかどうかで判断しているのだろうか。

そうは思わなかった。彼の内面はシャルルと同じかそれ以上に繊細で、そのように何事にも鷹揚であると思わせることで、平穩を保っているように見える。

数多の人々を見てきた。

だから、少しだけわかるのだ。彼がとても・・・深く何かに沈んでいることを。

暁霧の中に居るルイが、彼の誇りを捨てて別の人物になってしまったことに、憤慨しているようにも見えた。

ミシェルは決してそうはならないのだろう。理由はいくつもあるのかもしれない。

けれども、彼はどこか・・・そう・・・どんな屈辱や汚泥の中でも生き抜く強さやしたたかさがあるように思えた。

私はここでは何の権限もないのに、最奥の居室に入ることが出来た。

設備の点検などは、他の者に任せれば良いのに。

ここでの出来事は秘密であるというのであれば、外部から誰も入れないはずだ。

それなのに・・・私は呼ばれた。

もしも。

・・・私が、職を越えて、ヒカル・クロスと接触することをミシェルは見越していたのだとしたら。

いつも、あの研究所の治療棟で私も含め、皆に近付くこともせずに遠くで観察していたのは、ルイの経過観察ではなく・・・彼を霧の中から救いだす補助を自ら進んで行う者を探していたとしたら。

・・・何もかもが、ミシエルの用意した舞台の上のことであり、私は知らない間に、用意された台本どおりに物事を進めていたのかもしれない。

いや、それは、真実だろうと思った。

なぜなら、彼がこれほど満足そうに・・・遠巻きに誰かを観察するように距離を置いて話をするこもしないのではなく、今、私に話をしているからだ。

煙草を燻らす佳人を、私は食い入るように見つめた。

■36

「どうにかなりそうなくらい我を忘れて溺れたいという誘惑と、何もかもを手に入れる代わりに何もかもが手に入らない苦渋は、片方しか手に入らない」

ミシェルはやがてそう言った。静かに烟る霧の中で、彼は独り言のように語る。

その前者がシャルルとルイで、後者がミシェルなのだろうと思った。

そして、ルイがミシェルと違う結論を選んだことに対して、彼は少しばかり哀しんでいるように見えたが、その一方で歓迎しているようにも窺えた。

シャルルの選択でもなく、ミシエルの選択でもない、別の路を模索している彼を、静かに・・・ミシェルは、ただ、静かに見守っているように見えた。

それはとても辛い行為であったように感じる。

長い時間をかけて、彼は常に自己を律して、自らがルイに近付きすぎないように調整し続けた。アルディ家の求める事項をルイが満たすように、教育係として彼は最大以上の最高のものを与え続けたのだろう。

・・・ここにも、暁霧に包まれた人物が居る。

改めて、また、そう思った。

薔薇の香りが、階上よりも強く香るこの場所で、彼は静かに思考に沈湎する。

「・・・ヒカル・クロスとルイの接触時間を制限したのも、貴方なのですか」

私はもう、尋ねることはできなくなるという焦燥感を感じた。ルイとヒカルに関与し続けるつもりはない。

私の役割と職務と共有時間は限られている。

彼らだけに限らず、私も含め、すべて個というものはそうやって、添って歩く時間が短い者がいるから、そうではなく生涯にわたって関わる者を見つけることができるのだと思っている。

「それが何か関係するだけでも？」

「いいえ」

私は首を横に振った。

彼らの特別であるというまったく根拠のない自信は持っていないし、これからもそうだろう。私はそう感じることはない。

だから、ミシェルは私を選んだのだろう。チェスの駒のように。

何気なくつまみ上げた様に見えて、彼は周到な計算を根拠に実行したのだ。

「この館で治療するということを提案したのも、貴方ですね。ミシェル・ドウ・アルディ。・・・私の夢想ですので、否定も肯定も必要ありません。

ただ、興味があったら聞いてください」

「・・・奇妙な申し出をする来棟者に、どう返答しようかな」

彼はくすりと声を漏らし、そして酷薄そうな唇を歪めた。

恐ろしく美しい男性が、目の前で静かに・・・けれども、内心では激しく幾通りもの計算を同時に行って、行き着く結論になるためにはどのように手配したら良いのかを考え続けていた。

これまでもそうだったろうし、これからも・・・彼は生涯をこのようにして、激しさを秘めて過ごしていくのだろう。

彼は、誰かに謎解きをして欲しいのかもしれない、と思った。

その役割が、私なのだろうか。

私はそのまま続けた。

「彼は決してこの状況を望んでいません。

先ほど言った通りで、彼は未来を生きるために、生きている。・・・本当のシャルルではないから、過去に戻れないことを知っているのです。

だから、シャルルが愛した人々の名前を挙げることはせず、ただただ、ヒカル・クロスとルイ・ドウ・アルディのこれからを案じる父親の影を追っている。

ヒカルとルイ・ドウ・アルディが生まれる前の事については触れない。

それは、シャルルがおそらく・・・ヒカルには伝えていたかもしれないが、ルイには話をしていないからでしょう。

主観的な陳述は一切しなかったのかと思われます。

そこには彼は・・・いなかったからです。

だから、ルイは、決してそこには触れない。

想像の世界だけで、物事を述べることは根拠のないことだ、と今の貴方のように考えているからでしょう。

・・・彼には、戻る過去がないから、未来しか選べない。

過去に入れば、二度と戻らないとわかっているから。

過去は、現実を飛び越えて、未来に渡ることはできないから。

・・・過去に戻れないように、そういう風に、誰かが仕組みを作ったとしたら。

・・・ルイ・ドウ・アルディは目醒めるでしょうね、確実に」

「随分とお喋りなのだね」

「口が過ぎれば謝罪します。でも、このことを、彼女は・・・ヒカル・クロスは、悟ったから。あれほど激しい涙を流すのでしょうか」

ミシェル・ドウ・アルディはそこで煙草を捨てた。

用意された曇り一つないトレイに、煙草を投げ込む。

・・・そこからまだ煙が立ち上っていた。

「彼女は人前で泣かないことを信条としているからね。

・・・それを覆すときが、良い機会であるから」

彼は否定しない代わりに、そのように答えた。

沈黙さえ媚薬のようであった。彼に抗う神は存在しないようであった。

何もかもが、彼に平伏す。事実も、想定される未来も。

それなのに、彼は満たされていないようにただ、物事を弄ぶように采配している様子を見せ続ける。

本当はそうではないのに。

彼が導き出す答えは、ルイだけではなく、ヒカル・クロスさえ救うのだと、一体、どれだけの者が理解しているのだろうか。

私は緊張の余り、暑くもないのに汗が噴き出していることに気がついた。

無粋な面持ちで早口で彼の前でまくし立てる仮説は、少しも彼の興味を引くものではないはずなのに、ミシェル・ドゥ・アルディは、役に立たない私の話に耳を傾けた。

■37

この先に・・・どんな咎めを受けても良い、と思った私の言動がミシェル・ドゥ・アルディに障ることなく会話を続行することができたことに私は少なからず安堵を覚えた。

「ありがとうございます」

彼は肩を竦める。

白金の髪が頬に降りかかった。

・・・ルイがなりたかったのは、見事な黄金の髪ではなく、こういう色素の薄い色なのだろう。

しかし私はそれを口に出さない。

自分の感想を述べるのは、避けるべきであった。彼の・・・ミシェルには誰がどう感じているかは必要ではないように思った。

そして実際に、彼は、私の感想や他者がどう思うのかということについてまったく口述していない。

「礼を言われるようなことはしていないが」

私は首を振った。

「いいえ・・・貴方はやはり、彼の・・・彼らの最大の理解者であると思います」

「それは讃辞にはならないな」

彼は唇を歪めた。

その姿さえ美しい。

ルイより長い年月を生きているからだ。

長く生きている者は、それだけで美しい。

私はそう思う。

この世の全てを見聞きして、そして生き抜いてきた者だけに与えられる美がそこにはあった。彼は実兄と当主争いをして、フランス国内だけではなく国外でも大変に話題になった人物であった。再び実兄が当主に座することを彼が承諾したのか、詳細な経緯は明らかになっていない。ただ、しばらくの間まったく存在さえ消えていたのに、ある時突然彼の名前が浮上してきたのだ。

突然、とは言ったが、機を待っていたような印象を受ける。

まるで、計算されたかのようなようだった。

それは、シャルルの表舞台への出現が極端に減る頃を見はからったような時期ばかりであった。

・・・まるで、ミシェルがそこに居ると思わせるかのような存在の主張であった。

フランスの華と呼ばれる兄と同じ遺伝子を持ちながら、彼には尊称がない。

星辰の子と呼ばれるルイの教育係でありながら、彼には尊称がない。

他者が呼びならわすものについてはまったく興味がないようであった。

そして、ミシェルはおもむろに言った。

「君は面白いな。

・・・まったくの傍観者であると思ったが、オレの計算違いだったようだ。

職務を越えて彼らとの接触時に説教するのは、あの棟の所員の中では、君と・・・ジルだけだろう」

「ジル・・・」

私の記憶の中にある情報の検索結果に合致するのはひとりだけしか居なかった。

ジル・ド・ラ・ロシェルだ。

アルディ家ゆかりの者で、研究チームの名前に加わっていた。

ずっと前に退所したと聞いたが。

彼女の残した論文は、いくつかが公開されていて、私も読んだことがあった。

・・・未来を予想する者はこんな思考をしているのかと驚歎したので、彼女の名前を覚えていたのだ。

ミシェルの論文もシャルルのものも読んだことがあったが、もう、私の知能ではとうてい追いつかない高度なものばかりであった。

けれども、彼女の論文の書き方は平易で、誰かに読んで貰うために故意にそう書いているような印象を受けた。

文字には温度は存在しないが、彼女の論文は暖かい色があった。

そこで私ははっと顔を上げて、ミシエルの顔を見た。

すると、彼は私を観察するために、面白そうに青灰色の瞳をこちらに向けていた。

あまりにも造作の整った者というのは、時折恐ろしくなる。

ルイ・ドウ・アルディに対してもそう思った。

だから、ヒカル・クロスの柔和な穏やかな空気に安堵した。

それは事実だ。

同じ様に。

ミシエルが安堵する者が居るとしたら。

それは……

私は、彼がやってきた方角を見上げた。

ルイ・ドウ・アルディの居室と反対側の棟。

ミシエルが一人だけでそこに入り込む場所。

ヒカル・クロスには、そこに立ち寄るには許可が必要な場所。

ルイ・ドウ・アルディは、過去に還ることはないと断言するミシエルの根拠。

……すべてがそこにあるとしたら。

私は言葉に詰まった。

彼がこれだけ多くの情報量を放出しているということは、意味があった。

彼はではない誰かに、気がついて欲しいという願いとひとかけらの気まぐれがそこにはあった。

知らないふりをした方が、正しい選択だったのかもしれない。

けれども、ミシエルは私に選択を委ねた。

気がつくか否か、という選択だ。

■38

私とミシエルの間に、薔薇の香りのする風が吹いた。

なぜ、このタイミングでそれが吹くのかについて神秘性を持たせるつもりはない。

けれども、私はそれが自分への合図だと思った。

どういうわけか、その時にはそうであると信じたのだ。

ミシェルが、誰かに気がついて欲しいと願っているような気がした。

私は悟った。

もうひとつの棟に、誰が居るのか。

そして、その相手に対して、彼は何かを願っているのだということ。

あやふやな結論かもしれないし、導き出すには根拠のないことも含まれているかもしれなかった。

でも、私はそれを言わずには居られなかった。

誰かに、背中を押されたような感覚を味わう。

この薔薇の風が、そうさせるのだろうか。

どうして、彼女の名前を出したのか。

私と同じ様に、職務を越えてしまったと彼は言った。

しかし非難する口調ではなく、かえってそれを歓迎しているようであった。

そしてそれは必要な要素であると言った。

彼の高い知能で考えついた結論は、彼を満足させているらしい。

それだけ揃っていれば十分だった。

ミシェルは、長い時間をかけて、待ったのだ。

それこそ、気の遠くなるような長い年月を。

彼はヒカル・クロスとルイ・ドゥ・アルディを待った。

生まれてくるのを待った。

そして・・・この時期が到来するまで。

彼は、待ち続けた。

最大幸福を得るために、自分の幸福を捨てたのだ。

それ故の、結論なのだろう。

ルイとヒカルが、彼らだけの時間を持つことによって、未来へ生きることができると彼は判断した。

それは私の推測のように根拠のないものは存在しないのだろう。

なぜなら、彼はおそらく・・・これも私の想像でしかないけれども、あの棟の人との時間の中で、それを確信したのだと思った。

そしてルイが本当に真の強い魂を手に入れるために何をしなければならないのか、彼は考え続けたのだ。ずっと・・・ずっと。

孤独な作業だったと思う。彼の思考を共有することはできないから。

唯一、彼を理解するであろうルイは、彼を認識しない。

苦闘の末に実弟から当主の座を勝ち取ったが、埋められない溝があるとだけしか感じる事が出来ない。

シャルルとしての、ミシェルとの思い出がないからだ。

そして彼は、自分の経験した方策と別の策を実行することにした。

ルイが戻るためには、どんな投薬治療も効かない。

ルイの肉体は癒えても、魂が沈んだままだ。

それを癒すのは・・・ヒカル・クロスだけであると、彼は思料した。

彼女との未来の中で、シャルルのままでは決して結ばれないことと、彼の中で眠る彼女への渴望と・・・彼の誇り高さを計算したのだ。

結論を幾通りも考えるのではない。

そうなる結論になるために・・・ただ、ひたすら、その答えになるように、過程を計算した。

おそらく、彼の待っている「向こう側の棟の住人」も、彼を彼と認識しないのだろう。どれほど長い時間を持っても。

彼は彼女を取り戻すことが出来ない。だからここにやって来る。

・・・きっと、彼女は、ミシェルをシャルルと呼ぶのだろう、と思った。

私の推測でしかないが。

尋ねても、これに関しては、彼は決して答えないと思った。

もう、彼は私を見ていなかった。

私に期待した役割を、私は意図せずきっちりと果たしたらしい。

彼は病棟に来ていたのは、ルイの様子を確認するだけではなかった。

・・・決められた枠の中からはみ出してしまうような因子を持つ者を探していたのだろう。

それが、私であったわけだ。

誰かを雇うわけにはいかない。

そうやって近付いた者は、ルイにはすぐに感づかれる。

それに、持っている駒だけで動かさなければ秘密が漏れると彼なら考えそうだった。

どうして、シャルルに助力を求めなかったのだろうか。

ルイを救うためなら、彼は賛成しただろう。

・・・いや、違う。シャルルも同意したのだ。

なぜなら、ヒカル・クロスひとりをごここに遣り、彼は迎えに来てすぐ退却してしまった。

ここに、シャルルが複数人いるわけにはいかなかったからだ。

こちらの棟と、あちらの棟で、各々別の人物がシャルルと名乗るから。

だから、本当のシャルルはここにはやって来ない。

彼らのためだけに整えられた巨大な治療の館は、シャルルの許可なしには設置することができない医療器具が複数揃っていた。

どうしてこんなに拙い表現しかできないのだろう。

高い知性と富も名声も持っているのに。

何でも持っているのに。

それなのに、彼らは互いの手を取り合うことを知らない。

皆が、霧に包まれている。

風や光を求めて、霧の中を歩く者達がここに集う。

・・・遠くで聞こえる声や気配を頼りに、自分の信じた方向に向かってただ彷徨い歩いているのだ。

その先が、断崖絶壁であったとしても。

私は、胸が詰まった。

唇が震える。

でも、それを止めることが出来ない。

自分の身体であるのに。

声が喉を通過して音になる。

それが、ミシェルだけではなく・・・風に乗って、この棟の中で眠りにつく薔薇に還ると言われている一族の者達に、届くようにと祈りながら。

何かに祈ったことはない。

神に縋ったりしない。

けれども・・・この瞬間だけは、私は自分の声に祈りを込めた。

誰かが、何かが・・・誰かの肉体を借りるときには、こんな風なのだろうか。

「ミシェル。・・・彼女もきっと、またあなたをミシェルと呼ぶようになるでしょう」

しばらく無音が続いた。

遠くで、噴水の水が弾かれる音がするばかりだった。

さっきまで感じていた風も、そこにはなかった。

ただ・・・煙草を吸うこともなく、無言でじっと宙を見ているミシェルがそこに居るだけだった。

いや、違った。

彼は、少し上を見上げて、双塔を見つめていたのだ。

青灰色の薄い眼差しで、彼は霧の先を眺めているような、そんな様子だった。

「・・・過ぎた言葉は身を滅ぼす。忘れないことだ」
魅惑的で一度聞いたら忘れられないような低い艶のあるバリトンが響いた。
ミシェルは私の言葉に否定はしなかった。

■39

張り詰めた空気が私をさらに緊張させた。
けれども、その静寂を最初に破ったのは、ミシェルからであった。
「ここで長居は無用だ」
それが彼の言葉だった。
もう、私がここに居る理由はないのだ、と彼は宣言した。

「あの方達は・・・結ばれることはあるのでしょうか」
「それは愚問だな」
ミシェルは艶然と嗤った。
私が言うところの彼と彼女について、ミシェルはその先を知っているように思えた。彼は過去を見つめながら現在を生き抜き、未来を想像することができる。
なぜ、これほどの人物が、影のように生きているのか・・・私は、最初は・・・理解できない
と思った。
でも、理解できないと言い切ってしまうことは簡単なのだと思った。
彼と話をして、短い会話の中で・・・ミシェルは、シャルルでもなくミシェル・ドゥ・アルディとして生きていると思った。
彼も、生について霧中を彷徨い、そしてこたえを見つけようとしていると思った。
なぜなら、どんな辛苦辛勞を厭わず、彼はただ、見つめるという苦行に近い行為を続けているからだ。

生きるということについて、彼は執着している。
だからこそ、彼は生命について問い続けている。
そして・・・何かを購おうとしているようにも見える。
だからこそ、彼は生き抜こうとしているのだろうか。

彼は冴え冴えとして青灰色の瞳を私に向けた。
私は、この色を知っている。
ルイ・ドゥ・アルディも同じ瞳だった。
今、真理を語る白金の髪 of 麗人は私に去れと言った。

「この家の者は、独特の価値観で生きている。．．．それが高邁であると固く信じている。しかし、オレはそうではないと問い続ける」

深い深い．．．よく響く声で、ミシェル・ドウ・アルディは言った。

「何かに執着することが、変化をもたらす亜種を創り、強い因子となることを、彼らは気がつかない。

．．．誇りがあるなら今すぐ死ね、と言われたが。誇りがあるから今すぐ死ねないのだ、という可能性を持つことについて考えない。

ヒカル・クロスが必要な素子であると認めるのは少々やっかいだが．．．この家の者達が、彼女を受け入れることができる時。彼女のような存在を必要だと自分たちが求めていることを知るとき。それが．．．それが最後の舞台になるのだろう」

私は饒舌なミシェルの言葉を聞くだけであった。

その言葉を理解するより、記憶することだけで精一杯だった。

だから、後になって何度も反芻した。

そして、何度も咀嚼して初めて理解した。

．．．何かに執着してはいけないと育てられたルイが、霧の中で見つける．．．一条の光のようなヒカルの存在であり、彼は彼女に．．．生命の輝きに手を伸ばそうとしている自分に気がついた時に．．．彼は戻るのだろう、とミシェルは予測しているのだ。

「ルイは成就することは望まない。

．．．シャルルの影響を受けないように当人は気を付けていただろうが、それでも影響を受けているのだろうな。

結びつくことは、様々な定義がある。彼は．．．ルイは、ヒカル・クロスと今生で結婚するというより、彼女の唯一絶対になりたいのだと考えている」

ミシェルが断言してそう言ったので、私は驚いてその言葉に尋ね返してしまった。

それが彼を不機嫌にさせると承知していたけれども。

「恋人同士より深い絆を求めていると思ったのですが．．．」

「彼が求めているのは、それ以上だよ」

ミシェルは不敵に笑った。

「そういう曖昧なものは必要としない。ルイは星辰の子と呼ばれている唯一の者だ。

．．．肉体だけであったり魂だけであったり、結びつくことを求めている。それが、ルイ・ドウ・アルディだ。

．．．彼がひとりだけを．．．ヒカル・クロスをファム・ファタルに定めたのは、恋情で片付けられない様々なものがあり、彼と彼女の因子がこの家を大きく変化させていくと知っていたからだ」

私は彼の言葉の半分以下しか理解できなかった。

確かに、ルイ・ドゥ・アルディは優性遺伝子を多く保持する者であった。

また、ヒカル・クロスについても同じで、彼女の腕には予防接種の痕などが一切残っていなかった。

彼女の止血をした時に、それには気がついていていた。

国籍が違うからだと思っていたが、彼女はこの国に長く居住している者であるから、それはあり得なかった。

・・・つまり、ルイとヒカルは、ジーン・リッチなのだ。デザイナーズ・ベビーとも言うが。

予め・・・感染症や病気などの懸念を排除された因子保持者達なのだ。

ミシェル言葉で確信した。

彼らは・・・新しい未来を築くために、アルディ家に必要な優性遺伝子を多く保有する者達なのだ。

「完璧でないから完璧になるのだ」

彼は囁るようにそう言った。

「でも、私は、彼と彼女が惹かれあうのは・・・そういう外的要因だけと片付けたくないのです」

「それは君の主観だろう」

ミシェルは嘲ら笑った。

「どの代で融合しても、まったく問題としない。ただ・・・彼らの遺伝子が混じり合い、この先の・・・この館の中で本当にそれを必要とする者に適用できれば、それでオレの考察は終了する」

彼は軽くそう言った。けれども、それは真理だった。

ミシェルは、ルイとヒカルという組み合わせではなく、ヒカルとシャルルと・・・その次世代の者とルイという掛け合わせでも良いと言ったのけたのだ。

まるで、実験をしているかのように。

しかし、その表情はそれまでの無表情と違い、やや、昂揚しているように感じた。

彼の願いは、何なのだろう。

アルディ家には、憂悶を感じるだろうが、それ以上の期待をかけるような理由が、彼には存在するのだろうか・・・。

「双子は昔から不吉であったが。現代においては、人工的に操作された生命について異論を述べる者は少なくなった。・・・倫理問題の解決に伴い、一斉に開発が進む時代に生きる者達は、細胞分裂の過程でそのほとんどが多胎児だ」

私は黙ってしまった。

ミシェルとシャルルは、時代を先駆けした優性遺伝子保持者だと彼が遠回しに吐露しているように聞こえて仕方が無い。

しかしミシェルは私の考えを見越して、軽く首を振った。

ひょっとして・・・母細胞から創りだしたストックの存在であるミシェルの方が、より高い知能を持ち、より多くの優性遺伝をもたらすとアルディ家が分析したとしたら。

・・・この家の「もう一人の住人」と、ミシェルが頻繁にこうして会い、そしルイはその対面で療養していることに、説明がつく・・・

私はこめかみに汗が流れるのを感じた。

私の中で生まれた「ひょっとしたら」が一人歩きを始めたからだ。

ひょっとして・・・ルイは、ミシェルと「あの人」つまり、ジル・ド・ラ・ロシエルの遺伝子を使って生まれたアルディ家の最も濃い因子を持つもので、ヒカル・クロスの因子を入れたいという希望はアルディ家の者達の優性遺伝子を完成させるものだとしたら・・・

■40

「古来から、人々は不老不死であることを求めたが、それは実現しない。それは細胞レベルで維持できないからだ。

だから次に、不病であることを求めた。

その次に、たとえ病に陥っても、自らの肉体が再生すれば良いという結論を出した」

神話や寓話の転生や再来というものではなく、彼の言うそれらは、実現可能な言葉であった。彼の頭脳と彼女の肉体があれば解決することなのだろう。

それだけのことであるのに、周囲の者達は彼らを暁霧から無理矢理引き出すことをしない。

それを阻止しているのが、ミシェルとシャルルなのだろうと思った。

各々やり方は違うかも知れないが。

人が生きるとはどういうことなのだろう。

つつがなく健康で、最期の吐息の瞬間まで意識を持ち、それでいて苦痛のない死を迎え、家族や愛する者に見守られながら、逝くものの、存在を忘れられることなく別の者達はその者が居たという記録や記憶を引き継ぐことなのだろうか。

ルイの直系家族の病歴を見たことがある。

精神疾患や血液関係の病気を煩ったり、夭折していたりすることが多かった。

病だけではなく、時代の奔流に吞まれて若くして命を失ったものもいたが。

彼らの系図を遡ると、大変に興味深い生涯を送っている者が数多居た。

彼らの医療技術をもってすれば、助かったかもしれない。けれども敬虔な信徒である一族の目の前に、倫理や宗教観の遵守が立ちはだかり、生きることができた者を見送る結果になるとしたら。

彼の系図はそれを感じさせるものであった。

しかし、彼の資料は、アルディ家のみ・・・つまり、父方のみのものであった。

原細胞を調べるのであれば、母方の系図の方が必要であるということはミシェルはよく承知しているはずであったのだが。

それなのに、それらの資料は用意されていなかった。

それが私の「ひょっとしたら」という考えを加速させることになったのだ。

「仮定から導く理論はひとつに絞ることだ」

次々に湧き起こる「ひょっとしたら」に、ミシェルが忠告した。

それを確認する手立てが私には皆無だった。

でもその言葉で十分だった。

ミシェルが、ルイとヒカルを結婚しない可能性もあることを示唆していたから。

彼の目的は、達成されるのだろう。

そう遠くない未来に。

未来を生きようとする者達によって、アルディ家に必要な遺伝子と性質を持つ人間が、この家に誕生する。

・・・いや、違う。

融合するのだろう。

優れたものだけを繕うのではなく、不完全さを取り込むことで、完全になるのだ。

ミシェル・ドゥ・アルディがそう言ったからだ。

相反する性質が、混じって溶け合う。

冷酷であるけれども慈悲深く、計算高いが果敢であり、豪胆であるが繊細な者。

病を抱える因子を持つが、それを癒す因子も持つ者。

相反する・・・相対立するものが同時に存在し、彼の信念である生き抜くことを選ぶ者が現れるのだろう。

そして、その中には、きっと、愛を知りたくないと思いつつも愛を求めてしまう性質も含まれているのかも知れない。その逆かもしれない。

愛を知っているのに、愛を受け入れることに不器用な者が生まれるのかもしれない。

でも亜種が居なければ、種の継続は難しい。

同じ質の集団は一度の攻撃で滅されてしまうからだ。

だから。

たとえ、その時に彼自身がこの世に生きていなくても、彼の願いは生き抜くのだろう。

彼が言っている生き抜くということ・・・彼の成就とはそういうことなのだ。

彼自身の生存を言っているのではないのだ。

私はこの風変わりな人を無遠慮に眺め回してしまった。

彼の容姿に惑わされる者は多いと思う。

そして私もルイ・ドゥ・アルディを知っていなければ、彼の美貌に惑わされて、彼の言葉の意味について考えなかったのであろう。

よく切れる刃物を連想させる。彼に触れれば、誰もが切られる。

そして内に潜む熱望を曝け出してしまいそうになる。

それでいて、切る都度に彼は自らも切られるのだろうと思った。

切られる度に己が表出しないように。

・・・内なる己を出さないようにするためには、深く深く、個を沈めるしかなかった。

探求の極みというものは、こうやって、自分の生きているうちに何かを為し遂げようという焦りを捨てた者だけが・・・到達することが出来るのかもしれない。

「私のような者ができるのは、ただ祈ることとだけですよ」

私は肩を竦めて私はそう言った。

彼の求めた枠を越えてはいけない。

彼はそれを求めていない。

そんな気がしたからだ。

そこは・・・私が踏み込んではいけない領域であり、彼はそこに立ち入ることを望んではいない

。

「こんな仮説がある」

ミシェル・ドゥ・アルディは囁るように、そう言った。彼は研究者だ。

だから、仮説については決して口に上らせることはないのだ。

それなのに、私に「仮説だ」と言って彼の考えを伝えようとする。

・・・それがどんな意味を持つのか、私は知らないふりを理由にして、聞き流すことができなかった。

あり得ないことを仮説として私に聞かせる。

なぜなのだろう。

どうしてなのだろう。

彼は時折、気まぐれに・・・彼の知能に及ばない者達に彼の考えを植え付けるのだろうと思った。

理解しているかどうかは問題としない。

ただ、彼の声聞いてくれる者に、声を残す。

そうやって、彼は、彼の生きている証を残しているのだと思った。

■41

「なぜ、同じ様な顔立ちの者がこの家には多いのか。

なぜ、父系の系図原簿しか存在しないのか。

母方の持ち込む劣性遺伝子は影響しないのか・・・何かを繰り返した結果なのではないのか。

。

・・・その『何か』とは夢想であるかもしれないし、そうでないのかもしれない」

彼は仮定の言葉は用いない。

それについては、ミシエルの考察は終了しているのだろうと思った。

彼は私を見ていなかった。私を通り越して・・・彼がやってきた方角の棟を見つめていた。

彼の問いかけに答えることのできる知性を持った者は彼の家に多く存在するのに、彼の声は届かない。

しかし、彼は歎くことなく無言で問い続けているのだろうと思った。

「あなたの仮説は、きっと仮説ではなくなる時がくるでしょう」

私はそれだけを言った。

私の言葉が気に入ったのか、彼はふと、そこで青灰色の瞳を私に向けた。

この上なく伶俐な頭脳の持ち主がここに居る。

けれども、彼は、孤独だった。

しかし熱さを知らなければ寒さはわからない。

孤独も孤独だけしか知らないのであれば孤独を理解できない。

・・・だから、彼は誰かを愛し、誰かから愛されたことがあるのだろうと思った。

「時間だ」

ミシエルがそう言ったので、私は頷いた。

これ以上ここに居てはいけないのだと彼が忠告する。

そうですね、と私は彼の言葉に従う。

「長居をしてしまいました。・・・どこかで、彼らの話を聞くことが出来ることができると良

いなと思っています」

「あなたがあの研究棟で勤務し続ける限りは、それは実現性の低い事ではないはずだが」
ミシエルの言葉から、彼らから私に接触することは二度とないということがわかった。
利用されたと憤慨しても良いのかもしれない。

けれども、怒りはわかかなかった。

私がそうできない性分であったのかもしれないが、それより何より・・・彼と彼女の透明な・・・
透き通ってしまいそうなほど濁りのない、強い想いと絆があまりにも痛々しかったから、分を
過ぎたことをしてしまった。

ただ、それだけだった。

「何かをしてあげたくなってしまうと考えるより、動いてしまう。特に、彼女には。・・・不思議な人ですね」

「それが必要だからだよ」

ミシエルは素っ気なくそう言った。

彼の求める因子というのは、彼女のそういう気質のことも含めてなのかもしれない。

私がミシエル・ドゥ・アルディの艶やかな低いバリトンの声を間近で聞いたのは、それが最後
になった。

一礼をして背中を向けると、また、かちりとライターを点す音がした。

彼はまた煙草を吸い始めたのだ。

それほど長い時間の会話ではなかったはずであったのに、私はとても疲弊していた。でも、心地
好い疲労感であった。

彼のように、優れた才能と知性を持つ者には、人が群がる。

けれども、長い時間をともにしようとする者が少ないのは、きっとこんな風にして、会話に疲れる
からだ。

自分の脳が尋常ならざる速度で稼働するからだろう。

また、来た路を戻る。

でも、幾度も繰り返す錯覚の迷宮のように、私の視線は、ルイの居室のある棟の方を向いていた
。

彼がいつか・・・自分の本当の望みに気がつけば良いのに、と思った。

しかし、それは口にしなかった。

そして、もうひとりの「誰か」についても思いを馳せる。

ヒカル・クロスがあればほど泣いたのは、ルイのことだけを思っただけではなかったのだろう
。

どうして、この家の者達は不器用なのだろうか。

何でも持ち得ているのに、何でもできるのに、何でも手に入るのに。

ただ一言で良いのに。

愛しているよ、と言うだけなのに。

ただ、黙って・・・傍に居るだけしかできない。

愛していると伝えるだけのことができないで、苦悶の霧の中に迷い込んでしまう。

ヒカル・クロスはそんな彼らの暁なのだろう。

名前の通り、彼女は彼らの暁になるのだろう。

ミシエルの言葉から、ヒカル・クロスもルイ・ドゥ・アルディも遺伝子操作された命であるらしいということは理解できた。けれども、それだけでは生き抜くことはできないのだとミシエルは考えている。

それに、シャルルもヒカルも賛同しているのだろう。

だからこそ、各々の役割分担とでも言うべき無言の誓いを立てているのだろう。

愛しているよと言わないで、ただ傍に居ること。

遠く離れている方がまだ、心安らかであっただろうに。

傍に居て、何も言わず、ただ傍に居て・・・そういう日々を重ねていくことの重さを感じながら過ごす。

「諦めるか忘れるかのどちらかだ」

ルイがそのように言ったことがあった。

誰の何についてそのように言及したのか、その時はわからなかった。

しかし、それは・・・愛についての彼の考察であったように思う。

いや、その時は「シャルル」としての考えであった。

どうしても忘れられない人が居る。

その人が幸せになるためには、諦めるか忘れるかのどちらかしか自分には残されていない。

でも、忘れたくない。

だから、諦めたのだ。

秘めたる想いを諦めることも、忘れることもできないから。

ルイは・・・自分自身で居ることを、諦めたのだ。

彼が持っている誇りを捨てて。彼は、諦めてしまったのだ。

私はエントランスに向かって、歩いた。振り返らなかった。

そうしてはいけない気がした。

ミシエルの表情を見てはいけないと思った。

彼が、彼だけのために浮かべる表情は微笑みなのか苦悶なのかわからない。

けれども、誇り高い彼はそれを私に見られたくないのだろうと思ったから。
だから、私と一緒に歩かない。
彼は私と時間を置くために、煙草を吸っている。

ルイ。
忘れてはいけない。
諦めてもいけない。
あなたが、あなたであるために、これだけの人物達が心を砕いているのだから。
決してルイはひとりではない。
孤独を感じるかもしれないけれども、彼には愛する者がいて、彼は愛されているのから。

だから、彼はこれからの時間を静かに重ねて行って欲しい。
きっと、彼は良くなる。きっと、彼は戻ってくる。
私が会ったときにはすでにルイ・ドウ・アルディはそこに居なかった。
彼はシャルル・ドウ・アルディと名乗っていた。
だから、ルイと話をしたことはない。
けれども、私は知っている。
寡黙で知性ある金の髪の色青灰色の若者は常に優しくかった。
ヒカル・クロスの来訪を待ち詫び、それで居ながらも、自分を気にかけてはいけないと言うかの
ように決して彼女と言葉を交わすことはなかった。
それなのに、彼女の用意した端末を大事にして、黙々と訓練を重ねていく意志の強い人物だ。

薔薇の香りがした。
また、風がそよぎ始めたのだ。
外気を吸ったから、館に充満する薔薇の香に改めて気付く。
人間の嗅覚は最も慣れやすい感覚であるにも関わらず、常に薔薇の芳香を感じる。
それは、薔薇を絶やさないように誰かが配慮しているからだ。

私は・・・その薔薇の風を背に受けながら、この不思議な館を後にした。
長い夢を見ているようだった。
出る時は、入館するときの緊張と同じくらいに、緊張していた。
揺られていた舟から地面に降り立って、まだ揺れを感じているような陸酔いに似た感覚と言っ
たら良いのだろうか。
自分の生きる世界とあまりにも違う空間であったが、そこには確実に、そこで生きる人達が居た
。

どういふわけか、込み上げるものがあった。

ヒカルの涙を見たからだろうか。

それとも・・・苦しくなるほど切ない願いや思いを受け止めてしまったからだろうか。

秘めたる想いがここには幾つも存在した。

私はその幾つかに遭遇したがもっともっと・・・違う想いがあるのかもしれない。

ほら、私は彼らの側面や、ほんの一部しか知ることが出来ない。

交わった時間の中だけで、彼らの全てを知ることは出来ない。

だから、私は業務日誌には何も書かなかった。

ただ、最初に命じられた設備の確認の報告だけだであった。

滞在時間が長すぎたはずなのに。

入退の記録がおかしいと言う者は居なかった。

私が咎めを受けないように、誰が手を回したのか、承知していた。

私の一日は終わった。次の日からは、またいつもの日常だった。

でも。

いつか、きっと、ルイ・ドゥ・アルディに会える。

そんな予感がした。

根拠がないね、と彼はきっと、笑うだろうが。

■42 epilogue01 暁の霧

・・・それっきり、私の記憶は更新されていない。

なぜなら。

私は、ほどなくして研究棟から異動になったからだ。

以前から希望していた配属の変更願が受理されたからだ。

そして関連する団体に籍を置くことになり、それは身に余る好待遇であった。

希望すればどんな研修も受けさせてくれる。

各国の視察に行き、最先端の技術に触れることができた。

負傷した者が受けるべき心的外傷にかかる治療の考察について、短い論文を出したことがきっかけだった。

それが・・・私が医療従事者から医療研究者になった理由だ。

私の長年の経験によるところのものであったが、アルディ家との関わりによって、それを出そうと思った。

売名行為を目的としていないから、もちろん、アルディ家の私邸で起こった出来事や、彼らに関する記述は一切ない。

でも。彼らとの関わりの中でひとつ確信したことがあった。
人は再生するのだ、と言いたかった。

今では、再生医療は大きく変化し、誰もが・・・安価で安全な治療を受けることができた。
医療業界のそれまでが覆される画期的な再生医療方法が開発されたからだ。
そして間もなく・・・それを本当に求めている地域には無償と言える値段で施術されるようになる。

それはフランスの華が永らく望んだことであり、彼が永年に渡り携わってきたあの国に対する最も大きな貢献の一つであった。
それは彼一人でできることではなかった。
彼を支えた者が、ひとりやふたりではないことを証明した。

私は、その結果だけ知れば良かった。
ルイ・ドゥ・アルディやヒカル・クロスのその後の結末を、知ろうと思えばそうできた。
しかし、彼らに接触するつもりはなかった。もう、生涯、逢うこともないだろう。

私の寿命も永遠ではない。
限りがある。平均寿命はもっと長いはずであった。でも。
このまま終わるかもしれないという予感を幾度か経験した。
望んで危険な地域に足を運び、感染のおそれがあるとされた病に積極的であった故のことで、それは私の希望であったのだから仕方が無い。
驚異的な発見はできない。
私は凡庸だから。
だから、地道に臨床例を記録して少しばかり考察を加えて報告する仕事しかできないが、それを恥ずべき仕事とは思っていない。
その仕事に従事していなければ、彼らに出会うこともなかったからだ。

忘れてしまっていたというのは語弊があった。
正確には、思い出す機会が減ったという言葉が正しかった。
しかし、今でも、薔薇の香りに触れると思い出す。
涙を流した彼女の瞳の色や、金の髪の星辰の子のことを。

出資のほとんどがアルディ家であるあの研究所から離籍しているわけではなかったから、
時折・・・ルイ・ドゥ・アルディの名前が出るがあった。
彼は執務に復帰し、そして生きている。

戻って来たのだ。

彼がルイ・ドゥ・アルディという名称を用いているのであればそれは確実であった。それだけわかれば、私はそれで良かった。

いいや、その先を知りたくなかったのかもしれない。

ヒカル・クロスと、ルイ・ドゥ・アルディが結ばれなかった結末と、結ばれた結末と・・・両方が考えられたが、私はそのどちらの結果を聞いても胸が痛んだと思ったから。

それが理由で積極的に国外の研究所に赴くことにしたのかもしれない。

それなら、忘れていたという言葉は正しくないな。

あの家の者達なら、きっと、そう言って私を嗤っただろう。

しかし、私は今般、改装した研究棟に戻って来た。

なぜならば、感染率の高い接種事業があり、私はそれに参加する旨を表明したからだ。

それは特異なウイルス感染で、東洋人には感染しないとのことだった。

ある特定の家系にのみ感染すると考えられていたけれども、国際化が進んだ我が国のこども達に影響するという判断があり、このたび予防接種の種目に追加された都聞いた。

そして予防接種の際に流れ出る体液に感染する可能性が高いと聞いた。

だからしばらくは希望者のみだと聞く。

でも私には感染しない。

永らく虐げられてきた特徴が生かせるのであれば。

それは恥ずべき行為でも表明でもなかった。

私の体質が誰かを救うのであれば・・・それはまったく問題にならない。

応募を求める回覧メールに、私はすぐにウイのチェックを入れて返信した。

予防接種に至るまでの、開発年月はいつも長い。

なぜなら、大変に危険を伴うから。

拒絶反応を示す者も居る。

接種という行為でなければもっと違っているのかもしれない。

定期的な皮膚吸収のパッチでも良かったのかもしれない。

でも、接種が最も効果的であると判断したのがあの研究棟であるならば、きっとそれは正解なのだろう。

理解は少ないかもしれないが、やがて、時間が解決するだろう。

だから、私は参加することにした。

ひとりでも多くの命が救われるのであれば。

もうすぐ消えそうな私の命が糧になるのであれば。

・・・そこで、久方ぶりに、彼らのことを思い出した。
誰かのために、自分を犠牲にすることを厭わない薔薇の一族を、思い出した。

不器用で、切なくて、愛おしい人々のことを思い出した。
あと幾回、私はこの国の空気を吸うことができるだろう。
あの時の私の居住場所はもうなかったし、私の慣れ親しんだ研究棟は改築されて構造がまったくわからなかった。

■43 epilogue02 暁の霧

それから、私はしばらくパリに滞在することになった。
必須の研修を受けるためだ。同時に、幼いこども達の為にボランティアでワクチン接種の解除を申し出た。ここに滞在していても、非番の時には何をすることもなかった。昔々、ここで勤務していたという以外に、何かに固執しているわけではなかった。すでに私を知る者はここには誰も残っていなかったし、変わってしまった街並みを見て追憶を愛おしむ気持ちもなかった。

研修はそれほど大変なことではなく、いくつかの実技研修と、座学で構成され、懇親会では世界各国での医療情勢などの情報収集が目的となって皆が集う。
ただ資格を保有し登録していれば良いというわけではなく、定期的に研修を受け登録内容の確認を受けなければいけないシステムを厭わしいと思った事はなかった。
少しの時間の拘束で・・・医師ではない私でさえ、たくさんの命を救うことができるのだから。高度な医療行為は禁じられていたが、この時代になると、予防接種や処方を受けた、2回目以降の受診時のカルテ作成の補助など・・・医療行為そのものが、ひとりの医師によるものではなく、診断や手術の手順考慮など複雑な判断を要するもの以外では、補助者による裁量が認められる時代になった。
それは、再生医療が活発になり、これまで治療不能とされていた病気も怪我も治療することができるようになったからだ。
その結果、以前より多くの患者が絶対数として存在するからである。

しかし、相変わらず、医療現場というのは人手不足であった。
研究機関や、特定の病院には溢れているのに。
こうして地道に、予防接種をするような医師はいなかった。
これから・・・この医療システムは変化していくことになるのだろう。
そうやって欲しいという私の個人的な願いも含まれているのかもしれないけれども。

・・・最初の接種対象となったのは、アルディ家のこども達だと言う。

人体実験だとか、未成年者の被験者を容認することへの是非などが取りざたされたが、それでもアルディ家は緘黙し、将来のあるこども達へ可能性を説いて理解を深めていった。・・・やがて、ある特定の因子が作用と環境とウイルス感染が相まって発症するものであるが、一度感染すると治癒までに厄介で・・・まだそれは解決しきれておらず研究の段階であるということ程度の情報しか入ってこなかった。

医療の先端部に居ると思っていたけれど、私にはわからないことや知らないことが・・・多すぎた。それを不服としているわけではなかった。知ることが出来ない事実があるという事実を、私は知っているからだ。

遠いあの日に・・・彼女の涙を見た。そして苦悶しながらも微笑む彼の姿を見た。ミシェルという人物は本当は酷く繊細で何かを秘めている人なのだということも知った。そして・・・私自身の中に、職を越えて何かをしてしまうほどの熱情が存在していたことを知った。なぜなのだろう。・・・とても懐かしくなった。思い出すという現象は、時に・・・突如として湧き起こるものなのだを知る。

『記憶とは記録、保持、想起、忘却と過程を進める。そして、想起は再生、再認、再構成という段階を経る』

シャルル、と呼ばれて振り向くルイ・ドゥ・アルディの声が今でも耳に残る。

皮肉気に誰に語るでもなく囁くように彼は言った。誰に向けた言葉なのかと尋ねても、彼は薄く笑うだけで、それ以上は答えなかった。

だいぶ長い間、忘れていたのに。・・・いや、忘れていたのではなく、単に・・・再構築していなかっただけなのだと思う。

彼らも・・・ルイ・ドゥ・アルディもヒカル・クロスも、時折思い出すのだろうか。特に、ルイは自分が深く沈降してしまった、薔薇の香りに包まれた屋敷での出来事を思い出すのだろうか。本当のところは、わからなかったけれども。でも、わかるような気がした。

相変わらず、あの研究所は瀟灑な館のようであった。近代的でありながら、どこか懐かしさを感じさせる。

地下で繋がっている研究棟、一般棟、治療棟などの独立した棟が点在しているが、その間を濃い緑が杜となって覆い被さっていた。

冬のフランスの空は相変わらず遠くて、高くて・・・そして染み入るほどに綺麗であった。薄い水色がどこまでも広がっていた。茜色の夕焼けもみな・・・遠い昔のことであるのに、鮮やかな色とともに甦ってくる。何もかもが幻のようであったが、本当に起こったことであった。

ミシェル・ドゥ・アルディの実子としてルイが認知されたこと、彼には第2子が誕生したこと

も知っていた。そして、ルイ・ドウ・アルディは忙しく世界を巡っていることも・・・

あの時のヒカル・クロスの泣き顔が思い起こされた。彼女は今、どうしているのだろうか。彼女の滑らかな頬を流れる涙雫に・・・彼は気がついたのだろうか。

血縁でなくても、呼び合う繋がりがある。それは一般的には、愛という。

男女の情愛だけではなく、それ以上に・・・彼らはもっと深いところで、繋がっているような気がしてならなかった。

ああ、もう、どれくらい長い時間を過ごしてきたのだろう。記憶は年月が経れば鮮やかになり、決して・・・自分の望みのとおりに美化されることもなく存在することができると思自身の脳のある分野で証明できたことが何となく嬉しかった。

あの時の記憶はそのままに残っているけれども・・・やがて薄れて消えてしまうこともなく、ただ、私の奥底に眠っているだけで、こうして光や温度や空気を感じることによって刺激され、眠りから目を覚ますのだと知った。

彼の記憶はもっと鮮明で、もっと細かくて写真のように客観的かつ直感的であるのに・・・きっと、ヒカルに関してだけはそうではなかったのだろう。

彼は・・・自分自身が人でなくなる瞬間を怖れていたように思う。

それをヒカルによって繋ぎ止められていると感じるのであれば。

暁霧のような瞬間であった。本当に短い時間であったのに、私のそれからを変えてしまった。夢ではなく、確実に私の中に根を下ろしたものがあり、そしてそれを誰かに託すことを知り、私は今に至る。

病気をして、命と祈りについて考えることがあったからなのかもしれない。人が生きていく上で、何も波風が立たない日々というのにはあり得ないことで・・・そんな一瞬の霧に包まれてなお、人は模索し続けるのだと知った。

それは、あの若いふたりと・・・白金の髪の麗人によるところが大きかった。

忘れていたはずなのに、思い出さないで久しい年月が経過しているはずなのに・・・こうしてまた、空を見て杜を見て・・・空気を吸うと、目の前で再現される風景があった。

・・・私はここで、私の割り当てを考える。

Quotaという言葉がある。役割とか・・・割り当てるという意味だ。

・・・ミシェル・ドウ・アルディは私に割り当てたのだ。

彼と彼女の暁の霧の中で・・・微動だにせず路を指し示す灯台のような役割を私に与えたのだろう。

そして彼はその褒美として、qualisを私に与えた。

ラテン語で資格を意味する。私には・・・彼らの一瞬に触れる資格があるのだと、采配された

のだ。思いやりなどではない。ただ・・・彼らの何かに必要であったから私が遣わされた。職務に背いて、彼女に彼を救って欲しいと言ってしまった。でも、それが・・・本当は、元々想定されていたものだとしたら。

彼女がいつもひとりで・・・あの棟にやって来ることも、仕組まれたことであったとしたら。

私は強くうねる黒い髪を掻き上げた。

この髪と、瞳が・・・懐かしい友人を思い出す、とシャルル・ドウ・アルディは私に言った。性別も年齢も国籍も関係ない、とシャルルは嗤った。

それで私が採用されたようなものであった。

そして、ルイ・ドウ・アルディはシャルルであったとしても・・・私の姿を見ても、懐かしい人を思い出さなかった。そこに、記憶がないからだ。だから、彼はシャルルではないのだと・・・教えたかったのかもしれない。

そして、そんな私が彼の傍らにいて、ルイは何か気付いてくれれば良いのにとこの配慮であると同時に、ヒカル・クロスの信頼を得るに足りる容姿であったわけだ。

彼女も、幼い時の記憶しか無いと聞いている。でも、懐かしいと思ったのだろう。私にだけは・・・何かを感じてくれたようであった。

彼女とよく似た、うねりのある髪を見て・・・ルイは何を思ったのだろうか。

今になって尋ねることではなかった。そして、私は過去の繋がりを元に、彼らに再会するつもりもなかった。

それで良いのだ。私は・・・私の人生を生きている。同じ様に、彼らも彼らの人生を生きて・・・生き抜いているのだから。

生命には限りがある。そしてその限りや区切りを撤廃してしまうような秘めた可能性を持つ娘がもたらした、この世界の光明は・・・今、願ったとおりに・・・願った先に向かおうとしている。限られた者だけが享受できる恩恵ではなく、誰もが低額で治療を受けることが出来、順番を待つこともなく診断を受けられる世界。メディカル・サイバーの世界が行き渡った結果で・・・それはルイ・ドウ・アルディの尽力が大きかった。

私は・・・少しでも、彼らの何かに、触れることが出来て嬉しかった。それだけだ。誰かの役に立てた、という気持ちではない。

それはおこがましい。

でも。

私の命が、誰かの命に触れたのだと思うと、くすぐったいような気持ちになる。

あの時。

自分の立場や身分やそれらを越えて、声が出てしまった。

後にも先にもそれっきりのことであるが、私は・・・私の中の心の声を、ヒカルによって引き出

されたような気がしたのだ。彼女は実に不思議な人であった。

誰にも近寄らせないのに、ああして私の心を短時間で読み取ってしまったのだから。

・・・私ができるのはそこまでで、その先については・・・彼らの決めるところであった。

私はqという側にしか存在しない。

でも・・・あの暁霧と一緒に見たから。彼らの深い霧は、晴れ渡ったのだろうか。

そんなことを考えながら、空を眺めていたら。

突然・・・腿と腰に衝撃を感じたので、私は前にのめりそうになった体を反射的に支えた。

あっという声が聞こえて、私の足に小さな細い腕がからまった。

勢いよく突進してきたので、速度を払い落とすことが出来ずに、私の足にしがみついた小さな存在があった。

「ご、ごめんなさい」

幼い声が後ろから聞こえて来て・・・そして私は振り返り、微笑みを落とそうとして・・・息を呑んだ。

こどもの予防接種のボランティアで来ていることをその時になって、思い出した。

この日を限定として、棟内に設けられたプレイルームでの嬌声が聞こえて来るようであった。

ここは、昔は・・・限られた人間しか入れなかった。IDチップシールを貼付した者だけが入ることが出来た。そして皆は白衣を着て、静かに・・・無言で行き交う場所ではしかなかった。

しかし、あの時より杜の緑は濃くなり、棟は幾度か改築されて、私の記憶と少し違う景色を広げていた。

ガラス張りの、陽光をふんだんに受け入れることのできる場所で、こども達が遊びに興じている姿が遠くに見えた。

予防接種や健康診断など医療にかかわる場所というものは、本能的に怖れるものであったが彼らは皆、ここに来て危害を加えられることは無いと信じているようだった。そして、古い家柄のアルディ家の者であるから、大人しく座って人形のように順番を待っているのかと思えばそうではなく、本当に普通のこども達と同じように、用意されたたくさんの道具や絵本やスケッチブックを手に、各々が各々の好みに没頭していた。

・・・まったく普通のこども達の光景であった。

・・・けれども。

今、目の前に居る子は・・・驚くほど、ルイ・ドゥ・アルディに・・・に似ていた。

知性の高そうな青と灰の瞳に、金の髪に・・・こどもであるのに整った顔立ちも、見上げる視

線も・・・皆、ルイによく似ていた。ひとつ違うのは、彼がこどもであることと、金の髪は強い巻き毛であったことだ。

次に、彼は・・・とてもこどもらしい所作を持っていた。

若いのに老成してしまっていた彼とは違っていた。

「・・・ひとりなのですか？皆は？」

私はこの場の沈黙を破って、掠れた声でそう尋ねた。

ルイの親族であることは間違いなかった。今、思い出していたとは言えずに、私はごく一般的な言葉を投げかけた。

「・・・スケッチをしようと思って」

彼はそう言った。彼、と呼ぶには幼すぎた。声も高く、髪もこども特有の柔らかさがあるのでぶつかった衝撃で乱れてしまっていた。でも、間違いはない。体に押し当てるようにして抱えていたスケッチブックを落とすまいと、ぎゅっと抱きしめている彼に、私は言った。

「・・・この緑は、最高だよ」

「そのようですね」

受け答えに、ルイを感じ・・・私は、彼の胸に輝くゲスト・プレートに眼を遣った。

そこには、確かにアルディ家の者であることを示す名前が刻まれていた。

「ママか、パパは？」

保護者はどこにいるのか、と尋ねようと思っての言葉であったけれども、彼はそう理解しなかったらしい。聡い子であるようだが、彼はこどもであった。・・・それが私をますます、嬉しくさせる。彼にもこんな幼少期があったのだろうと思いたかったし、目の前にいる少年を見て、ルイがどこかで・・・懐かしそうに眼を細めて見ることがあれば良いのに、と思ったからだ。

その言葉に、彼が顔を輝かせて・・・私を見上げた。

逆光で私は光を背にしていたので、彼は眩しそうに私を見た。

その姿は・・・とても・・・あの白金の髪の麗人と似ていたし、ルイにも似ていた。誰の血縁者かという問いは必要ではなかった。この子は、アルディ家の未来であり希望であり・・・あれほど多くのこどもが、あそこで微笑みを降り注いでいるのだ。

彼は、私を目が合うと、櫻色の唇を少し開いたままで私の顔をしばらくじっと見つめていた。何かに驚いたらしい。

そして、彼はスケッチブックを抱えたまま・・・私を見上げた。

彼は、私の顔をまじまじと見つめながら、言った。踵を上げて、私の顔に少しでも近付こうとしているようだった。

「・・・ぼくの家には肖像画があって、永遠の暁という意味の、ヒカルという人の若いころの姿を残した画がたくさん残っています。

あなたは、僕の家で肖像画の人に似ています。ヒカルと、ヒカルの両親の肖像画です」

その時。彼が言い終わるか終わらないかの瞬間のことだった。

私と・・・彼の間に強い風が吹いた。こどもが驚く声がして、風に驚いた彼は、スケッチブックを取り落としてしまった。

地面に落ちる画材が派手に音を立てた。

彼はそれに狼狽して、しゃがみ込むと・・・土に汚れたスケッチブックを取り上げて、残念そうに歎きの声を上げた。

「そう。でも私は・・・ヒカル・クロスの縁者ではないのです」

「あなたは、どうしてヒカルの旧姓を知っているのですか」

彼が驚いて顔を上げたので、私は微笑んだ。

「さあ。どうしてだろう・・・その絵を描いた人に、聞いてみてください」

「あなたは、これを描いた人を知っているのですか」

私は頷いた。その絵を描いた人の名前には見当がついていた。

あの暁霧の中に・・・居た人だ。

「知っているとも言えるし、知らないとも言えます」

「まるで、暁霧のようなこたえですね」

その言葉に、私はぎょっとした。今度はこちらが驚く番であった。

彼がアルディ家のこどもであることは、名札からもわかるし、その顔立ちからもわかっていた。けれども・・・この言葉は、誰にも教えたことがない。これほどの幼いこどもが使いこなす言葉とも思えなかった。

彼は言った。私の怪訝な顔を見て、説明が足りないと判断したようだ。

これほど聡いのも・・・この子が、アルディ家の血筋の者であるからなのだと思った。それなりの教育を受けて、今に至っているのだろう。

「我が家に伝わる言い方です。

『その人によって・・・こたえが違い、正義が違い、そして問いすら違う。だからこそ、手を伸ばし続けるのが人間だ。たとえどんなに見えなくても、暁の霧は必ず晴れる。だから、霧の中にあると信じるものに手を伸ばせ・・・』

・・・ああ、忘れられないのは血なのでしょうか。ぼくは、この言葉が大好きで・・・いつも心に置いておくようにしています」

「座右の銘というものです」

「そうですね。・・・ぼくの他にも、幾人も好きだと言う者が居るので、あまりこれを口に出しません」

誇り高さも、アルディ家の者特有であると苦笑が混じる。

私は歡びが込み上げて来た。

どうして、忘れていたことが出来たのだろう。

ああ・・・ここに・・・ここにも・・・命も言葉も・・・祈りも伝わっているではないか。

私は、そっと言った。

伝わらなくても良かった。でも、言いたかった。

「あなたの、思うままに映る風景を、残せば良いのですよ。・・・そして、それをいつまでも、問い続けてください。・・・生きるということについて、ヒカルという女性が問い続けた先に、あなた達がいるのですから」

私の言葉は拙くて、説明も足りなくて、よくわからなかったかもしれない。

けれども、金の髪 of 巻き毛の少年は・・・私を暫く眺めていたけれども、やがてにっこりと微笑んだ。素晴らしく透き通った青灰色の瞳で、私を見た。

「ぼくの好きな言葉のひとつに加えることにします」

「光栄です」

私はそれだけを言うと、彼に会釈をして背中を向けた。・・・彼も、元居た場所に戻る気になつたらしい。スケッチに足る場所を求めて彷徨っていたようであったが、ひとり遠く離れてはいけないという、この棟でゲストとして入る時のルールを思い出したようだ。

こどもの拙い走り音が遠のいていくのを感じながら・・・私は、吐息を空に還した。

あなた達も、この空を見ているのでしょうか。

私は・・・久々に、暁霧の中で悩み問答を続けた彼らのことを思い浮かべた。

あなた達の思いは、残っています。確実に、他の命に繋がっています。

・・・私はそう囁いた。

あの時のヒカルの涙も。ルイの哀しみも。・・・ミシエルの苦悩も、すべて・・・蒼い空と深い杜と・・・そして霧のようでありながらまったく違う白い雲の向こう側に行ってしまったような気がした。

私の秘めたる想いは・・・ようやく、還っていくことが出来そうだった。

どこに、という場所は指定されないけれども。

漂っているだけかもしれないけれども。

私の暁霧は・・・ようやく晴れていくのだ。

そう思うと、見上げた空から見える柔らかな日差しが・・・とても眩しく思えた。
永遠の暁という名前のヒカルのような、優しくあたたかくて・・・そして少し切ない光を、目を細めながら、しばらくの間、眺めているばかりであった。

(FIN)

R-side

▼秘するが花02 邂逅編 番外編です。

この作品を、ご来訪いただき、コメントいただき、
応援して下さった皆様に捧げます

シャルルと一時の情事を愉しむという設定の、ほんの数話しか出てこなかった「彼女」
について書くことになりました。

君の名付け親は、古典を嗜む人のようだね

初めて名前を名乗ったとき、シャルル・ドウ・アルディはそう言った。

ブルガリア人とドイツ人とオーストリア人とインド人の血が混じるアメリカ人の父を持ち、
日本人と韓国人のハーフである母を持つ、国籍不明の外見を持つ彼女は、何千回も何万回も「あなたは何人なの？」と民族を聞か
れることに、少々うんざりしていた時だった。

特色は東洋人の血が、色濃く出ている。
容貌は欧州人のそれだった。
だが、その髪と瞳の色を黒くすれば、母親にそっくりだ、言われるようになった。
茶色い髪なのに質感は東洋人のそれで、茶色い瞳。
膝から下が長い。その抜群のモデル体型は、堅苦しいスーツに身を包んでもよくわかる。
象牙色の肌。腰近くにまで伸ばしたストレートを後ろで束ねただけの地味な髪型であるはずなのに、彼女の整った顔立ちを強調し
、かつ、見る人は誰もが一度は彼女の顔に体に見惚れるのであった。

マナ という名前について述べているのだということに、気がつくのに、少し時間がかかった。

「ありがとう、Monsieur。」
彼女はよそ行きの笑みで微笑んだ。

シャルル・ドウ・アルディ。
学会に久しく名を連ねる永年名誉会員。
彼が、学会に論文を寄稿する都度、会誌は飛ぶように売れ、問い合わせが殺到し、来日でもしようものなら大変だ。
会場には彼の論文結果をその口から聞きたがる者で満員となるのが常だった。

最初、彼女はもう永年名誉会員というから、どれほど年老いた象牙の塔の主なのかと置いていたら。

彼は、若かった。まだ、青年だった。
プロフィールはよく知っている。
元貴族であり、現在はパリに在住。研究所で、たくさんの分野に関する執筆・実験論文を報告し、臨床試験薬の調査も請け負う。
その一方でフェンシングの名手でもあり、ダーツやチェスの世界でも、その名が知られている。
フランスの華。
いつか、時が来たら、彼は大統領にさえ「片手間」でなってしまうかもしれない。

彼女をひどく驚かせたのは、その美しい風貌よりもむしろ、流暢に日本語を話す語学の才だった。
親日家で知られるシャルル・ドウ・アルディであるが、通訳もつけずにこれほどまでに完璧に日本語を使い、必要があればドイツ
語も英語も話す。

プラチナ・ブロンドの髪は、長めである。
秀でた額、完璧なカーブを持つ頬。
少年時代はさぞかし少女と見まごうような、涼やかな目元だったに違いない、蒼いけれど灰色がかった瞳。
上質のスーツを身にまとい、縞子織りのタイを締めている。
ビジネス・スタイルであるにもかかわらず、彼の物腰は優雅で、「ちょっと休暇に」と言ってもおかしくないくらい、リラックス
している。

その場にいた誰もが、彼に魅入られていた。
ここは、学会の準備控え室を兼ねた打合せ会場で、あと数十分後に始まる彼の講演が始まる。
準備控え室前の廊下を走るスタッフの足音が聞こえるくらい、誰が喋ることをやめてしまう。
分刻みの空間の中が、ほお、という感嘆の吐息で溢れた。

長い指が、とんとん、と机を叩いた。

「それで、はじめようか」
そう言ったとき、彼が少し苛立っていることに気がついた。

彼女が動き出すのが、一番早かった。
「本日のスケジュール、時間配分、カメラとマイクの位置、同時通訳メンバーのリストです」
シャルルは、ほお、とそのとき、もう一度彼女を見た。
「名札を良く見せてくれ」
彼が、そう言って、ちらりと顔写真の入ったIDを見た次のセリフが、それだった。

それが、彼と長いけれど短いつきあいとなるきっかけだった。

「あなたにとって、こういうことは何ていう言葉に置き換えるのかしら」
ベッドで、シャルルは気だるげに、慣れた手つきで煙草に火をつけた。
「暇つぶし。」

「『スポーツ』って言うかと思ったわ」
彼女は小さく笑って言った。
長い髪をかき上げながら、身を起こす。
情事後のシャルルは、この上なく優しいか、この上なく冷たいかのどちらかだった。
今日は、前者らしい。
会話を好まないシャルルが珍しく答えてきた。
「勝ち負けというほどの勝負事じゃないだろ」
そうかしら。
情欲に負けて貪り合うこの行為を、無言だけれども激しく交合するこの時間を。
彼は、あえて「意味のないもの」と言い切ったわけだ。

コトが終わった後は、お互いにシャワーを浴び、無言で身支度をする。
次の約束はしない。
ただ、別れる際に、「久々に楽しい時間だったよ。じゃ。」と言って彼は額に軽く口づける。
目を合わせることなく。これが、次も逢っても良い程度には満足したよという採点結果なのだ。
常に及第点でなければ、彼は二度と会おうとしないだろう。
ベッドから抜け出たその時から、彼の頭の中は、別のことで一杯になるのだ。

定期試験を受けるときより、苦勞するわ。
彼女は苦笑した。

彼とこうして情事を重ねるのは、年に何回か、だ。
彼はほとんど日本に来ない。以前は、親日家らしく、だいぶ頻繁に来日していたらしいが。
今は、インターネットの普及やテレビ会議システムなどの通信網の充実で、来日せずとも、各国と会議することが可能になった。
だから、もっぱら逢うのは彼女が仕事でパリに行くときだけだ。
そのときだけ、彼は、通訳も護衛もつけずに、ひとりで、ふらっと彼女の逗留先に現れる。
もちろんスケジュールが合わずに、逢わないで慌ただしく帰るときもある。そう言うときにはあえて、連絡しない。

お互いに、パートナーがいるとか、好きだとか、一般的に、誰もが行うコミュニケーションと情報共有は、一切行わなかった。

こういうルールもある。

彼女も、煙草を一本口にした。

今回は、シャルルが珍しく来日するという。
予定が書かれたテキストだけを貼り付けたメールが送られてきただけだった。
提携する姉妹学会主催のもののようなのだ。
スケジュールを見る限り、びっしりと予定が入っていて、このような時間を取ることもできないな、と想像していたら
シャルルから連絡があったのだ。時間が空いた、と。

「時間が空いたから逢いたい」とか「時間が空いたから、部屋に来ないか」と言わない。
「行くわ」
彼女の返事を待ってから、部屋番号を言って、彼は電話を切った。

通された部屋はシャルルの宿泊先であるロイヤルスイートだった。
ゲストルームとメインルームがあり、それらを繋ぐリビングで、ティーを愉しんでいたようだ。
ガラスのテーブルの上には、何本かの煙草の吸い殻と、無造作に置かれた資料の束と、
脱ぎ捨てたスーツの上着があった。
「講演、聞いたわよ」
彼女は持っていたブリーフケースから、ちらりと論文集を取り出した。
論文集を持っている者は、事前送付された会員であることを示し、それを見せればフリーパスで会場に入れる。
彼女にももちろん、事前に送られてきていた。
そうして「私も煙草とティーをいただくわ」
と言って、ソファに座る。煙草を一本、口にした。
今日の口紅は、ブルータイプでないので、口紅が吸い口についた。
夜のレセプションでは、グラスに口紅がつくような無粋なディナーは避けなければならない。

と。
テーブルの上の論文集に、目があった。
メモが載っている。
日本語を母国語とする彼女のことを
シャルル・ドゥ・アルディはよく知らなかった。

「マリナへ この論文集を持って入場するように シャルル」
走り書きのメモだった。
シャルルの愛用するモンブランのブラウンブラックのインクで書かれたものに間違いはない。
何度となく論文集の書名で見かけた筆跡だった。

それで、ありとあらゆることが、ひとつに繋がった。
いわゆる「察した」という状態だった。

彼が直筆でメモやメッセージを残すことは、ほとんどない。
メモを取ることも必要としないし、メッセージを残す仕事を業務としている者が、きちんと控えている。
つまり、これは私信であり、「マリナ」という人物に、彼が届くかどうか分からないまま、宛てた手紙なのだ。
そしてその文面から推測できるあらゆる可能性から、断言できることはたくさんあった。
彼女の脳細胞が活性化されて、瞬時に様々にシミュレートし始める。

日本語で書かれているから、彼女は日本人女性だろう。
シャルル・ドゥ・アルディのフルネームを書かずにいるので、相当親しい間柄だ。
だが、彼は彼女が来るかどうか分からないらしい。
マリナという人物が彼との約束を取り付けているのであれば、最初から会場入り口に渡しておけば良かったはずだ。
そして、シャルルは、そんな不確定要素の発生を認めない。
となると、このマリナという女性は、彼の、特別な存在なのであろう。

待たずには居られないし、逢うための手配を欠かさない。
でも、彼女には連絡ができないので、来るかどうか分からない。

そして、彼の講演が終わった今も、ここにメモがあるということは、彼女は来なかったということなのだ。

なんてこと。

彼女は、ふうと息をひとつ、ついた。
ため息が出るほど、完璧な動作だった。

シャルルが、恋をしている。

まったく気がつかなかったわけではない。
顎を少しあげて、紫煙を空中に散らす。
摂取したニコチンが頭の神経細胞を冴え渡らせると同時に、胸の疼きをごまかした。

彼女を抱くとき、彼は時折小さく「マリナ」と言うことがあった。
陶酔の絶頂にありながら、何度かその言葉を聞くたびに、発音が間違っただろうと思っていた。いや、彼が誰の名を呼ぼうと、全く関心がなかったのだ。今、この瞬間まで。

マナ、と「マリナ」、ね。

容姿は日本人のそれに近いが、ほとんど外国人である彼女にはわからないと思ったのだろうか。

知能指数が高く、恵まれた容姿と恵まれた環境に生まれた彼は、きっと、「そういう」ことに気を払う必要性を感じてなかったに違いない。
自分が恋をしていることを、彼は気がついているのだろうか。

気がつかないわけではないだろう。

彼女をこうして彼の腕の中に抱くときは、きっと、そのマリナを思い出しているに違いない。それは、間違いなかった。

いつだったか、その長い髪が好きだと、口づけてくれたことがあった。
今更ながら思い当たる。

「長い」髪が好きなのではなく、東洋人のような自分の容姿が好きだったのだと。
自分の名前が、想い恋い焦がれる相手に似通っているから。
日本とフランスを往復し、彼がどんなに逢いたいと願っても、その権力を行使してまでは逢うことの叶わない、日本の住人と同じ空に住んでいるから。

彼女が驚いたことは、いくつかあった。

まず、シャルルについて。
想い人がいたこと。
そして、どうも片思いであるようだということ。

次に、自分について。
この奇妙な発見というか驚きという感情が、とても湿気が少ないというか、
粘着要素を持たない、さばさばとしたものであったということ。

何度も肌を合わせていれば、自然に愛着というか憐憫というか、執着が沸くかと思っていたのに。

今、シャルルに手を取られ、ベッドルームに移動し、時間があまりないんだ、という彼の首に腕を回しているのに。
こうして抱交しているのに、彼女の頭の中はひどく冴えている。
シャルルの典麗な愛撫が、愛おしく思えてきた。
ひとつひとつの仕草を、彼女に捧げているのだ。少なくとも、彼女を「マリナ」と呼ぶその瞬間だけは。

初めて彼女は彼を「いじらしい」と思った。

マナという名前は母がつけた。
本当は「真名」という。
真名文字、仮名文字の真名から取ったそうだ。
「たくさんの国が交じったミラクル・ガールだけど、どうかその国の文字を愛して欲しい」という意味が込められていると、小さい頃から何度も聞かされた。
幼いときは、容姿が違う彼女をつまはじきにする者はたくさんいた。大人も、子供も。
異質な者には容赦がない。
長じるにつれて、彼女が美しい、ということをみんなが認め始めたとき、彼女を排除しようとした人々は、こぞって彼女の興味を得ることに夢中になった。

シャルルは当然にパートナーではない。
決まったパートナーは持たない。
彼女は、今でも、今になっても、気まぐれに恋愛めいたゲームを楽しむ。
火遊びを楽しみ、相手を自分の足下にひれ伏させて勝利を味わって、そして、捨てる。
情報共有100パーセントでないと信用できない間柄は、いらぬ。

いつだったか、何かの話のついでにシャルルにそう言ったことがあった。
「そういう享乐的なところ、悪くないね」
シャルルは皮肉めいたように、そう面白そうに言った。

批判も賛成もしない人。

その返答が心地よくて、今まで関係を続けていた。
もちろん、彼と一緒に味わう蜜の味はこの上なく甘美であることは間違いがなかったが。

「今日は、いつにもまして、心ここにあらず、ね」

終わった後、彼女はそう言った。シャルルは答えなかった。
身支度をして、いつものように彼女は帰り支度をした。
でも、これが本当に「いつもの」帰り道になるかどうかは、わからなかった。

「久々に楽しかったよ。」彼はそういうと、「いつも」のとおり、ベッドに腰かけたまま、彼女が部屋から出て行くのを見ていた。
視線はこちらにあったが、どこか遠くを見ているかのようだった。

ルールに踏み込むつもりはなかった。
いずれ、別れが訪れることを常に想定している。
でも、彼とは何らかの形でまた一緒に仕事をするかもしれないし、距離を置いた関係のままでもいるつもりだ。

パタン。

扉を閉めると、何か、急にからだが軽くなった。
彼が待つのは、私ではない他の女性だ。

シャルルに対して何の感情もわからないかということそうでもない。
むしろ、何度も逢うということ自体、彼女にとっては珍しいことだった。

パートナーとしては申し分ないだろう。
でも、唯一人の相手にはならないし、自分も唯一の人と定めることができるかどうか不確定だった。

不確定要素は、ありえない。
太陽が西から昇っても、彼が間違えることは、ないのだ。

シャルル・ドゥ・アルディならきっと、そういうはず。

シャルルは同志、だ。

問わず問われず、ただ、お互いの肌の温度のみを感じる時間だけは、自分が「違う」ということを忘れていられた。
人と違い、傷つき、そして捨てられるのであれば、前に捨ててしまおう。
シャルルと私。
違うのは、愛を求めるのを辞めてしまったかどうかということ。

シャルル。

私の仲間。
傷つけることが怖くて、脆いから、お互いに触れないようにしていた。
その中心まで飛び込まなかった。
私と同じ、かわいそうな人

部屋の廊下を歩きながら、髪の毛をなでつける。
情事後、という痕跡を残してはいけない。
これから自分は仕事に戻り、極上の笑顔で、夜の招かれたレセプションで招待主と満足させるような機知に富んだ会話を作り出すために、今日の論文集のポイントを再確認しておかねばならない。

なぜだか、足が軽かった。

次に逢うときは、彼に抱きついて、そして「またね、シャルル。」と言うのだ。

今までは、誰に見られているかわからないという理由で、部屋の外ではその気配さえ見せることはしなかったけれど。

彼女から、抱擁を求めることは、かつて誰にもしなかったけれど。

次に。外で彼に会ったら。

その幼気な恋心を隠す、彼に微笑んでみよう。

(FIN)

R-side あからめ

あからめ：目をふと脇にそらすこと

私が再びシャルル・ドゥ・アルディその人を見たのは、久しぶりのことであった。最後に会ってから、それほど時間が経過していないと思ったが、記憶の底に沈めていた時間の記録を呼び起こすと、相当月数が経過していることを知って、私は眉を少し上げた。彼は少し髪が伸びて、そして以前とかなり雰囲気が変わっていたので、最初は見間違いかと思ったくらいだ。しかし、それはないと私は結論を導いた。あのフランスの華と・・・誰かを、見間違えることは決してあり得ないのに。どんなに遠くからでも、彼の存在は煌めいて際立っており、周囲の空気が彼を中心として、あっという間に変化していく。それで居て、シャルルは決して・・・それに対して尊大であることはなく、いつも「退屈だ」と言って、その周囲の眼差しを煩わしいとさえ思っていた。それが、私の知っているシャルル・ドゥ・アルディだった。

でも、彼は唯一、私の・・・いや、皆の知っているシャルル・ドゥ・アルディでなかった時があった。私と一緒に居ても、私以外の女と居ても、彼はそういう感情をむき出しにすることはないだろうと思っていたし、実際にそうであったのに。この都内のとあるホテルに滞在していた彼が、長年待ち焦がれた相手と再会を果たした時・・・。私はそのときの記憶を呼び起こした。映像による記憶方法というのは、扱いが難しいが自在に使いこなすことが出来るようになると、自分の脳でさえ、便利なツールのように思えてくる。小さな、若く見えるというよりはむしろ幼く見える日本人女性に向かって、彼は猛進して行った。周囲を見渡すこともなく、ただ一直線に。彼は周囲を気にすることもなく彼女を抱き上げてそしてその髪に顔を埋めた。その少し前まで・・・私と一緒に居たことも忘れて、彼は真っ先に彼女に向かって行った。それが、彼の愛なのだ・・・本当の彼の愛し方なのだ、と目の当たりにして、私は非常に嬉しかったことを思い出した。無機質で無感動で、人間嫌いの偏屈な若き帝王は、本当は・・・たったひとりの人の愛を渴望し、たとえ成就しなかったとしても、その愛を貰ったことを誇りに生きている孤独で誇り高い人なのだとして、嬉しかったのだ。彼にも滾る情熱がまだ残っていることを、あの茶色の髪の日本人は彼に教えたのだ。

その日は、私は次のアポイントのために移動中だった。時間には十分余裕があったが私はいつも約束の時間のかかり前にその場に到着するように自らの予定を設定している。私の仕事は自分の予定の調整ではなく、誰かの予定を調整することであり、特に、時間にルーズな学者達のスケジュールを調整して、学会開催までこぎ着けることが主たる業務であった。今回のクライアントは相当に気難しいと聞いていたが、時間に正確な日本人であると聞いて、いつもより早めにその場に到着するように地下鉄での移動を選択した。東京の中心部は、車を走らせるより、電車を利用した方が確実な時間を設定できる。周囲はひとり、ブリーフケースを抱えながら、次の目的地まで歩みを止めることなく前を向いて先を急いだ。周囲は雑居ビルが建ち並び、等間隔に大きな道路が直角に交わる、人工の街の波を泳いだ。補正された道路は白を基調とする部分が多く、照り返しがきつい。私は目を細めて、季節に合わないサングラスを持ってくれば良かったとほんの僅かに公開しているときのことだった。そんな私の険しい顔に、すれ違う者はぎょっとして私を見上げていく。私はこの国の人達とほとんど同じ容姿でありながら、決定的にいろいろなことが違っているので、異質に見えるのかも知れない。この年齢の者の平均身長よりずっと上回る体躯だし、髪の毛は茶色で瞳も焦げ茶色で、顔立ちも東洋人のそれではあるが、一目でこの国の者ではないとわかる。無遠慮な者は、すれ違う私の姿を眺め回し、歩みを緩めたりして私を鑑賞する。まるで動物園の飼育員に見られた野獣を見るかのような目つきで。都内では外国人を見るのは珍しいことではないはずなのに、どういうわけかこの国の人々は、自分たちと違う者を見分けることが得意のようである。あの茶色の髪の日本人女性は、彼をそんな奇異な目で見たりすることはないのだろう。そして、外国籍の者、という偏見もこだわりも先入観もないからこそ・・・フランスの華と呼ばれる要人であるシャルル・ドゥ・アルディが、結婚もしないでひとり独身を貫いているのは、あの人が大きく影響しているのだと思った。私はため息を漏らした。新奇の眼差しには慣れている。でも、疲れる。多国とは違い、ここは治安が良い。だから、こんな風に単身で歩いていても安心安全なのだ理解している。本当に良い国だと思う。同時に、幸せであることを実感できない不幸な国だとも思うが。仕事柄、様々な国を見てきたが、これほどまでに万人が保護されて同等の権利を与えられている国も珍しい。たくさんの方の識者や学者や技術者を見てきたが、この国の者たちには渴望心が欠けているような気がしてならない。維持することを最優先とする。これほどまでに、優れた技術を持つ者が溢れ、才があればどんな願いも夢も叶う幻のような魔法の国であるのに。

そのときの私は、少し苛立っていたのかもしれない。煙草が吸いたくなって、私は時間に余裕があることを確認した上で、足先の方向を変更して、通りがかった路地に入り込んだ。この地区は公共スペースは喫煙禁止であったが、私有地はそうではない。私は、更地になった工事現場に入り込んだ。立ち入りができないようにフェンスを張り巡らせてあるが、今は全体休憩の時間らしい。こういった工事の土地には、作業者の便宜を優先して、喫煙スペースが設けられていることが多かった。貼り付けられた工程表を見上げると、間もなく、地盤から整備する大がかりな工事が始まるらしい。見れば、正面の空き地も工事中だった。

この国は土木建築がよほど好きらしい。

私はその場にすりと静かに入り込んで・・・簡易喫煙所を探り当てた。
誰も居ないことを確認してから、ぼんやりとフェンス越しに、土を掘り起こされて荒れた土面の広がる空間を見つめた。
表面は乾燥しているのに、地中は相当湿っているこの地域の特徴が良く現れている土だった。
黒々とした水気を含んだ土が盛り上げられていて、私はそれを眺めながら口元に煙草を寄せて、持っていたライターで火をつけた。
細身のメンソールしか持ち合わせがなかった。
こういう職業では、喫煙者であることが知られるとあまり良い顔はされない。
飲酒も喫煙も趣味嗜好だと思っただが。
私は大きく息を吸った。
青い空が眩しくて・・・本当にサングラスを持ち運べば良かったと後悔していた。

正面の場所は、どうも、公共の場所であったようだ。
小学校だろうか。
この国の学制は恵まれていると思う。
教育を受けなければならない義務。
義務で、教育が受けられる。
素晴らしい。
苦笑いを浮かべた。

誰かに見とがめられればすぐ出て行くつもりだったので、入り口の付近で私は片腕に肩肘を乗せて、ハイヒールの先が土に沈むのを気にしながら、煙草を勢よく吸った。

だから、彼の姿が視界に入っても、すぐにシャルル・ドゥ・アルディだと認識できなかった。

フェンス越しに・・・私の目の前を、音もなく通りかかった、この国の者ではない長身の白金の髪に、見覚えがあった。
この奇妙な巡り合わせをなんと言えはいいのだろうか。
私は息を止めた。
目を見開いた。
相手に、私の気配を気取られないように、察知されないように、動作を制止した。
私の中の何かが・・・彼にはもう触れることを赦さなかった。
彼の背中に頬を寄せたこともあったのに。それでも振り返らなかった男性は、私のよく知る潔さという羽を背中に広げて、足早に歩いているところだった。
神経質そうな、細く長い指先には、学会の会誌が挟まっていた。
見覚えのある表紙色であり、それはある特定の学会の会誌専用に使された着色であった。
特殊染料で染め上げているので、その会誌を持っているだけで入場権利を持つ。
シャルルはその学会の永年名誉会員だった。

そうだった。
頭の中のスケジュール日程をめぐって合点がいった。
あの時期からまた、同じ季節が巡ってきたのだ。そして、彼はまた日本に学会でやって来ている。そして、いつも日本にやってくる時には治安の良さを主張して、誰も供の者をつけない。ひとりで・・・こうして自由に闊歩できる時間も余裕も、フランスに戻らばないのだろう。彼が唯一息抜きできるのは、この国での短い滞在時間だけなのかもしれない。
その合間に、私は彼との逢瀬を貪り、愉しみ、享楽を共有したこともあったが、それは今となっては昔のことだ。
お互いに、割り切っていた。
愛も恋もなかったけれど、それでも希なる人との時間や機知に富んだ会話が楽しかった。
長い期間を共有することができたことについて理由を挙げるのであれば、強いて言えば、同じ性質の魂であったから・・・私のことを、彼は呼び寄せるのだろうか、と思った。
それから、私の名前を、彼が気に入ったから。理由は単純だ。

私は奇妙な感覚から抜け出すために、浮沈していた思考の波間から急いで顔を出して呼吸を始めた。

「・・・シャルル！待ってよ」
その声とその名前に聞き覚えがあった。

私は唇に煙草を啜えたまま・・・しばらく記憶の渦を彷徨うことになった。
他者から見れば、ほんの一瞬のことだったのかもしれないが。
私の瞳が焦点が合わなくなり、次に視線をあわてて戻した。
フェンス越しにどんどん遠ざかっていく、私のよく知っている背中を凝視した。
いや・・・私がかつてよく知っていた背中だった。

次に、目の前を、茶色の塊がぱっと横切った。
ものすごい勢いだったこともあつたらう。
小柄過ぎて私の視界に入り切らなかったのだと気がついた時には、その人物は、シャルルに突進して行った。

「ああ、マリナ、オレは忙しい」
懐かしい・・・よく響き渡る声の主がそう言って立ち止まった。
まるで、彼女が追いかけてくることを待っていたかのような声だった。
道路を横切る車のタイヤが、アスファルトと擦れて出す通過音の中でさえ、聞き分けることの出来る低い魅惑的な声が私の耳に届いた。
彼は少し嬉しそうだった。
それなのに、彼は正直に「追いかけてきてくれて嬉しい」とは言わない。
つんと澄まして、冷たく無表情に彼女にそう言った。
シャルル・ドゥ・アルディが振り返った。

・・・やはり、彼だった。
私は指先の煙草の灰が長く伸びていくことも気にせずに、そのまま様子を観察していた。

茶色の髪の方は、こちらに背中を向けていたので、顔がよくわからなかった。
しかし、あの時の人だと確信した。

彼女はシャルルの胸に飛び込んだ。突然立ち止まって振り返ったシャルルの胸に、勢い余って飛び込んだ、という描写が正しい。
しかし、彼はそれを計算しており、彼の広い胸に彼女が飛び込んで・・・そして、彼女に表情を見せまいとして胸の中にきつく抱き締める、その表情が何とも・・・何とも言い難いほど美しく、悲しく、そして何とも言いようがないほど切なかったので、私はしばしば彼の顔に見入ってしまっていた。

彼にあんな表情をさせる人。
彼の手を持っていた学会誌を路面に放り出させて、身体を受け止めることを優先させる行為をさせる人。
そんな人を、私は知らない。
あの人以外に、私は知らない。

彼女は腰にショート丈のカフェエプロンを巻いていた。
長時間の立ち仕事に向いている簡易靴を履いているが、その服装とそぐわないので、内履きなのだろう。髪の毛は無造作に束ねられて・・・赤い髪飾りで留められていた。
首には、入室用なのか、何かの身分提示なのか、ID証を入れたストラップを提げていた。
走っていたので、その面が、背中に回っていた。彼は、そのシリコンケースごと、彼女を抱き締めていた。
どう考えても、外出用の様子ではなかったから、どこか・・・この近くのビルで、何かを行っている最中のことであるらしいということまでわかった。

状況から類推するのは私の得意分野だ。
彼女はこの近くで勤務しているのだろう。そして、シャルルは学会の帰りらしい。しかし、学会というものは、開始から終了まで、時間が決まっており、今はどうしてその終了時刻ではない。
彼の所属する会は大きい。
大規模の催しであるから、もっと遅い時間まで拘束されているはずだ。
と、いうことは、終了予定時刻ではないから、彼は途中で抜け出して来たのだ。
そして、その姿を、あの人が追いかけている。どうも偶然見かけたのではなく・・・あの急ぎ具合を見ると・・・痴話げんかだろうか。
珍しい。シャルル・ドウ・アルディとあろう者が。

彼の予定はすべて現実となる。彼の行動には意味がある。
その喧嘩さえ・・・シャルルが、彼女に追いかけてきて欲しいから故にセッティングされたものであるのなら。

シャルルは相当、あの人を愛しているのだろうか、と思った。
あの人に心を許し、自分の心を解放しているのだろうか。

いつか、何かのゴシップ雑誌に、彼が「運命の人が居た」と言う表現から「運命の人が居る」と言い直し始めた、という記事が掲載されていたことを思い返していた。
それが、あの人なのだろうか。

治安が良いとはいえ、シャルルはフランスの要人だ。
それなのに、ひとり異国の路地を闊歩し・・・そして、この近辺で、おそらく働いているであろう、一般人の彼女の心を得るために、彼はこうしてこの路を歩くのだろうか。

すべての予定を繰り上げて。
すべての保守を退けて。

まるで少年のような無頓着と胸臆を行う様に、私は呆れて言葉を失っていた。

二言三言、互いに何か言葉を交わしていたが、彼が少し悪戯っぽく微笑んで、表情を和らげるのを見てまた驚いた。年相応の男性の表情をしていた。
茶色の髪に深いキスをひとつ、落としたが、彼女は彼の接吻を受けて慌てて身体を引きはがそうとしたが、シャルルはそれを赦さなかった。そのまま胸に抱いて、路に落としたままの学会誌を拾え、と指を向ける彼女を無視して、目を閉じ・・・彼女の額に唇を寄せた。彼には、冊子は単なる物体でしかない。彼女より大事なものはない。全身でそう言っているようだった。
彼女が追いかけることを、彼は待っていたのだ。
そしてそれは間違えることもなく立証された。

かつて・・・彼は、恋愛とは「死までの退屈しのぎ」だと言っていた。
それなのに、明らかに・・・駆け引きをし、戸惑い、心を隠すことをしていない。
これを恋愛と言わずして・・・なんと言うのだろうか。

しかも恋ではない。
彼は仮初めの恋をすることはあっても、あのような態度は取らない。

彼は・・・愛に堕ちて、それを十分に認識している。
人目も憚らず、がむしゃらに走る彼女が彼を見つめていることを、彼は試している。
そうしなければ彼の中の何かが・・・そう、何かが彼を鎮めることが出来ないのだということを、彼女も彼も、よく承知している。

そんな雰囲気だった。
二人のやり取りの詳細は聞こえてこなかった。
やがて、工事現場の作業開始を知らせるサイレンが周囲の騒音に鳴らない程度に響き渡り、人がどこからともなく溢れてきたので、私はその場所を移動せざるを得なくなってしまったからだ。
シャルルはそこでようやく彼女を彼の胸内から解放すると、ゆっくりと身体を傾けて、物憂げな青灰色の瞳を舗装路に投げ打たれた分厚い学会誌に目をやったが、彼女にそれを取るように指示をしたらしく、茶色の髪の方の人は、少し抗議したらしい。
彼は落ちたものを自ら拾い起こす教育は受けていない。
だから、彼女に指示したのだろう。
拾え、と指先が冊子に向いており、彼女がいくつか抗議らしい言葉を投げかけたが、彼の短い返答に反論できなかつたらしい。

諦めて、身を屈めたところを、彼女の腰を彼が腕を伸ばして掴み、さりげなく補助をしていた。
きっと・・・もし、彼女が転倒したら、彼は「落ちた品は拾わない」という主義を翻して、彼女を抱き起こすのだろう。
いや、彼のことだから、転倒前に真っ先にそうならないための方策を最優先で思考するのだろう。
そして必ず実施するはずだ。

彼女は気がついているのだろうか。
彼の優しい眼差しを。
時折見せる、激しい熱情の視線を。
そして・・・一緒に居ながらも完全には癒されない、と訴える、行き場のない彼の狂気を。
誰にも・・・誰にも心を開かないあのフランスの華が唯一の人として、彼女をずっと想っていた時間に、彼が何を思っていたのか、
彼女は知っているのだろうか。

ただ愛でるだけの間ではなさそうだった。
不思議な関係ではあるが、彼はそれだけ彼女に気を許しているのだろうと思うと、その場面すらほほえましかった。

シャルルが、悪戯っぽくまた、笑った。
闊達な微笑みで、彼はますます・・・少年のように見えた。

やがて、彼らは寄り添って・・・そして元来た道に戻ってきた。
私は気配を殺して・・・道路を横断して反対側の通路を歩き始めた二人を眺めていた。
大変に身長差のある二人であるが、小柄な彼女の歩みに合わせて、彼はゆっくりと長い足を動かしていた。
そのとき、あの茶色の髪の人々の横顔を初めて見た。
前回にすれ違った時と明らかに違う、愛されている者の横顔だった。
そして、あのシャルル・ドゥ・アルディも、同じ表情をしていた。
二人で前を向き・・・そして一緒に歩んでいる姿が彼らの未来を象徴しているかのようだった。
きっとどの国でも・・・彼はああして、彼女を庇護し、彼女は彼を見守り癒し、それでもなお心の奥底に燦る彼の狂乱を鎮めるため、二人で考え続けるのだろう。

彼が並んで歩くことも出来る人。
彼が歩みを止めて待つことが出来る人。
彼が・・・ついてくると信じて歩みを進めることが出来る人。
彼女はすべてを兼ね備えている。
彼との距離を時と場合に応じて変化させながら、彼女は彼と一緒に同じ方向を進むことを赦された、たった一人の運命の人なのだ。
。

私は煙草をもみ消して・・・奇異の眼差しで様子を窺っている周囲の者たちに、少しだけ微笑んだ。
「失礼。・・・お邪魔しました」
日本語が通じないと思っていたらしい。
私の言葉に、彼らは酷く驚いていたが、やがて何事もなかったかのように、持ち場に戻っていった。

元場に戻る。

・・・そうだ、私にも為すべきことがあった。

そこで、これが寄り道であり、フェンス越しに見せた幻ではないものの、二度とこのような偶然はないのだろう・・・と思った。
私は、舗装道路に戻り、進行方向を迷うことなく一定速度で、ハイヒールの靴音を高く鳴らしながら、立ち並ぶ雑居ビルをくぐり抜けていった。

歩きながら、携帯電話を取り出した。
久々に・・・誰かと過ごしたくなった。

街の喧騒が煩わしいと思ったのに・・・今は、なぜかそれが心地よかった。
私と反対方向を歩いて戻る彼らと距離が開く度に・・・私は寂しいと思うどころか、もっと遠くまで二人が行き着けますように、と祈った。
何も信じてない主義なのに。
彼らの愛は信じられる気がした。

空が、眩しいなと思った。
でもサングラスは必要ない、とも思った。
肉眼で見る蒼空は・・・都会の白っぽい青でさえ、美しい。
あのフランスの華の持つ、愛を知っている青の色と同じくらい、美しい。

(FIN)

BGM : I was born to love you

実物の彼女を見たのは、そのときが初めてだった。

これは恋にも愛著にも似た気持ちなのかも知れない。

いつ逢えるのだろうか。

いつ話せるのだろうか。

アルディ家のサンルームは、日も翳ろうとしていた。

温室から出て、中庭を横切り、近道をすることにした。

「予定では、今日あたりにマリナ・イケダ嬢が訪問するでしょう。」

彼の身の回りの世話をする、老紳士が朗らかに、そう告げてくれた。

ずっと待っていたことを、知られてしまったのだろうか。

きっとそわそわして、うろうろして、いかにも「待ち人来たらず」といった状態であっただろうから、

そういう情報をさりげなく流してくれることがありがたかった。

ありがとう、と小さく言うと、彼は笑った。

「セイジ様にそのように仰っていただけることが、何より喜ばしいことですよ」

そうだ。

温室の花を、彼女に届けよう。

シャルルの指示によって、邸内は、日本風の様々なものが急遽しつらえられた。

それでいて、あたかも今までそこにあったかのような、さりげなさという配慮も忘れていない。

彼女が立ち寄りそうなあらゆる部屋に飾られる生花は、毎日取り替えられていて、今日は芍薬だった。

花言葉は・・・「恥じらい」「はにかみ」「内気」「清浄」

そして、「生まれながらの素質」

少し考えてから、やはり花は芍薬がぴったりであると思い直した。

それなら、今、摘みたてのこの芍薬を、彼女のゲストルームに生けておこう。
あでやかに咲く翁咲きのそれは、きっと彼女のイメージに良く合うに違いない。

そう思いながら、その大きなガラス戸がはめ込まれたティールームを横切ったとき。
何か、そこにはない「色」が注意を引いた。

「色」ね。

今までそんなものに気を取られるコトなんて、なかったのに。
ここに来てはや数日。
今はそれと彼女の来訪のことばかりを考えている。

「それ」を見つけたとき。
正直、びっくりした。

正確には、
ぎくり、とした。

・・・！！彼女だ。

マリナ・イケダだ。
すぐにわかった。

最初は、茶色い藻がふわふわと浮いているかと思ったけれど。
ソファでうたた寝をしている。

柔らかい日が差し込むサンルームを兼ねたティールームで、彼女が、居た。
思ってもいない場所にいるものだから、暫くの間、その窓の向こう側から、彼女を観察するかの
ように凝視した。

茶色の髪。
日本人にしては色素が薄く、現代人にしてはかなり小柄な方だ。

化粧っ気のない、肌理の細かそうな象牙色の肌。

短く切りそろえられた丸い爪。

安心しきったかのように、眠りこけている。

眠っているので、目は大きいのか、瞳の色は何色なのか、どんな見つめ方をするのか、まだ、よくわからなかった。

ああ、この角度からじゃ、よく見えないな。

そう思い始めるともう、堪えることが出来なくなった。

彼女をもっと近くで見たいという衝動を、抑えることができなくなってしまった。

廊下を駆け抜けて、部屋の前まで来たときに、ちょっと息を整える。

彼女が目を目を覚まさないように。

もっと後になってから、彼女に「あんなに騒がしい扉の開け方や廊下の歩き方だったら誰だって目が覚めてしまうわよ」と苦笑されることになるのだけれど、それも気が回らないくらい、ドキドキしていた。

ドキドキというのか。

わくわくというのか。

とにかく、心穏やかな状態ではないことは、確かだった。

急激な心拍数の増加は、なかなか鳴り止まなかった。

中庭や廊下を走っただけが、理由ではないようだ。

手に持っていた、芍薬の茎が、手の汗とあがった体温で、しんなりしてきた。

このままここで立ち尽くしていても仕方がないので、思い切って扉を開ける。

躊躇なんて言葉は、自分には無縁だと思っていたのだけれど。

ちょっと苦い笑いが出てくる。

彼女は、いた。

先ほどと同じ格好で眠っている。

そうして、まず、花瓶に刺さっている芍薬の花に、持っている束を差し込んで増量した。

主のシャルル・ドゥ・アルディが見れば、きっと眉をひそめて、
「分量もバランスも大事なんだけどね」と言うであろう。

これで、よし、と。

ゲストルームに生けるというつもりだったが、急遽予定を変更した。

ようやく。

マリナ・イケダに逢える。

この機会をどれだけ待たただろう。

セイジは、待ち人の顔を、そっと、のぞき込んだ。

いつだったのだろう。

時期は、良く覚えていないけれど。

彼女に最初に会ったのは、ずいぶん前のことになる。

いつものように、ふらりとシャルル・ドゥ・アルディを訪ねていた。

彼のところが逃げ場だったわけではなくて、セイジはパリ以外にもいろいろなところに立ち寄る。
。

大学院ではグラフィック工学を学んでいるが、将来は建築や力学や加工学も学んで、家の設計とか、航空機などの設計と思っていた。

実現可能な「やってみたいこと」は、持ちカードがたくさんあった。

元々が、そういう緻密な作業は結構好きだった。

でも、この性分をどうにもならなくて持て余すことが多々あった。

一つのことに没頭すると、周囲のことがまるで見えなくなる。

そうかと思えば、その情熱が、ふい、と泡のように儚く消えてしまうこともあった。

飽きっぽい、というのとはまた違うと思う。

ひとつのことはやり遂げているし、中途半端が一番嫌いだった。

でも、毎日、退屈だった。

このまま工学部を出て、自分の思ったとおりのことを思ったとおりにできることが、退屈だった。
思ったとおり・・・本当はそうではないけれど。

そんなとき。
彼女に出会った。

「シャルル？邪魔するぜ」

人の声がするものの、返事がない。
中に入る。

シャルルは居なかった。
何か、急な急ぎの用事があったのであろうか。
ちょっと席を外した、という状態だった。

シャルルの私室は、セキュリティロックが解除されていて、机上のパソコンが付けっぱなしになっていた。

シャルルのパソコン。
一体何をみているのだろう。

彼が使用しているディスプレイはかなり大きめで、デスクの半分以上の幅があった。
デュアルタイプで、一つは仕事の調べ物らしきデータ分析表、もうひとつは、WEB会議システムの録画画像だった。

・・・何の気なしに。

その言葉がぴったりだったと思う。

人の声がしていたのは、その録画動画を再生していたからだった。
シャルルではない、若い女性の声。
フランス語でない。
どうやら、日本語のようだった。

ふいっと、そのディスプレイを見て、息をのんだ。
息をのむと言うより、息がとまった。

驚くところなるのだと思った。

かっとな顔が熱く火照って、口が半開きのままになってしまっていた。
呆然とするとと言った方が近かったのかも知れない。

そこに映る人は・・・彼が会いたいな、と常々思っていた「かの人」がそこに、居たのだ。

「何をしている」

シャルルの突き刺すような視線と冷徹な声が、この火照りを若干醒ました。
でも、ほんの少し温度を下げる程度だった。
彼の火照りはおさまらない。

「セイジ。」

シャルルは少し、目を細めて笑った。
でも口元はゆがめているだけで、目線は、勝手に彼のデスクに座ってディスプレイを惚けたように眺めていることに対して、批判しているかのようだった。

「あ・・・シャルル。しばらくやっかいになるぜ」

またか、とシャルルが小さく呟く。

「もうそろそろ、その拗ね根性は何とかした方が良くと思うよ。」

「何を言われても、家に戻るつもりは、ないよ」

口を尖らせて、反抗した。

「・・・それより。シャルル。この子、誰？」

ディスプレイの中で、淡々と「今日の天気」の報告をする、彼女を指さすと、シャルルはちょっとむっとしたかのように早足で近づいて、ディスプレイの電源を落とそうと指を伸ばした。

「この子、マリナだろう？」

そう言うと、今度はシャルルが驚いたようだった。

ここでこの話を切り上げられては困る。

必死だった。

最初からジョーカーは見せるな。

家訓だ。

でも、この場合には、最初に切り札を見せる必要があった。

ディスプレイを切ろうとしたシャルルの長い指がびくり、と動いた。

知っているのか、と彼が口を開きかける。

「知って居るも何も、彼女、有名人だよ」

シャルルが知らなかったというのは望外だった。

このところ忙しそうだったという話は聞いていたし、携帯電話もメールも不通だったから、情報収集が遅れているのかも知れない。

ちょっと貸して、と言って、今、電源を落とそうとしたパソコンのキーボードを取り上げる。

ブラウザを立ち上げて、「マリナ、グラフィック、W」というキーワードを入力していく。

「ほら」

目当てのサイトを開き、ディスプレイを指さした。

シャルルの顔がこわばった。

そこには、彼女が居た。

サイトは、日本の画廊オーナーで、グラフィックデザイナーでもある「W」氏が主催するものだった。

小さな隠しアイコンをクリックすると、そこに、何点かの作品が掲示される。

彼は、画廊のオーナーであると同時に、クリエイターでもあった。

題名は「Marina」

グラフィック加工されて、美術絵画風にされているが、間違いなく、先ほどの彼女本人だった。微笑む彼女、一生懸命何かを創作している風景、眠る顔、他人と談笑している無邪気な顔。

すべて、彼女がモデルだった。

淡い色彩画風の作品もあれば、凝った加工を施してあるものもある。

同じ業界にいるわけだから、この程度の加工処理でモデル本人を間違えるわけはなかった。

肖像権の問題があるから、隠しアイコンにして、招待者しか見られないようになっているけど。

これって、本人だよな？

もう一度、念を押す。

しばらくディスプレイを見ていたシャルルの横顔は、無表情で、何とも言えない怒気を感じた。無表情だから、そんな内面の気持ちなどはわからないはずなのに、全身で怒っていた。シャルル・ドゥ・アルディの憤りに気がつかないフリをするには、べらべらと喋るしかなかった。

彼の青灰色の目でにらまれれば、この館から追い出されてしまう。

それより前に、「彼女」を知る術がこんなに近くにぶら下がっていたのに、遠のいてしまうではないか。

これまで「逢えたらいいな」という程度であった淡い気持ちが「何が何でも彼女に逢いたい」に変化するのは一瞬の時間で十分だった。

これが、いつもの「気紛れな情熱」でないことを、同じ顔立ちであると言われている亡き大叔父の名に誓えるかと言うと、まだ自信がなかったけれど。

ここで、終わりにしたくないという気持ちは、確かだった。

「もう少し、補足説明しろ」
ぎろり、とシャルルが睨んだ。

頭を掻いた。

こうなると、シャルルは手が付けられない。
自分もそうだったけれど。

「だから。この【W】氏は、グラフィック業界でも結構有名人で、あちこち賞を取ったりしているんだよ。英語で論文を書くこともあって、結構、名が知れてきているんだ。その一方で、日本で画廊を経営してて、こういう絵なんかも、彼の作品だったり、若手の作家なんかを何人が抱えているらしい。」

サイトを見れば、彼の活動履歴はわかるはずだよ、と付け足した。

「この隠しアイコンというのがまたやっかいでさ。これを見つけるのは、すごく苦労したんだぜ」
「少し黙っててくれ」

シャルルがそう言って、何かをじっと考え込んでしまった。
この状態になると、彼は立ってしようが座ってしようがおかまいなしに、その動作を止めてしまう。

その間、憑かれたように、セイジはW氏のサイトと、動画レターを見比べていた。
W氏はやはりかなりの技量だ。
特徴を良く捕らえている。

日本人にしては色素が薄いようだ。
茶色の髪、茶色の瞳。
カメラだから、身長や全体の雰囲気はよくわからなかった。
でも、間違いなく「動く」彼女なんだ。

そう思うと、胸が高鳴り、感情が高ぶるのを抑えることができなくなった。

彼女は、カメラではなく、いつも違うところを見ながら話をしている。
ごく淡々と天気の話や、買い物で何を買った、旬の野菜は何だというような話を

メモを見ながら話をしているようだ。

それらを話し終わると、おもむろに「じゃ」と言って、電源を切断しているようだった。

時折、カメラに視線を向けることがあるが、自分を見ているかのようで、どきり、とする。WEBカメラなんて、珍しくも何ともないのに、こういう機器があることに感謝したくなる。

そのときだった。

シャルルが、突然、「セイジ・マクドゥガルの絵を売る。買い付けはこのW氏にする」と言い出したのだった。

びっくりした。

誠次・マクドゥガルの絵が、いつか日の目を見ることは希望していたし、売買すること自体は問題でない。

理由は、後に知ることになるのだけれど。

シャルルは結果が出ないと理由を明かさない。

理由を明かさなければ結果が得られないとき以外は過程では一切説明をしない。

天才というものはこういうものなのかもしれないな。

誠次・マクドゥガルもそうだった、と聞いていた。

「青磁。マリナに。・・・マリナ・イケダに近いうちに会うことになるぞ」

シャルルは挑戦的にそう言った。

ディスプレイの中の、マリナが「今日の天気は曇りです」とアナウンサーのように復唱していたのが、場違いな感じがしたけれど、笑うに笑えなかった。

びっくりするほど幼い寝顔だった。

いくつか年上であるとは聞いていたけれど、シャルル・ドゥ・アルディは詳細を明らかにしなか

った。

「ビジネスの相手になるのだから、先入観は禁物だ」
と言っておきながら、彼女を知る術を与えない。

シャルル、矛盾しているぜ。

そう思いながらも、彼女と会ったときのことを想像するのは愉しかった。
それが、今、こうして目の前に存在するのだから、緊張するなと言う方が無理だった。

緊張？

そう、緊張している。

大抵の人は、「自分と違う世界の人だから」と言って関係を築くことをあきらめてしまうか、途中で疲労困憊して離れていくか、熱狂的に信奉するかのいずれかのパターンにしかあてはまらなかった。

彼女は、自分とどう向き合ってくれるのだろうか。
幾度も期待して、幾度も失望して、期待することそのものを止めてしまったのに。

軽く寝息を立てて、よく眠っていた。
口元にはショコラが少しついていて。

テーブルを見る。

シャルルが特別に作らせたショコラだ。
少なくとも、5回はパティシエにやり直しを命じている。

相当、甘いものが好きなのかも知れない。

そのシャルルからの贈り物に満足して、すやすやと寝ている姿が、なんとなく切なかった。

さっきは、ドキドキしていたのに、今は、切なく思う。

・・・どうしちゃったんだよ。

そう思って、首を振った。

シャルルのショコラ。
どういう味なんだろう。

彼女の唇に付いているショコラをぬぐって口に含みたかったが、それでは彼女を眠りから呼び起こしてしまう。

満足げに微笑んでいる様子からすると、良い夢なのだろう。
シャルルの夢だろうか。

目を開いて、口を開いて、体を起こして、そうして自分を見るのは、このあどけない姿を見尽くしてからでも良い。
そう思った。

それならば。

せめて、ショコラだけでも共有しても、良いのかな。

そう思い、テーブルに積まれたショコラを、口に含んだ。

もうひとつ、口に含んだ。

甘くて、少しビターな後味のするさわやかな甘味が口内に広がった。

そのときだった。

「ちょっと！そのショコラは食べちゃダメ！」

日本語だった。

突然、声がして。

わっと小さく悲鳴を上げたのが自分だということにしばらく気がつかなかった。

びっくりして硬直している猫のように。

動きが止まってしまった。

その勢いで、ショコラをテーブルの上に取り落としてしまう。

「何落としてるのよ！」

「・・・ショコラ」

とてつもなく寝起きが良いか、寝たふりをしていたのか。

眠りから覚めたレディは、・・・レディじゃなかった。

「あんた、誰よ！そんな盗み食いみたいなことをして！」

口汚く、目をつり上げて、怒っていた。

どうやら、お菓子をつまみ食いしたことを怒っているらしかった。

「オレ？」

そう尋ねると、茶色い髪の毛の茶色い大きな瞳の彼女は、頷いた。

「そうよ。誰よ、あんた。」

最初の会話が、ムードも感激も伴わない叱責の会話で始まろうとは。

「オレは、セイジ。セイジ・マクドゥガル」

渋々、名乗った。

想像の世界で何度もシュミレーションしていた出会いの場面より、
ずっと強烈で、彼女の顔は、怒っていたが、とても魅力的だった。

(第一部 fin)

最初の場面です。

シャルルはどの辺から見ていたのかなあ。

セイジ、いろいろ考えてたようですよ（笑）

このお話をご覧になってから本篇に入るか、本篇を終わってからご覧になるかで彼の印象はずいぶん違うと思いますが。

「茶色い藻」と言った彼女を結構気に入ってるのではないのでしょうか。

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

■月魄（げっぱく）・・・月の光

「マリナを寝坊させるなよ」

そうは言ったものの、これを否定する言葉が、すぐさま彼女の口から発せられることを想定していた言葉だけに、予想外の事態に困惑していた。

困惑。

そう、その言葉が正しい。

マリナは。

彼女は、シャルルの思い人だ。

確認した。

彼女の来仏前に。

浮き名を流していたシャルル・ドウ・アルディが、結婚する意思を固めたらしい。

そんな噂の真偽のほどを確認するための目的でもあった、今回の来訪。

でも、彼のその思いを続けるベクトルとは別に。
自分の中の時間軸で動いていたマリナを、夢想することは止められなかった。

ほんの少し前。

彼女が、シャルル・ドウ・アルディと懇意の人間であり、彼が当主になる前からの古い友人であることも、彼の口から聞かされた。

友人？

彼の皮肉な問いかけに。
シャルル・ドウ・アルディは、唇をゆがめて、破顔した。

「いや。いずれ、オレの妻になる。そうなるより前から、・・・ファム・ファタルとして、生涯の心の妻だ。」

その言葉を聞いたときに、シャルルと彼女の絆の深さを感じた。

でも、マリナ・イケダはどのように思っているのだろうか。

聞けば彼女は8年以上前から、彼の知己であり、当主におさまる以前からの苦楽をともにした、「古き良き友人たち」のひとりであるという。そして彼の「青春の輝き」の中心となる人物。

その時代の彼を、知るよしもなかったけれども。

彼の今を支えている人物達であり、シャルルが信用する数少ない友人達のひとりなのだろう。

それ以上の感情も持っているのだが。

彼の「心の妻」と聞いて、さざめきが上がった。

どういう人物なのだろう。彼を、「フランスの華」を動かすほどの人物。

実際に逢った時には、小柄な日本人で、表情豊かな彼女に、一目で心を奪われた。

もっとも、彼女をモデルにした「Marina」シリーズを見ていたから、勝手な妄想かも知れなかった。

でも。

悪いことは悪いと言い、失礼な態度には、毅然として立ち向かう。

ぱちん、と平手打ちを食らったときに、彼女をこよなく愛するシャルルの気持ちが、ほんの少しだけ理解できた。

ああ、シャルルの定めたファミ・ファタルは、この女性なのだ。

そう思うと、俄然、欲しくなった。

シャルルが欲してやまない人が欲しかったわけではない。

自分から、初めて欲しいと思った。

この人と一緒に居れば、自分は倅せになれる。

この人と一緒に居れば、この人を倅せにしたいと想い続けることができる。

その意味で言えば。

最初で最後の、青磁・マクドゥガルの。

戀だったのかもしれない。

シャルルとマリナをその場に残していくことに、何も感じなかったわけではない。

逢いたいと願っていた、夢の人と。

小さい頃から主治医として、良き友人として接してくれたシャルル・ドウ・アルディの短い逢瀬を大事にしてあげようと、そう考えてのことだった。

W氏のサイト見たときに、ああ、この人はMarinaというモデルを、こよなく愛しているのだらうと、感じた。

この世の果てにあってさえなお、愛おしい存在として彼女を描いている。
しかし、隠しサイトでアップしているくらいだから、極秘の戀なのかもしれない。

それでも、誰かに公開せずにはいられない。この秘めたる恋を。

まだ、マクドゥガル家の当主として完全に継承していない。
彼の当主就任の条件は、妻を娶ること。
生涯の伴侶を、今の彼に決めることはできなかった。

だからこそ。

「心の妻」であることを吐露したシャルルと似たものを、W氏に感じた。
彼らは、自分より年上だから、生涯の恋を定めることができるのだろうか。
それとも、自分がまだ「そのとき」ではないのだろうか。

だからこそ。

このW氏や「フランスの華」であるアルディ氏も、魅了されて止まないイケダ・マリナ氏に興味を持った。

女を知らないわけではない。恋も何度か経験した。

それでも、それでも。

マリナという人物に好奇心以上の何かを感じたのは嘘ではない。

これが恋かどうか、恋を経験してなお、判別できない。

・・・恋でないと思う感情は、愛という。

大叔父の最期のノートに、たった一行、英語でそう書いてあった。

「そのまま帰したのか？」

「青磁には関係のないことだ」

ここは月光が差すアルディ家の薔薇園だ。

シャルルの唯一の楽園。

薔薇の品種改良はシャルルの趣味だ。

品種改良を施し、世界で初めての薔薇を数々咲かせている。

彼は、商品化することなく、ここでひっそりと生きる花々を、愛でる。

そのすべての花に「ファム・ファタル」と名付けていることを知っていた。

訪問するたびに確認するのが習慣となっていた。

彼がこの自ら作った楽園から、出る日があるのだろうかと思うこともあった。

けれども、シャルルが、その出口を見つけてしまったことを知ってしまった。

マリナが。

マリナが、彼を、彼自身が深く閉ざしてしまった茨の楽園から、孤独な天使を連れ出してしまう。

そう、思うと、無性に切なかった。

膝を抱え、薔薇園の隅で、煙草を吸う。

本来なら繊細な花々には、こんな煙は天敵であることわかっているのだけれども。

「ここにいたのか」

シャルルが話しかけてきた。

ざっと、いばらの蔓をかき分ける音がして、シャルルがやってきた。
探していたようだ。

「今夜は彼女と一緒にじゃないのか？」

そう尋ねると

「彼女は帰った」

という意外な答えがあった。

「へえ。シャルル・ドウ・アルディでも、意中の女性を帰すんだ。この時間に」

そう言って、またひとつ、紫煙を吐いた。月に向かって。

まるで、挑戦するかのよう。

「吸う？」

そんな誘いに、シャルルは首を振った。

「いや、煙草はやめた」

「彼女はそんなにシャルルに求めるのか？」

「そうじゃない」

シャルルが即座に否定した。

「彼女という存在と引き替えに禁煙したということであれば、間違いだ。彼女はそんなものに比べられないほど得難い存在だ」

「へえ」

意地悪く、言う。

「その話が本当なら。彼女は随分鈍感だね。シャルルの意図もわかってなかったようだけれども」

そうして、また、続いて思わぬことを言う。

「彼女は、本当にシャルルの妻になりえるのかな」

「何が言いたい」

シャルルが、珍しく反論した。いつもならば、この言葉一つ一つに、揚げ足を取るはずなのに。

「・・・マクドゥガル家に欲しい」

「駄目だ」

シャルルが即答した。今までで一番短い、いらえだった。

「なぜ？」

彼を煽る結果になることはわかっていたけれども。

「マクドゥガル家は、日本の資本参入で大きくなった。当主に日系アメリカ人のオレを据えようとしているくらいだから、当然に、配偶者は日本人を求めてくるだろう。願ってもない条件だと

思わないか。

少なくとも、アルディ家が娶るより、自然な成り行きだと思うけれどもね。

シャルル・ドゥ・アルディが支援する、日本人女性と、マクドゥガル家の婚姻は、両家にとってこの上なく有益だと思うが」

そう言うと、シャルルは、深く、ため息をついた。

「それはできない」

「それは答えじゃないよ、シャルル」

「いや、答えだよ、青磁」

シャルルはそう言った。

「彼女を差し出すことは出来ない。なぜなら、アルディ家には、彼女が必要だからだ」

「アルディ家？シャルルにではなくて？」

「アルディ家には、強い精神力を持つ人物の血筋が必要だ。

マリナ・イケダはその資格を十分に備えている」

自分の生涯の妻となるべき人物について、シャルルはそう客観的に分析した。

「随分、冷静な判断だな」

「冷静？これが冷静でいられる状態か？」

シャルルは、そう言って、自嘲的に笑った。

「今、目の前に、長らく手に入れたいと思っている女性が居て。そして、その女性を欲しいと言う牡が居る。それを指をくわえて見ていると言う方がおかしいと思うが。」

月の光は人を惑わすという。

今夜の月は、シャルルを惑わしているのだろうか。それとも・・・。

「マクドゥガル家にも欲しい。・・・少なくともオレはマリナを気に入った」

「お前の気持ちはどうでもいい」

ばっさりと、シャルルがそう言い切った。

「彼女はこのシャルル・ドゥ・アルディが定めた妻だ。何をどう変えても変更はない」

「彼女の気持ちに変更があっても？」

そう言うと、シャルルはちょっと眉を動かした。

「随分な自信だな。青磁・マクドゥガル」

みるみるうちに、月光の元で、シャルルの顔つきが変わる。

その天使のような微笑みが、闇の墮天使のような、蠱惑的なまなざしを含んだそれに切り替わる。

「・・・どうして『自分の必要とする女性』だと言えないのかな」

ため息をつく。

これではますます彼女を渡せなくなる。

「シャルル。彼女は政治的活動の道具にはなりはしない。だから、アルディ家が必要なのではなく、シャルルが必要なのだということが出来なければ、彼女は振り向かないよ」

「お前に言われる筋合いはない」

シャルルはぎりっと青灰色の瞳を光らせて、にらみ返してきた。

これまでこんなに剥き出しの敵意を晒すことなんてなかった。

「それなら、マクドゥガル家当主となるべき後継者として、誓おう」

その名をもって、誓う。

「マリナ・イケダを青磁・マクドゥガルの妻として迎え入れよう。」

「青磁！」

シャルルが叫んだ。

「お前の名をもって、マクドゥガル家の当主としての誓いを立てるということがどういうことな

のか、わかっているのか？」

「わかっていないなら、こんなことは言わないよ」

そう言い切った。

少し、悲しかった。

彼らは、大人になりすぎてしまった。

こういう、こんな切ない気持ちを「こどものようだ」と言うのかも知れない。

けれど、シャルル。

シャルルの想い人は、そんなことではなびかない。

地位も財産も名誉もいない、風のような人だから。

シャルルの居るところに喜びを感じて、シャルルが生きていることだけで満足するような、そんな女性であることを、一番よくわかっているのは、シャルルだよな？

彼女を欲しいと思う気持ちを、嘘だとか幻だとか思わない。

けれども、シャルルが一生懸命好きなことを、彼女にわかってもらうには、それじゃあ駄目なんだ。

そう、想いながらも。

マリナが欲しくなった。

どうしても、欲しくなった。

この名にかけて誓おう。彼女に「好きだ」と言わせてみせる。どんなに待っても。

それはきっかけに過ぎなかった。

W氏のモデルと、シャルルの想い人が同一人であるという偶然が、最初は唯単に面白かった。

次に、シャルルが密かに私室に飾っている3体のマトリョーシカの作者がマリナ・イケダであることを知り、ねだりにねだって最後の1体を見せてもらった。

4体の、小さな入れ子のマトリョーシカ。

それは、少年時代のシャルルを模した天使の喜怒哀楽。

W氏の作品にも似た、優しい印象の作品だった。

淡い彩色を施してあり、その表情が豊かになるようなデザインで、最後の小さなマトリョーシカだけは、
彼は肌身離さず持ち歩いているらしかった。

喜怒哀楽を表現したのであれば、1体足りないよね？

最初は私室の3体しか見せてもらえなかったけれど。

そう、指摘すると、シャルルは渋々、
内ポケットから小さな最後のマトリョーシカを取り出した。

随分とラッカーがはげ落ちていた。

この人形が、一番倅せだった彼の過去の時代を良く表しているように思えた。
苦境に立たされたシャルルを知る人物が願う、シャルルの倅せをそこに表現していた。

だから、マリナ・イケダを喚んで欲しいと、改めてシャルルに依頼した。

誠次・マクドゥガルの絵について、これまで遺族は誰も目を背けてきた。
だから、長らくアルディ家の所有物になっていたとしても、一向に構わなかった。

でも、彼女を知ってしまった。

彼女となら、一族が目を背け続けた「秘する恋」に、きちんと自分も向き合えると思った。

すべてのことが、こじつけになってしまうかもしれない。
けれども、彼女が何かを変化させるであろう、という予感というか期待というか。

そういう、光を感じた。

「マリナの怒りを解くには」

シャルルは、長い沈黙のあと、そう切り出した。

「まずは、謝罪することだ」

「言い過ぎたのは、わかってるよ」

ぷい、と横を見る。そのことにシャルルに触れられるのは辛かった。

彼女を怒らせてしまったのはわかっている。

でも、どうにもならないんだよ、シャルル。

彼女の笑った顔、困った顔、怒った顔、喜んでいる顔。

シャルルを模した人形達のように、彼女の喜怒哀楽をこの目に焼き付けていたかった。

全部を、見たいんだ。

確かに、怒らせすぎてしまった。

アルディ家に迎えられるべき人間が、どれほどの器なのかも、
知りたかったこともあるのかもしれない。

それでも、彼女はいたって健全な精神の持ち主だった。

彼女に、今の自分やシャルルの置かれている環境を話そうものなら、笑い飛ばすに違いない。

礼を失する態度には怒り、愛する者の前でははにかんで笑う。

そういう、普通の女性なんだと思う片方で。

彼やシャルルを目の前にして、普通でいられる彼女の剛胆さに感服した。

どうあっても、欲しいと思う。

それは、思いついた偶然ではなく。

自分自身に欠けていたパーツを、ようやく見つけたという気分にした。

「勝ち目はないぜ」

シャルルはそう言った。挑戦的な目だった。

彼が見せる、初めての表情。

不謹慎ながらも、ぞくぞくした。

見つめられるだけで、全身に鳥肌が立つ。トリガーが引かれた。

そう思った。

「安全な勝利というものは存在しない。危険な賭けは承知の上だよ。」

そう言うと、満足げにシャルルは微笑んだ。

改めて言う。

「彼女は、駄目だ」

「シャルル。もう一度聞くよ。

彼女を欲しいのは、シャルル？アルディ家？」

「オレだ」

シャルルは短くそう言った。

そうして、少し息を吐いて、彼は一度、大きく息を吸い込んだ。

「彼女なしの人生はありえない。もう、彼女のことばかりを考えているよ。」

「・・・OK。満足した。」

そう言うと、煙草をもう一本、灯す。シャルルが眉根を寄せた。

「ああ、わかっているよ。このまま部屋まで退散する。・・・でも」

もう一度、軽く彼をにらみつけた。

この世で、視線を外すことなく接する人物は、シャルル・ドゥ・アルディだけだった。
母でさえ、父でさえ。この容姿を忌み嫌った。

誠次・マクドゥガルの悲劇を、二度と繰り返してはならない。

何を言われているのかわからなかったけれど、自分が、求められた存在でないことは感じて生きてきた。

でも。

もう一人、増えた。自分から顔をそらさない人。

マリナ・イケダだ。

欲しい。

そう思うのは自然だろう？

誰に言ったのかもわかならい言葉を、紫煙とともに、はき出した。

「最後に、もう一つだけ」

煙草の火を消しながら、最後の質問をする。

「シャルル。シャルルは、彼女のことを、愛してる？」

「もっと生きたいと思うほどに。」

ウィ、という返事より、この答えが彼を表していた。

目を、瞑る。

シャルルも、その言葉を、重く重くはき出した。

毎日を「死ぬまでの退屈しのぎ」と言っていたシャルルが、生きたいと言う。

そんな、執着できる相手が、彼女なのだろう。

どれだけ愛しているのだろう。どれだけ、このときを待ったのだろう。
彼の、そんな浮かされたようなそれでいて悶絶するような苦慮を、聞いてしまった。

自分たちは、共犯だ。

そう、思った。

秘するかどうかは別として。

同じ物思いを共有してしまった。

同じものを欲しいと思ってしまった。

彼女が、シャルルの「生」であるならば。

彼女は、自分にとって「光」なんだ。

そう思った。

一条の光。彼女は光輝そのものだった。
月魄よりも、強い光線を欲することが、いけないことなのだろうか。

濃淡の区別がつかなくなって、どれくらいの年月が経過しただろう。

当主の座を継承することは、画家への道をあきらめることでもあったけれど。
両方、手に入れられると思っていた。
だから、望んでも手に入れられないものがあることに、恐れを感じていた。

彼女が居れば、失われた光を取り戻すことができるかもしれない。

そんな、想見さえ、抱いてはいけないのだろうか。

シャルル。

オレは、必ず奪う。

名前に誓う。

必ず、だよ。

いつか、ではない。必ず、だ。

そう、強く決心した。

(FIN)

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

深浅・・・色の濃いことと薄いこと。

青磁には、これが判別しにくい疾患があります。

「シャルルの、どこが好きなの？」

唐突に、そう言ったものだから。

彼女はうつむいて読み進めていた資料から、目をあげて「え？」と首を傾げた。

声をかけられたという認識はあったものの、何を尋ねられたのか、理解できていなかったようだ。

「ごめん。聞こえてたけど、わかってなかった。もう一度質問して。」

そう言うと、屈めていた身を起こした拍子にこぼれ落ちた前髪を掻き上げた。

茶色の髪の毛に茶色の瞳。本当は、もう少し濃い色合いなのかもしれない。

膨大な、彼の人生のほとんどを記したこの日記を、読み進め居てくことが今の作業だった。

キーワードになりそうな部分に印を付け、前に読み飛ばした部分で気になるところはまた戻って読み直す。

読み進めるだけでは終わらない大仕事だった。

「飽きっぽくて、いけないよね」

マリナはそう言って、笑った。

人間は1時間ないし2時間に一度休憩を入れないと、集中力が低下する。
シャルル・ドゥ・アルディはこれに当てはまらない例外だが。

定期的に休憩を入れ、こわばった肩や腰を伸ばし、目の疲れを癒すように目の回りを揉み、水分を取る。

そして決めた時間になると、彼女は食事をして、夜食におやつを包んでもらい、アパルトマンに帰る。

作業と言えば至極単純で、日本語が読めない自分の代わりに、マリナが読み上げてくれる文章を、メモを取りながら聞く。

文字通り二人三脚だった。

どれくらい、時間が経過したのだろうか。

そんな中でぽつりと聞いたものだから、彼女が聞き直すのも無理はなかった。

「だから。シャルルのどこが好きなの？」

もう一度、尋ねてみた。

すると、見る間にマリナ・イケダの耳朶が赤くなり、首まで朱に染まった。

「なに？なに？何言ってるの？」

口ごもり、目はあらぬ方向を見て、明らかに動揺している。

面白いので、もう少し弄ってみることにした。

「目も悪いけど、耳も悪いのか」

かつて怒られた口調でもって、そう、からかった。

そんな言いぐさは、そろそろ慣れてきたのだろうか。
マリナは、ちょっと唇の端をゆがめて、軽く受け流した。
まるで、自分が大人であると言いたげだった。

そういうところが、こどもだと言うんだよ。

内心でそう思いながら、テーブルの上に肘をついて、くすくす笑った。

こうして短い休息でのやりとりは、ごく短くて、素っ気ないものだった。

一緒に居る時間が長ければ長くなるほど、
彼女と過ごす空間が狭まってくるかのような気がした。

彼女と距離を縮めるような会話は、していなかった。

昼食と夕食は一緒に摂るが、そこでの会話はもっぱらお互いのことばかりだった。

彼女から漏らされた彼女の情報はとても少なかった。

売れない漫画家を続けていることだったり。

時々、画廊の主催する絵付けの講師をしてアルバイトしていることだったり。

シャルルと共通の友人達との青春の輝きの時代の話や、ほんの少しかいつまんで聞いたり。

シャルル本人の話は、しなかった。

こちらからも、敢えてしなかった。

あれから、夜はシャルルと逢っているのかい？

オレは、逢ってないんだ。怖くて。

彼の顔を見たら、また、蒸し返してしまうから。

君をどうにもならなくなるくらい、好きになってしまった、と吐露してしまうだろうから。

時々、夜遅く、薔薇園の照明が点いているのが、部屋から見えた。

シャルルが帰宅後に、薔薇のコンディションを見に立ち寄っているのだとわかっていてた。

でも、あのときの薔薇園での話を思い出すので、そこにいるシャルルを尋ねることはしなかった。

この屋根の下で、彼の私室で彼に愛される君の姿を想像するだけで、どうにかかなりそうなんだよ。

そう思ったことを口に出せるほど、彼女に受け入れられていないことははっきりしていた。

「質問する口調じゃないわよね」

わかっているけど呆れるわ、と彼女は笑いながらそう言った。
それが大人の交わり方なのかもしれないけれど。

彼女の口から聞きたいような、聞きたくないような、そんなくすぐったい気持ちに支配されていた。

好奇心半分、どうしものならない表現できない気持ちが半分。

「だって、二人はつきあっているんだろ？ ・ ・ いずれ、結婚、とか」

あははははは！

と大きくマリナが弾けるように笑った。

「まだ学生を謳歌してる青磁の口から、そんな単語を聞くとは思わなかった」

おかしように、彼女が言うものだから、思わず、口を尖らせて反論する。

「こどもじゃないよ」

「こどもとは言ってないよ。ただ、自分は同じ頃にどうだったかな と思って。」

そうやって「こども」に反応することが子供なんだけれどもね、と。

マリナはくすくすと、笑いを止めることもしないで言った。

そうして、ひとしきり笑った後、小さく微笑んだ。

今度は、本当に、小さく。ごく軽く薄く。

「わからない」

そう答えがあった。

何がわからないのか？

シャルルの気持ちが？

それとも、この先の二人の行き着く場所が？

だって、彼はあんなにも、あんなにも君に焦がれていて、君を妻にすると宣言しているんだよ。

その温度差は何なんだよ？

意味もなく、腹が立ってきた。

「マリナ。シャルルのこと、ちゃんと考えろよ」

そう言うと、彼女がびっくりしたように目を見開いた。

この表情は、とても幼い。

くるくる良く変化する彼女の表情の中で、この瞳を大きく開ける仕草がとても、好きだった。

「どうして、青磁が怒るの？」

ああ、本当にわかっていない女だな。

鈍感なのか、知らないふりをする策士なのか、まったく判別できない。

「白黒はっきりさせる瞬間は、今じゃないと思う」

マリナが、ぽつりとそう言った。

拒絶された。

シャルルが言ったように、彼女には「ここまで入って良い距離」というものがある。

しかも、時と場合によって、その距離が変わる。

だから、誰もその距離を測ることが出来ないのだから、立ち入ることが出来ない。

唯一、都度、正しい距離を測定して踏み込むことができるのは、あのシャルル・ドウ・アルディだけなのだ。

「ごめん・・・そういうこと、言う筋合いじゃなかった。」

「青磁は本当に、シャルルが好きなんだねえ」

マリナが脳天気と言う。にこにここと、感心したように何度も首を振って、頷く。

瞬間、思わず立ち上がった。

むっとした。

腹が立った。

「オレは・・・！！！」

そう、言いかけて口をつぐむ。

オレは？

オレは、何なんだ？

シャルルとの関係を聞き出そうとしたり、彼女の気持ちを確認めたり。

挙げ句の果てにはこどもと言われて激昂して、シャルルに興味があるんだね、と言われる始末だ

。

マリナ。

いつになったら、君は気がつくのだろうか。

彼の静かな視線よりも、ずっとずっとあからさまな、この視線に眼を反らさないで見つめ返すくせに。

マリナが、突然前髪を切って欲しいと言い出した。

見れば、中途半端に長くなった前髪が、下を向いて文字を追いかける作業には邪魔になるらしかった。

もったいないよ、伸ばしてみたら、と言うと。

「気になって仕方がないから。それに髪はまた伸びるしね」

そう言って、急遽、初めて会ったティールームにビニールシートを敷いて彼女の散髪をすることになった。

確かに、彼女の髪は伸び放題で、毛先がところどころ痛んでいた。気にならないくらいカットすれば、もっと良い状態を保つこと出来る。

「まるで盆栽だよな」

苦笑しながら、彼女の髪に触れることの出来る僥倖に胸を躍らせた。

でも、できるだけ、はしゃいでいることを悟られないように。

浮かれすぎて、彼女の髪を切りすぎてしまわないように。

自分に言い聞かせて、準備を整えた。

準備と言っても、ビニールシートの上に椅子を置き、座らせたマリナにも同じシートを巻くだけの簡単なものだ。

「どうしてオレが散髪が特技だって、わかったんだい？」

だって青磁の前髪、一日置きに切りそろえているでしょう。

マリナが笑ってそういうと、「なんでわかったの？」とどきりとする。

彼女が言い当てることはなんだってどきり、とするのかもしれない。

「絶妙な長さ、だもんねえ。そんなに目を隠さなくても良いんだよ」

さり気なく、マリナが言った。

「何でもお見通しの口ぶり、よせよ」

そう言うだけで精一杯だった。

この瞳の色が薄くなり始めて、病状が悪化したとき。

周囲の、特にマクドゥガル家の人間はこぞって「血が汚れた」だの「誠次が呪ってる」だの、あれこれ言い始めた。

それなら、どうして、オレに「セイジ」という名前を付けたんだ。

どうしてもどうしても理解できなかった。

元々、生まれ落ちたときから愛されなかったのなら、あきらめもつく。
そういうものだったんだ、と。

でも、そうじゃない。

たくさんの愛情を受けてきたし、唯一の男子相続人として、何もかもが手に入ると信じていることのできる毎日を送っていたのだ。

それなのに、この人は、オレに目を隠さなくて良いと言う。

誰もが目をそらすのに、君はオレに顔を上げろと言う。

「さあ、終わったよ」

小さな手鏡を差し出して、彼女に渡す。

前髪をそろえ、傷んだ髪を丁寧に取り払った彼女は、さらに幼く見えた。

歓声が上がる。

「すごい！青磁、床屋さんになれるよ！」

「・・・スタイリストとかヘアデザイナーとか言ってくれ」

苦笑いした。

その隙に。

自分の掌に残る彼女の短い髪を、ほんの一握り、こっそりポケットに入れた。

「何か、お礼をしないといけないわね」

彼女がそう言った。

欲しいものはひとつだけだ。決まっている。

「高価なものはちょっと無理だけど。肩たたきとか。脚マッサージとか。」

彼女は本気で言っているらしい。

マリナが無邪気にそう言うものだから、ますます愛おしくなる。

「そうだなあ。物欲は大抵満たされているから」

そう言いながら、彼女に巻かれたシートを取り除き、顔にかかった短い毛をブラシで取り除く。

「目にゴミが入るから、目を閉じて」

おとなしく、目を閉じるマリナ。

目を閉じながらも、礼の品を考えている。

物欲はないって言っただろ？と言っても、何かを一生懸命考えている。

お礼なんて、いらない。

そんな、一度きりのものはいらない。

マリナ、君の一度きりを、何度も欲しいと言ったら、君は困った顔をするのかな。

「じゃあ、これにしよう」

そう言って、キスをした。
彼女の唇に、自分のそれを押しつけた。

ぶつかったようなそんなキスしかできなかった。
この震えがわかってしまうかもしれなかったから。

「マリナからの、大人のキスが欲しい」

それだけ言うのがやっとだった。

マリナは瞬きを、ひとつした。

目をゆっくり閉じて、瞬きをするのは彼女の特徴だった。

「そういうことは、本当に好きな人とするものよ」

そう言った。

「マリナ、ひょっとしてやり方わからないの？」
思わず、そう尋ねてしまう。

彼女はむっとして、あるわよ、と口ごもった。

「マリナは、自分からしたことあるの？」

その言いぐさが気になって、そう尋ねた。

またマリナが口ごもる。

彼女が下を向いてぶつぶつ言っているので、この問いの返事はなんて答えたのかわからなかった。

どうやらあるらしい。

「それはシャルル？」

更にたたみ掛けるように言うと、彼女はちょっと困った顔をした。

「違うんだ」

少し、驚いた。

彼女もそれなりの年齢なわけだから、恋愛の一度や二度は済ませているかも知れないと頭でわかっているけど、この童顔な女性が、そんなに身が焦げるほどの深いキスを相手にする、というのはどうにも想像がつかなかった。

「じゃあ、なんでシャルルとはしてないの？」

「せ、青磁！！！」

マリナが目を見開いて小さく悲鳴を上げた。

顔が真っ赤になっている。

「それは・・・」

「それは？」

「約束したから」

「誰と！」

「昔の、彼」

ずきんと胸が痛んだ。

しまったと思った。

勢いで、聞くべきではないことを聞いてしまった、といういたたまれなさもあった。

「・・・何で？」

ドキドキしながら、尋ねた。

「どうして、好きな人に好きという表現をしちゃいけないのか、わからない。

好きならキスだってしたいし、もっと違うこともしたい。そう思わないの？

そんな約束をした相手は、別れてもなお、マリナのことを縛ってるの？」

彼女はまた笑った。泣きそうな顔だった。小さい声で、違う、と言った。

「私が、約束したの。彼が言ったわけではないの。

もう一度恋をして、本当にその人が好きだと思えるとき、その人にキスをしてごらん。

そうしたら、それはオレ以上に好きな人ができたっていうことだから、オレを忘れても良いよって。

オレも君を忘れるからって。・・・それなら、私は、一生、誰にもキスできないわね、と言ったの。」

これは呪いだ。

そう思った。

マリナ・イケダは昔の恋に囚われている。

それが、シャルルとマリナの間の壁になっていることに気がつかないくらい、透明で頑丈でそして彼女からでないと開かない、鍵付きの壁だ。

そいつは、きっとマリナの倖せを願って、自らが唇を寄せるような相手が見つければ、この恋は終わらせようと言ったのだと思う。

けれども、マリナの解釈は違っていた。

シャルルとの恋が、元彼との恋と比べられないことを、ちゃんとわかっている。

でも、できないんだ。

人を否定できない彼女ならではの、曲解だった。

元彼を忘れる事なんてできないくらいこよなく愛していたのだろうし、

これとは違った意味で、シャルルを愛しているわけだから、「彼より」愛することはできないんだ。

彼女がシャルルとの恋に躊躇する理由がひとつ、わかった。

でも、彼女にはそのことを教えなかった。

いい年して、大人ぶってて、ちっともわかってない。

恋というやっかいな代物を上手に扱える人なんて、いないんだよ。

そう、自分もそうだったけれども。

「オマエは、本当に阿呆だ」

呆れてそう言った。

なんでよ！と、マリナが言い返す。

「別れた男との約束なんて、ないに等しいものを律儀に守るのは、よほど」

そう言って言葉を切った。マリナを睨む。ああ、本当に腹立たしい。

「そいつのことが忘れられないか、よほどの阿呆だ」

マリナが口を開けてぽかんとしている。

しまった。怒りすぎた。

でも、マリナは少し面白そうに笑った。

「ありがとう、青磁」

何でお礼を言われるのか、わからない。

オレがシャルルとマリナのことを心配して憤慨していると思っているのだろうか。

「いやなヤツだと思ったけど、案外いいヤツじゃない」

「オレは最初からイイヒトだよ」

そう言うと、油断している彼女の額にキスをした。

あんまり素早いので、マリナがまたきょとんと瞬きをしているものだから、もう一つ、頬にキスをした。

「青磁！」

お礼はあと10回のキスで良いよ。

そう笑って外に出た。食事はあと1時間くらいだよ、と言って、彼女をそのまま残した。

笑いながら扉を締めると、小さく息を吐いた。

どうして、君をこんなに好きになってしまっただろう。

もう、留める事なんてできない。誰にも、できない。

キスをした唇が熱かった。この火照りを沈めることが出来るのは、ただひとり、マリナだけだ。

「・・・聞いてただろう？」

秀麗な顔立ちの男が、無表情で廊下で壁にもたれ、腕組みをしている。

シャルル・ドゥ・アルディはこちらを睨み付けたまま、短く言った。

「外に出ろ」

見た目にも憤っていることが明らかなシャルルは、ふいっと壁から身を起こすと、さっさと中庭に出てしまった。

ティールームから話し声も聞こえない死角に移動するつもりのようなのだ。

「立ち聞きも趣味が悪いな」

そう言うと、振り返らないで、シャルルは言い返した。

「聞かれていることがわかっているのに、そのまま話を続ける方が趣味が悪い」

さすがにむっとした。

そうして、バルコニーに出る。

庭は、夜の灯りが灯り始めたところだった。

「おいおい、ここで殴り合いの決闘でも始めるのか？」

そう最後まで言い切らないうちに、シャルルが振り返った。

青灰色の瞳が、憤りで溢れている。ぎりっと薄い唇を噛んだ。

滅多に見せない、シャルルの憤怒だった。

「殴りたいなら、殴れよ。でも、オレは謝らないよ、彼女にキスしたこと」

「青磁。」

大きくため息をついて、シャルルは怒りを収めた。けれども、その声はまだ冷静さを完全に取り戻していないかのようなようだった。

シャルル・ドウ・アルディのそんな姿を見るのは初めてだった。

きっと、彼女と一緒に居る時は、こちらが本当の彼なのかもしれない。

「彼女は駄目だと言っただろう。何があっても、渡さない」

「自分にキスひとつしてくれない女を追いかけるのはやめろ」

瞬間、シャルルの左手が頬を打ち鳴らした。

「いってえ・・・手加減位しろ」

そう言ったが、シャルルはまったく耳を貸さなかった。

だんだん空の色が紫から紺に変わっていくほんのわずかな時間。

その色をはっきり判別できなかったが、その背景を背負うシャルルを睨んだ。

「じゃあ どうしろっていうんだ。諦めろ？諦められないのは、シャルルだってわかっている
だろ。」

オレはマリナが欲しい。どうしても欲しい。

だから、シャルル。マリナを奪う。駆け引きなんてしない。シャルルと反対の方法でこちらを
振り向かせる。」

「やってみろ」

シャルルの返事は短かった。

「ただし、マリナは手強いぜ」

それだけ言って、さっさと邸内に入って行ってしまった。

なんだ？あれ。

その態度が解せなかった。

よほど、元彼のことを耳にしたことがショックだったのか。

それとも、彼に口づけるほど、マリナがシャルルとのことに足を踏み入れてないことにはっきりしたのだろうか。

シャルル・ドウ・アルディの感情の起伏は、全く理解できない。

ただ、言えることは。

シャルル・ドウ・アルディは、マリナを愛している、ということだ。

恋しているのではない。愛しているのだ。深く。こよなく。

(FIN)

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

紫電：しでん。鋭い眼光のこと まさに青磁のことですね

納得できないまま、そのまま食事の時間が来て、大広間に行く。

とても食事ができる状態ではなかったけれど、これで広間に行かないと、マリナが怪しむ。

あいつ、そういうところだけは敏感なんだからかな。

鈍感なんだか、繊細なんだかわからない生き物。

それがマリナ・イケダだった。

しばらく一緒にいるうちに、彼女のおおらかさや、人を否定しないところが美点であり欠点であることも何となくではあるが、理解できた。

「お待たせ」

極力、平然を装って席に着くと、この邸の当主、シャルル・ドゥ・アルディが先ほどの激昂をおくびにも出さず、澄ました顔で座っていた。

さっきの、あの乱れ様はなんだったんだろう？

そう、思いながらも。

目は、マリナに注がれる。

不思議な女性だった。

彼女が居ると、その場のすべての雰囲気や和む。
何がどうという話をしているのではない。

彼女が笑い、そして美味しそうに食事をして、満面の笑みを浮かべるだけで、その周囲にいる人たちが和む。ただ、それだけだった。

でも、それは、久しくなかった時間だった。

逃げるように今の大学院に進学し、一人暮らしを始めた。

それなりに学生生活は楽しかったし、家にいるときよりかははるかに自由だった。

でも、連日食事を一緒にする他人は、マリナ・イケダが久しぶりだった。

今日のマリナは上機嫌だった。
いつも見ているからわかる。

彼女は、結構、感情の起伏が少ない。

誠次・マクドゥガルの日記の読解は骨の折れる作業だったし、
毎日のバイオリズムというものは当然にあるから、うまく読み込めなくて、いらいらすることもあったらう。

でも、彼女は、淡々と仕事をこなしていた。

これにはちょっと驚いた。

彼女は、仕事に対しては、かなりストイックな人間であることを発見した。
だからこそ、シャルルは仕事中の彼女には逢わないようにしていたのだろうか。

大人の配慮、ってやつなのか？

そう思うと苛々した。

食事が終わると、いつものようにマリナは帰るね、と言って席を立った。

レディの退室には立席で見送る。

マリナがレディかどうかは別として。

長年の教育というものは恐ろしい。

自然に、体が動く。

シャルルと同時に立ち上がり、彼女を見送ることになった。

シャルルがそのとき。

マリナ、少し話をしないか。

と言った。

きた。

オレは、シャルルが動いた、と思った。

シャルルはオレのことを「牡」と言った。でも、シャルルだって変わらないじゃないか。

手に入らないものを欲しがり、何年もうじうじと連絡を取ることができず、最近になってようやくまた

その交流を深めたというマリナにだって、過去はあるだろう。

それを受け入れられないのか、受け入れてなお、自分の気持ちを整理できないのか。

シャルル・ドゥ・アルディともあろう者が、彼らしくない。

小さく笑う。

だから、オレは、その申し出を聞いて、「じゃ、オレはもう寝るから」と言って、部屋を退散することにした。

まだ、寝るには早すぎる時間であったけれど。

マリナは、ちょっと眉根を寄せた。

何か思うところがあったのかもしれない。

でも、オレは気がつかないフリをした。

ここから先は、立ち入ってはいけないと本能で感じたからだ。

二人の仲を取り持つつもりはない。むしろ、逆だ。

殴られてなお、シャルルより彼女を倅せに出来ると思っている。

扉を背にした時、

「マリナ。薔薇園へ行こう。今夜は薔薇が綺麗に咲いているはずだ」とシャルルが言うのが聞こえた。

優しい声音。

先ほどの子供っぽい憤りに焦がしたシャルルとは別人だった。

最初はマリナが理解できなかったけれど。

シャルル。

こんなに長い時間一緒にいるのに、シャルルの方が、今はわからないよ。

そう思った。

寝る、と言っても眠れるはずもなく。

このまま、夜のパリに繰り出しても良かったのだけれども。
それは唯虚しいだけだと思い直す。

そうして、部屋から見下ろす薔薇園の電気をぼんやり見つめながら、煙草を吸う。

今頃、シャルルとマリナは、愛の交歓でも愉しんでいるのだろうか。

彼がひとりの日本人女性を思い続けていることは知っていた。

彼の「青春の輝き」の頃の話だ。

でも、その後、彼は人が変わったように浮き名を流し、ひとりの女性を定めることがなく、
気紛れに次から次へと華を渡り歩く蝶のように、彷徨っていたと聞いた。

彼の女性関係について、彼の面立ちとよく似た秘書がため息をついていたのを見たことがある。

「どうしてあなたはまだ彼女を想いきれないのですか。

どうして・・・そうやって恋をするのを躊躇うのですか。

どうしてそうやって気紛れに女性と戯れるのですか。」

そんなようなことを言っていた。

シャルルは言った。

「退屈だから。」

そう言っていた。まだ小さかったから、良く覚えていないが、彼は冷たく返答した。

そのとき、彼の孤独と、愛の深さに気がつかなかったけれど。

今、彼の思い人を目の前にして思う。

彼女は、シャルルのファム・ファタルなのだ。彼の言うとおりに。

彼は堕ちてしまった。恋に堕ちてしまった。

いや、マリナという女性を、唯一人の女性と定めてしまったのだ。

どれくらいの時間が経ったのだろう。

煙草を一本吸いきるぐらいの時間だったから、それほど経過しているとは思えなかった。

見下ろしていた薔薇園のドアが乱暴に開き、マリナが飛び出してきた。

慌てて、煙草の火を消す。

何か、あったな。

1階に駆け下り、マリナが玄関まで足早に出て行こうとする姿を見つける。

「マリナ？」

息を切らして、声をかける。

そうして、ずっと薔薇園を見ていたんだよとは言えずに「何気なく窓を見たら、マリナがいたから・・・」としどろもどろに何かを口走ったが、彼女は聞こえていない風だった。

彼女は足を止めなかった。

そして、下を向いて、自分の靴を見ながら。

・・・泣いていた。

すぐにわかった。

彼女の大きな瞳から、特大の涙がこぼれ落ちた。

「なに、泣いてるの」

そう、声をかける。

「泣いてないよ」

「その目から飛び出している液体は涙と言うんだよ」

そう言うと、彼女は顔を上げてちょっとだけ笑った。

「シャルルみたいな言い方ね。」

その、シャルルに泣かされたんだろ。

そう思うと、胸が痛んだ。

そう思うと、とたんに苦しくなった。

彼女を泣かせることができるのは、オレじゃないんだ、まだ。

マリナに近寄り、頭を撫でる。

「・・・シャルルとけんかしたの？」

「・・・ん」

短くマリナが答える。けんか、というほどじゃないけれど。慌てて付け加えるイイワケが、なんだか切なかった。

童女のように、彼女は涙をこぼした。

女の泣き顔を見るのは初めてじゃない。泣かせたこともある。
でも、こんな泣き方をする女は初めて見た。

瞳が大きいせいだろうか。
それとも、彼女の瞬きの速度が遅いからなのだろうか。

目の際から、止めどもなく大きな水滴が落ちる。
瞬きをする都度、溢れては落ち、頬を伝わり、顎からその体を離れて下に落ちる。
とりわけ大きい涙が、ぽつん、と唇に落ちた。

胸が痛み、彼女を見つめることができなくなる。
自分にとって特別な人が涙を流すことが、こんなに辛いことだとは思わなかった。

それを誤魔化すかのように、彼女の頭をそっと撫でた。
さっき切って整えたばかりの髪が、乱れていた。

泣かされたんじゃない、勝手に自分が泣いたんだ、と彼女は言った。

嘘つけ。

思わずそう言うと、嘘じゃないよ、とムキになってマリナが言い返してきた。

何があったのかは聞かなかった。
シャルルと話をして、そうしてマリナが涙をこぼしている。
それが、事実だ。

少なくとも片方・・・マリナにとっては、穏やかな話にならなかったわけだろう。

「・・・送るよ」

本当なら、ここで彼女の頭を抱いて、そっと抱きしめてしまえば良かったのかもしれない。でも、それでは駄目なのだ。

マリナは温室の薔薇じゃない。

風雨にさらされて、強い日差しや凍える寒さを経験し、そしてそんな環境の下でも花を付けることのできる人間だ。

そういう精神力にシャルルは惹かれてやまないはずなのに、どうしてシャルルは彼女を温室の花にしようとするのか。

選ぶのは、彼女だ。

シャルルがどんなに駄目だと言っても、こればかりは無理な話だ。

彼女の側にもっといて、あれこれ聞きたい気持ちを抑え、背中をさすってやる。

涙を拭ってやることは簡単だったけれど、それはオレのやり方ではない。

一緒に歩む女には、自分で涙を拭って欲しい。でも、そのときは傍らに居たいとは強烈に思うけれど。

彼女は手の甲で涙を自分で拭いた後、泣いちゃった、と言って恥ずかしそうに笑った。

「青磁、聞きたいけど聞けないんだよなあって顔してる」

「でも聞かないよ。言いたくないことは聞かない主義だしね。言いたければどうぞ。」

そう言うと、マリナはじゃ、言わないわ。と言って赤く腫らした目を瞬かせた。

また明日ね、と言って車に乗せる。

彼女は少し頷いて、また笑った。まだ鼻の頭が赤かった。

きっと、今夜も泣くのだろう。

泣きたいなら泣けば良い。我慢することはない。

一人で泣きたいというのであればそうすれば良い。

でも、二人で泣きたいと言ったときには、もう、君を離さないよ。

青磁の側で泣きたい、と言ったときには、君を攫っていくから。

そう、思った。根拠のない妄想に駆られながら、今度は、薔薇園に足を運ぶ。

さて。

今度は、こっちだ。

シャルルは、まだ、居た。

薔薇園と言っているが、隣接した温室には、別の花も育てている。
先般は、そこから芍薬の花を失敬したのだが。

シャルルは、彼の手によって創られた薔薇の状態をひとつひとつを丁寧に注意深く確かめていた。

完全に管理された環境で、庭師もいるにもかかわらず、彼はこうしてここに足を運び、ファム・ファタルのために、次の日のテーブルに飾る花を決める。

マリナは知らないんだよ、シャルル。

その姿を見て、少しだけ切なくなった。

客人の現れない、日本風のゲストルームにいつも一輪だけ刺さっている薔薇の花のことを。
毎日毎日、最高の状態のものを、シャルル自身が自らそこに飾っていることを彼女は知らないんだよ。

自分の激情とは別に、そんなシャルルの寂静だけれど早瀬であるその流れに、彼本人が身を任せることができるのだろうか心配になった。

「帰ったよ」

そう言うと、振り返らずに、シャルルはそう、と言っただけだった。薔薇の葉脈を観察していた。

「泣いてたよ」

その言葉に、初めてシャルルが手を止めた。答えはなかった。
彼女は、シャルルの前では泣くのを堪えていたらしい。

暫くの沈黙の後、「きちんと話ができただのか？」と聞くと、短く「青磁に結果を報告する理由も義理もないが」と言う。

「シャルル、そういう言い方はよせ」

ひとつ、ため息をついて、煙草を取り出した。

シャルルが動いた。持っていた煙草を取り上げる。くしゃりと煙草をねじ曲げた。

「ここでは吸うなと言っただろ」

透き通るような青灰色の瞳でシャルルがそう窺めた。

「そんなに、ここの薔薇が・・マリナが大切なら」

そう言って言葉を切った。

「どうしてあんなに泣かせるんだ。

オレには理解できないよ、シャルル。

話をちゃんとしたんじゃないの。

前の彼の事や、これからのこと。

・・もうすぐ仕事は終わる。彼女なりの評論レポートが提出されたら、この契約は終わる。

そうしたら、すべてが終わるんだよ。」

それは自分に言った言葉なのかもしれなかった。

この作業が終わったら、彼女と別れなければならない。

彼女は日本で生活している。自分は大学院の休みが間もなく明ける。

何でもない日々がまた始まるのかと思うと、それだけでぞっとした。

そうして・・そうして、また、自分はふらふらと放浪するのだろうか。

かつてのシャルルのように。魂を彷徨わせて、何気なく生きろと言うのだろうか。

それはもう、イヤだった。戻れない、とそう思った。

「そんなに知りたいなら、彼女から聞けば良いだろう」

「彼女は自分が勝手に泣いたと言っていた。

でも、あんなに食事時にはシャルルと話が出来ることを喜んでいたのに、

帰り際には泣いて帰るなんて、何かがなければ、そういうことにならないだろ。

彼女はそんなに器用じゃない。」

「よくわかっているじゃないか」

「シャルル。オレはシャルルと口論をしに来たんじゃない」

しばし沈黙した。

彼の意図がよくわからなかったからだ。

やがて、彼は少し息を吐くと「悪かった」と言った。少し疲れている、と付け足した。

びっくりした。彼が弱音を吐くのを初めて見たからだ。

いつだって彼は間違いがなく、正解しか言わないかわりに、自分のことは決して明かさない。

その意味では、彼と彼女は同じだった。

自分のことはすぐ、二の次にする。

これは、けんかよりも深刻な問題のかもしれない。

でも、シャルルの口からは聞けないだろう。

彼の自尊心の強さは、何よりも青磁がよく知っている。

自分も同じだから。

「シャルルから話さないのなら、マリナから聞くことにする。

でも、聞いたら引き返さないよ。」

そう言うと、シャルルは小さく笑った。

先ほどの疲れている、と言ったシャルルではなかった。

bellicoso！（攻撃的に）

そんな笑みだった。

薔薇園から出てすぐ、煙草に火を付けた。月が浮かんでいた。

大きく煙を吸い込む。吸い込みすぎて、少し、むせた。

翌日の作業は正午までにして、午後は少し気晴らしをしよう、と言った。

なんと言っても、はれぼったいマリナの目を見ていると、痛ましい気持ちでいっぱいになり、薄暗い部屋の中で、息の詰まるような作業を繰り返すのは今日くらいは休んでも良いのではないかと思ったからだ。

そう、オレにも、彼女にも気晴らしは必要なのだ。

まだ途中で作業が終わらない、と言う彼女を無理に立たせ、今日の午後はデッサンの時間にしよう、と言った。

晴れた良い天気だ。外でランチをしながら、夕方まで庭で思い思い、スケッチをして自由に過ご

そう。

そう言うと、マリナの顔が見る間に晴れやかになる。萎んでいた花に水をやった気分だ。ずっと、デスクワークで、彼女の生業の基本であるデッサンやスケッチをしていなかった。膨大な資料の中には、下書きや絵の構図についてのメモなども入っていたから、さぞかし、うずうずしていたことだろう。必要ないとわかっているけど、彼女がいつも持ち歩いている黒い鞆の中には、たくさんの画材道具が入っていることを、知っていたから。たまには外の空気に触れなければ、参ってしまう。彼女も、シャルルも、オレも。

完璧に手入れされたアルディ家の庭園は、ちょっとした散歩コースだった。芝生が綺麗に刈り揃えられ、ゆるやかなカーブを描く小道があり、季節季節の花が植わっていた。マリナは目を輝かせて、泉や庭園の木々や木の実や花を狙ってやって来た小動物達を眺め回し、自分のスケッチするべき場所を物色し始めた。

「お昼を食べてからにしようよ」

そう言うと、マリナはそうだね、お腹空いたね、と言った。

目の腫れは大分引いていた。

二人で、日が良く当たる場所にビニールシートを敷いて、昼食用に作ってもらったランチボックスを広げる。遠足みたいだ、とマリナがまた喜んだ。小学校の時に、写生遠足に行ったことがあり、それが自分の今を決めたと言った。

食事の時にする話ではないけれど、と前置きをしてから。

「昨日、随分泣いたの？」

そう言うと、頬張っていたサンドイッチにむせたマリナが慌ててお茶を飲んだ。

「本当に、今、する話じゃないし・・・」

それに、彼女はサンドイッチを飲み込んで、言った。

「話すまで、聞かないんじゃないの？」

「最初はそう思ったけどさ」

考えてあったイイワケを披露する。

「ほら、今取り組んでいる仕事って陰鬱だろ？だから、それがイヤになったのかな、とか。

シャルルと気まづくなってしまうようなことがあったのかな、とか。

そういう泣きはらした顔で翌日の仕事に影響が出るようなことがあったら、やっぱり何とかしないと効 率よく進まないと思うし。」

その話をマリナが素直に信じたとは思えなかったけれど。

今、話をする相手はオレしか居ないわけで。オレはシャルルにしか話せないわけで。

その、シャルルとマリナが何かこじれていれば、当然にオレが板挟みになる、と考えたようだ

った。

最初に、ごめんね、と一言詫びがあった。

「なぜ、謝るの？マリナはオレに何か悪いコトした？日本人はすぐ謝るからな」
そう言うと、青磁は面白いわね、とくすくす笑った。

「シャルルは、ちゃんと、マリナのことが好きだと思うよ」

そう、切り出した。

マリナはそれには答えずに「言葉って難しいね」と言った。

「ちゃんとやらないといけないことを言っても伝わらない時がある。

やらないことが良いこともあるし、言ってはいけないこともある。」

「それはシャルルに、きちんと伝わらなかったってこと？」

うん、と小さくマリナが頷いた。

この後、マリナの告白があります。

こちらは「秘するが花 04 恋河徒情編 50 迷夢編」をご覧ください。

(タイトル、ながっ！)

マリナの話聞き終わった後、深くため息をついた。

そうしてポケットから煙草を取り出して「いい？」と許可を求めてから火を灯した。

そうして一息ついて、改めて言う。

「ほんと、オマエは阿呆だ」

そんなに連呼しなくても・・・。

マリナの顔が曇った。

「何度でも言ってやる。オマエはオレが今まで見た中で一番の阿呆だ。」

「青磁！」マリナが叫ぶ。

隣に座った年よりもずっと幼く見える彼女を横目で睨む。

穏やかな日差しが眩しかった。それとも、彼女そのものが眩しいのか。

目を細めた。

「シャルルにはっきり言えば良いだろう。今の自分を見て欲しい、って」

きゅっと唇を結んで、彼女の瞳が大きくなった。

切りそろえてやった前髪がますます彼女を幼く見せる。

「言えないよ」

「ああ、だからそういうところが苛々するんだよ。」

はっきり言ってやらないと、こういう手合いはぐずぐずと物事を先送りにしがちだ。

もっとも、マリナはそういうタイプではないらしかったが。

「なんで言えないの。」

「それなら青磁は言えるの？・・・私だって、今のシャルルを見ていないかも知れない。」

「それは時間というものが解決するだろう。」

あっさり切り捨てた。

「マリナは普段凄く大胆だけど、なぜヤツのことに限ってはそう慎重というか、結論を出すために考えることや行動することを止めてしまうの？」

彼女が言葉に詰まる。当たり前だ。凶星だもんな。

「時間じゃなくたって良い。ちゃんと言葉で言って態度で示さないと。自分のことわかってくれるでしょっていうのが一番良くないこと、頭で理解してるんだろ？」

はあ、とため息をついて、マリナがお茶を一気飲みした。

「同じこと言われたわよ。他の人にも。昨日国際電話でさんざん怒られた。」

へえ、シャルルのコトを相談する人が、いたんだ。マリナにも。

そう考えると、その相談相手が自分でないことに、ほんの少しがっかりした。

その棘のような胸の痛みを誤魔化すかのように、ぽんぽんと彼女の茶色い髪を叩いた。

日溜まりの匂いがしそうな髪だ。

「後は、書類をまとめるだけだね」

「そうだね」

誠次の日記を読んだ後。

何となくお互い無言になった。

彼の激烈な生き様について記録を読んだのはこれが初めてだった。

マクドゥガル家の者達が話す彼とは違っていた。一人の女性を愛して愛して愛して愛して愛して壊れた。

何となく、シャルルを思い出した。

彼がその虚無で退屈な人生から抜け出したと信じていてもできなかった時に。

戻れない路に、出口を作った人間がいる。

マリナだ。

その救いの手をシャルルは取ろうとして戸惑っている。その暗い道に彼女が引っ張り込まれしないかどうかを心配している。

そう思うと、シャルルの理解できない行動のうち、ほんの少しの部分だけだけれど、わかったような気がする。だから。暗いその道に踏み込む勇気があるかどうか、一緒に堕ちてくれるかどうか、マリナに問うているんだと思った。

万が一そんなことになれば、彼は全身全霊で光の場所に彼女を戻すことに力を注ぐであろうが。

シャルル。

すでに誠次の日記を読んだシャルルは、一体、何を思ってたんだい？

聞いてみたかった。

煙を吐き出して、少し遠くを眺める。

緑の濃い庭園だ。穏やかで静かな庭園。

こんな時間も悪くなかった。

ゆっくり景色を眺める事を止めてしまってどれくらいだろう。

マリナは不思議な女性だ。彼女を愛おしいと思う。

・・・でも、オレは誠次やシャルルの様には愛せない。

相手と一緒に堕ちたい。

一緒に堕ちることより、自分だけを堕ちることを選択した愛は、オレの愛し方じゃない。

闇の場所に堕ちるなら一緒がいい。光の場所に居るなら、一緒にそこに居たい。

「言うだけは言ったぞ」

それだけ言うと、立ち上がった。その話はそれっきりしないことにした。

スケッチ、しないとな。

煙草の火を消して立ち上がる。

彼女はうん、と言って、少し嬉しそうに目を細めた。

陰鬱な作業からほんの少しの間、解放してやりたかった。

そうしてこれからもずっと、彼女の髪を切り、泣いていれば涙を拭けと言い、

そして彼女のキスを乞う。いけないことなのだろうか。

顔を上げろと言った女性をどうしても欲しいと思うことが、それほど、いけないことなのだろうか。

シャルル。シャルルは医者のかせに、随分とオレのことを甘く見てるんだな。苦笑した。

風が吹く。

マリナの前髪をふわり、と持ち上げる。

どこでスケッチしようかと相談するマリナが愉しそうに笑う。

それだけで、良かった。今は、一緒に過ごせる。それだけで良かった。

オレは青磁・マクドゥガルだ。その名にかけて、もう一度。誓うよ。

マリナ、君を妻にするってね。

もう遠慮しないからな、シャルル。

(FIN)

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

■01

「そんなに膨れることないだろう」

彼女の頬を、青磁・マクドゥガルが軽く突いたので、彼女はますます機嫌を損ねてしまった。

「軽々しく触れないで」

そんな言葉を使う彼女の横顔が、愛おしい。

隣に並んでいた青磁は、満足そうに、グラスを持ち直した。

そしてよく冷えた、淡く発泡する水色の液体に唇を寄せた。

辛口のそれを流し込むような無粋な真似はしない。

本当に・・・軽く唇を湿らせる程度であった。

彼はいつも軽いアルコール程度しか口にしない。

彼は加療中であり、投薬治療を受けているからだ。

それが、日本にいる大きな理由のひとつだった。

その慣れた仕草が、彼女を寂しくさせる。

彼が、ここではないどこかの住人であることを思い知るからだ。

しかし、そんな会話も周囲の噪音にかき消されてしまう。

今日は、恒例のハロウィンパーティーだった。

恒例というのは彼女にとっては正確ではない。

確かに毎年開催されているようではあったが、青磁に誘われなければやって来ることはなかった。

彼の住む地域が、大学の講堂を借り受けてハロウィンパーティーを開催するのは、確かに恒例のことであった。

もちろん、学内の生徒も参加することが出来る。

学祭とは少し違う趣で、地域との親交について積極的に推奨している大学の方針であった。

よって、できるだけ参加するように、という回覧が院内にも回っていたのだと青磁は説明した。

それに参加することで、何かが得られるとは思わなかったけれども。

青磁は、思い出を作りたいと言った。

「一緒じゃなければ行かない」

彼はそう言った。

困ると彼女は言った。

彼はやがて帰国する身だ。

だから、少しでもこういった行事に参加したいと言った。

人付き合いが良く、様々な場所に出歩く彼は、流暢に日本語を喋る。

その容姿も際立っていることから、彼はいつも中心にいる存在だった。

昔からそうなのだろう。

人を導く気を持っているのだ。

それでいて憂いを帯びており、決して戯れに誰かと恋を始めることはしない。だから、ひょっとすると異性は好まない性質の者ではないかと囁かれる始末だった。

それだけ、彼に注目する者は多かった。

留学生でありながら、大変に日本語が流暢なのは、彼の家が親日家で、幼い頃より母国語と同じ程度に使えることを必要としていた環境だからだそう。

長い手足に、青年特有の着やせする体軀に、整った顔立ちは、確かに人目を惹いた。

特徴的なのは、片方だけ薄い瞳であった。

そして、彼の家の男子を象徴すると言う、麒麟のレリーフのピアス。

これだけで、誰もが魅了された。

異国の王子が舞い降りたと、誰もが彼の周りに集まった。

彼が眼疾患で通院治療しながら、大学院に通っているという事実は瞬く間に広がった。

彼が隠さないからだ。

それなのに、彼はまったく容姿には気にせず、誰にも気さくに話しかけるし、話に応じる。

院内での成績も抜群で、この間の論文は同科の教授達を唸らせた。

切迫して努力している風には見えないが、彼は彼なりに気配りをして、それで居ながらもこの状況を楽しんでいる。

そんな器の違いを感じるのだろうか。

誰もが彼を呼ぶ。

こうやって、行事のある都度、彼を呼ぶのだ。

青磁は彼女に視線を向けた。

・・・抗えない強い目付きに、彼女はそれでも横を向いた。

そして、彼は最も大きな特徴を持っている。

紫電と呼ばれる鋭い視線が、彼を彼にしている。

「私は確かに参加するとは言ったけれども」

「だから参加しているだろう？」

チャリティも含めているし、何か気に障ることでも？」

面白そうに、青磁が言うので彼女はますます不機嫌そうに声を潜めた。

「一緒に行こうとは言われたけれど、それ以外は承諾してない」

彼女が憤慨しているのは、青磁が会場に入るなり、彼女のことを「オレの恋人」と声高く宣言したことであった。

青磁が誰かを同伴して登場することは皆無であったので、この出来事に誰もが驚愕した。

彼は、誰のものにもならないという不文律があったのに。

彼が、それを覆した。

残念がる溜息まじりの声と、彼におめでとうと叫ぶ祝福には大きすぎる音声と・・・用意していた紙吹雪が定刻よりも早く巻き上げられて、会場は大混乱になった。

わっと歓声があがり、それでなくても昂揚気味の場内がさらにいっそう、姦しくなった。

反論しようとしたけれど、ぎゅっと肩を抱かれて、歓声に囲まれて、ただただ彼女は呆然とするだけであった。

離れてはいけない、という彼なりの防護の合図であったが、彼女はこれで逃げられなくなったという閉塞感を感じた。

今まで、彼の思いから逃れていたのに。

一緒に行こう、と言われて、断れなくなってしまった。

それは彼が間もなく日本を離れるからだ。

来年になれば、彼はこのパーティーに参加できなくなる。

残された時間は僅かだった。だから彼女は今回だけはイエスと言ったのだ。

彼が、思い出を作りたいと言ったから。

それなのに、彼は陽気に彼女に笑いかける。それが、気に入らなかった。

「何をそんなに怒っているの？」

「別に」

彼女は素っ気なくそう言った。

彼の紫電と呼ばれる強い視線から逃れることが出来るのは、この会場では彼女くらいだった。

ひっきりなしに皆が青磁と彼女に語りかける。

式は？とか。

いつからなのか？とか。

彼女の戸惑いをまったく無視して、皆が陽気に話しかける。

でも、そこから逃げ出すことが出来ない。

ひとりになれない。

青磁が傍らに居るからだ。

彼女は置物のように、ただ、座って居るだけしかできなかった。

青磁は、これが望みだったのだろうか。

そんなことさえ考える。

決して、そんなことはないと言頭の中で否定しながらも。

■02

催しと言っても、普通の宴会を拡張しただけのものだった。

それでも、近隣の有識者が招かれて、祝辞を雛壇の上で述べていたし、流れる音楽は目的に合ったものであったし、皆がどこかに橙色の何かを身につけていた。

空調が効いているはずなのに、会場は熱気で暑かった。

用意された簡易テーブルと椅子に納まりながら、彼女は差し出されたアルコールに口をつけた。

気持ちばかり差し出された固形物には手を伸ばす気になれなかった。

酷く喉が渇いていた。

頬が熱かった。

通り過ぎる誰もが、彼女を奇異の眼差しで眺めるからだ。

身が、縮まる。

青磁に祝福の言葉をかけるものばかりではなかった。

冷やかに彼女を品定めするかのようにつめる者も居た。

そこで、彼女は気がついたのだ。

彼と逢っている時には、その他の誰もが存在しない空間が用意されていたことに。

彼は、何もかもから解き放たれて彼の言葉だけを聞くことが出来る場所を用意した。

それが、彼のマンションであったのなら。

こんな風には感じなかった。

．．．．狡い、と思った。

逃げられないじゃない、と思った。

どうして、彼女を自分の恋人だと宣言する必要があったのだろうか。

彼は、いずれ、去ってしまうのに。

在日する間だけの恋の相手と定められた彼女は、一体どうして過ごせば良いと言うのだろうか。

そんな彼女の憂いについて、彼は払拭するように、そっと言った。
焦げ茶の髪の下から、声が漏れる。

「・・・オレは連れていくつもりだから」

「何を?誰を？」

彼女の問いに、彼は呆れたように少し無言になった。

長い脚を組み直す。

これは彼が苛立っている証拠だった。

「決まっているだろう。目の前の恋人を、オレだけのものにする」

「青磁、青磁」

彼女は慌てて言った。

「私は青磁の都合でそんな風に変更をすることが出来ない」

「わかっているよ。だから、あえてそう言う」

彼はそう言って、持っていたグラスに口をつけた。

やり場がない感情を逃す方法を、互いに熟知していなかった。

高い天井から、強い暁が射し込んできて、彼の虹彩を際立たせていた。
窓の向こう側は既に暗闇だった。

最近の音楽はわからない。

だから、空気に乗って流れてくる音に興じることができなかった。

それは彼も同じであった。この国のめまぐるしい流行には少しも興味を示していない。それなのに、彼女をここに誘った理由を彼はまだ彼女に説明していない。

それに、彼女を彼の恋人だと公言する理由がなかった。

なぜ、今なのだろうか。

なぜ、この場なのだろうか。

これまでと同じ様に、ひっそりと静かな時間を過ごせばそれで満足ではなかったのだろうか。

彼はこうやって、派手派手しく人々の注目を浴びることを快としているような人物だったのだろうか。

・・・彼女に、朝顔になってくれと言った青磁の、考えていることがわからなかった。

彼だけの朝顔であることと、皆に周知することは別であると考えていた。

彼もそうだと思っていると認識していたのに。

彼女は居たたまれなくなる。

何かを約束したわけではない。

でも、彼が口にする言葉の端々が・・・彼女に期待をもたらす。
それが、苦しかった。

「はっきり言ってなかったかもしれないけれど」

彼はそう言って、彼女を見た。

もっと近い距離で、彼の瞳を見たこともある。

でも、それでも彼女は戸惑っていた。躊躇っていた。

喧騒の中で、彼は彼女にだけ聞こえる声量で言った。

「ひとりで目醒めたくない」

それなら、自分ではない誰かでも良いのではないのだろうか。

彼女は想っていることを口にした。

すると、彼は顎をあげて少し嗤った。

ハロウィンパーティーであるけれども、学生や一般の者が混じる会場で、彼は際立っていた。

きちんとタイを結んでいたし、それでいて仰々しくない装いだった。

オレンジの斜線が入ったボタンダウンシャツに、淡いクリーム色の地のネクタイは凝った織りであった。ジャケットは細身のもので、焦げ茶色の上質なものだった。一般の来訪者でもこれほどの品は身につけていない。それに、靴も先端の尖ったものであったが、靴紐の長さは左右対称で、決してだらしない印象は与えなかった。

・・・隙がない。

彼はいつも、彼の家ではラフな格好であったのに。

朝顔を育て、そろそろ寒くなるから室内に入れないと、と憂える青磁と違う彼がそこに居た。

彼女は寂しくなる。

公言されたことがいやなのではない。

・・・こうやって、彼の、外の貌を知るのが、苦しいのだ。

■03

喧騒の中で、青磁は彼女に囁いた。

簾を外した空気に乗じて。

彼女の戸惑いを吹き飛ばそうとした。

「気づかれないうちに、うやむやにしようと思うのなら・・・最初から断りは入れない」

確かに、青磁に言う通りだった。

彼は瞞さない。

誑かさない。

彼女を道具として扱わない。

．．．．いつも。

皆は彼女ではなく、彼女の知己との繋がりを求めて話しかける。

彼女には興味がない。

意味がない。

存在はない。

そう言っているかのように、彼女を媒体とする。

だから哀しい。青磁と一緒に居ると自分の存在が薄くなりそうだった。

薄くなることによって、彼がなぜ自分を愛でるのかという理由を失いそうだった。

誰にも何も影響しないから、だから青磁が彼女を選んだのだと思いたくなかった。

青磁自身に影響しないから、青磁は自分を．．．つまり何も取り柄のない自分を伴侶として選んだのだと思いたくなかった。

それが結論？

そう尋ねたかったけれどもできなかった。

そこで、彼女の求める答えが、答えである可能性が高かったから。

．．．．青磁・マクドゥガルはあなたを選ばない。

そのような答えが返ってくることが、怖かった。

だから、秘密にしていた。

彼との関係を黙っていた。

他の者がどんなに．．．彼との浮き名を噂しようとも、平然としていた。

その日は、彼女と過ごしたのに。

別の者と過ごしたという噂を受け入れた。

青磁は、その都度否定した。

でも、彼女は否定も肯定もしなかった。

青磁がそんな噂を耳にする日は必ず彼女に触れにやって来ると知っていた。

でも、知らないふりをした。

嫉妬は感じない演技をした。

どこに居ても・・・何をしても、彼女は青磁を信じて居たからだ。

彼女以外の誰かを抱くことはしない。

彼女以外の誰かに愛を囁かない。

それを知っていたから。

慢心かもしれない。

でも。

それでも・・・。

青磁は、そんな風に他の誰かに不器用な愛を分け与えることが出来ないから。

彼女は彼を愛おしいと思うのだと感じていたから。

だから、解放していた。

それだけだ。

「目が覚めると、もっと好きになる。他には何もいない。

・・・理解ある大人を演じることができない。

・・・ただ、欲しい。

それだけしか言えない」

目醒めると彼はいつもそう言った。

彼と彼女との夜は夢だと言った。

幻などではない。

事実だ。

それなのに、蜻蛉のように彼女は夢だと繰り返す。

・・・違う。

彼女と重なった熱さは夢ではない。

そして、享楽の瞬夢ではないことを、彼はよく知っている。

「・・・好きすぎて、どうにかなりそうだ」

「それでは、生きにくいでしょうね」

彼女は冷たくそう言った。なぜそんな風に素っ気ないのか、彼は知っていた。

そして、彼女は気がついた。

青磁が・・・彼が少しも周囲を見ていないことに気がついた。

彼は皆と過ごす時間を大事にしたいと言っていたのに。

それなのに、彼女の周囲に気を配る割合がとても低くなっていることに気がついた。

ひとりだけに固執すると、彼はいつか破綻する。

彼はそう感じているようだった。

それでも目の前の彼女にむける注意を削ぐつもりはないと彼は無言で言っていた。

羨望の眼差し、好奇の眼差し、彼は様々な眼差しを受けて来た。

彼の視線は強い視線で、紫電と呼ばれている。

一度見たら忘れられないほどの瞳の強さと美しさを持っていた。

皆が、彼を直視できない。

ほんの暫く目を合わせていても、すぐに逸らしてしまう。

彼自身から眼を逸らされるようで、否定されるようで、青磁はそれが時折寂しくなったこともあった、と正直に吐露したのは、彼女の前でだけであった。

それを、恋と間違って認識しているだけだ。

何度もそう言った。でも彼は違うと言う。そうじゃないと言う。

恋には、偶然の重なりは必要なかった。

理由はひとつだ。

ただ、出会ってしまったからだ。

だから、理由付けは必要ないと彼は言う。

理由がないから、これは恋ではないと彼女は言う。

そうすると、青磁は笑う。

それでも、彼女だけが良いと言う。

それでも、彼女だけが良いのだと言う。

なぜ、彼女にそれほどまでに固執するのかわからなかった。

もっと違う未来もあったはずなのに。

「思い出を創りたいのではないの？」

知らない音楽が響く喧騒の中で、彼女は青磁に言った。

確かに、彼は楽しそうに優雅に座って居るが、本来はそうやって静を楽しむ場ではないことは、彼は承知しているはずであった。

「騒がしい催しは、どこの国でも一緒だよ。・・・それに、日本のハロウィンはとても大人しい

。これが思い出と言ったら、寂しすぎる」

「そうなの？」

「大体、室内に籠もって会話を楽しむ催しじゃないだろう。・・・チャリティも兼ねていると聞くので、出席しているけれども、ここにオレと同じ様に苦笑いしている留学生がどれだけいるのかな」

とても留学生とは思えない流暢な日本語で、彼は辛辣にそう言った。

その物言いが、どこことなく、あのフランスの華を思わせた。

彼の影響を受けているのは間違いなかったが、それに加えて、彼は生まれながらに人を惹きつける術を知っていた。

そして、それが適用できない相手がいることも、知っていた。

今、目の前で不思議な顔をして青磁の真意を推し量ろうとしている彼女は、彼の思い通りにならない。

待って、待って、待ち詫びた。

こうして、恋人だと堂々と言える日が来ることを。

彼女がどんなに驚いたり怒ったりしても、今日こうして披露することを延期したり取りやめたりするつもりはなかったもので、その通りに実行したまでだった。

「もっと嬉しがるか、驚くかと思っていた」

彼女は俯いて、両手をぎゅっと膝の上で握りしめた。

「私、見世物ではない」

「なんだ、怒っているのか」

青磁が軽くそう言ったので、彼女は唇を噛んだ。

「オレだって見世物じゃない。

でも、こうしないと君が他の誰かにこの場所を赦してしまうだろうから。

皆、オレ達のことを祝福している。

そうじゃない輩も居るかも知れないけれど、それなら、堂々と言えば良い。

オレはいつでも受けるつもりだよ。

でも、そんなことは瑣末なことです・・・今は、ようやく君を独り占めできたという満足で胸が一杯なだけだ」

「私は品物じゃない」

幾度かそう言って彼を窘めたことがあったが、彼はまったく懲りていなかった。

肩を竦めて彼女に言った。

彼の茶色の髪が頬にかかり、魅惑的な微笑みを彩った。彼女に彼の紫電は影響しない。

だからこそ、青磁は彼女に夢中であるのに、彼女はそれを理解していない。

「そうだよ。だから、君の隣を独占することが嬉しくて仕方が無い。・・・自分は誰のものにもならないと言っている君が、オレと並んでこうして皆の前に出てこようと思う気持ちになったこ

とを素直に喜んでいるだけ」

■05

「君はオレのものにならない。オレも、君の所有物にならない。

けれども、君の隣をオレは独占する。そして、オレの隣に居るのも、君だけだ」

青磁・マクドゥガルはそう言うと、艶然かつ余裕を満たした笑みで、彼女を見つめる。同じ年頃の者であれば、一瞬で心を奪われてしまうような、そんな笑みであったが、彼女はそれに構わずに、横を向いた。

・・・周囲は喧騒を通り越して、轟音に近い空気が、肌に震動を伝えてくるようなほどであった。だから、誰も彼らの会話を聞いていない。

気配を気にして、ちらちらとこちらを見る者は大勢いたが、立ち止まって、彼と彼女の会話を聞き逃すまいと耳をそばだてる者は居なかった。

・・・彼が選んだ場所は、視界が開けており、それでいて自分たちの姿が誰からも見える一方で、こちらの会話が聞こえない位置であった。

恋人だ、と彼は宣言した。

けれども、青磁と彼女の座っている距離は、恋人同士のそれではなかった。

彼女の行為について・・・彼と距離を置いて座ることについて、咎めたり眉を顰めたりはしない。

そして、彼女が望まないのに青磁から距離を縮めることはしなかった。

しかし、それでいて、彼女に寛容であっても、彼は他者を近寄せなかった。

彼らの卓に座ることを許可しなかったのだ。

顔見知りか幾人か彼に話しかけながらやって来たが、彼は適当にあしらい、会話をいくつかして、そして皆を遠ざける。

・・・これは、彼の長い習慣と経験で身についたものである。

相手に不快な思いをさせずに、遠ざける。

彼はやはり、ここに留まって長居するべき人物ではないのだということが、こんな些細な様子から見てとれた。

それでいて、彼女の僅かな身動ぎに反応し、何か口にしたいのか、暑いのか寒いのか、とあれこれ尋ねる。

仏頂面の彼女に、遂に青磁は困ったように言った。

「オレ、本当はこんなに他人を気にする方ではないのだから・・・わかってくれよ」

青磁を困らせたいのではないのだ。

けれども。

なぜ、満面の微笑みで幸せそうに青磁を見上げることができないのか、彼女は理由を知っていた。

彼の口振りから、彼はこのパーティーに来たかったのではなく、思い出を創りたかったのではなく・・・最たる目的は、彼女との関係を皆に周知徹底することなのだとわかってしまったからだ。

先ほどから少しも会場の中に混じろうとしないからだ。

座ったままで、決して・・・その場を動こうとしない。

だから、普段は余り口にしないアルコールで唇を湿らせているのだ。

それに、彼女の声が聞こえるだけで十分だと言わんばかりの、中心から遠く離れた場所を選んで座った。

ここは空調が良く効いていて、熱気で彼女がのぼせないようにするためであった。

・・・ここまで配慮して、彼女を着座させたのかと思うと、彼女はつい、声を漏らして唸ってしまう。

だから尚更、彼にそのまま遵うことの出来ないと囁く自分の感情に従おうかどうか、迷ってしまう。

「・・・今、何を考えているのか、あててやろうか」

青磁は面白そうにそう言うと、長い脚を組み直した。

不敵な笑みを浮かべていた。悪戯っ子のように瞳を輝かせている。

「やられた、と思っているだろう」

「わかっているなら、コメントする必要はない」

彼女のこたえに、青磁はまた笑った。

そして綺麗な歯を見せながら、微笑みながら、彼女に宣告した。

「君の思った通りだから。

・・・オレは君がいつまでもそうして誰かの前に一緒に出ることを嫌がるから。君が誰かに攫われないように、君をここに連れ出した」

「青磁」

困った彼女が彼の名前を呼んだ。

彼女は俯いた。

確かに、いつもの彼女であれば、こういった催しには出席する気にはならなかつただろう。

とにかく、人の多い場所は苦手だった。

青磁と一緒に歩く。

しかも、彼は、最初に彼女は特別な存在だと言ってしまった。

皆が、彼女を彼女ではなく、青磁の思い人として眺め回す。

彼が帰国するまでの、憐れな愛翫人形だとでも言うかのように。

間もなく、彼が帰国するから、それで未来を考えずに彼の傍にすることを選んだのだ、と皆がそう思っているのだろうと思った。

そんな憂いに満ちた顔で黙ったままの彼女に、青磁は終始、柔らかく接した。

しかし、彼女が惑うような言い方はしなかった。選ぶのは彼女だ、と言わなかった。

「・・・オレがどう思っているか、気にしろ。オレではない不特定多数のことなんて、考える時間があったら、オレだけを見てくれ」

■06

彼女は、その言葉に黙り込んでしまった。

彼女ではない他の誰かが聞けば、それは・・・彼が表すことの出来る最大の表現であると思うだろう。

いつも誰かに見られる青磁が、彼女には・・・見て欲しいと言う。

これが何を意味するのか、わからない彼女ではなかった。

最初に言った。

彼は宣言した。

これを最後にする、と。

でも、最後の恋にするには、彼は若すぎた。

年齢が妨げているのではない。

けれども・・・彼にはもっともっと広い未来があったはずだから。

だから、ここで狭めてはいけないと思った。

いつか、笑って・・・こんな苦しい恋を共有したのだね、と言っただけの程に穏やかになれるのであれば。

そんな思い出にしていまいたいと思っていたのに。

けれども。

彼の思い出は、これから始まると言う。

そして、この瞬間に、彼の恋人を表出した祝勢で賑わっている。

彼女の知らない所で。

気付かない素振りをして、無駄であった。

彼は知っている。

彼女が戸惑っていることを知っている。

だから・・・だから、最初に「オレの恋人だ」と宣言して、それ以降は何もコメントしないままで居る。

「オレはあなたをこの国限定の恋人にするつもりはない。はっきり言った方が良いのであれば・・・オレは君を生涯の妻にするつもりだ」

青磁の言葉に、彼女は首を横に振った。

「青磁。それを言うてはいけない。いずれ・・・選ばなくてはいけないときが来る」

彼は苦悶に満ちた声で返答した。

「いつだよ・・・いつが来たら、満足するんだ。」

君はオレの朝顔だ。オレの家で、朝顔と定めることは・・・何を意味するのか、知っているはずなのに、それを越えてオレに問うのか？」

青磁はそこまで言うと、噪音の中であって、彼女の面を見つめることに集中した。

その間。それほど長い時間ではなかった。

けれども・・・誰からの問いかけにも、彼は応えなかった。

小さな返事すら、しなかった。

青磁・マクドゥガルが・・・

誰に対しても求めないこたえを、彼女に求めた瞬間であった。

彼はささめく。

「・・・オレは今・・・貴女をオレの朝顔だと定めた。皆に告げた。

それが罪なら、言ってくれ。オレは・・・」

■07

「罪ではない。いけないなんて、言っていない。

青磁が・・・なぜ、そんな風に考えるのか、理解できない。

だから、そんな言葉に変換しないで欲しい」

彼女は青磁に言った。

青磁を理解できないと言った瞬間、彼を深く傷つけてしまったと思った。けれども、発した言葉を取り消すことは出来なかった。

だから、彼女は彼の前ではいつにも増して寡黙なのだ。

青磁に、多くの言葉を浴びせることができなかった。

ひとつひとつ、遣る瀬無い彼女の気持ちを込めて短く彼に向かって投げるだけしかできない言葉しか持っていなかった。

・・・もし、同伴することが嫌であったのなら。

彼の、傍らに居るのがいやだったのなら。
最初からここには来なかった。
どうして、彼はそれを理解しないのだろうか。

彼は彼女に、少し早口に言った。
決して、乱れる素振りを人前では見せない。
いつも彼は堂々としており、誰もが彼に魅了される。
それなのに・・・彼は端正な顔を曇らせた。
薄い瞳の側の目が、僅かに細くなった。

「いずれっていつだよ。
オレは、いつまでも待てる。
もうずっと待ったから。
もうずっと待っているのだから。
でも、それは『いつか』だからだ。
必ずやってくると信じて居るから、待てる。
いや、そうでなくたって良い。
オレが待つという自由を誰も奪うことが出来ないのだから。
君でだって、オレが待つことをやめさせることは出来ない」

溜息を幾つ漏らしたら、楽になるのだろう。
回数が決まっているのだったら、何度も何度も、それに向かって溜息を漏らすのに。
しかし、吐息は彼女を苦しくさせる。
青磁の喘ぎは彼女をもっと苦しくさせる。

「オレ・・・こんなに、誰かを長く好きになったことがないから、わからないんだよ・・・」
彼はぽつりとそう言った。
彼女にだけ、聞こえるように。

こうして、彼女に破裂しそうな悶絶躰地を訴えることで愛を得ようとしているわけではない。
彼は誇り高い。
そう・・・彼と彼女がよく知っている、あのフランスの華と同じくらいに。

しばし、彼女と彼の間には、沈黙が流れた。
どれほど騒がしい音や人声や気配達が周囲に在っても、彼らはまったく気にしなかった。
ただ、じっと・・・相手の様子を注意深く気配だけでも感じ取ろうとしているばかりであった。
仏頂面の青磁と、無表情の彼女が座っている空間は、皆からの死角になっていることが幸いした

。先ほど、昂揚した声で、彼女を恋人だと宣言した青磁は、そこには居なかった。

どうしてなのだろう。

こどものように、ただ黙り込むしか出来ない。

黙って居ても何も解決しないことを、幾度も経験して学んだつもりだったのに。

言葉が・・・出てこないのだ。

体が・・・動かないのだ。

ただ、目の前の人物の傍にいたいのだ。でも、相手がどんなことを思い、何を感じているのか知るのが怖かった。

彼女は、誰かに「どう思っているの」と尋ねることはなかったから。

青磁は、誰かに「どう思っただけなのよ」と尋ねることはなかったから。

時間を置けば解決するのだろうか。

突然不機嫌になる彼女と、それを見て更に沈鬱な顔をする青磁は、本当に恋人同士なのだろうか。

。

・・・そんなことすら、考えてしまう。

この沈黙は、坂道の沈黙だ。

黙って居れば、どんどん・・・下り坂を駆け下りていく。

余計な杞憂を伴にして、加速する。

■08

青磁は困ったように、綺麗な顔を顰めていた。

「公にしたかったのは、オレがそうしたかったから。

でも、秘密にしたかったのも、オレだから。

矛盾しているのは、わかっているさ。

誰にも取られたくないし、誰にも触れられて欲しくない。

専有物でないことはわかっている。

独占したいけれども、そうできない。

だから、宣言することにした。

だから・・・オレの恋人はこの人だって」

「青磁。それは同義よ」

彼女は慌てて彼の言葉を遮った。

そして、思わず声が大きくなってしまったことに気がついて、周囲をそっと見回した。

それが自分の狡猾さを示しているようで、彼女は首を竦めた。

ここに居るべきではない。

そう思ったからだ。

どんなに騒がしい空間であったとしても。彼女には空虚の海にしか感じられなかった。自分には無理だ。そう認識する場所ではなかった。

青磁の思惑が気に入らなかったのではない。

ただ・・・彼の望む、永遠の未来についてまだ思い浮かべることができなかったのだ。

自分は彼を否定したいのだろうか。それとも、恋の駆け引きに興じてみようと思っているのだろうか。

自分自身のことなのに・・・説明できない思いが浮かんで消えて・・・そしてまた浮かぶ。

彼を困らせたくて、そう言っているわけではなかった。彼は整えてあった髪に指を流して苛立らしそうに少しだけ目を細めた。片方だけ薄い瞳が長い睫の下から彼女への瞻視だけに集中していた。

彼の視線は強く、抗えないと言われている。彼の家の者の中にはこういった特徴が強く出る者がたまに生まれると言う。昔はそれが当主の資質として備わっていることが必要であった時代もあったのだと聞いた。

しかし、彼が彼のことを話す度に、彼女は押しつぶされそうな重くて熱い塊が彼女の中に澱のように蓄積されていくのを感じるのだ。

彼は彼女の名前を呼んだ。

「はい」

彼女は素直に答える。名前を呼ばれたら、彼女は返事をするようにと言われて育った。そういう健全なる作法が、彼が彼女をとて愛でる要素のひとつなのだと青磁は言った。

「君を、独占したいと思っているのは・・・間違いか？オレの勘違いなのか？」

そうであれば、はやめに言ってくれ」

彼女は苦笑いする。望んだ言葉なのに、苦い笑いしかできない。嬉しそうに微笑むことができない。

「・・・そうすれば、あきらめられる？」

「それはない」

彼の否定の言葉に、今度は彼女が口を噤んだ。

・・・なぜ、彼はこれほど執拗に諦めないのだろうか。嫌気がさして、面倒になって、彼女を放り出してくれれば良いのに、とさえ思う。

「軌道修正するだけ」

彼の素っ気ない言い方に、彼女は溜息をついて俯いた。

周囲の喧騒が気にならないほど、切迫した空気であった。

全員と言っても良いような視線が、彼女と青磁に注がれているが、彼女はただ、好意的でありながらも好奇の視線の雨に打たれるばかりであった。

青磁が特定の相手と付き合わないのは周知の事実であった。不特定多数と付き合っているのではない。

友人も多く、恋愛対象にされやすいためにいつも彼のまわりには人が居た。

しかし、そこを越えて、彼が望んで連れて来る人物は居なかった。

彼にはどこか踏み込めない部分があると周囲が感じているのだ。

強く拒絶されることも今ではなくなったが、余りにもわきまえというものを欠如した者には手厳しかった。彼は厳しい顔で、「恋愛対象とみていないし、これからもそうだ」と言い、「それ以上は友達でも入れないところだ」とはっきり言う。彼の潔さが清々しいと思うのか、曖昧にするのが美德とされているこの国の中で異端であることがかえって受け入れられているのか・・・とにかく、青磁は彼女を伴うことについて確信が持てたから誘った。

出された飲み物や軽食にこれ以上、手を伸ばす気になれない。

彼女は熱気で火照った頬に自分の手の甲をあてる。慣れない場所であった。こういう風にして青磁と大勢の居る場所に赴くのは・・・まだ慣れない。

かたん、と音がして、着座したばかりなのに青磁は言った。

「出よう」

えっと顔を上げる彼女の腕を、青磁が掴み上げた。暴力的な強さではなかったが、有無を言わさぬ気配が手の平に込められている。

これから様々な催しが始まるというのに、彼はもう退席すると言う。

チャリティを兼ねているが、すでにそれは入り口で寄付しており、学生である青磁が大枚を持ち出すことはあまり好ましいこととは言えなかった。だから彼は皆の前ではそういったことを見せびらかしたりしない。後で、この主催者側に自分で働きかけることはあるのかもしれないが。

「出るって・・・」

彼女が呆然としながらそう言うと、彼は腕を掴み立ち上がらせた彼女に頷いた。

■09

みんな、驚いていた。

会場の熱気でまだ頬が火照っていた。けれども、彼女は困惑した顔で、青磁にそう言うと、青磁はさすがにむっとした顔をして、彼女の矛盾を指摘した。

「あのままあそこにも、君は不機嫌になる。」

連れ出したら、今度は戻らなくて良いのかと言って、また困った顔をする」

「ごめんなさい」

彼女は謝罪した。

彼が、どんな気持ちであの場で彼女を紹介したのか、考えていなかったからだ。自分の気持ちで手一杯になり、自分を持て余してしまっていたが、青磁は彼女を困らせるためにこうして彼女を連れ歩いているわけではないことだけはわかっていた。

「青磁の立場が悪くなってしまったら、申し訳ない」

「立場？オレはただの留学生だ。そんなものはここにはない」

少し固い口調であったが、青磁はそのことに気がついて、彼女の手首を掴んでいた自分の手の力を緩めた。

強く引いたので、彼女の手首は朱くなっている。痛みもあるはずだ。それなのに、そのことについて彼女は何も言わなかった。そこで・・・彼の感情は音をたてて鎮まっていく。

「ごめん。痛むか・・・？」

決して恋人を紹介しない青磁が、彼女を誇らしげに皆に紹介する様子を見て、彼女は居たたまれなくなった。皆の驚きや歓声や、好奇の視線が痛かった。青磁は普段から皆の注目を浴びることになれているかもしれないが、彼女はそういう騒がしさは好まない。

だから、不機嫌そうな顔をしていたけども、不愉快であったわけではなかった。・・・ただ、困っただけだ。

だから、彼女は首を振った。

「だいじょうぶ」

その言葉に、青磁は足を止めた。ここは会場からほど近い小さな公園である。遊具施設が置いてあるわけでもなく、ただの空間でしかなかったけれども人通りはなく、静けさだけが漂っていた。ここを横切ると、近道であったから。行きは・・・あれほど昂揚感で溢れていた青磁であったの

に、今はただ・・・苦しそうだった。

そして、そんな彼を見ている彼女の胸は痛かった。

それは青磁の感情に左右されているからなのだと彼女は承知していた。

彼によって自分も揺さぶられることが怖かった。それだから、恋人に相応しい態度で皆に接することはできなかった。だから、これはそれを忘れてはいけないという証なのだ。彼女は自分の手首をもう片方の手の平で、そっと握った。

青磁が自分のことを大事にしてくれているのはわかっている。意見を尊重してくれていることも。でも、今日ばかりは付き合っただけで欲しいと懇願されて、それで断れなかった。本当にいやだったのなら、ついてきたりしない。彼が何を考えているのか、どうしたいのか、きちんと聞いてから

心構えを持っておくべきであったのに、それを怠ったのは彼女の責任だ。

そんな彼女に、彼は向き直った。

薄暗がりの中でも彼の耳に光る麒麟のピアスが彼女の目に入る。彼は留学生で・・・間もなく、学生の期間を終える。そうなればもう、ここには居ない。来年にはここにいるかどうか、わからない。

こうしてこの会場の催事にやって来ることも来年は実現しない可能性の方が高い。彼の思い出を作る機会は、無限ではな。二度とやって来ない季節や出来事を、彼が大事にしていることも知っている。

青磁は実家に帰れば、家を継ぎ、そして大きな事業を幾つも持っている旧家の当主となる。古い寂れた制度かもしれないが、彼がある目的をもっていることは聞かされていた。・・・誰にも明かすことのない秘密の話の幾つかも、聞いた。そして意見を求められ、彼女は彼に賛同することもあったし疑問を投げかけることもあった。この問答を、生涯彼と繰り返して欲しいと言われたが、その話は保留になったままになっている。

・・・片方だけ薄い彼の瞳が彼女の顔を覗き込んでいる。心配そうに。

悔悟に満ちた表情だった。

「うまくやれない。・・・君は、笑顔にならない」

彼がぼつりとそう言った。

「・・・どうしたら君を笑わせられるのかずっと考えている。でも君はいつも困った顔をするだけで・・・オレは、こんな君を待っていたわけではない」

そう言って、青磁は彼女の肩を擦った。まるで壊れ物でも扱うかのように、怖々と加減を調整しながら・・・彼女に触れる。

彼女の肩が、ぴくりと動いた。彼は彼女に気安く触れたりしない。本当に宝物のように扱う。こちらが驚く程に、彼は細心の注意を払って、彼女に接しているが本当は、自分自身を制御できなくなるほど我を忘れて彼女を求めてしまう引き金になってしまうのではないのかと懼れていることも・・・彼女は知っている。

「オレ・・・君を振り回している？」

青磁が苦しそうにそう言ったので、彼女は俯くこともできず、ただ彼の瞳を覗き込むばかりであった。

■10

「私は誰にも振り回されないし、誰にも怒っていない」

彼女がぶっきらぼうな口調でそう言った。彼は彼女の肩をそっと撫でる。そして少し俯き加減に

、青磁は囁いた。

「君と別れたくない」

絞り出すようなその声に、彼女の肩がぴくりと動く。彼女が何を考えているのか、青磁には伝わっているようであった。

それほどお互いが困るのであれば、少し距離を置かなくてはいけないのかもしれないと思っていることも、青磁にはわかっていたようだ。彼女は淡く笑いながら、言った。

「別れるも何も・・・約束はしていない」

「そういう意味ではない」

彼が否定して、顔を上げた。今度は、彼女の両肩を掴んで指先に力を入れたので、彼女はその圧の強さに困惑する。紫電、と呼ばれる彼の鋭い強い視線が彼女を射貫いた。

「恋人になってください、とか、恋人同士だよな、と互いに確認したりすることではない。オレの朝顔は、君だけだ」

彼が心に決めた人のことを恋人と言わずに朝顔というのは、恋人という名称だけでは、彼女に相応しい言葉として足りていないからだ。抱いたと思ったら腕からすり抜けて行く彼の想い人を、彼は理性を失いそうなほど強く求めている。それを彼女が怖がっているのではないのかと憂えている。

そんなことはないのに。

そんなことではないのに。

「・・・どうしたら、君は笑ってくれるのかな」

彼はぽつりとそう言った。

「君がオレだけの人になってくれるのであれば、何もいらぬ。いやだと言われても、もう、止まらない。

でも、君を怖がらせるのはやめようと思うのに、止められない。

オレ、勝手にひとりで浮かれて、君を困らせてばかりいる」

それから、彼女に向かって、搾り上げるような声で、苦しそうに言った。

「好きだ」

彼はぐっと唇を噛んだ。そして、また、小さな震えた声で、囁く。

「毎日、毎日考える。明日になったら、君に会えるだろうか。明日のいつになったら、君と話ができるのだろうか。そんなことばかり考えて、夜を過ごす。・・・情けないだろうと自分でも思うが、それでも仕方が無い。夜を待てば、朝が来る。そうしたら、君に近付ける」

それから、そこまで言うと彼は自嘲的に笑った。

「待つ、と言ったのに。あれほど・・・気の遠くなるほどの時間を、なぜ、どうやって待てたのかわからないよ」

それほど離れていない場所であったのに、賑わう会場の音さえ聞こえなかった。

今日はハロウィンだ。・・・夜に出歩く者は、魂を奪われてしまう。それでも、青磁は何を気にするでもなく、彼女に語りかけている。

「オレが先走り過ぎて、君を困惑させたのであるなら、悪かったと思う。でも、君を誰かにとられたくないと思うのに、誰にも見せたくないと思うのに・・・皆に紹介して自慢したかった。オレの念願が叶って、ようやく・・・振り向いてもらえたって、言いたかった」

彼女は上気した頬で、青磁を見つめた。

彼がこれほど言葉を尽くすことは珍しいことである。もっと口数の少ない彼女より青磁の方が陽気に話すことが多かったが、これほど彼が彼女の返事を待たずに話をする。

彼の目の端は少し朱くなっていた。後悔から来る昂揚であった。嬉々とした昂ぶりが一瞬で不安に変わったから。

思いやりを忘れてしまったと青磁が激しく自分を恥じているのだとわかると、彼女はそこでようやく唇を開いた。

彼女は質問する。青磁の項垂れた貌を見つめながら。彼は大変に美しい顔立ちをしているが、今の青磁は叱られたこどものように酷く幼かった。

「青磁は、朝が早く来て欲しいと思うの？」

「そう。・・・君に会いたいから」

彼女はそれを聞いて少し顎を引いた。今宵は夜更けを賑わす日だ。それなのに、それがはやく通り過ぎて欲しいと言ったのける青磁の気持ちが、わからない彼女ではない。

「青磁。・・・私は、朝が来て欲しいと思わない」

彼の激しい動揺が、彼女に伝わってきた。

「・・・そうか」

彼の顔からずっと血の気が失せ、青磁の唇も瞳も震える。

彼女からの言葉が、これほど重いものであるとは思っていなかった。青磁をそれほど動揺させるとはわかっていなかった。

そして、今、青磁も・・・そんな風に言われるとは・・・考えていなかったのだろう。

皆に彼女を紹介したことによって、彼女が少しでも彼との未来を口にできるようになってくれれば良いのにと思っていた青磁が、傷ついているのを目の当たりにする。

彼を恋人にすることによる優越は感じない。恥ずかしいと思っているわけではない。ただ、戸惑っているだけであった。自分の中でも割り切れていない想いが、急速に青磁に向かって傾いていく。永遠の熱情なのか一時の熱なのかは・・・決めてしまうには、彼女には時間が足りなかった。しかし足踏みしていると、また傾いていき、いつかは青磁の胸に飛び込んで、何もかもを放棄してしまいそうになる。それで幸せになれるとは思わなかった。流されて、青磁の言葉のままに従う自分になりたくなかった。

彼の歎きが、自分のことのように彼女の胸を痛くさせた。

でも。

彼の前では、言葉が足りなくなることはわかっていた。静かに落ち着いて物事を考えることがで

きなくなる。理性が破壊される。

・・・彼女は軽く溜息をついて、言った。

拒否されたと思っている、青磁に向かって彼女は言った。

「私は、朝が来て欲しいとは思わない。なぜなら・・・朝が来れば、逢いたいと思ってしまうから。夜が終わって朝になったら、もっと青磁の笑顔を見ていたいと願ってしまうから」

青磁は、わかっていない。

そう言って彼女は貌を朱くして横を向いた。彼がどんな表情で彼女を見つめているのか、知りたくなかった。

・・・こういうことを言わせる青磁は、本当に酷い人だ、と呟いた。

青磁は彼女の日常を奪う。それが本当に怖い。

■11

彼女がそう言うと、彼女はもうそれ以上何も言わなかった。

青磁が息を呑む気配がする。

だから。

何も言わない。

何も、言えない。

・・・もう、それだけで、ここに居続けることができないほど身の置き所がないという状況を味わう。望んでいないのに。彼の視線が痛かった。今まで、自分がどんな風にして見られていたのかさえ意識していなかった自分を恥じるように、彼女は俯きながら、言った。

彼が何かを言う前に。

彼が、自分の言葉を繰り返す前に。

「・・・青磁は、戻るべきだ」

彼が何か言う前に、彼女はそう言ったが、青磁は首を横に振った。

「嫌だ」

その返事に、彼女は困ったように眉を寄せる。

青磁は彼女を困らせてばかりいる。

「君と一緒にが良い」

そして、また、ゆっくりと繰り返す。

「一緒にいたい」

彼女の顔を、見つめる彼の視線は・・・吸い寄せられるように美しくそして心細い光だけしか

なかった。

誰もが彼に魅了される。

けれども、彼はそうではなくたったひとりだけを・・・自分の視界の中に入れてしまいたいと願っているのだ。

ひとりだけで良い。

彼の視線を逸らさないで生きてくれる人が居れば、彼はその人だけで良いと思っている。

しかし、それが彼女を切なくさせるのだと、彼は知らない。

彼は多くの者の中にいるべき人なのだ。

こうして閉じられた世界だけに居る人ではない。

「オレは君が好きだ。・・・君がオレを好きでなくても、好きにならなくなっても、それでも良い。オレに向いてくれるまで、待つ。でも・・・」

「でも？」

彼はそこで微笑んだ。参ったな、と言った。

「朝が来たら、とか。夜が来たら、とか考えない日が来て欲しい」

彼女の顔が、一瞬で赤くなった。

朝が来て欲しいと願う青磁に、朝が来ないで欲しいと願う彼女の折り合いというのは、それしかないと言っているのだ。

朝から晩まで、一緒に居よう、と彼が遠回しに言っている。

普段は、何度青磁がそう言っても、動じないのに。彼女は、慌てて否定した。

「前半と後半で矛盾している」

「矛盾していない」

青磁がくすりと声を漏らして笑った。

「でも、本当に困った。・・・困ったよ」

「何が、困るの。それなら、まだ戻れるうちに、戻って」

日が変われば、彼は質問攻めになることだろう。

彼は誰かを恋人にすることはない人物だということでも有名であったのに、こうして、突然同伴した彼女の事をあれこれ聞かれるのだろうと思った。

それでも彼はただ笑うばかりで何も語らないと信じていたが。

よく通る声で、彼は言う。

静かな夜空の下では、囁くような声でも彼女の耳元で話しているように通って聞こえた。

誰もが彼のただひとりになりたいと思っている。

皆が、彼の声を独占したいと思っている。

・・・彼女はただ、戸惑うばかりであった。

そこに飛び込む勇気がなかった。

溺れてしまうのが怖かったのだ。

そこまで深みに入ってしまうえば、もう、戻れなくなる。

「戻っても同じだ。ひとりで、戻ったら、それこそ一大事だろ」

彼は呆れたように言ったが、怒っていなかった。

戻っても同じだ、と聞いた彼女は肩を上げた。

「オレが困っているのは、君を不安にさせてしまっていること」

彼女は、黙っていた。そして首を横に振る。

不安には思わない。

「・・・もう、気が遠くなりそうなほど待った。

でも、まだ、待てる。

オレは諦めない。諦めてしまったら、始まらないから。そこで、終わりだから。何も変わらないことを始めてしまうくらいなら・・・諦めない」

誠実な言葉であった。具体的に何がどう、ということについて、彼女は聞かないことにしている。彼の具体的な未来は・・・あの国に帰ることなのだから。

「私はどうすれば良いのか、まだ考えていない」

「難しく考えすぎだ」

彼は笑う。しかし、易きに流れることもない彼女だからこそ、青磁は彼女が欲しいのだ。

■12

「今日はハロウィンだ」

青磁がそう言ったので、彼女は俯いていた顔を上げる。

・・・近くに青磁の姿があり、彼女は夜の街路灯に照らされていた。

彼女は彼の真摯な眼差しから逃げようと、軽く言う。

「Trick or Treat? と言うのよね」

そして、努めて明るく言った。

「Trick or Treat?」

「・・・言われた者は、魂のケーキを振る舞わないといけないのは知っているよな？」

青磁は真面目な口調で、彼女の意図を無視した。

「だから、オレは君にねだることができる。君にオレの魂をやる。そして君の心が欲しい」

そして、彼女の顔を覗き込むようにして、彼はもう一度はっきりと言った。

「君が欲しい。・・・君の心が欲しい」

彼女が横を向いたが青磁は真剣であった。

「交換にするの？ハロウィンの余興のひとつ？」

「誤魔化さないでくれ。待てるけれども、君が欲しいというのは矛盾しない」

それから彼は少し早口になった。

「誰にも渡したくないよ。誰にも見せたくない。誰にも触れさせたくないし、触れて欲しくない。でも、それはオレの満足を満たすだけだ。

オレは君と一緒に満たされたい」

彼女が少し唇を噛んだ。青磁は彼女は伏し目になった瞬間を狙って、彼女の顎を指先で撮んだ。

そして身を屈めると、彼女の唇に自分の唇を重ねた。彼女は体を強ばらせて目と瞑った。

彼の唇は震えていた。それは彼女が震えているからそう感じたのか、それとも・・・彼が囁く言葉に彼自身も揺さぶられているのだろうか。

・・・それは一瞬のことですぐに彼は離れて行く。

「人に見られる」

「だから？」

そして彼は笑った。

「Trick or Treat?・・・甘い菓子を貰い受けてただけだよ」

彼はそれだけ言うと、照れた顔を彼女に見せた。片方だけ薄い瞳が少しだけ細くなった。彼の整った顔に見惚れる者は多い。けれども、彼の本当の魅力はその強い視線である。

彼の紫電は、今、彼女だけに注がれていた。

「・・・宴の続きは、家でやろう。と、言っても何もないから、何か調達する必要があるが」

「ちょっと待って。私、このまま帰る・・・」

「無理。諦めて」

少年のような口調で、青磁・マクドゥガルがくすりと笑いながら言った。

「泊まって行けよ。今日の君を明日の君にしたい」

そして次に挑戦的に言う。いつもの彼の物言いであった。

「このまま君を帰したら、それこそオレは何を言われるかわからない。

それに、君の着飾った格好をまだ十分に見ていない」

「着飾ってなんかいない」

彼女は顔を赤くした。青磁は微笑む。綺麗だよ、と彼は囁いた。

「マクドゥガル家の婚姻式は着飾るところではないぞ」

「青磁、青磁」

困ってしまって、彼女はただ彼の名前を呼ぶだけであったが、彼はそれを面白そうに眺めているばかりであった。

「少し、歩こう。今日はハロウィンだから」

そう言って、彼は彼女の手を取った。

もう片方の手の平を、彼女の小さな手の上に乗せる。

「君が好きだ。だから、待つ。でも今日はハロウィンだから・・・オレに君の時間をくれないか。ノーならこの手を振り払ってくれ。それで諦める」

彼女はその言葉を聞いて、無表情に彼を見つめた。

しかし瞳を大きく見開いて、呼吸すら忘れてしまったかのように動かなかった。

青磁は、言い過ぎたと思い、やがて不安そうに尋ねる。

「オレ・・・期待しても良いかな。君は嫌なことは嫌だと言える人だ。それなのに、オレと一緒に居るのは決して嫌だと思っていないからなのか・・・それとも・・・オレが強引すぎた？」

「一度にたくさんの質問は答えきれない」

彼女が苦笑していたので、緊張を緩めた青磁に、彼女は再び笑みを見せた。

「ジャック・オ・ランタンを作りましょう。・・・一晩かかって、日付がかわってしまうかもしれないけれども」

彼女の申し出に、青磁の顔が華やかさを取り戻す。

「じゃあ、競争しよう。オレと君でどちらがより良いジャック・オ・ランタンを作れるか」

「より良いって・・・」

彼女が絶句していると、彼はくすくすと堪えきれないように笑いを漏らす。

「君は天才だな。オレは結構気難しくて、機嫌を取るのが大変だと言われているのに、こうしてあつという間にオレを浮かれた気分させてしまう」

「そうなの？」

彼女が驚いて、彼の言葉に答える。そうだよ、と彼は笑った。

「平手をくらったこともあるしな」

遠い眼をして、彼は懐かしそうに言った。

「こうして毎日を謳歌するのもあと僅かだ。でも、後悔したくない。君と過ごす日本での日々のひとつひとつが・・・オレにとってはかけがえのない宝になる」

■13

それだけ言うと、彼は肩を竦めた。

「それにしても君は酷い人だよ。オレをこんなに夢中にさせて、それでそのままにしておくつもり？」

「それは・・・青磁の言い分でしょう」

「君の言い分を聞きたい」

しまったという顔をした彼女に、青磁はにこやかに言った。

「質問には答えろよ。・・・たくさんの質問はしていない。ひとつだけだ。」

君の返事を知りたい」

しばらく無言であった彼女は、彼がそれを聞くまでは決して話題を変えないのだろうと承知している。

「青磁は意地悪ね」

「気難しくて機嫌を取るのが大変だ、と言ったばかりだ」

彼は面白そうに言った。

彼女はすこし考えて・・・彼女は横を向きながら、低い声で言った。

彼の手を振り払うことはなかった。イエスの証拠であった。

「私は、私よ」

「わかっている」

「私がそうしたくないと思ったのなら、ここには居ない」

・・・今度は、青磁が顔を赤くする番であった。

低く呻くと、見る間に相貌を朱に染めていく。

明らかに、狼狽えていた。

彼女が彼の言葉に正面から応じるとは思っていなかったらしい。

「・・・オレ、本気にするよ」

彼女は返事をする代わりに、彼の手をぎゅっと握った。大きくて優しく彼女の手を簡単に覆ってしまう彼の掌は緊張で強ばっていた。

「冗談や嘘は言わない」

「そうだな」

彼は大きく呼吸した。

「・・・今日は君と過ごしたい。とても綺麗だから。実は、今日だけというのも強がっていて・・・本当は朝も晩も一緒に居たい」

彼は胸元を再び緩めながら、言った。

「来年も、機会があれば来日する。そうしたら、あそこにもう一度行こう」

「構わないけれども・・・なぜ？」

彼女が不思議そうに言った。彼はわかってないなと言いながら説明した。

「決まっているだろう。オレの恋人だと紹介したが、今度は・・・オレの婚約者と紹介し、次の年にはオレの妻です、と報告しに行くためだよ」

彼女が嘖き出したので、とたんに青磁の顔が不機嫌そうに曇った。

「何だよ・・・そんなにおかしいことか？」

「青磁がそういう風に考えていたと思っていなかったから」

彼女はそう言ってまた笑う。

「何だよ・・・君はオレの未来にちゃんと、いるぞ」

それを聞いて、彼女は笑いを止めた。

幾度か、瞼を瞬かせて彼女は言った。なぜ、そんなことを彼が言うのかわからないと言う風に。軽やかに、それでいてとても重く。

「・・・私の未来にも、青磁はいるよ。ちゃんと、いる」

それを聞いた時。青磁が彼女の手をぱっと離して、自分の口元を覆った。夜目にもはっきりとわかるほど、紅潮している。先ほどの朱と比べものにならないほどに鮮やかに染まっていく。

「・・・ほんとうに？」

「本当に。嘘は言わない」

彼は彼女の名前を呼んで、それから再び彼女の手首を取った。

「・・・好きすぎてどうにかなりそうだよ」

「それは困る。これから・・・ジャック・オ・ランタンの出来を競争するのだから」

彼女の素っ気ない返事はいつものことであったが、これほどまでにあっさりとはぐされたと彼は何も言えなくなってしまう。

念を押すことはない。もうこれ以上のことは彼女は応えないからだ。

けれども、悔しさやもどかしさはなかった。青磁は艶やかに笑って、彼女に提案した。

「休憩はなし。どちらが先にできあがるかというスピードと精巧さで決めよう。負けた方が、勝った方に明日の朝食を作る。・・・これでどうだ？」

「わかった」

彼女は彼の申し出を承諾した。彼の家に泊まるということを受けたので、青磁は昂揚する気持ちを押し隠しながら、言った。

「それなら、早く戻ろう。今夜中に勝負をつけないと日付が変わる」

勝負、と言われて彼女は肩を竦めた。

「準備も何もしていないのに？」

「準備をしないと楽しめないわけではないよ。特にハロウィンはね」

彼はそれだけ言うと、彼女の手を取って夜道を歩き出した。

彼女から文句を言われるかと思ったが、彼女は何も言わなかった。

今宵は重大な告白をし、重大な願いをかけてしまった。

ハロウィンの夜は魔力が高まる夜としても知られている。もし、この言葉が単なる願い事ではなく・・・もっと強力に実現可能な未来を表したものであるのならば。彼が言ったひとつひとつの言葉について、彼女は思い返してくれるだろうか、と思った。

たとえ、すぐに彼女を連れて行くことができなかったとしても。きっと、青磁は彼女を連れてあの土地に戻る。

ハロウィンの夜に誓ったからだ。

そして、彼女もそのことについて否定しなかった。だから、諦めない。だから、待ち続ける。

彼女が青磁にイエスという日まで。

彼は何度でも言おうと思っていた。

青磁・マクドゥガルは彼女の名前を呼んでから、そっと言った。

彼女と寄り添うように歩きながら。

ハロウィンの・・・魔力が高まるという闇空に向かって、彼は言った。

「君とは恋をしたいのではなく、愛をしたい」

それには、彼女は返事をしなかった。

返事をしないかわりに、彼の腕に指をのせてぎゅっと掴んだ。

腕を組んだり手を繋いだりすることを自分から欲しない、彼女の精一杯の表現であった。

「さ、今日は手加減なしだ。オレ、結構うまいよ。昔から作らされていたからな」

えっという声が持ち上がり、彼は屈託無く笑った。

まだ、ハロウィンは続いている。

そして、こうして・・・彼女と幾夜も過ごしたいと心の底から願いながら、彼女と一緒に帰路を急いだ。

愛する彼女と一緒に。

彼の朝顔と一緒に。

(FIN)

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

雨花：うくわ。雨が降るように散る花のこと

■うくわ 前編

「ああ、やはり・・・花は良いな」

彼が長身を屈ませながらそう言ったので、後ろで立っていた彼女は返答に困った顔を見せることはなかった。

彼は土いじりが好きであるのに、空が近いところが良いと言ってマンションの最上階に住んでいる。

そんな希望が通ってしまうほど、彼は何でもできる身分であったがそれでも彼が手に入らないものがあつた。

彼の瞳は片方だけが薄い。

眼病であるとされており、かなり近付かないとわからないがそれでも完治してはいない。

寒い空の下で咲かせる冬の花々は、風除けに囲われているがそれでも風に揺れて葉擦れの音を鳴らしていた。

彼の部屋のベランダには簡易温室もあるのに、こうして風除けを自作している。

それは・・・自然の空気に触れるのが一番良いのだと思っているからだ。

夏には、白い朝顔が咲き乱れるベランダから朝顔が去ってしまった後の寂寥を埋めているかのようだ。

彼が最も愛しているのは白い朝顔であつた。

それでも、冬の空の下で・・・彼は嬉しそうに微笑む。

「中に入らないの？」

「もう少し。君は入っているよ」

彼は顔を上げずに言ったが、すぐに立ち上がって彼女に向き直つた。

彼は紫電と呼ばれる強い視線で彼女を見つめる。しかし、彼女はそれに臆したり眼を逸らしたりすることはなかった。

それが彼の心を躍らせる。自分のことをまっすぐに見つめる彼女のことが愛おしかった。

いつの間にか、彼女のことばかりを考えている。

そう言われて困った顔をする彼女が彼の腕の中に居る時だけはその目を閉じる。

でも、自分も同じだとは言わない。どれほど求めても、どれほど言ってくれと頼んでも。

「寒いだろう」

「平気」

彼女は寒そうな顔をしてそう言ったので、青磁は淡く微笑んだ。

彼の整った顔が綻ぶ。

「気を遣う必要はない」

彼は両手を腰にあてて、空を眺めた。

乾燥した夜空に、月が光っていた。浮かぶというより浮き上がって見えるほどに輪郭が鋭かった。

冷気を浴びながら、彼は軽く伸びをする。

平静を装わなければ、そのまますぐに彼女を胸に抱いてしまいそうになる。

彼女がイエスと言う前に。

けれども、それでは自分が満たされるだけであった。

導きに従っているわけではない。

彼が彼女に恋をしたのは偶然ではなかった。

けれども、必然でもなかったように思う。

「何か、あたたかいものでも飲む？」

彼はそう言った。

できるだけ彼女と会話していたかった。

彼女とふたりでいる時。

青磁ばかりが話をしているが、彼女はじっとそれを聞いている。

「新しい茶葉が入ったから・・・」

彼が中国茶を好むことを、彼女は知っていた。

だから、彼女は軽く頷く。

高雅な香りのする茶から立ち上る湯気を見て、彼女が感嘆する様子を想像するだけで彼は微笑んでしまう。

彼女が何かに集中している時の顔は無防備でそしてとても幼かった。

彼女が彼の家に来るときには、いつも決まって理由がある。

本を貸すとか、青磁の英訳のチェックを受けるとか・・・そういう理由がなければ会おうとしない彼女に、青磁はいつも言う。

「理由を作らなければ、駄目？」

困らせていることはわかっている。

そんな拗ねたこどもみtainな振る舞いで、彼女との関係を壊したくないと思っているのに。

わかっているのだ。

隠す必要もないし、認めないわけにはいかなかった。

彼の方が彼女に夢中になっていることを。

誰かを好きになるということは幾度か経験している。

でも、同じ数だけ別れを経験した。

・・・これを最後にしたかった。

この恋は、別れのない恋にしたかった。

「この寒さでも花は咲く」

青磁はそう言って、後ろを振り返った。

ベランダは綺麗に清掃されており、枯れ葉ひとつ落ちていない。

強風が吹いたので、それで何もかもが持ち去られてしまったのかもしれないが。

「リビングからの眺めがよさそう」

彼女は微笑む。外や空を眺めながらゆっくりと茶を飲む。それが彼女は気に入っているようであった。

彼女のためなら、青磁はいつまでもそれに付き合うつもりであったし、実際にそうしてきた。

今夜は、花を眺めながら彼女は熱い茶の湯気ごとその唇に取り込むのだろうか。

青磁は、彼女の肩に手を添えた。

「行こう。君に風邪をひかせたら大変だ」

彼女の髪が手の甲に乗った。

それだけで、彼女に近くなったような気になってしまう。

「・・・青磁は、花が好きなの？」

「彼らは誠実だから」

そう言って青磁は笑う。どれほど血が濃くても、裏切られた気持ちを感じてしまうときがある。

彼の家との不仲は改善されてはいたが、その時の事が消えてなくなるわけではなかった。

乗り越えたはずなのに、時々・・・虚しくなってしまう。

誰かを変える事ができると自惚れていた。

皆、青磁に心を寄せるが、彼が心を寄せられる相手は少なかった。

でも、自分が変わらなければ駄目なのだと思った。

それを教えてくれたのはあの茶色の髪の人であり、目の前にいる彼女であった。

そして彼女は青磁にいつも誠実であった。

誰も自分を変える事が出来ないと知った。

それなのに、彼女は彼を変える。

「・・・よくスケッチしたよ。花は毎日色が変わる。それが面白くて何枚も描いた」

青磁は懐かしそうに言った。

彼は濃淡の区別がよくわからないという。

けれども、日常の生活で不便を感じていることはなかったし、彼の病は完治に向かっていると
言う。

治ったら・・・この国を去る。この国に居る理由がなくなるから。

理由。彼女と会えなくなるという理由ができてしまう。

マクドゥガル家の土地は広大で、あの実家の杜を彷徨い歩くのが好きであった。

広すぎる家に置かれた調度品の翳りが好きであった。

人と話すより、そうして何かを見つめ続けて色を残していくことに夢中になった。

将来は、画家になると思っていた。

何にでもなれると思っていた。

しかし、彼は今、ここに居る。

「青磁？」

彼女が彼の腕に手を置いたので、彼は我に返った。

「すまない。考え事をしていた」

寒空の下で、彼はそう言って軽く頭を振った。

今があまりにも倅せで・・・彼はだからこそ、あの時の苦しかった自分を思い出す。

倅せになれば、忘れられると思っていた。でもそうではなかった。

苦しみを抱える勇気が出てきたが、苦しみを忘れることにはならなかった。

「昔のことを少しだけ思い返していた」

青磁は正直に言った。彼女に隠し事をして、無駄であったから。

聡い彼女にはすぐにわかってしまう。

大丈夫か、と彼女は言わない。

彼が平然としている様子を見せているのは、彼が誇り高いからで、それ以上に彼女に心配をかけた
たくないと思っているからであることを知っている。

「でも嫌な気分はしない」

彼は思ったままに言った。

そう、と彼女は言って・・・そして彼の腕から手を離れた。

彼女は決して馴れ馴れしい態度を取らない。

たとえ彼が彼女と肌を合わせる間柄であったとしても、彼女は決してある一定の領域を越えない

。

彼女のそんな度しやかな態度が彼の気に入っているところであった。

しかし、いつか彼女の方から彼の胸に飛び込んで来てくれないかという願望も持っている。ただひとりの人だけに固執し続ける青磁は、彼女がどうしたら微笑むのか・・・時々わからなくなる。

彼はそう言うと、冷風のために頬を赤くしている彼女に向かって、微笑んだ。

彼の中には狂気がある。それは彼の先祖から続くもので、ひとりの人を深く愛しすぎる気質も含まれている。

そんなことはないと思っていたが、彼は最近になって自分は本当に・・・顔貌だけではなく精神もマクドゥガル家の者であるのだと強く実感するようになった。

あの家が嫌で、出てきたというのに。

彼はあの家に彼女を連れて行きたいと考えている。

「・・・寒いから」

中に入ろう、と言おうとすると、彼女は彼の言葉を遮った。

「もう少し」

「寒いだろう？」

「寒くない冬はあるの？」

彼女の問いに、青磁は笑う。

冬は寒いものだとは言わない彼女の返答方法はいつも青磁を裏切らない。

「それなら、君の気が済むまでここに居ようか」

揶揄うように彼は軽く言った。

「一緒に凍えるのも悪くないな」

彼女が中に入りたがらない理由はわかっている。

青磁は今日、彼女に泊まっていけないかと言ってあったからだ。

しかし無理強いするつもりはない。

部屋に入ってきたからと言えども、彼女が帰ると言えばそのまま送るつもりであった。

彼女はそういう人ではない。

わかっているから彼女だけを自宅に迎え入れる。

一緒に、という言葉が僅かに震えた。

彼女と一緒にであるならば、彼は自分のこれから為すべき事を達成できそうな気がしている。

実際、そうであった。

気持ちの問題だけではない。彼女は青磁にとっては必要不可欠な存在であると認識している。

けれども。

気持ちの上で、必要としていると訴えれば良いのか・・・それとも、彼女が青磁になぜ必要なのかと理路整然と話す方が納得してもらえるのか・・・どちらがより良いのだろうかと考えてし

まう。

彼女はぼつりと言った。

「この間より、花が少ない」

冬の時期のことなので、密集するほど咲き乱れるということもなかったが、少し前まではここは秋から冬にかけて咲く花がたくさん艶やかに空に向かって花瓣を開かせていた。

彼女はそのことを言っていた。

「寒くなってきたしね」

青磁はそう言うだけであった。

冬の花は長く咲くことが多いが、それは満開の時期が長いのではなく蕾の時期が長いからである。

しかし、彼女が頻繁にここを訪れている訳ではないのだという現実を指摘されているようで、青磁は疼痛を感じていた。

もっと彼女と会っていたい。もっと彼女に触れていたい。

会う度に強く増していく彼の願いに、彼女を脅えさせてはいけないと思うのに、青磁は荒れた獣のようにしか振る舞えない。

すると、彼女は青磁を見上げた。

彼の瞳を迷うことなく見上げる彼女に、青磁の方が迷ってしまいそうになる。

戻れない路に入ってしまうようだ。

そう思った。

「ああ、本当だ。特に、今夜は冷える」

彼はまた空を見る。日本の冬の空は寒々しいが、彼の故郷の空とは違っていた。どこか柔らかく、どこか切ない。

彼の中には日本を焦がれる血が流れているからそう思うのだ。そして、この国がとても好きであった。

第二の故郷という表現が相応しかった。今では・・・この国を離れる瞬間が少しでも先に伸びれば良いのにとさえ思っている。

しかし、永遠は存在しない。彼の永遠は永遠でないから永遠なのだ。

そこに僅かに風が吹き、彼女の髪がふわりを舞い上がった。それを見て、彼は穏やかになることができない。

彼女を独り占めしたかった。今、彼女を独り占めしているというのに。

彼女の心を、独り占めしたい。彼に焦がれていると言わせてみたい。

そういう昏い欲求が彼の中で湧き起こる。否定することはできない。

彼女の躰が震えた。寒さで身を縮ませているのに、彼女はそれでも青磁に付き従う。
外気に触れて、着衣から寒さが入り込み、彼の身体を冷やしていくのにそれでも身体が熱くなる。
それは、彼女が近くに居るから。彼女が、ここに居るから。

●うくわ 中編

「寒いのなら、我慢するなよ」
彼女は青磁の言葉に微笑む。
そして、月夜を眺めた。彼女の瞬きの数さえ、彼には彼の欲しいものになった。
「冬のこの空気が良い。
朝の空気も好きだけれど。
朝は息を吐き出したくなるのに、夜は息を吸い込みたくなる」
なるほど、と彼は頷く。彼女は感覚が聡い。青磁の表現できない色が、彼女には見えているような気がする。
色覚異常は、治ったと判断することが難しい。
主観的感覚だからだ。
そのことに苦悶し、足搔き、そして自分自身を持て余していた。望んだ未来を否定されているような気がしたからだ。
自分は、なぜ、マクドゥガル家に生まれてきたのだろうと思った。
生まれて来た意味ばかり探していた。生きていく意味を考えていなかった。
けれども、彼は、彼と出会った人々によって、彼だけしか見えない風景を見つけることができた。
いつか・・・いつか、その風景を彼女と共有したかった。

青磁は身を屈めて、彼女の髪に額を乗せた。
彼女が先ほど身を遠ざけたのに、彼はそれでも彼女に近付く。
すまない、と思った。どうして・・・自分で自分を抑えられないのだろう。

「今日は、このまま帰す」
彼は決して望んでいないことを口にした。
このままでは、彼女を帰せなくなってしまう。
冬の寒い夜、誰でも良いから温もりが欲しいと思っているわけではない。

彼女が少し首を傾けた。彼がそう言うのであれば、と彼女なら言いそうであった。決して彼女から・・・一緒に居たいとは言わない。

青磁に対等であることを望む者は多かった。

彼の恋の相手になりたいと志願する者も多かった。

けれども、彼女はどこか違う。何かが違う。

その理由と原因を探している事に気がついた時。

恋に堕ちていた。

「帰す？」

「うん」

彼は幼い返事をした。

どこかで彼は期待していた。彼女が彼の判断に異議申立てすることを。

帰りたくない、と言って欲しかった。

試しているわけではない。けれども、彼は知りたかった。

彼女が彼のことを少しは・・・好いていてくれているのかどうかということについて。

「わかった。帰る」

青磁の目の前で、彼女は空を見上げた。青磁のように。

そして、彼女は苦笑いした。

ああ、そうではない、と言おうとして、青磁は短く呼吸するが、それは熱を帯びていて・・・白い綿のような吐息が現れた。

一緒に暮らしたいと思う。けれども、一緒に過ごすことと暮らすことは違うのだともわかっている。

彼女の生活を壊したくないが、彼の生活にはすでに彼女は必要不可欠であった。

でも。

この関係を、壊したくないのに・・・このままでは居たくないと思う。

どうして、恋は矛盾するのだろうか。

大事にしたいのに、壊してしまいたくなる。

泣かせたくないのに、怒った顔すら愛おしくなる。

青磁は、腕を伸ばした。冷気を含んだ彼女の衣服の下にある華奢な肩の固さを感じる。

並んで歩く時。彼女は、いつも少し離れる。青磁が強引に手を繋ぐまで、彼女は自分から寄りそうことはしない。

彼女と待ち合わせするとき、彼はいつも待ち合わせ時間より早めに行く。

青磁を待つ彼女の顔を誰にも見せたくないからだ。

けれども、彼を待つ彼女の表情を見たいと思っている。

どうして相反するものばかりが彼の中で生まれていくばかりで消えないのだろう。

「いやだ」

彼はそう言って・・・彼女を抱きしめる。

先ほど帰すと言ったのは、彼の方であったのに。

彼女が、空を見上げながら・・・わかった、と言った時。

彼は思った。帰せないと思った。

「・・・青磁は言う度に違うことを言う」

「そうだよ」

彼は彼女の身体を引き寄せながら、言った。

彼の身体の中に、彼女は包まれてしまう。

片方の腕で彼女の髀を抱き、もう片方の腕で彼女の背中に手を当てて自分に引き寄せる。

計算ができない。次を考えることができない。

近付くと・・・苦しくなるのに、離れると痛みを感じる。

「オレは君の前ではいつも本当のことしか言わない。いつも・・・思っていることを言うよ」

「それは大人の行動ではないわよ」

「君の前では大人になれないのだろうな」

彼女が声を漏らして笑った。

それだけで青磁は嬉しくなってしまう。彼女が、青磁との会話で笑う。それだけで自分は昂揚する。

単純だ。

理由は感嘆だ。

彼女のことを好きだから。彼は、彼女が好きなのだ。

これが最後になるだろうという気持ちでいた。

そして、しばらく彼女の髪に自分の顔を寄せて深く息を吸う。

冬と彼女の髪の香りが彼の肺に吸い込まれていく。

この冬の、この空気は来年の冬にはもう存在しない。

だから思う。この冬の空気を、覚えておこうと思うのだ。

彼女の温度と髪の手触りを、冬の空気と一緒に覚えておこうと思った。

また来年も、同じ冬を過ごせるように。その次の冬も。またその次の冬も。

「君には何も隠せないから」

彼女の額が彼の目の前に現れた。

彼女は嫺やかで彼の熱情に流されているように見えるが、決してそうではない。

とても強い人だと思う。そして強いということを誇示しない。

彼は彼女に唇を近付ける。

・・・ゆっくりと自分の身体を彼女に添える。
額に、彼は頬を滑らせる。彼女が瞬きをする音が聞こえて来るようであった。

「青磁」

彼女が彼の名前を呼んだ。

青磁は小さく返事をする。

いつまでも、彼女が彼の名前だけを呼び続けるように、と祈りながら。

「本当だよ。オレは君に・・・」

「疑っているわけではない」

彼女が更に顔を上げて視線を青磁に合わせようとする、彼はそこに身体を屈めた。

驚く彼女の表情を眺めて楽しむ余裕すら、彼にはない。

信じているから、と言われた。

疑っていないと言われるだけで彼は彼女を抱きしめて帰したくないと思ってしまう。

彼女の肌で、それを感じたかった。

彼女の唇で、さらに感じたかった。

「青磁」

「黙って」

彼は彼女の唇の上で言った。

高い鼻梁で彼女の鼻の冷たさを感じる。

耳に触れると冷たさが伝わる。彼女は冷えていた。

陶醉させるほどの魅惑的な声で。彼女に、優しく囁く。

しかし愉しむ余裕はない。

「・・・黙って」

繰り返し彼はそう言いながら、彼女の唇に自分の唇を重ねる。

ふっと軽く体温を乗せるだけ。それだけで・・・苦しい。

彼女の頬に触れる。髪が、青磁の頬を撫でる。

その間、彼女はただ黙って目を閉じていた。

彼に身体を預けるわけでもなく、青磁の腕に手を乗せるわけでもなかった。

どうして彼女が頑なにそのような態度を取るのか、青磁には少しだけわかるような気がした。

彼は、この国に永遠にいるわけではない。彼女の生活のほんの一時・・・僅かな部分だけ、重なっただけであると彼女は考えている。

青磁にはやらなければならないと考えていることがあり、それはこの国では実現できない。

だから。彼女に来て欲しかった。彼の行くところに。

「冬は好きだ。君に近くなるから」

彼女は黙ったままだった。彼が黙って、と言ったから。けれども、彼女は彼に言った。静かに、声を出す。

「私も。冬は好きよ。・・・青磁が優しくなるから」

それを聞いた時。

ああ、もう、駄目だと思った。もう、無理だと思った。

待つと言ったのに。

彼は、ずっと待ち続けると彼女に誓ったのに。

「・・・オレのことも好きって言ってくれよ」

彼は堪えきれずに言った。

彼女は何も答えなかった。そのことについてはいつも、彼女は口を閉ざしてしまう。なぜなのか、青磁にはわかっていたのに。

彼女に求めてしまった。

困った顔をしている彼女の髪を、青磁は整えてやった。

北風で、彼女の髪は乱れており、それが青磁を煽るのだ。

いつも清楚で静かな彼女が僅かに髪を乱す様が、青磁をととても苦しくさせる。

平静でいられない。

「すまない。意地が悪かった」

すぐに謝罪する。自分の非を簡単に認めてはいけないのだと教育されてきたが、彼女の前では・・・そういう意地を張ることはとても滑稽に思えた。

「君を困らせたくて言っているわけではないから。でも、結果的に困らせているから、同じことか」

青磁はそう言って薄く笑う。どうしても、彼女には矛盾した行動を取ってしまう。

それから、気を取り直して彼女に笑いかけた。

彼の耳に光る麒麟のピアスがちかりと輝く。耳に残る冷たさが、彼を思い出させる。

自分が、とても欲張りだということ。

彼女が欲しかった。連れて行きたいと思っている。

しかし、それは彼女の本当に望んでいることではない。そもそも、確かめてもない。

将来を約束した間柄にまで発展しているわけではなかった。

ただ、静かに・・・一緒に時間を過ごすだけである。

彼にはそれは「恋人同士であるのだ」という十分な根拠になったが。

「困っていない」

彼女は少し笑う。青磁を安堵させる笑顔はいつも清廉で美しかった。

造作の問題ではなく、彼女の知性や理性の輝きであった。

「・・・困っていない」

「それなら良いが」

彼はそう言って、彼女の髪から手を離す。これ以上、一緒に居れば自分を抑えることができなかつた。

帰ると彼女が言っても、帰らせないと思ってしまう。

帰そうと思っても、彼女がなかなか帰らないことに苛立つ。

それなのに、彼女の言葉で安らぎ、彼女の笑顔に癒される。

そして肩を竦めて、軽く言った。この場の雰囲気を変えたかった。

「オレは冬だけ優しいわけではないよ。君にはいつも優しくしたいと思っている」

「そう？意地悪を言うのに？」

彼女との会話はいつも楽しかった。青磁の虚を衝いてはっとするような言葉を短く発する。

恋をしたら、相手のすべてを肯定することになるだろうと思っていた。

けれども、違った。

恋をしても、彼と彼女の会話は変わらない。恋に堕ちる前の時と同じであった。

「好きな子には、意地悪して優しくして・・・そして泣いて欲しくない」

「随分と矛盾しているのね」

「そう」

青磁は頷いた。

「理論的であるのなら、それは恋ではないから」

その言葉に、彼女は黙り込んだ。青磁は微笑む。

求めれば、際限なく求めてしまう。

今の状態で、ゆっくり進んで行ければ良い。

これから先は長い。彼女は、時間をかけてゆっくり咲く冬の花のような人だ。

その花を急に咲かせたり無理にこじ開けたりすれば、枯れてしまう。

●うくわ 後編

沈黙が怖かった。彼と彼女の問答は、いつも短い。そしてすぐに終わってしまう。

沈黙すれば、彼は彼女を抱いてしまいそうになる。

自分の中にある、一方的な焔を消すことができなくなる。

「理論的な恋というものは存在しない？」

彼女の言葉はいつも静かでいつも哲学的であった。

それなのに、それが彼を駆り立ててしまう。

「少なくとも、オレには存在しない」

青磁・マクドゥガルが言った。

・・・そして、彼女の不意を突いた。

青磁・マクドゥガルは彼女の背中と膝裏を抱き、そして彼女を抱え上げてしまった。

急に空が近くなり、彼女は声を漏らす。

夜であるから大きな声を出してはいけないと理性が働いたらしい。それとも・・・あまりにも驚いたために、悲鳴すら出せなかったのだろうか。

どちらでも良かった。

青磁は、彼女を担ぐと、器用に肘でガラス戸を開け部屋の中に入った。

彼女が身を屈めなくても十分な高さがあった。けれども、彼女は身を強ばらせる。

「青磁！」

「君がオレに付き合う義理はない」

青磁はそう言うと、彼女を部屋の中で下ろす。

暖気と寒気の差によって起きた風に二人は吹かれるが、それも室内に入り自動開閉の扉が閉じた途端に止んだ。

彼女に対して強引に何かをするつもりもなかった。

寒さの中でも、彼がもう少し、と言ったのでそれで彼女は青磁の傍に居るのだ、とわかった。

彼女を抱き上げた時に、寒さで細かく震えているのがわかったから。

それが寒さからくるものなのか、青磁の行動によるものなのか・・・考えたくなかった。

怖がらないで、と言おうと思ったが。

言えなかった。

彼が最も怖いのは、彼女を脅えさせる自分自身であった。

彼は彼女から身体を離すと、室内の眩しさに目を細める。

眩しいのは・・・照明に対しての感覚なのだろうか。

「君はもう少し・・・オレが君を好きだっていうことを利用しても良いのに」

彼はそう言い始めた。

彼女は少しも、彼に頼み事をしない。自分の事では一度もそうすることはなかった。

どうしてなのか。彼はいつも不思議に思う。

自分ができることはそれほど多くはないと思っているが、それでも彼女が困っていて自分ができることは少なくとも皆無ではないと思っている。

もし、何もなかったとしても、新たに作ることができるのだろうと思わせてくれるのは、彼女が

居るからだ。

英訳チェックも茶の試飲も、みな青磁からの申し出によるものであった。
しかし、そういうことは彼女の頼み事にはならない。

そういう駆け引きは彼女にはできない。

でも、口に出るのは・・・彼女を困らせることばかりであった。

「さ、熱めの湯を用意して・・・茶を飲んだら送るよ」

適温の室内で、彼女は頬を上気させたまま青磁を見つめている。
彼女の視線が、彼にとっては紫電そのものであった。

眼を逸らすことができない。

目を離すことが出来ない。

・・・探してしまう。彼女の姿を。

「青磁」

彼女はそつと言う。

彼が抱えているものを、彼女は知っている。

家族なのに、わかりあえなかった。

今も、わかりあえたのかどうかわからない時があり、隔たりを感じる瞬間がある。

彼の眼の病が完治しているかどうか判断する根拠や基準がないように。

彼の中にある蟠りが消えて無くなる日は・・・まだやって来ていない。

だから、実家に帰ることは殆どなかった。忙しいと言い訳し、あまり関わらないようにしている。

それでも、会えば会話するし、いつも通り抱擁で迎えられ抱擁で送り出される。

絶望の先で見つけた、新しい風景を与えてくれたあの人を好きになったから・・・彼女を好きになった己について、嫌悪することをやめられた。

彼が冬の花々を見つめているのは、マクドゥガル家の敷地を思い出すからだろう、と彼女は思っている。

その通りであった。

敢えて空に近い場所に住んでいるのは、空を近くで見たいからというだけではない。

・・・土に近い場所に居れば、もっと思い出してしまうからだ。

苦悩のあまりに、マクドゥガル家の杜を彷徨った日々を思い出すから。

それがまだ・・・懐かしいを思うことができないほど、苦しいから。

根気よく治療するようと言われていたが、もうかなり長期間にわたって彼は治療を続けている

。

自分の治療に関しては焦る気はなかったが、時折、この状態が永遠であるとは思っていないぶんだけ・・・彼女が自分の脇をすり抜けて去ってしまうのかもしれないと思うと彼は焦燥感に煽られてしまう。

だから、彼女は言う。

「冬の花は・・・うくわが多い」

彼女はそう言った。雨花のことだ。

雨が降るように花が散ることを言う。

約束したかのように、一斉に散り落ちる。

日本では桜が有名であるが、冬の花は咲く個体数が少ないものが多いので、うくわとなる機会を見ることは殆どない。

それでも・・・彼女が、なぜ、そのように言うのか青磁は知っている。

滅多に見ることが出来ないから、珍しいのだ。

そして・・・青磁の育ったマクドゥガル家の敷地の中では古木が多く、花の重みで枝が撓る様をよく見たものであった。

それらが雨や風で散ってしまうのがとても残念で、身体を冷やしながらも花の散る様を眺めて家族にいつも叱られていた話を彼女にしたばかりであった。

「だから好きよ。一生懸命生きている。どの季節の花も。どの季節も」

「君にかかると嫌いなものがなくなってしまうな」

彼女は心優しい。

彼女は、彼の欲しいものをいつも持っていて惜しげもなく青磁に投げて寄越す。

けれども、彼は彼女に何もしてやることができない。だから、苛立つ。

彼は整った顔を傾げる。片方だけ薄い瞳が彼女を捉えた。

もし・・・彼が病に冒される前に彼女と出会っていたのなら、彼女はどんな色で見えるのだろうか。

彼女には嫌いなものはない。好きか、苦手か。彼女の区別はとても複雑だ。

いっそのこと、嫌いになれば良いのに。

そう思う時さえある。

それなのに。

失いたくない。そう思った。

「オレも君のうくわなのかな」

青磁は寂しそうに言った。彼女はすべてのものを愛でている。

彼は多くあるうちのひとつであるのだろうと思うと・・・彼の愛し方は、彼女のそれと違っているのだと思うと・・・

青磁はそつと言う。

「一度に散る。跡形もなく、一斉に散る」

彼の恋情も同じだと彼女は言いたいのだろうか。

だとしたら、彼女は彼のことを理解していない。

今、彼の家のバルコニーには花は殆ど咲いていない。散ってしまったからなのだ、と言いたそうであった。

彼女の言葉の影に、彼を躲す言葉がいつも付随しているような気になるのは・・・彼が不安に思っているからだろうか。

これほど唇を重ねても。

彼女は彼に夢中にならない。我を忘れない。

抱き合っている時でも、彼女は静かに目を閉じる。

・・・彼女は、そつと言った。大切なものを壊さないようにするかのよう。

「うくわは好きよ。そして哀しい。それで去ってしまうから。もう、元に戻らないから」

散ってしまった花は元に戻らない。それを彼女は嘆く。戻りますように、と言う代わりに戻らないから好きだと言う。

「やはり、帰ろう。送って行く」

彼はそう言った。自分の都合の良い解釈しか採用できなくなってしまいそうになる。

彼は、縋ったり拘ったりすることはできない。

そうすれば、間違いなく彼女は壊れてしまうから。

彼の先祖のように、彼はたったひとりを愛しすぎて、やがて・・・崩壊を招くのだろうと思ったから。

矛盾していることはわかっている。

けれども・・・どうにもならない自分の衝迫を抑えられない。

「うくわは好きよ」

彼女はまた、そう言った。

なぜ、繰り返すのかわからずに・・・青磁は苦しそうな顔を向ける。

彼女のあどけない顔を見る。今は、ただ、彼女を泣かせてしまいそうになる自分に嫌悪するばかりであった。

「でも、君はオレの朝顔だ。君は、オレの前では決して消えない。散らない。そういう花であって欲しい」

「違う。命は永遠ではないから・・・」

「万人の永遠でなくても良いんだ。オレの生涯だけの話で良い」

彼はそう言って嗤う。

「少し後ろ向きな考えだったけれども。オレは、諦めていないし、諦めるのは諦めたから」

すると、彼女は少し不思議そうな顔をした。

「青磁だけの永遠？・・・うくわのない世界？」

彼は、彼女の声で、身体が鎮まっていくのを感じる。

彼女は永遠だと囁かれても、動じない。酔いしれない。彼女はいつも・・・冷静だ。

「言い過ぎた。冬風に酔ったかな」

彼は冗談めいてそう言ったが、彼女は笑みを作らずに、彼の答を待っている。

青磁は少し、唇を尖らせて広義した。

「オレが言いすぎた。だから、この話はこれで終わり」

彼女を抱き上げた時。

彼女の躰がとても軽かったので・・・彼は驚いた。幾度も抱いた彼女の躰はとても小さかった。

それが理由かもしれない。彼の心が、いつになく乱されたまま落ち着かないのは。

・・・彼女が静かに、彼の腕に手を添えた。

「青磁。私が言っているのは・・・青磁だけの世界なのか、ということ」

彼が身体に力をこめる。彼女に触れられると・・・困ったとしか思えない。

自分を律せなくなるからだ。

「君は何を言いたい？」

彼は彼女に質問をした。彼だけの世界なのか、と彼女が訊ねる。そうではないのなら・・・一体、どんな世界なのだろう。

この景色を見ることが出来るのは、青磁だけである。この病がそうさせる。人と違う色しか見えないと思うと・・・筆を走らせて色を乗せることを諦めた。

最近まで、モノクロの世界しか描かなかった。

でも彼女はそれでも良いから、青磁にしかわからない風景を見つけろと言った。それで、彼は楽になった。

「言ったままよ。青磁ひとりの世界が、うくわのない世界？」

彼は彼女の名前を呼んだ。酷く掠れていた。

彼の最も愛でる朝顔は、すぐに季節が終わってしまう。

けれども、次の夏にはまた同じ様に花を咲かせる。

季節は巡り、そして命も巡る。

彼女は永遠はないが、永遠に命は巡っていくと彼に教える。

散らない花はない。雨のように散るか、雪のように散るか・・・各々違う散り方であるけれども、巡ることには変わらない。

それで終わってしまうわけではない。

だから。

彼は、言った。

「君にも・・・君にも、雨花にならない世界がある、ということか？」

「それは・・・青磁次第かな」

その瞬間。彼は、彼女を抱き上げた。

先ほどと同じ様に、小さいこどもを抱き上げるように。彼の視線は下から上になった。

彼女の顔が持ち上がったからだ。

一度ならず二度までも青磁に不意を突かれて、彼女は小さく悲鳴を上げる。

身動きしたが、彼の力強い腕は彼女を離さなかった。

「君にしては、珍しいな。・・・オレの責任にするなよ」

「どうかな」

彼女はそう言って薄く笑う。

彼の片方だけ少し薄い瞳を覗き込んでいた。

彼女は物怖じせず、彼の紫電を見つめる。

「それなら、オレと考え続けてくれ。これからも、ずっと」

そう言って、彼は彼女を担ぎ上げたまま、ゆっくりと動き出した。

彼女は彼の肩に手をあてて、身動きする。

「青磁。私、今日は帰れとあなたに言われたけれど・・・」

「前言撤回。今日は泊まってくれ」

青磁はそう言うと、そのままベッドルームに彼女を運び込む。

彼女の躰が緊張するのがわかる。

彼は言った。

「嫌なら、ノーと言ってくれ。でも、君に・・・うくわを見せてやりたい」

薄暗く、人の体温がなかったために暖房が効いていても寒々しいベッドルームに彼女を連れて行く。

それから、彼女の躰を今一度強く抱きしめて、青磁は目を閉じて言った。

「他には何もいらぬとは言わない。オレは君が欲しい。君も欲しい。

・・・君の恋人になりたい。それから、永遠の伴侶にもなりたい。

雨のように・・・花が一斉に散っても、そこにはオレと君が残っているから、と言い切る強さをオレに・・・くれないか」

「たくさん、願い事があるのね」

彼女がそう言うと、彼は小さく頷いた。

「どれも、君が居ないと実現しないことばかりだ」

青磁は彼女の眼が暗闇に慣れていないことを承知の上で、言った。

「君に、うくわをあげる」

そして、彼女をベッドに墮とした。ゆっくりと、そっと。丁寧に、けれども、彼はすぐに彼女の上に覆い被さり、そして、彼女の肩の両側に手をつけて、見下ろした。

暗闇で眼が見えていなかったかもしれないが。

彼女は、部屋に入ってきた時に気がついたらしい。

この部屋が、いつもと違うことに。

だから、ノーと言って彼から逃れなかった。

ベッドに倒された時、彼女は驚いて目を見開いていた。

その顔があまりにも幼くて、彼はくすりと声を漏らして笑う。

「青磁、これは・・・」

「・・・驚いた？」

そして、彼は自分の手元に広がるたくさんの花片を掬い上げ、彼女の額や髪に向かって、落とした。

花瓣の少し湿った感触と、暖気で立ち上る花の香りに彼女はただ驚くばかりであった。

彼は、彼女に雨花を落とし続けた。

雨のように。

花が、静かに彼女に落ちる。

「青磁の演出に呆れているだけ」

彼女が低い声でそう言ったので、青磁はまたおかしそうに笑った。

彼女は、ようやくわかったらしい。

なぜ、バルコニーに花がほとんどなかったのか。

清掃されたからではなく・・・彼が、選りすぐって散らしたのだ。

「咲いている途中で摘み取るのは酷だから。

君が来るこの日に一斉に散ってしまったのが良かったとさえ思ったよ」

彼女は溜息をついていた。

大きな驚きは去ったらしい。

彼女の背にも、花片が敷かれていた。そして、そこに彼は彼女を落とした。

彼女こそが、青磁のうくわだ。

そう思った。

彼女は花と一緒に落ちてきた。

あの時・・・彼女に恋をしたあの時にも、花が咲いていた。

それがすぐに愛に変わってからも。彼女は花のような人であった。

誠次・マクドゥガルがなぜ、花をテーマに絵を描いたのか、青磁は理解できた。

いつも彼女は花のように静かだけれども力強く生きる。

「・・・君に見せたい。マクドゥガル家の古木は多くて、うくわがよく見られる。雨のように、花が散る。たくさん・・・一斉に落ちるんだ」

そして顔を近付ける。

「だから、オレもうくわになって・・・君に墜ちても、いい？」

彼が何を言っているのか、彼女にはすぐにわかったようだ。

もう、逃げられなかった。

暗闇の中でも、彼女が恥じらいで顔を赤くしているのがわかる。

幾度、肌を重ねても彼女はそうして恥じらっていた。

愛おしい、と思う。大事にしたい、と思う。

だからこそ・・・彼の前でだけ、散り乱れて欲しいと思う。

彼は彼女の額に自分の額を寄せながら、囁いた。

誰も聞いていないのに。

花々に遠慮して、小さな声で呟くように彼女に語りかける。

「・・・好きだよ」

彼女はそれを聞くと、眼を瞑る。そして、花の香りを胸一杯に吸いながら、静かに・・・言った。

胸の隆起が大きくなり、青磁は再び身体が火照り、鼓動が聞こえてしまいそうなほど大きく脈打つのが聞こえないか心配になった。

「青磁のうくわを・・・ください」

それを聞いた時。

彼はかっと瞳を開き、目の縁が赤くなるのを感じた。

そして彼女の腕が、青磁の背中に回されるのを合図に、彼と彼女の雨が落ち始めた。

ベッドの縁から、花瓣が落ち始める。

雨花のように。静かに・・・でもあふれ出すように。

いつものことではあったが。

熱い茶を飲むのは、少し先のことになりそうだった。

(FIN)

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

いなめ：明け方のこと

その声を何度か聞いたことがある。

乃理は気がついた。

寒い冬のことだった。

傷口が乾燥しにくい湿気の多い頃と、花粉飛散で眼球が傷つかないようにという配慮で、この季節を選んで手術を受けた。

目には、消毒液を含ませたガーゼと、睨が少しも入らないようにするために遮光性の高い布をあてがわれ、包帯できつく固定されていた。

これじゃ、何にも見えないじゃないの。

乃理はそう言って、すぐに自嘲した。

もう、彼女の瞳はほとんど睨を感じることはない。

だから、どんなに包帯から光が漏れようとそうでなかろうと、あまり影響のないことだった。

それに、長らくそういった生活を続けていたので、よく見えない生活はあまり苦ではなかった。個室の病室はどこになにがあるのか手に取るようにわかったし、日々ぼんやりと過ごして、日光浴でしばし微睡眠、そして聞きたい音楽を聴いて過ごす。

気が向けば、インターネットに接続することもできたし、音声変換ソフトのデモ版を提供してくれた人がいたので、チェスの対戦などもすることに困らなかった。

暇な時間はあまりなく、規則正しく安らかな日々を送っていた。

睨を感じなくても、太陽光というのは偉大だと思う。

その暖かさを感じるし、日が出るころには目が覚めるし、日が沈むもなんとなくわかる。

乃理は慣れた手つきで、車いすの輪を押し出した。

手術までにはまだ、日にちがあった。

大事を取って、こんなたいそうな扱いを受けているが、それでも彼女はおとなしく指示に従うことにした。

体調も大分崩していたので、まずはこれを回復させることが肝心だと言われた。

だから日々、手術までの体力をつけることに専念している。

眼科病棟は軽症もしくは入院期間が非常に短い患者ばかりだったから、乃理は特設別室の誰かと話をすることもなかった。

けれども、廊下を通る声や。

外来診察時の待合室の中に混じる特徴のある声は、すぐに覚えることが出来た。

記憶力が良いのは、目が悪くなってからだったのか、それともその前からだったのか、もう覚えていない。

でも、彼女に一日置きに会いに来てくれる年の離れた友人の女性は、「どうして足音でわかるの！」と酷く吃驚する。

乃理はそういううまく説明のできないことには微笑んで誤魔化すことにした。

それは、あなたが好きだからよ。

その言葉を、上手く言える日が来るだろうか。

こんな言葉をかけなくても、彼女は日々感じたことや、どんなにここから見える冬の景色が素晴らしいかを事細かに話をしていく。

彼女が訪れる度に、髪の毛を梳ってもらい、ゆるく編んでもらうのが楽しみだった。

「ふわふわの髪の毛ね」

「猫っ毛だから、すごく困ってるの」

「ああ、私もよ」

そういう会話が愉しかった。

人の声を聞き分けるのには自信があった。

足音、雰囲気、匂い、そのすべてで「その人」を確認する過程は、チェスに通じるものがある。

「危ないぜ」

その声に聞き覚えがあった。

冬の昼間、天気が穏やかなので、庭に散歩に出た。

途中まで連れてきてもらえれば、後は自由にあたりをぐるぐる巡ることができた。

たまに進行方向の障害物とぶつかることがあるけれど、膝や足にアザを作る程度で、それほど車椅子のスピードは出していないはずだった。

どん、衝突音がして、あやうく車椅子ごと倒れそうになった。

その表紙に膝かけも落としてしまった。

「……おっと」

若い年齢だ。そう思った。

そして相手は、車椅子の車輪を抑えると、傾いたバランスを戻した。

「……ありがとう」

「どういたしまして」

素直に礼を言ったが、相手も相当なスピードで歩いていたのだろうと想像した。

「あんた、本当に目が見えないんだな」

無遠慮なその言葉に、乃理は少し微笑んだ。

膝掛けを受けとろうとして、方向を少し間違ってしまったようだ。

「残念ながら。」

「さっきの車椅子のスピードからすると、とてもそうとは思えないな」

乃理は彼の言葉に少し好感を持った。

これまで彼女にかけられた躊躇いや、哀れみや、気まずいなといった相手の思惑はとても、彼女を傷つけたので、このように無遠慮にずけずけと言う言い方が、かえって気持ちを楽にさせた。

「…私、あなたの声を聞いたことがあるわ。…眼科の患者さんかしら」

「そうだね。」

彼は曖昧な返事をした。

本当に覚えているの？と乃理を試したものだから、彼女は少し考えて、記憶の波から彼の音を拾い出した。

「この間は一昨日。その前は…半月くらい前に、外来の受付で、診察券を忘れたけれど予約はしてると言っていた。」

話しているうちに正確な日にちを思いだしてそれを告げると、彼はひゅっと口笛を吹いた。

「Bravo」

英語の発音が素晴らしく良い。

彼はひょっとするとハーフか、帰国子女かもしれない。

乃理は言った。

「ねえ、少し話をしていかない？夕食の時間まで、私、とても暇なのよ。」

「名前は…そう、聞かないことにするわね。」

そう言うと、じゃあ「S（エス）」で良いよ、と言った。

彼女はそれなら私は「B」で良いわと言った。

名前がBなの？とSが尋ねたので、違う、と答えた。

「名前は…そう、どうでも良いわ。でも、BLINDの状態を指し示している私にぴったりのアルファベットだと思うの」

彼女がそう笑った。そうか、それなら気の利いた名前ということにしよう、とSも笑った。

近くのベンチに腰掛けるように勧める。

確か、ほんの数歩先に、ベンチがあったはずだ。

彼の足音について行く。

その足音は若かった。きっと、乃理と大して年齢が変わらないだろう。

「それなら…B。この短い時間で少しばかり暇つぶしをしよう」

彼が面白そうに言った。

「わかったわ、S」

乃理も答えた。

「目はどうしたの？」

「涙腺を少し切開するの。でも、麻酔アレルギーが酷くて…今、ちょっと体力も落ちているので入院中。」

「…眼科には珍しいね。」

「そういうあなたも、眼科に通い詰めて随分経過するのではないの？」

彼の予約していた診療内容は、定期的な視力検査と、特殊な薬液を使った永年治療の点眼液の処方だった。だから珍しいな、と思って記憶していた。

どこか別のところで定期的に診察していて、ここでは初診だと言っていたように思う。

「凄いな、そこまで覚えられるものか。」

Sが感嘆の声を上げた。

乃理は唇を曲げて自嘲した。

「つまらないことほど、良く覚えてしまうの。」

その答えが気に入ったようだった。

「…オレはここにしばらくの間、立ち寄っただけなんだ。でも、処方箋が切れて、困っていたら、
主治医がこの医師を通じてあれこれ手配してくれて。…もうすぐここを発つ」

「そうなのね」

乃理が少し残念そうに言った。

この話しぶりからして、彼は留学生か短い間滞在している外国籍の人物なのだろうと思った。

ほんのわずか、イントネーションが違った。

だから、この近くの大学生かと思っていたのだ。交換留学生なのかもしれない。

しかも、海外の処方箋を日本で再現してもらうほど、病院関係者にコネがあるとなると、若いけれども相当な人物なのかも…と想像を膨らませた。

「あなたの主治医は相当な名医なのね」

「宇宙一だと思うよ」

彼は即答した。

「私の主治医も宇宙一だと思うわ」

乃理が笑った。

「そうか、宇宙一がたくさんいると困るな」

Sがそう言ったので、乃理もそうだね、競争させてみる？と可笑しそうに笑いながら提案した。

少し風が吹いた。

「冷えないか？」

「大丈夫」

そこまで言うと、乃理が可笑しそうに笑いながら呟いた。

「私たち、まだ、ほんの30分くらいしか一緒に居ないのに。

こんな、恋人同士のような会話をしているわね」

Sがそうかな…そういうのは疎くてね、と苦笑いする。

「不思議なことに、あなた、懐かしい気がする。」

「オレもだよ。君の顔半分が、包帯で見えないから安心するのかな」

彼がそう言うので、それはあるかもね、と彼女は相づちを打った。

「視線を合わせないことは、最大の不幸であり、最大の幸福でもある。」

「…誰の格言？」

「私の格言。今作った。」

Sは気の利いた答えだね、と言った。

「ねえ、S。あなたは恋をしたときに、目を合わせる方？それとも、合わせない方？」

「唐突だな。何を言うのかと思ったら。」

乃理は自分の思いつきに、はしゃいで手を叩いた。

「だって！こんな風に・・・同年代の男の人と話すの、初めてかもしれないし。
・・・もう巡り会えないチャンスかもしれないし。日本語では一期一会って言うし。
この際、聞きたいことは聞いてしまおうと思って。」

「同世代ってどうしてわかるの？」

Sがそう言ったので、乃理は根拠を提示した。

「話し方、イントネーション、歩幅の具合、会話のタイミング、笑いのツボ・・・総合的なものだから、
これで、私とあまり大して年齢が違わないという私の予測が外れていたら、とてもショックだわ。」

「まあ、当たっていると言えば当たっているし。そうでないと言えば、そうでないかも。」

風が吹いた。

冷たい風だった。

かつて、乃理が恋した相手もこんな風に冷たく風を吹きさらす人だった。

でも、それは冷たいから近寄るな、冷たいからはやく温かいところに行け、というその人の合図だった。

それに気がつかないで、その人の風の源全部が欲しいと思った。

その人は、彼女には北風でも、たったひとりの人だけには、温かい南風になる、そんな人だった。

愛の重さも愛の残酷さも知り得なかった。

「・・・どうした？」

少し、黙り込んだので、Sが怪訝そうな声を出した。

「ううん、何でもない。…失恋した時のことを思い出していたの。」

「その割りには、微笑んでいたよ。」

「ええ…失恋て、哀しいだけではないのよ。」

「そうだね。」

「あなたも失恋したことがあるの？」

乃理は尋ねた。

「失恋したとは思ってないよ。」

「相手が倖せであればそれで良いし。」

「成就の定義がわからない。未だに、ね」

その言葉で、昔の恋を彼がまだ秘めているのではないかと思った。

「B、君は恋をしたことがある口ぶりだね」

「恋はあるけど愛はない」

乃理はそう言った。恋をしたことはある。

幼い恋だった。そして、見事に玉砕した。

でも、その時は恨めしく思ったけれど、彼は精一杯誠実に接した。

残酷で冷たくて、そしてこの上なく繊細な、私だけの対戦相手。

生涯の対戦相手にならなただけで、彼のチェスを動かす音さえも、

その配置図さえも、全部、鮮やかに蘇らせることが出来た。

「愛と恋の定義は難しいよ」

Sが言った。

「Sは？あなたは、恋をしたの？愛をしたの？」

少し沈黙があった。

あまり親しいとは言えない人物に、踏み込んだ質問をしてしまったと思った。

「恋が成就できずに愛になった。」

彼はそう言った。

愛…乃理が呟いた。

そう、愛になった。

Sはもう一度言った。

「恋を成就して愛になる場合もある。でも、オレは…恋が成就しないで愛になった。

…その人を諦めなければならない瞬間に、それが愛になった。」

「哀しかった？」

乃理は尋ねた。いいや、とSは言った。

「恋より愛の方が苦しいけれど、それが自分にとって凄く良かったと思う。

ほんの少しだけ、思いやれるようになった。ほんの少しだけ、回りが見えるようになった。
…そして、ほんの少しだけ、切ないという気持ちを知った。」

オレね本当はいろんなことが、何でもできると思ったんだよ。

彼は穏やかに言った。

「本当は画家になりたかった。でも病気でできなくなった。

だから、凄く荒んで…そんなときに恋を知って愛を覚えた。」

ちょっと照れるね、とSが付け足した。乃理はそんなことないよ、と言った。

Sが少し黙ったので、今度は乃理が口を開いた。

「私は、子供過ぎて、彼を独り占めしたかった。でも、その人は他の人を好きで。

その人を知れば知るほど、羨ましくなってそして憎めなかった。

自分は特別だと思ったかったし、いつか白馬の王子様が現れて自分をこの状況から攫って行って
くれると思った。」

乃理は続けた。

「ほんの少し、いいえ、だいぶ、自分を憐れんだ。自分のためだけに泣いた。
でも、他の人のために涙したり、憂えたり、何かしたいと言い出す人がいるのだと
その恋を知って、学んだ。」

「良いことだよ。」

Sが言った。ううん、と乃理は首を振った。

「わがままな恋しか知らないから。次に恋をして、愛を知るようになったら、きっと、自分は正しいのかなと疑うと思う。そこで、また自分しか憐れむことが出来なかったら、きっと私は一緒恋はしない。」

できるかどうかわからないけれどね、時間がないし。

乃理は呟いた。

「正解はないよ。それを探すのも、試練というやつだ」

「随分悟った言い方ね」

彼女はそう言うと、そんなことないよ、ちっとも悟れていない。
とSが反論した。

「そう？今の話、随分老成してたわよ。」

「そんなことない…未だに思い切れない。…実は、その人の髪の毛を、こっそり持っていたりする情けないヤツなんだ」

そう言うと、Sが乃理の掌に何かをのせた。

ストラップだった。

歩先が細かく編んであったけれど、人毛のようだった。柔らかくて猫っ毛の人のようだ。

「Sは随分と・・・乙女ね」

酷いなあ、とSが笑う。

秘密だよ、と彼は言った。

普通はそれ、引いちゃうわよ。

乃理がくすくす笑いながら言った。

その人の髪の毛を持つことが出来るくらいだから、よほど親しかったのだろう、と思う。
それほどまでに身近な存在だった人を諦める・・・それは辛いことだと思う。

乃理は愛を知らない、と思った。自分の恋は未熟だった。

でもその未熟さを知ったおかげで、こうして今を穏やかに現実を受け入れることだできた。

風が冷たくなってきた。

「そろそろ、中に入った方が良い。」

そうだね、もう、夕暮れなんだね。

光が見えなくても肌で感じた。

Sが車いすを押してくれた。

「Sの病気、治ると良いね。」

「Bもね。手術するんだろ？」

「うん。でも根本的には治らない。・・・それでも受けろと言う人がいるから、受けようと思う。」

建物の入り口に到着した。

車輪を持ち上げて、Sが中に入れてくれた。

「それじゃ、オレは行くよ。また再会することがあったら、声をかけてくれ」
「それは私の台詞よ。私、今、本当に何にも見えないんだから」
「その耳と勘の良さがあれば、どこでも見つけられるよ……そう、運命的にね。」

「S。お話につきあってくれてありがとう。楽しかったわ。」
乃理は手を差し出した。

Sはその華奢な掌を握った。
想像通りの、大きな、若い青年の掌だった。

「ねえ、最後に、顔を触らせてもらって良い？」
乃理がそう言うと、少し吃驚したようにSが顔を触るの？と戸惑ったように言った。
「お願い。…再会した時に顔がわからないと困るでしょう？」

しょうがないなあ 困ったお姫様だ。

Sがそう言った。

ほら、と目の前で屈む気配がした。
乃理が手を挙げて、Sの顔を探す。
彼が両の手のひらで、彼女の手を包み、そして自分の両頬に導いた。

…精悍な顔立ち。目鼻立ちがくっきりしている。
髪は少し長めで…そして耳にはなにやら文様のあるピアスをしている。
ハリのある肌。整った感覚の目鼻。唇は少し厚めだ。
若いな、と乃理は思った。そしてものすごくハンサムなのだ。

「綺麗ね」
「男に綺麗というのは相応しくない。」
「あら、私は綺麗な男の人を知っているわよ」
「オレも知ってる。」

じゃあ 今度会った時には、その人達を引き合わせて、どっちが美しいか競わない？と言うと、面白そうに、Sがそれは良いね、と賛成した。

ああ、本当に、もう、行かないと。

Sが言った。

また、いつかね。

乃理がそう言った。そしてSが立ち去る足音を聞いた。

ほんの少しのこの邂逅を、彼女はひとつひとつ重ねていけば、いつか、愛というものを知るときが来るのかもしれないと思った。

人と人の出会い。

それは本当に貴重で、自分に足りなくて、いろんな人を傷つけてばかり居た。

S、もう一度会ったら、その時は、お互いの目を見て、そしてもう少し、お互いの恋について、Sの愛について語り合わないこと？

チェスの采配のようにはうまくいかないこともあるのだと彼女はもう知っていたから。

今度はいつと定めなかった。

でも、今度。今度会ったら。暁が宿っていない瞳であっても、彼の目をのぞき込んでみようと思う。

そんなに待たせないわよ、S……。そんなに待たせないでね。

また、会いましょう。近いうちに。

彼女は呟いた。

(FIN)

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

Prologue penseeより

青磁・マクドゥガルの部屋で夜を明かすのはこれが最初ではなかった。

あの夏の朝のことを考えると、必ず胸が苦しくなるので、彼女はひとり静かに下を向いて溜息を呑み込む。

彼の肌は熱かった。

肌を合わせ、軀を重ねても、この焼け付くような胸の痛みは治まらないだろう。

どんどん苦しくなるばかりであった。

好きだとか愛していると言われても・・・

どんどん哀しくなった。

自分で自分が抑制できなくなるのだ。

だから、青磁の傍にいるのは苦手であった。

彼女は寝返りを打った。

まさかこんなことになるなんて。

路の途中で具合が悪くなって脳貧血を起こし、そのまま青磁の家に運ばれたあと、高熱を出してしばし留まることになるとは思ってもみなかった。

すぐに帰るから、と言った彼女に、青磁は笑った。

「学校も休みだし、好きなだけ居ろよ」

彼はその間、自分の寝室を明け渡し、ゲストルームに寝泊まりしている。

熱に浮かされて関節の痛みで顔を顰める彼女に、青磁は献身的に尽くした。

病院に連れて行き、薬の処方を受け、また連れて帰ってきた。

自分の家に戻る、と言ったのに、彼は首を横に振った。

彼女ひとりでそんな状態のまま放置できないと言った。

「男の家に泊まるのが気が引けるのであれば、誰かを呼んでも良い。でも、いざとなったら君の住まいからでは病院は遠すぎる」

命に別状のある状況ではないのに、彼はそう言って深刻そうに眉を顰めた。

「具合はどうだ」

彼は彼女の背中に声をかけた。

彼女は無言で頷き、そして軀を反転させた。

汗でシーツが湿り、毛布は先ほど乾燥させたばかりであったのに、もう湿気を吸って重たく感じ

るほどになっていた。

「だいじょうぶ」

「平気か、と聞いているのではない。耐えられない状況であるか、と聞いているんだ」
青磁は少し怒ったようなぶっきらぼうな口調でそう言った。

■01

彼女の具合が悪そうだな、とは思っていた。

会った時から、顔色が良くなかった。

しかし、彼女は顔をマフラーで覆い、帽子を目深に被っていた。

時折声が掠れていた。

彼女の言葉はいつも短い。

その語尾が僅かに変化していることを、彼が見逃すことはなかった。

彼女の白い吐息が空に消えていく。

彼は医学部でもなければ医学の知識が豊富ということもなかったが、彼女の様子はいつもと違っていた。

化粧っ気はないものの、いつも薔薇色であった頬は不自然に赤く、動作が緩慢であった。

彼の言葉に、打てば響くような返事をし、時には青磁を閉口させるほどに論理的な物言いをする彼女のいらえではなかった。

耳鳴りか頭痛がするらしく、しきりにこめかみを指先で押さえていた。

そして終始、涙を含んだような声をしており、眉を曇らせて不機嫌そうにしている。

青磁が医師でなかったとしても、これは発熱の予兆であると推測できた。

けれども、青磁が、彼女に対してそんな言葉をかけようものなら……

いつもと違う、と言おうものなら彼女は怒り出したに違いない。

「私の日常を知らないのに、何と比較したらそういう差異を導き出せるのか」

そう言って、彼女は横を向いてしまう。

彼女は、いつもそんな憎まれ口を言う。

青磁の言葉を信用していないわけではない。

彼女はそこまで人を信頼できない人物ではなかった。

ただ……彼女は彼女自身を信頼していない。

青磁のことを憎からず思ってくれていると確信している。

心の中でどんな風に思っているのだろうか、青磁の声は届いているのだろうか・・・
彼女は、そんな質問を受け付けなかわりに、青磁の傍に居る。
青磁のこれまでの人間関係にはなかった接し方に、彼は戸惑った。
彼の望んだ・・・普通のありきたりな生活があった。

留学生活は順調であった。

留学兼治療兼静養と称して、この街に移り住んだ時。

誰もが外国人である青磁を見て、いろいろな想像を彼に重ねたものだった。

しかしこの国の人は概ね善良で、そして順応することに優れていた。

やがて彼が日本語が堪能で、日本人の特徴を強く出した親日家の家系であることを知ると、青磁の周囲に張り巡らされた枷のようなものは消えて、徐々に人波に融合していくような気がした。

生まれ育った国より遙かに慕わしい国で、彼は生涯をかけて愛せると思った人を見つけた。

あれほど熱烈に愛した人に対して感じた恋情とは違う愛を見つけた。

今すぐにも、連れて帰りたと思う程に。

けれども、彼女は彼を拒む。

唇や肌を重ねるのに、彼女は決して彼と心を重ねることはしない。

一時の悦楽のために彼女に熱情を捧げるのではない。何度そう言っても、彼女は淡く微笑むばかりだ。未来を囁いても、彼女はそこにいる未来の青磁の傍らに自分が居ないと思っている。

・・・彼女の強さが彼を受け入れると同時に・・・彼女は彼を拒むのだ。

それでも、会わずには居られない。どんなに些細なことでも、僅かな時間でも・・・青磁は彼女の声を聞き、彼女の顔を見て、艶のある櫻色の唇で青磁に向かって微笑む姿を見たいと思う。胸の疼きや喉の渴きを癒すことができ潤すことができるのは、彼女だけしかいないと、何度も伝えるのに、彼女はそれでは微笑まないのだ。

「なあ・・・具合が悪いのか？」

彼はとうとう、そう言った。

彼女の歩幅がいつもと違った。

彼女の目線がいつもと違った。

自分のことより・・・彼女の様子が気になって仕方が無かった。

彼女は、丸襟のコートの上に、幾重も巻重ねたマフラーの端が翻っていて、彼女の髪に絡んでいた。

それなのに、彼女は手袋ひとつしていなかった。

北風にスカートの裾が躍り、華奢な膝が見え隠れして、彼を落ち着かなくさせる。

「気分は悪いけれど、機嫌は良いわよ」

彼女がそう言うので、青磁は苦笑しながら・・・そっと彼女の手を取り、自分のコートのポケットに彼女の掌を導いた。

彼に抗わない彼女の掌は、熱かった。

「おい・・・」

彼は自分の足元に向かって、溜息を漏らす。

ぎゅっと・・・彼は自分の腰元の温度を握り返した。

湿った熱い皮膚の感触が伝わってくる。彼女は確かに、失調している。

■02

こんな風に、気軽に彼女に触れられることはなかった。

彼女はいつも、自分に厳しい。

決して・・・青磁に心を許すことはしない。

それなのに、彼女は今は彼に身体を預けるように気怠げな様子で乱れた呼吸を繰り返す。

・・・彼は、その様子そのものに嫉妬しそうであった。

彼女を乱すことができるのは、彼であって欲しいと思うのに。

彼女は、彼には乱されないのだ。

決して。

けれども、こんな・・・突然訪れた炎熱に、彼女は斃される。

ぐらり、と彼女の身体が揺れたのは、最寄り駅の改札を出た時のことであった。

あまりにも頻繁に大事を確認する言葉に、彼女は辟易していた。

彼の添いの腕をいらない、と言った時のことであった。

彼女は、彼の目の前で身体を傾け、真っ白な顔を背けながら地面に落ち崩れるところであった。

青磁が彼女の軀を受け止めなければ。

一瞬、周囲がわっと彼女に注目する。

・・・脳貧血だ、と思った時には、彼の身体が動いていた。

下を向いた彼女の顔が、蒼白であった。

無言出、彼女の軀を受け止める。

声が出ず、ただ、傾倒する彼女の軀を支える腕の重みだけが現実にあるだけであった。

自動改札の自動扉が閉じているのに強行突破した。
鳴り響く高音のアラートの音は聞こえなかった。

彼女の肩が揺れて、髪が地面に向かっていた。

いつも見る頭頂の位置はずっと低い場所にあった。

彼は我を忘れて・・・彼女の鳩尾を片腕で掬い上げて、地面に彼女が倒れ込むのを防ぐ方が先であった。自分達は正規の上客で、具合が悪くなった彼女は自分の連れで・・・そして皆に迷惑をかけないほどに近い場所に住んでいると説明すると、それだけで立証できてしまう自分の容姿を恨めしく思っていた日々がまるで嘘のように・・・有り難いのだと思った。

彼は、青磁・マクドゥガルであり、この街の誰もが知る人物であって良かったと思った唯一の瞬間であった。

駅前の高層マンションの最上階に住む、外国の実業家の御曹司のことは、知る者にとってまったく知らないことではない。

それは、彼の生国でもあまり変わらない処遇であった。

彼はいつも誰かの視線の先で生きていた。けれども、誰も本当の彼は見ない。

紫電と呼ばれる彼の鋭い視線を、誰も直視しない。

わかっている。

誰も悪いわけではないのだと。

誰にも罪はないのだと。

だから、彼女の失調に、誰かの責任を被せたいと思ったけれども、彼女をいつも見守っている青磁が気がつかなければ誰も気がつかなかったのだと確認し・・・そして安堵する。

言葉もなく項垂れる彼女の軀はとても軽かった。

そして服の上からでもわかるほど・・・とても熱かった。

「すぐそこが自宅なので」

彼はそれだけを言うと、彼女の肩を抱き、上着の胸ポケットから滅多に出さないIDと学生証を差し出した。効力があったのは、学生証の方であった。

この辺りでは知らない者がいない大学院が併設されている学舎の在籍者であることが証明される。

周囲を納得させなければ、彼女を介抱することができない自分に苛立った。

青磁は彼女の身体を抱いて脇から腰にかけて腕を廻し、彼女の身体に自分の腕を巻き付けるようにして彼女を担いだ。

淫靡な気持ちは沸き上がらなかった。ただ、彼女の力の抜けた身体をはやくここから連れ出さなければいけないと思った。・・・それだけであった。

それからどうやって彼女を自宅まで運んだのか、手順を思い出すことができなかった。彼は、そんな風にして、自分が動揺することはないと思っていた。

・・・あの恋を失った時に。

彼は、自分を失うことはないと思っていたのだから。

このまま、意識を失った彼女を自分の生国まで連れて行きたくなる衝動が・・・彼を襲う。

今、彼の大部分を占めているのはひとつだけだった。

彼女の失調に対し、自分ができることがそれほど多くはないということを知っていたから。だから、彼は自分を失いそうになる。彼女を救いたくて。

■03

・・・力を失った彼女の軀は、驚くほど軽かった。普通、意識を失った者は己自身で支えることを放棄してしまうので、人ひとりを支えるのは相当な力を要することを、彼は知っていたのに。だから、彼女の軀が軽かったので、これは幻ではないのだろうかと思えた。

決して縋らない彼女が、彼の腕の中で、小さな鳥のように肩を震わせて目を伏せている。

力なく・・・彼の言葉をいつも否定し続ける彼女が、心許無くきつく目を閉じて、辛そうにその場を耐えきろうとしている。

青磁は一度、彼女を自宅連れ帰った。

自分の家が駅前から近くて良かった、タワー型マンションのエレベーター完備で良かったと思っ

た。冬の冷たい風が除けられる庇のついた通路が伸びているマンションがこれほど役に立つと思っ

たことはなかった。この街の医療システムは素晴らしい。けれども、システム化されていることによって、彼女のように突如として失調する者への配慮が欠けているときがあった。

しかし、彼は冷静に・・・「もしも」の時の対処方法を思い巡らせた。

彼の自宅に一度連れていくことを、彼女に告げた。それしか方法がなかった。

すると、彼の声に彼女は小さく頷いて承諾を示した。

「ごめん」

彼女は掠れた声で言った。

彼はその言葉を聞いて、苦しくなって横を向いた。このまま、彼女を彼の部屋の中に閉じ込めてしまいたいと一瞬でも思った自分を・・・恥ずかしく思った。

「あやまるなよ・・・」

彼は同じ様に・・・彼女と同じ様に力なく言った。

頬を染めて、それでも頬以外には青白くなった彼女の顔や首筋が、乱れた呼吸に乗せて大きく上下した。

彼を頼って倒れたわけではない。彼とたまたま一緒にいただけなのに。

彼女が青磁を頼ることがなかったことを哀しんでいるのではなかった。この瞬間に居合わせたのが、彼で良かったと思ったのだ。

目の前で、これ以上ないくらい彼に苦しみを与える人が、同時に、青磁に歓びを与える。

・・・彼のよく知っている、白金の髪的青年は、こんな風にして・・・哀しみも歓びも苦しみも・・・皆同時に味わうという苦悶に耐え抜いたのだろうか。

玄関先で座りこむ彼女を見て、これは相当に具合が悪いのだと悟った。

青磁は、壁に凭れ掛り、背中を丸めて黙り込んだままの彼女に、そのままでもいいと言い、その場で苛立たしく、玄関先に備え置いてあった子機を取り出し、緊急電話用の短縮番号の手順を思い違いではないようにと願いながら、押した。

記憶違いでなければ良いのに、と思ったが、彼の記憶は誤りではなかった。

程なくして応答した先に、彼は短く緊急外来の希望を告げた。

症状を的確に述べ、あとどれくらいで到着するのかを伝える。

彼女の名前と年齢、保険証の種類と所持の有無を尋ねられる。

そして最後に。

・・・当人との関係を聞かれて、青磁は迷うことなく言った。

「婚約者です。一緒に暮らしています」

あとで彼女が知れば、相当に激怒するだろうと思ったが、信憑性が必要であった。ここで悪戯電話だと思われたら、彼女の診察時間は遅れてしまう。

連絡先としてこの住所と電話番号を伝えた。

慌てて、電話を切る。

救急車を呼んだ方が良かったのだろうか。しかし、セキュリティチェックの厳しい、このマンションに入るまでに相当時間経過を要することを考慮すると、彼がこのまま病院に連れて行った方が良さそうであった。

事件対策のために、必要とされた答えを述べてから・・・彼は、電話回線を切り、そして座り込んだままの彼女の背中に声をかけた。

「すまない、もう一度、外に出る」

彼女は無言であった。

膝を抱え込んで、項垂れ、辛そうに大きな呼吸を繰り返す彼女に詫びた。

このまま寝かせてやりたいところであったが、彼女に必要な処方を講じることができるのは、青磁ではなかった。

こんな時に、青灰色の瞳の男性であれば・・・彼女に辛い思いをさせなくても済んだのだろうと思った。

上着を着たままであった。もちろん、彼女は玄関のよく磨かれた、青磁ひとりでは広すぎるバリアフリーの平らかな空間の中に、彼女の躯があった。

いつも、この部屋にひとりで戻る時。

彼女がそこに居ればよいのにと考えた。彼女が、この部屋で・・・いや、この部屋ではなくても彼を待っていてくれれば・・・それだけで良かった。

彼の生まれ育った場所と比べれば、あまりにも狭い場所であった。

けれども、ここはこの街で一番・・・空に近かった。

だからここを選んだ。

それだけだ。

それなのに、それ以外にここを選んで良かったと思える理由ができる。

・・・彼女が炎熱に苦しんでいるというのに。彼は喜んでいる。

青磁の傍で細やかに呼吸する彼女の背を見ながら・・・彼は顔を曇らせた。

■04

このマンションではセキュリティが厳しかったので、タクシーを呼び寄せるのも、一般来客棟のエントランスを使用しなければならない。けれども、今回ばかりは遠回りをしている場合にはなかったので、居住者用の駐車場から出ることにした。そこから待たせてある車に乗る道程が最短であったからだ。

彼はこの国では自分で車を運転する必要は無かったが、来訪者用に駐車場を確保してあったので、そこからの出入りを近道として利用することがしばしばあった。

先ほどタクシーを呼び出しておいてもらった。フロントにコンシェルジュが常住しているのはありがたいことであった。青磁のような街をあまりよく知らない者の要望を的確に答えてくれる。

その時に、青磁の具合が悪いのか、と尋ねられたが、彼は滞在中の来客者の具合が悪いので、病院に連れて行きたいと言った。

それから少し考えて、未成年者ではないことと、感染症でもないようなのだが、熱が高いので緊急病院での診療を依頼し、そこに行くと言った。

面倒を広げるつもりはなかった。彼は学生で、この国の者ではない。未婚の青年が、具合の悪そうな若い女性を抱えて自宅から出てくることを誰かに見咎められてもそれでも良いと思ったが、それでは彼女への対応が遅くなってしまう。

けれども、彼女の状況が最優先されるべきであると考えていた。

その結果、彼は最短でできるものは更に短くすることとし、時間をかけることで効率の上がるものはそれを利用することにした。そういう時にだけ、自分はマクドゥガルの家の者だと強く感じる。

金銭や圧力や手配で解決できるものがあれば、それを徹底的に使う、という自分の家の昏い面を厭っているのに、それを使わなければ彼女を助けてやるのが出来ないのであれば、まったく気にしないで手を差し伸べるのだと思うと・・・苦い笑いが込み上げてくる。

上着を脱がせることもなく、彼女の小さな手荷物を持ってやりながら、彼は今一度、彼女を連れて外に出た。彼も上着を着て、診察に同行するに必要だと思われるものをポケットに詰め込む。

「行くぞ。・・・立てるか」

辛そうに頷く彼女の顔が白かった。青磁は胸が痛くなる。彼女が決して見せない表情がある。それは苦悶の貌であった。どんなに哀しそうな貌をしても、時折見せる嬉しそうな貌を見ても、彼女は自分のつらさをあまり顔に出さなかった。そういう人だから・・・好きになったのだ。彼の永遠の伴侶に相応しい人物だと思っていた。将来のことはわからない、といつも言う彼女に、彼は違う、と言いつけた。現在を重ねていくことが未来に繋がるのだから、肯定しない現在の先に彼の望んだ未来はない、と言った。

彼女の顔を覗き込んだ。彼は、足元にあった彼女の荷物を持ち、腕を掴んで引き上げてやる。勢いが付いた彼女の躯が持ち上がり、壁に凭れながら小さな声で、彼女は詫びた。

「車が来るなら、それに乗って帰れる。・・・迷惑だから、ここまでで良い」

「迷惑かどうかは、オレが決める事だ」

彼は静かな声で言った。怒りを抑えて、彼女を刺激しないように言う。

「まともに歩けない者を放りだして、それが君の希望だからその通りにしてやった、と真顔で言えるような奴の方が良かったか？」

ここで諍いを続けるつもりはなかった。第一、諍いにさえならないのだから。

彼女は彼を迷惑と思っているわけではなく、青磁が迷惑と思っていると思っている限りは、彼はまったく傷つかなかった。それを拒絶とは思わず、彼女の気遣いだと考えることにした。本当に拒絶するのであれば、彼女は失調している様子を・・・彼に見せはしない。

「後でいくらでも聞くし、詫びが必要なら、いくらでも言ってやる。でも、今はオレの言う通りにしてくれ」

彼はそれだけを言うと、彼女の肩を抱いて扉を開いた。

冷たい風と、室内の温風が混じる奇妙な瞬間を一緒に味わう。

分厚い扉が開くと、冷風が彼の頬や首筋をなぞって行った。

彼女の髪が少しだけ舞い上がり、そして翻った髪の手を見て、眼を細める。

青磁はその様子をじっと見ていたが、やがてゆっくりと歩き出した。

彼女は、寒ささえ感じないほど熱があるのだ。

・・・こんな風に、彼の傍らを歩く彼女の肩を抱いて・・・どこまでも歩きたいと願っているのに。彼女はそれを赦しはしない。

それでも。

今は、彼の言葉に黙ったままで項垂れている彼女を放置しておくことはできなかった。

いつか彼は必ず彼女と一緒に並んで歩く。

この国ではない。

・・・彼女を、彼の国に迎える。

でも。彼の腕が彼女を抱いているとを感じるだけで、指先から痺れが走る。青磁の身体に押し当てられた彼女の気配が、彼を乱す。彼女はそうしたくてしているわけではないのだと承知しているのに。

青磁は彼女の名前を呼んだ。彼女は無言だった。ただ、苦しそうに彼女が溜息混じりに漏らす吐息が白くて・・・今日は相当に寒いのだとわかった。

彼は気がつく。

彼女のことを気がかりで・・・彼も、外気の冷たさに鈍感になっているのだということについて。

彼は、気がついた。

■05

「今日は泊まっていけ」

彼のマンションに戻って来るなり、そう言った。

結局、彼女はほとんど言葉を発せずにした。

病院では、疲労による発熱であり、肺炎など重篤な病気ではないと言っていた。しかし、熱が高く、軽い脱水症状を起こしており、食欲もなさそうなので点滴を受けさせた。

その間、青磁はずっと彼女の傍に居た。

処置室で眠る彼女の腕から伸びる管が見えた。

剥き出しになった腕の白さを見ているだけで、彼は顔を曇らせた。

十分な睡眠と休養を心がけるようにと言われたらしい。

らしい、というのは彼女から聞いたからだ。

青磁は、診察室の前までしか付き添うことができなかった。

・・・彼は、彼女の家族ではなかったからだ。

処置室に入っている間は、付き添いを許可されたが、それでも、彼は彼女との関係を他者に説明する時に迷わずに「婚約者だ」と言ったからで、友人ですと言えば家族に連絡できないのか、と問われることになったと思われた。

端正な貌の彼が、日本人でない名前を名乗ったので、当番であった医師や看護師は少し困ったような顔をしていた。

流暢な日本語を話す青磁であったが、彼に診察結果を伝えることはできない、と言われた。

良心的な病院であった。彼は大きな施設の完備した病院しか知らなかったが、それより遙かに小さい医院であるのにも関わらず、日本にも緊急医療できる場所があり、彼女を託せるような場所に連れてくることができ良かった、と思った。

そして少し時間がかかると伝えられ、彼はいくらでも待つと言った。

どちらにしても、彼女を帰すときには付き添いが必要であったから、青磁が診察時間の終了した総合受付で待機することについては問題ないとされたので、彼はそこで検査結果を待つことにした。

これからいくつか検査をするから、と言うことであった。

最初。

青磁は何とか彼女に近いところで待機できないか、と言ったところ、彼女に止められたのだ。彼女がその時に自分ひとりで診察を受けることができるから、と口を開いたのだ。

いくつか検査を受けると聞いて、彼女の症状がそれほど重いのであれば、いっそのこと時間外診療ではなく、一晩入院させて翌日にじっくり検査した方が良いのではなかろうかと思った。

しかしなぜ時間がかかると言われたのか・・・それがなぜなのか、彼はわかった。

高熱のために、歩くことがままならない彼女は車椅子に乗せられて、時間外であるけれどもまだ設備が使えるからと説明されながら、ひとつずつ説明を受けていた。

血液検査と、レントゲン撮影と、流感の検査をされると言われていた。

それから、それらの検査の前に・・・彼女は妊娠の検査を最初に受けろと言われていたからだ。

そこで、青磁は彼女の行動に意味があったことを知った。

唇が切れそうなほど強く噛んだ。

診察には、ひとりで良い、と言ったことも。

熱が出る前に悪寒や関節痛があったはずなのに、市販薬を飲もうとしなかったことも。

どうしても家に帰る、と言ったことも。

・・・その可能性があったから、彼女は青磁を遠ざけようとしたのだ。

彼は合皮のソファに浅く腰掛けた。

深く腰を落とし、背もたれに寄りかかることもできないくらいに、動揺していた。

大きな掌で、彼は顔を覆った。

大きな溜息が漏れ聞こえるが、それが自分の唇から発せられているものだという自覚はなかった。

彼の長い脚がおさまりきらないソファに座って居ると、自分の膝が見えた。

・・・細かく膝が震えていた。

困ったとは思わなかった。むしろ、これで彼女を独り占めできるとさえ思った。しかし、それでは彼女は永遠に彼の隣に並ばないだろうとも思っていた。

自分の国に戻れば、彼は親の決めた婚約者候補達から相手を決めろと言われると思っていた。

既に、こちらで決めた相手がいて、頃合いを見はからって連れて行くからと言っていた。

留学先での短い恋愛だと決めつけている親族達を納得させるためには、彼は一度帰国しなければならないと考えていた矢先のことであった。

■06

・・・思いもかけない事態、ではなかった。

彼女といつかは・・・そうなることも考えていなかったわけではない。

享楽のためだけで、彼女に身体を重ねたわけではなかった。

しかし、ただ、熱に浮かされたように彼女の肌に溶け込むように溺れていたというのが正しい表現であった。

浅はかな態度で彼女に接していたつもりはなかった。

でも、いつも彼女は何も言わなかった。

一緒に暮らそうと言っても、彼と婚約だけでも済ませて欲しいと言っても。

彼女は何も返事をしなかった。

こういった事態を避けるために彼が配慮しなければならなかったのに。

青磁は、心の中で何度も彼女に詫びた。

無神経にも、彼女をひとりにできないと主張するばかりの青磁に、彼女は何も言えなかったのだろうと思った。

彼女は、きっと・・・青磁を責めたりしないだろう。
彼女の志半ばにして、彼女を連れて行くことができなかった。
連れて行くと決めていたけれども、それは彼女の環境が整ってからだ。

・・・こういった時に、思い出されるのは、彼の主治医の顔だった。
彼なら・・・自分の恋人とこのような状況を迎えた時に、どうするのだろうか。
何と言葉をかけたら良いのだろうか。

愛しているんだ、と何度も呟いた。
その声は小さくけれどもはっきりとしていた。
自分が世の男と同じであることを思い知らされた。
彼女を助けてやろうと思った自分の愚かしさを呪った。

それなのに。
震えが走るほど・・・彼は歓喜したのだ。
彼女が、彼だけのものになるかもしれないという機会が到来したのだ、と。
マクドゥガル家の悪しき遺制から解き放たれると思った。
次の当主になるのは彼であるが、マクドゥガル家には男子がなかなか誕生しない。
もし青磁に何か起きたり、今後、青磁の存命中に新たな男子が誕生しなかったりした場合には、
遠縁の者を養子に迎えなければならない。
それは厭わなかった。
彼女と結ばれなかったら、彼は廃嫡の申請を出すつもりであったからだ。

彼女が彼だけの朝顔になることを承諾した時に、彼の心は決まっていた。
いや、もっと前から決めていた。
そういう危うさが怖いのだ、と彼女はいつも言うが、それは・・・マクドゥガルの者なら誰もが持っている激しさであった。

やがて、彼女の姿が見えて、このまま検査を続けることになったらしいという様子が見えた時。
彼は顔を上げて、彼女の姿が見えなくなる場所がどこになるのか、確認した。
総合受付から見える長い廊下の両脇は、各検査室である。
彼女が入っていった扉が閉じて、施設使用中のランプが点された場所を見ると、青磁は横に引いていた唇の緊張を解いた。

その直前まで彼が考えていたことが、今現在には実現されることはないと否定された。彼女はそのまま、検査を続けることになったのだ。
それで・・・青磁は彼女の妊娠検査の結果を知ることになった。

ひととおりの検査が終わり、点滴を受けて、薬の処方箋を受け取った。終了時間ぎりぎりに受付を済ませたので、精算まで行うことができた。

・・・彼女の保険証を受け取った。

そして・・・彼女がまだ親の扶養に入っていることを改めて、確認することになった。医療システムが彼の国とは違っていたが、良心的な受付係が、手際よく教えてくれた。

最初は彼は付き添いなので、各種手続きができないと断られたが、後で検査中に彼女が青磁のことを誰かに告げたのだろう。彼女を待たせることなく、病院を後にすることができたし、車も用意することができた。

・・・戻って来た時には、すでに夜になっていた。

風がさらにいっそう冷たくなり、このまま彼女を帰すことはできないと思った。

彼女の靴を脱がせてやり、上着を玄関のクローゼットにかけてやる。

だいぶ疲弊していた。

彼女の顔色は相変わらず白かったが、点滴の効果が出ているのかもしれない。

苦悶した表情は浮かべていなかった。

「青磁」

彼女はリビングのソファにぐったりと身体を預けながら、彼の名前を呼んだ。

青磁は上着を脱ぎ、室内の温度を彼女が快適になるように調整し、そして加湿器の電源を入れるところであった。

「・・・いろいろありがとう」

「君も疲れただろう」

彼は労りの言葉をかけてやった。そして目を逸らす。

ありがとう、と言われて胸が苦しくなった。

■07

彼が彼女に付き添っていた間、何を考えていたのか彼女が知ったら、青磁のことを彼女は軽蔑するだろうか。彼女がこんなに苦しんでいるのに。

彼は、彼女にこの炎熱を堪えろと強要するに等しい願いを持ったのだから。

・・・このまま、彼女が妊娠していて、抗生物質や注射などの加療ができなければ良いのにと考えたことを、罪深いことだと思っていた。

彼女に辛い思いをさせてしまった。

後ろめたさからくる青磁の優しさを彼女に感謝されて、青磁はいたたまれなくなったのだ。

「学校はしばらく休みだから・・・好きなだけここに居ればいい」

彼はそう言ってから、彼女に薬を飲ませるためにキッチンからミネラル・ウォーターをボトルごと持ってきた。次に曇り一つ無いグラスをひとつ、戸棚から取り出した。

そして一回分の処方薬とグラスに注いだ水を彼女の目の前のテーブルに置く。

「オレはゲストルームで寝るから、メインルームのベッドを使え。シーツも毛布も枕も取り替えるから、少し待っている。・・・その間に薬を飲んで着替えておけ」

そこで彼女は顔を上げた。

青磁も自分で言う前から、ああ、そうか、と思った。

彼女がここで泊まれない理由がもう一つあった。

彼女の私物がここには・・・何もないのだ。

あるのは、彼女のために用意したバスローブと室内履きが各々ひとつだけである。

青磁は彼女に向かって言った。

「ここの洗濯乾燥機はよくできているので、速乾で洗える。その間は、サイズがかなり違うけれど・・・オレの部屋着で我慢してくれないか」

汗を吸い、病院から戻ったばかりの彼女は、もう少し体調が良ければシャワーを浴びたいところだろうと思った。

しかし、これほど疲れ切った様からすると、すぐに休ませてやる方が先のように思えた。

彼は自分の部屋に行き、ベッドを横切った奥にある収納戸棚に向かい、手早く・・・簡単に着脱できるタイプの部屋着を選んで彼女に持ち寄った。

この国に永住するわけではないので、荷物を極力多く持たないようにしていた。予備は持たないことにしている。

服も同じで、彼はまだ袖を通していない服をいくつもストックしておくことはしていなかった。

衣服が冷えていたので・・・彼は自分の胸の中でそれを温めながら、リビングに戻った。

「まだそれほど袖を通していないから・・・」

言い訳がましい言葉だと思ったが、彼女はそれを受け取ると、ありがとう、とまた言った。

「オレはあちらでベッドルームを整えるから、その間に着替えると良い」

「・・・青磁。私、シャワーを借りたい」

「今日はやめておけ。朝になって、熱が引いてからにしろ」

彼は、少し呆れたように彼女に言った。

彼女は自分が高熱を発していることを自覚できているはずなのに。

なぜ、そのようなことを言うのだろうか。

ややあって、彼女はぽつりと小さく言った。

「青磁は命令してばかりだね」

・・・そうであった。

彼は、自分の気持ちを隠すために、口調が厳しいものになってしまっていた。

青磁は横を向く。

それだけではなかった。

普段、この家に彼女を呼ぶことにどれほど苦心しているのか思い出し、彼女が宿泊することに対して浮かれてしまっている自分を恥じた。

彼女は、炎熱に苦しんでいるというのに。

彼は正直に詫びることにした。

「・・・すまない」

「そして今日はとても素直だ」

明日は雪だね、と彼女は笑った。

「雪だと良いのに」

彼は掠れた声で、そう言った。彼女が腕を伸ばし、薬を口に含み、グラスの水をすべて飲み終わった頃に、ようやく彼はそう言った。

「雪なら・・・君は帰れないから」

彼女は黙ったままだった。

そうだね、とか。

それは困る、とか。

何かひとことでもコメントすれば、彼女は青磁の気持ちを受け入れたことになる。

だから、彼女は何も言わなかった。

その代わりに、先ほどの願い事を口にした。

「止血テープで気触れてしまったの。・・・それに、病院に行った後は・・・そのままで眠りたくない」

今度は、彼はそれを駄目だと反対することができなかった。

■08

彼女と暮らす日を心待ちにしていた。

何度か彼女はここに来たことがあったし、彼もこの間、初めて彼女の家に入った。

彼女が来ると決まった日はそれだけで落ち着かなくなり、そうではなくただ単に外で食事や散歩するだけだとわかっていた日でさえ、ひょっとしたら、彼女がやって来るのかもしれないと期待していた。

彼女はこの家の合い鍵を持っていたが、ひとりで上がり込むことは決してしなかった。

そういう彼女の奥ゆかしさを愛していたが、それでもひとりで眠る家のあかりが点いていてくれ

ればこれほど嬉しいことはないのに、と思ったことも一度や二度ではなかった。

彼は部屋のシーツを交換し、自分の枕とゲストルームの枕を取り替えながら、吸湿の優れたシーツを敷き詰めた。

・・・普段はハウスキーパーが行うもので、彼は実家ではそんなことはしなかった。する必要が無かったからだ。

しかし、彼はここで暮らすようになり、彼女の来訪を待つということを覚えていくうちに、自分の寝台を整えることを学んだ。

そして彼女が帰るときには、いつも彼女は彼のベッドルームを整えてから帰る。家政婦のような真似はやめろと言ったところ、彼女は顔を赤らめて青磁はわかっていない、と抗議した。

彼女と青磁の汗や肌を合わせた名残と言うにはあからさまなしるしを彼女は消してしまいたいと思っているほどに、恥じているのだと知って、彼は苦笑した。

彼女を送っていった後に戻って来た時には、彼はひとりでベッドに横たわらなければならない。彼女が恋しくて・・・彼女の香りがまだ残るシーツや毛布に抱かれて眠りたいのだと、彼女には伝えていなかった。

・・・そして彼は顔を上げる。

バスルームから、水の気配が消えていたからだ。

彼がベッドルームを整えている間に、彼女がバスルームを使っている。

彼女は高熱が出ているので、長時間使用しないこと、何か変調をきたすようなことがあれば、室内のアラートボタンを押すこと、そして鍵はかけないことを条件に、彼は彼女がバスを使うことを許可した。

汗を流す程度だから、と言っていたが、時間が長すぎた。

眉を顰めて、彼は手の動きを止め、耳を澄ませる。

・・・女性のバスルームの気配を聞くのは無粋であるとは承知していたが、今回ばかりはそうも言っていられなかった。

大股でバスルームに近付く。

そして大きめにノックをして、彼女に入室を告げる。

約束通り、鍵はかけられていなかった。

・・・中に入ると、彼女の衣服が脱衣駕籠の中に入っていて、それがとても丁寧に畳まれていたので、彼は慌てて目を逸らした。

彼女の秘密を盗み見ているようで、落ち着かなくなった。

彼は、紫電と呼ばれる強い視線を持ち誰もが彼から目を逸らす。

それでも、彼女はいつも・・・彼の顔をじっと見る。

決して彼から視線を外すことはしない。

唇を重ねるその瞬間でさえ、直前まで彼女は瞼を閉じることはしない。
なぜなのか、と尋ねると「綺麗な眼だなあ、と思って」とだけ言った。
彼の瞳は、片方だけ薄い。
眼疾患のためであったが、それを彼女は綺麗だと言った。

それでも・・・彼は自分の中の欲心を抑えきる自信が持てなかった。
青磁・マクドゥガルは、自分を抑える。

幾度か恋をした。一緒に夜を過ごした相手もいた。
酷い別れ方をした時もあった。

けれども・・・この恋が、初めてであった。
失調した相手を介抱し、長時間拘束されても付き添うことを選び、彼は彼女の肌の質感を思い出して彼女の衣類から視線を逸らす。
それは、初めてのことであった。
これまでの恋と違い、青磁は彼女の不在を自分の中に備えていないことに気がついた。
いつも・・・彼女が彼の傍にいてることを考えて、彼は行動するようになっていた。
だから他の女に心が向くことはなかった。

彼女を必ず娶る。
そう言ってからどれくらいの時間が経過したのだろうか。
その気持ちは変わっていなかった。
今も、これからも。
変わらないと言い切ることができる。
彼は一度だけ深呼吸すると、バスブースの扉をノックした。
「おい・・・開けるぞ」
駄目だと言われても、鍵がかかっていたとしても、彼は中に入るつもりであった。彼女を早く寝かせなければいけないと、ただそれだけを思いながら。
薬が効きすぎて身体の感覚を失ってしまっているのかもしれないし、倒れているかもしれない。
そんな未来は彼は想像していなかったし、未来にするつもりはなかった。

■09

バスの扉は外側の扉と同じ素材でできていた。奥行きを出すためにガラス張りになっているが、使用中の場合には偏光フィルムが反応して不透明になる。
ステンレス製の手摺りや縁取りは衛生上変更することができなかったが、艶消しを施してあるので、落ち着いた感じにまとまっていた。

室内の壁側には大きな出窓があり、さらに枠上には斜め天井には大きく切り取ったようなトッブライトあって、浴室とは思えない程の開放感があった。

これはこの階が最上階であり、少なくとも青磁が居住する数年間のうちには、同程度の高層マンションは建設されないという前提の贅沢であった。

誰からも見られないという空間であるからこそ実現できている。

硝子タイルが貼られた壁面は滑らかな平面であり、一枚でつなぎ目がなかった。

星空を鑑賞できるように、タイルに添って縁取するように埋め込まれたLED照明は星の瞬きよりも小さく、淡い眩しか発さない。

大きなバスタブの中でジャクジーを楽しむこともできるし、ミストサウナで乾燥する肌を労る機能も備わっていた。

青磁は、普通の人ではないのだね、と彼女が言う時は、このバスルームを使った時であった。

確かに、彼は、他の学生や留学生達とは違うと思う。

けれども、これが青磁の生活であり、いつものことであった。かなり質素である方だとさえ、思っていた。

留学中は、生活雑事について配慮する必要の無いホテル暮らしでも良かったが、それではプライバシーがなかった。

それに、大学院生であるので、居住地を仮の滞在先と記すことはできず、そういうときには国内の身元保証人の連絡先が必要になるが、その相手には迷惑をかけたくなかった。

もっと大きな理由があった。

・・・青磁は、この街の空に一番近い場所に居たかった。

マクドゥガル家が恋しいとは思わない。けれども、あの家の敷地から見える空は好きだった。

空色だけでも、無数にあるのだと知って、彼は嬉しくなり、いつも空の色を様々に・・・絵具を混ぜ合わせて創り出すことに夢中になった少年時代を思い出す。

病状が悪化し、陰影がわからなくなり、僅かな翳りや暁を区別することができなくなった時に、自分の見ている景色は平面的で、奥行きが足りず、望んだ画家としての路は完全に閉ざされたのだと思った。

今はかなり良くなったものの・・・視覚という非常に主観的な感覚について、誰も「完治した」と宣言できるものは居ない。比較対象になるのは、青磁の過去の記憶だけしか存在しないからだ。

彼の持っている色彩感覚や空の色が何種類あったのか・・・誰も知らないから。

白金髪の治療医でさえ、彼には「完全に治癒した」とは言わないでいる。

けれども、彼女の髪の濃淡や横顔を見ると、彼はいつも自分ももっと深くて広くて多様な色を知っていれば、彼女をもっと知ることが出来るのではないのだろうかと思う。これは生涯ついてまわることだ。

本当の彼女を、一生、知らないままで終わるかもしれない。けれども、誰を愛してもそれは同じで在った。

『それなら。今、青磁の持っている色が全部なのよ』

遠い昔に愛したあの人からの言葉を思い出す。

彼の疾患について憶することなく、彼女と同じ様に彼の顔を覗き込んで、そのうち良くなるよ、と根拠のない未来を屈託無い笑顔で言った、茶色の髪の色茶色の瞳の人を思い出す。

しかし、目の前にいる、今、彼が恋している彼女はさらに違う解釈をする。

『青磁の生み出す色が違うなら、違うと言う。でも、それは私が今、持っている色でしかない。青磁が自分の色を制限することはないし、私に新しい色を教えるのであればそれを見てみようと思う』

それで・・・彼は愛に堕ちた。

彼女を生涯・・・青磁の持っている心身の力すべてを使って愛そうと決めた。

こんな風にして、青磁を乱す彼女を憎らしいと思う。

彼はマクドゥガル家の次期当主なのだ。親族達が待ち望んだ、直系男子である。

小さな東の国の、東洋人である彼女の魂がどれほど高邁であったとしても、彼が周到な準備をすれば、マクドゥガル家夫人という地位をノーと言うことはできないはずであった。

しかし、彼はそうしなかつた。

マクドゥガル家を愛して欲しいのではなく、青磁を・・・ただ・・・ひとりの・・・普通に恋をしている「青磁」でいたかつた。

矛盾しているとは思ふ。

しかし、青磁はこれほど長い時間を誰かのことを考えながら過ごしたことがなかつた。だから、戸惑っていた。

彼は想い人の名前を呼び、ドアをノックしながら、返事を確認することなく手摺りに乗せた手に力を入れた。

先ほど悲しい思いをさせたから、という配慮ではなかつた。

彼が、一瞬でも彼女から離れられなくなっていたのだ。

彼女が何と思おうとも。今、彼女を包みandraがせることができるのは自分だけであるならば・・・彼女を追いかけ続けようと思った。

どんなに傷ついても、どんなに気持ちが悪くても、彼女を諦められなかつた。

彼には、彼女が必要であつた。

■10

咎められても良かつた。

彼女の気配を感じられない瞬間を迎え続けることが彼には堪え難かった。

勢いよく扉を開くと、そこには彼女が居て・・・バスタブから出る途中のことであった。

彼女は考え事をしていたのか、それとも青磁の気配がわからないほどに失調しているのか・・・

・まったく意外だと言わんばかりで、呆気にとられていたが、すぐに小さな悲鳴があがり、彼女はバスタブの中に身体を沈めた。

青磁は彼女の濡れた真珠色の身体を見て、息を呑んだ。

暁の加減だろうが、投影防止のために光源のある窓側に設置された照明が彼女の軀にあたり、彼女は湯気の上る湯の中で佇んでいた。一糸纏わぬ姿であった。無防備な彼女の様子に、青磁も言葉失う。驚愕している彼女は、とても幼い顔をしていた。・・・湿った空気と湯気からは、備え置いてある、彼のよく知るソープの香りがした。

かっと全身に血が巡り、自分の恋情が滾り昂ぶるのを感じる。

彼は聖人君子ではない。

一夜の宿を提供するかわりに彼女に何かを求めるということはしなかったが、それでも・・・こんな風に裸体を晒されれば、平然としていることはできなかった。

自らが飛び込んだのに、勝手なことを考えるな、と思った。

それでも彼は極力抑揚を抑えて、バスタブに身体を沈めて、恥ずかしそうに首を竦めている彼女に向かって言った。

「・・・長風呂は危険だ。早く出る」

「出るから、青磁も行って。大丈夫だから」

彼女は上気した頬を向けながら、言った。目元も羞恥のためか潤んでいる。髪が湯に散って、いつもと違う蠱惑的な彼女の様子を引き立てていた。

彼はどうにかなってしまいそうだと目眩を伴いながら、感じていた。

彼女は失調している。

炎熱に苦しんでいる。

それなのに・・・そんな彼女を、今、無性に抱きたかった。

乱して散らしてみたいという感情が湧き起こる。

しかし彼はそれを抑えた。

眼光は鋭く、彼が紫電と呼ばれる視線の持ち主であることを改めて感じさせるような視線で彼女に向いて、彼は抑揚なく言った。

「この国では、発熱時にはゆっくり湯に浸かれ、と指導しているのか？疲労するから汗を流す程度にしておくことを提案する」

彼女は横を向いて、小さな声で、はい、と返事をした。

分が悪いと思ったのだろう。

そんな彼女がいつも彼を手厳しく拒否する彼女の様子と違っていたので・・・彼は、彼女から視線を外し、顔を背けて、窓の外を眺めた。

斜め窓になっている硝子枠からは・・・冬の夜空で冷やされた月が輝いていた。今夜は空気が乾燥しているので、月色は鮮やかであった。

それで青磁は知った。

彼女が月を見上げながら、湯に浸り何かを考えていたのだと知ると、青磁はそれ以上彼女を責めることができなくなってしまっていた。

「・・・後で水分補給を忘れるな」

彼はそれだけ言うと、彼女に背中を向けた。しかし、すぐに振り返ると、バスタブに身体を沈める彼女の顔の前に手を差し伸べる。

「・・・外で待っていると、いつになっても出てこないから。今、出る」

彼女は貌を横に振った。ぱしゃり、と水音がした。身体を丸めて羞恥に震えている彼女を見下ろしながら、彼は掠れた声で言った。

平気でいられるわけは、なかった。しかしこの場に彼女を置いていくわけにはいかない。

彼は彼女の名前を呼んだ。

「こういう事態だから、やむを得ないと思え。・・・それに熱のある人をバスルームで襲うほど・・・オレは特異な趣味は持っていないと思っているので・・・」

最後まで言うことはできなかった。彼女が怒って、青磁に湯をかけたからだ。

彼の髪に、水飛沫が飛び、彼の凜颯とした頬にも服にも飛び散った。

「青磁は意地悪だ」

「それだけ元気なら、ひとりで大丈夫だな」

青磁はそう言うと、薄く笑った。彼女の気丈さは今に始まったことではなかったが、やはり・・・彼女はそうやって青磁に対し斜に構えた態度である方が良かった。

そうでなければ、彼女がどれほど失調していても、どれほど苦しそうにしているても、また・・・彼は、彼女に触れてしまいそうになるからだ。

病院で彼を見上げていた、心細そうな、けれども青磁はここに居てはいけないと言い切った彼女の顔を思い出した。もう、あんな顔をさせたくなかった。

その瞬間だけ良ければそれで済まされるという問題ではなかった。

青磁はバスルームから出て扉を閉めると、廊下に出て・・・そして大きく肩で何度も深呼吸し、自分を律した。

胸が高鳴り、身体が熱かった。彼女の弾いた水雫が彼の頬を伝わり、そして服の上に墜ちたが、彼はしばらくの間、廊下に居て・・・彼女がバスブースから出てきて、用意してあったタオルに手を伸ばす気配を確認するとそこでようやくリビングに戻ることにした。

彼女が出てきたのは、青磁が濡れた服から部屋着に着替え終わり、リビングで彼女のために水差しにミネラル・ウォーターを継ぎ足している時であった。

冷水は身体に良くないので、常温のものを使うことにする。発汗によって失われたミネラルの補給を考えると、アイソトニック飲料の方が良いのかもしれないが、あいにくと切らしてしまっていた。彼女が眠ったら、近くの店に会に出れば良いと思っていた。

濡れた髪を拭き、できる範囲で身繕いをして、汚れた衣類を洗濯しているのだろうか、と思ったが、彼は何も言わなかった。遅いと言ってバスルームに飛び込んだのに、その後は彼女に声をかけることはしなかった。

「・・・先にいただきました」

湯を提供してもらうことを日本ではそう言うのだ、と彼女の言葉から知る。時々、彼女は大変に古風な発言をするが、礼儀の最低限は覚えるようにという健やかな家庭で育ったのだろうと思えた。

彼女は青磁が提供した部屋着を着て、袖をまくり上げていた。サイズがまったく異なるので、彼女の白い絹のような胸元が櫻色に染まっているのが見えて、青磁は彼女と距離を取るようにして、あえて素っ気なく言った。さすがに下履きはまったく機能しなかったらしい。彼女の膝下が寒そうであった。

「早くベッドに入れ」

青磁を誘う白い肌理の細かい肌が見え隠れし、彼は彼女に背中を向ける。

ひとりで歩くことができる程度に回復しているらしい。彼女の肉体は若かった。

脳貧血を起こしていたので、最初は動けなかったようであったが、しばらく病院で横になっていたのが効果的であったようだ。

もし、彼女が健康であれば、彼は背を向けることなく、彼女の腕を取って、そのままベッドに縛れるようにして彼女を捕らえるのに。

しかし、彼女が彼の言ったとおりに行動しなかったので、青磁は彼女に再び向き直った。

彼の髪が揺れて・・・先ほどの湿りがまだ残っており、彼の頬に降りかかった。

「今、そちらに水を持っていく。欲しいものがあれば言ってくれ」

それから、まだ動かない彼女に冷えるから、と極力穏やかな声で言った。

「それとも、何か口に入れるか？何も食べていないのだろう」

「いらない」

彼女は小さく答えた。そして、しばらく彼をじっと見つめていたが、思いついたように突然、ベッドルームに向かった。

青磁は溜息をつく。

今夜は眠れそうになかった。

ゲストルームで休むことにしたので、自分の荷物のいくつかを移動させたが、彼女が眠った頃を見はからって、彼女に必要なものを揃えるために、出掛けようと思っていた。

だから着替えなかったのだが、先ほど彼女に湯を飛ばされたので、仕方なく着替えることにした。

・・・彼女は大人しく、ベッドに潜り込み、自分の好みの形に枕を成形しなおしていた。枕が変わると眠れないらしい。

無事に彼女が横臥するところまで見届けると、彼はそこで部屋に入っていく。

青磁ひとりしか使っていない空間であるので、普段は引き戸を開いたままにしてあったので、入り口近くの壁をこんこんと軽く叩き、入室の合図にした。

大きく解放しているので、リビングを少し出るとベッドルームの様子はよく見えた。しかし、それでは彼女はよく眠れないだろう。

彼はブラインドの電動スイッチを起動させながら、もう片方の手に乗せていたトレーの上の水差しとグラスを窓際の小さな硝子テーブルの上に乗せた。

そして少し考えて、彼女が横になったまま手を伸ばせるようにテーブルを彼女の枕元に移動させた。

室内がブラインドによって暗くなり、自動調光機能が備わった天井の照明が少し明るくなったので、彼女は目を細めた。

「何か、欲しいものや足りないものがあれば用意する。でも、その前に少し休んだ方が良い」
彼は彼女の傍に座りながら、そう言った。長居するつもりはない。彼は脇に抱えていた冷涼ジェルを取り出し、彼女の脇下に入れるように言って、枕元に置いた。

「枕にも入っていた」

「そう。動脈やリンパ管が比較的、皮膚の表面近くを通る部位を冷やす。熱が上がりきると、震えも止まるし悪寒も去る。それまで辛抱してくれ」

青磁が頷いて彼女に微笑んだ。その顔を、彼女はじっと見つめながら・・・彼女は言った。

「扉は閉めないで」

ゲストルームはメインルームから最も離れた場所にあった。

ゲストルームに入ってしまうと、まったく様子がわからなくなってしまう。しかし彼は彼女を安心させるために、淡く微笑んだ。

「・・・オレも、ゲストルームの扉は開いておくから、何かあったら、呼べ」

「今日はありがとう」

彼女は青磁の綺麗な顔を見つめながら、そう言った。

まだ熱があるのは明白であった。額には既に新しい汗が浮かんでいた。

彼は掌で、彼女の額を撫でた。・・・熱かった。

「具合が悪いときには、予定をキャンセルしても構わない。こうなる前に、養生してくれ」
彼は声を詰ませながら、彼女に囁く。

■12

失調している時に寝ても仕方が無い。わかっているのだが、彼は言わずにいられなかった。しかし、それ以上言っても彼女を弱らせてしまうだけだと感じ、彼は話を切り上げることにした。

「オレがいると眠れないだろ。照明を落とすから、暫く眠ったらどうだ」

「関節が痛くて眠れない」

「それなら、目を閉じている」

「さっき点滴を受けているときに仮眠したから・・・」

彼は溜息をついた。

彼女は眠ろうとしない。

成り行きで泊らせることになったが、彼女がここで過ごすには、不足している生活用品や欠品しているものがいくつかあった。

「起きていても構わないが。眠っている間に、少し外に出ようと思っていた」

どこに行くのか、と彼女は尋ねなかった。彼を束縛するような言葉は彼女は青磁に言わない。その代わりに、彼女は質問した。

「どうしてそんなに優しいの？」

「優しくて頼れる男を演じているだけ。・・・君に良い印象を与えようと思って」

「打算的なのね」

彼女がそこでようやく笑ったので、青磁は安堵する。

「そう。オレ、好きな子にしか、優しくできないんだ」

肩を竦めて言った青磁の様子に、彼女は横を向いて枕に顔を埋めた。関節痛が酷いらしく、彼女は顔を曇らせていた。

「痛むのか」

彼は毛布の上から、彼女の肩を撫でさすった。・・・布で隔てられているのに、彼は彼女の熱を感じ、また・・・狂おしいほど・・・自分の情動を感じた。

青磁はすぐに彼女から離れて、立ち上がろうとした。

「留守番を頼む」

しばらく、彼女と離れていなければ、彼女の失調に関係なく・・・彼は彼女を自分の熱の中に取り込んでしまいそうになる。

「・・・ここに居て」

彼は絶句して、彼女の顔を見た。

彼女は青磁を知らなさすぎる。いや、男という性を知らなさすぎる。

理性がはじけ飛びそうになり、彼は唇を強く噛んだ。

瞳を強く閉じて、心の中で、自分に向かって落ち着け、と言い聞かせる。

何度も、何度も。

眉根を寄せて、苦悶に耐える青磁の様子を、彼女はただ、見つめているばかりであった。

総身に漣が押し寄せ、背筋を這い上がっていく。

「青磁・・・」

彼女の呼び掛けに、彼は無言であった。

彼は身体を屈め、彼女の熱い頬を両手で挟み、そして彼女の額に顔を寄せて、唇を押し当てた。

かなり熱が高かった。

「わかってくれ。・・・オレ、今、相当・・・苦しい」

彼は掠れた声で呻くように言った。言葉を出すのも辛かった。

彼女を組敷きたいという獣欲ではなく、彼女がここに居ることが彼を昂揚させていた。

大事に至らなくて良かったと思っている。

それは嘘ではない。

けれども、このまま・・・彼の傍で、彼女が暮らしてくれないのだろうかと思い始めていた。

彼が献身的に彼女の看病をすることが、彼女を恐縮させてしまうのは、わかっていた。

・・・誰にも渡したくないのだ。

炎熱に苦しむ彼女のことを・・・誰にも触れさせたくないのだと思っていた。

つまらない独占欲であることも承知している。

しかし、彼女の失調時には彼が・・・青磁が一番近いところに居たい。

ただ、それだけであった。

離れて暮らしていれば、青磁が居ない時に彼女が失調することもあるだろう。しかし、あんな風に倒れてしまったら・・・そう思うだけで彼は彼女の傍から離れられないと思った。

その一方で、だからこそ、彼女は何も言わなかったのだろうと理解していた。

「迷惑をかけてしまった」

「迷惑だなんて思っていない」

彼は吐き捨てるようにそう言った。

彼の中にも、狂気があった。

いつか・・・いつか、愛する者のために我を失うことがあるのかもしれない。

それはまだマシだと思った。

今回彼は感じた。

自分は、いつか・・・愛しすぎて・・・相手を壊してしまうかもしれないと思った。

待つ、と言ったのに。

待ちすぎて、待ちきれなくて、彼女のことを・・・連れ去るために、泣かせてしまうかもしれない。

そんな彼に向かって、彼女は静かに言った。

「具合が悪くても、青磁は気がつかないと思った」

「あり得ないよ」

彼は即座に否定した。

■13

青磁は彼女の顔を覗き込みながら、君は賢すぎていけないよ、と言った。

「オレが君をどれだけ見ているのか、君はまだわかっていないな」

彼女は困ったように返事をした。

「青磁こそ、わかっていない」

それはいつも、彼女が青磁に向かって話を切り上げるときの言葉であった。

ぎゅっと眼を瞑り、彼女は苦しそうに寝返りを打った。

「・・・わかっていない」

「わかりたいと思っているよ」

彼はどう言っても彼女が彼を受け入れることはないと承知しながら、言った。

「不調であっても、君が平気な素振りでキャンセルもせず待ち合わせ場所にやって来た理由も・・・オレが君の婚約者だと言っても怒り出さなかった理由も・・・ひとりで・・・もしかしたら薬を飲めない身体なのではないのかと考えて休養できなかった不安も・・・全部、わかりたいと思っている」

彼女は黙ったままだった。

本当は、彼女が復調したときに話をするつもりであった。

今の彼女に、冷静な判断や思考を求めても無理だろうと思っていた。

けれども、彼女は彼のことをわかっていない、と思った。

理解してくれと求めたことはなかった。

ただ、彼女を知りたかった。

素っ気ないのに、彼を否定するのに、決して抗わない。

彼に抱かれてもなお、愛していると囁き返さない彼女が・・・何を考えているのか知りたかった。

肌を寄せ合い、彼女の唇を感じ、彼女と過ごす夜更けや朝焼けを青磁が飲んでいないと思っているのだろうか。

彼女が断らないから都合良く傍に置いて居ると思っているのだろうか。

それはない、と何度も繰り返しているのに。

今回のことは、まったく面倒だと思わなかった。

いつか、一緒に暮らすようになり、生涯を伴にするようになれば、こういったことは彼だけに公然と赦される立場を得るのだ。

婚約者だ、と名乗るのではなく配偶者だと言い、付き添いを拒否されることもなく、彼女に妊娠の兆候があるかと正面から尋ねられるようになる。

彼女は青磁の言葉を黙って聞いていた。

横を向いたままで、青磁に背を向けていたので、どんな表情なのかはわからなかったが、身動くことすらしなかったので、考えながら聞いていたのだろうと思った。

そこまで言ってから、青磁は、言い過ぎたと思った。

彼女を待とう、と決めていたはずで、彼女にいつもそう言っていた。

根拠のない待機ではなかった。少しずつであったが、彼と彼女の関係は変化し、距離が縮まり、彼女に触れることを許可されるようになった。そして最近では、彼の部屋の合い鍵を受け取り、彼女の部屋に入ることを許されるようになった。

そうして彼は、待つことによって、彼女を見つめることによって、彼女を理解しようとして、努力し続けた。

だから。

彼女が彼の朝顔になることを承諾するまで、待ったのだから。

少しして、彼女が低い声で言った。

溜息混じりに、身体を丸めながら言った。

枕の端を掴み、彼女は独り言のように囁く。

「・・・私がそうしたかったからよ。私がそれで良いと思ったからよ。断れなかったのではない。流されているのではない。・・・青磁は、わかっていない」

青磁は、ああ・・・と声を漏らした。

そして彼女の髪に手を伸ばした。

彼女は汗ばんでいた。

熱に浮かされた言葉なのかもしれない。

それでも、彼は、それでも良かった。

彼女の密やかな秘めたる声が聞こえたからだ。

彼女の覚悟が見え隠れしていた。

彼は思い出していた。

自分の揺れ動く感情を見せないために、彼女に素っ気ない口調で背中を向けたことを思い出していた。

・・・彼女も同じだった。

彼女の言葉がいつも少ないのは、彼と同じ様に・・・自分の気持ちを律しているからだとしたら・・・

「・・・本当に、君の言う通りで、オレは君をわかっていない。

・・・でも、君がわかって欲しいと思っているということは、わかった」

そして彼は彼女の髪に指を入れ、愛おしそうに撫でながら、言った。

「早く治してくれ」

彼は、それだけを言うと、背中を向けたままの彼女に言った。

寝台の中央から大きく外れた場所で眠ろうとする彼女の肩に手をあてて、そっと言う。

「・・・もっとベッドは広く使え」

彼女の怒ったような声が聞こえてきた。

「・・・青磁はやっぱり、わかっていない」

青磁はその言葉を聞いて・・・彼女の背中を暫く見つめていたが、やがて唇を持ち上げてくすくすと笑った。

そして毛布の端を持ち上げて、彼女にそっと囁く。

ひとつ、わかったことがあった。

彼女は失調すると、とても幼くなるらしい。

「・・・前言撤回。今日は寒いから・・・君の熱を分けてくれるかな」

そして彼は彼女の脇に滑り込むようにして横たわり、彼女の背中を抱きしめた。

そこで彼はようやく・・・先ほど、彼女に伝えられなかった言葉を伝えた。

何度も言ったが、何度でも言うつもりであった。これから先も、ずっと。

彼女の汗ばんだ熱い身体を包み込むようにして、彼は彼女の耳元に唇を寄せて、言った。

「・・・愛しているんだ」

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

■14

彼が彼女を胸の中に包むと、彼女は黙って静かに彼の胸を背中で感じているようであった。関節痛が残っているので、健やかな眠りが訪れないのだろう。

彼女は、回された青磁の腕に自分の指を添えた。

「・・・ここから先は、オレの独り言だから、黙って聞いてくれていれば良いよ」
青磁はそう言って、彼女に話しかけた。

・・・室内は静かで・・・物音すら聞こえない。

こんなに、この家は静かであつただろうか。静寂を耳に、青磁は眼を瞑り、彼女の髪に顔を埋めながら、言った。

「君がここでの遣るべきことに区切りをつけたら、オレは君を連れて行きたいと思っている。仕事をしたいのであればそれでも良い。何かを学びたいのなら、それも良い。でも、今でなくても良いから・・・いつか、オレと暮らして欲しい」

彼女の返事はなかった。

「オレの代で、マクドゥガル家の紋を変更する。・・・これは一度、静流という人物の代の時に行おうとしたけれども、希代の傑物と言われた彼でもできなかったことだ。当主の座と君を天秤にかけるようなことはしない。でも、理由があって・・・どうしても、紋を変更したいと思っている。

たかが紋だけれども、当主でなければできないことだ。

・・・君に、オレが為すべきことをやり遂げることができるよう、支えて欲しい」

そして彼は目を閉じたままで・・・彼女の身体を抱き締めながら、言った。彼女の温度を感じながら、彼自身に言い聞かせるように言った。

「それから・・・今日は君に悲しい思いをさせてしまったことを、オレはとても反省している」
そこで初めて、彼女の肩がぴくりと動いた。青磁に顔を見せないようにしているのは、きっと・・・彼女が苦しいのだろうと思った。自分と同じ様に、胸が苦しくて・・・高熱があるのに眠れないほど、苦しいのだと思った。

彼女が月夜を見上げながら考え事をしていたのは、おそらくそういったことも含めて、あれこれと考えていたのだろうと思われた。

「不安にさせてすまない。哀しい思いをさせてすまない。でも、オレは君のことが・・・」
「もう、いいよ」

彼女がぼつりとそう言ったので、青磁は話をやめた。

彼女の小さな吐息が、彼の腕に降り注がれた。そして彼女は肩で大きく息をした。

「・・・青磁の朝顔になると返事をした時。それで全部を回答したつもりであった」
彼女も囁くように掠れた声で言った。いつもの口調より、ゆっくりとしていた。

「留学中の間だけでも良いと思っていた。

それで終わるなら、それまでだと思っていた。

だから始まっていないフリをしていた。

ずっと・・・ずっと。青磁が待っているのを知っていたのに、ずっと待たせた。だから、それで青磁が待ちくたびれて、離れてくれないかと思ったこともあった。その方が傷つかないで済むと思った。

でも、青磁は今日・・・私のことを婚約者だと言った。

長い時間付き添ってくれて・・・なぜ、診察結果を自分が聞けないのかと言った」

そして彼女は彼の腕を取ると、そっと・・・彼の掌を、彼女の下腹部に導いた。

「よせ」

彼は拳を握った。

彼女の肌に触れてしまえば、彼の理性は彼女の炎熱の前で、呆気なく溶かされてしまう。

彼が貸与した部屋着の布感があった。

しかし、彼女の大腿から下は素足であり、彼は彼女の肌に触れないように配慮しながら彼女を抱いていた。

彼女は淡々と語った。

「・・・そういう時が来ても、良いと思った。別々の路を選んでも、それでも良いと思っていた。もし・・・私がひとりではなくなったら、青磁がどういう反応をしても、受け入れようと思った」

「君にそうさせたくない」

彼は声を震わせながら、言った。

なぜ、彼女は別れを前提として物事を考えるのか、理解できなかった。

彼の心が離れると思ったのだろうか。

彼が帰国すれば、彼女のことを忘れると思ったのだろうか。

「・・・オレは諦めが悪い。君を諦めない。諦めるのはやめたと言ったはずだ」

彼女の指に青磁は指を絡めて・・・そして軽く持ち上げ、彼女の指先に唇を寄せた。今、こうしてベッドに横たわっていなかったのなら、彼は彼女の前に跪き、彼女の手を取って頭を垂れただろう。

彼の育った地域の風習であった。マクドゥガル家の麒麟と呼ばれる男児が他の家の女性に向かってそうするときには自分より高位にある者への敬服の証であった。今では、膝を折る姿が獣の求愛の仕草と似ていることから、愛する者への永遠の誓いと・・・それから婚姻の申し込みと同義だ

と看做されていた。

彼は彼女の髪の上から、細い項に唇を寄せた。

息が止まりそうなほど苦しかった。

■15

「オレは君をこうして抱きしめることをやめない。君が嫌だと拒まない限り」

残酷なことを言っていると思った。

彼女にも希望する将来があり、青磁と出会わなければ、それはこの国で実現される具体的な未来であったはずなのに。

一緒に来てくれるだろうか、と尋ねなかった。

青磁は、彼女を連れて行く、と言った。

「その時を迎えることについて、私は不同意してはいない」

彼女はそう言って溜息をついた。

彼と重ねた指先も熱く、力が入らないようであった。

「・・・同意しているって言えないのか？」

彼が呆れてそう言うと、彼女はおかしそうに笑った。

「肯定してはいけないのが定法なの」

青磁は彼女の身体を少し強く抱いた。絡ませた指が壊れないように気を付けながら、彼女の手の平を彼は改めて包み直した。

そして彼女名前を呼ぶ。彼女の名前を口にするだけで、彼は堪えがたい激しい勢いの潤びを感じるのだ。

「在学中に、婚約式だけでも済ませないか。君の親にも会いたい」

彼女はその言葉には無言であった。青磁は、目の前の女性が大変に強情な人物であることを承知していたので・・・その話はまた次回に持ち越すことを決めた。彼女が失調しているときに、こんな話を持ち出すのはフェアではなかった。

しかし、一日でも早く・・・彼女を彼だけの朝顔にしたかった。名実共に。

彼女はすっと息を吸って、彼女の身体を囲う青磁の腕に額を寄せる。

この時代になってなお、家や倣いに縛られている青磁は、彼女には滑稽に映るかもしれない。けれども、彼には彼の代で解決しなければならない問題があり、厭わしいとされた過去を浄化し、そして・・・朝顔がひっそりと咲く、離れた場所に埋葬された在る人物の亡骸を、昔の当主であった誠次・マクドゥガルという人物の妻として埋葬しなおしてやりたかった。

そして、静流の代からもっと昔に遡るほど古えの時代からの願いであった・・・麒麟の紋に、新たに紋様を加えることに挑戦したかった。

提案権は、当主しか持っていない。

青磁だけではなく、代々・・・幾度も反対された。

それには理由があった。

麒麟の紋様には秘密がある。

彼の耳で輝く麒麟の紋にも同じ様に・・・マクドゥガル家の男子だけに託された秘密があった。

その紋を変更するというのは、託された問題が解決することを意味する。傑物と言われた静流も倅登も、それを解決する時間がなく次に託して、逝去した。

それを、彼が・・・現代になってようやく解決する時を迎えようとしている。

ひょっとすると、彼ではなく、彼のこどもの時代になって、解決するのだろうと思われるくらいの長い年月が必要とされていた。

だから、紋を託すのは男子だけではなく女子にも託したかった。

変更できる権限を持っている間に、彼は、彼の持っている、生まれる前から託されている問題を解決したかった。

それが、彼が生まれて来た理由であり、彼が彼の人生として定めたものだから。

だから、生国の、親族の奨める地元の子供では駄目なのだ。

あの因習を普通として育った者には、これは理解できない。

彼と苦楽を共にし、彼の信念を理解でき、意見することができる者でなければ、彼の傍らに居ることはできない。

それに、彼女には強力な後ろ盾があった。本人はそれを承知していなかったが、いつか、それを利用しなければならない時が来るだろう、と思っていた。

そういう、政治的な打算を含んでいることを、彼女は承知していた。

彼女にはすべてを話していた。

いつか・・・彼女と別れる時がやって来たとしても、彼女なら彼の話した内容を、語り継いでくれると思ったからだ。そうはならないことを期待して話したという前提があるが。

彼に真実を話してくれた、フランスに居るホテル王の悲願を叶えたかった。

彼が再び・・・マクドゥガル家の敷地の土を踏むことが、青磁の長年の願いでもあった。

彼と同じ・・・麒麟のピアスを持つ者は、既に、朝顔の刻印を入れていた。

「・・・すまない。オレの都合ばかりだ」

青磁は素直に認めて、今の話はなかったことにして欲しい、と言った。

「復調したら、きちんと話そう」

彼はそう言って彼女の軀を抱き寄せた。

彼女の肌の湿りを知ってしまった。

もう・・・それを思い出さないで眠る夜はやって来ないのだろうと思った。

「・・・婚約？」

静かに、彼女は青磁の言葉を復唱した。

彼はその話を終えようとしていた。彼女をそろそろ休ませた方が良かった。

自分の思惑ばかりを語ってしまった。こうやって事情を聞いてしまえば、ノーと言いにいくこともわかっていた。でも、どうしても・・・彼女が腕の中にいるうちに、彼の気持ちを伝えなかったのだ。

「・・・それを捨てたいほど、君を愛していると言いたいのではなく、それを実現できると思うことができるほど・・・君を好きになってしまったと言いたかった」

彼はそれだけ言った。

後は彼女の判断であった。厭わしいと思われたら、それまでであった。

■16

彼は彼女の軀を抱きしめた。・・・彼の方が、震えていた。

彼女の髪の香りがした。彼が使っているものと同じ香りであった。こうして、溶け合ってしまったいとさえ思っていた。

愛おしさが募り、狂おしくなって、彼は彼女の体調のことを気遣えなくなりそうだった。

しかし、やがて彼は彼女の縛めを解いた。

「・・・ゆっくり眠って欲しい。自分のベッドと勝手が違うから違和感を感じるだろうが・・・少しずつ、慣れてくれると嬉しい」

すると、彼女が身体を動かして、青磁の方に向き直った。躊躇ったような仕草であったが、彼女は彼の胸に自分の頭を擦りつけた。・・・彼女の片腕が彼の背中に伸ばされた。もう片方の手は、彼に向き直った後、彼と彼女の軀の間で軽く重ねられた。

「・・・同じだよ」

彼女は囁いた。

「青磁と眠る時はどこで眠っても、同じだよ」

それが彼女のこたえだった。連れて行きたい、と言った青磁へのこたえだった。

彼と眠る場所はどこでも良いので、彼が傍に居ればそれは変化しないと言ったのだ。・・・遠回しに、彼女は彼の申し出を承諾してくれたのだ。

青磁は、言葉を詰まらせながら、彼女の言葉にこたえた。

「オレもだ。・・・君と眠る時は、どこでも同じだ・・・いつでも同じだ」

彼は彼女の身体をさらに自分に寄せた。

しかしそれは一瞬で・・・すぐに、彼女から離れた。

「頼む。・・・オレ、このままだと本当にどうにかなる」

あどけない彼女の顔を見つめているだけで良かったはずなのに、どうにもならない衝動が彼を再び乱そうとしていた。

彼は身体を起こした。彼女は相当倦怠感を感じているはずであった。

口調はゆっくりで、緩慢な瞬きを繰り返している。

「・・・また戻ってくる？」

彼女の言葉に、もちろんだと言って青磁は頷いた。もう、ゲストルームで眠るつもりはなかった。途中で目を醒ました時に誰も居らず、自分の部屋ではない場所で目醒めたのであるなら、心細くなってしまっただろう。

彼の背中に回された腕が、ゆっくりとベッドの上に乗った。

「君が嫌だと言っても、また来るよ」

彼はそう言って、優しく彼女の手の平に自分の指先を載せて、彼女の熱い手の平をなぞった。あと少し一緒に居れば、彼女の意識や望みは関係なく、彼は彼女を自分の情欲のために犠牲にしてしまっただろう。それは間違いなく訪れる。

・・・少し冷静になる必要があった。

心と体は違うと認識しろ、と言われるがそれでも・・・彼女に惨いことはしたくなかったし、自分を律することができるように教育された。

けれども、どうにも・・・彼女に対してだけは、彼は自分のこれまでの認識を改めないといけなほど、夢中になってしまっているように思える。

それでは、駄目なのだ。

一時の恋情だと判断されては、彼女を連れて行けない。

彼女が言っているように、留学中の特殊環境の中で恋愛と錯覚しているだけだと誰もが言う。

そうだと言わせないほどの彼の変わらぬ希望を提示し続けなければならない。

仄暗い闇に取り込まれてしまいそうになり、彼は意を決し、ベッドから完全に身体を起こした。

「・・・早く良くなってくれ。そうでなければ、君をここから出せなくなる」

それは彼の正直な言葉であった。

わかってないよな、と言いつうになった。

だからこそ、彼女に青磁を知って欲しかった。

・・・彼女をわかりたいと思っていたのに、彼は彼を知って欲しいと同時に思うようになった。

彼女の秘めたる思いを聞いて・・・彼は彼女の心を聞いた。

彼女が、じっと・・・彼を見つめて、少し眠ると言った時、彼はそうしてくれ、と言った。

すぐに・・・

彼女の瞼が閉じられ、やがて苦しそうな寝息が聞こえ始めた。

肺を鷲掴みにされたような気分だった。

愛おしくて、切なくて、そしてとても安らかという言葉と遠い状況であった。

それなのに・・・彼女の言葉で彼は歓喜に打ち震えるのだ。

彼がこれから背負うべきものをすべて話した。在学中にあえて話すことで、彼女に考えて欲しかった。

一時の感情ではないことを。

手軽な恋愛ではなく、周囲の者が持つような気軽な御伽話などではないことを。これから先は、楽しいことばかりではない。憂鬱になるような場面もあるだろう。だが・・・それでも、彼女は考えて、長い時間をかけて、感上げて・・・彼に応えた。それが、嬉しかった。

今は、素っ気ない彼女の返答さえ、愛おしくて何もかもを記憶していたかった。

■17

結局、彼女は昏々と眠り続けて・・・丸2日、ベッドで過ごした。

水分補給や服用の時間などは起き上がるが、それ以外はいつも横たわって、言葉もなくただ眠り続けるだけであった。

倒れた翌朝には熱が下がっていたが、かなり疲労していたらしい。

それを補うかのように、彼女は眠り続けた。

大学院が休みであったので、彼はその間、彼女の傍に居た。

有事に備えて、彼は外出することを控えて、ネットで宅配を依頼した。

このマンションでは、ロビー階でそういったものを受け取り手配する。

そして定時に訪れる荷物の受け取りの気配に彼女が眼を醒ましてしまわないかということだけ気を配った。

彼はその間、いくつか論文を書き、彼女が汗を流すためにシャワーを浴びている間にシーツや毛布を取り替えた。

熱が完全に下がっていたので、後は疲弊した内臓が復調してくるのを待つばかりであった。

静かな時間が流れた。

彼はひとりで過ごす時間よりさらに静かな時間を迎えることになった。

彼女と過ごしているからなのだろうか。

彼女は眠り続け、時折彼の名前を呼ぶ。

便利に使う為ではなく、無意識で彼の所在を確認しているのだ。

彼女が眠り続けてしまうほど、様々なことを思い悩んでいるのかと思うと、彼は胸が痛んだ。

そして二日目には起き上がるようになった彼女のために、さすがに、できたての温かい食事が必要だろう、と思い、彼は自宅から少し歩いた場所にある閑静な住宅街の中のパン屋に出向き、

失調している者でも口に入れやすいものを注文した。ポットパイを包んでもらい、温め直さなくても良いように保温剤を入れて貰い、サービスで上階の喫茶店から分けて貰った珈琲を付けて貰った。

だいたいの設備は彼の家のキッチンに備わっているが、彼女の口に合うものは、青磁の調理するものであるより、やはり、この国のものなのだろうと思った。

その時に初めて外出し、彼は路の途中で、久々に・・・ベンチに座り、喫煙した。この地域はまだ禁煙ではなく、公道でも特定の場所であれば喫煙可能であった。

・・・煙草が恋しかったわけではない。

ただ、ここ数日のことについて整理する必要があった。

青磁は、自分がこれほどまでに甲斐甲斐しく誰かに尽くす自分を想定していなかった。そして、彼女と、これまでになく最も長い時間を過ごし、それは延長し続けている。

これまで、彼女が青磁の家を訪れる時は、用事があって来るときと、用事があってそれが済んだ後に彼がねだって彼女をあの人に留め置くかのどちらかであった。

外で彼女の横顔を見るのが好きだった。

食事の時に、テーブルマナーが青磁と違うかもしれないと言って困惑する彼女の顔を見るのが好きだった。

誰も見ていないかどうかを気にせずに、彼女にキスをする青磁に、困ったように淡く笑う彼女が好きだった。

彼は、唇に乗せた煙草を一度だけ吸うと、そのまま揉み消して吸い殻を捨てた。

嗜好品では彼は癒されない。

ただ・・・思い浮かぶのは、彼女のことばかりであった。

保温を考慮して梱包された手元のポットパイを、温かいうちに彼女に食べさせてやりたかった。

・・・こんな風に、どこの家庭でも普通に思うことを青磁が感じ、それを実践したいと思うなどは、考えていなかった。

彼が吐き出した溜息は白かった。しかしすぐに淡くなり輪郭を崩して空に上っていく。

そして、それはこれまでの煩累たる思いをすべて・・・空に還してしまっているように思えた。

外は冷え込んで、彼は首をすくめる。こんなに冷えれば、彼女を外に出すことはできない。

そして手元の食糧が冷えそうであったので、彼はすぐにベンチから腰を浮かせた。

彼女に対して、配慮することが必要であった。

・・・彼女が、失調する度に、検査をすぐに受けられず、苦しむ時間を持つのであれば、彼は彼女を過ごす夜を放棄できるかと言われれば、それは難しかった。

別の者を抱きたいとは思わない。

彼女を抱けないから、獣のように他の誰かで良いと思うことはしたくない。

幸せにしたかった。そして、青磁は幸せになりたかった。

どうしたらそうなるのか、わからない。

しかし、彼女が居なければ、彼は幸せになれなかった。

それだけは断言できた。

・・・それが最後の恋と信じたがるものだ。

白金の髪の治療医は、そう言うかもしれない。

けれども、その主治医も、最初の恋を最後の恋にしたのだから。

彼は、最後の恋にするつもりはなかった。常に、彼女に恋し続けるのだから。

だから、いつも、彼は恋をしている。彼女に対していつも・・・恋に堕ち続ける。

彼女の声が恋しかった。たった数十分離れているだけなのに。恋しかった。

■18

自宅に戻ると、玄関先に彼女の靴がなかったので、彼は顔を強ばらせた。

オートロックシステムを採用しているので、彼女が出入りすることに障害はない。かつ、彼女はスペアキーを持っているので・・・いつでもここを出ることができた。

玄関から廊下に入る時に、彼女の名前を呼ぶ。

けれども、返事はなかった。上着を廊下に脱ぎ捨て、彼はリビングに手荷物を置くと、そのままメインルームに入った。けれども、そこに横たわっているはずの彼女の姿はなく、ベッドは綺麗に整えられていた。

彼女の手荷物も、上着も・・・バスルームで保管されていた彼女の衣類もなかった。

・・・バスルームでは、彼女の使用済みの洗濯物が乾燥待機に入っているところであった。

つまり、彼女は青磁が外出して、すぐにここを出てしまったことになる。

彼女が、彼を拒絶しているとは思えない。けれども、帰巢本能が働き、彼のいるここではなく・・・帰りたいと思ったのなら、それは引留めることができなかった。

本気で好きだから。

彼は、困惑した。立腹はしなかった。ただ・・・怖くなってしまった。

彼女の名前を呼ぶ。

部屋にはいないとわかっているのに。

彼女の名前を呼んだ。

置き手紙を探したが、どこにもなかった。

彼女はこの時代に珍しく、携帯電話を持って歩かない。・・・必要ないからだ。

そして誰かに管理される一方的な通知を持ち歩く必要はないと言って笑っていた。

幻などではない。先ほどまで彼と一緒にいたのだから。

「・・・どうして」

彼は呟いた。

一度家に帰ったのだ、と思うことにしたが、それでも納得できなかった。

看病した彼に何も言わなかったことを責めているのではない。

彼女も自分の必需品がない場所で過ごすのは苦痛であったのだろう。

彼が強引に引留めてしまったから。

しかし、これほど冷えた日に帰ることはないだろう、と思った。

彼女が予言したとおり、今晚には雪になる予報であった。

空気は湿っていたがとても冷たくて・・・彼女が外に出ることに適している空気ではなかった。

彼女はいつも尋ねない。

青磁にどこに行くの、とは尋ねなかった。

だから、彼女も何も言わないで出て行ったのだろうと思った。

でも。

・・・それでも。

そうやって自由に出て行ってしまふ彼女を恨めしく思った。

失望したのは彼女に対してではなく・・・自分自身に対してであった。

どれほど愛していても、相手が自分と同じになるとは限らない。

同じ様に愛していても、それが本当に同じかどうかはわからない。

・・・彼女には、彼女の生活があるのだ。

そこに、無理矢理に介入してしまったのは、青磁のほうなのだ。

どんなに傷ついても、それを彼女に訴えてはいけないのだ。

・・・それでも、彼女を愛しているから。

彼はたった一人きりの部屋がこれほどまでに広いのだと・・・広すぎるのだと、今更ながらに悟った。ただ、それだけだ、と思うようにした。

彼女が本当は自宅に戻りたがっていたのに、引留めたのは青磁の方なのだ。

彼はベッドルームのシーツが新しく取り替えられている様子を見て、溜息を漏らした。

彼女は彼女の痕跡を残さない。

彼がその余香を恋しく思っていると知っているのか、そうでないのか・・・わからなかったけれども。

戻ったことを見はからって、電話しようと思った。

彼が想定している時間から計算すると、辿り着いたかそうでないかの頃合いであった。

彼女に同じを求めるのは酷な話だと思った。

彼が彼女を求めるのは、純粋な愛ではなかった。近付いたことにも理由があった。そして、彼女には・・・彼の宿願を成就させるだけの力が秘められていた。

東洋人であること。それから、マクドゥガルのことを少なからず知っている者が近いところに居ること・・・それから、彼女は大変に希有な因縁を持ち合わせている人物であるからだ。彼女の家系も重要な意味を持っていた。

それが理由ではなかったけれども。

それが、彼が恋にと墮ちる理由ではなかったけれども。

何もかもを兼ね備えた人物であり、彼はそれが彼女を愛するようになった後に知ったことであり、すべては彼女を迎え入れるための材料でしかないことを承知していた。

彼女は自由だ。どこに行こうとも、彼の許可を求めることはしない。しかし・・・青磁は、病み上がりの萎れた羽根を持った人が、またどこかで倒れていないように祈るだけであった。

■19

その時に、かちりと玄関のドアが開く音がしたので、青磁はそちらに顔をやった。

安全確保のために、オートロック機能は閉扉後、すぐには作動しない。

再起動するときには、今のような施錠音が鳴るようになっており、侵入者や誤作動への確認を促すようになっていた。

彼はすぐに廊下を大股で横切り、玄関に向かった。

エントランスと言った方が良かった。この階層には、彼の居住区画しか存在しない。だから、人の気配があるということは、彼に用事がある者だけだということであった。

両扉の片側だけを開閉可能にした扉は、それでも広すぎた。重々しく広がる扉の向こうに、彼女の顔を見つけたとき。

青磁はそのまま飛び出した。

「・・・青磁！」

彼女の悲鳴があがる。

外廊下に彼女の悲鳴が響き渡った。

けれども、彼はそれも気にせずに、彼女の手首を強く掴んで、家の中に引きずり込んだ。

強く掴んだ手が持っていた荷物が、玄関に撒き散らされた。乾いたビニール袋や紙袋の音が幾種類か重なり、彼女が何カ所か巡り歩いて買い物をしたのだと知った。

閉じ込めるつもりはない。ここから出てはいけない、と禁じたこともない。

けれども・・・こんな風に、彼女が彼の知らないところで回復している様を見せつけられることがどうにも苦しかった。

なぜなのだろう。

つい、数日前までは・・・彼女が炎熱で苦しむ姿が辛かった。

それなのに、今は・・・彼女が回復して、彼の庇護から離れて行くのが辛かった。

「・・・出掛けるときには、一言声をかけてくれ」

彼は彼女の冷気を伴う上着を抱えながら、そう言った。

彼女が復調し、出歩くことができるようになっていたことに驚愕していた。

彼が出掛けた後を見はからって外出していることにも傷ついた。

・・・青磁は、彼女の腕を掴むと、すぐに上がれと言って靴を脱がせた。

玄関に散らばる荷物を拾おうとした彼女を制止し、手を引いた。

「青磁、痛い」

彼は無言であった。彼女が居ないという喪失感がまだ、胸の中で、空洞になっていた。声を聞いて温度を感じているのに・・・彼女が待つべき場所に居なかったと知っただけで、これほど動揺してしまう。自分は・・・もう、恋に堕ちたのではなく、恋に迷ってしまったのだろうかと思え思った。

「・・・ちょっと買い物をしに行ったの。駅前だから近くだし・・・」

彼女の説明の言葉は聞こえなかった。

彼の中で滾る、暗い炎がぽつんと灯り始めたかと思うと再び燃えさかり、そしてすぐに大きな情炎となって彼を灼いた。

束縛するつもりはない。

彼女は自由だ。

どこに行こうと、彼女の自由だ。

それなのに・・・彼は彼女が居ないと、とても不安で落ち着かなくなった。

彼が居なくても活動を再開できることを見せつけられて、彼は苦悶した。

彼は廊下の途中で立ち止まり・・・上着を着たままの彼女に、身体を寄せた。

彼女の髪も、肌も上着さえも冷たかった。そして、彼女の手首も冷たかった。

あれほど・・・炎のように熱いと感じた肌は、今は冷たかった。

壁に背中を押し当てられた彼女は逃げ場がなく、困惑した表情であった。

化粧っ気のない顔であったが、温風の流れる室内に入り、頬が薔薇色に染まっていた。

・・・こんな無防備な表情で、外に出たのか。

彼はそれだけで我を失いそうであった。

「・・・君を飼育したいわけではない。でも、オレ・・・」

青磁は身体を屈め、彼女の首筋に顔を埋めて、冷たくなった耳に彼の頬を押し付けた。彼女の腰から背中に腕を回す。

もう、それだけで・・・彼は彼女を蹂躪してしまいそうな狂気を抑えることができなくなりそうであった。

「・・・約束が欲しい」

彼はそっと言った。

自分に何が必要なのか、わかっていた。何も欲しくないと思っていたのに。

彼は、貪欲にも自分の希望を伝えてしまっていた。

彼女が落ち着いてから話そうと思っていた。しかし・・・こんな風に、彼の傍から消えてしまう瞬間を怖いことだと・・・青磁が思う限り・・・彼女に対してこんな風に惑いを与えるだけしかできない自分との折り合いが必要であった。

「・・・何を約束するの？」

やがて、静かな彼女の声が聞こえてきた。寒くはないのに、震えている青磁の背中をそっと撫でさすっている腕があった。

彼が自嘲気味に言った。「いいよ。何も約束しなくて良い。オレが勝手にそう思っているだけだ」彼女にこんな時に約束を求めるのは酷なことだ。そして、一度約束してしまえば彼女はきっとそれを遵守しようとするだろう。それは望んでいなかった。

■20

「今のは失言だから、気にしないでくれ」

彼はそう言うと、彼女から身体を離れた。

久々の外出で疲れているはずであった。少し休ませた方が良い。処方薬もまだ飲み終わっていない。

そろそろ・・・服用の時間だった。

「今日は、ポットパイを用意した。

・・・ここの調理パンは侮れないと思ったよ・・・」

彼は陽気にそう言って、彼女の髪を整え、そしてリビングに向かおうとして背中を向けた。いつもの通りに・・・振る舞おうとして、乱れた心を押し隠した。

「上着を置いておいで。・・・一緒に食べよう」リビングに投げ置くように放置してあったビニール袋を取ろうと思って、手を伸ばした時のことであった。

どん、と彼に何かが・・・体当たりしたと思ったら、それは彼女の軀であった。彼女は、そんな風に彼に寄り添うことはしない。

彼女はいつも・・・激しさを表に出さない。

彼の腰元に、彼女の腕があった。まだ上着を脱いでいなかった。

青磁は吐息を漏らす。彼女を困らせてしまったからだ。

「ごめん。・・・オレ、どうかしている」

彼の背中越しに、彼女の息吹を感じた。もう、熱くなかった。それが少し寂しかった。

約束が欲しいなどと言ってしまった。

彼女の心は自由だ。そして、彼女の軀も自由だ。

今は青磁の傍に居るが、誰と居ても彼女の望んだことであれば、それは青磁が止めることは出来ない。

「・・・青磁がいなくて、その間に必要なものを揃えれば、合理的だと思った」

「何が合理的になると思ったのか、説明できていない」

彼は笑った。

彼女はいつもこうして自分の気持ちを客観的にしか言わない。

青磁は彼女に飾りなく伝える。

「・・・君がどこに行こうと、オレに報告する義務はない。オレが勝手に待っているだけだ・・・」

彼の炎熱を彼女が受け止める必要も義務もない。ただ・・・遣る瀬無い、行き先のわからない思いを・・・どこに吐き出して良いのかわからなかった。

だから、彼女にぶつけてしまった。それは間違いであった。それだけはわかっていた。

「なぜ？」

彼女は彼の背中に頬を押し当てながら、言った。彼女はこんな風にして、誰かに近寄ることはしない。軀を寄せるのはいつも青磁の方であった。勢いよく飛び込む彼女が、何時もと違って・・・そして、それは彼が彼女の炎熱を引き受けたからなのだと思うと、彼は・・・そう考えるだけで、身が切られるほどの痛みを全身に感じた。

「青磁がいなくて、落ち着かないという自分の気持ちに説明がつかなかったから、それを忘れるために対処することにしたの」

彼女はそう言って、大きく溜息をついた。

彼は、彼の中から込み上げてくる熱い塊を感じながら・・・彼女の言葉を反芻した。

ひとりで居られないほど寂しく思ったから、外に出ることにした。しかし、自分の部屋に戻るのではなく、近場で用事を済ませまた戻って来た。・・・青磁が戻ってくる頃合いを見はからって。

彼女は、そう言いたいのだろうか。

それとも、それは彼の都合の良い妄想なのだろうか。

青磁は、切れの長い双眸を遠くに遣った。

彼女の触れている部分から、彼が眠らせることにした滾りがまたふつつつと湧いて来て・・・そして炎龍となって彼の全身を包んでいく。

「・・・眠っていると思ったんだ」

彼女は反論した。

「青磁は、眠っている間はずっと一緒に居ると言った。・・・矛盾している」

「ああ、そうだよ」

青磁は少しむっとして言い返した。彼女は、青磁の激情を知らない。復調し、外を出歩けるようになった彼女に対して彼が何を考えているのか・・・まったく想像していないその様子が、理解し難い憤りとなって彼を呑み込みそうになる。

「目醒めた時には尋ねることができるけれども・・・眠っている君に、抱きたくなって堪えられないと言えないだろう？・・・だから、寐ている間に、君を襲わないように努力していると言ったら、それを褒めてくれるのか？」

彼は半ば捨て身の気持ちでそう言った。

青磁のことを軽蔑するのであるならば、それでも良かった。

けれども、彼は健全な男子で、何より・・・生涯で最後の人だと思い定めている相手が目の前に居て、彼のベッドで寝泊まりしている。その上、彼に添い寝しろと言う。

彼はまったく道理に合わない憤りを彼女に向けていると承知しながら、早口でそう言った後、気まずそうに黙りこんでしまった。

・・・自分の言っていることは矛盾していた。彼女を大事にしたいのに、苦悶する自分に耐えきれなくて、こうやって彼女を困らせている。

彼の背中ですれを聞いていたが、彼女はやがて・・・彼の背後で、言った。

「青磁は・・・どうして・・・自分ひとりだけがそう思っていると思うの？」

その言葉を聞いた瞬間、彼の理性ははじけ飛んだ。

■21

「・・・パイ、冷めてしまったわね」

彼女が青磁の腕の中でそう言ったので、青磁は眼を薄く開けて彼女の姿を確認すると少し笑った。

「温め直せば十分だ」

癒えたばかりの彼女の身体を冷やさないように、項まで毛布を掛けてやる。

まだ、彼の中で炎が燻っていた。

床には彼と彼女の衣類が混在して散らばっている。

また、服を洗濯しなくてはいけない・・・と彼女が考えているのだろうと思った。一方で彼は安堵していた。これで、彼女はまた帰れなくなったから。

目の前がかっと赤くなったと思った。

そして、耳鳴りがして、自分の考えを話すことも纏めることもできなくなり・・・青磁は、急にのぼせたような感覚を味わった。

彼の理性が飛散してしまった後、青磁は彼女の身体を強く引き寄せ、そして彼はそのまま彼女を引き摺るようにしてベッドルームに連れて行き、彼女の言葉を聞くことを放棄して、彼女の五体の上に自分の身体を覆い被せた。

彼は自分がそれほどまで我を忘れた瞬間を知らなかった。

彼女が挑発したのだとは思っていない。

そういう駆け引きはできない人だからだ。

ただ・・・彼の身体が彼女を求めて、そしてどうしようもなくこの人が好きだと心が叫びだそうとするのに、うまく言葉にできないもどかしさが身体を支配しているのだとさえ、思った。

服を脱ぎ捨てる間も惜しかった。

青磁によってたくし上げられた服の下から覗く彼女の白い肌を見た時に、背筋に痺れが走った。

強引に彼女に押し入る。

そしてそのまま・・・彼は彼女に身体を合わせた。

項から首筋、そして鎖骨に肩・・・彼女の持っている曲線全部に唇を押しあてた。揺れる彼女の髪に指を絡め、どこにも行くことができないはずの彼女がどこにも行ってしまわないように腰を抱き寄せ、肩を掴み、彼は彼女に深く沈んだ。

何度も・・・彼女に触れながら・・・彼は声もなく何度も打ち震えた。

その間、彼女は貌を横にしたまま、彼の熱情を黙って受け止めていた。

時折、彼女の唇から青磁、と彼の名が聞こえた。

彼女の小さな声さえ愛おしくて、奪いたくなって、青磁は彼女の唇に自分の唇を重ねた。息もできないほど、激しく口吻を交わす。不器用な慰撫に、彼女はそれでも応えてくれた。

切なそうに、眉根を寄せている彼女の顔を見つめて・・・彼は彼女の名前を何度も呼ぶ。

彼にしがみつき、彼の指や唇の躍りに身体を反らせ、小さく震えている彼女を自分の肌に引き入れながら、彼は極みを感じ彼女の温度を奪い取った。そして自分を与える。

・・・自分は地獄に墮ちるのだらうと思った。

病み上がりの彼女をこんな風にしてでしか愛せないのであれば、自分はかつての当主達のように最愛の者を壊してしまうしかできない人間なのだと思う。

嵐のような激しい抱擁が去ると、青磁はそこで我に返った。

すまない、と謝罪しようとしたところ、彼女はふっと身体を起こし、彼に口づけた。・・・彼女からは彼に唇を寄せることはしない。

それなのに、彼女は青磁が謝らないように、彼の唇を塞いだ。

震えは去り、先ほどより身体が温かくなっていた。

長い・・・優しいキスだった。

彼女は・・・いつもこんな風にして彼を包み込む。

彼が本当に必要としている時には、いつも必ず傍に居た。

そして、彼女はすべての服を脱ぎ、自分から彼の肩に顔を乗せて・・・そして囁いた。彼に裸体を晒すことはやはり恥ずかしいらしく、胸に自分の脱いだ服を添えて、シャツすら完全に脱ぎ捨てていない、彼の湿った肌に顔を寄せた。

「・・・私もこうしたいと思ったから、ここに居る」

青磁は、やはりわかっていない、と少し唇を尖らせて彼女は言う。

「だから、謝らないで」

「・・・そうする」

彼は微笑んだ。彼女の額に唇を乗せる。

それから、青磁はふと、真顔になって彼女に尋ねた。

「怖くなかった？」

「少しも」

「オレは怖かった。・・・自分が怖いと思った」

彼女の躰を抱きながら、彼は告白した。

「こういうことは・・・どちらか一方だけが満足する行為ではない」

彼女は黙ったままだった。

「君のことを大事にしたいと思っているし、復調してくれてとても嬉しい。けれども、こうやって我を忘れて・・・君を傷つけるように自分を制御できなくなってしまうのであれば、オレは・・・」

彼はそこまで言うと、言葉を探すようにして、しばし無言になった。

「自分を忘れそうになったの？」

「いや、オレ自身であることを強く認識したよ」彼は嗤った。

「忘我というのは、自分を忘れることはなくて、自分の中のものを表出させ、それと対面することなのだろうな、と思った」

彼の中にある、抑えきれない獣じみた激しさが彼女の尊厳を穢すのであれば、青磁は彼女を連れて行くことは諦めなければならないと考え始めていた。

■22

「・・・君の体調の事も考えられず、強引に引留めて、その上・・・」

彼はそこで口を噤んだ。青磁は激情に身を任せて、配慮を欠いていた。

彼は彼女に何度も入った。赦しを求めていなかった。

彼を受け入れる時に彼女が僅かに身体を引いた際に、彼はそこで彼女に語りかけられなかった。

青磁が黙り込んだのは、この合歡によって、彼女が望んでいない結果を呼び寄せることになるのかもしれないと思ったからだ。

「それでも良いよ」

彼女は青磁の考えていることを読み取ったかのように言った。

「それでも・・・良い」

青磁は黙って彼女の髪を撫でた。

彼女が同意したとしても、彼は承知できなかった。

青磁は国に帰れば身分保証されているが、この国では異国の大学院生でしかなく、留学期間は終わっていない。しかも、影響はないと説明を受けては居るが、彼は治療期間中であり、定期的に眼疾患の経過観察のために、検査を受けたりもしている。これまでの経緯で、彼女がただならぬ身体になるのであれば、彼女は自分のやりたいことを中断して出産しなければならないし、その間に生まれてくるその子どもが婚外子になってしまわないように手続きを進めなければならなかった。現在は父親診断によって早期のうちに結論が出るが、それで納得するようなことはなかった。

それに、彼女にも悲しい思いをさせたくはなかった。

・・・そういう事実には附随する事務的なことを優先させることによって、子の誕生を喜べないのであれば、先に婚姻式を済ませてしまいたかった。

保守的であると言われればそれまでであったが、彼は子ができたから結婚するのではなく、結婚した後に正当なマクドゥガル家の子として家紋を変更する手続きを取る必要があった。

その手続きの過程で、当主は継嗣に対して身分を示す飾りと様体を指定することができ、この際に、青磁は麒麟の紋に朝顔を入れる予定であった。

彼女との愛を優先できない事が出てきており、彼は自分の感情と現実の間で苦悩した。

「オレにとっては望んだ結果になるが、君は・・・」

哀しませたくはなかった。苦しませたくはなかった。極力、そういう煩わしいことを考えさせたくはなかった。

そして彼は憂える。なぜ、彼女は悲壮な決意をもって、「留学中の間だけで良いと思っていた」と言ったのか、理解できていた。お互いに、子を流すつもりはなかった。それはまったく考えていない。けれども、こんな風に彼女を激流に翻弄させるような扱いを、自分が今後もしてしまうのであれば、彼は彼女から離れて暮らすことを選ばなければならないと考え始めていた。

しかし、会わなければきっと・・・次に会った時に、彼は会わなかった分だけ、こうやって狂うのだろうと思っていた。別れるつもりはない。彼女だけしか欲しくない。それでも、待つと言ったのに、結局こうして待てずに距離を詰めて彼女を傷つけてしまう自分がどうにも許しがたかった。

「青磁は先を考えすぎる」

彼女は淡く嗤った。

いつも思慮が深く、先々のことを考えて憂えているのは彼女の方であったのに。

「押し流されはしない、と言ったでしょう？」

彼女はそう言って彼の肩に唇を寄せた。滑らかな唇が彼の肩に乗り、青磁はそこから彼の身体に微電が走る感覚に溺れた。

「敢えて言うなら、もう少し冷静になれば良いのに・・・」

「君は冷静でいられるのか？オレは無理だ」

自分を誤魔化すことはできなかった。どうしても、彼女が欲しかった。

いつもそうであったわけではない。かつて、茶色の髪の茶色の瞳のあの人を愛した時は、恋は成就しなかった。けれども、今は・・・自分の心の内を語るほどに気を許してしまっている相手に対して、彼は彼女の未来を自分に託してくれないだろうかと真剣に考えている。

彼女にとっては、なにひとつ、良いことはない。

遠い国に行き、国籍を捨てさせ、家族や友人から離し、あの家に縛り付けることになる。

昔と様々なところが違って改善されてきてはいるものの、まだまだ課題が山積しているあの家が彼女の安らぎの場所になると、青磁は彼女に確約してやれなかった。

「・・・こうなってしまうのが怖かった。想像通りになってしまった」

彼は、すまないと言うかわりに、正直に言った。

「君を離せなくなって・・・立ち止まることを忘れて、君を引き摺り回す。一緒に歩いて行こうと言ったのに、冷静でいられない」

青磁の言葉に、彼女は唇を持ち上げて笑った。そして、顔を上げて、青磁の顔を覗き込んだ。彼の強い視線に憶することなく、彼女は彼の顔を見つめる。

失調した彼女を気遣うどころか、かえって気遣わせてしまった。

「青磁、こちらを向いて」

彼女がそう言って、視線を横に遣っていた彼に囁いた。

彼の顎に軽く口吻を添えると、彼女は静かに言った。

「・・・冷静であったのなら、青磁の話は受けなかった。でも、きちんと考える時間を青磁が作ってくれて、待ってくれたから私はそれに答えない」

青磁は黙ってそれを聞いていた。彼女は彼の視線を怖いと言わない。自分でさえ扱えない獣炎を、彼女は怖くないと言う。

「・・・こうして過ごすとき、私が何も思っていないと・・・平気だと・・・思っている？」彼女は少し困ったように言った。彼は首を軽く振った。

「いや・・・しかし、冷静な君であったのなら、オレを受け入れないと思った」

■23

「青磁だけに乱されて、それでも良いと納得している。・・・これは、私にとって考えられないことよ」

確かにそうであった。

彼女は自分のことをあまり話さないし、いつも他人のことばかり気遣っている。決して相手を否定しないが、むやみに賛同することもしない。その彼女が、青磁の前では怒ったり涙を見せたり・・・彼だけにしか見せない笑顔を見せる。彼の恋人になるのは嫌だと言うのに、こうして彼と肌を重ねる。

最初・・・他に相手がいるのかもしれないと思っていたが、そうではなかった。

しかし、それでも良かった。

彼女が彼に向き直るまで、いくらでも待つつもりだった。

その彼女が、彼が居なくて落ち着かない、と彼女は言う。

青磁はわかっていない、と幼い口調で駄々をこねたように言う。

彼女にあり得ないことをもたらす青磁・マクドゥガルという人物を、彼女が受け入れることが、どれほど彼女に対して大きな変化であるのか、彼は彼女の声聞いて、初めて・・・理解した。

「平気だったのに、平気になれなくなった。

他の誰かの気持ちはわかったけれど自分の気持ちがわからなくなった。

青磁が他の人と付き合っているのかもしれないと思ったり、この家に誰かを泊めたりしているのかもしれないと考えるだけで・・・自分がわからなくなった。なぜ、そんなことを考えるのか、わからなかった」

そして彼女は言葉を句切り、軽く頭を振った。

「いつも自信たっぷり、私がきつと青磁に恋すると宣言してばかりで、それなのにいつまでも待つと言って、矛盾したことばかりで・・・私のことを乱してばかりいる青磁を・・・今でも、何故なのだろうと思っているのに・・・」

彼女はそこでまた唇を閉じた。少し考えながら話していたのかと思ったが、そうではなく・・・躊躇っているようであった。

が、彼女は思い切ったように、彼に向かって言った。

「・・・本気で好きになった」

その言葉に、青磁・マクドゥガルは息を呑み込んだ。

こめかみを殴られたような衝撃を受けて、目の前の色が一瞬、反転したように感じた。その次には、唇が自分でもわかるほど震え始めて、近い場所にある彼女の顔を、信じられないといった面持ちで見つめ返した。

「・・・寒いのか？」

心配そうに彼女が彼を見る。彼女の細い首筋が動き、髪が鎖骨に散った。彼女の皮膚の薄い部分には、彼が加減を忘れて彼女の上に散らせた紅い痕がいくつも残っていた。

「・・・違う」

彼は呟くように否定した。寒くはなかった。まだ、彼の肌は汗ばんでいた。彼女の熱を奪ったからだ。

寒気が彼を震わせたのではない。

・・・彼女からの愛の囁きを受けて、彼の全身が震えたのだ。

・・・歓びで。歓喜に震える。

彼女の身体がひとりではないのかもしれないと思った時と比べものにならないほどの陶然とした

心持ちにのぼりつめていく。

自分の身体が震えて、前髪が揺れていた。

彼女はそんな彼を心配して、身体を起こそうとした。

が、彼に阻まれてしまい、彼女は小さく声を上げた。

彼女が胸にあてていた最後の衣をそっと取り上げて、彼は彼女の素膚を自分の胸に重ねたからだ。

彼女は身を小さく縮めたが、彼はそのまま彼女の身体を抱いたまま、ゆっくりと、着衣をすべて、脱ぎ捨てた。青磁、と彼を窘める彼女の声が聞こえてきたが、彼は無言でいた。

彼女の身体の上に、再び彼は自分の締まった身体を乗せた。

私が服を脱いだのは、シャワーを浴びるためだ、と彼女が彼に抗いながら言ったのに、彼はそんな彼女の唇を自分の唇で塞ぎ、彼女の声を呑み込んだ。

両手で静かに彼女の躰を撫でると、彼と同じ様に汗ばんでいた彼女の躰はすぐに熱を帯び始めた。

何度も・・・何度も彼女の肌に自分の手の平を滑らせた。

彼の胸の上で拳を握り、青磁の身体を押し戻そうとしていた彼女の指が徐々に開く。彼女の両手を取って、青磁は彼女の指に自分の指を絡めた。

今度は頬や唇を滑らせて、彼女の肌を温めていく。

言葉にならなかった。

彼女の言葉を受けて、彼は返答することができなかった。

ただ・・・この身に眠る炎熱を彼女が怖くないと言い、それによって乱されることを受け入れたのであるならば・・・

彼は、彼の中の自分でさえ抑えられないものが、仄暗いものだけではなく・・・それは愛の歓びというものが含まれていることを知ったから。

だから、自分で抑えられないほど、歓びで身体が震えるのだ。

「・・・そうだな。少し、寒いかもしれない。だから、君の熱を、わけてくれないか」

青磁は潤んだ溜息を漏らす彼女に向かって、囁いた。

今度は、彼女が満ちるのを待って彼と同じ場所に連れて行くことにした。

炎熱はまだ鎮まっていなかった。

■24

それからまた2日、彼女は熱を引き戻してしまい、青磁に外出してはいけないと禁じられることになった。

その間、外には雪が降り積もり、どちらにしても雪空の下で彼女を帰らせるわけにはいかなかった。なので丁度良かったのだ、と青磁が言うと、彼女は今度ばかりは本当に怒り出した。

ハウスキーパーの来訪も断り、あらゆる呼び出しには必要最小限しか応じず、完全にふたりだけの世界で数日を過ごした彼女は、相当に困っていた。

青磁が彼女に過干渉であったからだ。

眠る時も湯を浴びる時も彼は一緒に居ると言って片時も離れようとしなかった。

「オレ、独占欲が強いから」

青磁はそう言ったが、そういう域を超えていると彼女は反論した。

しかし、本調子でなかったようで、彼女は大人しく数日は青磁の言うとおりに寝たり起きたりの生活を繰り返していた。

その間、彼女はあちこちに電話をかけていた。

具合が悪くなり、出先で寝込んでしまったことを手短かに話し、詫びを加えた上で予定を変更しているようであった。

律儀な彼女の対応は適切であったが、彼は彼の知らないスケジュールが彼女に存在していることが気に入らなかった。

「・・・忙しいんだな」

彼がリビングのソファで横になり、資料となる専門書を読んでいると、彼女は青磁を軽く睨みおろした。

「青磁はこんなに家に引き籠もっていて・・・大丈夫なの？」

「オレの予定は全部キャンセルしたから」

一体、いつの間に・・・と絶句する彼女の前で、青磁は嘲ら笑った。

「オレの予定は、いつも同じ。君を早く連れて行けるように説得することが最優先タスクだ」
懲りない人ね、と彼女が呆れて言ったが、青磁はそれだけ元気が出れば大丈夫だねと受け流していた。

そして、今日という今日は帰宅すると言って準備を始めたので、青磁はつまらなさそうな顔をする。

「一緒に暮らせば、そんな面倒もないのに」

「あんな格好で一日過ごしていれば、また熱が出る」

彼女が言っている「あんな格好」というのは、青磁の部屋着を借りて脚を露出し、その都度、彼に抱き上げられてベッドに連れて行かれることを指し示していた。しかし、彼はその都度、彼女に触れても良いか、と尋ねる。彼女はノーとは言わなかった。

「・・・今度は君の部屋から持って来いよ」

青磁がそう言うと、彼女は口籠もった。これは緊急措置であるから、常時彼女の私物を置くことについて、彼女はあまり賛成していないようだった。

しかし、ここ数日の滞在によって、彼女が買い揃えたり青磁が手配したりしたものは、確実に増えていたし、それを持ち帰るつもりはなかったようであった。

彼女の為に用意したバスローブがひとつと、ルームシューズが一組しかなかったのに。彼女の残

していく香りだけしか残っていなかったのに。今は・・・目に見えて、彼女の名残が僅かであるけれども増えている。

青磁は整った顔を方々に向けて、微笑んだ。

彼女が眠っている間に、彼女の寝顔をデッサンしていることを知ったら、彼女は怒るだろうか。いつか・・・いつか、彼女に手渡しできる日が、来るだろうか。

あの人のように。

茶色の髪の色茶色の瞳のあの人が、自分の一番大事なものが何であるか知った時に、それまで描きためていたものを手渡ししたように。

今朝は、彼女の用意した朝食と一緒に食べた。

珈琲ではなく紅茶が好みであることや、パンは焼き加減にこだわりがあることを知った。彼女の作るスープは絶品で彼が褒めると彼女は気恥ずかしそうに微笑んだ。

歯ブラシは柔らかめが本当は好きなのだと知ったし、彼女の身につけている整髪料の銘柄もわかった。

同じ様に、彼女も青磁の生活についていくつか学んだようであった。

彼はかなり早起きで、朝食前の筋力トレーニングとストレッチを習慣としていることを知らなかった。彼女が泊まった朝はその日の夜に行っていたと言うと意外そうな顔をしていた。

また、青磁の湯加減は熱すぎると言われたし、ミストサウナを使った後は換気をしっかり怠らないようにしろと叱られた。彼が中国茶をたくさん揃えていることにも驚いていたし、彼女に隠れて煙草を吸ったことも判明して窘められた。

・・・こうしてひとつずつ、彼女の日常を知っていくことになるのだろう。

だから、それはまた次の機会に取っておくことにした。

「・・・何か持って帰るものでもあるのか」

帰り支度をしながら、彼女が紙袋に何かを詰めようとしているのを見て、彼は尋ねた。

手提げ程度の小さな鞆しか持ってこなかった。彼女の鞆に入りきらないので、買い揃えた時に店から支給された紙袋を広げている時のことだった。

彼女は無言だったので、彼はそこでソファから身を起こし、彼女の手元を見た。

・・・そして押し黙った。

彼女が手にしているのは新しく買い揃えた短期滞在用の生活必需品であった。それも男物ばかりであった。

■25

彼女がひとりで出掛けた時に、何を買ったのかわかった。なぜ、いくつもの店を回ったのか、理

由を知った。自分のものだけではなかったのだ。

彼女は、青磁のものも買い揃えていたのだ。

彼は早鐘を打つような心臓の鼓動を意識しながら、極力平然として言った。

「それ・・・オレの私物？」

「そう」

彼女は素っ気なく言った。彼に背中を向けていた。

彼女が無表情で素っ気ない時は、気恥ずかしさを隠す時であると彼は知っていた。

「・・・つまり、オレも君の部屋に泊まって良いという許可？」

彼女は貌を赤らめて、知らない、と言った。

年若い彼女が、こういった物を揃える時に何も感じないかと言ったらそうではないと思う。シェーバーや歯ブラシ、整髪料・・・もっと細々としたものもあった。彼女の居住地の近辺では揃えられないようなものだけを吟味して買ってあった。

彼は彼女を、また抱きしめて・・・心底愛していると囁きたくなった。

彼はそこで立ち上がると、部屋の奥から少し大きめの鞆を取り出し、まずは手に持っていた、読みかけの専門書を詰め始めた。後はノートパソコンと着替えが少々あれば十分である。部屋着もいくつか用意して、鞆に無造作に放り込んでいった。

彼女が呆気にとられてその様子を見てみると、彼はちょっと笑った。

「何だよ・・・早く支度しろよ。置いて行くぞ」

「どこへ？」

部屋着を脱ぎながら、彼は輝くばかりに締まった上半身を露出しながら、ウォークイン・クローゼットに歩いて行く。彼女が顔を紅くして、横を向いたので、何を今更恥ずかしいと思うの？と嗤ってやった。

家の電話を留守番電話対応にセットし、彼は着替えながら自分の家のセキュリティー・キーと、彼女の家の鍵を持ってポケットに入れた。

「君の家はしばらく暖房を入れていないから、寒いだろうな」

彼が揶揄するように言ったので、彼女は堪りかねて青磁に言った。

「泊めないわよ。・・・今日こそ私は帰るの」

「帰ることと泊めることは相反しないよ。・・・じゃ、君を送って行くついでだ。荷物を置いてくるだけ」

彼はきっとそれだけでは終わることはないと思っていた。

彼女の部屋に招かれて、玄関先で帰るつもりはない。

「・・・寒いから、マフラーと帽子を忘れずに」

青磁はそう言って、久々に見る、待ち合わせをした時の彼女の出で立ちを見て、目を細めた。

彼女はしばらく青磁の姿を見ていたが、身支度を終えた彼が彼女の用意した小物を入れた紙袋と

自分の鞆を持ったので、観念したのか、肩を竦めて言った。

「・・・お茶ぐらいは、ごちそうするわ」

彼女の譲歩の言葉に、青磁はくすくす笑った。

「オレ、マイセンのマグカップがいい」「ありません」「じゃ、FireKingでも良い」「もっとありません」

今日は夜通し・・・彼女のスケジュールについて、問い質そうと思った。

彼女について、あまりにも知らなかった。

けれども、知っていく歓びを知った。

これからも・・・彼女の炎熱を知る度に、彼は彼女を更に深く愛していくことになるのだろう、と思った。

そして、彼の中の暗くて激しい焰を知る彼女は、おののくこともなく、彼の炎を包むのだろう。

「・・・今日は寒いけれど、少し遠回りをしていかないか」

彼が申し出た。

「雪がまだ綺麗で・・・君とこうして空を見るのも良いけれど、雪も見てみたくなった」

高層マンションから見える空は薄青色で、寒々しかった。けれども、この空の蒼を覚えておこうと思った。これから、彼女とみる景色には蒼も、銀白も、様々な色が増えていく。彼女をひとつ、知る度に、それは増えていく。

彼女はそうだね、と言った。また熱が出てしまうかもしれないけれども、今日だけは、彼女と白く広がる一面の雪を踏んでみたかった。

「行こうか」

支度を調べた彼と彼女は、玄関を出た。

久々の外出で、彼女はあまりの冷気に驚いてマフラーの中に顔を埋めたが、空いている方の手を伸ばし・・・青磁のコートのポケットに手を入れて来た。

彼はそれを見て、満足そうに微笑むと、ぎゅっと彼女の手を握り返した。

この幸せを忘れない、と決めた。どれだけ長い年月が経過しても、これから彼女を哀しませて泣かせてしまうことがあっても。決して彼女を諦めない、と誓った。

彼は、彼女の囁く秘めたる思いを炎熱とともに受け止めたから。

彼女は、彼の秘めたる思いを怖くないと言ったから。

ああ、そうか。

彼は理解した。

「・・・約束が欲しいのではなく、オレが欲しかったのは、誓いなんだ」
彼は心の中で呟いた。

彼女が彼を愛しているという言葉の中に秘められた誓いを知った。
必ず、彼女は青磁を愛し抜くと言ったのだ。彼は、それに応えたいと思った。
彼女との約束ではなく、彼女を必ず幸せにするという自分への誓いが欲しかった。
自分自身へ・・・将来、必ずそれを為し遂げるために。

・・・誓おう。オレの生涯をかけて。必ず、君を幸せにする。必ず、君を娶る。君を朝顔の祖にする。オレの妻になるのは、君だけだ。

彼女が聞けば、多すぎる誓いね、と苦笑いするかもしれない。
それでも良かった。彼の一生をかけて為し遂げると決めたのだから。

彼女と並んで見る外の景色は、一面の銀世界で、ずっと広がっていた。
寒さは続いていたので、雪はまだこの地域を覆っていた。
足元に気を付けろと言った傍から彼女がバランスを崩しそうになったので、彼は彼女と重ねていた手を更に強く握った。

・・・今夜も雪が降りそうだった。

青磁・マクドゥガルは、今夜は帰れなくなりそうなほど、雪が降れば良いのに、と思った。

(FIN)

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

```
#next_pages_container { width: 5px; height: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }
```

▼01

外来を知らせる呼び音であると気がついたのは、それが鳴り終わって呼応する動作に青磁・マクドウガルが取りかからなかったからであった。

このフロアに直接訪れる者は居ない。なぜなら、セキュリティチェックの厳しい高層住宅に彼は住んでおり、大抵は主玄関と呼ばれる地表近くの門扉のモニターで用事が済んでしまうからだ。

彼は遠国からやって来た留学生である。

本分は勉学であるが、それ以外の目的で活動もしている。

だから、日中はほとんどここに居ない。

着替えをして休むためだけに戻る空間に、本当の休息は存在しない。

享楽を味わうために誰かとここで時間を過ごすこともなかった。

誰かがここを訪れることもない。そして、彼が望まない来訪者は文字通り「門前払い」で用事が足りてしまう。

駅前の高層マンションであるから、売却や転売などを案内する業者からの広告などはすべてエントランスのコンシェルジュに任せてしまっている。

彼の実家の財力であれば、ホテル暮らしの方が何かと便利であることは承知していたが、彼は、自分だけの空間が欲しかった。

庭があり、空が近く、そして遠くどこまでも見渡すことができる景色が欲しかった。

青磁は今度、生国に戻ればマクドウガル家の後継者として自由に渡り歩くことすら難しくなる立場を与えられる。今でも、成人しているので、いくつか筆頭株主であったり、代表者として名前が記載されていたりする。

それが煩わしいということではない。いつかは、そうなるだろうと覚悟していた。

しかし、最初から現在に至るまでまったく疑問を差し挟まない生活であったのか、ということではなかった。

だから、一時の自由を味わいたいという、どこにでもあるような別の世界への憧憬を実現させた、ということではない。

この国は、彼がかつて愛した人の国であり、彼の主治医であり友でもあるシャルル・ドゥ・アルディがこよなく愛している場所でもある。

そして、それに加えて・・・彼には彼が滞在するに十分な理由のある国であり、同時に、彼が生涯の伴侶にしたいと強烈に願う人物の生活する国でもあった。

一時の気まぐれや、すぐに醒めてしまう熱情ではない。

・・・彼女を青磁の生まれ育った国に連れて行きたいと思う。
それがどういうことなのか、青磁にはわかっていた。
別の国の、文化も価値観も何もかもが違う者を連れて行けば、摩擦は生じるものだ。

けれども、彼女は青磁から一定の距離を保ち続け、そして決して自分からは近寄ろうとはしない。

単なる友人であるのであれば。

これほど苦しくならない。

身体を重ねるだけの関係であるのであれば、彼女のことを合理的に流されることもなく遇することもできる。

けれども、そのどれにも当てはまらない。

ここ最近では、シャルル・ドゥ・アルディに連絡をすることが多くなった。

彼の主治医でもあるが、それ以上の関係であった。

フランスの華と呼ばれて、彼は常に人々の期待を背負っている。それが苦痛なのではなく、あの人はそれが当然だと感じている。

明らむ暁のような人に惹かれるシャルルの気持ちがわかる。

今までは、彼がなぜ、今後ずっと憂えることを絶やすことのできないような相手を選んだのか、不思議に思っていた部分があった。

しかし、今ならわかる。

心を奪われて我を忘れるから、という理由ではない。

打算も計算も理由も存在する。それでも、他の者を選定することができない。その狭間で躓くからこそ、失いたくないと思うのだ。

▼02

行くあてのない感情と戯れる時間は、青磁には存在しない。

焦っている、と彼女は言うけれども。焦れているのは、彼女の心を得たと実感できないからで、期限が迫っているから彼女を当初の予定通りにしたいと思っているわけではなかった。

知れば知るほど、

恋愛に相応しい資格というものは、相手に求めるものではなく己で定めるものなのだと思う。

重厚そうな扉は外観だけであった。

防犯上の問題で、ある一定の順番で開錠した後は、僅かな動力で開閉できるように細工されている。

だから、その人物はそれほど力がない者でも扉を開くことができる。

それなのに。なかなか入ってこない人物に、青磁は眉を動かして首を傾けた。

ここまでやって来られるくらいであるから、見知らぬ来訪者ではない。
その人物を、青磁はひとりしか知らない。

今、ここに一番居て欲しいと思う人。

今、ここで彼の弱った姿を見せたくないと思う人。

彼はモニターに映る人物の額を見て微笑んだ。

彼女だ。全身を見なくても、すぐにわかった。

予感と確認は別なのだと実感する。

彼女が来たな、という予感は事実になった。

そして、青磁はカメラの位置の調節をしておくべきだと思った。

その人物は、少し屈み込んでいる様子であった。

こちらの様子を確認しているのか。

スペアキーも、この場所への入り方もみんな教えたはずなのに、彼女は入ってこない。

しかし、なぜ入ってこないのだろう。

困惑と同時に、歡びが込み上げてくる。

特に連絡をしたわけではない。来て欲しいと告げたわけでもない。

けれども、彼女は察知したかのように、やって来た。

いつもは、彼が何度も誘い、何かしら理由がなければ部屋にやって来ることはない人であった。
自分から来たいと言うこともない。

青磁が強く言わなければ、どんなに遅くなったとしても身支度を調べ次第、さっさと帰ろうとしてしまう。

何を考えているのかわからないところもあるが、彼女は青磁だけではなくあらゆる人の中で目立たないように気を付けているのではなく本当に溶け込んでしまっているのは、彼女の特性なのかもしれないと思った。それでも際立つものがあることは周囲も青磁も十分に承知していることであるのに、当の本人が気がついていない。

まったく、酷い人を好きになってしまった。

彼はそう思うが、だからといって諦めることはしない。

彼女を諦めはしない。

その人物が、約束もしていないのにやって来た。

扉を幾度も潜り抜けた人物が、門扉の前で不機嫌そうな顔をして立っていた。

他の者の前ではいつも朗らかに、穏やかに微笑むのに。

青磁の傍に寄るとき、彼女はいつもそんな風にして機嫌を損ねた顔を見せる。

誰かを好きになる時。

笑顔であったり、涙顔であったり・・・人のきっかけは千差万別だ。

けれども、青磁は、彼女のすべてに恋をした。

彼の前でだけ、無愛想な顔を見せるのは、彼には本心を曝け出しているからだ。皆に愛想良く笑顔を振りまく彼女は、彼女の本心を見せることはない。

線引きしているのではなくて、そうになってしまうのだ。

だから、それを指摘した青磁には酷く憤慨していた。

誰にでも優しくて誰も否定しない彼女が、何を否定して何に哀しんでいるのか誰も知らなかったことに青磁が悲憤した時。

彼女は、心の扉を僅かに開いた。

確かに、きっかけはとても自己中心的であった。

・・・彼は、茶色の髪の非常に小柄な人物を忘れられなくて、行き場のない思いが重すぎて、強烈に誰かを愛したいと思っていた。

失った恋は愛に代わり、そして決して手が届かないものなのだと言って、誰でも良いから恋に堕ちてみたいと思った。

それは嘘ではない。

▼03

「・・・やあ」

自分の声が掠れている。喉の痛みは和らいできたが、まだどこか本調子ではない。

病院に飛び込むほどには重篤な状態ではない。

彼は眼病治療のためにこの国にいたので、些細な不調であったとしても「些細かどうか」を自分で判断してはいけないと言われていた。

けれども、発熱しただけで大騒ぎをすることのほどでもないと思われた。

もう、幼いこどもではない。

失調したな、と思ったので、自分でできる必要な処置は施したつもりであった。あとは睡りを貪るだけであった。

その時に来訪者を告げる知らせが届いたので、彼は起き出してきた。

それが今の状況であった。

汗ばんだ身体はいつもより重かったが、それでも青磁の枷にはならなかった。

会いたいという気持ちが、彼の身体に指示をする。彼女を迎えろ、と。

彼女は、青磁が出迎えるとは思っていなかったのだろうか。

それ以外にはあり得ない状況であったのに。

彼女しかここに入り込めないし、青磁は彼女以外の誰かをここに招くことはない。

遠く離れた異国であるから、家族がここにやって来ることもしなかった。

もっとも、定期的を送信する家族宛のメールでは、自分のことを多く話すつもりはなかった。

ただ、元気でいるのだと定型文のような文章を送る。

彼女はしばらくの間、青磁を見上げていた。乱れた格好はしていないが、これから眠ろうとしていたところであったので、かなりの薄着であった。

彼女は彼の浮き出る身体の線に途惑っているようだ。

男性の部屋に上がり込むほど、彼女は無頓着でもない。

彼の恋人だと広く周知したいのに、彼女はそれを望まない。

自分がそれほど恥ずかしい相手であるとは考えたくなかったが、彼女が青磁のこれからを考えていることは明白であった。

だから、一緒に暮らそうと何度も言ったし、彼の国と一緒にきて欲しいのだと懇願もした。けれども、彼女はイエスと言わない。彼の朝顔であることは同意するのに。

その彼女が目の前に居るので、彼は少なからず狼狽した。

来てくれれば良いのにと考えたのにそうできなかった。

彼の弱った姿などは見てくれるな、と願ったから決して連絡は取るまいと決めた。

願いが叶ったのか、叶わなかったのか、それすらわからない。

・・・このまま、彼女を家に招き入れてしまえば、彼女が呼吸できないほどに抱きしめてしまうかもしれない。

危ういと自覚している。

しかし、失調しているときほど、彼女が欲しくなる。誰でも良いわけではない。

彼女の湿った滑らかな肌を思い出す。最後に重ねた時から、どれほど経っただろう。

彼女は、肩にいつもの鞆を提げていた。帰り道なのだろうか。時間について気にしていなかったが、そういえば、この曜日のこの時間は彼女には用事がある。

青磁は驚いて、言った。

「今日は用事があったのでは？」

「延期した」

彼女はぶっきらぼうに応えた。

彼のために予定を変更してくれたのだろうかと期待してしまう。

予定を自分から変更することはしない。彼女が相手の都合を変更させることを好まないことを知っているのだから、青磁は少し驚いて言った。

「・・・入って」

彼は扉を押し広げ、彼女に家の中に入るように促した。

招いたのは自分であるけれども。この熱情は、炎熱のせいなのか。彼女は、唇を横に引いていた。

▼04

彼女はお邪魔します、と言った。もう部屋の家具の配置や間取りなども知っているというのに、いつまでも初訪問のような態度を見せる。

純朴であるのかもしれないが、それは、彼だけの彼女ではないのかもしれないという不安を大きくさせた。

・・・束縛されたい

青磁は、その言葉をずっと言わずにいた。

待つ、と言ったからだ。

彼はマクドゥガル家の跡継ぎだ。

いつかはこの場所を離れなければならない。

その時は、彼女が良い。彼女と一緒に帰りたい。

だから、待つ。

長くかかっても良い。

焦りはしない。

けれども、こんな時には動揺を隠せなくなる。

彼女が予定を変更してやって来た。

これが彼をどれほど大きく揺さぶっているのか、彼女はわかっているのだろうか。

誰かに所有されることはない、と思っていた。

マクドゥガル家の者に、眼病のことを指摘され、先祖返りのような容姿を持った彼のことを厭わしい子だとはっきりと口に出す者も居る。

マクドゥガル家の悲劇は、誠次・マクドゥガルが引き起こしたが、それ以降もそれ以前も、沈鬱なあの土地で起こった出来事を知ってなお、あの土地で生きて欲しいとは言えなくなった。

それでも良いと言う者もいたし、家の者が勧める相手も事情を承知しているかどうか前提で話が進められていた。

しかし、自分は誰かにあてがわれるように自分の相手を見つけることはしたくなかった。

若者特有の傲慢さだと言われてもまったく気にならなかった。

マクドゥガル家に逆らって生きる予定ではない。彼は、彼の代でマクドゥガル家の悲願の概ね全

てを終わらそうと思っているから。

あの謎を一緒に解き明かす人物が必要であった。そして、その重苦から逃げることのない人物が必要で、誰かにあてがわれた相手では荷が重すぎた。

現実を静かに見つめ、そして青磁がすることを傍で見守り続ける相手。

愛した人をそのような淵に落とすような行為の先にある謎を一緒に見ようと思う人物。そういう者でなければ、彼は相手を壊してしまう。

「誰もいないの？」

彼女はそう言った。誰かがいた方が良かったのか、良くなかったのか、どちらの考えを持っているのか推し量ることが出来ない。

日中の、決められた時間に家事代行が入っていることは、彼女も知っていることであった。しかし、身元のしっかりした者以外はここに入れることはない。顔も合わせないように、極力、その時間は留守にすることにしていた。

彼女が泊まって行くときには、彼女がこの家の中のことを青磁が詳細まで知らないことに憤慨していたことを思い出す。

あれから、少しばかり身の回りのことに気を遣うようになったが。それでも、彼女から見れば呆れるほど世間知らずに見えるのだろう。

彼女に家事をさせるつもりはない。

けれども、現実には、彼が生活していく上で自炊するというのも限界があった。極力、家の中のものは何も置かないようにしているけれども、それでもここでの生活が長くなるにつれて、持ち込んだ教書や参考文献などが山積するようになった。

「今日は遠慮してもらった。終日、オレが家にいるから」

そう、と彼女は言う。

「・・・上がって」

彼は再び彼女を招き入れる。まるで、彼女は彼の許可がなければここに入れないと思っているようであったが、彼女なら好きな時にやって来ても良いのだと繰り返さなければならない。しかしそのことに疲労を感じているわけではない。

どこか人目を避けてやって来るような様子 of 彼女が、ここまで来た。

そのことに、今、純粹に喜んでおり、彼はそれを隠すことはなかった。

▼05

ひとりで住まうには広すぎる空間に、彼女は玄関先で居心地悪そうに肩を竦めた。

「好きな時に、来れば良いのに」

彼の小さな囁きは、彼女に聞こえてしまっていたようであった。

彼女は抑揚なく言った。

まるで、義務のように。

綿のようにとらえ所がない部分があるが、彼女はとても強情であったし、納得のいかないことには従わない。本来の彼女はそういう気質なのだと思っている。

「休みだと聞いたから」

どこから聞いてきたのだろうか。

今日、体調不調で研究室には顔を出せないというメールを研究室のアドレスに一本だけ打っただけであった。

すると、青磁の不思議そうな気配が伝わったらしく、彼女はまた首を傾けて瞳を瞬かせた。

「青磁は、わかっていない」

これも彼女からよく聞く言葉だった。

「秘密事項でも何でもないことなのだから」

なるほど、と思った。次のフィールドワークのための演練であったので、少人数で編成していることもあり、青磁の所属するグループから漏れたのだろう。

普段、自分の個人情報などに神経を尖らせているわけではないが、これほどあつという間に情報は伝達してしまうのだと思うと、少し対応に気を配る方が良いのかもしれない、と思う。

そして、彼女が部屋に入ろうとしない理由を知った。

躊躇っているのではない。入れないのだ。

「ごめん、気がつかなくて」

相当、自分は熱に侵されていると思った。意識が朦朧とする程にまで深刻な状態ではなかった、やはり、足元が浮き立つような感覚が残っている。

その上、まさか今日、会えるとは思っていなかった相手がこうして彼の住まいを訪ねて来たのだから、昂揚しないはずはなかった。

彼女は肩にいつもの鞆を提げたままで、両手にも荷物を持っていた。見慣れないナイロン製の薄手の袋だ。携帯性に優れているもので、買い物帰りと思しき者がよく持ち歩いているのを見かけた。

青磁は普段、自分の必要なものを細々買い回る方ではなかったもので、事情を熟知しているわけでもないが。

所謂、自然環境対策というものであった。

この国の者たちは皆勤勉で、反復を厭わない。僅かな努力の積み重ねを励行している。もちろん、彼女もそのひとりであった。

彼女は黙々と努力を重ねる人であった。

能力があることを前提としているのではなく、自分の持つものが継続することにあると強く想っている。非凡であることの重要な要素は非凡なものを磨くことではなく、自分が持ち得ているも

のをどう組み合わせを、どう研磨していくかによるものなのだということを、彼女は熟知しているようであった。

▼06

「すぐに帰るから」

彼女のそんな声に、青磁は口を噤んだ。

いつもと違う体調に気を懸けることはなかったが、少しだけ曇った視界は、発病したかもしれないと不安になった頃のことを思い返させた。

その時にはすでに、普通ではない状態であったのだが。そのうちに、瞳の色が薄くなってきて、誰もがわかる程度になるまでに要した時間はそれほど長くなかった。

彼女の髪の色は、本当はもっと違う色なのではないのだろうか。

肌の色はもっと白いのではないのだおるか。

濃淡が判別しづらいという奇病を抱えた彼の中で、常に思いながらも口にできない事に対して、彼女は身を寄せることで応え続けている。

誰よりも近くに居ることによって、彼が確認することを許可している。

すぐに帰るな、と言えば彼女は困った顔をするだろう。

すぐに帰れ、と言うつもりはなかったが。

どうせなら、ひと晩泊まって行って欲しい。

けれども、失調を理由にせがむことはできなかった。

彼女は一体、どういうつもりで来ているのだろう。

そう尋ねれば彼女は二度とここには来ない。

都合の良い相手と思っているのではない。

彼女は、そういう享樂的かつ刹那的な考えを持っていないから。

だから、心を傾けたのだから。

彼女を疑うことは自分を疑うことになる。

彼女は上着を脱ぎ、リビングに入った。

陽光がまだ注いでいる時間であったので、目を細める。

青磁の住んでいる高層マンションはこの場所が視界に入るほどの対面の建築物がないので、青磁は日中はごく薄いカーテンだけを用いている。

そこからバルコニーに面しており、高層ゆえの強風に彼の育てた花々が乱されることのないように観察しているからだ。

いつであったか、彼女が、質問したことがあった。

なぜ、それほど土いじりが好きなのに、土から一番離れた場所を選んだのか、と。

青磁の実家の財力であれば、戸建てに住むことも可能であっただろうし、ここの階下も、かなり広いバルコニーを所有することができた。

青磁は、真摯に答えた。

「ここで育てることに必要があったから」

彼女はそれ以上、質問してこなかった。

彼の耳に光るピアスには、麒麟という聖獣を象った彼の家の男子であることの象徴が燦然としている。

伝説の聖獣であるが、風に乗り、慈愛を糧としていると言われている。

これは世界各地に散らばった血族が、いつか生まれた土地に戻ってこられるようにという願いを込めたものであるが。

彼は、彼の代に、この紋様を改編しようと考えている。

他の誰にも託すことはできない。

だから、彼がやる。

そのためには・・・彼には、彼と一緒にその事実に向かう人物が必要だ。誰でも良いわけではない。彼女以外には、考えていない。

それで気がついた。

彼女は、庭の植物たちの世話ができていないのではないのだからと心配してやって来たのだ。

彼は、彼女の背後に立ち、廊下とリビングを隔てるための扉を閉めた。

このドアひとつで、彼女が帰れなくなるということはない。

けれども、帰したくなかったから。

「体調は？」

「見ての通り」

青磁が肩を竦める。一目見れば、わかるだろう。

他の者への対応は一切できない状態であることを。床から上がれないというわけではないが、それは彼女の来訪に対してのみに適用される。

他の者が来るのであれば、応じないつもりであった。

青磁は恋愛をゲームにするつもりはない。それに。今は彼女が、彼の心の支えであり、彼の朝顔であると決めていた。それ以外の者に縋って、誰か別の者をその場凌ぎの安らぎにするつもりはない。

▼07

勝負にできるのであれば、最初からそうしていた。

勝敗を求める間柄を求めるのであれば、どれほど楽であっただろう。

そうではない。

・・・そうではないのだ。

「世話は、私がするから」

彼女はそう切り出した。

「用事が終わったら帰るから、寝ていて構わない」

青磁の前では、いつにも増して言葉が少ないように思えた。

それが「特別」だからなのか「特別ではない」からなのか、青磁は聞く事は無かった。

皆と同じであることは望まない。

彼は彼女の「たったひとり」になりたいと思っていることは、今でも変更されていない。

毎日の手入れを欠かさなければ枯れてしまうような種は育てていない。

けれども、青磁の失調の度合いや、いつから彼の失調が始まったのか、彼女は知らない。

だから、彼女はやって来た。

最も弱った存在であると認識していない。

絶望と苦しみで青磁は弱っているとは思わない。

・・・わかっている。

彼女にあるものは、ただ、慈愛だけだ。それでも、彼に対する心が嫌悪ではないことは知っている。知っているからこそ、苦しい。

彼女の心が、欲しい。彼女の心だけではなく、すべてが欲しい。

しかし、それでは彼女に近寄れないことも知っている。

まったく、難しい人を好きになってしまったものだ。そう思うが、それは止めることはできなかった。

マクドゥガル家の者は、定めてしまうと覆すことはできない気質の者が多い。

一度、この人だと決めてしまうと、その人が絶対になる。

アルディ家の者も同じだと聞く。

マクドゥガル家の者はもっと柔軟だと思っていたが、そうではないようであった。

どうやら、自分は彼女への熱に浮かされているらしい。

認めたくないと思う気持ちがあるが、同時に、そうなのだろうな、と肯定する気持ちがある。

だからこそ、マクドゥガルの者は恋に堕ちることには慎重であった。

恋に堕ちたらそれが恋なのだ

そういう言葉が残るのは、それが真理だからなのだと思う。

恋なのかどうなのか、定義付ける瞬間には、それはもう、恋なのだ。

「さっき水をやったので、当分は大丈夫だ」

青磁は、自分の言葉を出す度に感じる脳への震盪を堪えながら、言った。

「きっと花たちも喜ぶ」

少し曇った声で、青磁はそう言った。

青磁が主目的でなくても、良い。彼が愛でているものを、彼女が愛でてくれるのであればそれは、ないよりかは喜ばしいことである。

「構わないで良いの。それから、必要書類は持ってきた」

今日を期限としているわけではないのに彼女がそれを持ち込んだ理由を聞きたくて仕方が無かった。それを理由として青磁に会いに来たのだ、と言わせたかった。

どうして、これほど求めるのだろうか。

これは、炎熱がそうさせるのだろうか。

彼は、彼女の持ち込んだ両手に残る荷物を見た。

草花に関するものだけではなかった。簡単に調理できる品ばかりが、袋から覗いていた。彼が失調した時に必要とするような、液体や半固形の栄養補助食品であった。

けれども、青磁は彼女がそれを説明する前に、指摘することはなかった。自分を気遣って用意してきたのか、と聞いても彼女はそうだと答えないだろうから。

▼08

彼女が両手に提げてきた荷物が相当に重そうであったので、青磁は彼女に尋ねた。

「随分大荷物だけれども」

「たいしたことではない」

そうは言っても、彼女が扉を開けられなくくらいの重さであることは事実である。

額にはうっすらと汗が滲んでいる。

床に置くことのできないものなのだろうか。

彼女は居間に入ってきて、まだ、荷物を離そうとはしなかった。

「テーブルに置けば良い？」

青磁は彼女の後ろから片方だけ、袋の把手に触れて遠慮がちに引いた。

その時。

彼女の手が触れてどきりとする。

彼がこれほどまでに彼女に夢中になってしまっていることを、彼女は知らないのだろうか。

周囲には既に明白のこのようであった。

「相手が誰もいないのなら」と言い寄る者も現れなくなり、「彼女を想っていても良いから」と言い直す者が増えた。それでも、青磁はイエスと言わなかった。

適当に恋愛をするつもりはない。

そういう余裕は、彼には、ない。

それが余裕という言葉を使うことが適切なのかどうかという議論なら、彼女はいくらでも付き合うだろう。

けれども当事者として彼女がどれほど青磁から思われているのか客観的に述べることはしない。
気がついていないわけでもないだろうに。

それとも、青磁の心配りが足りないのか。

待つ、と言ったので、彼はいつまでも待つつもりだ。必要な時には、待つだけではなく、ともに行動し、考える。そういう意味の「待つ」だ。

思ったとおり、彼女が持ち運ぶには相当の重量であった。

一体、何を持ってきたのだろうか。

居間と続いているキッチンに運ぶ。彼女は小さく、ありがとう、と言った。

そして、さり気ない口調で尋ねた。

同時に、荷物の中を覗き込み、そして小さく声を漏らした。

「これ、オレに？」

まだくぐもった声であったが、青磁は驚愕しながら言った。

「そう」

青磁の家を訪ねて来て、青磁にあてた品でなければ何なのだ、と言いたそうな声で彼女は素っ気なく答えた。

「・・・助かるよ」

口当たりの良い乳製品や、飲料などが入っている。

滋養のあるものばかりであった。

青磁はその後の言葉が続かなくて、押し黙る。

どうしようか、と困惑する。

自分がこれほど言葉が足りない人間だとは思っていなかったからだ。

彼女が、彼のことを考えながら品物を選ぶことがこれほど嬉しいとは思っていなかった。

来てくれれば良いな、と考えていたが。

実際に来訪してくれた今となっては更に深い歓びを求めてしまう。

何と、欲深なのだと思ったが、気持ちが止まらなくなってしまう。

「とても、嬉しい」

彼は率直な気持ちを述べた。

二人の関係は危うい。

抱き合っているだけで良いとは思わない。

でも、彼女を抱きしめたままで眠りたい。

彼女が買い揃えた品が気に入った。青磁の好みを承知していることにも、またひとつ、嬉しさが込み上げる。失調している時には確かに、注文するのも買い出しに出るのも億劫であった。誰かに頼むほど、彼は誰かをここに招きたいと思っていない。

「もうひとつの袋は？」

青磁は彼女の持っていたもうひとつの袋に目をやる。

片方だけで相当の重量であったから、相当に疲弊しているだろう。
労いの言葉をかけてやりたかった。

▼09

もう片方の袋も、彼女は背伸びをしてテーブルの上に置く。

中から、正方形の布に包んだ折り詰めが出てきた。

・・・何を持ってきたのか、察しがついた。

彼が何もできない状態であるかもしれないと想定して、彼女が軽食を作って来たのだ。

青磁は、ただ、困惑する。

熱によって頭の芯がすっきりとしない不快感があるが、それ以上に彼女の気遣いに軽口を叩くこともできないでいた。

「冷蔵庫と冷凍庫に各々入れておけば日持ちするものばかりだから」

彼女はそう言うと、黙々と袋から出してテーブルの上に積み上げて行く。

彼女がなぜ、床に降ろし、持返すこともしなかったのか察した。

彼が代金を払うと言うと、彼女は首を横に振る。

「いつも、貴重な本の見せてもらって、英訳の手伝いをしてもらっているから」

なるほど。これは駄賃なのだ。

貴重すぎる駄賃であった。

彼女がそうやってしまえば、青磁はそれ以上何も言えなくなってしまう。

いつか、彼女の負担を肩代わりすることで何とかなるだろう。彼女はどちらか一方だけが尽くす関係は好まない。

「それなら、今回は君の言葉に甘えることにするよ」

掠れた声で、彼は言った。

しかし、これだけの量を用意したとなると、相当時間がかかったと思われる。

家事に精通していると言えない青磁でさえそれがわかる。

彼が研究室に今日は休むと連絡を入れたのがそれほど早い時間ではなかったことを考えると、それからすぐに作業に取りかからなければ、これほど準備することはできなかった。

おそらく、情報が入ってすぐにすべての予定を変更して、これらを準備したのではないのかと思われた。

「これ、ひとりで作ったのか？」

「誰と作ると言うの」

彼女は辛辣に遣り込める。それ以上は聞いて欲しくないと言いたそうであった。

「そうではなくて」

彼女の思うところと青磁のそれが違うことを伝えるために、青磁は言い直した。

「随分と、時間がかかっただろう」

「だから予定を変更した」

ああ、と青磁は合点して頷いた。

しかし、その説明の理路に納得しただけである。

彼女は予定をあまり変更しない主義だと思っていた。いつも温厚な彼女にしては珍しく譲らない点だと理解していたので、青磁は首を傾げた。

「怠いかもしれないけれども、食事で体の内側から温めて・・・」

彼女が説明しながら、ひとつひとつ丁寧に積み上げていく様を見て、青磁は胸苦しくなった。

いつか、こういう見舞いは終わる時が来る。それは、青磁がこの国を離れるときだ。

そして彼女が青磁が失調する都度、このように滋養を考えた食事を届けるような日々になるのかどうか・・・それは青磁次第だと思った。

心身が弱っている時には、身近な者に愛着を感じるという。けれども、青磁は違っていた。

離れているから、余計に恋しい。

一緒に暮らしていないから、尚更愛おしい。

彼女が彼の朝顔になると承諾してくれた朝を忘れない。彼女も、忘れていないだろう。

けれども、マクドゥガル家の持つ重すぎる課題が、彼女を押しつぶしてしまうのかもしれないと懸念している青磁の心が揺れている限り、彼女は何も言わない。

「君の時間を奪ってしまった」

青磁は困った声を出した。しかし、自分の声音がうまく相手に感情を伝えることができないほどくぐもって抑揚なく聞こえる。

彼は、彼女が機転を利かせて食事を届けてくれたことを嬉しいのだと言う前に、彼女が費やした時間の方を考えてしまった。

思考が鈍っている。そう思った。相手に伝えたいことが、伝わらないから。

▼10

「それほど長居はしない」

彼女はそう言って用件を済ませようとする。

急いであることはないのに。

しかし、それは青磁が押し黙ったまま困惑した表情を浮かべ続けているからなのだ気がつく、青磁は気怠さを吹き飛ばすような口調でつとめて気鬱にならないように言った。

彼女に帰って欲しいと思っているのではない。その逆だ。

不調で弱っている時の姿を見せたくないと思うが、彼女は特別であった。

「とても困ったことになったと思っているけれども、同時にとても嬉しいと思っている」

彼は正直に言った。

「青磁、熱があるの？」

平常心を失っているという意味を込めて、彼女が言うが、彼女の方が狼狽えていた。

いつにない彼女の細い声に、彼は全身の気怠さも関節の痛みも消えてしまいそうなほどに躰が打ち震えているのを感じる。

何とも思われていないとは感じていなかったが、彼女は彼に対して距離を置いている。それは確認するまでのことでもなかった。

その彼女が、青磁の安否を確認するために、自分の予定を変更してやって来てくれた。これが困惑ではなく歓喜であると伝えるためには、どのようにしたら良いのか、彼には策が思いつかない。けれども、どうにも・今すぐ、彼女を抱きしめたくて仕方が無かった。

彼が知っている、一般的な恋人同士の始まりではなかった。だからこそ、夢中になっているのだという自覚はあった。

しかし、それが一時のことではないのだろうという確信めいたものも存在する。

彼は、誰にも彼の朝顔になって欲しいと言わなかったのに、彼女に対しては願いが消えることがないからだ。

求めているものが多すぎることはわかっている。

マクドゥガル家を捨てることもできないし、彼女を諦めることもできない。

・・・あのフランスの華と同じ状況であることに対して、複雑な思いを持っていた。

けれども、シャルルはそれを貫いている。だから、青磁は不安になることはない。

自分はシャルルと違うことは承知しているが、あの人がファム・ファタルに感じているものと同じくらい強いものを、青磁も目の前の彼の想い人に感じているからだ。

恋が終わり、愛に変わり、そして新しい愛を憶えた。

自分の中にはどうしようもない狂気が眠っていることもわかっている。

マクドゥガル家の男達が愛した女性達は、尽く何らかの不遇を味わっている。

最大の悲劇は・・・マクドゥガル家本邸の焼失にかかるあの出来事であっただろう。

彼女には、そのような不幸を味わわせるつもりはなかった。しかし、青磁の心構えだけではどうにもできない問題も幾つか存在するのは事実である。

彼に必要なのは、彼を癒す人物でもなく、愛されるだけの人物でもなく・・・彼と一緒にこれから彼が向き合わなければならない現実と課題に立ち向かう人物である。

彼女こそ、彼の探し求めていた人だと思っている。

もし、彼女でなかったとしたら。彼はその次はないと思っている。

条件に合致しているかどうかということが愛する条件ではない。彼には、やらなければならないことがある。それは、どうしても彼でなければできないことであった。他の誰かに任せることができない。

普段はまったく気にしない耳のピアスが、どうにも重かった。それはマクドゥガル家の継嗣という重責によるものなのか・・・彼女を目の前にして、戸惑っている自分を持て余しているのか・・・どちらにしても、彼はいつも通りに振る舞うことができそうもなかった。

押して響かなければ、引く。それを繰り返す。

彼女が困ったり厭だと言ったりすることは、彼は望まない。

信頼を失うのは一瞬だ。けれども回復させるにはとても長い時間がかかってしまう。

だから、彼は言った。

「熱は・・・あるよ。どうにもならないほど」

彼の声は掠れていた。

▼11

彼女は青磁を見上げていた。

確認しなくても、口に出さなくても明白であった。

彼女は彼の朝顔だ。

そして彼女は彼の申し出にイエスと言った。

視線を動かすこともなく、覗き込むように青磁の片方だけ薄い瞳を見つめ返している彼女は、やがて静かに言った。

「それなら、もう休んだ方が良い」

そうやって逸らかされることもわかっていたが。

彼女に、青磁の想いは届いている。

彼はそう確信した。

奇妙で不思議な関係だと思う。恋人同士と言うには、距離がありすぎる。

けれども、彼女は青磁を拒むでもなく、こうして彼の炎熱を確認しにやって来る。

「身を温かくして、水分を十分に」

ありきたりなことであったが、彼女が言うとそれが最上の方法であるのだと信じていることができる。

彼はテーブルの上に並べられたものが彼女によつて的確な場所に高速で収納されていくのを見ながら、キッチンのカウンターに腰を預けてその様子を眺めていた。

どこかに腰を下ろしてしまうのも気怠い。

発熱に対して備えがないわけではないが、彼の中からやって来る、嵐のような激しい恋慾が彼を落ち着かなくさせる。

背中と形の良い耳の後ろから汗が滲むのを感じる。

参ったな、と思った。

彼女が一目で青磁の不調を感じ取ることができるほど、彼は良くない状態らしい。

「必要があれば病院に・・・」

そこまで言ってから、彼女は口元に笑みを浮かべた。

彼が何のためにこの国に滞在しているのか、思い出したようであった。

奇妙な眼病を患っている彼は、その治療のために日本に滞在している。

それだけが目的ではなかったが、彼が定期的な通院を怠っていないことを彼女は知っているのだから、それ以上のことは言わなかった。

もっと、彼を束縛しても良いのに。

彼女はそういう感情を露わにしない。

しかし、無感情であるということではない。

一緒に暮らそうと言っても、彼女は首を縦に振らない。

そうってしまったのなら、取り返しがつかないと思っているからだ。

彼女が戻れなくなってしまうということではない。

彼が、彼女のことを「彼の朝顔ではなかったのだ」と言い出しにくくなると思っているようであった。

「・・・用事が終わったので、帰る」

彼女の声で、我に返る。ぼんやりとしていたらしい。

考え事をしていたつもりはなかったのに、いつの間にか時間が経過していたようであった。彼女と居ると、時間を忘れてしまう。

彼は腰を浮かせた。

確かに、頭痛も関節痛も自覚している。喉も渴いているから、発熱していることは間違いない。

しかし、そんなことを言おうものなら、彼女はすぐさまこの場を辞すると言って聞かないだろう。

。

本当は、今日は彼女にはずっと傍にいて欲しいと思っている。余計な心配をかけたくないので、会わない方が良さそうだと思っていたのに。彼女の顔を見て、声を聞いてしまった途端に・・・放したくなくなってしまった。

矛盾する気持ちを、今でも制御することができない自分に途方に暮れる。

それでも、彼は静かに言った。彼女を留めて置くことが出来ない自分が不甲斐ない。

「・・・送るよ」

▼12

彼女は苦笑いを漏らしながら、言った。

「病人はあなたなのよ」

彼女が青磁のことを「あなた」と言う時に、彼はいつも甘い痺れを味わっていた。楽しむことはできない。ただ、その甘美な麻痺が彼女を想うが故のことであることはわかっている。

・・・そして、その理由も知っている。

彼女は、他の者には決して「あなた」と言わないことを知っているからだ。

配偶者を呼ぶときの応答と同じであった。青磁は、いつか、彼女が時分のことを障害そのように呼び続けてくれることをイエスと言う日を夢見ている。

いつもの彼なら、もうここで諦めてしまっていたところだろう。

マクドウガル家の者に迎え入れるための条件に合致した者でなければ・・・彼女は間違いなく、壊れてしまうだろうと確信していたから。

けれども、彼女はそうではなかった。青磁の予想を裏切り続けた。

そして、いつの間にか・・・彼は恋に堕ちてしまった。

いや、恋に堕ちた瞬間は、彼は自覚していた。けれども、それを認めるまでに随分と時間がかかってしまった。

彼女にしよう、と決めて近付いたけれど、彼女でなければならぬと思い定めたわけではなかった。

愛を選んですべてを捨ててしまったとしたら、彼は彼の生きている意味を失う。そう思っていた。

そして、あの家の不幸の連鎖を切断するのは自分で良いと思っていた。マクドウガル家の男達は、いつも最後は誰かに託すことになって命を終えていた。けれども、彼が誰かに託すとしたら・・・きっと、彼の息子となる人物になり、そしてそれが最後になるのだろうと思っていた。

全てを引き継ぎ、全てを壊し、そして全てを新しく作り替える。

彼は、その間、少しも弱く在ってはいけない。その時に、隣に居るのは・・・朝顔のように撓む柔軟性がありながらも決して途絶えることのないしなやかさと強さを併せ持つ者でなければ、青磁と一緒に歩けない。

可不可で相手を選ぶのが最善の方法だとは思っていない。

愛を定める時に、そういう条件も含めなければならないのは、マクドウガル家の定めなのかもしれないが、彼はそういう要素を厭っていたはずなのに、今になって・・・決してそうはしないと決めていたことを踏襲しようとしている己に愕然とする。

彼は、マクドウガル家の男子であるが、その家に逆らおうとしている要素だと思っていたのに、その実は、マクドウガル家の因子そのものだという行動しかしていないのだと知ったからだ。

彼らが全世界に散らばったことには、理由がある。あの土地では、相応しい子孫を残すことができないからだ。

そして、更に激減した男子にしか残せない謎を残すために、彼らは麒麟の烙印を推して記録を残すことにした。

すべてを明かすことのできない者であるのに、マクドウガルが耐えてしまわないように、名前を残すことにしたのだ。

そのうち、波瑠佳・マクドウガルだけが血縁でない者としてのすべてを知る最後の人物になってしまったが、その後、葎の婿が書物を残し、絲・マクドウガルがフランスに渡って記録の消失を防いだ。

青磁は、内外ともに記録の多くを知る直近の者である。

誠次という人物の道筋を追うことによって、詳細を知ることになったのだが、それでも青磁が悲

劇を引き起こした人物と酷似した容姿を持ち、マクドゥガル家の土地で生まれ育ちながら奇妙な眼病を背負うことになった意味を考えると・・・青磁が最後の真実の継承者なのだろうと思った。

これから先、自分の子に、これらの秘密を託すつもりはなかった。そうしたいと思えなかったからだ。

その代わり、と言っては痴がましいが。

彼の配偶者になる人物には、すべてを知って欲しかった。

そういう・・・打算を含めた恋の相手を探していることを、青磁は最初に彼女に告白していた。だから、彼女は青磁と距離を置く。そういう対象で見られたくないと思っていたのが最初であったのだろうが・・・青磁には、そのような秩序を求める要素があり、時分がそれに合致しそうだと思っていたからこそ、節度を彼女は持っていたから。

▼13

「それでも、送っていきたいから」

彼の打算が、その言葉には含まれていた。

それなら、彼女がここに留まるという宣言を聞きたかったから。

狡い申し出であることは、十分に認識している。

けれども、彼女を帰したくなかったし、もし見送るのであれば彼が彼女の背中を見届ける権利を放棄したくなかった。

少しでも・・・一瞬でも、一秒でも長く傍に居たい。そういう気持ちが彼をそんな風に動かし続ける。

愚かしいことだとわかっていても。この恋はきっと・・・最後の恋であり、永遠の愛になるのだということを予測していたから。そうなるだろうという曖昧なものではなく、己でそう決めたいと願っていることだから。

彼女は首を軽く傾げた。彼女はいつも拒絶することはない。

「青磁の安否を気にかけている人がいることを忘れないように」

彼女はそう言った。

彼女は時分が早くここを出て、青磁がひとり静かに休むことが必要だと言いたいらしい。

彼女を見送ることは、柔らかく拒否された。

それでも青磁が彼女の言葉に従おうとしないので、彼女は青磁を見上げると、テーブル越しに軽く彼を睨んだ。

「早く休んで」

彼は目を伏せて、時分の足元を見つめた。

確かに、すぐに彼女を送っていけるような状態ではなかった。

かなり発汗しているらしい。部屋着が湿っていて重く感じる。

「君がいるなら」

青磁はそう言うと、少しは離れた場所に佇んでいる彼女を切なく想いながら見つめる。彼の視線は紫電と呼ばれるもので、眼光鋭く、人によってはそれが怖いと言う者もいる。けれども、彼女はまったく動じなかった。

「治るものも、治らなくなる」

「君がいるなら、治る」

青磁の言葉に、彼女はとうとう呆れたような顔をして言った。

「こどものようなことを言っても駄目よ」

大体、神経が休まらないではないか、と彼女は言ったがすぐに口を噤んだ。

どれだけ日本語が流暢であったとしても、彼は遠い異国からやって来た人物で、誰も傍についていないことを心細く思っているのかもしれない。

元々、ここにやって来たのも、そういう懸念があったからであったことを、彼女は思い出したようだ。

軋むような痛みがふと、甦ってくる。

青磁は美貌を僅かに歪めて、テーブルに用意されたミネラル・ウォーターのペットボトルに腕を伸ばした。彼女が持ってきてくれたものである。

青磁がその銘柄を好んで飲んでいることを知っている彼女が、途中で買い求めてきてくれたものであった。

複数本あったが、それを持って来るだけでも相当に重量があったと思われる。それなのに、彼女は青磁のためだけに、持ち込んでくれた。

・・・目と目を合わせれば、手に取るように気持ちが通じ合うという関係ではない。しかし、知りたいと思う。

けれども、心がざわめく。彼女の視線の先に・・・青磁は存在し続けたい。

「君が付き添ってくれるのなら、寝る」

「青磁」

彼は彼女に近寄ると、彼女の手首をそっと掴んだ。

彼女の肌は冷たかった。彼の躰が熱いからだ。

「君と一緒になら、寝る」

彼はそう言って、彼女の腕を引いた。こういう時であるのに。

彼女が愛おしくて、そして彼女が来てくれたことが嬉しくて・・・彼は、それだけで十分であると思っているはずなのに、彼女が去ってしまうことが怖い。

「少し話をするだけなら」

彼女は腕を引かれたままで躊躇いがちに言った。彼の体温が想像以上に高いことを察知したのだ。そのままひとりにさせておくわけにはいかないと判断したのだろう。

彼女は言葉を覆すことはあまりしないようにしているようであったが、それでも考えを改める潔

さも持っている。そういうところも好ましかった。

▼14

彼が寢室のベッドに倒れ込むように横たわると、彼女は静かに彼の手に持っていたミネラル・ウォーターのボトルを枕元に置き直す。

「少し飲む？」

「いや、後で」

彼は彼女から取り上げられて、空になってしまった手の平を時分の額にあてた。

天井が見えるが、揺らめいているように見える。

解熱剤も飲んでいたので、躰の怠さはその影響もあるのだろう。押さえ込むより、発汗して熱を下げた方がよさそうだった。

確かに、いつもの彼らしくない物言いではなかった。

それを咎めるでもなく、揶揄するでもなく、彼女は静かに彼のベッドの裾にあるオットマンに腰掛けています。ここは日本式であるので、彼は高低差の少ないベッドを愛用していたので、彼女は名ばかりのそれにいつも苦笑いしていたことを思い出す。

彼女はそこで膝下の行方を持て余し、彼に向けて躰を斜めにして腰の両側に手を置いた。

纏れ合うようにしてベッドに彼女の身体を横たえてから、随分と時間が経過しているような気がした。

快樂だけを共有する関係ではない。

それだけは断言できる。

愛のない間柄ではない。

彼はそう信じている。

想っていない相手に身を委ねることに何も感じないような価値観の者であったのなら彼は彼女を好きにならなかったと思う。

いや・・・恋に堕ちてしまったのならそれが恋なのだから。

彼女が、彼だけを見つめない相手であったとしても、恋していたのだろう。

条件で恋を選ぶことなどできないことを思い知る。

あの、フランスの華ならどんな風に分析するのだろう。解明できない、心の動きに後付けで理由を附すくらいなら・・・これほど苦しくなかった。

彼は高い天井を見つめながら、自分の手の甲を額に添える。彼女がブランケットを彼の身体の上に向け直してくれたことすら、浮遊感の中に記憶する程度であった。

シーツが冷たい波のように心地好かった。けれども、彼女の肌の冷たさが彼を誘う。彼女の髪の毛の香りや肌のおいに敏感になっていた。失調しているのなら、そういった感覚はすべて穢くなるのが常であったのに。

彼女が傍らに寄って彼の睡りを見守ることを期待していたのに、何とももどかしい距離で彼の稜にいた。

これが、彼と彼女の距離なのだろうと思う。

背中を見せているのに、青磁を振り返ったままの彼女を眺めた。

「もっと近くに」

彼はそう言ったが、やがて軽く首を振った。

彼女も失調してしまうようなことがあってはいけない。

感染するような病ではなかったが、それでも彼女には彼女の生活があり、その決め事を変更して彼女はここにやって来てくれたのだから、それ以上を望んではいけないと思った。

「すまない。オレの都合ばかりで・・・」

彼はそう言うと、目を瞑った。

彼女がここにいるということが、彼には特別なことであると言ひ募ったとしても、それは炎熱が齎す幻影なのだと彼女に思っ欲しくない。

でも。

どうにも・・・心の内を隠すことができない。

「呆れないで欲しい」

彼はふっと天井に向けて吐き出すように言った。

失調しているせいか、煙草も欲しいと思わない。

けれども、こういう時に限って思い出す過去と対峙するのは、どうにも遣る瀬無い。

「どうして？誰にでもあることよ」

彼女の声は、清廉で、彼に染み渡る。

▼15

「こういう時は慣れていない。・・・苦手だな」

「慣れていて得意な人もそれほどいないでしょう」

彼女がおかしそうに言った。そうか、と言いたかったが言葉にならない。

その代わりに、彼は長い睫を伏せて、深呼吸した。横たわっているのも、彼の締まった腹が僅かに動くばかりであった。

彼女は実に不思議な人物だ。

自分の心の内に、誰かを依存させることはない。それなのに、人の心の機微を知り抜いている。もし。

本気で彼女がそうしたいと望んだのであれば、彼女は人の心を自由に動かせる人物なのだろうと思う。

まるで、マクドウガル家に君臨した麒麟や、マクドウガル家に名を残した葎のように。

だから惹かれるのか。

彼女の中にある、青磁と同じものを・・・「言葉にならない何か」を感じるから、これほど惹かれるのだろうか。

人の心の内を覗ける相手に対して畏怖を感じるのは、その者によって心を動かされるからだ。隠しているものが曝け出され、誰かに知られるというのは大変に恐怖である。

そして、場合によっては、相手の都合のままに自分の感情が左右されてしまうかもしれないという予感めいたものを感じるから・・・だから、相手との距離を正しく保とうとする。

それが正しいのか正しくないのかということは関係しない。適切であるかどうかということも。

しかし、青磁の瞳を見ると、心を乱されると言い出す者はひとりやふたりではなかった。

彼はいつになく遠く感じる天井を眺めながら、大きく息を吸った。

喉が痛み、声を出すのも億劫に感じる。けれども、話を終えてしまえば、彼女は帰ってしまう。

彼女を引き留めるだけの存在になりきれない自分をもどかしく思う。それならいっそのこと、好きになることを諦めてしまえば楽になるのかと思ったが、青磁はそういう見切りを良いことだと思わなかった。

良いかどうかで決められるものでもないことも、承知している。

それで言い訳したかっただけだ。

彼女をどうしようもなく好きになってしまっている自分を止める理由を探すことはない。

こうして異国の地で失調する自分のことを知って、彼らはどう思うのだろうかと考えなくなって随分と時間が経過した。

茶色の瞳のあの人・・・フランスの華が運命の人と定めたあの人との出逢いによって、彼は少し考えを改めた。

家族に歩み寄るのは自分からでなければ、何も変わらないのだと思うことができ、そして行動することができた。

「・・・昔は、熱が出ると家内が騒がしくなって、それがどうしてなのか、わからなかった」

彼は呟くように、心にある熱を吐き出した。

「男子は出生率が異常に低い。

生まれても身体が弱く、健康で長命であるという保証はない。そういう家に生まれつくと、少しの不調でも大騒ぎになる」

青磁は目を瞑り、意識を遠く飛ばす。

こどもの発熱というものにそれほど神経質になることがあるのだろうかと思いに思いながらも、熱に浮かされた時のことを思い返す。

そのまま儂なくなってしまうのではないのだろうかと思った。

あの家に生まれたことが厭わしいと思ったこともあった。しかし、失調すると・・・血縁者達は彼の見舞いに訪れる。早く良くなるようにとメッセージカードを残し、彼は復調すると必ず返事

を書かされた。

また退屈な作業が待っているのかなと思ったが、自分がそれほど大切にされているのだと感じた瞬間でもあった。

マクドウガルの男子は滅多に生まれることがない。だから大事にされているのだと思う一方で、形ばかりの尊重ではないのだと信じることができた。

しかし、彼が眼病を患った時。そして、丁度その頃から、青磁はあの誠次に酷似した顔立ちだと皆が気付きはじめた。

誠次とその父の静流・マクドウガルはとてもよく似ていると言われている。けれども、当時の彼らの風貌を残すものはほとんど残っていないし、気軽に閲覧できる状態ではなかった。

マクドウガル家の悲劇については、幼い時から禁忌であるとだけ言い含められていた。それを知りたいと思うようになったのも・・・彼らが時折、青磁の聞こえないところで「あの時の誼いか因縁か・・・」というようなことを繰り返し囁いていることに気がついた時からであった。

▼16

だから、それまでは何でもできる自由な立場だと意識することさえなかった家の中の自分の存在が、本当は大人達が困惑する異質な存在であることを知り、青磁は困惑した。

それまでの対応をいきなり変えられてしまったと感じたからだ。

親しく口を利くこともなく、必要以上に近付くことはしない。

だから、失調時に皆が見舞いに来るのは心配しているのではなく確認しているのだと気がついた。

彼がいつ死ぬか・・・確認しに来ているのだと思うようになった。

健康な身体であったことも、絵が好きであったことも、皆、否定するようになった。

マクドウガル家の名を残す者たちに並ぶ人物になるのだろうと言われて、甘やかされて育ったのに。

彼の瞳が薄くなり始め、顔立ちが悲劇を呼び起こした人物に似ていると誰かが言い始めた時。

彼はなぜ、彼に「青磁」という名前をつけたのだろうかと考えさせられることになった。

忘れたい悲劇であるのなら、どうして青磁は青磁・マクドウガルと名を付けられて、育ったのだろうか。それが逃れられない約定であったからなのか。

自分達のこどもに、そのような詛呪を刻んで、皆は一体何を考えていたのだろうか、と何もかもを疑問に思うようになってしまった。

自分は一体、何のために生まれたのだろうか。

最初から、必要のないこどもであったのなら良かったのに。

都合の良い時だけ必要とされ、そうでなかったのなら疎まれる。

それはあって良いことなのだろうかと考えることさえ許されない。

青磁は孤独を感じた。

失調して発熱すると、部屋に籠もって誰の看病も受け付けなくなってしまった。

いつだったか、彼が高熱で魘されている時に・・・彼の様子を見にやってきた彼の親は、彼の貌を見ると深く溜息を漏らしたから。

それなら、最初から期待させるような育て方をしなければ良かったのに。

彼の何が彼らを失望させたのか、少しも共感できなかった。

それで思ったのだ。

親であったとしても、血が繋がっていたとしても。

各々がまったく違った個であり、同じものを求めてはいけない時もあるのだ、と。

だから彼は家を出て、遊学とか留学とかいう名目で外に住まうようになった。

それを可能にさせるだけの環境であったことと、彼の奇妙な眼病を研究したいという奇特なフランス人医師がいたからこそ成し得たことであった。

失調するたびに、家族と遠くなっていく自分を感じた。

だから、余程の事が無い限り、あの家では不調を訴えることはしなくなった。

理解者を探すこともしなかった。

あの家で暮らして、そのまま家の決めた者と結婚して家庭を持ったとしても、彼はまったく満たされなかつただろう。

青磁の中には、そういう蟠りがある。

今は少しだけ改善された間柄であったが、それでも・・・どこか遠くの親族を見るような目付きで彼を眺める実家に長居したいとは思わない。

けれども、彼はいつか、あの家に帰る。「いつか」ではない。

間もなくそれはやって来る。

いつまでも好き勝手なことができるとは考えていない。

実際に、彼は若いが幾つかの事業の経営者として名前を記載されている身だ。

飾りであったとしても、飾りのままで終わるつもりはなかった。

そのようなことを考えていると、足元で屈んでいたはずの彼女が自分の身体の横に移動したことに気がついた。

彼女が腰を上げて、彼の近くに寄ったことすら気がつかないほど、彼は物思いに耽っていたのか。

「考え事をしていた」

「いいよ」

彼女の返事は短い、彼の心に沁みだ。

こうして返事があることが、何より嬉しくて・・・そして彼はずっとそれを待っていたのだと思った。

青磁の物思いを読み取ったかのように、彼女は彼に気遣ってそっと身動く。

もう、気の遠くなるような昔の話なのに、どうして今になって思い出すのだろうか。

彼は吐息を呑み込んだ。

黙ってしまえば、彼女が行ってしまう。

けれども、彼が話すことは・・・彼が自分のことを話すのは、彼女にとっては負担になるだけだ。

だから、彼は家族のことをあまり詳細には語っていない。

ただ、彼女はそれでも青磁が情に薄い者だとは考えていないようであった。

彼女の誕生日の時にはおめでとうとは言わずにありがとうと言った時に、彼女は表情を柔らかくして、青磁にこの上ない優美な微笑みを浮かべた。

はじめてみる彼女の表情に、しばらくの間、その状況を忘れてしまったくらいであった。

人の祝い事を「ありがとう」と言える人は、とても優しい人なのよ

彼女はそう言った。そして、そんな風に言う事の出来る彼女に恋をした。

彼は腕を伸ばした。

彼女が消えてしまわないように。

身体が軋んだが、それは我慢できる。けれども、心の疼きは我慢できない。

自分に言い聞かせているようであった。

家族との距離が縮まらないから、彼女との距離を詰めてみたいと思うのだろうか。

諦めて、新しい関係にだけ目を向けることが、楽になる方策だとは思わない。

それは彼女にも指摘されていたことであったが、だからと言って彼女を諦めることはしない。

心の溝を埋めたいから、誰でも良かった・・・という状態であるのなら、どれほど楽であっただろうか。割り切って、彼の渴望をそのつど埋める者を惹き寄せれば良いだけの話であったのだから。

けれども、彼女には満たされもするし、餓えることもある。失望することもあるし、期待以上のこたえが戻ってくる嬉しさもある。もどかしさも切なさも憤りも感じる。でも、それでも諦めようとは思わない。

驚いた声が青磁の頭上から降って来た。

話をするだけだと言ったのに、彼が別の行動を示したからだ。

「青磁」

「少しこのままで」

彼女の腰を両腕で抱き、彼は彼女の衣服の匂いを肺に取り入れる。

彼の汗が彼女の服に染み付いて、そして彼女が彼の恋人だと皆にわかるほどに変色すれば良いのに。

そういう邪な考えが浮かんで、すぐに消えていく。彼女は戦利品ではない。

身体を屈めて、彼よりずっと華奢な彼女の軀を抱きしめた。

彼女の腰や腹に回った青磁の腕の方が、ずっと思いのだろうと思ったが、しばらく彼女の体温を感じて・・・この憂悶から解放されたかった。

考えても、解決しない。

行動しなければ、何も動かない。

しかし、考えることをやめたら、そこで終わってしまう。

彼女と接するようになって、彼が持ち始めた思いは幾つもあった。

そのうちの 하나가、今、彼の身体を巡っている。

彼女を欲しいと思う。身も心も、すべてが欲しい。

彼に夢中になって、彼とどこまでも一緒に行きたいと言ってくれないかと夢見ている。

そして、彼女に青磁が欲しいと言わせてみたい。

こういう昏い欲求を抱えて、彼が純粹に愛だけに生きることができずに踟躇している様を、彼女が喜んでいとは思えない。

戸惑っている。

そういう表現以外の言葉が見つからない。

彼女は、青磁という相手に対して、困っているように見える。

しかし青磁はそれを尋ねることはなかった。

それを聞いたから、青磁が彼女を諦めるということはないし、聞いてしまった以上は彼女に対する気持ちを抑えることができるのかと自問自答していたから。

・・・愛だと確信しているのに、それは確信ではなく過信であったのかもしれないと何度も思った。

でも、結論が出るまで待つと決めた。

間もなく、彼はマクドゥガル家に戻ることになる。

でも、その時には彼女と一緒にあって欲しい。

こうして、炎熱に浮かされる時には、彼女に稜にいて欲しい。

やがて、彼の湿った髪に柔らかいものが触れた。

それが、彼女の掌だと気がつくまで、彼はずっと目を閉じて、幼子のように彼女の軀にしがみついていた。

これは自分の今の心の内のそのままだと思った。

彼女に固執し、彼女を戸惑わせている自分は、炎熱に浮かされているあの時のこどもの頃のまま成長していないのだと思った。

マクドゥガル家の麒麟だと褒めそやされて、自分は何でもできると思っていた。

絵が好きで、将来は世界各地を巡り、いろいろな風景や人物を可能な限りたくさん描き続けたいと思っていた。

それができなくなったとき。

自分はいかに小さく、何もできなく、そして人の思惑の中で翻弄される脆弱な器しか持ち得ないのだろうか、と感じた。

彼らが求めていたのは、青磁ではなく、誰でも良かったのだと知った。

マクドゥガル家の血を絶やさないう程度に健康で、あの家の過去に口出しをしない者。青磁はそういう存在になると思われていた。だから好きなことを好きなだけ享受することを許されていた。それなのに、青磁はマクドゥガル家最大の悲劇と言われた時代に関わった者たちとあまりにも近い容姿を持っていた。

姿形だけで彼の人生が決まってしまったように思えて悔しかった。

誰が悪いわけでもない。

自分の価値観が変化してしまったのだ。

だから、離れた。それだけなのに、それは彼の満足にはならなかった。

彼女の掌が、青磁の額に添えられる。彼は、彼女の軀に回していた戒めを解き、再び仰向けになって背中をシーツの上に重ねる。

彼女は、青磁の頭上から声をかける。どこまでも静かで、彼はその声に満たされていく。

「はやく治して」

「君が望むのなら」

青磁はそう言ってから笑いを含んだ。

そういう風に、彼女に責任を任せてしまうのは良くないことだ。

それはわかっている。

けれども、彼女に望んで欲しかった。

彼女の願いや言葉はいつも力強い。

いつもは柔和で何があっても、自分以外の者を優先させるほどに気優しいのに。

・・・だから願った。

豁达で、何にも屈せず、そして彼女に対しては彼女が時折憤懣に溢れる表情を浮かべることすら楽しむ不遜な青磁・マクドウガルであり続けることが・・・それは、マクドウガル家で鬱屈としていた自分とあまり変わらないのかもしれないと思うことすら、吹き飛ばしてしまう程の威力があった。

「人任せにするような話ではなかった」

彼は両腕を乱暴に広げて、ベッドの上で身体を弛緩させる。

「こういう時にどうすれば良いのか、もう忘れてしまったよ」

歎きに近い感想しか、思い浮かばなかった。

やはり、彼女を引き留めておくべきではなかった。

弱いところを曝け出すほどに距離が近いわけではない。

疎まれるのが怖かった。

蔑まれることを懼れた。

それなのに、なぜ、彼女に対しては曝け出してしまうのだろう。

そして、彼女には、物思いすら受け止めて欲しくなる。

一方的な願いではなく、彼女が同じ状況であるのなら、青磁は聞いてみたいと思った。

彼女の心の眩きを、青磁は聞くことができるほどに近い場所に・・・彼女の炎熱に灼かれるほどに近い場所にいられるのだろうか。

煩悶が彼を痺れさせる。

彼女に対する配慮を麻痺させてはいけない。

青磁は、自分のことばかりを話している。彼女はそれを聞いている。

その状況が、彼にさらなる熱を加えていく。

▼19

彼女は青磁の髪の中に白い掌を埋めた。

灯りの加減なのだろうか。

暗闇に浮かぶ彼女の顔はただ、彼に向かって視線を向けている。

青磁だけを見つめる彼女の姿を恋い焦がれすぎて、彼は幻を見ているのだろうか。

そんなことさえ思った。

「君はどうしてそんなに優しいの」

勘違いしてしまいそうになる。

彼女が、彼を愛しているのではないのか、と誤ってしまう。

身体を重ねたからといって、心が重なるとは思わない。

でも。

彼女は、彼の特別であった。

いつまでも優しく、いつまでも残酷だった。

最後の恋にしたいから、何もかもを特殊にしたいと思うのかもしれない。

恋は・・・愛は・・・どこに行き着くのだろう。

恋をしたら、それが恋なのだ。

そういう言葉が、マクドゥガル家には残っている。

確かに、そうなのだと思う。

今になって、実感する。

恋に堕ちた。

それだけで十分だった。

理由もいらない。前置きも必要ない。

誰かを愛するために、説明できる何かを用意することもない。

それが、恋であり愛なのだ知った。

誰かに心を預けても良いと思う。それが、今なのだと思う。

委ねることができると思った。

青磁は、小さな声で言った。

「優しい？」

「そう」

彼は頷く。彼女は、他の誰にでも同じ事をするだろう。

心が弱り、砕けそうになる気配を感じると、彼女は自分の気配を消して、相手を元気づける行動を選ぶ。

それでも。

彼女のすべてを委ねることを彼女が選んだのは、青磁だけであると信じたい。

彼女は誰でも良いと思っているわけではない。

少なくとも、現在の彼女の褥の相手は青磁だけであった。しかしそれを確認することが怖い。そうなのか、と尋ねたくないし、それによって壊れるものの方が彼には大きな痛手である。

なぜ、青磁が彼女の近い相手に選ばれたのかは考えない。

けれども、彼女を手に入れたとは思わない。

フランスの華になら、この心の霧が解明できるのだろうか。

そうではない。

青磁の心は己にしかわからない。

だからこそ・・・フランスの華にはすべてを話すことはない。

それなのに、彼と連絡を取りたがるのは・・・そうだ、決して望まれない結婚を彼が決行しようとしているからだ。それは、あの白金の髪の良い人にも共通していることであつたから。

共感を求めていたわけではないが、これから青磁が直面する様々な困難を、彼女に伝播することがないようにするための気構えを知りたかつた。

幸せで、心地好い状況だけを味わう日々ではない。誰がマクドゥガル家夫人となつても同じであつた。でも、青磁には、誰でも良いわけではなかつたのだ。

「弱っている時に言っていることは、あまり信用しない方が良い」

「本人に言われても」

彼女は苦笑いを吐き出した。確かにそうだ。青磁はそうだな、と頷く。

▼20

「弱っているから、君につけ込むこともできるよ」

「思っていないことを言わないで」

彼女の顔が、傾いた。

気配でわかる。青磁自身の様子より、彼女の気配の方が優先される。それは変わらない。失調していても、そうでなくても。

誰でも良かったから、というわけではなかつた。

自分でそう思い定めるといふよりかはむしろ、彼女にそう思つて欲しくなかつた。

条件に合致した人物であつたということが最初だつた。

でも、それすら遠い幻や妄想であつたのかもしれないと思ふ程、彼女と過ごす日々が平穩であつたことを青磁は楽しんだ。

別れはほとんど存在しない、新しい出逢いだけを受け入れる日々。

彼の使命を忘れそうになつた。

けれども、彼はその都度思い出す。

あの家を愛おしいと思えないが、あの家の糧になつた者たちは愛おしいと思つたことを、思い出す。

「君は優しすぎるよ」

青磁は唇の端を曲げた。

そしてもう一度言う。

「優しすぎる」

過ぎることは不足と同じだ。

彼の求める完璧は彼女の完璧ではないことは、承知している。

だからこそ、告げてしまう。

「もう、帰った方が良い。・・・スペアキーは持っているだろう？」

彼はそう言って、また目を瞑った。

彼女の気配が遠のくまで、そうしているつもりだった。

送ると言ってみたり、行くなと言ったり、矛盾していることを繰り返していると思う。

彼女がその都度、それを受け止めていたら疲弊してしまう。

そう思った。もう、彼女は帰した方が良い。

彼女を送らなければいけない。彼女をひとりで帰すくらいなら、彼は堪えて平気な素振りを見せることに集中し、彼女を送り届けるまで何事もないように振る舞うことを選ぶ。

「青磁」

身を起こそうとした彼の頬が、彼女の両手に挟まれた。青磁は再びベッドに戻されてしまう。

彼の安息そのものが、彼を覗き込んでいた。

顔を屈め、額を青磁の湿った額の上に乗せた。

彼女の顔や瞳が近くなり、青磁は酷く狼狽して視線を彷徨させた。しかし、見る対象を選ぶことができないほど、彼女が近かった。

彼の視線を怖いと思わない相手が、彼の貌に自分を重ねている。

「熱が相当高い」

それから呟く。

「ひとりにしておけない」

「同情は必要ないよ。それから、義務も感じることもない」

青磁は心にもないことだと思いながらも言った。

彼女は自分がそうしたいからと思わず、青磁が困っているから何とかしようと思っている。彼女が望んで彼女が青磁の傍に居ると言うまでは、待つのだと言った。その通りに実行することが、彼女への誠意と愛の証だと思う。

彼しかできないことを、彼が意識して行う。

「君の時間をだいぶ使わせてしまった」

彼がそう言うと、彼女は彼に額を押し当てたまま、ゆっくりと横に擦った。

「そう思うのなら、早く治して。そのことだけに集中して」

「君がこんなに近いのに？」

彼は微笑む。熱を感じていなかったのなら、そのまま顔を上げて彼女の唇に自分を重ねることに没頭しただろう。

▼21

彼女の掌が、彼の頬や耳に触れると青磁は身を竦ませる。幼いこどものように。

そして、いつも彼がそうして触れると彼女が見せる仕草と同じであることに気がついた。彼女が触れると、身が震える。歓喜のあまり。そして、戸惑いのあまり。

どうにもならないほどの熱が、彼の中にある焔を呼び起こす。

このままでいると、どれほど失調していたとしても彼女を抱いてしまいそうになる。

いつもは、彼から近づくのに。今は、彼女から彼に触れているから。

理性による戒めが緩みそうになる。

「・・・思っていないことではない。どうやって、君の心につけ込もうか考えているところだから」

青磁はそう言うと、彼女の手の甲に自分の手の平を添える。彼女の手は冷たくて心地好かった。自分の手の平は自分のものではないと思ってしまうほどに熱い。彼女を焦がしてしまうのではないのかとさえ思うほどである。

彼女の指先に青磁は自分の指を潜り込ませる。

「今日は来てくれて嬉しかった」

彼は正直に、自分の心をさらけ出した。

「予定があったはずなのに・・・君は来てくれた。それが嬉しい」

「調子が良くない時には、すぐに病院に行くか・・・誰かに連絡しないと。」

取り返しがつかない事態になってからでは遅い」

「もう、今・・・取り返しがつかないことになっているよ」

青磁はそう言うと、彼女の両手を自分の両手で包み、そして腹に力を入れて顔を持ち上げた。

・・・彼女の唇を掠う。

ひやりとして、そして甘い。

肌の擦れる音がして、彼はベッドに堕ちていく。僅かな距離であるのに、それが遠く感じられる。

彼女は彼に両手の自由を取り上げられて、困った顔をしていた。

わかっている。そういうつもりで彼女がここに居るのではないことも。

「ほら・・・危険だよ」

青磁はくすりと声を漏らした。声が掠れているけれども、彼女に取り繕っても仕方が無い。彼女が欲しいと全身で訴えていることは、彼女にもわかっていることだろうから。

「君の肌でオレを冷ましてくれる？」

断られるのは承知の上であった。これ以上彼女をここに留めておけば、彼女を見送ることもできなくなってしまう。自分のために時間を調整してきた彼女の対応を、彼の懊惱で穢すことはしたくなかった。

だから、そう言った。彼女がそれで帰ると言ってくれることを期待して。

青磁の中には、彼でさえ抑えることのできない獣が潜んでいる。

マクドウガル家の男子は麒麟の化身だと言われている。

しかし、それは聖獣と言われていても、所詮は獣であった。彼の中には獣が居る。狂気でできた塊だ。

彼女を独占したいと思うが故に、彼女そのものを無視してしまうことも厭わない気持ちになってしまう。だが、それを彼女に見せないようにしてきた。

でも、彼女は気がついているのだろう。

だからこれほど距離を置く。決して彼女は彼に夢中にならない。

極力、彼女が怯えないように、彼女に接してきた。

しかし、彼はそれでも、時々自分が壊れてしまうのかもしれないと思う時があった。

なぜなら、彼はマクドウガル家の者だからだ。

狂気と孤独の家に育って、何も影響しない健やかな人間になったとは感じられないし、それは決してあり得ないのだろうと思っている。

実際、彼女を前にして失調している姿を見せてなお、彼はこの状況で彼女の心が絆されることを願っている。彼女の誠実さを利用しようとしている。そういう自分が確かに存在していることを確認しているようで、切なくなる。

わかっているのに、それを止めることができない。

それが後悔という名前以上の存在であることを承知しているのに・・・彼は彼女に対して、近付こうとしている。

▼22

彼女が戸惑っていることはすぐにわかった。

それでも、彼女の頬に自分の頬を押し当てた。彼女は自分の身体のどこを支えて良いのか困惑し、彼の身体の上に自分を乗せてしまった。

慌てて退こうとする彼女に、青磁は囁く。

「いいんだ」

彼女の肘が彼の顔の両脇に落ち着き、彼女の身体を自分の上に感じて、彼は背中から一筋汗を流した。

「どうして連絡しなかったの」

彼女の言葉に、青磁は手を震わせた。彼女にそれが伝わったらしい。彼女の瞳が更に彼を覗き込んだ。

これほど誰かを求めているながら、なぜ、彼は誰かを呼ばなかったのか。

青磁の行動には矛盾がありすぎる。

そう言って咎めているように見えた。

彼は彼女と目を合わせたままで、静かに告白する。

「誰でも良かったわけじゃない。君がいないのなら、誰が居ても同じことだから」

なぜ、わからないのだろうか。

青磁は微かに憤慨を感じる。

彼女でなければ意味がない。

他の誰かを彼の傍に寄せることもないし、こんな姿を見せたいと思わない。

しかし、彼女には予定があると聞いていた。

だから、誰にも状況を伝えなかった。

彼も既に成人している者であるから、万が一のことは考えている。

余程ひとりで立ちゆかなくなるような状況であったとしたら、どこに何を伝えれば良いのか、それは承知しているつもりであった。

しかし、正直にそれを言ってしまうと彼女が青磁の中でどれほど大きな存在なのかという事実を押し付けるだけにすぎない結果になってしまう。

彼女のことを待つ、と言った。

自分がどれほど彼女のことを好きなのかそれを証明し続けるための待機ではない。

うまくいかない彼女との関係に、青磁はもどかしさを感じるものの、それでも結論を急ぐことはしないと決めていた。

時が全てを解決するとは考えていない。

けれども、時をかけなければ得られないものもあるのだと知っているから。

なぜ、自分はこのように深い慾に遭遇しやすいのだろうか、と思う。

それは青磁が多くを願うすぎるか、強く願うすぎるからなのだと知ることの出来る年齢になった時には、彼は誰も愛せないのだろうかなど思い始めている頃であった。

どんな者とも、どんな関係であっても、長く続かない。

友人とか恋人とか名前を変えてはいるものの、それらは彼の中で永遠という存在にならなかった

。

だから。

フランスの華が、運命の人と呼んだ彼女を今でも想い続けいると知って、愕然とした。自分と同じ存在だと思っていたから。

そして、マクドゥガル家の男は、たったひとりの人を深く愛しすぎて壊してしまうという愛し方しかできないことも知っていた。

それに倣うつもりはなかったが、自分も他者からみるとそんな風に映るのだろうと自覚していた。

しかし、彼女は少し違っていた。

青磁の紫電を見ても怯まず、そして彼のことをひとりの男として扱った。

彼の家のことも、彼の持って生まれた謎も業も、特別なことではないのだ、と言い切った。

ひとめで恋に堕ちたわけではない。

彼女のことを好きになっても差し障りがないのか、彼の中で考えた時期があった。

けれども。

それらがどうしても良くなってしまうくらい、彼女は会話を進めていくうちに彼を魅了して、それが終了することはなかった。

▼23

青磁は彼女の両手から自分の手を離した。

彼女の手の冷たさより冷たいとは感じなかった。しかし、汗ばんだ掌に風が入り込み、彼の身体の熱さを再び教える。

彼の部屋はとても静かだ。何も聞こえない。僅かに、彼女と彼の呼吸音と空調の音、それに外の風が少し強くなってきたことを気配で知らせるだけだ。

どうしても、彼女のことが諦められない。

ここまで言って、彼女がそれでも青磁を拒否するのであれば。

彼は帰国の頃、自分の気持ちに決着をつけなければならないと思っていた。

「先回りして、私の予定を決めないで。私がどうするのか、私が決める」

「そうだな」

青磁は彼女の怒った口調に苦笑いする。怒っているのではない。哀しんでいると知っているから。

彼女に何も言わなかったのは、こうして予定を変更して欲しいと願うことと同じことになると思ったからだ。弱っている人間を見捨てて自分の予定を優先させるほど、彼女は他者を切り捨てることに無感動でいられない。

それを見越して、彼女に連絡するというのは、青磁の誇りが許さなかった。

彼女がいなくても、切り抜けられるというところを見せたかったのか・・・それとも、大学院に顔を出さない青磁について、彼女がおかしいと気がついてくれることを待っていたのか。

彼女のことは、彼女が決める。

わかっていることなのに、宣言されると・・・少し胸が痛んだ。

すると、彼女は彼の額の上で顔を振った。彼女の髪が青磁の頬に降り、彼はくすぐったさに目を細めた。

彼女の身体が青磁の上に乗る、彼は離れた手を彼女の身体の脇に添えた。

甘い重みが彼を痺れに誘う。

彼の身体に重なる重さに、甘さを感じたことなどなかった。彼女を知るまでは。

健康でないことを厭われた日々を思い返す。

けれども、彼女は青磁のために、言われてもいないのに、彼を気遣ってやって来てくれた。

このことが嬉しくないのだとしたら、彼の喜びはどこに行ってしまったのだろうかときえ思う。

彼女と巡り逢って、ただ己の恋情だけでは相手を動かすことができないのだと知った。そして、相手を動かすには恋情がなければ少しも響くものがないということも。

相反する事実を受け入れて、その先にある何かについて同じこたえを出せるのであるならば、相手と同じ未来を視ることができる。それを知った。

愛しているというだけで、何もかもを乗り越えることはできない。

けれども、愛していなければ乗り越えられないものもある。

彼女を好きになって、そのことについて深く理解した。

誰かを愛するという事は誰かを壊すことではなく・・・自分を壊すことなのだとということ。

青磁は確かに、あのマクドウガル家の男子の特徴を兼ね備えているが、同時に・・・あの家に集った女人達の気質も受け継いでいるのだと思う。愛する者に尽くし、愛する者に与え、そして奪われることを知りながらもそれが恋なのだを知る者たちと同じ魂が彼の中には宿っている。

彼女に迷惑をかけてしまった。

いらぬ心配をかけてしまった。

それが、青磁の焔を更に揺らめかせる。

今・・・彼女がこのまま彼に触れ続けるのなら。彼はもう、止められないと思った。

「君がこれほど強情だとは思っていなかったから」

青磁はそう言ってまた綻ぶ。

彼の忍耐にも限界があった。炎熱が、彼の理性を焼き切りそうになるほどの激しきで燃えさかっている。

「それなら、最初から・・・連絡してくれば良かったのに」

彼女が強ばった口調で、彼の口元に近い場所で囁く。

「これからは、そうするよ」

青磁の声も小さかった。彼女に対して、そういう態度はいけないことなのだと思っていたのに、

彼女はそうではなかったから。嬉しい誤算に、言葉が震える。

▼24

青磁、と彼女は彼の名前を呼んだ。

「誰かに教えてもらって知るって、少しだけ哀しかった」

彼女の告白に、彼は瞼をぴくりと動かす。

青磁の中では大切な人であることは間違いない。

けれども、彼女が同じであるとは限らない。

だから、言わなかった。

彼女に負担をかけさせたくないと思ったから。

しかし、それが彼女を哀しませていたのだとしたら。

彼は熱を帯びた声で、彼女に謝罪する。

「今度は君に最初に知らせるよ」

「そういう意味ではなくて」

彼女が微笑むと、彼はそれだけで嬉しくなる。しかし、屈託のない微笑みではなかった。愁いに満ちた、少し寂しそうな笑顔。

「青磁が悪いのではなくて、私の問題」

「どういう意味？」

青磁が尋ねる。鼓動がはやくなってくる。

自分の期待する何かが得られるかもしれないという予感からくるものだ。しかし、それを急かさずじっと待った。

彼は待つしかできないけれども。

待つことによって得られるものもあるから。それを知っているから。

そのまま激しいうねりに身を任せてしまいたくなってしまう。彼女を抱いたままで、彼の熱が引いていくまで。

彼女は、一瞬、しまったというような顔をしたが、青磁は見逃さなかった。

これほど近い距離にありながら、彼女は受け流せると思っていたのだろうか。

少し可笑しくなって、声を漏らして笑うと、彼女の頬が動いて彼女は青磁から逃れようとする。

けれども、彼は素早く彼女の背を抱き、自分の胸の上に彼女を絡め取った。

彼女の指の温度を感じていたかったが、それ以上に今は・・・彼女の言葉が聞きたい。

「どういう意味だよ」

彼はもう一度尋ねる。彼女は口籠もっていたが、青磁がそのまま言葉を待って無言でいると、や

がて諦めたように軽く溜息をついて、それから短く返答した。

「私が勝手に自分に失望しただけ。青磁が、ひとりで解決しようとしていたことを知ったから」

「オレのことで君が失望？」

少し顔を離すと、彼女の困った顔が見える。彼女は青磁の顔をじっと見つめながら、面白くなさそうに言った。

「そう」

彼は彼女の名前を呼んだ。

どうして失望したのか、それが聞きたい。

彼が彼女に連絡をしなかったから。

そしてそれを他者から聞かされたから。

何も知らないと思い知らされたから。

彼を知っているのは自分だけだと自惚れていたから。

・・・そういう言葉が聞きたかった。

残酷だと思うがそれが本心だった。

彼女の心に、彼が居るのだと彼女の口から知りたかった。

彼女と駆け引きを楽しんでいるのではない。それができるのであれば、もっと上手に彼女の本心を聞き出すことができる。それなのに、彼はどうにもならないもどかしさのために、ただ口を噤んで彼女の話のを待つしかできなかつた。

熱のせいだろうか。

だから、彼女に対してこんな風に、質問してばかりいるのだろうか。

「今日はどうして聞きたがるの」

「熱があるから」

彼は可笑しそうに言うと、誤魔化さないで、という彼女の文句が聞こえて来た。

「君に内緒にしていたわけではないんだ。ただ・・・こうして予定を変更して来てくれると良いなど期待してしまうから、だから言わなかつた」

「あなたの普段を知っていれば、こうなることはわかっていたでしょう」

ああ、と思った。

また彼女は青磁のことを「あなた」と呼ぶ。心地良い響きであったが、同時に彼の中にある焔の勢いが増してしまう。

▼25

そして彼女は青磁の日常を知っていると云った。

そして彼女は、早口で言う。まるで、その場を駆け抜けて早く終わらせようとしているようであった。

「誰かが来ていれば、それですぐに帰るつもりだった。哀しい気持ちになるのであるならば、知らないふりをしていようと思っていた」

彼女の言葉が青磁の肌に雪のように降り注ぐ。心地好い声の響きが、彼の火照った肌から熱を奪っていく。

「オレはこの部屋には誰も呼ばないよ。君以外は」

それに、と言って青磁は苦笑する。

「君が何を遠慮しているのかはわからないけれども。スペアキーを渡してあるのに、何を心配しているのか、少しも理解できない」

彼が誰かにキーを渡すというのは皆無である。

ここは、人を招いて何かをする空間ではなかった。

殺伐としたという表現までには至らないが、これまで各地で短期滞在を繰り返している青磁の荷物というのは実に少ない。

ホテル住まいにした方が良かったのかもしれないが、それでは彼は彼女といつまでも心を通わせることはできなかつたと思う。

生きている世界が違ふと言われてしまうことが何より怖かつた。そんなことは十分に承知している。でも、それでも近付きたかつた。

「理解してもらわなくて結構よ」

彼女は素気なくそう言った。

彼は、何かを言い返す前に、彼女の身体を抱き締めた。

彼女の香りに混じって外気の匂いが残っていたが、彼はそれを肺一杯に吸い込んだ。

「・・・本当は」

青磁は彼女に囁いた。熱のせいだろうか。今日はいつも抑えていた様々なことが声になって彼女に向かって行く。

「君が看病に来てくれると良いなと思っていた。来てくれよ、と言いたかつた。でも、それでは君を束縛することになるし・・・それに君はオレを束縛できるけれども、その逆がいつも必ず成立するとは限らない」

それから青磁は目を瞑った。

天井が揺らぐ。

彼女の顔が近くにあるからこそ、こんな風は無防備でいられた。

失調した時は、夜が明けない気がしていた。

青磁の孤独や虚などを埋めてくれる手の平を期待することができなくなっていた。

彼の炎熱は誰も鎮めることができない。そう思っていた。

すると。

彼女は身体を起こして、青磁の頬に自分の唇を押し当てた。

ふわりと彼女の気配が動く。

唇にではなく、彼の頬に彼女は唇を擦らせた。ぎこちないキスに、青磁は息を止める。

どうして良いのかわからなくなるほど・・・目眩がした。

それが失調からなのか、それとも信じられない奇蹟のような彼女からのキスに戸惑っているからなのかはわからなかった。

彼女は素っ気なく繰り返す。

「・・・理解しなくて良いから」

今の行動について説明を求められても彼女は説明しないのだろうと思われた。

青磁の顫顫に汗が浮かぶ。ただ呆然とそれを受け止めるばかりで、余韻に浸る余裕さえなかった。

このことについて理由を考えたり、彼女の心の動きを推し量ろうとするなどと言われて、青磁は困惑する。

何気ない動作ということで片付けたい彼女と違い、彼はこのことに意味を持たせたかった。

「つまり、君は怒っているのか？」

青磁は喉の痛みも忘れて尋ねてみる。

しかし、予想通り、彼女からの回答は得られなかった。

▼26

「それだけ元気なら、大丈夫そうね」

彼女は唇を突き出した。分が悪いと思ったようだ。

けれども。

青磁は、彼女の身体を強く抱き締めると、力強く引き寄せて今度は彼女をベッドに沈めた。

小さく悲鳴が聞こえて、青磁の身体の下で、彼女が不本意だということを全身で表していた。つまり、かなり激しく抵抗したのだ。

不調といえども、彼と彼女では身長も体重にも差がありすぎた。青磁は彼女の上に屈み込み、そして今度は彼が彼女の顔を覗き込む。

両手首を自分の手の平の下に置き、そして彼は軽く足を開いて彼女の上に身体を浮かせる。

「青磁」

一瞬で反転してしまったことに、彼女は酷く驚いていた。

「今、君が言ったんだぞ。大丈夫そうだ、と」

青磁は悪戯を仕掛けるこどものように邪気なく微笑む。

湿った臥榻に彼女を押し倒すのはやり過ぎだったかもしれない。

でも、今は離れて居たくないという気持ちが彼を衝き動かした。

「青磁が不調の時には、かなり我が侷になるということが良くわかりました」

彼女は溜息混じりに、彼の顔を仰ぎ見ながら言った。青磁が笑う。

「そうだよ。オレは、かなり我が侂だ。君に今日はこのままここに居て欲しいと思っているし。・・・今日は帰って欲しくないと思っている。君の都合を考えもしないで、君を今、思い切り抱いてから眠りたいと思っている」

最後の言葉に、彼女が顔を真っ赤にして目を見開いた。

そういうつもりではない、と言っているでしょう。

彼女がそう言ったが青磁は今度はその言葉を聞き流した。

無理強いするつもりはない。本当に嫌がるようであればすぐさま解放する。でも。

彼が炎熱に浮かされている時には、いつも孤独であったが。

こんな風に彼女と話をすることによって、果てがないかもしれないと思った孤独な休息の時間がまったく違ったものになってしまう。

なぜ、これほどまでに心惹かれるのか。

また少し、理解したような気がする。

彼女は自分の心をさらけ出すことが不得手だ。その彼女が、青磁のためにやって来てくれた。そして、炎熱を気に懸ける。

その一方で、青磁が他の者を部屋に入れているのかもしれないと思う彼女の心中が、彼をせつなくさせる。

そんなことはないのに。

それでも、彼と彼女は互いだけを見つめていると言い交わしていない仲なのだと思い知る。

「オレは君だけだよ」

青磁は心を込めて、彼女に言った。

自分の中に何が渦巻いているのか、彼女は気がついていて。それは青磁が指摘することではない。反対に、安心させたかった。

彼が彼女以外には、誰ともこうするつもりはないことを、知って欲しかった。

「そんなに器用な人だとは思っていない」

彼女が否定的な言葉を使う時は、決まってその逆を述べているのだ。

器用に相手を選ぶ人間であるのなら、青磁という人物に近付かなかった、と彼女は言ってくれているのだと思う。

彼女は彼を軽く睨んだ。

「なぜ、そんなに嬉しそうなの？」

彼の体調が良くないから、彼女はやって来たというのに。

彼がひとりでも困らないように、時間を作って彼女はいろいろ準備してきたというのに。

どういうわけか、まったくそれらのことが生かされそうもない状況に気がついて、彼女は彼の身

体の下から逃れようと努力しはじめる。

「・・・少しくらい、わかれよ」

彼はそう言うと、彼女の頬にキスをした。

先ほどの返礼だ。

けれども、そのまま終わらなかった。

彼女の頬を滑りながら、今度は耳朶や顔の輪郭に唇を押し当てる。

彼女の顔が熱くなっていくのがわかった。

何が始まるのか、そこではっきりと悟ったようだ。

鈍感なのか鋭い感性の持ち主なのか、まったくわからない。

▼27

彼女の安らかな寝顔を見つめながら、彼は彼女に毛布をかけなおしてやった。ゲストルームから持ってきたものなので、幾分乾燥しているものを選んだつもりであった。心地好い肌触りに、彼女の口持ちが心なしか緩んで微笑んでいるように見える。

青磁のベッドは湿りが抜けないままに冷えてきたので、このままにしておけば、彼女の方が失調してしまう。

彼はシャワーを浴びて汗を流し、もう一度解熱剤を飲んで水分を摂った。

かなり熱は引いてきたようであった。

しかし、違う熱の燻りが彼を動かしたことによって彼女が疲弊して眠り込んでしまっている。

体調が悪いのに、何をしているの

彼女はそう言って彼を窘めたが、それでも拒絶しなかった。

彼女の肌が、彼をいやしてくれた。

失調すると添い臥しが恋しくなるというのは本当だと思った。

しかし誰でも良いわけではない。幼い時には、家族の温かさが恋しかったし、今はただ、彼女が傍に居るだけで満たされる。

愛があれば何もいらぬという綺麗事を彼女に囁くつもりはない。

彼は、いつかマクドゥガル家に戻る身だ。でも、その時には彼女と一緒に来てくれることを願い続ける。

炎熱というのは、願いなのかもしれない。

失調している時の青磁は我が侘だと言った彼女はそれでも彼を否定しなかった。彼が心の底で何を抱えているのかを知っているからだ。

そして、彼が素直に思っていることを口にする時に、他の誰も寄せ付けず彼女だけに吐露したことが、彼女をここに留まらせた理由になった。

他の誰かに、彼の秘密や孤独を簡単に明かすほど、彼の昏い思いの根は浅くない。

彼女の素膚を柔らかいブランケットで包んでやると、彼は再びベッドに潜り込んだ。身ぎれいにして着替えたものの、再び湿ったシーツに身を横たえる。しかし、不快感はなかった。彼女がそこに横臥しているからだ。

持ち運んだミネラル・ウォーターは既に空になっていた。そして時間もかなり経過している。今日はこのまま彼女を泊ませようと思っていた。

こういう時に、スペアキーを持たせるのではなかったと少しばかり後悔する。

彼の知らない間に出て行かれては困るので、毛布を取りに部屋を出た時に、扉の施錠を改めておくことにした。

オートロックで完全管理されていたが、在室時に小さいこどもが勝手に徘徊しないように、チャイルドロックが採用されている。

彼の身長の高さ上にある小さな施錠であったが、これを使用するのは今回が初めてのことであった。

彼女が知ったら、相当憤慨するだろうなと思ったものの、彼の眠ってしまっている夜更けに帰宅すると決めて行動されることに比べれば、少しぐらい叱られても構わないと思った。

大切な者を閉じ込めるような行為であるのに、密かに心が躍っていた。

彼だけの彼女として独占できるからだ。

肌を重ね合うだけではない関係を望んでいる。青磁は、彼女をもっと知りたいと思った。

自分の予定を変更してまでやって来てくれた彼女に、さらに無理をさせてしまったと思う。彼女を自分の胸に引き入れてしまった後は、いつも思う。これが彼女は望んでいないことなのではないのだろうか、と。

しかし流されるような人でないことも知っている。

それでも・・・青磁は安心しきれない不安を新しく生み出してしまう。つい先ほどまで彼女を独り占めしていたというのに。

彼ができることと言えば、彼女にこたえを早急に求めないということだけ。

待つ、と言いつづけているだけ。

それでも、彼女はこうして彼に少しだけ彼女そのものを見せてくれる。

彼は彼女の汗で濡れた髪に指を差し入れた。

彼もいつにない倦怠感を感じる。疲労していると実感した。

そういう時ほど、彼女が恋しくなるものだと知った。

誰でも良いわけではない。彼女だけしか欲しいと思わない。

それをうまく伝えることができずに、こうして彼女を引き留めるためだけに腐心する自分は、マクドゥガル家の男子であるのだろうかという疑問に思うこともあった。

しかし、そうなのだろうと確信めいたものもある。

顔容が、先祖に似ているからというだけではない。ひとりの人を愛しすぎて壊してしまうのが、あの家の男の愛し方だ。誰に教わるわけでもないのに。いや、誰にも教わることができないから、そうになってしまうのだろう。

彼女が自分のためにしてくれたことを考えると、青磁は胸に込み上げるものを感じる。運命だとか必然だとか、そういう言葉で片付けられない出逢いを果たしたとを感じるから。そして自分の状況に酔いしれているばかりではいられないこともわかっていた。これは永遠ではない。この状況は、ずっと続くわけではないのだ。彼は毛布に顔を埋めた彼女の様子を見つめながら、彼女の身体に自分を寄せた。頭痛を感じたし、悪寒も残っていた。でも、それでも。このまましばらくこうしていたかった。

彼女の髪を撫でながら、彼は呟く。

誰に言うでもなく、自分自身への言葉だった。

「・・・マクドウガル家の紋に、朝顔を入れる。オレの代で全てに決着をつけることはできないけれども。でも、それだけは為し遂げたいと思っている。

あの家の謎を解くのは、オレと君だ。もう、大体わかっているんだ。けれども、それを動かすだけの力が、今のオレにはない。ずっとあの家から逃げるようにして過ごしてきたから。

・・・突然戻って、いきなり当主などは務まるわけではない。

だから。

オレにはオレを信じてくれる人が必要だ。

それからオレが信じ抜けると思える人も。

何があっても、必ずやり遂げる。君の人生を変えてしまうのはわかっている。でも、きっと幸せにすると約束しないかわりに・・・オレはきっとやり抜くから」

自分への言葉であった。彼女に直接向ける気はない。こうして自分だけの思いをぶつけても、彼女は戸惑うだけだ。それに、彼は彼女が彼を拒んだとしても、それでも帰らなければならない。諦めることはできないが、あの場所でやらなければならないことがある。

恋を選ぶことができるのであるならば、どれほど簡単であっただろう。

こうして彼の炎熱を心配してやって来てくれる彼女のことを愛おしいと思う。壊してしまいそうなほどに・・・融合してしまうほどに激しく焔を燃やしてしまうほどに。

彼が横たわった時の震動で彼女を起こさないように、彼は静かに身体を伸ばした。

枕が変わると眠れないという神経質さを見せる彼女が、彼の寝台で睡りに堕ちている。

静かな寝室で、彼はひとり心を固める。

彼女のことを心から愛しているが、彼女がどんな決断をしてもそれを受け入れるだけの度量を育む必要があった。

これしきの発熱で、心を失いそうになるほどでは彼はまだ・・・まだ帰れないと思った。

帰りたいと切に願うことはない。できれば、戻りたくない場所だ。けれども、彼だけにしかできないことがある。

この後、青磁と同じような気持ちになる者を産み出さないために。

「・・・それが青磁の本音？」

ぎくりとした。

彼女の髪を梳いていた自分の指が止まる。

彼女が起きているとは思わなかった。

しまった、と思った。決して告げるべきではないことを、言ってしまったから。

「建前ではないだろうな」

彼はすかさずそう答えた。

軽く受け流して終わってしまう会話になるように祈りながら、彼女の顔を見下ろすと、青磁は彼女の瞳が毛布の中からはっきりとこちらを見ていることに気がついた。

それから優しく囁く。

「君がオレの朝顔であることには変わりがないよ」

こたえになっていないとわかっている。それでもそう言って話を終わらせるしか彼には思いつかなかった。

「・・・青磁は失調すると我が侷になるけれども、素直になるのね」

思うことを何でも言う事を我が侷と言ひ、素直であると言う彼女の区別の方法に、彼は苦笑いを浮かべた。

「今日は熱に浮かされているから、言っていることはあまり気にしなくても良いよ」

「本当に？」

彼女がそう言って毛布から顔を出した。彼の寝室にあったものではないと気がつくのと、小さな声でありがとう、と言った。彼に気を遣わせてしまったことを詫げる言葉だった。

▼29

「本当だよ」

彼の声は幼かった。強烈な睡気が襲ってきていた。

体温が下がりはじめたらしい。

眠ってしまう前に、彼は彼女に忠告した。

「今日はもう遅いから・・・オレが眠っている間に帰らないでくれよ」

それだけ伝えれば十分だった。彼女はこれで万が一、帰ると言っても彼に黙って部屋を後にすることはないだろう。

抱いて確かめたのに、彼女はするりと抜けて行ってしまふ。

そういう儂さを持っているのに、とても強い人でもあった。

今日の遅れを取り戻すために彼女がどれほどの時間を捻出するのだろうかと思うと、彼女を崇拜

してやまない。

「頼むから・・・君を送らせてくれ」

「それなら、早く治して」

「うん」

彼は幼い返事をした。彼女が言っているのは最初から同じであった。

「泊まって行けよ」

彼女は毛布の中で身動きしながら溜息を漏らす。

「青磁のことだから、帰れないように細工をしたに違いない」

言い当てられてどきりとするが彼は平然を装った。

「さあ・・・何のことかな」

彼女を閉じ込めてしまうことができるのなら、最初からそうしているよ。心の中でそう呟いた。

彼女は微睡んでいた途中であつたらしい。声音ははっきりしていたが、動作は緩慢であった。

「・・・こうして一緒に居るのは、とても良いものだと思うよ」

「それを伝える必要があるのは、私ではないのでしょうか？」

彼女の言葉に、また彼は返答に詰まってしまう。

彼が何に対してそれほど憂えているのか、彼女は知っているようであった。

「予行演習」

「私で練習しないで」

青磁と彼女は同時に笑った。

彼が家族に・・・自分の失調時には、家に伝わる水菓子を欲しがったことを伝えるのは、遠い先のことではない。

また、焼き菓子も時折欲しくなることを、いつまでも言えないままで終わらせることはないのだろうな、と思った。

彼女と一緒になら。彼女と一緒にであるのなら。

それもすぐに実現できそうなことに思えた。

彼はもう一度、尋ねた。これで彼女がノーと言えば引き下がるつもりだった。

「・・・今夜は傍に居て欲しい」

「今夜だけ？」

彼女の返答に、彼は声を失った。狼狽していると自分でもわかる。

薄い瞳の側の頬が痙攣した。あまりの驚きで。

「それは・・・」

彼女はそれ以上言わずに、寝返りを打って向こうを向いてしまった。

しかしすぐに呆然としている青磁の方に向き直り、顔を顰める。

「このシーツ、交換しましょう。このままだったら、青磁の身体が冷えてしまう」

熱があるから、冷やさなければいけないのに。

彼女はそう言って毛布を身に纏いながら起き上がった。

綺麗だ、と思った。

どんな豪華な服を纏っていたとしても、今の彼女の理知は決して反映することができないだろうと思われた。

内から出る美しさというものが備わっている人だと思った。どこまでも優しく、どこまでも強い。そういう人物が、マクドウガル家には必要だった。

たとえ、誰もとわかり合えないとしても、諦めてしまうのではなく、誰もと心を通わせたいと思いつけるような、そんな人物が・・・。

今夜だけではない。これからもずっと・・・

彼にそう言わせないために、彼女が身を起こしたのだと思うと、それ以上はこの次以降に備えておいた方が良さそうであった。

▼30

「・・・いつか、誰かや何かのためではなく自分のために・・・」

彼はそこまで言うと、端正な口元を引き締めた。

彼の眼病が完全に治るとは限らない。

けれども、確実に変化していることを感じる。

もう一度、あのマクドウガル家の敷地に広がる風景を描くことができるだろうか。

こうして、炎熱に浮かされた時のことを、話す事が出来るのだろうか。

彼を思い遣る彼女の前では、彼はいつになく自分のこれからのことを語りたくなってしまう。

なぜなのだろう。どうしてなのだろう。

そんな神妙な顔つきをしている青磁の前で、彼女がふっと淡く微笑んだ。

こういう表情をしている時の彼女には、何かが宿っているのではないのだろうかとさえ思えるような神々しさがあった。

多くを言わなくても良いのだ、と彼女は言いたそうだった。

その先を促すこともなく、目を伏せて、辛抱強く彼に繰り返す。

はやく良くなって欲しいと思うのは、彼女の心からの気持ちであったから。

「ゆっくり休んで。私は・・・あちらの部屋を貸して貰うから」

「駄目だ」

青磁は嗤う。気怠い睡魔が襲ってきたが、それでも彼女に向かって魅惑的な笑みを浮かべながら、頭を振った。

「今夜も、一緒に居てくれるだろう？」

彼はそう言って彼女に更に近寄った。

起き上がろうとしていた彼女は青磁に阻まれて、困った顔をする。

何と答えて良いのか思案しているようだった。

「それでは青磁が治らない」

「いいや、君と一緒になければ治らない」

呆れた顔をする彼女に、青磁はくすりと声を漏らして笑った。

こうして、どんなに苦しい時でも微笑みをやり取りする相手がいるからこそ、炎熱を消し去ろうと思える。そう思った。

彼女がますます呆れた顔をしているので、彼は心の中で呟く。

単なる発熱なら、ひとりでも治せるけれども・・・そうではない炎熱は、ひとりでは治せない。

けれども、それは声に出さなかった。いつか、彼女がイエスと言った時に言おうと思った。

失調を理由に彼女にたくさんのことをねだってしまったから。

彼は気恥ずかしさと後ろめたさの中にある喜びを見つけ出すことで満足することにした。

「せっかく君が用意してくれた食事をそのままにしてあったことを忘れていたよ。何が合うかな。ワインか、それともブランデーかな」

「何を言っているの」

彼女が青磁の身体を軽く叩いた。病人が、何を提案しているのかと彼女は本気で怒っていた。

気怠い睡気がまだ青磁を包んでいる。

眠るより、こうして会話していたかった。

そして、彼女と過ごす夜はどの夜も素晴らしいもので・・・そして彼の家のことを少し語って聞かせてみようと思った。

彼女はどんな感想を述べるのであろうか。

彼は炎熱に苦しんでいるはずなのに。

そして気怠い身体を横たえたいはずなのに。

汗で濡れた不快なベッドの上でいつまでも、こうして彼女と語りあっていたい気持ちになった。

青磁の朝顔となる人は、彼を窘めつつも、持ち込んだ食事を温める支度をすると言った。

そして彼にそれまでは休んでいるように、と厳命する。青磁に命令できるのは今のところ・・・彼女だけであった。

どうにも擦ったいような、嬉しいような、それでいてこの瞬間を決して忘れてはいけないのだという厳粛な気持ちが、青磁の炎熱を取り払ってくれるまでにはそれほど長い時間はかからないようである。

青磁・マクドゥガルはそんなことを思いながら。

乱れた髪のみままで起き上がろうとしている彼の想い人の髪を、両手で整えてやった。

炎熱の乗る、大きな手の平を受けて、彼女は目を閉じて大人しくされるがままになっていた。

ひとりじゃない。

そう思える瞬間であった。

もう、炎熱に魘されながら孤独を味わうこともない。それを考えると、この状況がまた訪れないかと考える。

彼女に知れてしまったのなら、大変に叱られるだろうな。

そんなことを思いながら。

彼は、今日は彼女とどんな話をしようかと考え始めていた。

考えなくても、ただこうしているだけで良かった。

それが、彼の焔を鎮めてくれる。

傍にいて欲しいという彼の願いを受けて、彼女がここに居るから。

それから。

今夜だけで良いのか、と言われたことに対して彼はまだ回答していない。

今夜だけで良いわけではない。わかりきっていることなのに。

ああ、まったく厄介な焔を身に受けてしまった。

そう思った。

けれども、少しも嫌だとは思わなかった。

むしろ・・・この炎熱がずっと続けば良いのにとさえ思えてくる。

まだ完全に復調しているわけではないが。青磁は、彼女の髪に指を埋めながら祈るような気持ちで心の中で呟いた。

彼の朝顔は、いつも淡く微笑む。それが、彼を笑顔にさせる。

それだけのことなのに、それだけのことがただ、愛おしい。

青磁は、彼女の腕を取り、まだ身支度が調っていないと言い募る彼女の身が起きるように手を差し伸べる。

先ほどまで感じていた、睡りへの誘いを受けるわけにはいかない、と思った。

・・・今夜は長くなりそうだな、と思った。

(FIN)

*01

青磁・マクドウガルが濡れた体に吸水性の優れた素材の上着を羽織った時に、大きな溜息がプールサイドの縁沿いに漏れた。

均整の取れた彼の体が隠れてしまうことを惜しむ歎息であった。

ゆったりとした、水を含んでも体に貼り付かない布地が皺を刻み彼の体の温度が失われていくことを防ぐ。それは同時に、彼の整った引き締まった肢体を惜しげも無く晒す時間は終わりだと告知することと同じだった。

幅の狭い腰、伸びた長い脚、背中も胸も、肩から伸びる腕にも無駄なものはひとつも存在しない。水は彼の肌から、いとも簡単に離れて行く。

若いとか恵まれた体軀であるという以上に、彼がこの場にいる誰よりも特別な存在なのだと、彼が何も言わなくても全身が語っていた。

しかも、彼の顔立ちは誰かに似ていると言わしめることができない程に忘れることのできないほど印象的な顔立ちであった。

気の強そうな眉に、豊かな髪。

通った鼻筋は民族を忘れてしまうほどに貌の中で完璧な比率を誇っていた。

かつて、恋した人に「生意気だ」と言われた唇は情感豊かで真珠色の揃った歯を見え隠れさせる。

そして彼を際立たせているのは、形の良い耳に光る一点ものとしてすぐにわかる麒麟の模様のピアスと、片方だけ薄い瞳であった。

吸い込まれそうな、それでいて抗えない魅力に満ちた瞳で、人によってはそれを「紫電」と呼ぶ。

片方だけ薄いということも人を惹きつける。それでいて、彼はまったくそのことを後ろめたく思わないどころか、彼であることの証明のようにしていた。ひけらかすのではなく、隠し事はしないという心持ちでいるように努めているらしい。

眸子の鋭い青年は、ここに長く居る者ではない。

そう感じるからこそ、皆が彼に瞠目するのだ。

奇蹟のような人物であるが、彼はそういった視線をまったく気にしないでプールサイドに無造作に置いてあったロングタオルに手を伸ばし、そして自分の髪の湿気を除去するためにそれを被って鋭い紫電を一瞬だけ隠した。

彼の視線が怖いという者もいれば、たまらない魅力だと言う者もいる。

けれども、彼のことを、ただひとりの普通の男として見る人物に、彼はすっかり心を奪われて、彼女だけしか見つめることができなくなっていることも、誰も知らない。

水が滴る度に、周囲の溜息が増えて行く。

その青磁が、タオルを取りにリザーブしてあったビーチチェアとテーブルに近寄った時。

二人がけのそれに、誰も何もないことに気がついて僅かに眉を顰めた。

普段は前髪を下ろしているが、水濡れて秀でた額が露わになった彼の貌が一瞬陰る。

そこには、確かに人が居た気配が残っていた。

青磁はここにひとりで来たわけではない。

日差しの強い、雲一つ無い青い空の下で、彼は膝丈の水着から雫を滴らせながら唇を引き結んだ。

「おい・・・」

彼が連れてきたのは、彼の最も愛する、彼の朝顔だ。マクドゥガル家の男が、女性に向かって朝顔になって欲しいと言うのは・・・生涯の伴侶となって欲しいと求婚するときだけだ。

彼の家では、朝顔、と表現するときは永遠の女性を意味することもあるが、同時に禁忌の女性・・・つまり人生を狂わせる相手という意味も含まれている。

あのフランスの華が運命の女性のことをファム・ファタルと言うように。

大きく影響する人のことをそのように呼ぶことがある。けれども、青磁より前の数代は、それらの禁忌を避ける傾向にあった。それは、マクドゥガル家の当主の就任期間が異常に短いままに代替わりすること、そして男子は出生率が異常に低く、青磁が次の代の継承者と決まるまでに、相当の悶着があったことを考えると・・・青磁は、それでも自分の愛する人を「朝顔」と言うことを躊躇ってしまうような憂事を多く抱えている。

古くさい家系のしきたりであるかもしれないが、それでも護らなくてはならない理由がある。

彼が陸に上がるのを待っていたのかのように、数人が駆け寄ってきて、足場の悪い場所で彼に話しかけてきた。

ひとりなのか、ここに宿泊するのか、などと矢継ぎ早に質問する。

確かに、地元のものでなければ日帰りするには難しい場所にあった。

夕刻の海が正面に見えて、かつプールも整備され、各部屋には海に面した部屋風呂が設置され、専用のビーチからシュノーケリングも楽しめる。ゴルフ場もテニスコートも完備されているし、室内でスカッシュやフットサルなどができるに十分な場所も確保されていた。

バカンスを愉しむには十分すぎるほどに完備された場所であったが、それ以上に、場所を確保するにも一苦労するという事で有名な場所であった。

それが、大きすぎるプールのコースのうちのひとつを終日独占し、それでもなかなか姿を現さない予約客はどれほどの特別な滞在者なのだろうかと周囲の者が噂に没頭している最中に現れたのが、青磁・マクドゥガルであったので、皆は騒然とし、連れ立っていた者が彼に見惚れてしまっている様を面白くなさそうに呆然としている者の嫉視を浴びながら、青磁は悠然と自分にだけ割り当てられたコースを泳ぎはじめたのだ。

けれども、彼が現れた時には連れ立つ者が居た。

気恥ずかしそうに俯いたまま、他の者の好奇を避けるようにして現れた若い女性であった。

彼は特別出口から彼女と現れると、彼女の肩を抱きながら颯爽と現れた。

まるで、彼女の披露目の場であるかと宣言するかのよう。

しかし、当人は・・・彼の腕に抱かれて、大きなバスタオルに身をくるんだ人物はただ、首を竦

めて彼の案内すら邪魔そうに困ったような表情を浮かべていた。

*02

彼女は少し離れた、フリースペースに座っていた。

手には、防水加工を施したシート端末を持っている。

タブレットよりも更に薄型で、色彩が鮮やかなことで話題を呼んでいるものであった。

有機ELをパネル化した開発技術を転用したもので、限りなく透明で曲がる光源を使ったものであった。彼はそれを見ると、彼女が彼の思惑の通りにプールで水と戯れることはしないのだな、と予測する。

元々、彼がいつも彼のマンションで会って、周辺を歩き回るだけではなく、どこか別の場所に行こうと言ったことが始まりであった。

同性の学友達と海に行ったところ、相当楽しい時間を過ごしてきたらしい。そこに彼女が居なかったことがとても残念だと土産を渡しながら、彼は今度は彼女とふたりだけで出かけたと言った。

彼女は少し困ったような顔をして、今度ね、と言った。

彼が夏の長期休暇を利用して、彼の実家に帰国することを知っていたからだ。

もうすぐその日がやって来る。

日本では、戻ってくる頃には遊泳できる状況ではなかった。

海に行きたいのであれば、国外の南の方に旅行すれば良い、と彼が目を輝かせて提案したが、彼女はノーと言った。彼は学生で、実家から戻ってくればすぐにこれまでどおりの生活が始まる。それを返上して遊びに興じるなどとんでもない、と彼女が反対したところ、日帰りなら良いと言う交換条件になってしまい、彼女は青磁とともに日帰りで出掛けることになったのだ。

宿泊や交通にかかる費用は出す、と青磁が言ったが、彼女はそういう浪費は好まなかった。

そして、思い立って行動するより、計画的に実行したいのだと婉曲に断りの話をされて、青磁が代替案を持ってきたのが、このリゾートホテルでの休暇だった。

ここはフランスのホテル王が経営するホテルの系列であった。

未成年は入ることができない。5名以上の団体も入れない。ドレスコードがあり、静寂を破る者は即座に退去を命じられる。

そういう瀟灑な宿泊施設がひとつくらいあってもよいものだから・・・とホテル王は豁达に青磁に言ったが、それは計算された進出であることもわかっていた。抜け目がないが、どこか少年のようなその人と青磁は浅からぬ縁で結ばれている。

少ない客数と完全予約制の割合が他の宿泊施設よりも高いが、最高のサービスを受けられるオーバージュとしても評判の場所だった。しかも、今夏はプールを改築したので、更に人気は高く、そして彼女が予約しても来年までは確保できないであろうと思われる場所であった。それを、青磁がいとも簡単に「予約が取れた」と言ってきたので、彼女は青磁が偶然に用意できたものではないのだということを知り、いつもよりも更に無言になってしまったのである。

彼女にはつてで、予約が取れて、かつモニター料金で良いのだと言った。

氏名登録もしたのでキャンセルするにも費用がかかると言われると、彼女は固辞する理由がなくなってしまった。

狭い追いつめ方だと青磁はわかっている。けれども、こうでもしなければ彼女は彼と一緒に遠出することもない。

「泳がないの？」

青磁は彼女に向かってそう言ったが、彼女は陽光から逃れるようにタオルを羽織りながら、僅かに唇を引き締めた。

「先に泳いでいて、気を悪くした？」

彼は彼女に囁くように言った。

いいえ、と彼女が首を横に振る。

「先に行っていて、と言ったのは私だから」

彼はほっと顔を綻ばせた。彼女の機嫌を取っているわけではないが、手に取るようにわかりやすい感情の起伏の人、ということではないので青磁には推し量りかねるところがある。

それでも、面倒だとか厄介だとは思わない。

彼女が彼だけに見せる特別な面があると知っては、特に。

青磁は濡れた髪から小さな雫を落としながら、彼女に言った。

「本当は気が進まなかった？」

今頃、そのように聞いても仕方が無いと思っているが、それでも彼女の浮かない貌を見ていると、青磁は手放しでこの状況を喜ぶことはできない。

それでも、彼は見知らぬ場所で彼女を独占できるということに、心を弾ませていた。

どうにもならないほどに好きになってしまった。他の者が嗤っても構わないと思うほどに。けれども、彼女は青磁の生涯に必要な人物であった。

由緒正しいマクドゥガル家の継嗣でありながら、心を浮つかせるなどと、と眉を顰める者たちもここには存在しない。

羽目を外すということもなかったが、こういう様子の彼女を他の者は誰も知らないのだと思うと・・・どうにも気持ちが安定せずに昂揚してしまう。

「自分で後悔を増やすようなことはしない」

彼女はそう言って、肩を持ち上げる。

青磁は、彼女のこのような考え方が好きだ。

嫺やかであるが、風に流されるような人物ではない。

彼女の精神は実に強靱で、青磁にできえノーと言い切れる強さを持っていた。

彼の視線は紫電と呼ばれ、見る者によっては抗い難い目付きなのだと言う。

彼はそれを気にしない彼女の言葉に耳を傾けるようになって、随分と時間が経過した。

かけがえのない時間が過ぎていく。無為ではない時間。彼女は彼の肌に最も近い者になり、彼は彼女の心に一番近いと思えるようになった。けれども、彼女はこうして時折彼を不安にさせる。

引かれた距離を感じるからだ。彼女に夢中になっていると態度でわかるだろう。けれども、彼が

彼女の何もかもに盲目的に従うのであれば、彼女はきっと彼の元から去ってしまうことも承知していた。

自分の中にある、譲れないものがあるから・・・彼は、マクドゥガル家の謎を解き明かし、耳に光るピアスの刻印を変更することを目指している。

誰に望まれなくても。誰に阻まれようとも。

恋をしてしまった。恋に堕ちたらそれが恋なのだ。

それを免罪符の代わりに使うつもりはない。けれども、抗えない力に、時々戸惑う。

これほどつれない人を、愛おしいと思うのは、彼の錯覚なのだろうか、と思う。

そう信じられるのなら、どれほど楽であったのだろうか。

この国に滞在している時だけの、割り切った関係であるのなら・・・彼は、これほど長い時間ここで過ごそうと思わなかった。

抱きしめたまま、マクドゥガル家の敷地に流れる河に沈んでしまいたい。

そう思うこともある。

実際、あの河には氾濫の度に底に沈もうとする男女が絶えることはない。

あの土地には、狂気が流れている。登を狂わせたように。静流の妻を狂わせたように。外からやって来る者はすべからくどこかを失っていく。

青磁はだから、彼女と水で戯れることを積極的に提案していなかった。この国では、年間を通して、どこでも水に潜れる。

様々な景色や季節を彼女と分かち合いたいと思っていた。

ようやく・・・外出して遠出することを承諾してくれた彼女は不機嫌そうに、水から離れている。

青磁の質問に、彼女は貌を上げて微笑んだ。

「まずは青磁が楽しむことから始めなければ」

彼女が居てこそなのだと言おうとしたが、彼は形の良い唇を引き結ぶ。水によって温度が失われた肌は、彼女の体温が恋しいと訴えている。けれども、必要以上に彼女に添わせることはしない。

それは彼の誇りであると同時に、彼女への誠意であった。好きになってしまったことは否定しない。けれども、どこが好きなのかと聞かれれば、どこもかしこも好きなのだと言ってしまうのに言えない雰囲気は彼女には漂っていた。

それが何故なのか、青磁は知っている。

彼女は・・・これがかりそめの夏なのだと思っているのだ。

夢のように過ぎていく夏で、来年には同じ事は起こらない。そう思っているから、彼女はこうしてやって来ているのに、他の者たちが見せる恋人同士の享楽に溺れることはないのだ。

そしてそれは非常に目立った。この場所でひとり醒めた顔つきで佇んで居る彼女は、まったく他の者に影響される気配はなかった。場の雰囲気を読めない人ではないが、流されることも呑まれることもない人物であった。だからこそ、青磁は彼女を生涯最後の人にしようと思ったのだが。

*03

彼女はこのような人目の多い場所で、青磁と行動することを好まない。

それは承知していたことであった。

彼女は青磁のことを恥ずかしい相手と思っているわけではない。逆だ。

彼女が、彼と一緒に居ることを恥じている。

一度だけ、それとなく聞いたことがあった。

彼のことを恥じているのか、と。

彼女は違うと強い口調で言い切った。

彼女がなぜそのような顔をするのかわからない、と言う青磁に、彼女はただ微笑むだけであった。

何も言わない。青磁が聞いても、彼女は何も答えない。

他者を観察することに長けている人であるのに、自分自身のことは上手に表現することができない彼女の不器用さを愛していた。

だから青磁は、好まないことを積極的に取り入れることはしていなかった。

極力、大勢の居る場所を避けて外出するようにしていたし、彼女が年齢や経験に対して不相応だと言いつつような時間と金品の浪費は避けた。度しやかな彼女は、他の皆が喜ぶようなことでは喜ばない。

ここ数週間ほどお互いに多忙でまとまった時間が取れていなかった。だからこそ、こうして時間を捻出したのだが、それは彼女も同じだと思う。

無理を言って時間を空けて貰ったのは青磁の方であったが、彼女もまた多忙を極めているはずであった。詳細な予定を青磁は知らない。それで良いと思っているのではない。今は、まだそれで良いのだと思っているだけだ。

容易く届くような人であるのなら、青磁はこれほどまでに心惹かれなかったであろう。しかしながら、彼女の気持ちを知りたくて、少しでも距離を縮めたくて、連れ出してしまった。

部屋で本を読みながら、話を交わし、時にはベランダに設置した風除けの中に端座する草花たちの成長具合を確かめることが何より楽しいようであった。彼女が何を好み、どんな時間を過ごしたいのか最近になってようやく感じ取ることができるようになった。

しかし、青磁はもう一歩だけ先に進みたいと思っていた。

今日、天気良ければ夜には満天の星が眺めることが出たろう。

だから、今日は晴れれば良いと願っていた。

これを下心、と言えればそれまでであった。

青磁は、彼女と今日は宿泊するつもりでやって来た。

彼女は日帰りであると信じているけれども。

「君は楽しんでる？」

濡れた髪の間から、青磁が瞳を覗かせて彼女を見ると、彼女は目を伏せたまま言った。

「とても」

冷たいのか、素っ気ないのかわからない。

けれども、彼女はとても優しい人であることも、青磁は知っていた。強くて、慈愛があり、そしてどこに居ても自分のことだけで手一杯になることはない。

惚れたからそう見えるのだ、と言われることもあったが、青磁はそう思わなかった。

彼女は、彼女なりに考えてくれている。

それがわかるからこそ、彼は待てるのだ。

「水には入らないの？」

「後で」

彼女が熱心に読み耽っているのは、青磁が貸してやったシート端末であった。薄い鮮やかな色から淡色まで細かく指定できるので、青磁の眼に負担のかからない端末であった。

彼女の持っているものに興味を持った者が何人か覗き込んで行ったが、すぐに傍らの青磁の風貌にぎょっとしたような驚いた顔をして足速に立ち去ってしまう。

他の者の視線に晒すために彼女を連れてきたのではないが、彼女が人に注目されると、どこかすぐったい気持ちになってくる。

まったく矛盾する気持ちについて、フランスの華であれば的確な表現をしてくれるのだろうか。

そこで彼女は顔を上げた。

どきり、とした。

青磁は微笑んでいた端正な貌に、次にどういう表情を浮かべれば良いのか忘れてしまうほどに、今の彼女の表情は彼を惹き寄せた。

普段、彼女は露出の多い服装を好まない。

けれども、プールサイドでチェアに座る彼女は、いつも見る彼女と違っていた。

そうだった、と思った。

彼女のパイル地のフード付きの上着を着ていた。

そして先ほど羽織っていたタオルを膝の上に乗せている。

まったく彼女の肌が見えないか、というとそうではなく、そのタオルの下から覗く素足は、彼女が水着を着ていることを青磁に教えていた。

覆いそこねてしまった彼女の大腿からちらりと淡い色使いで、細かい花柄の布地が見える。遠目で見るとドット柄に見えるが、近くで見るとそれは小さな円形の花だった。彼女のような東洋人にはとても良く映える色であった。

そして彼女の爪先は、僅かに色が入っており、日に晒されて乱反射している。細かい粒子入りであった。それで、彼女も今日は特別だと感じていることを知って、青磁は、また微笑んでしまう。

そして、陽光の下で見る彼女の裸の足に、青磁は眼を逸らす。

目のやり場に困るほどに大胆な格好であるわけではない。彼女はロッカールームに入る前に念押ししてきたのだから。

「期待しているよ」と言った青磁に、彼女は手の平で腕を軽く叩くと振り向くまでもなくロッカールームに消えて行ってしまった。

本当は、見晴らしの良い部屋をチャージしてあったのでそちらで着替えさせれば良かったのだが、青磁の思惑の通りに行かないことを学んでいる彼は、何も言わずに共用の更衣室に彼女を連れて行った。それも全面改装されていたので、心地よく使用できることを事前に確認していた。

こういう外出は、はじめてではない。

彼女と付き合い出す前にも、幾度かこうやって出掛けたこともある。

恋愛もはじめてではないし、このように連れ立って遠出することもままあった。

それなのに、なぜなのだろう。大勢で出掛ける時にはなかった感覚だ。

彼ははじめて片恋の相手と出掛ける少年のように、何もかもに確認をし、昂揚して眠れない幼いこどものように、心が浮き立つ自分を認識していた。

そういう気持ちは、久しぶりのことだった。

確かに、彼は夢中なのだ。

「もう少しで読み終わるから」

彼女はそう言って指先を動かしながら、読み物に耽っていた。

青磁はその間、彼女の顔をじっと見つめる。

元々化粧気のない彼女であったが、今回は髪の毛を軽く結んで耳元が見えていた。彼女を抱いている時か髪を梳いてやった時にしか見ることでできない、彼女の小さな耳朶が見えていた。

テーブルの向かい側で、彼は足を組み、しばらく彼女のために無言の待機をすることに決める。

こういうことはいつもあることであった。

そして青磁も、考え中であったり手配中であったりした内容を彼女のためだけに中断すると、彼女は途端に不機嫌になった。

マクドゥガル家の夫人として、彼女に決めたいという話はすでに正式に申し入れてあったが、当の本人の承諾がなければまったく意味のないことだと言われて保留になってしまっている。今回の帰国も、そのことについて話し合うことになるだろう。反対しているわけではないし、彼が持ち込んだ彼女の身上というか釣書については、拒絶される理由もなかった。

何しろ、彼女には強力な後ろ楯があるのだから。

これが、最後の長期留学になるだろう。もう彼はそういう言葉で逃げることをやめた。あの家の不幸の連鎖を断ち切るのは自分であり、そのことによって何が起こるのかも、薄々察している。

その時には、彼女が傍に居て欲しい。勝手な願いであったし、彼女のことをまったく無視した願いであることもわかっていた。

だから、説得するための時間は惜しまない。

それでも。

彼女のことは、条件が合致しているからという理由だけではない。彼女に愛をしてしまったのは青磁であったから。そしてその彼女は彼が望んだとおりの人であった。それだけではなく、彼女は青磁の目の前で彼が眼を細めてしまうくらい、素敵な女性になっていく。

すると、彼が想定していたよりも早く彼女は目線を上げた。

充実し満足した顔をしていたので、読了したのだろう。

「青磁、ありがとう」

彼女はそう言って、大事そうに自分の足元のバスタオルにそれを包んだ。

防水性があると聞いていても、やはり気になるのだろう。

先に泳いでいてくれと言っていた彼女が青磁の視線を感じて、唇を閉じた。

「何か、飲む？」

「まだ必要ない」

彼女の言葉が、最近理解できるようになった。

これは断りや拒絶ではなく、後で飲む、という意味だ。

日本語は奥が深いなどと苦笑するが、彼は外国人であるのになんかという域を超えて堪能であった。

。

そして彼女は顔を上げると、彼女と同じ様に上着を羽織っていながらも胸元が開けている彼の姿に今さらながらに気がついたようで、僅かに顔を赤くした。

「何だよ、見慣れているだろう？」

「青磁」

彼女の陰を含んだ視線も、今日は青磁にとっては甘い棘でしかなかった。

*04

彼女がこういう冗談を好まないことも知っていたが、今日は緊張や緊縛が外れやすい状態にあるようだ。

その状態を、籬を外すと言うのだ、と彼女は言うけれども。

青磁は周囲の視線などは最初から気にしていなかった。自分の容姿はこの国の者にとってもよく似ているし、通名として使用している名前はこの国に馴染みの深い音で構成されている。そういう風にしろ、という家のしきたりのようなものであったので、あれこれ聞かれることにももう慣れてしまった。

うんざりした時期もあったけれども、今は・・・この名前が良かったと思っている。

何をどうしたい、という明確な目的があったはずなのに。

彼女に見られてしまうと、それらはすべてまったく整然としていない思い付きのように思えてしまう。

青磁は、彼女が退屈だと言うことを懼れていた。

彼女はそういう風に人を失望させるようなことは言わない。

だからこそ、青磁は・・・自分の願いのとおりに彼女が実行しているだけではないのかという疑いを捨てきれない。

彼が強く望んだから。

彼の束の間の恋愛に付き合っている・・・そう感じてしまう自分に迷いがあるのだと思った。

そういう弱さも含めて、青磁は彼女に剥き出しの自分を見せる。

彼も若かった。他の者と同じ様に・・・彼女に楽しんで欲しいと思う一方で、彼女と世間一般の夏を過ごしたかった。

彼がこの国で過ごせる夏は、数えるほどしかやって来ない。

それよりもずっと長い時間、この国で夏を迎えている彼女には、いつもの夏かもしれないけれども。

青磁には、これが最後であるだろうと思う季節であった。

彼は、自分の国に持ち帰る戦利品のように彼女を想っているわけではない。それをどうやって彼女に伝えるのか・・・言葉では無理なのだという結論しか出なかった。

だから。

彼女を、こうして遠出に誘った。

皆で出かけた時に、青磁の意中の人とは、その後はどうなったのだと聞かれた。皆がその話を聞きたがるが、青磁はあまり多くを語らないので、余程大事にしているのだな、という聴取結果で満足したらしい。

しばらく口出しはしないという暗黙の了解が得られた。

確かに、彼は誰にも心を飛ばすことはない。

派手やかな見た目よりも、ずっと真面目で誠実なのだという評価を得られて、青磁はこの国の者は善良で人の良い面を見ようとする傾向が強いのだ、と改めて思った。

しかし。

彼女も同じなのだろうか、と思うと不安という芽が彼の胸の中で一気に芽吹いてしまう。

何度摘取っても。それは幾度も芽を吹いてくる。

彼は待つと言ったし、それを曲げるつもりもない。

ようやく、彼だけには特別な面を見せてくれているのだと実感できるようになった。

・・・自分が不安の時には、相手も不安なのだ。

そう思うことにする。自分の中の問答だけで解決できない課題を、青磁は乗り越えなければならない。

「ビーチに出ることもできるし、このウェアのまま大抵の場所には出入りできる。何か、不足があるようなら、遠慮しないでくれ」

そこまで言ってから、まるで彼の家に招いた時のような口調になっていることに気がついた。

軽く嗤う。

青磁は、彼女の落ち着いた物腰とは反対に、かなり焦っている。

彼女には、モニター扱いだから、と言っていた。

かなりの負担を青磁が引き受けているのではないのか、と心配した彼女に。

必要ない、と言った。

嘘は告げられない。けれども、心配させたくない。

彼女は、マクドゥガル家の夫人になる人だ。

今後、こういったことで逐次、気に懸けてしまうようであったのならマクドゥガル家の当主とし

ての自分との間に、深い溝が入ってしまう。

だから、最初から見せておきたかった。

彼女は、贅沢ができるから、彼と居るのではない。

だから、彼女が良いのだ。

同じ様な環境で育った者の方が、こういうことに時間をかけないで居られることは承知している。

勝手がわかっているし、何より・・・マクドゥガル家のことを説明しなくても最初から基礎知識として得ていることが多いからだ。

彼女は青磁の話を知ると、少し顔を傾けて考えているようだった。

・・・彼女ではない者達と出かけたこの間の外出は楽しかった。

学友と学ぶことは、勉強だけではないのだと実感する。

結局・・・彼の生国でそれを味わうことはできなかった。

どこに行っても、彼の容姿とマクドゥガル家の名声と、そして彼がなぜ片眼だけ薄いのかということを知っている者はそれを尋ねないことによって知っていることを証明してしまっていたから。

聞きたいことがあれば青磁本人に聞けばよいのに、皆、そうしない。

彼の機嫌を損ねることを懸念していた。

人の一生には、谷もあれば山もある。

それなのに、何も傷つかないで、何も感じないで生涯を終えることは青磁にはできなかった。

いや、できなくなった。

茶色の髪のある人に出会って、それは人生の大きな部分を手放してしまっているのだということを知った。

人は、傷つくから、癒されることを知る。

失うから、愛して愛され、得ることの喜びを知る。

だから、彼は半乾きの頭に手を入れて、無造作に髪を散らした。

「君はどうしたいの?・・・オレは、君と一緒に居られればそれで良い」

「判断を人に委ねてはいけない」

彼女はそう言ったが、口調は柔らかであった。

いつもの・・・彼女であった。

どんな場面でも、どんな服装をしていても、彼女は少しも変わらないのだ。

「青磁はどうなの?私が、青磁の予定を狂わせてしまった?」

彼は言葉に詰まる。

何でもお見通しであったというわけだ。

彼が自分の心の中で巡らせていた、彼女との行動予定について彼女は把握してしまっているのだろうか。

いや、そうではない。

日帰りだと言ってやって来たから、時間を気にしていると思っているのだ。

「ここは知り合いのついでで予約できた。でも、その代わりに、施設を回って細かく気になったところを報告することになっている」

道中、差し入れを持たせてくれた「ambush」の店主は、青磁を見て髭面の中から満面の笑みを見せた。その眼は悪戯っ子のような目付きだった。

青磁の好む中国茶と片手で摂取できる軽食。彼らのためだけに作られたオリジナルの料理だ。何だか、息子の初デートにそわそわする親のような気持ちだ、と言っていた。

青磁は苦笑いを浮かべて、礼を述べただけであった。

いつか、あの夫妻もここに招きたいなと思った。

なにより、誠実で生真面目で礼儀正しいこの国の恋人達が寛ぎながらも礼節を重んじる場所ということで設定した空間だ。

あの人は・・・こういう時間を持ちたかったのだろうか、と思った。

フランスに住む、マクドゥガル家に縁の深い人物のことを思う。

近いうちに、彼女に引き合わせたいと思っている。

それから・・・青磁の耳に光るピアスを作らせた人物にも。

彼は哀しい半生を送ったが今は静かに人生を過ごしている。

彼女を連れて行きたいと思う場所は無数にあった。

そのうちのひとつが、この場所なのだと思う。

大きく呼吸すると、彼の胸元から腹部にかけて大きく筋肉が動く。

「オレは・・・君が喜ぶ顔が見たい。それだけ」

青磁がそう言ったので、彼女は聞いた瞬間に緊張を走らせた。

全身にそれが伝わって、彼女の膝上に、タオルに巻かれた端末を彼女が強く握りしめて、そしてそれは機器に負担をかけると気がつき慌ててスチールテーブルの上に置いたのを、青磁は黙って見ていた。

彼女には何度も好きだと告げている。

時には、愛している、と言う。

他の者には言わないことなのだと言って貰うために、彼はかなり自分を律して行動しているつもりであった。

そして、彼女とは何度も夜を過ごしている。それでも、彼女と恋人同士なのだと言い交わすことも認めて貰えないし、彼女の恋人なのだと言いかたに紹介されることもなかった。

人に認めてもらうことが目的で、彼女に恋しているわけではない。

しかし、これほど難攻不落の人の頑なな心の内にあるのは、一体どんな迷いなのだろうかと思う。

。

*05

「あまり気が進まなかった？」

直前まで、熱心にシート端末に見入っていた彼女に、青磁はそっと言った。

そうだと言って欲しくはなかったから、そのように尋ねた。しかし、彼女に「青磁がそう言ったのだから」と言われることが何より怖かった。彼女は自分の意志が働かなければ、このような場所には同行市内。

でも。

自分が特別なのだと強く実感したいと思うのに、彼女はいつもそれらの縛めを軽く躲してしまう。

自分は年齢相応の恋愛を楽しめていないと忠告されたこともあった。

でも、それでも良い。・・・それでも良いのだ。

彼女と一緒になら、それでも良い。マクドゥガル家の凝った想いが彼女を縛ってしまうかもしれない。だから、彼は待つのだ。自分の想いが、彼女にとって重すぎて、背負えないと言うのであれば、少し退くつもりであった。

でも、諦めない。

青磁は、彼女を最後の人にする決めた。もし、それが叶わなかったから・・・自分は、生涯結婚しないだろうと思った。養子を迎えることがあるかもしれない。

しかし、妻と呼ぶのはひとりだけ良いと思っていた。

真実の妻はひとりだけだったのに、かりそめの妻を持った誠次。

たったひとりの妻しか持たなかったのに、妻以外の人との子を持った静流。

遡れば、理由のわからない恋愛を受け入れた者が多すぎた。

だから、マクドゥガルの家は、たったひとりと決められないのだ、と言われた。フランスのアルディ家のように。

あの家と本当は縁続きなのかもしれない。

シャルル・ドゥ・アルディが突然、主治医として青磁の前に現れたことにも、何か理由があるのかもしれない。

しかし、マクドゥガル家の歴史には、空白と空欄が存在する。

それを埋めるのも、青磁の役割だと考えていた。

それから・・・もっと大事な使命があった。

だから、シャルル・ドゥ・アルディとので出逢いと繋がり・・・それから、その先にあった様々な苦悶は、必要不可欠であったのだと思うと、青磁は複雑名気持ちになる。それを包み隠さず、彼女に告げたのなら。青磁の心は軽くなるかも知れないが、彼女のこれからを曇らせてしまうことになりかねないと思った。

マクドゥガル家に必要だから、彼女を好きになったわけではない。

好きになろうとして近付いたのは確かであった。

埋められない空虚を埋めてくれるのは、彼女だけだと思った。

でも。

彼女はそれ以上の存在だった。

恋をするのではなく、愛をすることになった。

恋に墮ちたのではなく、愛に墮ちた。

恋に堕ちたら、それが恋なのだ。

そういう言葉を残した者もいたけれども。

青磁は、愛に堕ちてしまった。

愛をしたら・・・愛に堕ちたら、それは愛にしかない。

そう思った。

・・・人との出逢いに、そういう風に理由や原因が恋愛を呼び寄せ、それを必須とするマクドゥガル家の考え方がどうにも受け入れ難い。

でも。彼女となら、例外を考えることも苦痛ではなくなった。

それを、彼女の国の言葉で、ひとことと言えない自分がかどかしい。

「水は好きではないのか？」

「いいえ、好きよ。・・・この国は水で囲まれた国だから」

彼女のこたえはいつも美麗であった。

そして彼女の具体的な思い出が連鎖することはない。なぜなのだろう、と思ったが。彼女のそれまでの経緯を尋ねると、なるほどと思わざるを得なかった。

青磁も、すべてを彼女に時系列に語ることはできなかった。

人の一生というものは、必ずすべてが共有されるものではないのだ。

そう思っている、相手を知りたくなる。それが恋であり、相手をどこまでも信じたくなるのが愛であるのだと思った。

「水に囲まれたところでも・・・もっと違うところにもある」

「それは、青磁の育った場所？」

「そう」

彼は短く答えた。彼の育った場所のことを、彼女に詳しく話していないことに気がつく。・・・彼女のことを知りたいと思うのに、自分のことは少しも話していないことに気がつく。

自分のことを語らないのに、彼女のことを知りたいと思う。それはとても勝手に独りよがりの願いではないのだろうかと感じた。

来ることは出来ても、行くことは出来ない。

そういう、一方通行の想いであるのなら・・・それは、それで心安らかであったのだろう。でも、彼は、今は・・・彼女の心を知りたいと思う。

簡単に説明できない様々なことが彼の中を巡って消えていく。告げなければわからないあの家の陰鬱な特徴を、敢えて教える必要があるのかどうか、彼は考えてしまう。

恋愛というのは、時に思いものだと感じる。

特に、性別の差を理由にするつもりはないが、家を継がなければならないと思う者には、配偶者の条件というものは重要になってくる。

打算ではない。

幸せになりたいから。相手を幸せにしたいから。

だから、考えてしまうのだ。

条件という言葉で片付けることはできない。

人が長く生きるにつれて、自分ではどうしようもないことで縛られていくことを感じていく。それが大人になるということなのだろうかと思絶したこともあった。

けれども。

自分が、自分を捨てられない。それでも、あの家の根本を覆し、新しい未来を敷き直すのであるのならば。

彼女は必要不可欠な存在だった。部品とは思っていない。彼女は、マクドゥガル家に迎えるには勿体無い存在だと思う。でも、それでも彼女を迎えたい。

どこでも幸せになれる人を、マクドゥガル家の土地に搾取するような行為を、青磁はあえて行おうとしている。

だから、待っている。

それでも彼女がイエスと言ってくれる余地があるのなら。

待とうと思う。

長い時間がかかりそうであっても、待てる気がする。

走り抜けた先に待っているものが・・・青磁にとっては決して無為ではないのだと信じられるから。

それでも、マクドゥガル家の事情とは関係なく、こうして逢瀬を楽しんでいたい。それは本当の気持ちであった。

彼女が心から安らいで楽しめることに青磁が同席できるのであれば。

極力そうしたかった。

彼女は水を恋しがる。けれども、マクドゥガル家に入ってしまうと・・・自由気儘な生活はなくなってしまう。

それで幾度も壊れてしまったマクドゥガル家の夫人の話を聞いていた青磁は、それでも彼女に「だいじょうぶ」と言うことはできなかった。だからこそ、彼女は何も言わないのだろう。青磁の企画した旅程であったとしても、それは素晴らしいと称賛しない。なぜなら・・・彼女は、イエスと言ってしまったから。彼の朝顔になるのだと承諾してしまったから。

だから、これから先に、彼女が見る景色は、彼女そのものとして見る最後の風景なのだとわかっているから・・・彼女は彼と遠出しようと思っているのだろう。

*06

青磁は湿った水の空気に目を細める。こうして彼女と遠出することになるとは思っていなかった。いつか、彼女にもマクドゥガルの敷地の自然を見せてやりたい。そう強く願うようになった。特に、ここ最近では彼女が自分の未来の中にいることを想像する機会が増えた。

その場限りの恋情で満足することができなくなってしまった。

傾いたと思ったら、それはもう元に戻すことができない。

いいや・・・戻したくなかったのだと思う。

後戻りしたくなかった。振り返ることを放棄したのではなく、前を向き続けて、その先に何がや

って来るのかを待ち受けていたいと思ったのだ。

それは、勝手な・・・若すぎる願いなのかもしれない。

だから、待とうと思った。

今すぐにでも、彼女を連れて行きたいと思ったがぎりぎりまで待とうと思った。きっと・・・刻限がやって来たとしてもそれでも待つことをやめるということはやめることはできないのだと思う。

本来なら自分のはやく戻って、あの家の鬱屈した原因を取り除く作業に取りかかるべきであろう。

でも。彼にはともに歩む者が必要だった。彼ひとりでは決して為し遂げることはできないことはわかっている。

だから誰でも良いのだと言うつもりはない。

それを忘れることができるから、彼女といたいのだというのではなく・・・彼女は、彼にいつもそれを思い出させる。決して忘れさせない。帰らなければならない場所のことを思い出させ、そこでやり残したことを、固い決心でもって執り行えと言いつける。それなのに、早く帰れと言わない。

彼と彼女は、実に不思議な関係であった。

恋人同士の熱を交わすだけでは得られない心の静寂を感じる。

なぜだろう。

彼女は彼を独占したいと言わない。行きたいところに行けと言う。それが嫉心からくるものではなく、本当にそう思っているのだ。

呆れてしまうくらい、彼女は風変わりな対応しかしない。

こうして出掛けているのに、熱心に端末を覗き込んでいる彼女を見て微笑んでしまう

その場の雰囲気を読めないのではなく彼女はどちらかというところかなり繊細だ。

けれども、あのフランスの華と同じ様に他人を寄せ付けたいのではなく、彼女は人に近付くことを懼れない。

・・・かつて、青磁がこの人なのだと決めた、あの茶色の髪の人のように。

「なに？」

彼女が青磁に尋ねる。

「いや・・・」

青磁が口籠もる。彼は言い淀んだりしない。いつも相手を見据えて、そして従わざるを得ない力を相手に放つ。

青磁が怖いと言うもと、彼に魅了されて無条件に従ってしまう者のどちらかが多かった。

彼は生まれながらに人を従わせることができる。それは特別でも特殊でもない。彼が欲しているからなのだと思う。

誰かから与えられた能力であるのではなく、彼が・・・きっと、人の歓心を得たいのだと強く願っているからなのだと思う。

餓えているから、そう思うのだ。

それまでは何不自由なく、何を選ぶこともできるのだと思っていた。

マクドゥガル家の悲劇のことも、承知していた。

そして。

自分が、その時の悲劇の主と同じ様な顔立ちをしていることも。

それから。

彼が「セイジ」という悲劇そのものの名前であったことも。

縋って良い場所を探していたように思う。

でも、青磁は紫電と呼ばれる目線でしか人は自分を表現しないのだということが怖くなった。

そんな時に、彼女は、彼を眩しく見ることもなく、時には冷たい言葉でもって彼をひとりの男で特別な存在なのではないのだと告げ続けた。

だから。

彼女の特別になりたいと思った。

どれだけ多くの者が彼らに従うのかということは関与しない。

そう思った。

この年齢で、人を遵えることも人を動かすことも・・・そして誰かを愛することについて早々に決めなければならないのだと知り、青磁は絶望した。

誰かを愛することに、条件を必要とするのは・・・それは愛する事なのだろうか。

前置きや理由がある恋熱は否定されるのだろうかと思悶した。

彼はそんな関係を自分が作り出すとは考えていなかったのに、誰かを愛することを自分で作り出す事になった。それが青磁を躊躇わせる。彼女にもう一步近付きたいと思う自分を止めてしまう枷になった。

温度を感じるのに、彼女の心に重なることは出来ない。

そういう自分が彼女を怖がらせていると思うが、それでも・・・それでも、彼女ではない誰かにしようとは、もう思えなかった。

*07

「私に構わず、自由に過ごして欲しい」

「オレは今、自由にやっているよ。かなり」

そして青磁は少し笑った。

自分は不自由で窮屈そうに見えるのだろうか。他人がどう思うのか気にしないことにしていたが、彼女から見た青磁がどのような印象なのかだけは気になってしまう。

青磁がひとりで泳ぎ流していた間、周囲の者は彼を凝視するが、彼と眼が合うと途端に視線を外してしまう。元々、そういう鋭い視線の持ち主であると承知した上で彼を見ているわけではないからだ。

本格的に泳ぎ込むことはしないつもりであったので立ち上がった彼に幾人か声をかけてきたが、

彼が恋人を待っているので話に応じられないと柔らかく拒むと、残念そうに立ち去っていく。他人に向かって彼女のことを「恋人」と言えるのに。彼女の前ではそれを言えない。

「あれほど話しかけられているのに？」

彼女が青磁に言った。青磁は苦笑いを浮かべながら首を横に振る。

「話が通じない相手と話をしても仕方ないだろう」

「話が通じない？」

彼女が青磁の瞳を見つめる。彼女は怖じけることもなく彼を覗き込む。どうしてなのかと聞いたことがあった。すると「人の眼を見て話をするのが礼儀でしょう」と言う。確かにその通りではあったが、ごく当たり前のことのように言っただけの彼女の健やかさが青磁には眩しかった。

「英語で答えることにしているから」

彼が澄ました顔で言ったので、彼女は綺麗な白い歯を見せて笑った。

彼がひとりになる瞬間を狙って、様々な者が話かける場面に幾度か彼女は居合わせたことがあった。

その度に、彼女は彼を遠くで見ているだけで、決して近付かない。

青磁は、彼女がやって来ればその場で話を打ち切ってしまうと承知しているからだ。

他の者との会話を自分が中断させてしまっただけではいけないと思っている。

しかし、青磁はその都度辛抱強く言っている。

一緒に話に入ってこい、と何度も言っているのだが、彼女は首を縦に振ることはない。

特に今日は彼女に後ろめたい秘密を持ってやって来ているので、青磁は彼女の姿を探すことに専念し、そして周囲の者からの好奇を含んだ詮索を回避することにした結果、違う言語で話がわからない素振りを見せることにした。

チェックインの時には日本語で対応し、そして彼女には流暢を越えた滑らかな発音で軽口を言うことすら自由に操るといふほどであるのに。

嘘を朽ちにしているわけではない。彼はこの国では外国籍の留学生の身分だ。

だからこそ、彼女がこうして贅沢だと困惑するのだが。

彼にとっては少しも負担ではなかった。けれども彼女はあまり良い顔をしない。

だから、自分が株を所有しており、配当が思ったよりも良かったと言った。かつ、ここは知り合いからの紹介で高額な遊興費にならないことを示して、彼女はようやく出かけることを承諾してくれたという状況であった。

詳しい事情は話していなかった。

できるだけ目立たないようにしたいという要望が通り、入り口で総支配人が出迎えたきり、彼らは他のビジターと同じ扱いであった。

プールを一例、貸切とするということがなければ。

また彼は配慮がなさ過ぎると彼女に窘められることになるのかと思ったが、彼女は何も言わなかった。

緊張も不機嫌もそこにはなかったので、青磁は安堵する。

それでも、彼女が自分だけを見て欲しいと言ってくれないかと思った。

欲深いと思う。一緒に居られればそれで良いと思い、次には彼女が自分だけの朝顔と認めてくれないかと願った。そして・・・今は、彼は彼女を独り占めしたいと考えている。彼女は何も言わない。だから、待つと言った。

待つことを許してくれた彼女は、彼に待たないようにと言う。

一体、彼女を放置して何を楽しめと言うのだろうか。

「それに君のエスコートなしに、オレに何をしろと？」

彼は甘く囁くように言う。

椅子に座り直す時に、彼女に僅かに近づく。

けれども。

彼女は少しも絆されることはなかった。

「ひとりにしておけないよ」

「そういう気遣いはしなくて良いものよ」

彼女はぼつりと言う。

「他の人との出逢いを大事にした方が良い」

「オレは君との出逢いを大事にしているけれども、今のところはそれで満足しているから」

彼はそう言って微笑む。彼女が軽く溜息を交えて彼の片方だけ薄い瞳を見つめる。

そういう仕草が、彼を深く激しい恋情へ誘うのだと彼女は気がつかない。

彼が彼女に今ひとつ強く出られないのは、恋慕しているからというだけではない。けれども、他の者と連れ立ち彼女は放置しておけと言い出すとは思っていなかった。それは譲れないな、と思う。

「オレは、君と二人だけで出かけたかったから」

少し口調が強くなってしまったと思ったが、彼ははっきりと口にした。

*08

「ささやかな事かもしれないけれども、オレには必要なことだから」

彼は微笑んで言った。ようやく、そう言えるようになった。

彼に必要であったのは何なのか。遠い異国の地に来て、ようやくわかったような気がする。そして、毎日を繰り返すということがどれほど貴重で切ないことなのか。

彼女はそれを聞くと、仄かに淡く微笑んだ。しかし、すぐに彼女は言う。

「さっきから、青磁に話しかけたいと思うような人がたくさん往来している」

「君しか見ていないから、わからない」

青磁が明瞭に言っただけだったので、彼女は呆れた顔をしていた。

それすら、楽しい。

日常の中の非日常なのか、非日常の中の日常なのか。

彼女の存在は、両方を含んでいる。

青磁は声を漏らして笑った。

それから、少し浮かれた気持ちを延長させる。

いつもは言わないことであった。

何の気なしに。軽い口調で彼は彼女に向かって言う。

片方だけ薄い瞳は彼女を注視する。ああ、可愛いな、と思った。惚れているからという理由だけではない。

「・・・妬いているの？」

彼女の目が大きく見開いたので、本人よりも青磁の方がどきりとして真顔になってしまう。

「・・・何？」

いつもと違う彼女の反応に辟易ろぐ。

寛いでいた身を背凭れから起こし、彼女の方に体を傾ける。

彼女は一瞬、唇を開いて青磁を見つめると、またたく間に頬を赤くし、首筋や耳朶まで朱に染めてしまう。

青磁は普段、彼女のこういう表情を見たことがなかった。

誰かに嫉妬するという感情は、彼女は持ち合わせていないのかと思っていたのだ。欠けているのではなく、誰かと自分を比べることはしない人なのだと信じていた。

「あの・・・」

青磁がその場を流すこともできずに、困惑した声を出す。

くしゃり、と髪をかき上げた。

今すぐ抱きしめてしまいたい。胸部に何かが悶えているかのように重苦しくなった。

自分と彼女が、まだ愛の途中にあることを知った。これでは恋を始めたばかりの幼い少年少女のようではないか。青磁はそう思った。けれども、それがどこか心を浮かせる。

彼女が嫉妬している。

彼女の心を乱すものは許さないと知っているのに、彼女の心を自分が乱していることを知り、嬉しくなる。

彼女が横を向く。耳が真っ赤で熱を持っていることがわかった。

彼女の肌が、うっすらと汗ばんでいる様子がわかる。

青磁は視線を伏せている彼女の名前を呼んだ。

「こちらを向いてくれ」

彼女は少しの間黙っていたが、すぐに彼の方に視線を向ける。

眦まで聴し（ゆるし）色であった。

彼女は青磁を軽く睨んだ。

「嫌な人」

彼女は他者のことをそういう風には言わない。冗談であってもだ。

青磁にだけは、特別になってしまう。いや、彼女そのものであっても良いのだと彼女自身に許可している。それが、嬉しい。

すると彼女は突然、立ち上がって言った。

「暑い。泳いでくる」

それまで後で良いと言っていたのに。彼女はその場から逃れるように言った。青磁について来いとは言わない。きっと、他の一般遊泳の場所に紛れて、彼から姿を消そうとしているのだ。

「待てよ。オレも行く」

青磁が言うと、彼女は首を横に振った。

「目立つ」

「そう思うから目立つんだよ。人は案外、他を見ているようで見ていない」

特にここは恋人同士で来ている者たちが多い。

ここに来る全員が、他者に眼を遣る者に寛容な相手だけを連れてきているわけではないだろう。

「荷物を置いてくるから」

彼女は青磁の言葉に返事をしないで、ぼそぼそと呟くように低い声で言うと、荷物を丁寧に抱えて、逃げるように所定の場所に置く。

青磁は自分達の休憩スペースを確保してあったので、彼女はそこに向かって行く。後ろ姿を眺めながら、彼女にそのスペースについて説明していないことに気がついた。

立ち上がった時に見えた彼女の脚が白く眩しく映る。

こういう男の下心を前面に出すつもりはないが、やはり、彼女のことを愛おしいと思うから抱きたくなるし、身体を重ねる時間以外の時間も気に入っていた。だからこそ。

彼女との関係に対しては誠実でいたかった。

他の者に目を向けることはあり得ないのに、彼女が心乱れるのは、青磁のことを憎からず想っていてくれるからなのだと考えることにする。彼が彼女の心を乱してしまっているのであるのなら、彼女の心を鎮めるのも青磁だけでありたいと切に願う。

・・・だから。

青磁は、享楽のためだけの恋愛は必要であるとは思っていない。

少なくとも、今は、いらぬ。

*09

彼女の後ろ姿を眺める。

ひとりきりで座って待っている青磁の顔を、驚いた顔で見えていく者たちの視線を受け流し、彼はただ彼女だけを見ていた。

少し離れた場所で、彼女が慎ましく服を脱ぎ始めた。水着を着用していることはわかっていたが、どうにも落ち着かなくなる。

彼女の肌を他の者に見せたくない。

けれども、彼女は彼の恋人なのだと示したい。

包んでいたシート端末を安定した場所に置くために屈んだ時に、象牙色の水着の裾が見えた。

ショートパンツとスカートの中間の形状のようだ。

レースが腰を巻いている。露出を好まない彼女の選びそうな型であった。

透き見しているかのような気になり、彼は視線を彷徨わせるがすぐに彼女に意識が向いてしまう。

ひとりですか、とその時に声をかけられた。

青磁が振り仰ぐと、幾人かの若い女性が青磁を熱心に見つめていた。彼は微笑んで言った。

「恋人と来ているから」

残念そうな顔をして去っていく者たちからすぐに視線を移す。

同じ様に、彼女に話しかけて彼女を困惑させる者が居ないかどうか、周囲に気を配る。けれども、すぐに彼女を眺めてしまう。

恋の病と言うことすらできない拙い昂揚に、青磁は苦笑した。

彼女はこちらに背中を向けており、上に羽織っているものをまだ脱いでいなかったが、腰元の柄でセパレートタイプのようだ。

今夏の新作のようだ。

真新しい白さだった。

けれども、彼女の白い肌に良く映えていた。

今日のために揃えたのだろうか。

彼女には、こちらに来てから買い揃えれば良いと言ったが、そういう金銭的な負担をさせるくらいなら行かないと言われて結局何を選んだのか聞かずに当日を迎えてしまった。

そして、今、彼女のことを恋人だと言った時。

甘い痺れが走った。それはすぐに心地好いものになり、彼を微笑ませ満たしていく。

彼女が聞いたら、どんな反応をするのだろうか。

そして、彼女がするりと殻を脱ぎ捨てるかのように上着を脱いだ。思ったより大きく背中が見えて、青磁はどきりとする。

脱いだそれを丁寧に畳み、彼女は露わになった短い裾を引きのばして整えていた。

泳いでしまえば、そんなことはすぐに気にならなくなるというのに。彼女が気になっていることはそこではないのだろうと思われた。

青磁のところにやって来るのが、気恥ずかしいのだ。

こちらから迎えに行ってもやらなければ、と思い彼が立ち上がった時。

またしても、青磁に時間があるかと尋ねてくる者に行き会った。

こちらの様子や都合を気にすることもなく、見上げる彼の締まった身体を見てモデルか運動選手なのか、どこからきたのかなどと質問を次々に投げかけてくる。

青磁は微笑みを絶やさずに、言った。今度は日本語で。

「恋人を待たせているから。失礼」

そう言って軽く顔をこれから迎えに行く彼女の方に向けた。

こういう相手は、英語でまくし立てても引き下がらないことを知っているから。青磁は、笑顔で拒絶を見せ、彼女の方に向かって行く。

すると、彼女はこちらに向かってくる。

見られた、と思った。

騒がしいプールサイドであるから、何を言ったのかは聞こえなかったはずだが、それでも話している様子から何を言ったのか察しているようだ。

明らかに不機嫌な顔をしている。

青磁が他の者と話をしていたからではなく、青磁が恋人だと言ったことに憤懣を感じているらしい。

何とも矛盾した感情であるが、青磁にはそれが理解できた。

自分も、同じ様に矛盾を抱えているからだ。

恋は、時折矛盾する。何が正しい順路なのかわからなくなってしまう。しかし、それで諦めるようなことにはならない。

彼はまた彼女の全身を眺めてしまう。

情けないことではあったが、目が追ってしまう。

セパレートタイプの水着ではあるのだが、トップは腰より少し上までの長さのもので、レースの下からは薄く彼女の身体の線が見えるが、近い場所でなければそれはわからない程度だ。彼女の白い肩に乗る紐から、その下にも短い丈のトップを着用していることがわかる。若々しいものであるが品の良さは損なわれていない。彼女らしいと言えば彼女らしいが、冒険に欠けていると思

うと少し残念な気持ちがあった。

本当に、嫌な奴だと己に言ってみせる。

目のやり場に困るようなものを身につけて欲しいとは思わないが、彼女と彼だけしかいない場所で、他に知り合いもないのだからもっと挑戦を受け入れても良いのではないのかと思う。しかし口にしない。

でも、それらを差し引いてなお、彼女は愛らしかった。

まだ少し頬を上気させたままであった。

けれども、表情が完全に硬くなっていて、青磁の脇をすり抜けようとしたので、彼は彼女の腕を掴んだ。

「待てよ」

直接、彼女の肌に触れるので、動悸で狼狽する。

滑らかな肌の温度に、彼の掌の加減を忘れてしまう。

青磁は手の力を緩めずに人目も憚らず彼女を抱き寄せてしまいそうになった。

「痛い」

彼女が顔を顰めたので、青磁は慌てて手を離れた。

「すまない、加減し損ねた」

素直に謝ったが、彼女は憤りで目を陰しくしている。

頬を赤くし、青磁を睨み上げる様が何とも可憐で、また見入ってしまう。こういうことを考える不埒な男だと蔑まれても仕方が無いな、とってしまった。

「私は青磁の恋人ではない」

やはり、彼女の憤懣はそこにあった。青磁は軽く肩を落とす。浮かれていて、彼女の心の迷いについて配慮が欠けてしまった。

「聞こえていたの？」

青磁が尋ねる。

「他の人にも言ったの？」

彼女が呆れた顔をしていた。

ああ、そうか、と思った。

先ほど『恋人を待たせている』と言った。それで断りを入れた者たちと彼女はすれ違ったのだ。おそらく青磁の断りの理由について話をしていたのだろう。

「オレの恋人になって欲しいと思っているよ、ずっと前から」

彼はそう言った。順序が違うと思ったが、これは良い機会なのかもしれないと思った。

「イエスと言うまで待つ、と言ったから待つよ。こうしてふたりで出かける先で君を不愉快にさせたくない。勝手に恋人だと言ったことは謝る。でも、その返事がノーだとは思っていないから」

「青磁はもっと大事に言葉を選んだ方が良い」

彼女は呟くように言った。

「大事にしたい言葉だよ。だから、君に対してしか使わない」

彼女は何か言おうとして口籠もった。

白い水着が眩しかった。これが婚礼衣装であったのなら。そして、彼は彼女が許すのであれば、この場で跪いて彼女の手を取り、誓いを立てることも厭わなかった。

*10

彼女が困惑している。わかっていることであつたけれども、時期が早すぎたのだろうか。青磁はそう思いながら、彼女を見た。

「今日は、楽しく過ごそう。恋人同士ではないと君が言うのなら、それでも良いから。オレは君を不愉快にさせるために誘ったわけではないよ」

そのとき、俯いていた彼女がぽつりと言った。

「・・・から」

「え？」

彼は聞き返す。彼女の声は滑り止め防止の床に吸い込まれて行ってしまう。

聞き漏らすことのないようにしていたつもりであつたが、彼は彼女に尋ねた。

「もう一度言ってくれ。聞こえなかった」

「だから」

彼女はそう言って急に顔を上げた。

どきりとする。

いつもは見えない首や肩の曲線が彼の平常心を奪う。

焦っているのはわかっている。でも、ここで引くことは出来なかった。

「私は青磁に言われたことがない」

「オレの話を聞いていなかったのか？」

今度は青磁が呆れて言う。

声音が少し硬い口調になってしまった。

「いつも君に愛していると言っているのは社交辞令かと思った？

君を泊めるのもこうして出かけるのも誰とでも同じ様にしていると思っていたのか？」

それから込み上げてくる強い感情をぐっと呑み込んだ。彼女を責め立てても仕方がないことで、まったく筋の通らないことであることは承知している。

でも、常に囁く彼の心からの言葉が、彼女に届いていなかったのだとしたらそれはとても哀しいことだと思った。

通り過ぎる幾人かが、青磁と彼女の様子を横目で見ていく。けれども、青磁はそんなことは気に

ならなかった。

それなら、今、ここで恋人になってくれと言ったのなら。

彼女は即座にイエスと言うかといえば、そうではない気がしていた。

当てつけのように言うのは最低だ。

それまで昂揚していた気持ちが一気に凋んでいく。彼は一体、彼女の何を見ていたのだろうと思った。そして、彼女にそんなことを言わせてしまった彼自身が猛烈に許せない。

それから青磁は両手を握り、拳を作った。

「ごめんなさい」

彼女の声が聞こえる。そうじゃない、と青磁は言い返した。

憤っているのは彼女に対してではない。そう言おうとしたが、言葉にすると語気が乱れることはわかっていたので暫く黙り込む。

思った事は口にする方だと思っていた。だから、いつも彼女には想いを秘めることなく言い続けた。

好きだよ、と。

愛している、と。

そして彼だけの白い朝顔になって欲しいという申し出にイエスと答えてもらった時。はじめて過ごした彼女との夜と朝を迎えて、彼はそれでこれまでの片恋が終わったとは思わず、新しく愛が始まったのだと思った。恋が実り、愛になったと思った。恋を終えてそれを愛に変えて、もう次の人をあれほど思うことはないと考えていた。

当分、そういう恋愛は必要ないとも思っていた時期もあった。けれども、彼女はそれを全部覆してしまった。それほど大きな力があることを、彼女は自覚していない。

でも、それを押しつけるように賛美の材料にすることはなかった。

ふたりの時間を重なっていく喜びの方が大きかったから。

最初に理由があったはじまりであったけれども、それを霞ませてしまうくらい、彼女と一緒に居られて幸せな気持ちになった。

だから、これからも一緒に居たいと思う。

「君が謝ることはない」

青磁はか細い声で言った。

ごめんよ、と彼も謝る。楽しいはずの時間が台無しになってしまった。

彼は思った。

青磁と彼女は、まだ喧嘩の仕方も知らない。

一歩引いて、良いよと譲歩することができない。

彼は彼女を独占したいと思うし、彼女は彼を独占するのはいけないことだと思っている。

愛についての価値観や愛し方の違いかもしれない。

でもそれを理由にして彼女を諦めることはしたくない。

「舞い上がっていた」

正直にそう言った。彼女の白い足と小さな指先が見えた。よく見ると、淡い色で着色してあった。そういえば、彼女の指先もいつもより光沢があった。

悄気ているというのに、彼女の姿が気になって仕方がなかった。

男の性なのだと言われてしまえばそれまでであったけれども。

彼は、彼女の姿を目に焼きつけておきたいと思った。

これが最後の夏になるかもしれない。

「その水着、似合っているよ。とても」

彼は気まずい雰囲気破るようにそう言った。

それから、諄いと思ったがもう一度言った。

彼女の名前を呼び、彼女の視線をこちらに向けさせる。

「こういうところと言うのは、場の雰囲気に酔っていると思われるかもしれないけれど」

彼は前置きをした。それからはっきりと発音する。

「オレの恋人になって欲しい」

こういうとき、この国の同年代の男達はどのように求愛しているのか余り詳しく知らなかった。

他者がどうであるか興味がなかったから。けれども、先般出かけた時にもっとよく聴取しておけばよかったと思った。

「それから、勝手に恋人だと言って、すまない。君に聞くべきだった。君を、オレの恋人と呼んでも良いだろうか、と」

あの時、恋人を待たせているからという言葉は正確ではなかった。正しくは、彼の想い人を待たせているからと言えば、彼女はここまで憤慨することはなかったのかもしれない。

「オレはあちこちに気が回らない方から、ひとりの人と決めてしまうと他に眼が行かなくなってしまう・・・」

だからもう彼女に目を向けることはないのか、と言い継ぐことはできなかった。彼女の心を乱すばかりで、彼女を微笑ませることができないのであれば、相手を幸せにするという資格を失ってしまっていると思う。

しかし、諦めることなどはできない。到底、できない。

「オレの中で、オレの朝顔になって欲しいというのは、恋人になって欲しいと言うよりもっといろいろな意味があって・・・それに同意してくれたということは、オレの恋人になってくれることを前向きに検討するという意味だと思っていた」

彼は心の内を吐露する。彼女が場の雰囲気を荒らして困惑していることを承知の上で。

彼は早口で囁くように言った。

他の者に聞かせる話ではないことも承知している。

でも、彼女に知っておいて欲しかった。

もし、青磁のことで彼女が嫉妬するほど彼のことを心憎からず想っていてくれているのだとしたら。

これだけは、伝えておきたかった。

「いつもそういうことを口にするのは、軽んじているからではない。いつか、言いたくても言えない時が来た時に後悔したくないからだ」

*11

彼はそれで話を切り上げるつもりはなかった。彼女を送り届けるまでは、楽しい時間の延長であって欲しい。何より、自分がその思い出作りを欲していたが、彼女にも同じ様に楽しい時間であって欲しかった。

ここで彼女と険呑な状況のままにしておくことはしない。それは誰もできることだ。けれども、青磁はそうしない。

彼女のことを心の底から好きだから。

彼女には、笑顔でいて欲しい。そして、笑顔でない顔の時の彼女も変わらずに愛おしいと想う。それを告げたかった。一方的であると思ったし、彼女はどのように思っているのかということを考えていないと思う。

だから、いつも尋ねないことを訊いた。

彼はいつもそうするように努めてきた。求めてはいけないと思ったから。

けれども、彼はこの時だけはその戒めを解いて、彼女に委ねてみようと思った。

「君は、どう思っているのか聞かせて欲しい」

待つと言ったのに。彼は、いつまでも待つと言ってそれまでずっと待ってきたのに。

生真面目な彼女が身を任せるということはどういうことなのか、青磁は理解しているつもりであった。

そしてマクドゥガル家の重責から逃れたいと思っているのではなく、青磁が彼に相応しい相手を見つける時まで傍に居られればそれで良いと思っていることも。

だから、彼女は何も言わない。彼を束縛するようなことも言わないし、彼が万が一、他の者とうして束の間の逢瀬を楽しむようなことに興じていたとしても、彼女は決して責め立てるようなことはしない。

しかし、彼は朝顔の人だと思っている。

あのフランスの華が運命の人のことをファム・ファタルと呼んでこよなく愛するように。自分にも、自分の生涯に限りなく近い場所に居続けてくれる人物を捜し求めていた。誰でも良いと思っているわけではない。それは彼女もわかっていると思っている。

「好きだ」

彼は思いを込めて、そう言った。彼女がどう思っているのか知りたいと思ったが、それは聞かなかった。相手が振り向くまで待つと言ったのは青磁の方だ。どうしても青磁に添えないという気持ちであるのなら、彼女はこうして彼と時間を過ごす事はしない。乞われたからと言って、彼女は人に言われるままに自分の行動を決めたりしない。朝顔の花そのもののような人だ。鶴は弱く萼は華奢で滑り墜ちてしまうような儂さを持っているのに、蔓を伸ばし天に向かって花を咲かせる。根元から死んでしまわない限り、花を付ける前に挫けるようなことはなかった。

「私は・・・」

彼女は明らかに狼狽していた。けれども、こたえを先送りにするつもりはなかったようで、やがて顔を上げると先ほどの彼と同じ様に、青磁、と彼の名前を呼んでから言葉を始める。

「未来を決めてしまわないで。青磁がそうするのなら、私はもっと言いたいことを言おうと思う」

彼の先ほどの言葉に、心を動かしたようであった。

恋を失うと必ず後悔する。

そして、恋がうまくいかない時にも。

けれども、否定したくなかった。

この人を好きになって良かったのだと思いたいし、彼女にそれを伝えないままに消滅させるには、重すぎて大きすぎた。

失うことを前提に始める恋ではなく、終わらないことを前置きした恋になるかもしれないという予感があった。同じ様に、彼女にも何か思い定めたものがあるのだとしたら。青磁はそれに耳を傾けようと思った。

「オレの気持ちは決まっているよ。それに未来は決まるものではなく決めるものだと思うから。思った以上の未来はやって来ないから」

「だから、それが困るの」

「でも、一時の気の迷いではないとわかってくれよ。今日はとても楽しみで、今、こうしている瞬間も楽しいのだから」

それを聞くと、彼女は素直に頷いた。

これは青磁にとっては大きな驚きであった。

次に続ける言葉を失ってしまう。

いつもの彼女であるのなら、彼の言葉に哀しそうに微笑むだけであるから。

しかし、彼女は少し気恥ずかしそうに言った。

「・・・私も、今日は楽しみしていた」

青磁は強ばらせていた額から力を抜いた。

自分が持っているありったけの情熱でもって、彼女の心を動かせるのだとしたら。彼は、それに挑み続けると思う。

それが彼の言う「待つ」ということだから。

今回のことには、青磁に非があると思う。

彼は彼が言うところの「待つ」ことに慣れてしまい、彼女の様子に注意深くなかったと悔やんだ。

下腹に力を入れて、声を出す。

そうしなければ虚脱したどうでも良い科白しか出てこない気がしたから。

彼女が心待ちにしていたと聞いて、それまで沈んでしまった心がまた軽くなっていくのを感じる。

「オレは・・・少し、頭を冷やした方が良さそうだ」

自分の気持ちばかりを押し付けて、いつも彼女を怒らせてしまう。

青磁が心待ちにしていたように、彼女も予定を調整しこの日を青磁のために空けたのだ。興味があって、行ってみたかったと言ったのは本心であったかもしれない。しかし、青磁と二人きりで出かけるということによって、彼が何を期待するのかわからない彼女ではなかった。

彼女は直前まで読みものに耽っていたし、ロッカールームから出てくるのも遅かった。だから気乗りしないのかと考えていたが、そうではなかったと聞かされて、青磁の肩の力が緩む。

・・・こういう時には、どういう風に言えば良いのだろうか。

彼ははじめての恋に戸惑う少年のように、頭の中に適切な言葉を浮かべることができなかった。

忘却が恋であるのならば。

彼は完全に恋に堕ちている。

「それなら、少し泳ごうか」

彼女は言った。

青磁ははっと顔をあげた。また、自分の中だけで解決しようとしていたことに気がつき、目を瞬かせた。

すると、彼女は照れくさそうに笑う。

「そろそろ乾いたころだから」

彼は唇を曲げた。彼女の言っている意味がわからなかった。

「乾く？」

彼女の言葉を繰り返す。彼女はまだ水に濡れていないはずであった。確かに、青磁の体はすでに

乾いていたが、それでもまだ髪は湿っている。

「そう。時間がかかってしまった」

言っている意味がわからなくなり、ますます困惑した顔つきになった青磁に、彼女は眼を逸らして言った。

「たまには、冒険しないとね」

そう言って気恥ずかしそうに笑い、プールに目を遣った。

深い蒼色に輝く水面が光っている。天井は高いガラス張りで屋外にも温水のものが設置されている。どこから入ろうかと悩んでいる彼女の肩を見つめながら、青磁は今の疑問を解決しようとして背中を向けた彼女の隣に立って、彼女の顔を覗き込もうとした瞬間。ぎょっとして呼吸を止める。

*12

驚愕するとあらゆる動作が一時的に止まる。

青磁が見下ろした角度から、彼女の胸元が覗いて彼は声を吸い込んだ。

全身が痺れる。予告もなくそれは突然の攻撃だった。

闘いを挑んでいるわけではなかったのだろうが、彼女を見て、やられた、と思った。しまった、と思ったのもほぼ同時だ。

形の良い瞳が大きく見開いた。瞬きをするのも忘れてしまう。

それから次に、頬に血が上り、顛顛が何かに殴られたように強い衝撃を受けて脈打つ。胸の中を荒々しく弄られたような衝撃が彼の体を強ばらせる。

赤面するという状況以上の動揺に、青磁は声を失った。

「それ・・・」

彼がそのときに、彼女がどうして「乾いたから水に入れる」と言ったのか理解できた。

彼女の胸元にあったのは、白い朝顔だった。

耐水性の優れたボディ・シールだ。タトゥー・シールとも言う。

貼付するタイプで、様々な種類があり、自分で上から模様を追加することもできる、水を弾き薄利しにくい光沢を極限まで抑えたタイプである。

それには定着パウダーが必要で、乾くまでに少し時間がかかる。

そういえば、と思った。

ロッカールームに併設されたリラクゼーションサービスのエリアで、そのような有料サービスを行っていることを思い出した。

青磁自身、興味がなかったことに加えて彼女はそういうペイントにはまったく理解を示さない

と思っていたので目の端で流してしまっていた光景だった。

彼女はそこに行ったのか。

それで、乾くまで水に入れれないと言い、身支度を調えるまでに時間を要したのか。

確かに、彼女には冒険だった。

胸元を覗き込むことができるほど近寄らないとわからない場所にそれは咲いている。

白い小さな朝顔の花が彼女の左胸に咲いていた。蔓の下が伸びて、水着の際に隠れてしまっている。彼は手を伸ばしてその先を眺めてみたいという衝動に駆られたが理性で押しとどめる。かなりぎりぎりの場所にペイントしてあった。

誰に施して貰ったのかと、また彼女のことを考えずに問い詰めてしまいそうになる。たとえ店員であったとしても、同性であったとしても、我慢ならない。

遠目ではわからないくらいの度しい柄であるが、彼女の肌に朝顔が咲いている。そう考えるだけで彼の血が沸騰しそうだった。

確かに、大人しい印象を与える出で立ちで、冒険に欠けると失望した。

しかし、近くで見ると・・・彼女が精一杯努力していることがわかる。彼のためだ。自分だけで楽しむのなら、彼女はこういうことはしない。自分を飾ったり装ったりすることは最優先事項としていない。

胸が破裂しそうな勢いで脈動が彼を内部から煽る。

彼女は青磁を振り返ると、首を傾けた。まるで、彼を誘うかのよう。

「行かないの？」

「駄目だ」

彼は即座に言った。

彼女のこんな姿を、誰にも見せられない。

いや、見られることに青磁が耐えられない。

「頼むから、行かないでくれ」

青磁は震える声で言った。どうしたら良いのかわからない。この動揺を見て、彼女はそれでも不思議そうな顔をしている。

「・・・せめて、もっと人が少なくなってからにしてくれ」

懇願する青磁に、彼女はふうん、と小さく頷いた。

「なぜ？」

「君を人に見せたくないから」

「おかしな人。・・・もう少し羽根を伸ばせと言ったり、誰にも見せられないと言ったり。私はどうすれば良いの？」

おかしくなっているんだよ、君のせいで。

そう言おうとして心に留める。

そしてそれが彼女が怒っている原因であるのだと知った。恋人であると宣言したことを憤慨しているのではなく、彼女は青磁の・・・男の心理がわからないらしい。鈍感なのか、繊細なのか・・・時々よくわからなくなる。けれども、それが彼女なのだと思うと、自分の言葉を振り切って水際に立つこともできたのにそうしない彼女を愛おしく思う。

それから、彼女は残念そうに言った。

「楽しみにしていたのよ」

「ああ、オレもだ」

「青磁は泳いだのに」

「でも、今は駄目だ」

目の前の水に飛び込むだけであるのに、それがいけないと言い出す青磁の前で、彼女は小さな耳朶に自分の髪を引き揚げて凧がす。

何だよ、と彼は心の中で呟く。

彼女の仕草が・・・瞬き一つでさえ、彼の心を激しく玩弄する。

「オレ、今、水に入ったら確実に心臓が止まる。少し休みたい」

素足で立つ床から根が伸びて、彼女を絡め取ってしまえば良いのに、と思う。

体は熱くなり、彼女の朝顔に向かって視線が釘付けになってしまう。不埒な男だと思われても、やはり、その意味を考えざるを得ない。

「・・・日の入りの時刻になると、ビジターの中でも特に限定で、日没を観察しながら入れる貸し切りのジャグジーがある。そこを予約してある。男女兼用でこのまま入れるから、そこに行こう」

「それまで何をしているの？」

彼女の言葉に、青磁は困窮する。確かに、日の入りまではかなり時間があつた。

彼が秘密のままにしてあつた部屋で時間を過ごそうと言ったら、彼女は帰ると言うだろうか。

青磁が黙っていると、彼女は踵を返して荷物を置いてある場所に歩きはじめた。彼は弾かれたように、慌てて追従する。

参ったな、と思った。本当に、降参だ。

何も言えなくなるほど可愛いと思う。

彼女がどんな気持ちで朝顔の絵柄を探し出し、今日は少し羽目を外してみようと思った経緯を語ることもなく青磁に見つかるまでそっと隠していたのかを思うと、滾る恋情を押しえ込むことができない。

恋愛に不器用な方だとは思っていなかった。

でも、彼女の前では、何もできなくなってしまう。

確かに、彼と彼女にはいろいろ学ばねばならないことが多かった。

抗議されるかと思ったが、彼女は素直に彼の提案に従うことにしたらしい。

「食事もしていなかったものね」

彼女は呟いた。

「計画通りにはいかないこともあるでしょう」

「計画？」

彼女は上着を羽織りながら言った。彼女の朝顔が隠れて見えなくなってしまうのを名残惜しく思いながら、その一方で彼は安堵する。

彼女を他の男達に見せるのは、いやだ。

「君も何か計画していたのか？」

「今日をどう有意義に過ごそうかと考えないで来たと思っているの？」

呆れたように、彼女が言ったので、彼はそこでようやく微笑んだ。

彼女が楽しみにしていたという言葉は本当だった。計画を変更しても良いと思うくらいに。いつも予定通りのことを進める彼女が、そのとおりにいかないことに対して肯定していることが何よりの証拠であった。

*13

「それなら、部屋で読書の続きでも・・・」

彼女が言ったので、青磁はまた尋ねる。

「部屋？」

「青磁、部屋をリザーブしたでしょう」

どきりとする。何でもお見通しというわけか。

彼は唸った。

「なぜ、それを知っている？」

彼女は面白くなさそうに言った。

「どうして言わなかったの？」

質問を質問で返すものの、彼女は青磁の質問に最初に答えた。

「サービスカウンターには、着替えてから行ったので、手回り品は端末とタオルだけだった。有料サービスの精算をどの段階で行うのか尋ねると、ロッカー番号のエリアを聞かれて、それから言われた。

宿泊者の追加料金は部屋付きになります、と。

私の持っているロッカー番号は、宿泊者の割り当て数字だったのね」

青磁は黙っていた。気がつかなかったとはいえ、迂闊であった。

「それでフロントに行って、今日の宿泊予定になっていることを知って。どうして青磁が最初のチェックインの時にひとりで手続きしたのか知った。総支配人自らが手続きしたからよく覚えていますと言われた」

目立たないように過ごしたいと念を押したはずが、一番知られたくない彼女に目立ってしまった。彼女の登場が遅れた理由がわかった。

「それで、君は・・・」

「屋内プールでも、プライベートチェアを用意しているからと場所まで丁寧に説明してもらった。

今日は宿泊することで予定を変更して、その連絡を各所に入れるために、端末を利用させてもらった」

彼女が使用していたのは読書ではなくて、連絡用の通信機能だったのか。

画面を眺めていたのは、送信した内容のチェックをしていたからだ。

彼は唸った。彼女のことをただ愛でるだけの存在ではないのだと改めて思う。

してやられたと思うものの、彼女のそういう確認をするための行動力や論理的に物事を考えられる冷静な判断を気に入っていることを今さらながらに思い出す。

「怒っていないのか？」

叱られたこどものように、青磁は恐る恐る彼女に尋ねる。

「なぜ？」

「黙っているいろいろ予定していたから」

「そうね・・・それも『計画通りにいかないこと』に入るから今日は怒らない」
それから彼女は付け加える。

「いつも私が怒っているみたいね」

「そうは言っていないけれど・・・」

青磁は口籠もった。彼女が教えられてもいないのに、休憩スペースに迷いなく足を運んだ理由もこれでわかった。

「青磁はいろいろ順番を気にするけれど、気にして欲しいところはどこではないから」

彼女は面白そうに言った。これほど上機嫌の彼女も珍しい。彼に気にして欲しいことが、彼女の中にあったのか。これも驚愕だった。

「気にして欲しいところ？」

「恋人宣言する前に、私達は恋人同士なのか、ということ。それから・・・」

そこで彼女は口を噤む。やや俯いた顔が彼の視線を引き寄せていることなど、彼女はまったく計算していない。憎らしい人だと思う。彼の心を乱すのも、彼の心を安らがせるのも、彼女だけなのに。

そして、そんな青磁も彼女にとってそういう存在になりたいと願っているのに。

まだ、こたえを出してくれない。しかし、ねだってはいけないと思う。今はただ、ふたりの時間を重ねていきたい。

「それから？」

彼が彼女の言葉を引き継ぐ。

どうしてわからないのか、と言うように、彼女は青磁を見つめた。胸元を隠し、青磁にバスタオルを押し付けるように渡す。手にはシート端末を持っていた。

軽量で小さいので、彼女の大きめの上着のポケットに入ってしまう。

「早く気がついて」

彼女はそう言うと、左足を少し持ち上げ、それから自分のボトムの裾を僅かに上げた。

・・・青磁はバスタオルを取り落としてしまいそうになる。

胸元の花と同じものが、太腿の内側に入っていた。同じものではなく、もっと小さい花片だけのものだ。そこに気がつく者はたったひとりしかいない。

いや、ひょっとすると彼も気がつかないかもしれないくらいの彼女の内なる場所にそれは咲いている。

せっかく鎮まった焰がまた勢いを増した。

彼女の顔は、青磁と同じくらい赤くなっていて、すぐに脚を降ろして、体を搔くし、怒ったような口調で言った。

「恥ずかしい」

「・・・うん」

目の前が朱に染まってしまうのかと思うくらい、青磁の方が赤面していた。

しかし、早く気がついてくれと言った彼女の方がもっと身の置き所がないと思ったので、青磁は彼女に言う。

「それ、良いな。君がそういう挑戦を受け入れるとは思わなかったから・・・とても感激している」

彼はそれだけ言うのがやっとだった。

どうにかなってしまいそうだ、と思った。

このまま抱き上げて、彼女を部屋に連れて行ってしまいたい。

それから大きく息を吸う。動揺させられっぱなしだ、と悔しく思うよりも彼女の心が嬉しい。それをどう伝えれば良いのか、考える。

「荷物を持って、フロントに集合しよう。でも、それは落とさないでくれ」

「シャワーを使うなということ？・・・耐水性があるから当分落ちないと思うけれど」

「そのまま。水着のままで。・・・もっとよく見せてくれ。シャワーは部屋で入れば良い」

彼が何を言っているのか察して、彼女は目を見開いた。

「もっと近くで見たい。濃淡がどうなっているのか、オレにはわからないから」
彼女は彼の目が完治に向かっていることを知っている。それは単なる口実であることもすぐにわかるはずだ。でも、直接的には言わない。それは過程であるかもしれないが目的ではないから。彼女は肩を竦めて、青磁は今度はポスター描きだけではなく、ペイントシールのデザインも興味があるのか、と言った。

「それも良いな」
彼は笑う。彼女は少し微笑んで、それでは、と言ってロッカールームへの出入口に消えて行く。それを見送った彼は、その場に座り込んだ。
幾人か、彼の様子をちらりと見ていく。先ほどと同じだ。
しかし、背中まで赤い彼の蹲った様子は数人の目撃で終了する。
すぐに立ち上がる。
バスタオルからは、彼女の香りがした。
半乾きになった髪をかき上げて、彼は深呼吸した。何度も。

彼女が泳がずに素直に従ったのは、やはり気恥ずかしいからだだろう。青磁以外の目に晒されるのも気になるところだと思ったのだとしたら。

そうまでして、彼女が踏み込んでみたいと思ってくれるということが彼には無上の喜びだった。意中の人との時間は、これほど幸せなのだろうかと思うが自分は一生こうして彼女を熱烈に愛することになるのだから・・・もう少し平然としていられなければならないな、と思った。

あのフランスの華なら、何と切り返すのだろうか。そもそも、人の多い場所には出たがらないだろうから、運命の人を誰にも見せたくないという感情さえ沸く機会がないのかもしれない。

冷たいシャワーを浴びて、熱を冷まさないといけない。
彼は立ち上がる。

すると、また彼はひとりでやって来たのか、連れはいるのかと聞かれて足を止められてしまう。青磁はふっと妖婉な笑みを浮かべて言った。

「恋人を待たせているから」
これも、彼女に聞かせられないな、と思いながら。でも誇らしげに言った。

・・・次は、ふたりだけの時だけで良いので揃いのリングをはめてくれないかと言ってみようか。自分もこうして彼女の元に行き着くまでに何度も足を止める必要がなくなる。
断られるだろうなと思いながらも、彼は決して諦めないと心の中で決めていた。

日帰りの予定ではなく、宿泊の予定に切り替えることにする。最初から、そのつもりであったけれども。そうではないかもしれないという可能性を削除する。

いつか、この日を思い出して自分は若かった、と苦笑いするのだろうか、と思った。そのときには、彼女と語り合いたい。彼女は、今日のこの日をどんな風に迎えて、どんな風を感じていたのか。今はまだ言ってくれそうもないが、幾年か経過したら・・・思い出話として話しても良いと思うかもしれない。すべてが仮定で架空で不確定な未来でしかないけれども。

未来は、自分で描くものだ。誰かに与えられるものではない。そう思うからこそ、彼は彼女のことを待ち続けることができる。

・・・Balneum Scipionis.

そんな言葉が頭に浮かぶ。ラテン語だ。

大きくて豪華な浴場で贅沢に耽る古代ローマ人が、さらにそれより前の時代の、小さな浴室しかなかった時代の方が勇ましく、勤勉かつ質素でありながら心逞しくあった、と思いを馳せる話である。

広大なプールを独占して泳ぐより、静かに時間を過ごしたいと思う彼女が思いきって成功するかどうか見込みのないものに挑戦する。青磁がなかなか気づかないものだから、少し気分を損ねる。彼女はまったく、何をするにも彼の心を乱す。どれほど豪華な時間も、彼女との時間には及ばない。

だから。

そういう心根の人と一緒に過ごす時間を大事にしようと思える。

彼はよし、と声をかけると急いでその場を離れた。後で、夜景が綺麗な時間の時にもう一度来よう、と思った。

そのときには・・・きっと、水に濡れた彼女の水着が白く光ってとても綺麗なのだろうか、と想像しながら。

*14 epilogue

Dum fāta sinunt vīvite laetī. 楽しく生きなさい、運命が許す間は。

エレベータの中で、彼女は分不相応だと文句を言っていた。

かなりの上階に位置する部屋であることが、部屋番号と青磁が押した降機階の数字を見て、彼女は溜息をついた。

若い男女が気軽に宿泊する場所ではない。

普段着でやって来てしまったと言ったので、今日は部屋での食事にしてあるよと言った。

すると彼女は軽く青磁を睨む。

「用意周到ね」

計画通りにものごとを進ませてくれない人が、青磁をそう言って咎める。が、彼は気にしないで笑った。

彼女は青磁に言われたとおり、簡単に手足を拭き清めただけで身支度を調べ、集合場所に先に来ていた。青磁は火照った体を冷やすために相当長い時間シャワーを浴びていたのだから、その間彼女は持って出たシート端末で、今度は本当に読書をしていた。

それから、彼は昇降中、壁に凭れて上を見上げながら、言った。

「好きな人を恋人にしたいのなら、連れて来いと言われた」

彼は正直に吐露する。ここは知り合いのついでで借りることができたと言ってあった。

「オレの部屋に君が入ることができるのも、君の部屋に入ることができるのも恋人だから。

君をオレの恋人にしたいから。

だから、ここも同じ。

部屋に入ったら、君とオレの関係は恋人関係で、将来を前向きに考えている相手なのだと決める」

彼は言った。

到着するまでに、伝えなければいけない、と思った。

彼女に手を伸ばした。手の甲を上に向けて彼女の方に差し出すと、彼女は自分の手を無言で青磁に重ねた。

「オレの恋人になってくれ。・・・イエスなら、手を握り返して」

彼女は笑った。

「ノーなら？」

「それは考えていない。でも、それなら手を振り払ってくれ。このまま帰ろう」

彼は水気を含んで少し伸びた前髪からじっと彼女を見つめる。こうして立ってられないくらい、彼女のことを想っている。けれども、それで脅えさせてしまうのは本意ではない。

彼は自分の手の平に神経を集中させる。

「オレの朝顔になってくれ、というのは・・・オレのたったひとりになってくれ、という意味だよ。この国ではどう言えばいいのかわからない」

彼女は軽く息を吸って・・・そして彼の手を強く握り返した。

彼はその間呼吸を止めて反応を待っていたので、彼女の答えに大きく息を吸った。目頭が熱くなる。

何だよ、これくらいで感激して・・・と自分を叱る。

彼女はぼつりと言った。

「・・・さっきのお返し」

彼女の腕を痛いほど掴んだことを言っているらしい。

彼女は力一杯、彼の手を握り返した。

「・・・水着は着替えたのか？」

青磁は往路時の服装の彼女に言った。彼女は少し笑う。

「あれは着脱可能なトップとボトムなので、一枚ずつ脱げば嵩張らない」

青磁の手にぎゅっと力が入った。

あれより薄い肌の露出の状態が彼女の服の下にあるのかと思うと、力の加減を忘れてしまう。

「部屋で見せて」

彼は懇願する。彼女はいやだ、と言った。でもその顔は笑っていた。

「せっかくプールに来たのに」

「夜の方がここは綺麗だ。海も見える」

それから、彼はふと、思ったことを口にした。

「今日は、オレは煽られてばかりだけれども・・・」

「計画通り」

彼女はそう言うので、青磁が彼女を凝視した。

「ちょっと待て。それなら、オレは・・・」

「何？」

彼女が目を輝かせて笑う。彼女はこんな表情もできるのか。

そう思うと、彼が翻弄された瞬間のことを、あれこれ考え、溜息を洩らす。彼女なりに、青磁に主張していたのだとしたら。青磁と同じ気持ちだとしたら。それは・・・。

「楽しそうだな」

青磁は口元をほころばせて言った。

彼女はまあね、と言ったがそれ以上は何も言わず、再び彼の手を強く握った。

間もなく、部屋に到着する。

彼女のために部屋には特別に白い朝顔の花束を活けてさせてあった。

喜んでくれるだろうか。

しかし、彼女の喜ぶ笑顔の次に、彼女の朝顔を見たい。そう思った。

そうだ。オレ達は、今日はまだキスも交わしていない。

そう思い、彼女の名前を呼ぶ。彼女は無防備に顔を上げたので、彼は体を屈めて彼女の唇を掠めるように奪った。

「青磁」彼女が顔を赤くする。

誰か他の人が入ってきたらどうするのだ、と文句を言ったが、それはなかった。

僅かな浮遊感の後、目的の階層に到着した。

扉が開き、青磁は彼女の手を引きながら、言った。

「・・・読書なんて、できないよ。きっと」

どういう意味なのかと彼女は聞いたが彼は笑い声を漏らして彼女の手を引いた。

彼女の考えている予定と、青磁の予定を調整しなければいけないと想った。どんな時間を過ごしたいと思うのだろう。

彼は彼女と居られれば、それで良かった。どこにも行かなくても良い。でも、彼女の意見を聞いてみたい。

しかし、それより前に、彼は彼女の朝顔を見るということを実行するのが最初であったが。

(FIN)

■01 成ぎ（たいらぎ）

オレ以外の誰かと、こうしているの？

言っではいけない言葉を言ってしまったと、青磁・マクドゥガルは猛省していた。その時のことを考えると、今でも激しい頭痛がして息苦しさを考える。まだほんの数日前のことなのに。季節は、その数日のうちに変わってしまったように思った。

なぜ、そんなことを言ってしまったのか。
わかっている。彼は、燥いでいたのだ。
根拠のない自信によって。

初めて会った時から、随分と時間も季節も経過していて、彼女も彼もあの時から変化したように思えた。少なくとも距離は縮まり、彼は彼女のことを何よりも大事な相手であることを日々認識している。

だが、彼女との間に、どうしても越えられないものがあるのだと感じている。うまく言葉にできないけれども、彼女は青磁との未来を考えないようにしている。

だが、青磁の方はそうではない。

常に夢見ている。その夢が具体的になるには、どうしたら良いのかと考えている。

・・・彼は、彼女がいないことがあり得なくなってしまった。

そんな時、マクドゥガル家の実家に彼女のことを具体的に話そうと思っていて、一度帰国する予定になっていた。

実は既に心に決めた人がいるのだということは幾度か話をしているところだった。留学先で運命の出逢いをした、というわけではない。彼女に会うことは留学の目的の一つであった。勿論、目の治療のこともあったが。

彼は永遠にここに居るわけではない。だから、ここから離れるときに彼女を連れて行きたい。先頃、アルディ家からも彼女を推挙する旨の書翰が届いたと聞いた。勝手なことをするなと言ったばかりだったが、内心はその気遣いに感謝していた。

そんなことが彼女の知らないうちに進んでいた。

だから、一度ゆっくり話をしたいと思っていた時に。

彼女が続けて彼と時間を持つことを断ったのだ。

青磁を最優先にしたりすることのない人だということはわかっていた。承知で好きになった。恋

愛に溺れて、何もかもを投げ出す人ではマクドゥガル家夫人は務まらないからだ。打算的な戀だと言われればそれまでであったが、彼はどうしても彼女という人となりを見て判断したかった。しかし、彼女は僅かな時間で彼の心を奪ってしまったのだ。彼女はそれだけの魅力を備えていた。彼の用意した言い訳そのものすら役に立たなくなってしまうほどに。

条件が整ったから好きになったのではない。

いつの間にか・・・もう、彼女以外には考えられない程、彼女のことを深く愛するようになっていた。

だから彼女にとって特別な存在になったと感じた時に。

彼は心躍り、そしてさらに少しずつ欲深くなっていった。彼女の全部を知りたいと思い、彼女を隣にして歩く唯一の恋人だと彼女に皆に触れ回って欲しかった。

何人も恋人を持ってうまく立ち回るような人ではない。そういうところは実に誠実で、青磁を翻弄して楽しむようなことはしなかった。実際は、かなり翻弄されているけれども。

だが、青磁の学業と治療を優先させるという姿勢を彼女は徹底して貫いており、彼は彼女の成熟した精神に敬意を払っていた。

だからなのだろうか。

今度時間を取って、話をしたいと言った時に、続けて断られてしまった。

何かを察した彼女が青磁と距離を置こうとしていると考えた青磁は、彼女が本当に予定が合わないのだと説明する目の前で、あんな酷いことを言ってしまった。

オレ以外の誰かと、こうしているの？

彼女は、大きな眼を見開いて、彼女は青磁の顔を黙って見つめていた。

頬が紅潮し、睫の震える音が聞こえそうだった。唇を横に引結び、大きく深呼吸を繰り返す。青磁は彼女が怒り出して彼の頬を叩くくらいの激昂を見せるのではないのかと思っていたが・・・実際は違った。

耳や首筋を赤らめた彼女は、眦から大きな涙を零し始めたのだ。

「・・・エリナ」

彼は彼女の名前を呼んだ。

しまった、と思った。青磁は息を呑み、そして自分が何をしてしまったのかを感じた。

ようやく、薄くなってきた壁を彼はまた厚くしてしまった。彼女に触れることを赦されて、彼女にキスをするのを拒まれなくなった。だから彼は慢心していたのだ。自分のたったひとり、同じ様に彼をたったひとりだと思ってくれているのだ、と。だから恋人気取りで・・・彼女が「そんなことはあるわけない」と怒り出す様子を笑って抱きしめて取りなすという場面を夢想していたのだ。

彼は片方だけ薄い瞳を瞬かせた。その間も、彼女の瞳からは大粒の真珠のような涙が落ちて彼女の顎を伝い、彼女の胸元に落ちていく。

「・・・帰ります」

彼女はそう言って、その場を立ち去ってしまった。青磁はその後を追うことができなかった。泣かせてしまった。

ごめん、とその場で謝れば良かったのに、彼はそれすら言えなかった。

涙で頬を濡らす彼女をひとりで帰してしまった。

適当な言葉で彼女を傷つけてしまった。それなのに、それを癒す術が見つからない。

その夜は、眠れなかった。

次の日の朝一番に、彼女を探したけれども彼女は見つからなかった。あらゆる連絡手段を使っても彼女はつかまらない。授業には出てきているようであったが、どうしても見つからなかった。彼の焦りは周囲にも見て取れるようで、青磁はその時に自分が思っている以上に動揺していることを自覚した。

そんな微妙なすれ違いを愉しむ余裕は彼にはなくなってしまった。

それまで彼は、恋をしなかったわけではない。彼女の前にも、とても好きになった人がいた。シャルル・ドウ・アルディの心の妻だと言わせるような女性で、彼女のことを好きになったことは今でも後悔していない。恋を失い、愛を知った。

比べることはできない。でも、彼女はずっと考えているのだろう。それを青磁は慮ってやる必要があったのに、無視して壁を飛び越えようとした。彼だけの事情によって。

あの時の涙を思うと、彼は何も手に付かなくなってしまった。

初めて、彼女が彼の家泊まった時のように。

あの時、彼女は彼の朝顔になってくれると言った。

なぜ、それを信じられなかったのか。

なぜ、試すようなことを言ってしまったのか。

なよやかで儂くて、それでも蔓は生命力逞しく伸び続ける朝顔の花。

まさに、彼女のような花で、青磁はマクドウガル家で解決しなければならない問題がある。

彼女に会う手段が限られていることに気がついた。

それが青磁の不安を煽る。

目を瞑れば、彼女の涙顔が浮かんだ。

なぜ、あのままにして帰してしまったのだろう。彼女の涙を受け止めるべきだった。何をしても彼の中で彼女の静かな抗議が彼の心を刺し続けるので、彼は普段の生活を続けることすらできなかった。

眠れないし、食事も喉を通らない。思い浮かぶのは、彼女の笑顔と薫りと・・・肌の湿りであった。

肌を重ねることに、彼女が安楽的に考えているとは思えなかった。青磁もそうであったから。単なる快樂や一時の緊張感でもってそれを享受することはしない部類の者であると認識していた。どうにもならない程、彼女に深くのめり込んでいるとは思ったが、それは青磁が単に戀に溺れているだけではないのだということを彼女は証明し続けた。

結局、一日中探し回ったが彼女と会うことができなかった。青磁は誰にも相談できずに、そのままambushという彼が行きつけにしている店に立ち寄り、何も説明できずに茶だけを飲んだ。彼女が来ているかと思ったが、それは期待外れだった。結局、店主に気を遣わせてしまっただけで帰宅した。

自分の部屋に戻った時に感じたことがある。

ひとりで暮らすには広すぎると思った。マクドゥガル家の屋敷よりもずっと狭い場所なのに。彼女がいなくても、それはとても違うものになってしまう。

それは初めてのことであった。連絡が完全に取れなくなってしまったので、青磁はとうとう、彼女のもとに出向くことにした。普段は彼女が嫌がるので、会うのは専ら青磁のマンションであった。最近では時折出かけることもあったが、目立つ容姿の青磁に注目が集まることを彼女が気にしていると感じたので、彼女が外に出ようと言わない限りは青磁の方から申し出ることはとても少なかった。唯一、ambushという店にだけは彼女は足を運んでいた。

移動中も、彼はずっと彼女の涙を浮かべた姿を思い出していた。泣かせてしまったことに対して痛惜という以上の痛みを感じていた。

なぜ、もっと大事にできなかったのだろう。

なぜ、もっと誠実に対処しなかったのだろう。

しかし、なかったことにはできなかった。それはわかっている。

・・・ただ、慌てていた。

彼女を失いそうな気がしてただ落ち着かない。

気が急いで、何もかもが手に付かないのだと言おうものなら彼女は青磁の元を躊躇なく去ってし

まうだろう。そういう潔さも持っている人だった。

一步間違えれば犯罪者だな、と苦笑いしながら青磁は彼女の家の扉の前でただひたすら待った。アポイントを取らないで待ち伏せするのは反則であるとしか言いようがない。

でも。逆に、恋愛に決まった法則があるのならそれを知りたいとさえ思う。今、彼はどのように良いのかわからずただ彼女に会いたいと思っていた。

何をどう言おうというシナリオができているわけでもない。ただ、謝りたかった。それが自己満足だったとしても。

「・・・何をしているの」

どれくらい時間が経過したのかわからなかったが、手足がすっかり冷え切った頃に、彼女の困惑する声が聞こえてきてそちらを向き直った。ずっと扉を凝視していて考え事に耽っていたらしい。陽は角度を変えていたし、彼女は頬を赤くしてこちらを睨み付けるように見ている。ああ、怒っているなとわかったけれども。彼女に会えたことが嬉しくて、青磁は微笑み、そしてすぐに笑みを消した。まだ彼女に謝罪していないのだから。綻びは必要とはされない。

しかし心が躍ってしまう。

彼女は両手に荷物を持っていた。日用品を買い足したらしく、彼女の小さな手には余りある大きさだったので、青磁は慌てて手を伸ばした。

「持つよ」

「だから、何をしているのかと聞いているの」

彼女は少しむっとしたように言った。怒っているなと思ったけれども、それよりも彼女の負荷を和らげたかった。

「君を待っていた」

彼はそれだけ言うと、彼女の手から荷物を挽ぎ取るようにして受け取った。ずしり、と重かった。荷物持ちでさえ嬉しいと思うのに。わずかに手が触れて、彼女ははっとしたように顔を上げた。青磁の手が予想以外に冷たかったと感じたのだろう。心優しい彼女は自分の手の冷たさよりも青磁のそれを気にする。

彼女はやや考えた後に、肩を竦めて鍵を取り出して開錠した。ふわり、と彼女の薫りがして、青磁は目を細める。彼女の空間に入ることができるという歓びを噛みしめる。それから、胸の高鳴りも。

「荷物、ありがとう」

彼女はそう言いながら、扉を開いた。肩に掛けていたショルダーバッグを持ち替えながら、玄関の照明に電源を入れる。部屋の中は射し込んだ西日のせいでそれほど冷気は感じなかった。

正面に見えるベランダに面している窓に掲げられている薄いレースのカーテンがとても白くて彼女の几帳面さを感じさせる。

ああ、どうしよう。彼はそう思った。受け取った荷物を投げだして彼女を抱きしめてしまいそ

うだった。

彼女は靴を脱いで、先に部屋に上がったが青磁はそのまま玄関先で立ったままだ。どれほど親しい間柄であったとしても許可されなければその先に進むことはなかった。

決まった場所に鍵や鞆を置くのは彼女の習慣だ。青磁の家にやって来ても彼女はいつもきちんと・・・一時的な来訪者であることを主張するかのように来客として振る舞う。一緒に暮らそうと言っても。どれだけ夜を重ねても。彼女は、決して一線を越えない。

暖房の電源を入れたらしく、電子音が小さく響いた。

そこはとても静かな空間で、彼女の部屋には年頃の娘が置くような細々したものはほとんどなかった。彼も飾り立てることを好まないの、彼女のそういう趣味嗜好が気に入っていたところだ。いや、すべてがもう、肯定されるべき事項になってしまっていると感じた。今、改めて。盲目になっているとは思っていなかったが、どうやら・・・

彼女に対しての感情が爆ぜるのではないのかという恐怖というか、緊迫を自分の中に感じていた。

自分が抑えられなくなってしまった時に、彼女を壊してしまいそうな気になってしまう。

マクドゥガル家の厄介な気質であった。大事にしたいのに・・・時折、狂乱の波に溺れてしまう者が居る。彼女が必要であるのに彼女をそんな波に巻き込みたくなかった。

立ち尽くしたままの青磁を見て、彼女は眉を動かした。上着を脱ぐととても薄着で、短い外出を想定していたものと思われた。彼は、手の中に残っている紙袋や布製の持ち込み用のそれを見つめる。

そこで、なぜそれが重いのがわかった。

彼の常用しているミネラル・ウォーターであった。すぐにわかった。それは、自分の為に彼女が買い揃えてくれたものなのだ、と。

彼は玄関先にそれを置く。涙が出そうなほどに、嬉しかった。彼のことを彼女が考えてくれたのなら。それ以上に、何を求めるのだろうか。自分が願ったさもしい願望を恥ずべきだ、と思った。

彼女は青磁に背中を見せながら言った。

「そこは寒い」

■03

静かな怒りに満ちてなお、青磁のことを気遣う彼女が愛おしかった。

「エリナ」

青磁は彼女の名前を呼んだ。

「今、お茶を煎れます」

彼女の素っ気ない言葉が青磁の胸を抉る。腕を伸ばして、駆け上がれば彼女は目の前にいる。

「青磁」

彼女が彼の名前を呼ぶ時には、彼は痺れを伴う。

どうしようもなく、夢中になってしまった。

彼女のたったひとりになりたい。永遠になりたい。

「そこにひとりで居ないで」

それが彼の心を決めた。

この人を、最後の人にしようと思った。

自分が傷ついているのに、詰ることもしないで青磁を気遣う。彼は紐靴を解くこともしないで、そのままもどかしげに踵を踏み、靴を捨てるようにして彼女の領域に上がり込んだ。

そして彼女に向かって彼は体を傾ける。

外気の残る、冷たい上着のままで。

初めての恋に戸惑う者の様に。

どうして良いのかわからないままに・・・翻弄される。しかし、彼女がそうしているのではない。

紊されているのは彼の方で、彼女は悲しんでいる。

彼は荷物を床に置くと、そのまま頭を下げた。

「すまない」

青磁の謝罪に、彼女は無言だった。

しかし、しばらくして声を出す。

「なぜ、謝るの？」

「君を泣かせてしまったから」

彼は頭を上げて言った。普段、彼は頭を下げることはしない。マクドゥガル家の次期当主であるという自負があり、そのように教育されてきたからだ。

しかし、彼女は別だ。

素直に、ひとりの男として愛しいひとの心を解したいと思うから。

「泣かせたくてああ言ったわけではない」

「わかっている」

弁解を聞きながら、彼女は静かに言った。彼が決して、本当にそう思っているわけではないことは、これだけでは伝わらない。

それならなぜ泣かせたのだ、ともうひとりの自分が彼に問いかける。

思ったままを言うことはできなかった。彼女を独り占めしたくて、彼女に怒って欲しかったのだと言えなかった。ただ、彼女はそれでもわかっていたと思われた。

なぜなら、それ以上は尋ねなかったから。

彼は、彼女の傍に寄った。自分が特別だと思ふ傲慢な気持ちはどこかに失せていた。彼女の部屋に上がり込むことを赦されても、それは彼が寒気の中を勝手に彼女の帰りを待って佇んでいたの
で暖気を与えようとしただけのことなのだ。

「私が勝手に泣いただけ」

「そうじゃない」

彼は辛そうに言った。本当に息苦しかった。彼女にそう言わせてしまう自分が不甲斐なかったのだ。

何の事かわからないと逸らかされるより誠実な回答だった。彼女は向き合うことに恐怖を感じる人ではないのだ、と思う。

涙を流したことを恥じてはいないのだが、思うところがあったのだろう。

「そうではないだろ」

青磁は低い声で言った。まだ、彼女に触れられなかった。

このまま抱きしめてしまいたいと思った。しかし、それでは話が有耶無耶になってしまう。会いたくて、ずっと姿を探していた。連絡が取れないことに恐怖を感じた。

それでますます彼女が必要だと青磁は思ったのだ。

ずっと笑っていて欲しいと思う。そして、彼の傍で彼の為に朝顔になってくれると言ってくれた彼女をずっと大切にしたいと思っていた。

俯く彼女の横顔が凜としていて美しい。

決して派手やかさはないけれども、彼女の芯の強さを知っている青磁は、彼女を眩しそうに見つめた。

キッチンに立った彼女の横顔を見ながら、彼は言葉を詰まらせる。

待つ、と言ったのに。

彼はずっと待てたのに。いざ、彼女と距離が近くなると幼い独占欲で彼女を困らせてしまった。心を疑ったのではない。けれども、結果的にそうってしまった。

彼女が青磁の他の者と恋愛関係にあるとは思っていない。たとえそうだとしても。彼に魅力や引力がないから、彼女が余所見をしてしまうのだと思った。

紫電と呼ばれる鋭い視線を持ちながらも、彼女を射抜けない彼はもどかしさを感じていた。

自分はどうしたら彼女の心を安らげることができるのだろうか。

彼女が不誠実であることはあり得なかった。たとえそうであったとしても、彼は後悔しなかった。彼女のことを好きになったのは、青磁なのだから。

でも、彼女を悲しませることはそこには含まれていない。彼は激しく後悔していた。

何故、あんなことをやってしまったのだろう、と。

だから正直に告白した。それを拒まれたら・・・もう彼女とこうして会うことはないのだろうという覚悟とともに。

「オレ・・・本気だから」

彼は掠れた声で言う。心を込めて。

「どうしたら君と一緒に未来を伸ばしていけるのか、考えている」

追いつめる様な言葉だとは思ふ。でも、それ以上の言葉を探す余裕がない。

もう、彼も限界だった。

溢れて迸る想いが止められなかった。こんな想いはもう二度と味わいたくない。

彼女と心を通い合わせたい。肌の温度だけではなく心の温度も知りたい。

愛している以上に本気だった。もう、どうにもならないほどに。

あのフランスの華が、ファム・ファタルと定めた人に惹かれ続ける、抗えない力を彼も感じていた。抗えないのではなく、抗いたくないのだ。

運命的な出会いというものではなく、彼が彼女を定めてやって来た。

それを彼女は気にしている。それなのに、彼は彼女を束縛し、彼女のことを責めるような言い方をしてしまった。それが彼女を傷つけた。

でも、彼女の涙さえ、彼は独り占めしたいのだ。

なんという欲深な願いなのだろうと思っていた。

彼の家の、詛われた愛の呪縛が発動してしまっているのではないのかと錯覚するほどに。彼は心を震わせた。

不釣り合いだと思っている。彼女が青磁によくそう言う。けれども、青磁の方がいつもそう思っていた。彼女のような心優しい魂を、あのマクドゥガル家の土地に持ち帰ってしまうのはとても残酷なことなのではないのだろうかと思った。

愛が深まると、更に頻繁にそう思うようになった。

■04

「一緒にいるということだけがすべてではないでしょう」

「どうして君は・・・」

絶句して青磁は言葉を途切らせた。彼女が意地悪を言っているわけではないことは承知している。でも、青磁との未来を少しでも考えてくれたことはないのだろうかと思う気持ちになってしまっていた。

彼女がイエスと言ってくれた時のことを忘れない。しかし、それ以上を彼女は望んでいないことがわかると、青磁はそれが切なくなった。

もっと多くを望んでくれても良いのに。

そう思ってしまう。

彼が求めるように彼女からも求めて欲しいと願った。

焦がれている。

もっと近くに居て、ずっと近くに居たい。

彼女はそれっきり黙り込んでしまった。青磁も黙ったままだった。

しかし、彼は諦めなかった。諦めることはやめたのだ。そう宣言した。

詰るのは簡単であった。

しかし、それに抗う。

責め立てて、その先にあるものは無しかなかったから。そんなことで彼女を失いたくはなかった。

「すまない」

彼はもう一度謝った。

「疑ったわけではないんだ。ただ・・・君に否定して欲しかっただけだ」

青磁は正直に言った。すべてを述べるのが正しいことだとは思っていない。

しかし、今回は正直に言った。疑っていると思われてしまうことの方が彼は怖かった。彼女が他の誰かと青磁と同じ様な時間を持っているとは考えていない。彼女は、そういうことには狡い考えを及ぼすことができない人だから。

だから、これは青磁がひとりで片付けなければならない疑問であったのだ。

相手に尋ねてはいけない内容だった。

実を掴むことはあっても、実を結ぶことはないのだから。

「ごめんよ」彼はもう一度囁くように謝る。彼はそれだけを言って、そっと彼女に告げた。

「帰るよ。今日のところは」

本当は、このまま抱きしめてしまいたかった。そのままもどかしく唇を重ねて、潰されてしまうと彼女が言うほどに強く・・・彼女の体を彼の体で覆ってしまいたかった。でも、彼はそうしない。彼女を怖がらせたくない。

いや、本当は彼の方が青磁という人物を怖いと思っていたのだ。

自分自身のことを。

マクドゥガルの男は、どこかそんな気質の者が多い。誰かを深く愛しすぎて、破滅に導くことが多々あった。新しい愛を見つけることが不得手で、ひとりと決めてしまうとそれ以外を考えられなくなってしまう。

自分は、そんなことはないと思っていた。あの人に出会うまでは。マリナ・イケダは、彼に愛を教えたが、同時にマクドゥガル家の男であるということも再認識させた。

新しい恋に踏み切ることに言い訳を用意しなければならなかった。

待つと言ったのは、自分が楽だったからだ。確かに待つことは辛いことであったけれども、彼はその間、彼女のことを好きでいられた。

そして自分の恋慕が成就しそうだと思うと途端に彼は更に加えて望みを持ってしまった。

愛は、望んではいけないことなのか。

そんな、傲慢な気持ちを持ってしまったのだ。

それを敏感に察知して彼女は涙を流したのかと思うと・・・

彼は不安な気持ちになり、どうしても会いたくなってしまう。

勝手な想いに振り回された彼女が静かな憤りを感じたのは無理もないことだと改めて思った。

だから、もう一度言った。

心を込めて。本当に、失いたくないのだ、と思いながら。

「君が好きだ。泣かせてすまない。でも、オレはこうやって君を困らせる。

・・・それはオレが未熟だから。

でも、その度に君と話し合いたいと思う。だから、待つ」

片方だけ薄い瞳に僅かに痛みが走った。

これを言って彼女が去ってしまうのであれば、彼は彼女の幸せを願って彼女の前から去ることも考えていた。マクドゥガル家に入ってしまうえば、彼の知らないところで彼女の苦悶が生まれることは容易に想像できた。

それでも戻れない路に彼女を連れて行く。でもひとりにはさせない。彼は彼女を愛し彼女を護り、彼女が見聞きしたものを受け入れる。

それより何より・・・生涯をともにするのは彼女が良いと青磁は願っていた。

これほど言い募っても、結局は彼女を愛しているのだ。心の底から。

誰にも渡したくない。

だから、あんなことを言ってしまった。

「今日は寒いから、気を付けて」

彼はそれだけを言うと、彼女に背を向けて立ち去ろうとした。

今日は、会えただけで十分だった。

彼女に謝りたいが、今回だけで挽回できるとは思っていない。

信頼というものはそういうものだ。一度崩れてしまえば崩れたところだけを修復すれば良いのだというわけではないのだ。根柢から作り直す必要がある。

青磁はそれを身を以て知った。

ここで居座るつもりはなかった。

彼女の心の傷の方が気になった。自分の傲慢さを正当化するつもりにはなれなかった。

頬を撫でて、彼女を抱いて、そしてごめんと囁きたかった。

彼女の領域に侵入するつもりはなかった。本当はそこも彼は共有したかったけれども。でも、時期尚早だと思った。

「邪魔をした」

彼はそれだけを言うと背を向けて、外に向かう。彼女が病気であったり困っている状況でなければ、それだけで安心した。

シャルル・ドウ・アルディが、ずっとファム・ファタルを想い続けていた時の心情がこの時によく理解できた。

それから、彼ななさやかな昏い物思いも。遠くで見守っているだけなら。きっと、彼はそれ以上彼女を悲しませることはないのだろうと思ったのだろう。しかし、青磁はそうではなかった。目の前にいる人の歎きさえ共有したいと思っていた。その原因が青磁であったとしても。

「謝りたかった。それだけだから」

彼はそう言い捨てるようにして彼女に背を向ける。

なぜ、いつも彼女に託してしまうのだろう。

自分で決められないからなのか。あまりにも残酷だと思った。

だから、彼は安易であったのかもしれないが、この場を去ることにした。彼女の領域に入っはいけない。そう思ったから。

自分は割り込んでしまっている。そう思うから。

自己満足だとはわかっている。

「青磁」

彼が立ち去ろうとしたときに、彼女はそっと彼に声をかけた。

体に痺れが奔る。彼女が彼の名前を呼んだだけで。ああ、もうこの人は自分の朝顔そのものなのだ、と思ってしまう。こんな時なのに。こんな時だから、そう思うのだろうか。

「・・・うん」

彼は頷いた。彼女が自分を気に懸けてくれることを感じ、ただ心が熱くなる。

どうあっても、どうしようもなく自分を平静に保っていることが出来なくなってしまっていた。

彼女に背を向けて、深呼吸する。本当は、帰りたくなかった。このまま、彼女と一緒に時間を過ごしたいと思っていた。

「あの、お茶を・・・」

「駄目だ」

彼は絞り出すようにして言う。もう、ここには居てはいけないと感じた。

「ありがとう。でも、もう、帰るよ」

青磁はそれだけ言うと、外に向かって歩き出す。

もう、心臓が張り裂けそうなくらい緊張していた。

■05

「青磁、待って」

彼女は彼を引き留める。寒い外気にこのまま送り出すことに気が咎めるのだろう。彼女はそういう人だった。けれども、今の青磁にはそれは残酷すぎる優しさだった。このままここに留まれば、きっと彼は彼女の赦しを得るまでこの問答を繰り返すのだろうと予想していた。そしてそれは確実なことであったから。

だから、彼は彼女の甘い誘いを振り切って断りを入れた。彼女のことが好きだから。このまま流されてはいけないのだ、と思った。

一時の感情に身を任せる相手ではない。彼女の気持ちを尊重したい。しかし決して諦めはしない。・・・それくらい、本気で彼女との未来を考えている。

その大事な人を泣かせてしまった。彼の浅慮からくる言葉によって。

彼女に気遣われたからそうするのではなく、彼の誠意を見せたかった。

それも自己満足であるかもしれないけれども。それでも、彼はもうこれ以上彼女を悲しませたくなかった。涙を流す彼女を美しいと思ったけれども。その美しさをもう一度見たいとは思わなかった。

いや、本当は・・・彼女の涙は自分だけに見せて欲しいと思っていた。

狂おしい思いに溺れたくなくなってしまう。彼女は、彼を支配する。笑顔でもって。涙顔でもって。

「あのさ」

彼は静かに言う。後ろ髪が引かれる、というのはまさにこのことだった。彼は心を抑える。

「こういう時に・・・引き止めるのは駄目だ」

青磁は忠告する。歯止めが利かなくなることはわかっていた。間もなく、その箍が外れてしまうということも。だからはやくここを立ち去らなければならない。

「話がまだ、終わっていない」

いや、話はもう終わっているのだ。青磁は思った。

「青磁の問いに答えていない」

青磁は深呼吸した。あの問いかけに、イエスかノーか、という回答は必要ないのだ。

「それは、もういいんだ」

青磁は呻く。少なくとも、他の多くの者よりも、彼は彼女に近い場所にいる。それだけで満足できなかった自分が悪いのだ。どれくらい近い場所にいるのかを確認する時期ではなかった。彼が彼女を悲しませてしまったという事実は変更しようがない。

しかし、彼女は青磁の懇願に近い途絶を受け入れなかった。

「私は・・・」

「無理しないでくれ」

彼は振り返って言う。彼女の言葉がわからなかった。どんな答が戻ってくるのか、彼は想像できなかった。

青磁の知らない彼女の生活や人との関わりを知るのが怖い。それなら、知らないままで良い。そういう気持ちが働いた。恋に惑わされて愛を失いそうになる。

だから、ここで引き返さなければならぬと考えていた。

彼女に無理に何かを言わせたいとは思っていなかった。勿論、彼ひとりだけなのだと言いたい気持ちもまだ存在する。けれども、それよりもなによりも・・・彼女の気持ちを優先させたい。傷ついた彼女の心を、彼の前で再び曝け出すことが良策とは思えなかった。

「オレは君に多くを求めてしまったから」

彼はそれだけを言うと、話を終わりにしようとした。

「なぜ？」

その時。

床を蹴る音がした。

そして、彼女の問いかけとともに、青磁の上着を軽く叩いた音がしたので青磁は驚いて振り返る。早く帰れと押し出されたのかと思った。しかし、そうではなかった。見れば、彼女が俯いたままで彼の背中のおすぐ近くに立っていた。

彼は彼女の名前を呼ぶ。声が震えていた。自分でもわかる。拳を握り、頬を引き締める。駄目だ、と言いつ聞かせる。

「あり得ないから」

彼女は言った。わかっているのに、なぜか苦しい。

「私は、青磁以外の人とは・・・その・・・あり得ないから」

張り詰めた空気の中で、彼の声が震動する。聞きたかった言葉なのに、彼の鼓動は速まるばかりで、目眩がしそうなほどに彼を揺らさせる。

かっとな頬が紅潮し、体の血が沸騰しそうだった。

なぜ、と問いつかけた彼女の問いに、彼は応じた。

「君が好きだから。どうしようもなく、好きだから」

だから、言いつしまった。

彼女は青磁の欲しい言葉をくれた。青磁だけなのだ、と言いつ欲しかった青磁に、彼女は告げてくれた。

今、彼が欲しかったその言葉を聞いたのに締め付けられるほどの苦しさだけしか残っていない。

彼女はまたひとつ、彼の背を叩く。乾燥した音がまたひとつ生まれた。

息ができない。苦しい。冷えた空気が、暖かい空気に循環されていく。

頬を叩かれるより、痛かった。彼女は軽く、彼の背を打つただけなのに。それなのに、その度に何かがつ削ぎ落とされるような気がした。彼の物思いも、彼の哀しみも。

「堪えきれなくなるから」

彼はやっとのこと言いつ言った。正直に言いつった。

「オレに優しくしないでくれ。声もかけないでくれ。今は・・・」

彼女のことを信じていた。決して、彼以外にこうすることを赦していない人なのだ。

青磁は彼女の気配を背に感じながら、自分の中の焰と闘う。

彼は、体を強ばらせる。彼女が腕を回し、彼の体を抱きしめたから。長身の彼は更に上着を着ているので、彼女の手は回りきらない。けれども、彼女の温度がじわりと彼の体に浸透していく。

彼女は、彼の怖さを知らない。理性を失い、彼女を壊してしまいそうなくらい力強く抱きとめて・・・そして彼女をどこにも行かせることも認めずに、彼はマクドゥガル家に連れ去ってしまうだろうという予感があった。彼女の未来も希望も踏みにじって。

そういう・・・自分の心の中に巣くうものを彼は怖れていた。歪んでいると思う。しかし、彼は彼女をそんな狂気から護りたかった。矛盾していると思う。

けれども、彼の心には獣が宿っている。麒麟という聖獣になぞらえているけれども、それは単に、餓えた獣でしかあり得ない。マクドゥガル家の男子は、吉兆どころではなく病んだ魂そのものが形を作っているだけなのだと思わざるを得ない。

自分は、溺れたいのか。それとも浮き上がりたいのか。

よくわからなかった。しかしながら、彼は思うのだ。彼女が好きで・・・彼女を愛しすぎて、踏み込んで良い距離を間違えてしまった。そしてそれが彼女の涙を呼んだ。

狂気の波に、彼は彼女を巻き込んでしまった。それなのに、彼女は青磁を気遣う。その心が切なかった。そして、そんな彼女の思いを他の誰かに渡したくはなかった。

「あの・・・エリナ」

彼は彼女の名前を呼ぶ。どうあっても、彼はここに留まってはいけない。

このまま彼女を抱いてしまいそうになるから。

しかし、彼はそれで終われない。

それで解決できるとは思えないから。

でも、彼は・・・自分の獣炎を吹き去ることができそうにないという予感もあった。

彼女を乱すだけでなく、己のことも乱れると思った。乱される。

彼女に、彼は乱される。でも、彼は自分のことではなく彼女のことを思う。

■06

「私はそんなに器用ではない」

ああ、わかっているよ。彼は心の中でそう叫んだ。

彼も彼女も器用とは言えない。月日を増す毎に、彼と彼女は答えのない迷宮に進んでしまうと思われた。

わかっている。彼も、それほど器用ではない。彼女の他に、誰か別の人を選ぶほど彼は臆長けているわけではないのだ。

ああ、もう、駄目だ、と思った。それでも彼は・・・終わりにできずに彼女に振り返ってしまった。

彼女の顔が近くにあつて、青磁はとうとう、体の向きを変えて振り返ってしまった。

少し怒ったような顔をして、頬を赤らませている彼女が見えて、彼は彼女の肩を掴みそして強引に自分に寄せた。

彼女の温度を手の平に感じて、彼は目の前が一瞬霞んだ。焦がれた彼女の温度がそこには存在する。背中に手を回し、彼は彼女を胸に入れる。

「そんな顔を見せないで」

言葉と違う感情を持っていた。彼だけにはそんな表情を見せて欲しい。他の誰かには見せないで欲しい。

彼女は黙ったままで彼の抱擁を受けていた。

「ごめんよ」

彼は囁く。部屋の片隅で、彼女は黙って青磁に抱かれていた。

「本当に、すまない」

「もう、いいの」

彼女はそう言った。

それを聞いて、彼は安堵する。

でも。

彼女の哀しみを、彼はそれでも忘れることはないだろう。

「君を束縛するようなことは言わないよ・・・これからはずっと」

青磁は誓った。彼女のことを大事にしたいと改めて思った。

「そうではなくて」

彼女が青磁の言葉を否定したので、彼は彼女の髪の毛の匂いに混じった彼女の真意がわからずに困惑した表情を浮かべる。

青磁は、彼の誓いを否定する彼女の顔をじっと見つめた。片方だけ薄い瞳が彼女を捉える。彼女だけは、彼の視線を怖いと言わなかった。それは青磁という人物の個性であるけれども大好きな絵を描くことができるようになるための治療であるのならば辛くても受けるべきだ、と彼女はいつもそう言って彼を優しく肯定する。

彼女が何を言いたいのかを推し量る。しかし、彼女は彼の胸の中で静かに彼の回答を待っていた。しばらくして、彼は彼女の待っている言葉に行き着いた。正しいかどうかはわからない。背の筋肉が張り、彼は彼女をこのままにしておけない、と思う。愛おしさでいっぱいになった。

だから彼は言い直した。強がりを言っても仕方がない。彼のありのままを言う。

「今の言葉は撤回する。本当は、君のことを束縛したいし、君の唯一になりたい。他の人に触れられて欲しくないし、オレを同じ様に君のたったひとりにして欲しい」

たくさんの願いを言ってしまった。それで彼女が彼を嫌悪するのであれば、それはもう仕方の無いことだとして受け入れるしかなかった。

彼女を愛していた。勇気をもって、彼は彼女に一步近付く。

「欲張りね」

彼女は言う。そうだな、と青磁は言った。確かに、彼は欲深い。たくさんのことを彼女に求めて

いる。

マクドゥガル家の夫人として入って欲しい。彼と一緒に、あの家の謎を解消することに加わって欲しい。彼女だけが、彼の朝顔なのだと決めてしまったから。勝手な想いだとはわかっている。でも、彼女以外には考えられない。

自分の中にある、仄暗い想いを彼女は知っている。

肉親であるのに遠く離れなければならなかった家族や、遊学という理由で様々な国を渡り歩くことになった彼の経歴について、彼女は多くを知っている。それでも、変わらずにいてくれた。

「そう。欲張りだけれども・・・君が欲しい」

彼は熱っぽく囁く。それがすべてだ。彼の、願いのすべて。

絵を描いていたい。マクドゥガル家の当主の座を捨てられない。彼と同じ名前であった誠次のことを考えるようになった。彼は、何を犠牲にしても、彼の熱情を残しておきたいのだと考えていたのだろうと思う。それが悲劇を招いたとしても。

そしてそのことが、青磁のこれからを左右させるような出来事になったのだということも彼女は知らない。彼女に話す時が来るのは・・・まだ先の話だ。

これから先の人生は、彼女の絵を描いていたいと思った。

それから、マクドゥガル家のあの敷地の風景を。彼の育った場所であり、彼の悲哀を生み出した場所でもあった。

「君が欲しい」

彼の言葉はこれで尽きてしまった。けれども、それがすべてだった。

彼女を支配したいのではなく、ともに歩みたいと思っていた。それこそが、マクドゥガル家の者が求めるすべてだと思う。狂ってしまうかもしれない恐怖に抗い、それでも当主と一緒に人生を歩む人を求めて・・・青磁は彷徨っていた。けれども、そんな人は見つけることはできず、愛している人に対して理解を求めるしかなかった。

彼女のように、強い意識をもって青磁と対峙することができる人はとても・・・そう、とても少ない。

また己の願いだけを言ってしまった。青磁は深く悔やんだが、出してしまった言葉をなかったことにはできなかった。

どうにもならないほどの激情が湧き起こる。抱きしめているだけでは終わることのできない、目眩がするくらい強い衝動が彼をじわりじわりと浸食していく。

ぎゅっと彼女を強く抱きしめる。彼女の嫌がることはしたくない。彼は彼女が欲しかったけれども、彼女が望まないのであるならば、このまま帰るつもりだった。

勢いに任せて彼女を抱くということはしたくなかった。特に、彼女の部屋ではそのような行動は控えたかった。

すると、彼女は彼の胸の中で肩を強ばらせて苦しそうに身動きした。力が強すぎたのだろうか。彼は、慌てて腕の力を緩める。

耳元のピアスが冷たく感じた。体温が上がっているからだ。寒さはもう感じていない。

彼女は黙ったままで彼の背中に腕を回したので、驚いた彼は体を震わせた。

待つと言ったのは青磁からであったのに。なぜ、待てないのか。彼女が責めても仕方が無いと思った。しかし、彼女は彼の体に寄り添った。

「帰れなくなる」

彼は正直に困窮した状況を訴えた。

「帰るの？」

彼女の声に、もう後戻りはできないと思った。彼女の頭をかき抱き、髪の毛に指を埋める。まだ冷気の残る彼女の髪から彼の求めていた香りが浮かぶ。

身を屈めて彼は彼女を抱きしめた。

なぜ、彼女は挑発するようなことばかり言うのだろう。そう思ったこともあった。

けれども、それは彼を煽っているのではなく、彼女が何かを伝えたいのだということに気がついた。彼女はいつも何も求めないと思っていたけれども。本当は・・・彼女は青磁にいつも訴えていたのかもしれないと思い始める。

そう考えると何もかもが納得できた。

「好きだ・・・好きなんだ。待てないくらい」

彼は彼女に告げる。それから彼はもう一度謝った。

「泣かせてごめん」

「青磁」

彼女は顔を上げた。彼の名前を呼び、大きく目を見開いて彼を見つめていた。

彼女の頬に自分の手の平を添える。何もかもが愛おしい。

恋に堕ちたらそれが恋なのだ。

彼は、改めてそう思う。

それから彼は再び囁いた。

「もう、帰れなくなった」

■07

彼は彼女の額にキスをする。それから、膝を屈めて彼女の唇を奪う。

何度唇を重ねても飽きることはなかった。

彼女の柔らかい唇の感触が彼を扇情する。

黙って口付けを受ける彼女の顔に手を添えて何度も自分を重ねる。

それから、立ったままで彼は彼女に口吻の雨を降らせた。

彼女の腕の上に青磁の腕を回し、そして軽く持ち上げる。

帰れない。帰れない。

彼女の傍で呼吸したい。

そう思いながら。

彼は彼女に頬を傾けて呼吸を止め、そして彼女の唇を啄み、貪る。

彼の心は躍る。彼女が抗わないで彼と重なることがこれほど嬉しいことなのだと思いつける。激った感情を正義とは思わないが、彼女に対してだけは、青磁はいつも常ならぬものを思っていた。

恋の惑いが彼を狂わせているとは思わなかった。

彼は、彼女のすべてが・・・彼の未来に繋がると思っていたから。

でも、彼女のすべてはわからない。

・・・青磁に付き纏う彼の物思いを彼女は知っているのに。

「もう少しだけ、待って」

彼女から声が漏れた。青磁の心が震える。

ああ、もう、戻れない。

彼女が初めて待つということに対して返事をしてくれたから。

彼は両眼を大きく見開いた。彼女は繰り返さなかった。正確には、繰り返せなかった。再び、彼が顔を傾けて彼女に口吻したから。

どのように返事をしたら良いのかわからなかった。

でも、彼女は間違いなく彼の朝顔だった。彼女の精一杯の・・・ぎりぎりの譲歩だろう。これまで何も言わなかったのだから。

「待つよ。でも、今は待てそうもない」

矛盾する言葉だと思ったが、青磁はそれだけを囁くと彼女を強く抱きしめた。

体が震える。寒くはない。徐々に切り替わる乾燥した暖気が部屋を暖め始めていた。しかし、体が震えるのだ。彼女を悲しませてしまったのに、彼女は青磁を気遣うから。歓喜の余り、彼は彼女を強く抱いた。この人を好きになって良かった、と改めてそう思った。

頬に、額に、髪に、彼は唇を落とす。恋の苦しさは承知していたことであった。彼女に想いが通じた後にあるのはもっと苦しい愛の煩悶だった。

それでも、彼女の傍にいられる。彼女は待つな、とは言わなかった。もう少しだけ猶予が欲しいという意味として彼は受け止める。そしてそれはイエスかノーかという答ではないと思われた。迷っているのではなくて、彼女は考えているのだ。

思わせ振りのことをして彼を弄ぶことができる彼女ではない。

彼は彼女の首筋に手を伸ばした。びくり、と弾けたように彼女が身動きして目を瞑る。

彼は彼女の体を抱き、そして部屋の奥へ連れて行く。後ずさりする彼女の体を支えながら、彼はベッドに彼女を座らせた。綺麗に整えてある。彼女の几帳面さは知っていたけれども、彼は端に腰掛けた彼女の前に跪いた。

「座って」

「もう座っている」

彼女は驚いた顔をしながらもそう答えた。

彼が真剣な面持ちで彼女に話をしようとしている気配を察知したのか、彼女は立ち上がることはなかった。

「聞いてくれ」

彼は彼女の前で、床に跪いた。それでもすっと背を伸ばして、彼女の顔を覗き込む。膝を合わせて手を重ねている彼女に、青磁は微笑んだ。

彼女は当主夫人としての資質を兼ね備えている。

生まれた時から教育されていなくても。

条件ではない。

何より、もっと必要なことがあった。

彼はこんなにも彼女を愛しているということだ。

彼は彼女の手を取った。そして、ほんのりと暖まった彼女の指先を伸ばし、彼はそこに口づけた。愛を込めて。願いを注いで。

彼女と温度を重ねている時とは違う熱がそこにはあった。

何もかも・・・すべてを捨てて、彼女とマクドゥガル家とは関わりのない場所に行きたいと思う時もある。それでも、彼は、あの家の忌まわしい呪縛を終わりにさせたかった。マリナ・イケダとともに読み進めたあの悲劇を知ってしまったから。

それからずっと考えていた。

彼の家に纏わるものを、彼は取り除きたい。彼の次の世代には彼の味わった苦しみは伝えたくない。だからこそ、彼女を選んだ。思惑があった出逢いであった。

でも、彼女を愛してしまった。深く、強く。

どれほど彼女を求めても、彼はマクドゥガル家の継嗣である。次の当主となる。彼女にそれを見届けて欲しいと思っていた。そして、彼と彼女が紡ぎ出す真実は遠からずマクドゥガル家を変えるだろうと思っていた。それは想像ではなく、近い将来実現する事実だと青磁は認識している。

「妻として迎えたい」

多くのことは語れなかった。しかし、それだけをやっと言えることができた。

求婚の言葉には足りないと思っていた。でも、彼はそれで十分だと思っていた、彼女には十分伝わっていた。

巡る季節を彼女と過ごしたいと思っていた。胸が押し潰されそうになるほどの苦しさや痛みが、彼を現実を引き戻す。

こうして手を握っているだけでも彼は彼女を失いたくないと思ってしまう。彼女の指先が、ぴくりと動いた。しかし彼女は手を引くことはない。

「オレは本気だ」

彼はそれだけを言うと、彼女の目をじっと見つめる。有無を言わさぬ強い視線を自分が持っていることは承知している。しかし彼女にはそれは通用しない。だからこそ、彼女を遠慮もなく見つめる。幾度か頬を叩かれたことがあったが、それでも穏やかな彼女が感情を露わにすることが嬉しくて、幼いこどものように無邪気に喜んでしまう自分に嫌悪したこともあった。そしていつの間にか、彼女を目で追いかける時間が長くなった。観察していた頃とは違って、無意識に存在を探してしまう。

「返事は、待つよ」

彼は言った。彼女は何かを言おうとして唇を開いたが、それは声にならなかった。彼女も目を逸らさずに彼を見つめている。

誰かに用意される未来は彼には必要ない。

彼の事情に彼女を巻き込むことは心が痛む。でも、他の人は考えられない。青磁は、これから待ち受ける苦難と一緒に切り開ける人を求めている。だからといって誰でも良いわけではない。しかし彼とともに生きるということは、幸せなだけの日々ではないということは確かだ。

そんな中に彼女を連れて行くのは狂悖であるとしか言いようがなかった。

もう、自分は狂っているのかもしれない。そう思った。

すると。彼女がふっと微笑んだ、と思った途端に彼女の顔が近付いて来たので彼ははっとして顔を上げた。彼女は彼に指先を絡め取られたまま、体を屈めて彼の頬に唇を付けた。彼女からキスをするということは殆どなかったので、青磁は驚いて彼女の手を強く握り返した。彼女は顔を顰めて表情を変える。

「痛い」

彼は慌てて手を離した。しかし、今度は指先ではなく彼女の手の甲を掴み、そして彼の両手で壊れ物を扱うかのように優しく包んだ。

「今のは、イエスという意味？」

「返事は待つと言ったばかりなのに」

彼女は困ったように首を傾げた。青磁は苦笑する。

良かった。いつも通りの彼女だ。そう思った。

「君の笑顔をずっと見ていたい」

心に思ったままを伝える。彼女の泣き顔ではなく、彼女の微笑みが彼を癒した。それは本当のことだ。

「そういうところが・・・」

彼女が彼を諷めようとしたが、それは彼のキスで遮られた。

押しのけようとする彼女の手を握ったままで、彼は彼女に再び唇を重ねる。どうにかなってしまいそうなほど、愛している。

彼は彼女をベッドに横たえる。彼女は横を向いて困ったようにしていた。押し返して拒むのなら、彼はそこで帰るつもりだった。しかし、彼女はそうしない。

彼は器用に上着を脱ぎ捨てた。床に矧ぎ落とすように置くと彼女が驚いて声を出した。

「仲直りのことはなんて言う？」

彼は彼女の額にキスをしながら、質問した。彼は外国人だ。まだまだ、この国で知らない言葉が多かった。すると彼女は静かに答えた。

「成ぎ」

「そうか。綺麗な言葉だ」

彼は甘い微笑みを浮かべて彼女の散った髪の毛を指で梳いた。

「・・・続けて良い？」

彼はそっと尋ねた。眸の奥がちかちかと明滅を繰り返す。彼は彼女の溜息を聞いた。だが、それは拒絶ではなく、彼女はそっと彼の背中に腕を回したので、青磁は微笑し、それからふと真顔になって彼女を抱きしめた。

ほら、帰れなくなった。

そんなことを思った。

(FIN)

蒼_01

桜が散った後に残される、雄薬と雌薬は独特の色合いをしている。

桜の紅と白を交えた薄い色よりも、濃い紅色をしている。

花は散るのに、枝に残る雄薬と雌薬を、いつまでも睦まじい男女に見立てて「桜薬を観る」という表現を使うことがあった。

青磁・マクドウガルは、高層マンションの最上階にまで舞い上がった桜の花弁に気がつき、ふと、顔をそちらに向けた。

片方だけ薄い瞳がちかりと輝き、彼の風貌の中でも際だった特徴であることを示していた。

限りなく東洋人に近い色素を持っていたが、肌の質であったり、顔立ちそのものがこの国とは少し違う。

生国ではかなりの確率で間違えられたのだが、この場所で同じ国の者だと信じ込む者は殆ど存在しない。

もともと、流暢な日本語を操る彼と少しでも話せば、ひょっとしたら東洋人ではない遺伝子を持っているだけなのかもしれないと思わせてしまうほどに達者な会話を繰り広げることができた。それに、彼の視線と己のそれを合わせてしまえば、紫電と呼ばれる彼の眼光に見入ってしまい、大抵のものは彼に傾倒してしまうのだ。

彼女を除いては。

彼は汗ばんだ肌の火照りを冷ます途中であったことも一瞬忘れて、窓辺に寄った。

高層マンションの最上階が彼の住まいであったが、そこまで花片が舞い上がってくるのは相当の強風か、それとも花の終わりが近いために軽い風でも吹き上げられる数が増えてきており、そのうちのひとひらが青磁の目にとまったかのどちらかであった。

時刻は間もなく薄闇を迎える頃であった。

ここ数日、特に日照時間が長くなってきたと感じ、急に暖かくなったので桜の開花が進んだとそこかしこで耳にした。

そういえば、桜の季節は彼と彼女にとっても思い出深い季節であった。

しかし、その季節よりも前に・・・

彼女が彼を知るよりも前に彼は彼女を知っていたのだ、と打ち明けることがないままであったけれども。

でも。

先ほど、彼女がぽつりと「桜の季節がまた巡ってきた」と言ったので、本当は感づいているのだろうと青磁は思う。

今、ここで二重サッシのガラス戸を開けてしまえば、室内の空調が一変して彼女に気がつかれて

しまうかもしれない。

それでも、彼はゆっくりと扉に手をかけたが、彼の予想通り、不規則な強風がひゅつと鋭い音を立ててガラス戸の隙間に突風を生み出して彼の体を急速に冷やした。

上半身は何も身につけず、下半身はゆるやかな洗いざらしのデニムに素足という出で立ちであった青磁は、一瞬、目を細めて自分の額が露わになったまま、外に目を向ける。

彼はそんな風に後退りするほど軽量ではないので、あっさりと、柔らかい仄かな夕陽の下に出ることができた。部屋の中を確認するように振り返る。彼女はバスルームを使っているからしばらくは気がつかれないだろう。

数度に一度だけ、彼女は彼の誘いに応じて彼の部屋にやって来る。

彼は彼女に夢中で、己の誇りさえ失いそうなほどに彼女を独り占めしたくて仕方が無い。けれども、それを知っているのか、彼女は彼に応じないことが多かった。しかし、彼女は彼のことを、割り切った関係の相手という認識をしている様子ではなかった。

束縛されることの辛さも、束縛することの惨めさも彼は知っているから、彼女のことはあれこれ詮索しない。そして、彼女は他の者との恋を継続しながら青磁のことを都合の良い相手として保有するような人物ではなかった。

不器用で、誠実で、頑固で、それでいて心が透明である故に他者の様々な物思いを一緒に引き受けてしまう優しさを持っている。

自分の心は決して明かさず、人当たり良くつき合うことに徹しているが彼女はとても繊細で感性豊かで・・・そして青磁はもっともっと、彼女のことを知りたいと思う途中にあった。

ひとかたならぬ心の通じ合いを確認したと思うと、彼の腕からするりと抜け出してしまう。

地上から吹き上げられた桜の花弁は白く輝きながら青磁の目の前を舞っていた。

躍るように、逃げるように。

そして乱れて静かに地上に落ちるまで翻弄され続ける。

青磁は自分が彼女に振り回されているとは思わない。夢中になっているという事実は認めるが。

青磁は春の強風に煽られながら、その様をじっと見つめた。

片方だけ薄い瞳で。置き去りにされたこどものような、所在なげな顔をしていたが、それを指摘する者はここにはいない。

誰も見ていないから、そんな顔をするのか。それとも、誰かに見て欲しいから、そんな顔をするのか。

・・・彼女は、まだ帰り支度をしている。

桜の花が、散るための支度を終わられずに、空に舞って

それが終わらなければ良いのにと彼が想っているというのに。

しかし、彼女は、彼がどれほどここで一緒に暮らそうと言っても、彼女はイエスと言わない。

この関係に、何か変化を求めたいのか、決着をつけたいのか・・・青磁には明確に言葉を使って

説明することができなかった。彼女と永遠を誓い合いたい。彼女に、永遠に青磁の傍にいたいと言って欲しい。それが、彼の望みだ。

彼の願いは、彼女に関するものばかりで溢れている。その全部が、彼女に関するものなのだと言えれば彼女はまた逃げてしまいそうな、困った顔をするのだろう。

青磁が物思いに耽る理由があった。

桜の季節に入る前の僅かな期間に、彼は彼の国に彼女を誘った。

渡航や滞在にかかる手配の心配はしなくても良いから、と言ったものの、彼女はそれについて承諾しなかった。

ひとりで行くべきだ、と主張し続けた。

彼女がなぜ、そのように言うのかもわかっていた。切なくなり、言葉が出なくなってしまうほどに、よく理解できた。

しかし、彼女と一緒にないのならば、彼は帰る必要はないのだからと彼女に説明すると、彼女は途端に落胆の溜め息をついて、それっきり黙り込んでしまった。

彼は激しく詰られるより、このように拒絶される事の方が辛いのだと知った。彼女は彼に、この世のありとあらゆる感情を教える。

それが苛立たしいと思う事もある。

彼の苦悩を知らない彼女が、彼が苦しいと思う瞬間を感じ取ることができるから。

・・・かつて、彼が恋をした相手も、同じ様に彼の心の襞にある苦悶を察することに長けていた。

恋が実らず、愛に変わった。あの時の思いがあるからこそ、彼女を大切に愛おしく思う青磁が存在する。

彼が、まだ彼の家族と話し合っていないからだ。一方的に、滞在先の国で迎えたい相手がいると言った。そして、その相手は、マクドゥガル家の者が反論できない縁を持った相手であり、青磁が探し求めていた条件を兼ね備えている。

だから反対される理由もなかった。万が一、反対されるのであれば、フランスの華と呼ばれる彼の主治医に仲介を依頼することになるのだろうという予定を立てていた。

傲慢で人の依頼などは決して受けない相手であるが、今回の話ばかりは受けざるを得ない事情があった。

それを最終手段として使うことに、青磁は躊躇っていた。

力でねじ伏せることが解決に至ると思えなかったからで、それは彼女から得た影響による考えた方であった。一族が受け入れる姿勢であるのに、彼女が渋っている。条件も資格も、そして青

磁そのものが望んでいるという最も重要な要件を満たしているというのに、最後の難関が突破できない。

人はみな、満たされたいと思う。

方法や時期はそれぞれであるけれども。生まれた時から欠けていると感じるのは、なぜなのだろうか。己がすべてを満たされた存在であると感じないのは、産声をあげた瞬間に、何かを落としながら生きているからなのだろうか。

そして、人は・・・自分の半身を探し、運命の人を求める。

自分の責任や選択というものから逸脱した存在に神聖を求める。

青磁は、肺に春の空気を入れる。この国の大気の匂い。桜の大気。それが愛おしい。自分の身体の中に流れる血に、愛おしむ記憶が刻まれているからなのだろう。しかし、そうでなかったとしても、この国の、この時期の風は、どういうわけは青磁にとっては懐かしいものであった。

懐かしいは、愛おしいことなのだ。

そう言った人のことを思い出す。

今、夢中になっている人は、かつて恋した人とは何もかもが違っている。でも、彼は、あの人のことを時々思い出す。彼女がいなければ、今、目の前にいる人のことを愛することがなかったからだ。

青磁は、間もなく実家に戻らなければならない。家に縛られていると嗤う者もいるのだろう。しかし、彼は彼の代かもしくは次代で完結させたいと思っている命題を抱えている。それを解決できるのは、彼女だけなのだろうという予感があった。それは予想とか希望とかいう曖昧なものではなく、確実な未来なのだと思っている。

そんな彼の煩悶に関わらせたくないという気持ちも大きかったが、彼女と一緒に、彼はこの問題を解決できると思っているし、このような状況でなかったとしても、きっと彼女のことを愛おしむと思った。

家を捨ててくれと彼女が言うのであったのなら。彼は、それも考えたのだろう。でも、彼女はそう言わない。青磁が抱えているものの大きさを知っているからだ。そして、彼女以外に、それを解決できる術を持つものがないことも知っている。

だから、青磁は彼女を追いつめていることも十分に承知していた。

だからこそ、待つ、と繰り返すばかりであった。

彼女が青磁との未来を考えたくないという選択をして欲しいとは願っていない。けれども、彼女の幸せというものに自由選択を含むのであれば、彼女は青磁と一緒にいない時の方が未来を多く選ぶことができるのだと思う。

でも。

彼は、一緒に居たい。桜の薬が濃い紅色を見せると、彼はマクドゥガル家の敷地に残る、倅登のために植えられたという桜を彼女に見せたいと思う。

登という人物を大変に愛でて、日本の方式を多く残したとされる、マクドゥガル家の傑物とされる人のことを思う。彼は、この国を愛でた。同じ様に、青磁も心を引かれる。理由がわからないのではなく、なぜ心が吸い寄せられるのか認識しているから、なおさら強く惹かれる。

マクドゥガル家の悲劇は、誠次・マクドゥガルが引き起こしただけではない。過去に、幾度も生じているのだ。

稀生の時にも。也真斗の時にも。マクドゥガル家の男は、時々狂う。外からやってきた女の健康な血肉を継承することができない者は、時に狂気に生きて、狂気に死ぬ。

自分も・・・そうして、狂ってしまっているのだろうか。

青磁がこの国に拘るのは、この国ではない生国以外で過ごすことによって狂うことから回避されるのではないのかと思っているからなのだ。

でも。

桜の花びらが舞い上がると、どうにもならないもの苦しい気持ちが彼を落ち着かなくさせる。愛している人を壊したくなってしまう。そうしなければ得られないのではないのかと考える。

失う事が怖いから。得たものは壊す。そして得られないものは滅する。そういう一族の中で生きてきたから。青磁は、そこから遠く離れた場所で生活しているのに、その呪縛から解かれることができないと感じる。

自分のことを多く話さないのは、自分の育ってきた環境が他の者とまったく違うことを知っているからだ。

同じであるものを探すために生きているわけではないし、同じでないから愛せないということでもない。

・・・認めなさいよ

とても小柄な人の声が、聞こえる。まっすぐな視線で、彼の瞳を臆することもなく見据える彼女の視線を思い出す。

青磁の視線は、紫電と呼ばれている。逸らすことのできない強い視線のことを紫電と言う。しかし、彼は眼光鋭いだけでそのように呼ばれているわけではなかった。

青磁は、眼病を患っており、片方だけが薄い瞳を持っている。

それを神秘的だと言う者もいるが、彼はそれが未熟性の烙印であるという認識以外には考えられなかった。

それが、彼そのものであるのだ。

そう教えてくれた人を好きだった。

そして、それを実感させてくれる人を好きになった。

愛とは、こんな風に始まって深まるものだを知った。これがはじめてではなかったのに。

愛や恋を述べる機会は、これは最初ではなかった。

これが最初ではない。でも、最後だと思う。

次がないのだ、と思うのではなく、次は存在しないのだ、と願う。

これを言えば、外国籍の青磁が、その国独特の方便でもって逃れようとしているのだと思われることが苦しかった。

一時の恋情で彼は行動しているわけではない。

彼女だからこそ、彼はこの国に留まっている。

それを証明する術が無いから、彼は慌てているのだ。

彼女が誰か、青磁ではない他のものに心を動かしてしまうのではないのか、と。

一時の恋情で彼は行動しているわけではない。

彼女だからこそ、彼はこの国に留まっている。

それを証明する術が無いから、彼は慌てているのだ。

彼女が誰か、青磁ではない他のものに心を動かしてしまうのではないのか、と。

桜の薬のようにになりたいと思っていた。

生涯の番いになるような、桜の花片よりもずっと長い時間一緒に居られる関係になりたい、と。

桜の花びらではない。彼は彼女の薬になりたい。

散ってもなお、そこに残り色濃く・・・実を残す者になりたい。

桜の薬は。桜の花の色よりも濃い。そして、番になって残る。花が散ってもなお・・・それは残る。

蒼_02

彼は宙に舞う花片を見つめる。追って行くことはしない。目の前を過ぎるそれらは、青磁に何かを伝えるかのように、ただひらひらと合図するかのように明滅するだけであった。それが彼には今は良くわかった。奇妙な眼病は、完治に向かっている。あと少しで、彼はここに滞在する理由を失ってしまう。それが今は、辛くて堪らない。

理解していたつもりであった。最初から、ここは終の棲家にはならないということも、承知した上で・・・そして、彼女を好きになってしまった。彼女と恋を結ぶということは、彼女をこの国から引き離さなくてはならないということであることもわかっている。条件が合致したものであればそれで良いというわけではない。青磁は、愛されるのではなく自分が愛した者が良いと判断してしまったのだ。後悔はしていない。彼女をこのまま連れ去ってしまえば。彼はそんなことすら考えてしまう。

あれほど、待ち焦がれた状況であった。彼女がイエスと言うのを、ずっと待っていた。

青磁にも、勿論、独占欲も孤独も存在する。しかし自分はそれが人一倍激しくて、そして皆がそれを怖れていることもわかっていたからこそ、彼女でなくては受け止められないと思ってしまった。それを彼女は察して「決め込んでしまうのは危険だ」と忠告する。まるで自分のことではないかのように淡々と語る。

残酷な人だと思うが、彼女は青磁の惑いを察知していたのだと考えられた。彼女はそういうことには人一倍聡いところがある。朧であった輪郭や濃淡がはっきりと見えると自覚するにつれて彼は見えなくなったものがあるのではないのか、と指摘されたような気になってしまった。

今は、これほどに花の美しい季節であるのに。

彼女の心がかみ取れない。彼女は、彼にこんなにも優しいのに、彼は彼女に優しくしてやることができない。

自分は異国から突如としてやって来た、彼女の桜なのだろうか、と思った。僅かな期間だけしか咲かない、花。それを愛でて人は足を止めることがあっても、それと一緒にどの季節も幾年も自分を重ねようとするのはしない。花が咲くその時だけ。もしくは、紅葉しその樹が生きていることを実感する時だけ。その時は、まるで紫電に打たれたかのように、彼らは足を止めることがあっても、その先には何も無い。

無性に煙草が吸いたくなった。

彼女が好まないのに、彼女と過ごしている時には吸わない。けれども、自分の中には仄暗い狂気が存在する。それを煙だけが忘れさせる。そう思っていた。

彼はかなたの地上を見遣る。ここは最上階だ。風も強く、縁に出てはいけないと言われていた。

人が寄ることの出来る最も外側の手摺りに彼は体を凭せ掛けて、地表を見つめる。

花はだいぶ散り去り、濃い紅の色と緑葉が混ざってすでに姿を変えてしまっていた。満開の桜を見上げながら、彼女が綺麗ねと言ったことを思い出す。

彼女のためなら、雨粒でも桜でも抱えきれないほど用意してやろう、と思った。でも彼女はそれを望まない。彼女は青磁に、摘取るのではなく降ってくるからこそ愛おしいのだと言うのだ。

煙草の煙は、一瞬だけ、その痛みを忘れさせる。依存するわけではないが、彼は彼女と行き着く先が見えない焦りで煩悶している。

何と勝手なことだろうと思う。

あれほど、彼女が欲しかったのに。彼女が彼の胸の上で目を閉じることを許可された途端に、今度はその先が欲しくなる。

このまま、あの花蕊達のように番って生きたい。そのためには・・・

「青磁」

背後で声がした。

ここは高層階であるから風も強い。部屋の空調との差異によって勢いよく閉まってしまうのだが、このマンションはその点にも配慮されていて滑らかに開閉できる。そこもここに居を構えた理由のひとつであった。マクドゥガル家の庭に出る時ととてもよく似た感覚を味わうことができた。

。

今までは、あれほどあの家が厭わしかったのに。今は、懐かしささえ感じる。

音に気付かず、彼女の声と風で我に返る。

「やあ」

彼は薄く微笑んだ。

すでに身支度を終えた彼女の髪が、舞っていて、彼は目を細める。汗ばんだ額に口付けをしたのは、つい先ほどであったのに。今、彼女は涼しげな目元を彼に向けている。

彼の掌に包み込んでしまえば隠れて見えなくなってしまう顔が、彼にゆっくり近付いた。

「風邪をひく」

「大丈夫だよ」

彼は言われてはじめて気がついた。まだ上半身には何も纏わず、そういえば自分は水気を散らすために軽装のままだったのだ。

「涼んでいただけ」

「そうではなくて」

彼女は顔を赤らめた。横を向いて、青磁から視線をはずす。

「何か、着て」

先ほどは何も纏わずに抱き合ったのに。彼は苦笑した。

彼女の度しい感覚を愛おしむ。

彼女を家まで送り届けるつもりであったが、青磁の準備ができていなかったのも、結局彼女を待たせる結果になってしまった。

彼はそれを素直に謝ることにする。

「すまない。桜が舞い上がっていたから」

本当は、舞い上がっているのは自分のほうであった。彼女と時間を重ねると、あまりにも幸せすぎて何もかもに寛容になってしまうし、何もかもが美しく鮮やかであると感じる。

「何か、考え事？」

彼女は察したように言った。彼は微笑む。イエスと言え、それを邪魔してはいけないと呟いて彼女は背を向けてしまう。

わかっていることであった。

彼女は、他の誰かと通じ合うことに長けているけれども、他の誰かが自分を望んでいるとは決して思わない。もう少し自分に自信を持ち、そして自重して欲しいと思う。彼の所有物であるとは考えないが、彼だけのたったひとりになって欲しいと青磁が常に考えていることについて彼女はいつも憂悶する。

どうしたらひとつになれるのだろうか。愛していると告げるより、それ以上に本気で、真剣に、彼女のことを妻に迎えたいと考えているのに。

彼の家に咲く白い朝顔は、愛と狂気の象徴だ。白い花は、人を狂わせる。桜も淡い紅色であるが、彼は桜というものは、白い花だと思っていた。眼病のために、濃淡がわからなかったのだ。マクドウガル家に咲く桜の樹を何年も見たというのに、彼は、それが徐々に白くなっていくという

奇病に陥っているのだと思った。経年により古木は色素を失ったのだ、と。

しかしそうではなかった。色を失ったのは青磁の方であった。

「桜が散って、桜薬の時期になったから」

彼はそう言ってまた見下ろした。すぐ目の下に、桜の木々が目をついた。ここは新築であるから、別の場所から持ち込んで植えたのだろう。そういう植え換えは樹を弱らせることが多いが、無事に根付いたようだ。人の事情で生きる場所を変えた樹は、それでも春には花を咲かせて実を結ぼうとしている。

彼女が隣にやって来た。

「危ないから、中に入って。・・・すぐに戻るから」

青磁は優しくそう伝えるが、彼女は巻き上がる髪に手を添えながら、青磁の当初の目的と同じ様に、涼を感じて目を細める。ほとんど化粧をすることはない彼女の睫が揺れていた。

それ以上、ここに居ては駄目だ。

青磁は心の中で呟いた。

なぜなら、彼は彼女を帰せなくなってしまうから。

傍にいても、傍にいらなくても苦しい。どうしたら良いのかわからなくなって途方に暮れるくらい、彼女が愛おしい。

桜薬を観るということは、番うことを・・・結ばれることを承諾することと同義だ。

青磁の実家に咲く桜の樹は、幾本か枝分けを行って敷地だけではなく河に添って何本か移植されたが、愛を誓う男女は桜薬を観ることによって幸せになれるという、何とも甘い夢が伝えられていた。

白金髪の男がそれを聞いたのなら、冷笑することだろう。まったく根拠がないのに、人はなぜそれに縋るのか。幸せは、誰かに与えられたり約定したりするものでもないのだ、と嗤うのだろう。

「雄薬と雌薬が剥き出しになって、今度は実が成る。桜を愛でるという感覚は、理解できるよ」

「花だけではなく、その後も？」

「そう。桜という種について論文が書けそうだ」

彼は冗談交じりに言った。生真面目な彼女はその気になれば、きっと今のテーマで文字を起こしてしまうのだろう。だがしかし、青磁はそう言いたかったのではない。神妙な面持ちの彼女を見て、彼は気持ちが和む。

彼と将来を話し合うことは頑なに拒絶する彼女であったが、それ以外は至って穏やかであった。外では彼女は彼に何も求めない。

恋人同士の近接もキスも、自分だけが特別であるという確認は何一つ求めない。それが時々、もの悲しい。

青磁はもっと彼女に独占されたかった。

自分ひとりの、自分だけのものなのだと彼女に宣言して欲しいとさえ思う。いつから、こんな風に心が脆くなったのだろうか。そう思ってしまう。

己を愛せない者は、誰かを愛せない。しかし、誰かを愛することによって己に向かうこともある。彼女は青磁にそれを教える。

「桜の花片だけではなく、花に包まれていたものすら、青磁は桜だと言いたいよね」

彼は軽く頷く。散ってしまえば興味をなくすことが多いが、その後にはのこるものこそ、彼が求めていたものだと思う。

彼は手摺りに腕を乗せた。自分の考えこんでいる姿を見せたくなかった。

彼女に言われて、ようやく気がついたが彼の水気はどうになくなっていて、素膚に春の風がやって来て、彼の温度を連れて行ってしまう。

だから、彼女は心配して服を着ろと青磁に忠告したのだが、彼はそれに遵わずに、目下の桜庭を見つめる。

花は散り、すでに見物に訪れようという者もいなかった。ここは私有地で、内側の庭に面しているので住人以外にはなかなか気がつかない場所であったが、今、彼はそれを上から眺めている。

「なぜ、同じ種は、一斉に同じ時期に咲くのかな・・・」

周囲を確認しているわけでもないのに、花たちは同じ時期に生まれてくる。マクドゥガル家の男達とは違う。

愛の条件について、彼は考えている。そんなことを考えて愛をするのかと言われてしまうが、ずっと続く幸せに夢をかけすぎて、目の前の一瞬を積み重ねていることにこそ永遠があるのだということを忘れてしまいそうになってしまう。それはすべて、今が満たされているからだ。

形にできないものを、形にする。

それまで誰もできなかったものを、彼はやり遂げる。そのために、彼は彼女を連れて行きたい。簡単なことであった。

青磁は、彼女と桜薬を眺めたいのだ。きっかけも理由も存在する。打算もあった。条件も合致していた。でも、そんなことはどうでも良くなってしまいうくらい、彼女に気持ちが傾いてしまっているのだ。

愛のためにすべてを捨てる気質であったのなら、彼女は青磁とこのような関係にならなかつたらう。

結婚を前提に考えて欲しい、と幾度か話を持ちかけたが、彼女は自分のことより青磁のこれからを考えるべきだと言い張るばかりであった。

青磁が、一時の気の迷いで彼女を抱いていると思っているのか、と最初は憤慨し失望した。でも、そうではないということも、最近ではわかるようになってきた。

彼女は、彼が狂気に走ることを食い止めているのではないのか。

そう思うのだ。

都合のよい解釈であることも承知している。でも、そう思わざるを得ない。

彼と同じ様に熱に浮かされたように夢物語を見続けるような人であったのなら、青磁も彼女のことについてここまで拘らなかったかもしれない。幾度か断られたら、それで仕方の無いことだと思って諦めていただろう。

彼の家に巣くうものを祓うために、彼がこれからすることは賛成されるばかりではないと思っている。

過去のマクドゥガル家の幾人かが試みたように。

しかし、彼は人から理解できなくても実行するつもりであった。称賛されたくてやるのではない。悪因を断ち切るためだ。これ以上、マクドゥガル家に悲劇は起こさせない。帰りたいけれども帰れない人がいて、あの土地に降り立ちたいと思っている。でも、それができていないから。だから、彼はやるのだ。

「・・・青磁？」

はっとした。

彼女の手の平が、彼の腕に乗った。あたたかい。

「体が冷えている」

彼女が心配そうに呟いた。自分の髪が巻き上がって彼の腕を擦っていることも気にせず、両手で彼の肌を温めようとした時。

あっと声を出す瞬間さえ、なかった。

強風に彼女の体が蹠踉めいたのだ。

手摺りがあったとしても体の均衡を失い、彼女は風に踵を浮かせてしまった。

「行くな！」

彼は危ない、と叫ぶことができなかった。

桜に酔った風が、彼女を連れて行こうとしている。

そう思ったからだ。

青磁は加減を忘れて、彼女の腕を取って力強く自分の胸の中に入れる。

彼の声が静かな建物に響き渡った。

悲鳴さえ上げることもできない彼女を自分の体の下に入れて、手摺りを強く握り、彼女の背に押し当てた。目を瞑ったままの彼女が、何が起こったのか理解できずに彼の胸と手摺りに挟まれて身を縮ませていた。

「・・・ここは危ないと言ったのに」

彼は掠れた声で囁いた。一瞬、桜の木々が近くなって彼はひやりとした。自分はいつ死んでも構わないと思っていたが、本当はそうではないらしい。このまま命を落としてしまったのなら、彼が考えていることは達成できない。

その一方で。

あと少しであったのにと残念がる声が心の中で蠢いた。このまま、彼女と桜薬に向かって落ちたのなら。それは、彼の願っている成就が完成されて永遠になるということはないのか、という囁きが彼の中で響き渡る。

今の叫声とは別の響きでもって。甘い蜜と猛烈な毒を孕んだ声であった。

彼の顔や胸、腕に彼女の髪が絡み付くように貼り付いた。

湿り気を帯びているのは、彼女の髪なのか自分の冷や汗なのか・・・どちらなのだろうと考える余裕すらなかった。

このまま、ここから彼女と一緒に・・・桜薬を観ることで永遠に睦む仲になると誓わせる代わりに彼女を連れて行ったのなら。マクドゥガル家ではなく、代々の主の悲願が詰まったこの世とあの世の狭間に、今、行き着くことを願ったのなら。ひとつになれるのだろうか。彼女を、彼だけのものにしてしまえるのだろうか。

狂った焰が、彼の魄を焼きつける。

どうにもならないほど、彼女が欲しい。心と体以外にも。彼女の未来が欲しい。過去も欲しい。全部を飲み尽くしたのなら彼の乾きは癒されるのか。

蒼_03

「青磁？」

彼女の声聞いて、青磁は力を緩めた。

飛ばされていかないように彼女を引き寄せたけれども、それはとても加減したとは言えない状況であったので、彼は慌てて彼女の顔を覗き込んだ。

「どこか怪我は？」

彼女は首を横に振った。しかし、あれだけ強い力で腕を掴んだのだから、きっと鬱血していることだろう。少しも傷ついて欲しくないと思うのに、彼が彼女の肌を傷つけることに昂揚を感じる青磁は、もうおかしくなっているのかもしれない。

他の者に気取られないように、彼女の肌が露出する部分には彼の痕跡を残さない。涼しい顔をして他の者と話をする様を眺めて、誰も知らない彼女の秘密を知っているのは自分だけなのだ、と内心で悦ぶだけであった。まったく困った病んだ思いであることはわかっている。

「桜に酔った」

彼は、言った。目眩がするほど降り注ぐ桜の花弁はどこにも存在しない。ちらりちらりと点滅するような桜の光は、もう、見えなかった。

彼は彼女の頭に自分の手の平を添えて、震える声で言った。

彼女の全身に、桜貝のような痕跡を落としたいという昏い思いに駆られてしまう。自分だけのもので、自分だけに赦されたことなのだという目に見える証が欲しい。

なんと欲深なことなのか、と思う。それはわかっている。

こうして一緒にいられるだけで嬉しいと思うのに。その先を求めてしまう。
もっと、もっと愛したい。

ぎゅっと自分の胸を彼女に押し付ける。

彼女の背が撓って櫻の枝のようになった。風に吹かれて、このまま落ちていきたいと思ってしまう。この瞬間が、幸せの絶頂であるのなら。

しかし、そうではない。彼はもっと幸せになれると考えていた。

フランスの華の言う通りだ。

幸せは他者から与えられるものではない。

自然発生するものでもない。

・・・自分が創り出すものであるから。

だから、この先で待っているものは多くの苦難も混じっているものの、大きな幸福と充足が待っている。

それを信じて、彼は走り続ける。

彼女のことが気になって仕方が無いという状態から大きく逸れて、もう彼女のことを考えない日は存在しない。

それを、日常としてしまった。

すると。

彼女が腕を彼の背に回し、そして彼の胸の中からくぐもった声で青磁に語りかけた。回りきらない手の先が、彼の背の途中で指先を起こす。しがみつくように、そして押しとどめるかのように。

「・・・いかないで」

それは、先ほど彼が彼女に向かって叫んだ言葉そのものだった。

青磁は驚いて、一瞬、呼吸を止めた。彼女がそんな風に青磁に何かを願うことはなかったことから。

風の強い春の日の中で、彼女が震えながら彼に囁く言葉が・・・幻聴でないことを確かめる術はひとつしかなかった。

「もう一度、言ってくれ」

彼女は困った顔をしていた。少しだけ体を起こす。

そうすることによって彼女の心の内を覗き込もうとする青磁の視線と、彼女の視線が出会った。どうして良いのか、わからない。

何が良くて何が悪いのか、それすらわからない。

花に酔ったというのは方便であったけれども。本当のことなのかもしれないと思った。確かに、青磁は花のような彼女に酔っている。

青磁の懇願に、彼女は軽く首を振った。切ない彼女の反応に、青磁はまた腕に力を入れる。壊してしまいそうになってしまう瞬間を幾度も経験した。その都度、自分という人間は本当はとっくの昔に狂っているのではないのだろうかと思ってしまう。

瞳の色が薄くなったのは、その予兆で、すでに夢の世界に入り込んでいるのではないのか。数々の出逢いも別れも、そして待ち望んだ彼女と彼だけの時間さえ、桜に酔った故の幻なのかもしれない。

どうしたら、そんな惑いから抜け出すことができるのか。

どうしたら・・・彼女をこのまま自分の腕の中で微笑ませることができるのか。

彼はいつも問答ばかりしている。

「青磁、青磁」

彼は再び自分への呼び掛けではっと顔を強ばらせた。

高層階の手摺りで支えもなく彼にしがみつくしか術が無い彼女の声に、自分が彼女を怯えさせているのだと気がついて、彼は身を起こした。

彼が風で吹き飛ばすことはない。しかし、風に髪を散らせている彼女はあり得ないことではなかったが。

「今、飛んでいきそうだった」

彼女は慌てて腕を掴み、扉の近くまで彼女を連れて行く。引き摺るように強引に扱ってしまっているとわかっていたが、彼には彼女を優しく誘導することができなかった。彼女に対して、まったく余裕がなくなってしまう。いつもの事であったが、酷く動揺していることが自覚できていた。

彼は髪をかき上げた。すっかり乾燥していたが、じわりと額に汗が浮かぶ。嫌な感覚が残っていた。

もう少しで、彼女と一緒に落ちてしまいたいという誘惑に流されてしまうところであった。

確かに、このところ彼の思い通りにいかないことが多かった。

実家に彼女を連れて行きたいという希望も実現しなかったし、彼女は青磁との仲を詳らかにすることに積極的ではなかった。加えて、最近彼が苛立っているのは、彼女に対して他の男が寄ってくる様を目撃してしまったからだ。

まったくつまらない嫉妬であることはわかっている。しかし、それを見て、青磁は不機嫌になって落ち着かない気持ちになってしまった。なぜ彼女を好きになってしまったのだろうかと煩悶し、繰り返し自分に問いかけた。もう彼女を諦めてしまった方が楽になるのかもしれないとさえ思ったのだ。つれない彼女の態度は、青磁のことを弄んでいるのではなく彼女の本来の姿である不

器用で度しやかであることの現れであることを、十分理解しているはずなのに。

・・・桜薬の季節になってしまう前に、彼女と桜を堪能することを心待ちにしていた。

しかし、彼女が他の誰かとその景色を見ているのかもしれないと思うと、身を焦がすほどに・・・

そして全身がひりつくような痛みを感じる。

今日も、優しくできなかつたのだろうと思った。彼女は彼の家に泊まらずに帰ると言い出したので、青磁は内心、かなり焦っていた。

それらはすべて青磁の考え方と気持ちの持ち方から来ているものなのに、それを彼女に押し付けてしまいそうになった。

すまない、と思う気持ちと後悔と反省の念があつという間に彼を支配してしまう。

上手に愛そうとは思っていない。けれども、彼女には優しく包み込む青磁・マクドウガルでありたかつた。彼女は他者を優しく包むが、そんな彼女をさらに憩わせる者でありたかつたから。

けれども。

今、自分の昏い思いを悟られて、そちらに行つてはいけなさと諭されてしまい、青磁はどう対応して良いのかわからずに途方に暮れてしまった。

彼女は、綺麗になった。前よりもずっと。だから、他の者がそんな彼女に気がつくことが許しがたいと思ったのだ。それを恥じて、彼は慌てている。彼女には何もかもが見通せていると思っていた。

彼は唇を引いて、扉に手を掛けて彼女に中に入るように言った。

外気に慣れてしまったが、室内とはあまりにも違う圧がかかって、扉を開ける力をいつもより強くしなければならなかつた。

そんな中、彼女は外に出てきたのだ。このことを素直に喜べない。

どんな風に、逸らかしたら良いのか。

彼がそんなことを考えていると、扉を開き彼女が部屋に入るのを待っていた青磁の前を、目礼しながら横切つた彼女と視線が合つて、彼はまた緊張する。

部屋に入って、彼はソファの上に投げだしてあつた薄手のシャツを素膚の上に着て、彼女の言つた通りに肌を隠す。

「ただ、桜の薬を見たいな、と思っただけだ」

最低の言い訳だと思った。桜を見物しようとして身を乗り出し、危ういと彼女に指摘されたという場面設定で逃れようとしている自分の状況を、それ以上言うつもりはなかつた。彼は麒麟のピアスが冷えて彼の体温を奪っていくのを感じながら、それでも彼女に尋ねる。

彼の体が冷えることは厭わないが、彼女の体が冷えていないか、心配になったからだ。

「寒くない？」

「平気」

素っ気ない回答であつたが、彼女はやや乱れた髪を手の平で撫で付けていた。帰りの支度が整い、彼女が部屋を出て行く時間が近くなつていた。

行つて欲しくない、と思つている。

でも青磁は多くを希望しない。特に、彼女が彼との逢瀬の後にどのように行動するのは、彼女が決めることだと思っていた。

本当は、どこにも行かせたくないと思っているが。

彼女は、襟元に指先を遣りながら、空気を受けて縋れてしまったブラウスを整えながら、言う。

「青磁は、時々、とても危なっかしい」

「オレが？」

彼が驚いて尋ねた。そんな風に言われたことはなかったからだ。

彼の紫電が怖いと言われることはあったけれども。彼が危うい、と彼女が感じているとは初耳であった。

「そう」

彼女は顔を上げる。そして、青磁に説明した。

「桜に酔ったの？それは花片？それとももっと違うもの？」

青磁は何も言えなくなってしまう。桜薬を見るところということは男女の仲を誓うことなのだ。だから、彼は桜薬を見たいと思っている。

蒼_04

青磁は彼女を気遣った。自分の身体が冷えたとしても、彼女が同じ状態になることは避けたいことであった。このまま帰したくないとは思いますが、それ故に彼女を哀しませたくない。それは正直な気持ちであった。

恋をすると人は狂っていく。けれども、愛を知ったら人はどうなっていくのだろうか。桜の薬に願いをかける男女の様子を嗤っていた頃の青磁はもうここには存在しない。

彼は知らなかった。知らなくても良いと思っていた。

来年も同じであるかどうかわからない樹の枝に貼り付く花の名残を見て、なぜ恋人達は未来を想像するのかということ。

そして長じると、青磁には理解できないことなのだと思っていた。

彼の奇妙な病のために、血が繋がった者でさえ、彼を敬遠した。伝染性はないとされていたのに、あれほど彼に媚び諂っていた者達は遠巻きに彼を見るだけになったし、次の当主が出てくるまでの繋ぎであればそれで良いとあからさまに言う者もいた。だから、自分の優遇された状況は自分で勝ち取ったものではないのだと思い知ることになり、それが彼の愛に対する価値観を大きく変更させることになったことは事実として認める。

しかし、今ならそれが・・・なぜ、人は愛を誓うのか、わかるような気がする。

以前のように、愚かしいことだとは思わない。

わからないのではなく、理解できることが怖かったのかもしれない。

彼の家の者は、時々、人の愛し方を違えてしまう者が出てくることのあるから。自分はそんな風

にして誰かを強く欲することはないのだろうと思っていた。

でも、あの土地を離れて、彼は恋を知った。

それが実らず愛を知り、そして再び・・・愛を求める。

泣かせたくないと思ひ、傷つけないと願うのに、彼は恋する相手をいつも泣かせて困らせてしまう。それでも、好きでいることを諦めることはしない。後ろめたい気持ちがあることは確かだ。彼は、純粹に、他の者と同じ様な過程を経て彼女を好ましいと思ったわけではなかったから。

マクドゥガル家の者に相応しいか、彼女の家族の反対は対応できる程度か、マクドゥガル家の生活だけではなく、常に外出しがちになるであろうこともわかっていた。そんな中で、家族としてふたりで強い絆で結ばれるほどの相手なのだろうかと思極めを行うように観察してしまう、彼のそんな心の内を、彼女はとうの昔から承知しているように思う。

それでも、何も言わない。

彼の考えが変わらないことに困惑するような様子さえ見せる。自分でも、これほど固執することになろうとは考えていなかった。もう少し、諦める瞬間というものに臆病でないような気がしていたのだ。

しかし、今は、まったく考えられない。彼女のいない日々は想像できないし、想定したくなかった。

それほど・・・桜の花だけではなく薬さえ眺めたいと思うほどに、彼女を愛している。

酔ったのかと聞かれる程に、彼は自分の物思いに鬱ぎ込んでいると気がついて、笑顔を浮かべる。無理して笑むことはないと言いが、彼は彼女を心配させないための偽りを受け入れる孤独も、彼女から教わっていた。

季節が終わり、色が変わり、匂いが春から夏に変化する。その時になってなお、桜を愛おしむ絆で結ばれていたい。

そんな願いを、桜の花が散った後に人は願ったり誓ったりするのだ。

「桜薬に酔った」

彼は告白した。桜の花びらの咲く様、散る様をこの国の人々はこよなく愛していることを知っている。マクドゥガル家の敷地にも、桜が咲く。でもそれと同一であるわけではないのだ、と彼女を見て思うのだ。

人の生まれ育ったものが共通していなければいけないのだ、とは思わない。

あの白金髪の人も、彼が定めたファミ・ファタルとは何もかもが違っていることを承知の上で、愛を継続することを選んだ。

恋に墮ちることも、愛に溺れることも簡単なのだ。しかし、継続することは難しい。成就することが最終目的では無い青磁にとって、愛というものが方便になっているのではないのかと思った時期もあった。

愛する人を不幸にしてしまう。時には、己が狂ってしまう。愛している人を狂わせてしまうよう

な土地に連れ帰って、相手が幸せになれるとは限らない。

しかし、それでも青磁は彼女と生きたい、と思った。

これほど気持ちを傾けて、マクドウガル家に戻らないことすら考えたのは、彼女を最後にしたいと思っていた。

やり遂げなければならないことを放置して、恋に溺れることができなかったのに。

彼は、惑っている。

狭間で行き戻りを繰り返してしまっているような状況を彼は受け入れている。

放さないで欲しい。

溶かさないで欲しい。

消えないで欲しい。

・・・そして、彼と彼女は互いに言った。

行くな、と。

彼女は彼の中に、危うさを見つけたのだろうと思う。

風が吹いても、青磁はあの場所で吹き飛ばされるような肉体を持っているわけではない。筋肉も重量もそれなりに存在するから、彼女が心配するような事態には陥らない。それなのに、彼女は・・・青磁に語りかけた。

肉体ではなく魄が離れて行きそうだと察したからだ。

桜薬を見たからだろうか。地表近くではなく、宙から見下ろすように、あの紅色を見てしまったから。吹き上げる春の強風に彼は地と天を混雑させてしまった。それが青磁に目眩がするほどの匂いを伴った芳醇な空気が彼を酔わせる。

そんな彼に、彼女は問いかける。

「桜薬に？」

彼女は不思議そうな顔をした。匂いも勢いもあるわけではない。散った後に残る濃い色の、残花よりも華奢な雌雄の薬を見て、彼が酔うと告白することが珍しいと感じているようだ。

青磁は自嘲気味に嗤う。

「そう。だから君と眺めたい」

それは偽らざる気持ちであった。

しかし、すぐに補足した。

「君を酔わせたいわけではないが・・・」

言い訳じみている、と思った。自分が何を説明しようとしているのかさえ、はっきりしなくなってしまう。

蒼_05

桜薬に青磁は酔うと言いながら、青磁はそれを彼女と眺めたいと言う。

それでも。

彼の言葉を、まったく支離滅裂だと嗤う彼女ではなかった。

彼女はちらりと彼を見る。

・・・彼女の方が、紫電の持ち主ではないのだろうかと思う時がある。

紫電の持ち主である青磁を絡め取ってしまうほどの力を持っているのだから。

「行こう」

彼女を酔わせたいと思ったわけではないのなら、何を求めていたのかということについて言い淀んでいたままの青磁に、彼女はぽつりと言った。

青磁が顔を上げると、彼女は彼に背中を向けて自分の薄手の上着や鞆を取りにクローゼットに向かっているところであった。客用のそれを使うのではなく、主寝室の青磁の使っている場所の方が圧倒的に広いから、そちらを共有すれば良いのにと提案しているのに、彼女は頑なに来客用の場所を使っている。そして、残して行くものはまったくなかった。

一緒に暮らそう、という彼の申し出にもイエスと言わない。束の間の夢ではなかったのかと青磁が思ってしまうほど、彼女の痕跡はいつも儂い。

その彼女が、青磁に行こう、と誘う。どこへ、と聞かなくてもわかっていた。彼女は桜薬を見る為に外に出ようと誘っているのだ。

そして青磁が行かなくても、それでも、彼女は行くのだろう。

彼は彼女の名前を呼ぼうとして、声を止める。

ここで呼び止めて良いのだろうかという躊躇があった。

自分の中にある、この秘めた物思いを彼女は感じ察して、そして行くな、と言ってくれた。戻れない路に踏み込みそうになって戻れないとわかっているのめり込みそうになった青磁を止めた。彼女となら、彼の中にある昏い葛藤はきっと薄らぐのだろうと確信した。彼女に期待するのではなく自分に希望を持つことが出来る。そんな相手と巡り逢いたいと思い、そして出会うことができた。彼は桜の下で願いを唱える男女を蔑んだことを悔いた。

人の心は移ろうもので、決して永遠などは存在しないのだ、と。

彼はその時にそれが絶対だと感じていた。しかし、今は違う。永遠を約束するのではなく、永遠に傍に居続けたいのだと願うことこそが誓いなのだと思った。

これまでの距離の遠さを、僅かな期間で埋めることはできなかった。青磁と家族の間にあるものは深刻なものであるが、元通りにはならないのだろうと感じていた。なかったかのようにすることはできない。これまで、青磁は家族やマクドゥガル家のことを忘れたわけではなかったが、それでも時折・・・それらが箒みに感じるがあった。

もし、あの家に生まれなかったら、自分はこれほど遠くにやって来ることもしなかったのだろうと思うけれども。でも、彼の眼病と彼の風貌がマクドゥガル家から乖背させ睽離させたことは事実である。彼が真実を知る前に、彼は孤独を感じてそこに閉じこもってしまった。誰かと心を通わ

せることはできないのだと拒絶していた。

でも。

フランスのパリで過ごした短い日々にも生まれた、成就できない恋心と、今ここで育てている愛おしい気持ちが彼を変えた。

自分だけが苦しんでいたわけではないのだと想像することができたし、理解し受け入れ、許すことができるようになった。

更に、彼から離れて行ってしまった者達に対して、彼らも苦しんだのだろうと想像する気持ちの余裕が生まれた。

それらはすべて、彼女の影響によるところが大きいと思う。

信奉しているのでは無い。しかし、尊敬に値する人物だ。彼はそんな彼女を好きになって良かったと思っているしこれからも変わらない気持ちでいるのだろう。

「もう散ってしまったのに？」

この時期の桜の樹の下に行こうと思う者がすくないことは、青磁もよく承知していた。

これから、彼女のことを彼は散らしてしまう。桜のように。

それまで生きてきた国を置いて、彼の国に来て欲しいと懇願することになる。彼女は、イエスと言わない。でも、イエスと言うまで彼は諦めない。

恋に堕ちたら、それが恋なのだ。

彼はそれを実感する。

理由もきっかけも、恋の前ではすべてを置き去りにする。

桜の散った後について、彼は思いを馳せている。

そしてそれは恋に似ていた。

桜の花の香りは僅かで、他の花たちのように強い芳香は持たない。

結実するまでの過程を、彼は彼女と眺めていたい。

そう思わせるほどのものが、彼女には存在する。

いつも愛に饑えていて、それでもすぐに得られるものを疑わしく思って身構えていた青灰色の瞳の男のことを思い出していた。

彼もこんな風に・・・桜の風と空の下で、巡り逢った人のことを思うのだろうか。

蒼_06

花の香りが漂ってくるような気がした。それは幻であったのかもしれない。

室内には桜はないから。しかし、彼は確かに春しか咲かない、すでに散ってしまった花の空気を感じる。

目眩がするような甘い匂いと、浄化されるようなもの悲しい香りが混ざった、懐かしい空気をこ

こで感じた。

「散った後にしか、桜薬は見る事が出来ないでしょう」

彼女は苦笑いを交えながら、言った。表情は見えない。既に上着を着て、声は遠のきながらも彼に届く。風のように、風に乗って。

それは、彼を何に、どこに導くのかわからない。

彼女の髪と、春に相応しい柔らかい色合いのコートの色を眺めながら、彼は狼狽える。青磁は彼女の前では、ひとりの青年になってしまう。人々から傳かれたり、同年代の者が臆するような場面に慣れていたりするけれども。でも、こんな場面では彼はいつも戸惑ってしまう。

わかっている。

それは、彼女だけがもたらすものであることを。

「桜薬を見る、という意味を知っているのか」

彼は呻くように言った。それを肯定されてしまえば、彼女を手放せなくなってしまう。彼女がどれほど抗おうとも、彼女から離れないと決めてしまう自分の心が怖かった。

もう、とっくの昔に狂っているのかもしれない。

「青磁」

戸惑う彼に、彼女は言った。

「知らないことにしておく」

彼女は返事をする。

それが、今のところの彼女の返しなのだろう。

でも。

ノーではなかった。

拒絶するのではなかった。

彼はそれがどんなことを意味しているのか把握しかねて、そしてまた彼女に質問する。

「知らないままにはできなくなる」

青磁はぎりぎりのところで・・・婉曲の際で踏みとどまった。

彼の妻になって欲しい。彼だけのものになって欲しい。彼とともに、マクドゥガル家に住んで欲しい。具体的な言葉はいくつも存在する。

けれども。

桜薬を見ることの意味を彼女は知っていながら。

それに酔ってしまったと言って狂気を覗かせた彼を引き戻した。

戻れない路から。

彼はそんな彼女と・・・ずっと、ずっと、傍に居たい。

彼女と、世界各国の桜の薬を眺めたい。

しかし、それは言わないままで、彼に向かって彼女は囁くだけであった。

肌を寄せ合い、そして彼に優しい笑顔を向けるのに。

それは彼がそうさせているのだと思っていた。彼女が言い出せないのは、彼だけが未来に傾いているからだ。

しかし、彼が望む未来はふたりで望まなければ生まれない。

「桜が散っても、桜は綺麗ね。・・・それを、忘れていたくない」

彼女の答は至って簡素なものであった。

彼が、散った桜の跡を見ようとするのは、永遠を誓って欲しいからだ。

しかし、彼女はその声を無視しないかわりに、その誓いを忘れることができなくなってしまうが、良いのかと問う。

「ああ・・・忘れないよ」

彼は即座に言った。どうして、忘れることができるのか。

これほど愛おしいという気持ちを、忘れることはない。痛みとなって薄らぐことを待つという未来があるのかもしれないけれども、マクドゥガル家の男はただひとりの人を激しく愛する傾向にある。

それが破滅や破局を迎える結果になっても、誰も・・・本人でさえもそれを止めることは出来ない。

青磁は完全に彼女に夢中なのだ、という滑稽な状況であるのかもしれない。しかし、少しも気恥ずかしいとは思わなかった。

事実だから。彼は、彼女に夢中だから。

「それなら、早く支度をして」

彼女は少し怒ったように言ったので、自分がまだ上半身に何も身につけていない状態であったことに気がついた。

そうか。

彼は笑った。

彼女が始終背中を向けて、素っ気ない言葉を繰り返すのは彼が外出できるような状況どころか、何をしていたのか明白な格好であったからなのだ、ということに気がついた。

彼は彼女に徴を付けると同時に、彼女からの徴が欲しいと言った。

胸の上に薄く残る桜色の彼女の痕に気がついて、彼はそれを指先でなぞった。

その色が濃くなっていくことを確かめたくて、彼は素膚のままでいたのだということをややく

思い出した。

気が遠くなってしまいそうなほどの深い悦楽に浸り、そして彼女と抱き合うたびに彼は彼女への思いを募らせていく。

しかし、彼女を愛おしく思うのは、その時間だけではなかった。こんな風に、彼の心の内を理解し、そして桜薬を見る、というマクドゥガル家の土地の者は誰でも知っている言葉の意味を彼女は拒絶しないで受け入れようとしてくれている。

青磁は・・・青磁は、彼女に何かを与えられているのだろうか。彼女を安らげることができているのだろうか。それを聞いても、彼女は応えてくれないだろう。今は、まだ。

蒼_07

「困っているの？」

彼は向こう側の彼女に聞いた。

彼女の小さな呟きが聞こえたが、青磁にははっきりと聞き取れなかった。

それでも、何を言っているのかは想像できた。

きっと、そのように言う青磁のことを意地悪だと言っているのだろう。

そうだ、彼は・・・愛に酔って彼女を困らせている。

それが許されると信じられるから。

彼が酔っているのは、本当は桜薬ではない。

桜の薬の色合いでは、人は酔わない。

けれども、色の濃淡が判別しにくくなるという眼病を患っていた青磁には、その色は鮮やかすぎた。しかし、今はそれが嬉しいし、少し哀しい。

病が快癒に向かっていくことは嬉しい。また、あの時のように絵が描けると希望を持つことが出来る。

しかし、同時に・・・マクドゥガル家に戻る時がやって来たということを知らせる兆候だから。

「青磁」

はっきりとした声で、彼女が玄関先から声をかけてきた。

青磁はそれに反射的に応える。

「今、用意をしていく。待たせてすまない」

そうか。待たせているのは、彼女ではなく彼の方なのだ。

それに気がついて、支度を急ぐ。

でも。次に、彼女の声には彼は足を止めた。今度は、はっきりと聞こえた。

抱き合っている時には聞こえない声。そして、近い場所で見つめ合っている時には消えてしま

う声。

彼女の、心の内の声はとても小さい。けれども、今ははっきりと口にした。

「青磁とだけ、見たいから」

彼は歩きながらソファの上に投げだしてあったシャツを着込むために上げていた腕を止めた。

彼女の声を、何かの動作と同時に聞いてはいけない。そう感じたからだ。

・・・最初は、見ているだけで良かった。次に、話をしてみたくなった。怒った顔が可愛らしくて、もっと話をしたいと思った。そして、彼女と幾度も衝突し、意見を交わし、相手の思考に賛同したり反発したり・・・幾度も話し合いを繰り返した。彼女は自分の心の内をなかなか明かさないので、それに対して憤ったこともあった。また、他の者が彼女に気安く声をかけるだけで胸が騒ぎ、彼女に優しくできなくなってしまった。

それが恋なのだ、と気がつく時には、すでに深く彼女を愛していた。

それに対し、自分はある目的があってこの国にやって来て、彼女を見つけ出した。

後ろめたいという気持ちを感じる前に、彼女に夢中になっていた。

自分が醜い嫉妬で彼女を支配してしまいたいと願っていることも・・・彼女は承知の上で、彼に散った桜に残るものを見に行こうと言う。

他の者に、彼女を引きあわせたくない。渡したくない。彼女は、彼の所有物ではないというのに、それをわかっているのに、どうしても独占したいという気持ちが消えて無くならない。

彼が外出の支度を整えている間、彼女は呟き続ける。それが彼に届いていることをわかっている。大きな、独り言であった。

「他の人と観桜に行くのは・・・気になるものね」

それは、青磁が他の者と行くことについてなのか、他の者と観桜する時に彼女が感じていることなのか、わからない。それでも、彼女は囁く。囁きにならない声で。彼の前では消して言わないことを述べる。

彼はただそれを聞くばかりだ。桜の風に乗って、彼だけの薬は告げる。春が過ぎて夏の気配を宣言する桜薬そのもののよう。

「故郷の桜はどんな感じなの？」

彼は必要最小限のものを用意して、慌てて廊下を歩く途中の言葉であった。

「今はどう見えるのかわからないけれども、とても・・・綺麗だよ」

そうだ。彼は、この病を癒そうとしてから、あれらを眺めたことはなかった。あの土地の花達は、どうしているのだろう。静流という名前の当主が愛した土地の花達は白い花が多かった。

そして彼の家では白い朝顔について述べることは禁忌とされていたけれども、唯一の相手と定められたものを、朝顔と呼ぶことは消えていない。

フランスの華がファミ・ファタルと呼ぶように。青磁は、彼女のことを彼の朝顔と呼ぶ。

桜も朝顔も・・・この国ではとても深く愛されている花々であった。青磁はそれを知ってとても心が満たされた。自分の中にある渴望が、この国ではどんどん満たされる。しかしそれは、彼女あってこそのことだ。

「桜薬を観ることが、春の行事になるくらい」

彼は表現をぼかして言った。桜の花を眺めるだけではなく、桜の散った跡に集う人々のことを言うが、その意味は述べない。

彼女は、もうわかっているから。

男女の契りと誓いを望む薬の晷を眺める時。それは、彼女であって欲しいと思っていたが、それが実現されそうで彼は躊躇していた。

蒼_08

彼はそこで彼女の待つ玄関先に顔を出した。

彼女はきちんと上着を着て、鞆を肩に掛けていた。いつも見る、彼女の姿であったけれども。少し湿り気の残った彼女の髪が、「いつも」から逸脱していることを教えていた。

泣き出したい気持ちになってしまう。

彼の顔を見上げて、彼女は首を傾げる。

「待っていてはだめ？」

「いいや・・・」

彼はそれだけしか言う事が出来なかった。胸が何かに詰まって、重くなってしまう。

単なる一時的な火遊びだと・・・彼女との関係はこの国だけに限定されるのだと言えば彼女は心安らくなるのだろうかと思うと、決してそうではないのだと考える。青磁が持つ葛藤と同じ様に、彼女の中でも葛藤があるのだと思っている。行かないで欲しい。彼女はそう言った。

それは、桜の風に酔って彼が吹き飛ばされてしまうかもしれないという不安だけではなく・・・彼女の心の声なのだろうと思った。

「君を待たせることはしたくない」

彼はそう言って、前髪をかき上げた。ある時期からはあまり長くすることはなかったが、整える時間はなかったもので、いつもより長く伸びた気がする前髪の下から、彼は彼女を見つめる。この瞳は、生涯、同じ色になることはないだろう。眼球を移植しない限り。でも彼は色素が戻らなくても良いと考えていた。見えるものが同じであったのなら。あの桜の細かい濃淡が見えるようになるのであれば、彼は、この瞳を残したいとさえ思っていた。

困っているのか、と尋ねた彼女に答えることができていなかった。確かに、彼は困窮していた。

彼女を、失いたくない。

そう思っているからこそ、一緒に暮らそうと申し出た。彼が妻にしたいと宣言した人物は、彼女が最初ではない。だから、彼は後ろめたく思っている。それを彼女は感じているのだ。

愛した者と行き着く先を、彼が結婚であると言い切ってしまうところが危ういのだと彼女に指摘されたことがあり、彼はそれ以降、どのようにして愛を表現していいのか躊躇ってしまっていた

。彼女がそんな彼に身を寄せるようになった時に、ますます困惑した。彼と同じ未来を見ていないのであれば、なぜ、彼に彼女の身を許すのかわからなかった。

それでも、彼女が恋しくて・・・どうしてそんな風に彼に身を任せるのかということを探ねられないで今日に至る。

青磁は、自分が待つことには耐えることが出来ても彼女を待たせたくないのだと思っていた。だから、こんなに焦っている。

彼女が、待ってはいけないのだろうか、と言うから。

「桜の花と違って、待っても散らないから」

彼女は柔らかくこたえた。彼は慌てて、彼女に近寄る。

どうして良いのかわからない。でも、彼女を帰したくなかった。

同じ敷地の中の見物であったので、彼は薄い裾の長いフード付きの上着をシャツの上に羽織っているだけであった。部屋着に少し変化がある程度の軽装だ。

彼女はそれを見て、目を細めた。

「体が冷えないように」

先ほど、何も纏わずに上半身を素のままに彼女に触れた時に体を冷やしているのではないのかと彼女に指摘されて、青磁は笑った。

「あれしきのことでは、何も起こらない」

彼女は、青磁を見上げた。そして、軽く溜息をつく。判っていない、とまた呟いた。

「心配してくれている？」

彼は心が踊り出すのを感じた。ぽこぽこ音を立てて泡が彼の体の内で弾けては消える。

「必要ないようだけれども」

「必要だよ。心配して欲しい。オレのことを考えて欲しい」

彼は正直に告白する。

玄関先で・・・扉の先に出てしまえば、彼女は彼に対して冷淡になってしまう。

恋人同士の甘い抱合はこの部屋の内だけでしか成立しない。人に見せびらかすような行為は彼女は好まなかった。しかし、彼は想う。

場所や状況がわからなくなってしまうほど、誰かを愛してしまったということを止められない者は・・・どんな忠告も制止も不要としてしまうくらい、歯止めがきかないものなのだと彼は知っているから。

「・・・オレとだけ、桜薬を見て欲しい」

彼は絞り出すように言った。

それは彼が少年の時に、決して自分は言うことがないのだろうと思っていた言葉であった。

「青磁とだけ？」

彼女は復唱した。彼は遣る瀬無くなって、微笑む。縋ることは彼女を苦しめる。覆い被さるような気持ちでもって依存するような台詞は言いたくない。

でも・・・でも。

「桜の薬だけは、君とだけ、見たい」

拙い言葉だとわかっている。でも、それしか言う術が見つからない。桜は誰と見ても良い。でも、男女の誓いを立てる桜の薬については青磁とだけにして欲しい。

蒼_09

そんな願いを彼女は無視したり拒絶したりすることはなかった。

ただ、返事はなかった。

それでも、彼女は言った。

桜薬を見に行こう、と。

「桜の薬を見たいという人は、滅多にいない」

彼女は言う。

青磁の欲しい言葉から少し逸れた返事であった。

しかし、彼はそれで不満だとは思わなかった。

なぜなら、彼女は、敢えてそう言っているから。

なぜなら、彼女は青磁と約束をすることはしないから。

未来を誓う夢のような願い事は言わないのだ。

青磁がもっと具体的に、実現するためにはどうしたら良いのかと提示しなければ彼女はイエスと言わないのだろう。

そしてその間に、もし、彼が疲弊してこの恋を諦めてしまったとしても彼女はまったく恨み言は言わないで静かに去って行ってしまおうのだと思われた。

どうしたら、そのようにならないのか。

彼は、真剣に考えている。

彼女を永遠に、彼の傍で微笑んでもらうために、彼がしなくてはならないこと。それは明白であった。

「・・・今回は、ひとりで戻る」

「そう」

彼女は即答した。短いこたえであったけれども、彼女はそれを待っていたのだと思った。青磁は鳩尾から喉元に駆け上がる狂おしさを、肺に吸い込んだ。

彼の故郷に、彼女を連れて行きたい。それは今でも変わらない気持ちであった。しかし、彼女は青磁に聞いた。

「いつ？」

「すぐにでも」

彼女はもう一度言った。

「いつ・・・？」

青磁はそこで形の良い唇を閉ざした。

自分の思ったことが、勘違いなのだろうかと心の中で彼女の言葉を繰り返す。

片方だけ薄い瞳が、大きく開いた。

頬が僅かに痙攣する。彼女の声が、彼から平静を奪う。

彼女は聞いているのだ。

いつ、戻ってくるのか、と。

彼がひとりで帰郷することを送り出すのに、彼女は青磁に戻って来いと言う。

けれども、青磁にはっきりとすべてを告げることはしない。

明白な返事ではなかったけれども。

頭の中が発泡した状態になる。何かが弾けて、何も考えられなくなりそうになる。それが「何」であるのかさえ、わからなくなってしまうほどに華やぐ騒ぎに胸が共鳴し、彼は頬がかつと熱くなっていった。

胸が痛い。

息苦しい。

耳鳴りがする。

それでも、彼女の姿も声も香りも温度もすべて・・・すべてが今、彼に向かっていると思った。

もどかしい。

でも、愛おしい。

マクドゥガル家の慣習が、なぜ、花樹に喩えられることが多いのか、彼は理解した。

彼は言葉を探した。

戀や愛は儂いものだから、という認識を改めざるを得なかった。

花が散って、その後に残るものさえ愛おしいと思うから。

唯一絶対と愛する人のことを花にたとえるのだ、と悟る。

誰に教えられるでもなく、彼はそれを知った。

思いを馳せる毎夜毎朝の青磁のことを、彼女は知らない。

それでも。

自分だけが切ない物思いに眠れぬ夜を過ごしていたのではなく、彼女も・・・少しでも・・・彼女が少しでも自分のことを気に懸けているのだと確認するような言葉を投げかけられて、彼は戸惑っていた。そういう返しを期待していたところも在ったが、彼女に限ってそのように容易く青磁に都合の良い解釈をしてしまうような言葉を使うとは考えていなかったから。

失望したのではなく、まったく予想外の出来事に青磁は心を激しく揺らせている。それだけはわかった。

「すぐに、戻る。そう、桜の薬が完全に葉桜になってしまわないうちに」

「葉桜の季節はもうすぐ、そこよ」

彼女は微笑んだ。面映ゆい思いをしているのは彼だけではないのだ、と言いたそうに。

しかし、そんな彼女の笑顔を青磁はこよなく愛していた。

彼女のことを思えば、気鬱なことも無視して遣り過ごしてしまいたいような出来事も乗り越えられそうな気がした。

何より。

この人となら・・・この人と一緒なら、彼は戻れない路に怯えて生きることはないと核心できた。いつの間にか迷い込んでしまっているような、そんな恐ろしい冷たく寂しい路の中にひとり孤独に取り残されるという恐怖に打ち克つことができる。少なくとも、そう強く心を持つことができる。

焦げ付きそうなほど強く熱い恋情を胸に、彼は囁くように彼女に言った。

「桜薬を、見てくれるか？」

「これから見に行くところ？」

狡いな、と思った。しかし憎めない。

青磁は苦笑いを浮かべる。なぜ、これほどまでに彼女は青磁の心をかき乱すのか。理由はわかっているのに、青磁はそれを考える。彼女のことを考えるのは、青磁が彼女に心を奪われているからだ。そして、諦めないと決めたから。

もし、こんな愛し方が彼女の重荷であったのなら。彼女は正直に告白するのだろうと思う。その時は、青磁は彼女との人生について考えることを断絶させなければならない。夢想することも、ひょっとして継続できるかもしれないと期待することもしないと努めるのだろう。

しかし、そんな瞬間が来ないように。

「もしも」という過程を幾つも立てて彼女に接することは避けていた。いくつもある未来のひとつにしたくなかったからだ。

切ない気持ちがあふれ出しそうになる。

思いすぎて・・・きっと、この思い全部を放出してしまったのなら、彼女を容易く壊してしまう。それが怖い。そして、彼女は彼に対して怯えているのではないのだろうか。少なくとも、彼は己が怖かった。熱情を抑えきれない時があるから。彼女に加減しない自分が苛立たしくもあり、同時に恐怖でもあった。マクドゥガル家の男子は、そういう愛し方しかしない。己があの家のものであることを証明するために保持しているわけではない気質が、彼を悩ませていた。

蒼_10

彼の恋は穏やかなものにはならない。炙られるように強く激しい念に近い感情でいつも焼き尽くすような恋愛しか経験していなかった。

でも。

あの時に、成就することのなかった戀が彼を変えた。

彼の瞳のことを彼に直接尋ねる者は少ない。青磁も人格者であるわけではないと自覚しているが、距離を置かれたようでこちらも態度を変えてしまうこともあった。

しかし彼女はどこか他の者と違っていた。ありきたりな言葉でしか表現できないが、最初は神の奇跡でもなく、運命の偶然でもなく、彼は彼女の存在を知っていた。

そして、彼に対して、叶わなかった恋の相手と彼女だけは、青磁の眼病のことを彼の一部であり個性であり特徴でしかないという認識であった。

それが彼を安堵させた。自分は人と違うのだと他者によって確認させられることにうんざりしていたから。

過去の様々な出逢いと別れの中で、彼は知った。

叶わない恋が、それを教えてくれた。

運命というものは抗えないものではなく、自分で定めることができるということ。

そしてそれは受け入れることも拒むこともできるが、ひとりの力では達しえないことも同時に学んだ。

抗えないほどに強い力で惹き寄せられる物事に、立ち止まるという強さを身につけた。

運命とは・・・運命という名前ではないのだ、と彼は思った。

抗えなかったことに対する理由であったり、永遠と定める根拠にすることもあった。けれども。季節によって今でも、叶わなかった恋のことを懐かしむことがある。その恋が成就しなかったことについては固執するのではなく、だからこそ、彼女を見つめることができるのだと思える。

そして、桜薬を見るという誓いの元に、青磁の父と母は結ばれて青磁が生まれたことも、彼の土地で様々な恋人達が花が散ってもその先まで一緒に生きていこうと誓うことも・・・今では、違った感情と景色で受け入れることができる。

そうか、と思った。

運命とは、受け入れてはじめて運命と呼べるものに形を変えるのだ。

そう思った。

勿論、彼女は彼にとって都合の良い肯定ばかりを青磁に返す人ではなかった。

青磁が帰郷することに難色を示していることの根源を見抜き、指摘し、彼を問い詰めることもやっつてのける。逃げてはいけないと言うこともあったし、時にはそんな彼女に青磁が困り果てて彼女から逃れるように会うことを避けることもあった。しかし、彼はどうにも彼女が気になってまた戻って来てしまう。

諦めたくないと思っていた。

彼女がもうやめて欲しいと言うまで。

彼が、もう、これ以上傍にいられないと思うまで。

青磁は、彼女に桜薬のことを言い続ける。

そしてそれは桜の季節でなかったとしても言うのだろう。

もう、告げてしまったから。

彼女に、彼だけの朝顔になって欲しい。

桜でも朝顔でも・・・本当は、花の種などはどうでも良いのかもしれない。ただ一つだけわかっているのは、彼だけの蒼になって欲しい。それだけだ。

しかし何度も繰り返した青磁からの求婚の言葉に彼女はイエスと言わない。

だから、時々不安になる。自分は彼女のことを苦しめているのだろうかと思ってしまう。彼が言い募りすぎて、彼女は何も言い出せないのでは無いのかと思うのだ。そんな風に思わせる態度を彼女が見せない分、余計にそう考えこんでしまう。

彼女は何も言わない。

しかし、その代わりに・・・素っ気なく尋ねてきた。

いつ、帰ってくるのか、と。

それが今は、無性に嬉しい。知らずに笑顔になってしまう程に。彼のことを考えている彼女を想像するだけで彼に幸せが落ちてくる。

待っていなかったのにやって来た桜の花片が、彼に幸せな桜風をもたらす。

愛や恋に酔って見失ってしまうものより、愛や恋に教えられ知ったことの方が多かった。

素晴らしい経験であり、彼は人を信じ、彼の紫電に惑うことのない人の声を聞き分けることができるようになったと思った。

血の繋がった、あの忌まわしい歴史を共有する一族でさえ、青磁のことを理解しようとしなかった。

与奪を司るのは、運命の人ではなく己そのものなのだ、と知った。彼女は総てを赦す女神でもないし、彼の未来を定める理由の根源でもない。

ただ、彼女がいるから生きていることが朗らかで明らかなものであると考える彼の存在になることを認めるか、そうではないか、という問題を残しているだけであった。

青磁はいつになく口籠もりながら、言った。

蒼_11

「これから桜薬を見に行くけれども・・・君にも、マクドゥガル家の敷地の桜も見たい」
いつか、とは言わなかった。すぐにでも見せたいものであったから。

あの桜達の下で、彼がかつて見てきた風景になりたい。

今度は青磁と彼女が風景そのものになりたいと思っている。

永遠を誓い、未来も一緒に現在、花がないのにそれでも集う恋人達のように彼女といつまでも一緒に同じ風景を見たい。

その色が、彼と彼女で違っていたとしても、青磁が見る彼女はいつも同じであるから。

彼女はしばらく無言であったが、その問いかけを無視することは無かった。

「青磁がなぜそうしたいのか、説明して」

「説明するために、今回戻ろうと思う」

青磁は笑う。彼女がそこまでして話を逸らかすのは、彼に一度ひとりで、戻り、彼女を伴わないで解決しなければならないものを先に解決して来い、と言っているからだ。

厭わしいと思っていた。

でも、今は懐かしい。

あの昊の下で咲く、桜の薬が恋しくなった。

あのマクドゥガル家の土地を見せたのなら。彼女は何という感想を洩らすのだろうか。

青磁はそれを考えながらも、彼女をすでにだいぶ待たせてしまっていることに気がつき、外出の支度を整える時間を短縮させる。

自分から誘っておいた観桜であるのに。

しかし桜の花はすでに存在しない。その花の下から覗く薬と葉を眺めに行く。

「でも、一度戻ったのなら」

彼は前置きした。微笑んでいた精悍な顔がふっと引き締まって真剣な面持ちになった。彼が決めていたことに対してまったく軽く考えているのではないのだという気持ちを秘めて、宣言した。

「次に戻る時には一緒に連れて戻りたい。それで良いかどうかは聞かない。そうしなければ次は戻らない、というオレの希望だから」

彼が帰る場所はマクドゥガル家であったけれども、彼はいつも彼女と帰りたい。そう思っていた。帰る場所は、彼女の帰るところだ。

あの茶色の髪の人が言っていたことと同じだろうと思う。彼女も、彼女が帰る場所は白金髪の人のところなのだと考えているから。

いつ、彼女のところに戻ってくるのかと聞いた時の彼女の心を包みたかった。それ以上に、その言葉に青磁は癒されたのは青磁の方だ。

「次の桜を眺める時には、君も一緒に見て欲しい」

「桜薬は青磁を酔わせるのに？」

「そう。だからこそ、見張りが必要だから」

彼女は少し首を傾けて、笑った。泣きそうな顔をしていた。しかしそれは困った顔ではなかった。

「わかった」

彼女は短くそれだけを言う。彼は背中まで強ばらせていた緊張を解いた。

自分がそれほど緊縛した空気を作っていた本人であると言うのに、その空気が緩和されて、今までいかに息苦しい雰囲気であったのかを知った。そんな中に彼女を置いて、追いつめたのは青磁

の方であったのに、彼女は何も言わなかった。

「・・・強制ではないよ」

「強制でする返事ではない」

彼女はいつもよりさらに素っ気ない口調で言う。わかっている。こういう風に必要最小限しか述べない時の彼女は、限りになく正直に物事を述べている時であった。

人は貪欲だ。

恋愛というものは、そこで終わり、ということはないのだろうと改めて思う。

彼女を見ているだけで良かったのに、それだけで満足できなくなってしまった。

愛は、人を狂わせる。薬は、人を酔わせる。

好きになってしまって、それが恋なのだと認め、愛になっていく。

いいや、恋を知らねば愛を得ることはできない。

桜の花が散らなければ、薬を見ることが出来ないように。

それらは別々で考えることのできないもの同士であるのだから。

それから、彼は彼女の質問に、もう一度回答した。

「すぐに戻る。それほど長く待たせない。戻ったら・・・まだ桜が咲いているところまで日帰りで良いから旅をしないか」

「どうして交換条件なの？」

彼女は笑い出した。ああ、彼女の笑顔が本当に好きだ、と思った。

思うだけで彼の心は優しく柔らかく色鮮やかになっていく。もう二度と、こんな気持ちになることはないと思っていた。

でも、今は・・・

考えてもいなかった。

こんな穏やかな微笑みを信じて、彼女を残して行くことに対する不安が霧散してしまうなんて。

しかし彼女には静寂しかなかった。

蒼_12

だから、青磁はそれで知った。

不安にさせてはいけないと思っていたが、本当は青磁の方が不安で落ち着かない気持ちを抱えていたのだ、と気がついた。

彼女はいつも変わらない。

ただ、言うべきことを言って成すべきことについて行動し、思考する。

これはひとりで乗り越えるものであるかもしれないが、彼女が彼に行くなど告げてくれたことによる安堵であることを忘れてはいけない、と心に強く刻んだ。

彼は唇を突き出して、いつものように朗らかに言った。

「君とずっと・・・桜葉を追いかけたいから」

彼はそれだけ言うと、顔を背けてエントランスの脇に設置されているウォークイン・クローゼットの扉を開けた。靴の予備や上着などはここに収納されている。そこで身支度をして室内に上着や持ち込む必要のないものを保管しておくことができる、機能的な収納場所に足を運んだ。

そこで、ふと、足を止める。

そこにあったのは彼の所有物だけではなく、彼女の薄手の羽織物が掛かっていたからだ。

小さく、気配を押し殺すかのように遠慮がちにかかっている上着は彼女が今日着ていたものであった。

その小さな事実だけで、彼は胸が熱くなる。

こういう、ひとつひとつの積み重ねが愛を大きくしていくのだと実感した。

なんだよ、と口籠もった。

彼女が主寝室のクローゼットを使わずに来客の扱いでありたいという彼女の本意がわからないと、歎いたばかりなのに。こうやって静かに彼を驚かせる準備を進めている彼女は、すぐ傍で彼の外出の支度が整うことを待っている。

それは、淡い桜色をしていた。

彼女は自分の持ち物を青磁の家に残して行かない。いつでも、ぷつぷつとやって来なくなることがある、と想定してのことであった。青磁はそういう気遣いをしないで欲しいと常に言っていたものの、彼女はそれを聞き入れなかった。

それなのに。

またこの場所に、近いうちにやって来ることを約束した上着を眺めるだけで、彼女を帰したくなってしまう。本当に、彼は彼女に振り回されている。でも、彼女の行動にはいつも理由があって、彼が勝手に不可解だと戸惑って心を揺らされているだけである。それはわかっている。でも、してやられた、という気持ちが湧いてくる。

嬉しさの次に、こんな気持ちになるなんて。

余裕はないはずなのに、笑みがこぼれてしまう。

マクドゥガル家に伝わる言葉は幾つかあるが、そのうちの一つに「切札は最後に使うもの」というものがあつた。勝負や駆け引きではないけれども、彼女はそうやって青磁に直接物事を伝えるのではなく、静かに・・・そう、桜が散り積もるように積み重ねていく。

ここに置く、ということは、また部屋にやって来ることを約束したからだ。

自分の持ち物をそこに置くことの意味を青磁は深く噛みしめていた。

そして・・・息を潜めて青磁を待つ彼女の心を知る。

すぐに、戻ってくる。

彼は誓った。まだ出発していないのに、もう、帰りたいという気持ちにさせてしまう。

彼女に夢中であることは認めるところであったけれども、これほどとは自覚していなかった。危険すぎるとも思うけれども。でも、それでも・・・それでも、この恋をやめることはできなかったし、諦めることは諦めていた。

痺れるような痛みと疼きを感じながら、彼は顔を上げた。

そして手を伸ばし、そっと・・・彼女の桜の花弁のような、そんな上着に触れようとしてまた手を降ろした。聖なるもののような、触れてはいけないもののような気がした。

神聖視してはいけない。

彼女はひとりの女性であり、そして青磁の大切な存在である以上のものを求めすぎていることもわかっていた。十分すぎるほどに。

その代わりに、彼はその隣に並ぶ自分の別の上着の肩口を摘み、そしてそれを彼女の上着に近付けた。

・・・今すぐにでも、こうしてまた彼女に触れてしまいたくなるけれども。

今は、これだけで満足しようと思った。

それは。

彼女と彼の肩の高さが並ぶ貴重な瞬間であった。

その代わりに、裾の部分が彼女の方がかなり短くなっている。彼のそれから見れば、彼女の羽織り物などはとても小さくて・・・そんな小さな衣類しか着ることのない彼女に、これほど大きく影響されているとは、と改めて思うのだ。

桜の花弁が、昊まで届いた。

この物思いの最初を思い出した。そうだ。桜の花びらが散って、この高層階まで届き、そして彼はそれに酔って・・・

青磁はまるで片恋の少年が思い相手の人物に隠れて秘密を落とし込むような、そんな昂揚を感じながら、自分の中に秘密をしまい込む。

秘めたる想いではない。彼女にすでに伝えてある思いであった。

蒼_13

けれども。

・・・今、彼は彼女に報告することもないような小さな仕草を、自分の中に落とし込んだ。

忘れない。

こんな気持ちは、ずっと続くのだろう。彼女と永遠を誓い合っても、彼が片想いである気持ちは、きつとずっと続く。それで良いと思った。

彼女に優しくしたい。彼女を大事にしたい。

そう思っている一方で、彼が怯える、彼の強い情念が彼女を滅ぼしてしまうのかもしれないという予想が的中しないことを祈りながら。彼は、彼女にこんな気持ちを持ち続ける。季節の花々を愛でて、マクドゥガル家の・・・土の香りのする場所を案内したいと考えていた。

今住まっている処のように、蒼空に近い場所も良かった。でも、土に近い場所も好きだ。昔は厭わしかったのに、今はとても懐かしい。

こんな風に思うことを、彼女は構わないと言ってくれるのなら。世界を廻って・・・いつか、彼女と蒼空に戻りたい。

あの人も、そうなのだろう。

運命の人のことを、心の妻だと言い切った人のことを思い返す。同じ愛し方ではないけれども。いつまでも、永年に、想い続けるのだろう。

「待たせてすまない」

彼はそう言って彼女の前に再び現れた。

きっと、彼の大きな独り言も聞こえてしまっていることだろう。

会いたいののに会えない時間が、間もなく訪れる。今は、メールや音声通話、WEBでの映像通話が普及された時代であったけれども、青磁は彼女はそれよりももっと近くで感じたいと思っていた。

届きそうで届かない気持ちを抱えて、彼女のことを置いて帰国することは躊躇われた。それは、彼が不安に思っているからだ。彼の知らない時間に、彼女が誰かに心を向けてしまうことを疑う自分が、辛かった。

綺麗な感情だけが生まれるわけではない。

恋とは、愛とは、己に対する試練のようなものだと感じる時がある。

それでも、彼は彼女を諦めない。もし、彼女が彼だけを求めるという人であったのなら、彼は彼女をこれほどまでに好きにならないと思うからだ。

彼女は嫌な顔ひとつせず、頷いた。

一枚少ない着衣のために、少し、寒そうであった。

彼はそれを見て、腕を伸ばす先を変えた。

「青磁？」

「今日は赦して。・・・まだ、肌寒いから」

彼は彼女の肩を抱き寄せて、自分の方に近付けた。彼女の髪が自分の手の甲に乗って、空気をたっぷり含ませた柔らかい毛布のように彼を温める。先ほどの、湿りの残る髪ではなかった。

同じ夢を見続けたい。そう願いながら。

彼は、彼女を抱き寄せた。

このように出歩くことを好まない彼女だけでも。今回ばかりは、彼に対して何も文句を言わなかった。

できることなら、決して傷つけないし、ましてや、寒い思いをさせることもしたくなかった。でも、彼女が行こうと言ってくれたから。

彼女は、彼に勇気をくれる。諦めないで信じることを期待させる。

「すぐに、帰ってくる。だから、戻って来たら・・・オレの話を聞いてくれるか？」

彼は囁いた。

これから、桜薬と一緒に眺めに行く相手にだけ聞こえるように。

あの時。

行ってはいけない、と言ってくれた彼女と築いていく未来が、とても待ち遠しい。

しかしそれは待っていてはやって来ない。こちらから・・・青磁と彼女が作っていくものだから

。

彼女に青磁は甘い微笑みを浮かべる。

「次は、君を連れて行くよ。マクドウガル家の敷地の桜はとても綺麗だから」

「私は承諾していない」

「承諾してもらえるように努力するよ。それだけ、あの桜は綺麗だから」

彼女の抗議に、彼は笑って言う。

マクドウガル家の不幸によって、焼け落ちてしまった桜があった。

マクドウガル家の多くの者が愛でたというその桜は、今、息を吹き替えそうとしている。

これから長い年月をかけて、その樹は河沿いの桜達のように見事に枝葉を伸ばすことだろう。それを、見せてやりたいと思った。

青磁の時代では達成できないことであるかもしれないけれども、次の世代には見事な桜を見ることができのだろうと思った。

「桜薬を見に行こう。・・・でも、オレはこれを君以外の誰かと見ることはないから」

「青磁」

彼女は困った声で、彼を窘める。

笑顔が素晴らしい彼女であったけれども、彼の為に困る彼女を見て、青磁は胸が躍った。

自分のために心を動かす彼女を見て、自分は悦んでいる。まったく、厄介な感情であったけれども・・・この恋を終わらせることはしない。

しかし、マクドウガル家に戻った時に。

自分から尋ねたことはなかった、彼の親の桜薬にまつわる話を質問しても良いのかもしれないと思いはじめていた。

ああ、確かに、桜の薬に酔っている。

彼は実感する。

雄薬と雌薬が寄り添う姿を見て、桜が散っても・・・恋を愛にかえて、彼はずっと彼女と寄り添って大きな樹木の枝葉となり、朽ちてなおその養分となって生きるという生命を過ごしたいと強

く願った。

「行こう。少し眺めたら、どこかで食事でも良いかな。体を動かしたから空腹で・・・」

その先は言う事が出来なかった。

真っ赤になった顔のまま、彼女が青磁の脇腹を叩いたからだ。

涙目になり、彼女はそういう話題を人一倍嫌うことを知っていながらの青磁の発言に動揺してしまっている。

それでも、彼は彼女の肩を離さなかった。

「行こう」

彼は笑いながら、扉を開けた。

その時。

ふわり、と桜の風が彼の鼻腔をくすぐった。

桜の香り、というよりかはむしろ、桜の薬の香りであった。

廻りゆく季節のひとつであるかもしれない。

けれども、どうにも愛おしい季節の瞬間に、彼は片方だけ薄い瞳を細めて、そして深呼吸した。

そして心の中で呟く。

桜の薬に酔ったのは・・・君が傍にいるからだ・・・

それを桜の薬の下で言うために、今は、声を呑み込んだ。

桜の風を感じながら。

青磁は彼女とともに、外に出た。

あのマクドゥガル家の桜の薬を、彼女と眺める日が、遠くない未来にやって来ることを願いながら。

彼が、彼女の肩を自分に寄せたまま、歩きだした。

不思議なことに、彼女は抗わなかった。

桜の薬に酔ったのは、彼だけではないのかもしれないな。

彼はそんなことを思いながら、微笑みが自然に浮かぶ自分の心が桜の薬のように鮮やかに色づくのを感じていた。

春は彼らの元にやって来て・・・そして、また次もやって来ることを言い追いて去って行く途中であった。

男女が永遠を誓う、愛の証を、眺めるために。

ふたりは桜の季節に出かけて行った。

T-side

◆01 まずはその対象と構図から

彼が徐々に名前を知られていくようになる都度、私は少しだけ残念な気持ちになる。それは、有名になったとたんに興味が失せる芸能人に対するそれと、何となく似ていた。彼が知らないところに行ってしまう。それがどんなに喜ばしいことだったとしても、寂しいのだ。

彼が画廊のオーナーとグラフィックデザイナーの兼務が難しくなってきたとき。画廊の店番をしないか、と突然電話が入った。考えさせて、と言おうと思ったけれど、次に口から出た言葉は「仕方がないから引き受けてあげる」という即答だった。定職にも就かずぶらぶらしていた私にアルバイトをしないかと持ちかけてきたときだった。彼が私を思い出したことが、嬉しかった。

時々、メールのやり取りをしたり、共通の友人達と一緒に飲み会をしたり。その程度の関係であったはずなのに、私に声をかけてきてくれた。それだけで、有頂天になった。

持ち上がりの私立学校で、彼は典型的なお坊ちゃんだった。倅せに育った人間は、鈍くなると思った。穏やかで物静かで、そのくせ成績も運動も何もかもがそんなに苦労しているとは思えないのに抜群に良かった。その穏やかな物腰のせいで、リーダーになるタイプではなかった。その代わり、彼の一言は常に絶大だった。

私もそれほど毎日の生活に困っているわけではない。現にこうしてアルバイトで日々を過ごし、気ままに旅行したり遊びに行くことができるのは、やっぱり親が自分を扶養してくれているからだと感謝している。でも、つまらないのだ。毎日が、つまらないのだ。

そんな気持ちを、ワタルが最初に見抜いた。

「杜宇子。もうちょっと自分を好きになったら」

ある日。そう、ある日突然彼は言った。私はワタルは鈍感だと改めて思った。平気でそういうことが言える彼が恨めしかった。狡いよ、ワタル。その瞬間、私が恋に堕ちたことを、知りもしないで。

以来、私はワタルを「ワタル」と呼び捨てにする最初の女子になった。

「杜宇子」

彼が私をそう呼ぶたびに。彼が私をそう呼んでくれるようになったことに。

私がどんなに嬉しい気持ちを堪えているのか、彼は知らない。

◆02 要件定義には階層と優先順位

長い時間一緒に居ればやがて恋が芽生えるなんて妄想は持たないことにした。

本来不在にしがちになったワタルのかわりに店番をするわけだから、会うとか会わないとかいうところの話ではなく、単に縁が繋がっているというそれだけの関係だった。

でもそれだけでも私は特別なのだ。そう思った。そう思うことにした。彼らしい画廊の配置図に感心し、いつも片付けられた空間で彼が仕事をしている姿を想像する。単なる留守番だったけど。

この恋はとても密やかに息をしていた。芽吹く時期を待っていたかのように、とても昔から私の中にあつた恋の種なのかもしれない。一瞬で恋に堕ちたのに、恋を持続させることは難しい。私はワタルを好きになったのに、その後、手に入らない恋を嘆くより、新しい恋をすることに夢中になった。そして、学校を卒業したら、ほんの数回会う程度にしかならない関係しか残らなかった。

それでも、彼が私が職を探していることを、大分前の飲み会でほんの一言二言言っただけなのにちゃんと覚えていて、そして私に声をかけてきてくれたことを徒事ではないことなのだから、この出来事を、この眠っていた恋の種に水をやるべき時という「スタート」にして良いのかなと思った。

そんなとき。

ワタルが、恋をした。

彼が人を好きになることなんてあるんだね。
人事みたいにそう思った。まるで誰かの噂話のように。

ワタルの恋。へえ

もう一度、心の中でその驚きを繰り返した。

そのときにはもう、自分自身の言葉に、少なからずの衝撃を受けたのだったが。

相手は、画廊が主催している絵付け教室の講師だ。
年は、私たちより少し下だ。
とても小柄な女性で、幼く見える。
化粧っ気がないので、場合によっては学生に見えないこともない。
茶色い髪に茶色の瞳の、色素の薄い女性で、外に出る仕事はしていないのだろうと一目でわかるくらい、色の白い人だった。

先般、取材に来たキャスターの女性の妹だそうだ。何となく似ている。
予定していた講師が急病で代役を頼んだところこれが好評だったということで、以来彼女はたまに顔を出して、依頼された講師のアルバイトをするようになった。

私は、ワタルが密やかな恋を始めるところに居合わせる格好になったのだ。

◆03 基本設計には論理とドメイン性の確保が必要

ワタルは明らかにその恋を秘めたるものになっているらしかった。
それでも、彼女が来るときには画廊はいつもにも増して綺麗に整頓されていたし。
彼女が来るときには、生徒の気が散らないように参加を遠慮する彼が、後ろの席に座って聴講している。明らかに、彼は「いつもの」彼ではないのだ。
だからと言って彼の穏やかな性質そのものが変化するような激しい恋ではないようだった。
静かに、彼女を見守る。そんなかんじだ。

なぜ彼女に告白しないの？と尋ねたことがある。
えっ??
穏やかな彼の頬が朱に染まった。
目元まで染まるものだから、私は苦笑いをせざるを得なかった。

彼女？誰のこと？
あなたが今ここで、微笑みながら一生懸命ディスプレイと会話しながら作っている、そのグラフィック作品のモデルの事よ。私は辛辣に言った。

時々忘れてしまうくらい私には昔からのワタルだが、彼はグラフィックデザイナーだ。

その斬新だったり懐古的だったり、とにかく私には考えもつかないような作品を創り出す彼は、自分のサイトの隠しアイコンに彼女をモデルにした作品を掲載していた。
もちろん身元のはっきりしない者はいれない厳重な制限の元に。
ワタルは一体何歳になったの？と聞くと、杜宇子と同じ年だよ、と笑う。

その年齢になってまで、そんなお子様みたいな恋しかないワタルがよくわからない。

私がそう言うと彼は困ったな、と頭を掻いた。
そして少し疲れたように眼鏡をはずして目頭を押さえた。
今、創っている作品の仕上げに入っているらしい。
それほど根を詰める作品のモデルを、穏やかに見つめるワタルがよくわからなかった。

私がワタルへ何か秘めていることくらい、わかりそうなものなのに。

ワタルはちっともわかってない。
私は言った。

フランスまで買い付けの仕事を依頼するほど彼女を信頼しているのであれば。
自分の作品のモデルを依頼して承諾してくれるほどの関係であれば。

彼の静かな想いというのは、静かだけれど見つめるだけで済まされてしまう程度なの？

「杜宇子のその物怖じしない言い方は気持ちが良いね。」
ワタルは言った。

そして、彼女に言うつもりはないよ。
ただ、こうしてモデルになってもらうことを承諾してくれるだけで満足なんだ。

呆れた、と私は言った。憤りでなんだか涙が出そうになる。
ワタルの恋が理解できない。見つめているだけで満足できる恋なんてない。
恋は墮ちるものであり、そして静まるものなんかじゃない。

ワタルは確実に恋をしていてそして私はそんなワタルを見るだけで切なくなる。

それにね、彼女には恋人が居るんだよ、杜宇子。

ワタルがそう言った。
◆04 発想の源ではなく品質の検証材料のために在る

だから何？

私は彼に詰問した。なぜだかわからないけれど憤っていた。
ワタルの穏やかさが好きなのに、そのワタルの穏やかさが腹立たしい。

思い通りにならないから、八つ当たりしている。わかってる。
彼の情熱が自分に向けられないから、私は憤っているだけなのだ。
その一方で、彼のこういう愛し方が羨ましかった。

私の恋は、スタートすることをやめてしまったときに枯れてしまっていたのだ。
その蒔かれたばかりの時と違うものになってしまったのだ。

恋をやめると思った瞬間に恋が終わっていたのだ。

どうせ、ワタルは私を見てくれない。それなら、ずっと一緒に居られる方を選ぶ。
そうやって私は私の恋と私が傷つくことと天秤にかけた。
そして後者を選択した以上は、ワタルを自分と同じだと思って、憤ったり教え諭す事なんて、所詮意味のないことなのだと思います。

恋をやめる事なんて、だれにも出来ないのに。
私でさえ、ワタルでさえ。
だから、思いを遂げなくてもその恋をやめずに続けるワタルはやっぱり凄いヤツだねと言って、
後押ししてあげなければいけない立場にあるのに。

私には責める資格なんてないのだ。もちろん、権利も義務もない。

「ワタルは阿呆だ」
私は決めつけたように言ったので、ワタルはまたちょっと困ったように息をついて、その指の動きを止めた。
「杜宇子。杜宇子は何を憤っているの？」
「ワタルが本当に阿呆だから。・・・奪えば良いでしょ。本当に好きなら」
「彼女はモノじゃない」

ぴしり、と彼が言ったので、私は顔を上げた。
厳しい、知らない男の人の顔が近くにあった。驚いて、少し後ずさりした。

「そういう言い方はやめてくれ」

・・・びっくりした。ワタルは静かに怒っていた。彼女をモノ扱いしたから。
彼がこれほど怒るのはまったく希なことで、成人してからは見たことがなかった。
私に対してそういう怒りをぶつけることが初めてだった。

思い上がっていたことをようやく知る。
特別なのは、彼女であることを知る。

私は、あまたある衛星のうち、ほんの少しだけ彼に近い衛星であるに過ぎないことを。他の人よりほんの少しだけ、距離が近いから、だから余計に見えてしまう。見たくないものも、自分だけに見せて欲しいと切望するものも。

「ごめん」

ワタルが言った。いつもの彼だった。

「私の方が踏み込みすぎた」そう謝る。こじれては、お互いが苦しいだけだ。それにワタルに謝ってもらうようなことはされていない。私がただ、勝手に傷ついて勝手に怒って勝手に嘆いているだけなのだ。
◆05 そして要件定義や現状分析を忘れていることに気づく

彼女の買い付けた絵は、確かに素晴らしいものだった。誠次・マクドゥガルというまだ無名の作家のものだったけれど、本当に素晴らしい。あまりこう言ったことに明るくない私でさえ、この絵の切なる想いが伝わってくる。

ビジネスでもプライベートでも彼を満足させる彼女が、羨ましかった。

そんな折。
彼女が話しかけてきた。

人好きのする彼女は、ほとんど口をきかない私にずっと話しかけるタイミングを見計らっていたようだった。いやな相手と話をしなければならない。私は一度苦手意識を持つと、とことんその人が苦手になる。彼女に対しては不思議とそうは思わなかった。自分より年が若く、小柄なこの女性は、誰にでもくっつくなく話し、いつも朗らかに笑う。加えて、こんなに素敵な買い付けができて、講師としての人気も高い。それにフランス人の恋人がいるということだ。順風満帆じゃないの。羨ましい。でも、なぜか憎めない。

「オーナーとは、同級生と伺ったのですが」
彼女は言った。そうよ、と私は素っ気なく言った。
「中学校から一緒だったの」
「そうですか、そんなに長いおつきあいというのも羨ましいですね。」
彼女が目を丸くする。

「時間の長さじゃないわ」
私はそう言い返した。かなりとげとげしく。
それは、私とワタルが過ごした時間の何万分の一の時間しか共有していないにもかかわらず、一瞬で彼を惹き付けてしまった彼女へ投げかけた暴言だった。

彼女はこの言葉に傷つくかもしれない。言ってしまった後に、気がついた。
でももう言葉は出てしまった後だった。

「そうですね、私もそう思います。・・・一緒に過ごさなかった時間も大事なのだと」
そうして、ふと、壁に飾られた3点の絵を見つめた。
「もちろん、時間を共有することはとても素晴らしいことですが」
彼女の目は何を見ているのだろうか。
「恋人と会えなくて、寂しいの？」
そう尋ねると。彼女は一瞬唇をびくりと動かして、それから真っ赤になった。
ワタルの赤面どころではない。首まで赤くなっている。
なぜ知っているのと言いたげだったけれど、女のカンよ、と笑ってごまかした。

「いえ、なんと言ったらいいのか。上手に言えないのですが、
失われた時間は戻らないけれど、それに気がついてそれからどう過ごすかという時間が大事なのかな、　　と思って」

彼女のことをワタルが好きになった理由がわかったような気がする。
彼女は、どんな人にも、入り込めるのだ。そしてすぐさま親しみを感じてしまう。
でも決して自分のことは言わないし明かさない。
これ以上入り込んではいけないという拒絶を感じないので、気がつかないのだが。
これはワタルと同じだ。
だから惹かれてやまないけれど、ワタルは彼女に近づこうとしないのだ。
それでも時折、こうして彼女の防壁が崩れるときがある。
それが、自分が初めて入って良いよと許した、好きな人のことに関わる時だけ。
これもワタルと同じ。

しょうがないなあ

私は苦笑した。年下のこの彼女にやり込められてしまった。
完敗だ。敵わない。でも、負けない。

でもなんだかすっきりした。心のもやもやというか疑問が晴れた、そんな感じだ。

その物思いを彼女が察したのかはわからない。

彼女は小さく笑った。

「私の初恋、実は中学校の同級生なんですよ！」と言って離れていった。

その言っている意味、わかっているのだろうか。

彼女の明るさからみると、それは懐かしい暁なのだろう。

時々思い出すけれども、眩しくて目を押さえるほどの光でなく、柔らかくそして優しい煌めきなのだと思う。

ワタル。

私の恋は秘めたる恋だ。今は、まだ。

そして秘めたる恋を持つワタルが好きだ。

お互いに、その恋について語ることが出来たら、もうちょっとだけ、ワタルに近づいても良いのかな。

私にとっては、たった一つのお星様だけど、ワタルにとっては私はたくさんいる友達のひとり。

でも、ワタルから見て、一番光っている衛星になりたいと思った。

どんなに時間がかかっても、良い。

必ず、彼から近寄らせてみせる。

就職先、探さないとなあ

彼女の後ろ姿を見ながら、そんなことを思った。

(FIN)

U-side 闇蟬 前編

鳴く蟬は、「吟蟬（ぎんせん）」という。
鳴かない蟬は「暗蟬（あんぜん）」というのだそうだ。
それでは、私は鳴かない蟬だから、暗蟬なのだろう。
鳴きたくても鳴けない。そういう蟬もいるのだ。

「ウメ、調子悪いの？」
そう聞かれて、私は手を止めた。
今しがたのセッションで、ブレスの位置を確認するために、イメージトレーニングをしながら楽譜にメモを書き込んでいた最中のことだった。
「そんなことないけど・・・？」
「そう？Cの音が微妙に高い。…この気候のせいかな。」
彼はそう言った。オレもリードの調子が悪いんだよね。そう言った。

ここは完全防音室で、外気の湿気や温度とも完全に隔離された場所なのに、彼はそう言う。
微妙に出入りの風が影響しているのかもしれない。
オーボエ奏者は神経が細かい人が多い。
細やかでないとあの繊細な音色を出すことが出来ないかと言うかのように。

でも、大はそんなオーボエ奏者と違っていた。
おおらかで、理論的に物事を進める。
理系で、将来は物理学や生化学などの方面に進みたいと言っていた。
音楽業界は文系が多いと思われがちだが、本当は理系が多い。
このジュニア・オーケストラでは圧倒的に理系だった。
文系理系と区別することの方がおかしいだろう？
彼はそう言って笑った。

「そうね、この蟬の音がなんだか調子が狂ってしまうのかも」
大は私のことを「ウメ」と呼ぶ。本当は「梅華」という名前なのだけれど。
楽器ケースに書かれた私宛のサインに「To ume」と書かれているのを見て、そのままそれで呼ぶようになった。
彼だって本当は「ヒロ」という名前だけれど、私は彼を「ダイ」と呼んだ。
私たちはそういう間柄だった。友達以上で、恋人未満。
一日のうちの大半を一緒に過ごす間柄だけれど、彼の心には踏み込めない。そんな間柄。
主席オーボエ奏者とフルート奏者は隣同士に座る。
これは何百年も変わらない配置。
最近では弦楽器奏者の配置を変えて演奏することもしばしばあるけれど…
管楽器奏者だけは変化しなかった。

ダイと出会ったのは、この松本で行われているジュニアオーケストラの選抜メンバーによる講習会が初めてだった。中学3年の時だった。

全国選抜された、全国の学生のうち、ほんの一握りだけが夏の短い期間、ここで合宿を行い、世界中に散った日本の音楽家の指導を受ける。

彼は、休憩時間には受験参考書を手にとって、一心不乱に受験勉強をしていた。
防音が完全に行き渡った練習室から抜け出して、彼はたくさんの蟬が鳴く木の下で勉強していた。
松本は空気が乾燥して、日陰は涼しいけれど、日中は暑い。
蟬も大音量で鳴いている中、彼はまったく耳に入らないかのように集中していた。
…オーボエ奏者の特徴だった。いや、トップ奏者はこういう気質が強い。
私も一度レッスンに入ると、時間を忘れることがしばしばあった。

音楽科に進まないの？
そう話しかけたのが最初のきっかけだった。
彼は顔を上げた。

ああ、将来はもっと違うものになりたくて。

彼が笑った。

私たちのような若い学生が、全国から集まり、そして世界で活躍する音楽家の指導を受けることが出来るのはその地道な努力と、長い経験年数が必要最低条件だ。
彼は、驚くべき経歴の持ち主だった。
小学校高学年でオーボエを始めて。
まだたった5年の経験年数で、ここまで登りつめてしまった。
彼の名前は聞いたことがあった。
学生コンクールで、突如として上位入賞を果たしてしまった新星だった。

彼のその音色が好きだった。
透き通るのに、艶めかしい。情動的なのに、静寂に響く。
すぐに彼だとわかる音。
それなのに、ピッチは常に狂ったことがない。

その時。
私の心の中で何かが動いた。

彼に心を動かされた。
今まで、音楽の路以外に、私が心を奪われるものなんて、何もなかったのに。
彼を見ていたいと思うようになり、そして翌年の合宿にはまた会いましょうと約束するだけで精一杯だった。

何てこと。

私は彼に、恋をしてしまった。

彼の音色の秘密はなんといってもそのリードの製法にある。
ダイは言った。
「リードはやはり自分で削るに限るよな」
いつだったか。彼に頼まれ事をした。
一緒に買い物に行つて欲しいと言う。

私たちは年に一回、この合宿でしか会えない。
だから、私は選抜メンバーに選ばれるために必死でレッスンを重ねていた。
その合間を縫って、つきあって欲しいという。
彼の実直な性格を考えると、これはデートの誘いではないことがすぐにわかった。
・・・行った先は駅前の、デパートの化粧品売り場。
外国産のネイルエナメルを購入したいと言う。
「リードの接着にはこれが一番で。でも買う暇がなかった」
彼はそう言った。
でも、年若い男の子がそんな化粧品売り場をうろつくこともできないので、今までは姉に頼んでいたけれど、やむにやまれずウメに頼むんだよ、と彼はそう言った。
私は二つ返事でOKした。

オーボエとフルートは密接な関係にある。
その管楽器の形態からオーボエはクラリネットと同じに見られがちだが、本当は限りなくフルートに・・・C管に近い。
ピアノで「ドレミファソラシド」と叩いたときに同じ「ドレミファソラシド」の運指で動く楽器と小さい頃から一緒に過ごした。
これは親にも環境にも感謝しないとイケない。
私の絶対音感に気がついた周囲の人から勧められて、ピアノとフルートを始めた。
でも、フルートにはすぐに限界を感じた。
・・・そんな私が未だにこうして日本の選抜メンバーに残ることが出来るのは、私が器用貧乏だから。

私は真の奏者になれない。そう感じたのは。
私が、アルトフルートも、ピッコロも、負荷なく吹けるからだ。

通常ソロ奏者は自分の楽器以外は吹かない。
なぜなら「口が変わる」という言い方をして、口角の回りの筋肉を変化させることを厭うからだ。

私はそれが自在に出来た。
だから、技術がたいしたことがなくても・・・
そこそこに演奏できて、皆の厭う他の楽器も演奏できる便利な人間としてしか、重宝された。
いずれ、このメンバーから世界にでる人が出るだろう。でも私は選ばれない。
でも、私はわかっていた。
自分が、この日本の狭いジュニアという世界でしか生きられないことを。

そんなときに、別の道を進もうとするダイに出会った。
私はそんな道もあるのだとはじめて知った。
・・・毎日毎日、血反吐が出るくらいのレッスンをこなす日々が辛かった。
ここまできたらもう引き返せなかった。

一日のうちの練習時間は、こういう休みの時であれば、10時間を超す。
生活時間と睡眠時間以外は、常に楽器をもっている状態だ。
もしくは、音楽について講義を受けている時間。
私の中で、音楽は生活の一部であり・・・睡眠時間より長く接している辛い時間だった。

それを、ダイはあっさり捨てると言う。
「大学に入って、専門課程に入ったら、音楽はやめるだろう」
彼は買い物かごの帰りみち。帰りのバスの中でそう言った。
「もったいない」
そう言うと彼は笑った。闊達な笑いだった。

「もともと部活の延長で・・・もっとやりたいことがあるのに、これに時間を割けない」

彼は笑った。音楽は好きだけれど、もっと好きなものがあり、好きな人がいて。
そしてその人のいる海外に飛び出したい。
彼はそう言った。

私はその彼の凜とした横顔が羨ましかった。
惰性で続けて居る私よりずっと才能溢れている彼が。
そんな風に音楽を「たくさんある好きなもののひとつで、もっと大切なものを優先したい」
そういう気持ちを語ることが切なかった。

…蝉が鳴いていた。

まだ季節は夏だった。

私とダイは、とても近い場所に居ながらにして・・・とても遠い場所に居るのだと悟った。

本当は年に一度しか会話を交わすことはなかったけれど。
もっと別の彼を知っていた。
こっそり、中学と高校のオーケストラ部の定期演奏会に行っていた。
毎回、必ず、開場すぐに行って、同じ席に座った。
もう何年になるだろう。
毎年2回ずつ行われる演奏会では、彼は常に首席奏者だった。
学校のオーケストラ部であるから、品質はたかが知れている。
でも、彼の演奏は際だって素晴らしかった。

…彼は世界的に有名な奏者になることができる。

私には、そんな奏者になる技量はなかったけれど、その奏者になる資質を持つ人を見分けることだけは長けていた。

拙い音楽を演奏する集団の中にあっても彼の音色は煌めいていた。
そして、それが逸脱しないように、周囲に気を配る余裕も見せていた。

私は彼の音楽に恋をしているのか、それとも彼そのものに恋をしているのかわからないくらい…夢中になった。

でも、私の夢中は皆と少し違っていただいようだ。
静かに、何年も見守ることが、その証だと思った。
かつてのサリエリのようにモーツァルトを激しく愛しすぎた感情ではない。
…長く彼を見守っていたかった。
そして彼が始めて演奏するソロには、私が立ち会いたいと思った。

何回か、その演奏会にいくうちに、同じように、同じ席に座る人が気がついた。
一番前の正面の席。

音楽通ならあまり座らない席だ。

…でも、ダイはその席の人に合図を送っていた。
着席するなり、とんとん、と左足のつま先で、彼は音を鳴らす。
その席に座る人が、茶色の髪を動かす。顔いたサインだ。
彼と彼女のその合図に気がつかない人がほとんどだった。
でも、私は気がついてしまった。
後ろ姿だったので、顔がよく見えない。
小柄な、茶色の髪の人だった。

私はその人を凝視した。
彼の音色を理解しているとは思えなかった。
ただ、演奏会に来ているだけ。一般的な父兄の聴音の様子に、私は何か言いようのない感情を持った。
…ダイは、音楽がわからない人が好きなのだ…
そう思うと、遣る瀬無くなった。
彼を理解できない人を彼が好きになったことに。
彼を理解しているつもりであった私がちっとも彼を知らないことに。
遣る瀬無くなった。

その年の夏。
ダイは言った。
「ウメ。・・・オレの演奏会、来てくれた？」
なんのことかしら？
私は笑った。
ダイは「君によく似た人を見つけて・・・舞台から手を振ったんだけど」
と言った。
私は笑った。「他人のそら似でしょう？」
そうか、と彼は言った。

でも、匿名で花束を贈り続けたことについて彼は触れなかった。
彼に贈る花はいつも同じだった。
前から注文して、その季節になくても特別に取り寄せる花。

ベラドンナ・リリーの花言葉。
——「私を見て」

彼はその意味に気がついたのだろうか。

私の夏は彼に会うことから始まる。

ダイ。
私のこの気持ちに気がついているのであれば…
その屈託のない笑いを私だけに見せて欲しい。
そうでないことはわかっているけれど。

私の、彦星様。

一年に一度しか言葉を交わすことができない、私の王子様。

どうか、私だけに微笑んで欲しい。

そして私たちは何年にもわたってパートナーだった。
毎年顔を合わせれば自然に一緒に居る時間も長くなる。
彼と私の席はいつも同じだった。
隣同士。
そして勝手の知る練習開場では、彼のピッチに合わせたA音で始まる。
もう、チューニングメーターはいらなかった。彼の音はすぐにわかり、
私はトップ奏者としての合図を受ける。

…甘美な瞬間。

調和がとれ、A音でハーモニーが生まれる。
トップ奏者と言われる人達はメンバーの入れ替わりがほとんどない。
その代わりにその他の席は、どんどん新しいメンバーが入れ替わっていく。

厳しい世界だ。
トップ奏者と思っていても、翌年には次点に座っていることもあるし、
その席そのものがないこともある。

私はこの席にしがみついていたかった。
ダイが居る限り。

そんなときダイが言った。
「ウメ。なんでそんなに悲愴な顔をしているの？」と。
私はちょっと泣きそうになった。
だって、苦しいから。
そう言いたかったけれど言えなかった。
恋をすると音質が変わる。
それは本当だった。身をもって実践した。
それでダイが恋をしていることを共感してしまった。
..だから哀しかった。苦しかった。辛かった。

彼の音色は素晴らしい。技術もそうだけれど、そのたぐいまれなまろやかな音が。
私の心を打ち、そして聴衆を魅了する。
この耳ざとい選抜メンバーでさえ、自分の演奏を忘れて彼の音色に聞き惚れる。
…もったいないよ、ダイ。これを捨てるのは惜しい。

そう何度もいったけれど彼は笑って言った。
「世の中にはもっと凄い人がたくさんいる」と。

そして彼は言った。
「ウメと演奏しているときが一番楽だ。音域もブレスのタイミングも一緒に…
なんだか二人で演奏しているのに、そうじゃないみたいだ」
——彼の最大の賛辞だった。

私は目を瞑った。

なぜ、トップクラスの奏者は、男性が多いのか。
体格が違う。
肺活量が違い、骨格が違う。
筋力で何時間もその姿勢を支えることが出来る。
そして極めつけは呼吸方法だ。
女性は胸式呼吸。男性は腹式呼吸を無意識のうちに行っている。
体の作りが違うから、仕方がない。

だからダイが「呼吸方法がウメと同じ」というのは語弊がある。

オーボエは息の長くはき出すことの出来る楽器だったから、その演奏は、私に合わせているのだけなのだ。

私は少し哀しくなった。
確かに、ダイとは音調も解釈も何もかもがとても良く似通っていると思う。
でもそれと演奏スタイルとはまったく別のものだ。
私はどんなに頑張ってもダイには追いつけない。
追いつく前に彼は走ることを止めてしまうという。
だったら、この気持ちはどこにたどり着けばいいのだろう。

私はダイと一緒に居ても、他の人がいると話をしない。極力しない。
私とだけ話をしていての彼しか話したくなかった。
正確に言えば、他の人と話をしていてのダイを見るのが切なかった。
だから少し距離を置いてみている方が、楽だった。
「ウメももうちょっとみんなと話をしたらどうなの」
ダイはそう言うけれど、私はちょっと首を傾げて、
「ダイがいないときには話をしてるわよ、たくさん」
と言った。その通りだったから。

私のそんな様子はダイを嫌っているかのように思われたらしい。
木管楽器だけのパート練習の合間に、そんなことを言われた。

「梅華は大が嫌いだなあ」

そうじゃないよ、と私は笑ったけれど否定はしなかった。

嫌いと好きは紙一重だ。

だから、私のこの感情は、好きでも嫌いでも表現しにくかった。
でも相手の不幸を願う感情はなかったので、あえて「好き」ということなのかもしれない。
それ以外は・・・見ていたくない、話すときも苦しい、心が乱れて演奏に支障が出る。
それは嫌いという表現では成り立たないのだろうか。
そんな「好き」か「嫌い」かで済ますことが出来るのであればどんなに楽だったか。

そして今年は、世界的に有名なヴァイオリン奏者であるカオル・ヒビキヤがゲスト参加するという。
私たちは興奮した。
このジュニア・オケに選抜されなければ、世界の楽団に所属する以外に彼女と共演する機会はまるでないのだ。
特に彼女はソリストだから・・・こういうオーケストラに参加するというのは、珍しいことなのだ。

今年はダイと演奏する最後の年になるかもしれない。
無理してでも、出たい。
そう思えるような最後の夏。
記録的な猛暑で、外の蝉が慌てて鳴いているかのようなそんな暑い夏だった。

でも私は気がついていて。
ダイのケースには、毎年のように、サインが増えていた。
それは、すべて・・・カオル・ヒビキヤのものだった。
そして・・・その傍らにはいつも小さく、「Marina」とサインされていることに。
演奏家にそんな名前の奏者は居ない。

――マリナ。
それがあの人の名前なのだろうか。
彼は数年の間に、何台か楽器を買い換えた。
それなのにケースは交換しなかった。
それは偉大な音楽家のサインを放置するに忍びないと思っているからなのか、それとも、「Marina」と書かれたその人のサインを大事にしたいのか、聞くことができなかった。
私は逢うたびに「楽器が変わったね」「リード、調子が良いのね」と言うしかなかった。

麗人というのはああいう人のことを言うのだと思う。
秘めた情熱が進る三白眼に、女性にあるまじき長身は、ヴァイオリン奏者の利点になった。
長い手足に、均整の取れた体つき。長い手指に、繊細な技法。
素晴らしい甘い音色が彼女の世界を豊かに繊細に色濃く表現する音楽は、やはり生演奏が素晴らしいと思った。

彼女のレッスンシーンを目の前で見られるというのは僥倖に近い。

・・・今年の夏は、以前にも増して暑い夏だった。
私の楽器は暑さに弱い。
だから、時々練習の手を止めて、楽器を冷やさなければならなかった。

もう、夕暮れ。
一体何時間レッスンすれば、彼に追いつけるのだろう。

私はそう思った。
そして、蟬の鳴く杜を、見上げた。

レッスン室は完全防音とはいえ、周囲に音が漏れる。
だから、こういう合宿所は、森の中にあるか、誰も来ない墓場の近くにあるかと相場が決まっていた。
今年は、この合宿の後に合流するプロのオーケストラと、カオル・ヒビキヤとの共演コンサートも計画されているし、彼女の来訪に相応しい場所として、この杜の中の合宿所が指定された。
松本や甲府の付近ではこういう施設が整っていてとても安心できる。
冬は雪深くなるか湿度が極端に下がった寒風のために、管楽器奏者のレッスン上にはまったく辛い場所ではあったが、湿度が少ないので、弦楽器奏者やハープ奏者、ピアニストが多く集う場所でもあった。

そんな静かな杜に鳴く蟬を見ることはないけれど、ただただたくさんの音を奏でる蟬を。
私は静かに聞くことがまだ、できなかった。

ねえ ダイ。
ダイは知ってるのかな。

この泣いている蟬と同数だけ、泣かない蟬がいることに。
その存在を気がついてもらえない蟬がいることに。
鳴いている蟬を恋い焦がれても、彼女たちは、泣くことが出来ない。

彼らの…その音色に同調することが出来ない。

私そのものだ。
暗蟬。それは私のことを指す。

カオル・ヒビキヤは、噂に違わぬ麗人だった。
とても女性とは思えない長身に、物憂げな三白眼の美しい顔立ちの持ち主で、小さい頃から英才教育を受けてきた彼女は、そのまま音楽だけの世界に生きているようだった。
でも、カオル・ヒビキヤのCDもDVDもほとんどすべてを持っていたけれど。
実物の彼女はもっと迫力があつた。ソリストとしての自信と経験と…そして何か思いきったような闊達さと強さがあつた。
彼女はぬるま湯で生きてきた人間ではなかった。
心臓を患い、奇跡の生還を果たし、現在の音楽活動に至るまでは、随分と断絶期間があつたという。
そんな彼女は思いつめたような三白眼が印象的だった。

彼女はその日の合同練習が終わった頃、最後に一通り演奏してみようか、というところで現れた。
彼女はラフなパンツスタイルで、大股で入ってきた。
バイオリンケースをひょいと、片手に掲げて、ふらっとやって来た。そんな感じだった。
ホールの全員が、一斉にどよめいた。
カオル・ヒビキヤだ！

100人ほど居るホールが騒然となった。

全員が、足を踏みならす。
楽器を持っているから、拍手は出来ない。
これはオーケストラ独特の、歓迎の合図だ。
ホール一杯に、皆の踏みならす足音が響いて、彼女はその歓迎を受け止めました、と言うかのように、少し右手を挙げた。
彼女はサングラスをかけて、颯爽と登場した。
王子様みたいねえとクラリネットの女の子が私の後ろで呟いた。
女の子よ、カオル・ヒビキヤは。
そう言うと、ちっとも女性に見えないじゃない！
と口々に女子が反論した。
ジュニアメンバーは、一番年上は19歳、年下は13歳だから、そんなため息もとても幼く聞こえる。
彼らは恋も知らない。
恋する暇はない。
家と学校とレッスン教室を唯ひたすらに往復する毎日だ。
だからこういうタイミングで、著名な眉目秀麗な音楽家に会えると、こぞってテンションが上がる。
それもジュニアメンバーならではの楽しみでもあるのだが。
彼らは、本物を見ることが出来て興奮しているようだった。
私はそんなものかしらと思った。
一一一苦笑した。

彼女を見てもあまりときめかない。
音楽家としての彼女は尊敬し、そしてその演奏を生で見ることが出来るのは嬉しい限りだが、あまり、そういう「色めき立つ」感情が湧かない。

それは私が恋を知ってしまったからだった。
今、左隣にいるダイが最も輝いて見えるから。
最も身近に居るから。
遠い世界のカオル・ヒビキヤを見て、ときめく余裕がなかった。
私は隣にダイが座って居ることの方が大切に… 苦しかった。

私はダイを横目で見た。

彼は普通の態度だった。リードを締めて、音調を調整していた。
あの茶色の髪の人に合図したように、とんとん、と左足で二回、床を鳴らしたただけだった。

その合図に。

どういうわけか、カオル・ヒビキヤが反応した。
ふと、その物憂げな三白眼をこちらに向けた。

…こちらを見ていた。

…ダイ？

ダイは微笑んでいた。
不敵な笑いを浮かべて、カオル・ヒビキヤを見ていた。

「大。師匠が到着だぞ！」
ホルンの男との子がそう言った。
彼はうるさいなあと言った。
…鈍感な私はそこでやっと気がついたのだった。
彼の楽器ケースに、無数のカオル・ヒビキヤのサインがあることを。

彼女は弟子を取らないことで有名だったから、ダイと彼女が関係あるなんて、考えても居なかった。
そして、選抜メンバーは皆、誰かしら高名な演奏家の師事を得ているのが常だった。
だから、普通の会話の中に「ウチの先生が…」と自分の師匠の名前と知名度が、その者のスキルに付随するアクセサリーとなっていた。
私はあまりそういったことに興味がなかったの、この時になって初めて、ダイも誰かの師事を受けていたのだということに思い至った。
まるっきり気がつかなかったのではなく・・・彼は特別だから、誰かの下でレッスンを受けるなんて、考えても見なかった。

それにカオル・ヒビキヤはオーボエ奏者でない。

…でも、オケの最初の音あわせは、オーボエとコンサートマスタ(またはコンサートミストレス)で行われる。

彼女が自分の望みのオーケストラで演奏しようと思った時には、
まずは、同じ楽器ではなく、基音を出す、オーボエに声をかけるのではないだろうか…

私はダイのことをほとんど知らないことに、今更ながら気がついた。

よくよく考えてみれば、私の興味がなかっただけで、オーケストラのメンバー表には、どこの学校出身か、何のコンクールに出ているのか、所属はどこか、誰の師事を受けているのか、ちゃんと書いてあるのだ。
持ち歩いている楽譜の裏に下敷き代わりに敷いてしまっていたメンバー表を取り出して眺めた。
…ダイの紹介項目には、彼の輝かしい経歴と、カオル・ヒビキヤという名前がちゃんと書いてあった。毎年の事だから。最初の年しか見なかった。その時は書いてなかった。
確か、カオルは長期の演奏旅行で海外に行っていた頃だ。…だから書かなかったのか。
毎年彼の受賞歴で長くなるそのスペースを見るのがなんだか誇らしいようで辛かった。
毎回合宿の最初に交わされる、もう知った仲間同士の自己紹介で、昨年度一年の活動結果と、むこう一年の活動予定を聞けばそれで十分だった。

ちょっと耳を澄ませばすぐにわかる情報なのに。
私は唇を噛んだ。

カオルに皆の集中が集まってしまう、今日の合同練習はそれでお開きになってしまった。
彼女もタイトなスケジュールであるから合流レッスンは明日以降に持ち越された。

カオルはまた優雅に手を振ると、特別に設けられた専用の個人練習棟に足を運んでしまった。彼女のレッスン風景は今日は見ることが出来ないらしい。
…解散の合図で、皆が楽器を片付け始め、そして思い思いに宿泊施設棟に戻っていく。

「ウメ。戻らないの？食事は？」
最後まで残っておさらいをしている私に、ダイが声をかけた。
彼は楽器をすでに収納し、その師匠がたくさん書き込んだサイン入りの楽器ケースと楽譜と、そしてリードを入れた水入れを持っていた。
リードは適度な湿気を持たせて、削り込みを行う。
彼はいつも空いているほんのわずかな時間でもリードを削り機で削っていた。
そうして何本もストックを持たないと、いざというときに、リードが割れたり裂けたりして演奏そのものに支障が出るからだ。

「いい。ちょっと・・・おさらいする。温度も下がってきたし」
ああ、この部屋は暑かったし外気温も高いしね。
彼は頷いた。
「今日、ピッチ（音程）高めだったし。少し調整しておきたい」

私がそう言うと、それなら、先に戻るよ、と彼は言ったので私は微笑んだ。
あまり根を詰めないように、と念を押された。
これから用事がある、と彼は言っていたから、そのままカオルのところに足を運ぶのだろうと思った。

私はそのダイの背中を見送ってから、ひとつ吐息をついた。
彼は毎年違った彼になる。
背が伸び、顔が面長になり、そして口の悪いこどもから少年というより…男の人になってしまった。
そうして体格が定まってくると奏法も安定してきて、彼の音色はあでやかになっていった。

彼の演奏会もコンクールも欠かさず聴いた。
私は第一のファンと思っているわけではなかったけれど…
あの茶色の髪の人より、たくさんのダイの演奏を聴きたかった。
ただ、それだけだ。
それ以上は…求めない。

管楽器奏者内の恋愛は御法度だった。
密接にレッスンしたり、議論したりするので、そういう状況に堕ちやすかったけれど、
特にトップ奏者同士の恋は…切ない結果に終わることが多かった。
音楽の価値観と、恋愛の価値観が同じであるうちは良い。
でもそれにずれが生じたり私生活がうまくいかないと、とたんに音に出る。
管楽器奏者は呼気を使うからそれが如実だった。
耳の良い者が聴けば、誰が誰に片想いをしている、誰と誰がこっそりつきあっていて…
そんなことまで解るという。
そういう恋愛の哀しい結末を味わいたくなかった。だから、このままで良いと思った。

私は…私はダイの才能に嫉妬している。でも、その前に。ダイの傍で微笑むあの人に嫉妬している。
奥歯を噛んだ。

静かなホールで私は吐息をついた。どのくらいそこに居たのだろう。
食欲はなかった。このまま疲れて泥のように眠りたかった。
…あまりにも静かすぎて、防音室の外から聞こえる夜の蝉の鳴き声が、僅かだけれど聞こえてきた。

もう遅い時間だった。私はホールを軽く片付けて、合同練習室を出ることにした。

——もう、来年はここに来られない。

それは確実だった。

ジュニアの年齢を超えてしまうに近かった。私は今18歳で、来年19歳になる。
来年は…来られそうもなかった。
特例で12歳からここに来ていた。その時はまだ、自分は世界に通用する奏者になれると思っていた。
でも…そろそろ限界だった。
後から後から、若い演奏家がやってくる。
私がこの首席奏者の席に座ってられるのは、ダイがいるから。
彼と一緒に演奏したくて練習に励み、彼がさり気なく、総合監督に「フルートのトップ（主席）は…持ち替え（フルートとピッコロ・アルトフルートなどを演奏中に替えて演奏すること）もできる人が良い」と私を推薦してくれたからだった。

ダイ。
ごめん。
私は来年、ここに来られない。
ダイの居ない演奏はもう辛い。

少しだけため息をつき、練習場を後にした。

防音扉を開けると、大音量の蝉たちの鳴き声に、少しだけ顔をしかめた。

Yahoo!ブックマークに登録

そして夜空を眺めた。

蝉たちの鳴く杜を眺めた。
そして上を見上げて、満点の星を眺めた。
今年はここも猛暑だった。
毎年この時間になるとかなり涼しくて、楽器を持つ手が冷えてきたものだ。
私は肩から提げた革製の楽器ケースを持ち直した。

「暑いな」
突然、声をかけられて、ぎょっとした。
——誰？
練習棟の灯りもほとんど消えてしまっていたし。
今、出てきたばかりのホールから暗がりに出たばかりなので、目が闇夜になれていなかった。

まだこのあと自室で運指の練習をするつもりだったので、楽器は反対側の手に持ったままだった。あやうく、その楽器を取り落としそうになる。

その姿を見て、私は息を呑んだ。
「カオル・ヒビキヤ！」
「呼び捨てにするなんて、酷いなあ」
彼女はくすくす笑いながら、その長めの前髪をかき上げた。

間近で見ることがあるなんて。
私はどう、声を出して良いのか解らず、空いた方の手で楽器ケースの肩紐を握りしめた。

褐色がかかった巻き毛、物憂げな褐色の三白眼がはっきり見える。
端整な顔立ちに通った鼻筋。
均整の取れた、ヴァイオリニストかダンサーかよくわからないくらいのシルエット。
長い手足。良く響く声。
何もかもが、カオル・ヒビキヤだった。

「すみません、ヒビキヤさん。つい、興奮して。」
私はそう言った。

「いいよ、…可愛い女の子に呼び捨てにされるのは光栄だ。ウメちゃん」
彼女が私の名前を呼んだので、私は少し驚いて目を見開いた。
甘いカーブを描いた唇を少しだけ歪めて、彼女は笑った。
「なんであたしの名前を知ってるのかって顔をしてる。」
「そのとおりですから」
私はそう言った。
そして、彼女が今、私が行った動作と同じ事を。
…夜の星を見上げながら、宵の蟬の音に聞き入っていたことに気がついた。
「夜の蟬。風情があるね。まさかここで聞けるとは思わなかった。」

カオルはそう言った。
私の問いには答えなかった。

彼女は、宿泊棟に通じる小道に設置されたベンチに腰掛けていた。
そして、だれからも声をかけられない静寂を楽しむように、星を見上げていた。
「女の子がこんなに遅い時間、出歩いたら駄目だろう…部屋にお戻り」
「あなたも女子ですよ」
私は苦笑した。そうだったっけ、とカオルが笑った。
「それにここは敷地内ですから、大丈夫ですよ。安全面ではね。灯りが少ないから、夜道で転んだりして楽器を落とさない限りは。」
私はそう軽口を叩いた。
カオル・ヒビキヤがヴァイオリンを持っていなかったことも私を気安くさせたのかもしれない。
楽器を持たない彼女は…そう、まるで月夜見の神があまりの蟬の囁しさに、ここに思わずやってきて呆れている。そんな感じだった。
どこか寂しげで、どこか幸せそうで…どこか、頼りなさげに見えてしまった。
月の光のせいかもしれない。それとも、この蟬の声で、私の聴覚が狂い、聴覚と接続して視力や接続してない思考力までも狂ってしまったのかも知れなかった。

「ここにお座りよ。…今にお客さんが来るから。」
カオルが笑って、隣に座れといってベンチを軽く叩いた。

「お客様？」
「ああ、毛色の違う奴と、小さい奴」
彼女はそう言ってまたくすりと笑った。
「ウメちゃん。…凄い楽器を持ってるなあ。見せて」
カオルの隣に座るだけで緊張のあまりに硬直している私に、彼女は親しげに話しかけてきた。
私は彼女に、楽器を手渡した。まるで、弓を持つかのように。慣れた手つきで彼女は持った。ずしりとした感触があったのかもしれない。
または、私が長時間握りしめていたから、生暖かくなって、ちょっと吃驚したのかもしれない。
彼女は、すげえと言って口笛を吹いた。
「…これを日本で、持っている人が何人いるかな。
ああ、久々に見たよ。ムラマツの完全ハンドメイドだね…しかもプラチナだぜ！」
彼女が高く私の楽器を掲げた。
フレンチタイプ（※フルートにはカバードとフレンチがある。フレンチの方が奏法がより難しい）なので、ホールキー部分が月の光で乱反射した。
「これ、馴らすの難しかっただろう」
「それでもなかったです。プラチナの方が温度管理が難しいですが…シルバーや18Kよりもずっと音色が安定しているのです。」
それであえて君はこれを選んだんだね、とカオルが私を見てそう言ったので、私は少しだけ心を平静に保つことが出来なくなった。

「…どういう意味でしょうか」

また、カオルはその問いに答えなかった。

「ダイはね…奴が小さい頃から知ってるんだ。」
カオルが話し出した。
「ほら、奴は拘る性質だからさ。音楽やりたいって言ったときに、最初はヴァイオリンやらせるつもりだったんだ。…でも、いつかカオルと共演したいからヴァイオリンはイヤだ、弦楽器は追いつけないからイヤだ、って言いやがる。」
カオルがそのときのことを思い出したらしく、細くて大きな手を口元にあてて豪快に笑った。

「しかもさ。アイツ、次に何て言ったと思う？メカニカルで、舞台の上で目立って、カオルと同じでない楽器。でもカオルはボクを見なければ演奏できない位置にいる楽器が良いと指定しやがったんだ。…そしたらもう、あのポジションしかないだろう？」
…ダイの楽器選びの動機がそれだけだったのには正直驚いた。

「さすがに、断れない筋からのお願いでなかったら、ああいう『こだわりマン』を弟子にするつもりはなくて。…でも、アイツは数年であつという間に上手くなった。」
それは演奏会のたびに聴きに來てくれる人がいるからです、と私は心の中で呟いた。
自分の演奏を聴いてくれる人が居れば、必然的に練習にだって熱が入る。

私は黙って彼女が語るダイに耳を澄ませた。
「このジュニアオケのメンバーだって、推薦状がないと入れないんだろ？あたしはそんなものは書かないから自力で来いよって言ったんだ。」
ダイを紹介した人が毎年甲府に來るのでね。
…毎年、この合宿が終わった後に。甲府でちょっとした催し物があつてね。
アイツには、このオケに参加できないような奴には甲府に足を踏み入れるなつて言ったんだ」
そうしたら毎年來やがって。あたしより参加回数が多いんだ。酷いよなあ

彼女はそう言って笑った。

彼女は私の楽器を眺めながら世間話をした。
時々笑いながら片手を口元に持って行くので、少しだけはらはらした。
噂に違わない、豪快な気質の人のようだった。

・・・そろそろお出ませ

彼女が何かに気がついて、微笑んだ。

誰かが來る。
彼女の耳は私の数倍良かった。私は足音に気がついたのは彼女のその台詞から数秒経過したときだった。

宿泊棟への道は緩やかな傾斜になっていて、こちらからは下り坂だ。
だから、大きな楽器の人は、楽器を運ぶ際に、この傾斜に気を付けて歩かなければならない。
つまり向こうからは上り坂で。
…向こうから、誰かがやってくる足音がした。
その人物はが徐々に近づいてきて、姿を現したとき。
彼女に言っていた「毛色の違う客人」だと思った。

「ヒビキヤ。…おい。探したぞ。」

彼はとても不機嫌そうに、そういった。
白金の髪に、青灰色の瞳の…本当に月の神様のような人が目の前に現れた。
長身の、神経質そうな人だった。
外国人と一見して解るのに…流暢な日本語だった。
彼は、カオル・ヒビキヤの知り合いのようだ。
カオルは唇の端を歪めて、ふふんと鼻を鳴らした。

ここで待ってたんだ。

彼女はそう言った。

「やあ、シャルル。遅かったな」
カオルはそう言って、反り返り、長い脚を組み直した。

シャルル、と呼ばれた人物はますます不機嫌そうに、眉根を寄せた。
彫刻のような、その美しい顔に、はらりと白金の髪がかかり、月の光を全部集めてしまったように光を受けて発光し、今はその髪はレモン色に見えた。
月の神様のようなその人は、カオルと私の目の前に立って、腕組みをした。
私にはまったく目が入らないかのようだった。私は慌てて立ち上がった。
「レディが先に立つものじゃない」
カオルが面白そうに言ったものだから、私は、はい、と小さく頷いてまた座ってしまった。

「オレの患者が何してる。…今日はゆっくり休むというから、休憩時間を予定しないでここまで移動することを許可したのに。」
彼は憤慨していたようだった。
物言いは静かだったが、目つきが鋭くなった。
はいはい、とカオルが言ってちょっと笑った。
「発作を起こしても知らんぞ」
「…腕の良い医者がいるからね。しかもあたしの主治医だ。そいつが治してくれるさ」
「ふざけるな」
ぎらりと、今度は強くカオルを睨んだので、私はまた腰を浮かせてしまった。
カオルはまったく動じてなかった。

「ここにいる小さなレディが驚いているよ。名医シャルル・ドウ・アルディ。…本当に診て欲しいのは、あたしじゃない。」

彼女はそう言って、座ったまま、私の楽器をシャルルに渡した。

シャルルは、私のフルートの色あいに気がつき、おや、と眉を動かした。そしてそれを受けとると、ずしりとした感触に、少しだけ声を漏らした。先ほどの憤りは忘れてしまったか、後回しにしようと思ったらしい。

「…ムラマツのハンドメイド。H管。エクストラバージョン。フレンチタイプ。頭部管をオリジナルに交換してある。…日本人で持っている者の中で最年少だな。」
彼はそう言うと、興味なさそうに、私に渡して寄越した。
カオルは面白そうに言った。
「あんた、フルート好きだったろ？珍しい楽器をみて、喜んだお礼はなしかい？」

そう言うと、シャルル・ドゥ・アルディは私の方をおもむろに引き直った。
…そして、じっと私を見た。
その青灰色の瞳で。
喜んでる？この無表情が？
私はカオルが言っていることが理解できなかった。

でも次の瞬間、吸い込まれそうな彫りの深い瞳が私を見たものだからそんなことを言う暇はなかった。
「名前は？」
「ウメ」
私の代わりにカオルが答えたので、シャルルはカオルに少し黙ってろ、と短く言った。

「…いつからだ？」
彼はそう言った。
「え？」
私がそう声を出すと。

私から楽器を取り上げて、カオルに渡した。ちょっと持っている、と肩にかけていた鞆も取り上げて、カオルに渡した。カオルははいはい、とまた言って、面白そうにほおづえをついた。

この神様達の気紛れに立ち会って良いのだろうか…
私はなんだかここに居てはいけない気持ちになってきた。

その時、シャルルが動いた。
「あっ…！」
「黙って。」
シャルル・ドゥ・アルディが、私の両の頬を掴んだのだ。
冷たくて細くて繊細だけれど、大きな手のひらが、私の顔を包んだ。
「日本人にしては顔が小さいな」
シャルルはそう言いながら、私の顎からこめかみにかけて…ゆっくりとなぞった。
私は顔が赤くなり、近くに見えるその瞳から眼を反らすだけで精一杯だった。
その横でにやにや笑うカオルが恨めしかった。助けてくれたって良いじゃない。
――― 一体、何をしようと言うの。

U-side 闇蟬 後編

「あの。離してください。」

私は小さな声でそう言うのが精一杯だった。

彼の左手の薬指から伝わる冷たいリングの感触から、その素材は私の楽器と同じハードプラチナだとわかった。その薬指が、小指と一緒に、私の頬や顎のラインをなぞった。そしてうなじにまで手を伸ばしたので、私は首を縮めて肩を上げた。「いつからだと聞いているんだ。」シャルル・ドウ・アルディは、まったく日本人女性は神経が退化しているとしか思えない、と苛立たしげに呟いた。私は眼を反らしながら、とぼけてみた。「なんのことでしょ…」。「オレは医者だからね。ごまかせないよ。…ウメちゃん？」彼がぐい、ともう一度、私の顔を自分に向けた。「こっちを見る」彼はそう言った。その強い口調に逆らえなかった。大人の人にそんな風に命令されるのは慣れていなかった。困ってしまった。「ウメちゃん。奴には隠し事はできないぜ。」可笑しそうにカオルが言った。「シャルル。レディが怖がっていいよ。そう、どいつもこいつもって顔しないでさ。気持ちはわかるけどね。」

「…顎関節症。随分長いこと患っているね」シャルルが言い当てた言葉に、私はぎくりとした。隠しても駄目だとシャルルは言った。青灰色の腫が私をのぞき込んでいた。「職業病みたいなものさ。…高い確率で発症する。Ⅰ型からⅢ型までの混合だな。食事するときも相当痛いだろう」「痛くありません。痛くなんかありません。」私はそう言って、彼の手を振り払った。「君だって自覚症状あるだろう。痛み止めの注射を打っている痕跡がある。でも演奏に支障が出るから、ぎりぎりまで鎮痛治療はしないのだろう？それが悪循環になる。長時間練習した後は、口もきけないくらいだね。」シャルル・ドウ・アルディは私を見て、わからない、といった風に首を振った。「このプラチナフルートの頭部管がハンドメイドで君の唇の形状に合わせたものである理由もわかるよ。負担ができるだけかからないように、作り直したのだろうね。そして、最も好まれる18Kフルートにしないで、プラチナにした理由は、やはり、その顎の周りの筋肉がバランスを崩して音程が崩れたときに、硬質の音ができるプラチナの方が誤魔化しやすいからじゃないのか？」「……」私は無言だった。たった、ほんの一瞬だけ私を見て、少しだけ触診して、楽器をちらりと見ただけでわかってしまうこの人が怖かった。私そのものが薄っぺらい人間だからか。シャルル・ドウ・アルディ。何者なのだろう。どこかで聞いたことがあった。

「忠告しておく。早いところ専門家に診てもらえ。それとも…専門家の忠告を無視して、君はずっとごまかしごまかしその状態を続けていたのかな。」私は下を向いた。まったく頑固なお嬢さんだ。シャルルはそう言った。相当痛いぞ、これは。そう言った。

…痛いわよ。痛いに決まってるじゃない。

確かに激痛が走る。最近では常に鈍痛がある。でも痛み止めを使うと、口角の筋力が加減できなくなり、…私の唯一の取り柄であるピッコロもアルトフルートも持ち替え吹きができなくなる。微妙な加減ができなければ音程も保てないし、難易度の高い曲も吹けなくなる。

この合宿に入ってから、皆に知られずにいることにどれだけ心を砕いたことだろう。…レッスン後はもう、口もきけないくらい、痛んで咀嚼することもできない。フルート奏者は私だけではない。

他に5人も居て、彼ら彼女らは、私の席が空くのを感じと狙っているのだ。脇に控え、監督や指揮者の注意を自分の事のように楽譜にすぐさま書き込んで、自分のレッスンでないそれが終わったあとは、自分のことのように重点を置いて練習する。音楽の世界とはそういうものだった。そしてチャンスに恵まれて、タイミングが良く、努力を怠らない才能溢れる人間だけが残る。どれか一つだけ優れていても、駄目なのだ。それに、…私はダイと一緒にもう少しだけ過ごしたかった。

贅沢は求めない。今年だけだ。来年はもう、私はここの参加資格を失う。規定する合宿の申込日までに、私は19歳になる。

ダイはまだその時はその年齢に達しない。
大学に入ったばかりで、まだ音楽を続けて居れば、彼はまだこの合宿の参加資格があるのだ。
留学経験者が多いから、学年で区切ると遅れて進学した者が有利になる。

だから年齢で制限するのもわかるけれど。でも、酷いと思っていた。

その代わりに、私は特例で、13歳に達する直前だったことを理由に、12歳からここに参加することが出来たのだから、文句や不平は言えなかった。

―――来年、ダイの右隣に座るのは、私でない誰か、なのだ。

顎関節症を患ったのは随分前だ。
これは管楽器奏者に多く見られる。

一種の職業病だ。

顎の筋力を酷使して、とても負荷をかけ、精神ストレスもかかる故の故障だった。

演奏会本番の前は、緊張がほぐれるのを畏れて食事も水分も摂ることができない。
ましてや、鎮痛剤なんて使うこともできやしない。
痛みを耐えながら、日々を生活することは辛かった。
唯一寝る瞬間だけが痛みを感じなかった。

もう、限界でしょう。

私のかかりつけの医師は言った。
楽器でごまかしても。技術でごまかしても。
本人が治療しないのであれば、駄目ですよ。

アーティスト専門に診ているその人はそう言った。
君はまだ若いから、はっきり言うよ。
そうして…はっきりと死の宣告をしたのだ。

手術をしろという。
砕けた軟骨を除去しないと痛みは消えないと言う。
私に死ぬと言ったのだ。

1日休めば自分で解る。

2日休めば周囲が解る。

3日休めば観客が解る。

そういう世界だった。
一日何時間も孤独で退屈な基礎練習をして技術を維持する。
華やかな曲の練習をするのは、ほんの僅かな時間なのだ。
それが私の今を支えているのに。
手術なんかしたら、何ヶ月楽器に触れないのか。
何ヶ月…その何倍の時間をかけたら、今の自分以上になれるのか。
考えるだけで恐ろしかった。

熱が出て学校行事があっても、睡眠時間を削っても練習時間を確保した。
毎日毎日、学校とレッスン場を往復するだけだった。

朝2時間基礎練習をして。昼休みに30分練習して。自習時間があれば音楽室の教師に頼み込んで個室防音室を借りて練習する。そして夕方終業と共に深夜までレッスンに明け暮れる。
そんな毎日を失うのだ。そんな毎日を捨てろというのだ。

…このシャルル・ドゥ・アルディも。同じことを言うのだ。

私は…泣きそうになって。

「ウメちゃん。だから、はやく治療しなよ。あたしが見てもわかる。
ダイが心配して…シャルルにここに立ち寄るように、頼んで寄越したんだよ。…ウメちゃん？」
カオルの言葉を聞き流した。

私は。

おもむろに楽器を分解し始めた。
何してるの？とカオルが唖然として言う。
泣きそうな顔をした女子が、涙を流す前に、慌てて楽器をケースに閉まっているのだ。
その奇妙な行動に唖然とするカオルに、シャルルが説明した。

「涙の成分がプラチナの本体に付着するのを防ぐために片付けているんだよ。塩分がこの楽器には禁物だ。涙とか汗とか。だからこの陽気は相当辛かっただろうね。・・・見上げた根性だな。」

シャルル・ドゥ・アルディがそう解説した。

私の解説は良いから。はやくどこかに行って。でなければ、私がはやくどこかに行かなければならない。

…楽器を慌てて片付けた。

肩にかけていた楽器ケースを開き、尾篋土のやわらかいケースに収納して。
溢れそうになる涙を堪えた。ここに落としてはいけない。楽器を痛めてはいけない。

彼が好きだと言ってくれた楽器だった。
良いね、と言ってくれた。
だから私はこの楽器がとても扱づらいと思ったけれど好きになった。
このフルートでダイと演奏できることが嬉しかった。

…でも、もう、それもできない。
カオル・ヒビキヤに知られてしまった。
彼女はきっと、早速音楽監督にドクターストップをしろと告げるだろう。

そうして壊れることを引き替えに、トップ奏者の地位にしがみついたまま、そのまま転落していった人を何人も知っていた。
後輩にも何人がいた。
今のチャンスを選んで将来を捨ててしまった人と、私は今同じになろうとしていた。

…防湿効果の高い楽器ケースをばちんと音を立てて蓋をして。

そして私は初めて。ようやく泣くことに専念することが出来た。

「だったらどうすれば良いのよ！」
私はそう言って号泣した。
後から後から涙が出てきたが、嗚咽は蝉の音にかき消された。
楽器を片付けて、それをぶつけて傷つけたりすることがない状態になって初めて……。
私は泣くことが出来た。
私の感情より優先されるものはこの音楽と。そしてダイだけだった。
ぼろぼろと涙を流す。
涙を流すのだって、病気には障る。
ずきんずきん、とこめかみが痛む。

「私にはこれしか取り柄がない。私に残されたものはこれしかないし。
…他にどうやって誰と繋がることのできるというの…」
小さいときからこの生活だった。
今を失うことが怖かった。
だったら…来年からは会えないみんなとダイに。最後の私の姿を焼き付けて欲しかった。

暗蝉もその羽音を響かせることができるのだと。
そう、言いたかった。

わかってるわよ。

私は世界に通用しない。日本のジュニアに選抜される程度しか技術がない。
どんなに環境にもタイミングに恵まれていてもそれを上手く使うことの出来ない人間だった。

だから今年くらいダイと一緒に演奏させて欲しい。
それは私の小さくてささやかな願いだった。
それを。
今あったばかりのこの人達に指摘されて、そしてそれを止めろと言われて。
私はどうしたらいいのか、わからなかった。

「……ダイが言った。努力家の女の子が、毎年隣に座る、って。」
ああ、泣くんじゃないよ。別嬪さんが台無しだよ。
カオルが腕を伸ばして、泣きじゃくる私の頭を撫でた。
「食事の時間も気にするくらいの神経質なその子は。
…トップ奏者になんか謙虚さを持っていると言った。
毎回、下っ端が掃除するべきホールを掃除し最後に退室する。
そして一番にやって来て、空調を気にする。
…ダイがそんな風に女の子の話題をするのは、二人目だよ。
…そしてその通りじゃないか。
ウメは、この時間まで練習をして練習をして、そして、その地位を保っている。
そんな素敵な女の子が、痛みと秘密に苦しんでいたら、ダイだって苦しいだろ。」

カオルはそう言った。

違うよ、私は泣きながら否定した。

最初に入室するのは。
私が人よりたくさん基礎練習をしないと…休み休み楽器を暖めているのを知られてしまうから。
私が人より遅く退室するのは。
掃除をしているという名目でないと、その痛みと耐えかねて、痛み止めを服用する姿を見られたくなかったから。

「…なによ、ダイは知ってたの？……馬鹿みたい。」
私はそう言って、また上を向いて泣いた。

どんなに悔しい結果になっても、コンクールの時には泣かなかった。
主席を奪われた時にも泣かなかった。

自分の練習不足が敗因だと思い、闘志を燃やしたただけだった。

・・・でも。今、この瞬間。

私のことをよく知らない人達の前で、私は泣いた。
私を知らないから、思い切り泣けた。

その時に思いだした。
シャルル・ドゥ・アルディ。
カオルと最初に共演した人物だった。
確か、ワンフレーズ飛ばして。たぶんわざとだと思うが。
カオルに殴られた人物だ。
昔の逸話の人物が、今、ここに居た。
こんな凡庸な私を、奇跡のような人達が困ったように。でも嬉しそうに見つめていた。
きっとダイに対してもこうして見つめているのだろう。
優しい、月の神様たち。
「ダイが気むずかしいから。ああやってパートナーを何年も替えずにいられるのって、ウメしかないと思うんだよね。」

カオルが言った。

そして私はカオル・ヒビキヤとシャルル・ドゥ・アルディの関係が羨ましかった。
彼女と彼は、今、患者と医者関係にあるという。
出会ったときの年齢の何倍もの年数を経験して、彼らはその関係を少しだけ変えたけれど、それでも信頼関係を築いていた。

私は。

ダイとそんな関係を築けないだろうと思った。
来年、私の姿がなければ、ダイはそうなんだ、と思うのだろう。
でも、ただそれだけだ。
隣に座っていた人物が交替しただけ。
そう思うだけだ。
私も。
ダイでない人を隣に何度も演奏した。
その器用さを乞われて、演奏会のエキストラに参加した際には、一番末席でさえ、そこに参加できることを喜んだ。ほんの何小節しか出番がなくても。

でも。
カオルはまた長い話をした。
「ダイはね。音楽を始めたのが遅いから。絶対音感はない…だから、音程を気にしすぎる。
あいつが始終リードを削ってストックをたくさん作っているのは不安の表れさ。
音程が、環境や自分のコンディションで崩れることを極端に嫌う。
・・・ウメちゃん。
君がきちんとした音感で、彼にA音とC音を提供しているから。
彼は平穏を保てるのさ」

私は彼女が言っている言葉の少ししか…理解できなかったと思う。
号泣していたから。
ダイが語る私は私であって私でなかった。
そんなに私はご大層な人間でない。

ただダイと一緒に演奏できなくなる日をカウントダウンしている情けない人間なのだ。

私がこんなに辛く苦しい日々を送ることができるのは、彼のその才能に魅せられてしまったから。
ただそれだけだった。

「ダイも器用貧乏でね。あいつも、音楽の道を究めることはないだろう」
シャルルが今度は言った。
「…いずれ、別の道で大成する。
これはほんの・・・序章でしかない。」

彼の人生が、音楽以外でもっと花開くのであれば。
私は喜んで応援したい。

泣きながら。私はそう言って笑った。
やあ、ようやく笑ってくれた。暗蟬の姫君。

カオルはそう言った。
暗蟬。カオルはその意味を知っていた。
「あたし達のように…泣きたくても泣けない蟬のことだろう。」
彼女はそう言った。
「我慢強くて・・・そしてこよなくダイを大切にしてくれる人を蔑ろにするわけにはいかないよね？」
シャルル・ドゥ・アルディ？と聞かれて。
その異国の人はちょっとだけ舌打ちをした。
「ダイと一緒にアイツに怒られてもいいのであれば、このままウメを放置するけれど。」
「ああ。わかったわかった。」
彼はほんとうに仕方なさそうに。

手を振った。本当にうんざりした様子だった。

「この子の病床例については興味があるしね。珍しい複合型だし。
ストレスと緊張性障害については経過観察後、論文のサンプル価値はあるね。……
引き続き経過観察して。
しかるべきときに手術すれば良いのだろうか？」
まったくオレの回りの女性とはこうも願い事が多いものなのだろうか、と彼が大げさにため息をついた。

「…おい！何、ウメを泣かせているんだよ！」
その時不意に声がして。
こちらからみて下り坂から、ダイがやって来るのが見えた。
「いい大人が二人して。なに、泣かせてるんだ！」
彼は怒っていた。
とても憤慨していた。
ダイ。
私の涙が止まった。
彼はまだ少年と大人の狭間の人だった。
ひょろりとした体躯。でも、骨格は大人だった。
大きな瞳に、バランスの取れていない少年とも青年とも言えるようなそんな彼を。
私は眩しくて直視できなかった。

…カオルとシャルルが月の使わした人達であれば、ダイは太陽そのものだった。
彼らも、眩しそうにダイを見た。
「おい、また身長のびたんじゃないのか？」
そうカオルが言うとダイは近づきながら、面白くなさそうに言った。
「もう少しでカオルを抜かすよ。……それより。帰りが遅いので、出てきてみれば。
何してるんだよ」
ウメを泣かせとは言ってないぞ、と彼が口ごもった。

成り行きだ、とシャルルが言うと、ダイはきっと彼を睨んだ。
「シャルル。お前…泣かせるなって言っただろう」
おや、とシャルルは意地悪く笑った。
「それは特定の人に対する願い事じゃないのか…知らなかった。」
シャルル・ドウ・アルディがそう言うと、ダイは面白くなさそうに口を尖らせた。
「いいから。オレの言う通りにしてくれ。
——今年の甲府の祭りには彼女の隣の席を譲ると約束しただろ」
白金の髪的那个人は、面白そうに結構、と言った。
「君がそれを譲るとは。相当大した決心だね。」
「うるさい」
ダイは言った。そして私に向き合った。
「…ウメ。具合は…あまり良くないのか」
「ダイ。知っていたの？」

そう言うと、ダイは、パートナーなのだから、解らない方がどうかしている、と笑った。
「食事。固形が辛いと思って、ゼリー状飲料を買って置いた。
カロリーだけは保たないと、持久力がもたない」
私は笑った。
「…もうそういうレベルじゃない」
「…そうか。」
ダイは少し寂しそうに言った。
「でも明日の最終日にはちゃんと出るから」
私はそう言った。
彼がうんと頷いた。

「カオル。シャルル。…ちょっとカオルの独立棟で待っててくれ。」
ひゅう、とカオルが口笛を吹いた。
「ナイトがプリンセスを送っていくそうだ」
「そんなんじゃない」
ダイがそう言って否定した。
私の肩に掲げられた鞆を彼は代わりに持ってくれた。
カオルとシャルルは。まだ、月夜を眺めていこうと言う。
私はびよこんと頭を下げた。

カオルは「おやすみ、良い夢を」と言った。
シャルルは黙っていた。
私はこの奇跡の様な人達と話をすることができたことそのものが私の最後の音楽活動になるのかと思うと少し切なくなった。
素敵な音楽家達との会話が私の演奏活動歴の最後欄に書かれることになるのだろう。
カオルと、ダイと。そしてシャルルとの音楽討論。

見返りを持たない、そんな私の願いを。
彼らが聞き入れてくれた。
私は捨てるつもりがなかった。
捨てることが出来なかった。

シャルルとカオルが何かを考えていた。
私が座っていたところにシャルルが座ると。
二人でなにやら話をし出した。
カオルは手を振って挨拶をしたが、シャルルはもう私とダイには興味がなくなったかのように

こちらを見もしなかった。

「行こう」
ダイが言った。

宿泊棟までの、ほんとうに短い距離と時間。
私はダイと、音楽の解釈と今後のスケジュールなどの事務的な話以外を…はじめて交わすことになった。

「彼らを置いてきてしまって良いの？」
「ああ、どうせもう一人が到着するのを待っているんだろう」
カオルが言っていた「小さい客人」のことだろう。
ダイは月を見上げて、「暑いな」とカオルと同じ台詞を呟いた。
私は「そうだね」と言っただけだった。
ダイと普通の会話をしたことがないから、どんな話から始めれば良かったのかわからなかった。

ダイは私の歩幅に合わせてゆっくり歩いた。
そして「ごめん」と言った。
「…本当は随分前から気がついてた。だけど、ウメが言い出すまで、言い出すつもりがなかった。そんなに酷くなっているなんて、知らなかった。…いや知っていたけど、我慢できるくらいだから…大丈夫だって思ってた」
彼は前を向いたまま、そう言った。
私の左側に立つ彼は、演奏するときの彼と同じ角度なのに違うダイだった。
「それはダイのせいじゃないでしょう」
「…明日の最終日には出られそう？」
その質問に、当然じゃない、と私は極力朗らかに言った。
「明日は無理をしても良いから」
そう言ったので、私は言葉に詰まった。
無理をするな、と言われると思ったからだ。
「悔いのないように。…でも、そのあとはきちんと治療してくれ。」
ダイ。それは私に死ねと言っているようなものよ。
私はその言葉には返事をしなかった。
「取り柄がなくなっちゃうわね」
ちくりと、それだけ言うと、彼は大きくため息をついた。
「ウメ。…取り柄って、優れている技能を指すわけではないよ」
彼は言った。
「その人そのものの優れているところをそう言うんだ。ウメにはちゃんと、取り柄があるだろう？持ち替えできて。長らくトップ奏者を維持して。そして、きちんと努力することを知っている。辛いとも痛いとも言わない。辛抱強くこつこつ進むことって、取り柄じゃないの？」

…ダイ。それは路を極めた人が言うんだよ。
でもその言葉は私には重かった。
とても…ずしんと来た。
ダイは路を極めつつある人だ。そしてこれから… あっさりと言う道に行こうとしている。
彼はそんな頂点に登りつめる前に、私に向かって振り返ってくれた。
そして、墮ちていく人を何人も見ているはずなのに、私には諦めろとは言わなかった。

優しすぎるよ、ダイ。
そんなだから…私はあなたを見ていたいと思ったのだけれど。

彼だって努力していないわけではなかった。
私は知っている。
才能だけではこの世界では生きていけない。
たくさん書き込まれた楽譜と、スコア（総譜）を持ち歩き、休憩時間には曲のおさらいをして。そして時間を惜しんですべての情熱を注いでいることを私は知っていた。

カオルもシャルルもそんな彼だからこそ、師であるようはずっと雲の上の人達なのに、ああして対等に彼を扱うのだ。

…おせっかいね。

私がそう言うと、ダイは少し口を尖らせた。
「それはないだろう。もう何年一緒にやってるんだ。」
だから、早く病院に行け。早く戻ってこい。
彼は、そう言った。私は小さく微笑んだ。
「考えておくわ」
それ、あのシャルルの台詞だぜ！
ダイが目を丸くしてそう言った。
その表情があんまりにも面白くて、私はついまた笑ってしまい、大きな口を開けたものだから痛みをしかめることになった。
「今日はもう休め。明日に備えろ。」
カオル・ヒビキヤと一緒に演奏できるのだしね。
彼は目をきらきらさせながら言った。
随分長い間師事していたのに、彼女は一度も彼と同じ舞台上に上がらなかつたらしい。
…今度こそ、カオルにぎやふんと言わせるよ。オレの音じゃないと始まらないしね。
それが彼女との約束なんだ、とダイが言った。
ああ、あの茶色の髪の彼女のことだろうな、と思った。
「それなら、明日は最高の演奏にしないとね」
私はそう言った。

…蝉はまだ鳴いていた。
私とダイの会話はここで終わった。

頑張ろうね

私が彼と別れ際にそう言う。

ああ、お互いに。明日は無理しろよ。

持ってくれていた鞆を受取りながら、彼の言葉を聞いて。

私は笑った。もう泣かなかった。

あの人達に逢ったから。
この暑い夏の夜に、気紛れにやってきた、彼らが私を少しだけ変えた。
最終日は、いつも楽しみだった。
これまで練習してきた曲を、その都度招いたプロのゲストと一緒に楽しむ。
プロを目指す音楽家のタマゴ達には、唯一の息抜きだった。
その時だけは、上下関係も、厳しい奏法の指導もない。
ただただ、最後の演奏を楽しんで。
来年もまたこのメンバーで演奏しようと言い合う。
それは半分だけ叶って半分は叶わない願いだけれど、決まったようにそう言う。

カオル・ヒビキヤが入ってきた。
昨日と同じように、足を踏みならして彼女を迎え入れた。
彼女は…ちょっと頭を搔いて、そして手を挙げた。足音がやむ。
「若い音楽家の人達へ」
彼女はそう言って話を切り出した。音楽理論や難しい奏法はなしにしよう。そう始めた。

「あたしは…あんた達と同じくらのときに病気になりしばらく音楽を離れた。でもやっぱりこの道が自分の道であって…自分を支えてくれる人達と繋がることの出来る唯一の手段だと思った時に。そして、ヴァイオリンを続けなさいと言ってくれた人のために。もう一度始めることにした。」
そう言う、彼女は甘いニスの光る彼女の愛器を撫でた。
「音の道はとても険しくて、とても…孤独だけれど。一本道ではない。いろんな、道があって、それぞれがそれぞれの道をゆくのだと思う。
だからこそ、音楽というやつは奥が深い。」
そこまで言うと、彼女は少し笑った。
お堅い話はなしだよ。これがあたしの最初で最後の講義だね。
さあ…言葉はいらない。始めようじゃないか。

彼女がそう言う、オーボエ、音をくれと言った。

…ダイはカオルの言葉をじっと聞いていた。何か思うところがあるのだと思う。
そして、静かにけれども完璧なA音を吹いた。
基音。これが始まりの音。
その音にあわせて、カオルが音を奏で始めた。
顔を上げると、次にコンサートミストレスが。そしてそこから波及するように、次々にA音を奏でるいろんな楽器の音の渦。
私は目を瞑った。
これが最後とわかっていても。目を瞑ってこのまま…じっと聞いていたかった。
カオルの音は素晴らしかった。
弦も弓さばきも素晴らしかった。生のカオル・ヒビキヤをいつか聞きたいと思っていたけれど…この基音だけで、十分満足できた。

「それじゃ、今回で卒業になる者は立って」
カオルはチューニングを終わらせると、よく響く声でそう言った。
「卒業」それは来年には年齢制限を迎える者を指す。
来年からは…『ジュニア』でなくなる。もっと上のランクの大人達に競争を挑む立場になり、このジュニア・オーケストラは…幼くて甘くて柔らかい綿菓子のような夢になる瞬間だった。

何人かが立った。私も立った。
でもカオルがそんなことを言い出すのがよくわからなかった。

それはすぐにわかった。
ダイが立ち上がったからだ。

「ダイ？」
私が怪訝な顔を見ると。彼は少し笑った。
右側の私をちらっと見た。
「…来年は、オレ、留学するんだよ。フランスの大学に。」
彼がぼそりと言った。私は啞然とし、周囲は騒然となった。
ここ何年も彼の音でチューニングしていたメンバーには衝撃だったはずだ。
となりのサブを吹いていた女の子も口を開けていた。
…誰も知らなかったらしい。

後になって知ったけれど、ダイはこれが最後の合宿だった。
彼は理系の…スーパーサイエンス高校の指定を受けている学校の生徒で、その物理センスを評価されて、来年からは交換留学生として日本からフランスに派遣されるという。
…そんな凄い人とは知らなかった。
彼が何を知っていてどんな将来を考えているのか。

ほんの少ししか知らなかった。

隠していたわけではないよ、と彼はみんなに言った。私も含めて。

黙っているのと隠しているのと、私たちの世代ではあまり変わらなかった。
でも私はそんなダイが好きだった。
あまり多くを語らず・・・でも口の悪い、長らくのパートナーの気質を私は心得ていた。
ダイが好きだったから。
好きだったから・・・次に笑ってみた。
そう、そうなんだ、と言ってみた。
私はダイの一部しか知らなくても、ダイが好きだった。それで良いじゃないと思った。

知らなかったよ、とか聞いてないよ、とか。そういう言葉は誰でも言えた。
でも、私は「無理するところこそだね」と言って笑った。
頑張れ、とは言わなかった。
これから留学して。
結果を出そうとする彼を応援する言葉はきっとそんな言葉ではないだろうと思った。

彼もここは最後になるのに。また、戻っておいでと言った。
それは音楽の世界に戻ってこい、どういう形でも、という事だと思った。
そして私は「考えておく」と返事をした以上、それに答えを出さなければならないと思った。いつか、どんなに長い年月を経過したとしても、その結論を出したいと思った。

ダイ。

私の秘めたる恋の相手。
拙い暗蟬の音を聞き分けてくれた、素敵なお大人達と一緒に、彼は今年消えてしまう。

ダイに、私は何を残してあげられるのかな。

いつか・・・いつか、こんな女の子もいたなと思いだして欲しいな。そう思った。
私なりに頑張った。結果も出した。でもそのぶんたくさん辛い思いをしたけれど、やっぱりダイを好きになって良かったし、この道を選んで良かったと思う。

「なにか・・・リクエストはあるか」
カオルがそう言うと、ダイが大きな声で言った。
「別れのカノン」
・・・カオルが苦笑した。随分と・・・趣味が悪いね、と言ったけれど、少しして、彼女は弓を弦の上に置いた。
つややかでみずみずしく・・・そしてどこか憂いを帯びたカオルの音。
彼女が目配せをすると。
私たちは即興で、その曲に伴奏をつけた。
本当はオーケストラ向きの曲ではなくソリストがピアノ伴奏で演奏する曲目だった。

でも、カオルが演奏すると私たちは自然につられて・・・
そう、そこが彼女の最大の魅力だった。

彼女は音楽が好きで・・・音楽が好きの人が好きだった。
ダイもそうだった。
技術じゃないよと彼は言った。
ダイもカオルと同じだった。音楽が好き、音楽が好き自分が好きではなかった。
音を愛でる人が好きで。
だから、音を出すことがない無音の私の叫びに気がついてくれた。

茶色の髪の子が音楽がわからなくても、音楽を奏でるダイを好きなのだったら、それはやっぱり良いことなんだと思った。

別れのワルツ。

私の最後の演奏曲になった。

カオルが弾き終わると、一斉に喝采が飛んだ。
彼女は少し微笑んで、ダイは左足をとんとん、と2回だけ叩いた。
その合図は、彼と彼をよく知る人だけの合図だった。

今年の夏は暑かった。
とにかく暑かった。
でも・・・でも、いろんな意味で、私の知るどんな夏より。良い夏だった。夏らしい夏だった。
冷房の効いた防音室のなかで過ごしていた私に、暗蟬が少しだけ見せてくれた幻が。
私の大切な宝物になった。

――それから何年が経過しただろう。

偶然、本当に偶然。

彼を。ダイを見かけた。
しかもフランスの空港で。

何年経過しても彼の顔を忘れることがない。
それに、日本人がこうして異国で取材陣に囲まれてるなんて滅多にないことだったから、私は驚いて足を止めた。

…彼は取材陣に囲まれていた。

私は近くの人に聞いた。彼は誰でしょう、と。

ニュースを見なかったの？
そう聞かれたけれど、しばらく演奏旅行に同行していたから、ニュースは見えていなかった。

日本人で、初めて。ある分野で研究結果を証明してみせた人なのだ、と興奮気味に言っていた。

私はその輝かしく昁を浴びる、日本人研究者を遠くで眺めた。

そっか。

ダイ。

あなたは道を極めたのね。
そう思った。

私は…

私はあれから手術をして、音楽理論と語学の道に進んだ。
今は、フランス語の通訳を必要とする指揮者達の通訳をしている。
音楽用語がわからないと通訳できないので、私のような奏者あがりの通訳は重宝された。

もう、一緒に演奏することはないけれど。

今でも思い出す。

——頑張らないといけないときは、無理をしても良い。

——取り柄は技術が優れていることとは限らない。

彼のその言葉を今でも思い出す。

あの夏の、暗蟬の杜での会話が今の私を支えていた。

ダイ。

私の秘めたる恋は、結局、そのまま何もしないままで終わってしまった。
勝手に膨らんで勝手に萎んでしまったその恋の種は、まだ私の大事な奥深いところで眠っていた。

あれから、随分後悔したのよ。告白しておけば良かったって。

でもね。秘めているからこそ私は今、こうして微笑んでいることができるのだと思う。

いつか、いつか会えると思うから。

連絡は取らなかった。

いつか、また、音楽を通じて、誰かを通じて会えると思うから。
ダイには、新しい環境に早くなれるほうが大事だと思っていたので、そのまま連絡を取らずに今まで居た。

世間って狭いのよ。私はそう思う。

だから…だからこんな日本でない場所で彼を見かけても驚きはほんの少しだった。
それまでフランス語で質問にぼそぼそと答えていた彼に、日本人インタビュアーが、日本語で質問した。
「この喜ばしい報道を、誰に知らせたいですか。」

彼はたくさんいるんだけど、と言って頭を掻いた。
その仕草は、昔とちっとも変わらなかった。

「…両親と。姉と。そして、私のたくさんの友人に。特に。」
彼は言葉を切った。

「フランスという異国の生活が辛かったときに、頑張ることを教えてくれた長らくの友人…ウメに。」

ばかね。

私はその言葉を聞いて微笑んだ。

あのときの拙い言葉を…私たちはお互いに秘する言葉としてあの夏に秘めた。
恋ではなかったかも知れないけれど、私たちは私たちの言葉を大事にして、長い年月を経たのだと思うと、とても切なかった。切ない。何年ぶりに味わうのだろう。

——暗蟬の姫

そう私を呼んだ、カオルは今でも。
つんと澄ましたDVDジャケットとは全く違う、大雑把な歩き方で、皮肉たっぷりに笑うのだろうか。

しばらく彼女の新作を聞いていなかった。
店で探してみようかな。そう思った。

シャルル・ドゥ・アルディは…私の顎関節症の治療カルテを取り寄せていたらしいけれど、
その後は薬と術後の処置方法だけを書き記してフランスに去ってしまった。
今ではグリーティングカードに返事もない。
でも、どうやら手術の時には彼も立ち会っていたらしいということは聞いて、ダイとの約束を守ったんだ、と思った。

久々に。
少し、楽器でも吹いてみようか。

そんな気になった。

また、今年の日本の夏は何年かぶりに暑いらしい。

久しぶりに、松本に行ってみようか。
カオルやシャルルと同じ世代になった私は…誰か。
暗蟬の姫を見つけるのだろうか。

そう思いながら、そのだんだん大きくなる人だかりの横をすり抜けて。

私は空港を後にした。

(FIN)

W-side

イケダ・ユリナの紹介で、イケダ・マリナと知り合った。

銀座の雑居ビルの地下の1室が、彼の画廊だった。
このあたり一体のビルオーナーである父から譲ってもらった、彼の管轄ビルだ。
とは言っても、次男坊で、跡継ぎ云々で煩わされることのない、悠々自適の彼は、
この地下の画廊で、時たま、催し物をしたり、新人作家の作品を即時販売で展示したり、
とにかく、毎日をあまり苦労しないで過ごしていた。

イケダ・ユリナはテレビ局のアンカーウーマンだ。
若手作家の創作について取材をしたいということで、飛び入りでこの画廊にやってきたのがきっかけだった。
画廊は通常、人目につく1階に設置されることが多い。
日の光が差さない方が、作品が傷まない。
彼は取材にそう答えた。
しかし、この看板もない、地下1階の窓もないスペースに、ユリナが取材に来てくれたおかげで、おおむね、採算が取れる程度には繁盛していた。

そしてしばらくして、彼の画廊で、ハプニングが起きた。

今度主催する絵付け教室の講師に予定していた講師が盲腸で入院してしまったので、急遽代役を立てることになった。
困って、ユリナに相談したところ、イケダ・マリナを紹介された。

マリナはユリナの実妹だ。
とてもよく似ていた。
茶色の髪に、茶色の瞳。色素の薄い人物だった。
非常に小柄で、いつも持ち歩くコットンの鞆が、彼女の体を小さく見せていた。
長らく売れない漫画家をしているが、絵付けの心得があるので、お役に立てれば、ということだった。
自宅で仕事をしているらしく、日焼けもしていなかった。
色素が薄いので、コンタクトでも日の光に対しては、目が弱いのであろう。
日中の打合せには、陽光差す場所では目を細めるのが印象的だった。

他に適当な人物が見あたらなかったので、やむを得ず彼は彼女を代役とすることとした。
顧客から評判が悪かったら、即刻断れば良い。
先般自分のギャラリーを紹介してもらった恩返し程度に思っていた。

だがしかし。

イケダ・マリナは、人好きのする人物で、腕前は秀でたものがあるとは思えないのに、臨時講師の代役であるにもかかわらず、その絵付け教室は最後まで欠席者が出ることのない人気教室になった。

一度、マリナの講義に出たことがある。
非常に、自由であった。
当初は、決まった道具に決まった方式で絵を描く教室だったのに。
彼女の手にかかると、誰もが自由気ままに、解放されるようだった。

人が好きなんだ。
ワタルはそう思った。

人が好きだから、その人は何をしたいのか？が瞬時にわかる。
やりたいこと、抑圧されたことを、あたかも「自分の意思でしたこと」のように表現することを促すことができる。

希有な存在であるのは、確かだ。

以降、時々、講師を頼むようになった。

画廊にも、小さい号数のものであれば、マリナの作品が売れていくようになった。
あまり大きいものだと、マンガをメインにしている彼女は、締切に間に合わせるができないようであった。

それに、特段、美大で授業を受けた新進作家であるわけではないので。
あまり大きい号数は売れない、というのが現実だった。

でも、その現実。
マリナは闊達に笑い飛ばし、講習生の作業が遅くて延長になったとしても、彼女は文句を言わず「提携範囲内ですから」と笑って、残業料金を受けとろうとしなかった。

春風騷蕩な彼女に好感を持つまで、時間はかからなかった。
自分とそれほど年齢が変わらないということもあったかと思う。

そんなある日。

マリナが、画廊にやってきて、作業をさせて欲しいと言ってきた。
作業スペースというほどの広さもないが、絵付け教室のための教材やカラーが置いてあるスペースがある。そこを、使わせて欲しいと言ったので、彼はどうぞ、と快くスペースを提供した。

「少し、このカラーの残りど、この教材。使わせてもらっても、良いですか？」
彼女が少し、はにかんだように笑ったので、彼もつい、つられて小さく笑った。
「いつも最後まで片付けを手伝ってくれてますし。良いですよ。遠慮なくどうぞ」
「ありがとうございます」

そう言うと、彼女は時計をちらっと見ながら、作業を始めた。

狭いスペースの中で、二人きりで居ると、集中できないかな、と思ったが、
店を開けておくわけにもいかないので、できるだけ距離を空けて、次回の教室のチラシやダイレクトメールのデザインを考えることに集中することにした。

どれくらい、時間が経過しただろうか。
地階であるので、日差しの加減がわかenらないが、もう日も傾きかけているはずだった。

創作中の彼女を見るのは、初めてだった。
髪の毛や汚れが入らないように、両脇の髪をねじり止めし、細かな部分の絵付けを仕上げている。

「できたあ」
小さく言って、彼女は筆を置いた。
同じ姿勢を続けていたので、肩が凝ったのだろう。
大きく伸びをした。

「見せてもらっても良いですか」
彼がそう言うと、マリナは どうぞ、と言って、ちょっとはにかんだ。
彼女が作品を見せるときは、いつもそうやって少し恥ずかしそうに微笑む。
闊達な彼女の、意外な表情だった。

それは、小さなマトリョーシカだった。
4つしか入れ子になっていない。小さなタイプだ。

元々、教材キットがあって、初心者用に絵付けをするだけの無地のものだ。
立体的であるので、簡単そうにみえてもデザインがしっかりしていないと、思ったとおりのものに仕上がらない。

あらかじめ、図案は考えてあったのだろう。
もう4つのマトリョーシカすべてに着彩が終わっていた。

「良い色ですね」
「最後のラッカーが乾いてないので、色合いが今ひとつですけれど」
良い出来だった。

マトリョーシカは喜怒哀楽を表したもので、モデルになる人物がいるのだろうか。
同じ顔立ちだった。

笑った顔、怒った顔、悲しい顔、そして楽しそうに微笑む顔。
薄い金髪に、青灰色の瞳。色味がちょっと薄いような気がした。
こういう絵付けには、濃淡やコントラストと効かせた方が仕上がりが映える。
パステルの淡い色を使うのは彼女の独特の方法だった。

「天使の喜怒哀楽がテーマですか？」
「実在の人物がモデルです。友人への贈り物です。いただき物をもらったのですがお礼の品にと思って」
彼女にしては饒舌だった。
友人、という言葉が、ちょっと詰まった気がしたけれど。

「・・・もう、長らく会ってないので、うろ覚えの部分も、あるんですけども」
ドライヤーを使って、ラッカーを乾かしながら、彼女はそう言った。
「でも。天使。そう、天使のように綺麗な人です。きっと、今もそうなんでしょう。」

ちくり、と胸が刺すように痛んだ。

天使は雌雄の区別がない。
けれど、この天使はきっと男性なのであろう。

薄い、と感じたのは、モデルが外国人で、日本の色使いを積極的に取り入れた結果だろう。ちょとはかなげな感じがするが、ラッカーが乾いていくうちに、その色合いが少し変化して、照り輝いてきた。

完全に乾いたのを待って、彼女は用意してきたエアクッションに包み、包装紙にくるんだ。

「あ」
マリナが、しまった、というような顔をした。
大きなコットンの鞆をごそごとあさるが、目当てのものが取り出せなかったらしい。

「どうしました？」
関心のないふりをしていたが、彼女のその声に振り向いた。

「リボン、忘れてしまいました。今日、渡す予定だったんです」

そして、また腕時計を見た。

その人と、待ち合わせ、するのかな。

彼はう〜んと小首をかしげて、少し考えた。
「リボン。ちょっと待って。あるかもしれないよ」
包装紙の色にあったリボンがあると思う。

「ああ、あった。」
適当な長さに調整して、先端を切り、マリナに渡す。
「ちょうちょ結びって、どうしても縦結びになってしまうんですね」
マリナが丁寧に礼を言った後、リボンの結び目に四苦八苦する姿に、彼は思わず笑ってしまう。
悪戦苦闘する彼女が面白かったけれど。

あの、繊細な絵付けをする彼女が、リボン結びが出来ないというギャップが、彼を破顔させたのである。

「貸して。やってあげる」
何度も結び直すと、端がほつれてきてしまう。
彼は、見かねてリボンを結んでやることにした。

「ワタルさん、器用ですねえ」
感嘆の声。
「ほら、できた。」
「ありがとう」
マリナは、手を叩いて喜んだ。
リボンを二重に結び、ちょっとボリュームを持たせた。
「素敵！」

「お茶でも、飲んでいく？」
「ありがとう」
断りの、ありがとうだった。

ワタルは、また胸が痛んだ。

「待ち合わせがあるので、また。」
「そう」

彼は、それ以上強くは誘わなかった。

「今度お礼をしないといけませんね」
マリナは画廊を出るときに、そう言った。
彼女は姉と同じで、律儀であった。

「そう思うのなら」
ワタルは1階の出口まで見送りながら、腰に手をあてた。
「これは貸し1ということで」
「ポイント制なんですね」
マリナがふふっと笑った。
そして鞆を持ち直すと、べこんと頭を下げた。

彼女の背中を見送りながら。

ポイントをためて、君がこちらを見てくれるのなら、たくさんためるよ。

そう、想いを込めて姿が見えなくなるまで、見送った。

(FIN)

Devarana (テワラン。サンスクリット語で「天国の庭園」「天空の庭」)

■01

「いい加減にその状態維持の姿勢は何とかしたらどうなの？」
彼をよく知っている幼なじみの杜宇子はワタルに呆れてそう言った。
もう言わないわよ、と念を押してそう言った。

彼は苦笑して、フレーバーコーヒーの入ったカップから立ち上る湯気に眼を細めた。
杜宇子は甘いコーヒーを好まない。
しかし今日は滅多にない繁忙で相当疲れているはずだったので、せめて甘いバニラの香りの漂うものを、とワタルが自ら煎れていた。
「何のことかな」
「とぼけないで・・・あの人のことよ」
杜宇子がワタルが思い定めている人に対して何もしないことに憤りと苛立ちを覚えていることは承知していた。
それでも、思ったことは口にする彼女が、これまでそのことについて触れたのは、これで2度目だ。
それは杜宇子にとってはとても我慢強いと褒めてやらなければならない回数だった。

一度目にワタルは激昂して、彼女を叱咤してしまった。
それ以来、彼女はワタルの秘めたる思いについて、尋ねたりその後の進捗について意見したりすることはなかった。
けれども、今回ばかりは黙っていることは出来なかったらしい。
「杜宇子の言いたいことはわかっているよ」
ワタルはそう言ってミニキッチンの上に乗った、2つのマグカップのうち片方を彼女に差し出した。
ワタルはこの画廊のオーナーだ。
そして杜宇子はそこで受付嬢のアルバイトをしている。雇用者と被雇用者の関係ではあるが、彼らは学友であり、昔からの友人でもある。
休憩時間や仕事時間ではない時には、このようにざくばらんに話をするのできる間柄だった。
ただ一つ・・・互いの恋愛については、口を差し挟まないというのが暗黙のルールであった。昔からそうだった。
杜宇子は目鼻立ちのはっきりした美しい人であった。
しかしそれはワタルが彼女にこの画廊の受付を任せている理由ではない。
頭の回転が速く、それを表に出さない奥ゆかしさがあった。
周囲は、家族ぐるみの付き合いのある杜宇子とワタルが長い友人時代を経て、いつか結ばれるのではないのかと言う。
しかし、それはなかった。
彼女のことを、見守る者がいるからである。
彼女は・・・本当に心から愛されることを望んでいるから。
ワタルではそれは与えてやる事が出来ない。

個性的であることを必要とされるこの画廊において、そうではないことを必要とされる職種に彼女は就いた。
そしてその要求を完璧に遂行している。
それが誰のためであるのか・・・何のためであるのか、ワタルは知っているのに、触れることは決してなかった。

「入ったよ」
「良い香り」
杜宇子がことり、と音を立てて小さなテーブルの上に置かれたマグカップに眼を細めた。

画廊はワタルの本業の片手間に経営しているもので、彼の父の所有するビルのひとつだった。彼は不動産王の息子であるのに、それを継承しなかった。
「ひとりでごここまで片付けをして・・・大変だったろう」
ワタルはねぎらいの言葉をかけたが、杜宇子は仕事だからと言って笑った。
ここ数年で恒例になっている展示会の最終日が今日だった。
彼はどうしてもはずせない用事があって、最終日の、今日の荷物の搬出の時間に間に合わせることが出来なかった。
画廊の主催している絵付け教室がだいぶ人気になってきた。手軽に習い事ができるということと、都心の一角にあって気軽に立ち寄れるということと、ワタルが「これが本業ではないから」と言って、講習料を材料費を込めてかなりの廉価に設定していることが人気を呼んだらしい。
それに、この独身の若きオーナーが、先般、実は有名なグラフィックデザイナーであり、不動産王の息子であることが、雑誌に掲載されて・・・物見遊山で来訪したものの、彼の気さくな魅力に惹きつけられてそのまま、教室の申し込みをしていく者も少なくはない。

杜宇子は苦笑する。
毎回定期的にさやかながらも、絵付け教室の生徒達による展示会を開催しているが、今回は大盛況で、この小さなフロアに入りきれないほどに混雑したのだ。
貴重な絵画を一時待避させておいて良かった、と杜宇子は心底思ったものだ。
機材の片付けの後、ワタルが居ないことを良いことに、こっそり隠しておいた貴重な絵画たちを戻し、いつもの静かな画廊に戻しているところに・・・ワタルが慌てて戻ってきたのだった。
彼は滅多なことでは怒らないが、定めたポリシーに反することを勝手に行えば不快になるはずだった。
怒られることは承知でやったので、素直に謝る。
勝手にレイアウトを変更してしまった。
勝手に、彼の考えていた配置を変更し、そして「皆に見て欲しい」と常々言っていた作品群を「今日は展示会なので」と言って片付けてしまったのだから。
けれども、ワタルはひとりが残っている杜宇子に「コーヒーを煎れるよ」と言っただけだった。次に、労いの言葉をかけた。それだけで十分だった。彼女は・・・嬉しくなる表情を隠そうとして、ワタルの背中に注いでいた視線を、コーヒーのマグカップに移す。

もう、夜も更けていた。

香気を伴う湯気が立ち上って、杜宇子は先ほど片付けのために着替えた軽装のまま、ステンレスのチェアに腰掛けた。これもワタルのデザインで・・・すべてにさりげないこだわりがあった。
女性が座っても堅苦しくならないように、微妙に傾斜しており、緩やかに腰を落とすことが出来る計算されたその椅子が杜宇子の気に入っていた。
いつもは・・・違う女性がそこに座るのが。
彼女はたいへんに小柄なので、杜宇子のように美しい曲線の脚を地面に軽く降り立たせることができない。
僅かに浮いた足元を愛おしそうに眺めるワタルの姿を何度も目撃しては、そのたびに胸が少し痛くなったと、ワタルに伝えることが出来ない。
彼はそこに座るように指示したので、杜宇子は少し躊躇ったが、座ることにした。
「彼女」がこの画廊に来るまでは、そこは杜宇子の特等席だった。
しかし悔しくも何ともない。
いや、嬉しいのだ。

彼が・・・杜宇子が好きになった人が好きな人を、杜宇子も好きだから。
彼女しか赦されない場所に、杜宇子も来て良いよ、と彼が許可するから。

だから、少しも悲しくも寂しくもない。ただ・・・ワタルの煮え切らない態度に少しばかり腹を立てていたが。

熱いよ、と言われていたのに、一口煤って、杜宇子は熱いと顔をしかめた。
少し冷めるのを待つことにする間の言葉を探す。
いつもはこんな風に緊張することも無いのに・・・

今は、乱れて雑然とした夜中の画廊の空間で、こうして・・・静かに会話を愉しむことに専念することにした。
彼は最終ぎりぎりここで足を運んだ。連絡が取れないことと、業務の終了報告のメールが届かなかったことによって、まだ作業中であると確信したらしい。
業者はとっくにトラックに荷物を積んで搬送を終えているのに、杜宇子の所在がわからないということで、ワタルが・・・駆けつけた。それだけで十分な報酬だった。

「代休、取ってくれよ」
「気が向いたらね」
そんな会話を愉しんで・・・杜宇子は続きのフロアに広がる片付け途中の絵付け教室の作品たちを見つめた。
素人が作った作品ばかりだから、値打ちがあるわけではない。
しかし、即売会ではそのほとんどが売れた。
持ち帰れない者が依頼していった品を梱包して、早い内に発送しなければならない。
明日は画廊の定休日であったが、それを待って次の営業日に手配するつもりはなかった。信用問題に関わるので、依頼されたものについては、どんなに遅くともその日のうちにある程度処理をする。
杜宇子はそういう人だと知っていたからこそ、ワタルはまっすぐに・・・戻らずにここに来た。

「ワタルの人気はすごいわね」
「いや、彼女の人気だろうね」
ワタルは即座に否定した。
彼が言う「彼女」とは、ここの絵付け教室の講師をしている、茶色の髪の茶色の瞳の小柄な女性のことである。
知人から紹介されたと言っていたが、彼女はとんでもない人物だった。
学歴も経歴も目立ったところはない。
逆に中卒だと言われると杜宇子は臆してしまっただけだ。
それなのに・・・溢れる魅力がある。
人が好きな人だった。
誰もが彼女に集まる。
単なる・・・決められた定形の器に絵付けをしていくだけの倦怠とも言える教室にこれだけの人が老若男女を問わずに集まるのは、彼女の魅力だからなのだ。
彼女は否定しない。そのものが持つ良いところを引き出す能力がある。
人に教えるというよりは、審美眼があるのだ。
しかも、単にその気にさせるだけではなく本当にそのものが持つ美点を的確に見抜く。
この画廊を有名にした、最も優れた作品である誠次・マクドゥガルの作品を買い付けしてきたもの、彼女だった。
そして、あのフランスの華の思い人と聞いたときには、しばし杜宇子でさえ言葉を発することができないくらい驚愕した。
後に、その所収者と彼女が恋人同士でありながらも、それを越えて売買契約を結んだと聞くと、杜宇子はますます彼女が好きになった。
彼女を知らない人は、彼女はフランスの華の庇護を受けていると言う。
しかし本当はそうではない。
小さなアパートに住み、本当は漫画家なの、と言い放って、日本国のどこでも旅するが、絵付け教室のスケジュールを変更したことではない。

変わっている、とサトルには言われる。
恋敵なのに、好きになったとは聞き捨てならないと彼は言った。
しかし彼女に逢って、サトルは「しょうがないなあ」と言っただけだった。

自分でない者を好きになった者を好きになった。
長い間・・・いつか、自分を見つめてくれないのだろうかと思っていた。
だから、ワタルの傍に誰かが居たら激しく嫉妬したこともあった。
熱に浮かされたように、彼を忘れようと他の誰かに恋をしたと自分を誤魔化したこともあった。

でも、・・・今は嬉しい。嬉しいのだ。
誰にも優しいワタルが、たったひとりを定めた。
長い時間、彼だけを見つめてきた。
それなのに・・・そんなことはなかったのだ。
彼は誰にでも優しいが、誰にも心を開かない。
兄弟にさえ、淡々としている。

それは彼の気質なのかもしれないが、彼が何かに執着し、誰かを・・・心から愛することが出来るとは、杜宇子は思えなかったから

彼の母は病気で逝去している。
それが起因するとは思えなかったが、彼は・・・どこか他人と距離を置く。
柔和でいつも微笑みを絶やさず・・・そして自分の好きなことに対して努力を重ねて、ようやく、グラフィックデザイナーとして名前が売れてくるようになった。
ワタルが「W」として活動し、その経歴を一切公表しないのは、彼の父の威光を厭ってのことだと思ったが、それに触れられると彼は途端に相手と距離を置くのだ。
そして一度距離を置いてしまうと、その距離を縮めることはない。
ワタルと父親との間に何があったのかはわからない。
けれども・・・彼の父も、昔はグラフィックデザイナーになりたかった、と先般の対談集で書いてあったから・・・
彼の父と最も似通っているのは、本当はワタルなのかもしれない。
だから、彼が彼女に惹かれるのは杜宇子にはよく理解できた。
彼女は・・・あの、茶色の髪の方は、誰かと距離を置くけれど、それを決して定めたものにしない。ワタルはそこに惹かれるのだ。
彼と彼女は良く似ている。でも、彼ができないことを彼女はできる。
時と場合と状況によって、彼女は相手に本当に必要なものを、必要とする分だけ、与えることができる。本人はそう意識していないようなのだが。

ワタルが・・・常々、兄弟は3人だと言っているのに、いつも4人分のケーキしか注文しないことを知っている。
そして、彼が彼女にグラフィックのイメージモデルを依頼するときも、詳しくは尋ねずに快諾した。
・・・そのときの彼は、自分が広く誰かに作品を見せることを躊躇っていた時期でもあった。
それが・・・彼女が持ち運んだ、誠次・マクドゥガルの絵を見てから考えが変わったようだった。
いや、その絵そのものではなく、彼女の書いたという考察レポートを読んで・・・彼は秘められた才能がどこまで通用するのか試してみようと思うようになったらしい。

■02

欲がないというか、あまり自己主張を得意としない人物かと思っていただけに、この変化は杜宇子にとっては新鮮であり、驚愕だった。
しかし一番変化に戸惑っていたのは、ワタル自身なのかもしれない。
この画廊に持ち込まれる数々の作品に目を通すようになって、杜宇子は少しだけ学んだことがある。
才能あるものは、その才にしがみつくとはいえないのだと思った。
いつでも手放してしまうし、価値というものについて深く考えていないことが多いように感じる。
だからワタルが・・・有り余る溢れる才幹を十分に発揮してみたいと思うとは、実は思っていなかった。それが今はどうだろう。
デザイナーとしてひとりで事務所を運営していたが、それも今は難しくなり、あれこれ考えた末に、弁護士の兄のついで、とうとう事務所を設立することとなった。
仕事は忙しくなっているはずだった。
そちらとこの画廊の往復だけで、彼の生活は終わってしまう。
それなのに、ワタルは今まで通りの業務スケジュールをこなし、悠然とした空間を損ねないように、いつもこの画廊では時間を決めて、来客が居ても居なくても滞在するようにしていた。
そんな時間があれば、少しでも・・・仕事をすれば良いのに、と彼女は思う。
だが、ワタルは一度決めてしまった事に対しては、最後までやり遂げるという信念があるので、何を言っても「ありがとう。考えておくよ」と言うだけで、実際は従わないことを杜宇子はよく知っていた。

客観的に合理的に物事を考えるようにしている彼が、唯一そうできない相手がいる。
それが、あの人だった。
彼女の穏やかな空間を守り抜くために、彼はこの場所を手放さない。
彼は知っているからだ。
微々たるものではあるが、彼女がこの絵付け教室の報酬を生活費にしていることや、それに見合った金額より多くは求めないことや・・・
大実業家の一族でもあり、古の血を持つフランスの華の恋人であるのに、つましく生活し、日本とフランスを往復する生活を送りながらも、日本での日々を変更することなく過ごしている彼女に・・・ワタルは自分と重ね合わせ、更に自分ができないことを成し遂げてしまう彼女に焦がれているのだということを、ワタルはよく知っているのだ。

彼の秘めたる想いに、彼女はいつになったら気がつくのだろうか。

杜宇子は祈りにも似た気持ちで、そう思うことがある。
自分の恋愛を成就するためには、あり得ないことなのだが・・・どうにも、あの小柄な茶色の髪の女性を嫌いになったり、煙たがったりすることができない。
ワタルが幸せであれば、それで良い。
彼は・・・随分と待ったのだから。こうして、影ながら彼女を支えているのだから。
いや・・・彼女の存在そのものが、ワタルの支えになっているから。
何でも手に入るけれども、本当に欲しいものは手に入らない。
いつか、彼がそう言っていたことを思い出していた。

彼は・・・虚無の中で退屈な日々を送っていたのに。
それなのに、ある日突然、一条の暁が彼を照らし出して、仄暗い静かな場所から、いきなり明るい世界に引き出したのだ。

最初は、彼は大変に戸惑っていた。
杜宇子の眼から見ても明らかだった。
兄の友人から妹だと言って紹介されたあの方は、とても小柄で・・・いや、幼く見えた。
この画廊を立て直すための一貫としての集客活動であった、絵付け教室の講師が急な病で継続することができなくなり、困ったワタルがつてをたどって紹介された女性だった。
打ち合わせも条件も簡単に電話で確認しただけのようだった。
不定期な仕事に飛びつくなんて、たかが絵付け教室、と思って軽んじているのではないのだろうか。経歴も驚くほど・・・なかった。
正直に言って、ひところ流行した家事手伝いという職業の人かと思った。

・・・自分だって長らくそうであったのだが。
ワタルは、彼女のことを悠々自適な生活を楽しむお嬢様なのかと思ったようだった。
しかし、人選に悩む時間がない。
駄目だったら後任を探すまでだ。ワタルはそう思ったようだった。
いっそのことワタル自身が講師になってしまえば、話は簡単だったのだが、彼は首を縦に振らなかった。
彼自身は経営者であるから、人前に立つことは決してしないとこれまた頑固に決めてしまっていたので、杜宇子は先行き不安なその状況に、かなり気を揉んで見守っていた。

実際に逢った人は、想像や憶測とかなり違っていた。
漫画家を目指して都内に住み続けており・・・彼女はいつも夢や希望や目標を諦めたり手放したりすることがなかった。絵に携わる職はなんでも経験したいというのが今回の志望理由だった。
面接にもならない面接の最後に、ワタルは聞いた。
「なぜ、そんなに絵に拘るのですか」
「いつか・・・逢いたい人に会えるかもしれないという希望です」
彼はそれで採用を決めてしまった。

彼女は大変に人間が好きだった。職業柄、必要としているのにも関わらず、あまり人と知り合いになれないことを気に病んでいたらしい。それが解消されて嬉しい、と彼女は言った。まったく呑気な人だ、という印象を持っていたことを記憶している。

杜宇子は・・・
それだけではない予感を感じていたから、あれほど不安を感じたのだろうか。
彼が・・・ワタルが細い縁なしの眼鏡の奥で、柔和に微笑む瞳を未だかつて見たことがなかった光を宿し始めたことに、杜宇子は気がつかないと思ったのだろうか。

人に速度を上げて魅了されている彼の様子に、杜宇子は胸が苦しくなった。
彼女の周りにはいつも人が集まる。
とても不思議なことだ。
そして、とても友人が多いらしく・・・結局、どこから聞きつけたのか、この画廊にはいつも定期的に人がやって来るようになった。皆、彼女と何かしら縁がある者たちようだったが、それだけではなく、教室の生徒達が熱心に通い始めるようになったのだ。

彼女は教師に向いているとワタルが言ったことがあった。きちんと学べばよいのに、と。
しかしあくまでも創作を選んだ彼女は、誰かに何かを教えるほど自分には知識も経験も不足しているからと言って笑った。
いつか何かで・・・自分の名前が残るものを創り出したいと言っていた。若い頃は、それが漫画家として大成することだけしかないと考えていたが、と言ってまた笑った。
よく自分のことを話すのに、彼女のことをほとんど知ることが出来なかった。
あのフランスの華の思い人だと知ったのは、いつだったか、彼がこの画廊に乗り込んで来たからだ。
絵の買い付けが縁故事情によるものではないことを証するために、彼女はその事実を長い間黙っていた。しかしそのことについて、ワタルは一言も責めなかった。彼女の考えがわかったからだ。その代わりに・・・彼は彼女を拘束した。
向こう2年間の講師契約を結んでしまったのだ。
彼は優しい人ではあったが、経営者でもあった。
彼女の集客能力を確保しておきたいと思ったのでそうしたまでだ、と素っ気なく言った。
杜宇子はなにも聞いていないのに。
杜宇子は従業員でしかないのに。
彼は誰かに聞いて欲しかったのだろうと思った。
そのときに・・・彼女をワタルがこよなく愛していることを知った。
好きという感情ではない。
相手の自由を望み、相手の幸せを願って自らの気持ちを吐露しない。

・・・これが、愛ではなかったら、いったい何なのだろう。

彼女を縛ってしまったことに大変苦悩したようであったけれど、杜宇子はワタルのそんな吐露が嬉しかった。
この穏やかな時間が、あと2年は確保されると思ったからだ。
画廊の経営は順調だったが、ワタルは拡充することは考えていないようだった。
この小さな空間を大事にしたい、と言った。

何も無い場所から始めた。
経営が傾いて、作品も施設もそのままに転売された場所だった。長らく・・・誰も足を踏み入れない場所だったのにそこを天国の庭園のように・・・穏やかに誰もが訪れることのできる場所にしたい、と彼が名付けた。
ワタルは経費がかかるからと言って、それらの照明器具や壁紙や・・・絵の修復を丁寧に、自分でこつこつと地道に行った結果、今がある。

杜宇子はこの空間が好きだと・・・最初に足を踏み入れたときに言った彼女の言葉を忘れていない。
ワタルは完璧主義者なので、一見して素人の作業とは思えないほどにきちんと整えた空間を用意していた。それなのに、彼女は一目見るなり「これほど総合的にいろいろなことを考えて作られた空間は心地よいという言葉以外に表現できない」と言った。

絵画が傷まないように、外気に触れないように奥まった場所に設置した。
誰もが最初は戸惑うので、杜宇子が正面で微笑んで接客しつつも、内部にまで目が行き届くような配置にした。
壁紙は、落ち着くけれども汚れが目立たない暖色の淡い色にした。
椅子や机の引き音が障らないように、備品の底にはすべてシリコンパッドシールが敷き詰められた。

立て直しシミュレーションと称して彼の実弟が時折収支報告のデータを取りにやって来る。メールで済ませられる内容なのに、彼がやって来る。
そして、彼女が居る。
授業前の打ち合わせに講座の開始時間の少し前にやって来る。
そして・・・ワタルはいつも静かに決まった場所に座っている。
持ち歩いているラップトップで作業をしているふりをしているが、本当は・・・じっと彼女のことを見つめていることに彼女は気がつかない。

永遠はない。
いつか・・・この空間も閉じるときが来る。
それでも・・・杜宇子はこれがもう少し続けば良いのと思う。

ワタルが居る。
サトルが居て・・・タケルさんとタケルさんの愛する人が時折やって来る。
あの人が居て・・・みんなでああでもないこうでもないと言いながら、この小さな空間で賑やかに過ごす。いつもは静かな空間なのに。
誰かを待つだけの場所ではなくなっていた。誰かを迎えるための空間になっていた。

彼が・・・この場所をどうしても変化させたくないという理由と正当性を知っていたから、杜宇子は黙ってそうだね、と言った。
やがて、彼に変化が訪れて、それまでセーブしていた本業に力を注ぐようになった。
忙しくて・・・彼が護りたいと思う空間が護れないことは耐えられなかった。
仕事を越えている。領分を越えている。そう思う時もある。
残業は好まない。彼女の職種では、それは滅多なことではあり得ない。
それでも・・・杜宇子はワタルが不在の時に、ひとりでここを切り盛りしなければならないし、彼をがっかりさせたくなかった。

あのとき。
杜宇子に言われて彼は憤った。
どうしてあのフランスの華から奪い取らないのか、と質問したときにワタルが激昂したのだ。

彼は言った。
「彼女はモノじゃない」と言い切った時。
ワタルがあれほど強く何かを言ったことはなかった。彼が怒っている姿は滅多に見ることはない。
けれども・・・けれども、あの人のために。彼はその心をさざめかせる。
蒼色の短い髪の毛に・・・眼鏡の奥ではいつも優しく微笑む人。
誰かを押しつけて先を越そうと思わない人。
先頭を走っているのに・・・後ろを振り向いて「だいじょうぶか」と常に誰かを案じる人。
そのワタルが・・・誰も気にすることなく、追いかけてようとしている人が・・・彼女が現れた。

涙が出るほど、嬉しい。

成就する恋より、愛を・・・愛を育てることのほうが杜宇子は崇高だと感じた。
こういう愛し方は、不毛だとサトルは言う。
けれども・・・けれども。
杜宇子にとってはこれがただ一つの恋であり愛であり・・・秘めたる想いなのだ。

だから彼女は黙々と今回の業務をこなすことにした。
ワタルが杜宇子を信頼して、全幅の信頼を置き、杜宇子に任せて不在にする。

それを杜宇子はイヤだとは言えなかった。
それを杜宇子はイヤだとは言いたくなかった。

ワタルは反対側の椅子に腰をかけた。あたりには・・・一面に甘い香りが漂った。
こうしてワタルと夜の空間で時間を過ごすことは滅多にない。
彼と彼女は家同士の付き合いが少なからずあるが、それでも・・・ワタルは杜宇子とこうして過ごすことを避けているようだった。

少し寂しい。
昔のように・・・互いの家を行き来して、皆と騒いだ・・・若く幼い日々を知っているだけに、杜宇子に対する遠慮を感じて杜宇子は切なくなった。
しかし、彼の心には別の人が住んでいる。彼女とこうして静かな夜を過ごしたいと切望するワタルを・・・杜宇子は知っている。

■03

「絵付け教室の模擬の・・・見本品。・・・この余部に取り分けておいたから、だって」
彼がそう言うと、杜宇子はふたつのマグカップを交互に眺めて・・・そして微笑んだ。

彼と杜宇子の目の前のカップは、紛れもなくあの人の作品だった。

彼と彼女の前に置かれた・・・
柔らかな薄い青灰色の混じるマグカップの光沢に眼を細めた。
底を持ち上げてみれば、刻印があるはずだった。
それを見れば、誰が彩色したのかはわかるが、見なくてもわかる。
あの人が色入れをしたものだった。
色は人を表す。
彼女の色は無敵大だった。
マグカップの周回だけでも微妙に色合いが違う。
それなのに徹底して同じ色を使う。
淡いパステルを好む人だった。
若い頃に・・・そういう色彩で人の絵を描いたことがあると言っていた。
彼女の絵を、杜宇子はまだ見たことがない。
しかし何度も色を見ていた。彼女の色は・・・無敵大だった。
何かを・・・象徴するかのよう色だった。

彼女にとって、愛とは、この世の色とは・・・こういう色味なのだと思う。
何か図柄や、物体を描かない。
ただ・・・色が広がるだけ。
それなのに、その意図がよくわかる。
人によって識別できる色というのは違うことを知っているようだった。
だから彼女の絵付けは、いつも・・・こうしてグラデーションを多く用いている。

・・・不思議な人だ。
しかるべき後ろ盾があって、十分な知識と教育を受けていたら・・・
彼女は今、ここで絵付け教室の講師で生計を立てることはなかっただろう。

彼女は・・・ただひとり、描きたいと思う白金の髪の青灰色の瞳の青年を描くことが出来るようになるまで、何かを描くことを禁じてしまっていた。
それがよくわかった。
広く大きく穏やかで海のような色見なのに・・・深淵の苦悩を表しているとも思った。
彼女は2客のカップに彩色を施していた。
海、空、雲、月、太陽・・・本当はもっとたくさんの色を使いたかったのだと思う。
2客あるうちのひとつは、「空」と命名されていた。もうひとつは「月」だった。

杜宇子でさえわかった。

これは・・・あの白金の髪の、青灰色の瞳の青年を模したものなのだというのを。
それなのに・・・ワタルはこれを愛おしそうに使う。
飾っておくのではなくて、使う。手の平で暖める。彼の口元に寄せる。
それが・・・愛の囁きに代わるものであると、杜宇子は知っている。

残酷な人だと思う。
でも、それがワタルには嬉しいのだ。
彼女の作品に触れることが出来る贅沢を味わっている。
たかだか・・・絵付け教室の展示会での模擬作品であるのに、彼はそれを・・・この画廊の中に飾られているどんな作品よりも先に、触れた。
彼女が彼にあてたメッセージを最初に読んだ。

そして・・・彼はそのうちのひとつを、杜宇子にも貸し出してくれた。
世界にひとつしかない、彼女の作品なのに。
労をねぎらい、彼女の疲れを癒すために甘い香りの漂うコーヒーを煎れてくれる。
自らも仕事で疲れているはずなのに、そんなことは決して口にしない。
だから、それだけで、嬉しい。杜宇子は、嬉しい。

それは、あの人がワタルにもたらしめたものだ。
あの人が現れなければ・・・ワタルは誰にも優しいけれど、誰にも優しくなれない人で居たと思う。

たとえ・・・あの人が誰を愛していようとも。

「怒らないの？」
「何が？」
ワタルは笑った。
展示会後の、雑然とした画廊の様子を見て・・・彼は最初の頃を思い出すよ、と言った。
そうだった。最初は・・・こんな場所から始めたのだった。

家族同士の縁薄い付き合いはあった。しかし、彼女はワタルと距離を持っていた。
いや、彼の方がそうしていた。
幾人かの友人とともに、開店祝いにここを最初に訪れたとき。
まだ正式なオープン前であり、そして間もなく開店するというのに、この場所は今のこんな風に雑然としていた。
杜宇子はひとりでやり遂げると言ったワタルの言葉をそのまま聞き流していた。
手伝う気持ちもなかったし、そのまま友達と一緒に画廊とは言えない状況のこの場所を後にしてしまった。
単に・・・これから夜遊びに行く途中の通り道に画廊があり、約束の時間までの暇つぶしの一瞬だった。
だから実はそれほど多くを記憶しているわけではない。
とても雑然としている雑居ビルの地階が、これほどまでに生まれ変わるとは、そのときには予想すらしていなかった。
結局、坊ちゃんの道楽で終わるだろうと思っていた。
それくらい・・・ワタルと疎遠になっていた。

それなのに・・・ワタルは彼女に声をかけてきた。
画廊の店番をしないか、と言った。
あのときより、綺麗になったから、最初に客を出迎える場所に・・・特別な席に、杜宇子に座って欲しいと言った。
断るつもりだったのに。そうできなかった。

そして・・・そして今に至る。
最初は本当はどうだって良いのだ。
今、この瞬間、秒数を重ねるごとに、杜宇子はワタルが変化していくことに惹きつけられて目が離せない。

彼が彼女の事を想って、カップひとつにでさえ愛おしむ表情を見せる度。
彼が夜遅いこの時間に、彼女がすでに帰ったことに安堵の吐息を漏らす度。
杜宇子は寂しくなるどころか・・・ワタルがもっともっと素敵になる様を見届けていたいと思う。

「杜宇子の判断は間違いじゃないよ。こちら連絡が取れない状況にあったしね」
ワタルはそう言って一口、コーヒーを啜って、顔をしかめた。

彼はコーヒーはあまり好みではない。それなのに・・・彼女のためにコーヒーを煎れた。
「でも、絵を勝手に動かした」
「杜宇子ひとりの判断ではないだろう？」
ワタルがくすりと笑った。
杜宇子は横を向いた。後ろに束ねた黒髪が揺れる。

わかっているくせに、時々、ワタルは意地悪を言う。
違う。
わかっているくせに。杜宇子の気持ちをわかっているくせに。
・・・ワタルは杜宇子に優しくする。

「人の熱気と湿気は案外想像以上のものだ。ここの空調が間に合わないくらいの出入りがあったのであれば・・・そういう選択が一番正しいと思うよ。なに、本来の絵を見て欲しいという趣旨には反してないよ。パンフレットには、きちんとここの展示品についての案内が入っていて、入場者は必ずそれを手にするはずだから、宣伝としてはまあまあかな。・・・それに杜宇子が判断したのだろうけれど、助言をしたのは・・・彼女が指示したのかな。・・・いや、もっと別の・・・」
ワタルはそこまで言うと、眼鏡の奥の柔和な瞳を細めた。

杜宇子は黙ってコーヒーを飲んだ。
叱責されるのは杜宇子ひとりで十分だと思っていたからだ。
助言をしたのは彼女だけれど、それを受けて、レイアウトを変更したのは杜宇子だった。

この無風流に見えて実はとても記憶に鮮やかに残る色味を出す人の言葉には、杜宇子も従う気になったのだ。

「私にはそういう知識がないから」
「それなら僕だってそうだ」
「ワタルはこの経営者だから、何を言っても何をしても良いのです」
つんと横を向いた杜宇子に、ワタルがくすくすと笑った。
こんな穏やかな時間が・・・いつまでも続けば良いのに。杜宇子はそう強く思った。

■04

「あの人のこと、気にならないの？」
杜宇子がそう言っただけでワタルは察しがついたようだった。
今、この場に彼女が居ないことにワタルは安堵しているが、同時に失望している。
彼が入ってきて、すぐに周囲をぐるりと見渡した視線が求めているのは、杜宇子の姿ではなかった。
彼女はぎりぎりまでワタルを待っていた。
それを言うべきかどうか、彼女は決めかねていたが、すぐに唇を開いて彼の欲しい言葉を捧げた。
こんな時間まであの人が居れば、それはそれで彼の杞憂の源になる。

「あの人は・・・迎えに行く人がいて、どうしても行かなければならないからと言っていた。ずいぶんと遅くまでワタルを待っていたのよ」
「そう」
わかっている。
あの、フランスの華が来ているのだ。
多忙を極めているはずなのに、なぜ、あの男はああして日仏を行き来する時間を工面するのか。
・・・わかっている。

それは彼女に逢いたいからだ。

彼女に逢いたいから・・・
彼らは良く似ている。
彼女の時間を奪うことはしない。
差し出してくれと要求しない。
けれども、こうして空いた時間を使って・・・少しでも彼女の居る場所にやって来ようとする。
行き着けなくても良いから、彼らは彼女の傍に近づければそれで良いと思っている。
殉教の民のようだ。
行き着けなくても、足を踏み出せば、彼女に近づける。
確実に。

「そろそろ勝負時じゃないの？」
「何を言っているのか、わからないよ・・・それに。勝負にならないよ」
ワタルはそう言ったので杜宇子は笑った。
わかっているくせに、わからないフリをする。
彼は勝負というものに挑まないけれど、挑むことによって誰かを傷つけるのであれば、そんな恋や愛はいらないと思っている。
切なくて苦しくて、どうしてこちらを向いてくれないのだろうかという独りよがりな気持ちではない。
秘めたる想いに身を焦がすのではなく・・・もっと違った何かをワタルは抱えている。
「勝負をする前から、そんなことを言っている」
彼女は言った。
杜宇子はコーヒーのマグカップに口をつけた。丸みを帯びた縁がどんな最高級のコーヒーカップより口当たりが良い。彼女が絵付けをする前に、やすりで削いだのだ。そして丁寧に・・・根気よく鑄がけをしたのだ。たかだか模範品なのに。
でもそんな人をワタルはこよなく・・・こよなく愛している。

やや低めに設定した空調で冷えて疲労した体に染み渡るような甘さだった。
本当は香りだけが甘かったのだが。
彼女は甘いものはあまり口にしない。
しかし、そんなワタルの気遣いが心地よかった。

「大盛況だったようだね」

ワタルがそう言った。

教室の生徒の作品が売れていく。

誰かの手に渡る。

そして、それらをきっかけに、何かが生まれていく。

作る喜びを感じ、誰かの作品を愛でる喜びを知り、そしてそういった人々を見つめる彼女の笑顔が・・・ワタルの最高の報酬なのだ。

それに加えて、彼は今、彼女の作った色を手に行っている。

たとえ、誰を思った品だとしても。

これをこの画廊に残していった。

それが何を意味するのか・・・ワタルはわかっていたようだった。

「本当はもっと何客もあるようよ」

でも、彼女が決して売らなかったのがその2客なのだと聞いた。

そんなに大事にしたいのであれば持ち帰れば良いのに、と杜宇子が言うと、これはここに置いてあった方が良いと、彼女が首を振ったのだ。

ワタルはその話を最後まで聞くと・・・そう、とまた小さく言って、彼も杜宇子と同じようにコーヒーに口を付けた。

心なしか、口元が綻んでいた。

「杜宇子はここの正社員になる気はないの？」

「その話は保留。今はやるのが目の前にあって、それどころではない」

彼女は美しい眉を少し潜めた。

先般からワタルが切り出している話を杜宇子は保留にしていた。

以前のように・・・気がついたら頷いていた、とはいかなかった。

彼の申し出はとても嬉しい。

けれども・・・けれども、彼女はそうしてしまったら、一生、彼との関係が変わらないような気がした。

いや、このまま・・・この関係が心地よい。

傍に居たい。

誰よりも一番長い時間を過ごしたい。

誰よりも彼を助けたいと思う。

でも・・・でも。

今は、確固たる気持ちでイエスと言えない。

自分には・・・ワタルを最後まで見届ける覚悟が、まだ、ない。

「それなら、答えが出たら言って」

「随分悠長ね。・・・そういう時は、期限を決めるものではないの？」

「そうするのが一番良いことでないかと判断するときには、変更できるのも、経営者の特権だよ」

彼はそう言って笑った。静かな声が・・・杜宇子の疲労を飛ばし散らしていく。

「楽な受付嬢で良ければ直ぐさま返事をしたと思うけれど・・・こんなにこき使われるのであれば少し考えてしまうわね」

彼女は軽くそう言った。

本当は知っている。彼が杜宇子に何か・・・実績を持たせてやろうと考えていることを。

ただ微笑んでいる美しいだけの杜宇子では、この先も彼女は自分を好きになれないと憂えて居ることも。

自分自身事を愛せないワタルが、杜宇子に囁いた言葉がある。

もっと自分を好きになれと言った。

その結論も成果も・・・杜宇子の中の変化も、ワタルにまだ告げていない。

「私も、同じ言葉をワタルに言うわ。・・・答えが出たら、そう言って。私はワタルの結論を絶対に否定しないから」

この言葉には彼は少し驚いたようだった。

ことり・・・と。杜宇子の方から見て、色濃い部分のマグが・・・テーブルの上に置かれた。眼鏡の奥で・・・彼の瞳の暁が少しだけ、揺れ動いた。

「僕は変化を嫌うのでね。・・・このままが良いと思っているよ」

「どうかしら」

杜宇子は唇の端を持ち上げた。ワタルが決してそうは思っていないことがわかったからだ。

「ま、部外者はこれ以上の話はしない。・・・今日中に片付けないと、予定が詰まっているのだから」

「杜宇子」

ワタルが椅子から身を傾けて、立ち上がろうとした彼女に呼びかけた。

マグカップを・・・両手で軽く包んだままだった。彼の愛そのものだった。

決して触れない。決して温度を感じさせない。その代わりにいつも包み込んで、何かあった時には敏感に察知できる距離に居る。

それがワタルの愛だった。

杜宇子はワタルとの話題を一方向的に打ち切ろうとした。

胸が痛くなったから。

涙が出そうになったから。

でも・・・ワタルを困らせるために出した会話ではなかった。

杜宇子を労るワタルの視線が、何とも・・・杜宇子には慣れていなかったからだ。

だから自分のことを語るワタルより、ワタル自身のことを語ってもらったり・・・あの人のことで微笑むワタルを見ている方が・・・楽だったから。

不毛だなあ。

サトルの声が聞こえてくる。

そうだ。自分はまったく・・・実りを求めていないのだから。サトルの言うとおりでいい。

「さ、片付けよう。続きを開始しないとね」

小休止のコーヒーは確かに甘くて疲労した躰には即効性があった。
しかし・・・これほど甘い香りを漂わせているのに、なぜか・・・苦かった。

■05

「・・・僕の答えは変わらないよ、杜宇子」
彼が杜宇子に従いながら、そう言った。
彼も静かに立ち上がるが・・・まだ大事にカップを持ったままだった。
「別にそんなの、宣言しなくても良いじゃないの」
彼女は会話を終えたつもりだったので、少し意外だとも言うかのように、ワタルを振り返った。
彼女から切り出すと彼は困った顔をするか、拒絶の態度しか取らないのに。
でも。
今日のワタルは・・・少しだけ・・・距離が近い。
「彼女しか考えられない」
杜宇子の指先が、かちん、と音を立てた。
短く切ったつもりの爪が、マグカップにあたった音だった。
・・・ワタルの直接的な吐露を、初めて聞いたからだ。
彼が近い。・・・でも、彼が遠く感じる。決して・・・手を伸ばしても届かない那落迦に墮ちた気がした。
「杜宇子しか考えられない」という答えはとうに期待していない。
期待すると失望が大きい。
でも、期待するほどの何かがあるわけでもない。それは失望より大きな何かを失うようで・・・でも結局は失望しないまま、傷つけないで居られる安寧の状態なのかもしれない。

けれども。

こうして・・・

ワタルの声が愛おしそうに・・・苦しそうに彼の秘めたる思いを吐き出している。

「・・・そうだよ。ワタルは、彼女しかあり得ない・・・あの人なしではいられないくせに」
杜宇子は、それだけ言うのがやっとだった。
苦しくて切ない。
・・・どうして、この人はこうして自分の想いを閉じ込めてしまうのだろうか。
大人なのだから、相手をそこまで思い遣らなくても・・・良いのではないのだろうか。
時折そう思う。心に刺さったままの気持ちを・・・どうやって解せと言うのか。
杜宇子は彼に背を向けながら、軽く伸びをした。
自分の表情は・・・今、きっと、とても惨めな顔をしているに違いない。
ワタルにはそんな自分の顔を見せたくなかった。
人の笑顔が好きだ、と言った。
ワタルは自分を好きになれ、と言った。
だから。
だから・・・自分を嫌いになるような顔を彼に見せたくない。
ああ、最初から・・・勝負にならないのは自分の方ではないか。
どんなときにも笑顔を絶やさず「またね」と言う人を。
次を期待する希望を絶やすことのない、太陽のようなあの人のことを・・・ワタルが好きになっても当然だった。
彼には太陽とか月とか・・・天地の理は通用しない。ただあるのは・・・深い闇底だけだった。
そこにいきなり暁が照らされた。自分と似た闇を持つのに、同時に暁を持つ人が現れた。
ワタルが・・・自分は誰も・・・自分自身さえも好きになれないと沈んでいた場所から、彼女はそうではないと言って彼を引き揚げた。

それが、マリナ・イケダだ。
限りなく優しくて・・・限りなく寂しい人の憂いに触れた人が居る。
誰も・・・杜宇子でさえも、彼の深間に触れることは出来なかったのに。

いや、そういうワタルだからこそ・・・杜宇子は彼に秘めたる想いを抱き続けるのだから。

ワタルは、少し吐息を漏らして・・・彼にしては珍しく、長い言葉を引き出した。

「彼女が帰ってくる場所がある。僕が戻ろうと思う場所がある。たとえどんなに小さくても。狭くても。そして、そこはビジネスとして成立する。
誰にも文句は言わせない。誰にもそんな場所がある。
・・・戻ればいつもと同じで・・・杜宇子が居て。サトルが居て。
・・・そんな不変の空間がここであると良いなと思うよ」
「・・・贅沢な願い事ね」
「そう？願いは大きいほど・・・楽しいよ」
この静かな空間で・・・ワタルは何を思ったのだろうか。

サンスクリット語を語源として、「天国の庭園」という言葉がある。
まさに・・・ここはそんな場所なのだろうか。
誠次・マクドゥガルの名画が眠り、そして・・・フランスの華が時折訪れる場所。
それ以上に、ワタルやタケルやサトルが・・・この場所を懐かしいと思って集う。
ああ、そうだ。
彼がどうしてもこの場所に固執するのか。

・・・杜宇子は知っていた。

この場所は・・・彼らの母親が愛でた場所だから。
家業でもある夫の不動産業には口を差し挟むことはなかった。

しかし、この場所は・・・彼女が幼い時に育った場所だった。
近くには、取り壊しが済み、更地になってしまった彼女の通った小学校があった。
懐かしい・・・そして悲しくも切ない場所が、ここだった。

この場所は彼らの天国の場所なのだ。
・・・ワタルの休息の場所だから。
彼女はだからこそ、そこに・・・存在しても良いのかどうか惑っている。

天国の庭園をワタルは求めている。
あんなに穏やかな彼なのに・・・その心の中は決してそうではないのだ。
それを思うと・・・杜宇子は、自分を見て欲しいと言えない。言い出すことが出来ない。
彼の闇は深く静かで・・・そして冷たくどこまでも底がない。

何もかもを知っていると思っていたのに。
ワタルに関しては・・・何も知らなかった。
恋敵を模したマグカップを愛でて・・・そしてあの人の安寧の地を用意する。
それが、彼の愛なのだろうか。

■06

杜宇子は、この静かな空間が・・・彼のDevarana（天国の庭園）のようだと思った。
穏やかで変化がなく・・・それでいて、見ている者によってその存在が変わる変化し続ける不変の空間。
彼が割り込むことを、大変に邪だと考えているから・・・これほど静かなのだろうか。
静かに見せかけているのだろうか。

ここを心地良いと言って、何度も訪れる者が徐々に増えてきている。
それは彼がそういう空間になるように配慮しているからだ。
決して・・・彼の心に波風が生じていないということではない。

「ワタルは・・・もうちょっと自分を好きになっても良いのに」
彼がどうしてこの恋に躊躇しているのか、杜宇子には何となく理由がわかっていた。
けれども、それは・・・彼が解決しなければならない。

・・・ワタルは立ち上がると、その利き手を持ち上げて、人差し指を端麗な顔に垂直に押し当て、親指は顎の下に置いた。

・・・ワタル独特の仕草だった。
・・・静かにしろという合図だった。

「しっ・・・静かに」
彼の合図に、杜宇子が口をつぐむ。
短く切りそろえられた彼の髪の下で・・・ワタルが滅多に見せない鋭い眼差しを見せた。

彼の本業である空間には、ワタルは杜宇子やこの画廊の関係者は同席させない。
本来の彼の表情は・・・きっとこんな表情なのだろう。
厳しい男性の・・・杜宇子の知らない男の人の顔だった。

杜宇子はそれが何なのか・・・すぐに理解した。
頬が緩んでくる。
肩の力が抜けてくる。
ワタルが杜宇子の知っている柔和な仮面を捨てる時。
それは・・・本当に彼の中に息づいているものだけに見せることを赦している表情だった。
仕事の時であり・・・何かを決断するときであり・・・激昂するときでもあり・・・

そして・・・そして。
杜宇子はすべてを察して、席を離れた。
まだ、コーヒーは湯気が立ち上り・・・そして飲みかけだった。
甘い芳醇な薫りが燻っている。

見なくてもわかった。

ふわり、と空気が甘くなった。
このコーヒーのように。
飲めば苦いのに、薫りは甘く周囲の者を誘う。

・・・今までの奇妙なまでの緊迫感は何であったのだろうと思うくらいに・・・柔和な波長が流れ出した。

・・・ワタルがワタルになる瞬間だ。
・・・皆が知っているワタルに戻る。

それはワタルであってワタルではないけれど。

穏やかで静かで、自分の主張を誇張しないし、淡々と客観的に自らでさえも述べてしまうほどの・・・穏やかな人がそこにいた。
誰も・・・誰も、「彼女なしではいられない」と言い切るワタルを知らない。

あの人は・・・本当の彼を知ることになるのだろうか。いや、本当は知っているのだと思う。それでも、彼女は目をそらすのではなくて「そこに在って当然」という意味での緘黙を課している。
自らにも、ワタルにも。
だからこそ・・・この静かなまでの緊張感を、だれもが咎めることもなく・・・当事者達も躊躇うこともなく享受するのだと実感した。
都会のこんな喧騒多い場所で、静かな・・・安らぐ空間を求めて、誰もが彷徨っている。

この変容を杜宇子は静かに・・・微笑みながら受け止めた。
ワタルと杜宇子の間には、あまり会話がな
彼はいつも言葉が少ないし、自分のことは一切話さない。
それでも・・・こうして・・・本来の自分が生きるべき世界から戻り、この地階の狭い空間に降り立つ彼は・・・あのフランスの華と同じくらいに神々しい天使のような人だと思った。
シャルル・ドゥ・アルディがここにやってきた時には、あまりにも美しいので言葉を失った。身分高い者の歩き方は、他の者のそれと違っている。立ち止まったり躊躇ったりしない。
誰かに路を譲り、自分のエスコートする者に合わせることはあるけれど、決して・・・自身の予定を変更させることはない。

他者を気にすることがないので、一定律だ。
それなのに・・・今はどういうわけか、ワタルが地階に降り立つ足音が恋しかった。
彼もそういうカテゴリに入るはずなのに・・・ワタルの足音は一定ではない。
いつも誰かを気にするから・・・誰も気にしない歩みをする事ができないのだ。

そんなワタルは昔から変わらない。
だから・・・だから杜宇子は彼に惹かれるのだろうか。
人は変化するのに、彼は何か・・・変化しないことを決めてしまっているようだった。
それなのに、そんな彼を否応なく引っ張り回す者がいる。
あの人の。
あの人は・・・彼の懐に突然飛び込んだ。そして直ぐさま離れて・・・そして彼に大変に強い引力でもって魅了してやまない。
これほど穏やかで静かにしているから・・・あの人は気がつかないのか。
いや・・・あの人の永遠の恋人は、ワタルの気持ちをとうに察している。

この空間に・・・
この空間に、何かがあるとしたら、
杜宇子は息を吸った。
愛しい・・・待っていた人に背を向けて。

今の自分には、ワタルが振り向いたとしても受け止めるだけの度量がない。
あの人のように・・・あの人のように魅了するものがない。
ただ、好きだけで振り向いてもらえるというのは恋物語でしかない。
想いを強く持つだけでは・・・成就しない。
成就しない愛もある。
自分は、どうしたいのだろうか。

・・・ワタルと一緒に人生を歩みたいという先のことは想像できない。
でも。
これだけは言える。

・・・彼の微笑んだ顔が好きだ。

本当に・・・彼が心から微笑む姿が好きだ。
ただ、それだけだ。

眩しい灼熱の日差しのような笑顔ではなく・・・穏やかな・・・永遠に続きそうだと思うほどに柔らかな彼の微笑みが見たかった。
。

■07

「ワタルは優しすぎるよ」
杜宇子がそう言うと、彼は首を振った。
「・・・僕は残酷な人間だと思うよ、杜宇子」
彼がぼつりとそう言ったので、杜宇子は次の言葉を失ってしまった。

杜宇子はすぐに理解した。

彼はこの場所に、彼女を縛り付けていると思っている。
だから彼は浮かない顔をしているのだ。
彼女への愛に我を忘れることを制御している。
そう、感じる。

彼女があつた国と日本を行き来している理由のひとつが、ここの教室の講師を先々まで引き受けていることにあるということを承知しているようだった。
それなのに、彼女をこの国に縛り付けておくことになるのとわかっているのに・・・彼は申し出を止めることが出来なかった。

彼女を離したくなかったからだ。

どんな理由であれ、あの人を・・・彼女にここに降りたって欲しかったのだ。

彼女が天使を模して、あのフランスの華をイメージした作品を創っても。
ワタルにとっては・・・降り立つ天使は、彼女に他ならないのだという強烈な想いが彼を突き動かしたのだ。

・・・もっと集客的に確かな人物が居るだろう。
探せば、こんな小さな画廊で微々たる報酬であったとしても、手を挙げて志願する者は皆無ではないはずだった。
それなのに・・・彼女に学を与え、場所を提供し・・・

だからこそ彼は言えないのだ。
彼は経営者で、彼女が恩誼とを感じる恵沢をいくつも彼女に捧げている。

だからこそ、それからだからこそ・・・ワタルであるのに。
誰かを傷つけるための愛の囁きは不要であると感じている。
誰も幸せにならない愛の奪略は彼の中で存在しない。

「・・・そういう風には、思っていないよ。あの人はずう思わないよ」
杜宇子はそれだけ言うのがやっとだった。
そんなことないよ、とか。
貴方の愛は成就すると良いわね、とか。
気休めは言えない。
ワタルがこのままでいる限りは、彼女との関係は変化しない。

・・・彼女からワタルとの距離を縮めない限り、彼は自ら彼女に近づかない。

「・・・不毛ね」
杜宇子は自分が言われた言葉をワタルに言って遣った。
実りのない愛を抱えているのは、杜宇子だけではないのだ。

「そうかな？僕には・・・十分、報酬があるよ」
彼がそう言って笑った時だった。

■08

からん、とドアにつけた乾いた鈴の音が鳴り響く。

ワタルが静かにするようにと杜宇子に指図した意味がわかった。

ふたりのよく知る足音が・・・静かな画廊にまで響き渡ってきたからだ。
画廊は地階にあり、階段を下がって少し奥に進むと、入り口がある。
雑居ビルではあるが、同じフロアに店舗はないので、時間を空けることもなく迷わずまっすぐに突き進んでくるその足音が・・・
ここに用事がある者であるのは明白だった。
つい数時間前までは、不特定多数の者が往来していた空間であった。
人が多すぎて、終了時間直前では、鈴音が鳴っているのかさえ気にならなかったし、聞こえなかった。
人間の聴覚とは、聞きたいものだけを聞き分けることが出来るのだということを実感した一日だった。
ワタルが居てくれればこんなことも緩和されたのかもしれないのに、と思う余裕さえなく時間が過ぎ去った。
はっきりなしに鳴るその音が煩わしいと思ったのに、今は・・・今は懐かしく大きな音に感じる。

「・・・ただいま！」

声が聞こえてきた。
若い・・・澆刺とした声だった。夜の更けていく静かな空間を突如として現れた声と人の気配に、杜宇子が顔を上げた。

「どうしたの」

杜宇子が慌てて入り口まで出迎える。

思いもかけない人物が、ふたり、いた。

「良い香り。・・・ああ、本当に美味しそうな薫り」
そこには・・・先刻、出迎えるのためにここを慌てて出発したマリナ・イケダの姿があった。
そして、もうひとり。
浮かない顔をした・・・ワタルと良く似た面持ちの青年が立っていた。

杜宇子は呆れた声を出した。

「何をしに来たのよ」
「何って・・・片付けの手伝い」
マリナがそう言って、茶色の瞳を輝かせた。手首につけていた赤い髪飾りで、簡単に髪の毛を束ねたが、杜宇子のように美しい流線型にはならず、首もとで茶色の髪の毛が丸まった。
肩にかけた大きな画材道具も、衣類も、先ほどのままだった。
彼女の用事は終わったのだろうか。
杜宇子の呆れた顔を見て、マリナ・イケダがぐすりと笑った。
「私の用事は・・・人をホテルまで送り届けるだけ。車も用意してあるし、部屋だって自分で確保しているから知っているはずなのに、『荷物持ちの随行が居ないと行動できない』と言い張るなんて、困った人がいるものよね・・・」
マリナがそう言って、にこりと微笑んだ。
寒いと感じた空調の効いた室内が・・・一気に温度が上がったような気がする。
彼女は、まさしく太陽のような人なのだ。
この静かな場所に・・・日の差さない地階に・・・彼女は慈光をもたらす。
しかし、それは無垢な強烈な暁ではなかった。

決して自分の恋人を迎えに言ったとは言わない。
彼女は・・・あの人を恋人と人に紹介をすることを躊躇っているようだった。
愛や恋について、この人も・・・秘めたる想いや悲しみを持ち合わせている。
杜宇子はそう思った。

彼女をこよなく愛する・・・白金の髪の毛の青灰色の瞳をした男性も。
静かに彼女の居場所を整え続けながら、それが足枷になっていると感じているワタルも。
どうしてこうも・・・拙い愛を抱えている人ばかりなのだろうか。

もっと・・・自分を好きになれば良いのに

ワタルの言葉は、ワタルにそのまま返してやりたいくらいだった。

自分の幸せを願わなければ・・・他者を幸せにできないことくらい、とっくに気がついていても良さそうなのに。
■09

「サトル」
今、苦しい想いを打ち明けたことを少しも面に出さずに、ワタルは弟の名前を呼んだ。
杜宇子を悲ませたり憂えるような表情をさせたりすれば、直情的な実弟は、直ぐさまワタルに抗議することだろう。誰の目も憚らずに。
サトルはむっつりとした表情で入ってきた。
今まで薄暗い闇夜の中に居たのだろう。ここの光源を落とした間接照明でさえ眩しいと言うかのようにあからさまに顔をしかめて目を細めた。
杜宇子はそんなサトルの顔を見ながら・・・複雑な心境だった。
長兄と良く似た顔であるが、こういう表情は、昔のワタルを思い出させる。
いや・・・ワタルは昔から物静かではあり、このようにくるくると表情を変化させることはなかった。
しかし・・・若い頃のワタルに似ている。
彼は、長兄に最も似ていると言われているが、このような心を許した者達の前では、ワタルに良く似ている表情を見せる。

何を見ても、誰を見ても・・・ワタルに行き着くこの想いをどうすれば良いのだろう。

ワタルよりずっと小柄であるが、マリナとワタルはどこかで待ち合わせて、ふたりでここにやって来るほどには親しくない。
杜宇子とワタルの疑問を解決するかのように、そこでマリナがぐすりと笑って言った。

「・・・片付け。杜宇子さんに・・・ひとりでは大丈夫と言われたけれど、気になって来てみたら。
・・・外に彼が居て。
仏頂面で立ち尽くしているから、連れて来てしまったの。
もう・・・だいぶ長い時間そこで立っていたみたい。
・・・まるで、怪しい人が誰も立ち入らないように見張っているみたいに・・・ね」
「おい！」
マリナの説明に、サトルが顔を赤くして叫んだ。

杜宇子はその様子があまりにもおかしくて、吹き出してしまった。

杜宇子が誰かの助けを施してもらうことをありがたい恵みだと思ふような人物でないから。

だから、サトルは中に入らないで、じっと・・・杜宇子の作業が終わるまで待っていたのだ。
ワタルが入って来るのも見ていたのだろうか。
彼にさえ気がつかない密やかな息遣いで・・・サトルは・・・外で杜宇子を見守っていたというのに。
彼女が誰かの助けを必要としないことも。
そして、誰かが先回りして「手伝うよ」ということを厭う人であることも承知しているからこそ・・・サトルは彼女に近づきたい
気持ちを抑えて、杜宇子の居る空間を見守っていたと言うのか。
更に驚くべき事には、マリナ・イケダがそれに気がついたということだった。
美兄であるワタルに声もかけないサトルの・・・静かだけれど杜宇子を想って高鳴る心拍を聞き分けた。
この人は、それほど親しくもないサトルの気配を感じ取って、そして声をかけたというのか。

そして彼女は「ただいま」と言った。
こんばんは、とか。
お邪魔します、とか。
そう言わなかった。

「ただいま」と言った。

・・・参ったわ。太刀打ちできない。

杜宇子は苦笑した。

愛について・・・愛をすることについて、各々の秘めたる想いを胸に抱く人々が集うこの場所を、どうして・・・どうして消滅させる
ことができようか。
ここはまさしく・・・杜宇子にとっても。
ワタルにとっても「Devarana」なのに。

「バニラの香りがする・・・」
マリナがそう言って目を細めて顎を上げて、上を向いた。
目が弱い彼女は、嗅覚が良いらしい。
茶色の目を細めて、幸せそうに微笑んだ。
この空間に漂う、癒しの薫りを早速かぎ分けたようだ。
ワタルは、ああ、と言って優しく微笑んだ。

「今、休憩中で・・・フレーバーコーヒーを煎れていたところ。イケダさんもどうでしょうか」
年下の彼女に敬語で接するワタルの言葉は、いつもどおり・・・抑揚の乏しいけれども優しい声音であった。決して・・・恋の苦しみを
を混じらせることはなかった。

もちろん喜んで、と彼女は笑って言った。
「まだ何もしていないうちから、慰労のコーヒーをいただくなんて、贅沢だわ」
彼女は笑った。そして、その通りだとサトルが頷いた後、彼は意地悪く兄に言った。
「オレには聞いてくれないのかな、兄さん」
サトルが憤慨したように抗議した。
ワタルはそうだった、と思いついたように言った。
「サトルもどう？だって、甘いものはあまり好きではないと思ったから」
「兄さん！」
サトルが叫んだ。杜宇子が切れ長の大きな瞳を少しだけ・・・大きくした。
それは内緒にしていたはずではないのだろうか、と言った抗議だったが、ワタルはくすくすと声を漏らして笑った後、キッチンに
向かって躰の向きを変えた。

「・・・良い色だな」
サトルがそう言った。
テーブルの上に置かれた、マグカップを指した言葉だった。
「どう？我が画廊の名物講師の・・・マリナ・イケダ氏の作だよ。タイトルは・・・」
「Devarana」
マリナがくすりと笑いながら言った。
「そう・・・今回の展示会のテーマだ」
サトルが口笛を吹いた。
「・・・Devarana？粋だね」
「名付けたのは、タケル兄さんだよ」
ワタルは言った。

「天国の庭園という意味なのに・・・なんで黄色と青灰色の色しか使わないんだ？」
「私にはそう見えるから。Devaranaの世界が」
おそらく・・・ワタルには、もっと違う色に見えるのだろう。
彼のDevaranaには、茶色の瞳の茶色の髪の女性の微笑むのだろう、と杜宇子は思った。
・・・静かな草原や空や・・・月や太陽が混在する天国の庭に・・・誰が何を住まわせているのかは各々違う。

「ただいま」と彼女は言った。
だから・・・だから。

「おかえり」
ワタルはそう言った。
杜宇子が言おうとしていた言葉だった。
■10

「さて。人手が増えたことだし。片付けてしまおうか」
明日からはまた・・・静かで穏やかな空間になるように、現状復帰をしなければならない。
ワタルはワイシャツの袖をまくった。

「今日のはずせない仕事、うまく行ったのか？」

彼の弟が遠慮無くそう聞いた。
杜宇子が遠慮して聞けないでいると思ったらしい。
ワタルは笑って頷いた。

「もちろん」

この場に居た、誰もが・・・ワタルの用事というのは、マリナ・イケダを題材にして扱った作品集をWEB展示としてインターネット配信することの企画立案のための会合であったことを知っていた。
知らなかったのはモデルであるマリナ・イケダだけだった。
彼女は・・・彼女には微笑んで欲しいから。
臆することなく・・・微笑んだマリナを描き続けたいから。

彼女が買い付けてきた誠次・マクドゥガルの愛する人に対する想いも・・・このような気持ちだったのだろうか。
描くことによって愛を深め、描くことによって何かが浄化され昇華され・・・
限りなく・・・今以上に・・・愛を・・・愛をすることを笑って赦してくれるだろうか。

彼の作品は相当数になっていた。

その件で肖像権の問題もあるということで、あのフランスの華がマリナ・イケダの代理人として来日していることを、この場の者たちは皆、知っていた。

当事者であるはずのマリナだけが、悠然としてどこから片付けの手を入れようか悩んでいた。

あの人は・・・あのフランスの華は、彼女の権利に関することなのに、まだ知らせていないらしい。それほど・・・マリナは彼にすべてを委ねているのだとしたら・・・

二人が・・・いずれ権利を分かち合う関係になる・・・つまり、結婚をするのも近いのかもしれない。

それならなおさら、彼女にすべてを話すはずであるのが常なのだが。

人嫌いで風変わりな白金の髪青年実業家は、すべてが終わった後に、彼女に話をするらしい。

しかし互いに決裂して終わったわけではないらしい。

その証拠に・・・遅くはなったが、ワタルはこうして戻ってきた。

彼らは会合が終わったので・・・そこで散会した。

マリナは、あの人の商談相手がワタルであることを知らない。

マリナは、ワタルの「どうしてもはずせない用事」に自分が関与していることを知らない。

でも。

それでも。

彼女は・・・この場所になくはならない存在なのだ。

天から舞い降りてきた天使は、彼女の愛する人ではなく、彼女なのだ。

少なくとも・・・ここでは。

「イケダさんなら、来ると思っていたよ」

ワタルはそう言った。

「でも、マグカップ・・・使わせてもらっているけれど、客数が足りなくて・・・別のものでも良いかな」

「容れ物にはこだわりません」

マリナがそう言ったので、ワタルがまた声を漏らして笑った。

彼が声を出して笑うのは、本当に・・・本当に珍しいのだ。

今日は、ワタルはよく笑った。

きっと、彼の会合というのは有利に終了することができたのだろう。

高揚感も手伝ったのかもしれない。

・・・彼女と居ると、彼はよく笑う。

静かに穏やかに・・・皆から一歩引いた微笑みではなく・・・円の中心に居ることを楽しむ、声を漏らした笑いが・・・ワタルのそんな笑顔が、杜宇子には眩しかった。

彼には彼だけしかできないことをすることで彼女への愛の証を示している。

誰でもない、自分自身に証明し続けている、

静かな愛はないのかもしれない。

でも、ワタルの愛には音がない。気配がない。

それほど時間を置くこともなく、新しい薫りが小さな空間に充塞した。

先ほどと同じものであるのに・・・微妙にどこかが違う。

ミニキッチンがこれまでにないほどに稼働している。

ワタルがスイッチを入れると、IHヒーターの上で、釣の細い薬罐が音を立てて水蒸気を放出しだした。

ワタルがいつも煎れることのできる人数は4人までだ。

別々に暮らしているはずなのに、彼ら家族は集うと、いつも・・・甘いものがそれほど好物ではないのに、ケーキを食べる。

ケーキはもうひとりの人が好きだったからだ。

自分でも、頻繁に手作りのケーキを焼いていた。

その時だけは、ワタルが自ら季節折々の器を選び、湯を沸かして濃い紅茶を煎れる。

それは・・・もう二度と再現することの出来ない五人の時の習慣だった。

都内の、気に入りの店があり、そこに長男を良く連れて行ってはケーキの蘊蓄を披露して息子を苦笑させた。

誰でもない時間と何を気にするでもない空間こそが・・・何よりも恵まれた天国の庭園であることを、その人は知っていた。

「天国の庭園はね、実は、とても近くにあるものなのよ」

よく、そう言っていた。

「容れ物には拘らない」と言ったマリナ・イケダは雰囲気良く似ている。

朗らかで闊達で・・・太陽のような人。

母性とは、そういうものを指すのかもしれない。ただ、そこに居るだけでそこは一瞬にして荒野から草原に変化する。天国の・・・

・満ち足りた神の苑が無限に広がっていく。
彼女の周囲に、母親が不在である者が多く集うという話を聞いたことがあった。
それは、彼女に何か・・・失われた何かを求めているのかもしれない。
もちろん、ワタル自身も。
■11

「賑やかなのは、たまには良いことだね」
疲れているはずなのに、ワタルはそう言った。

癒されるから集う。
集うから癒される。

・・・誰かと分かち合うとは、そういうことなのだと云うかのように。

ワタルは・・・初めて、誰かと分かち合いたいと思ったのかもしれない。
この場所を・・・彼の「天国の場所」をあの人と共有したいのかもしれない。

「『たまには』？最近のここは・・・いつも賑やかよ」

杜宇子が言い返した。
ワタルはそうだったか？と言って聞き返したが、それは答えを期待していたわけではなさそうだったので、彼女は知らない顔をして、どこから片付けようか、と早速分担を考え始めていた。

「一息ついたら、4人で一気に片付ければすぐ終わる」

サトルはそう言ってぐるりと周囲を見回した。
こんなことであれば、もっと早い時間から杜宇子の手伝いをするべきだった、と悔しそうな顔をしていた。しかしサトルからの申し出には、杜宇子は「私を甘やかさないで」と言って、彼を窘めることしかしないのだろう。杜宇子はそういう人だった。
だから、彼女が携帯電話で呼び出してくれやしないかと思っていたのに、とうとう彼女はサトルに連絡を寄越さなかった。
そんな折に、ワタルが人通りの減った路地から姿を現して、ふらりと雑居ビルに入っていったので、サトルがタイミングを狙っていたところに、マリナ・イケダが通りかかったのだ。

4人の関係は、微妙な均衡を保っていたのに、それでいて何か穏やかな雰囲気満ちている。

彼が揃いのカップで出し直しをしようと言った。

杜宇子は2杯目はもうたくさんは飲めないから、とワタルに声をかけたが、それでもいらないとは言わなかった。
テーブルの上でやや冷めかけたコーヒーの入ったマグカップを杜宇子が黙って両手で持ち、運んだ。

その阿吽の呼吸に、マリナが微笑んだ。

彼女は・・・こういう静かな愛を知っているのかもしれない。

あの、激しい気性のフランスの華との愛では考えられなかったので・・・誰か別のひととの距離感を思い出しているのだろうと思った。

彼女がそうやって、彼ではない誰かを思い出す場所は限られているのかもしれない。

「オーナー、今日のお仕事はもう、良いのですか」

マリナの言葉に、ワタルは彼女に背中を向けたまま、返答した。

「おかげさまで。・・・首尾良くこちらに終わりました」

彼の実兄のタゲルが付き添い、綿密な打ち合わせを立てた。

双方とも不利益にはならないはずだ。

「それなら、良かった」

マリナはほっとした顔になり、嬉しい話が聞けて良かったと言った。

「片付けを始める前に・・・コーヒーで乾杯ですね」

マリナが手を叩いて喜んだ。

彼女のこういう間髪入れない喜びの表現がワタルの表情を柔らかくさせる。

「・・・入ったよ」

だか、ワタルが3人の前に差し出したコーヒーは、3客しかなかった。

上品な焦げ茶色のカップだった。

コーヒーの色を損ねない、暖かみのある・・・マリナの茶色の瞳と茶色の髪を思い出させるような、色のカップだった。

それがワタルの作品であることを杜宇子は知っていた。

本当は・・・あれは5客あるのだ。

本当は・・・欠けた5人目に、この色を持つ人が加わってくれないかと願いながら創ったものであることが、杜宇子にもサトルの目にも明らかだった。

「オーナー？」

それ以上加えられてテーブルの上にはコーヒーカップは出ていないと察したマリナが少し首を傾げた。各々の前に出された器からは、甘い香が漂っている。マリナが恨めしそうに、上目遣いにワタルを見つめる。

その仕草は若く見えるのではなく、幼く見えた。

「数が足りない」

「良いんだ」

ワタルがくすりと笑った。

そして、次にキッチンからマリナの作品のマグカップを持ってきた。

「イケダさんには、これ」

そして、マリナの目の前には、先ほどのマグカップがことり、と置かれた。

キッチンペーパーで水分を拭き取られたマグカップが2客、マリナの前に差し出された。

「緩衝材を巻いて、梱包して持たせてあげるから、少し待っていて」

どうして？と理由がわからないマリナがしきりに不思議そうな顔をしているので、ワタルは笑った。ワタルは水仕事で腕まくりをしていた袖を一度軽く伸ばしてカフスを止めた。また作業を始めるときにははずすのに。ワタルの肘から手首までの肌の露出がいきなり消えて・・杜宇子はどきりとした。現れるとどきまぎするのではない。今、そこに見えていた「普段では見られない彼の姿」が消えてしまうと、胸が高鳴る。見てはならないものを見てしまう時より、見てしまった後に訪れる静寂に戸惑う。

ワタルは眼鏡の奥で、瞳を細めて破顔した。静かに、対岸に座るマリナ・イケダに言った。

「貴女を待っている人を置いて、ここに来てくれるのは嬉しいことだけれど、仕事の範囲を越えた業務は信用問題になるからね。それに超過の深夜割増料金を払わないといけなくなる」
「杜宇子さんだって居るわ」
「彼女は・・・こここの社員だからね。貴女は契約講師。就労状況も条件もまったく違う」

「・・・ワタル！」
「杜宇子、いったいつの間に就職したんだよ」
杜宇子の声と、サトルの声が重なった。
ワタルはまた笑った。

「ま、近い内にそうなるから」
その声に、マリナ・イケダが手を叩いた。
「それならなおさら、乾杯しないと。・・・だって喜ばしいことがこんなに重なる日は、滅多にないから・・」
その声に、3人が各々思うところに行き当たり、それぞれ苦笑いを浮かべる。
彼女は喜びを見つける天才だ。些細なことでも・・・大きな欣悦に変化させてしまう。

まったく、困った人で・・不思議な人だ。
だからこそ、彼女に人が集うのかもしれない。
だからこそ、あの男性は彼女を愛し続けているのかもしれない。

きっと、自分でない他の者も、同じ事を思っているに違いない。

「それは今度にしよう」
ワタルがそう言って遠回しに彼女に帰れと言った。
マリナがたとえ、出迎えるだけだと言い張ったとしても、彼女と祝杯をあげたいと熱烈に思っている男をひとり置いておくと、後に差し支える。
マリナは差し出されて綺麗になった2色のマグカップをワタルの方に少し押し出した。
「オーナー、私にも・・・コーヒーを煎れてください。ご面倒でなければ、このマグカップにもう一度」
「構わないよ。でも・・・イケダさんの帰りが遅くなってしまう」

ワタルが困ってしまってた。サトルがみかねて、口を差し挟んだ。
「さっさと、待ち合わせの人のところに行けて言ってるんだ。こんなところで飲み物一杯を飲む飲まないで粘るより、もっとやることがあるだろう？」
「あら、それは大事なことなのよ。それに・・・」
マリナがそこで笑った。いたずらっ子のような幼い笑顔だった。
マグカップに茶色の瞳を遣る。

「そのマグカップは、ここに在るべきものだと思うの」
「そう？・・・これはペアのマグカップではないの？」
「いずれ、もっとたくさん増える予定です」
マリナが即答した。
「展示会をやるたびに・・・ひとつずつ、増やしていきたいです。展示会のテーマごとに。
不揃いでもこれは連作になって・・・ひとつひとつに意味を持つ。・・・支障がなければこのまま、ここに置いてもらえませんか」
「それなら、イケダさんとイケダさんの来客が来たときに使用するようにしましょう」
「いえ、水差しでもペン立てでも良いのです。・・・ここに置いてもらうことに意味があるのだから」

■12

「図々しい奴だなあ。・・・あんた、今、これからもここで仕事しますって宣言しているようなものだぞ」
サトルが呆れてそう言ったが、杜宇子に睨まれたので、それ以上は言わずに肩をすくめてしまった。

「そうなるよ、良いなと思うのですが」
マリナがサトルの言葉に気を悪くした風でもなく言ったので、ワタルが返答する。
少し・・・動揺しているようだった。
声音が低くなっていた。
彼女がこの場所を居心地が悪いわけではないと思っていることを、思いもかけずに知ったからだった。

「それは願ったり叶ったりのことなのですが・・・それでは、持ち帰りたくなったら言ってくださいね」
これは貴女の作品なのですからね、とワタルは念を押した。
「この連作が止まるまで、ここに置きましょう。・・・では今回の展示会のテーマの『Devarana』が・・・この器の名前ですね」
白金の色の・・・淡い太陽光とも月明かりとも解釈できるような器と、青灰色の白い月が良く似合う薄い空の色をしたカップを交互に眺めながら、ワタルはそう言った。
彼女のDevaranaはこんな色をしているのだろう。

「それほど大それたものではありませんけれども」
彼女はそこまで言うと、ワタルに照れくさそうに笑いかけた。
「だから、ごめんとおっしゃらないでください。オーナー。契約外だからと仰らないでください。
今日は業務の延長とは思っていません。手伝いに来ただけ。・・・私はここに来たくて来たから」

マリナの言葉に、ワタルが言葉に詰まった。普段・・・彼はこうして誰かから直接的な言葉を浴びても決して動じない。それなのに、彼女の一言一言がとても・・・重く感じる。自分に都合の良いように解釈をしたくなかった。淡々としていることが最良であるといつも思っていたし、これからもそれは変更されないだろう。しかし、彼女の意味を取り間違えれば・・・彼は愛の迷宮を彷徨ってしまいそうになる自分が居ることとうの昔に気がついていたのに。

- コーヒーを飲みませんかと言ったのはオーナーですよ」

マリナがそう言ってワタルを責めたので、彼はそうだった、と言って笑った。彼女の顔を見ていると、どうしても・・・相反する気持ちが交錯する。引き留めておきたいのに、彼女を帰したくなくなるのが怖くて、早く去ってくれば良いのに、と思う。それなのに、契約更新を申し出たり・・・早く帰れと言ってみたり。自分の中の矛盾に、自分で気がつかないなんて。

「今回は、ワタルの負けよ。・・・終わったら、送って行ってあげれば良いじゃない」
杜宇子がそう言って場を取りなした。

意味を理解していないマリナだけが、にこにこ笑いながら、はやくコーヒーで乾杯しよう、と言って催促した。

「それにね、オーナー」
「業務時間外は、そういう名称で呼ばないでくださいね。・・・契約書の但し書きに書き足しますよ」
ワタルがそう言ってマリナ・イケダに用意するためのマグカップをふたつ、持ち上げた。
マリナが・・・少し意外そうに声を漏らした。
「どうして2つ、とわかったのですか？」
「単純な考察と、足し算だよ、イケダさん」

ワタルは笑った。

夜が更けて・・・静かな画廊の淡い間接照明の中で、ワタルはくすくす笑った。こんな笑いを深夜にするなんて、どれくらい久しぶりのことだろうか。昔の・・・楽しみにしていた行事の前の日に、眠れずに夜更かしに興じたころを思い出す。大人になって眠れない夜や、眠りたいのに眠れないほどの激務を味わった。しかし・・・こんな夜を過ごすこともできるのだ。

サトルが立ち上がった。
ワタルが話を始めるのと同様だった。

「貴女が相手の方と落ち合って、そして戻ってくには、夜は遅いけれど、少し早過ぎやしませんか。・・・だから、貴女は途中でここに立ち寄るからと言って戻ってきたのではないのかな、と思います。ただ・・・相手の方はそれで話が終わったと思わないのであれば・・・イケダさんは相手の方に何か用事を言いつけて、ここに遅れて来るように、調整したのかな、と」
「疲れた躰には、甘いものが良いかなと思っただけです。・・・私も食べたかったし」

マリナがにこりと笑った。
ワタルさんには叶わない、と言った。
杜宇子が叫んだ。
「こんな埃まみれの場所に呼びつけたの？」
信用問題に関わるから、急いで片付けないと、と言って、杜宇子が立ち上がって作業を開始し始めた。
「ああ、せっかくのコーヒーが・・・」マリナがちょっと残念そうに口のつけられていない茶器に視線を注いだので、ワタルは苦笑した。
「入れ直しますよ。何度でも」

声にならない声で、追加した。
貴女のためなら・・・何度でも、ね。

届かない声はマリナの耳に入らなかった。
彼女は少し得意げに胸を反らせて顎を引いて説明をした。

「このコーヒーには、あのホテルのショコラが最高ですよ、きっと。そのホテルのオリジナルで、今日、新作の試作が出たそうです。
・・・しかも、発売前だから、スイートクラスの宿泊客が直接注文しなければ、手に入りません。販売戦略なのでしょうけれども・・・とにかく人気で、まったく手に入らない。当然、私が行っても駄目だったので、頼んで持ってきてもらうことにしたの」

「それで、あの人をお使いに出したの・・・？
呆れたというより、そんなお使いをあの人にするのね」
びっくりだわ、と杜宇子は素直な感想を漏らした。
話を聞きながら作業を始めていた彼女は、呆れて大きな溜息をついた。
「確かにあそこのショコラは最高だけれど。でも、わざわざお使い立てさせることなの？私に言ってくれば買いに行ったのに」

「だって、どうしても・・・みんなで食べたかったの。杜宇子さんに食べて欲しかったのになあ・・・ああ、もちろん私も食べたいのだけれども」
小さなこどもの言い訳のように、マリナが少し萎れた声で言ったので、ワタルは彼女に優しく、友人として声をかけた。

「ありがたい話だけど・・・彼がそれを許すかな」
「どうかしら。・・・ちょっとした賭をしている気分になります」
ワタルが「彼」と言ったことにマリナは否定しなかった。胸が・・・痛んだ。
彼女の賭は勝負にならないのだ。
ワタルが最初にそう言ったように。
彼女は・・・きっと彼が来ると信じている。
そしてそれは間違わないだろう。
勝負にならない。
彼女はどちらかに勝敗をもたらすようなことはしない。
最初から・・・結果を選ぶようなことはしないから。ひとつしか、答えがないから。

そんな彼女が彼に頼んだ茶菓のために、彼が足を運ぶ。そして・・・
■13

からん、と音がした。
入り口で、待機していたサトルが声を上げた。
彼はさりげなく移動して、誰かの来訪を・・・今度は扉の内側で待っていた。
それほど待たずにやってきた来訪者を見るなり、軽く口笛を吹いた。
「すっげえ・・・予想通りだ」

「予想通りではなく、予定通りだ」
むっつりとした声で、もう一人の誰かが・・・サトルに回答した。
人目に付かないように配慮された設計であるから、最も奥まった場所にキッチンが設置しており、こちらからは来客の顔が見えていない。
それなのに、マリナの顔が綻んだ。

「さ、これで・・・今日の作業を乗り切るくらいの手手が揃ったから・・・その前に、乾杯でしょうね。ワタルさん、とびきり熱くしてください」
マリナが笑って、その声の主を出迎えに足を運んだ。
遅い、とか。ショコラは人数分あるか、と言って他愛もない会話が始まり、マリナの明るい声に低く良く通る声が応答していた。

白金の髪と青灰色の瞳を持つ人物に会うのは今日はこれで・・・幾度目だろう。

彼は、ひとり残されたキッチンで・・・ワタルは思案した。
彼の髪と瞳の色を模したマグカップに湯を入れて、軽く温めながら彼はいつもより多目の湯を沸かす。

いつもは4人分しか目分量で量ったことがない。
けれども・・・今日は5人分のコーヒーが必要だった。
自分には、できるだろうか。
・・・Devaranaの空間を、彼女に与えてやる事が出来るだろうか。

彼は顔を上げて、先ほどしまい込んだもう2客のカップを取り出した。
やはり、このマグカップは、今は使うことが出来ない。
その代わりに・・・あの男が顔をしかめたとしても、この茶器を使うことにしようと決めた。

勝負にならない勝負はしない。
けれども・・・勝負と思わない角逐（※互いに争うこと）に挑んでみるのも良いのかもしれない。結果を気にするのではなく・・・経過によっては結果が逆転することも、ある。

彼女の言っていたショコラはきっと、あの男が滞在することになっている宿泊先のものであろう。病中は舌感が鈍くなっていた母のために、よく・・・あのホテルが得意とする一口大の茶菓を求めて取り寄せたものだった。
だから、ワタルに言えば取り寄せることだってできたのに。
サトルか、タケルに尋ねてみれば、良かったのに。
特に、タケルはそのホテルのシェフだったレストランにマリナをよく連れて行っているようだから、少し思料すれば、すぐにわかったはずなのに。
それでも、彼女は彼に依頼した。

分が悪いスタートではある。
しかしこれは始まりではなく・・・もう、始まっているのだから。
そこでワタルはまたひとり、笑ってしまった。
どうやら、自分はその男に挑むつもりらしい。あの男に・・・勝つつもりらしい。
また、ここでも愛の矛盾に気がつく。
自分は・・・自分の中に眠るのは、いったいどんな自分なのだろう。
諦める事が出来るくらいならば、最初からこんな気持ちにならなかった。

ワタルは微笑んだ。
5人分のコーヒーを煎れるのは、久しぶりのことだった。
彼は・・・相当、味に煩いだろう。
それにマリナ・イケダの言うとおり、彼がこの部屋の片付けを手伝うとは思えなかった。
しかし、彼女の笑顔の前では・・・あのフランスの華もひとりの男になる。

立場も身分も国籍も環境も・・・誰が誰を愛しているのかさえ、咎められない自由な場所。

そんな場所に・・・彼女の笑顔があれば良いのに、と思った。

サトルの音がする。そして杜宇子が深夜の来客者の中に招き入れる音がする。
そして・・・マリナ・イケダが彼の詰問を軽く交わしながら、皆と一緒に時間を楽しもうと言っている音がした。

「これは貴方の良く言う、『Devaranaの時間』というものではないの、シャルル」
「オレの国の信仰する神の庭園とは違うだろ。それに賑わしいことを指し示すものではないよ、マリナ」
「あら、入り口は違っても・・・行き着く先は同じであれば宗教も信仰も関係ないわよ。おまけに、賑わしくなんて、ないわよ。だって、ここには知った顔しか居ないから。・・・静かよ、とても」
マリナがそう言って、不機嫌そうな彼に中に入れと呼び込んでいる。

ワタルは今度は声を漏らして笑った。
あのフランスの華を黙らせる人物が、居る。そして彼女の自分を自分分は・・・

ああ、本当だ。

彼は遠く天の空に還った人の言葉を思い出していた。
安らぐから集う。癒されるから集う。
集うから・・・癒される。誰かと集うから・・・愛が始まる。
既に愛が始まっているから・・・傍に寄りたくなる。

勝負がいやだとか、心乱されるから離れていたいとか。
そんなものは理由でしかない。
自分の中のパラドクスに、答えを出せる日が来るのだろうか。
そしてそれを彼女に告げたら・・・彼女は、ワタルになんて言うのだろうか。

しかし、彼女の元に誰もが集う。
あっという間に・・・この静かな空間には人が集ってしまった。
惹きつけられる。それを否定することは出来ないし、したくもなかった。

「さ、みんな、少し休憩だ。・・・最高のショコラで・・・客人をもてなすぐらいできるだろう？席作りを頼むよ。・・・ここは雑然としすぎているからね」
声を張り上げた。
今日の作業は明日に持ち込むことになるだろう。
夜更けの祝筈に勝るものはない。
彼はここを経営者である。だから彼の決定は絶対であるが異を唱える者は居ないだろう。
この雑然とした空間が・・・あの麗人によって神の庭に変化する。
フランスの華は、自由気ままに出歩くほどに悠々とした環境ではないはずなのに。
彼女のために・・・彼女を手に入れるために・・・こうして時間を調整してここにやって来る。
気持ちがわからないでもない。いや、理解できる。

その声に呼応するかのようになり、マリナ・イケダがはしゃいだ声を出した。
「ほら！お祝いの席なのだからそんな顔はよして。・・・ねえ、嬉しくないの？私は・・・私は嬉しい。だって私が素敵だなぁと思う人達がここにたくさん集って居るから・・・ああ、もちろんそこにはシャルルの名前も加えても良いわ。・・・貴方がもう少し仏頂面を緩めてくれるのなら」

皆が疲弊しているはずなのに、どういうわけか活力が漲ってくる。
その源でもある・・・茶色の髪の色茶色の瞳の女神は、ワタルには決して見せない・・・悔しいくらいに美しい表情で・・・恋をして愛を知る者の表情で、ワタルの目の前に現れた。

次の作品のテーマは決まったよ。

ワタルはそっと呟いた。
彼の作品のイメージモデルの務めも持ち合わせる彼女に心の中で囁いた。

貴女をここに絡め取っていたと思っていた。でも、そうではなかった。
Devaranaはどこにでも存在する。
誰の中にも存在する。
誰にでも創り出すことができる。

だから・・・ワタルの創る楽土の庭に・・・自由に気儘に降りたって飛び立ってそしてまた戻ってくることを約束していく人が見つめる先を・・・今度は描いてみようと思った。

彼女は、彼女だけのDevaranaの腕を取ってワタルの前に現れた。

「ああ、良い香りだわ。ワタルさん・・・はじめましょう」

そうだね。始めようか。いや・・・もう始まっているから。

ワタルは頷いた。
目の前の、彼の「天国の庭園」に。

(FIN)

W-side 弄火

■FireWorks 01

「良いのですか？」
それがマリナ・イケダの第一声だった。
ワタル・イツキは、微笑んだ。

遠くで、開催を予告するための前火（開催予告のための日中打ち上げる花火。空中に広がる花火の形状より、音声が大きいことが特徴）が乾いた水縹の空に響く。

今日はこの地区で花火大会の催しがあり、動産及び不動産の一部所有者でもあるワタルは当然ながら主催者側として出席することを半ば強制された状況であった。

この近辺は昔ながらの縁故を優先するものか、ワタルのように代替わりを理由として才覚を暫くの間、隠すことを選択した者か・・・その2種類の人種しか存在しない。

この年齢でそういった会合に出席するのは大変に稀なことだった。

だから親の代からの相続であることを主張することにした。

気の良い息子が父の名代として参加するという形式をとることにする。

年嵩の者たちはそれで安心する。

この土地を支えてきた重鎮たちに逆らう気持ちはない。

彼の若さの中に煌めく才能は、今、この瞬間には必要とされないのだ。

それよりも・・・ワタルの柔和さであった。そして彼の人としての度量の広さを主張する瞬間でもあった。

穏やかで物静かという印象を与える。

細身の眼鏡をかけており、いつも穏やかに微笑んでいるし、淡々としていることが多かった。短い髪や豪奢であることを主張しない清潔感のある服装や物腰は、この周囲の年輩者から絶大な人気を勝ち得る容姿として重宝した。

しかしその内なる想いの烈しさと熱さに触れた者は・・・本当はそうではない面も持ち合わせている事を思い知ることになるのだ。

。

・・・間もなく夕暮れを終えて、空は黒紫に塗り変わる時間を迎えようとしていた。

ゆっくりと・・・空が薄くなっていき、そして次に濃く変化する。

その合間に時間の経過を刻んでいくように、煙火が大きな音を立てて上っては煙を空に燦らせていく。

花火という催し物がある日の空は、独特の景色に見える。

ワタルは目を細めた。

今、彼が眺めているのは空の変わりゆく色ではない。傍らの花火であった。

■FireWorks 02

大きな華の散った柄の浴衣を着ているマリナ・イケダを見て、彼は綻んだ。

とても良く似合っていると思ったからだ。

普段の彼女は快活な性格を表すかのように、軽装であることが多かった。

それは彼女が絵付け教室の講師という職から来る必要条件なのかもしれない。もしくは・・・堅苦しい上下関係のある社会の中にあまり身を置かない生活の現れなのかも知れない。けれども、彼女は必要であればその時々々に要するものを準備する能力は失われていなかった。

でも。

今日はそれを十分条件としていなかった。

「・・・やっぱり、不相応ではないですか？」

心許なさそうな口調で彼を見上げたマリナ・イケダの言葉にワタルは微笑む。

彼女の口からそんな言葉が漏れるということは相当に恐縮しているということだった。単純に喜ぶほどには・・・彼女は短絡的ではなかったようだ。

それは承知している。本当は酷く繊細で人の心の中に頓着なく入り込むようで自分の心は閉ざしたままの人に彼は優しい視線しか与えない。

確かに、彼女の身につけているそれは高級と言うには高価すぎる品である。

しかし何と比べて不相応なのだろうか。とても良く似合っていると言うのに。

見る者が見れば、彼女の言うとおりの不相応な品だ。

手織の布と帯、小物に至るまで華美ではないが丹念に工夫された斬新でかつ奥ゆかしい柄と色が混じり合っている。彼の好きな柄のひとつであった。額は関係がない。眠らせておくには惜しい品であったから、彼女に声をかけて・・・それを理由にしてマリナ・イケダを連れ出した。

浴衣を着せたかったのか、彼女を連れ出したかったのか、どちらが最初の理由なのだろう。それすらどうでも良くなるほど・・・

彼女は魅惑的に映る。

マリナは美について、誰から学んだわけでもないのだろうが独特の感覚があり、これについてワタルの兄である赴留は大変に高い評価を持っている。・・・彼の後継者にしたいと思うくらいに彼女の識別能力は優れたものが備わっていると思った。

それは、若いころにたくさんの美に触れているからこそ養われた感覚であり、誰も金品では買うことの出来ない生来の資質というものかと相まって想像される特殊な能力であった。

だからこそ、これらの品が、気まぐれに彼が用意するようなものではないことを彼女はワタルから告げられなくても、直感で・・・知っているのだ。

「着ている本人がそう思ってしまえば・・・浴衣が泣いてしまうよ」

「ああ・・・」

彼女が申し訳なさそうに恐縮して、首を窄めたので、ワタルは可笑しくなって声を漏らして笑った。彼がそういう風に声を出して笑うのは滅多にないことだったので、マリナは嬉しくなって一緒になって微笑んだ。

「それでは、この幸運を感謝して。・・・今日は花火を堪能することにします」

「そうしてくれるとありがたいね」

■FireWorks 03

彼は眼鏡を軽く持ち上げた。

周囲はこの時期のこの時間帯では考えられないほど多くの人で混雑していた。

・・・彼らが居るのは、打ち上げ場所の正面に位置し、少し上に顔を傾ければその全景が贅沢に鑑賞できる静かな空気の漂う場所

であった。人混みが小さく見える場所に居る。日除け風よけに配慮された全面ガラス張りのビルの屋上だった。ごく限られた者しか行くつくことが出来ない最上階で、普段は誰もやって来ない。今は・・・バルコニーと言うには広すぎる空中庭園にふたりは居た。そのほか数人が居たが最初に軽く会釈するだけで各々が自由に、設置された観覧席に座る。これも予め割り当てられて用意された場所であった。花火には喧騒がつきまとうが、それらは遠い音でしかなかった。安全と静寂と全景を同時に兼ね備えた場所というものが存在することすら、マリナ・イケダは知らなかったようだ。こういう鑑賞方法も、彼女は知らなかったと言う。特等席というものは、花火の打ち上げ場所の近くで鑑賞するものであり、そしてそういった場所にも馴染みがないと彼女は言っていた。だから連れて来ようと思ったのだが。「この都内で、これほどの場所があるなんて」「そうだね」

彼女はまた微笑んだ。先ほどから溜息ばかりついているマリナ・イケダの横顔をそっと見る。彼女が心置きなくこの時間を楽しめるようになるには、あと少し時間がかかるのかもしれない。間もなく開催される催しへの空気の昂ぶりは、会場からはるか上空のこの場所からでも十分に伝わっている。下を見れば、人が小さく蠢いている様を観ることが出来た。この催しものために用意した色鮮やかな衣に身を包んで、人々は集うのだ。不思議な光景だった。これほどの人が一体どこから寄ってくるのだろうか。次第が進むにつれて彼女の杞憂は薄れていくのだろうと予想していた。

ワタル・イワツキは、これまでプライベートで彼女を連れ出すことはなかった。彼は雇用主で、彼女は非常勤の被雇用者であり・・・それ以上の関係ではなかったからだ。この関係は長い間続いているし、それは良好であった。

公私混同はしないという言葉には、完璧という言葉は存在しない。私情を交えずに客観的に仕事をするのが難しいからこそ、このような言葉があり、人々は戒めとして使い回すのだと理解していた。だから、彼の兄が彼女のことを妹のように遇していることには何も言わなかった。男所帯であるから、彼女のような存在は兄にとっては必要であったのかもしれない。それだけではない目的も、彼の中にはあるようだけれども。
■FireWorks 04

後ろで軽く束ねた髪には、赤い髪飾りがついていた。茶色の髪に良く似合う。今日の着付けは、彼の経営する画廊で働く女性が着付けてくれた。彼女に合う履物や小物を揃えたのもその人物である。いずれも若々しいマリナによく似合っていた。その着物を見た時・・・彼女は表情を柔らかくした。マリナ・イケダに着せたいと言ったら、綺麗な微笑みを浮かべて、軽く頷いた。その品がどういったものなのか、彼女は何も言わないのに承知していたのだ。

そして作業を始める。画廊の閉店時間を早める。誰の目にも触れない死角に、滅多に使わない商談用の簾でできた衝立に更に布を巻いて着付けするための空間をこしらえる。呼び出したマリナ・イケダが、閉店時間でもないのに照明が落とされているにも関わらず施錠されていない画廊の中に怪訝な顔をして入ってくるなり、彼女はマリナをそこに押し込めてしまった。その間、男性は外に出ていると言われて彼は近くにある、廃校となってしまった小学校の跡地でひとり考え事をしていたが、西日が強く照り返してきたので画廊に戻った時にはすべてが完了していた。杜宇子が何をどう言い含めたのかわからなかったが、何も聞かされていなかったマリナ・イケダは浴衣に身を包み、少し紅潮した顔で「よろしく御願います」とだけ言った。「くびれがない方が浴衣は似合うのよね」彼女は辛辣にそう言うのと笑顔でふたりを送り出した。鮮やかな花火の散る見事な柄が目に入った。踵の少しある履き慣れない者でも不便のないように創られた下駄鼻緒の柄も鮮やかな赤だった。やはり彼女には和装が似合うと思った。

道中、慣れない足取りで歩く彼女にワタルは歩調を合わせながら説明をした。どうしても同伴者を連れて行かねばならない席があり、誰かに頼むには時間がないこと、それからその浴衣を着てくれることが条件であったことなどの理由を連ねたが、彼女はただ黙ってひとつひとつの説明に頷くだけだった。

「この浴衣・・・お母さまの形見なのだと伺いましたが」
彼女はひととおりの説明を終えたワタルを見上げるとそう言った。「着道楽な人でね。・・・そういったものは着ないと傷んでしまうし、適当に分配することもできなくて。・・・ウチは女性がないので、母はそれらを息子達の恋人に分ける日が来るのが楽しみだと言って、だいが若い頃のものも大事に保管していたみたいで・・・」
彼はそう言って言葉を句切った。
■FireWorks 05

母の着物からは樟脳の香りがした。昔はよく和装していたが、最期までの数年は、それらにほとんど袖を通すこともなくなった。若い人の好む柄だよと弟が苦笑いしていたが、それでも彼女は「着ないと傷む」と繰り返して言った。その言葉を・・・今、自分は家族ではないマリナ・イケダに伝えようとしていた。しかし、今はその独特の芳香が昇華して消失していた。今日のこの日のことを切り出せなくて、ワタルがしばらく和筆筒から出したきりにしてあったからだ。・・・母の香りが飛んでしまったことに気がついた時にはもう遅かった。父は今でも母の着物に触れることが出来ない。きっと・・・わかっていただろう。そうしてしまえば、香りが抜けて・・・彼女の居ない家の移り香だけしか残らないことに。忘れてくれないのに、ひとつずつ消えて行く思い出に耐えられないのに受け入れざるを得ないやせなさを持つのは・・・誰もが同じであった。母の香りや思い出が消えていくようだった。本当は今日のこの日に必要でなかった条件だ。ただ、父の代わりとして・・・まだ年若いワタルが、その場所でひとり佇む姿を見せることは出来なかった。父はこのあたりを取り仕切っている大規模な占有者だった。人柄は温厚であったが、それでも大規模な会社を営んでいる以上は穏やかな庭で微笑むだけでは居られないこともある。それを厭ってワタルは彼の業務を継承しないことに決めていたのだが。その父を支え続けた母はもう居ない。毎年、打ち上げ花火を鑑賞するのが恒例であった彼女の行事はもう、更新されることはない。

多忙な父はこの時だけは時間を捻出して、母のためにここに訪れてささやかな時間を共有することになっていた。

だから母が居ない今は父はここに訪れることはしない。

それでも付き合いがあり、主催に名を連ねている以上は参加しなければならない。

「・・・しなければならぬ」という枷は、どうしても解消することができない。それは自分で定めてしまっているからだ。

好きなものを好きな時に愛でるという行為だけを選ぶ時代は過ぎてしまっていた。

だから、マリナ・イケダを誘うのは躊躇われた。雇用主から誘われれば、ノーとは言えないからだ。命令に近い形で彼女の私的な時間を奪うのは本意ではない。そういう出会いでなければ知りあえなかったが、だからこそ・・・それ以上は求めることはない。しかし、彼女以外には考えられなかった。この会合には自分の配偶者でなければ参加してはいけないと言われたからだ。そのうち彼女は気がつくだろう。周囲の者たちが自分たちよりずっと年嵩であることに。そして恋に戯れる気配を持たない・・・静かに人生を同伴している者だけが持つ独特の空気に。

■FireWorks 06

「つまらないことを御願ひしてしまいました」

ワタルがそう言うと、マリナは不思議そうに首を傾げた。

なぜ彼がそう言うのか理解できないといった風であったが、本当はきちんと理解していたはずである。

彼女は、好奇心に溢れた眼差しをワタルに向けて、鉛達に言った。

「こういう鑑賞は初めてで・・・今日は浴衣を着た人達が多いなという程度にしか気がついていませんでした。

花火大会があることすら知らなかったから。

思いもかけない贈り物もらった気分ですよ」

大人のような発言だった。しかし彼女は大人の女性だった。

ひどく小柄で、若く見えるのではなく、幼く見える容姿をしていたが、それでも彼女はこうして断れない案件に従う度量の広さを持っていた。

ワタルが恐縮しきりであることを察して彼女は朗らかに笑う。

若い頃の彼女を知らない。

けれども容易に想像がついた。

彼女は大人になって・・・彼女の身に咲く火の華のように鮮やかに煌めいた日々を過ごしている。

彼は薄い水色の空を見上げた。反対側の空は茜色で、今日の晴天は夜まで続くということを広く知らしめていた。

「母が毎年・・・花火を見るのを楽しみのひとつにしていました」

彼はぼつりとそう言った。そう言わなくても良かったのに、彼は自分のことを話さないのに、語り出した。

「息子達は各々に出歩いてばかりで、つまらないとよくこぼしていました。いつか浴衣の柄を一緒に考えることが出来る家族が増えることを楽しみにして・・・それを実現させてやるのができないままになったことだけが、唯一の心残りです。ああ、母の心残りはたくさんありすぎるでしょうから・・・」

「素敵な方ですね」

マリナは微笑んだ。世辞は好まない気質の彼女であったが、共感できる事に対しては、大変に短いけれども彼女は感想を漏らす。彼は豪華なりクライニングシートに浅く腰をかけて、テーブルの上に乗せられた飲み物をマリナに勧める。細かい水滴がついた発砲タイプの軽いアルコールであったが、彼女はそれに手を伸ばさなかった。これを仕事だと思っているからだろうとワタルは胸が痛んだ。

連れてくるべきではなかった。杜宇子に声をかければ良かった。

しかし、こういう場所に伴う相手を適当に選ぶことが出来ないワタルには彼女しか考えられなかったのだ。

マリナはそこに座らずに、ぼんやりと花火の打ち上げ予定の方角を見つめていた。内輪を片手に持ち、小さな貝をあしらった巾着を提げた彼女にその柄は本当によく似合っていた。

「オーナーが・・・ワタルさんがどんな風に普段を過ごしているのか、少しも知らなかった」

彼女はそう言って気恥ずかしそうに笑った。仕事で話をする時以外は役職名で名前を呼ばないようにと徹底していたが、彼女は今、どちらの名称で彼を呼べば良いのか、まだ悩んでいるようであった。

「ワタルで結構ですよ」

「それなら私もイケダさんではない呼び方が良いな」

彼女はくすりと声を漏らして笑った。自分のことに対しては厳しいのに、マリナ・イケダに関してはそれ以上に距離を保つことを厳しく自分に課しているワタルのことを笑ったのだ。もっと自由で良いのに。そう言われているような気がした。

■FireWorks 07

「それならマリナさん」

「さん、はいらない」

彼女は手を振る。しゃらん、と巾着の留め具が鳴った。白蝶貝で出来た留め具で、これも彼女の茶色の瞳と髪に良く映えた。象牙色の肌は白くて肌理が細かく、彼女が焼けに配慮しなくてよい職業であることを示していた。

こうして空の下で彼女を連れて歩くとは思っていなかったから。ワタルはまた、申し訳ない気持ちになってしまう。

「僕は貴女をマリナと呼ぶ資格はないですから」

それだけ言うのがやっとだった。彼女をマリナ、と呼ぶ人間は大勢居る。

けれども、彼女をイケダさんと言う人間は少ない。

自分はどちらになりたいのだろう。

慕わしく彼女をマリナと呼ぶ側に居たいのか、それとも彼女の呼称にこだわる数少ない側に居たいのか。

「ワタルさんは・・・」

マリナが少し顔を曇らせた。彼女にそういった表情は似合わない。

どんなに不快なことがあってもすぐに潔くそれを肯定する彼女は誰からも愛された。絵付け教室は盛況だ。傾きかけていたあの場所を建て直したのはワタルであったが、それに尽力したのは彼だけではない。

すでに彼女はあの画廊においてはなくてはならない存在であり、まだまだ成長の余地のある優れた素養のある人物であると考えていた。

「私は拘りません。・・・どんな風に呼んでいただいても構わない」

ワタルは軽く溜息をついた。

彼女に気を使わせるくらいであるならばこれは仕事だと言って遣った方が良さそうだと判断した。

このままでは・・・彼は踏み越えてしまいそうになるから。

相手には恋人が居る。

そして、ワタルの手に届かないような世界の住人が彼女の恋人だった。

「・・・時間外の超勤手当はつけておきますから」

「いらない」

彼女は素っ気なくそう言ったので、ワタルは彼女の顔を見た。

柄に視線を遣り・・・彼女の表情を見ないようにしていた彼はそこでマリナ・イケダが少し哀しそうにしていることに気がついた。

「今はプライベートです。画廊だって閉店していた。・・・私は仕事でここに居るのではない。それなら、ここに来ない」

彼は呻いた。彼女に何て言えば良いのか困惑した。

・・・貴女を独り占めしたくて、貴女を特別にしたくてこんなことのような我が侷を言う自分を赦してくれるのだろうか。

そんな情けない感情が湧き起っては、それはあり得ないと打ち消されていく。

「すまない」

ワタルはそれだけ言った。

「貴女を困らせるつもりはないのです。・・・ただ、花火と一緒に見られたら・・・貴女はその浴衣にどんな感想を持つのかな、と・・・」
そこまで言って彼は苦笑した。理由をいくつも創ってみても、結局のところは彼の願いはただひとつだけなのだ。ワタルは短髪に手をやり、少し頭を掻きながら気恥ずかしそうに、けれども正直に内情を吐露した。
「なんてことは無い。貴女と出かけたかったのです。薄暗い画廊の中でいつも可哀想だと思っていましたので・・・」
「仕事ですから」
彼女は微笑んだ。
「だからワタルさんがこういう風に自分のことを話してくれることに、正直驚いている」
彼より年下の女性はそう言って彼に綻びを見せる。

■FireWorks 08

「僕はいつもどおりなのだけれども」
彼が苦笑してそう言う。
彼がいつになく動揺している姿をみて、今度はマリナが狼狽えた。
「ワタルさんが困っている」
彼女は首を傾げた。そして少し斜め上を向いて、思索している。
「今日誘ったのは・・・いつもモデルを無償で引き受けてくれている御礼」
ワタルはそう言ってその場を取りなすことにした。
「だから、今日は無礼講。それから、その浴衣の感想を聞かせてくれると、なお嬉しいな」
彼は静かにそう言った。
・・・僅かではあるが外気が入り込んできて、彼女の髪を揺らしていた。
ここはビル風が強いので、バルコニーに出るのは勧められないが、それでも夏の空気を味わうという贅をさり気なく取り入れてあった。
暑くもなく寒くもない空調であったが、時折入れられる夏の空気に乗って、囂しい歓声が聞こえてきた。
間もなく・・・この近辺は申し送りによって照明が落とされる。
程なくして、都内の闇空に華が浮かぶ予定であった。
空に近いので、中継のヘリの音が間遠に聞こえる。
目に見えないざわめきが彼女をますます・・・魅力的に見せる。
「この柄、素晴らしいですね。・・・こうして夕闇に映えるように計算されているのにとっても優しい風合いで・・・配置も良い」
。本当の花火はこんな風にくつも消えては重なり、そして消えていくから」
彼女はそう言って気がついた箇所から次から次へと感想を漏らしていく。
確かにこの品が素晴らしいのはその点にあった。見た儘の花火の散る瞬間を描いたもので、母の気に入りの品であった。
花火が重なる色の配り方が見事で計算されており、鮮やかであるのに色は優しい。
帯も良かった。
大きな柄の浴衣地を損なわせないように少し渋めの染色で近くに見ると細かい朱珍が織りに混じり、何とも言えない風合いを醸し出していた。
それらを的確に表現していく彼女に、満足そうに目を細めて聞き漏らさないように耳を傾ける。

しかしそこまで言って、マリナはふと、口を噤んだ。
「どうしたの？」彼が彼女の様子に腰を浮かせた。朗らかに陽気に喋っていたのに、突然話すのをやめてしまったので、ワタルは怪訝な顔をした。
浴衣の帯がきつかったのだろうか。それとも慣れない着付けで彼女の体調が悪くなってしまったのだろうか。
自分がこれほど・・・動揺しているのはなぜなのだろうか。
ワタルは立ち上がって、彼女に近付いた。
下を向いて、マリナはじっと・・・浴衣の柄に目を見張っていた。
「これ・・・テーマは花火ではないのね」
「よくわかったね」
彼は表情を緩めた。硬い表情をしていたマリナであったが、それは何かに不快であるからではなく・・・彼女の審美眼が何かを訴えていたからだった。
ワタルは一種感激に近い電流が背中に流れるような気がした。
神託を受ける巫女を目の当たりにしたような・・・そんな厳粛な気持ちになる。
夜の空に輝く火の華に心を躍らせることもなく、この瞬間だけは彼だけの・・・目の前の彼だけの火の華に微笑んだ。
「その品には名前がつけられていてね。・・・『弄火』という名前だ」
「『弄火』・・・」
彼女が復唱した。
「火を弄ぶ、と書いて『弄火』と言う」
物騒な名前だよ、と言ってワタルは笑った。
■FireWorks 09

黙ったままのマリナに、ワタルは言った。
彼が立ち上がると、非常に小柄なマリナとの身長差が目立つ。
けれども、まったく関係なかった。彼女の表情は見えなかったが、同じ視線に・・・彼女が眺めているように、彼女に散る花火を見下ろす。

「火は、胸中に燃えさかる激しい感情のたとえにも使う。
そして弄ぶとは自由自在に扱うこと。
その他にも自分の心を慰めるために・・・激しく愛することという意味がある」
彼の解釈をじっと聞いていたマリナは、俯いて柄を見続けた。マリナの視線からでは、こちらから見える柄と逆転しているはずであった。
上から見下ろすその大輪の華たちの燦めきについて、マリナはやはり何かを感じたらしい。
「・・・そんな風に激しい名前を持つ品を母が用意していたことにも驚いたけれども・・・母は、自分の息子達に各々、女物の浴衣を用意した。
こういう風に名前とテーマの込められた品ばかりを。
きっと、こんな相手を息子は選ぶのかも知れない、と・・・予言めいたもので空想していたのだろうね。今となってはわからない」
だからこそ、マリナに袖を通して欲しかったのだが。
彼はそこで捕捉することを忘れていなかった。彼女に今のままの言葉を伝えるつもりはなかった。マリナ・イケダはフランスの華の恋人だ。
人ではないと思えるほど美しく高い知性を持ち、彼女を極限まで愛している彼の恋人なのだ。
「このテーマは『命』ということ？」
「それから『祈り』」

彼はそつと言った。彼女で良かったと思った。
「この花火のように、幾つにも重なって、それらはひとつひとつが各々に消えるけれども、その一瞬の美しさはどんなものにも代えがたい煌めきがあって・・・皆がそれに目を留める。けれども、ひとつだけ打ち上がるのではなく、互いを引き立てていく。そして次に繋がり、人々は一瞬の儚さに息を止めるのではなく、眺と音と・・・また次も打ち上がるかもしれないという祈りにも似た希望を持って花火を見上げる。・・・そんな意味が込められている」
それからそこまで言うてから彼は寂しそうに笑った。腕を組んで、遠くを見た。
・・・空はもうすっかり暗くなってしまつて、夕焼けの眺が僅かにビルの向こう側にちらりと色味を残しているだけであつた。

「貴女は袖を通してはいるからわかるかもしれないけれども・・・それはほとんど、母は着ていない。でも大事に保管していた。だからね。僕は自由に職を決めて家を出てしまつたし・・・あまり親孝行であつたとは思えないのだけれども。そこに込められた母の願いをどうしても叶えてやりたかつた」
いつになく言葉多く彼は語つた。
こうして彼女と・・・美の解釈について語りあい、母のことを思い出し、そして願いをかける自分の傲慢さを知つていながら・・・喜んで自分の自身に嫌悪しながらそれでもそれを受け入れているワタルの胸中は複雑であつた。
でもそれを彼女に悟られないようにするだけの分別と理性は持ち合わせていた。

夏色の風が吹く。
彼女の髪が揺れて、いつもと違う表情を見せる彼女が居る。
そして彼の名前を呼ぶ。
これがどれほど・・・どれほど幸福なことなのか、彼は知っている。

「貴女にぴつたりで、僕の今度の作品のテーマにも相応しい」
彼は呟いた。彼女は誰にも心の内をさらけ出さない。明朗であるかのようなのだが決して自分の範囲に人を入れることはしない。あのフランスの華に対してでさえもそうなのだろう。
けれども・・・そこに踏み込むのではなく。
そこに、弄火のような・・・激しいけれども永遠に燃えさかる・・・染み入るような深く静かな華の眺を届けることはできないのだろうか。
彼は唇を横に引いた。ぎゅっと・・・拳を握る。
マリナに触れることはできない。
彼女は、彼の恋人だ。
彼女の恋人は、フランスの華と呼ばれる、彼女の弄火だ。
激しい感情を秘めながら、彼女を求めて燃やし尽くしてしまひそうになりながらそれを御して彼女を日本に戻す。彼女に笑つて欲しいから。彼女を愛しているから。
並大抵の度量ではできないことだつた。

ワタルは横を向いて・・・視線を逸らせた。
そして、彼女に空いた席に座るように促した。
「もうすぐ始まる。座つたままでも十分よく見えるよ」
彼はそう言つてマリナに着座を指示する。慣れない浴衣で彼女は窮屈な思いをしているはずなのに、それでも黙つて彼の母の遺品を身につける。
・・・彼の母親を思い出し、彼が誰にも見せなかつた母への思慕を聞いたマリナは、彼女にしかできない方法で、彼を癒すのだ。
彼は微笑んで、マリナに言う。彼女が少しでも心軽くなるように。
「ね、だからこれは僕にとって都合の良い行事であるので、貴女がそれほど恐縮することはないのだから」

■FireWorks 10

マリナがそのまま黙つて立ち尽くしていると、ワタルは短い髪に自らの指を沈めて反対側の指先で眼鏡を持ち上げた。男性であるのに極めて繊細な指先だつた。整つた爪は、作品やキーボードとの摩擦を厭うから。
「貴女を困らせたいと思つているわけではないから・・・こういう話はするべきではなかつた」
空は静かに・・・薄い色から深い色合いに変化していきつていく。
地上では間もなく開始されるその瞬間を待ち侘びている者達の落ち着いた声か幾つも重なつて響き、そして空に昇つていく。
その空の下で・・・ワタルは少し哀しそうに、眉を顰めて目を伏せた。
「僕は僕の都合で貴女を振り回してばかりいて・・・公私を分けるというのは兄ぐらいにならないとできない芸当だね」
彼は自嘲的にそう言つた。
あまりそう言つた否定的な言葉を使つたり自らを貶めたりするような言葉は使わないようにしているワタルがこの時ばかりは少し様子が違つていた。
マリナ・イケダは、彼のそんな様子をじつと見つめていたが、やがて笑つた。
「私も私の都合で来たから。・・・こんなに素晴らしい品を見せてもらったし、ワタルさんのことを少し知つた。それに、花火も見られる。こんな良い景色で観ることが出来るのに、それを不満だと感じたりする必要があるのかしら」
「そうかな」彼はそう言つて薄い笑いを浮かべる。彼女は嘘や虚飾を好まない。だから本心でそう言つているのだろうが、彼が問題にしているのはその過程である。
彼女が思うようになった過程。ワタルに着いてきて良かった理由。
・・・杜宇子に言い含められたのだろうか。
マリナが突然の申し出に快諾するなどとは、あり得なかつた。
彼女はいつも・・・彼女の恋人のことを考へているのだから。
「振り回すというのは、振り回されている側の人間が言うことで、少なくとも、この場には居ないわね」
彼女はそう言つた。つまり、自分は決してワタルの言動に左右されているわけではないと伝えていた。
ワタルは嗤つた。
それから・・・ふと、思いついたように軽く言つた。囁きに近い声で。

「僕はね、貴女の正面にいたい」
彼はそう言つた。静かに・・・けれどもはっきりと。
その瞬間だけ、彼はいつも絶やさなかつたほほえみを消して、マリナに真摯な表情で彼の胸の内を告げた。彼は何かをしたいと余り主張しない。それなのに。今日に限っては・・・彼はいつもと少し違つて、自分の望みを口の上らせていた。なぜなのだろう。今日という日が特別であるということでもないのに。いや、特別だろう。彼女と一緒にいるのだから。だからこそ、言つてはいけないものが存在するのだとわかりきつていふのに。

彼の短い髪の下から、理知的な視線があつて、マリナを正面から見据えていた。
何かを失つて何かを得た人物特有の瞳だつた。マリナはそれを知つていふ。
傍らでもなく・・・同じ方向を見るでもなく・・・彼女の正面に居たい。

横顔でもなく後ろ姿でもなく・・・彼女の目が何かを絶やさずに見ている様を見ていたい。
その言葉と、始まりの最初の花火が空に散ったのは同時であった。
大きな音が鳴り響き、自分たちの足元さえ揺らいでしまいそうなほどの轟音と目を瞬かせてしまうほどの閃光が空から降ってくる。

しかしその言葉は彼女に届かなかった。

「え？」
マリナが尋ねる。
彼の声は花火の音にかき消されてしまったからだ。

「貴女をずっと見ていたい」
ワタルはまたそっと言ったが、それもまた人々の声と遠音に消されていく。
彼女がもう一度言って欲しいと促すが、彼はそれには応えなかった。
「・・・ごめんなさい、聞こえなかった」
マリナの声は聞こえるのに。彼の声は聞こえない。それがもどかしくて、とうとう、マリナが彼に一步寄った。
前後して、周囲の照明が落とされた。
ふっと予告もなく周囲が暗くなり、目の悪いマリナは一步踏みだしたその次を止める。
始まる前に消せば良いのにという声が聞こえてきたが、彼はそういった声に賛同しなかった。
・・・もしこの照明が消えてしまったら彼女の姿が見えなくなってしまうから。
光を背にして、マリナ・イケダの上に散る花火の柄が消えてしまうから。

そして今、その時はやって来た。周囲は暗くなり、空に輝く煙火を皆が見上げる。でもワタルはそれではなく、彼女を見つめていたかった。
彼には眩しすぎる太陽のような光がそこにあった。

・・・まさしく、その衣は弄火だと思った。

彼の言葉を消し、彼の思いを自由に操る。そしてその衣を着て彼に微笑むマリナは彼のものにはならない。
もどかさも切なさもすべて・・・すべてを鮮やかに照らし出す彼女の弄火が、彼の言葉を消すのであればそれもそれで良いと思った。
音にならなくても光が残る。残像しか残らなくても。
それを彼が形に・・・絵にし続けていることについてマリナが駄目だと言わない限り、続けていこうと思っていた。いつか、それを描けなくなるときまで。・・・描かなくても良いと思う時が来るまで。
「二度言う必要の無い話だよ」
ワタルはそれだけ言うと、いつもの穏やかな表情に戻っていた。

■FireWorks11

・・・緻密に計算された順序で、次から次へと空に華が咲き始めた。
息つく間もなく、それらは乱れ咲くように空に浮かんで消え、音と僅かな煙を残し輪郭を淡くしていく。その度に、地上からは遠く歓声が聞こえて・・・そしてその声や温度さえ吸って様々な色に輝く華がまた開いては散って行く。
「・・・疲れる姿勢で見続けるのは、良くない」
彼がそう言って、立ち尽くしているマリナに声をかけた。
彼女の注意の対象は、すでにワタルの言葉ではなく、空に浮かぶ弄火のような花々の紋様に移ってしまっていた。大きな彼女の瞳の中に、花火が光ってちかりちかりと閃光を反射する。
それが分かるくらいに近くに居るのに・・・彼女の心はここにはない。
ワタルはマリナ・イケダに着座を促したのに、彼女は従わなかった。それは空の模様を奪われているからではなく・・・困ったなと言って、彼女は頭に手を遣った。慣れない結い上げで頭痛がするのだろうか。
「だいじょうぶ？」
彼がそう言って、彼女の傍に立つ。その仕種ひとつとっても・・・もう、いつものワタルであった。
決して過敏な反応もしないし、距離を開きすぎたりしない。
細心の注意を払って・・・彼女に何も疑問を感じさせないように振る舞う。
マリナ・イケダはワタルの言葉が近くにやって来たので、少しはっとしたように顔を上げた。
・・・やはり、つまらなかつたのだろうか。無理して・・・彼と一緒に居ると彼女が感じるくらいなら、もう二度と彼女に自分の内をさらけ出すような真似はしないようにしようとしていた。
「・・・とあって」
彼女がふいと何かを言いながら彼を見たので、その無防備さに彼は口を横に引いた。危うさが垣間見えるのは、彼女が若く見えるのではなく幼く見えるから故なのだろうか。この視線が、あのフランスの華を夢中にさせているのだろうと思った。
目が弱いせいもあるのだろうか。彼女の瞳はゆっくりと瞬く。齡達で磊落な彼女はそれでも時折、目の前でびしゃりと扉を開けてしまうような時がある。本人は意識していないのだろうけれども、・・・少なくとも、ワタルにはそれがなぜなのか、理解できるような気がしていた。
彼女は人が好きであるが、同時に人が怖いとも思っているようだった。
詳しくは聞いたことがなかった。
だからだろう。
彼女が、本業とは違う副収入について、あまり否定的でないのは、ワタルも同じだからだ。それだけに集中していたいこともあるが、それだけを選ぶことが出来なかった。
・・・また花火がひとつ、打ち上がった。
ワタルの声と同じ様に、マリナの声も聞こえない。ここは静かな空間を確保されているはずなのに。彼女の周りだけはまるで・・・たくさんの人が集う地表のようだった。見事な柄の浴衣に、同じフロアに居る者達は目を留めて、似合うわねと言って彼女を誉めそやした。その度に、嬉しそうに微笑む彼女を見て、ワタルがさらに微笑む。
彼女が自分の傍らに引き寄せたいとまったく思わないと言ったら嘘になる。
けれども、そうすることによって彼女の哀しむ顔を見るのであれば、それはいらぬ。
だからせめて、彼の描く作品の中で微笑む彼女だけが、ワタルを見つめるだけで良いとさえ思う。
彼がマリナの傍に寄って、この時だけ・・・彼女の肩を軽く押した。繊細な芸術家の指先だった。
しかし骨張っており、マリナのそれとはまったく違う質感を持った指先が・・・彼女の肩に触れて、その時に茶色の髪に僅かに触

れた。
ワタルの掌が持ち上がる。マリナを着座させるという目的を忘れたかのように。そして・・・彼のその僅かな動きに彼女は気がつかない。
「もう帰った方が良い？」
そっと声をかける。彼は決してそうは思っていないのに。しかし、あと数十分以上もマリナをこのまま立たせておくことは出来ない。
なぜ彼女は座って彼の隣で美観を享受することを拒むのだろうか。

マリナは首を横に振った。ワタルが表情を曇らせたので、何かを察知したらしい。まったく・・・人の心の機微に無頓着なのか鋭敏なのか、よくわかならい。それが彼女であるのだけれども。
マリナはワタルの誘導に諦めたように、用意された椅子に浅く座った。
姿勢が良かった。
しかしそれには理由があった。
彼女が非常に小柄な人物で、その椅子に深く座ると、こどもが腰掛けているように足の甲が浮き、踵を少し上げてある沓を履いているにも関わらず見目の良くない格好になるからであった。

「この柄を少しでも多くの人に見て欲しいと思って」
彼女が座った後、そう言ったので、ワタルはぐっと言葉を呑み込んだ。
マリナの座って居る脇に置かれている飲み物は、すでに大きな水玉を零しながら、コースターを濡らしていた。からん、と氷が溶けてグラスの中で蠢く音がしたが、それも花火の光を反射していて・・・彼の中で思い描いている世界そのままに、彼女がそこに座っていることについても、感慨深く何も感想を漏らそうとしなかった。

彼女が座ると、柄が見えなくなる。
マリナには美への感覚が常人のそれとは少し違うと常々感じていた。
しかし、それに加えて彼女はその他にも・・・もうひとつ、強い信念があるように思っていたが、それは気のせいではなかった。
ひとりでも多くの者に見て欲しいと思うのは、作者の性だ。
素晴らしい作品に触れたのなら、それを世に広く知らしめたいと思う。それは誰しも一度は感じることだ。
「僕は浴衣を誰かに見せたいと思うのではなくて・・・貴方が来たら似合うだろうなという好奇心だけだよ」
彼はそれだけ言うのがやっとだった。
どうして、彼女がその品にまつわる話を聞く前から・・・階上の観覧を気にしたり、着座を遠慮したりするのか、理由をいくつか考えていた。

ワタルと一緒にいたくなかったから。
慣れない浴衣を半強制的に着せられたから。
・・・この景色を、ワタルではなく、彼女の恋人と一緒に眺めたいと思いを馳せているから。

でも、そうではなかった。

彼は小さく唸った。そして喉元から込み上げてくるものを抑える。
・・・ワタルの傍らで微笑む人にいつか着せてあげたいと言った母の顔を思い出した。でも彼は彼女に正面に立ちたいと言い、決してワタルと並んで人生を歩むことはなさそうな人を好きになってしまった。
そしてその想いはまだ、伝えられていない。
独りよがりの愛に溺れきることが出来るのであれば、すぐさま、彼女に想いをぶつけただろう。でも、できない。それが・・・ワタル・イツキだからだ。
そしてそんな彼の本質を見抜いていたのは、母だけであった。
弄火のような人を好きになるだろう、と母はワタルに言ったのだ。
そして浴衣をひとそらい、残した。
泡沫の恋を楽しめない。
相手が他者の恋人であることを承知で好きになったのなら、尚更だ。
燃やし尽くすほど強い愛と生命の定義を己の中ではっきりと持ち合わせている人物を好きになり、それはまさしく「弄火」そのもので・・・そんな人を静かに、けれども途絶えることなく愛し続けるのがワタルであると伝えられた。
なぜ、この衣を母が遺したのか、今になって理由を知る。
そして。
その通りだったよ、と伝えることはもうできない。

「・・・そんな見事な品をずっと放置しておいて、情けない息子だな」
ワタルが掠れた声でそう言った。けれども、今度は彼女に届いていた。小さい声だったのに。掠れていたのに。彼女は、彼の声を聞いた。
彼は眼鏡を少し持ち上げて、目頭を擦った。心躍る催しのはずであるのに。
どうしてだろう。彼女と居ると、楽しいだけではない。苦しいのでもない。
ただ、無性に・・・懐かしくなる。

ああ、そうだ。
彼は思った。
本質を見極める能のある彼女は・・・ワタルの内面すら、見透かしてしまうのだ。だからだろうか。
あんな話をしてしまったり・・・こうして、僅かな些細なことで心が激しく揺さぶられるのは。

「あまり良いモデルではないですが・・・。身に余る光栄です。正直に、嬉しいとさえ思う。滅多に着られるものではないですし」
そしてマリナは隣に腰掛けているワタルに、目を遣った。ゆっくりと瞬きする。
「・・・とても好ましい品です。美しいというより、懐かしいと思うくらい。
ずっと残しておいて欲しいものは、継がれていくものだと思います」
彼女はそう言って笑った。
「だから今、貴方は大事な人の願いを成就させたのだから、少しも歎くことはない」彼女は力強くそう言ったので、ワタルはそうだね、と言った。それだけしか言えなかった。

「自分だけ愛でるのではなく、皆にも分け与えてやりたいと思う気持ちを持つ、そんな人に着て欲しいと思った母の願いは、今、成就された」

彼はそう言って、すっかり深紫に染まってしまった空を見る。
・・・花火がまた打ち上がって、それはひときわ大きなものであった。

命とは、願いとは。ひとそれぞれに違うものであるが、彼女は彼の言い出せなかった言葉を汲み取り、そして弄火が素晴らしいと評した。

この人を好きになって良かった、と心の底からそう思った。
■FireWorks12

それに、座った時の所作がわからないのです

彼女は密やかにそう告白したので、ワタルはくすりと声を出して微笑んだ。
本当に困った風であったので、彼が助け船を出す。
「浴衣にも作法がありますが、最近はそれほど煩くない。・・・回を重ねることで学ぶこともありますから」
「また、来年も着せてください」
彼女が未来を口にしたので、彼は苦笑いをした。
彼女にとっては気まぐれな一言かもしれないが、彼にとっては・・・それは重大な意味を持つものだから。
「僕は結構忘れないで憶えている方だから・・・来年も予定してしましますよ」
彼が柔らかにそう言うと、マリナは嬉しいと言った。
これほどの品を眠らせておくのは勿体無いと言った。
「頭でわかっていることと、学ぶことは別のことだから。知識を生かすのは実践でしかできないことだよ」
「確かにそう思います」マリナは笑った。
「いくら学んでも・・・その傍から知識が消えていってしまう」
「それはいつか突然、繋がっていくものだと思いますよ」
ワタルが気恥ずかしそうに言ったマリナに返答する。
「かくいう僕も・・・日々、毎日何かを得て何かを失う繰り返しの鈍感になっているなあと思う時があります」
「まさか」
彼女が驚いてワタルの顔を見たので、彼は可笑しくなってくすくす笑った。
「どうして？僕も人間だし・・・何ら変わりませんよ。貴女と同じです」
同じ、と言った時に胸がちくりと痛み、次に甘い痺れが広がった。
彼女と共通するものをワタルが持ち合わせていることを彼は認め、そして彼女に伝えたことに彼女は気がつかない。

そして彼女は首を振った。
「いいえ、やはり私は粗忽者なので・・・借りた着物を汚してしまいやしないかと気が気でないです。少しもそこから学べない」
「浴衣は着ないと傷む。でも、着ても傷む。だから有相を考えるのでしょうか」
そうなのですが、と彼女はワタルに気恥ずかしそうにまた少し唇を突き出して言った。
「以前にも、高価なドレスを汚してしまったことがあり、酷く怒られました。ものの価値を金額で判断することはできないのですが・・・」
「ほら、貴女は今、学んでいることを証明した」
ワタルが微笑む。目の端が少し細くなった。
「・・・貴女が。
落ちる水滴が気になって、飲み物に手を伸ばさないとしたら。
着座によって浴衣が汚れたり皺になると考えていたら。
・・・貴女は、学んでそれを実行しているのだから」
だから、少しも気にしないでくださいというワタルの申し出に、彼女は首を竦めて顔を顰めた。
「いやだ、その時のことを思い出してしまった」
「金額がすべてではないとわかっているのに？」
彼女は顔を顰めた。
その時の事が記憶に残っているままに、彼女の残像として彼女の中で再現されているようだった。
「・・・だって、その時の値段で・・・」
彼女は少し躊躇いながらその時の値段を口にした。
しかし、ワタルがそれを黙って聞いていたので、マリナが茶色の瞳を大きく見開き、唇を半開きにして驚愕の溜息を漏らした。
「さて、まさか、それ以上？」
「さて、どうなのかな」
彼は涼やかにそう言ってゆっくりと立ち上がった。催しはまだ始まったばかりであるのに、行こう、とマリナに言った。
「どこに？」
慌てて、彼女が立ち上がった。
ぱっと勢よく立ち上がったので、彼女の前に花火が打ち上がったかのように、鮮やかな柄が蘇った。
踵が鳴り、彼女は不安そうに彼に声をかける。
「・・・貴女を見せびらかしに。せつかく杜宇子が綺麗に着付けてくれたのだから、少しでも多くの人に見せたい。だから、下に降りよう」
「でも、ここに出席しないといけないからということだったのでは・・・」
彼はにこりと微笑んだ。
「もう出席した。最後まで居る義理はないよ」
普段の彼であるならば、絶対にしないことであった。
立ち上がり、この場の世話人らしき人物に声をかけると、彼は行こう、とマリナに言った。
「ワタルさん、そんなに高価なものなら、汚れるから人混みに入れない」
彼女がそう言うと、ワタルが眼鏡の奥で目を細めた。
「それでも構わないと持ち主が言っているのだから。・・・行こう。もっと、見晴らしの良い場所がある。昔、僕たち兄弟の遊び場だった場所だ。・・・そこには、きっと・・・兄も弟も来ているはずだよ」
彼女は喜びの声を上げた。
・・・大勢で空に輝く華火を見たいと思う彼女らしい反応だった。

「ワタルさんはお金持ちなの？」
彼女がちらりと彼を見上げたので、可笑しくなったワタルは首に手を遣って困ったなと言った。
「いいや、僕は単なるグラフィックを囓った、しがないデザイナーだよ。・・・次の作品を創ることに頭がいっぱいだから」
「でも」
「普通の家だよ。・・・僕も、僕の家族も。大金持ちで自由になるお金があるのなら、ヘリをチャーターしてこの景色を見下ろすとか、貴女のためだけに花火大会を開催するとかやってみせるよ」
彼女の恋人なら、やりかねない。けれども、それでは彼女は喜ばない。

マリナは口を噤んだ。
先ほど、ワタルが世話人と話をしていた言葉が漏れ聞こえてきたからだ。
「今般は共催のご快諾と企画立案と場所の提供協力、ありがとうございます」と。
確かに、そう言っていた。しかしどんな時でも彼はワタルであることに変わりがない。そう考え直すと、マリナは首を振って、彼の申し出を受け入れることにした。

マリナの困惑した顔を横にして、ワタルは今日、幾度目か数えることをやめてしまった微笑みを浮かべる。
永らく忘れていた・・・昂揚感を感じる。
しがらみの中で、静かに泳ぐ日々であったのに。
彼女がそれを変えてしまった。
こんな風にして、彼を変えていく。
彼に思い出させる。

階上から、階下へ。彼らは移動する。
「花火が終わらないうちに急ごう。・・・それほど遠くはない」
彼女がはい、と嬉しそうに返事をした。
こういう場所に飾っておくような人物ではないことは最初からわかっていたことなのに。
独り占めできないくらいだ。

ああ、この気持ちは・・・あのフランスの華になら理解できるのだろうか。

また空に大きな花火が打ち上がった。彼女の顔が輝いた。
彼が彼女を独り占めできるのは、これから別の目的地に到着するまでの僅かな時間だけだ。
・・・それでも構わなかった。
彼女が輝いているのは、ここではない違う場所であったとしても。

今日の日のことを彼女は恋人になんと報告するのだろう。
青灰色の瞳に陰を含ませて、少しばかり嫌な顔をするのだろうかと思うとおかしさが込み上げてくる。

彼の弄火は無邪気に笑った。
先ほどの緊張で言葉少ないマリナ・イケダはもうそこには居なかった。
ワタルのよく知っている綻びだった。
・・・彼がもっと知りたいと思う人の笑顔は、今、この瞬間だけは彼だけに向けられる。

またひとつ、空で弄火が散った。

(FIN)

マリナ・イケダは湿気で膨らんだ髪の毛を左の耳にかけながら、同じ側の肩にのせた大きな鞆を持ち直した。

そして視線を足元に移す。うっかりして足を踏み外しそうになったことが

目の前には階段があり、手摺りに手を掛ける。重い荷物を持っているし、何より彼女は非常に小柄でそのうえ、目が弱かったので、いつ足元の均衡を崩すかわからないからだ。

体力はあったし少々の怪我はいつものことであつたけれども、大切な画材道具を台無しにすることはできない。

先頃、注意力散漫だと常日頃彼女の恋人に注意されていたこともあり、彼女はまだ照明の灯されない階段の先にある半地下の画廊に向かうために片脚をあげてゆっくりと階段を下がろうとした。相手の言葉に従属するつもりはなかったし、相手もそれを承知で小言を向ける。でも、離れている間のことについて心配しているのだと理解していた。穏やかな恋ではないかもしれないが、穏やかな時間を切望する気持ちは同じなのだ、と思った。

ここ数日で東京は朝晩の冷え込みが顕著になった。

通る度に、画廊の前の道路に植わっている街路樹達が色を変えていることに気がつく。そしてマリナはとうとう、一枚上着を重ねることにした。通り過ぎる者達の流行や季節感を先取りした様子とはまったく違う自分の出で立ちに目線を感じる事があつたが彼女はそれらを受け流して歩みを進め、画廊に向かつてきた。

そして、世間は季節毎の行事を先取りするのに夢中で、そういった事情に疎いマリナは時々、一体今は一年のうちでどの季節に該当するのだろうかと困惑することさえあつたが、画廊に近づくにつれてそれらは気にならなくなる。

半地下に位置する画廊は、ひとたびそこに入れば遮音も遮光も完璧で、静かに流れる気にならない程度の音楽と完全に調整された湿度と室温の中で快適に過ごせる。とても、都心の雑居ビルの一画とは思えない。

・・・画廊でアルバイトをするようになって、どれくらい経過するのだろうか。

それほど長い年月でなかったもののここは彼女の生活の一部になっている。

少なくとも、日本にいる間は。そして彼女はこの年月を愛していた。置き去ることができない感情がここにある限り、彼女はここを離れることができないでいる。それを恋人であるフランスの華に指摘されたものだからむきになってしまっているとされても仕方の無い状況だった。

彼女は、冥府に降りる神話の姫君のような面持ちで階段に脚を落とす。

永遠の楽園のような・・・そんな場所に彼女は安堵を覚えている。誰もマリナを否定しないし、彼女の彩色の過程を見せながら他の皆に色を乗せることの喜びを伝える。それがどうにも愛おしい作業に思えて仕方がない。

何よりも絵を描くことが好きであったが、それは「誰よりも」好きであったかどうかという比較にはならない。他者の喜びと自分のそれを比べることはできないのだ、と知った。それはシャルル・ドゥ・アルディと関わることによって知ったことだった。

そんなことを考えていると、彼女は反射として声を上げた。

「あ」

降下した先の踊り場に人の気配を感じたからだ。

最近の画廊では、人がよく入るようになった。敷居が高いと遠慮していた若い世代や、絵画というものに興味を持ち始める者が画廊に入り、そして一見の客とならずに来店を反復することが多くなったのだ、と説明を受けていた。

繁盛することは良いことが比例して品格を失いがちだという呟きを耳にすると自分がいかに狭い世界で生きていたのか、と思う。

「あ」

相手は、自分と同じような音声を発した。もっと低くてよく通る声であったが。

見下ろした状態でもわかる。短く切り揃えられた髪は、甲府に住む彼女の幼い時からの友を思い出す。そして彼はとても上品だ。

細身の体に纏った服はさりげなさを装っているけれども、大変に凝った品だとわかる。

服だけではない。靴や鞆や、眼鏡さえも。場違いな場所を自分の一部なのだと定めてしまたったことに、どうにも複雑な気持ちを覚える。

外見だけではなく内面も穏やかであることが滲み出ている彼は、マリナの姿を見つけるとちょっと困ったような顔を向けた。

「こんにちは」

革の鞆を斜めがけにして丈の短い薄手のウールコートを纏っている。襟元から覗くシャツは同系色で合わせており、細身のチノパンツに長い脚が包まれていた。

ワタル・イツキは、この画廊の経営者だ。まだ若いのに、都内の画廊を存続させている手腕は、父譲りと言われているが、本来はグラフィック・デザイナーを生業にしている。マリナもイメージを使わせて欲しいと言われているが、積極的に詳細を見せてもらったことはなかった。

だが、彼の目を通すと他者は等しく善人で、且つ宝石のように煌めいている存在なのだろうと思う。

マリナが声を上げたのは、思わぬ人物が階段を降りきった場所で佇んで居たからではない。

何しろ、あの画廊の持ち主なのだから。

彼女を驚かせたのは、彼が眼鏡を外して手にしている姿を見たからであった。

「こんにちは」

マリナも訝のように呼応して階段を降り始めた。睨を背にしている所以她は目を細める。

・・・薄暗がり立っているワタルは、どこか儚かった。

眼鏡のないワタルを眺めるのは初めてであった、と言っても良かった。彼は自分の身形を整える姿を他者に見せることを避けていた。彼だけではなく、彼の兄もそうだった。その点では彼らは非常によく似ていた。だが、無防備と言って良いほどの様子に、マリナは足を止めてしまった。

「・・・どうかしましたか」

ワタルは彼女が階段の途中で足を止めたので、その様子に気がついて声を出した。

この人はどうして彼女の一挙手一投足に敏感なのだろうか、と思う。自分は相手に対してそうではないのだ、と気付かされてマリナは唇を引き締めた。

「眼鏡・・・」

マリナは呟く。こういう時に饒舌に慣れないのは、なぜなのだろうか。

彼は、その言葉を聞き微笑んだ。

自分が所有している店の前で佇んでいる彼はどこかあどけない空気が漂っている。それは、彼が眼鏡を外して眩しそうにマリナを見つめているからだ。彼女は、それ以上近付けないのはそのためなのだ、と述べようとして声を出すことはできなかった。触れてはいけない風のようなものを感じたから。

「今日も宜しく御願います」

彼は丁寧に頭を下げた。マリナは慌てて何度も顎を縦に振る。彼の謙虚な態度に恐縮したのだと説明する言葉がなかったので、そのような行動でしか表すことができなかった。そして不遜な態度になっていたのかもしれないと思い直し、階段を降りきる前に彼女は膝に手が付くほどに頭を垂れた。

「危ないよ」

マリナの様子に彼は苦笑したのでマリナは首筋を朱くした。この人の前では、自分は幼子のようなものなのだと思う。彼女とそれほど年齢が離れていないのに、何もかもが大人で、何もかもに努力し続けた成果が伴っている。

そして彼が片手に眼鏡を持って、裸眼のまま彼女を見守っている様子を見て、マリナははっと息を呑んだ。

初めて、彼が眼鏡を外して顔を向ける様を見た。

彼の弟と兄はとてもよく似ているが、ワタルは兄と弟にあまり似ていなかった。母親似であると聞いていたがあ、目元の艶めかしさがマリナを硬直させる。

#02

「中に入らないのですか？」

「先に中に入ってください」

奇妙なこたえにマリナは眉を動かした。

彼女より先に来ていたワタルが彼女に先に行けと言う。店の持ち主である彼が発する言葉に紛れる微妙な音に、マリナは質問を重ねた。

「待ち合わせですか？」

「いえ、そうではなく・・・」

ワタルが珍しく言葉を濁しているのので、マリナは詮索しすぎだと理解した。

薄灰色の影の中に佇むワタルは苦笑した。睫が長い、とマリナは思う。彼女はいつも彼を見上げるばかりであったし、このように眼鏡を外した彼を見ることもなかったのだから、彼とよく似た別の者と話しているのではないのかと錯覚してしまいそうになる。

「あの、眼鏡をかけていない状態で見られるのがちょっと恥ずかしくて」

ワタルがそう言って顔を横に向けた。

彼は顔を手の平で蔽った。それから、目の上を擦った。

少しだけ冷たいと感じる風が、半地下の階段下に吹き込んで来た。都内では時間の差によって現れる風の向きについて変化を感じるものはとても少ないだろう。だが、ここには確実に存在した。

ずっと滞留している場所ではない。少し先には、夜間用の照明に間もなく切り替わる直前の、淡い光が見えている。そこには受付嬢の杜宇子がいて、画廊の主であるワタルや講師であるマリナの来訪を待っているのだ。

それなら、眼鏡をかけたら良いのに、と思うものの、彼には何か理由があるようだった。

「この時期からは・・・中に入ると、眼鏡が曇るでしょう？」

「はい・・・」

ワタルがごく当然のことを言ったので、拍子抜けしたマリナは彼の前に移動してその話の意図を推測しようとした。彼は少しだけ目元を朱くしていた。

「私も、眼鏡をかけますが」

彼女は前置きした。

「その時には、足元が不確かで不安になります」

自分の経験を述べる。彼は何を気にしているのだろうか。

「ああ、見ないでください」

彼は眼鏡を片手に持ち、横を向いた。

彼と彼女が目的地としている画廊は、ほんの数歩先だ。

そして、目的がなく赴くわけではなく、その場所で達成しなければならないことがある。身なりについてさり気ない気遣いを配っている彼がそのような困惑を見せるのであるならば、普段と違う何かが起こったのだろう、と思われた。

何があったのか、と聞くことは簡単だ。

だがしかし、彼の心の内をマリナが把握してはいけないのだ、と思う。彼が望んでいないから。そして、そこまで踏み込んでしまったのなら、マリナは適度な距離を保つことができなくなってしまうと感じているから。

「いつか、この辺りでサトルと・・・弟と雨宿りをしたことがあったそうですね」

彼は僅かに見えるであろう、外の気配に眸を向けて言った。

「ああ、はい・・・」

マリナは頷く。急な雨が降ってきて、そこで雨宿りをしたことがあった。そこに居合わせたサトルと短い会話をしたことを思い出す。白雨が魅せた時間の中で行き来した物思いについては、ワタルに全部を伝えることができない。なぜなら、今はその季節ではないから。マリナは正解だとは思っていない。ほどよい距離というものは、秘匿も意味しているから。相手に知られていないものごとについて許容し、たとえ知って板としても口にしない秘めたものについて肯諾しているということが前提とされる。そういう人間関係は歪であるかもしれないが、関係というものは相手を思い遣ることがあってこそ存在する。世界が廻っているのは、そのような根拠があってこそなのだ信じている。少なくとも、まだ、今は。

眼鏡を外したワタルに、マリナは下を向いてしまう。どうしてなのだろう。彼の顔を見てられない。

「イケダさん？」

「ああ、ごめんなさい」

彼女は慌てて言った。首を激しく横に振って、鞆をぎゅっと掴む。

そうしていれば落ち着いたから。

・・・どんな時でも。

だが、今はそれは通用しなかった。

「いいえ、そういう謝罪は望んでいない」

彼は呟く。その言葉の選び方は彼の実兄にとっても似ている。似ている、というのは良い意味にも悪い意味にも受け止められる。マリナ自身も姉と妹と似ているかと聞かれるとよくわからないとしか答えようがなかった。だから心でそう思っている、簡単には出せない言葉のひとつになっ

てしまった。

「会ったことはないのですが、お母さまに似ているのだろうな、と思って」
だが、思わず、感想を漏らしてしまう。彼なら免してくれるかもしれないという甘えがあったのかもしれない。仕事には厳しい面を見せるワタルも、普段は大変に穏やかで大人の男性の持つ落ち着きの塊のような人だと思っていた。

だがマリナの言葉を聞いた途端に、彼がふっと違う笑みを浮かべたので、マリナは彼の顔を覗き込んだ。人の心を覗き込むようなことはしてはいけない、と思っている。だが、時々自分はとても想像力の乏しいことをしてしまっているのだと思うことがあった。今回もきっと、後になってひどく悔やむことになるのかもしれない。

それでも、彼の母親の話をするのはいけないことなのだと確認することになってしまう。

「弟と兄は父によく似ていますよ、確かに」
彼は視線を彼女から外した。ずっと、心に膜が張られたようで、マリナははっと息を呑む。彼の眼鏡をない顔は端正であったがどこか影があった。

「僕が彼らに似ていないから、母親と似ていると想像したのかな」

「それは・・・」

安易な発想だと思われたらどうか。

マリナは瞬きを繰り返した。それは返答に窮したからだ。自分で持ちかけた話題なのに、彼に扉を建てられてしまったことに動揺していた。

「きっと、そうであるのだから、と」

マリナは頭を垂れた。相手の期待する言葉でなかったことはマリナにもわかっていた。けれども、どうしても・・・そう言いたかったのだ。

彼は乾いた笑いを階段の踊り場に残した。困惑している気持ちが滲み出ている。

「いいえ、言い直します。そうであって欲しいな、と私が思ったから」

ワタルの機嫌を損ねたのか執り成したのかのかわからない。けれども、彼女はここで取り繕ってはいけないと思った。これまでの日々の中で、それだけは誤ってはいけないと思っていたことだから。

すると、彼は声を洩らして笑った。

「ああ、貴女にはかなわないな」

そう言って目頭を指先で強く押さえた。

「コンタクトにしてみてもどうでしょうか。私も、随分勇気が必要だったのですが世界が変わったような気がしました」

彼は眼鏡をかけ直しながら、言う。小さな声で、ありがとう、と言われた。

「確かに、僕は母親に似ているようです。よく言われます」

これだけ美形の兄弟で、それぞれ父と母に似ているのであるならば、彼らの両親は相当な美貌の

持ち主なのだろう。

「でも、母に似ていると言われることで困ったことになることが多いので」

「困ったこと？」

「ここは母の思い出の深い場所で」

ワタルは静かに語る。徐々に傾いてきた陽が階段の中にまでやって来て、静寂そのものが彼らを包む。

「元々、ここは母の所有物だったので」

彼から聞く、この場所の存在理由について知らされていなかったマリナは眸を見開いた。

「息子の誰かがここを建て直すことができないのであるならば、消滅しても仕方が無い、と思っていた父に反発したことからここを譲り受けることになりました。母の思い出の場所で、そう・・・皆が集う場所になれば良いのに、と言っていたので」

彼女は押し黙った。

#03

彼女は、母親との情愛に対して因縁とでも言うべきものに対峙している様を見守ることが多かった。大変に不可思議な話であったが、不思議としか言い様のない巡り合わせが彼女を少しずつ大人にさせていった。そして、誰かに優しくすることができるようになっていった。今、目の前に佇んで居る人もぼんやりと見える視界の中でだけ見つけることのできる「何か」を探しているのだろうか。

頬にひんやりとした空気があたって、冷え込んで来たことがわかる。だが相反して彼女の頬は熱が上がってきた。体温と外気の差がそのように感じさせるのだと現象について敷衍することができるのに。今日は湿気が多く含まれている空気が低い雲を見上げているような気持ちにさせる。いや、それだけが原因なのではない。

今までに見たことのないワタルの姿を見て、落ち着かない気持ちになっていることを認めざるを得ない。否が応でも認識せざるを得ない。マリナがワタルを惹き寄せているのではなく、ワタルがマリナを惹き寄せたのだと思ってしまう。男女の仲、ということではなく。

・・・誰かに惹き寄せられて、自分が誰かを惹き寄せてしまう。そういう瞬間に多く立ち会ってきた。しかし、どうにも離れしない。瞬間の気配に敏感になっていくだけで、何もかも鈍感になっているだけだと思う。対峙するべき存在と永遠に別れてしまった者達は、心の中に秘めている想いをどこに放出するのだろうか、と思った。

永遠に戻ってくることのない人のことを想って生きるのが人の生である。だが彼女はそうではない。かつて、見送らなければならない状況の時にそれを覆して欲しいとフランスの華に頼んだ

。

そして彼は彼女の願いを聞き入れた。それがどれほどの重さなのか、あの時は考える暇もなかった。

だがしかし、ワタルの様子を見ていると、自分の胸に疼痛が広がっていく。鋭い痛みではないが彼女の中でこれからずっと消えない質量と熱量をもって続く。それこそ、永遠に。

「大人げないと思いますが、母と似ていると言われると平静になれないところがありましてね。今となってはもっと喜ぶべき点として享受すべきだと思いますが」

「家族は、顔貌の繋がりではないから」

彼の意外な発言に彼女は口早に応じた。

それからはっとして顔を上げる。先ほどまで湿気を含んだ髪のがきが気になっていたが、頬にかかるそれを払いのけることもなく、彼に傾ける辞を探す。こういう時、以前の自分であったのならもっと簡単に言葉を出せたらろう。

「確かに、そうですね」

彼は笑った。しかし、静かな言葉にマリナは胸を抉られたような痛みを感じる。他の者が聞けばそれは歌にも似た心地好い肯定に聞こえるだろう。

「軽率な発言でした」

彼女はそう言って頭を垂れた。

「謝ることでないですよ」彼は苦笑するが、その都度彼女の視線は下を向く。

眼鏡を外し、僅かな時間の中で考えに沈む彼に口を差し挟むことは不粋であったと猛省する。だが、マリナは想うのだ。

そうせざるを得ないような愁いが見えて、彼女はそのままにできなくなってしまった、という理由を黙して通り過ぎることができない性分はこの先もずっと抜けきらないのだろう。他者の困惑を見過ごせないというのは自己満足でしかない。理解しているものの、それでも口を出してしまう。

言わないままでいるより、言ってしまった後悔に満足を感じているのは過去の後悔が残っているからなのか。あの時にこうしていれば良かった、と思うことは何よりの不幸だと思っていた。それは、もう二度とやり直すことができないから、それならば、こうと決めた時に行動した情熱を尊重したい。言い訳にしかならないかもしれないが、これを理由にして他者を傷つけても良いのだとは思わない。だからこそ自分の熱情について説明しておきたい。そう思うのだ。

・・・過去から現在に至るまで、数え切れないほどの多くの人のことを傷つけたと思う。その時には気がつかなかったかもしれないが、今では思い至る場面を数え上げることができる。

なぜなのだろう。

その時に思ったことを放置できるほど自分は成熟していない、ということなのか。

熟考する前に行動する。

それが良いことなのか悪いことなのか判別できない。どれほど、年を重ねて生きていても正解はわからない。

眼鏡をかけ直したワタルは、いつものワタル・イワツキだった。間もなく、彼は名前ばかりのオーナーになるのだろう。世界で彼の名前を知らない者は存在しないのだと思わせるほど、才能を開花させる。マリナが惜しんでいるのは彼の作品を積極的にしない限りには見る事が出来ないことだ。ワタルは自分の作品を求められない限りマリナに見せることはなかった。それは時に心地好かった。だが、彼の謙虚さが、マリナを困惑させた。しかし、彼女は混迷に流されない。

「眼鏡というものは、壁に近いですね」

マリナは言った。

「外してしまえば見えないという無言の申請を他の人は受け入れる。事実かどうか確認せずに。

・・・でも、そういう時には実際に見えないけれども。

そんな中でも、曇ってしまうこともあるのですよね、よく見えるように装備する大切な自分の一部が、事実を曇らせることも、ある」

そこまで言ってから、マリナは自分の後頭部を右手で撫で付けた。言い訳をしたくなるほど動揺したときの行動だ。

わかっているのに、制御することができない。

自分の言葉が相手を動かすと確信しているわけではなかった。だが、自分の何気ない言葉が誰かの何かを動かすことがある。その反対があるように。誰かの言葉が、自分を動かす。

「そうですね。・・・曇ってから見えるもの・・・そういうものがあるのだと思います」

ずっと晴れ渡っている時には、見たいと思っているものが見えなかった時のことはわからない。

だからこそ、思うのだ。曇っている時にこそ真実が宿っていることがある、と。

「似ている、というだけでこの画廊に影響があることを怖れていました。良くも悪くも」

彼はそつと言う。

そうか、と思った。親を厭わしいと思ったのではなく、大事に思うからこそ自分の力で何とかしたかったのだろう。

「ああ、貴女にこんなに子供っぽい話をするなんて」

彼は額の上に指をあてて軽く溜息を洩らす。

「いいえ、少しもそんな風には思いませんから」

マリナは慌てて彼の言葉を打ち消した。誰もが誰かの子であるのだから。

「母と懇意にしていた方々を失望させたくないな、と思っていました。それでも、どこかに行きたい、と思う人達のどこかになれたら良いのに、と思っていることもまだ消えていない」

彼の言葉が心に染み渡る。

だが、彼の「どこか」は存在するのだろうか。

そこまで踏み込んではいけない。彼女は本能的にそう感じた。

「それはきっと、叶えられていると思います」

マリナは低い声で言った。確信できるものが物理的に存在するわけではない。だがしかし、彼女は確信する。マリナの「どこか」はここに存在するから。

「さあ、もう入って」

ワタルはそれだけ言うと、見上げているマリナに笑顔を落とした。

「あの」

彼女は思わず一歩前に出てしまう。

ふたりは近くなったので、彼は少し驚いたように息を呑んだ。

#04

「ほら、先に行ってください」

もう一度促されてマリナは後ろに退いた。

近すぎるよ、と柔らかな拒絶が聞こえるような気がした。でも彼はそんなことは言わない。必要な言葉だけしか使わない。

「・・・今度、作品を見せてください。いえ、モデルになってください」

突然話題を切り替えたので、自分の思考能力について恥ずかしくなり、彼女はかっと頬を染めた。

「貴女なら、いつでも」

ワタルは笑いながら言った。急な申出に少しも嫌な顔をしなかった。

「あの、私も・・・自分の作品の参考にしたいので」

「僕の作品を？僕を？」

彼が目丸くした。彼女がまんが家であることは知っているが、そのような申し出は初めてのことであったので、内心は驚愕しているだろう。

「たとえば、どんな作品？」

矢継ぎ早に質問されたので、マリナは少し考えた。湿気を帯びた空気が冷え込んで来たのがわかる。髪に纏れるかのように含まれた空気が僅かに重くなったから。具体的なものを考えていたわけではない。ただ、会話を繋ごうとして口にした話題であることはワタルにもわかっている

のだ。

「ええと」

彼女はやや口籠もった後に、言った。

「キスシーンとか」

それを聞くと、ワタルは腕を組んで首を傾げた。こういう仕草は兄弟でとてもよく似ている。兄の場合には思案するというより間合いを取るためであり、弟の場合には困難な状況にどう立ち向かうか方策を練っている時であった。だが、目の前の柔和な空気に包まれたワタル・イツキは、どんなことを考えているのだろう。

そうやってしまってから、自分がどれほど荒唐な発想を述べているのかに気がつき、マリナは後頭部に手を遣った。

「あの、ちょっと・・・支離滅裂でした」

マリナはそう言って謝罪する。声が干上がっている。

恋人であるシャルルには質問できないことをこの人に言ってしまった、と思った。

互いに過去にどの程度深い関係にあった相手か、確認することはなかった。

過去を塗り替えることはできないが、それでも過去を知りたいと思ってしまう気持ちを隠すことができない。稚拙な気持ちを振り払うかのように、日本とフランスを往復する自分の気持ちを持って余してしまっていた。

・・・彼女の頬が熱くなって、自分が彼の前では何も取り繕うことができない状況にあるのだと知った。この人は、彼の実兄とは違った「何か」がある。本当はとても激しい人なのかもしれない。そんな時に、このような状況で思ったことを口にしてしまう。

「眼鏡を外す瞬間というのはどういう時なのかな、という妄想です」

恥ずかしそうに彼女は目を瞑った。そして背中にじわりと汗が浮かぶのを感じる。

「ああ、忘れてください」

彼女がそう言って手の平を彼に見せて、全てを否定する仕草を見せた時。

彼がふっと体を傾けて彼女の顔の位置に自分のそれを近付けた。

彼女は非常に小柄なので、彼は体を半分に折っているような格好になる。

「・・・確かに、眼鏡を外さないと、という気持ちになりますね」

彼ははそう言って片手で眼鏡を外した。マリナのすぐ近くにワタルの眼差しがあって、彼女は声を呑み込む。

そしてこんな時には誰もやって来ない。

確かに、兄や弟とは顔立ちが違う。しかし、眼鏡を外した彼の双眸の中には強い暁があって、彼の意志の強さを表していた。どうしても手に入りたいものや守りたいものについては強くなれる者の決意がそこにあった。彼はどんな人生を歩んできたのだろう。そう思ってしまう。

マリナはワタルの詰めてきた距離に驚いて、眸を彷徨わせることすらできずにいた。

「恋人との瞬間では、何もかもを取り払いたいと思いますから・・・」

そう言って、彼は彼女に顔を近付ける。彼女は肩にのし掛かる鞆の紐を握りしめた。

そうか、彼は何もかも取り払いたいと思うのか。

そんなことを反芻する暇もない近接した空間で、マリナはただ、目を瞑ることもできずに彼の瞳を見つめていた。

彼は大変に整った顔立ちだった。近くで見るとそれを思い知る。眼鏡があったから、気がつか
なかつただけだ。確かに女性的な顔立ちであったかもしれないが、彼の頬も鼻筋も唇も・・・恋
を知っている人の形であった。近寄ることのできる極限の場所を、彼は知っている。

受付嬢で古い馴染みである彼女と並ぶと、溜息が出る。それほど、彼は全てに愛されている。

でも、その視線が今はマリナを覗き込んでいた。

・・・彼は優しい印象が強いものの、今は、彼の視線はマリナだけを見据えている。

少なくとも。

今。

この瞬間は。

思わぬ近接に彼女は呼吸を忘れた魚のように水面に向かって喘ぐだけしかできない。

そして彼は彼女に近付き、彼女は目を閉じて肩紐に両手を添えた。彼女の大事にしているすべて
がそこに詰まっている。つい最近まで彼女の恋人を描いたスケッチブックが入っていた場所だ
った。それ以降も、彼女の全部がそこに在った。気が向いたように赴くパリへの準備品もそこに
あり、彼女は住処というか拠点というものについて執着していないのだと大家の息子に指摘され
たばかりであった。

だからこそ、ここは「どこか」なのだと思ってしまう。いいや、そう思いたい。

マリナは言葉に詰まって、ただ、身を強ばらせる。

触れて欲しくない場所に触れてしまった者への罪と罰は、どのようにして購えば良いのだろうか
。

マリナが黙って目を瞑っていると、そこにふっと風が現れた。

彼女の前髪を、ワタルが吹き上げたのだ。

外気とは違う、あたたかい呼気を含んだ急風が彼女の前髪を吹き上げた。

そしてようやくマリナは目を開く。

視界にはワタルが姿勢を直して眼鏡を再び装着し、そしていつもの通り静かな笑みをたたえて彼女への視線だけが残っていた。

「あの・・・」

マリナが困惑して、今の状況を把握しようとしているところに、ワタルはふっと微笑んで目元を緩ませた。

「ご存じでした？僕はとても意地悪な人間です」

「・・・え？」

マリナが理解できずにいると、彼はくすり、と声を洩らして笑った。

「くもりの向こうに見えるもの・・・それは僕が欲しかったものかもしれません」

彼の目を見てみると、吸い込まれそうになっていく。マリナは唇を強ばらせた。

彼女の知っているワタル・イツキなのに。彼女の知らない面がある。

「そういうものだ、と決めつけるのではなく。一度は視界を曇らせて、そしてその次に見えるものにこそ真実があるのだと思わせてくれる。僕は、そういう作品を創りたいと思うし、そのような姿勢の人を大変に尊敬しています。そう、貴女を」

彼はそこまで言うと、マリナの理解への過程にかかる時間を省略して、ただ、頷いただけだった。

「くもり、のち。・・・次の作品へのタイトルに頂きますね」

彼はそう言うと、先に画廊に入った。

あれほど、マリナに先に入れと言っていた場所なのに。

横切った時に、ワタルの香りがマリナを包んだ。あの一瞬は何だったのだろう。

彼女の額と前髪を吹き上げた、突風。

そして意地悪なのだと言ったワタルの言葉。

ただ、マリナは立ち尽くすばかりであった。からん、と扉を開ける音がして次にはワタルを待っていた受付嬢の声が振動となって聞こえて来る。どのような会話なのかはわからないが、彼の眼鏡が曇っていることを指摘しているような、そんな会話なのだろうと推測できた。

「くもり、のち」

マリナは呟く。

彼が言ったことは全部はわからないかもしれない。

けれども。

マリナはこの場所で、冴え渡る晴れの陽光だけではないものも必要なのだと知った。

昏い焔のような、誠次・マクドゥガルの連絡であったり、赴留という師を得ても自分の行き先に迷ったりしている。

それでも。

ここは、確かに彼女の・・・すべての感覚の後にある場所なのだと思う。

ワタル・イツキに置いて行かれたとは思わなかった。彼は彼女の雇い主だ。

だからこそ。超えてはいけない線引きがあった。

どうしてなのだろう。僅かに、痛みのようなものが彼女の胸を走った。

くもり、のち。

雨が降ることもある。そして曇ることもある。でも。

・・・それでも、自分は突き進む。生き抜く。

マリナ・イケダは大きくひとつだけ深呼吸して、湿り気を帯びた髪の毛に両手を入れた。

意地悪なオーナーは嫌いではなかった。

そして、意地悪極まりない彼女の恋人のことを思って空を見上げた。

(FIN)

●01

不和や不振の象徴であるという花を、マクドウガル家ではいつも冬の季節に飾る。それが、年末の行事に欠かせない花であるからという低俗的な理由ではなく、誰かを思い出しているのだろうかということは、何となく理解していた。

父である青磁・マクドウガルは自分を多く語らない。けれども、妻の生国である日本での思い出を最上としていた。

青磁・マクドウガルは・・・彼が当主に就任するまでの間に培ってきた人脈を蓄財を切り崩すように使い込んでいるように見えた。

・・・潤渴した人材を舐め回すだけで生涯を終えてしまうのではないのだろうかとさえ思っていた。

「彼」は、マクドウガル家が絶えてしまっても全く問題なかったし、彼の父が窮地に陥ってもまったく心を動かされなかった。

きっと、青磁の生涯が終わるまで、フランスのアルディ家や、縁戚の者たちが青磁を支えるのだろうかと思った。それが青磁の蓄えなのだ。

青磁・マクドウガルには紫電と呼ばれる強い視線があり、先祖返りの容貌を持っている。年齢を重ねるほどに、マクドウガル家の濃い血統の流れを感じさせるので、皆が彼に惹き寄せられる結果となった。

しかも、彼は諸外国で研鑽を積んでおり、留学経験が豊富であった。

青年期まではほとんどマクドウガル家に寄りつかなかったのに、それでも当主を継承できるのは彼が最有力だとされてその通りになった。

家に対して愛が湧かなかった理由は明白であった。青磁の眼疾患により、一時彼に誰も近寄らなくなったからだ。それが少年期の頃であったこともあり、彼は留学を名目に国外に終始滞在するような生活を送っていた。

かつ、青磁はその時に・・・生涯の伴侶を選び、その伴侶が「彼」の母になった。

日本という東の果ての国から連れ帰った小さな東洋人を妻にすることは、誰も反対しなかった。反対できなかったという理由もあった。

彼女はアルディ家の後ろ盾というか、強い縁を持っている人物であり、そのアルディ家当主であるシャルル・ドウ・アルディから決して悲話に終わらないようにという遠回しな念押しをされて

いた。しかも、幾度も。

シャルル・ドウ・アルディはフランスの華と呼ばれ、今ではあの国の最重要人物のひとりとされていた。

そのシャルル・ドウ・アルディが懇意にしている者の縁の娘が青磁の連れてきた人物であった。青磁が劣遇は許さないと言っているのであれば、それは従わざるを得なかった。

それに、アルディ家は、マクドウガル家の秘密を解明するのに大変に尽力した家である。

マクドウガル家は、以前に屋敷を火災により焼失しており、大事な文献や記録の大部分が失われてしまっていた。

それを再現した、アルディ家に残っているいくつかの情報の断片を起こしてマクドウガル家の失われた過去情報を補った功績は、大きかった。

だから、アルディ家が後援する彼女を受け入れることに拒否できなかったという者も居るが・・・当事者である青磁・マクドウガルがその人しか自分の妻にしないと若い頃から宣言していて、決して青年時の情熱だけでそのようなことを言っているわけではないと証明し続けた結果、彼女は・・・青磁の妻としてマクドウガル家に入ることになったのだ。

それでもそこに至るまでには大変な長い時間と、青磁の忍耐と努力を強いる結果になった。

しかし、彼はそれを差し引いても、母が好きであった。

息子であるという鼻屑目だけではなかった。素晴らしい女性であると思っていたし、きょうだい達から揶揄されても、それでも平気でいられるほど、大切な存在であった。

彼女は、勤勉で控えめで決して・・・表舞台に出ようとしなかった。

まるで、あの、静流・マクドウガルの妻のようであった。

彼は、母が静流の妻のように狂気の果てに、誰も振り返らなくなってしまうのではないのかと思った。

一瞬でも・・・叶わない思いをこの土地で持ってしまうと、皆、狂気に陥ってしまう。

アルディ家が復元した、過去の系図や経緯を記した記録を読み返す度に、そう思わざるを得なかった。

しかし、彼の母は静流の妻と違い、狂気に陥ることもなかったし、継子への重圧に耐えかねて健康を害すこともなかった。

彼の父方の祖父母・・・つまり、青磁の父母には親しみは湧かなかった。

この地域では、夫婦が対になって出席することが当然とされる会合は多かった。

諸外国への遊説にもそれは必須であった。

青磁は、同じ地域に存在する良家という以上にマクドウガルに利益を齎す家に対して膝を折らなかつた。

マクドウガル家の男子は麒麟だと言われている。

中国の霊獣のことだ。

彼らの祖の中に、その国の者が居たという証になるのかもしれないが、それ以上の大きな意味を持って、この言葉が受け継がれてきていた。

しかし、今になって思う。

麒麟も鳳凰も、霊獣と呼ばれる生物は、雌雄を名前で区別している。

「麒」「麟」、そして「鳳」「凰」・・・各々に性別がある。

マクドウガル家が霊獣を、家紋としたことの意味について、青磁が仮説を証明した。

誰もが・・・麒麟と言われたマクドウガル家の男子の本当の意味を知ることになった。

類稀な傑物として澱んだ土地の主になるための神に近い場所に居る者の降臨という意味ではなかったのだろうと思った。

もっと大きな秘密があり・・・青磁・マクドウガルはそれを解明し、幾度目かの黎明期をもたらした人物として後世まで語り継がれるほどの偉業を為し遂げた。

それなのに、彼の母は・・・青磁の妻は、そういったものにほとんど参加しなかった。もともとそういう教育を受けておらず、加えて外国人であったということもあった。

しかし、性格が引っ込み思案であるからという理由ではなく、自分の名前が残ることを極端に畏れていたように思われた。

きっと、後世には彼女に関する記述はほとんど出てこないと思われた。意図的であったからだ。

まるで、最初から彼女は存在していないかのように扱われている。

それが「彼」には気に食わなかった。

青磁の息子であり、彼女の息子である彼の存在を否定されているかのように思えたからだ。

正式な手続きを経て、彼は青磁・マクドウガルと青磁の妻から生誕した正式な継嗣であった。それなのに、母の存在が薄いから、青磁の実子というよりかはむしろ庶子として扱った方が良いのではないかという声を完全に遮断することができなかった。

これほど、青磁・マクドウガルに酷似した顔と、紫電と呼ばれるマクドウガル家特有の強い視線を持ち合わせているというのに。

青磁から贈られた腕輪には、彼が次の後継であることを示した、麒麟の複雑かつ繊細極まりない紋様と・・・朝顔の紋が入って、今ではそれは燦然と煌めいているというのに。

何が不足しているのか、彼にはまったく理解できなかった。彼が彼であるために必要なことが、不足しているとは思えなかった。

母が誰であったとしても父系制を敷いている限り、彼は青磁の継子であることには変わりがなかった。そしてそのように教育されて育った。

母の生まれが影響するとは思えないし、そういったことがないように青磁・マクドウガルは配慮しているのだろうとっていた。

けれども実際は違った。

どんなに愛し合ったふたりの間に生まれたこどもであっても、遺伝学的にふたりのこどもであることが証明されても・・・それだけでは足りないのだ。

偉大な当主が選んだ者だから、その者に付き従うという性根の持ち主だけで親族が構成されていたのだとしたら、そういった家系はすぐに廃れてしまったのだろうと思う。

一方は歓びを最上とし、もう一方は疑いを最上とする。

●02

彼が気に入らないのは、青磁が彼の妻を片時も離さないからだ。

まるで、宝物を独り占めしたがるこどものようだった。

マクドウガル家に残しているこども達でさえ、青磁といる時間より長く一緒に居ることは許可されなかった。少なくとも、彼にはそう映った。

まるで、彼女が離れていることに恐怖を感じているようだった。

「他の場所にいるときは、もっと・・・そんな様子ではないのだけれども」

いつも彼女はそう言った。

母と言うには、彼女は若かった。彼はいつも、青磁と彼女の子であって羨ましいと言われる。けれども、それを聞いて讃辞とは思わなかったし、少しも嬉しいとか誇りに思うとか感じることはなかった。

青磁・マクドウガルは、自分のこどもたちに、自分の妻のことを「母上」「お母さま」などと、母という称号を用いることを禁じた。

彼女はそのような役割を持っているだけではないからだ、と言った。

そして当主の発言は絶対であった。

彼女は青磁の妻であり、彼らの母であるけれども。遠いこの土地に連れて帰ってきた人を、青磁はこよなく愛していたことは、わかっていたけれども。

・・・それでも、どうしてそんな風に隔離してしまうのか、彼には理解できなかった。

彼女はマクドウガル家ではごく自然に過ごし、使用人達との関係も良好であったし、この家の歴史やしきたりについては最大限の努力を払っていた。

青磁の長男である彼が長じるにつれて、皆は青磁とよく似ていると言うが、母方の血族は彼は母に似ていると言う。

・・・ずっと、止まっていられない。自分の姿形は、年月によって変化した。

青磁の少年時代を知らない彼女は、彼を見ていると青磁の幼い頃を見ているようで嬉しい、と言う。けれども、青磁は、彼を見ると・・・彼女の昔を再現しているようで楽しみだと言う。

それなら、彼の存在は、一体、どういう意味を持っているのだろうか。

父母の温かみを伝えることはなかった。彼らは、いつも居なかったから。

それでも、母は・・彼のことを案じ、マクドウガル家に残していくこども達に、いつも言っていた。

「この土地を守るのはあなた達の世代だから」

いつも土産を用意し、屋敷にいる限りはできるだけ彼らと一緒に過ごそうとしている母の行動を青磁は妨げているとしか思えなかった。

どうして、青磁は彼女をそんな風にして束縛するのだろうか。たんなる独占欲ではないことはわかっていた。しかし、理由を明かさなければ、誰も理解されないことは青磁が一番よく知っていると思われたのに。

そして、なぜ、そのことについて彼女は意見しないのか・・・

もっと後にならないとわからなかったことであつたけれども。

彼女は、彼の頬を撫でる。

いつも、彼の成長の速度がはやすぎると言って笑う。

「もっとゆっくり、大人になって欲しいのに」

彼は急いで大人になりなかった。そうすれば、彼は様々な場所に、彼女と一緒に行くことができる。父の名代として動くことができる。

・・・青磁・マクドウガルと同じ様に振る舞うことはできなかった。

気質は、生真面目な母ととてもよく似ていた。けれども、父に対して・・・愛する者への対応に納得できないときの頑なさは、父親譲りであつた。

他の家庭のように、自分が引き継いだものを喜ぶ時間は、彼にはなかった。

他の家庭が標準だとは思わなかった。

学校に通うようになり、この地区の者はマクドウガル家のゆかりの者を尊重する傾向にあつたけれども、それでも、彼は不在しがちな両親のことを、保護者や法定代理人として以外に評することができなかった。

手を繋ぎ、敷地近くの河を一緒に歩いた記憶はあつても、世間話で語る両親の話の素材はない。

母は・・・

妻が家に居て、夫を待ち、こどもを産み育て、出生率の異常に低い男児が成人することを念頭に生きる立場の女性ではなかった。

彼女は母親であつたけれども、その前に青磁の伴侶であつた。

永遠の・・・彼だけの朝顔であつた。この地域で、朝顔の人、と言い表すことは自分の将来の配偶者になりうる人物のことを指し示す。

青磁は、彼女を妻にしたのに、永年の恋人だと言い続け・・・妻という器に押し入れることはしなかった。

そして、青磁・マクドウガルの恋人という立場を求め続ける。

それが、彼の気に食わない。

「お母さまがお父さまの傍に居ることは・・・マクドウガル家の悲願でしょう？」

彼のきょうだいには彼にそう言うけれども。

確かに・・・家に残すことによって狂気に陥るマクドウガル家の悲劇の経路を振り返ってみても、当主の近くにあつて、この土地で根付く者より生命を長く保つことができた。

わかっている。彼の手首で光る腕輪にも、大いなる秘密が隠されていることを。青磁がそれを解決すると言われていたが、実際に解決出来たことを証明するのは、青磁の次の世代なのだ。そして、彼が、その次の世代そのものなのに。なぜ蔑ろにするのか。

●03

そういう訳で、彼は彼ら両親が居るとき・・・いや、青磁・マクドウガルが滞在している時は至極不機嫌だった。

母だけ先に戻ってくれば良いのに、とさえ思った。

けれども、どんなに不在にしていたとしても、青磁はこの館の当主だ。

使用人達は長い不在を嘆く代わりに帰邸を喜び浮かれ、マクドウガル家のこども達は親を慕って前夜は眠れない夜を過ごす。

自分は本当は、青磁・マクドウガルの実子ではないのかもしれないとさえ思うが、彼の若い頃にとってもよく似ていると言われ続け、瞳の色は彼の母によく似ていると言われるので、彼は間違いなく父と母の実子であると認めざるを得なかった。

いつものことではないか、と窘められることも多々あった。

だから彼は、早くこの家を出たいと思っていた。

けれども、そうしたら母はこの邸でたったひとり、マクドウガル家の血を引いていない者になってしまう。

彼のきょうだい達は、皆、そういう事には考えが及んでいないように思えた。

本当に彼女を守ってやる事が出来るのは、彼女の血肉をわけた者だけなのだから。

どんなに口では愛して居ると言い、身分保障をしたとしても、彼女の心の悲しみや苦しみまでは青磁はすべて引き受けることはできないだろうと思った。

・・・生まれてからずっとこの土地の風習に慣れて暮らしてきた者と、そうではない者の歴然とした違いについて、青磁はわからないのだ。

それは彼が少年時代から留学を繰り返しており、この国に戻ってからも、しばらくはこの土地から離れて暮らしていた。

青磁が娶ると宣言した彼の恋人をマクドウガル家が受け入れるまで、戻らないと言ったのだ。周囲は、特に反対しているわけでもなかった。彼女には強力な後ろ楯があったし、日本人である彼女を迎え入れることには異論がなかった。

彼が拘ったのは、彼女の条件を彼女そのものだと思わないで欲しいということであった。

彼女自身を受け入れ、彼女を好ましいと思ひ、どうして青磁が彼女を好きになったのか、知って欲しいと言ったそうだ。

それは、青磁のことを知って欲しいという願いに聞こえた。

彼女を理由にして、わかりあえないで永らく離れて暮らしていた彼の血肉を分けた者たちに対して・・・彼がこどものように、欲しいものについて訴えているような気がした。

離れて行ったのは、青磁からなのに。彼はこの土地を離れて、気儘に暮らした日々を満喫していたのに。それなのに、彼女を理由にしているような気がして・・・彼は青磁と彼女を複雑な思いで見ることになった。小さい頃にはそんなことを感じなかったのに、大きくなって自分が他の社会通念上、一般とされている家庭が恋しいかと言ったらそうではないと言い切る自信があった。

彼が終始黙ったまま、不機嫌そうに食事を流し込み、彼女の持ち帰った土産の焼き菓子と中国茶にだけは目を細めて、美味しいなど言った。

幼いこどもが居るので、賑やかな食卓はいつものことであったが、いつもより更に騒がしかった。

青磁も彼女もその喧騒に目を細める。皆が、青磁に触れたがる。彼は平等に小さな身体を持ち上げて、ひとりひとりに頬を寄せて唇を押し当てる。

・・・まるで、神様気取りだな。

彼はそんな風にしか、思えなかった。

だから、彼だけは青磁のキスを受けなかった。ここから逃げ出したのに、彼はここで当然のように君臨しているから、それが気に入らない。

その様子を見ていて、彼女は部屋を退室する彼に向かってそっと囁いた。

彼の腕に細い腕を添えて・・・躊躇いながら彼女は彼に言った。

「・・・星を見ない？」

彼はその言葉に唇を引いて、彼女の顔を見た。頬が赤くなり、ただ・・・頷くこともできずに、勢いよく顔を背けてしまった。

うまく伝えることができない。なぜなのだろう・・・こんな風に、胸が苦しくなり、哀しい程に彼女の傍に居たいと思ひながらも、これから生涯、彼女は自分を見捨てることはないという安心感が伴う。

ゆらゆらと、彼女という海の中で揺れていた時のことを思い出すかのようだった。

・・・今の地位が欲しかったから、彼女は青磁と結ばれたのではない。彼女は青磁が日本に居る

ときからの付き合いであったが、諸国を巡る青磁の支えとなり、今に至る。

自分の逃避に彼を使わなかった。

それなのに、彼は彼女を自分の戻るべき場所に連れ帰った。

・・・青磁と彼女が結ばれなければ、彼は存在しないというのに。

それでも、彼女が本当に幸せになるのであれば、彼は存在しなくなったとしても良いと思えた。慎ましい幸せだけで良かった。彼は、自分の腕に繋がっている腕輪が鎖のように思えて仕方が無かった。

朝顔と麒麟の紋が入った複雑な絵柄のそれは、彼だけが持っている彼の証である。

現在の当主である青磁でさえ、公式に入れることのできない紋であった。

青磁の耳に光る大仰なピアスは、麒麟の紋しか見えないが、裏面には小さく朝顔の紋が入っている。

そして、彼の左薬指に入る指輪には、朝顔だけしか入っていない。この顛末については、まだ、彼は詳しく教えて貰っていないが、青磁と彼女の間で何かがあったのだろうと思った。

そして彼女がそれを語らないのであれば、彼は誰にもそれを問うことができない。

事情を知らない者が聞けば、青磁と彼女の婚姻は御伽話のように聞こえるかもしれない。

日本で見初めた相手と結ばれ・・・その相手は、青磁のゆかり深い家柄と繋がりのある者であった。

偶然ではない。それは必然であった。けれども、青磁も彼女もそれを運命だと言わなかった。偶然が結ぶ縁ではないと言い切ったのだ。

彼女のその発言によって・・・彼女はマクドウガル家に迎えられることになった。

後押ししたのはアルディ家だけではなく、青磁の母親であった。何があっても彼女を守り抜くと言った青磁に、彼は本当だろうか、と行ってしまった。

彼の父なのに。彼の母の配偶者なのに。

そして、マクドウガル家の当主であるのに。

どうして・・・彼女の言葉と同じ様に、素直に彼の胸に響かないのか、わからなかった。しかし、それを模索しようとは思わなかった。

理解できないのであれば、それはそれまでだと思ったのだ。

彼女は、彼が守る。青磁ではなく、彼が守る。

だから、理解できなくても良かった。

流れ行く風を感じ、この時間を止めたいと思う程の人に、出会ってしまったと青磁・マクドウガルは言う。

けれども。

ここに残された、麒麟のこどもたちは、一体どうすれば、青磁のように幸せになれると言うのだろうか。

だから、彼は母が彼だけに声をかけたことについて、少しばかり有頂天になっていた。彼の一番の理解者は、やはり彼女なのだと改めて思った。

彼女は聡明で、何事にも静かに動じることなく対応する。

母としての落ち着きだけではない穏やかさがあり、彼は自分がつまらないことで一喜一憂していることに彼は何も言わないのに僅かな仕草から察知する。

・・・彼は、激しい自己嫌悪に陥る。

情愛に飢えているわけではなかった。

どの家庭にもあるような「何か」が欠如しているものの、それは些細なことであり、両親共に健在で家族は円満であった。

家も隆興の極みを見せているし、こども達も至って健やかだった。

仕事柄、当主夫妻が不在しがちな本家のことを任せられる者たちを集めてこども達の教育に注力するというのも、青磁の方針なのだろう。

学齢を越えれば、自由にどこでも留学することができ、両親に随伴することが許される。

マクドウガル夫妻はこども達との談話が終わると、各々やるべきことを終えてから執心するまで各々自由な時間を持つ。

彼らは、夫婦一緒に居るのが苦痛ということではなく、何か目的があってそうしているらしいのだが、こども達は部屋に入ることになるので、何をしているのかはわからなかった。

しかし、今日は違っていた。

彼は自室に入る時間が延長される年齢を過ぎていた。邸内であれば、自由に歩き回っても咎められない年齢になった。

・・・マクドウガル家の規範で定めている成年令に近くなっているからだ。

けれども、ひとり漫ろ歩く夜が彼の空疎な心を埋めることはなかったので、大抵、自室に本を持ち込んで読み耽ったり、最近では少し絵を描きためたりしていた。そんな風にして過ごすこの土地の夜というものは至極退屈で、永遠に続きそうなほど単調でありながら静かで穏やかで・・・それが彼を鬱屈とさせた。

なぜ、こんな陰気な土地に生まれたのだろうかと思う。

彼は、母がなぜ、遠い異国からこの場所に嫁してきたのか尋ねたことはなかった。

人間の行動というものは、すべてがひとつの理由で動くわけではないからだ。

母は・・・また、すぐにパリに赴くと言っていた。ここは別荘程度で、滞在時間は本当に短か

った。

母として、腹を痛めて産んだこども達と一緒に居たいと思う気持ちを抑えて、マクドゥガル家の当主夫人として要求される諸事項に対応すると言うのは、何とも切ないことだったのだろうと思う。息子である彼でさえ、そう思うのだ。

けれども、マクドゥガル家の血を引く彼がそのような辛酸を嘗めることは仕方の無いことであったが、彼女は・・・この家の者ではないのだ。

排他であることが優れているとは思わない。

そして、彼女が居なければ彼は生誕しなかった。

でも。

・・・もっと違った人生を歩めたはずなのにと思わざるを得ないのだ。

もっと平凡で・・・もっと静かで・・・もっと安らげる場所について、青磁は彼女に選択肢を与えなかったのだろうと思うと憤りも増すばかりであった。

若い頃に知り合い・・・彼は彼女を連れ帰った。この家に連れてきた。

遠い東の国の娘を妻にすると言って、彼は数年間、それを言い募った。

彼女を娶れないのであれば、当主の座を捨てるとまで言った。

その頃には、青磁が当主の後継として広く認知されていた頃なので、皆が慌てた。

彼が連れてきた東の国の娘は、マクドゥガル家の望む通りの娘であった。

文句の付けようもなかったし、何より彼女には後ろ楯もあった。

代々、縁続きの者を血縁としてきたマクドゥガル家とまったく縁の無い者であったが、彼女はそれでも努力し続けた。

青磁が途中で、彼の運命を放棄して諸外国に放浪し始めた理由を承知していながら、それでも青磁が学ばなければならない様々なことも学ぼうとした。

青磁は怠惰であったのではない。

けれども、誰かを深く愛さなければ、彼自身が壊れてしまうと思えた程に、愛に渴望していた。

その依り代というか、土台に母を選んだのであれば、青磁の選択は正しかったと言うべきなのかもしれないが、彼にとっては・・・ただ、哀しい悲劇の始まりでしかないと思えた。

本来ならこの土地に縛られることのない国の人であったはずなのに、青磁が連れ帰ってきてしまったから、彼女はいらぬ努力を繰り返している。

今になっても、彼女を受け入れない者たちが居るし、交流範囲を広げていく中で、少なからず嫌な思いもしたはずであった。

必要の無い煩わしさを彼女に与える青磁という男が・・・どうにも苛立った。

なぜ、マクドゥガル家の悲劇を繰り返すようなことをするのか、理解出来なかった。

この家には、かつて、口にするのも憚られるような惨劇が起きた。その頃の話は、今でも詳細を語る事が禁じられている。禁じたとしても、余りにも哀しすぎて切なすぎて誰も口に出来ない話

であった。

面白おかしく口伝えすることは許されていない内容であったから、彼もそれほど多くのことを聞いていたわけではなかったが、青磁は当主であるので、すべてを知っている。それなのに・・・彼女を縛り付けて、青磁の唯一の朝顔だと公言する。

わかっている。これは愚かな独占欲であるし、世の家族の中では、比べる必要はないけれども、彼は幸せな部類なのだと承知している。けれども・・・どうにもならない苛立ちや悶えが、彼の中で消滅しないのだ。

だから、母が彼に声をかけてくれたことが嬉しかった。

その時間が訪れるまで、大変に長い時間に思えて仕方が無かった。

他のこども達が寝静まる頃を見はからって来るように、と言われて、彼は秘密の約束に胸が躍り、あと幾つ瞬きすればその時間が到来するのかと思った。

旧離れと言われている棟は、一部焼失したものの、昔のままになっていた。

音楽室があり、そこには定期的に調律されたピアノが置いてあったりする。・・・昔は体が弱くて就学できなかったり、学校に通う必要が無いとされていたりした時代もあり、その頃に家庭教師を招いて音楽のレッスンを受けたのだと言う。

現代にはそんなことはなかったが、それでもその時の名残をいくつも残す古い旧棟が、彼は好ましく思えた。

それに、その音楽室の扉から外に出ることが出来て、その路は杜の奥まで続いている。

まだ小さなこどもが居るのでそこは幼いこどもの出入りは、大人の同伴がなければ許可されていなかった場所であったが、このほど、彼はひとりで邸内を出歩いて良い年齢を迎えた。少なくとも、深夜でなければ、自由に移動できる。

誰も咎めはしないのに、彼は足音を忍ばせて邸内を幾度も歩き回った。時間が到来するまで、待ちきれなかったからだ。夜の屋敷は日中より更に静かで・・・本邸と言われている、こども達が過ごす場所より薄暗くて少しひんやりしていた。

●05

冷え込んだ空気を吸いながら、彼は空を見上げた。

音楽室から抜けた、杜に向かう小径の続く内庭に出ると、そこから空がよく見えた。

乾燥して冷え切った空に浮かぶ星は冷たく鋭く瞬いていて、時折、杜がそよぐ音が聞こえる。小さなこどもが居るので、出入りに注意するための柵が設けられていたが、彼の身長ではそれは呆

気なく乗り越えられる高さでしかなかった。

しかし、青磁のこどもたちは好奇心が旺盛で、その先を知りたがったので、柵の前にこども達がそこで興味を留めるように、遊具が設置されてずらりと並び立って、小さな公園に様変わりしていた。

その先の杜の奥に、何があるのか彼は知っている。まだ全てを知っているわけではないけれども、決して足を踏み入れてはいけない場所がこの杜には幾つかある。

昔の風情を再現させた小さな小屋みたいな屋敷であったり、移設されて日が浅い墓標があったり・・・留守にしがちなマクドウガル夫妻が教えないと決めた秘密が、そこかしこに眠ったままになっていた。

いつまでも隠しておけるわけではないし、口さがない使用人達や、土地の者たちからそれとはなく聞いていた。

マクドウガル家の悲劇については、記録が残っていない。少なくとも、この家の中には。けれども本当はどこかに封印されていて、知らないだけではないのだろうかと考えている。

彼が知りたいのは、噂や伝説ではなく事実であり真実であった。

彼女は知らなくても良い秘密なのに、青磁はそれを彼女に背負わせている。そんな気がして仕方が無かった。もっと自由に、もっと伸びやかに彼女は笑って太陽の様な優しさをこども達に注ぐことがあっても良いのではなかろうかと思うが、彼にそれを言う権利はまだ許されていなかった。

静かで杜の木々の声が良く聞こえた。彼は音すら色に残したいと思っていた。温度すら、絵にしたいと思っていた。この土地は確かに鬱屈としており、陰気で寒々としている。けれども、ここは彼らが生まれ育った土地で、そして自分はマクドウガル家の継子であるという誇りが彼にはある。

しかし、それはいつでも捨ててしまえば良いと思っていた。

彼女と結婚できないのであるならば、後継者としての権利を捨てると断言した青磁と同じとは思っていない。

何かを引き替えにして取引するような恋愛であるならば、最初からしない方が良いと思っていた。

だから、なぜ、彼女が何も意見を述べないのかが不思議であり、今夜こそその話が聞けるのかと思うと、大きな昂揚が彼を支配することになったことについて、彼は歓迎の姿勢を取ることにしたのだ。

「待たせて、ごめん」

いつの間にか、空から落ちてきそうな星々を眺めながら時間を過ごしていた。

彼の背後から声が聞こえて来た。

彼女の声だった。

「いや・・・今来たばかり」

「嘘つきね」

彼に近寄ると、彼女は彼の手を取り、小さな両手で彼の手を包んだ。包みきれない彼の指先がびくりと動く。こんな風にして触れられると・・・困る、と思った。

少女のようなあどけない顔立ちは東洋人特有であったが、それでも彼女はいつまでも若かった。苦労を知らないからというわけではない。その逆で、様々な場所を青磁と一緒に歩き渡り、そしていつも何かを憂えて居るから時間が止まったのだろうと思った。

陰鬱な顔をして周囲の者を心配させたり不安にさせたりすることは、彼女の本意ではないことを彼は承知していた。

だから本当は、こども達を置いて留守にすることについていつも、すまないという気持ちを強く持っているのは、マクドゥガル家の血族ではない彼女なのだと彼は思っている。

彼女は厚手のガウンを着て、髪を後ろで緩く束ねていた。化粧つ気はなく、青白い顔が見えた。邸内のほとんどの照明は落とされたが、主寝室といくつかの部屋はまだ灯りが点いていたので、その淡い光が彼女の頬を浮かび上がらせていた。

本当に小さな人だ。

彼はそう思った。この小さな東洋人の体の中には、青磁やマクドゥガル家を動かす情熱が秘められている。そして、その血が彼の中にも混じっていると感じる。

この人が、母でなかったのなら間違いなく、どんなに年齢差があっても彼女を娶ると言って夢中になったのだろう、と思った。

思慕の情ではない。彼女は本当に素晴らしい人だと思っていた。

もちろん、口に出すことはなかったけれども、態度に出してしまうのだろう。

きょうだいには「兄様は母様が大好きだから」と言われるが、それはまったく見当違いのことはなかった。

あたたかくて優しいからという理由からではない。皆は、彼女の労苦を半分程度しか知らないのだと思った。

この家に入るのには相当な辛苦を味わったことだろうし、青磁が耳に入らないように配慮してお入ってしまう、マクドゥガル家当主への憤懣について知らない彼女ではなかった。

しかし、彼女はこの家に滅多に生まれないとされていた男子をもたらしただけではない。彼の下には弟が居る。どちらも健やかであった。

だからこそ・・・彼女は最も大事にされなければならない人であると、彼は主張するのに青磁に彼の声は届かなかった。

傍に寄った彼女からは花の匂いがした。彼はどきり、として彼女のあたたかい手から自分の冷え切ってしまった手を除いた。そして彼は彼女の両手首を柔らかく注意深く掴み、彼女のガウンの外ポケットに入れてやった。

「冷えるよ」

そつと言うと、優しいのね、だいじょうぶよ、と彼女は笑った。

こうして彼女とふたりだけの時間を持つことはほとんどなかった。

ほとんど邸にいないので、幼い子ども達との時間を優先しがちになり、長子の彼に巡ってくる時間はとても短いものであったからだ。

それでも、邸に居る時の彼女は朝晩の挨拶も欠かさなかったし、一番我慢しているのは彼だからと言って言葉をかける彼女の優しさがなければ、彼はきっとここでやっていけなかっただろうと思う。

どれほど周囲の者が彼に傅いても、それはまったく別のものであり、彼が欲しいのはそんなものではなかった。

「何だか、秘密の会合みたいね」

彼女はそう言って笑った。外でなければできないような話なのだろうか。そうしたら・・・一体、それはどんな話なのだろうか。

「疲れているのなら、いつでも良いんだ。・・・話はいつでもできる」

決してそうは思っていないのに、彼は彼女にそう言った。すでに、彼女の身長を超えた彼女の前髪が、彼の目線のすぐ下で揺れていた。

秀でた額が見え隠れして、そこに唇を寄せることのできる青磁という人物を妬ましく思う。

彼も大きくなった。彼女を守れるほどに、成長したと思う。それなのに、青磁は彼を彼女に近付けなかった。まるで攫い取られて行くことを懼れているかのようなのであったので、彼は苦笑する。

そんなことはしない。彼女が愛しているのは・・・夫と定めたのは、青磁だからだ。

いつまで経っても盛りのついた獣のように彼女を片時も離そうとしない青磁の愚かしさだけが目に付いた。彼ならそんなことはしない。

自由にさせる。

就寝前の自由時間しか与えない、牢獄のような日々から解放してやれる。

性急に話を始めることはしなかった。こうしていつまでも・・・可能な限り、空を一緒に見たいと思っていたからだ。その気持ちが伝わったのだろうか。

彼女も上を見上げて、星のきらめきに眼を細めた。

●06

「なかなか時間が取れなくてごめんなさい」

彼女はそう言って彼に謝るので、彼は首を横に振った。

彼は、謝罪を求めているわけではない。ただ、彼女と話ができるということだけが嬉しくて、ここにやって来たのだから。

「いいんだ」

他の者たちは彼女を独り占めできなかつた。彼だけが、他の者より先に生まれてきたので、彼女を独占できた。けれども、彼だけが・・・独占できたことによる独占できない苦しみを知っているのだ。

短い会話であるのに、とても胸苦しくなる。それなのに、中斷したいとは思わない。こういう風にして、焦がれる気持ちを何と言ったら良いのか、彼はまだわからなかつた。

「そう思ってくれているだけで・・・それで良い」

徐々に掠れていく声が、自分のものではないように感じた。喉が渴いているわけでもなかつた。彼女の前では、いつも緊張し声が固くなってしまう。

そんな彼の仕草を、彼女を厭っているから故の動作であると思つて欲しくなかつた。

彼女はいつも・・・彼のことを気に懸けていることは知っていたから。

だから他の家庭と同じでなくても良かった。いつも両親が不在で寂しいと涙するきょうだい達を宥めた。

ありふれた日常より、こんな風にして・・・滅多に訪れない星空の夜を迎えることができるのであれば、彼はいくらでも我慢できると思つた。

彼は麒麟の子だ。この家の者たちが願っていた、待望の男子であつた。青磁がもたらした栄光が一瞬ではないことを示すための象徴であつたけれども、彼はそれ以上になる自信があつた。けれども、それは彼女が支えてくれていてからこそである。自分の生まれの源を司る彼女と一緒に居られれば、それで良かった。母を求める情だけではない感情が・・・誰にも言えない秘めたる想いであることは承知の上であつた。彼は、それでも彼女の笑顔を見ていたいと思つたのだ。

誤魔化したりないことにするつもりはなかつた。誰にも言えない気持ちであるからこそ・・・それを強く持ち続けることが、彼がこの家の継子であることを証明する手楯なのだと思つていた。

彼女はそんな彼の様子をしばらく見つめていたが、話を切り出すことにしたらしく、既に彼女の背を越えてしまった彼に向かって、そつと言つた。

言い聞かせても、青磁に対する彼の不審は止まらないだろうと思つたようだ。それは事実であつたので、否定する気持ちになれなかつたが。

言い聞かせても止まらない。

青磁が彼女を静かに徐々に殺めているのを止めることができるような年齢に近づいて来た。だから・・・だから、はやく彼女に追いつきたかつた。ひとりで苦しんでいるのであればそれを分かち合いたかつた。

あと一息だという瞬間が最も苦しいのだと、身を以て知った。

この土地の奇妙な風習が、彼女を蝕んでいくことを憂えて、青磁がマクドゥガル家に在留しないということは明白な事実だった。それなら、こども達はそのままにしておいて良いのかと苛立ちさえ覚える。

彼女のことが、それほど大事なら・・・なぜ、何もかもを捨て去る決意を持ってなかったのだろうか。

「またすぐ、パリに発つ。お土産は・・・」

「いらないよ。元気に過ごさせていれば、それが一番だから」

「あなたは、時々・・・喫驚することを言うのね」

彼女は笑いながらそう言った。誰に似たのかしら、と言葉が続くかと思ったが、彼女はそのまま空を見上げた。

「・・・空は繋がっている。だから、もう少しだけ待っていてくれる？」

白い横顔を見つめながら、彼は何も言わずに下を向いた。

「・・・オレは待っているだけしかできないのか？」

彼がそう言ったので、彼女は目を細めて彼を見上げた。彼女の目線の上に居る彼に足りなくて、青磁に足りているものが山ほどあったから、何が足りないのか聞くことはしなかった。

けれども、満たされているかどうかで彼女の傍に居ることの許可不許可が決まってしまうのであれば、彼は青磁が居る限り満たされないことになってしまう。

「お互いが健やかに過ごせますようにと願っている間は、どんなことがあっても辛くはない」

「・・・辛いのか？」

彼が少し驚いて尋ねた。彼女にそういう情愛が欠落しているとは思っていなかったが、それでも淡々と過ごしている様を見ると、こういう日常を受け入れているのだろうと想像していたからだ。

長い間、そんなことすら尋ねる機会がなかったことに・・・彼は身が震えるのを感じた。確かに、自分達は世の家族と違っていた。こんなことさえ、察することができなかったのかと思うと・・・ただ、愕然とする。

彼女は軽く首を振った。上から見下ろす彼女の瞳が、震えているように思えた。

「自分で選んだことだから、辛くはない。でも、あなた達と一緒に居られないことが苦しい」

「それなら、連れて行けば良いじゃないか」

そこで彼女は彼の名前を呼んだ。このことについては、物心ついた時から繰り返し話をされていることであった。やむを得ない事情であり、彼女が頻繁にパリに足を運んでいる事情も、彼は承知していたと言うのに。

それでも・・・それでも、こんな風にして彼女を困らせるつもりはないのに、つい、口に出してしまうのだ。

「あの人の具合が良くないのはわかっている。だから、元気なうちにこの土地に呼んでやりたいということも。でも・・・」

「それ以上は、言っては駄目よ」

優しく、けれどもきっぱりと彼女は彼を押しとどめてしまった。彼は唇を噛んで下を向く。どうして駄目なのだろうか。

マクドウガル家の子ども達が会ってはならない理由はない。

毎年、恒例で撮影している家族写真を彼女が持ち歩き、あの人に見せているのは知っていた。それを愉しみにしている人達がいることも知っている。

けれども、仏頂面の彼の表情は、いつになっても仏頂面であった。泡沫の家族ごっこをして喜ぶほど、彼は子どもではない。

他の家族達と違うことが悔しいのではない。

青磁を中心に、この家が回っているから気に入らないのだ。彼女はもっと自由に・・・伸びやかに和やかに生きてくれれば良いのに。

諭されたのに、彼はそれでも止められなかった。他のことは我慢できる。でも、彼女が辛いのであれば、こんな事はもう終わりにするべきだと思った。

「この家に尽くすことはない。・・・もう、十分だろう？」

言ってしまった、と思った。

言っただけではいけないとは思っていたが、とうとう、彼は口に出してしまった。

彼女には、皆が、頑張れと言う。そして彼女は無言で、何事にも真摯に取り組んでいる。それでも、どんなに懸命になっても、彼女は所詮、余所者としてしか扱われない。きっと・・・彼女が死んでもそのままなのだろう。

この土地の者たちは何代にも渡って住んでいる者たちばかりであるし、この家そのものがそもそも、古い時代の名残を懐かしむ傾向にあった。

青磁や彼が・・・その昔、稀なる麒麟と呼ばれた静流・マクドウガルと顔立ちが似ていることによって周囲の者が過大な期待を背負っていることや、彼の息子である誠次・マクドウガルの起こした惨事について知りつつもそれを払拭させるための偉業を為し遂げることに青磁が尽力していることや・・・その他、様々なことがまだすべて解決したとは言えなかった。

そんな渦中に放り込まれた彼女は、それでもなお・・・静かに、耐え続けている。

何とも言えない気まずい空気が流れた。互いに黙り込み、そして彼女は唇を横に引いて、堅い表情で彼に伝える。それは何度も言ったことであつたが、それでも繰り返し、彼女は彼に教え説いた。

「あなた達を、あなたを・・・愛しているの。だから、私にできることをしたいのよ」

「それなら、オレと行こうよ」

「どこに？」

「ここではない、どこか遠く」

彼の言葉に、彼女は笑った。決して嘲笑ではなく、哀笑でもなく、ただ、微笑むだけであった。

「あなたは、この場所がいやなの？」

「青磁がいやなだけ」

「どうして？あなたの父なのに？」

「だからこそ、という理由は認めてもらえないの？」

彼の言葉に、自分の血の流れを感じ、彼女はまたひとつ笑った。

「理屈っぽいのは、誰に似たのかしら。・・・誰も教えていないのに」

彼は彼女の笑顔を見ると、安堵する。どういうわけか、懐かしくなる。

「オレはまだこどもかもしれないけれども、すぐに追いつくよ。だから、もう、この家に縛られなくても良いんだ。こんな場所は、あなたには似つかわしくない」

そう言った彼に、彼女は静かに近寄った。

彼はどきりとして一瞬体を強ばらせた。

・・・彼女とこうして近くに寄ることは許されていない。

ある一定の年齢に達すると、男子は婦人に安易に触れてはいけないと教えられて育った。先ほど触れたのも、本当は咎められる行為であった。

彼はこの家の長男で、いずれこの家の当主になる。古くさいしきたりや儀礼という言葉は薄れた時代になったが、それでもまだそれらが存在することを否定できなかった。

しかしそれには例外がある。相手から近寄った場合には、それは適用されない。

今、彼女はそれを十分に知りつつも、彼に触れようとしたので、彼は身を引いたのだ。

彼女は、そっと、彼の手を取った。互いの温度は、冷氣によって少し低くなっていたが、それでも、温かかった。

彼女の温度を感じて彼は唇をぎゅっと噛んだ。

両手を包み込み、今度は彼女が彼に体温を捧げる。

「あなたが思う以上に、私は幸せなのよ。・・・だから、今もここにいる」

あまり口数の多い方ではない彼女が、そう言って彼に囁く。彼の頬が熱くなっていく。

こんなに近い彼女を感じて、彼は・・・高鳴る心臓の音が彼女に聞こえやしないかと心配になった。

緊張で、頬を引き締める。

そして吐息を漏らすことすら躊躇われる程に近い距離に居る彼女を見つめた。

どうして、彼女は・・・こんな風に簡単に彼を乱すことが出来るのだろうか。

「そんなに、オレ達のことを忘れてしまうくらい・・・置いていってしまうくらい、あの男の傍に居たいの？」

それを聞いた瞬間、彼女がぴくりと肩を動かした。彼はとうとう、聞くまいと思っていた質問を始めてしまった。

どちらかを選べという酷な選択を強制してしまった。彼女はそんな話をしたかったのではないのだろうか、それでも確かめずにはいられなかった。

自分は、愛されているのだと。

これほど気に懸けるくらいなら、連れて行けば良いのに。それなのに彼女はこども達を置いて行く。

このまま・・・どこまでも逃げたい、と思うのは、彼がそう思っているのだろうか。それとも、彼女から伝わる温度がそう感じさせているのだろうか。どちらでも良かった。ただ、彼女の傍に居たいという気持ちだけが、彼を動かしている。

「滅多に日本に戻れなくても、家族に会えなくても、それでもここに居る理由はなに？オレ達が原因なら、一緒に日本に移り住んでも良いと思うよ。・・・あの男は傲慢だよ。あいつは、あなたを独り占めにしてばかりいる」

母を求めるこども達を置いて、青磁は彼女と一緒に連れ歩いてばかりいる。決して片時も離そうとしない。

彼女は、そんな青磁の傍に居て、息苦しくならないのだろうか。それとも・・・それほどに彼を愛しているのだろうか。血肉を分けた者を置いても、それでもなお、一緒に居たいと、彼女が願っているのだろうか。

「私の家族はここに居るわよ。それに、青磁も私の夫なのよ」

彼女は静かにそう言って、彼の手の甲を包んだ。親指の腹で、彼の甲を撫でながら彼女は穏やかにけれども明然として語った。

そして彼の顔を覗き込んだ。彼女と彼の前髪が、触れてしまいそうになるくらいに近く。彼は体を強ばらせた。きょうだい以外に、これほど近くに誰かの顔を寄せることはなかったからだ。彼は青磁とよく似た顔で彼女の瞳を見つめ続けた。

彼にも紫電と呼ばれる強い視線は備わっている。誰もが、彼の両の瞳から眼を逸らすことが出来ないと言う。けれども・・・彼女の瞳こそが、紫電であると思った。眼を逸らすことが出来ないほど、惹かれるのだから。

当主の少年時代の顔つきに似てきたと言われる。彼の年齢の頃は既に眼疾患の兆候が出ており、青磁はしばし家族と離れて暮らしたり、謂れのない伝染性疾患を疑われて血族達から隔離に近い

状態で放置されていたりした。

その頃の記憶が、今でも青磁の中に残っており、この家で暮らすことが青磁の苦痛であるのなら、それを彼女に背負わせることはないのだ。しかし、長い時間留めて置くこともできないとも思っているのであれば・・・なぜ、土地を捨てて彼女を選ぶことのできない男の傍に、彼女が寄り添うのか・・・彼はそれが知りたかった。

「いつか、理由がわかる」

彼女は彼の考えを察知して、そっと言った。

「オレがまだ大人じゃないから、わからないとでも？」

「そうではない」

彼女は首を振った。額の上に乗っていた髪が揺れて、彼の髪に絡まった。

・・・彼はゆっくりと瞬きをした。

瞼を閉じたままにも、開いたままにもできないほど、苦しかったからだ。

彼女は踵を上げて、俯いた彼の額に自分の額を当てた。

「青磁はいつもあなた達のことを心配している。できることなら、一緒に連れて行きたいと思っている。いつも、いつも。私が呆れてしまうくらい、彼は家族を愛している」

「オレはあいつの話を聞くのはうんざりだ。あなたがどれほど気遣っても、青磁はあなたを蔑ろにする。だから、オレはあいつを好きになれない」

「どうか、そんなことを冗談でも言わないで。あなたの父なのよ」

「戯れ言で言えるくらいなら、もっと言っているよ」

彼は正直にそう言った。きょうだい達は青磁を父と呼び、慕っている。会えない時間を埋めるように、青磁はこども達と静かな時間を過ごそうとしている。

しかし、彼にはそれがどうにも偽善的であるとしか思えなかった。

常々、ここは動物園みたいだと思っていた。気が向いたときだけ愛でにやってくる青磁は、まさに父という名の観光客でしかないと思っていた。

「理由があることは承知している。でも、そのことと、あなたを連れて行くことは別のものだ。・・・あいつと別れてくれとは言わない。けれども、もっとあなたを必要とする人達がいることを忘れて欲しくないんだ」

彼女は彼の名前を呼んだ。

杜が揺れて、葉音が聞こえて来た。

しかし、それ以外はまったくの無であった。

温度は冷たい夜の空気に吸い込まれて行き、星々はそれを吸って輝きを増すようだった。彼女の嘆きも哀感もすべてを、この家は呑み込んでしまう。

周囲は暗くて静かであったので、彼女の溜息は大きく響くように彼の耳に届いた。

「私も、いつも思っているわ。いつも、いつも」

「わかっているよ、そんなこと」

彼は眉根を寄せて、彼女の額から伝わる声を彼の額で受け止めながら、言った。

彼女は悪くない。悪いのは、青磁・マクドウガルだ。

他のきょうだい達がそれで良いと言ったとしても、彼は許すことは出来なかった。

青磁は、彼から母を奪い、父という名前でもって、彼を縛っている。

彼は彼女の額から自分の顔を引いて・・・そして彼女の髪に、頬を埋めた。

●08

彼女の髪は柔らかかった。そして、優しくて懐かしい匂いがした。

「急いで大人になる必要はない」

彼女は彼の背中に腕を回しながら、そう言った。自分ができることの少なさを痛感する。今すぐにできることが、彼には何もなかった。ただ、待っているだけしかできなかった。

「待つというのは、辛いな」

彼がそう言うと、彼女は含み笑いをした。

「青磁も同じことを言った。今でも、時々言うけれど」

「あいつと比べないでくれ」

「比べているのではない・・・ただ、嬉しいだけ」

彼女は彼の背中に回した腕を伸ばした。彼の背中の上で、自分の左側の手首を右手で受け止めると、彼女は目を細めて愛おしそうに彼を抱きしめた。

「もうすぐ、腕が回りきらないほど大きくなる。そうなったら、ずっと一緒に居られる。その時にはもう、一緒に居たくないと言うかもしれないけれども」

「それはあり得ないよ」

彼は即答した。一度も、そんな風に思った事はなかった。

「オレが迎えに行くまで、待っていて。もう少しだけ」

俯いたので、伸びた前髪が彼の通った鼻梁に乗った。片方だけ薄い瞳の青磁が少年時代に瞳の差異を指摘されることを厭って前髪を長めにしていたという語り話を思い出した。彼は彼女を見つめていられなくなるほど苦しいのに、彼女は青磁を基軸にすべてを考えている。

彼女の愛が、愚かしいとは思わなかった。けれども、籠の鳥のように彼女を閉じ込めている青磁がどうにも気に入らなかった。

胸が張り裂けそうになり、叫び出したくなる衝動を抑える。

ただそれだけで・・・精一杯だった。

だから、彼は彼女の話に耳を傾ける努力を怠りそうになってしまう。

「急がなくて良い。・・・ゆっくり、大人になって」

「いやだ」

彼がそう言ったので、彼女は彼の肩に顔を預けた。さらに彼女が近くなり、彼はかっとなら顔が熱くなった。

それでとうとう、彼は限界を超えて叫んだ。

「青磁のところに行くなよ。いつまでも・・・ここに居てくれ。なぜ、青磁の血縁だからという理由で、パリのあの人のことに、あなたがこれほど時間を割かなければならないのか、理解出来

ないよ。家族を置いて、時にはひとりでパリに残されて・・・そこまでして、あの人をこのマクドウガル家に招きたいのであれば、さっさと連れてくれば良いんだ」

「待って、待って」

彼女は息子の名前を呼んだ。急ぎすぎるきらいのある彼を制止することはできそうもなかった。彼は確かに・・・青磁・マクドウガルの息子であったが、同時に彼女の息子でもあった。

「オレ達と・・・オレと・・・青磁のどちらかを選べとは言わない。けれども、あなたが本当はどう思っているのか、聞きたい」

彼は掠れた声でそれだけ言った。

そして、彼も彼女の背中に腕を回した。

思い切り、抱きしめる。

こんなに小さくて華奢な人なのに。

青磁は彼女にまたひとつ重荷を持たせようとしている。

彼女は間もなく、マクドウガル家の者ではないのにマクドウガル家の象徴のひとつになる。

朝顔を刻んだマクドウガル家の紋は、正式なものとして認知され始めた。

もう少しして、彼が大人になり、当主に就任すればそれは確固たる事実となる。

なぜなら、青磁が彼女のことを朝顔の人、と呼ぶからだ。

彼の唯一の女性という、最上の経緯を表した尊称であった。

その時・・・静かに、彼女の肩が震え始めたので、彼は顔を上げた。

寒さに凍えて震わせてしまったのであれば、こんな夜更けに彼女と星空を見ることに浮かっていた彼の責だ。

誰も来ない場所で、彼女が話をしようと言ったのは・・・彼が彼女とふたりだけの時間を過ごしたいと思っているからだ、彼女はよくわかっていたからだ。

彼のことを理解できる唯一の女性は、彼のたったひとりの人であった。それは生涯、変わらない。これほどまでに彼女を求める気持ちが、他の者より強いのは、彼の中に流れる狂気の血のせいだと思った。

マクドウガル家の惨事のことを想像するだけで、身悶えしそうになる。いくら過去のことであっても、そんな土地にこども達を住まわせている青磁の気が知れなかった。・・・平然としている青磁も本当は狂っているのだろうかと思える。

けれども、彼女は寒さで震えていたわけではなかった。

・・・涙を流し始めたのだ。

彼の言葉に、彼女はただ・・・声を殺して涙を目の縁から流し落としていた。

肩が濡れて、瞬時に冷たくなる涙の温度を感じ、彼は狼狽した。

泣かせるつもりはなかった。

「ごめん・・・オレ・・・」

彼女は、ただ、声もなく重い呼吸をするばかりであった。

彼のどうしようもない思いが、彼女を苛んだ。

どんな言葉をかけたら良いのか、わからなかった。

先ほどまで、微笑んでいた彼女が、瞳から大粒の涙を流し、瞬きをする都度それは零れて頬を滑り、彼の肩や首を濡らしていく。冷たくも熱い涙が、彼を乱していた。

駄目だ、このままでは・・・

彼は眼を瞑り、歯を食いしばって、彼女と同じ様に細かく鳴動するばかりであった。

なぜ、彼女を笑顔にさせることができないのだろう。

いつもいつも、彼女のことばかり考えているのに。どうしたら・・・どうしたら、彼女は幸せになるのだろう。自分は、一体、どうしたいのだろう。

その時のことだった。

彼女の顔が乗った肩と反対側が、何かに掴まれたと思った時に、我に返ったがその時はもう彼は抗えない力によって

彼は、強い力に引かれて、彼女の躰から強制的に離された、と思った時には背中から地面に叩きつけられていた。

彼女の悲鳴が聞こえる。そして、彼の名前を呼ぶ声が静かな周囲に響き渡った。

次には、彼は背中を強く打ったので、呼吸ができなくなるほどの重い圧迫を肺に感じ、しばらく呼吸できずにただ、胸を押さえて蹲るだけであった。

冷えた土の匂いがした。

そして自分の口にも同じ匂いが広がっていくのを感じる。

倒れた拍子に口の中を切ったらしく苦い血の味と溢れる液体が自分の唇の端から零れた。

「・・・何するのよ、青磁」

彼女の鋭い声が聞こえて来たが、彼の視界に広がるのは、たくさんの星々が輝く空と僅かに見える杜の端であった。起き上がることもすらできないほど、息苦しかった。

彼女の駆け寄る足音と、それを阻む人影が見えた。

・・・それは確認するまでもなかった。その人影は、青磁・マクドウガルであることは間違いなかった。

緊迫した彼女の声に、痛みに耐えながら彼は頭を持ち上げる。

・・・彼女は倒れた彼に腕を伸ばしているのに、青磁はそれを制止して彼の胸の中に彼女を捕らえている姿が見えた。

広くて大きな背中が見える。・・・夜着の上に厚いガウンを纏った青磁がそこに居た。彼は、低く呻いた。

●09

「青磁」

彼女が詰問するような口調で彼の名前を呼んだ。それだけで十分な非難であったが、青磁は彼女の軀を抱き受けたまま、冷静に言った。

「君を泣かせるからだ」

「あなたの息子なのよ。乱暴するなんて・・・」

「乱暴じゃない。躰だ。・・・親を敬わず、泣かせるなんて、息子として最低だ」

青磁の腕を、彼女が憤りに任せて叩く音が聞こえたが、厚手の上着はその音も衝撃も吸収して、乾いた小さな叩音しかしなかった。

彼はその声を聞いて、ゆっくりと起き上がる。・・・呼吸が楽になるにつれて、背中と腰の痛みが増してきたので、顔を顰めた。けれども、彼女のことが気になって痛みを耐えながら体を起こすと、そこにはこの家の当主が彼女の頬を濡らす涙を、大きな手の平で拭いているところであった。

けれども、反対側の腕は彼女の肩をしっかりと抱きしめており、彼女は青磁の胸の中で身悶えしていた。

「何を言っているの！」

彼女は怒りで顔を赤くしながら言った。彼女は夫の無謀さに呆れながらも、感情のままに言葉を出してしまわないように律そうとしている姿に、青磁は眼を細めていた。

彼とよく似た顔の男性は、彼女の軀を覆い尽くしていた。彼にはまだ、それはできない。

それから、青磁は彼の息子を一瞥した。普段とは違う顔つきだった。

かなり不愉快そうな顔を露わにしていた。

そして、溜息をひとつ漏らすと、彼に向かって言い放った。

「お前がこの人の息子でなかったのなら、首を絞めるか、歯の一本くらいは折っていたかもしれない。・・・わかっているだろう？オレとお前の中に流れる血というものは、そういうものだ。・・・忘れるな」

青磁は言い終えると、彼女の手首を掴み、自分の頬にあてた。冷たいな、と言った口調は優しく、彼に言いおろした様子とはまったく違っていた。

「君を泣かせるからだ。殴らないだけマシになったと言ってくれよ」

「青磁、青磁」

彼女は弱り切った声で青磁に呼び掛ける。

「人払いをして、誰も来ないようにと指示していたのをオレが知らないとでも思ったのか？ 甘い。どれくらい長い時間の付き合いだと思っているんだよ」

青磁の口調は若かった。青磁と彼女の間の会話は、ふたりきりの時には、彼の知らないふたりになるのだろうと思った。

それから、青磁は彼の名前を呼ぶ。抗い難い声音が降って来たので、彼は痛みを堪え、立ち上がった。力ではまだ、勝てなかった。青磁の口調には当主としての誇りと強さと自信が満たされていたからだ。口惜しいが、青磁・マクドゥガルには逆らえない何かがあった。

彼の視線は鋭さを通り越して痛みさえ含まれていた。かなり憤慨していることがわかる。片方だけ薄い瞳が、彼を見下ろしていた。

「彼女を焦がれるのなら、選ばれてみろ。彼女の待ち望んだ、すべてを平らかにする麒麟になれるのであるならば、認めてやる」

そこで、青磁の耳を飾るピアスがちかりと光った。麒麟の紋が入ったものだ。青磁の生まれる前から、青磁の誕生を願っていた人がいる。青磁の持つピアスとほぼ同じものを持つ人物が、パリにもうひとり、居る。その人のピアスには、すでに朝顔の刻みがあった。

それから、彼女にごめんよ、と囁くと、青磁は頬を傾けて、彼女の抗議を唇で塞いでしまった。声にならない声が、彼女の喉から漏れるがそれでも青磁は彼女の濡れた頬に自分の頬を押し当ててただひたすらに彼女の唇を貪った。激しい口吻に彼はただ啞然としてそれを見つめる。一組の男女の交わりに、彼は羞恥で紅潮する余裕さえなかった。

青磁の一方的な抱擁に、彼は啞然としてその場に立ち尽くし続けた。

青磁の中の激しさが、自分のそれと共鳴したからだ。

・・・自分の身体が震える。

それは彼女の涙と青磁の怒りが混じったものであった。

青磁は怒っている。

そして哀しんでいた。

背中で怒りを露わにしていたが、その勢いに任せて彼女を蹂躪しているのではなかった。

それでも・・・それでも、彼女を独り占めする青磁をとうてい許すことはできなかった。

彼女が邸に居る時は、いつもよく眠れない。

目醒めた時に、すでに出発してしまっていないかどうか確認してしまうからだ。

彼女が邸に居ない時は、いつも口数が少なくなる。

ひとこと話す都度、彼女の声을忘れてしまいそうになるからだ。

「何だよ・・・オレは絶対に、認めないからな。オレは、あんたを認めない」

彼はそれだけ言うと、顔を上げた青磁を睨み付けた。彼も顎を上げて、青磁を威嚇する。

「いい加減、母親離れしたらどうだ。見苦しいぞ」

「うるさいな」

「青磁、離してよ」

三人三様の言葉が入り乱れていた。しかし、杜は相変わらず僅かに揺れるばかりであり、星の煌めきは夜が更けて行くにつれて徐々に濃くなっていくばかりである。

青磁はその様子に決着をつけるために、彼に強い口調で命じた。驚きのあまり、涙を溢したままの彼女を抱きながら、彼は言った。そして不敵に笑う。

・・・青磁もまた、彼のことを息子として見ているだけではないという挑発であった。

青磁は彼女の姿を自分の身体で覆い隠してしまい、彼の視界から消し去ってしまうと肩越しに振り返ってまた嗤った。

「・・・ここから先は、こどもには刺激が強いが・・・見ていくか？」

彼は低く唸りながら、青磁につかみかかろうとして一步、足を前に出した時とほぼ同じに、ぱちんと、音がした。

彼女が青磁の頬を打ったのである。しかも、手加減無しに思い切り強く。

彼女にはまったく警戒していなかった青磁は、頬を勢いよく打ち据えられて、横を向いてしまった。その隙を狙い、彼女はするりと青磁の腕から抜け逃れる。

「一体、何をしているのよ」

彼女の語気の強さに、青磁も彼もしばし呆然として彼女に視線を注いだ。

普段声を荒げることはしない彼女が、厳しい顔で彼らを睨んでいたからだ。

青磁の凄みをも越える程の様子に、青磁も彼も黙り込んで、それまでの勢いを鎮めていく。

彼女は青磁の肩を思い切り拳で叩いた。青磁は顔を顰めるが、決して抗おうとしなかった。

「親子で何をしているの、と尋ねているのよ」

まったくもう、と彼女は大きく溜息をつき、自分の頬を手の甲で拭った。

「青磁、あなた、また隠れて煙草を吸っていたのでしょうか」

彼女の詰問に、青磁は声を詰まらせた。濡れた大きな瞳が開き、彼らを威圧した。

青磁は妻の問いに肩を竦めた。

「誰も来ないと思っていたら、君がこっそり隠れるようにやって来て、オレにも気がつかない。しかも、その次には、息子が浮かれた足取りでやってきて、こちらの気配にも気がつかないでいる。・・・黙って見ていようと思ったが、そうもいかなくなつた、と言つてもまだ怒るのか？」

「話をはぐらかさないで。煙草はいけないとあれほど言ったでしょう」
彼女の気迫に押されて、青磁は少年のように頬を膨らませる。

●10

自分よりずっと背の低い彼女に叱責されて、少年のように凋む青磁がそこに居た。

次いで、彼女は彼の方を見たので、彼は緊張のあまり、背を伸ばした。

「あなたもあなたよ。いつまでも・・・青磁を認めないと言い続ける限り、青磁はあなたを連れて行けないじゃない」

それから、再び彼女は青磁の方を向いた。まだ、険しい顔をしていた。

「私、今夜は下のこども達と一緒に寝ます」

青磁が彼女の名前を呼んだ。けれども、彼女は青磁に横顔を見せて憤懣を露わにした。

「もう、勝手にすると良いわ。親子でいがみ合つて、何をしているのよ。何をしたいのよ。馬鹿馬鹿しくて、呆れるを通り越して何も言えない」

そして、彼女は一度だけ夜風に身を震わせると空を見上げた。

「・・・ここは誰が何と言おうと、私のもうひとつの故郷よ。だから、安心してこども達を預けておける」

彼は言葉にできなかつた。彼女がもうひとつの故郷だと・・・この土地のことをそんな風に言ったのは、初めての事だったからだ。

どれほど哀しいことがあつても悔しいことがあつても、彼女はいつも何も言わなかつた。じっと耐えているだけで、それを自分の事のように感じて彼は苦しかつた。

何でも知りたかつた。彼女のことなら、何でも。

これは、青磁から受け継がれている想いなのだろうか。それとも、もっと前から繋がっている想いなのだろうか。

誰かを大事だと思ふ気持ちは・・・誰にでもある。

彼女の中にも、彼と同じものが流れている。

そう感じる瞬間であつた。

「あなたのことは何でも・・・何でも知りたいし、どんな些細なことでも私はあなたを知りたいの」

彼女はそれだけ言うと、青磁と彼から離れた。

彼がいつも思っていることと、同じことを彼女が思っていた。

それだけで、歓喜が彼の体を駆け抜ける。

彼女を笑顔にしたい。それだけなのに。うまくいかないから、だから彼は不機嫌なのだ。わかってきたことなのに、それを伝えることは難しい、と思った。

「だから、短い時間で良いので、青磁と話をして欲しい。・・・私が話したかったのはそれだけよ。・・・もう休みます。私の自由になる時間はもう終わり。でも、また明日が来るから。だから・・・おやすみなさい」

優しく教え諭す彼女の言葉に、彼は黙ったままだった。そうだね、と賛同するにはとても難しい課題であった。

「冷たくしないでくれよ。・・・君がいない寝室に入る気がしない」

「それなら、ふたりで眠れば良いでしょう。親子なのだし」

彼女がつれない返事をするので、青磁と彼は同時に溜息を漏らすと、彼女はそれを聞くなり唇の端を持ち上げて微笑んだ。

「ほら。・・・そんな様子はとても似ているわよ。青磁。

そろそろ、認めたらどう？あれほど待ち望んだ男の子なのに、どうしてそんな風にするの？

ただ・・・照れているだけとはやく言ってしまえば良いのに」

青磁が、妻の名前を呼んだ。けれども、彼女は少女のように爽やかに嗤っただけだった。

「彼の紋にZを入れた理由を、そろそろ、教えてあげるべきよ」

彼は彼女がそのことについてとうとう話題にしたので、ぎゅっと唇を結んだ。

確かに、彼のブレスレットの中には麒麟と朝顔のレリーフと一緒に、ごく小さな文字が刻まれている。アルファベットのZに似ているが、最近になるまでそれに気がつかなかった。

そのことについて、青磁・マクドウガルが彼の質問に回答しなかったので、彼は憤慨していたのだ。次に帰郷した時には、教えて貰わなければ、彼女を奪還すると宣言していた。それなのに、青磁がそれを無視したので・・・だから、彼は青磁と口を利かないでいたのだ。

麒麟はマクドウガルの男児を表しているが、その背に広がる鬣や蹄の中に、その持ち主の名前を表す文字が刻まれていることを知っているのは、その装飾品を持つ者だけであった。

身につける時に、説明される。

彼も腕輪について説明があった。しかし、彼の名前にはZという文字は含まれていない。

その意味や、何故その文字なのかという問いについて、明確な答えは当主から与えられることはなかった。

彼の父は、彼を見つめると横を向いた。

決まり悪そうに、それでいてどこか恥ずかしそうであった。

「青磁」

彼女の促しの令に、青磁は抗えず、そしてきまり悪そうに、ぼそりと言った。

マクドウガル家の者は、彼女に逆らうことができない。抗議することもできないし、彼女の言葉に反論すらできない。その彼女を泣かせてしまった彼に憤りをぶつける青磁と、青磁だけが彼女の肌に触れることができるという愠気の焔に灼かれる彼の対峙に・・・彼女はひとつの雫を落としたのだ。彼女の涙と引き替えに、それは審らかになった。

彼女に促されて、彼はとうとう・・・秘密をひとつだけ、明らかにした。

「・・・Zは瑞祥の略だ。待ち望んだ継嗣のことを、表現する言葉で・・・最後とか最上の、とか・・・これ以上ない、という最上級の讃辞を言うときに使う」

「ほら、あなたのことを一番好きな人が・・・とうとう、暴露したわ」

彼女は青磁の苦渋に満ちた言葉を聞いて、おかしように言った。酷い人だ、と青磁は彼女を軽く睨んだが、彼女はまったく気にしていなかった。

どれほど言葉を並べても、どれほど愛していると言って抱きしめても埋まらない気持ちを込めて、彼の腕輪には麒麟と朝顔の他に、秘密がたくさん込められていた。

もちろん、それだけではない、この家の重大な秘密がそこにも刻まれている。

青磁がマクドウガル家の男児であることを示すための徴が耳飾りであったために、永らく気がつかなかったことに、彼は幼い時から気付いていた。

腕輪の上で光る紋の謎に、いくつか仮説を立てたのもそのためであった。しかし、それを立証するまでは口にはしてはいけないと母にきつく言われていたために、彼はそれを誰かの前で明らかにすることはなかった。

「もっと早くに来てくれることもできたのに。私の我が侘で・・・遅くなってしまった」

彼女がそう言ったので、彼はそうではない、と首を横に振った。

青磁が日本に留学中に会ったという彼女の準備が整うのを待って、彼はこの土地に彼女を連れて来た。

その間に、幾度も話し合いが持たれたのだろうと推測していた。そしてそれは憶測ではなかった。青磁は少しでもはやく彼女と婚姻したいと願ったが、彼女が躊躇っていた年月が長くて・・・その間に青磁に持ち込まれた縁談を悉く断った彼が、いつかマクドウガル家を滅ぼすのだと囁かれた時代のことを、彼女は今でも憂えていた。

青磁の家系がいつか、マクドウガル家の決定的な滅亡の烙印を齎すかもしれないのだと言われていることについて、彼女の生のあるうちに否定することはできないのだということを知り、彼女はそのことでも深く憂えて居る。

何代にも渡って証明し続けていかなければならない課題であった。

彼らの祖先たる者たちがそうしてきたように・・・今、この瞬間に解決できない問題が、緩やかにけれども決して浅くはない深さに流れているから。

彼女は彼らに背を向けると、昔・・・音楽室であった出入り口に向かって颯爽と歩いて行った。寒さに首を窄め、彼女は頬に乗る潮気に瞬きを幾度も繰り返していた背中を見つめている彼と青磁の視線を受けて、彼女は一度だけ足を止めて・・・そして厳かに言った。

「ここは私の故郷よ。余所者と言われても、何と言われても・・・。

私が・・・ここが懐かしいと思う限り・・・私の故郷なの」

彼女の言葉を聞き、彼は大きく呼吸した。

これまで詰まっていた呼気が流れて行くような、そんな感覚を全身で浴びるように受ける。

当然のように受けていた彼女の愛の雨は、当然ではなく・・・彼女の努力の末に生まれたものであると知る。

彼に注がれる愛はいつも穏やかで温かくそして・・・静かに満たし続けるものであったが、それがどれほどの労力を伴い、それでいて青磁の求める愛の激しさと異なるのか、彼は今になって知ったのだ。

母になったら、妻になることを忘れるわけではない。

妻であるなら、母になったことを忘れるわけではない。

その狭間の苦悩を浴びながら、彼女はそれでも・・・青磁とこども達を愛し続ける大きな愛を持ってここに居る。

だから、彼女の言葉に・・・青磁も彼も逆らえなかった。遵うべき言葉を携えて、彼女はこの土地にやって来たのだ。

彼はわかったよ、と小声で言った。

彼女を哀しませたくない。哀しませるような事態は望んでいない。

ただ・・・笑っていて欲しかった。

それだけだ。

そこで気がついた。

そして・・・彼は、悟った。

・・・彼女の笑顔だけ求めていたが、彼女は笑顔だけしか持たない人ではないのだ、ということに。

憂いもあれば哀しみや怒りを感じるときもある。彼女は、人形ではない。

だから、彼女本人の意志で・・・こういう状況が存在するのだ、と彼は認めたくなかったのだ。

そう、もう、ずっと前に気がついていたことであつたのに、気がつかないふりをしていた。そうすれば、自分は楽だったからだ。

青磁だけに責があると思ひ込むことは楽で単純でそれでいて明解だった。

だから、彼は・・・なぜ、彼女が彼を置いていくのかということ、ずっと彼女に尋ねることができなかつたことについて、彼女が涙を流したものだから、それで酷く狼狽していたのだ。聞いてはいけないことを聞いてしまったのだ、と思ったから。

会話が途切れることは想定していない。彼と彼女の間に、言葉は必須ではないからだ。

遠い昔に・・・もっと遠い・・・無言の絆で繋がれていたという確固たる別の絆が、彼と彼女を結んでいたから。

何もかもを必要とするわけではなかつた。何も、必要ではなかつた。

ただ・・・彼は彼女の傍に居たかつた。それは、青磁から受け継がれた熱情であつたのかも知れない。母を恋しがる情炎なのかも知れない。けれども・・・彼は、それが彼であるという根拠であると認識していた。

彼が彼であるために・・・彼女が必要なのだと思った。

彼の倅せは、彼女が居るから、成立する。

背の伸びた姿を見て・・・彼は微笑んだ。

強く凜々しい彼女の背を見て、彼は微笑む。なぜ、青磁が彼女を、朝顔の人だと言うのか、その時ばかりは理由がわかるような気がした。

彼女は嫺やかに見えてとても生きる力に漲っていた。そして、誰にも抗えない紫電の瞳を持つ青磁を懼れていない。だからこそ、彼女は彼の傍に居るのだろう。

そんな気がした。

だれも、彼を見ないから。だれも、彼に異を唱えないから。そんな人生は少しも楽しくないばかりか青磁がこれからやり遂げようと決めたことを大きく揺らがしてしまうのだと、青磁・マクドゥガル本人が承知していたからだ。

●12

「・・・怒らせてどうするんだよ」

彼はむっつりとそう言った。自分の父でありながら、決して彼のことを父と認めようとしない息子に、青磁は嘲ら笑った。

「長い付き合いだからな。・・・事の納め方も承知しているよ」

「誤魔化されない人だって知っているだろうに・・・」

彼は長い溜息をついた。いつまでも若々しいのは結構なことだが、それは無謀という名称に置き換えることが出来た。

青磁はどうにも・・・あの人のことを理解していないように思えて仕方が無かった。

「オレは彼女にずっと片想いだからな・・・邪魔するなよ」

青磁はそう言うと、自分と似た顔立ちの息子に向かって釘を刺した。

息子は呆れて、青磁の無理な要求に対して首を振った。

「邪魔をするにも何も、あんたが邪魔しなければ良いだけの話だ。・・・四六時中一緒にいるのに、この邸に居る時くらい彼女を解放してやれよ。・・・あんたはまったく勝手極まりないよ」

それだけ言うと、彼は大袈裟に溜息を漏らし、くしゃくしゃと自分の頭を掻いた。今になって、急に冷えが彼の躰を襲ってきた。

「最初から、知っていたんだろう？オレと彼女がここで会うことにしたことも。・・・煙草を吸いに来たと言うが、彼女に一番近いあんたが、素知らぬ顔をしたって騙し通せないくらい聡い人を妻にしていることくらいわからないわけないだろう」

「・・・さあ、どうかな」

青磁はそう言うと清艶に微笑んだ。彼はこの家の主だ。幼い頃から知り尽くしている。この場所の誰にも目に付かない会話の可否について、知らないわけはなかった。

彼は上目遣いに、距離を取って青磁の姿を眺め見た。まだ、追いつくことのできない人物が眼の前に居た。青磁を父に持ち、彼はいつもあまり心地好いとは言えない気持ちを味わってきた。

世間一般のような家庭とは違っているマクドウガル家の何もかもが気に入らなかった。

けれども、それを強いていながらここに居ない青磁に一番腹立たしさを覚えていた。

母を母としてだけではない視線で見ると、と青磁は釘を刺しに来たのだ。

目の前で、彼女との抱擁を見せつけられた時。そんな風にしいて抱き合うことは日常茶飯事なのだということを知った。彼女がさほど驚いていなかったからだ。

場所を弁えろと怒ってはいたが。

・・・しかし、彼はもっと別のことを考えていた。

彼女が、母という立場以外に見せる表情や仕草に驚いたのではなく、青磁から彼女を奪うことは出来ないと宣言されたような気がしたからだ。

「聞け」

青磁は彼の胸の内を察したかのように、彼に言い放った。まるで命令に近かった。有無を言わず、聞くことを強制するような口調に彼は閉口したが青磁はそのまま続けた。

「まるで牡のような人の言語は理解できない」

「・・・昔、オレのことをそうやって・・・獣だと・・・牡だと言った人が居たな」

青磁は嗤った。自嘲気味であったが、どこか懐かしそうであった。

横を向いたがこの場を立ち去ることのできない青磁の分身に言った。

「彼女はこの家に必要だ。この家の悲願を達成するために利用しているとお前は憤っているかもしれないけれども・・・ただ、それだけであるならオレは彼女が男児を産んだ時点で、日本に戻しているよ」

「では、そのことは認めるんだな」

彼が正面を向いて、険しい顔を見せた。彼女のことを利用する・・・と青磁は言った。夫である青磁が述べていることについて、どうして誰も咎めないのか。どうして・・・彼女はそれで良いと肯定しているのか・・・

「そもそも、それはあり得ないだろう」

青磁の唇が僅かに歪んだ。彼は、親族の用意した配偶者の候補をすべて退けて彼女を迎え入れたのだ。たったひとり・・・彼女の息子だけを誕生させたのならそれで良いという結果を見据えて彼女を招いたのではないことについて、青磁は今でも証明し続けている。きょうだい達は皆、健やかで・・・青磁の発言権は絶大なものになった。

まぎれもなくマクドゥガル家の継嗣でありながら、多くの子を少しも健康を損ねることなく失うこともなく、今に至っている奇蹟について、誰も為し遂げることができなかった事を為し遂げた青磁について、息子である彼は何も知らないのだ、と言いたそうな口振りであった。

「この家の謎を最後に解決するのは、オレではなくお前だ。彼女も、それを願っている」

「そういう謎かけはやめろ。・・・自分の代で終わらせろ」

「いや、終わったことを証明するのは、オレではなくお前だ」

青磁はそう言うと、端正な貌を横に振った。とても若く見えた。

彼女と一緒に居るからだろうか。それとも、何かを為し遂げなければならないと決めた人間はこんな風に、年月を感じさせないものなのだろうか。

「いつも一緒にいるのに、彼女を怒らせることをするんだな」

青磁に向かって、彼は挑戦的にそう言った。哀しませたり怒らせたりすることは望んでいない。

いつも、彼女は穏やかに過ごせれば良いと思っていた。

たとえどんなに・・・青磁が、その気持ちは持つてはいけないのだと教え諭しても彼女と長い時間過ごすことが出来なかったのは青磁の責任なのだから、その物思いを中断することはできなかった。

「いつも一緒に居るから・・・彼女のすべてを知りたいと思うのだろうか」

彼の辛辣な言葉に、悠然とした様子で青磁・マクドウガルは答えた。

「普段は穏やかで静かであるけれども、彼女の中にある激しきや意志の強さを・・・お前たちは皆、受け継いでいる。マクドウガル家の気質だけではなく、彼女から継いだものを大事にしろ。いつか・・・それが大きな意味を持つことを知るだろう」

青磁の言葉に、彼は唇を尖らせた。

「そういう言い方はやめろ。・・・永く生きている方が優れていると聞こえるよ」

「長く彼女に片想いしている方が優れているのさ」

「・・・彼女の夫のくせに」

彼は呆れてそう言ったが、青磁は首を振った。

「生まれてから今に至るまでずっと彼女に愛されてきた者と、もう立っている位置が違う。・・・オレはずっと、彼女に片想いだよ」

彼はそれだけ言うと肩を竦め、彼女と同じように空を見上げた。

目を細めた彼の瞳は、片方だけ薄かった。

何もかもを見通すような強い視線の持ち主であったが、こういった仕草を見せる時の青磁は、とても儂かった。

「あの人はオレの朝顔だ。だから、諦めてくれ。息子であっても、譲ることはできない。・・・恋い慕う気持ちは同じだけれども、それは共有してはいけない」

その言い方があまりにも神妙であったので、彼は無言で返答できずにいた。

・・・杜に、風が吹いた。

彼らの会話の終わりを告げるかのように、杜から屋敷に向かって風が吹いたので青磁はそこで戻ろう、と彼に言った。

「彼女は言い出したことは必ず実行する。今夜は、寝室には戻らないのだろうか。今夜は、オレとお前で寝るか？」

「絶対、いやだ」

彼の即答に、青磁は笑った。

「こどもの前で、恋人気分で浮かれて、息子に彼女を取られやしないかと気を揉む小心な男の寝所に戻る人ではないことくらい、最初からわかっているだろう？」

「ああ、もちろん。だから・・・だから、今がある」

青磁はまだ空を見上げていた。

星が輝き・・・空気が乾燥しているので、今にも星が堕ちてきそうな硬質の輝きを地表に落とし続けていた。夜の杜は恐ろしかったのに。・・・今は、どこか懐かしかった。こうして誰かと話をしているからなのだろうか。それとも。もっと別の、何か違う風がこの場所を懐かしむかのように、吹き付けているからなのだろうか。

彼は身震いをすると、地面から彼の体温を奪っていく冷気に気がついて、背中を強ばらせた。

・・・彼女が話は想像がついた。途中で切り上げられてしまったけれども。

間もなく、パリに居るあの人がこちらにやって来る時期を設定するから、彼にもそれを手伝って欲しいということなのだろう。

それは青磁の悲願であった。

昔・・・誠次という人物が引き起こした悲劇について、青磁は決着を付けるつもりなのだ。生涯、足を踏み入れることはしないと誓ったその人を、もう一度ここに呼び寄せるために・・・マクドウガルの血族であると認めさせるために青磁は動いている。

そして、その背後にはアルディ家という、フランスの名家が後ろ楯についでいる。

強権を行使して為し遂げればもっとはやくに実現していたことなのに、それでも青磁は慎重に事を運んだ。当の本人が固辞し続けたというのも理由にあったが、それでも・・・その人の持っている秘密が、マクドウガル家の悲願を解決するのだと知ると、青磁はどんなことがあっても、それを達成しようとして・・・今に至る。

世界各地を飛び回るのも、業務目的もあるがもっと違う理由もあった。

ある調査をするためだ。代々受け継がれてきた麒麟の紋様の謎について、託された仮説を立証するために彼は世界各地に散った、古の麒麟の末裔を調べているのだ。

もともと青磁に似ている彼が・・・パリに住まうその人の話し相手になって遣って欲しいというのが、彼女の彼への頼み事であった。こんな風に、呼び出さなくても彼女が命じれば彼はそれに逆らうことはしないのに。

それでも・・・彼女は密やかな秘密めいた時間を作り出すことで、彼に親としての情愛が消えていないことを伝えたかったのだろうと思う。

それにしても。

そういった繊細な機微をすべて無にしてしまうような青磁の所業が、ますます承服しかね彼は、青磁に向かってひとつだけ、言ってやることにした。

「愛されることと、愛することの優劣をつける限り・・・青磁は彼女に片想いのままだな」
青磁・マクドウガルの息を呑む音が聞こえて、彼は余裕ではなかったが、微笑みを浮かべた。

「おまえは・・・生意気だな」

「青磁・マクドウガルの息子だからね」

それだけ言うと、それ以上青磁に付き合っただけ寒い夜空を鑑賞する気にはなれなかった彼は、部屋に戻ると言った。

「でも、続き部屋だからな・・・こども部屋で寝ると言った彼女と一緒に寝ようかな」

彼の名前を、青磁が呼んだ。彼はおかしように笑った。青磁はこうやって攻撃するに限る。

●14

「冷えてきた。・・・戻ろうか」

「言われなくてもそうする」

「ひとつひとつに文句をつけないとならないなんて・・・こどもだな」

青磁は懐かしそうに、そう言った。かつて、自分もそうであったからだ。

何もかもに鬱屈しており、何もかもが色褪せて見えて、何もかもに・・・絶望してそれでも憤慨することによってでしか自分の言葉を吐き出すことができない日々を過ごし、そして今に至る。

「彼女は今夜は青磁の寝所には戻らないのは、事実だな」

そう言うと、彼は青磁によく似た顔つきで不敵に笑った。

うり二つということではなかったが、彼はまさしく・・・青磁の息子であると誰もが判別できるほど、彼らは似ていた。

「・・・どうかな。オレは諦めないって彼女に常々言っているから。なに、夜は長い。・・・近いうちに、おまえのきょうだいもまたひとり、増えるかも、な」

「自分のこどもに挑戦してどうするんだよ」

彼は呆れたと言って、青磁の言葉をにべもなく拒絶した。

青磁は確信しているのだ。たとえどんなに夜が更けたとしても、彼女は皆が寝静まった頃に青磁の元に戻ってくると。

「少なくとも、オレは泣かせないし、彼女を泣かせる奴は誰であっても・・・息子であっても赦しはしない」

彼女は彼の母であるが、それとは別に、青磁の妻なのだと言押しする青磁の言葉に、長い年月を一緒に過ごしてきたなお、彼女を求める気持ちが弱まることはないと言い切る男の姿があった。

「青磁と比べるなよ。オレの方がずっと待っているんだ」

「誰かと比べる余裕があるなら・・・先は遠いな」

青磁の言葉に、彼はかっとなった。

語彙の問題ではなかった。

青磁は本当に・・・彼に向かって彼女を泣かせるなど警告しているのだ。

彼は唯一、自分が持っている札を出してしまっていた。切札は、使いようによっては自分の破滅を招くのだ、と青磁が言っていることは理解できた。しかし、彼はここで使うことにした。効果があるかどうかは別として。青磁と同じ場所に立っていても、彼女は彼を見ることはない。

「彼女を過小評価している。それこそ、幾日も口を利かなくても平気な人と喧嘩できると思っているのか、青磁」

彼のその言葉に、青磁はむっとした顔をして息子を睨んだ。

お互いが主張している、彼女の最大の理解者の立場は、互いに譲る気持ちはないと宣言し合ったわけだから、穏やかに話を進められると思った方が浅慮であった。

彼は彼女に愛されていると言う青磁は彼の父だ。

そして、彼は父こそが母の愛をすべて独り占めしていると思っている。

「オレが彼女に拘っているのは・・・理由がなければいけないのだという理由を認めていないから。青磁。世の中には、考えるよりも前にそうになってしまうというものがあるんだ」

「知ってる」

青磁はそう返答した。

青磁も知っているのだろう。

あの墓標の脇に刻まれた言葉のことを。

恋に堕ちたら、それが恋なのだ。

それを否定することすら、恋に堕ちている証拠なのだ。

彼女のことを、ひとりの女性として慕ってはいるが、青磁の持っている愛とは違っていた。彼女は青磁の妻であり、それより前に、彼の母であったのだから。

けれども、母に求める以上の激しい感情を秘めていることは、間違いないと認めなければならない。

もし、彼女が彼の母でなかったのなら、という仮定は存在しない。彼が存在しなくなってしまうのと同義であるから。

彼を激しく引き剥がすほど、彼女のことを恋い慕っているのは、青磁なのだ。

そして、そんな父と母の恋愛は、今でも・・・続いているのだろうと思うと、彼は何とも言えない気持ちが込み上げてくるのを感じた。

納得しなくてはいけないのだろうが、納得できなかった。

「いつか・・・オレは、彼女のただひとりになる。この家のことを託すことができるのはオレだけだと言わせてみせる」

「なるほど。それは大いなる野望だな」

青磁は、古い制度に生きる最後の麒麟だ。そして、彼は・・・青磁の子でありながら、新しい時代を作っていくために必要とされる最初の入り口であり、これまでの最後になる存在になる。だから、そんな願いを込めて、彼女と青磁が考え抜いた言葉が、あの腕輪には刻まれているのだ。

「オレ、もう戻るから。・・・男の独り寝は侘しいだろうな」

青磁に憎まれ口を言う。けれども、青磁は真剣に思い悩んでいるようであった。それほど、彼女が傍に居なければ安心できないのであれば、こうして戻ってくることもなかろうに、と思った。

しかし、彼女は残しているこども達のことを心配しながらも決して・・・自分のことを語ろうとしないので、それを見かねた青磁の配慮なのだろうと思った。

次に繋げたことを証明するための存在、か。

彼は薄く笑った。

なるほど。

それなら、それは青磁には出来ないことであった。

・・・彼は彼女が戻っていった音楽室の入り口に向き直ると、軽く片手を上げた。青磁に挨拶をする義務は遂行するつもりはなかったが、それでも・・・初めてこの家の当主を遣り込めたという充実感が、彼を少しばかり寛容にさせた。

「ああ・・・星が、綺麗だな。昔と変わらない」

青磁の声が聞こえてきた。彼はまだ暫くここで佇んでいるのかもしれない。

首を窄めて、片方だけ薄い瞳が見る星昊を満喫し、そしてその景色を自分の心に刻むのだろう、と思った。

この景色を見せてやりたい人が居ると言い、そしてそれを実現するために、彼女は黙って青磁に遵う。そして・・・彼は青磁と彼女のこどもでありながら、何ができるのだろうか、と思った。

おまえの母であるが、オレの妻だ、と言い切った青磁の言葉に・・・言い返すことが出来なかったのは・・・その言葉を聞いて、彼が少しばかり青磁を見直してしまったからだ。口惜しいことにそれは事実であり、彼はそれを認めないほど狭量ではなかった。

打ち付けた腰が、今になって痛み出したので、彼は少し顔を顰める。熱いバスに入りたいところだが、湯温を下げてゆっくり入ることにしようと考えていた。

そして・・・続き間の向こう側で安らかに眠るこども達と彼女の様子を見て、そうしたら、その頃に青磁がまだここに来たら、湯冷めするかもしれないが呼びに来てやろうと思った。

彼はそこで理由を作った。

青磁が風邪を引こうが、戻って来ないでここで夜を明かそうが彼には関係ない。

でも。

そうなれば、彼女が哀しむから。

・・・独り寝をすることになりそうな青磁を憐れんだからだ。

彼のことを、最後でありながら、最高の存在になるようにと願いをかけた。・・・最初の子であり、マクドウガル家の繁栄を予兆させる瑞祥だと、彼は言われ続けて居る。

しかし、彼は象徴で終わることなく、きっと・・・この家を変化させるとマクドウガル家の当主である青磁は公言したことは、今でも有名な話であった。

・・・彼は邸に入りながら、小さく笑った。

もちろん、彼は今でも青磁のことが気に入らないし、必要がなければ口も利きたくない。はやく大きくなって、彼女に随行できる年齢に達することを夢見ているし、彼女が自分のことだけを考えてくれる日が来るのではないのかと夢想することもある。

けれども。

彼女は・・・複雑極まりないこの家を捨てることをしなかった青磁に出会い、遠い国で聞かされていた話と現実の違いに驚きつつもそれを受け入れたのであろうと思われた。

青磁を支えるのは彼女であるが、彼女を支えるのは青磁だけである必要は無かった。

この家の者は、狂気にも似た強い思いを抱えすぎて、そして壊れてしまう。

だから、青磁にも彼にもそんな因子は存在しているが、それを彼女は静かに・・・そう、静かに鎮めているのだ。

パリに居るといふ、あの人も、生まれた土地にもう一度足を踏み入れたいと願いつつも、その願いを達成することは夢であらうと思っていたに違いない。

でも、ずっと・・・ずっと、願っていたことなのだろうと思った。

彼女は、パリに行こうと言っていた。彼の顔を見たら・・・受け継がれている血の流れに驚かれるのだろうか。

彼女と過ごす、パリの滞在を楽しみにした。

それなら、もう少し待てる気がした。楽しみがあるから待ち遠しいと思うが、同時に楽しみがあるから、過程を過ごすことができるのだ。

どういうわけか、その想像の中に、青磁が居た。

青磁と、彼女と、彼ときょうだい達と・・・もうひとり増えたきょうだいの手を引いて・・・どこまでも、皆で歩いて行く後ろ姿が浮かんできた。

青磁の言うとおりの・・・間もなく、もうひとり増えるのかも知れないな。

口惜しいが。

マクドゥガル家には、昔から奇妙なしきたりがある。

彼女が母になった瞬間・・・長子は生まれてすぐのこどもを抱くことができる。

青磁よりも先に抱くのだ。そして祝福のキスをすることができる。

彼だけの特権であった。そして、彼女は彼にだけ・・・生まれ落ちたばかりの自分の子を託すのだ。

・・・そんな日が近いことを予感していた。

彼は音楽室の冷え切った室内を横切って、邸内に戻った。

扉が閉まる音がしたが、青磁は追ってこなかった。

彼の予想通り、暫く昊を眺めているのだろう。

・・・静かな・・・彼女の通過した気配さえ吸い込んでしまった静寂に向かって、彼はゆっくりと歩き始めた。

ふわり、と。

柔らかい風が吹いたように感じた。

それは室内が暖かく心地よく・・・まるで、母の胎内のように安堵できる空間であるからなのか、もっと違う何かが吹き付けたのか・・・彼は考え込むために足を止めることはしなかった。

生まれた時から住んでいるこの邸の空気は、彼にひどく優しくかったから。

(F I N)